岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 99

松尾古墳群
斎富古墳群
馬屋遺跡ほか

山陽自動車道
建設に伴う発掘調査

11

1995

日本道路公団広島建設局備前工事事務所
岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 99

松尾古墳群
斎富古墳群
馬屋遺跡ほか

山陽自動車道
建設に伴う発掘調査

11

1995

日本道路公団広島建設局備前工事事務所
岡山県教育委員会

1．斎富古墳群航空写真

2．斎富古墳群全景（南上空から）

１．斎富古墳群全景

２．２号墳第１主体部（南から）

３．２号墳第４主体部（南から）

１．馬屋遺跡全景（西から）

２．馬屋遺跡全景（南西から）

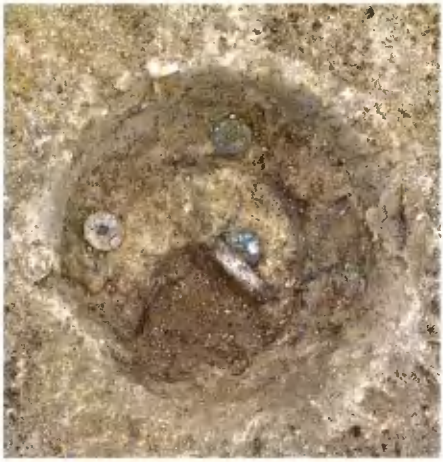
1．馬屋遺跡土盛部西半部航空写真

2．馬屋遺跡土盛部東半部航空写真

1．馬屋遺跡土盛部西半部 奈良時代建物群

2．馬屋遺跡土盛部東半部 平安～鎌倉時代建物群

1．検出状況



2．和同開寶出土状況

3．埋納土器

4．和同開寶

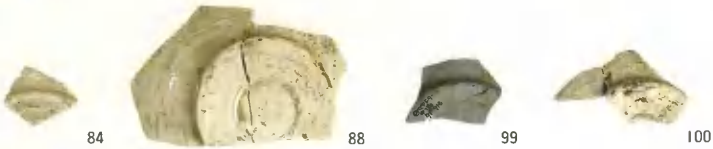
土器埋納遺構と出土遺物

1．土壙墓－2

2．土壙墓－2出土遺物

1．越州系陶磁器

2．定窯系陶磁器



3．緑釉陶器 1

4．緑釉陶器 2

5．緑釉陶器 3

序

山陽自動車道は大阪府吹田市を起点とし、瀬戸内海沿岸を結び山口市にいたる総延長426kmの高速道路です。県内で最初に開通したのは、昭和56年備前～相生間でした。以降倉敷・福山間、岡山・倉敷間と次々開通致しましたが、備前・岡山間約40kmが最後まで残されていました。

日本道路公団広島建設局備前工事事務所は、昭和60年７月に開所し、その間備前～岡山間の早期開通をめざし奮励努力し、無事平成５年12月16日開通を迎え、県内全線が開通する運びとなりました。当事務所は残務作業も終え平成６年７月１日をもって閉所しました。この間埋蔵文化財の発掘調査につきましては、昭和62年から平成４年10月末日の山陽町斎富遺跡の調査終了にいたるまで熊山町、瀬戸町、山陽町に所在した多くの遺跡について記録保存のための調査を岡山県教育委員会・岡山県古代吉備文化財センターと協議を重ねつつ実施してまいりました。

本書は、熊山町、瀬戸町内の遺跡、山陽町馬屋遺跡、斎富古墳群などを収載し、斎富遺跡については来年度刊行される予定と聞いております。

なお、この発掘調査、および本書の編集は、岡山県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位のご尽力に対し、深甚なる謝意を表するものであります。

平成６年12月

日本道路公団広島建設局備前工事事務所
前所長　　多久和　　勇

序

山陽自動車道は、瀬戸内沿岸の主要都市を東西に結び、九州・近畿さらに瀬戸中央自動車道、やがて中国横断自動車道とも結ばれ、四国・山陰地方へと連なる大動脈であります。この高速道路の開通によって各地域間の交流がますます盛んとなり、岡山県においても、経済的・文化的に一層活性化が促進されるものと期待されています。

この山陽自動車道の備前市から岡山市間建設に先立ち、岡山県教育委員会では、関係当局と幾度となく協議を重ね埋蔵文化財の保護・保存の調整を図ってまいりました。しかしながら、この道路が古代備前の中枢部を、そしていみじくも古代山陽道と並行するようにして走るため、多くの遺跡が記録保存の対象となりました。最後まで残された備前～岡山間が開通することによって、県内全線が開通することもあって、県民各層から寄せられた早期建設の要望は大きく、限られた期間に調査を実施せざるを得なかったのですが、平成４年10月末日をもって全遺跡の調査を完了しました。以降、整理・報告書作成作業を行なってきたところであります。

今回発刊いたします備前工事事務所関係の第１分冊には赤磐郡熊山町から瀬戸町、山陽町にいたる各遺跡について収載しております。この中には、瀬戸町松尾古墳群の陶棺、山陽町馬屋遺跡の奈良時代から室町時代にわたる掘建柱建物群の変遷、古墳時代後期には珍しい竪穴式石室を持つ斎富古墳群など多くの成果を得ることができました。この報告書が、今後この地域の歴史解明の資料として、また文化財保護の一助として広く活用されることを希望しております。

なお、発掘調査の実施および報告書の作成にあたっては、『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財対策委員会』の先生方から種々の御教示と御指導を得、また、日本道路公団広島建設局・広島建設局備前工事事務所・岡山工事事務所をはじめ、岡山県土木部・岡山県東備地方振興局や地元の関係各位からも温かい御理解と御協力を賜りました。関係各位に対して、深甚の謝意を表わすしだいであります。

平成７年３月

岡山県教育委員会

教育長　　森　崎　岩之助

例　　言

1．本書は、山陽自動車道に伴い、日本道路公団より委託を受けて、岡山県教育委員会が昭和63年～平成３年度に発掘調査を実施した備前工事事務所関係の熊山町・瀬戸町・山陽町内19ヶ所の報告書である。斎富遺跡については平成７年度に刊行予定である。

2．発掘調査は昭和63～平成３年度の一次調査の後、平成２～４年度に実施した。本報告書は、そのうち昭和63年度から平成４年度に行った発掘調査の報告である。

3．発掘調査および、報告書作成にあたっては、山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、下記の方々に委員を委嘱した。対策委員会各位からは終始有益なご指導とご助言をいただいた。記して深謝の意を表す次第である。

水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）
鎌木義昌（岡山理科大学）平成４年度まで
西岡憲一郎（岡山県遺跡保護調査団）平成３年５月まで
西川　宏（山陽学園女子高等学校）
間壁葭子（倉敷考古館）
高見周夫（岡山市遺跡保護調査団）
根木　修（岡山市教育委員会）
新納　泉（岡山大学）平成３年５月まで、平成５年度から
稲田孝司（岡山大学）平成３年５月から平成４年度まで
土井基司（岡山大学）平成３年５月から平成５年６月まで
亀田修一（岡山理科大学）平成５年７月から

また、馬屋遺跡の建物群については奈良県立文化財研究所の松本修自氏（現東京国立文化財研究所）に来跡願い、またその後においても種々の教・指導を得た。多数の県内外の研究者の方々から、様々なご助言、ご教示を得た。記して、感謝の意を表す次第である。

4．特殊な遺物および自然科学分野における鑑定、同定等については、下記の諸氏、機関に依頼し、有益な教示を得、一部の成果については、報告文をいただいた。記して深く感謝の意を表す次第である。

- 人骨鑑定　　池田次郎（九州国際大学）
- 歯鑑定　　小田嶋梧郎（前岡山大学）
- 鉄滓分析　　大澤正巳（新日本製鉄）
- 輸入磁器の産地同定　　上田秀夫（㈶和歌山県文化財センター）
- 動物遺体鑑定　　金子浩昌（早稲田大学）
- 樹種鑑定　　畦柳　鎮（岡山商科大学）
- 脂肪酸分析　　中野益男（帯広畜産大学）
- 緑釉陶器　　平尾政幸（㈶京都市埋蔵文化財研究所）
- 瓦器　　橋本久和（高槻市立埋蔵文化財センター）
- 黒色系土器　　武田恭彰（総社市教育委員会）

●東播系土器　　大村敬通（兵庫県埋蔵文化財調査事務所）
●灰釉陶器・緑釉　楢崎彰一（名古屋学院大学）
　　柴垣勇夫・浅田員由（愛知県陶磁資料館）
●玉の分析　　東村武信（京都大学原子炉実験所）
　　藁斜哲男（京都大学原子炉実験所）
●玉　　高橋進一（総社市教育委員会）

また鉄器については、当センター尾上元規の教示を得た。

馬屋遺跡の土器の時期については、早島式土器（吉備系土師器椀）については、山本悦世「吉備系土師器椀の成立と展開」『鹿田遺跡　3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第6冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1993年、瓦器については、橋本久和「古代後期・中世の土器」『中世土器研究序論』1992年、および尾上実「南河内の瓦器椀」『藤沢一夫先生古稀記念　古文化論叢』1983年、輸入陶磁器については、横田賢二郎・森田勉「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集　4』1978年によっている。

5．報告書の作成は、平成5年度に岡山県古代吉備文化財センター山陽町事務所で伊藤晃・二宮治夫・吉久正見・横山定が行った。本文の執筆はこのほか調査担当者が分担し、文末に文責を記した。

6．発掘調査時の遺構写真については調査担当者が撮影した。遺物写真については、江尻泰幸が担当した。馬屋遺跡の掘立柱建物写真図版の白線は発掘調査時に想定したもので、整理段階で新たに加わった建物には白線を引いていない。また、建物図面も修正したものが多くあり、写真図版と異なる場合がある。

7．本書の編集は、瀬戸町関係を下沢、斎富古墳群を吉久・安井悟・福田正継、馬屋遺跡・池新田遺跡・新屋敷遺跡を横山・二宮・伊藤が担当し、馬屋遺跡・新屋敷遺跡の写真図版の作成については中野雅美の援助を受けた。全体にわたっては、伊藤が担当した。

8．本報告書の関係する遺物、実測図、写真、マイクロフイルム等は岡山県古代吉備文化財センターに保管している。

凡　　例

1．報告書に記載された高度値は海抜高であり、方位は特に示さない限り磁北であるが、馬屋遺跡のＴＮ記号は真北を示す。

2．本報告書掲載の各遺構・遺物実測図の縮尺率は下記の通り統一しているが、例外については縮尺率を明記した。

遺構　竪穴住居・掘立柱建物　１／80　土壙墓土壙・井戸　１／30　土器棺　１／20

遺物　土器　１／４　瓦　１／４　土製品　１／３　石器　１／３　鉄器　１／３

玉類　１／１

3．遺構番号・遺物番号は、各遺跡の中での連番号で、新屋敷遺跡・馬屋遺跡は各遺構別ごとの番号である。

4．遺物番号は、材質を示すため、土器以外のものについては下記の略号を番号の前に付した。

土製品：Ｃ　石器・石製品：Ｓ　金属器・金属製品：Ｍ　玉類：Ｏ　木製品：ｗ

瓦器：ｔ　黒色土器：ｂ　磁器：ｊ　灰釉：ａ　緑釉：ｇ　瓦：ｒ

東播系土器：ｕ

5．遺構名を省略する場合の略称は、下記の通りである。

竪穴住居―住　掘立柱建物―建　土壙―土　井戸―井　土壙墓―墓　柱穴・ピット―ｐ　また、遺物名については、壺形土器、甕形土器、高杯形土器などを壺、甕、高杯のように略称して用いる。

6．報告書中に用いる時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために文化史区分、世紀を併用した。またⅠの第１・２図及びⅡの第１図は建設省国土地理院発行の５万分の１地形図を複製し、加筆したものである。

総　目　次

序
例言
凡例
総目次
Ⅰ　調査の経緯と第１次調査の概要…… 1
第１節　調査の経緯と概要…… 1
第２節　地理的・歴史的環境…… 5
第３節　第１次調査の概要…… 9
Ⅱ　瀬戸町内の遺跡…… 21
第１節　実教寺北遺跡…… 23
第２節　松尾古墳群…… 24
第３節　勘定口２号墳…… 37
Ⅲ　山陽町内の遺跡…… 63
第１節　斎富古墳群…… 71
付載１　斎富遺跡・斎富古墳出土の玉類の産地分析（藁科哲男・東村武信）…… 171
第２節　新屋敷遺跡…… 221
第３節　池新田遺跡…… 232
第４節　馬屋遺跡（ヤブレ塚古墳）…… 251
付載２　馬屋遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析
（中野益男・中野寛子・明瀬雅子・長田次郎）… 481
付載３　馬屋遺跡土壙墓１出土の歯の鑑別（小田嶋悟郎）…… 489
付載４　馬屋遺跡土壙墓２出土人骨（池田次郎）…… 492

Ⅰ　調査の経緯と第１次調査の概要

Ⅰ　調査の経緯と第１次調査の概要

第１節　調査の経緯と概要

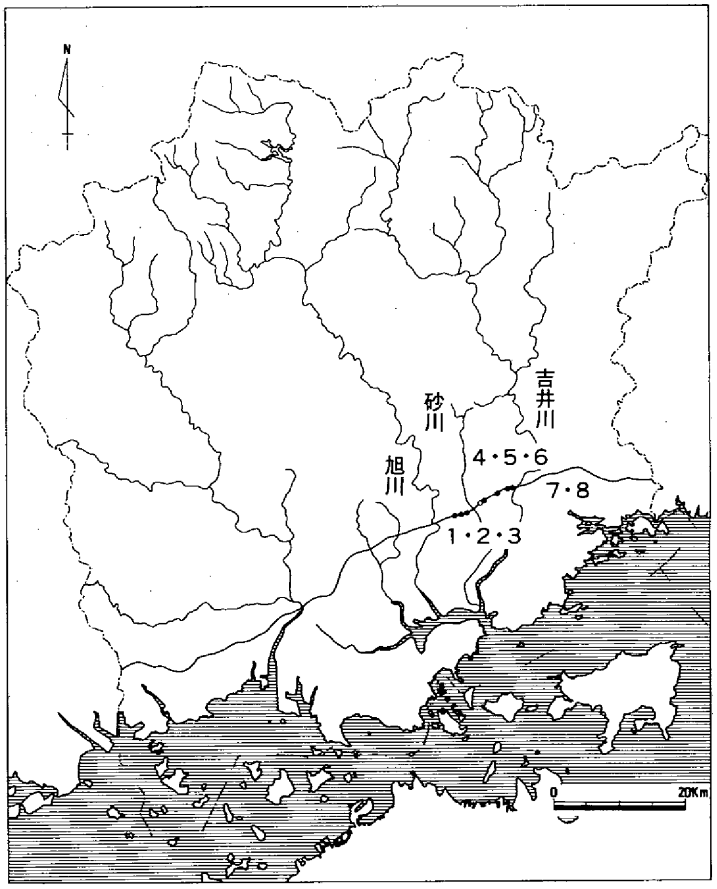
岡山県内山陽自動車道ルートで唯一残された岡山～備前間に存する遺跡の第１次および全面調査は、熊山町・瀬戸町を昭和63年～平成元年度中国横断道（米子～落合）に従事していた２名の調査員が冬期の１～３月に確認調査・本格調査を実施し、平成２年度は主に瀬戸町内の第１次および全面調査を実施した。

山陽町内の遺跡については、平成３年度当初調査員10名体制で調査を行う計画でいたが、山陽町内の用地買収が遅れていたため、急拠岡山工事事務所関係の岡山市田益遺跡の調査に入り、用地買収のメドがたった５月連休明けから４名が第１次調査にあたった。

この結果、馬屋遺跡20,130㎡、ヤブレ塚400㎡、池新田遺跡1,120㎡、新屋敷遺跡1,164㎡、斎富遺跡20,580㎡、斎富古墳群1,683㎡、勘定口２号墳370㎡、計53,427㎡が発掘対象面積となった。

４～６月に田益遺跡の調査を終え、７月から馬屋遺跡・池新田遺跡・新屋敷遺跡へ３班７名、斎富遺跡へ１班３名で調査を開始した。さらに10月からは、中国横断自動車道４名、井原線関係２名が調査終了に伴い山陽自動車道に６名増員され、斎富古墳群、斎富遺跡の調査にあたった。平成３年度には馬屋遺跡の土盛部分、池新田遺跡、新屋敷遺跡、斎富古墳群、斎富遺跡のボックス部、工事用側道の一部を終らせた。

平成４年度は、20名の調査員で調査を行なうべく計画していたが、平成５



1．馬屋遺跡
2．池新田遺跡
3．新屋敷遺跡
4．斎富遺跡
5．斎富古墳群
6．勘定口２号墳
　実教寺遺跡
　塩納成遺跡
7．松尾古墳群
8．満願寺遺跡

第１図　調査遺跡の位置図

年度開通を計画していた公団の工事工程と調査期間の終了時期が折り合わず、このため県教育委員会は、建設省の百間川改修工事を半年間中断し、この調査にたずさわる予定の3名の調査員を（作業員も含め）増員し調査を進めることになった。

また作業に従事する作業員についても、山陽町内では確保することが出来ず、岡山市、瀬戸町、赤坂町、吉井町、英田町、佐伯町などの近隣市町から四系統のバス路線を設定し人員の確保に務めた。

調査は、馬屋遺跡の土盛部の残り、橋脚部および南北側道8,945㎡、斎富遺跡19,170㎡、墓地移転の関係で平成3年度調査が未了であった瀬戸町勘定口2号墳370㎡の調査を含め10月末日に完了した。そして14名の調査員は公団岡山工事事務所の岡山市白壁奥遺跡、岡山市池田家墓地関連遺跡、高梁工事事務所の賀陽町大村中世墓地、建設省の国道53号バイパスの岡山市西山古墳群の調査に入り、残り6名が年度末まで整理作業を行った。

平成5年度は4名が斎富古墳群、馬屋遺跡他の報告書作成作業に従事した。

発掘調査・整理・報告書作成については、日本道路公団と岡山県の委託契約に基づき岡山県教育委員会文化課が契約を行い、発掘調査は古代吉備文化財センターが行った。

〈発掘調査年度、担当地区および担当者〉

昭和63年度（1～3月）	瀬戸町保木池尻遺跡、保木西遺跡．松尾2・4号墳．松尾窯址第1次確認調査	下澤公明・大智　浩
平成元年度（　〃　）	瀬戸町実教寺南遺跡．実教寺北遺跡．	下澤・（大智）
平成2年度（通　年）	瀬戸町奥池西遺跡．奥地北遺跡．塩納成A・B遺跡．熊山町満願寺遺跡第1次確認調査．松尾2・4・5号墳．実教寺南・北遺跡全面調査	下澤・栗原健一
	山陽町斎富古墳群第1次確認調査	下澤・栗原・澤山孝之・古市秀治
平成3年度（5～6月）	高月条里遺構（馬屋遺跡）・長尾遺跡．門前奥池西遺構．南方条里遺跡（斎富遺跡）第1次確認調査	伊藤　晃・下澤・平松義則・横山定
（7～3月）	斎富遺跡全面調査	岡田　博・山本了峰・長門　修
（10～3月）	〃	井上　弘・古谷野寿郎・氏平昭則
（7～3月）	新屋敷遺跡・池新田遺跡．馬屋遺跡全面調査	伊藤・下澤・二宮治夫・窪田廣志 野上和信・平松・横山・杉山一雄 （調査補助）
（10～3月）	斎富古墳群全面調査	福田正継・松岡浩太郎・安井　悟
平成4年度（4～10月）	馬屋遺跡	二宮・窪田・石田容一
（4～10月）	斎富遺跡	伊藤・下澤・井上・福田・二宮・窪田・野上・竹井孝充・吉久正見 石田・田原　順・山田明信・東呂木　博・長川　優・安井・松岡・大橋雅也・横山・滝川明徳・根木

		智宏
（4～9月）	〃	平井　勝・大森善市・高田恭一郎
（4～6月）	勘定口2号墳	福田・山田・長川
〈整理・報告書作成〉		
平成4年度（11～3月）		伊藤・二宮・窪田・吉久・安井・横山
平成5年度（4～3月）	瀬戸町関係．斎富古墳群．馬屋遺跡他を整理・報告書作成	伊藤・二宮・吉久・横山
平成6年度	斎富遺跡整理・報告書作成．瀬戸町関係．斎富古墳群．馬屋遺跡他を印刷出版	

発掘調査体制（昭和63年度～平成4年度）

昭和63年度（1988年度）

岡山県教育委員会

教育長　竹内　康夫
教育次長　前　享治
文化課長　吉尾　啓介
課長代理　河野　衛
課長補佐　伊藤　晃
主　査　藤川　洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所　長　水田　稔

総務課

課　長　佐々木　清
総務主幹　藤本　信康
主　任　花本　静夫・岡田　祥司
片山　淳司

調査一課

課　長　河本　清
主　幹　下澤　公明
文化財保護主事　大智　浩

平成元年度（1989年度）

岡山県教育委員会

教育長　竹内　康夫
教育次長　竹本　博明
文化課長　吉尾　啓介（～11／30）
鬼澤　佳弘（12／1～）
課長代理　河野　衛
課長補佐　伊藤　晃
主　査　藤川　洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所　長　長瀬日出明

総務課

課　長　竹原　成信
総務主幹　藤本　信康
主　任　岡田　祥司・平松　郁男
片山　淳司

調査一課

課　長　河本　清
課長補佐　下澤　公明
文化財保護主事　大智　浩
澤山　孝之
古市　秀治

平成2年度（1990年度）

岡山県教育委員会

教育長　竹内　康夫
教育次長　杉井　道夫
文化課長　鬼澤　佳弘
課長代理　光吉　勝彦
課長補佐　伊藤　晃
主　査　藤川　洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所　長　長瀬日出明
次　長　河本　清

総務課

課　長　竹原　成信
課長補佐　藤本　信康
主　任　平松　郁男・坂本　英幸

調査一課

課長事務取扱　河本　清
課長補佐　下澤　公明
文化財保護主査　栗原　健一

平成3年度（1991年度）

岡山県教育委員会

教育長　竹内　康夫
教育次長　森崎岩之助
文化課長　鬼澤　佳弘
課長代理　大橋　義則
課長補佐　柳瀬　昭彦
主　査　時長　勇

岡山県古代吉備文化財センター

所　長　横山　常實
次　長　河本　清

総務課

課　長　藤本　信康
課長補佐（兼係長）　小西　親男
主　査　平松　郁男
主　任　坂本　英幸

調査三課

課　長　伊藤　晃
文化財保護主幹　下澤　公明
第一係長　岡田　博
文化財保護主査　二宮　治夫・窪田　廣志
野上　和信
文化財保護主事　山本　了峰・平松　義則
主　事　横山　定・長門　修
（第二係）　11月～
係　長　福田　正継
文化財保護主事　松岡浩太郎・安井　悟
主　事　氏平　昭則

平成4年度（1992年度）

岡山県教育庁

教育長　竹内　康夫
教育次長　森崎岩之助
文化課長　渡邊　淳平
課長代理　松井　新一
課長補佐　柳瀬　昭彦
主　査　時長　勇

岡山県古代吉備文化財センター

所　長　横山　常實
次　長　河本　清
文化財保護参事　葛原　克人

総務課

課　長　北原　求
課長補佐　小西　親男
主　査　石井　茂
主　任　石井　善晴・三宅　秀吉

調査三課

課　長　伊藤　晃
文化財保護主幹　下澤　公明
課長補佐　井上　弘
第一係長事務取扱　井上　弘
文化財保護主査　二宮　治夫・窪田　廣志
野上　和信
文化財保護主任　竹井　孝充・吉久　正見
石田　容一
文化財保護主事　田原　順・松岡浩太郎
主　事　横山　定
第二係長　福田　正継
文化財保護主任　山田　明信
文化財保護主事　東呂木　博・長川　優
安井　悟・大橋　雅也
主　事　根木　智宏

調査二課

第一係長　平井　勝
文化財保護主査　大森　善市
文化財保護主任　高田恭一郎

平成5年度（報告書作成）

岡山県教育庁

教育長　森崎岩之助
教育次長　岸本　憲二
文化課長　渡邊　淳平
課長代理　松井　新一
課長補佐　高畑　知功
主　査　時長　勇

岡山県古代吉備文化財センター

所　長　横山　常實
次　長　葛原　克人

総務課

課　長　北原　求
課長補佐　小西　親男
主　査　石井　茂・石井　善晴
主　任　三宅　秀吉

調査二課

課　長　伊藤　晃
文化財保護主査　二宮　治夫
文化財保護主任　吉久　正見
文化財保護主事　横山　定

第２節　地理的・歴史的環境

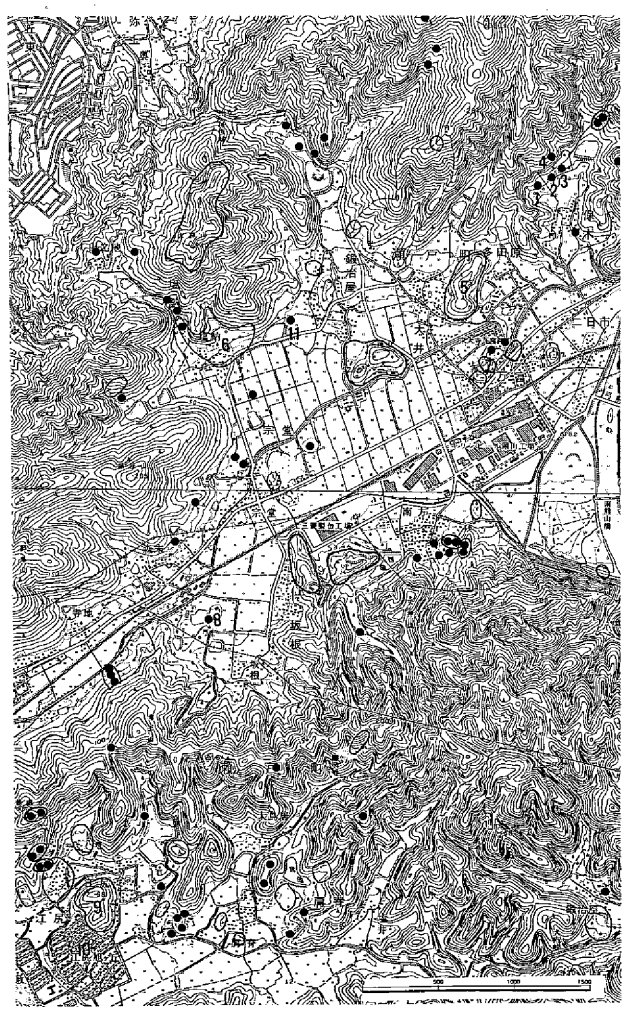
瀬戸町

赤磐郡瀬戸町は、岡山県東南部に位置し西から南にかけて山陽町及び岡山市と東から西にかけては熊山町と長船町そして備前市と接している。地勢的には、岡山平野の北東端にあたりその端が県下三大河川の内の一つである吉井川によって画されている。町の北東側は、350～250ｍの山地を主とするが、南に下がるとその高さを減じて行く。そして、吉井川や砂川による沖積低地が広がる。吉井川の北東からの流路は、東瀬戸山塊にぶつかり西に大きく流れを曲げさらにこの山塊を沿って下って行く。この東瀬戸山塊の西側に砂川の流路が形成されているのである。これら河川の影響とともに山地が流紋岩により成り立っていることから直線状の谷を形成させている。遺跡は、この縁辺部に多く分布している。

岩宿時代及び縄文時代の遺跡は、隣接する熊山町で確認されているがその詳細について不明なのが現状である。『瀬戸町誌』においては、夏井遺跡から縄文時代に属すると考えられる石匙の写真が示されておりこれからも資料が増えるものと考えられる。また、報告がなされていないが塩納成遺跡の丘陵裾部から岩宿時代前後とされる石器が出土している。

弥生時代に入っても前期にさかのぼる遺跡は確認されていないが、中期になると石器の表採などによってその存在が知られるのである。これら表採される地点は、沖積地ではなく丘陵部に多く認められいまだ沖積地における大規模な遺跡は認められていない。後期になると規模の大きな調査が行なわれた陣馬山遺跡においては、竪穴住居や台状墓が検出されたことにより集落と墓との関係が明らかにされている。しかし、この期の墓は、経塚１・２号墳や向山１～17号墳のように認められているが先の例のようにそれらに関わる居住地はまだ明らかにされていない。

古墳時代になると、観音寺丸山に全長137ｍの前方後円墳である玉井丸山古墳が所在する。この玉井丸山古墳の占地する北の山陽町側には、両宮山古墳を筆頭に森山古墳・廻山古墳・朱千駄古墳・小山古墳などの前方後円墳が集中する地であり、５世紀代になると備前南部にお



1．松尾２号墳　2．松尾４号墳　3．松尾５号墳
4．松尾古窯跡　5．経塚１・２号墳　6．塩納成遺跡
7．東大寺瓦窯跡　8．夏井遺跡　9．向山１～17号墳
10．陣場山遺跡　11．吉岡廃寺

第２図　瀬戸地区遺跡分布図（1/50,000）

いても重要な位置を占めていることが窺われるのである。後期に入ると谷部に横穴式石室を主体とする古墳群が数多く営まれるようになる。そして、その内部には陶棺が納められていることが比較的多く認められている。

古墳時代以降は、塩納に白鳳時代初期の第Ⅲ四半期前後に造営された吉岡廃寺が認められている。また、治承４年（1180年）に火を受けた東大寺の復興のための瓦を焼いた東大寺瓦窯跡が万富の大寺山に造られている。そして、この期に前後して万富の保木でも認められた備前焼の窯が点々と谷部に営まれるようになる。（下澤）

山陽町

赤磐郡山陽町は、地理的には、岡山県南東部の赤磐郡において中南部に位置する。西は、本宮高倉山を中心とする丘陵を境として御津町と、南西および南は丘陵などによって岡山市・瀬戸町と接している。東は熊山町と、北は平野部などで赤坂町と接している。

町域は、北の吉備高原と南の岡山平野の接点にあたる広くて浅い皿状の盆地地形をなしている。この盆地の中央を、砂川が南流している。砂川は、航空写真から、その右岸・左岸に旧河道と思われる

1．馬屋遺跡　2．池新田遺跡　3．新屋敷遺跡　4．長尾遺跡　5．南方条里遺構（ＳＴＡ140+60西）　6．斎富遺跡　7．斎富古墳群　8．門前奥池西遺跡　10．山陽小学校校庭遺跡　11．岩田大池遺跡　12．門前奥池東方遺跡　13．両宮山遺跡　14．朱千駄古墳　15．森山古墳　16．廻り山古墳　17．小山古墳　18．茶臼山古墳　19．森山古墳関連遺跡　20．馬屋森向遺跡　21．馬屋出水遺跡　22．馬屋長田遺跡　23．備前国分尼寺跡推定地　24．備前国分僧寺跡

第３図　山陽町遺跡分布図（Ｓ：1/50,000）

跡が確認出来、そして、現在の河道は17世紀後半の大規模な河道改修によるものである。このように乱流する砂川が、何回か河道を変えながら、沖積低平地を形成したと考えられる。また周囲の丘陵は、町西部が標高300～450mに対し、町東部が40～100mと標高が低く、起伏も小さい。地質的には、おおむね花崗岩からなり、ところにより山砂利層の分布もみられる。町域の遺跡の多くは、この丘陵上ないしは丘陵と低平地の接点に分布している。

町域での旧石器時代の遺跡は、現在確認されていない。しかし、遺物としては、砂川河床で採取された石器が報告されている。現在確認されている最も古い遺跡は、沖積平地南縁山麓の緩斜面に形成された谷部に所在する、南方前池遺跡（図中9、以下同じ）である。この遺跡は、縄文時代晩期から弥生時代後期までの遺跡であるが、特に、縄文時代晩期の食料貯蔵穴10基が検出されたことで著名である。

弥生時代前期の遺跡は、南方前池遺跡の他に、山陽小学校校庭遺跡⑽の2か所が確認されている。明確な遺構は検出されていない。中期になると、遺跡の規模が拡大し、数量的にも増加してくる。集落遺跡の場合、中期中葉から後期初頭のものが、丘陵上や斜面などの比較的高所に、後期以降になると、丘陵端部や谷間など低位地との接点に多く分布するようになる。前者の遺跡の代表として、山陽団地造成工事に伴って調査された用木山遺跡・惣図遺跡・愛宕山遺跡・さくら山遺跡等がある。また、後者の代表的遺跡として、山陽団地造成工事に伴って調査された門前池遺跡や現状保存された岩田大池遺跡⑾、山陽町立総合福祉センター建設に伴って調査された門前池東方遺跡⑿のほか、砂川以東では山陽自動車道建設に伴って調査された斎富遺跡⑹等があげられる。以上のような立地の変化は、低平地での生産基盤の安定や拡大と密接に関係していると考えられる。一方これら集落の墳墓としては、山陽団地関連では、四辻土壙墓群・愛宕山土壙墓群・便木山遺跡などがある。これらは集落から離れた場所に立地し、当初から居住域と墓域とを分離していたことが明らかにされている。

古墳時代には、町域においても多数の古墳が造営され、現在までに約200基が確認されている。現在山陽団地のある東高月丘陵には、4世紀から5世紀初頭の用木古墳群以後、岩田古墳群・野山古墳群・宮山古墳群・愛宕山古墳群・四辻古墳群・便木山古墳群が営まれ、77基の古墳が古墳時代を通じて造営されている。またこの丘陵の南から南西に広がる平地部には、全長192mと吉備第三位の規模を有す両宮山古墳⒀をはじめ、朱千駄古墳⒁・、森山古墳⒂・廻り山古墳⒃・小山古墳⒄といった5基の大型前方後円墳が、5世紀後半から6世紀前半に相次いで造営されている。この他この平地には、両宮山古墳の北約100mに茶臼山古墳⒅、森山古墳の周溝に接するように「森山古墳関連遺跡」古墳⒆の2基の20m級の円墳があり、両宮山古墳の陪塚と考えられている。高月地区と比較すると見劣するが、町内北西部西山地区から赤坂町窪田にかけて、全長推定75mの赤坂町鳥取上高塚古墳や2面の鏡が出土した全長45m吉原6号墳をはじめとする7基の前方後円墳を中心として、120基の古墳が群在している。また砂川東岸の高陽地区にも、舌状丘陵などに、約40基の古墳が群在している。

このような古墳造営の背景には、大規模な集落の存在が想定される。しかし、町域内での古墳時代の集落遺跡としては、門前池遺跡・門前池東方遺跡や斎富遺跡などで、その様相が明らかとなりつつあるが、今後の調査・研究の蓄積が待たれる。また、門前池東方遺跡や斎富遺跡では、朝鮮半島系の遺物が相次いで出土しており、この地域と朝鮮半島とのつながりについても、今後の課題となる。

律令制下の町域は、備前国赤坂郡に属し、『倭名類聚鈔』にみえる高月郷・鳥取郷に比定される。『延喜式』巻二八兵部省「諸国駅伝馬」条によると、山陽道高月駅に馬20疋が置かれていたことが判

明する。古代山陽道のルートは、町北東部日古木（ひこぎ）地区から下市・河本・岩田を経て町南西部馬屋地区に至る説のほか、いくつか提起されている。しかし、諸説とも共通して、山陽道高月駅を馬屋地区に比定している。馬屋地区では、県道岡山・吉井線拡幅に伴い調査された馬屋森向遺跡⑳・馬屋出水遺跡㉑・馬屋長田遺跡㉒や、今回報告する山陽自動車道建設に伴って調査された馬屋遺跡(1)で、官衙との関係が推定される掘立柱建物など奈良時代の遺構・遺物が検出されている。また馬屋遺跡に近接して、備前国分僧寺跡㉔があり、その南約300mの穂崎字阿部にある仁王堂池付近が国分尼寺跡㉓と推定されている。このほか、門前池遺跡では、望楼風の建物など奈良時代から平安時代の10棟以上にのぼる建物群が検出され、門前池東方遺跡や斎富遺跡でも奈良時代の掘立柱建物などの遺構や陶硯などの遺物が検出されている。

平安末期、町域では、鳥取荘が開発され長講堂領となり、これ以降文献上でも、町域の姿が明らかとなってくる。遺跡としては、山陽団地造成に伴って調査された三蔵畑遺跡で鎌倉時代の土師器窯跡が検出されたほか、今回の馬屋遺跡・斎富遺跡の発掘調査で、平安末期から室町時代の掘立柱建物を中心とする集落が確認されている。なお長講堂領鳥取荘の中心と考えられる町北部では、まだこの時期の遺跡は調査されておらず、今後の解明が期待される。（横山）

〔参考文献〕

・瀬戸町

『瀬戸町誌』

・山陽町

『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』(1)～(4)(6)　山陽町教育委員会1971年～1977年

「門前池遺跡」『岡山県埋蔵文化財調査報告』(9)　岡山県教育委員会　1975年

「馬屋森向遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財報告』20　岡山県教育委員会　1990年

「馬屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』22　岡山県教育委員会　1992年

「馬屋遺跡」「斎富遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』23　岡山県教育委員会　1993年

「森山古墳関連遺跡現地説明会資料」　山陽町教育委員会　1994年

塩見真康ほか「岡山県山陽町門前池東方遺跡の朝鮮半島系資料」『古文化談叢』32　九州古文化研究会　1994年

『岡山県史』考古資料　岡山県　1986年

『山陽町史』　山陽町　1986年

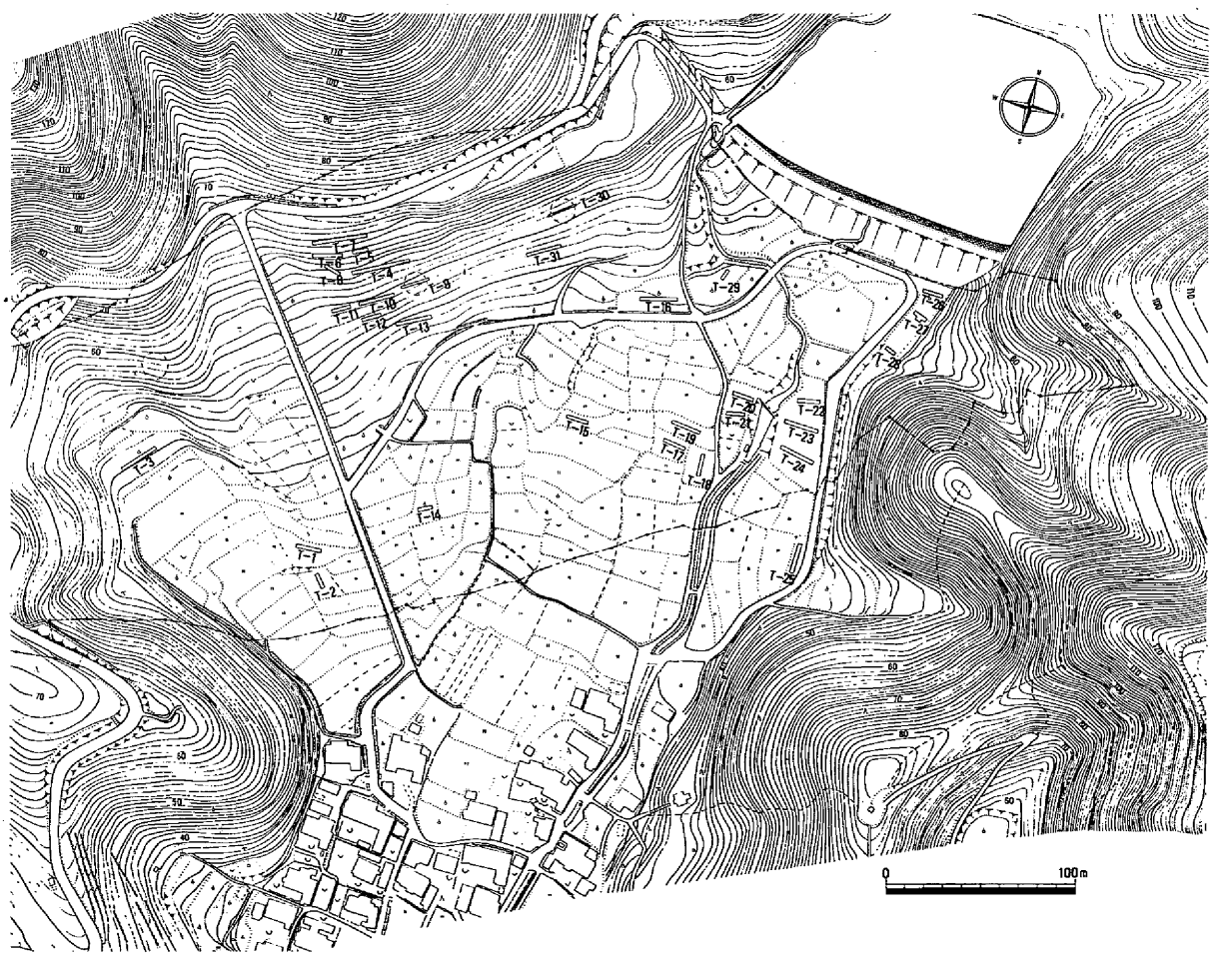
第３節　第一次調査の概要

調査の経緯と概要

調査は、中国横断自動車道建設に伴う発掘調査が真庭郡川上村の蒜山原地区において実施されていた。この地域は、県南部の気候条件と異なり１月から３月の冬期については積雪が多くかつ根雪となるため調査の継続が不可能となる。また、山陽自動車道建設に伴う工事の工程も固まりつつあり、そのすり合わせの資料が早急に必要となった。このようなことから横断道担当の２名を山陽自動車道の備前工事事務所管内の一次調査にあたることとした。この年度は、昭和63年１月４日から平成元年３月31日までの３月間において保木池じり遺跡・保木西遺跡・松尾２号墳・松尾４号墳・松尾窯跡について実施した。

平成元年度は、前年度と同じ体制で１月から３月の３月間において実教寺南遺跡と実教寺北遺跡について一次調査を実施した。

平成２年度は、年度当初から担当者２名をもって年間を通じての本格的な調査に着手した。しかし、一部の遺跡においては全面調査にいたらずに一次調査段階で終了する遺跡が見られる。それらは、瀬戸町の奥池西遺跡・奥池北遺跡・塩納成遺跡Ａ・塩納成遺跡Ｂそして熊山町の満願寺遺跡である。



第４図　保木地区調査位置図（1/4,000）

平成３年度は、用地買収が最も遅れていた山陽町部分について地元の了解をえて５月から４名で一次調査を実施した。前年度と同様に一部の遺跡においては全面調査にいたらずに一次調査段階で終了する遺跡が見られる。それらは、長尾遺跡・南方条里（STA 140＋60西）である。

このようなことから昭和63年度から平成３年度までの一次調査で終了した遺跡について以下その概要を記す。なお、一次調査に引き続き全面調査に移行した遺跡については、各遺跡の報文中で扱うことにする。

保木池じり遺跡（第２図）

保木の集落から北へ入った広い谷部の東側に位置する。調査は、Ｔ－15～29のトレンチを設定した。遺跡は、段差のある水田を形成しており最も高いところから低いところまでの高低さは８ｍほどを測る。このようなことから、東側の丘陵際については表土が浅く10cm前後で基盤層に達する。しかし、西側の谷部については礫を含む再堆積層が厚く１ｍを超えるとほぼ角礫となり土を含まなくなる。

遺構は認めることができず遺物については、若干の中近世磁器の破片を検出している。

保木西遺跡（第２図）

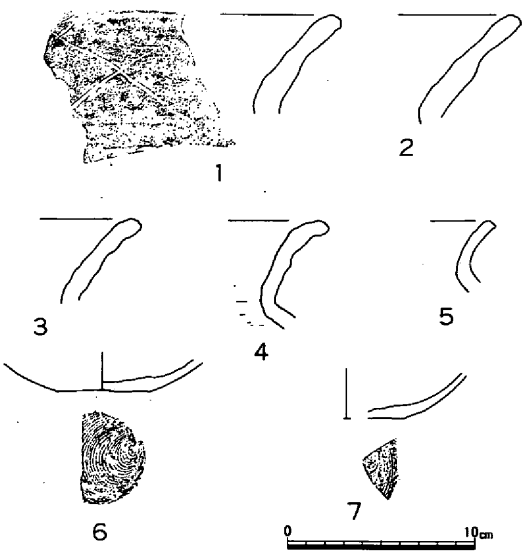
保木池じり遺跡の西側に接して位置する。地権者の同意が得られる水田は少なくＴ－１から３とＴ－14のみのトレンチであった。基本的には、20cm前後の表土以下は礫であり遺構等は検出されなかった。

保木窯跡（第２図）

遺跡は、北西側の丘陵斜面に位置すると推定されていた。昭和51年に実施された分布調査において４か所の窯跡を認めている。調査は、Ｔ－７～13のトレンチを設定し遺構の確認につとめた。しかし、窯に関係する遺物等はまったく認めることができなかったのである。この部分を東西にとおる水路のカット面の北側において土器片と炉壁片を多く確認することができた。これらはいずれも畑の石を寄せたような状態で塊まりとなっており、遺構として認められる部分は把握できなかった。さらに、地権者から畑の造成の際に機械をいれて開墾していたことが明らかになった。このようなことからほぼこの時に消滅したと考えられるのが妥当であろう。したがって、分布調査で認められた窯跡は畑の耕作に支障となるため取りぬかれて用水脇に寄せ集められた結果と推測するのである。

出土遺物（第５図）は、いずれも備前焼である。１～４は、比較的口径の大きいと考えられ、５はそれらより口径が小さい甕形土器である。１と４は、内面屈曲部にヘラの調整が認められる。また、１には口縁部外面に窯印が認められる。６と７は、椀形土器である。６は、底部径が５cmを測り外面には糸切りが認められる。

この他に、30点前後の破片を採取しているがほとんどが胴部の破片であり、口縁部の破片からは図示した器種が認められているだけである。これらの色

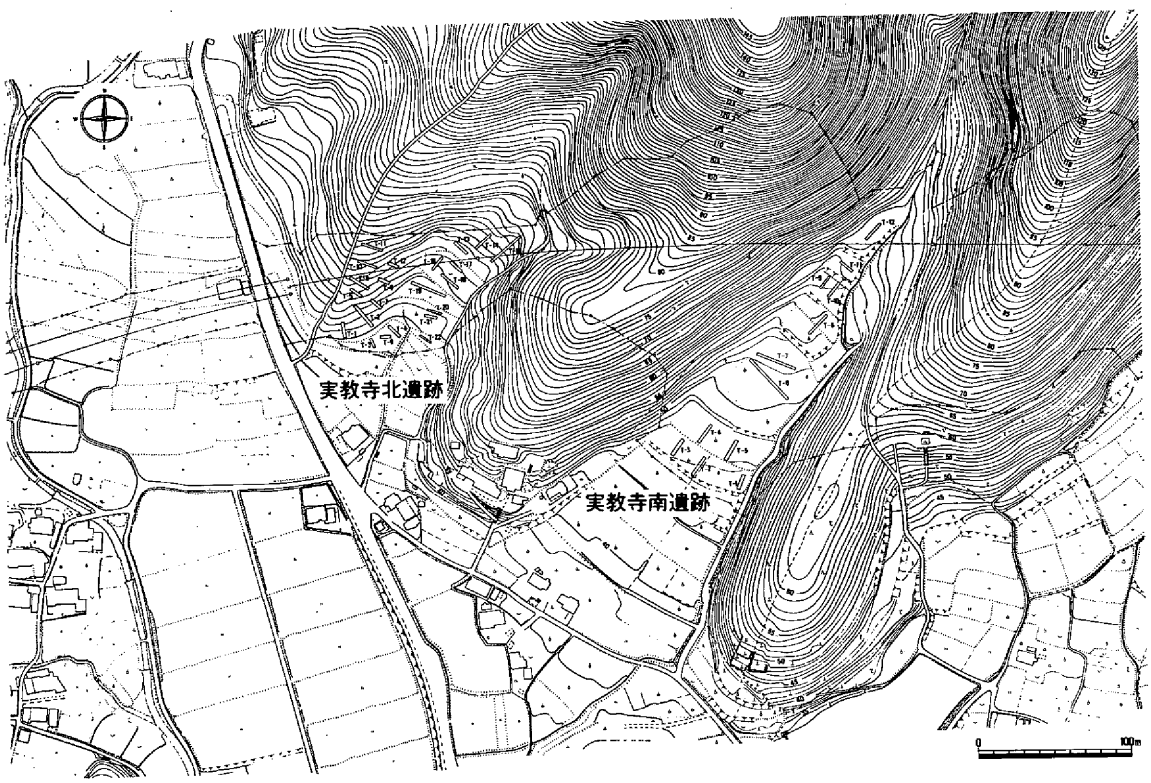


第５図　松尾窯跡出土遺物（1/4）

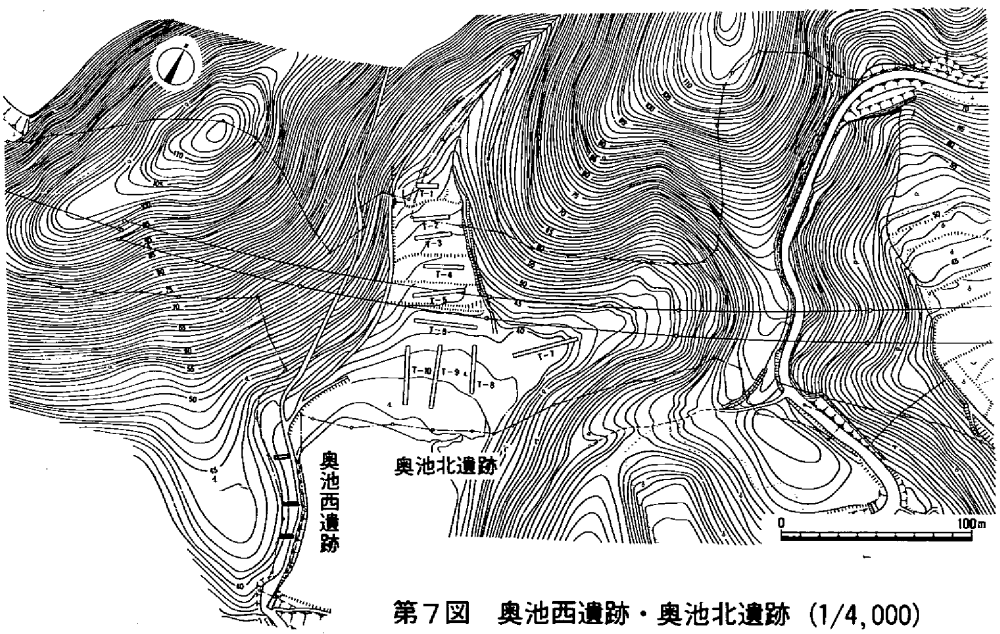
調は、前段階の須恵器に近い内容を呈するものが認められる他に赤く発色したものも存在している。また、瀬戸町史料集に報告されている器種と近い内容を示している。

実教寺北遺跡（第６図）

県道可真上万富停車場線の東側丘陵裾から谷部にかけて位置する。調査は、Ｔ－１～22のトレンチを設定した。丘陵部は、表土下10cm前後で基盤に達し、谷部は礫を主体とする再堆積土が認められた。その結果、遺構は認められず若干の中世と近世の磁器類を検出した。



第６図　実教寺北遺跡・実教寺南遺跡調査位置図（1/5,000）



第７図　奥池西遺跡・奥池北遺跡（1/4,000）

奥池西遺跡（第７図）

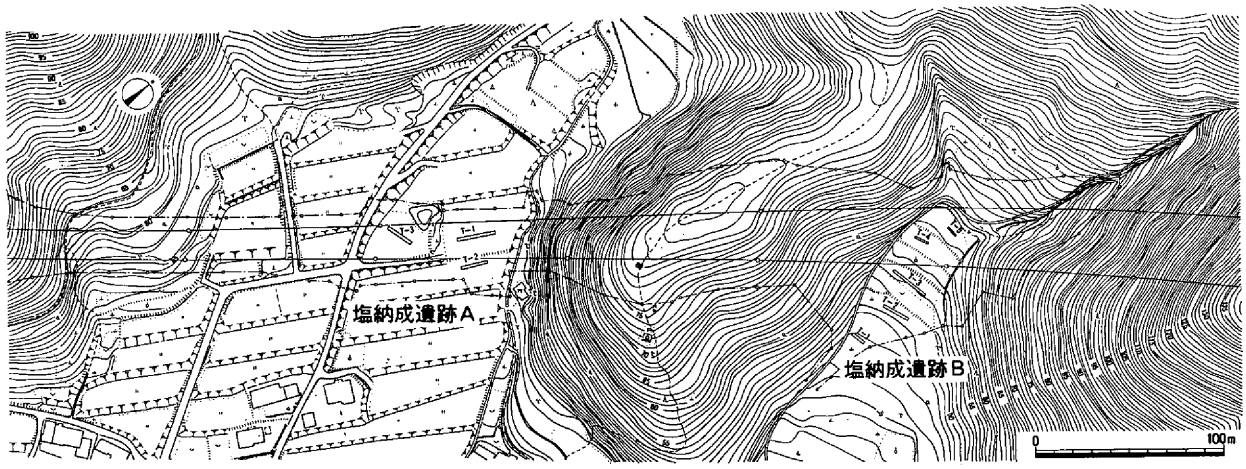
多田原の集落から１kmほど北へ行った奥池の西丘陵斜面にあたる。東側が池になっていることから、そのカット面の上段部分の若干平坦部を形成しているところに３本のトレンチを設定した。いずれのトレンチも表土下10cmほどで花崗岩風化土の基盤に達する。遺構・遺物は検出されなかった。

奥池北遺跡（第７図）

奥池西遺跡の北側にあたり、池の奥側に形成された谷部に相当する。谷は、北西側と北東側に二股に別れている。トレンチは、それらを含めてＴ－１～10を設定した。各トレンチの基本的な堆積は、約20cmの表土が認められそれから40cmほどの厚さで細礫が認められる。それ以下は、角礫となりほとんど土を含まない層となる。遺構は、認められず中世の遺物を若干検出した。

塩納成遺跡Ａ（第８図）

塩納の集落から北へ200ｍほど行った谷筋にあたる。この地点は、塩納勘定ロ２号墳が路線内に認められるが墓地の移転関係から今回の対象から除外した。水田は、昭和53年に圃場整備されたことから基盤層まで影響を受けていた。遺構・遺物は、認められなかった。



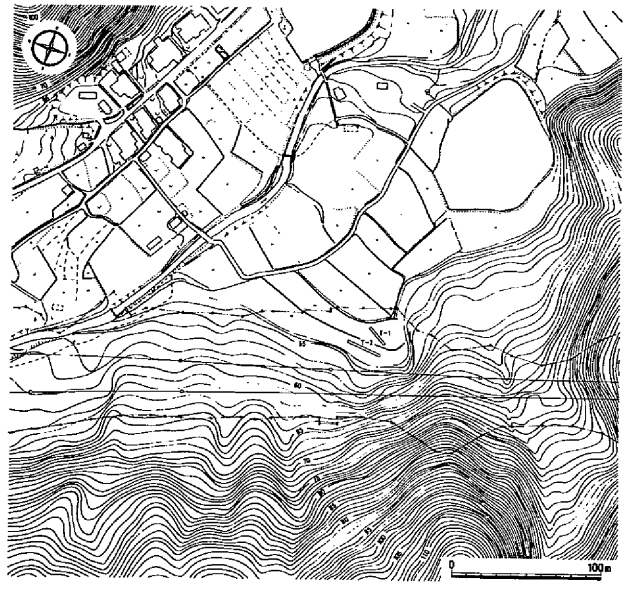
第８図　塩納成遺跡Ａ・塩納成遺跡Ｂ調査位置図（1/4,000）

塩納成遺跡Ｂ（第８図）

塩納成遺跡Ａの東側丘陵を隔てた細い谷にあたる。表土下50cmほどで暗黒色の礫層になり、遺構・遺物は、認められなかった。

満願寺遺跡（第９図）

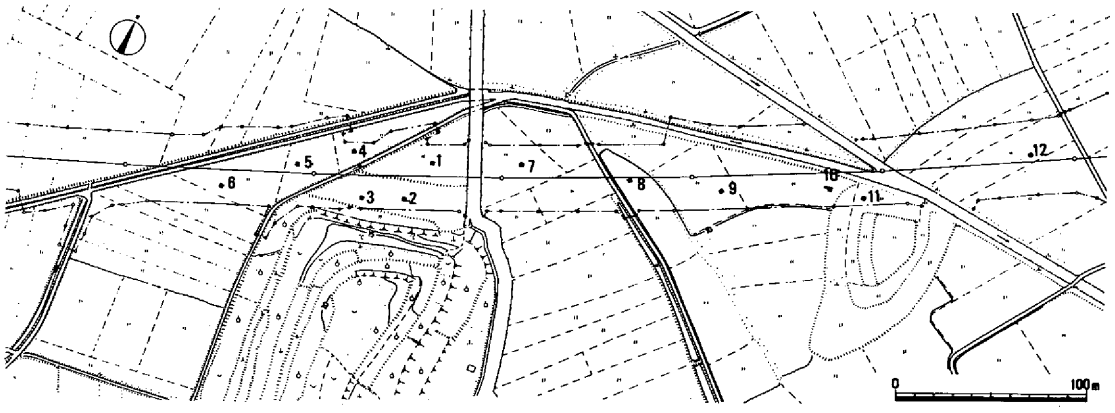
町道奥吉原線が奥吉原の家並みを抜けた東側に位置している。南からの丘陵が迫る水田である。その地形から丘陵斜面を削平して水田を造成していることが一瞥して判断される。３本のトレンチは、水田直下ですぐに黄色の基盤層になり水平に面が形成されている。遺構・遺物は、認められなかった。（下澤）



第９図　満願寺遺跡調査位置図（1/5,000）

長尾遺跡（第10図）

町道長尾石ヶ坪線の東西の低位部と東方残丘部を中心として、12本のグリッドを設定した。舌状台地裾部のＴ－２・３は、耕土下約30cmで黄褐色土の基盤に達した。東方残丘上のＴ－11は、耕土下約15cmで黄橙色礫の基盤に達した。これらは、開墾による地形の改変を受けていた。またＴ－10では、西方向への基盤層の下がりと、その上面に暗灰褐色土の包含層が確認された。この包含層は、Ｔ－11

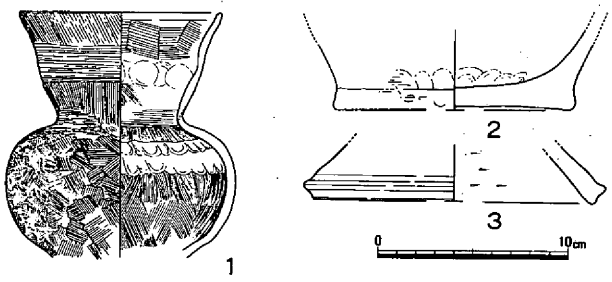


第10図　長尾遺跡調査位置図（1/4,000）

のある東方残丘からの流れこみであろう。

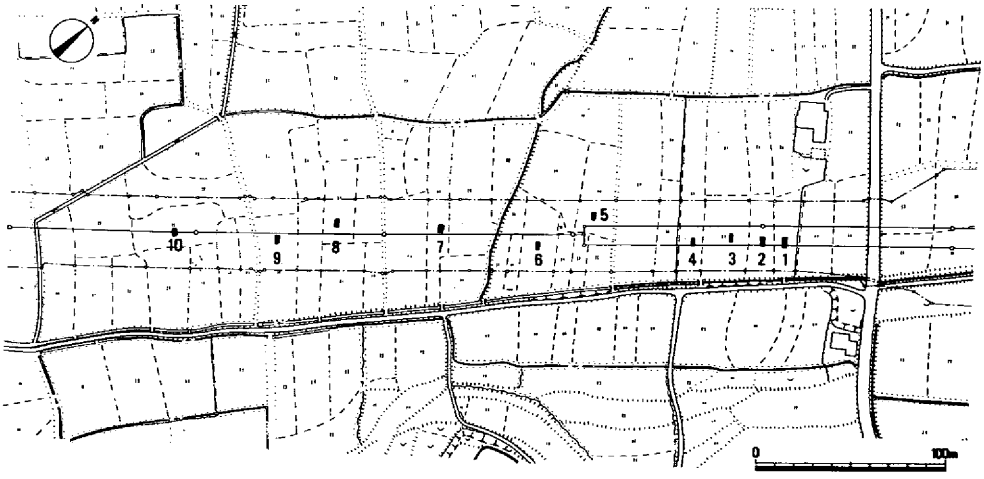
その他のグリッドは、粘質土層と砂層とが堆積し、旧河道または低湿地の様相を呈していた。全てのグリッドで遺構は検出されなかった。

遺物（第11図）は、Ｔ－８の砂層から土師器の坩（１）が出土した。また、Ｔ－10の包含層から弥生土器（２・３）や土師器が多く出土したが、須恵器はほとんど認められなかった。この他、Ｔ－１～７で土器小片が数点出土している。



第11図　長尾遺跡出土遺物（Ｓ：1/4）

南方条里遺構（STA 140＋60西）（第12図）



第12図　南方条里遺構（ＳＴＡ140＋60以西）調査位置図（Ｓ：1/4,000）

斎富遺跡の南西、町道沼田船廻線から砂川の間の水田に、T－1～10を設定した。各トレンチとも土層は、旧河道もしくは低湿地の様相を呈していた。また遺構・遺物は検出されなかった。（横山）

１．奥池北遺跡全景（南から）

２．奥池北遺跡Ｔ－１（西から）

３．奥池北遺跡Ｔ－４（西から）

図版２

1．塩納成遺跡Ａ全景（北西から）

2．塩納成遺跡Ａ　Ｔ－３（西から）

3．塩納成遺跡Ａ　Ｔ－１（西から）

1．塩納成遺跡Ｂ全景（南東から）

2．塩納成遺跡Ｂ　Ｔ－５（西から）

3．塩納成遺跡Ｂ　Ｔ－３（西から）

図版４

１．満願寺遺跡全景（西から）

２．満願寺遺跡Ｔ－１（南東から）

３．満願寺遺跡Ｔ－２（東から）

１．長尾遺跡調査風景（東から）

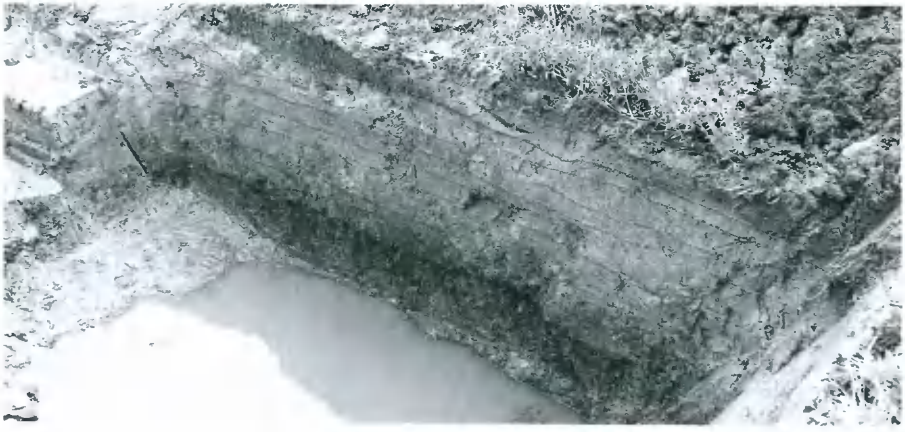
２．長尾遺跡Ｔ－８（南から）

３．長尾遺跡Ｔ－10（南東から）

図版６

１．南方条里（ＳＴＡ140＋60西）Ｔ－３（西から）

２．南方条里（ＳＴＡ140＋60西）Ｔ－７（東から）



３．南方条里（ＳＴＡ140＋60西）Ｔ－９（南西から）

Ⅱ　瀬戸町内の遺跡

瀬戸町内の遺跡挿図目次

第１図　遺跡位置図（１/50000）
第２図　実教寺北遺跡調査位置図（１/3000）
第３図　遺構配置図（１/400）
第４図　松尾２号墳墳丘図（１/150）
第５図　土層断面図（１/80）
第６図　松尾２号墳石室図（１/50）
第７図　松尾２号墳陶棺出土状態（１/50）
第８図　松尾２号墳出土陶棺（１/12）
第９図　松尾２号墳出土陶棺断面（１/12）
第10図　松尾２号墳出土遺物（１/４）
第11図　松尾４号墳墳丘・断面図（１/200，１/120）
第12図　松尾４号墳石室図（１/50）
第13図　松尾４号墳出土陶棺（１/10）
第14図　松尾４号墳出土陶棺短側面拓影（１/５）
第15図　松尾４号墳出土陶棺長側面拓影（１/５）
第16図　松尾４号墳出土遺物（１/４）
第17図　松尾５号墳墳丘・断面図（１/150，１/60，１/80）
第18図　松尾５号墳石室図（１/50）
第19図　松尾５号墳出土遺物（１/４）
第20図　火葬墓（１/15，１/４）

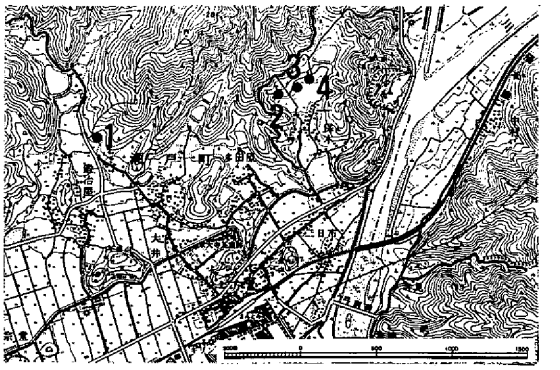
Ⅱ　瀬戸町内の遺跡

山陽自動車道建設に伴う発掘調査は、先に述べた如く中国横断自動車道建設に伴う発掘調査が冬期において中断せざるを得ない気候条件から、その期間について昭和63年と平成元年度の１月から３月の３月間について第一次調査を実施していた。平成２年度からは、担当者２名をもって年間をとうしての調査体制のもとでの発掘調査に着手したのである。

調査は、平成元年度に一次調査を実施した実教寺北遺跡の全面調査から行い、引き続き松尾古墳群の所在する保木地区の全面調査終了後に奥池西遺跡･奥池北遺跡･塩納成遺跡Ｂ・塩納成遺跡Ａ・斎富古墳群の一次調査を実施したのである。以下、実教寺北遺跡及び松尾古墳群の報告を行なう。

第１節　実教寺北遺跡

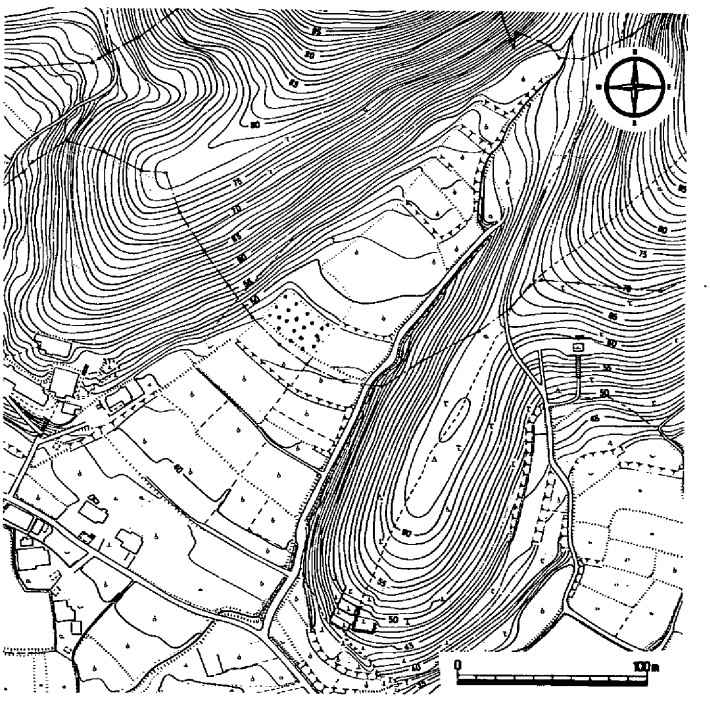
実教寺北遺跡（第１図）は、瀬戸町万富鍛冶屋に所在する。平成２年の１月に実施した実教寺南遺跡の丘陵を隔てた東側の谷に位置する。調査は、同年２月に一次調査を実施した結果、トレンチにおいて遺構が検出されたため全面調査を行なうこととした。このことを受けて、第一章第三節で述べたようなことから平成２年度の山陽自動車道（備前工事事務所）の本格的発掘調査の開始により、当遺跡を引き続き調査することとなったのである。



1　実教寺南遺跡　　3　松尾４号墳
2　松尾２号墳　　4　松尾５号墳

第１図　調査遺跡位置図（1/50,000）

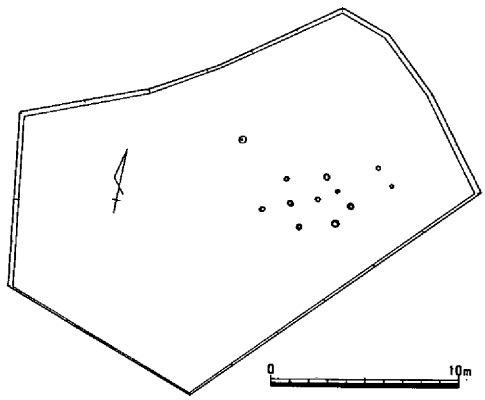
一次調査は、現状が水田となっている谷部に12本のトレンチを設定した。基本的な堆積層序は、厚さ20cm前後の表土の下に30～50cmの茶褐色土そして10～40cmの厚さで淡黒褐色土が認められた。その下層には、淡黄褐色礫層が厚く堆積しているのを認めた。この堆積内容は、谷の奥のトレンチ７～12においてはその間に礫層等の間層を持ち厚く堆積層を形成させている。また、茶褐色土及び淡黒褐色土の両者においても基盤層の角礫が多く含まれている。この調査の結果、トレンチ３において表土直下から若干のピットを確認したのである。なお、これより下



第２図　実教寺南遺跡調査区位置図（1/4,000）

層からは遺構・遺物は認められなかった。このことを受けて、トレンチ３の水田部の270㎡について全面調査を実施したのである。

遺構は、水田層直下からピットが検出された。ピットの規模は、42×35cmのものから21×20cmの円形の形態を呈するもので、深さは24～２cmをそれぞれ測る。これらのピットは、建物を構成するものなのかについて判断することができうる遺構の遺存状態ではなかった。遺物は、ピット中からの出土はなく耕作土及び遺構確認面において若干の中近世磁器類を出土している。



第３図　遺構配置図（1/400）

第二節　松尾古墳群

松尾古墳群は、赤磐郡瀬戸町万富に位置する。昭和63年の一次調査で３基の所在を確認した。この調査時以前において、瀬戸町誌中で太田吉岡村誌を引用し４基とし現在２基のみ確認されていると記している。この内の１基は同誌中において『保木掛け上がりの直ぐの西側竹藪と山林の接点である。墳丘は半ばぐらい削り取られ陶棺が露出』と記述されたものは、今回調査対象となった２号墳が現状において同様の状況を呈していることから同一に古墳と把握したのである。また、名称については、岡山県遺跡分布図における松尾２号墳と同位置にあることからそのまま用いた。さらにもう１基については『池の集中溝の下で桃畑の隅にある。』と記されている。この古墳の位置は先の分布図とは若干ずれるが町誌における『付近に陶棺片が散らばっている』ということから調査時における現状と同様な状況を示していることから４号墳とした。次に、今回５号墳としたものは位置的に分布図における４号墳と同じ位置となるが陶棺を伴出していないことから新たな古墳として取り扱った。

松尾２号墳

墳丘（第４図）

孟宗竹の竹藪に認められたもので、その南側を土取りのカット面に石室の一部と陶棺が辛うじて断面に引っ掛かった状態で確認された。墳丘は、ほとんどが流出し充分に把握できなかった。しかし、北側の丘陵斜面部において石室を中心として平坦部を形成している形状が認められた。

墳丘の盛土は、ほとんどが流失し第５図に示した土層断面における２層の淡黄褐色土まで二次的な堆積土であり周溝内堆積土も認めることができなかった。盛土と推定されるものは、３層の淡暗黄褐色土のみが残されていると推測される。

周溝（第４図）

丘陵北西側に一部認められたが当初から全周していたかどうかについては遺存の状態から把握できなかった。周溝は、幅70cm深さ30cmを測り東側は立ち上がるが、南西端は消失して確認することができなかった。この周溝から推定する当古墳の規模は、径８ｍ前後の円墳となる。

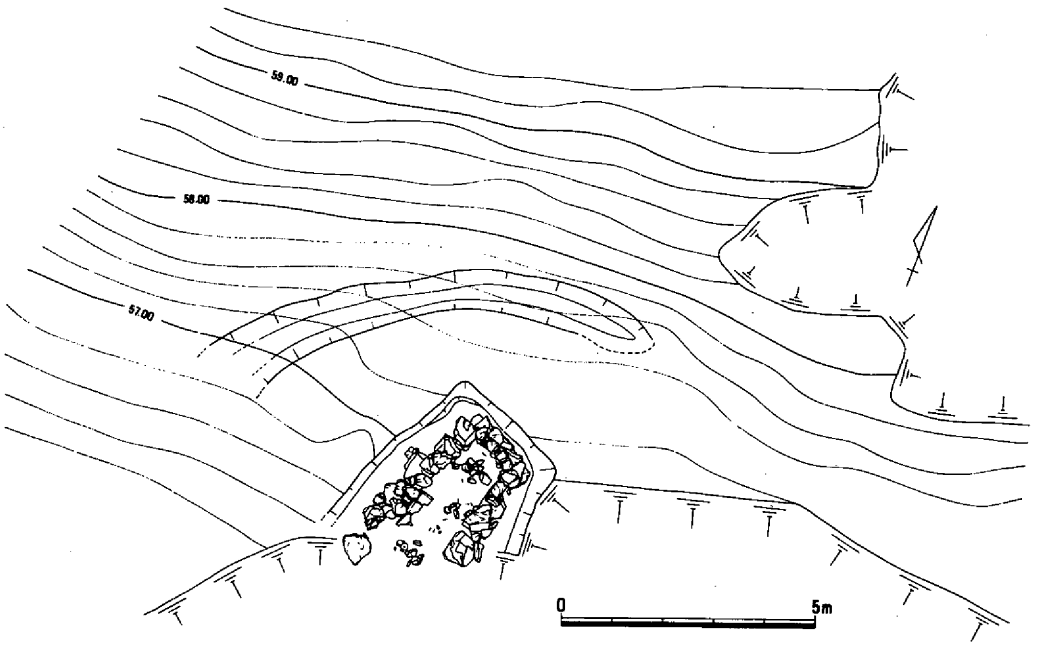
横穴式石室（第６図）

石室は、花崗岩の基盤を幅280cm深さ100cmほどを方形に掘り下げた中に設けている。石室規模は、

幅110～130cmである。石室の遺存状態は、西側壁の一段目の残りは良いが二段目は原位置を留めているのは奥壁寄りのものが主である。奥壁については、大形の石を据えその上に二個の石を積み上げている。そして、羨道部については奥壁から220cmほどでカットされており明らかにすることができなかった。両側壁と奥壁は、若干掘凹められて石を据えてその内側110cm高さ15cm前後に認められた。

埋葬主体（第６図）

先に述べたごとく、墳丘が竹藪のカット面に露出した状態であるためその部分近くに認められた陶棺及び棺台の一部は辛うじてずり落ち気味の状態で検出された。しかし、奥壁から３ｍほどはほぼ原位置を保っていることが認められた。陶棺は、西側壁に沿って認められたが棺の身と蓋が潰れた状態

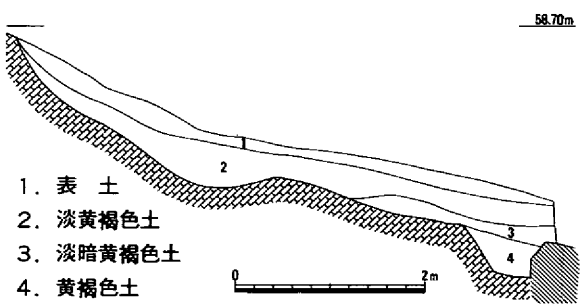


第４図　松尾２号墳墳丘図（1/150）

でかつずり下がる状態を呈して検出された。その東壁には、棺台に用いられたと考えられる石が認められその周辺から棺釘も認められている。さらに、奥壁の東西に沿った状態で石が認められその周辺から棺釘も東西に沿った姿で認められたことからこの位置にも埋葬されていたと考えられるのが妥当であろう。

遺物出土状態（第７図）

陶棺が西側壁に沿って一部は原位置をたもつが、他は身も蓋も潰れてかつずり下がった状態で認められた。この部分を取り除いて出土したのが１～３の須恵器の杯蓋と土師器の高台付椀である。この他に釘と11と12の不明鉄器が認められた。



第５図　土層断面図（1/80）

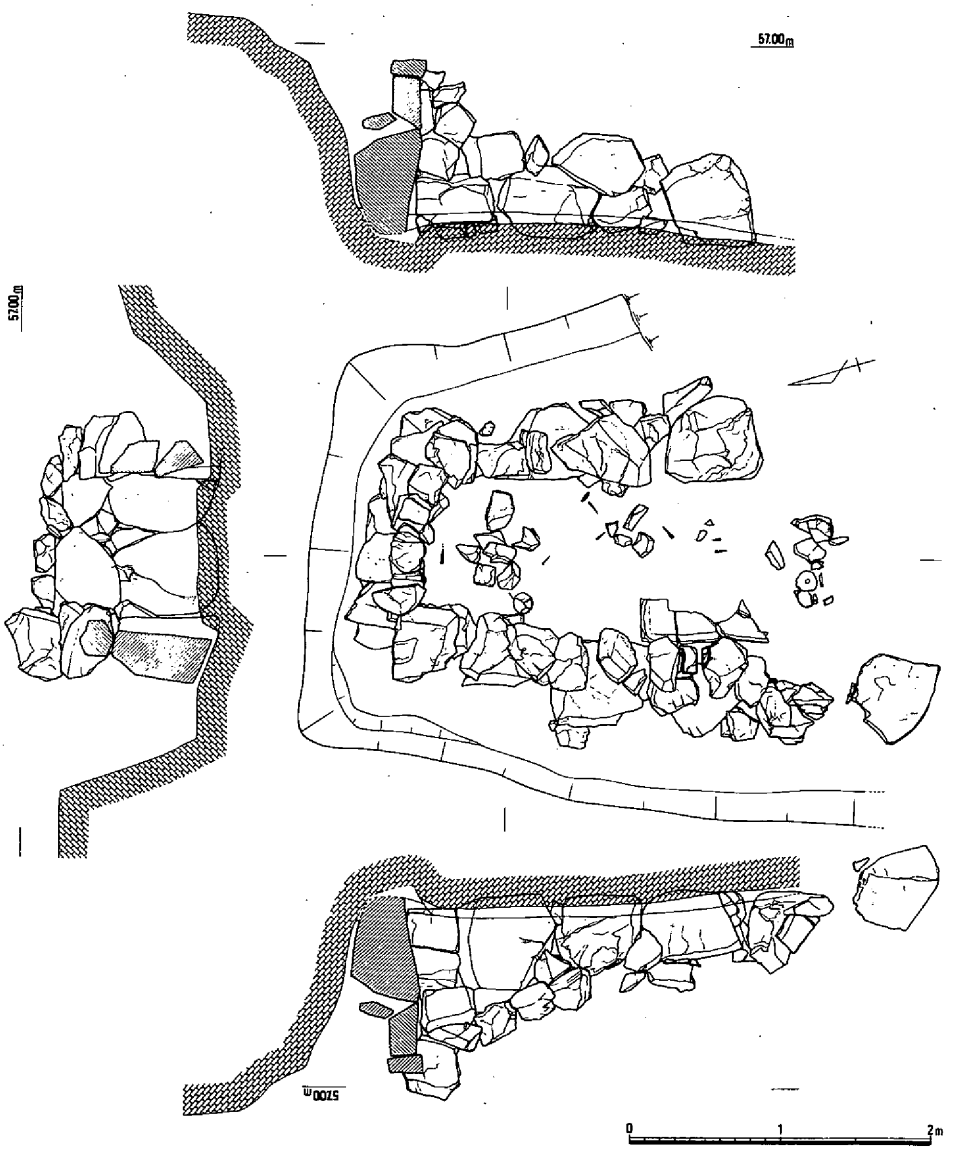
出土遺物（第８・９・10図）

陶棺（第８・９図）は、須恵質家形切妻式

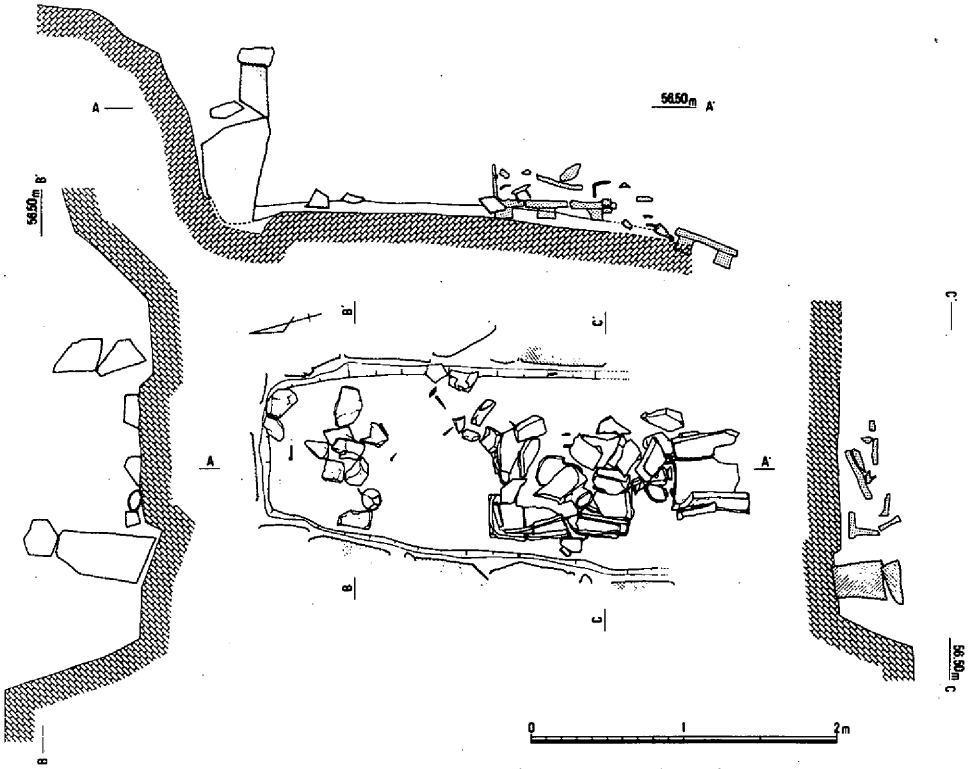
である。第８図における左身は、長さ81cm高さ44.3cm脚の長さ10cmである。また、同図の右身は長さ72.5cm高さ43.5cm脚の長さ９cmである。身の幅は、38.+αcmである。脚は、左右それぞれ一列３本で９本を付しているその径は、12～13.5cmを測り身との接合部で径が小さくなり台形状を呈する。蓋部分は、左のものだけが出土しており内側の幅58.5cm外側の幅51cmで中央に幅7.5cmの凸帯を有している。

１は、口径16.3cm器高2.7cmを測る扁平なつまみを有する杯蓋である。２は、口径13.5cm器高2.5cmを測る扁平なつまみを有する杯蓋である。３は、口径14.2cm器高13.5cmを測る擬宝珠形のつまみを有する杯蓋である。５は、口径６cm器高30cmを測る平瓶である。２は、上記の須恵器と折りかさなって出土した土師器の高台付きの椀である。

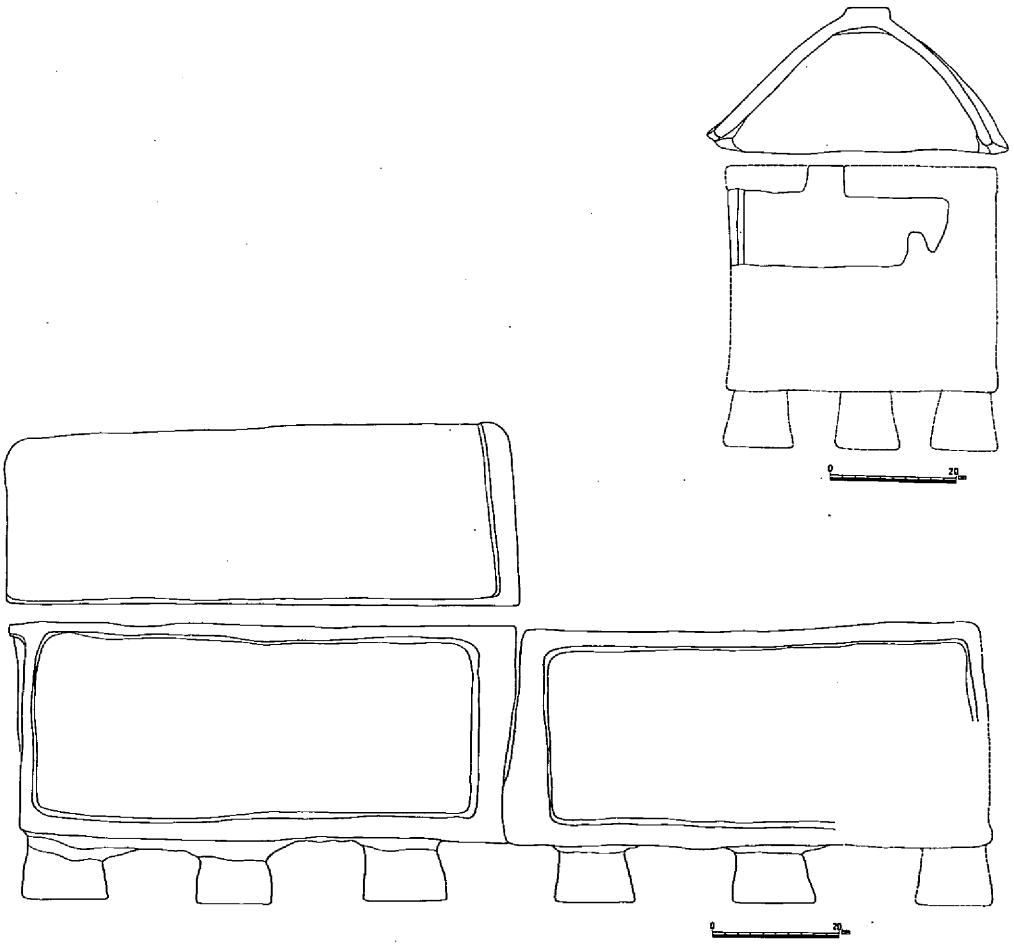
棺釘は、10点認められ３と８から釘頭の状態が折り曲げているものであることが認められる。11は、厚さ２㎜ほどで断面形態が三角形状となるものである。12は、幅2.2cmを測る。鎌と考えられるが、刃部が明瞭でなくかつ屈曲部も中側に折り込んでいないことからこれとするには躊躇する。



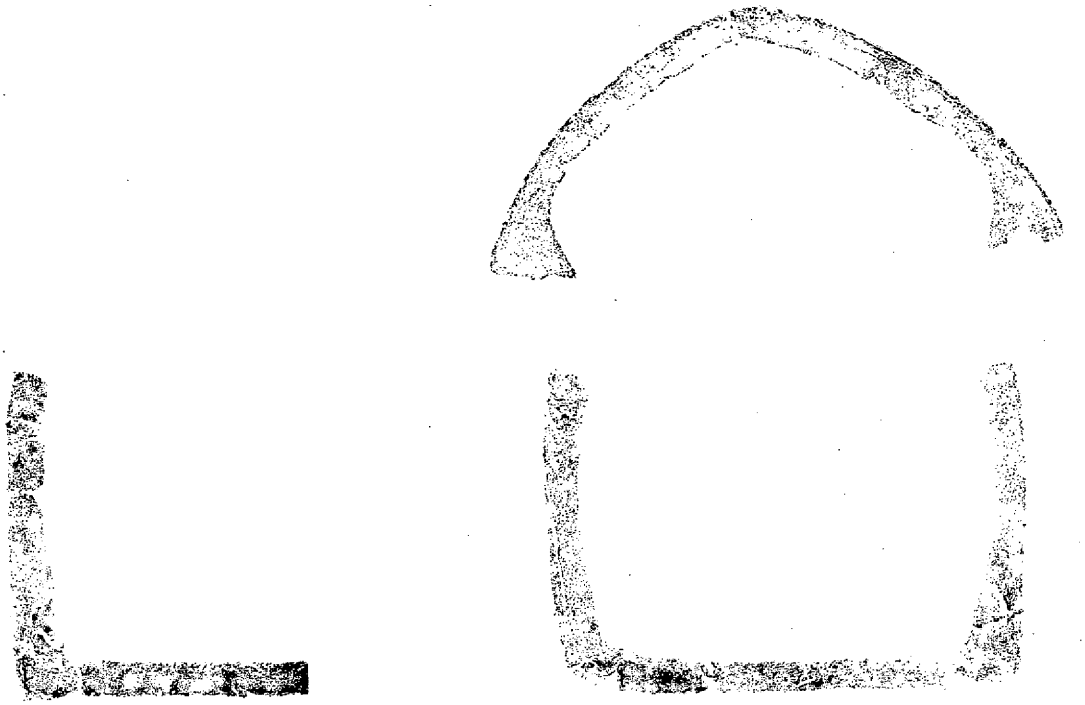
第６図　松尾２号墳石室図（1/50）



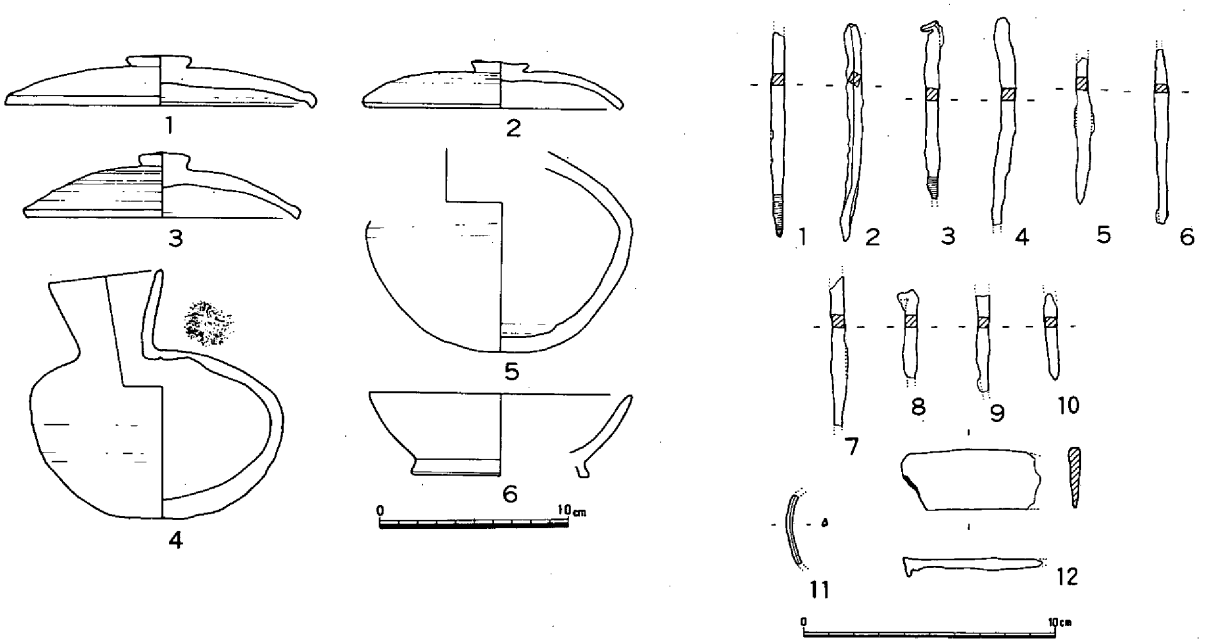
第７図　松尾２号墳陶棺出土状態（1/50）



第８図　松尾２号墳出土陶棺（1/12）



第９図　松尾２号墳出土陶棺断面拓影（1/6）



第10図　松尾２号墳出土遺物（1/4，1/3）

松尾４号墳

墳丘（第11図）

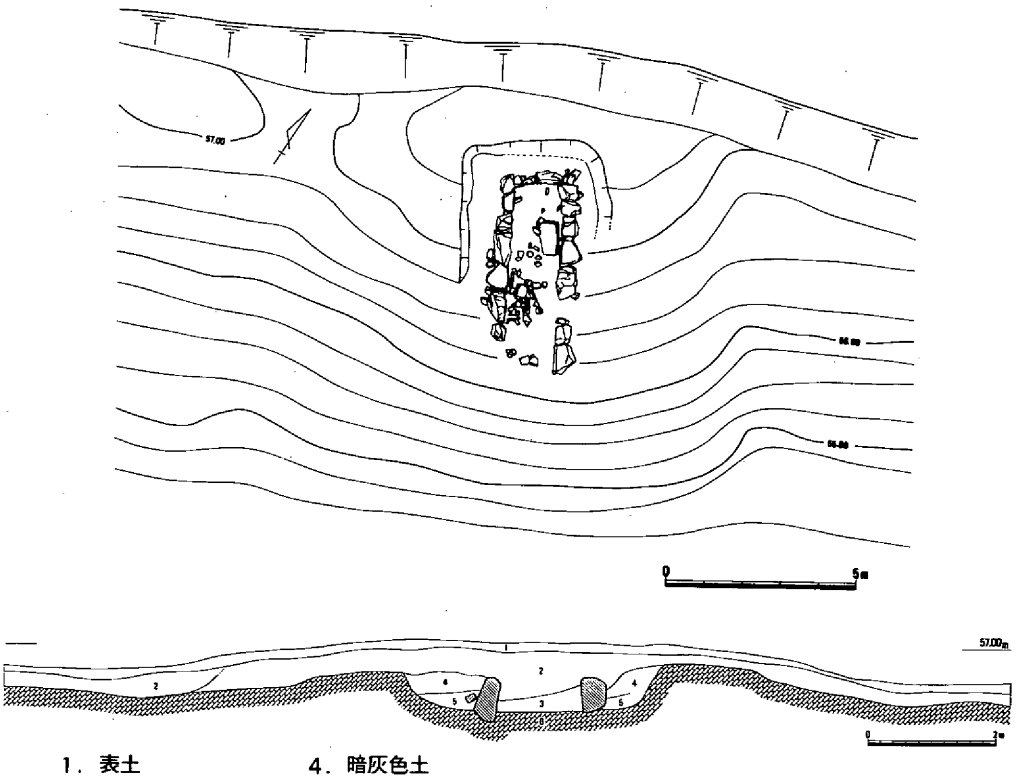
瀬戸町誌において『方墳状の墳丘』と記されているが明らかに方墳を窺わせると判断させる内容は把握できなかった。墳丘が想定される盛土は、断面図（第11図）においては認められなかったが、一部石室構築に伴う掘り方周辺が平坦に整えられた状況を示すのが認められた。したがって、墳丘の規模の特定はできなかった。なお、現状からその規模を推定すれば８ｍ前後の円形の古墳と考えられる。

周溝（第11図）

明確にそれと判断できるものは、平面的に把握できなかった。断面図（第11図）における南西側に認められる第２層の立ち上がりを土層から判断したが、この層は表土下に堆積する層として石室上面にも認められるものと同一のものである。また、墳丘図（第11図）の北東側に認められる等高線の屈曲は、山道状の凹が下方まで続いていることから周溝の痕跡としがたいのである。以上のようなことから周溝については確認することができなかったのである。

横穴式石室（第12図）

基盤層を幅390cm深さ60cmほどに掘り下げて石室を築いている。石室は、奥壁から370cmほどは遺存するがそれより南は確認されなかった。畑の造成により消失したものと推測される。石室の幅は、130～150cmで両側壁は一段目のみを認めるにすぎない。奥壁は、石材を縦方向に用いたものを二枚が認められる。石室の平面形態は、ほとんど胴の張りが認められず直線的な形状を呈している。



第11図　松尾４号墳墳丘断面図（1/200，1/120）

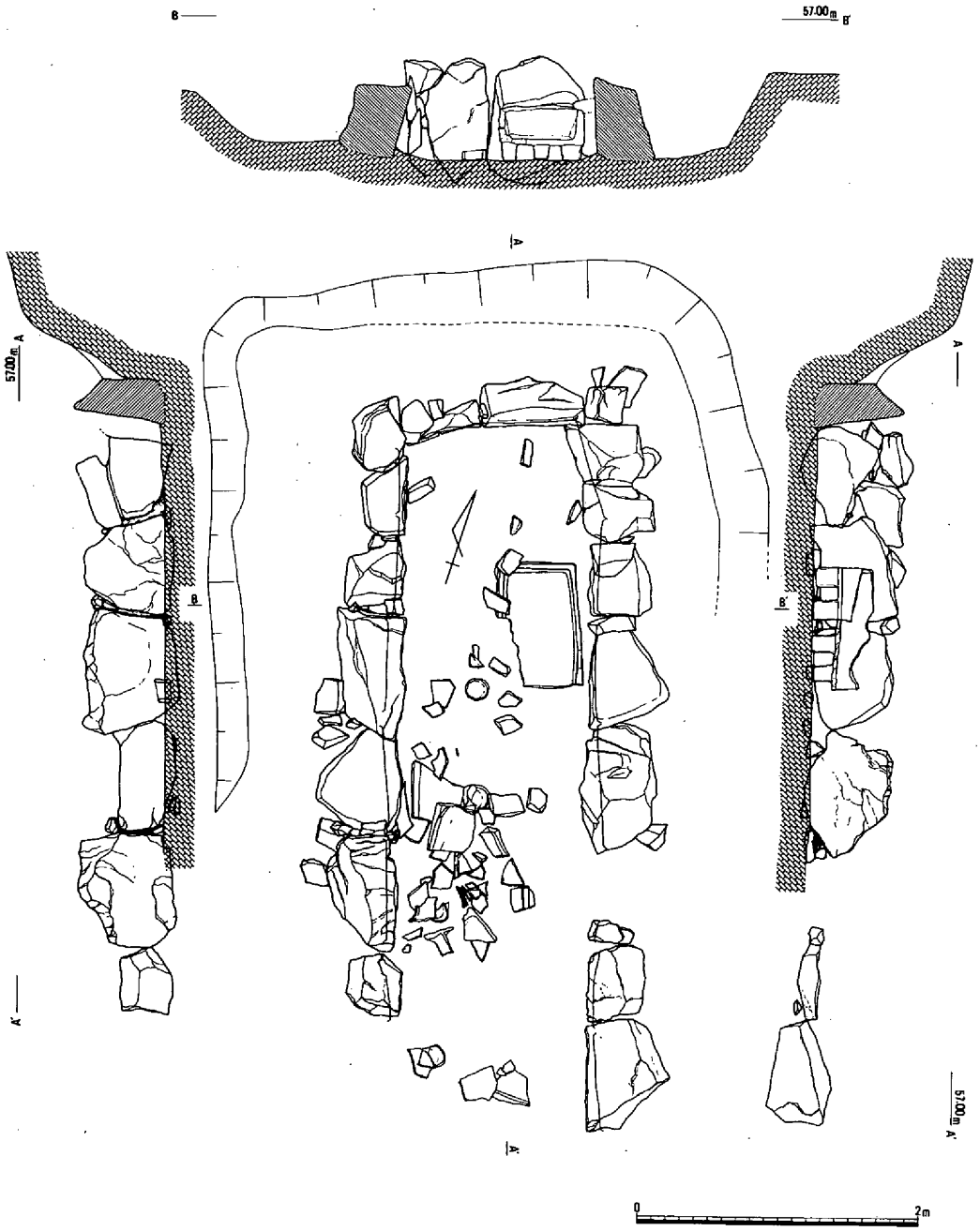
埋葬主体（第12図）

陶棺が東側壁に沿って身の半分が原位置で認められた。陶棺の他の破片は、西側壁側の南よりに纏って検出された。当初陶棺は、一個体と考えていたがこの陶棺の西側に床面にめり込んだ状態で陶棺の脚が認められた。その出土状態から原位置を保っていることが判断できることから、二つの陶棺が両壁にそった状態で存在したことが知られるのである。他の埋葬主体については、釘等が認められず不詳である。

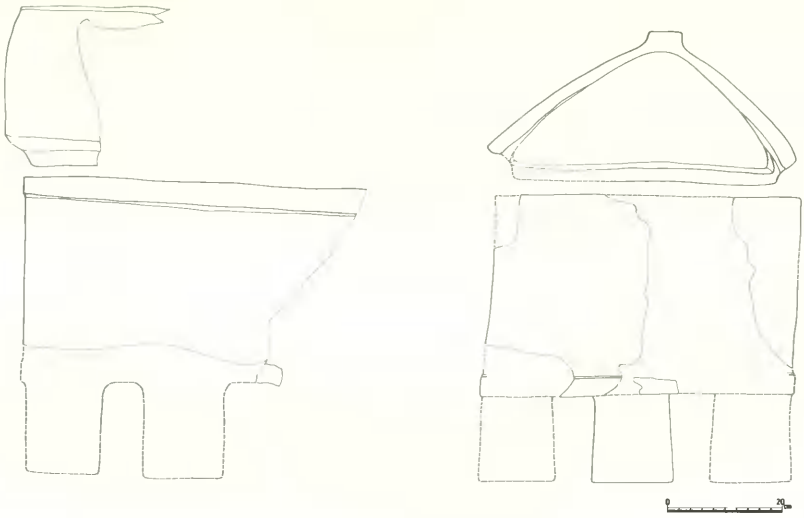
遺物出土状態（第12図）

陶棺の他には、石室外に掻きだした陶棺片と須恵器そして中世の土師器である。

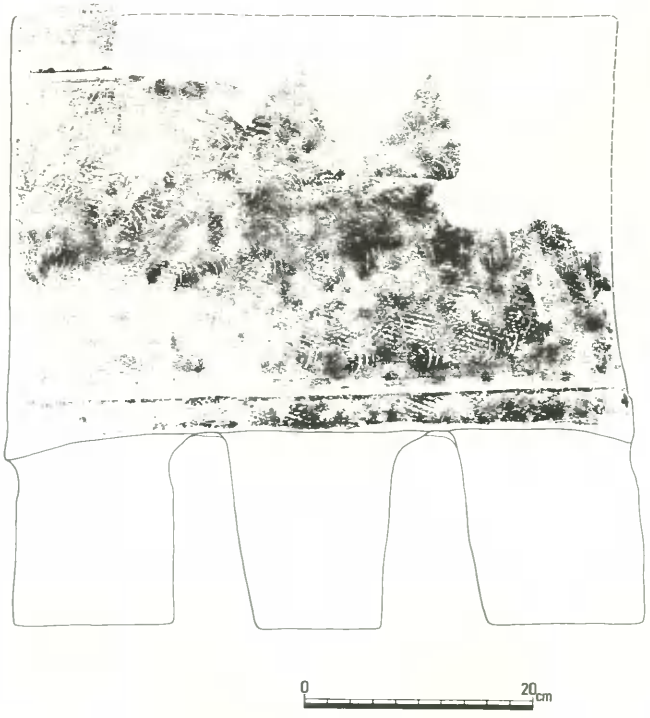
出土遺物（第13～16図）



第12図　松尾４号墳石室図（1/50）



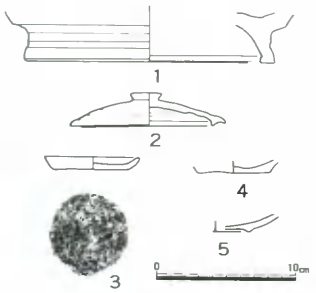
第13図　松尾４号墳出土陶棺（1/10）



第14図　松尾４号墳出土陶棺短側面拓影（1/5）

第15図　松尾４号墳出土陶棺長側面拓影（1/5）

陶棺一身（第14～15図）は、大きさは、長さ85.5＋αcm高さ55cm脚高15～16cm脚径14～15cmを測る。脚は、３本で４列認められることから片身12の脚が付されていた。この陶棺の長側面と短側面及び内面に青海波と格子目のタタキが認められる。陶棺一身蓋（第13図）は、須恵質家形切妻式のものであるが石室隅と石室外の掻きだしから出土したものである。この陶棺と先の石室内の身だけの関係は、第13図の陶棺は、



第16図　松尾４号墳出土遺物(1/4)

内外面の風化が著しく明瞭に観察できなかったが内面底部に同様のタタキが認められることから同一の陶棺を構成するものと思考される。なお、この陶棺の西側に存在したであろうその脚高7.5cm前後で径も小さい内容を示している程度が把握できただけである。

この他の、出土遺物（第16図）は、須恵器と土師器である。1は、長頸瓶の高台部の破片である。2は、口径11cm高さ2.4cmを測る杯蓋で扁平気味のつまみを付す。内面には、かえりをもつ。3は、口径6.6cm底径5.4cm高さ9㎜の土師器の皿であり、底は糸きりが認められる。4は、底径5.2cmを測り、底はヘラ切りが認められる。5は、僅かに高台が認められる土師器の椀である。

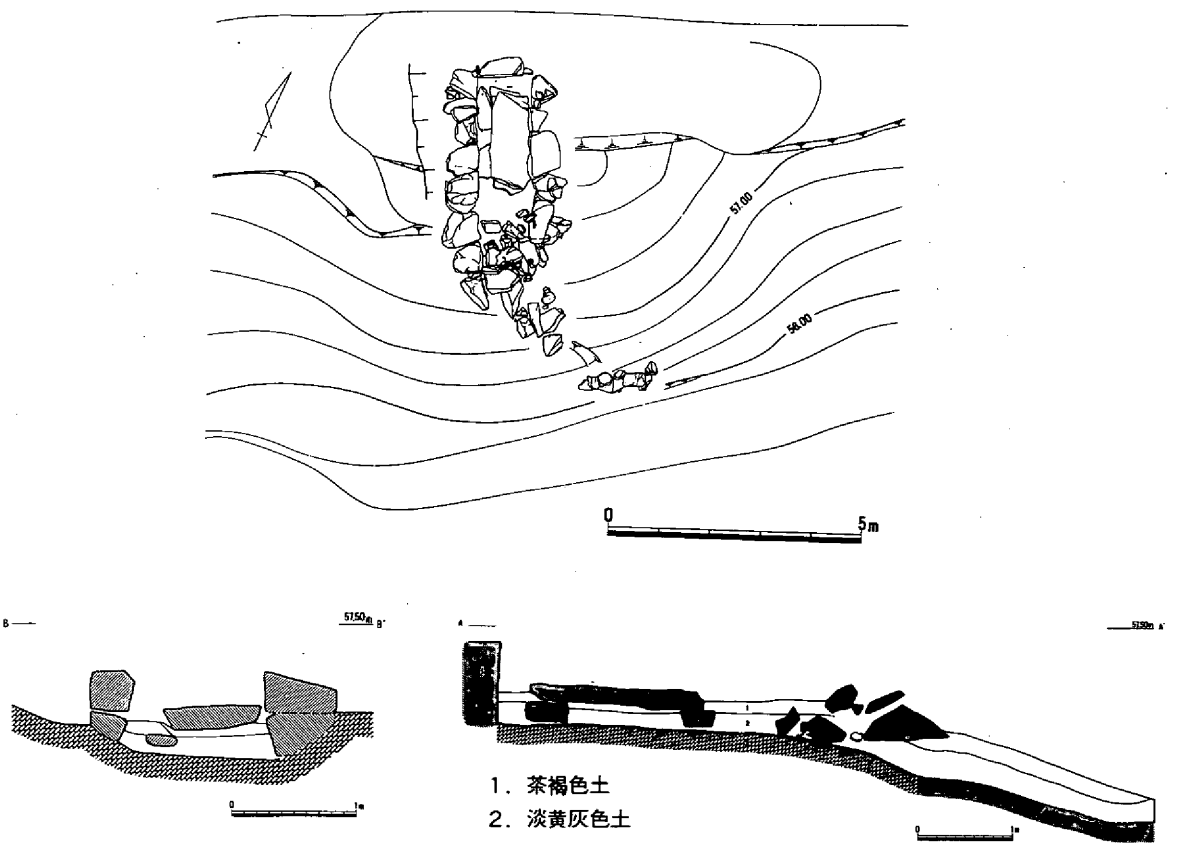
松尾5号墳

墳丘（第17図）

墳丘の地形測量図によると石室の両側の等高線が若干変化を示している。しかし、盛土が残される可能性の強い石室上面まで削平されており表土から石室の石が認める状態であった。このようなことから墳丘規模及び形態について明確に把握することができなかった。

外護列石（第17図）

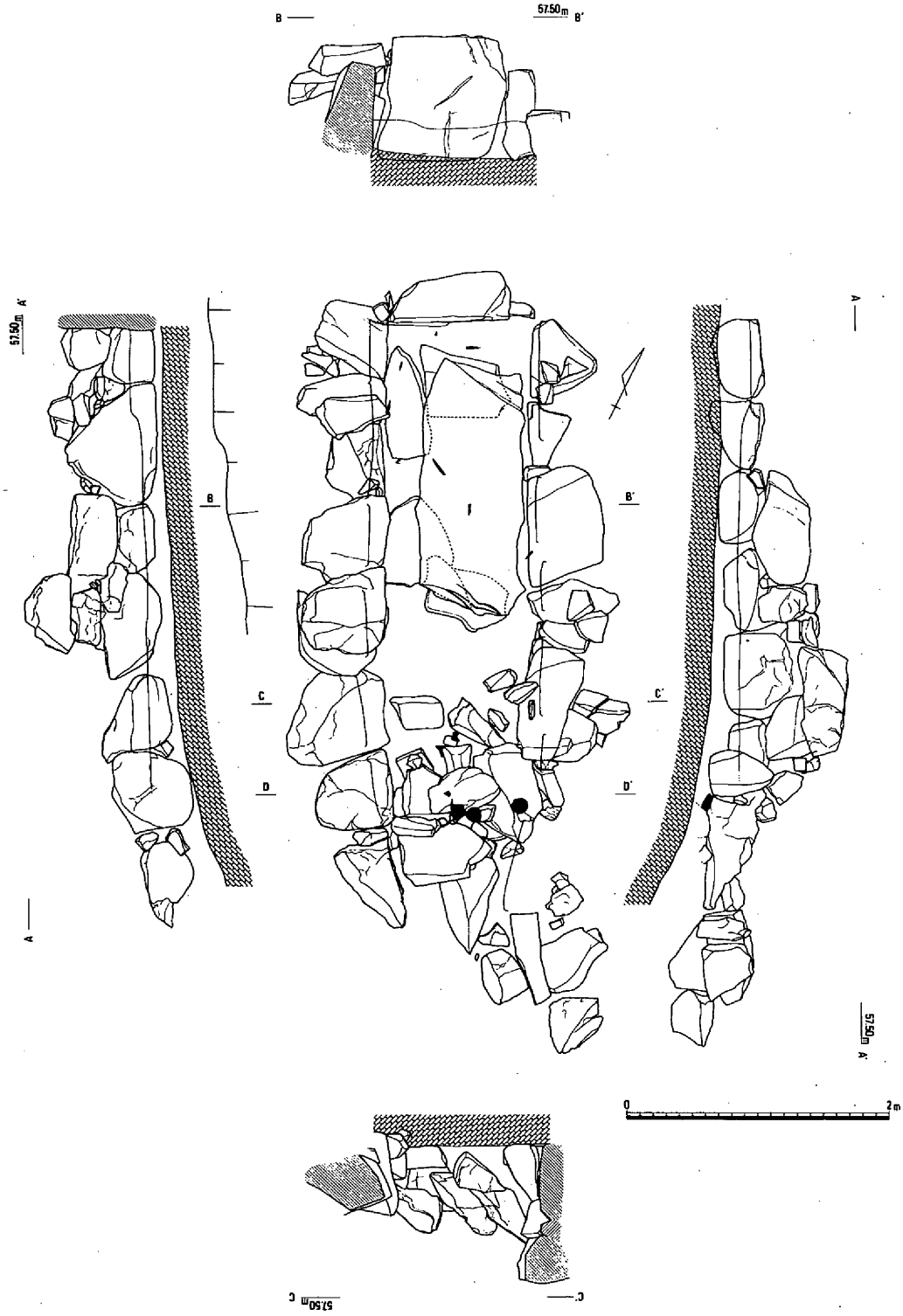
東よりの北東から南西にかけて長さ150cmの直線状に認められた。基盤層に据えられた状態で石を横に置き、一部は二段目まで確認された。その基底部には、根石状のものがあり明らかに組んだ状態を示していた。遺存状態が悪く明確に外護列石とするには躊躇されるが、その可能性があることを付しておく。



第17図　松尾５号墳墳丘断面図（1/150，1/60，1/80）

横穴式石室（第18図）

規模は、全長460cm幅130cm前後を測り、南に開口する。石室平面形態は、閉塞に近くなってその幅を狭くしている。無袖と考えられるが、東側壁のA—A′側面図（第18図）に示した斜線の丸い石の



第18図　松尾５号墳石室図（1/50）

ところから強く内側に屈曲する。この石だけが川原石であり、他は花崗岩を用いていることから玄室との境として据えられたと思考されるのである。奥壁は、一枚石を用い側石は一部において三段まで遺存している所が認められている。石室内は、長さ190cm幅80cm厚さ20cmほどの扁平な石が据えられていた。閉塞は、比較的大きめの石が用いられていた。

埋葬主体（第18図）

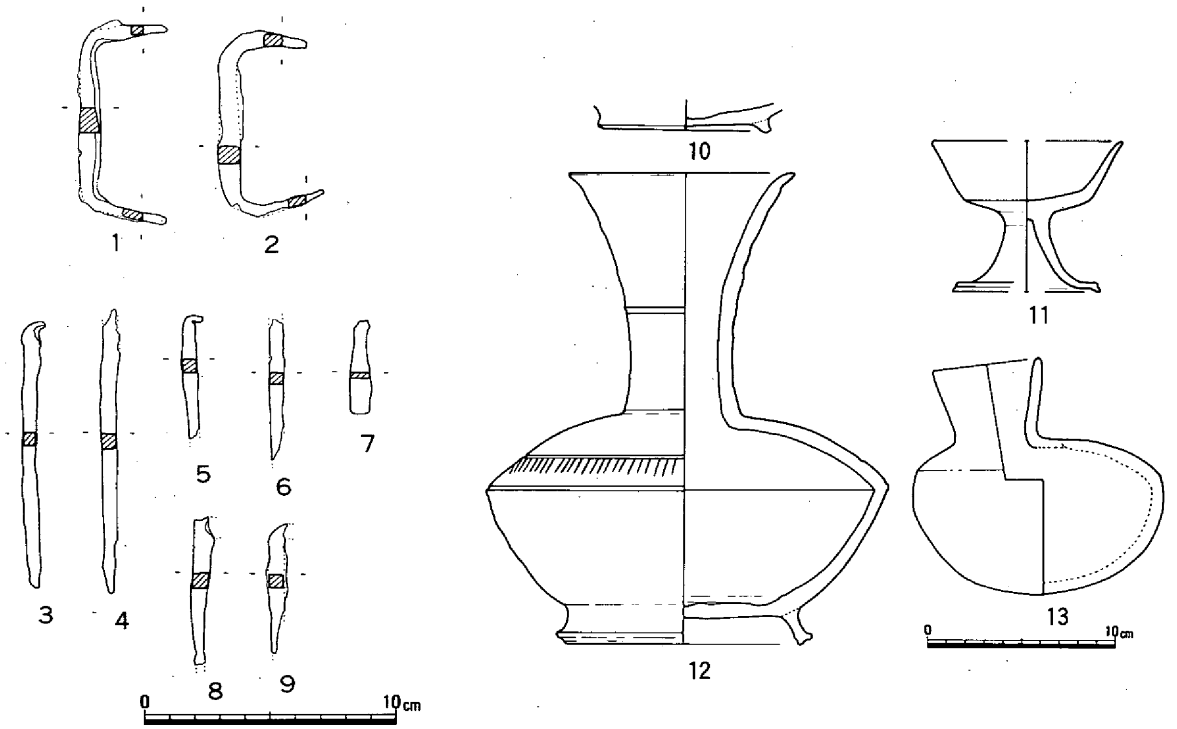
石室内に認められる扁平な石の上及び奥壁よりに棺釘が認められたことから木棺の存在が推測されるのである。

遺物出土状態（第18図）

木棺にともなうと考えられる釘とその扁平な石の下からも棺釘と考えられるものが二本検出されている。一点は、図に示したようにこの石のほぼ中央真下からで、他の一点はやや外側に認められた。須恵器は、閉塞の周辺から出土している。

出土遺物（第19図）

1と2は、長さ7cm余りの鎹である。3～9は、棺釘である。3が最も残りが良くほぼ原形をとどめている。10～13は、閉塞の周辺から出土した須恵器である。10は、高台付の杯であるが器面の風化が著しい。11は、器高8cmの高杯である。12は、口径12cm器高25cm高台径12.2cmを測る高台付長頸瓶である。頸部中位と肩屈曲部に凹線を施す。また、肩部には刺突文を巡らしている。高台は、外方に開き端面は凹部を形成している。13は、口径6cm器高12.5cmを測る平瓶であり、底部は摩滅が激しくツルツルとなっている。これらの須恵器のうち10以外は、邑久郡牛窓町に所在する寒風古窯跡出土のものと極めてよく類似する内容を示している。



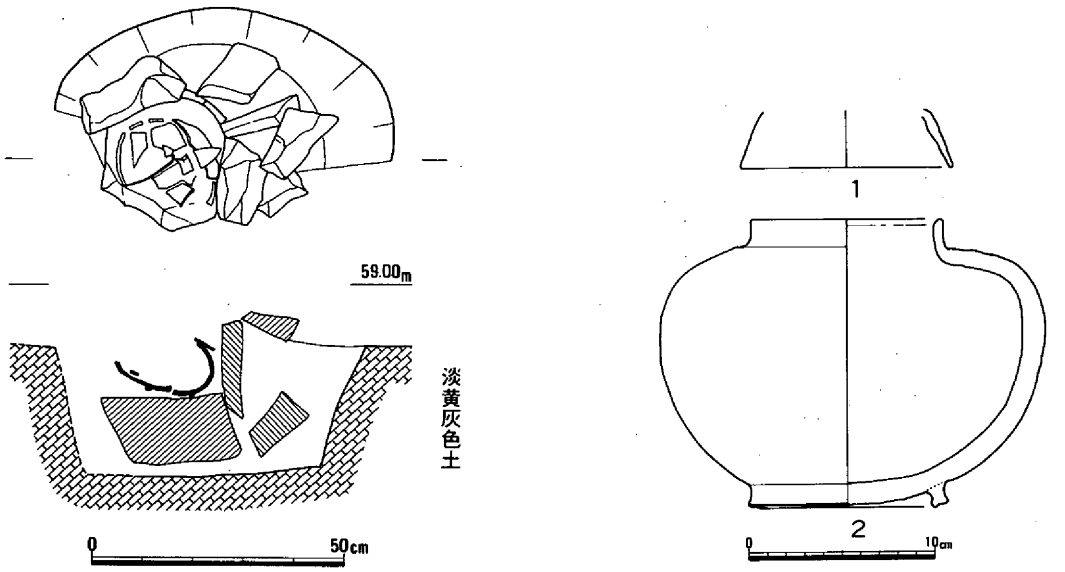
第19図　松尾５号墳出土遺物（1/3，1/4）

火葬墓（第20図）

一次調査時にＴ－４（第４図）の下側において用水のカット面に確認されていたものである。掘り方は、半分ほど確認することができたがほぼその全容を把握することができた。規模は、約65cmで楕円形の平面形態を呈し、深さは25cmを測り断面形態は逆台形である。掘り方の底には、厚さ13cmの方形の石を据えてその上に骨蔵器を置き、さらに周囲を石で囲った状態を把握することができた。骨蔵器は、口縁部が落ち込んだ状態で認められたが、杯身の破片が認められていることからこれによって蓋をされて納められていたものと思考される。骨蔵器の中には、火葬骨が認められたが遺存の状態が悪く分析できなかった。

出土遺物（第20図）

１は、須恵器の杯身で口縁部の一部のみが検出された。その出土状態から蓋として用いられたと考えられる。２は、口径11.1cm器高15.4cm高台径10.7cmを測る短頸壺である。この両者は、邑久郡牛窓町に所在する寒風古窯跡群から出土する須恵器の胎土に近い内容を示している。（下澤）



第20図　火葬墓・出土遺物（1/15，1/4）

第３節　勘定口２号墳

はじめに

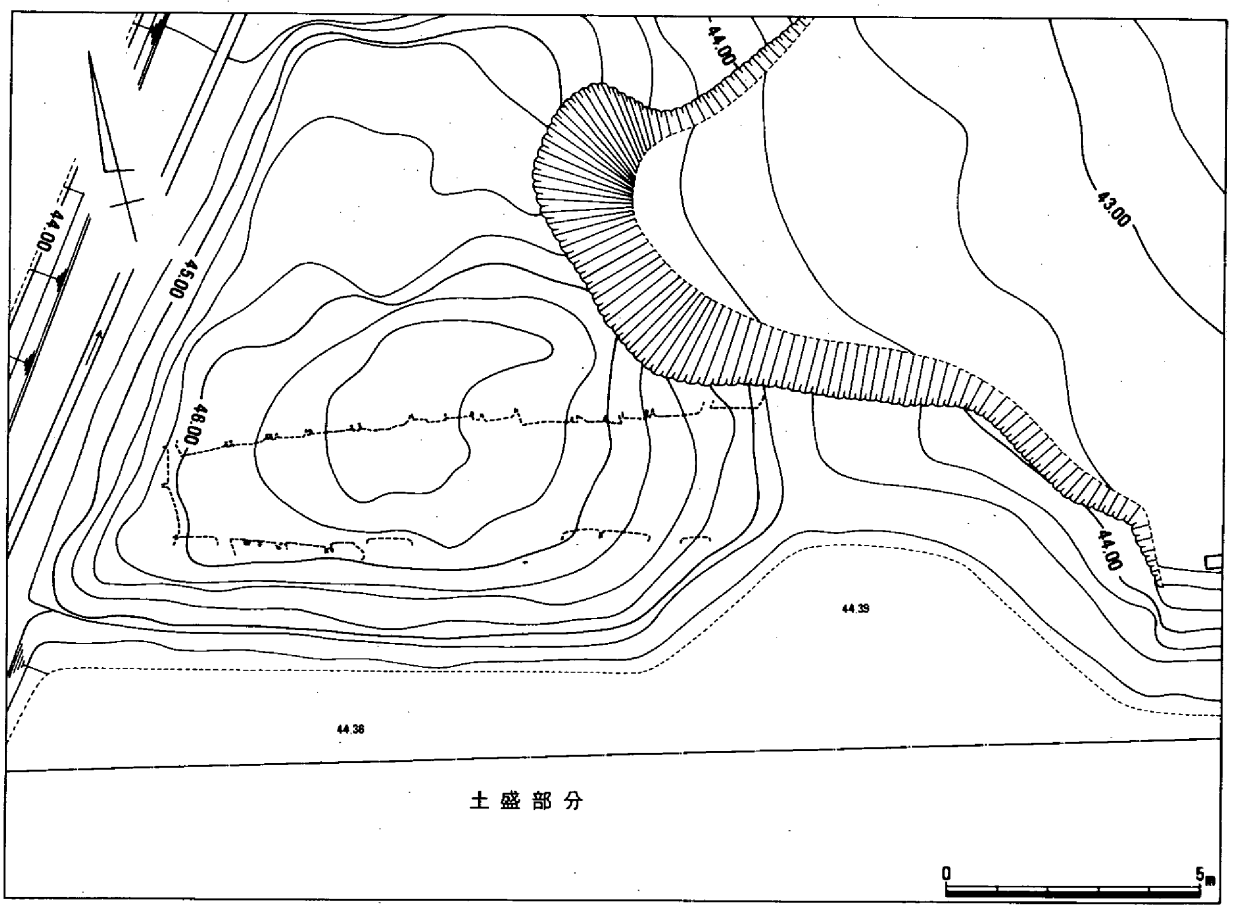
勘定口２号墳の所在する地点は、塩納という集落の北側にそびえる大森山の山裾に位置し、東方眼下には万富地域の平野越しに、岡山県の三大河川の一つである吉井川の雄大な流れを遠く望むことができる。

この古墳の周辺には、山の池岡古墳、勘定口１号墳、塩納七ツ石古墳、塩納成古墳の５基の古墳が知られているが、塩納成古墳はすでに消滅して存在していない。

1979年11月に施行された塩納地区圃場整備事業に伴って、瀬戸町教育委員会が緊急の発掘調査を行ったところ、瀬戸町内でも大型の横穴式石室を有する古墳であることが確認され、木棺１基と陶棺２～３基が埋置されていたのが明らかになった。出土遺物は瀬戸町郷土資料館に保管されているが、その中には須恵器や土師器の土器以外に、耳環、鉄鏃、鉇などの金属製品も認められる。

この勘定口２号墳は、大型の横穴式石室の一部と北側の墳丘盛土がわずかに残存し、その所在が完全になくなることはどうにか免れていたが、山陽自動車道の路線内に位置するため、再び発掘調査を実施して記録保存の措置を行うことになったのである。

今度の発掘調査は、横穴式石室の実測に主眼を置き、現地での発掘作業を1992年４月18日から５月16日まで実施した。



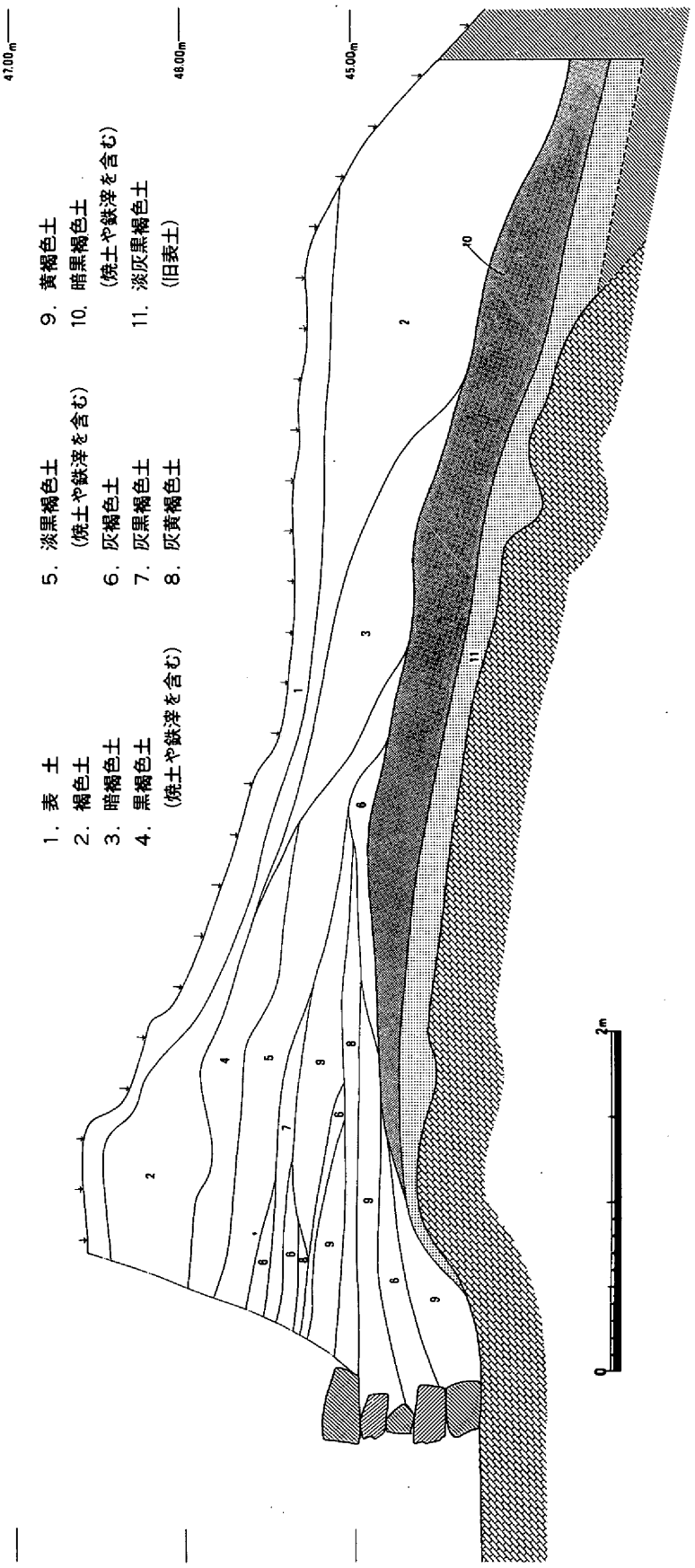
第１図　調査前周辺地形測量図（1/150）

調査前の状況

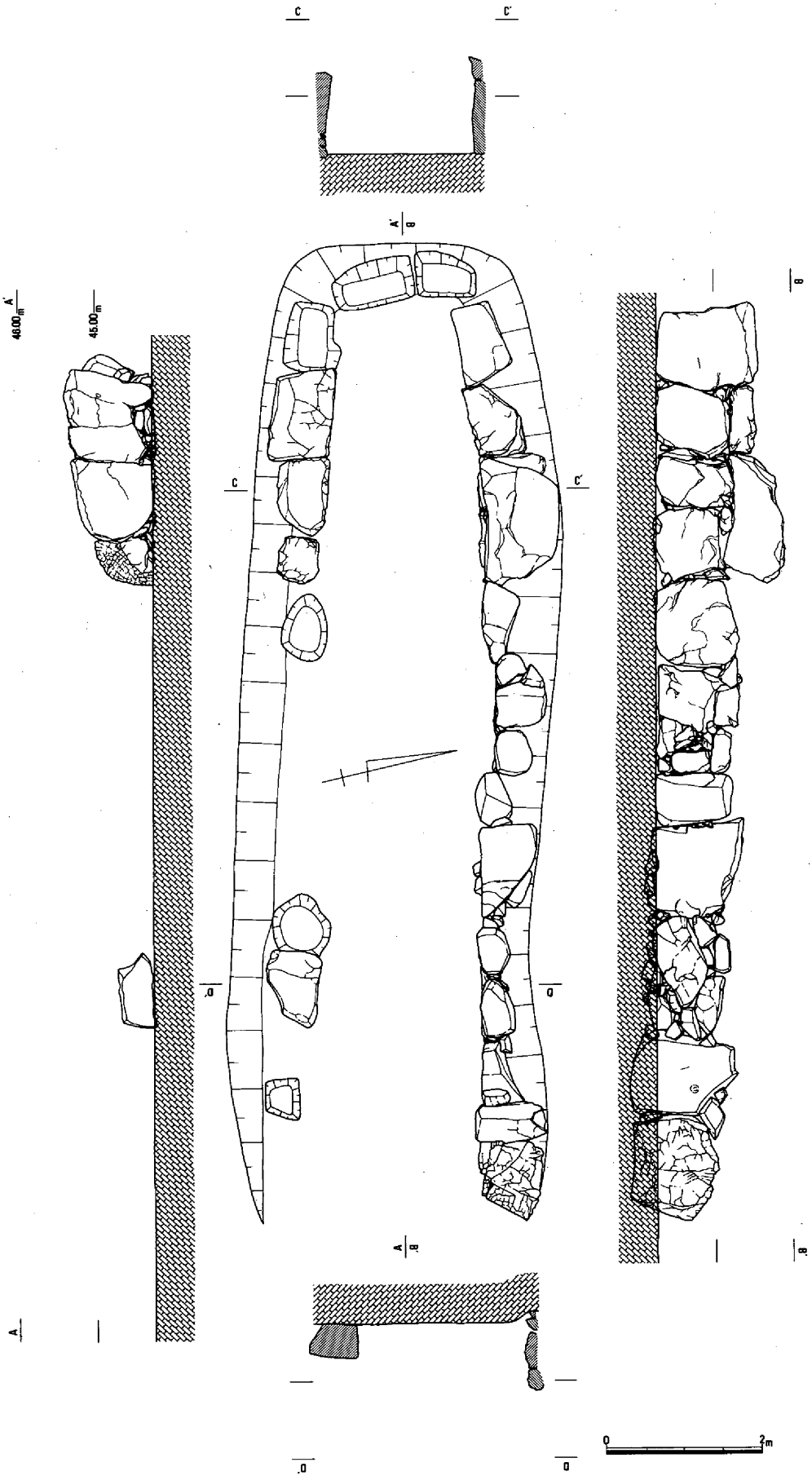
勘定口２号墳の所在地周辺は、1979年11月に施行された塩納地区の圃場整備事業に伴って地形の改変が極度に進められ、この古墳も大型の横穴式石室の一部と北側の墳丘盛土がわずかに残存しているだけであった。石室の右側壁に面した南側に位置する墳丘は著しく削平され、平坦な水田になっていた。石室の奥壁に面した西側の墳丘も奥壁近くまで破壊され、農作業用の通路と水田に水を供給する水路に変化していた。さらにその西側部分は、矩形を呈した水田に造成されていた。

北東側の墳丘も大きく抉られており、版築状になった色調の異なる盛土の断面が露出していた。近所に住む人々の話によると、この地点には近世から現代にかけての墓が最近まで存在していたが、山陽自動車道の建設に伴って別の所へ移転したという。発掘調査を実施した初日に備前焼大甕の破片や数個の河原石を採集したが、これらはその墓に使われていたものであろう。

なお勘定口２号墳の発掘調査作業は、山陽町に所在する斎富遺跡の調査に並行して進められたこともあって、山陽自動車道の建設工事も終盤のあわただしい時期になっていた。そのため古墳の所在地周辺には道路の橋脚がいくつも姿を現し、石室の入口に面した東側は残土置場となっていた。



第２図　墳丘盛土断面図（1/40）



第３図　石室実測図（1/80）

墳　丘

この勘定口２号墳で墳丘が残存したのは、北側に位置するほんのわずかの部分であった。また北東側の部分も、近世から現代にかけての墓が移転して墳丘の盛土が大きく抉られていたため、石室の主軸方向に直交するように北側の墳丘を断ち割り、土層断面の観察を行った（第２図）。

その結果、表土の直下に存在した褐色土には粘性がなく、古墳が築造された後に堆積した土砂で墳丘の盛土ではないと考えられた。勘定口２号墳の墳丘盛土は暗褐色土から下位の黄褐色土までで、焼土や鉄滓を多く含む暗褐色土や旧表土の淡灰黒褐色土も存在した。石室に近い墳丘の中心部分には、灰褐色土や黄褐色土などの互層が何層にも認められ、石室が堅牢で崩れないように工夫が施されていた。

この古墳には墳丘がほとんど残存しないが、北側の墳丘土層断面を観察したところでは、径約14mの比較的大規模な墳丘であったと判断された。

墳丘の高さは、墳丘の上面が削平されていたので不明である。

なお墳丘下の旧表土上面には、焼土や鉄滓を多く含む土層が確認されたため、この勘定口２号墳は製鉄炉近くの排滓場に築造されていたのである。

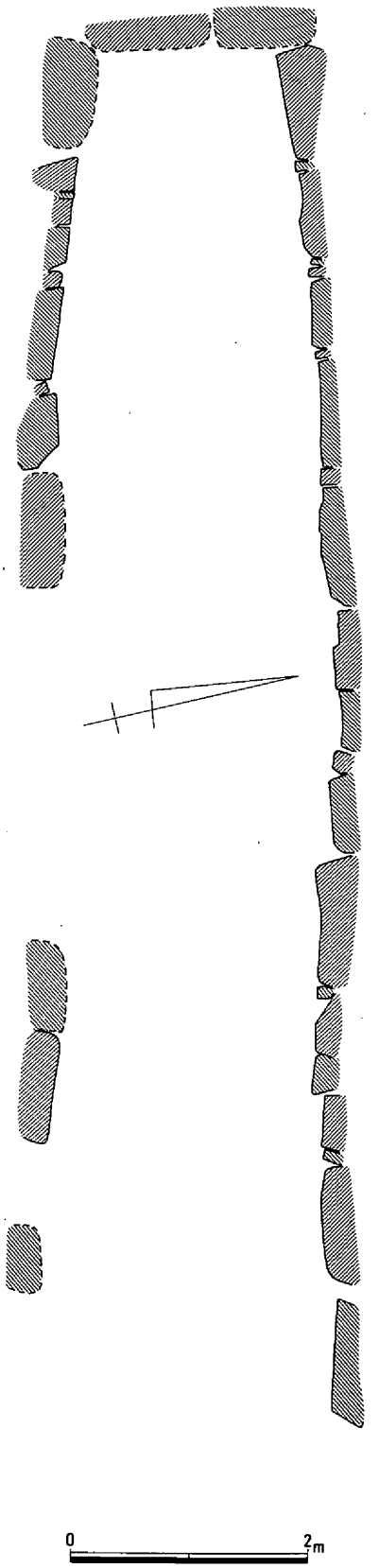
石　室

勘定口２号墳の埋葬施設は、無袖で大型の横穴式石室である。

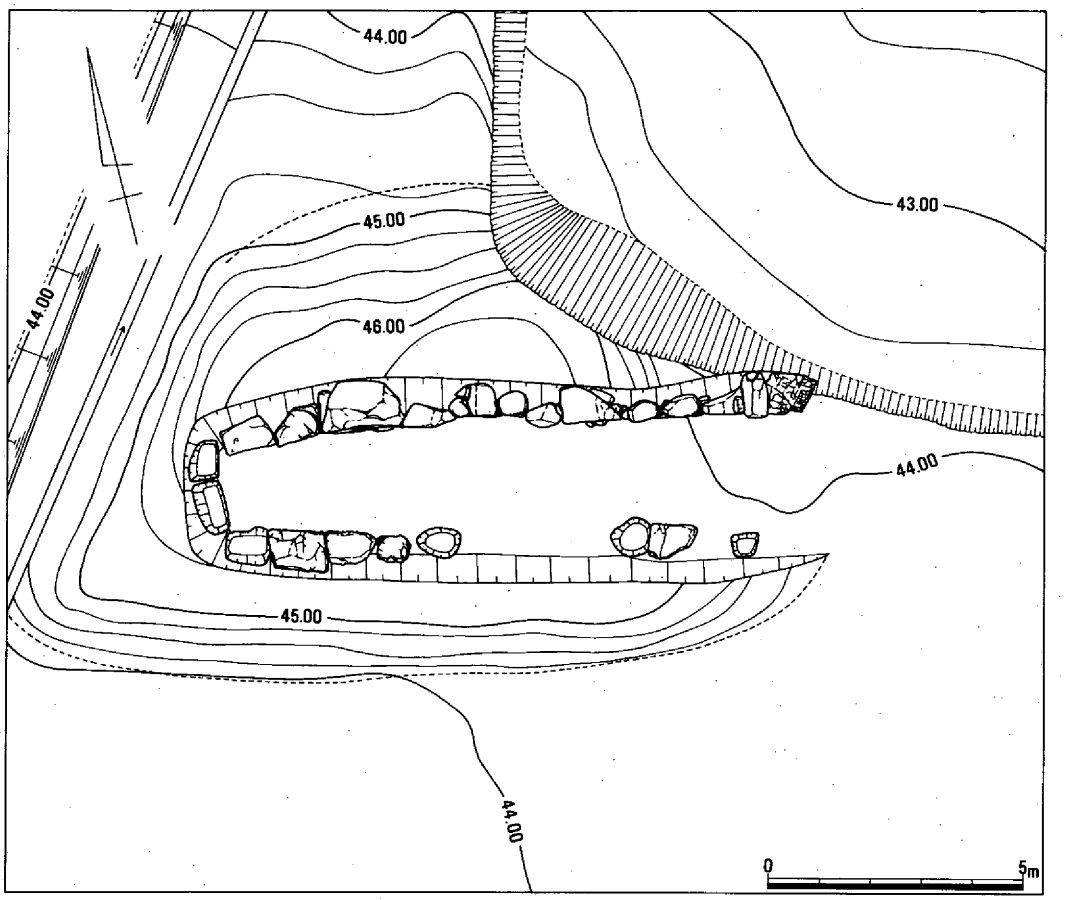
奥壁は石材が抜き取られて存在しなかったが、掘り方底部の床面を精査したところ、かつて基底部に２個の石が据えられていたことが判明した。

右側壁は極度に破壊され、基底部の石が残存したのは４個だけであった。奥壁に近い部分に３個の石が据えられていたが、奥壁との間に１個の石が抜き取られていたことを確認した。石室の入口に近い部分には１個の石が残っていただけであったが、基底部に据えられていた石の抜き取り痕跡を追求した結果、側壁の壁面が折れ曲がる「袖」はなかったと考えられた。

左側壁の基底部は、途中の石が抜き取られずに残っていた。石室の入口に面した部分は、調査した時に東側端部に据えられていた石で完結し、東側へ続かなかった。この部分は、旧地形が南西から北東方向に向かって緩やかに傾斜していたこともあって、基底部の石は安定した地山面に接して据えられていた。奥壁に近い地点には２段目の石も残存したが、基底部とは異なり横口積に



第４図　石室床面平面図（1/60）

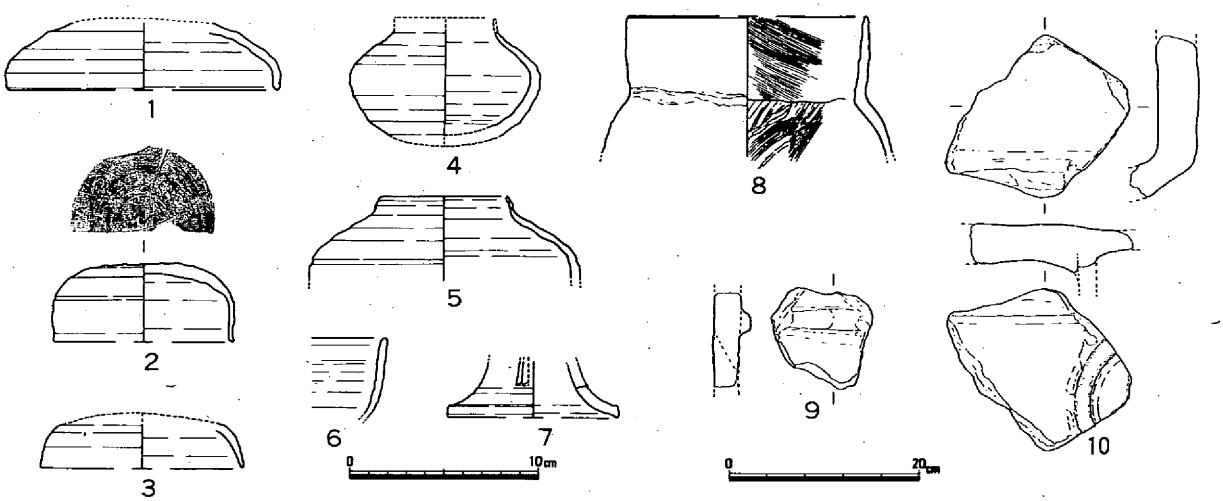


第５図　調査後周辺地形測量図（1/150）

なっていた。この石は、基底部に据えられた石の面よりもやや内側に迫出し、「持ち送り」の形態を呈していた。大きな石の間に生じた空間には、小さな石を数多く詰めていた。この左側壁の壁面は、緩やかに湾曲して中央部分の幅がわずかに広くなる「胴張り」の現象が認められた。

この勘定口２号墳の埋葬施設である横穴式石室は、奥壁や右側壁に据えられていた石が存在しないのみならず天井石も認められなかったから、石室の床面からの高さは不明である。

石室の床面で計測した全長は約11.60mであった。また奥壁の幅は約1.50m、石室の入口の幅は約2.40mを測り、石室の入口から奥壁に向かって移行するにしたがって床面の幅が狭くなっていた。



第６図　出土遺物（1～8：1/4，9・10：1/8）

出土遺物

1～7は須恵器である。1は推定口径14.4cmを測る杯蓋で、口縁端部は短く立ち上がり、端部は丸く仕上げている。外面の天井部は回転方向が時計と同じ右のヘラケズリを行い、その他はヨコナデを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で灰色を呈している。2と3は短頸壺の蓋である。前者は推定口径9.4cm・器高4.1cmを測り、外面の天井部に×印のヘラ記号が存在する。口縁部の器壁は天井部に比して著しく薄くなり、端部は短く外反して丸く仕上げている。外面の天井部と体部の境には、1条の浅い凹線を有している。外面の天井部は回転方向が右のヘラケズリを行っており、その他はヨコナデで内面の天井部には仕上げナデも認められる。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で内面に有機物が付着している。後者は口縁部の小破片である。端部は直線的に張り出し、内外面ともヨコナデを施している。内面の器表面には、有機物の付着が認められる。4と5は短頸壺の破片である。前者は推定胴部最大径10.2cmを測り、底部から口縁部に移行するにしたがって器壁が薄くなっている。外面の底部は回転方向が右のヘラケズリを行い、その他はヨコナデを施している。後者は推定口径6.7cmを測り、外面の胴部上位に1条の凹線が認められる。口縁端部は器壁が薄くなって屈曲しながら内傾して立ち上がり、端部は丸く仕上げている。内外面ともヨコナデを施し、外面には自然釉が付着し、蓋をして焼成した痕跡が認められる。6は椀の口縁部破片である。内外面ともヨコナデを施し、灰色を呈している。7は長方形の透しを有する高杯脚端部の小破片である。内外面ともヨコナデを施し、焼成は極めて良好で自然釉が付着している。

8は土師器の壺で、この遺物だけは墳丘直下の鉄滓に混在して出土したのである。推定口径12.6cmを測り、口縁端部は器壁が薄くなりながら直立している。内面にはハケメが認められ、外面はヨコナデを施している。胎土中には砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を呈している。

9と10は陶棺の小破片である。前者の外面には凸帯が存在し、後者の外面には脚の剝離した痕跡が認められる。胎土中には大きな砂粒を大量に含み、焼成は良好で赤褐色を呈している。

まとめ

勘定口2号墳は、この古墳の墳丘も含めて所在地点の周辺部分が圃場整備事業に伴って地形が著しく改変されていたり、埋葬施設である横穴式石室の天井石のみならず奥壁や側壁の基底部の石も抜き取られているなど、古墳全体が極度に破壊されていたが、直径約14mを測る瀬戸町内でも大型の古墳であることが判明した。

またこの横穴式石室は無袖で、床面からの高さは不明であったが、全長約11.60m、奥壁幅約1.50m、入口幅約2.40mを測り、石室の入口から奥壁に向かって移行するにしたがって床面の幅が狭くなっていた。

この勘定口2号墳が築造された時期は、石室から出土した須恵器や陶棺の形態的特徴から、7世紀前半になるであろう。瀬戸町教育委員会が圃場整備事業に伴って緊急の発掘調査を実施し、木棺1基と陶棺2～3基が埋葬されていたのを確認しているから、数回の追葬が行われたのは明らかである。

瀬戸町地域の製鉄遺跡が不明である現状では何も言えないが、勘定口2号墳は製鉄炉近くの排滓場に築造され、瀬戸町教育委員会が発掘調査を実施した時に石室内から比較的多くの鉄滓を採集していることから、鉄生産に関わった集団の一つの傑出した墳墓であったのではなかろうか。　（福田）

1．実教寺南遺跡全景（北から）

2．実教寺南遺跡調査区全景（北から）

図版２

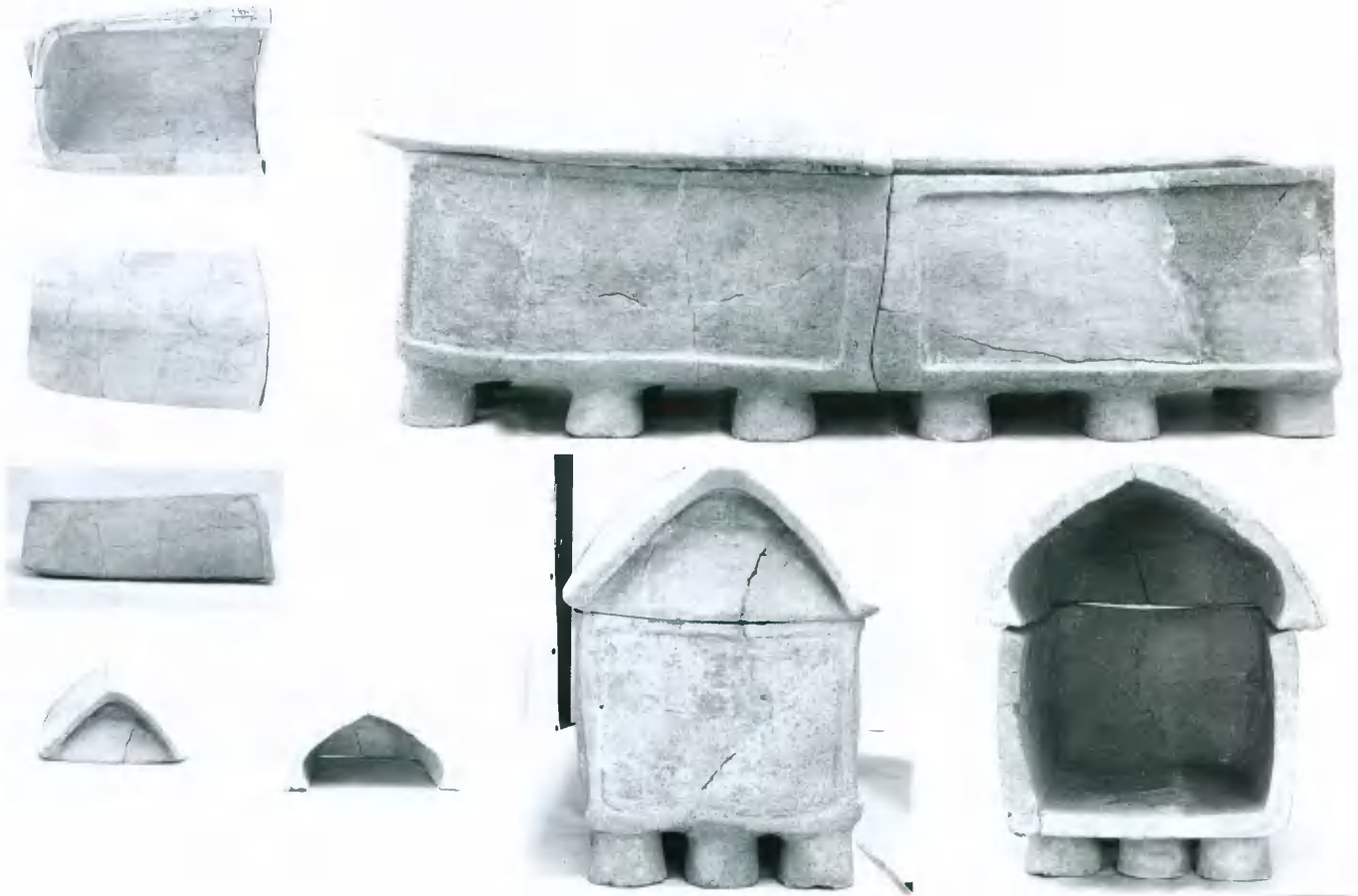
１．松尾２号墳遠景（西から）

２．松尾２号墳調査前（南から）

１．松尾２号墳石室全影（南から）

２．松尾２号墳陶棺出土状態（南から）

３．松尾２号墳遺物出土状態（南から）



松尾２号墳出土陶棺

松尾２号墳出土陶棺

図版６

1．松尾４号墳石室全景（西から）

2．松尾４号墳全景（南から）

3．松尾４号墳陶棺（南から）

4．松尾４号墳奥壁土層断面（西から）

松尾４号墳出土陶棺

図版８

松尾４号墳出土陶棺

１．松尾５号墳調査前（東から）

２．松尾５号墳墳丘上層断面（南西から）

３．松尾５号墳閉塞及び外護列石（南西から）

図版10

1．松尾５号墳石室全景（南から）

2．松尾５号墳平石（東から）

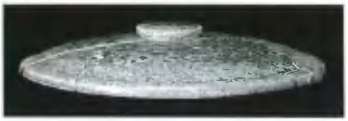
3．松尾５号墳平石除去後（南から）

4．松尾５号墳遺物出土状態（南から）

1．松尾火葬墓検出状態（西から）

2．松尾火葬墓火葬壺除去後（西から）

図版12



松尾２・４・５号墳・火葬墓出土遺物

1．勘定口２号墳発掘調査前墳丘全景（西から）

2．発掘調査前墳丘全景（北から）

図版14

1．残存する墳丘全景（北から）

2．残存する墳丘全景（南から）

1．墳丘北側土層断面遠景（東から）

2．墳丘北側土層断面近景（東から）

図版16

1．残存する石室全景（東から）

2．残存する石室全景（西から）

1．左側壁全景（南東から）

2．左側壁全景（南西から）

図版18

1．右側壁の奥壁に近い部分（北から）

2．左側壁の奥壁に近い部分（南から）

1．奥壁部分石材抜き取り痕跡（東から）

2．墳丘検出作業風景（南西から）

3．石室側壁検出作業（東から）

図版20

出土遺物（1/3）

Ⅲ　山陽町内の遺跡

斎富古墳群

目　　次

1．調査の経過と概要 …… 71
　1．調査の経過 …… 71
　2．調査の概要 …… 72

2．弥生時代～古墳時代前半の遺構・遺物 …… 75
　1．概観 …… 75
　2．土壙墓 …… 76
　3．土壙 …… 82
　4．土器棺墓 …… 83
　5．箱式石棺墓 …… 84
　6．遺構に伴わない遺物 …… 84

3．古墳時代後半の遺構・遺物 …… 85
　1．概観 …… 85
　2．1号墳 …… 86
　3．2号墳 …… 90
　4．5号墳 …… 132
　5．土壙墓22 …… 137

4．古代～中世の遺構・遺物 …… 141
　1．土器棺墓1 …… 141
　2．中世墓 …… 142

5．まとめと考察 …… 144

　表－1　主要遺構の出土遺物個体数一覧 …… 149
　　－2　土器観察表 …… 150
　　－3～7　鉄器計測表 …… 159
　　－8～11　玉類計測表 …… 162
　　－12　耳環計測表 …… 169

　付載1　斎富遺跡・斎富古墳群出土玉類の産地分析 …… 171

図 目 次

第１図　斎富古墳群周辺地形図(1/6000)… 71
第２図　１次調査トレンチ配置図（1/600）
…… 72
第３図　弥生時代～古墳時代前半の遺構全体図
（1/400） …… 75
第４図　土壙墓１平断面図（1/40） …… 76
第５図　土壙墓１出土土器（1/4） …… 76
第６図　土壙墓２～５平断面図（1/40）… 77
第７図　土壙墓６～９平断面図（1/40）… 78
第８図　土壙墓10～13平断面図（1/40）… 79
第９図　土壙墓14・15平断面図（1/40）… 80
第10図　土壙墓16・17平断面図（1/40）… 80
第11図　土壙墓18平断面図（1/40） …… 81
第12図　土壙墓19・20平断面図（1/40）… 81
第13図　土壙墓21平断面図（1/40） …… 82
第14図　土壙墓21出土土器（1/4） …… 82
第15図　土壙１～３平断面図（1/40） …… 82
第16図　土器棺墓２平断面図（1/30）および出
土土器（1/8） …… 83
第17図　土器棺墓３平断面図（1/30）および出
土土器（1/8） …… 83
第18図　箱式石棺墓平断面図（1/40） …… 84
第19図　遺構に伴わない遺物（1～3:1/4、4～7:
1/2） …… 84
第20図　古墳時代後半以降の遺構全体図（1/
400） …… 85
第21図　１号墳調査前墳丘地形測量図（1/100）
…… 86
第22図　１号墳調査後墳丘地形測量図および墳
丘断面図（1/100） …… 87
第23図　１号墳主体部平断面図（1/30）… 88
第24図　１号墳出土土器（1/4） …… 88
第25図　１号墳主体部出土鉄器（1/3） … 89
第26図　２号墳調査前墳丘地形測量図（1/200）
…… 90
第27図　２号墳調査後墳丘地形測量図および墳
丘断面図（1/200） …… 91
第28図　２号墳第１主体部平断面図（1/50）
…… 92
第29図　２号墳第１主体部平断面図および付属
溝平断面図（1/50） …… 93
第30図　２号墳第１主体部遺物出土状況（1/
20）および装身具出土状況(1/4) … 94
第31図　２号墳第１主体部出土土器（1）(1/4)
…… 96
第32図　２号墳第１主体部出土土器（2）(1/4)
…… 97
第33図　２号墳第１主体部出土土器（3）(1/4)
…… 98
第34図　２号墳第１主体部出土大刀・刀子（1:
1/6、2～4:1/3） …… 99
第35図　２号墳第１主体部出土鉄鏃（1/3）
…… 100
第36図　２号墳第１主体部出土馬具（1/3）
…… 101
第37図　２号墳第１主体部木棺想像復元図
…… 101
第38図　２号墳第１主体部出土棺釘（1/4）
…… 102
第39図　２号墳第１主体部出土装身具（1/2）
…… 103
第40図　２号墳第２主体部平断面図（1/30）お
よび遺物出土状況（1/20） …… 104
第41図　２号墳第２主体部出土土器（1/4）
…… 105
第42図　２号墳第２主体部出土鉄器（1/3）
…… 105
第43図　２号墳第３主体部平断面図（1/40）
…… 106
第44図　２号墳第３主体部遺物出土状況（左:1

/20、右:1/4) …… 107
第45図　2号墳第3主体部出土土器（1/4）…… 107
第46図　2号墳第3主体部出土鉄器（1/3）…… 108
第47図　2号墳第3主体部出土装身具（1/2）…… 108
第48図　2号墳第4主体部平断面図（1/80）…… 109
第49図　2号墳第4主体部掘り方実測図（1/80）…… 110
第50図　2号墳第4主体部遺物出土状況（1/40）…… 110
第51図　2号墳第4主体部出土土器（1）（1/4）…… 113
第52図　2号墳第4主体部出土土器（2）（1/4）…… 114
第53図　2号墳第4主体部出土土器（3）（1/4）…… 115
第54図　2号墳第4主体部出土土器（4）（1/4）…… 116
第55図　2号墳第4主体部出土土器（5）（1/4）…… 117
第56図　2号墳第4主体部出土土器（6）（1/4）…… 118
第57図　2号墳第4主体部出土土器（7）（1/4）…… 119
第58図　2号墳第4主体部出土土器（8）（1/4）…… 120
第59図　2号墳第4主体部出土土器（9）（1/4）…… 121
第60図　2号墳第4主体部前庭部出土土器（1/4）…… 122
第61図　2号墳出土の主体部に伴わない土器（1）（1/4）…… 123
第62図　2号墳出土の主体部に伴わない土器（2）（1/4）…… 124
第63図　2号墳第4主体部出土大刀・刀子（1～3:1/6、4～14:1/3）…… 125
第64図　2号墳第4主体部出土鉄鏃（1）（1/3）…… 126
第65図　2号墳第4主体部出土鉄鏃（2）（1/3）…… 127
第66図　2号墳第4主体部出土弓飾金具（1/2）…… 127
第67図　2号墳第4主体部出土馬具（1/3）…… 128
第68図　2号墳第4主体部出土釘・鋲（1/4）…… 129
第69図　2号墳第4主体部出土その他の鉄器（1/3）…… 130
第70図　2号墳第4主体部出土装身具（1/2）…… 131
第71図　5号墳調査前墳丘地形測量図（1/100）…… 132
第72図　5号墳調査後墳丘地形測量図および墳丘断面図（1/100）…… 133
第73図　5号墳主体部平断面図（1/40）… 134
第74図　5号墳主体部遺物出土状況（1/30）…… 135
第75図　5号墳主体部装身具出土状況（1/4）…… 135
第76図　5号墳主体部出土土器（1/4）… 136
第77図　5号墳主体部出土装身具(1/2)… 136
第78図　土壙墓22平断面図および遺物出土状況（1/30）…… 137
第79図　土壙墓22出土土器（1）（1/4）… 139
第80図　土壙墓22出土土器（2）（1/4）… 140
第81図　土器棺墓1位置図（1/300）…… 141
第82図　土器棺墓1平断面図（1/40）および出土土器（1/4）…… 141
第83図　中世墓位置図（1/300）…… 142
第84図　中世墓1平断面図（1/20）および備前焼壷（1/4）…… 142
第85図　中世墓5備前焼壷（1/4）…… 143
第86図　その他の備前焼壷（1/4）…… 143

図版目次

図版1　古墳群全景

図版2－1　古墳群遠景（西から）
2　調査前地形（東から）
3　表土除去後（東から）

図版3－1　土壙墓群（西から）
2　土壙墓1（北から）
3　土壙墓1出土土器（1/3）

図版4－1　土器棺墓2検出状況（北から）
2　土器棺墓2出土土器（1/6）

図版5－1　1号墳墳丘（北から）
2　1号墳主体部（東から）
3　1号墳主体部出土遺物（1/3）

図版6－1　2号墳全景（西から）
2　2号墳主体部（手前から第1～3主体部）（西から）

図版7－1　2号墳第1主体部遺物出土状況（西から）（石室北側）
2　2号墳第1主体部遺物出土状況（西から）（石室中央）
3　2号墳第1主体部遺物出土状況（西から）（石室南側）

図版8　2号墳第1主体部出土土器（1）（1/3）

図版9　2号墳第1主体部出土土器（2）（1/3）

図版10　2号墳第1主体部出土土器（3）（1/3）

図版11　2号墳第1主体部出土鉄器（1:1/6、他:1/3）

図版12　2号墳第1主体部出土装身具（1/1）

図版13－1　2号墳第2主体部（北から）
2　2号墳第3主体部検出状況（北から）
3　2号墳第3主体部蓋石除去後（北から）

図版14－1　2号墳第2主体部出土遺物（1/3）
2　2号墳第3主体部出土遺物（7:1/4、他:1/3）

図版15－1　2号墳第3主体部出土鉄器（1/3）
2　2号墳第3主体部出土装身具（1/1）

図版16－1　2号墳第4主体部検出状況（南から）
2　2号墳第4主体部遺物出土状況（南から）

図版17－1　2号墳第4主体部奥壁付近遺物出土状況（南から）
2　2号墳第4主体部奥壁構築状況（南から）
3　2号墳第4主体部袖部および羨道（北から）

図版18　2号墳第4主体部出土土器（1）（1/3）

図版19　2号墳第4主体部出土土器（2）（1/3）

図版20　2号墳第4主体部出土土器（3）（1/3）

図版21　2号墳第4主体部出土土器（4）（1/3）

図版22　2号墳第4主体部出土土器（5）（124・127・128:1/4、他:1/3）

図版23－1　2号墳第4主体部出土土器（6）（1/3）
2　2号墳第4主体部前庭部出土土器（1/3）

図版24　2号墳第4主体部出土鉄器（1）（1:1/8、2:1/6、81以下:1/2、他:1/3）

図版25　2号墳第4主体部出土鉄器（2）（1/3）

図版26　2号墳第4主体部出土装身具（1/1）
図版27－1　5号墳墳丘（東から）
2　5号墳主体部検出状況（南から）
3　5号墳主体部蓋石除去後（南から）
図版28　5号墳主体部出土遺物（土器：1/3、装身具：1/1）
図版29－1　土壙墓22（北東から）
2　土壙墓22遺物出土状況（南から）
3　土器棺墓1（北から）
図版30　土壙墓22出土土器（1）（1/3）
図版31　土壙墓22出土土器（2）（1/3）
図版32－1　土器棺墓1出土土器（1/4）
2　中世墓の備前焼壷（1/4）

表目次

表－1　主要遺構の出土遺物個体数一覧… 149
表－2　土器観察表…… 150
表－3　1号墳鉄器計測表…… 159
表－4　2号墳第1主体部鉄器計測表　… 159
表－5　2号墳第2主体部鉄器計測表…… 160
表－6　2号墳第3主体部鉄器計測表…… 160
表－7　2号墳第4主体部鉄器計測表…… 160
表－8　2号墳第1主体部玉類計測表…… 162
表－9　2号墳第3主体部玉類計測表…… 165
表－10　2号墳第4主体部玉類計測表…… 165
表－11　5号墳玉類計測表…… 168
表－12　2号墳耳環計測表…… 169

第1節　斎富古墳群

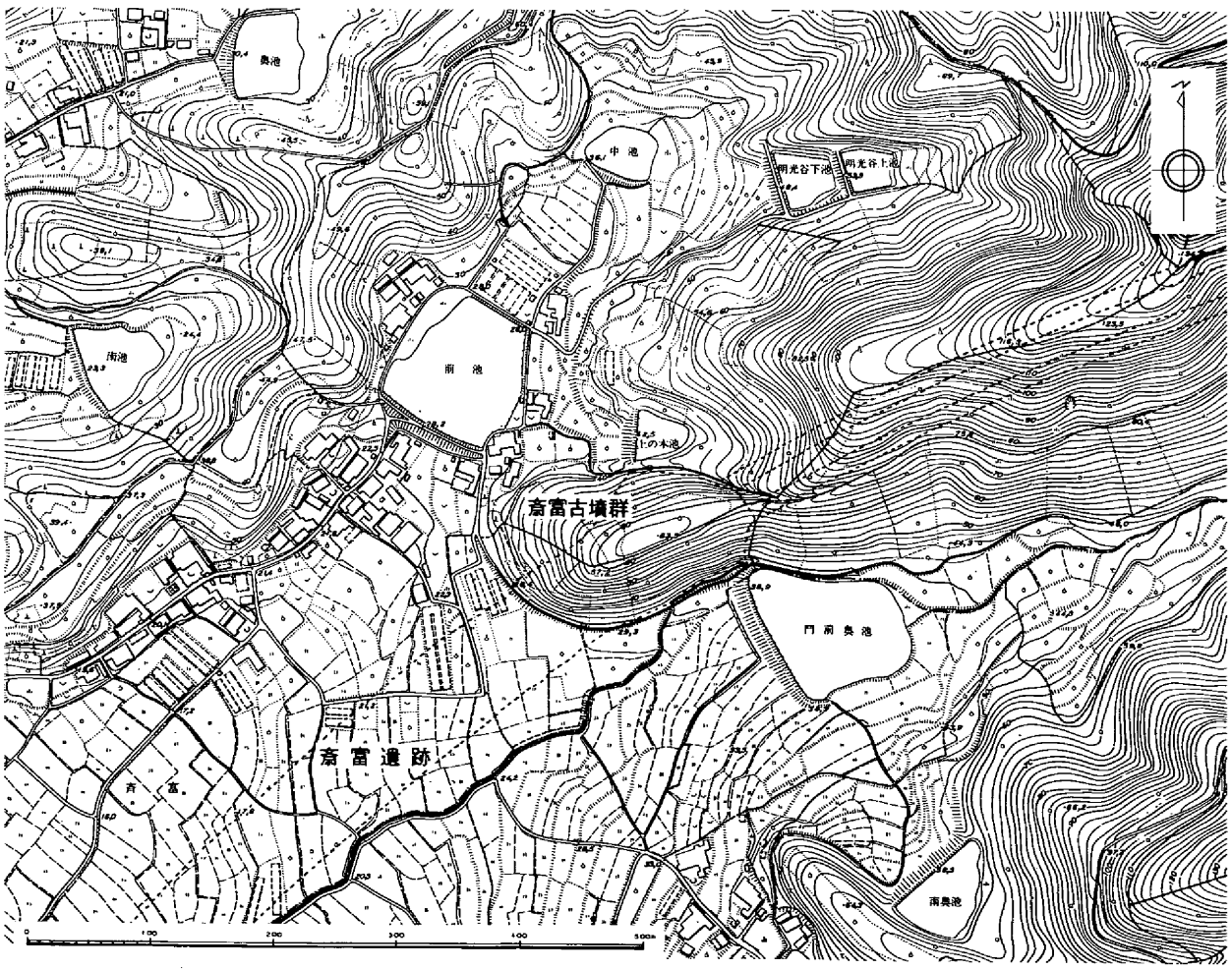
1．調査の経過と概要

1．調査の経過

斎富古墳群の所在する地点は、瀬戸町との町境に位置する標高242.1mの龍王山から西方向へ舌状に張り出した標高83mの低丘陵上で、西方1.5kmの所には北から南に向かって流れる砂川が縦断している山陽町の沖積平野が展開する。古墳群の所在地は遺跡の立地条件に恵まれ、岡山県教育委員会が発行した『岡山県遺跡地図（第二分冊）』の山陽町編にも3基の古墳が存在して須恵器片が採集されたことが明記されているため、山陽自動車道建設に伴う遺跡発掘調査の対象となったのである。

斎富古墳群の所在する丘陵上へ実際に行ってみると、丘陵のほぼ中央部分にぶどう畑の果樹園が造成されて丘陵表土面が改変されていたので、旧地形を把握するのは極めて困難であった。また丘陵上を散策した結果、斜面に古墳の天井石に使われていたと思われる4個の石が散在し、周辺から須恵器や弥生土器の破片と一緒に備前焼の小片も採集した。

現地踏査による事前の予備調査でも、古墳の数が確認できないばかりか、別の遺構も存在する可能性が生じたため、丘陵上の地形測量を行って遺構の存在や広がりを把握することにした。　（福田）



第1図　斎富古墳群周辺地形図（1/6000）

2．調査の概要

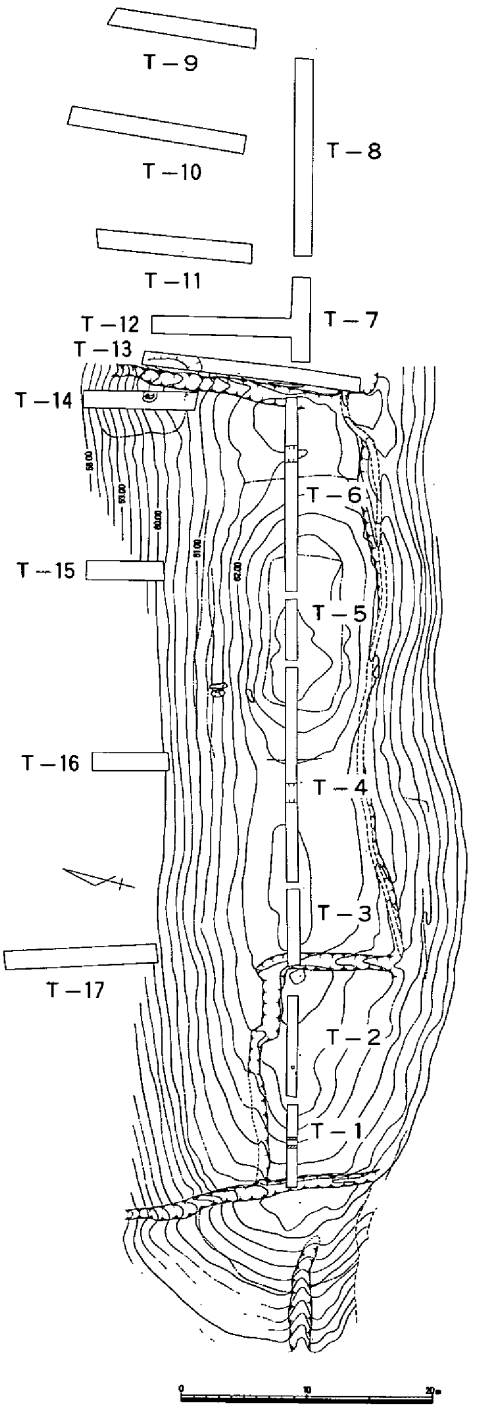
1次調査

1次調査は、平成3年2月18日から同年3月16日まで実施した。斎富古墳群は、県の埋蔵文化財分布地図においては、丘陵上に1号墳から3号墳の3基の円墳の所在が知られていた。これより以前における当古墳に関する記録と考えられるものが、『赤磐郡誌』に記載されている。これによると墳形を前方後円墳とし、名称が向山古墳で、所在を斎富の門前奥とし、地番まで記されている。さらにその規模については、後円部径6.5間・高さ7尺、前方部長径3.5間・短径5間・高さ5尺、全長10間を測り、備考として『湟を長方形に造る』と記されている。このようなことから、丘陵部分に17本のトレンチを設定し、その把握につとめた。

その結果、T－7から13においては、すでに表土が認められず、基盤層と考えられる黄褐色土層が露呈しており、この面および下層からも遺構・遺物は認められなかった。またT－15から17は、北側のきつい斜面部に相当し、表土下20～30cmで基盤層に達し、遺構・遺物は認められなかった。遺構が確認されたのは、T－1から6の丘陵中央部をほぼ東西に横断したトレンチからである。

T－1は、トレンチ中央から南北方向の溝を確認した。T－2は、西寄りの所から火葬墓に用いられた備前焼の壷が据えられた状態で検出された。T－4は、トレンチ中央近くから幅160cmほどの溝を確認した。この検出土層は、基盤層に近い内容を示しているが、T－4の東にかけては、その土層の上に盛土と考えられる土が認められる。T－6は、トレンチ東寄りで幅140cmの溝を検出し、この溝より西側については、T－4と同様の内容を示す。T－14は、北に向かって平坦部が認められたことから、トレンチを設けたものである。これによりトレンチ中央付近からシストが認められ、かつT－13の北端寄りでこれに伴う溝を検出している。

1次調査は、遺構の存在と広がりおよびその内容について、今後の調査の資料を得るためであった。しかしながら今回の調査については、調査時の現場での現状把握と地形測量図からして、調査前に考えていた古墳群の認識とは相違する内容を示唆する点が多々あることが明らかになった。このようなことから、これ以



第2図　1次調査トレンチ配置図 (1/600)

降の調査に支障をきたさないように、検出された遺構は掘り下げず、さらに盛土と考えられる部分においても表土の面だけに留め、それ以上の掘り下げは行わなかった。

この結果、以下のような1次調査の概要を得たのである。1号墳は、T－6の東側に認められたもので、1辺4＋αmを測り、平面形態は方形を呈する。2号墳は、T－4から6にかけて認められ、その規模は東西29m・南北15mを測り、平面形態は長方形を呈する。3号墳は、T－3と4にかけて認められ、規模は1辺12mを測り、平面形態は方形を呈する。4号墳は、T－1とT－2にかけて認められ、規模は径9mを測り、平面形態は円墳で、中世墓と重複している。5号墳は、T－14に認められ、規模は東西7m・南北8.5mを測り、平面形態は方形を呈する。

今回確認された5基のうち、先の赤磐郡誌に記載がみられる向山古墳は、その規模および形状の内容から、2号墳に近い内容を示しているのである。特に記述中の『湟を長方形に造る』については、1号墳と3号墳とに接する部分が明瞭に窪んでおり、さらに北辺側の等高線の61mラインから1m前後に平坦部が識別できるのである。このような形状を通して、先の記述がなされたと思考されるのである。

以上の5基の古墳および中世墓について、発掘調査が必要となったのである。　（下澤）

全面調査

1次調査の結果に基づいて、平成3年11月29日から平成4年3月31日まで全面調査を実施した。

1号墳は直径約9mの円墳で、主体部は木棺直葬のものが1基だけであった。主体部から出土した遺物としては、須恵器の杯蓋2点、刀子2点、鉄鏃の破片がある。

2号墳の墳丘は前方後円墳に似た極めて特異な形態を呈しており、全長は約23mであるが、西側は約16mの同じ幅で隅丸長方形に張り出し、東側は径約18mの円形になっていた。墳丘内には竪穴式石室1基、箱式石棺2基、横穴式石室1基の合計4基にもおよぶ主体部が築造され、大量の遺物が出土した。竪穴式石室には天井石が1枚も残存しなかったが、石室内は盗掘や攪乱を受けた形跡はなく、埋葬当時の様相を良好な状態で留めており、追葬が行われたことが判明した。横穴式石室にも天井石はなかったが、8基の木棺痕跡を検出し、追葬が繰り返し行われた状況を把握することができた。

3号墳と4号墳が所在すると考えられていた地点は、どちらも自然の高まりが認められただけで、古墳は存在しなかった。

5号墳は直径約7mの円墳で、主体部は箱式石棺が1基だけであった。主体部からは完形品の須恵器7点と玉類が良好な状態で出土し、埋葬された遺体の頭位を知ることができた。

中世墓は5基検出した。いずれも備前焼壺を使用したものであるが、残存状態は著しく悪い。

1次調査では確認できなかったが、全面調査で新しく検出した遺構がある。

土壙墓と土壙は、3号墳と4号墳が所在すると考えられていた地点の南から西にかけての斜面と、2号墳の墳丘下位に、20基以上も存在した。土器が伴うものや、木棺痕跡が認められるものがある。

丘陵の北西斜面で箱式石棺墓1基を発見したが、遺物は存在しなかった。

土器棺墓が3基存在した。2基は丘陵の北西斜面に位置し、残る1基は5号墳の西約7mの地点であった。後者の土器棺墓の下層には、長大な土壙墓が存在した。出土遺物の須恵器は、杯身11点・杯蓋12点・高杯1点・台付椀1点・壺5点・提瓶2点・平瓶1点・横瓶1点と点数が多いのみならず器種も豊富で、埋葬された遺体に副葬する土器の配置状況を知るだけでなく、その当時に使用されていた須恵器の器種構成を垣間見るようである。　（福田）

日誌抄

平成２年度

２月18日　斎富古墳群１次調査準備。
19日　斎富古墳群現地踏査。
25日　斎富古墳群１次調査開始。
26日　地形測量着手。トレンチ設定・試掘。
３月１日　トレンチ写真撮影・実測着手。
６日　北側斜面で箱式石棺の主体部検出。
12日　トレンチ埋め戻し着手。
16日　斎富古墳群１次調査終了。

平成３年度

12月１日　斎富古墳群全面調査開始。
２日　４号墳調査前写真撮影・地形測量。
３日　４号墳墳丘検出・表土除去作業着手。
５日　５号墳調査前写真撮影・地形測量。
６日　５号墳墳丘検出・表土除去作業着手。
12日　１号墳調査前写真撮影・地形測量。
13日　１号墳墳丘検出・表土除去作業着手。
17日　１・５号墳周溝検出作業。
19日　２号墳調査前写真撮影・地形測量。
20日　２号墳墳丘検出・表土除去作業着手。
26日　３号墳調査前写真撮影・地形測量。
１月７日　１・５号墳墳丘全景写真撮影。
９日　３号墳墳丘検出・表土除去作業着手。
10日　１・５号墳墳丘土層断面実測。
16日　１号墳調査後地形測量。
18日　５号墳調査後地形測量。
20日　５号墳主体部天井石検出・清掃作業。
21日　５号墳主体部天井石写真撮影。
中世墓１備前焼壷検出・実測。
22日　５号墳主体部天井石実測着手。
５号墳西側で土器棺墓１を検出。
23日　土器棺墓１写真撮影・実測。
４号墳北側で土壙墓１を検出。
24日　５号墳主体部天井石除去作業。
４号墳西側で土壙墓２～４を検出。
27日　５号墳主体部内掘り下げ作業着手。
３号墳南側で土壙墓５～８を検出。
29日　２号墳墳丘全景写真撮影。
30日　３・４号墳調査後全景写真撮影。
31日　２号墳第１主体部検出。
２月１日　３・４号墳周辺の土壙墓内掘り下げ。
４日　５号墳主体部遺物出土状況写真撮影。
５日　５号墳主体部遺物出土状況実測。
７日　１号墳主体部検出。
10日　１号墳主体部内掘り下げ作業着手。
５号墳主体部内遺物取り上げ作業。
土壙墓１～８写真撮影・実測着手。
12日　２号墳第２主体部検出。
15日　２号墳第１・２主体部内掘り下げ。
２号墳第３主体部検出。
17日　２号墳第３主体部内掘り下げ。
３・４号墳調査後地形測量。
19日　２号墳第２主体部写真撮影・実測。
20日　１号墳主体部写真撮影・実測。
24日　２号墳第４主体部検出。
25日　２号墳第４主体部内掘り下げ。
27日　５号墳主体部実測着手。
３月１日　２号墳第１主体部遺物出土状況実測。
６日　２号墳第４主体部内木棺痕跡検出。
９日　２号墳第４主体部遺物出土状況実測。
17日　２号墳第１主体部内遺物取り上げ。
21日　斎富古墳群全景航空写真撮影。
23日　２号墳第１主体部実測着手。
２号墳第３主体部実測着手。
２号墳第４主体部内遺物取り上げ。
24日　２号墳第４主体部実測着手。
25日　土器棺墓１の下位に土壙墓22を検出。
26日　土壙墓22内掘り下げ作業着手。
30日　土壙墓22写真撮影。
31日　斎富古墳群調査終了。

2．弥生時代～古墳時代前半の遺構・遺物

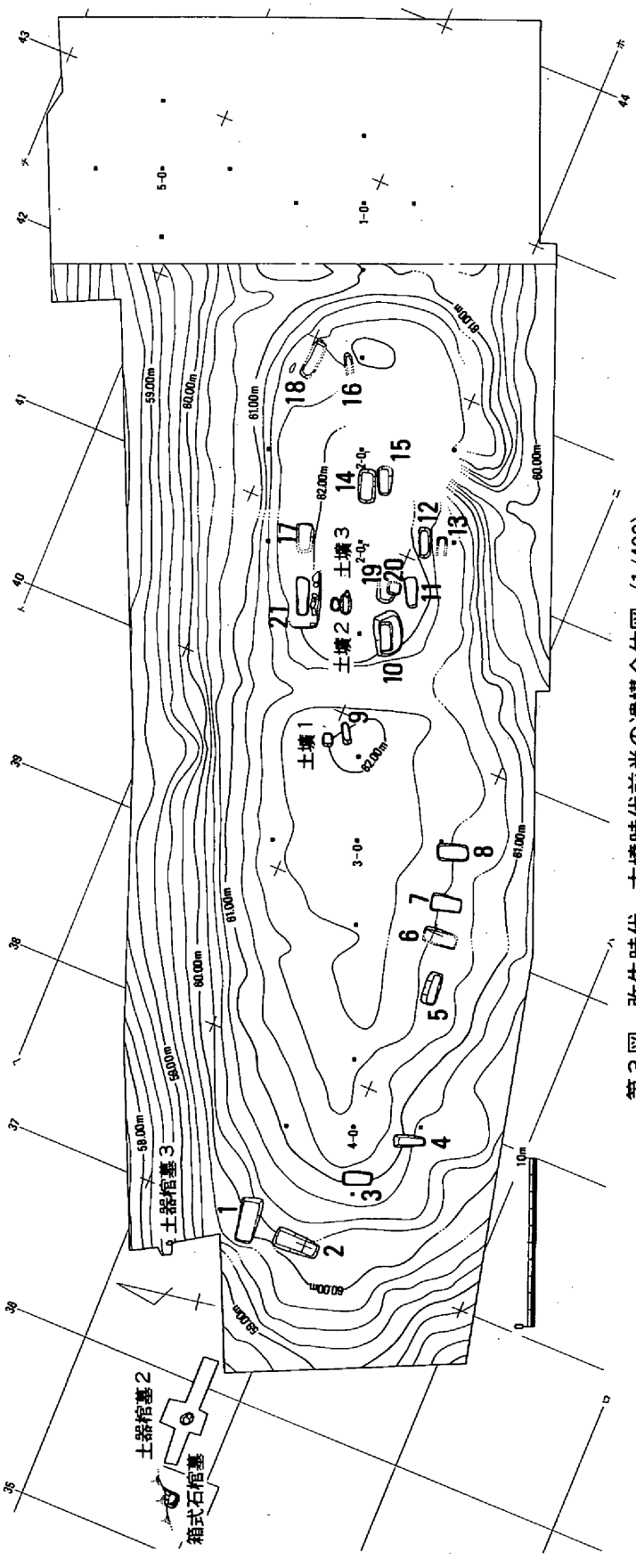
1．概観

1次調査の結果に基づいて全面調査を実施した斎富古墳群の発掘作業は、平野を望む丘陵の西端部分から着手した。この地点は3号墳と4号墳が所在するであろうと予想された位置になっていたが、自然の高まりが認められただけで古墳は存在しなかった。作業を進めていた時に弥生土器を採集したので周辺を精査したところ、数基の土壙墓を検出した。これらの土壙墓には土器が伴うものや木棺痕跡が認められるものがあり、時期を特定することができた。

このような状況であったから、古墳の盛土下位にも土壙墓が存在する可能性が考えられたので、古墳の調査終了後にすべての盛土を除去して調査を継続した。その結果、2号墳の地点から10基以上の土壙墓や土壙を検出した。ほとんどの土壙墓や土壙が素掘りだけだったが、埋葬施設の周辺に人頭大の石が存在する特殊なものも認められた。

これらの土壙墓や土壙で時期が判明しているのは、弥生時代後期のものが多い。2号墳の墳丘下位で検出したものはすべての主軸が尾根方向に平行するが、丘陵の西側では規則性は認められない。

その他に丘陵の北西斜面より、弥生時代後期終末と古墳時代初頭の土器棺墓2基と、時期不明の箱式石棺墓1基を検出した。

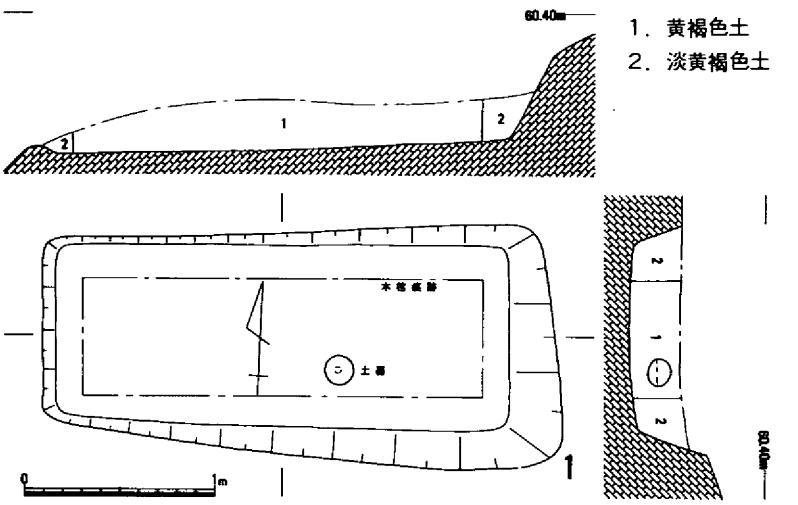


第3図　弥生時代～古墳時代前半の遺構全体図（1/400）

2．土壙墓

土壙墓１（第４図、図版３）

土壙墓や土壙を検出した丘陵の西端部の地点で、南方向約３ｍには土壙墓２が存在していた。



第４図　土壙墓１平断面図（1/40）

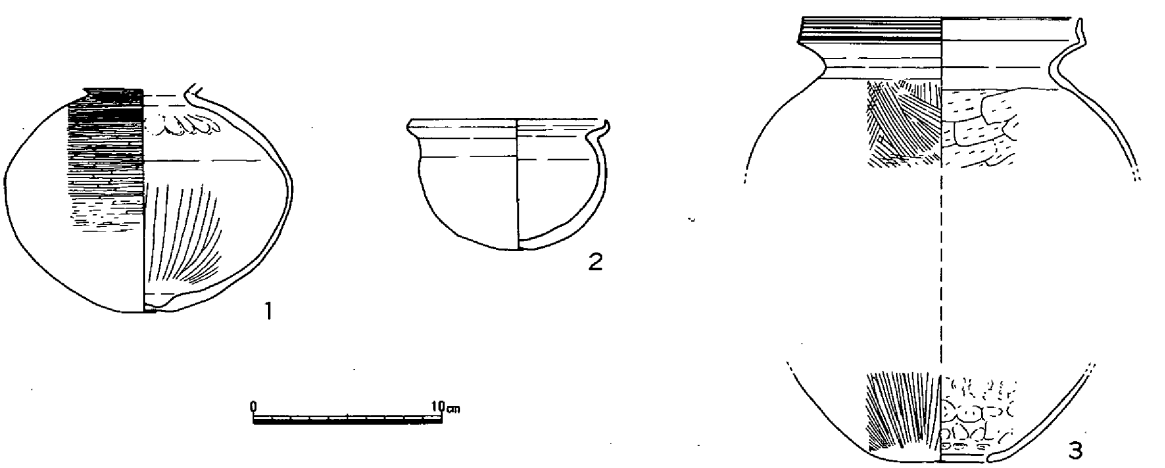
この土壙墓の長軸はほぼ東西方向を示し、底部の海抜高は5966～5975cmと西側へわずかに傾斜していた。底部の計測値は長径238cm・短径89～95cmとなり、210×62cmの黄褐色を呈する木棺痕跡を検出した。この土壙内に埋葬された遺体の頭位は東側と推定され、内部から弥生土器（１～３）が出土した。

遺物（第５図、図版３－３）

土壙墓１から出土した遺物は、３点の弥生土器である。

１は口縁部を欠損するものの、頸部から底部にかけて器形や調整が観察できる壷である。胴部の最大径はほぼ中位にあり、底部はかすかな平底が残存する。胴部内面の上位はユビオサエを行い、中位から下位にかけては縦方向のユビナデを施している。外面の上位は横方向のヘラミガキを行い、その上面全体に丹塗りを施している。２は小型の鉢である。口縁端部は上方へ屈曲し、底部にはかすかに平底が認められる。内外面とも器表面の磨滅が著しくて調整が不明であるが、外面には丹塗りが施されているようだ。３は口縁部から頸部にかけてと底部の破片であるが、胎土や色調から胴部の中位を欠損した同一個体の甕と推定できる。この甕の底部には、径約５cmを測る焼成前の穿孔が行われている。屈曲する口縁の外面に６条のクシ描沈線が認められ、内外面とも全体にヨコナデを施している。胴部上位の外面はハケメが存在し、内面は横方向のヘラケズリを行っている。底部の外面は縦方向のヘラミガキを施し、内面にはユビオサエ痕跡が顕著に残存している。

これらの土器はその形態的特徴から推定して、弥生時代後期末葉の時期に比定されるであろう。



第５図　土壙墓１出土土器（1/4）

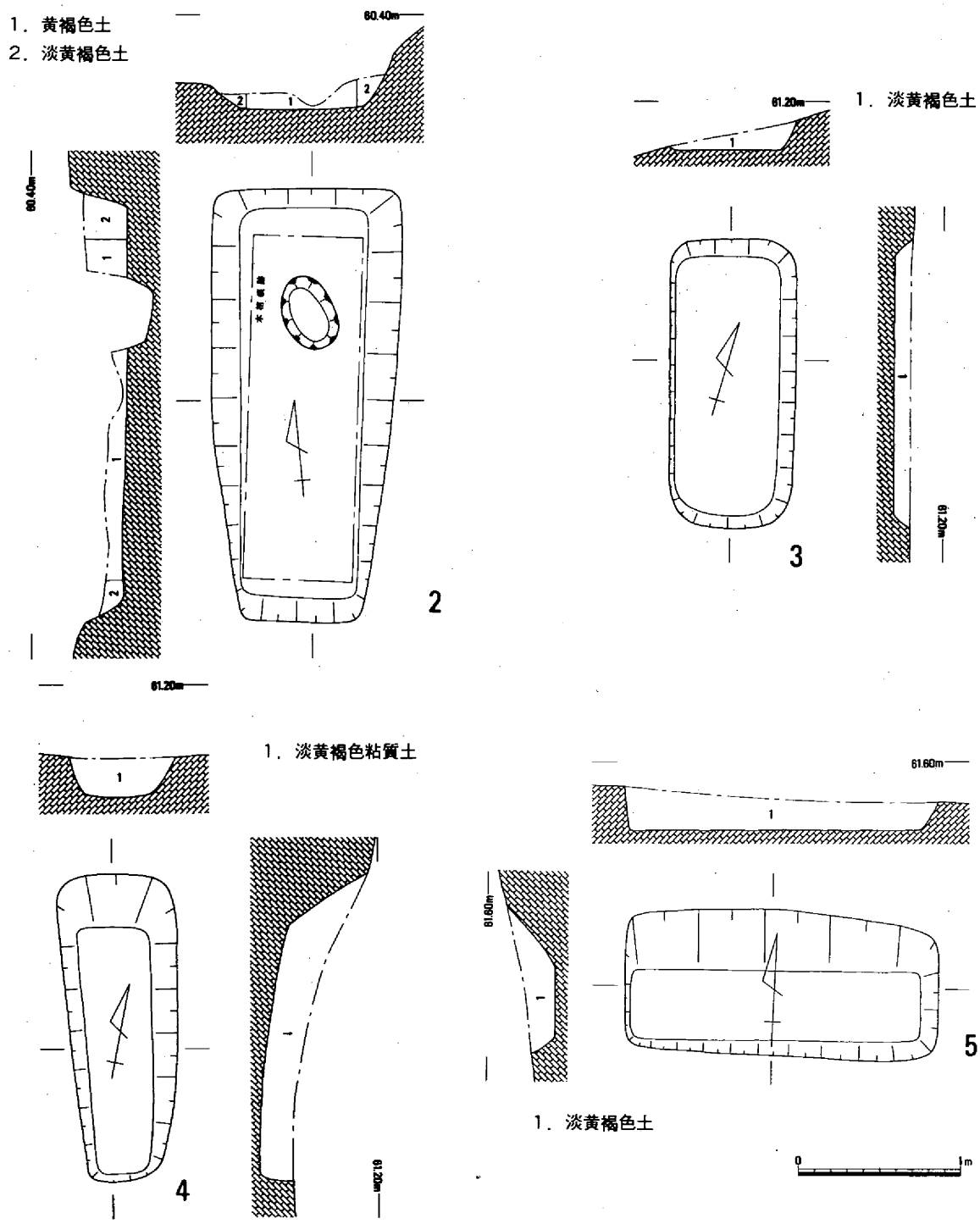
土壙墓２（第６図）

前述した土壙墓１の南方向約３ｍで検出した土壙墓である。平面形が長方形を呈する底部の海抜高は5960～5973cmで、長径243cm・短径72～80cmの内部に214×69cmの木棺痕跡が存在した。

土壙墓３（第６図）

土壙墓や土壙を検出した丘陵の西端部の地点で、土壙墓２と土壙墓４の中間に位置する。

平面形は隅丸長方形を呈し、底部は海抜高が6090cmの水平な面になっていた。底部の計測値は長径160cm・短径60～64cmとなり、精査したにもかかわらず木棺痕跡や遺物は存在しなかった。



第６図　土壙墓２～５平断面図（1/40）

土壙墓４（第６図）

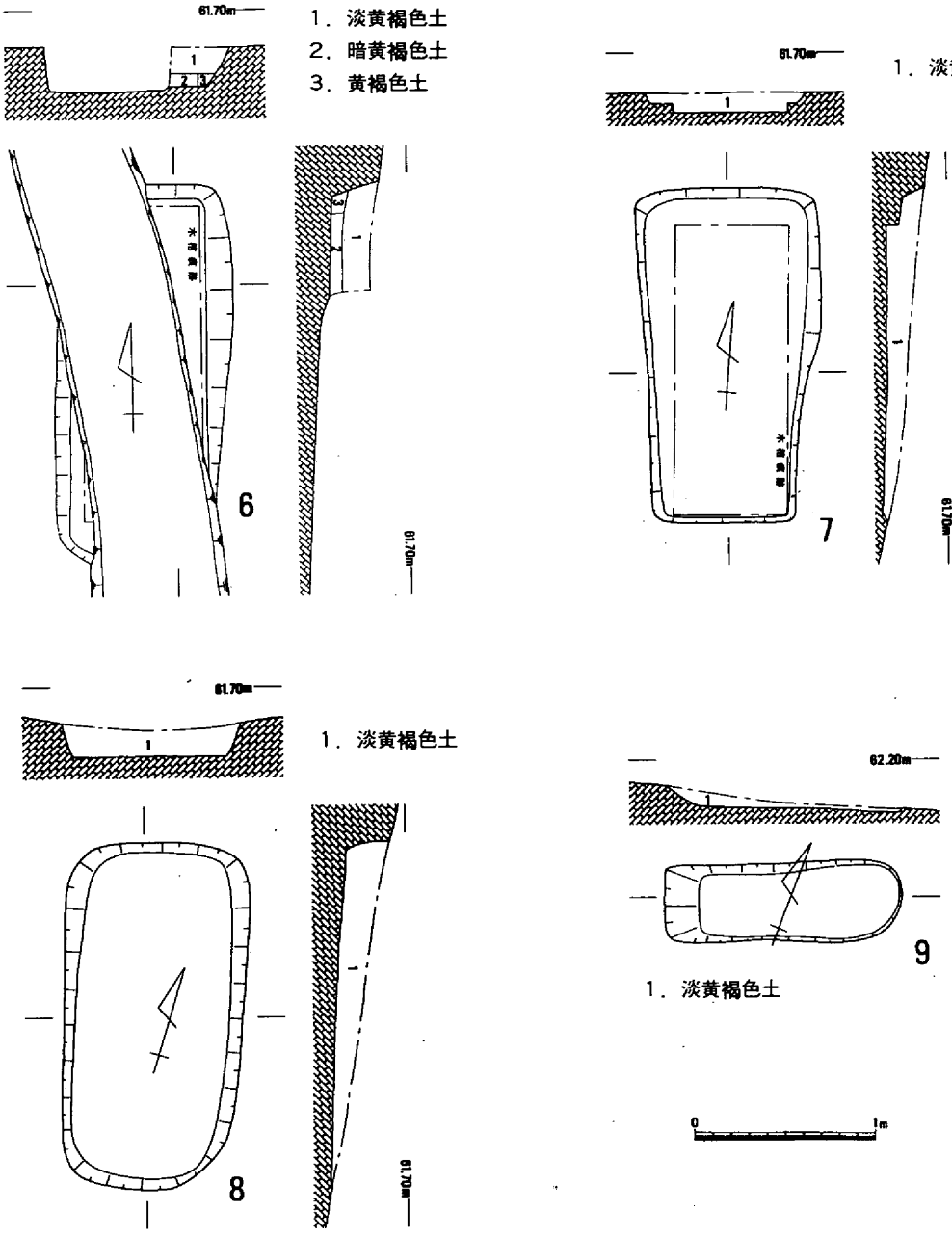
前述した土壙墓３の南東方向約４ｍで検出した。平面形が隅丸長方形を呈する底部の海抜高は6048～6064cmと南側へ傾斜し、長径152cm・短径30～45cmの内部に淡黄褐色の粘質土が堆積していた。

土壙墓５（第６図）

土壙墓６の西方向約３ｍの地点で検出した土壙墓である。平面形が長方形を呈し、底部は海抜高が6118cmの水平な面になっていた。底部の計測値は長径172cm・短径43cmで、遺物は存在しなかった。

土壙墓６（第７図）

前述した土壙墓５と後述する土壙墓７の中間に位置する。この土壙墓の中心部分は、果樹園によって掘削された後世の溝が存在した。平面形は隅丸長方形を呈し、北端の底部海抜高は6130cmで南側へ傾斜していた。底部の計測値は長径約195cm・短径約75cmとなり、内部に木棺痕跡を検出した。



第７図　土壙墓６～９平断面図（1/40）

土壙墓７（第７図）

土壙墓６と土壙墓８の中間に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、底部の海抜高は6137cmで地形の高い北側が２段になっていた。底部は長径174cm・短径67～89cmで、内部に木棺痕跡を検出した。

土壙墓８（第７図）

土壙墓７の東方向約３mに検出した。平面形は隅丸長方形で、底部の海抜高は6129～6138cmであった。内部に木棺痕跡は存在しなかった。

土壙墓９（第７図）

土壙１の南方向約１mに検出し、隅丸長方形を呈していた。底部は長径約110cm・短径32～39cmを測り、海抜高が6191～6195cmになっていた。

土壙墓10（第８図）

土壙墓19の西方向約３mに位置し、墓壙が２段掘りになっていた。中心部分の墓壙は長方形を呈し、底部の長径156cm・短径57cmであった。内部を精査したが、遺物は存在しなかった。

土壙墓11（第８図）

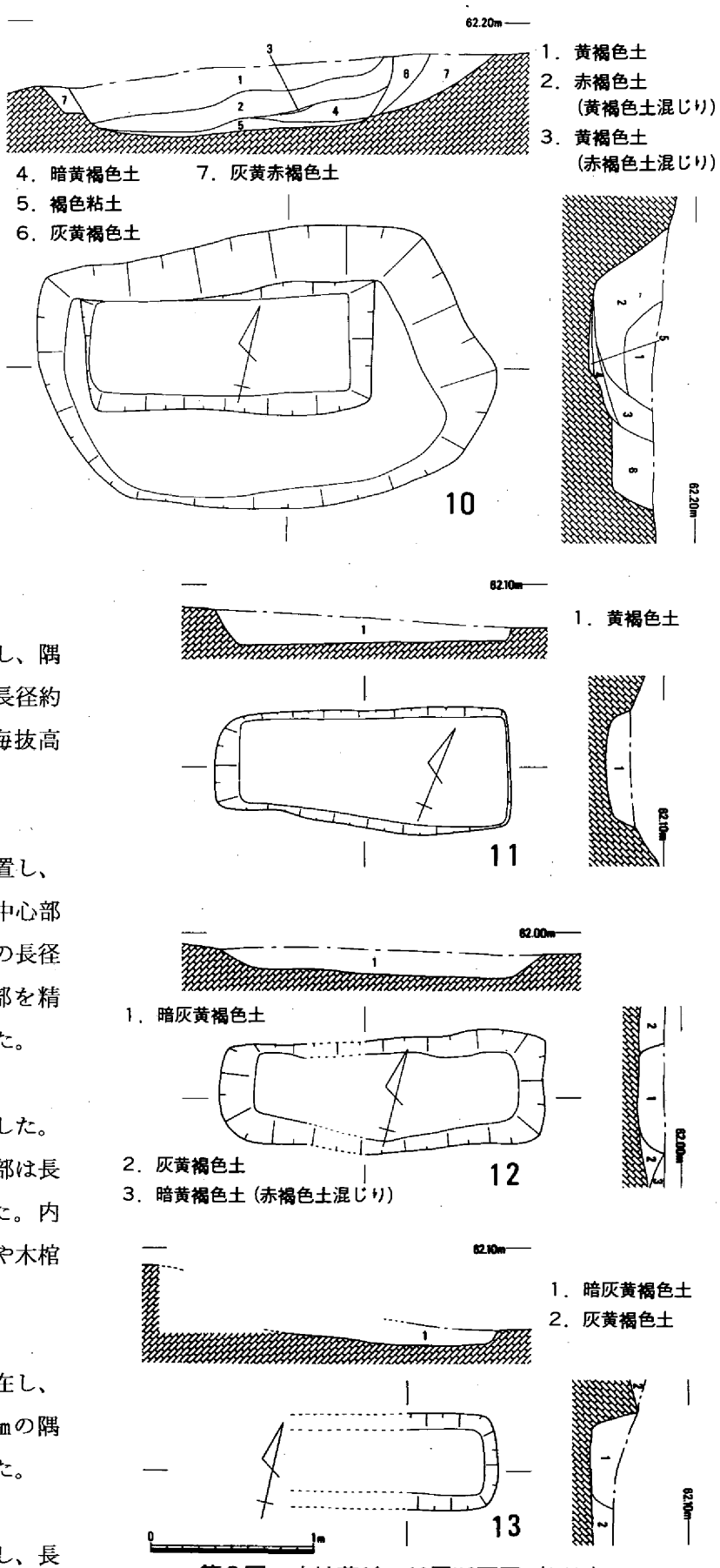
土壙墓20の南方向１mに検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、底部は長径151cm・短径49～65cmであった。内部には黄褐色土が堆積し、遺物や木棺痕跡は存在しなかった。

土壙墓12（第８図）

土壙墓13の北方向約１mに存在し、底部が長径148cm・短径35～52cmの隅丸長方形に似た形態になっていた。

土壙墓13（第８図）

土壙墓12の南側約１mに位置し、長軸東端約65cmが残存するだけである。



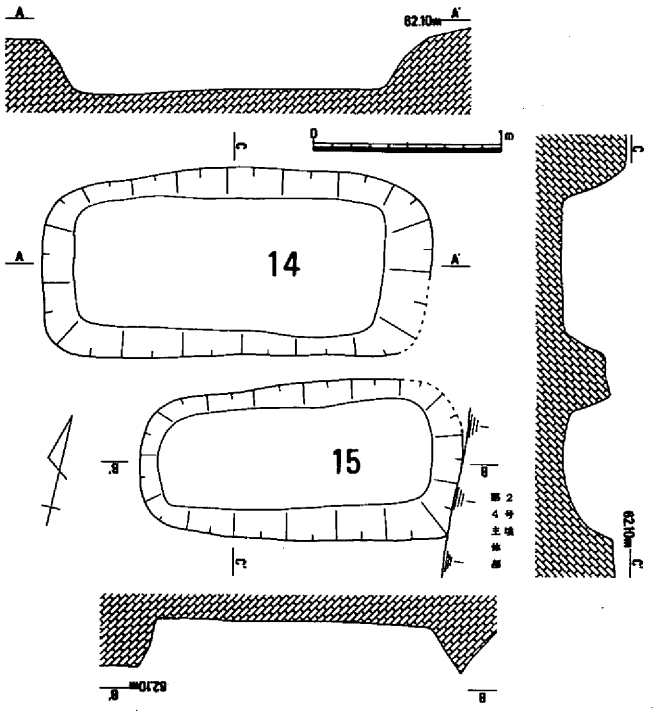
第８図　土壙墓10～13平断面図（1/40）

土壙墓14（第９図）

土壙墓や土壙を検出した丘陵の東端部尾根上の地点で、土壙墓19と土壙墓16の中間に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、底部の海抜高は6170～6173cmになっていた。底部の計測値は長径164cm・短径65～73cmで、遺物や木棺痕跡は存在しなかった。

土壙墓15（第９図）

前述した土壙墓14の南に接して存在した。平面形は隅丸長方形を呈し、底部の海抜高は6173～6178cmになっていた。底部の計測値は長径146cm・短径45～54cmになり、東端部は２号墳第４主体部の掘り方によって切られていた。



第９図　土壙墓14・15平断面図（1/40）

土壙墓16（第10図）

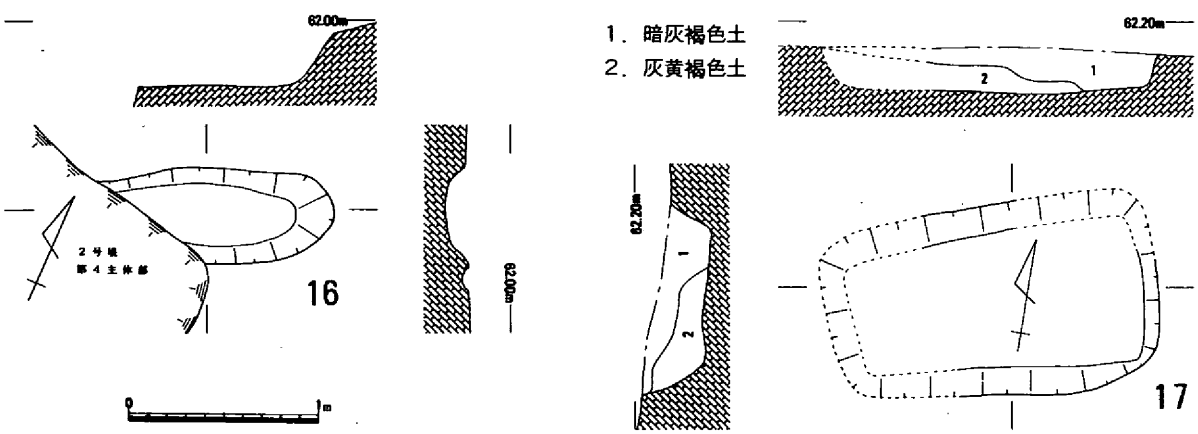
土壙墓や土壙を検出した丘陵の東端に位置し、西側部分は２号墳第４主体部の掘り方に切られていた。平面形は隅丸長方形に近い形態を呈し、底部の海抜高は6650cmであった。検出面からの深さは約30cmを測り、残存する底部の最大幅は32cmになっていた。土壙墓内を精査したが、遺物や木棺痕跡は存在しなかった。

土壙墓17（第10図）

土壙墓21の東方約3.50mで検出した土壙墓で、西と北東の部分は果樹園に造成された時に削平されたと推定される。平面形は隅丸長方形を呈し、底部の海抜高は6181～6184cmになるであろう。検出面からの深さは20～32cmを測り、内部に灰黄褐色土と暗灰黄褐色土が堆積していた。底部の計測値は長径約155cm・短径60～80cmになると考えられ、内部に遺物や木棺痕跡は存在しなかった。

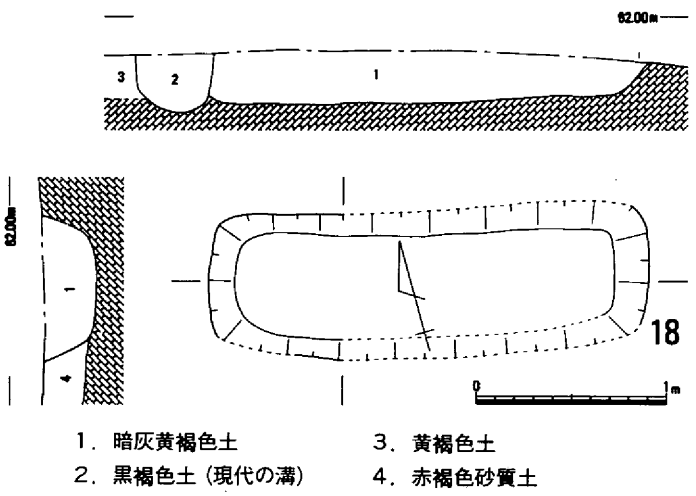
土壙墓18（第11図）

土壙墓や土壙を検出した丘陵の東端部の地点で、前述した土壙墓16の北方向約２mに位置する。こ



第10図　土壙墓16・17平断面図（1/40）

の土壙墓が存在する地点は後世の果樹園の造成による撹乱が著しく、土壙墓掘り方の上面を把握することが困難であった。平面形は隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは18～28cmであった。底部の海抜高は6153～6160cmになり、内部に暗灰黄褐色土が堆積していた。底部の計測値は長径200cm・短径44～55cmで、この土壙墓内に遺物や木棺痕跡は存在しなかった。

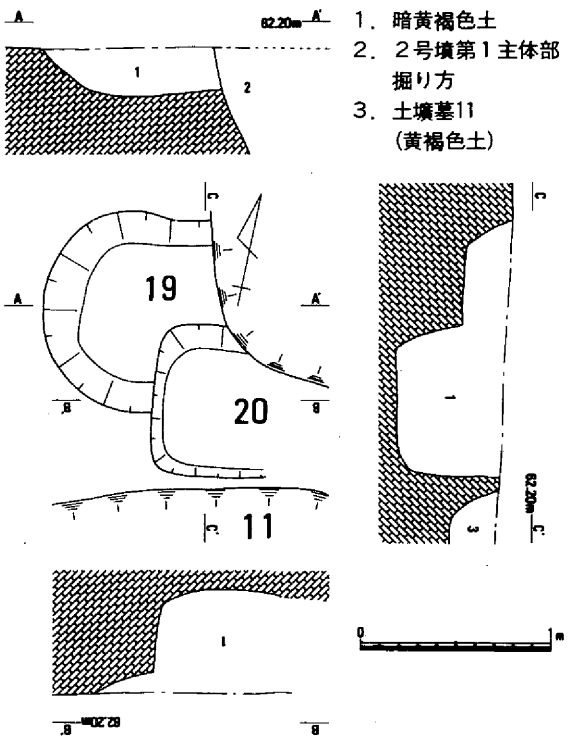


1．暗灰黄褐色土　　3．黄褐色土
2．黒褐色土（現代の溝）　　4．赤褐色砂質土

第11図　土壙墓18平断面図（1/40）

土壙墓19（第12図）

土壙墓10の東方向約３ｍの地点に、土壙墓20と重複して検出した。両遺構の新旧関係は、土壙墓20が土壙墓19を新しく切っていた。さらにこの土壙墓の東側部分は、２号墳第１主体部の掘り方によって切られていた。残存する遺構の検出面からの深さは約25cmを測り、底部の海抜高は6180～6184cmになっていた。平面形は隅丸長方形を呈し、底部の幅が約73cmになるであろう。この遺構は東側部分が削平されて不明であるため、単なる土壙である可能性も強い。



1．暗黄褐色土
2．２号墳第１主体部掘り方
3．土壙墓11（黄褐色土）

第12図　土壙墓19・20平断面図（1/40）

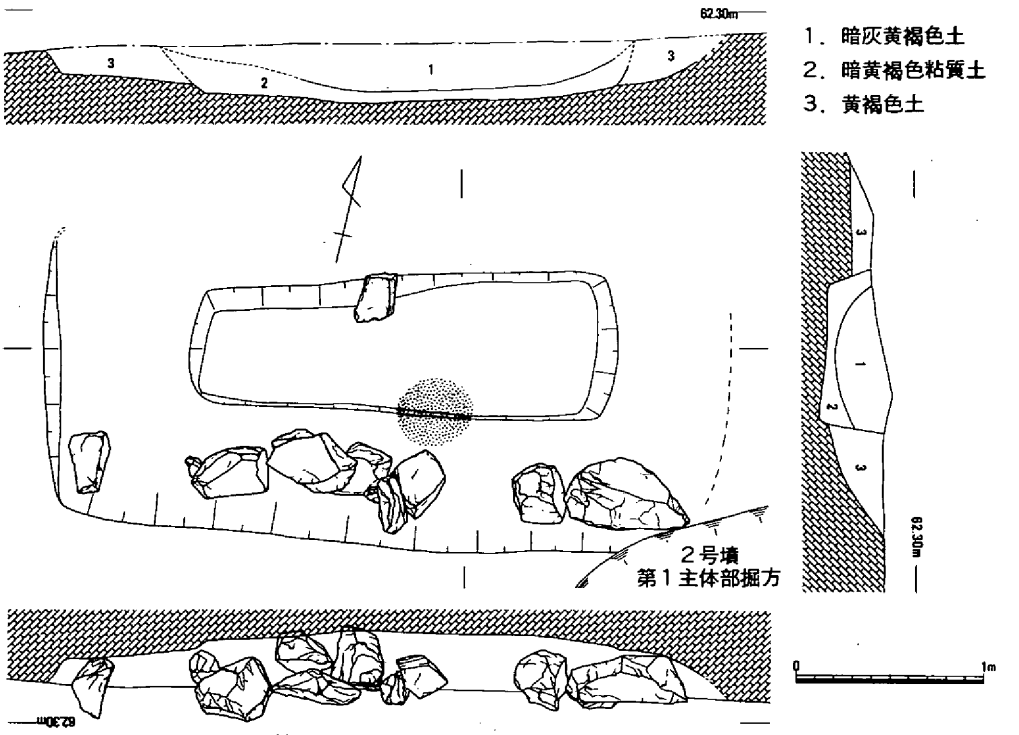
土壙墓20（第12図）

前述した土壙墓19を新しく切った状態で検出した遺構で、東側部分は著しく削平されて不明である。さらに北東部分は、２号墳第１主体部の掘り方によって切られていた。残存する遺構の検出面からの深さは約55cmを測り、底部の海抜高は6150～6158cmになっていた。平面形は隅丸長方形を呈し、底部の幅が約72cmになるであろう。内部には暗黄褐色土が堆積し、遺物や木棺痕跡は存在しなかった。この遺構も土壙墓19と同様、単なる土壙になるものかもしれない。

土壙墓21（第13図）

土壙墓２や土壙墓３の北方向約２ｍの地点に位置し、東方向約４ｍには土壙墓17が存在した。

この土壙墓は、埋葬施設の西側から南側にかけて人頭大の石10個が存在する平坦面を有し、他の土壙墓とは異なった特殊な様相を呈していた。中央に位置する土壙墓の平面形は隅丸長方形を呈し、底部の海抜高は6181～6200cmになっていた。検出面からの深さは25～30cmを測り、底部は中心から東西両方向に向けて緩やかに湾曲していた。底部の計測値は長径218cm・短径45～70cmとなり、南壁には底面に密着して弥生時代後期中葉の時期と推定される壷の底部（第14図）が出土した。

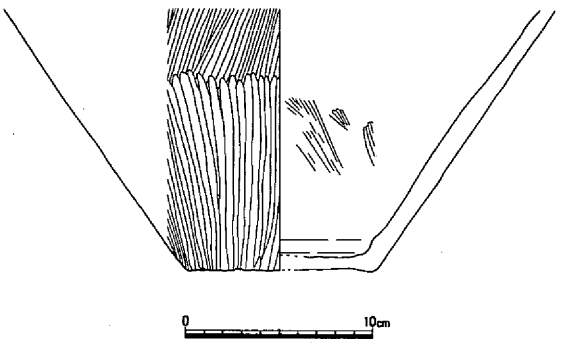


第13図　土壙墓21平断面図（1/40）

3．土　壙

土壙1（第15図）

土壙墓9の北方向約1ｍで検出した土壙である。平面形は隅丸長方形に近い形態を呈し、検出面からの深さは約8㎝と浅い。底部の海抜高は6189㎝で、土壙内には淡黄色土が堆積していた。底部の計測値は長径61㎝・短径38～50㎝となり、遺物は出土しなかった。



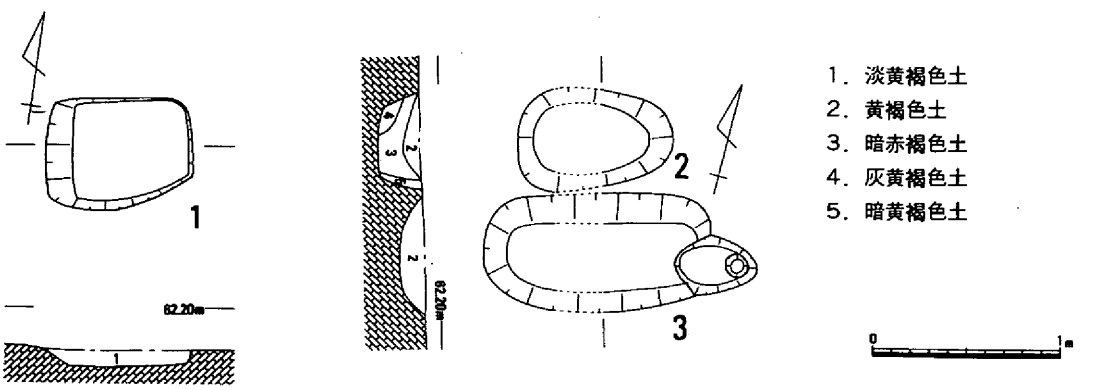
第14図　土壙墓21出土土器（1/4）

土壙2（第15図）

土壙墓21の南方向約2ｍに存在した。平面形は卵形を呈し、底部の海抜高は6188㎝であった。底部の長径は60㎝で、遺物は検出できなかった。

土壙3（第15図）

前述した土壙2の南に接して検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、底部の海抜高は6189㎝であった。検出面からの深さは約14㎝で、底部の計測値が長径100㎝・短径30～36㎝になっていた。

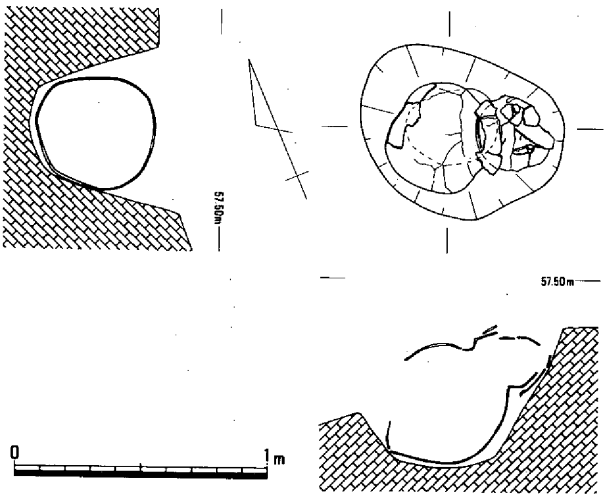


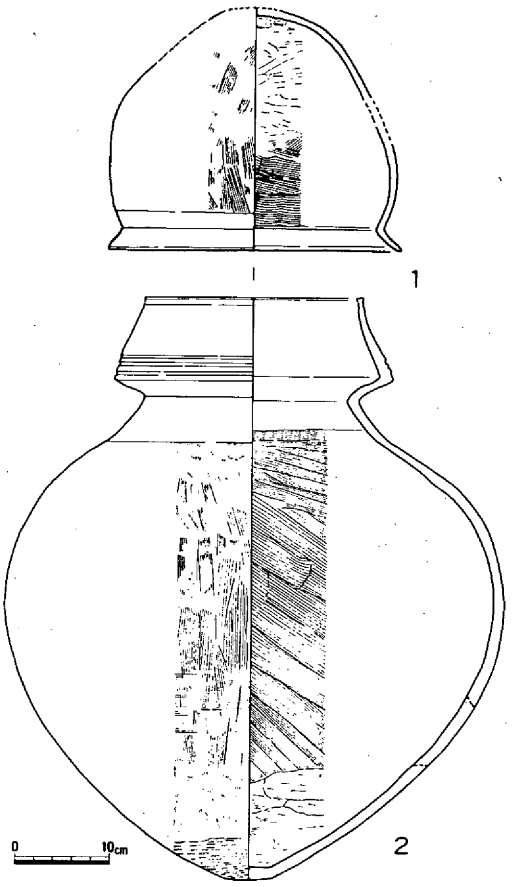
第15図　土壙1～3平断面図（1/40）

4．土器棺墓

土器棺墓２（第16図、図版４）

土壙墓や土壙などを検出した丘陵の北西端部に存在した土器棺墓である。この遺構は、山陽町内を南北に縦貫して児島湾へ流入する砂川流域の平野を望む丘陵の比較的急勾配である北西斜面に、駄目押しを行うために設定した遺構存在確認用のトレンチによって発見したのである。





第16図　土器棺墓２平断面図（1/30）および出土土器（1/8）

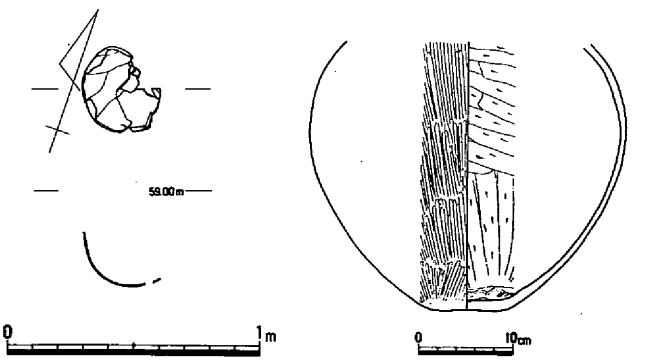
この土器棺墓の掘り方は、検出面で長径82cm・短径62cmの楕円形に近い形態を呈し、その中に口縁部が著しく内傾して立ち上がる巨大な壷を約40度に傾けて据え、その上位の口縁部に鉢を伏せた状態に被せて蓋にしていた。掘り方底部の海抜高は5674cmで、断面は「U」字形になっていた。壷の内部を精査したが、土砂が充満しているだけで遺物は存在しなかった。

この土器棺墓に使用していた壷（２）と鉢（１）のセットは、その形態的特徴や調整手法により、古墳時代初頭の時期に比定されるであろう。

土器棺墓３（第17図）

この土器棺墓も前述した土器棺墓２と同様、土壙墓や土壙を検出した丘陵の北西端部に存在した。土壙墓１の北西方向約５ｍに位置し、土器棺墓２はこの土器棺墓の西方向約10ｍの地点であった。発掘調査実施予定地の境界部分に、上位が削平された土器が出土したため、範囲を部分的に拡張して調査を行った。

この遺構は、壷と推定する胴部から底部にかけての比較的大きな破片が横たわっているだけで、掘り方は確認できなかった。土器の最下位の海抜高は5862cmで、内部に遺物は存在しなかった。この土器は、弥生時代後期末葉に比定されるであろう。

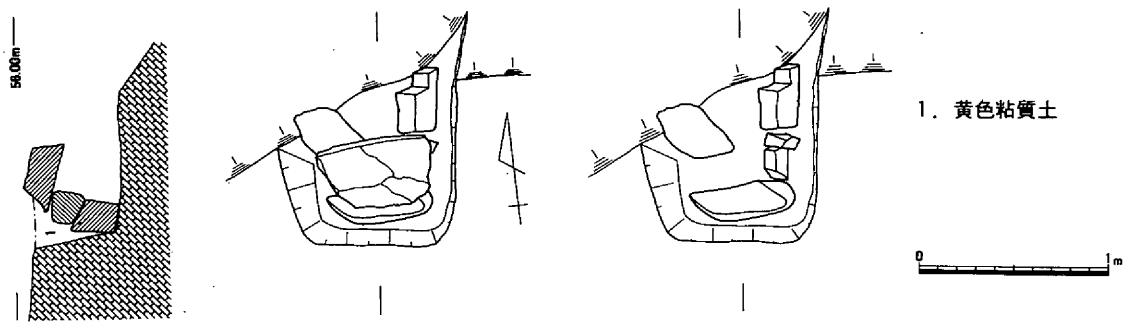


第17図　土器棺墓3平断面図（1/30）および出土土器（1/8）

5．箱式石棺墓（第18図）

この箱式石棺墓は、前述した丘陵の北西端部に位置する土器棺墓２よりもさらに西方向約10m地点の急斜面に存在した。６月の梅雨期を前にして、丘陵の斜面に置き去りになっていた発掘調査に伴って生じた排土の処理作業中に、その所在が明らかになった遺構である。

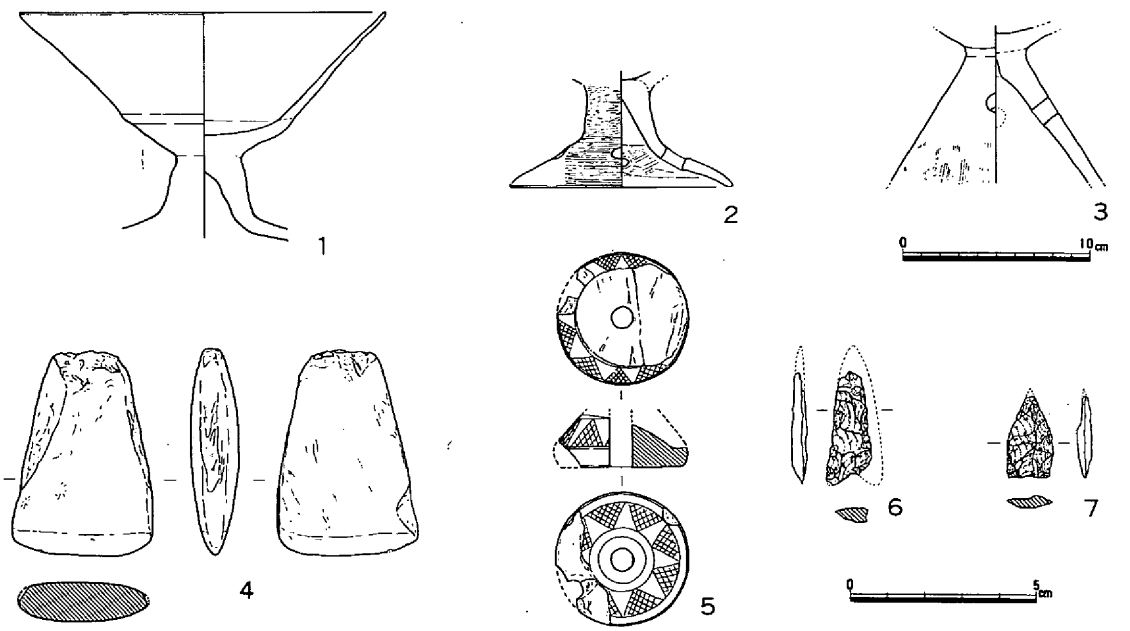
地形の低い北側部分は、削平されて不明である。主軸はほぼ南北方向を示し、残存する天井石は１枚だけであった。石材を２段に積んだ南端の小口部分では、床面から天井石までの高さは約35cmで、床面には何も存在しなかった。床面の幅は、西側壁の石材が残っていないので知る由もないが、30～35cmになるであろう。また掘り方は、石棺がやっと構築できるだけの狭いスペースで、ほぼ天井石が隠れる約45cmの深さに掘り窪めていた。天井石の上面や掘り方内には、灰色の粘土が認められた。



第18図　箱式石棺墓平断面図（1/40）

6．遺構に伴わない遺物（第19図）

図示できた土器は、土師器の高杯（１・２）と高杯または器台の破片（３）である。１と３の器表面は、磨滅して調整手法の観察が困難である。２の内面にはハケメが存在し、外面は横方向のヘラミガキを施している。石器には、小型の石斧（４）、紡錘車（５）、石鏃（６・７）がある。４の材質は泥岩で重さ43.22ｇを測り、磨製の良品である。５は鋸歯文を配した滑石の製品で、重さが20.44ｇである。６と７はサヌカイト製で1.41ｇと0.83ｇを測るが、前者は欠損している。（福田）



第19図　遺構に伴わない遺物（１～３：1/4，４～７：1/2）

3．古墳時代後半の遺構・遺物

1．概観

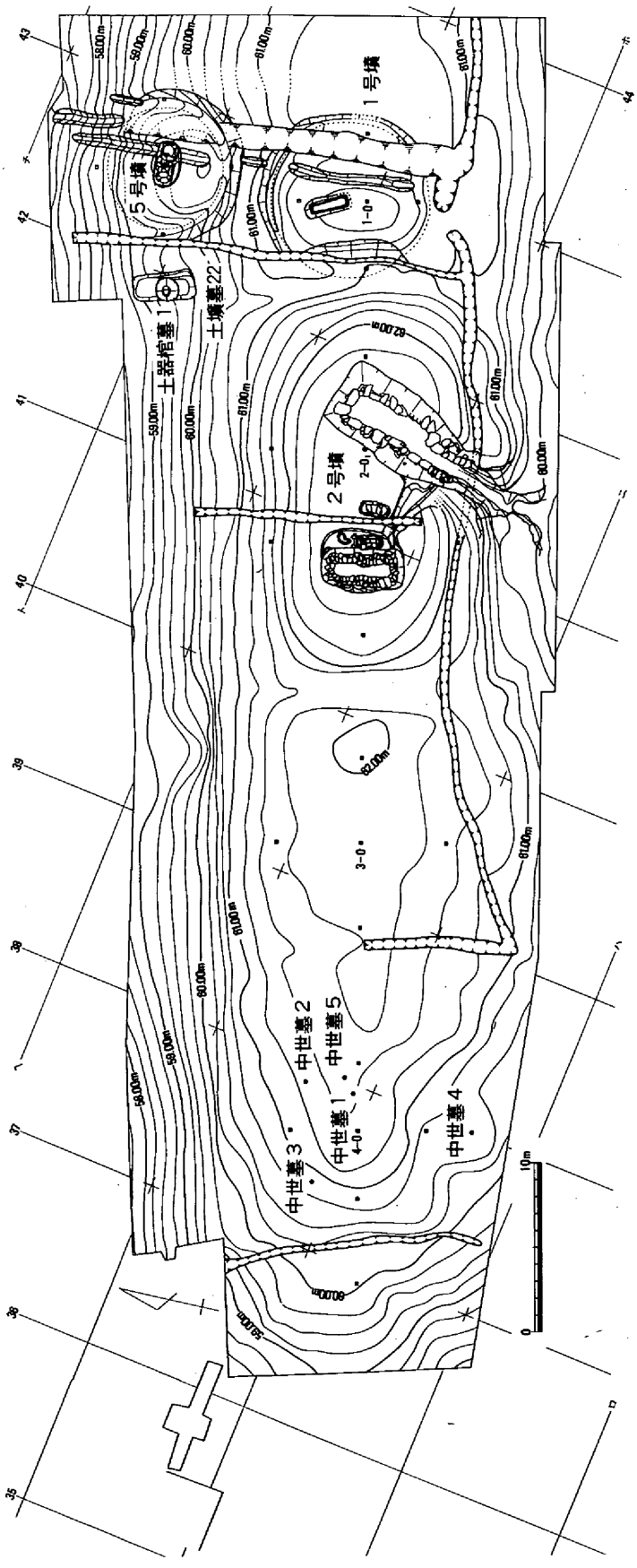
昭和49年3月に岡山県教育委員会から発行された『岡山県遺跡地図（第二分冊）』の山陽町編によると、斎富古墳群には3基の古墳が所在し、須恵器の杯が採集されていることが明記されている。

1次調査の遺構確認作業では、山陽自動車道建設予定地内にさらに別の古墳2基が存在する可能性が考えられ、全体で古墳5基を調査する計画で本調査に着手した。

2号墳の地点は、ぶどう畑の果樹園に造成されていたので旧地形を把握することが困難だったが、表面採集した土器片の中に多くの弥生土器が含まれていたので、弥生時代の巨大な墳丘墓になることも推定された。

発掘調査の結果、3号墳と4号墳に想定していた所は自然の高まりで、古墳ではないことが判明した。また1号墳の北方向の斜面に1次調査で検出した古墳は、斎富5号墳と命名した。さらに土器棺墓1の下位で須恵器が多量に副葬された土壙墓を検出したので、土壙墓22として調査を行った。

なお弥生時代の墳丘墓かもしれないと推定された2号墳には、4基の埋葬施設が確認されたため、西側に位置するものから順番に、竪穴式石室を第1主体部、西側の箱式石棺を第2主体部、東側の箱式石棺を第3主体部、横穴式石室を第4主体部とした。



第20図　古墳時代後半以降の遺構全体図（1/400）

2．1号墳

(1)　調査前の状況（第21図）

1号墳と2号墳が所在した地点は、後世にぶどう畑の果樹園に造成されていたため、本来の旧地形を把握するのが極めて困難であった。さらに墳丘と推定される部分には、尾根に直交する方向に肥料穴または排水溝と考えられる何条もの深い溝が掘削され、旧地形の改変が著しく行われていた。また墳丘の南端部分には、小石や瓦礫を集めた小山が存在し、須恵器片や備前焼壷の小破片を採集した。

このような状況であったから、1次調査の段階で、墳丘の頂部と推定される部分に、2号墳から延長した尾根方向のトレンチを設定して確認調査を行った。その結果、2号墳との間には表土面から約80cmの深さの溝状遺構が存在し、墳丘と考える位置に暗黄褐色を呈する盛土を検出したため、墳頂部が削平された小規模な古墳と推定した。さらに規模を確認するため、尾根に直交する方向に掘削された溝の断面を精査したところ、直径約9mの円墳であることが判明した。

(2)　墳丘と周溝（第22図、図版5－1）

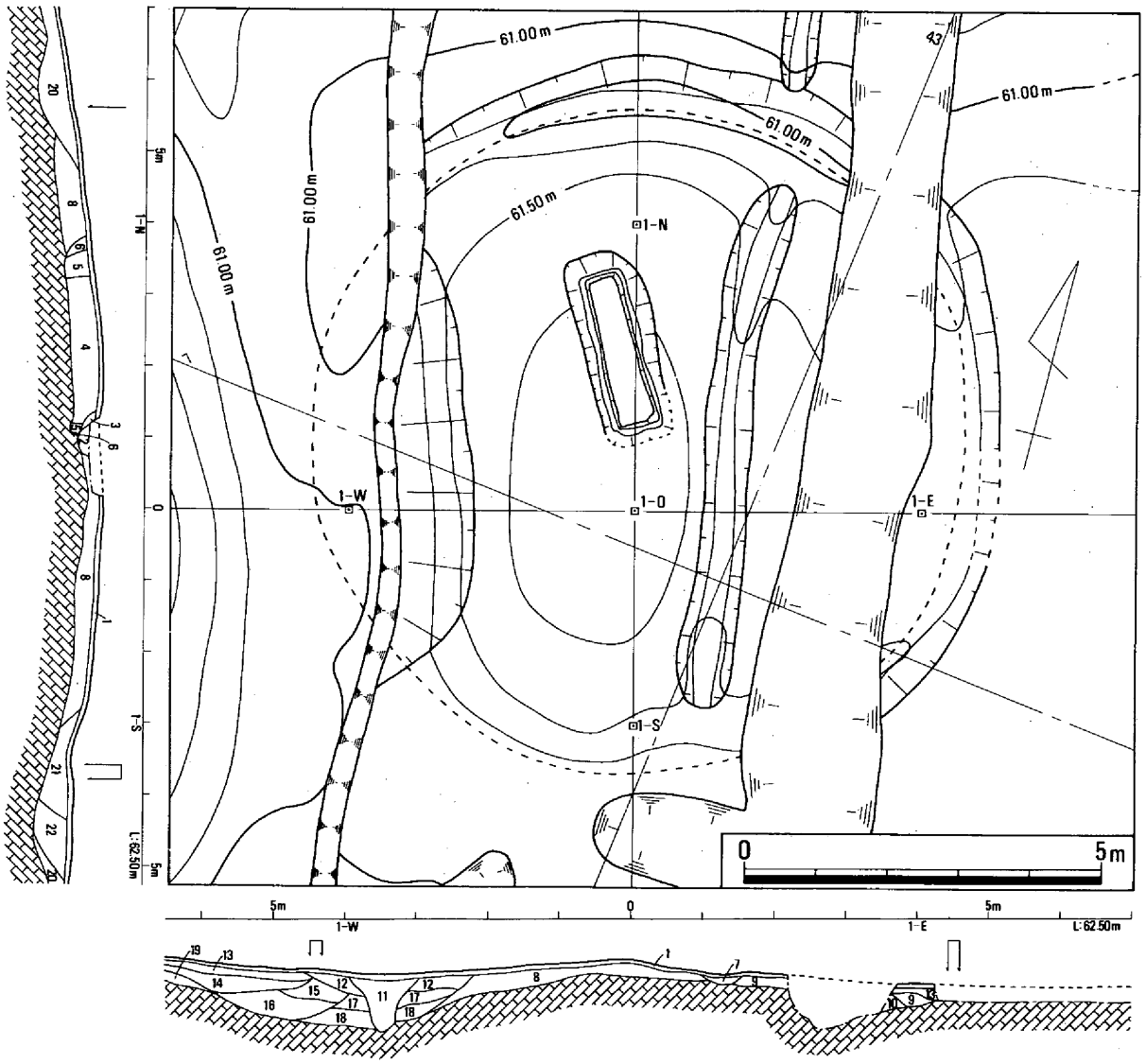
先にも記述したように、この1号墳が所在した地点は、後世にぶどう畑の果樹園に造成されていたため、墳頂部が著しく削平されていた。残存する墳丘の高さは約90cmと低く、墳丘中央部分の表土直下に主体部を検出した。墳丘盛土は暗黄褐色を呈する粘質土で、東端部には黄褐色土も認められた。

第21図　1号墳調査前墳丘地形測量図（1/100）

この１号墳は円墳で、墳丘の規模は直径約９ｍであり、主体部は木棺直葬のもの１基だけであった。

１号墳の周溝は、北側と東側で部分的に確認しただけで、残存状態が極めて悪かった。北側で確認した周溝の検出面での幅は約80cmを測り、内部に黄褐色土が堆積していた。周溝の底部から墳丘頂部までの高さは約１ｍと低く、墳丘そのものが後世に著しく削平されていると判断した。

西側の墳端部分は、２号墳に近接した地点で、周溝は検出できなかった。１号墳と２号墳の新旧関係を把握するため、土層断面観察用の畦を残して精査した結果、１号墳が古く、２号墳が新しいことが判明した。その理由は、１号墳の墳端に堆積していたしまりの強い黄色土（第22図17）とブロック混じりの黄褐色土（同18）を切って２号墳の墳端が新しく存在し、暗黄褐色土（同15）と褐色のやや強い黄褐色土（同16）が堆積していたからである。



1．黒褐色土(表土)
2．黒灰黄褐色粘土
3．暗灰黄褐色土
(炭混じり)
4．淡黄灰褐色土
5．黄灰褐色土
6．明褐色土
7．黒黄褐色土
8．暗黄褐色土(盛土)
9．黄褐色土(盛土)
10．黄褐色土
(同色ブロック混じり)(盛土)
11．黒黄褐色土(しまり弱い)
12．暗黄赤褐色土(しまり弱い)
13．褐色土
14．黄赤褐色土
(黄色ブロック混じり)
15．暗黄褐色土
16．黄褐色土
(褐色やや強い)
17．黄色土(しまり強い)
18．黄褐色土
(同色ブロック混じり)
19．暗黄褐色土(２号墳盛土)
20．黄褐色土
21．褐色ブロック
22．明黄褐色土(しまり弱い)

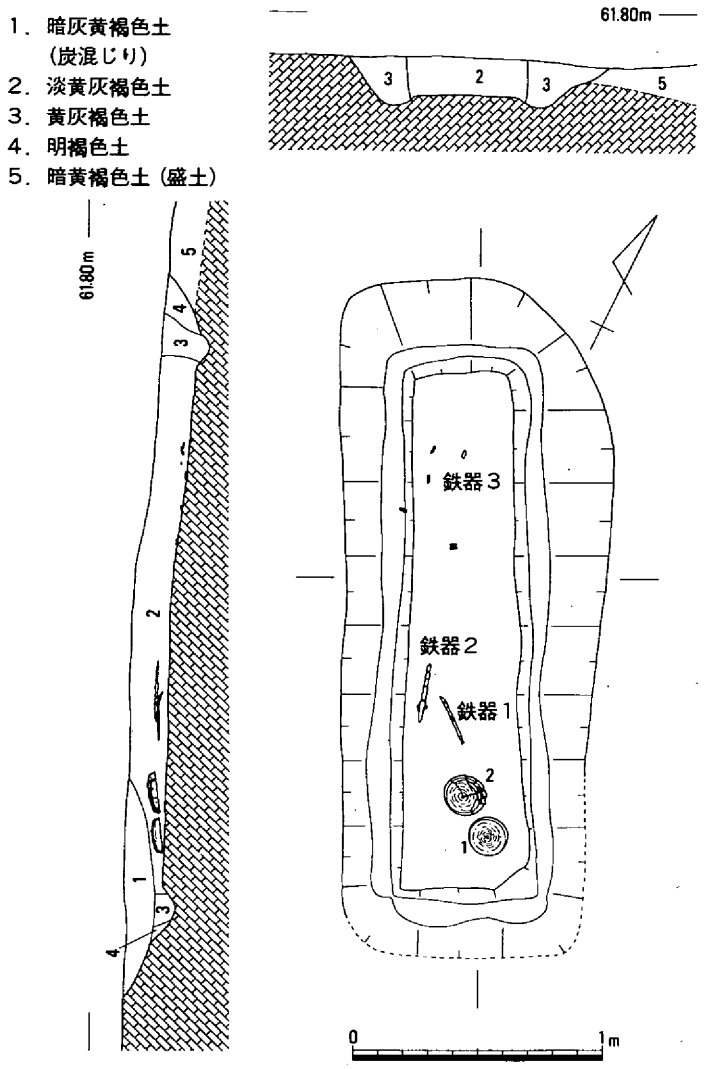
第22図　１号墳調査後墳丘地形測量図および墳丘断面図（1/100）

(3)　主体部（第23図、図版５－２）

１号墳で検出した主体部は、木棺直葬のもの１基だけである。その位置は墳丘の中心部分ではなく、やや北東方向に片寄っていた。

検出面での平面形は隅丸長方形を呈し、長径約270cm・短径約110cm、主軸方向がN－26°－Eを示していた。

検出面から底部までの深さは14～16cmと極めて浅く、主体部の上面が後世に著しく削平されていると判断された。底部の周囲には幅４～10cm・深さ３～５cmを測る断面「U」字形の溝が存在し、木棺の板材が挿入されていたと考えられた。この溝の痕跡から木棺の内法を推定すれば、長径約220cm・短径50～60cmになり、南小口部分が北小口より10cmも幅が広くなっていた。また底部の海抜高は南小口が61.51m、北小口が61.38mとなり、南から北に向かって緩やかに傾斜していた。このような状況から判断して、主体部内に埋葬された遺体の頭位は、南側の地形の高い部分になるであろう。



第23図　１号墳主体部平断面図（1/30）

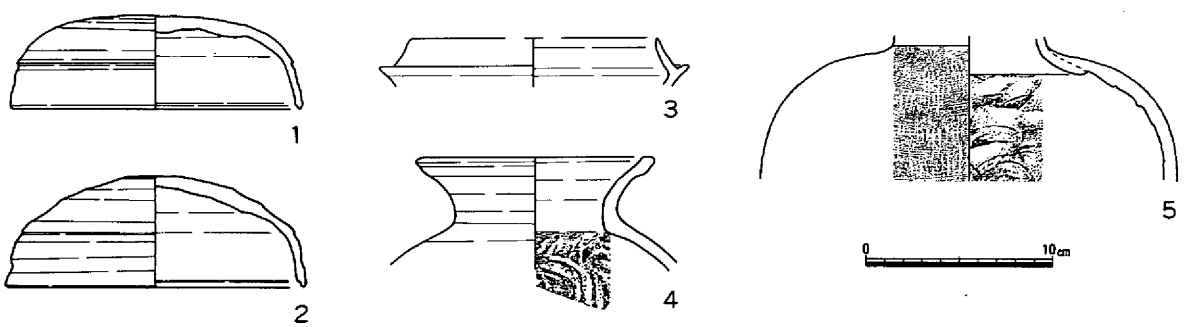
なおこの１号墳の主体部からは、須恵器の杯蓋２点、刀子２点、鉄鏃の破片が出土した。

(4)　遺物

須恵器（第24図、図版５－３）

主体部から出土した須恵器は、２点の杯蓋（１・２）で、南小口部分に近い位置に天井部を上にした状態で存在した。

この杯蓋の外面の天井部と体部の境には稜を有し、内面の口縁端部に段が認められる。内面全体と



第24図　１号墳出土土器（1/4）

外面の体部から口縁部にかけてヨコナデを行い、外面の天井部はヘラケズリを施している。２の内面の天井部には、仕上げナデ痕跡も認められる。ロクロの回転方向は、どちらも右である。この２個体の杯蓋の胎土中には、白色の比較的大きな砂粒を多く含み、焼成は２個体とも良好で、青灰色または灰白色を呈している。１の計測値は、口径15.2cm・器高5.0cmである。２は口径15.8cm・器高6.0cmを測り、内外面の器表面に凹凸が顕著に認められる。

３は、東側の墳丘斜面で採集した杯身の小破片である。推定口径13.0cmを測り、口縁部が斜め上方へ立ち上がる。焼成は良好で、全体に灰色を呈している。

４は、墳丘の南西端部で採集した壷の口縁部から胴部の破片である。口径は11.6cmを測り、斜め上方へ立ち上がった口縁端部は、わずかに肥厚している。外面と内面の口縁部はヨコナデを行い、内面の胴部には同心円のタタキ痕跡が認められる。また焼成は良好で、全体に自然釉が付着している。

５は、南東の墳丘表土で採集した壷の胴部破片である。外面はタタキ痕跡の上面にカキメを施し、内面には粗い同心円のタタキ痕跡が認められる。胎土中には砂粒が少なく、焼成は良好である。

鉄器（第25図、図版５－３）

主体部の中央からやや南側の杯蓋に近接した位置で、２点の完形品の刀子が存在し、北側部分に鉄鏃の破片が散在した状態で出土した。

１の刀子は、刀身部13.8cm・茎部5.4cmの全長19.2cmを測る完形品で、切先から関へ移行するにしたがって刀身の幅が厚くなっている。

２の刀子も、刀身部16.8cm・茎部7.4cmの全長24.2cmを測る完形品で、関に近接した茎部に木質が残存している。刀身部の幅は切先から関に向かって厚くなり、関の部分で2.0cmになっている。

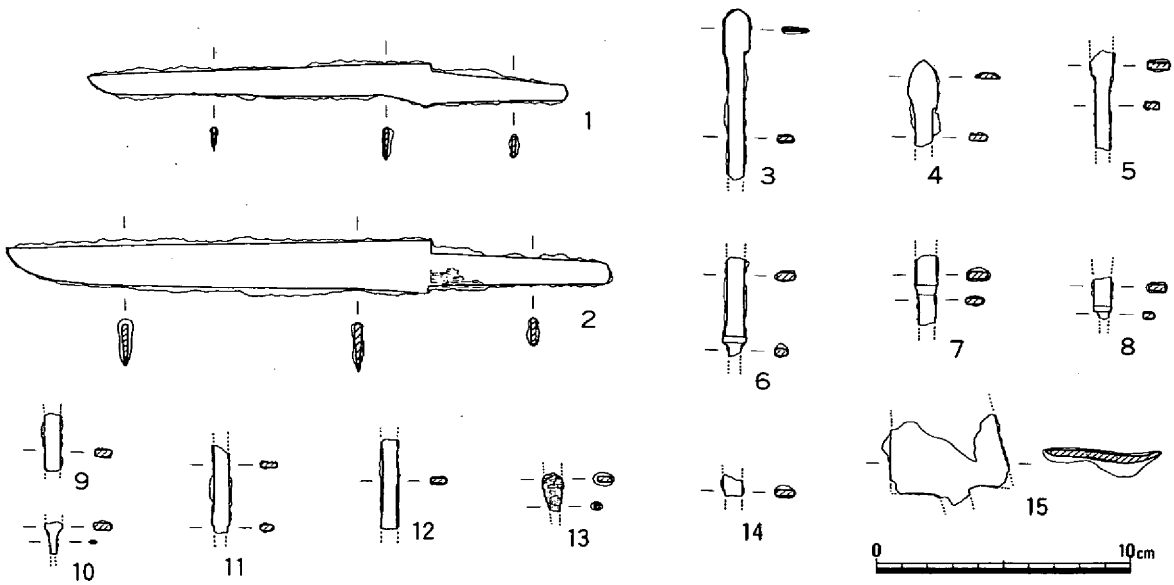
３～５は長頸柳葉式の鉄鏃で、関が左右非対称になっている特徴が認められる。

６～８・10・11も前述と同様の鉄鏃と推定され、関の部分の断片と考えられる。

９・12・14も同様の鉄鏃で、頸部の断片と推察できる。

13は茎部分の断片であるが、矢柄の木質が付着しているのが認められる。

15の鉄器は、平根長三角形式の鉄鏃と推定される。先端部分や茎の部分が著しく破損して全体が不明であるが、残存する重さは13.3ｇである。



第25図　１号墳主体部出土鉄器（1/3）

3．2号墳

(1)　調査前の状況（第26図）

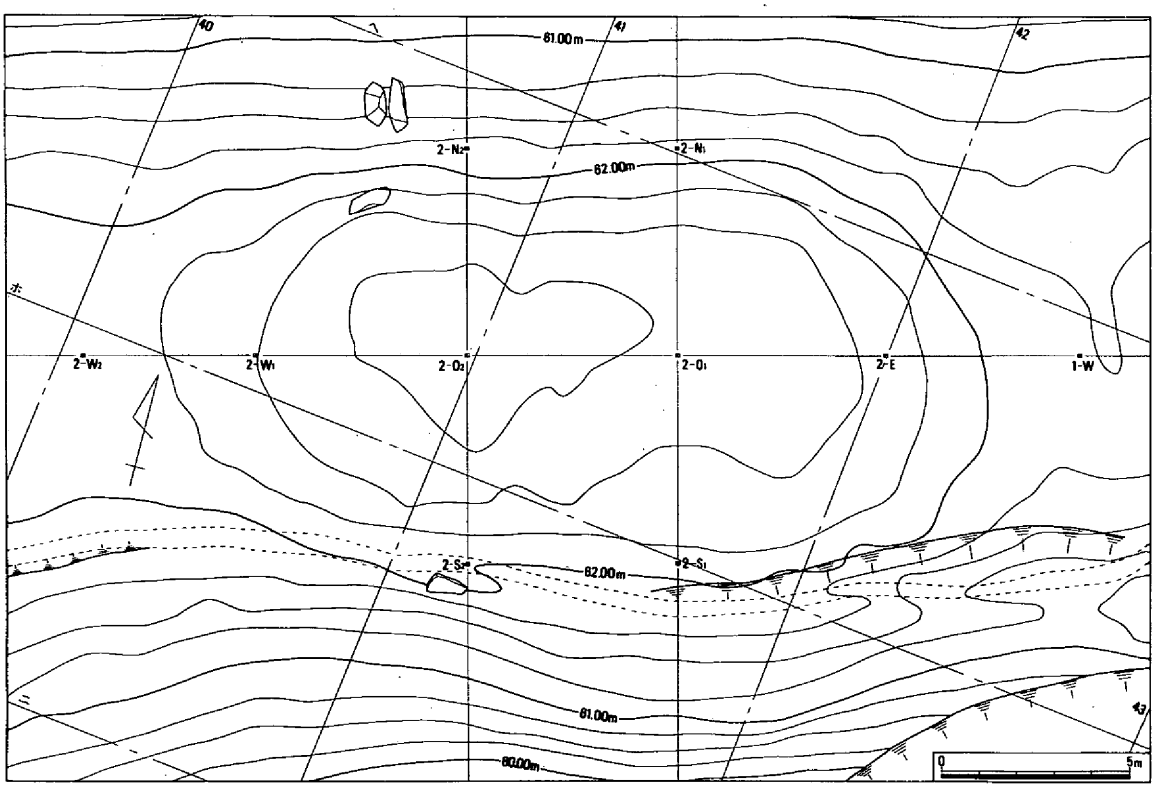
2号墳が所在した地点は、後世に造成された果樹園の中心部分に位置し、表土面が著しく削平されていて、本来の旧地形を把握するのが困難であった。丘陵の尾根上に長径約25m・短径約15mの隅丸長方形を呈する低い隆起部分がかすかに確認できたが、規模が極めて大きいのみならず円形や方形の高まりではなかったため、古墳と考えるにはためらいが感じられた。また1次調査のトレンチによる遺構の確認調査では、弥生時代の墳丘墓になる可能性も推定された。

丘陵上に位置する隆起部分の北側斜面には、長さ約1.50mを測る3個の石材が散乱していた。また南側斜面にも、長さ約1mを測る北側斜面に存在したのと同質の石材を検出した。調査後の所見によると、これらの石材は第1主体部の天井石の一部であったと考えられる。

(2)　墳丘（第27図、図版6－1）

2号墳の墳丘内には、竪穴式石室1基、箱式石棺2基、横穴式石室1基の合計4基にもおよぶ主体部が築造されており、墳丘の平面形は前方後円墳に似た極めて特異な形態を呈していた。この墳丘の規模は丘陵の尾根方向と同じ東西を示す全長約23mであるが、西側は約16mの同じ幅で隅丸長方形に張り出し、東側は18mの円形になっていた。

墳丘盛土の土層断面を観察するため、東西の主軸に沿うように調査終了段階まで畦を残して精査したが、竪穴式石室や箱式石棺の地点と方向が著しく異なる横穴式石室の中間部分に両者を区画する溝や層序の乱れはなく、同じ暗黄褐色の盛土を掘り窪めて各々の埋葬施設を築いていた。2号墳で検出した主体部に切り合い関係が認められたのは、第1主体部と第2主体部である。前者の竪穴式石室の掘り方内に後者の箱式石棺が存在したから、第1主体部が古く第2主体部が新しいと考えられた。

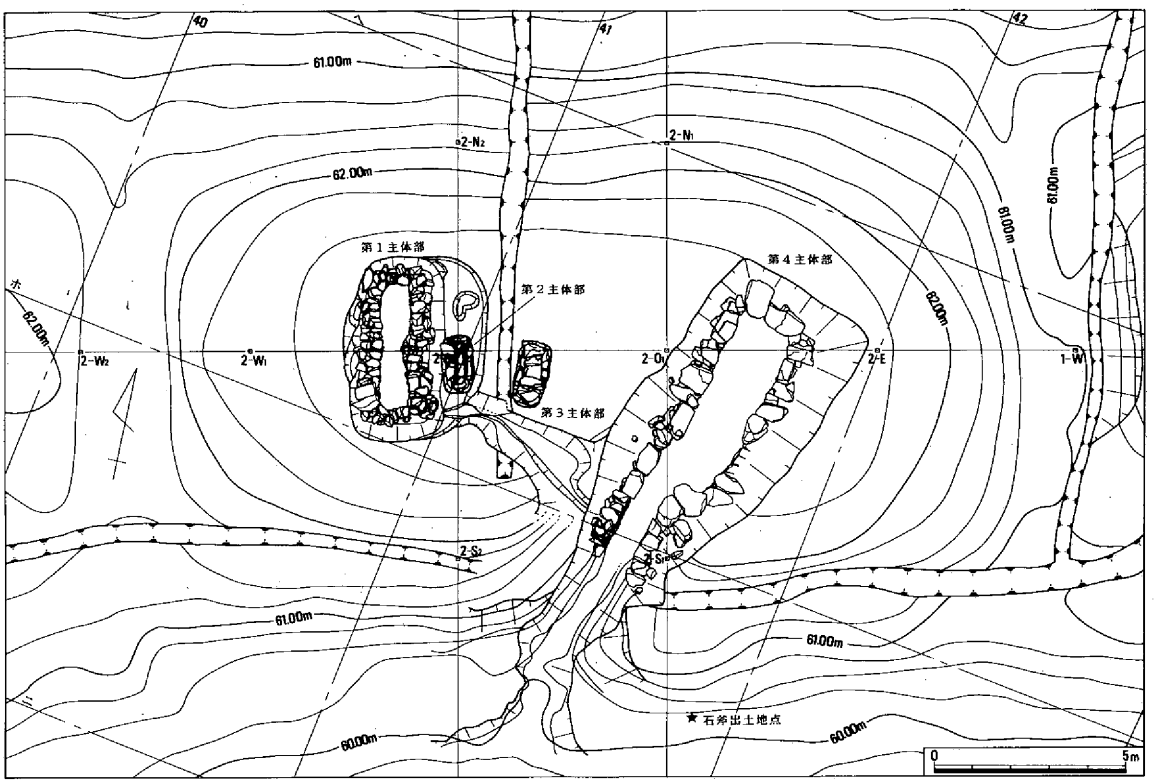


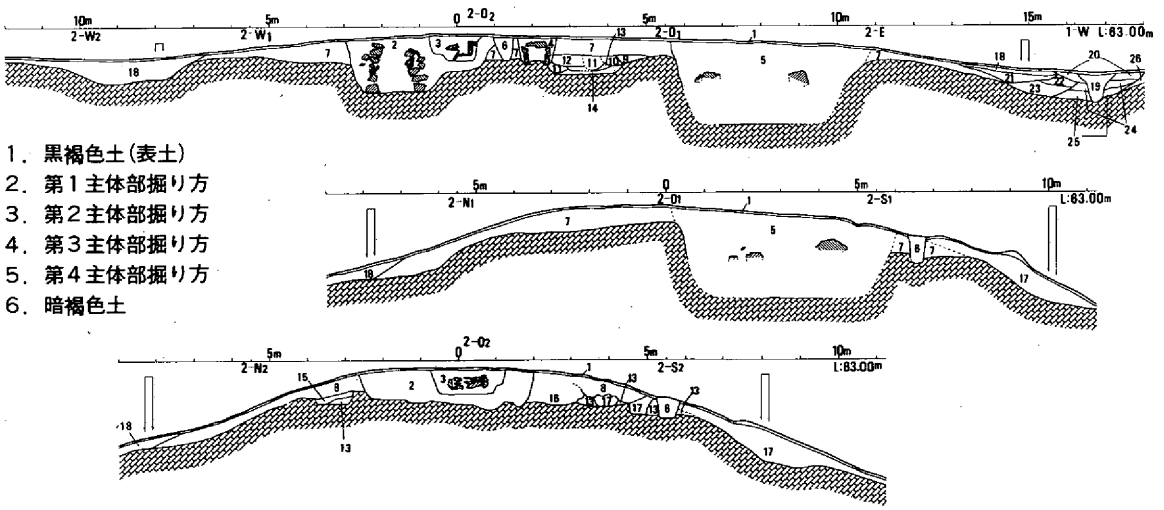
第26図　2号墳調査前墳丘地形測量図（1/200）

(3)　第１主体部

石室（第27～29図、図版７）

２号墳の第１主体部は、墳丘の最も西側に位置する竪穴式石室で、石室の主軸方向が後述する第２主体部や第３主体部の箱式石棺とほぼ平行するN－13°－Wを示していた。発掘調査でこの石室を検

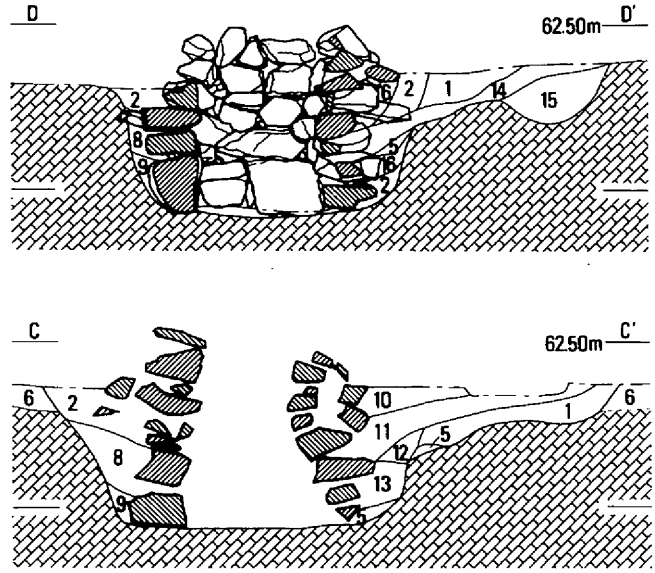


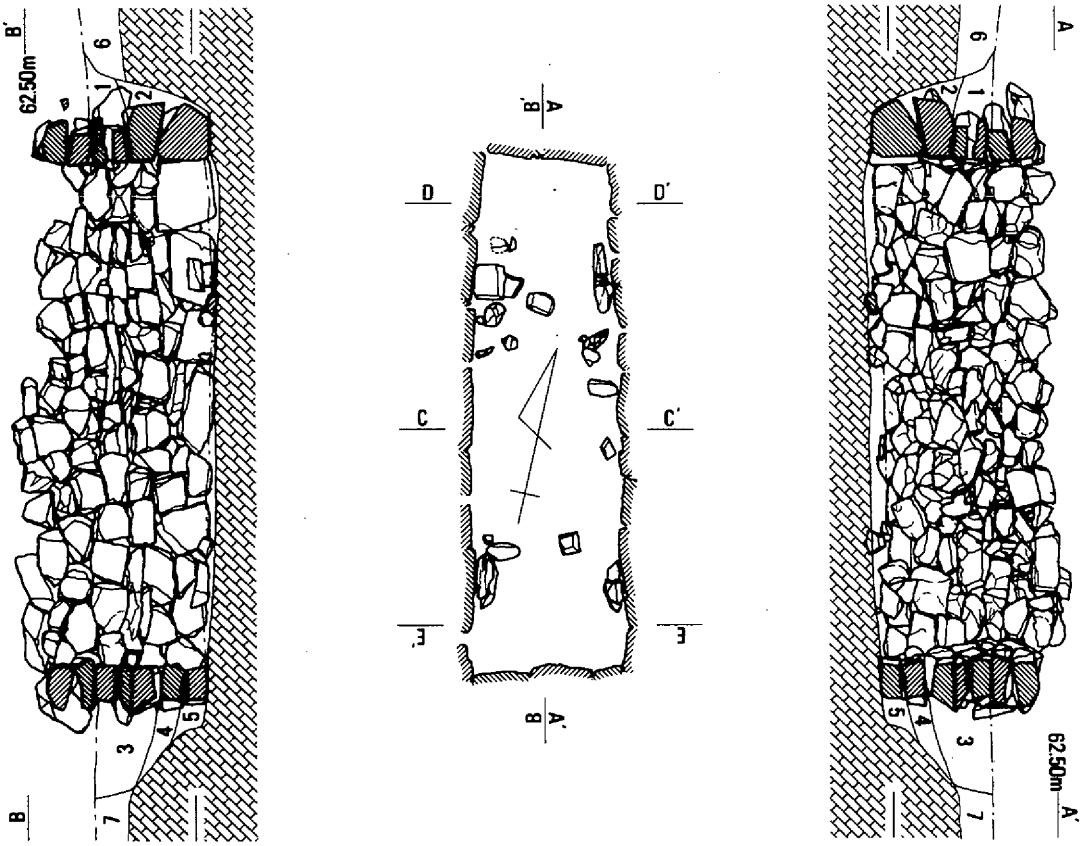


1．黒褐色土(表土)
2．第１主体部掘り方
3．第２主体部掘り方
4．第３主体部掘り方
5．第４主体部掘り方
6．暗褐色土
7．暗黄褐色土(盛土)
8．暗黄褐色土(赤褐色土混じり)(盛土)
9．暗赤褐色土
10．暗灰黄赤褐色砂質土(しまり弱い)
11．暗灰黄褐色砂質土(しまり弱い)
12．黄褐色土
13．灰黄褐色土
14．灰黄赤褐色土(しまり弱い)
15．暗灰褐色土
16．赤褐色土
(黄褐色土混じり，しまり弱い)
17．暗灰黄褐色土
18．褐色土
19．黒黄褐色土(しまり弱い)
20．暗黄赤褐色土(しまり弱い)
21．黄赤褐色土(黄色ブロック混じり)
22．暗黄褐色土
23．黄褐色土(褐色やや強い)
24．黄色土(しまり強い)
25．黄褐色土(同色ブロック混じり)
26．暗黄褐色土(１号墳盛土)

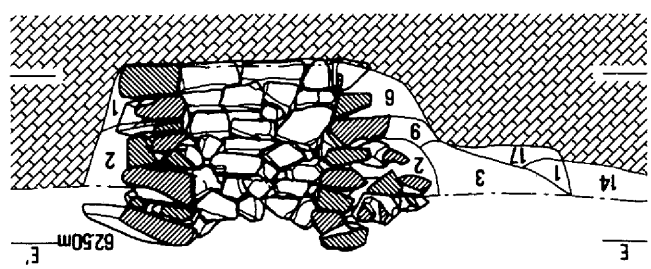
第27図　２号墳調査後墳丘地形測量図および墳丘断面図（1/200）

1．赤褐色土（黄褐色土混じり）
2．暗灰黄褐色土
3．暗黄褐色土（赤褐色土混じり）
4．暗褐色土
5．赤褐色粘質土
6．暗黄褐色土（盛土）
7．暗赤褐色土
（暗黄褐色土混じり）（盛土）
8．暗赤褐色土
9．暗黄褐色粘質土
10．黄褐色土
11．黄褐色土（赤褐色土混じり）





12．黄褐色砂質土
13．赤褐色砂質土
14．灰黄褐色土
15．灰褐色土（赤褐色土混じり）
16．赤褐色土（灰褐色土混じり）
17．赤褐色土



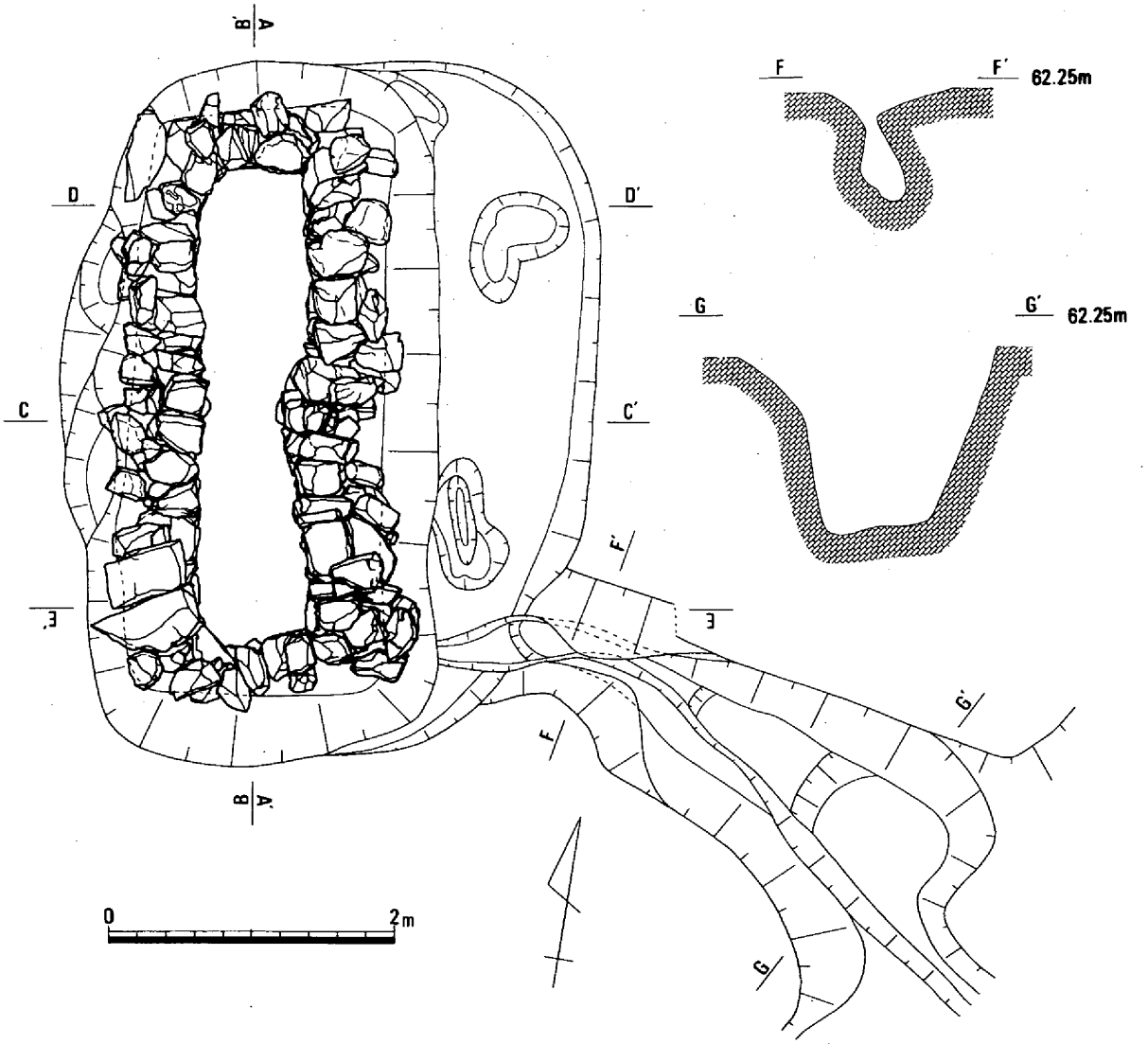
0　2m

第28図　２号墳第１主体部平断面図（1/50）

出した段階に、天井石はすでに１枚も残存していなかった。墳丘の北側斜面や南側斜面に散在した長さ1.00～1.50ｍを測る比較的大きな４個の石材が、この第１主体部の天井石の一部であった可能性が強い。この主体部が存在した地点は後世に果樹園が造成されていたため、墳丘の盛土が著しく削平されて流失したことが考えられ、表土面直下15～20cmの浅い部分から石室の石材が並んで確認された。東側壁の中央付近は、石室の内側に向かって壁面が張り出していた。

石室の壁面は、両側壁および両小口ともすべて石材を小口積にし、部分的に場所が限定されるけれども、赤色顔料を塗布した痕跡がかすかに肉眼で確認できた。西側壁の中央から北側へ寄った基底部は、やや大きくて安定感のある石材を使っていた。壁面の裏側となる石室の掘り方内に石はほとんどなく、性質の異なる土砂を版築状に積み上げていた。床面には棺台として用いたと考えられる石が存在するものの、地山面を掘り窪めただけで砂利や板石などは認められなかった。東西両側壁とも緩やかに内傾して立ち上がる「持ち送り」の形態を示し、石室内の断面形は台形を呈していた。

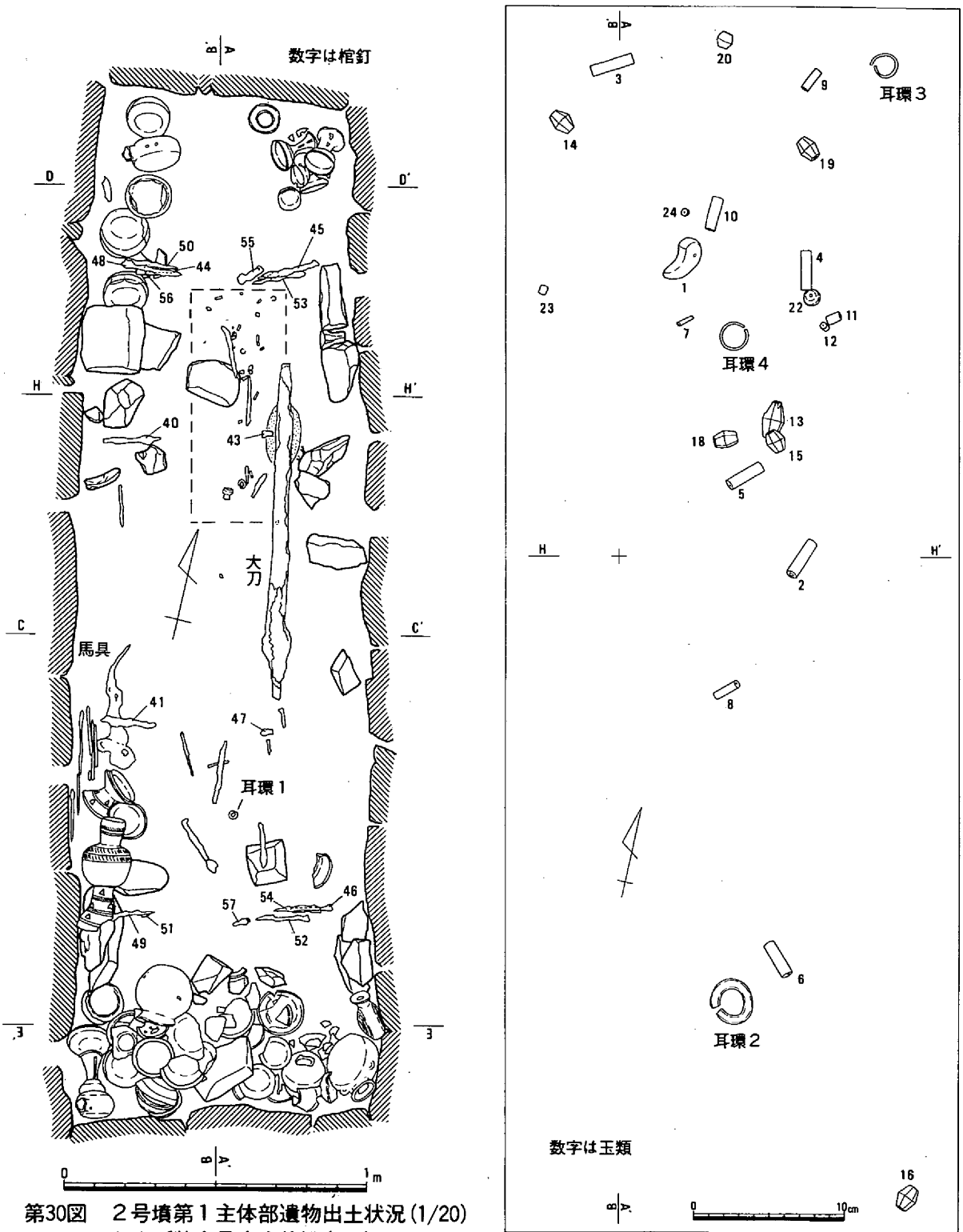
２号墳の第１主体部である竪穴式石室の床面での内法は、長径335cm・短径80～100cmを測り、北側より南側の小口幅が20cmも広くなっていた。石室の高さは天井石がなかったので不明であるが、側壁に残存する最上位の石材から推定して約130cmになるであろう。



第29図　２号墳第１主体部平断面図および付属溝平断面図（1/50）

付属溝（第29図）

この付属溝は、掘り方の南東隅から地形の低い墳端に向かって斜めの方向に掘削されていた。断面は袋状または「U」字形を呈し、先端部分が第４主体部の横穴式石室に切られていた。この溝は、起点が石室床面ではなく、２段掘りになった石室掘り方の上位であるから、排水溝とは考えられず、その機能や性格は不明である。



第30図　２号墳第１主体部遺物出土状況（1/20）
および装身具出土状況（1/4）

遺物出土状況（第30図、図版７）

第１主体部の竪穴式石室は、天井石が１枚も残存しなかったが、石室内は盗掘や撹乱を受けた形跡はなく、埋葬当時の様相を良好な状態で留めていた。

発掘調査の作業を行っていた段階に、南側小口部分から出土した須恵器の杯身と杯蓋に、時代が極端に異なるのが明らかなものが共伴する現象に遭遇して理解に苦しんだが、作業が進展するにしたがって２対の形態が違った耳環４点を検出し、この第１主体部は竪穴式石室であるにもかかわらず追葬が行われていたことが判明した。木棺に入れられた初葬の遺体の頭位は、耳環や玉類など装身具の出土状況から北側になるであろう。追葬の遺体はどのような状態で置かれていたのか不明であるが、耳環の片方や副葬された須恵器の位置から、頭位は南側と考える。

また石室の中央部分では、木棺に使われていたと考える釘が、元の位置を保持する良好な状態で確認されたため、木棺に使われた板材の組み合せを復元することができた（第37図）。その結果、埋葬に用いた木棺には蓋を使わなかったか、蓋があっても釘止めはしていないと推定された。

石室の主軸と同じ方向で切先を北側にした大刀は、床面よりかなり上位で出土したから、木棺の上に置かれていた可能性が強い。さらに須恵器の脚付長頸壷（48）は、前述の大刀よりさらに約20cmも上方から横倒しの状態で発見されたが、この壷の蓋になる子持蓋（47）は石室中央部の床面から出土しているから、追葬の時点に場所を移動したのであろう。

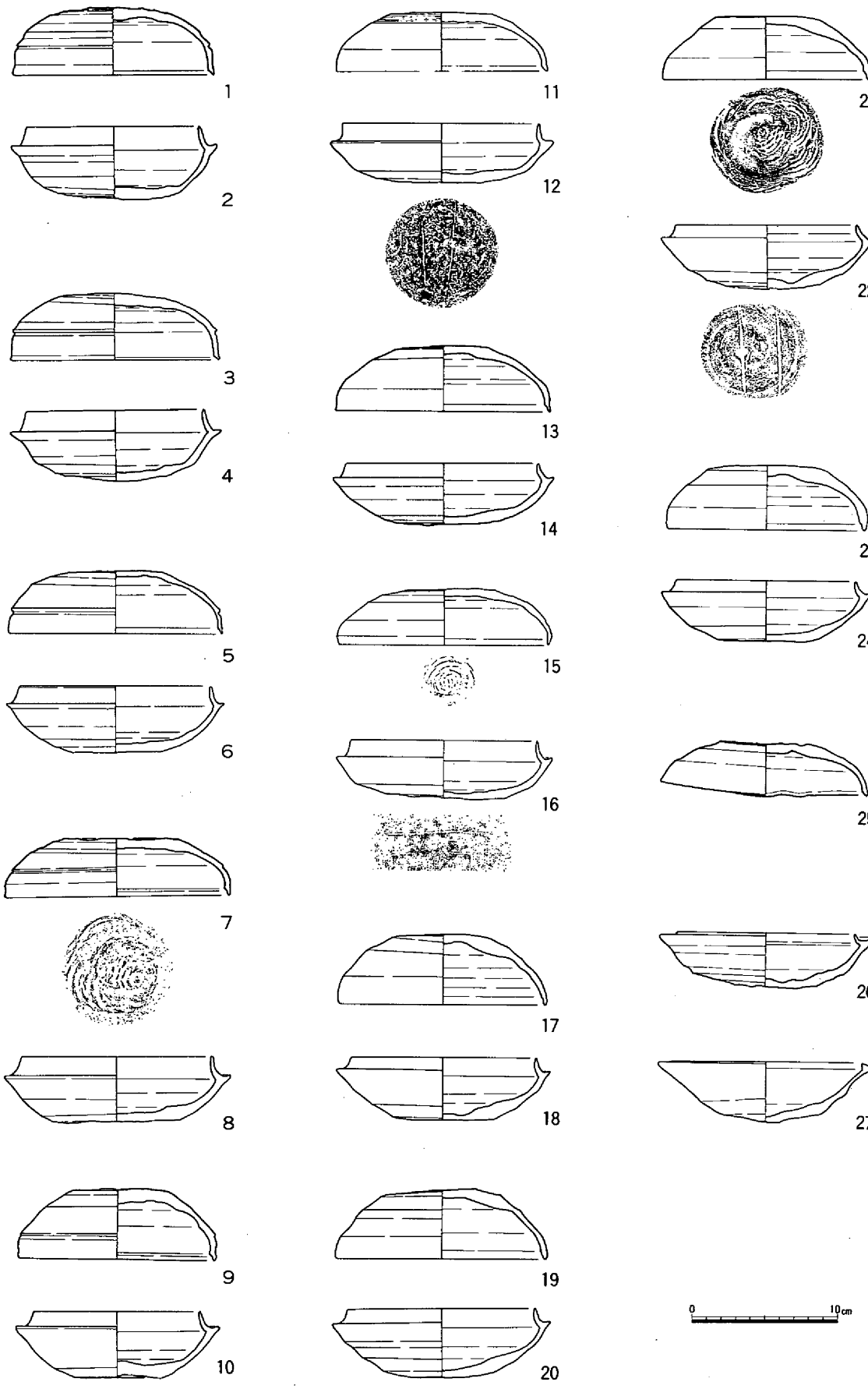
なおこの第１主体部では、須恵器の土器類は北側と南側の小口部分に主として副葬し、一部が西側壁の北寄りに存在した。木棺に使われた釘を除く鉄器は、馬具と鉄鏃の一部が西側壁の壁面に接して出土し、残る鉄鏃や曲刀子は装身具と一緒に中央付近で確認された。特に鉄鏃の多くは、大刀の刀身部下位から集中して検出された。装身具は埋葬された遺体の位置によって出土地点が決定されるが、ほとんど中央付近に存在していたものの、対になる太い耳環の２点だけは離れて発見された。

遺物

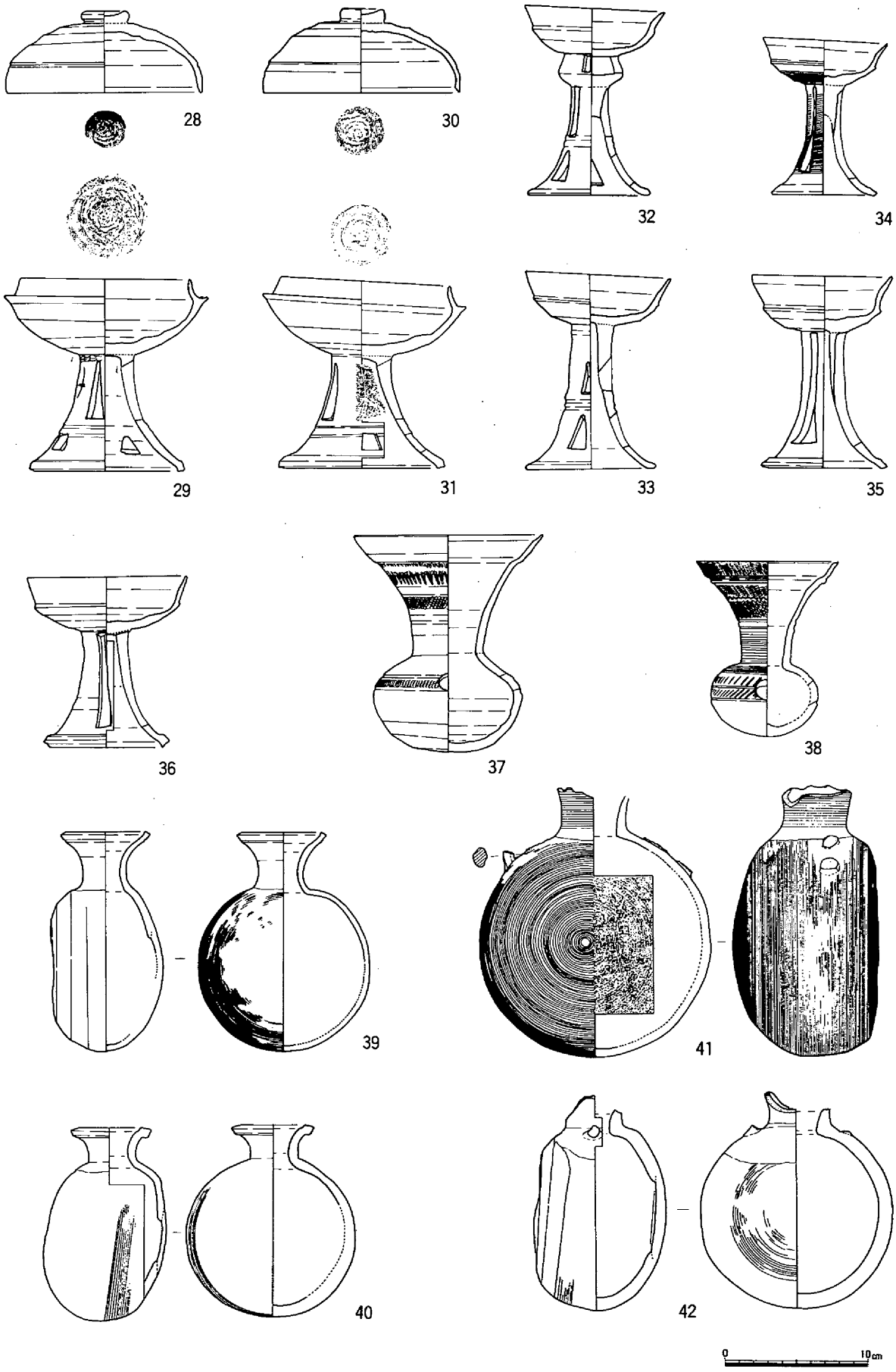
須恵器（第31～33図、図版８～10、表－２）

杯身・杯蓋　２号墳の第１主体部は、竪穴式石室であるにもかかわらず追葬が行われているのを確認したが、初葬に伴って副葬された杯身と杯蓋はそれぞれ12点の合計24点になり、いずれもセット関係が認められた。杯身は口径11.2～15.4cm・器高4.1～5.0cmで、口縁端部は丸く仕上げている。外面の底部はヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施している。ロクロの回転方向は時計と同じ右が多く、外面底部にヘラ記号を有するもの（12・16・22）も存在する。杯蓋は口径13.0～15.4cm・器高3.9～4.8cmで、外面の天井部と体部の境に稜を有するものや、内面口縁端部に段が認められるものが多い。外面の天井部はヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施している。ロクロの回転方向は杯身と同様に右が多く、内面の天井部に同心円のタタキ痕跡が残存するもの（７・15・21）も存在する。追葬に伴う杯身（26・27）は口径12.1～13.2cm・器高4.1cmで、口縁部の立ち上がりが短く、外面の底部はヘラ切り未調整である。また杯蓋（25）は口径11.0～14.0cm・器高4.2cmで、全体の歪みが大きく、外面の天井部はヘラ切り未調整である。なおこの竪穴式石室から出土した１と２のセットは、口径が小さいにもかかわらず器高が相対的に高く、個々の部位の形態や調整手法にも古い様相が看取できるから、おそらく斎富古墳群で出土した杯身と杯蓋では、最も古い時期に作られた土器になるであろう。

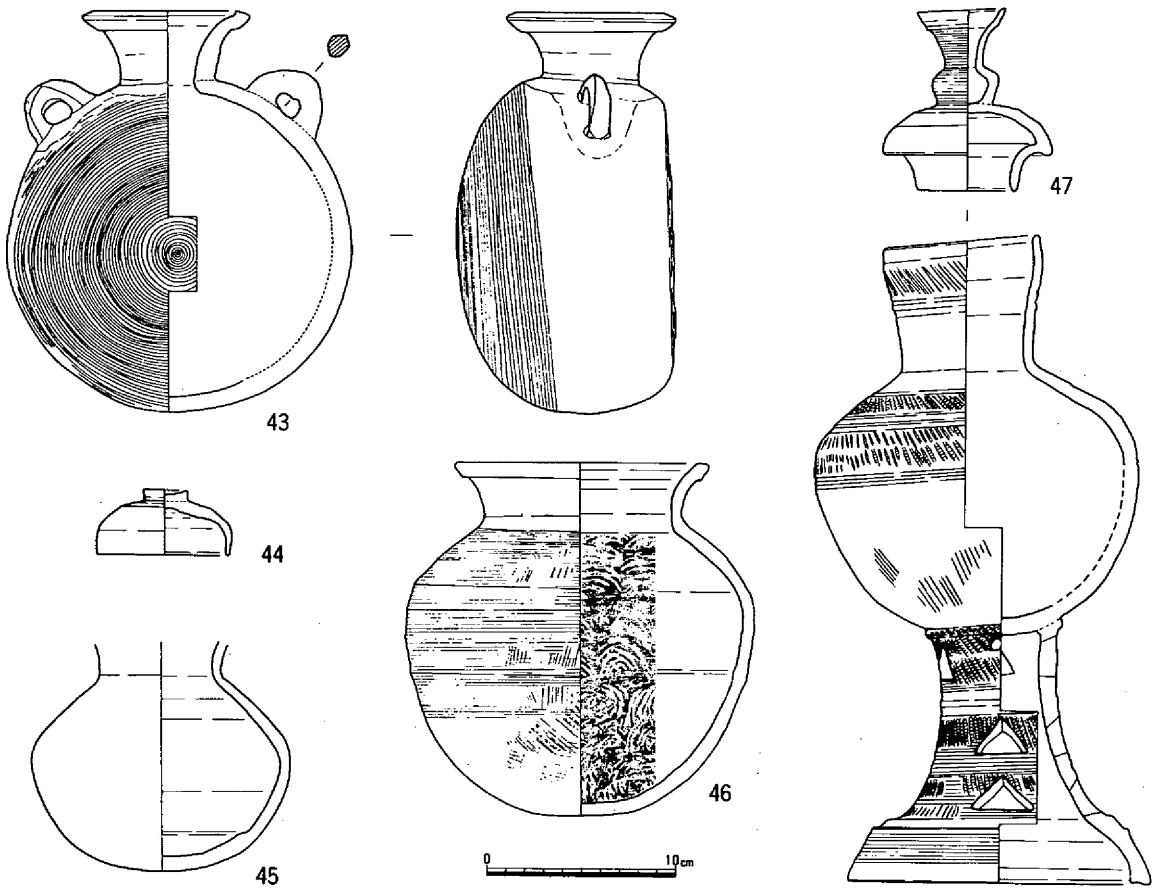
高杯　２号墳の第１主体部から出土した高杯には、各種の器形が認められる。蓋（28・30）とセット



第31図　２号墳第１主体部出土土器（１）(1/4)



第32図　２号墳第１主体部出土土器（２）(1/4)



第33図　２号墳第１主体部出土土器（３）(1/4)

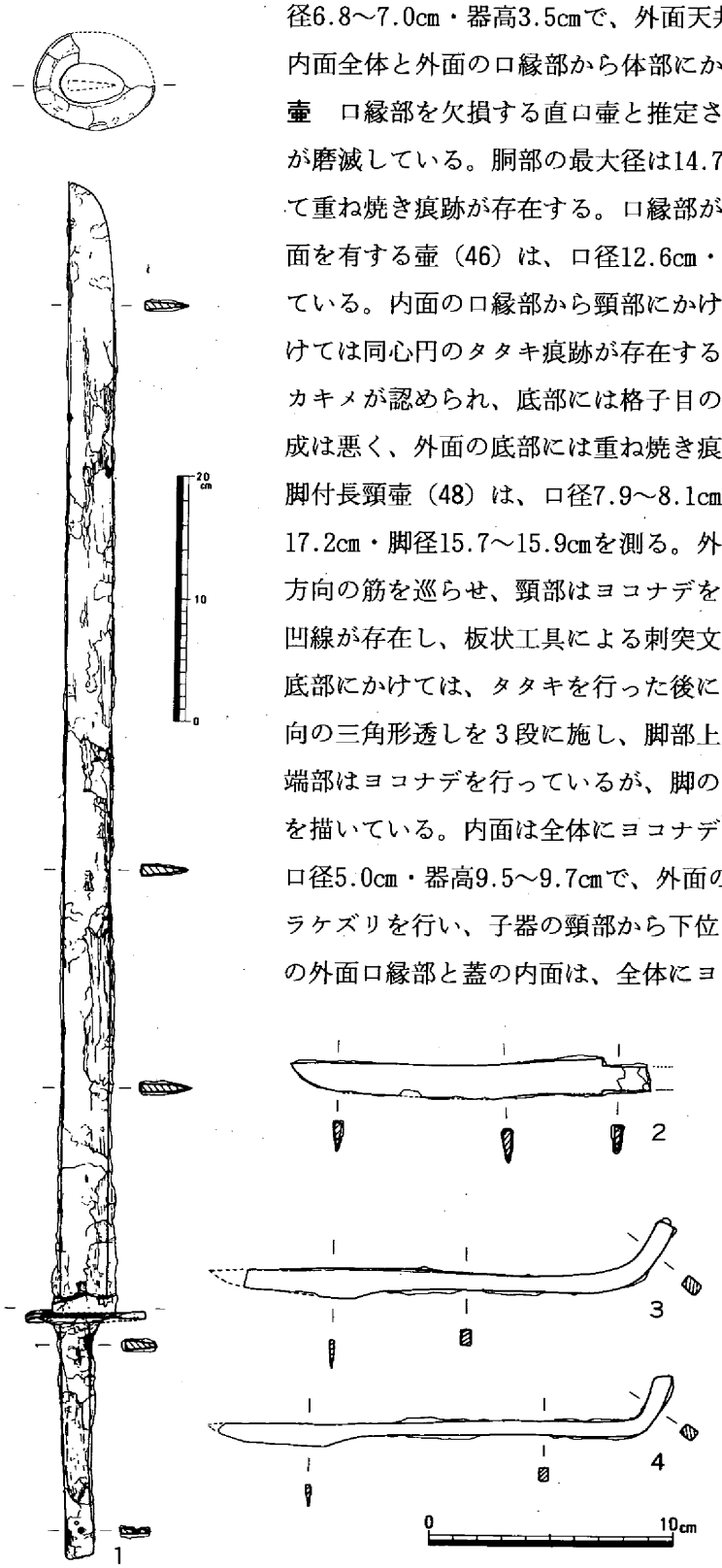
になった有蓋高杯（29・31）は、蓋の内面天井部と杯部の内面底部にそれぞれ同心円のタタキ痕跡が残存する。蓋の外面天井部と体部の境に稜を有し、内面口縁端部には段が認められる。脚部の透しは３方向の２段に存在し、上段は三角形、下段は台形を呈している。また２点の高杯とも、脚部の上位にヘラ記号が認められる。32は杯部と脚部の間に３方向の長方形透しを有する算盤玉に似た接続部が認められる奇妙な形をした無蓋長脚高杯で、内外面とも全体に黄色または黄灰色の濃い自然釉が付着している。脚部は３方向の２段透しを施し、上段は長方形、下段は三角形を呈している。33は３方向の２段透しを有する無蓋長脚高杯で、上段および下段とも透しの形は三角形である。同じ無蓋長脚高杯でも、３方向の１段透しのもの（34～36）がある。透しの形は上下に細長い三角形（34・35）と長方形（36）が認められ、外面杯部の底部から脚部にかけてカキメを施しているもの（34）もある。

甕　全体の器形が大きいもの（37）と小さいもの（38）がある。前者は口径13.2cm・器高15.2cm・胴部径10.5cmで、頸部上半にクシ描波状文や板状工具による刺突文が施されている。胴部の上位には２条の浅い凹線が存在し、その間に刺突文が認められる。後者は口径9.9cm・器高12.3cm・胴部径7.5cmで、外面の口縁部から頸部上半にかけてクシ描波状文を施し、頸部下半にはカキメが認められる。また胴部の中位には３条の凹線が存在し、板状工具による刺突文が２段に巡らされている。

提瓶　提瓶は５点出土した。39と40は耳のない小型品である。口縁部から頸部にかけてヨコナデを施し、外面の胴部にはカキメがかすかに残存する。41と43は環状の耳を有し、外面全体に自然釉が付着している。外面の胴部にはカキメが認められ、頸部はカキメが残存するもの（41）とヨコナデを行っているもの（43）とがある。42は耳を欠損しているが、おそらく鈎形であったと推定する。胴部の正

面にはカキメがかすかに認められ、背面は全体にヘラケズリを行っている。

蓋　44の蓋は著しく小型品である。竪穴式石室の北側小口部分で東側壁に近い位置から、床面に接した状態で口縁部を上にして出土した。天井部につまみを有する小型品であるから、子持器台の子器に伴う蓋を考えたが、全体の法量が小さく、ミニチュア品になるのかもしれない。この蓋の計測値は口径6.8～7.0cm・器高3.5cmで、外面天井部のつまみ周辺はヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてはヨコナデを施している。



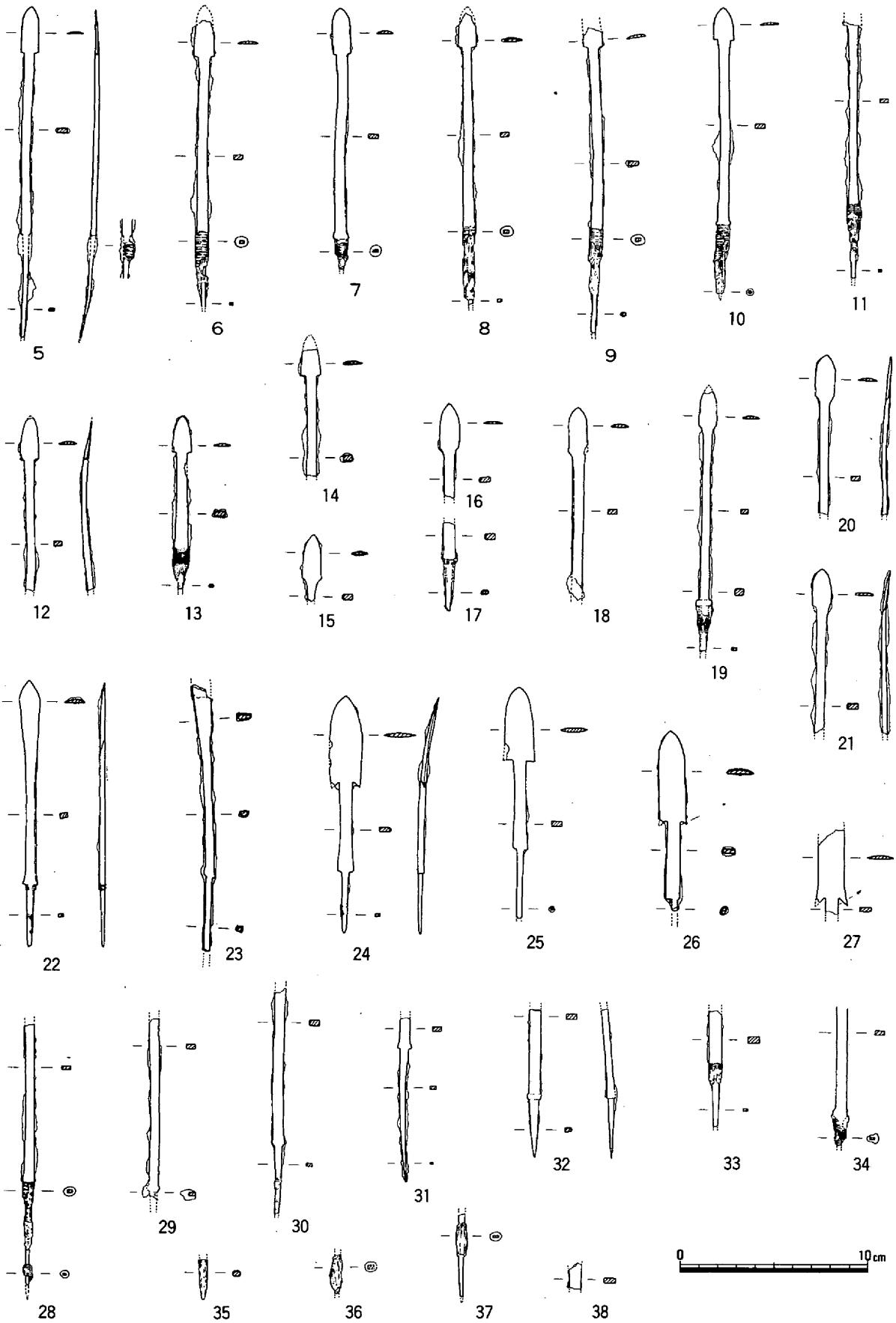
第34図　２号墳第１主体部出土大刀・刀子（1：1/6，２～４：1/3）

壷　口縁部を欠損する直口壷と推定される土器（45）は、焼成が悪く器表面が磨滅している。胴部の最大径は14.7cmで、外面の胴部下半から底部にかけて重ね焼き痕跡が存在する。口縁部が斜め上方へ短く外反して端部の外側に面を有する壷（46）は、口径12.6cm・器高18.8cm・胴部最大径18.4cmになっている。内面の口縁部から頸部にかけてヨコナデを行い、胴部から底部にかけては同心円のタタキ痕跡が存在する。外面の胴部にはタタキ痕跡の上面にカキメが認められ、底部には格子目のタタキ痕跡が顕著に残る。この壷の焼成は悪く、外面の底部には重ね焼き痕跡が認められる。子持蓋（47）を伴う脚付長頸壷（48）は、口径7.9～8.1cm・器高33.9～34.7cm・胴部の最大径17.2cm・脚径15.7～15.9cmを測る。外面の口縁部には鋭利な工具による斜め方向の筋を巡らせ、頸部はヨコナデを行っている。胴部下半には５条の浅い凹線が存在し、板状工具による刺突文が３段に施されている。胴部下半から底部にかけては、タタキを行った後にヨコナデを加えている。脚部には３方向の三角形透しを３段に施し、脚部上端に３方向の小円孔も認められる。脚端部はヨコナデを行っているが、脚の上位と中位にはカキメの上面に刺突文を描いている。内面は全体にヨコナデを施している。なお子持蓋の計測値は口径5.0cm・器高9.5～9.7cmで、外面の天井部はロクロの回転方向が右のヘラケズリを行い、子器の頸部から下位の外面にはカキメが認められる。子器の外面口縁部と蓋の内面は、全体にヨコナデを施している。

鉄器（第34～36・38図、図版11）

大刀　全長112.2cm・刀身長92.2cm・茎長20.0cmである。目釘穴は１か所認められ、刀身と茎には鞘および柄の木質が付着している。鍔は長径10.0cm・短径約8.0cmを測り、倒卵形を呈している。刀身の断面形は二等辺三角形で、平造になっている。

刀子　２の刀子は茎部を欠損しているが、刀身部は12.9cmを測る。切先から関へ移行するにしたがって刀身の幅が厚くなり、関に近接



第35図　２号墳第１主体部出土鉄鏃（1/3）

した茎部に木質が残存している。３と４は曲刀子である。茎の先端は、わずかに肥厚して刃部とは反対側に曲げられている。この両曲刀子とも、切先の先端を欠損している。３の残存長17.7cm・刀身部最大幅1.2cmである。４の残存長18.6cm・刀身部最大幅0.9cmである。

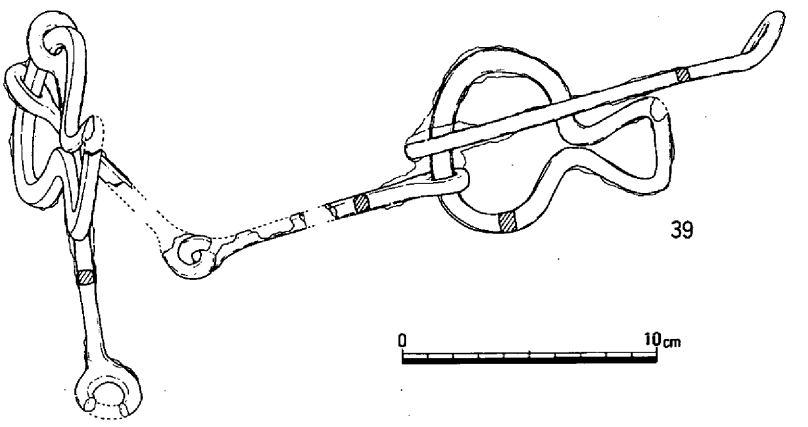
鉄鏃　すべて尖根系の鉄鏃である。５～12は長頸柳葉式鉄鏃、22と23も長頸式鉄鏃だが、鏃身関が明確でない。24～27は頸部が短い尖根系鉄鏃で、鏃身部の形態は腸抉柳葉形を呈する。各々の鉄鏃の茎には、矢柄の木質と樹皮を巻いた痕跡が認められるものも多い。

馬具　瓢形の環状鏡板をもつ轡である。図示した右の鏡板は高さ9.6cm・最大幅7.4cm、左の鏡板は高さ10.0cm・最大幅7.4cmを測る。引手の長さは図示した右が15.8cm、左が16.4cmである。引手の先端は「く」字状に曲げられ、引手壺を形成している。中間部分に位置する銜は、中央付近を欠損して長さが不明である。銜と引手は別々に鏡板に連結している。

棺釘　いずれも頭部を逆Ｌ字状に折り曲げている。長さが最大のもので21.6cm、最小のもので15.2cmである。木目が付着している状態を観察すると、全体に縦方向の木目、全体に横方向の木目、上半部が横方向で下半部が縦方向の木目がある。第１主体部の棺釘の出土状況から使われていた木棺を推定すると、第37図のようになるかもしくは第37図の木棺に釘止めしない蓋が伴うかもしれない。

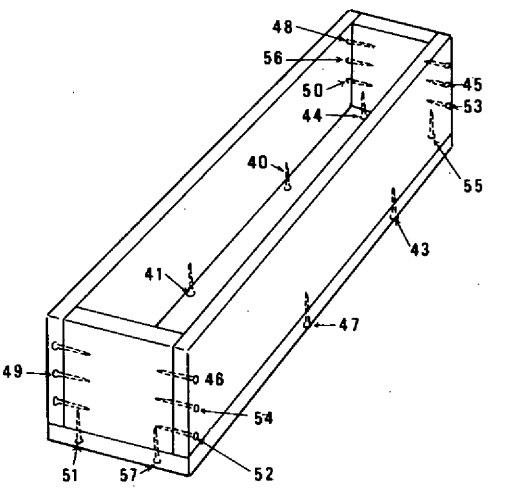
装身具（第39図、図版12）

玉類　２号墳の第１主体部から出土した玉類の種類は、勾玉１点、管玉11点、切子玉７点、算盤玉２点、丸玉１点、小玉104点である。勾玉（１）は淡黄色の硬玉を使い、長さ31.5mm・幅19.9mmである。管玉（２～12）の材質は、緑または濃緑色の碧玉、薄緑色の緑色凝灰岩、薄緑色のガラスがあり、円孔はいずれも片面穿孔である。７点の切子玉（13～19）はすべて水晶製で、６面がほとんどであるが７面のもの（17）も存在する。算盤玉（20・21）の２点と丸玉（22）の１点は、前述した切子玉と同様に材質が水晶である。小玉（23～126）はいずれもガラス製である。青または緑色を呈するものが多いが、紺または濃紺色のものも認められる。

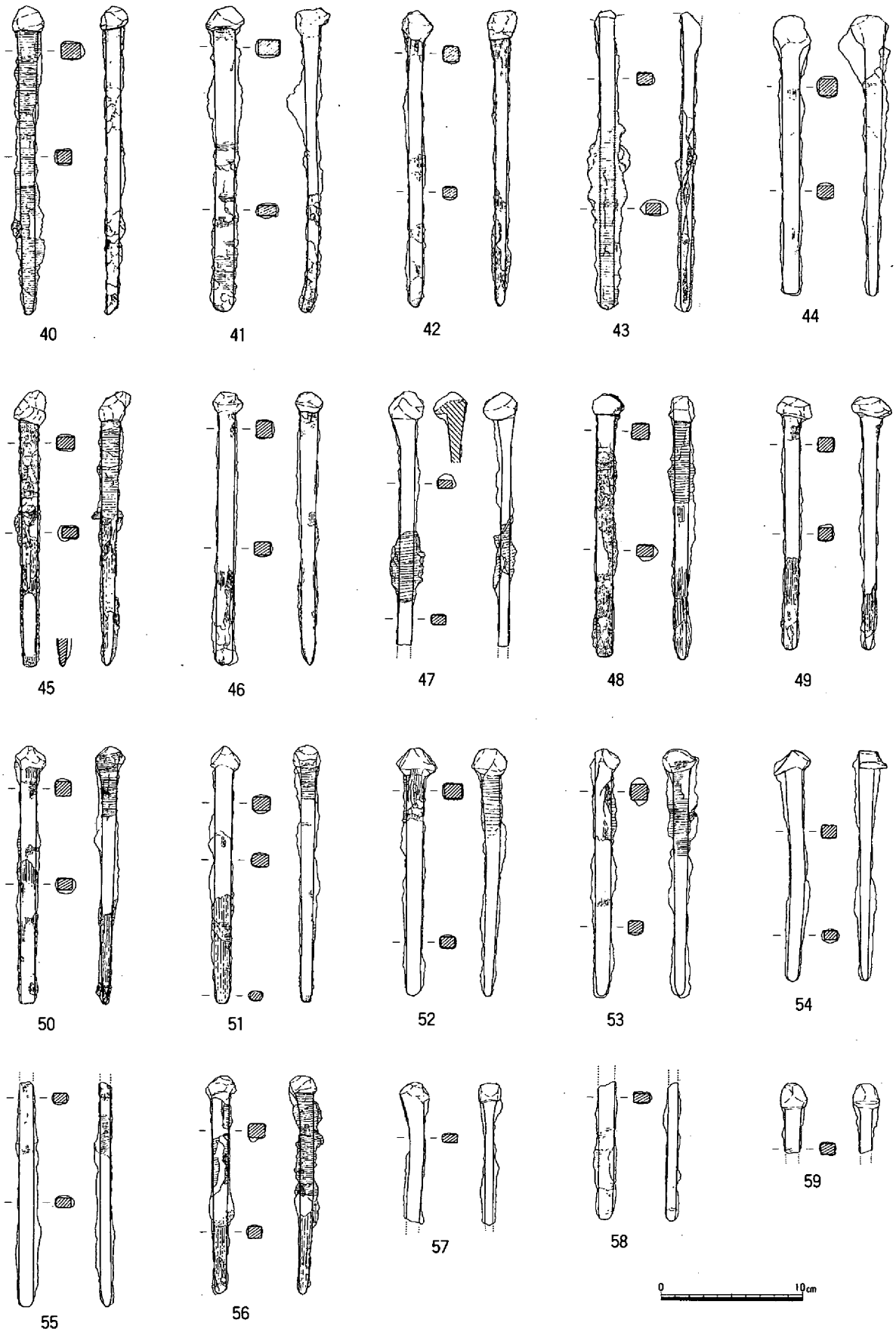


第36図　２号墳第１主体部出土馬具（1/3）

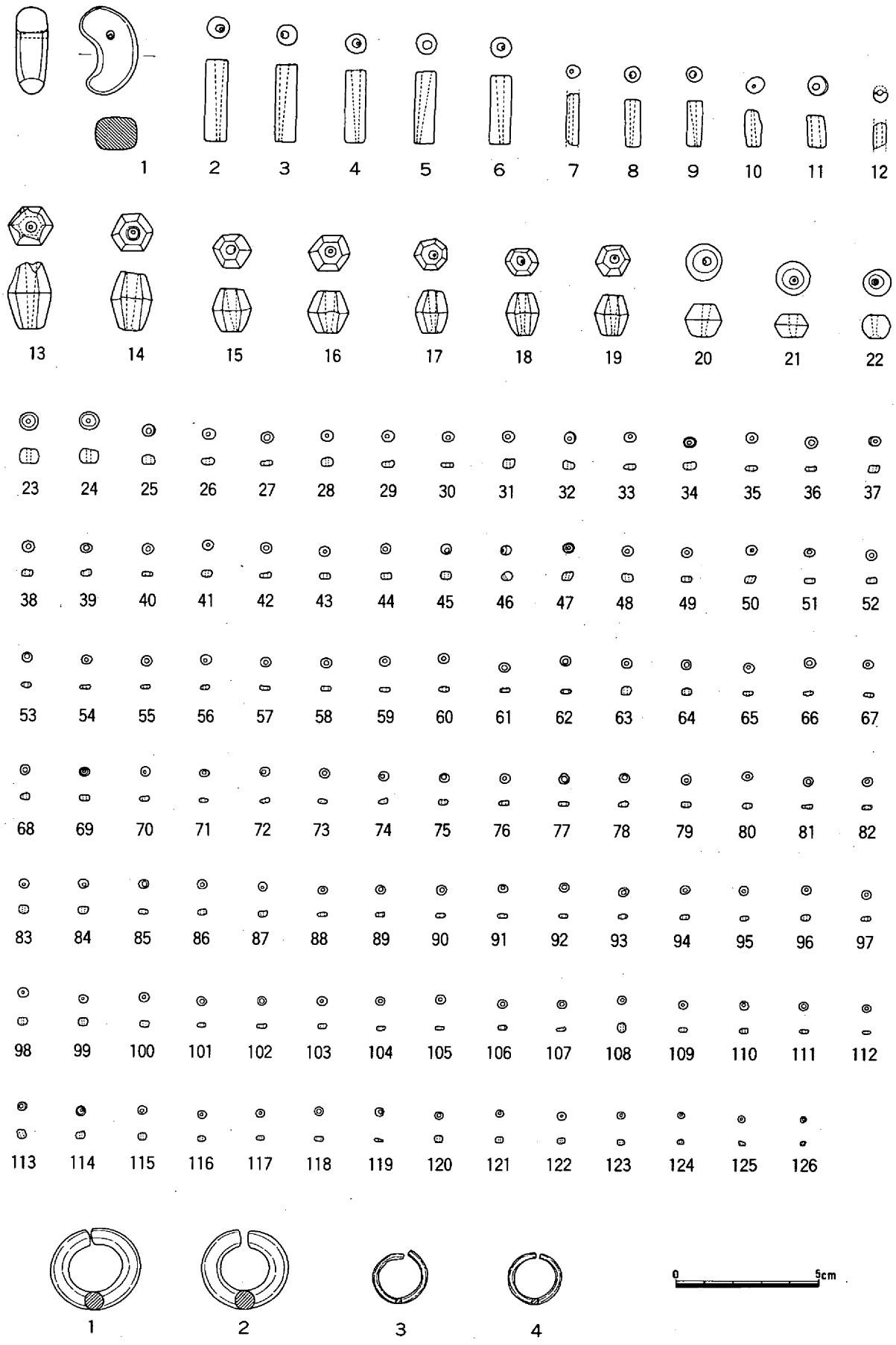
耳環　この第１主体部は竪穴式石室であるにもかかわらず追葬が認められ、対になる２組の耳環が４点出土した。これらはいずれも銀製で、３と４が初葬、１と２が追葬に伴うものである。３を計測した最大値は、外径1.97cm・断面径0.23cmである。４は外径1.88cm・断面径0.25cmである。１は外径3.19cm・断面径0.68cmである。２は外径3.11cm・断面径0.71cmである。



第37図　２号墳第１主体部木棺想像復元図
〈数字は棺釘の番号で第30図と対応〉



第38図　２号墳第１主体部出土棺釘（1/4）



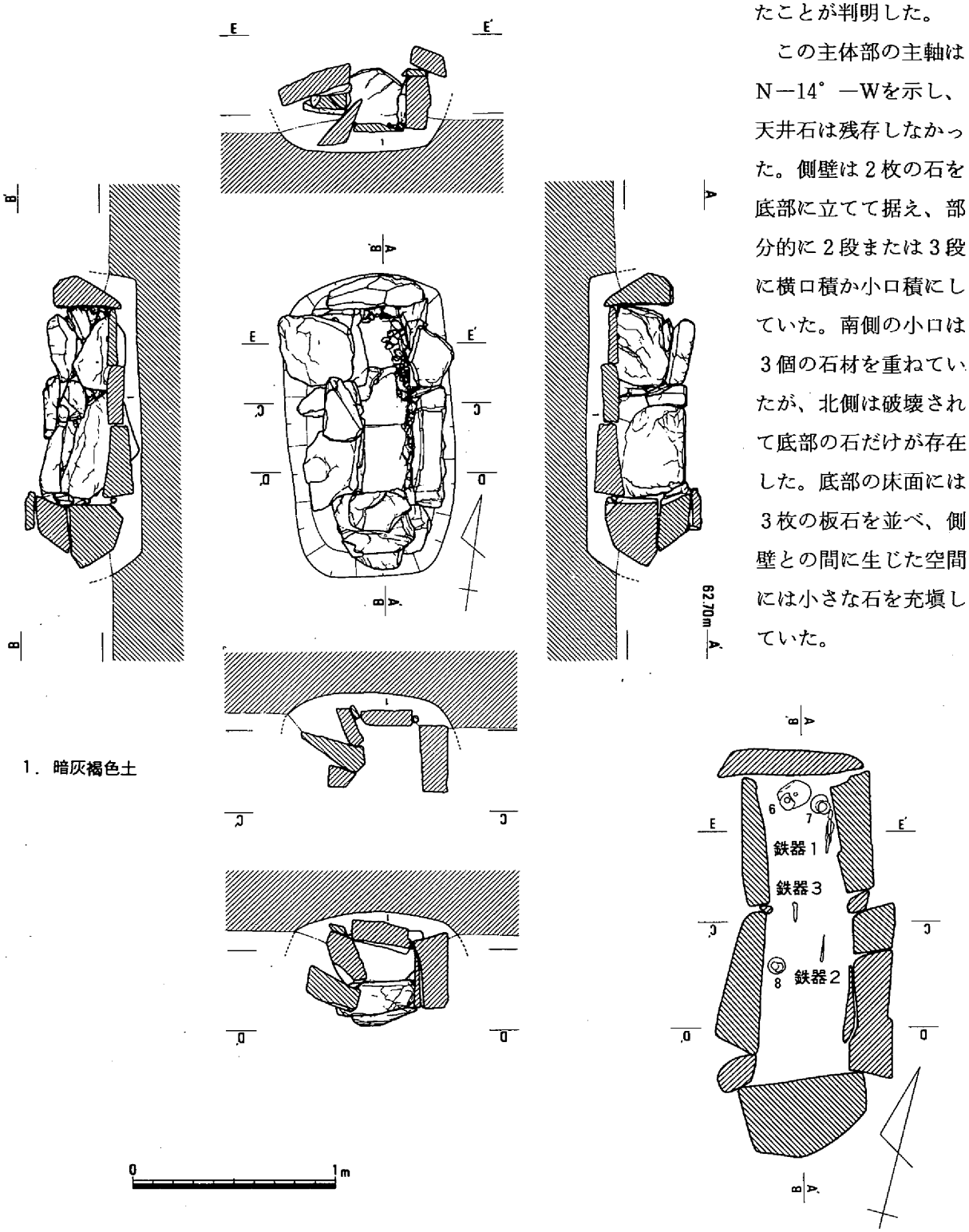
第39図　２号墳第１主体部出土装身具（1/2）

(4)　第２主体部

石棺（第40図、図版３－１）

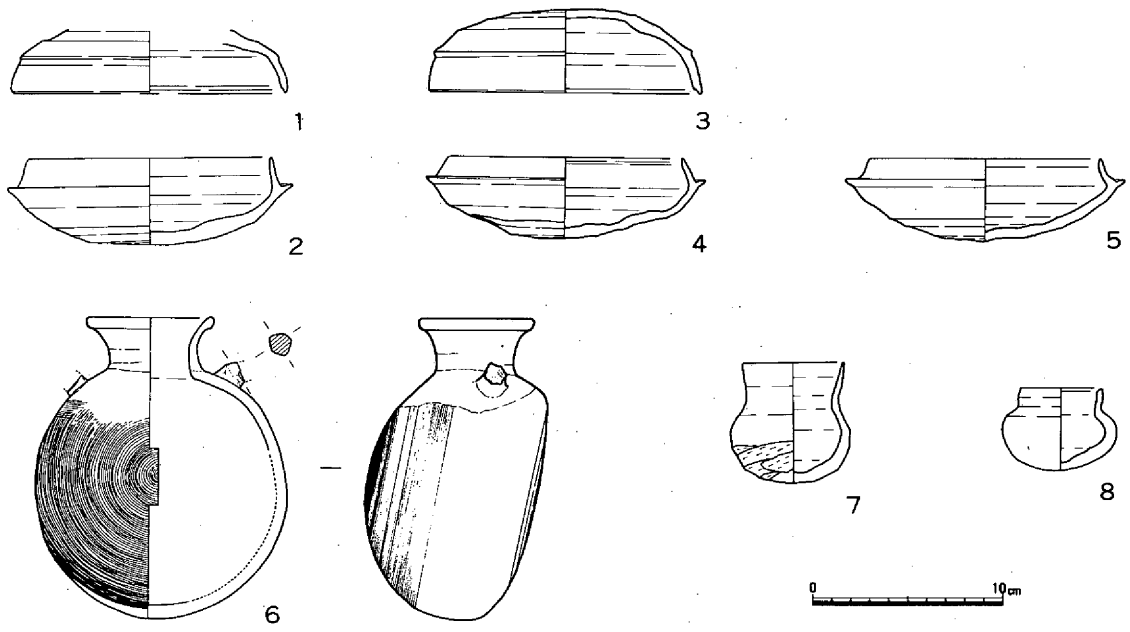
前述した第１主体部の東隣に検出した箱式石棺で、主軸は第１主体部とほぼ平行する南北方向を示していた。この第２主体部は第１主体部の掘り方上面に位置しており、第１主体部より後に築造されたことが判明した。

この主体部の主軸はN－14°－Wを示し、天井石は残存しなかった。側壁は２枚の石を底部に立てて据え、部分的に２段または３段に横口積か小口積にしていた。南側の小口は３個の石材を重ねていたが、北側は破壊されて底部の石だけが存在した。底部の床面には３枚の板石を並べ、側壁との間に生じた空間には小さな石を充填していた。



1．暗灰褐色土

第40図　２号墳第２主体部平断面図（1/30）
および遺物出土状況（1/20）



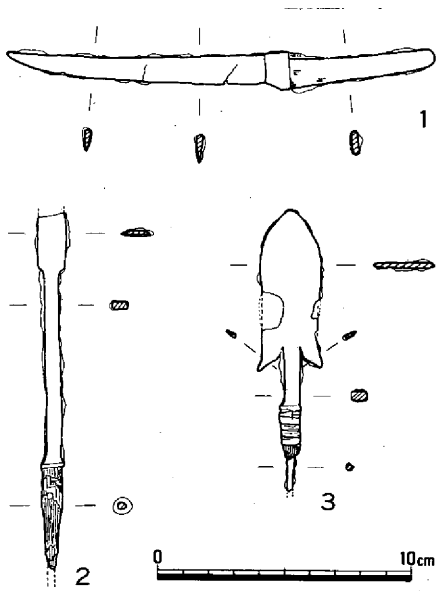
第41図　２号墳第２主体部出土土器（1/4）

この２号墳の第２主体部である箱式石棺の内法は、長径100cm・短径24～32cm・高さ40cmを測り、南側の小口が北側よりも幅が広くて床面レベルが高いから、埋葬された遺体の頭位は南端になるであろう。

遺物出土状況（第40図、図版13－１）

第２主体部の箱式石棺から出土した遺物は、須恵器の提瓶および壷の３点と鉄器３点の合計６点で、図示した須恵器の杯身と杯蓋（１～５）は、箱式石棺直上の盛土内から重なるようにして発見されたのである。

須恵器の提瓶（６）と直口壷（７）は北側の小口に近接して存在し、短頸壷（８）は西側側壁のほぼ中位から壁面に接するようにして出土した。刀子（１）は中央部分から２個体に破損した状態で発見され、２点の鉄鏃（２・３）は直口壷の南脇に側壁と接する位置より重なって出土した。



第42図　２号墳第２主体部出土鉄器（1/3）

遺物

須恵器（第41図、図版14－１、表－２）

杯身は内面口縁端部に段を有し、焼成は良好で自然釉が付着している。杯蓋は体部と口縁部の境に稜を有し、内面口縁端部に段が認められる。提瓶の耳は鈎形で、外面胴部にカキメが存在する。広口壷と短頸壷はミニチュア品で、外面底部は手持ちのヘラケズリを施している。

鉄器（第42図、図版14－１、表－５）

刀子は刀身部11.2cm・茎部5.7cmで、茎に糸巻きの痕跡と柄の木質が残存する。２と３は長頸柳葉式と平根腸抉柳葉式の鉄鏃で、茎に矢柄の木質と矢柄表面の樹皮巻きが認められる。２は頸部7.8cmで、鏃身部と茎部の先端を欠損する。３は鏃身部6.4cm・頸部5.5cmで、茎部の先端が存在しない。

(5)　第３主体部

石棺（第43図、図版13―２・３）

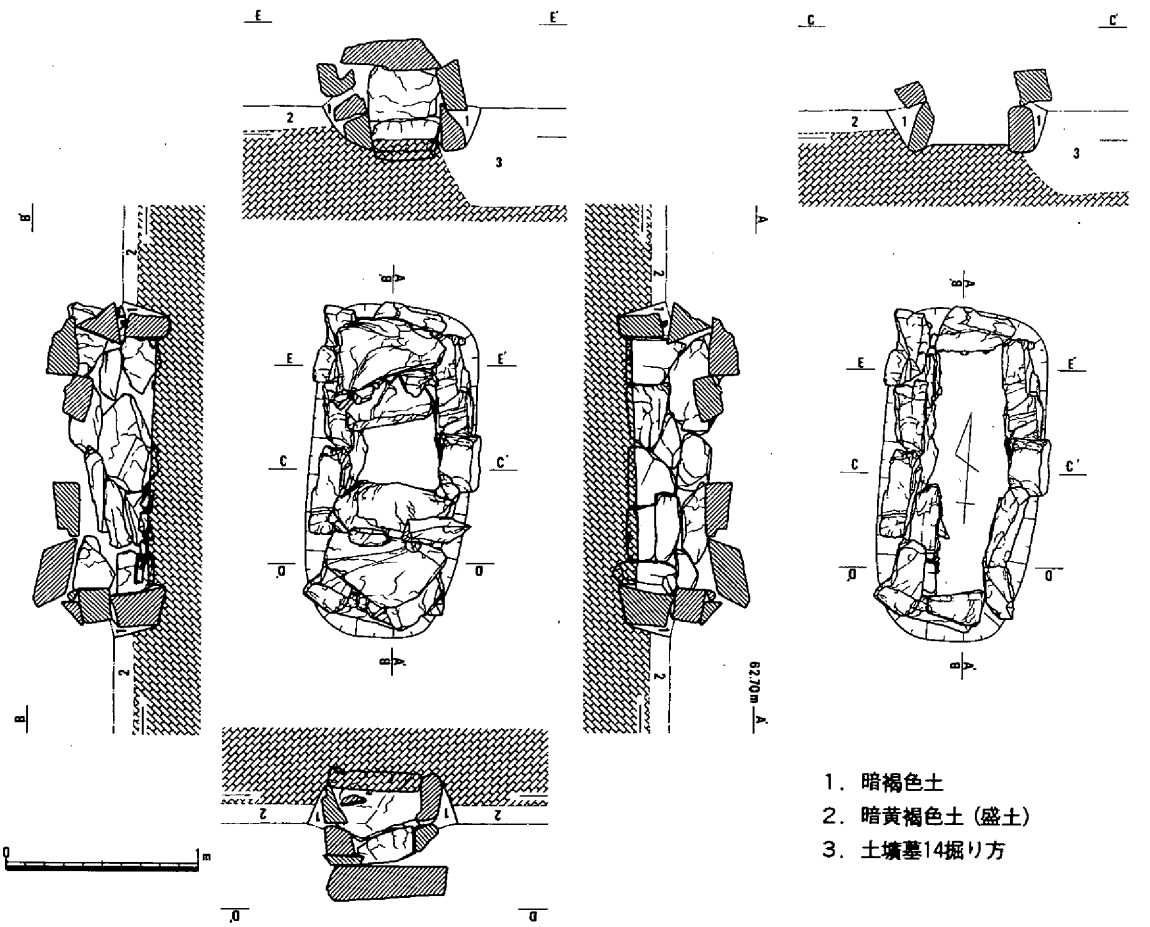
第２主体部より約２ｍ東側へ寄った地点で検出した箱式石棺で、主軸は第１主体部や第２主体部とほぼ平行するＮ―１°―Ｗの南北方向を示していた。

天井石は４枚が残存していたが、中央部分が持ち去られて存在しない。天井石の間には小さな石を配し、石の間に生じた空間を埋めていた。東側の側壁は底部に５個の石を立てて据え、上位に２段または３段に横口積や小口積に石を乗せていた。西側の側壁の石組は粗雑で、底部に４個の石が存在するものの、石の間には空間が多く認められた。南側と北側の両小口は石を２段に積み、天井石が安定して乗るように小さな石を間に詰めていた。床面には砂利や板石はなく、地山面が露出していた。

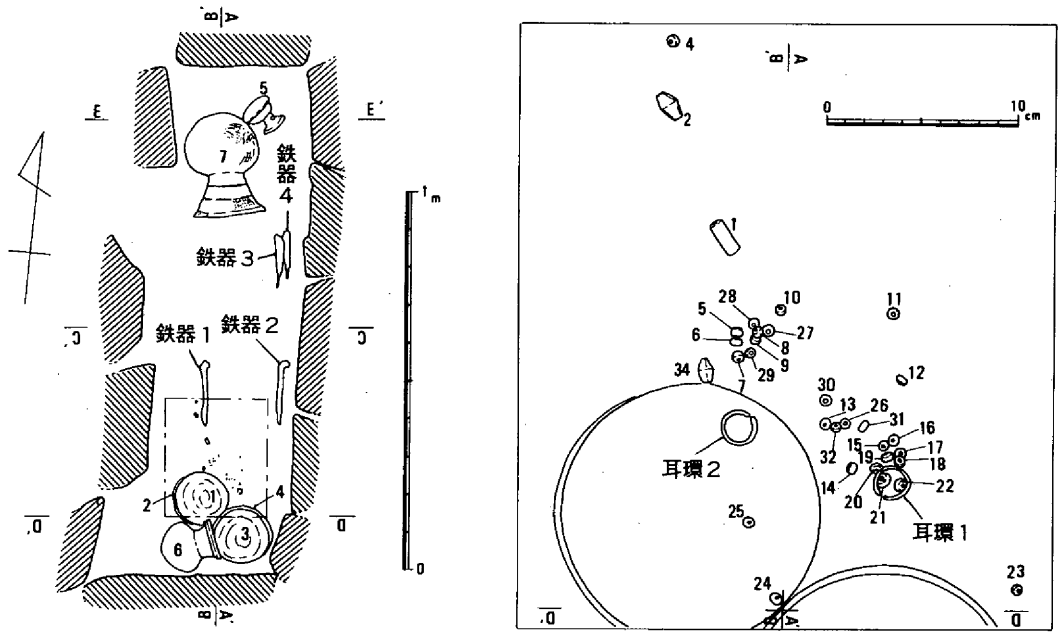
第３主体部の箱式石棺の内法は、長径132cm・短径37～42cm・高さ32～42cmを測り、南側の小口が北側よりも幅が広くて床面から天井石まで高くなっていた。床面のレベルは、南から北に向かって緩やかに傾斜していた。

遺物出土状況（第44図、図版13―３）

２号墳の第３主体部である箱式石棺から出土した遺物は、須恵器７点、鉄器４点、装身具35点の合計46点であった。須恵器の器種は、杯身２点、杯蓋２点、高杯１点、少し頸部の長い壷１点、広口壷１点である。鉄器の種類は、曲刀子２点と鏃２点である。装身具のそれは、管玉１点、棗玉１点、小



第43図　２号墳第３主体部平断面図（1/40）



第44図　２号墳第３主体部遺物出土状況（左：1/20，右：1/4）

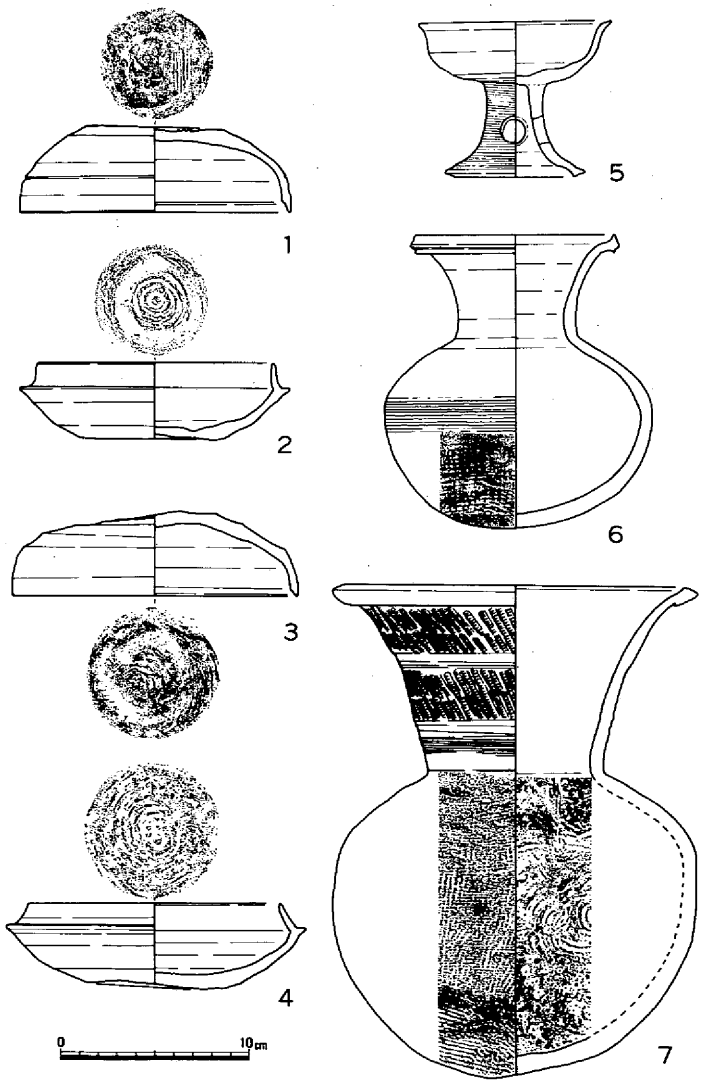
玉31点の玉類と耳環２点である。

須恵器の杯身と杯蓋は、口縁部を合わせたままセットになって少し頸部の長い壷とともに南側の小口部分から出土した。２点の耳環と多くの玉類がこの付近より集中して発見されたから、杯身と杯蓋のセットは、遺体の頭骨を支える枕の代用品に使われていたのであろう。高杯と広口壷は、北側の小口に近接して横倒しの状態で存在した。２点の曲刀子は、石棺の中央よりやや南側に寄った地点から、切先をともに南へ向けて平行に並んで検出した。２点の鉄鏃は、広口壷の南東約20cmの所から一部が重なって出土した。

遺物

須恵器(第45図、図版14—2、表—2)

１と３の杯蓋の計測値は、前者が口径14.4cm・器高4.7cm、後者が15.0cmと4.6cmである。外面の体部と口縁部の境には稜を有し、内面の口縁端部には段が認められる。１の外面天井部と３の内面天井部には、同心円のタタキ



第45図　２号墳第３主体部出土土器（1/4）

痕跡が残存する。２と４の杯身の計測値は、前者が口径12.5cm・器高4.1cm、後者が13.3cmと4.7cmである。口縁端部は丸く仕上げ、内面底部には同心円のタタキ痕跡が残存する。高杯（５）は脚部に２個の円孔を有する特異な形態で、口径10.0cm・器高7.2cm・底径6.3cmを測り、脚部にカキメが認められる。少し頸部の長い壷（６）は口径10.4cm・器高15.6cmを測り、胴部にカキメが存在し、底部には格子目のタタキ痕跡が存在する。広口壷（７）は口径17.8～18.4cm・器高23.6cmを測り、外面の頸部に連続刺突文を施し、胴部下半にタタキ痕跡が認められる。内面の口縁部はヨコナデを行い、胴部には同心円のタタキ痕跡が存在する。

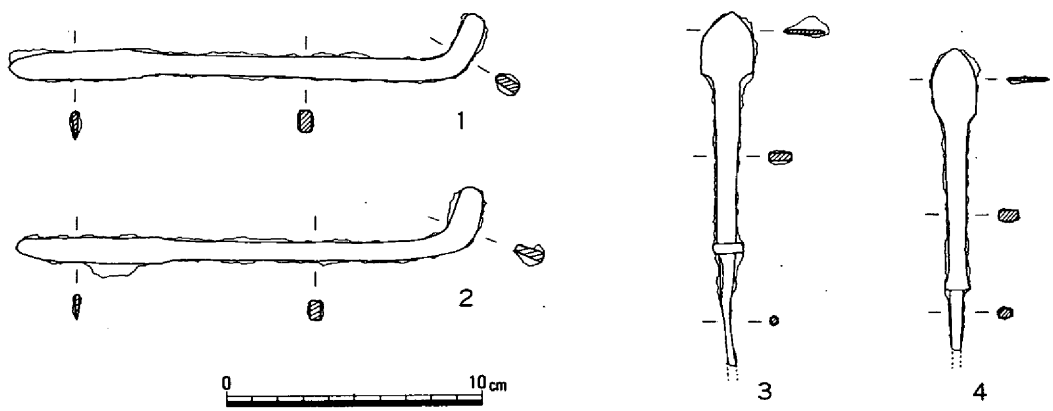
鉄器（第46図、図版15―１、表―６）

１と２は曲刀子である。茎の先端が刃部とは反対側に曲げられている。１は全長18.7cm・刀身部長5.2cmである。２は全長18.5cm・刀身部長5.8cmである。３と４は長頸柳葉式の鉄鏃で、通常の長頸鏃より鏃身部・頸部ともに幅が広い。３は鏃身部長2.6cm・頸部長6.8cm、４は鏃身部長3.1cm・頸部長6.5cmであるが、茎部はともに先端を欠損して長さが不明である。

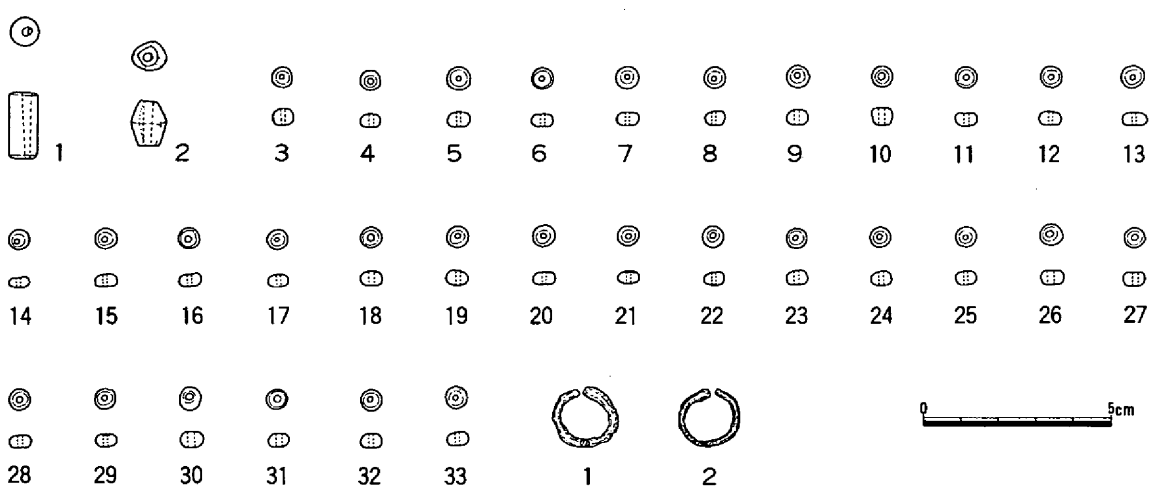
装身具（第47図、図版15―２、表―９・12）

玉類　玉類の種類は、管玉１点、棗玉１点、小玉31点である。管玉は碧玉製で、片面穿孔になっている。棗玉は黒色の埋もれ木を使っている。小玉はいずれもガラス製で、紺色か緑色を呈している。

耳環　対になる２個が出土したが、両方とも銀製である。１を計測した最大値は、外径1.75cm・断面径0.25cm・重さ1.11ｇである。２の計測最大値は、外径1.65cm・断面径0.17cm・重さ0.97ｇである。



第46図　２号墳第３主体部出土鉄器（1/3）

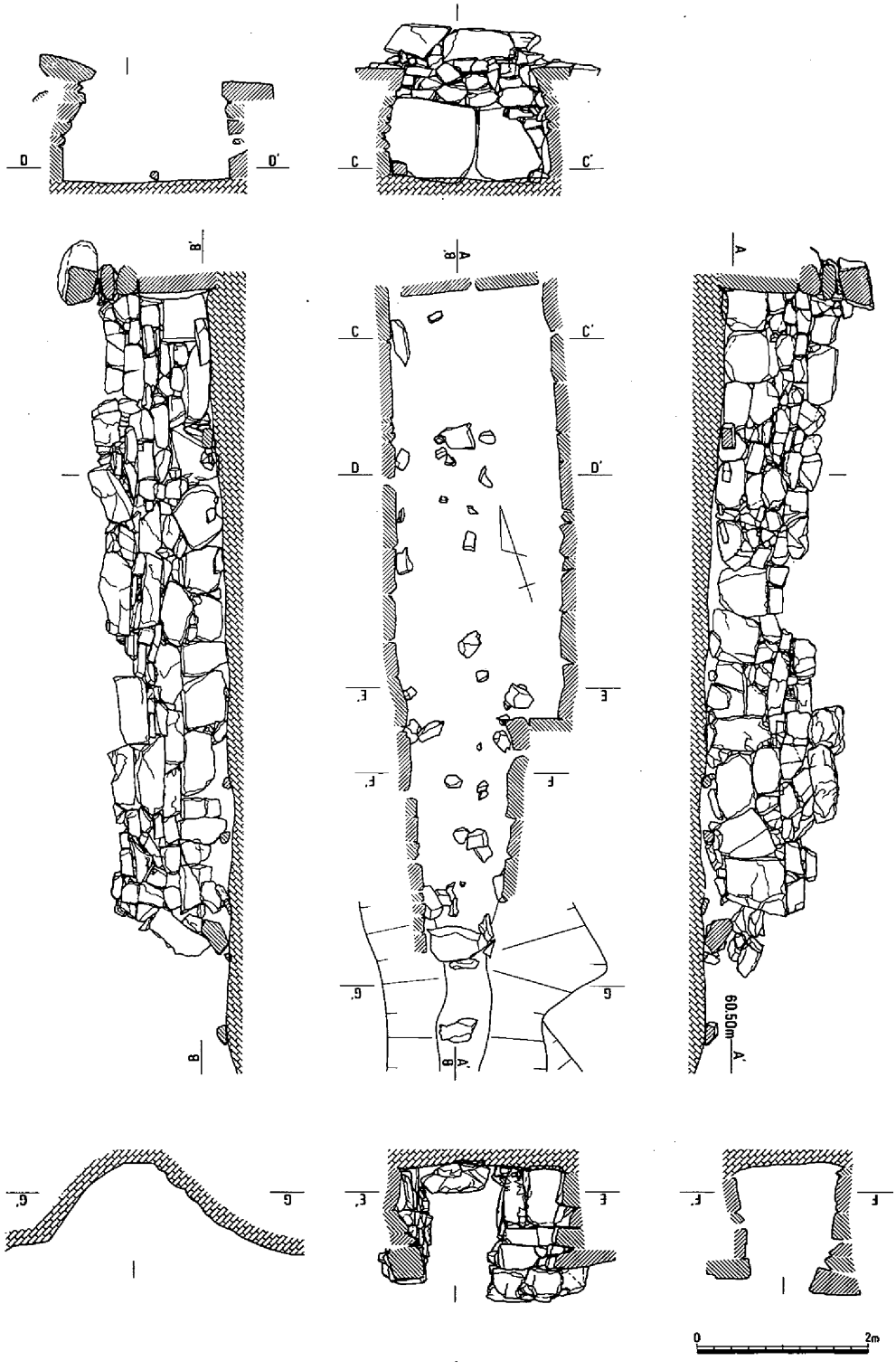


第47図　２号墳第３主体部出土装身具（1/2）

(6)　第４主体部

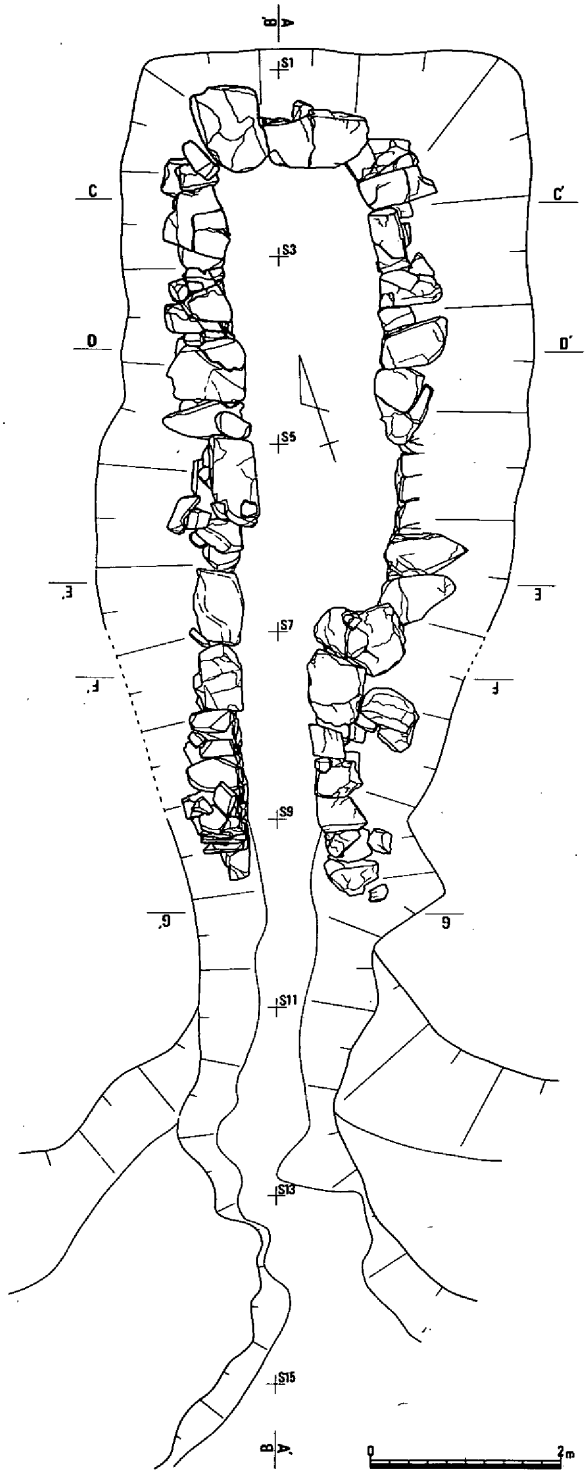
石室（第48・49図、図版16・17）

２号墳の第４主体部は、墳丘の最も東側に存在した左片袖を有する横穴式石室で、石室の主軸方向が前述した第１～３主体部とは著しく異なるＮ―20°―Ｅを示していた。発掘調査によってこの石室を検出した時に天井石はすでになく、奥壁の外側に１枚、石室内に２枚、石室入口付近に２枚の合計

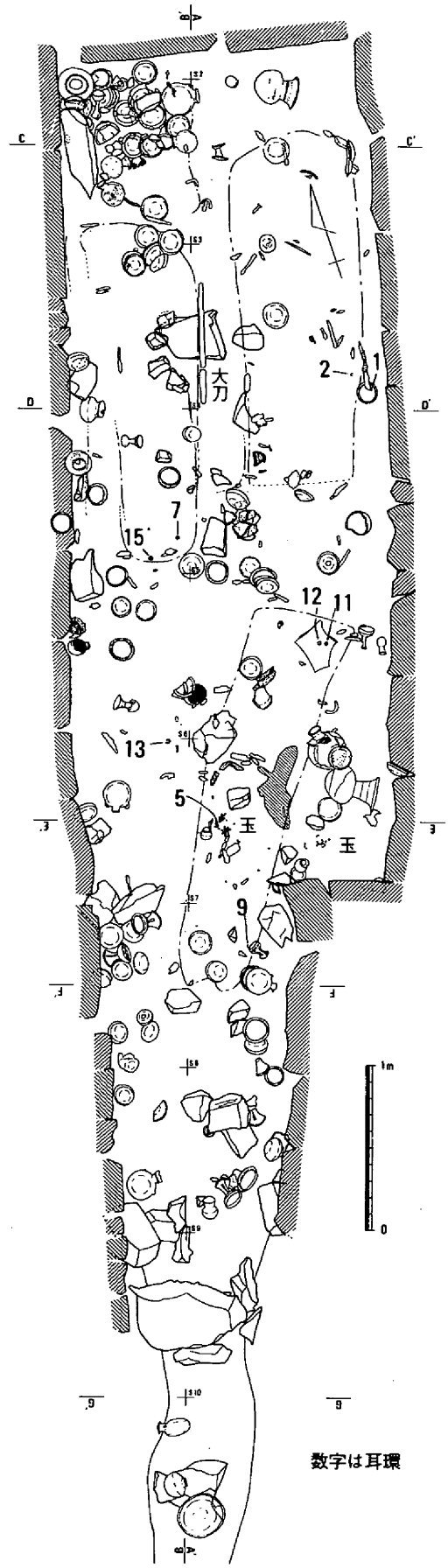


第48図　２号墳第４主体部平断面図（1/80）

5枚の天井石が転落していた。この石室の床面から天井石までの高さは、奥壁の袖の部分に辛うじて残存する最上位の石材上面までと推定され、側壁の上端部分が崩壊して相当量の石材が存在しないと考えられた。石室の入口付近は、地山を溝状に掘り窪め



第49図　２号墳第４主体部掘り方実測図(1/80)



第50図　２号墳第４主体部遺物出土状況(1/40)

て丘陵の斜面に通じる前庭部を造成し、子持器台や壷などの須恵器（第60図）が出土した。

奥壁の基底部には、高さ約100cm・幅約110cmの安定した巨大な石と高さ約90cm・半径約75cmの扇形をした石とを並べて据え、その上位に小規模な石材を３～４段に横口積または小口積にしていた。さらにその上位である天井石が乗る位置には、約40×50cmの菱形をした石と高さ約35cm・長さ110cmの扁平で大きな石とを並べて置いていた。袖の部分は、高さ約75cmを測る柱状の石材２個を立てて据え、床面で側壁より約65cm石室内へ張り出す壁面を形成していた。この壁面が屈曲する袖から石室入口にかけての羨道部分の左側壁は、右側壁や玄室部分の左側壁の石積み状況と様相が異なっていた。すなわち袖の部分に立てた石の高さまで大小様々な石を不規則に置き、袖石の上面レベルで積んだ石の上端が直線的に揃っており、この羨道部分の左側壁だけは別個に築造された可能性が強い。羨道部分も含めた右側壁は、基底部に比較的大きな安定した石を奥壁に接して存在する石とほぼ同じ高さになるように揃えて据え、その上位に比較的小規模の石を４～５段に積み上げていた。この右側壁の壁面は、各段の目地がほぼ平行する直線状を呈していた。玄室部分の左側壁は、中央付近の基底部に使われていた石が比較的小さい。その基底部の石は奥壁と袖の両方向から石を据え、最後に中央付近に生じた空間に小規模の石を詰めたと考えられた。床面には棺台の石が存在するものの、地山面を掘り窪めただけで砂利や板石などは認められなかった。左右両側壁が緩やかに内傾して立ち上がる「持ち送り」の形態を示し、石室内の断面形は台形を呈していた。

２号墳の第４主体部である横穴式石室の床面での計測値は、玄室長5.00m・羨道長2.80mになる全長7.80m・奥壁幅1.80m・玄門での玄室幅1.75m・玄室中央幅1.95mを測り、玄室の幅は中央がわずかに広くなっていた。羨道の幅は、玄門で1.15m、石室入口で0.80mであった。石室の高さは天井石がなかったので不明であるが、奥壁に残存する最上位の石材から推定して約1.70mになるであろう。

遺物出土状況（第50図、図版16・17－１）

第４主体部の横穴式石室は、天井石が１枚も残存しなかったが、石室内は盗掘や撹乱を受けた形跡はなく、追葬が繰り返し行われた当時の状況を、良好な状態で留めていた。

奥壁の右側壁に寄った隅の部分には、追葬の時にかって副葬されていた遺物を片付けた約20点の土器が存在し、その下位から木棺痕跡も検出した。奥壁の左側壁に近い部分は、完形の広口壷１点が出土したが、遺物や木棺痕跡のない比較的広い空間が認められた。玄室の中央より奥壁側で左側壁に寄った地点には、長さ215cm・幅63～75cmを測る１基の木棺痕跡を確認した。木棺の内部には、鉄鏃を主体とする鉄製品が散在していた。さらに右側壁に近接した地点には、複雑に重複した４基の木棺痕跡を検出した。奥壁に面した木棺の小口部分からは、対になった５組の杯身と杯蓋が出土したが、４基の木棺と副葬品との関係は、把握することができなかった。前述した左側壁に寄った地点の木棺痕跡とこの重複した４基の木棺痕跡の間には、別の木棺痕跡である角の一部を確認した。羨道から玄室に至る地点にも、長さ235cm・幅45～60cmを測る木棺痕跡を検出した。ほぼ中央の右側壁に面した側板の近くからは、耳環や玉類の装身具が集中して出土した。また左側壁に面した側板の付近には、炭化物が集中して存在した。羨道の中央から入口にかけては、木棺痕跡が存在しなかった。この周辺から出土した遺物には、杯身や杯蓋が少なく、器形の異なる高杯が多く認められた。石室の入口に面した前庭部からは、壷や提瓶とともに石室内の脚部と接合した器台の杯部が出土した。特殊な遺物としては、比較的多量の鉄滓を採集した。なおこの第４主体部の横穴式石室内で検出した木棺痕跡は合計８基となり、出土した耳環の８対16点（第70図）とうまく符合する。

遺物

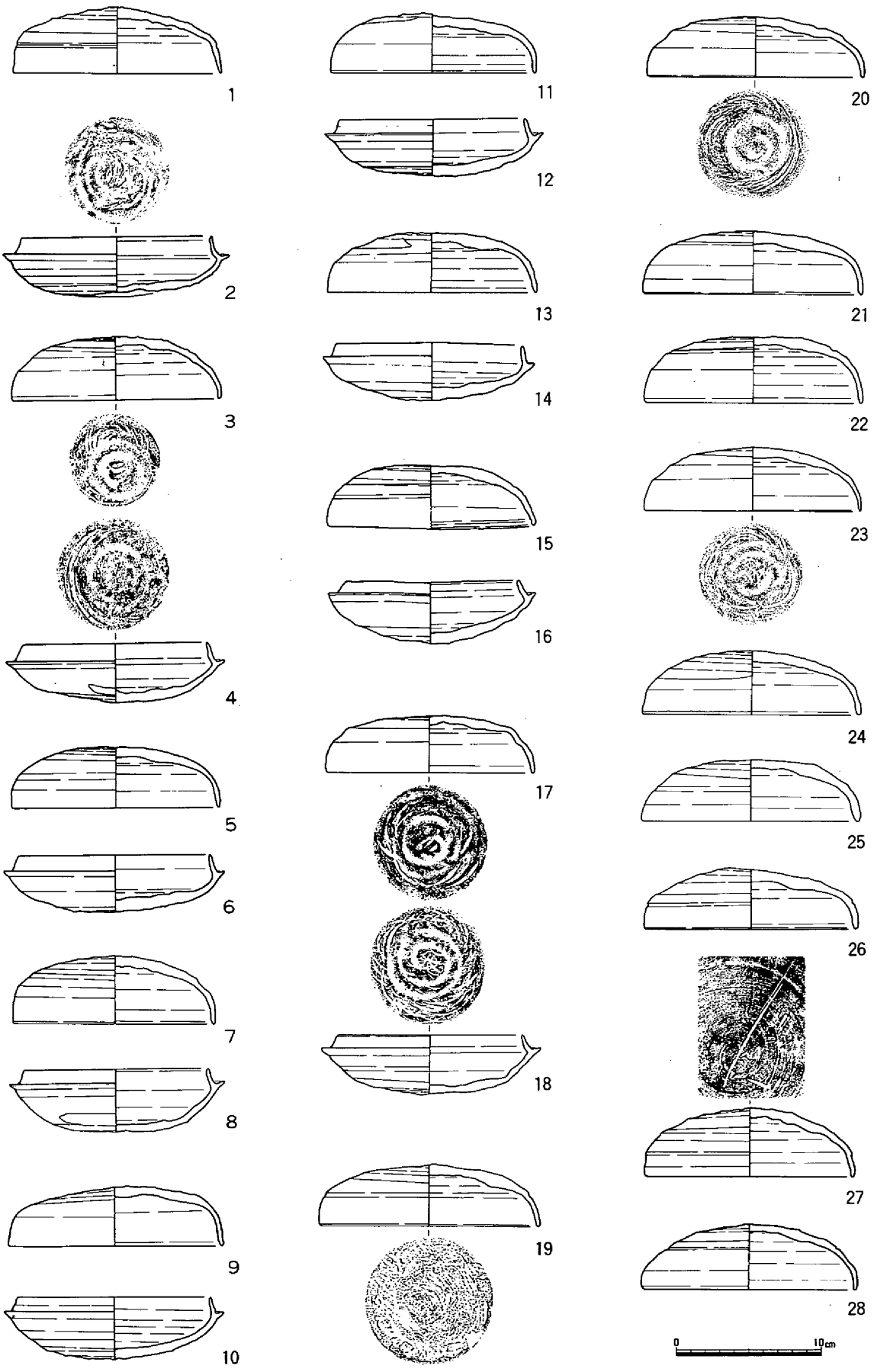
主体部出土の遺物

須恵器（第51～58図、図版18～22、表－２）

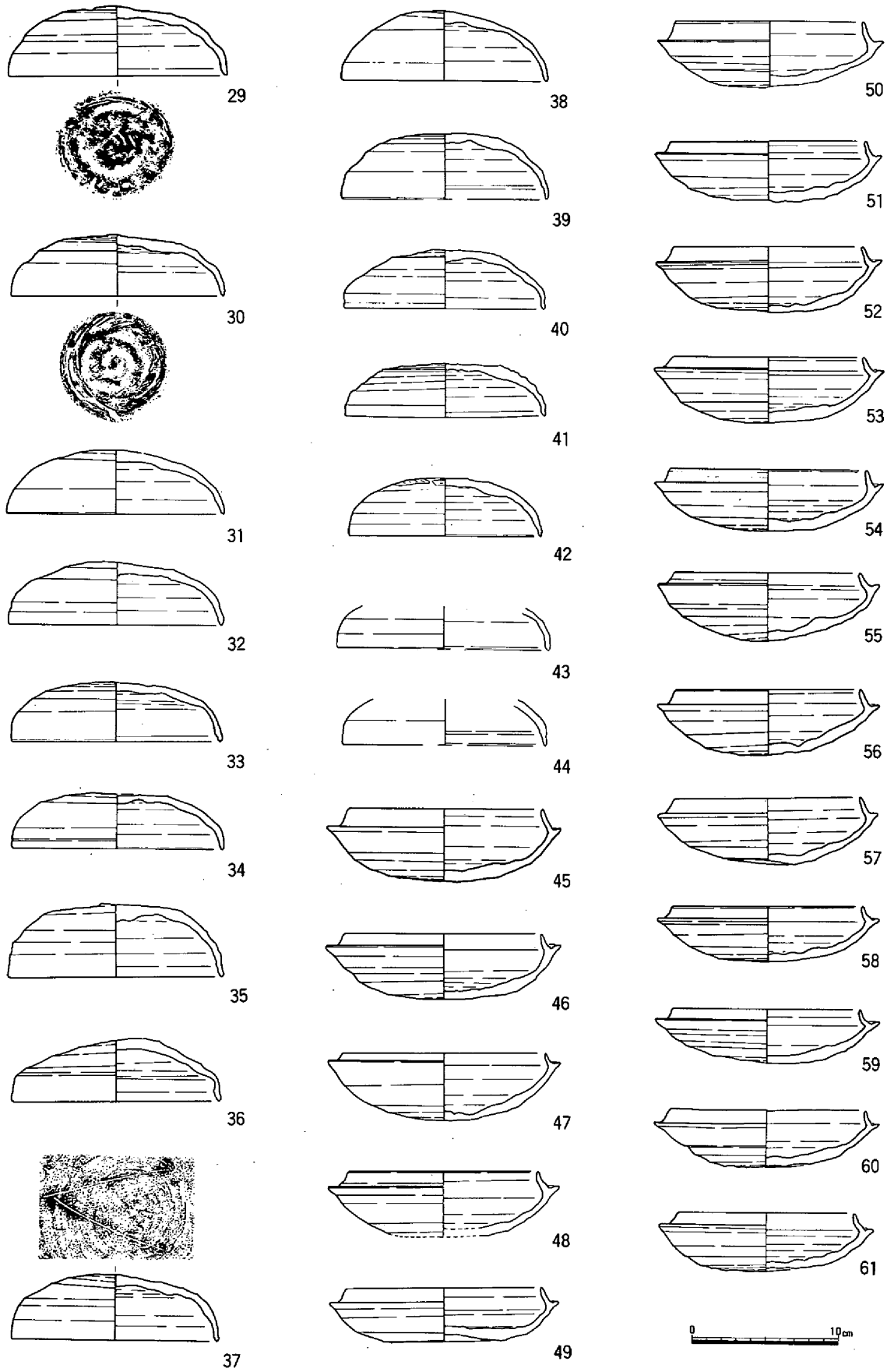
杯身・杯蓋　２号墳の第４主体部は横穴式石室で、石室内には８基の木棺痕跡が存在し、追葬が繰り返し行われた状況を確認した。杯身と杯蓋の出土地点および法量や色調を精査した結果、９組18点のセット関係が認められた。杯身は口径10.7～13.5cm・器高3.5～4.7cmで、口縁端部は丸く仕上げている。外面底部はヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施している。ロクロの回転方向は時計と同じ右が多く、内面底部に同心円のタタキ痕跡が存在するもの（２・４・18・63）や、外面底部にヘラ記号を有するもの（70）がある。72の杯身は法量が極めて小さく、口径9.6～9.8cm・器高3.4cmを測る。外面の底部はヘラ切り未調整で、全体の器形が歪んでいる。杯蓋は口径13.0～15.4cm・器高3.7～4.9cmで、外面の天井部と体部の境に稜の痕跡を有するものは少なく、口縁端部も丸く仕上げているものが多い。外面の天井部はヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施している。ロクロの回転方向は杯身と同様に右が多く、内面の天井部に同心円のタタキ痕跡が残存するもの（３・17・19・20・23・29・30）や、外面の天井部にヘラ記号を有するもの（27・37）が存在する。

高杯　２号墳の第４主体部である横穴式石室から出土した高杯には、多様な器形が認められる。有蓋高杯の蓋（73）が１点だけ存在する。口径13.8cm・器高5.4cmを測る完形品で、内面の天井部には同心円のタタキ痕跡が残存する。外面の天井部と体部の境に稜を有し、貼り付けたつまみ周辺の天井部にカキメが認められる。５点出土した有蓋高杯（74～78）は、脚部の透しがいずれも長方形で３方向に１段となっている。これらの高杯は口径11.4～11.7cm・器高12.1～14.1cm・脚端径10.1～12.0cmを測り、５点すべての脚端部が肥厚している。杯部の外面底部はヘラケズリの上面にカキメを施し、内面は全体にヨコナデを行っている。杯部の内面底部に同心円のタタキ痕跡が残存するもの（74）や、脚部の内面上位にシボリ痕跡が認められるもの（76）もある。脚部は内外面ともヨコナデを施しているが、かすかにカキメが存在するもの（77）もある。79は長脚無蓋高杯で、脚部の透しは１段で長方形を呈している。杯部は浅くて口縁端部が外反し、外面には連続刺突文と１条の凹線が認められる。80も無蓋高杯であるが、杯部が口径に比して深い。底部から口縁部にかけての器壁は、緩やかに内湾して立ち上がる。脚部の透しは長方形または細長い三角形を呈し、３方向で１段だけになっている。杯部の外面には３段になった連続刺突文と２条の凹線を巡らせ、内面はヨコナデを施している。81は短脚無蓋高杯である。端部の径が大きくて低い脚部には、ヘラ状工具による縦方向の直線が３方向に描かれている。脚部の透しが２段の長脚無蓋高杯（82～84）は、いずれも内外面に自然釉が付着して焼成が良好である。浅い杯部の口縁端部は外反し、外面の底部と口縁部の境には稜が認められる。杯部の内面底部に同心円のタタキ痕跡が残存するもの（82）や、外面にヘラ記号を有するもの（84）がある。85と86も３方向に２段の透しが存在する長脚無蓋高杯であるが、脚下端に４～５個の貫通した小円孔を有する蓋をし、中に陶製の丸玉２個を入れて鈴のようになっている。

甕　法量の異なる３点が出土している。外面にヨコナデだけを行った簡素なもの（87・88）と、クシ描波状文や板状工具による刺突文を施したもの（89）がある。後者の内面頸部にはシボリ痕跡が認められ、外面底部はロクロの回転方向が右のヘラケズリを行っている。87は器形が著しく小規模で、器表面全体の調整も粗雑だから、葬送に伴って作られたミニチュア品と考える。

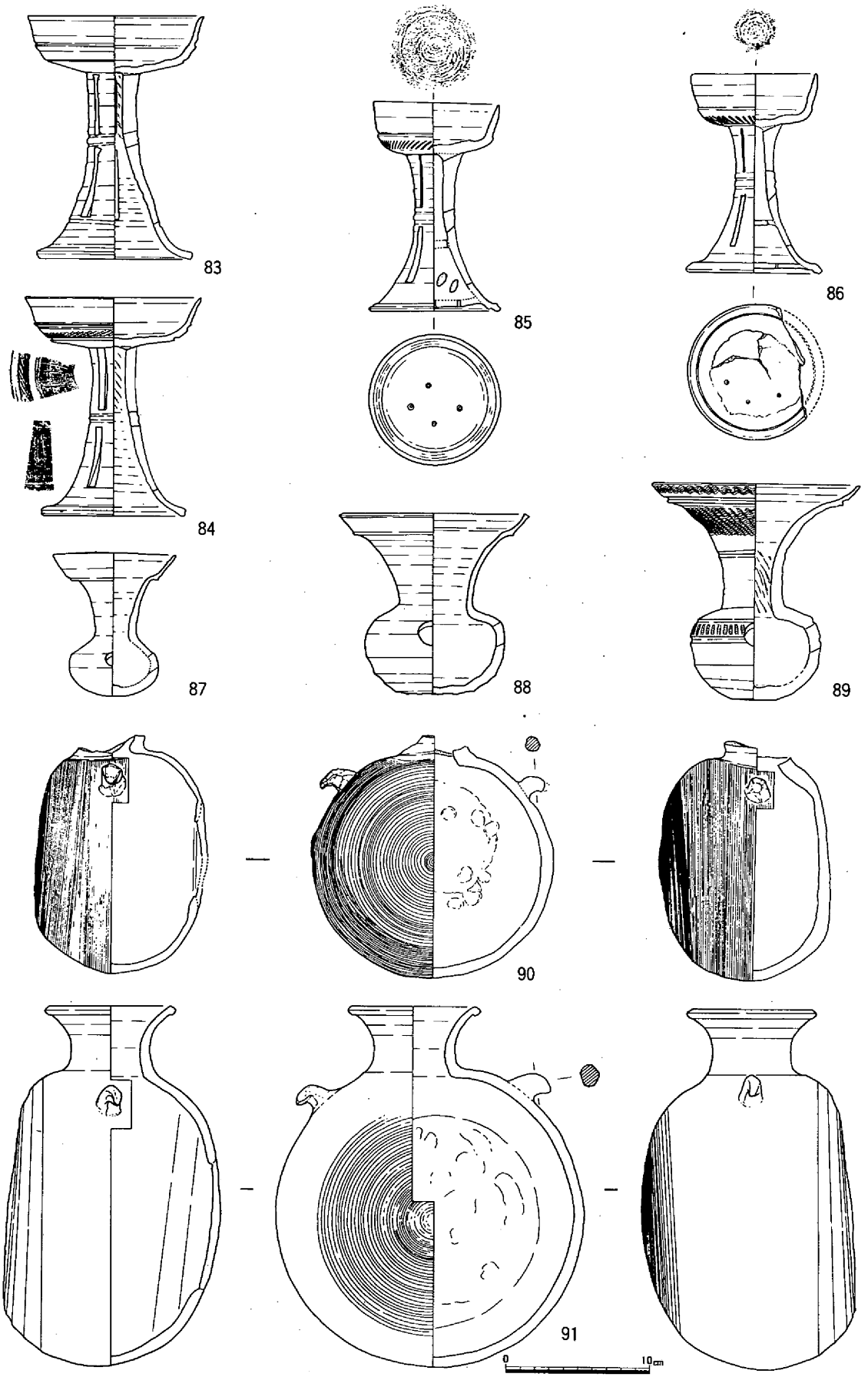


第51図　２号墳第４主体部出土土器（１）(1/4)

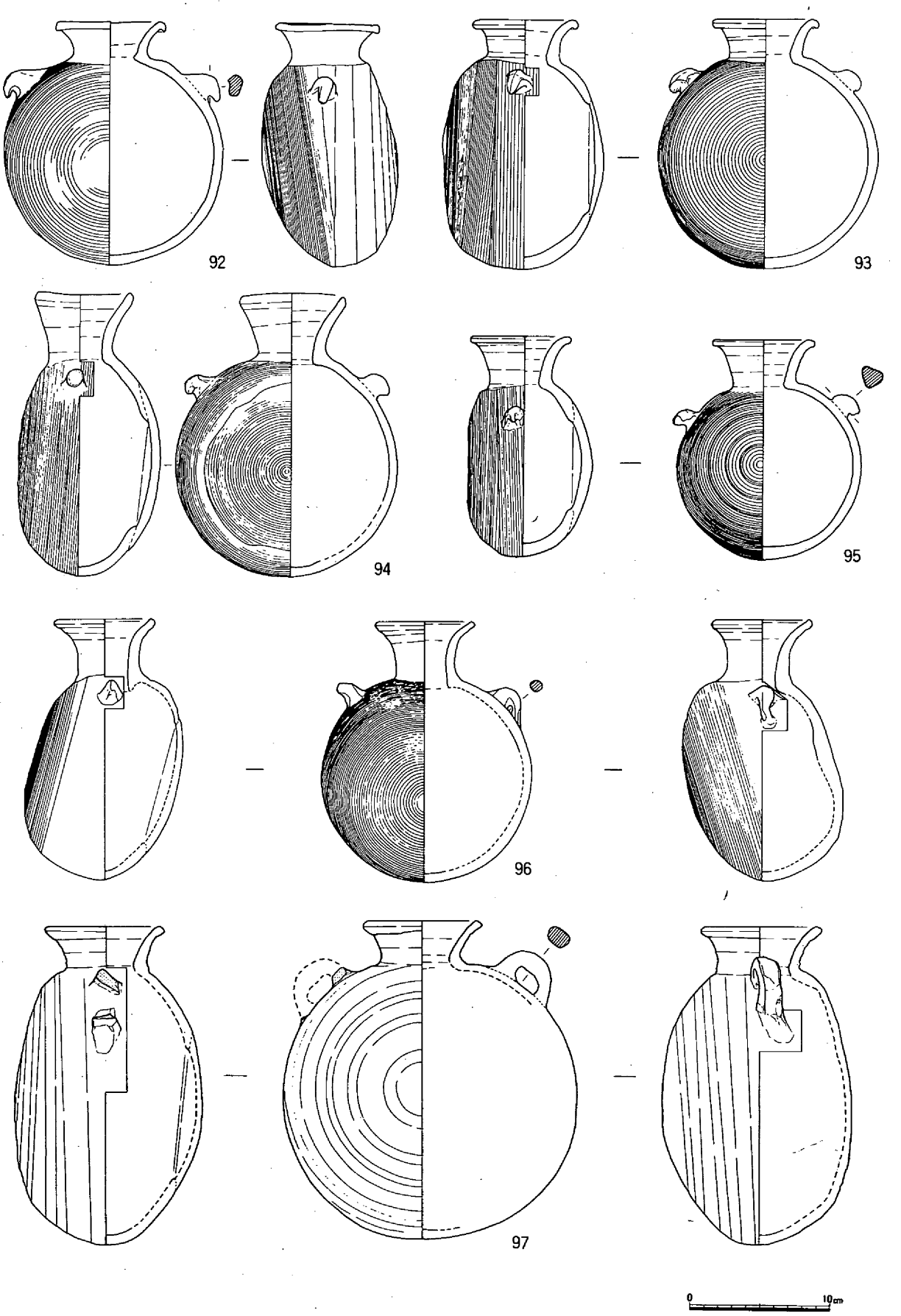


第52図　２号墳第４主体部出土土器（２）(1/4)

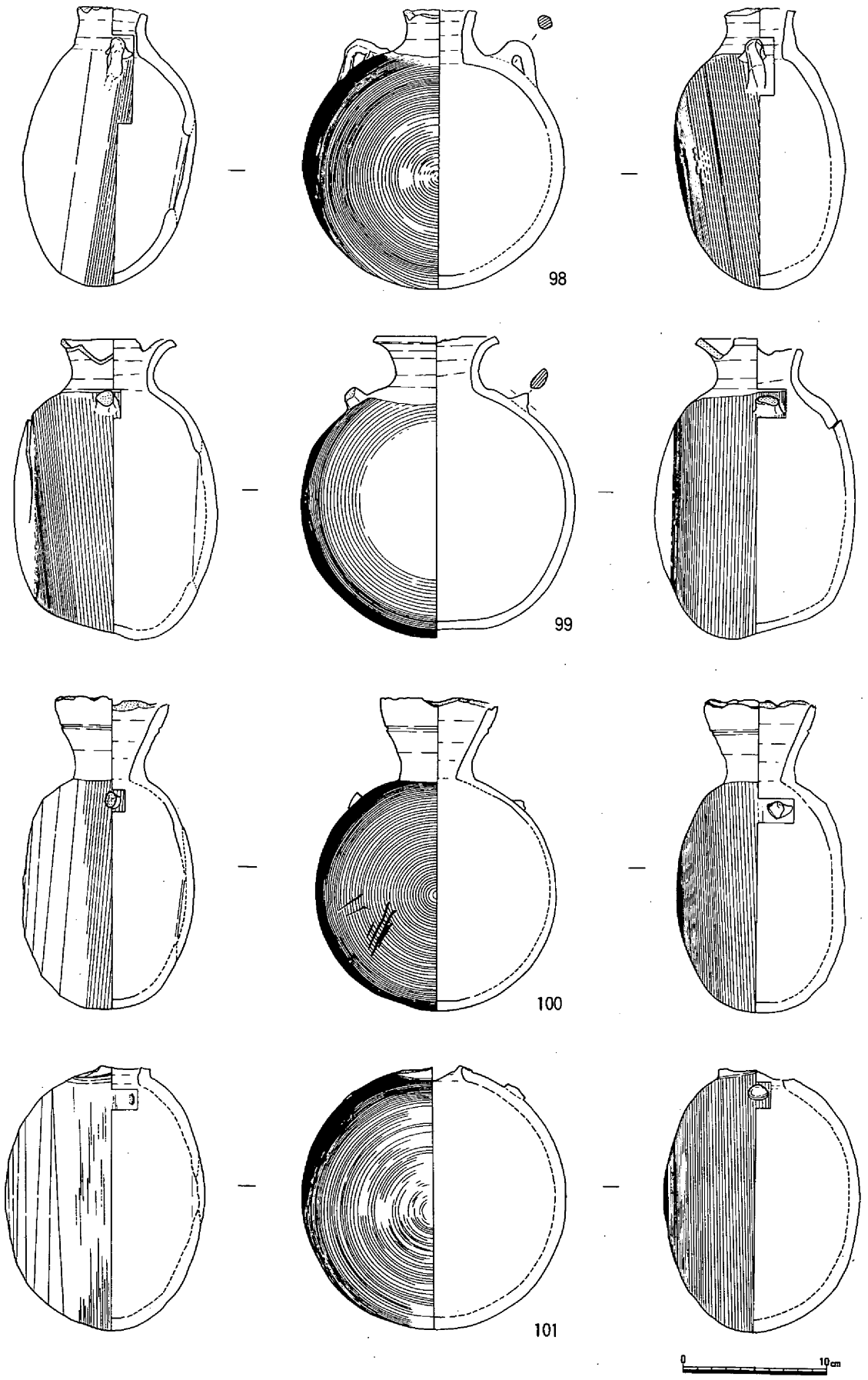
第53図　２号墳第４主体部出土土器（３）(1/4)



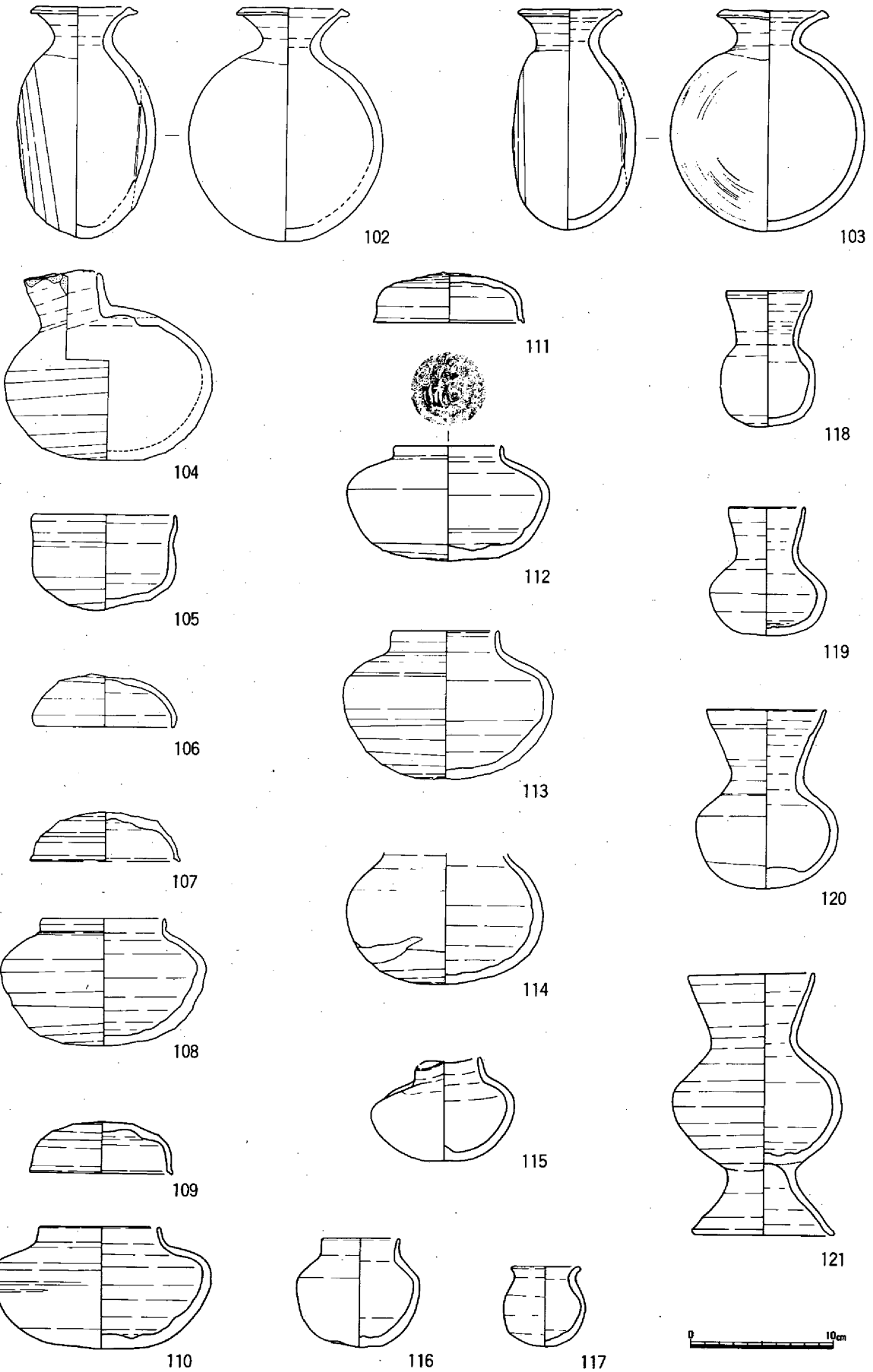
第54図　２号墳第４主体部出土土器（４）(1/4)



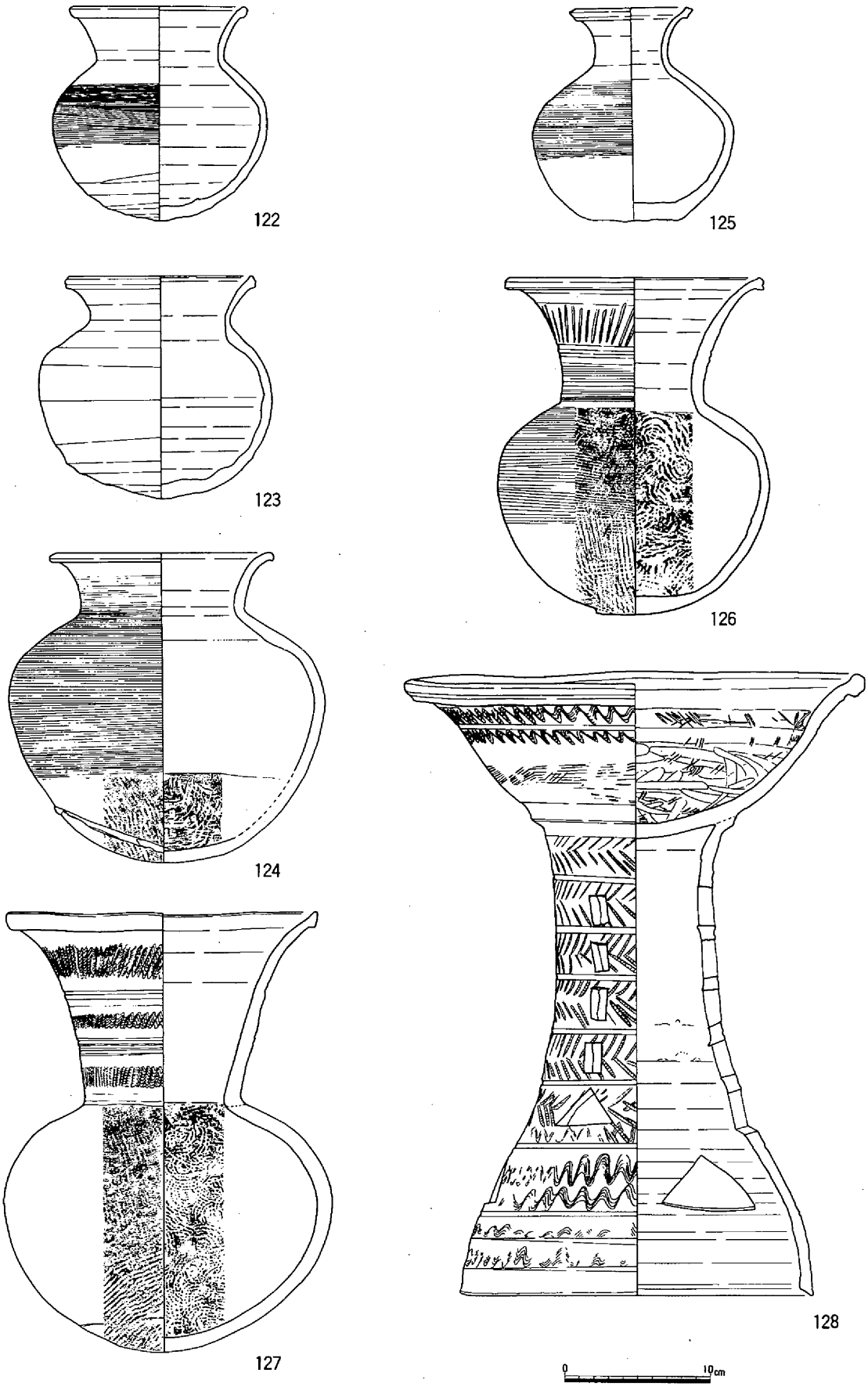
第55図　２号墳第４主体部出土土器（５）(1/4)



第56図　２号墳第４主体部出土土器（６）(1/4)



第57図　２号墳第４主体部出土土器（７）(1/4)



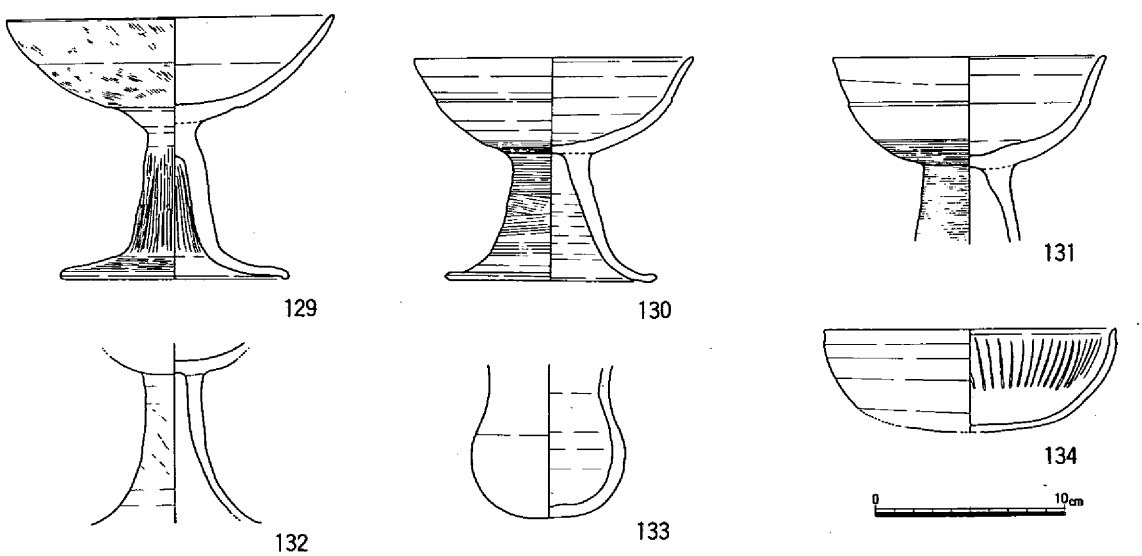
第58図　２号墳第４主体部出土土器（８）(1/4)

提瓶　形態の異なる12点もの提瓶が存在する。耳の形状で分類すると、環状（97・98）・鉤形（92～95・99・100）・円板（101）・耳なし（102・103）になるが、環状と鉤形を有するもの（96）も認められる。口縁部から頸部にかけてはヨコナデを施し、外面の胴部正面にはカキメが存在する。外面胴部の背面は、ヘラケズリのままで放置されているもの、ヘラケズリの上面にカキメを施しているもの、ヨコナデを行っているものなどがある。

平瓶　口縁端部をわずかに欠損している。胴部の最大径は14.6cmを測り、焼成は全体に悪い。外面の底部はヘラケズリを行い、口縁部から胴部上半にかけてはヨコナデを施している。

椀　口縁部の器壁は厚さが薄くなりながら湾曲して立ち上がり、端部は丸く仕上げている。外面の底部はヘラケズリを行い、その他の部分は全体にヨコナデを施している。この椀は完形品で、全体に黄灰色の濃い自然釉が付着している。

壷　蓋を伴う短頸壷が、3対セット（107～112）で出土している。蓋3点の天井部と体部の境は屈曲し、内面の口縁端部に段が認められる。外面の天井部はヘラケズリを行い、外面の体部と内面全体はヨコナデを施している。短頸壷は最大径が胴部上位に存在し、外面の口縁部から頸部にかけては、蓋を被せて焼成したために生じた自然釉が付着しない部分が認められる。外面の底部はヘラケズリを行い、その他の部分はヨコナデを施している。112の内面底部には、同心円のタタキ痕跡が残存している。106の蓋は器形が著しく歪んで、外面の天井部はヘラ切り未調整である。115～119は短頸壷または直口壷の小型品である。いずれも器形全体が歪み、外面底部はヘラ切り未調整であるから、古墳に副葬するためのミニチュア品であろう。120と121は直口壷であるが、後者は脚付きである。前者の外面底部はヘラ切り未調整で灰褐色を呈し、重ね焼きによって生じた変色部分が認められる。口縁部が短く外反する壷（122～125）は、いずれも外面底部にカキメを施している。外面底部の調整はヘラケズリ（122・123）、平行タタキ（124）、ヘラ切り未調整（125）であるが、溶着した土器片が円形に存在するもの（124）もある。内面はヨコナデを施しているが、底部に同心円のタタキ痕跡が残存するもの（124）も認められる。126と127は広口壷である。口縁部の外面にはヘラ状工具やクシ状工具による文様や凹線を描き、胴部は内外面ともタタキ痕跡が存在する。口縁部の内面はヨコナデを施し、前者の頸部から胴部にかけての外面にはカキメが認められる。



第59図　2号墳第4主体部出土土器（9）(1/4)

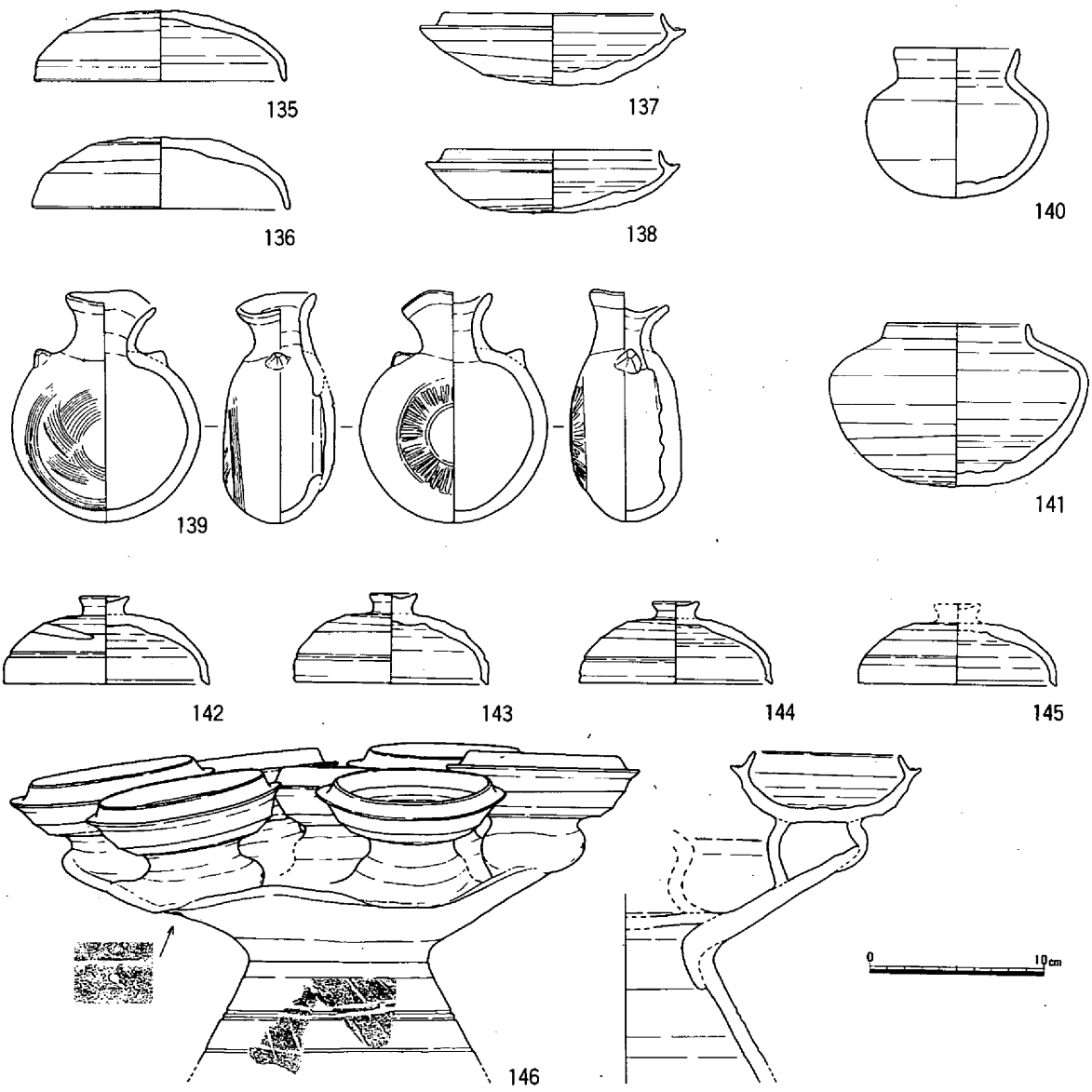
器台　口径30.2cm・器高42.7cm・脚端径24.0cmを測る。外面の杯部上半と脚部下半にはクシ状工具による波状文が認められ、外面の脚部上半には綾杉状の文様を巡らせている。脚部の透しは3方向に認められ、上半の4段が長方形、下半の2段が三角形を呈している。杯部の透しは内外面とも平行タタキの上面にヨコナデを施し、脚の端部と内面はヨコナデを行っている。

土師器（第59図、図版23、表－2）

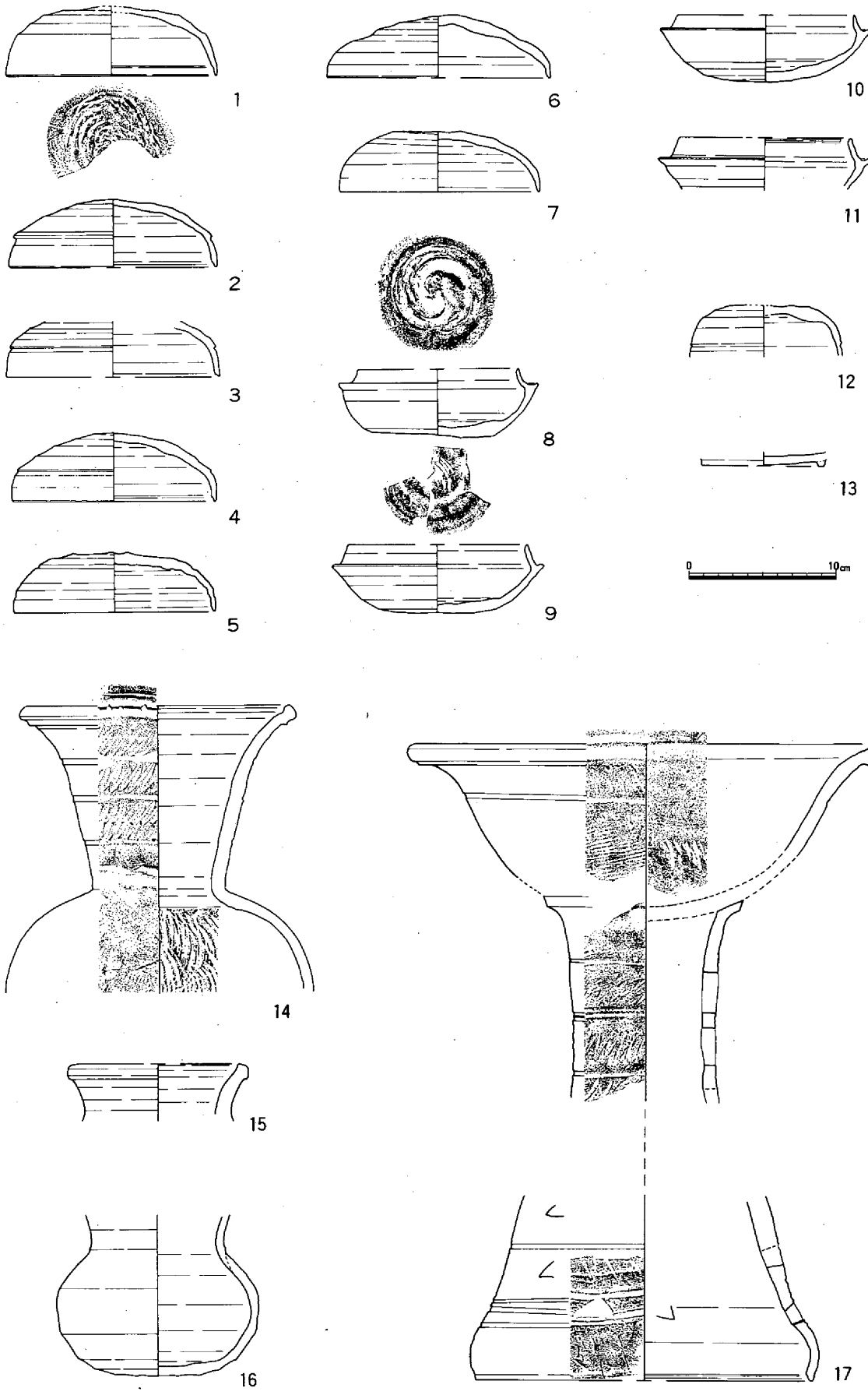
2号墳の第4主体部から出土した土師器で図示したのは、高杯4点、壷1点、椀1点である。129の杯部外面はハケメの上面にヨコナデを施し、脚部外面の中位はヘラミガキの後にヨコナデを加えている。130～132は須恵器の製作手法で成形し、杯部と脚部の接合部分にカキメが存在する以外は、全体にヨコナデを行っている。口縁部を欠損した壷（133）は、内外面とも全体にヨコナデを施している。椀（134）の内面上半には暗文を巡らせ、その他の部分はヨコナデを行っている。

前庭部出土の遺物（第60図、図版23－2、表－2）

杯蓋（135・136）と杯身（137・138）は、前述した石室内出土のものと同じ法量や調整手法であ



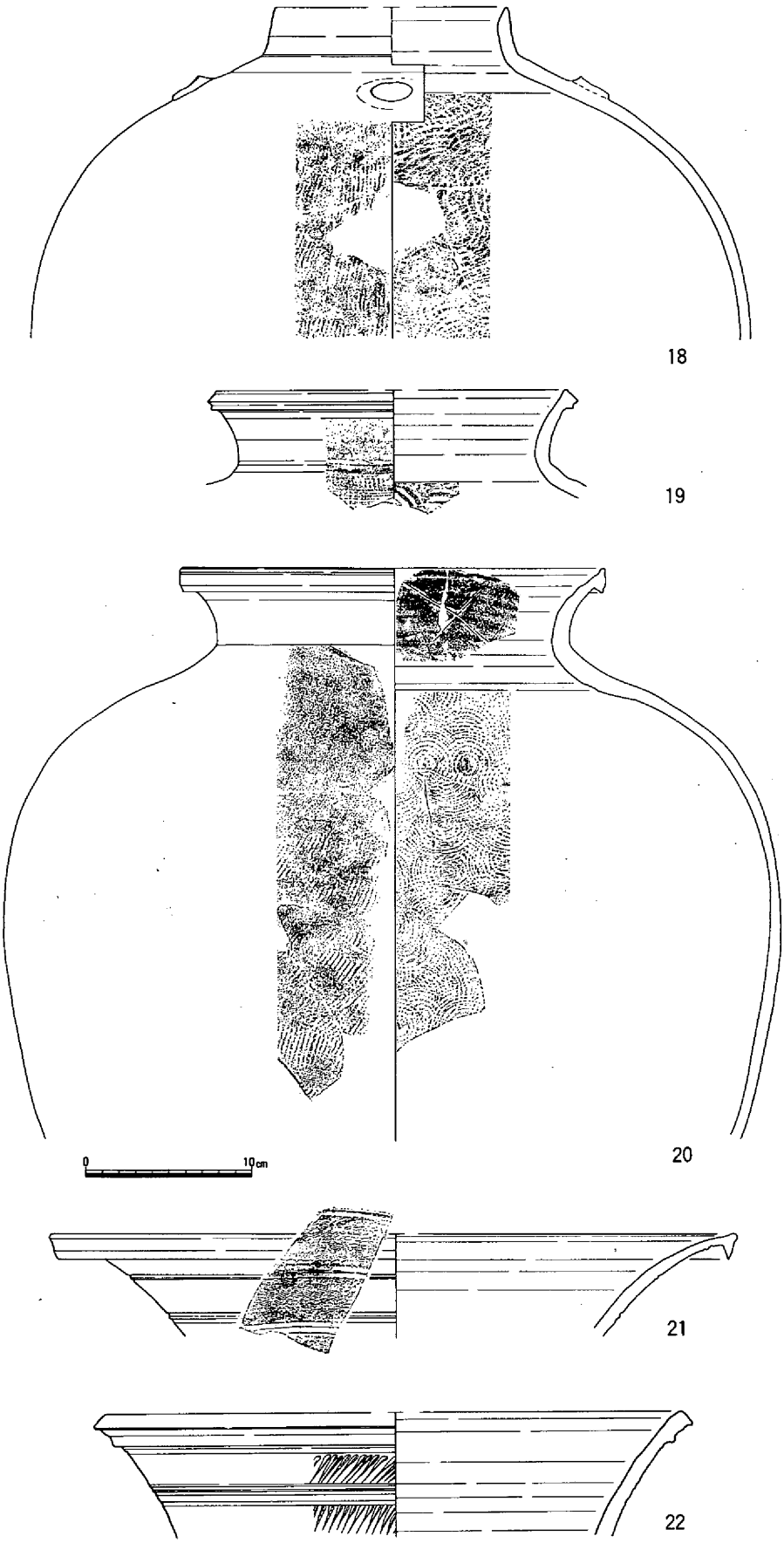
第60図　2号墳第4主体部前庭部出土土器（1/4）



第61図　２号墳出土の主体部に伴わない土器（１）(1/4)

る。小型品の提瓶（139）は全体の器形が歪み、耳は三角錐形である。胴部正面には凹線とヘラ状工具の刺突文が存在し、背面にはカキメが認められる。短頸壷（140・141）の外面底部はヘラケズリまたはヘラ切り未調整である。蓋（142～145）の伴う子杯７点を有する鉢部の浅い子持器台（146）は、脚下半が欠損して不明である。脚の外面には斜線の刺突文や凹線が存在するが、透しの有無は判断できない。蓋に張り付けたつまみ周辺の天井部はヘラケズリを行い、外面の体部と内面全体はヨコナデを施している。外面の天井部と体部の境には稜が認められ、内面の口縁端部には段が存在する。

なお２号墳の主体部に伴わない土器（第61・62図）も図示している。



第62図　２号墳出土の主体部に伴わない土器（２）(1/4)

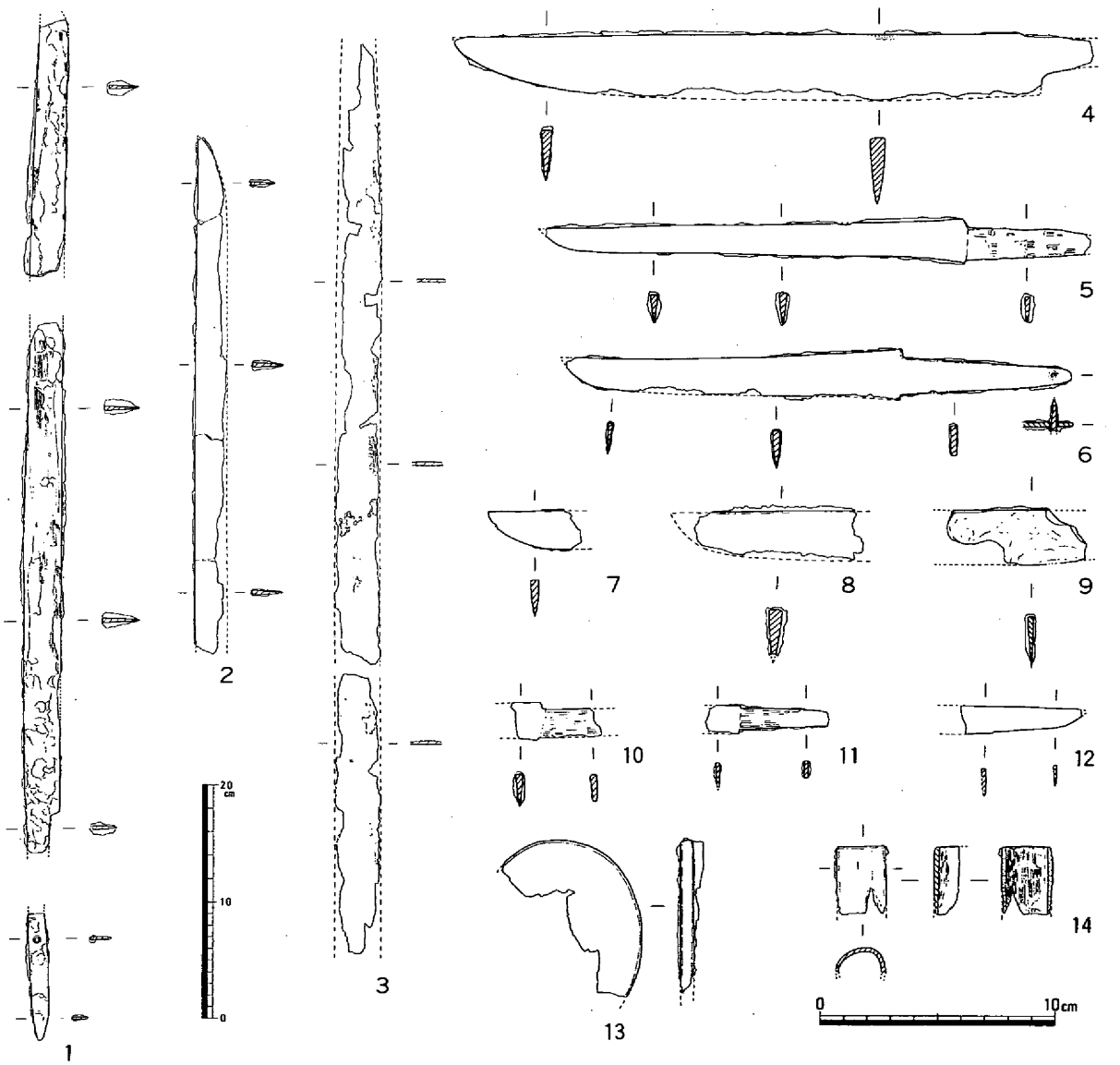
鉄器

大刀・刀子（第63図、図版24、表－７）

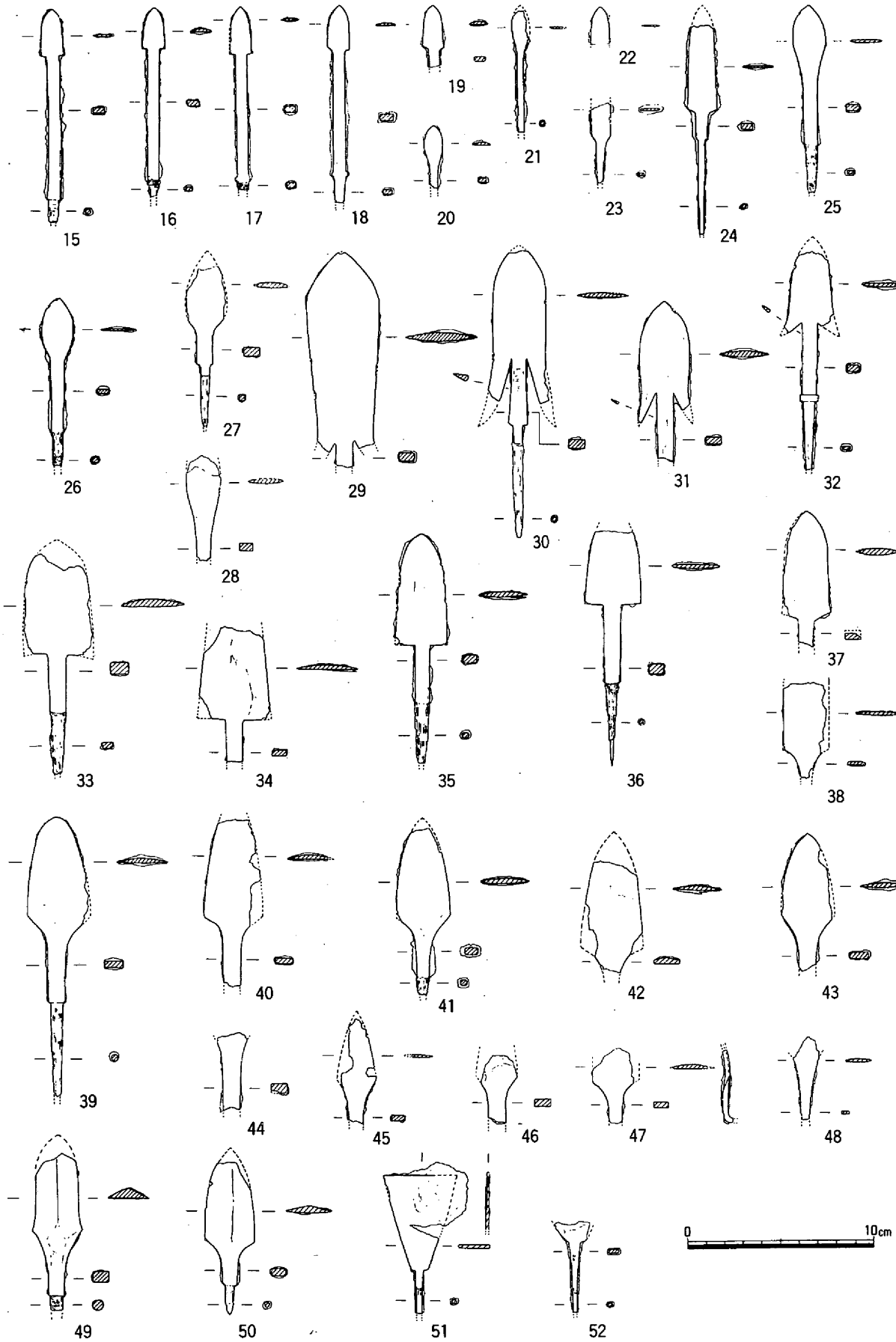
１の大刀は３個体に破損している。断面が二等辺三角形の平造である刀身幅は3.3cmで、関は片側のみに段を有する。茎尻はやや尖り気味で、目釘穴は１か所認められる。刀身には鞘の木質が付着している。２は刀身幅2.7cmを測るが、関や茎の部分は欠損して不明である。３も大刀であるが、錆化が極度に進行して端部全体が剝離している。４～12は刀子である。６はほぼ完形で全長21.6cm・刀身長15.4cm・茎長6.2cmを測り、茎の１か所に目釘が残存する。13の鍔は倒卵形を呈し、透し穴は認められない。14は刀子の鞘である。内面に木質が存在する。

鉄鏃（第64・65図、図版24、表－７）

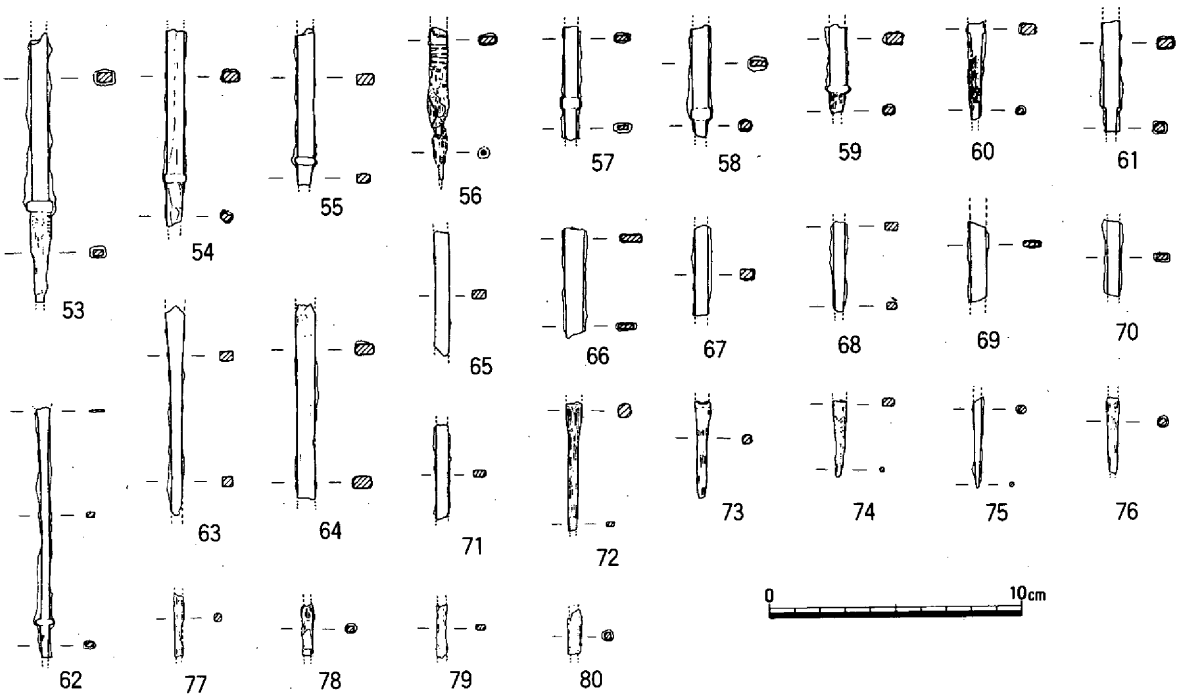
15～28は尖根系の鉄鏃である。15～21は長頸柳葉式であり、24～28は鏃身部は幅が広く作られている。29～43と49～52は平根系の鉄鏃で、29～32が腸抉柳葉式、33～36が長三角形式、37～43・49・50が柳葉式（49・50は鏃身部に鎬をもつ）、51・52が方頭式である。また53～71は長頭式鉄鏃の頸部破片であり、72～80は茎部の破片である。



第63図　２号墳第４主体部出土大刀・刀子（１～３：1/6，４～14：1/3）



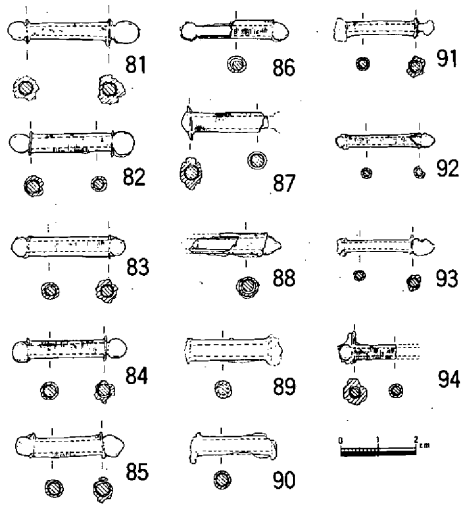
第64図　２号墳第４主体部出土鉄鏃（１）(1/3)



第65図　２号墳第４主体部出土鉄鏃（２）(1/3)

弓飾金具（第66図、図版24、表－７）

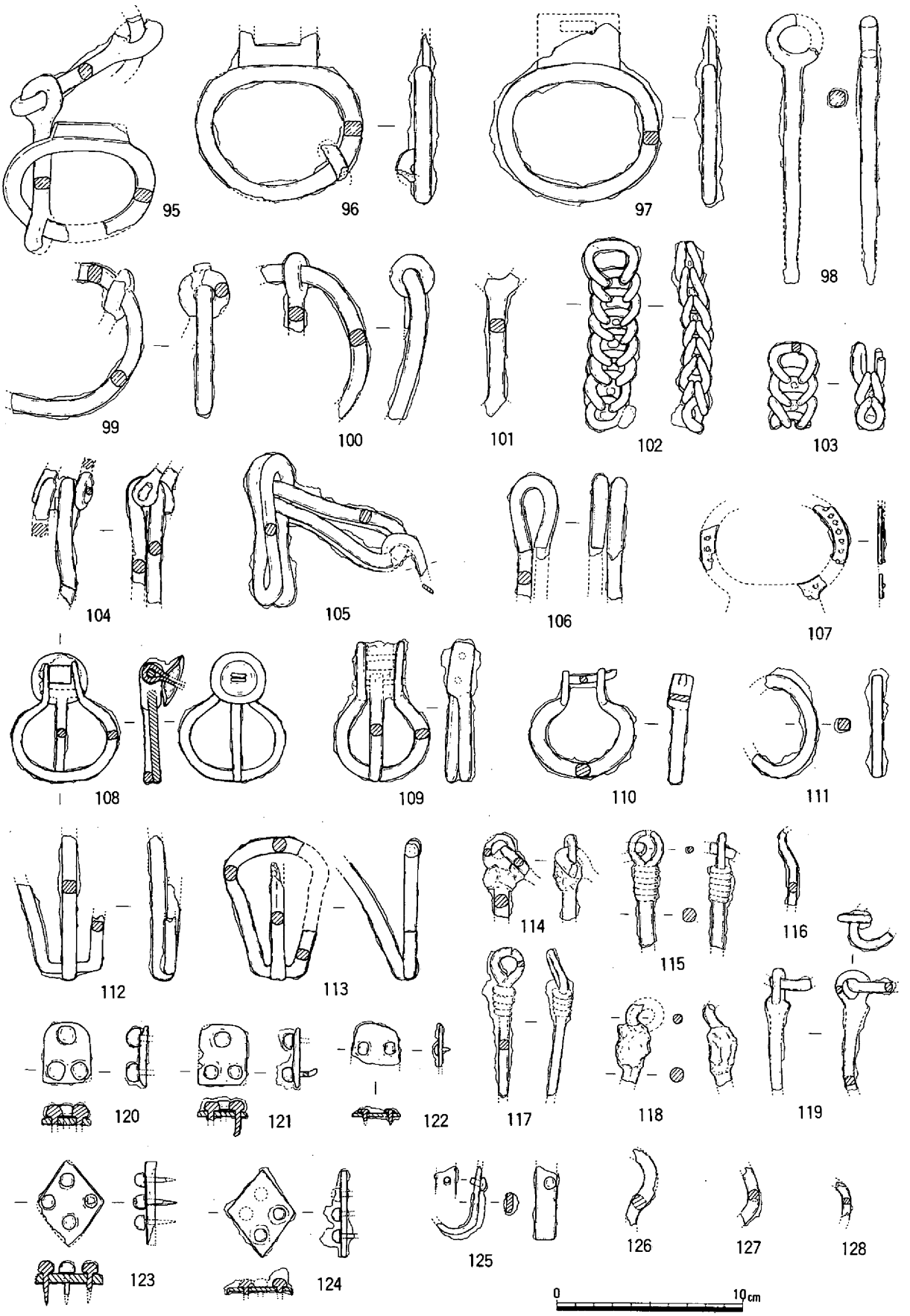
両頭部は球形を呈している。両頭部の基部には、花弁状突起を持つものが認められる。中間部分の棒状部には、直交する方向の木目が残存する。



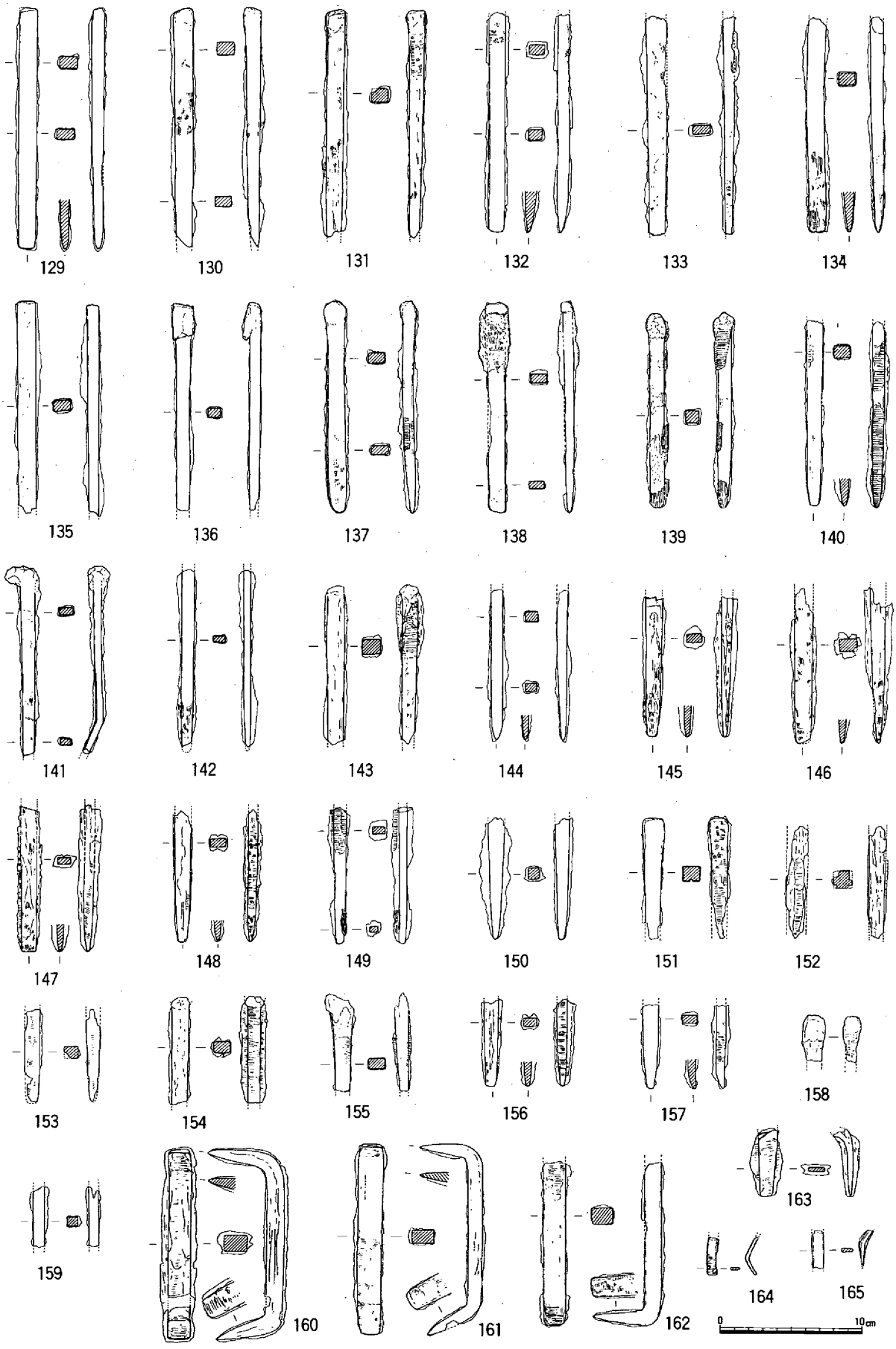
第66図　２号墳第４主体部出土弓飾金具(1/2)

馬具（第67図、図版25、表－７）

95～103は環状鏡板付轡である。鏡板の形態から判断すると、３個体が存在するであろう。二連式銜が付属している鏡板（95）は、幅は8.4cmであるが、高さは立聞の部分を欠損しているから7.4cm以上になる。96と97の鏡板は同一個体の轡のもので、幅8.7～9.0cm・高さ約10.0cmを測る。98は引手である。102と103は鏡板の立聞につく兵庫鎖で、少なくとも８連以上になる。104～106は鐙の兵庫鎖で、木製の壷鐙に付属していたと思われる。104には鋲具との接続部分が残存し、105は鐙の釣金具に接続されている。107は剣菱形杏葉の縁金具で、鉄地金銅貼になっている。上部の扁円形部分の破片と、下部の菱形部分との接点に位置する破片が認められる。108は鞍であるが、径2.8～3.0cmを測る円形の座金を有する。109～113は鋲具であるが、109～111の３点が座金のない鞍になる可能性もある。114～119は轡の銜または引手の一部で、前述した95～103より細くなっているから別個体である。端環の基部は、鉄棒を巻付けて装飾を施している。120～122は爪形の飾金具で、縦3.4cm・横2.7～2.8cmを測る。鋲が３個認められ、鉄地金銅貼である。123と124も飾金具であるが、縦4.6～4.7cm・横3.6cmの菱形を呈している。鋲は４個存在し、鉄地金銅貼になっている。125は轡の鏡板に接続する釣金具と推定されるが、小破片であるために断定はできない。126～128は鋲具などの一部と思われるが、詳細は不明である。



第67図　２号墳第４主体部出土馬具（1/3）



第68図　２号墳第４主体部出土釘・鎹（1/4）

釘・鎹（第68図、図版25、表－７）

鉄釘（129～159）は明確な頭部を作り出していないものが多いが、その中でも141は打ち伸ばして「L」字形に折曲げ頭部を形成している。木目が付着している状態を観察すると、全体に縦方向のもの（130）、全体に横方向のもの（140）、上半部が横で下半部が縦のもの（131・139・143）がある。鎹（160～163）は「コ」字状を呈するが、やや外反気味に折り曲げられている。内面にはいずれも横方向の木目が認められる。164と165は、小破片のため何であるのか不明である。

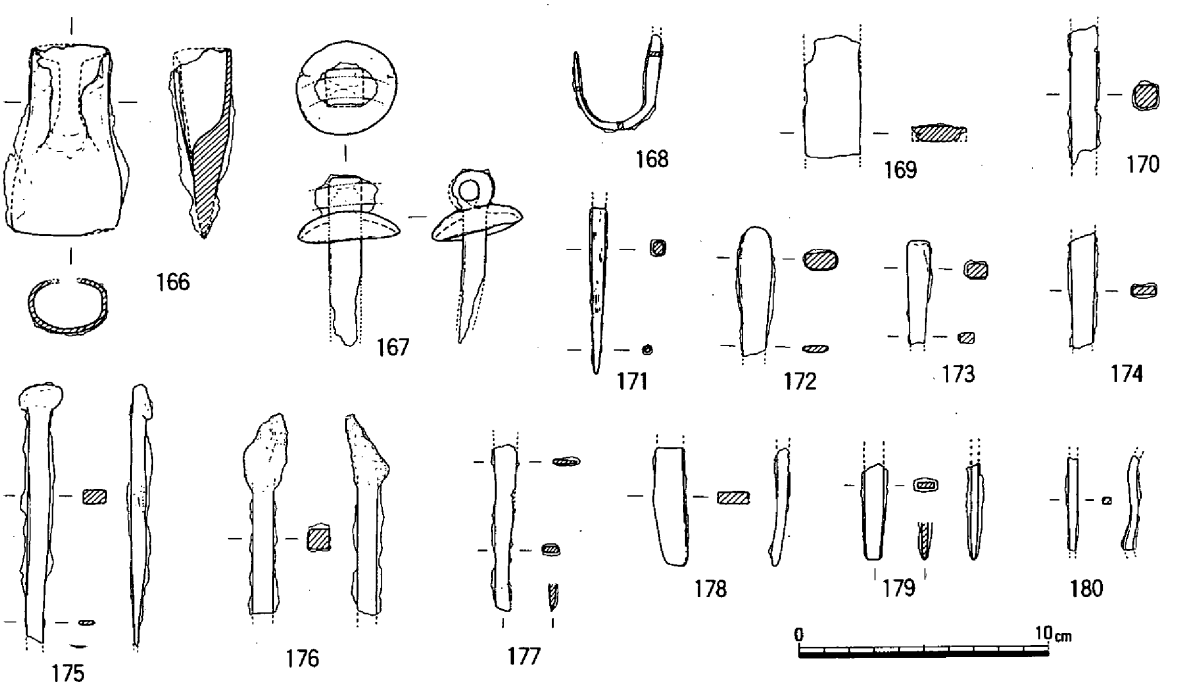
その他の鉄器（第69図、図版25、表－７）

有袋鉄斧（166）は全長7.5cm・刃部幅3.8cmを測り、袋部は両側から折り返して形成している。167は木棺に付属する環座金具か馬具の鞍と思われるが、断定はできない。平面形が円形を呈する笠形の座金を持ち、足の断面形は長方形である。座金上方の部分は、明確ではない。168は何か不明であるが、釣針になるのかもしれない。169～179は鉄釘と推定されるが、180は不明である。

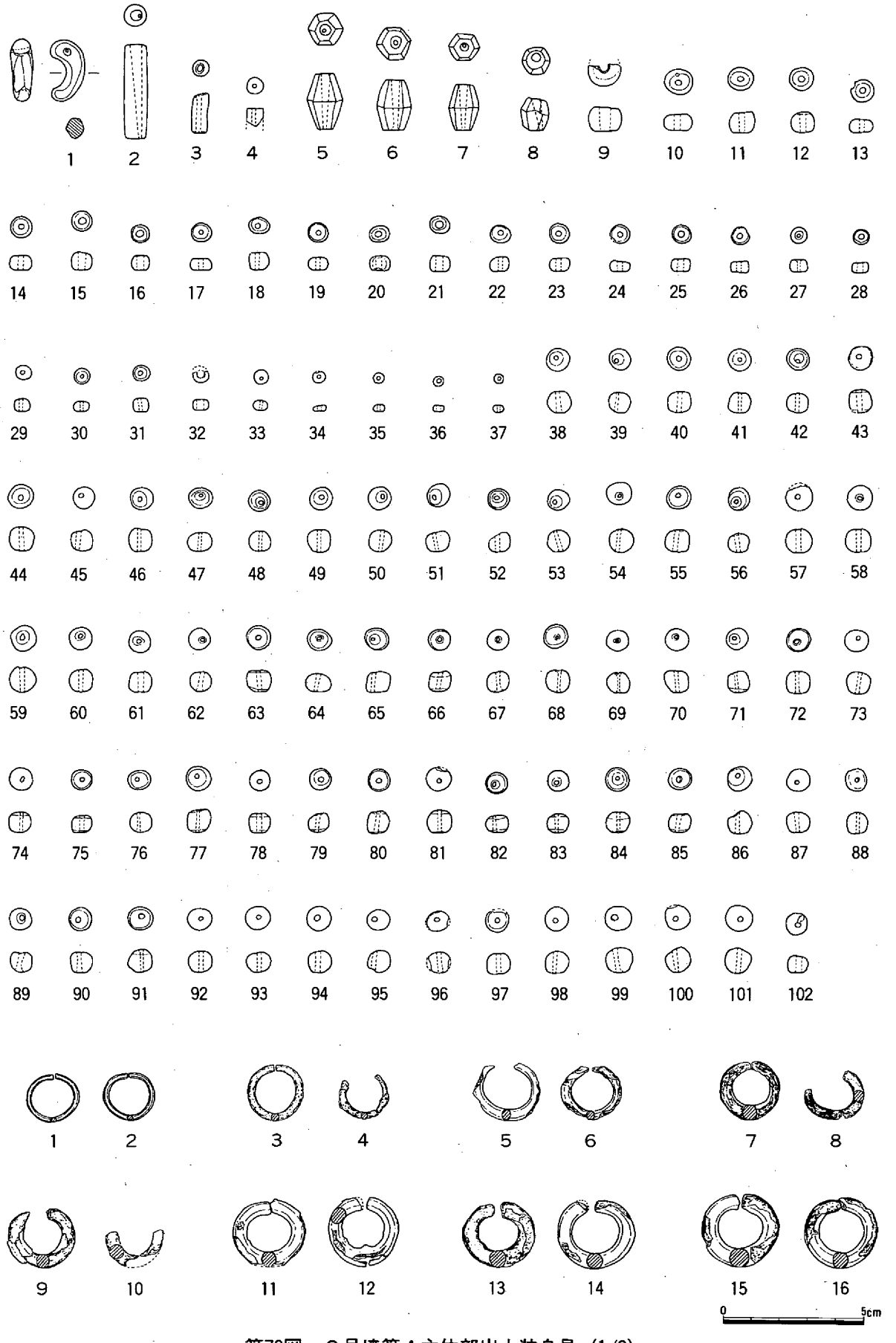
装身具（第70図、図版26、表－10・12）

玉類　２号墳の第４主体部から出土した玉類は、勾玉１点、管玉１点、切子玉４点、小玉94点となっている。勾玉（１）は暗赤褐色の瑪瑙製で、長さ22.0mm・幅12.4mmを測る。管玉は碧玉製（２）とガラス製（３・４）があり、後者は前者より規模が小さい。切子玉（５～８）はすべて水晶製で、６面加工である。小玉にはガラス製（９～37）と土製（38～102）がある。前者は大きさや形態が多様であるが、いずれも紺色を呈している。後者は黒色または黒褐色の練玉で、土砂との見分けが難しく非常に壊れやすいから、図示した以上の点数が副葬されていたと思われる。

耳環　８対16点の耳環が出土している。１と２は断面径0.18～0.21cmの細い金製で、極めて精巧な仕上げである。３と４は銀製で、断面形が多角形を呈している。５・６と９・10は出土した位置の状況からセットになると考えたが、鉄地金銅貼と鉄地銀貼の相違がある。11～16はいずれも鉄地金銅貼であるが、表面が剥離して全体に錆が付着している。



第69図　２号墳第４主体部出土その他の鉄器（1/3）



第70図　２号墳第４主体部出土装身具（1/2）

4．5号墳

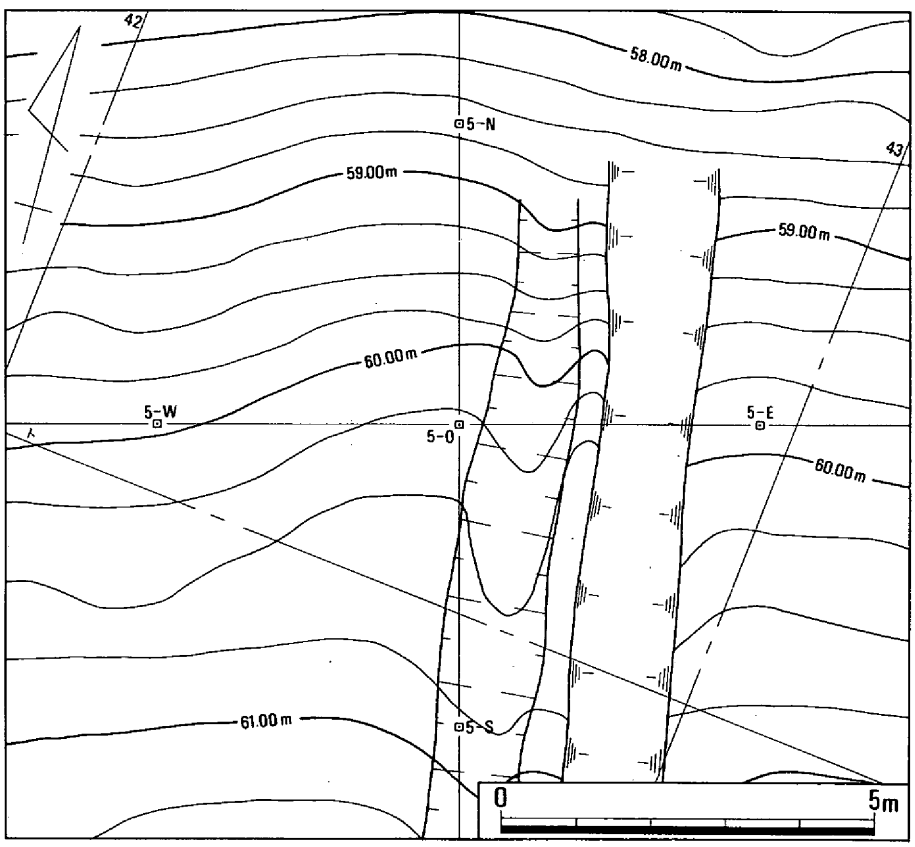
(1)　調査前の状況（第71図）

この古墳が所在した地点は1号墳の北側斜面で、尾根頂部から続く果樹園に伴う肥料穴または排水溝と考えられる深い溝が南北方向に存在した。その溝を掘削して生じた土砂を積み上げたにしては、やや不自然な高まりが認められたため、一次調査でトレンチによる確認調査を行った。その結果、高まりの中心部分に埋葬施設である箱式石棺を検出し、墳丘の盛土と周溝の一部も存在したため、新しく発見した斎富5号墳と命名し、発掘調査を実施した。

(2)　墳丘と周溝（第72図、図版27－1）

5号墳は1号墳の北側斜面に所在したため、地形の高い南の周溝底部と地形の低い北の周溝底部では、約1.80mの高低差が認められた。また1号墳や2号墳と同様に、この5号墳の地点もぶどう畑の果樹園に造成されていたため、墳丘が南北方向に走る数条の溝によって削平されていた。北側に位置する墳丘の盛土は、赤黄灰褐色土と黄褐色粘質土の間に赤褐色土を薄く積み上げ、墳丘が崩壊しないように配慮されていた。主体部主軸方向の墳丘断面の観察によると、墳丘の高さは約90cmと低く、後世に墳頂部が削平されていると判断した。この5号墳は円墳で、墳丘の規模は直径約7mとなり、主体部は箱式石棺が1基だけであった。その主体部は、墳丘の盛土が完了した後に中心部分を隅丸長方形に新しく掘削し、底部が地山面より低くなるように掘り窪めて構築していた。

5号墳の周溝は、地形の低い北側では検出できなかった。残存状態が比較的良好な地形の高い南側では、検出面での幅が100～140cmを測り、断面が緩やかな「U」字形を呈していた。また周溝底部の海抜高は約8040cmで、全体に黄灰褐色土が堆積していた。

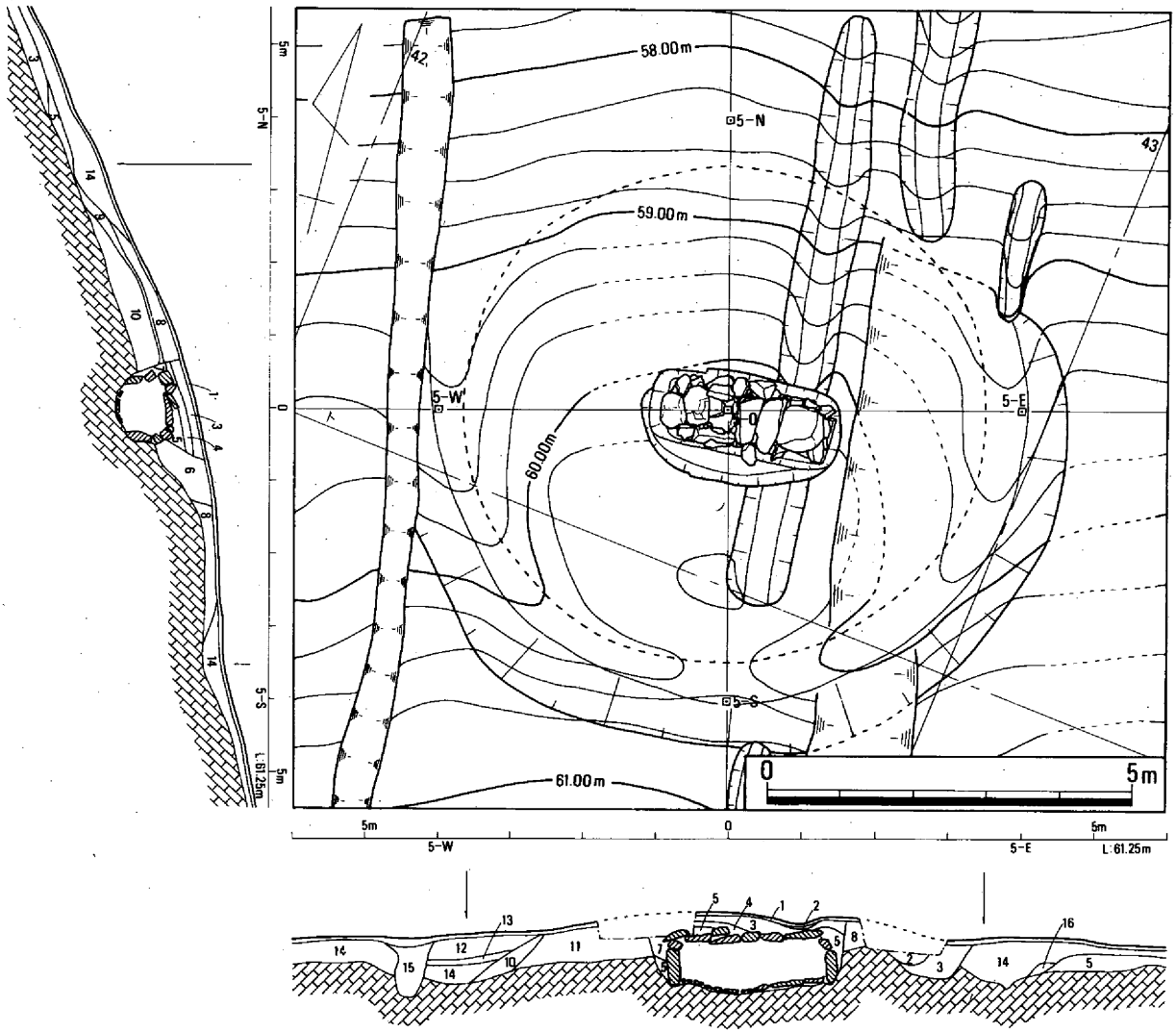


第71図　5号墳調査前墳丘地形測量図（1/100）

(3)　**主体部**（第73図、図版27—２・３）

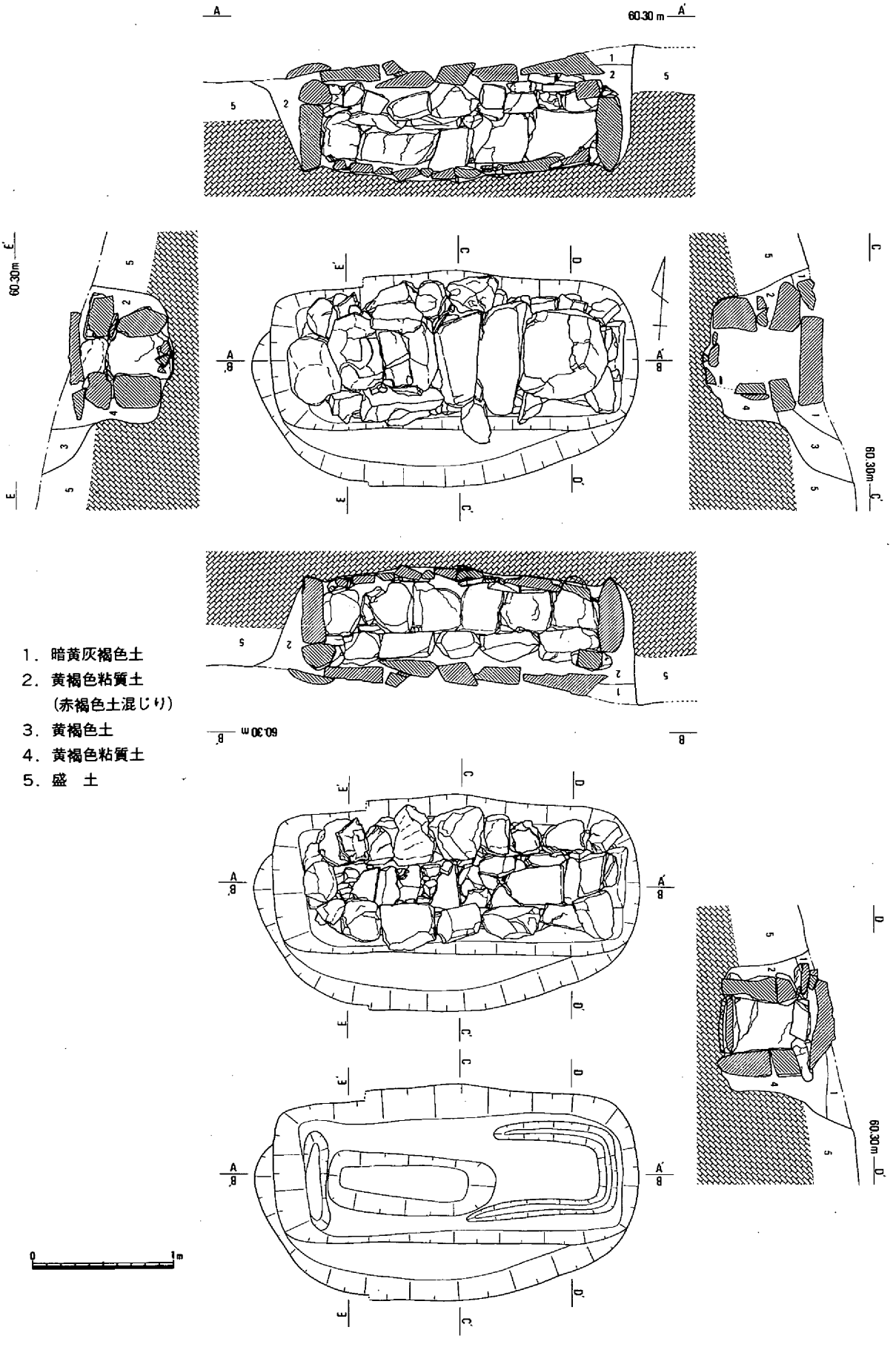
５号墳で検出した主体部は、墳丘のほぼ中央で検出した箱式石棺の１基だけである。墳丘盛土は後世の果樹園造成によって削平されていたが、主体部の箱式石棺は破壊されずに完全な状態で、築造当時の姿を保持していた。

主体部の主軸は斜面方向と直交し、等高線に平行するように造られており、Ｎ—83°—Ｅになっていた。墳丘中央部に主体部を築造する掘り方は、墳丘の盛土が完了した後に掘削し、底部では地山面を35～55cmの深さに掘り下げていた。主体部の天井石は６枚で、精査したが石材の間に粘土は存在しなかった。北側と南側の側壁は２段構造になっており、下段は５～６個の石材を立てて並べ、上段は

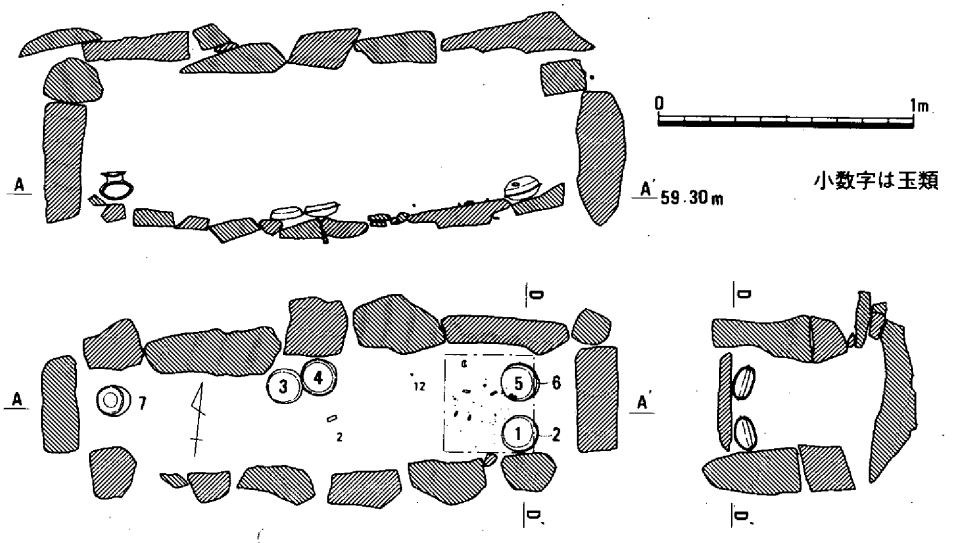


1．黒褐色土（表土）
2．灰褐色土
3．暗黄灰褐色土
4．赤褐色土
5．黄褐色粘質土
6．黄褐色土
7．黄褐色土（赤褐色土混じり）
8．赤黄灰褐色土（盛土）
9．赤褐色土（盛土）
10．黄褐色粘質土（盛土）
11．黄褐色土（盛土）
12．暗黄褐色土
13．黒灰黄褐色土
14．黄灰褐色土
15．黒黄褐色土（しまり弱い）
16．黄褐色粘質土（炭混じり）

第72図　５号墳調査後墳丘地形測量図および墳丘断面図（1/100）



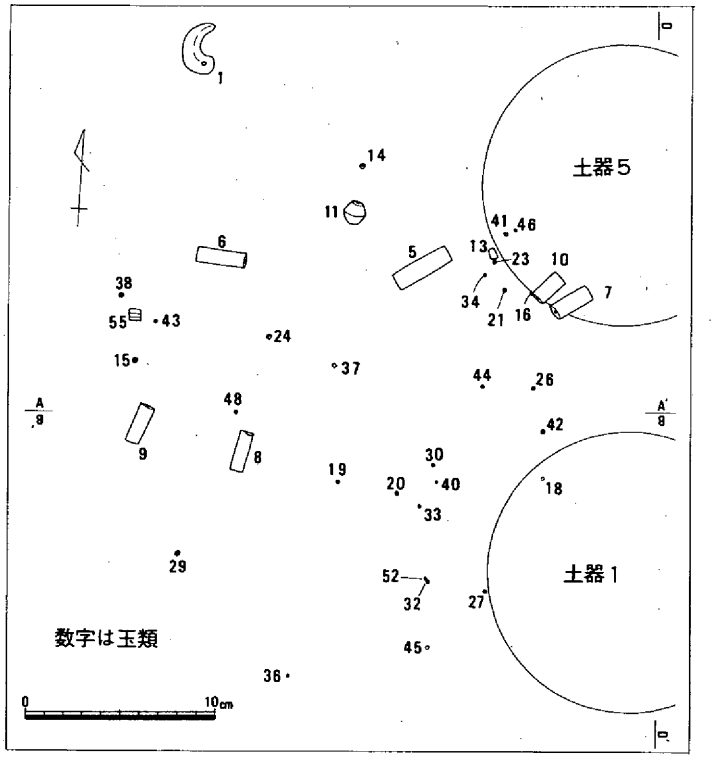
第73図　５号墳主体部平断面図（1/40）



第74図　５号墳主体部遺物出土状況（1/30）

小規模の石材を横口積または小口積にしていた。東側と西側の小口も側壁と同様に２段構造で、１個の扁平な石材を立てて据えた上に別の石材を横口積にして置き、さらに天井石を乗せていた。底部には板石を敷き詰めていたが、床面は東から西に向かって緩やかに傾斜していた。

５号墳の主体部である箱式石棺の内法は、長径195cm・短径28～38cm・高さ55～60cmを測り、東側小口が西側より幅が広くて天井が高く、首の周囲に着装されていたと考える装身具が東側小口に近接した部分に集中して出土し、さらに枕石の代用品と思われる須恵器の杯身と杯蓋のセットが並べて置かれているなど、この主体部の箱式石棺に埋葬された遺体の頭位は、東側に位置するであろう。



第75図　５号墳主体部装身具出土状況（1/4）

⑷　**遺物出土状況**（第74・75図）

５号墳の主体部から出土した遺物は、７点の完形品須恵器と54点の玉類である。

４点の須恵器は、東側小口に近接した位置に杯身と杯蓋をセットにして並べて置き、遺体の頭部を安定させる枕の役目をなしていた。残る杯身と杯蓋は、北側の側壁の中央部で、壁面に接して２点が並んで出土した。須恵器の小型壺は、西側の小口に近接した地点に、口縁部を上にして出土した。

54点の玉類は、遺体の頭部を安定させるために杯身と杯蓋をセットにして並べて置かれた位置から主体部の中央にかけての部分に、集中して出土した。その出土状況から推定して、埋葬された遺体に装飾した首飾りであった可能性が強い。

(5)　遺物

須恵器（第76図、図版28、表－２）

５号墳の主体部から出土した須恵器は、杯身３点、杯蓋３点、小型壷１点の合計７点で、いずれも完形品である。そのうち杯身と杯蓋は合わせた状態または近接地より出土したから、法量や色調なども考慮してセット関係になると判断した。

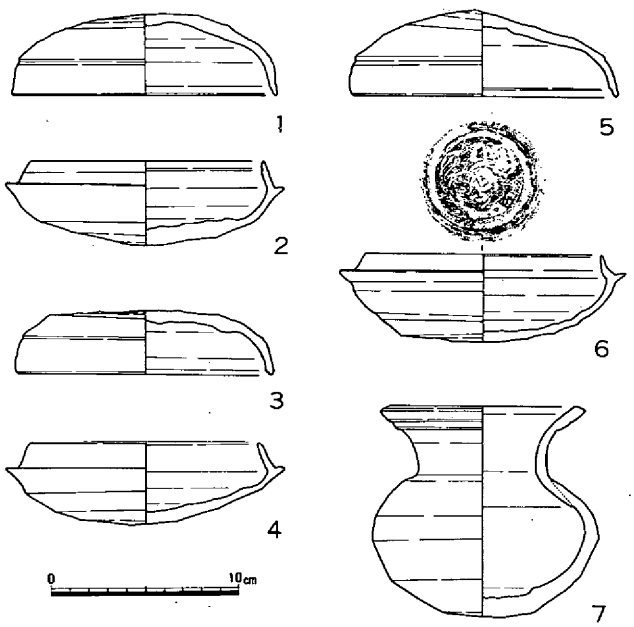
杯身の計測値は口径11.8～12.6cm・器高4.2～4.8cmとなり、内面口縁端部に段が認められるもの（２）や内面底部に同心円のタタキ痕跡を有するもの（６）がある。杯蓋の計測値は口径13.7～14.4cm・器高3.4～4.6cmとなり、いずれも外面の天井部と体部の境に稜が存在し、内面口縁端部に段または稜を有する。

小型壷（７）は口径9.6～9.8cm・器高11.3cm・胴部最大径12.1cmを測り、焼成は良好で全体に自然釉が付着している。

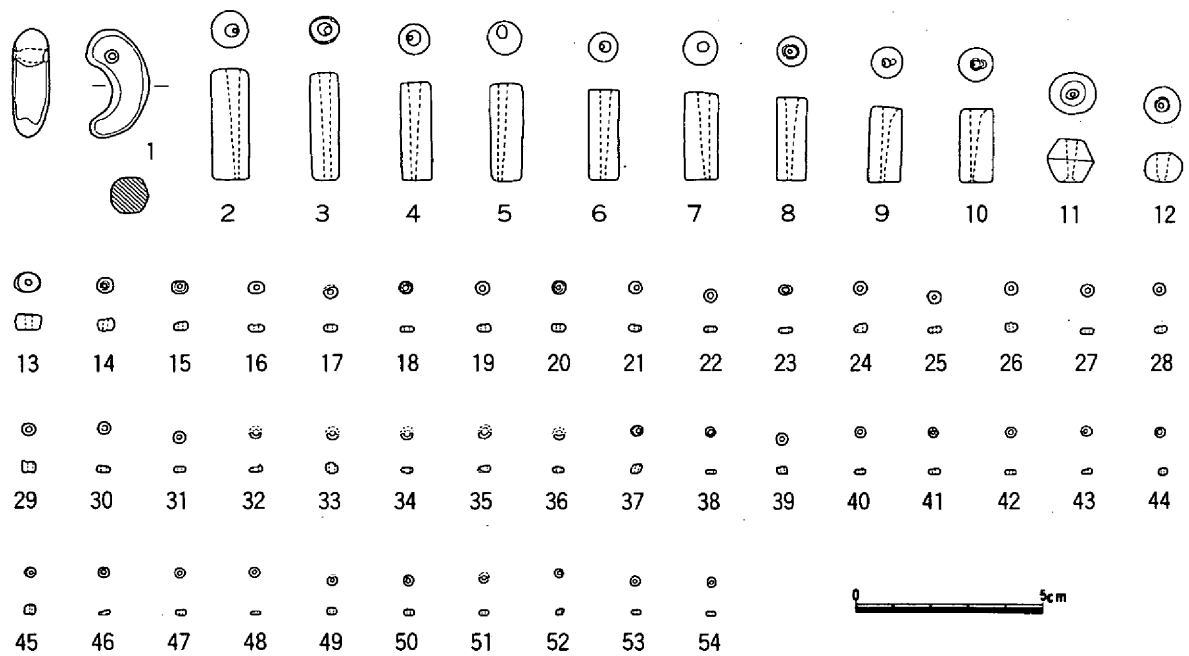
装身具（第77図、図版28、表－10）

装身具は玉類だけである。その種類は、勾玉１点、管玉９点、算盤玉１点、丸玉１点、小玉42点の、合計54点である。

勾玉（１）、算盤玉（11）、丸玉（12）の石材は、透明な水晶である。管玉（２～10）は、いずれも濃緑色の碧玉を使用し、片面穿孔となっている。小玉（13～54）はすべてガラス製であり、青または緑色が多いが、紺色（13・42）や赤茶色（39・52）のものも認められる。



第76図　５号墳主体部出土土器（1/4）



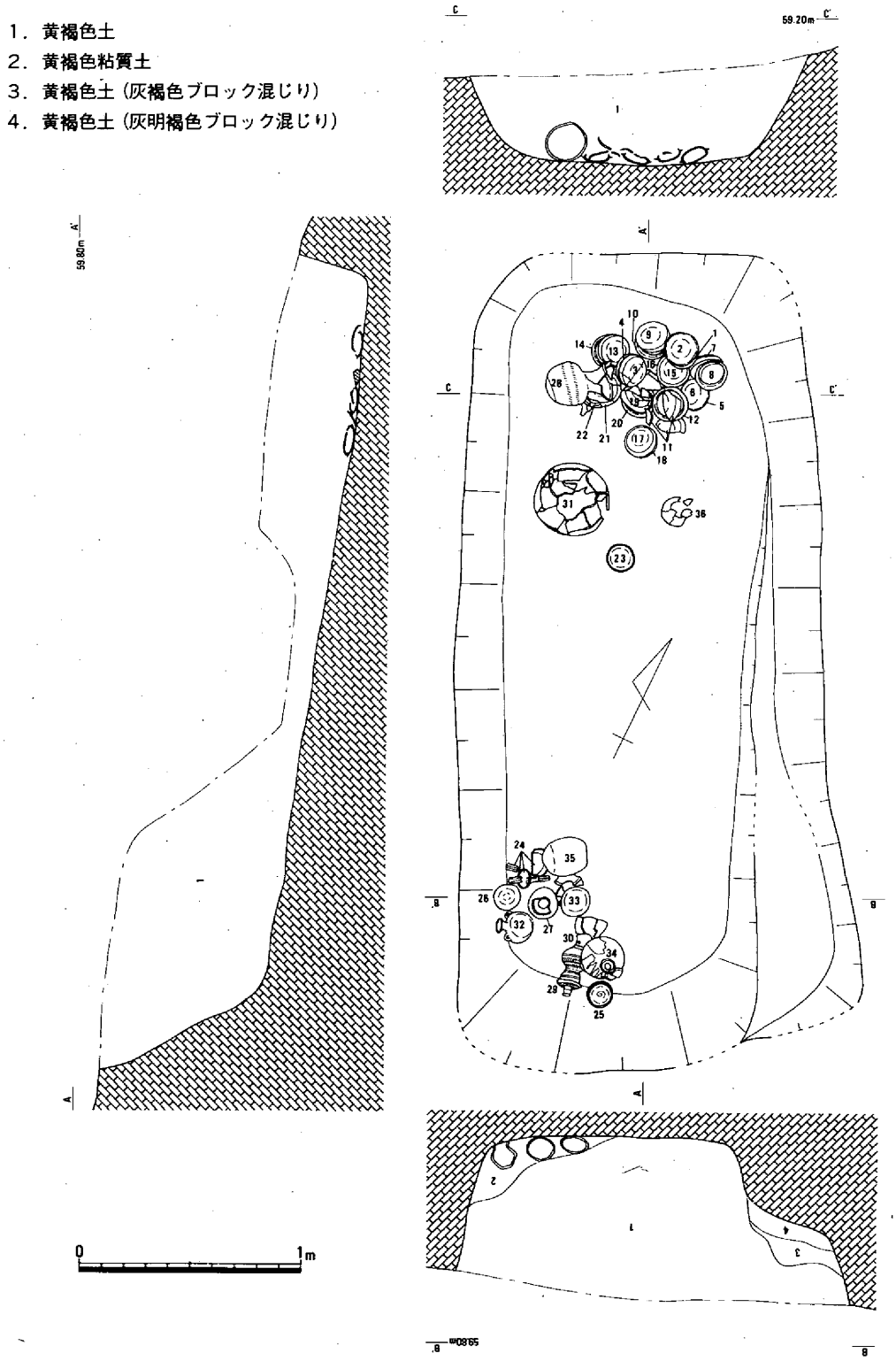
第77図　５号墳主体部出土装身具（1/2）

5．土壙墓22

(1)　主体部（第78図、図版29—1・2）

5号墳の西方向約7mの地点で、土器棺墓1の下層から検出した土壙墓である。埋葬施設である主体部が存在するだけで、その上位に墳丘状の盛土は確認できなかった。

主体部の平面形は隅丸長方形を呈し、東に面する側壁は2段掘りになっていた。検出面での土壙墓



第78図　土壙墓22平断面図および遺物出土状況（1/30）

上面の規模は、長径365cm・短径145～180cm・深さ40～60cmであった。底部の海抜高は5850～5895cmとなり、底面が南から北に向かって傾斜していた。底部の計測値は長径315cm・短径95～115cmを測り、中心部分に黄褐色を呈する土砂が堆積していた。

土壙内に置かれた木棺の追求に努力したが、精査したにもかかわらず検出できなかった。しかし25の杯蓋と36の土師器壷は、床面から浮いた状態で出土したから、33の提瓶と36の平瓶の東脇から31の壷の東脇まで、土壙の東側に片寄って木棺が入っていたと推定した。なお南側は31の脚付長頸壷の脚端部に、北側は17と18の杯のセット付近に、それぞれ木棺の角が位置するであろう。

(2)　**遺物出土状況**（第78図、図版29－１・２）

この土壙墓からは35点の土器（29の蓋は30の脚付長頸壷の付属品と考える）が出土したが、土師器は図化できなかった壷（36）の１点のみだった。また土器以外の遺物はなく、この古墳群で検出した主体部では特異な状況であった。これらの多くの土器は、土壙墓の南北両端部に集中して存在した。地形の高い南端部には、高杯・台付椀・直口壷・広口壷・脚付長頸壷・提瓶２・平瓶・横瓶が認められ、杯は１点もなかった。土壙の床面から浮いた状態で出土したのは、台付椀（25）と平瓶（34）である。地形の低い北端部には、杯蓋と杯身のセット11・広口壷・大型壷が床面に接して存在し、杯蓋１点（23）と土師器の壷（36）は床面から浮いていた。この土壙墓に埋葬された遺体の頭位は、地形の高い杯が存在しなかった南側と推定されるから、遺体の部位と副葬する土器の器種について、何らかの意図があったと考える。

(3)　**遺物**

須恵器（第78・80図、図版30・31、表－２）

杯身・杯蓋　この土壙から出土した杯身と杯蓋は23個体で、23を除く22個体が身と蓋を合わせた状態にして並べていた。そのセット関係は第79図に示した通りであるが、その法量・胎土・焼成・色調・調整手法などを念入りに観察した結果、３と４・７と８・17と18は身と蓋が異質で整合しない。また23の杯蓋は、床面から浮いた状態で出土し、法量も他の杯蓋に比して極めて小さく、この個体だけが外面の天井部をヘラ切り未調整になっていることから、後世の混入と考えた。杯身は口径12.3～13.2cm・器高3.7～4.5cmで、口縁端部は丸く仕上げている。外面の底部はヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施している。杯蓋は口径13.7～14.7cm・器高3.7～4.4cmで、外面の天井部と体部の境に稜があるものや、内面口縁端部に段を有するものが多い。また身と蓋に共通して、内面に同心円のタタキ痕跡が認められるものや、外面にヘラ記号と推定される痕跡が存在するものがある。ロクロの回転方向は、１・２・４～10が右、３・11～22が左である。

高杯　長脚２段透しの無蓋高杯で、口縁や脚の端部は丸く仕上げている。口径11.0cm・器高16.9cmを測り、全体に暗青灰色を呈している。

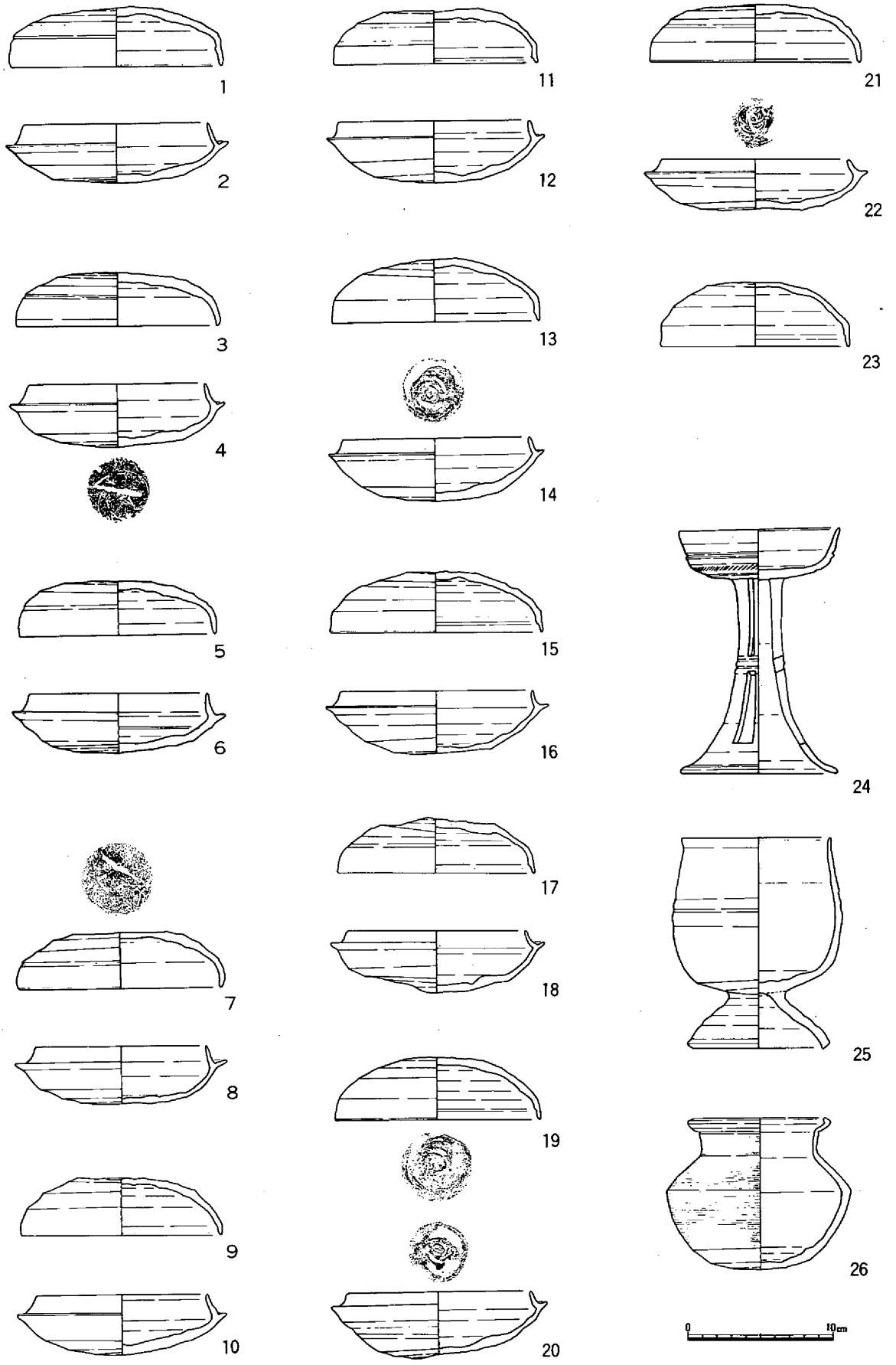
台付椀　計測値は口径10.1cm・器高14.6cm・台径9.0cm・胴部最大径11.6cmで、灰色を呈している。

壷　器形の異なる５個体が出土した。小型のものは外面にカキメが認められ、広口壷と脚付長頸壷には板状工具の刺突文を施している。大型壷の胴部から底部には、内外面ともタタキ痕跡が残存する。

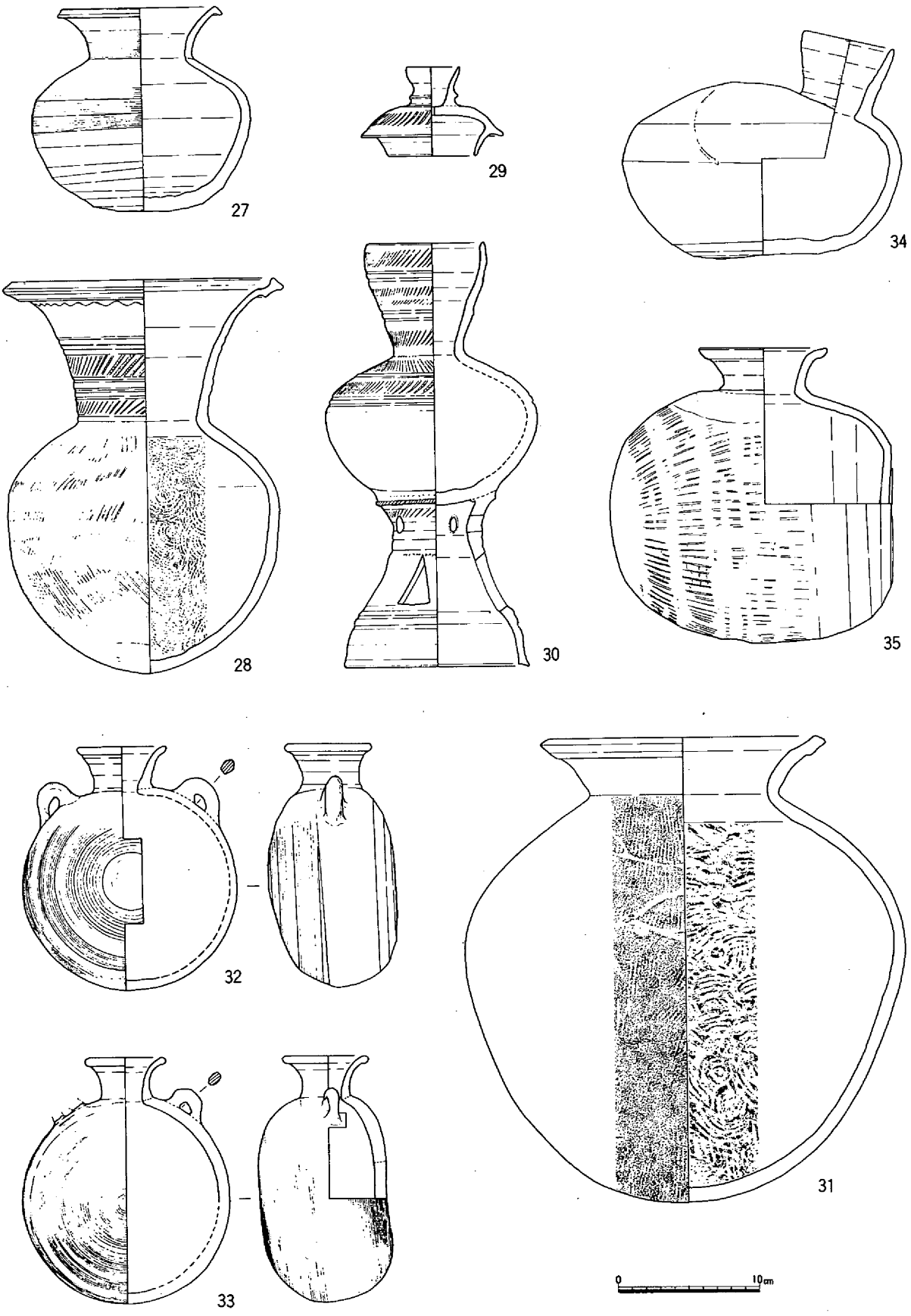
提瓶　２個体とも環状の耳を有する。胴部にはカキメが存在し、口縁部はヨコナデを施している。

平瓶　口径6.3cm・器高16.0cm・胴部最大径19.6cmを測り、外面全体に自然釉が付着している。

横瓶　口径9.3cm・器高20.8cm・胴部最大長20.0cm・胴部最大径17.9cmを測り、焼成は不良である。外面の胴部はヘラケズリやヨコナデを施しているが、格子目状のタタキ痕跡が残存する。　（福田）



第79図　土壙墓22出土土器（1）(1/4)

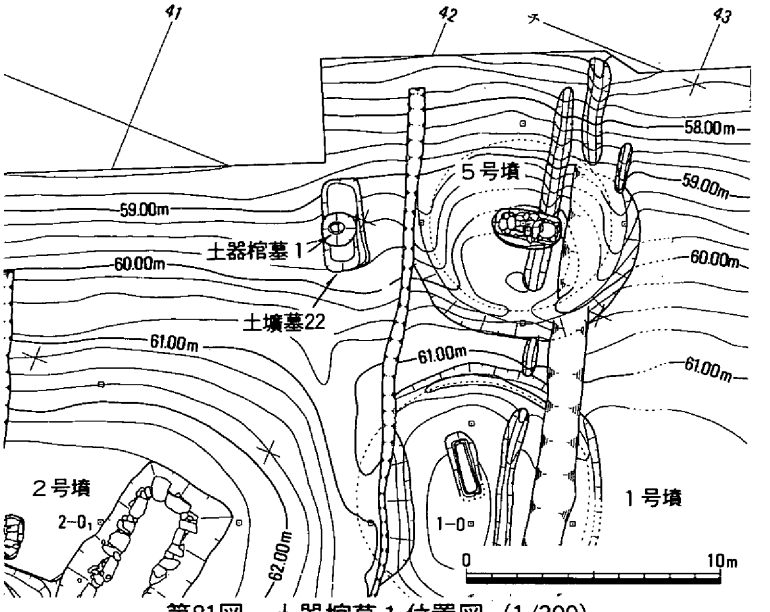


第80図　土壙墓22出土土器（2）(1/4)

4．古代～中世の遺構・遺物

1．土器棺墓1（第82図、図版29）

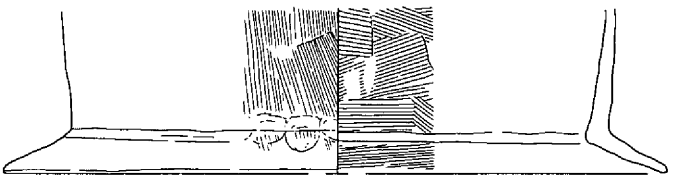
発掘調査を実施した丘陵の北東端部に位置する比較的急斜面の部分に存在し、前述の5号墳から西方向へ約7mの地点となっていた。それぞれの口縁部を合わせて横たわる土師器の甕2個が出土したため、その周辺を精査した結果、土壙内に置かれた土器棺墓であることが判明した。

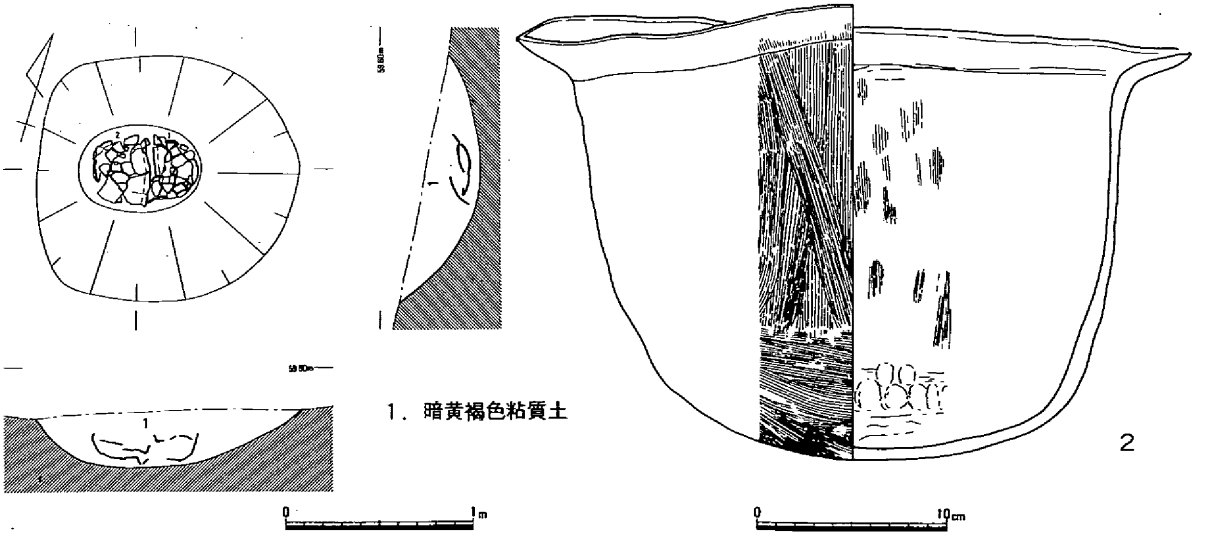


第81図　土器棺墓1位置図（1/300）

土壙の平面形は楕円形に近い形態を呈し、検出面での規模は長径140cm・短径130cm・深さ30cmになっていた。土壙の断面形は浅い「U」字形となり、内部に2点の土器を覆うように暗黄褐色の粘質土が堆積していた。この土壙の底部は黄褐色の軟質土で、地山ではなかった。それで調査終了後にこの土壙を半裁した結果、下位から多くの須恵器が出土したため、前述した土壙墓22の所在が明らかになったのである。このような状況から、土器棺墓1は土壙墓22の上面にできた窪地を利用して造られたと判断した。なお土師器の甕2点の内部を調査したが、遺物はなかった。

2点の甕は、口縁部が「L」字状に屈曲し、内外面にハケメを施している。2の内面の胴部はユビナデを加え、底部はユビオサエを行っている。これらの土器はあまり見かけない器形であるが、平安時代前葉の時期に比定されるであろう。


1

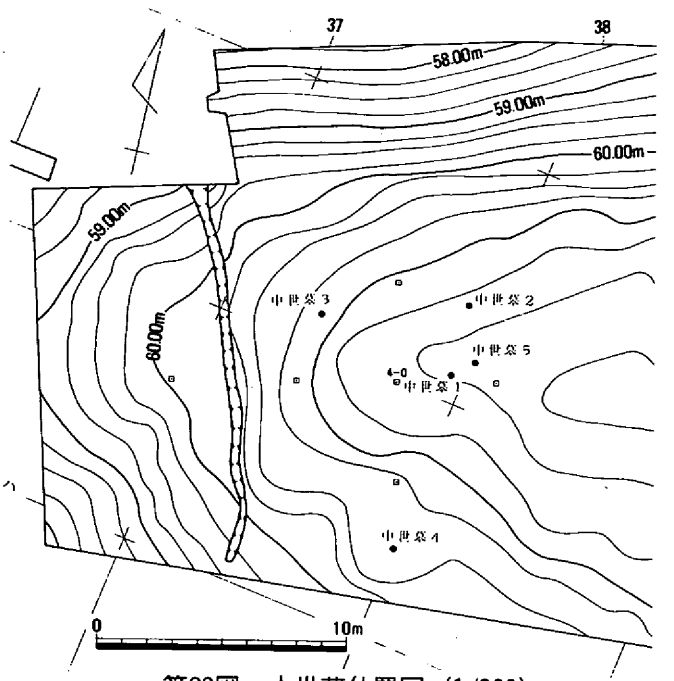


第82図　土器棺墓1平断面図（1/40）および出土土器（1/4）

2．中世墓

(1)　概観

中世墓を検出した地点は、当初4号墳が存在することを想定していた丘陵の西端部分である。後世に造成された果樹園が現在まで営まれていたため、いずれも極度の破壊を受けていた。したがって遺構は、すべて蔵骨器に使用したと考えられる備前焼壷の破片がわずかに残存していただけで、合計5基であった。表土除去作業中にはかなりの点数の備前焼壷小破片を採集したから、さらに数基の中世墓が存在していたと推定される。



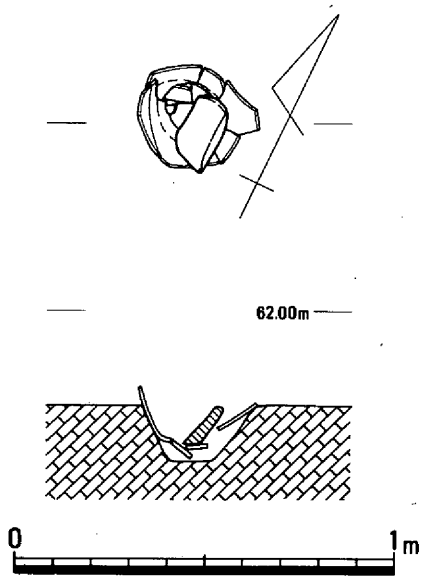
第83図　中世墓位置図（1/300）

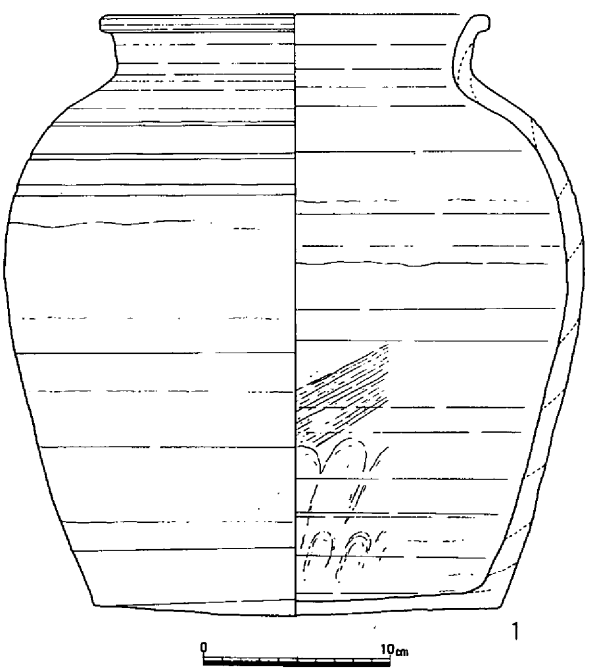
(2)　中世墓1（第84図）

今度発掘調査を実施した丘陵の西端部分で、4号墳の所在が推定された地点の尾根上に位置した。この中世墓1の北東方向約1mには、中世墓5を検出した。

果樹園によって表土が撹乱されていたため、現地に残存したのは胴部中位から下半の部分だけである。地山面を約15cmの深さに掘り窪め、備前焼壷の底部を据えていた。その掘り方の底部の海抜高は6180cmで、断面形は逆台形を呈していた。内部には扁平な河原石1個が存在し、少量の骨片が出土した。なおこの遺構が存在した所の表土除去作業中に採集した備前焼壷の口縁部から胴部にかけての破片が、中世墓1に使われていた下半のものと接合することができた。

この備前焼壷は、口径20.0cm・器高32.0cm・胴部最大径31.0cm・底径21.6cmを測り、肩部はあまり





第84図　中世墓1平断面図（1/20）および備前焼壷（1/4）

張っていない。口縁部はわずかに外傾し、端部は玉縁状を呈するものの、肥厚は未発達である。肩部には3条のヘラ描沈線を巡らせ、内部下位には斜め方向のユビナデ痕跡が残存する。胎土中には比較的大きな砂粒を多く含み、焼成は良好で全体に須恵器に酷似した青灰色を呈している。

以上のような形態的特徴や色調から、中世墓1に使われていた備前焼壷は、備前焼の分類でⅡ期後半からⅢ期前半の鎌倉時代中葉に比定されるであろう。

(3)　**中世墓2～4**（第83図）

前述した中世墓1の所在地点を中心に、約10×10mの範囲内で検出した中世墓である。

この3基の遺構は、いずれも浅い窪地に備前焼壷の破片が存在しただけで、図化は不可能だった。

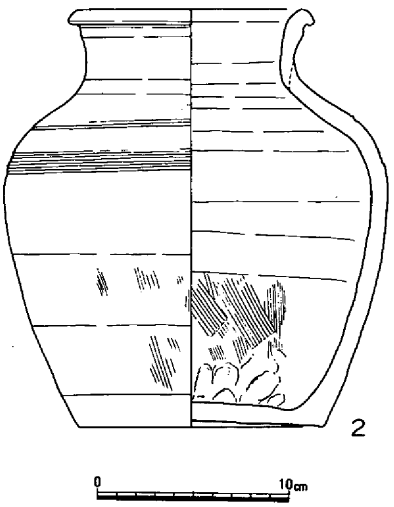
(4)　**中世墓5**（第83・85図）

この遺構も中世墓2～4と同様に、浅い窪地に備前焼壷の底部破片が存在しただけであるが、遺構検出作業中に採集していた破片が接合し、全容が明らかになったので図示した。

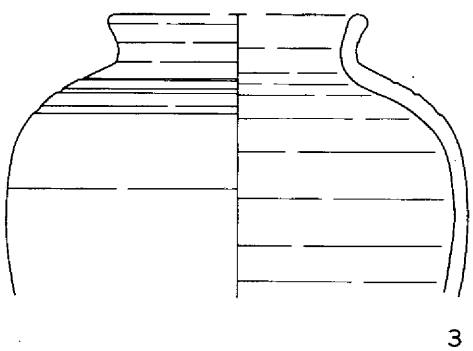
(5)　**その他の備前焼壷**（第86図）

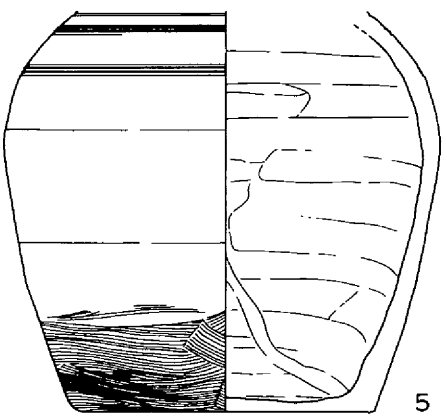
中世墓5の備前焼壷も含めて、肩部にヘラ描沈線文（2・3・5）やクシ描波状文（4）が施され、口縁部は外傾している。口縁端部の玉縁は、退化して小さくなっている。胎土中の砂粒は少なく、いずれも全体に赤褐色を呈している。

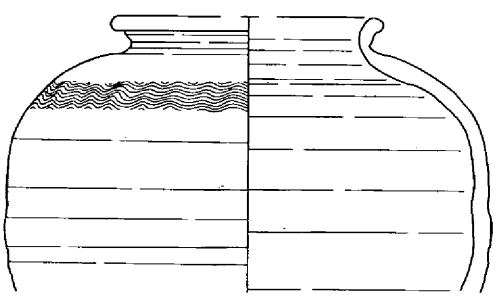
これらの備前焼壷は、形態的特徴や色調などから推定して備前焼分類のⅣ期後半からⅤ期前半に比定され、室町時代後葉の時期に属するであろう。（福田）

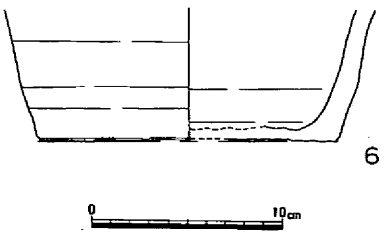


第85図　中世墓5備前焼壺（1/4）









第86図　その他の備前焼壺（1/4）

5．まとめと考察

斎富古墳群が所在した地点は、山陽町の南東部に位置する舌状に張り出した低丘陵上で、眼下には北から南に向かって流れる砂川によってもたらされた沖積平野が展開する。この地理的な立地条件に恵まれた環境を考慮しながら、発掘調査によって得られた結果に基づき、若干の説明を加えてまとめと考察を行いたい。

検出した遺構とその時代について

斎富古墳群が所在した低丘陵上へ、人間が最初に足を踏み入れたのは、弥生時代の後期である。

検出した遺構は、約20基にもおよぶ土壙墓と２基の土器棺墓である。土壙墓１の内部には、３点の土器が副葬されていた。２号墳の墳丘盛土を除去して検出した土壙墓21には、埋葬施設の西側から南側にかけて、人頭大の石10個が存在する平坦面が認められ、南壁からは底面に密着して壷の破片が出土した。この壷の底部は安定した平底を呈し、外面の胴部下位から底部にかけてヘラミガキを施しているので、弥生時代後期でも中葉の時期に属するであろう。これらの土壙墓の主軸方向は、尾根方向に平行するものと直交するものが存在した。前者には２号墳の墳丘下で検出したすべての土壙墓が該当し、後者は平野に面した丘陵の先端部分に検出した土壙墓に多く認められた。なお土器棺墓は２基だけであったが、この丘陵上が果樹園に造成された時に破壊されてしまった可能性も考えられる。

遺物が共伴しなかったので築造された時期を特定することができないが、弥生時代後期から古墳時代前半の時代に属すると推定される遺構として、丘陵の北西端部に存在した箱式石棺墓がある。

古墳時代の後半になると丘陵上は最盛期となり、１号墳、２号墳、５号墳の古墳３基が築造され、墳丘を有しない埋葬施設だけの土壙墓22も存在した。

１号墳と５号墳は墳形が同じ円墳であるが、前者は丘陵の尾根上に所在し、後者は丘陵の斜面に位置していた。また埋葬施設はどちらも１基だけであったが、前者は木棺直葬の土壙であるのに対し、後者は箱式石棺であり、相違していた。２号墳の墳形は前方後円墳に似た極めて特異な形態を呈し、竪穴式石室１基、箱式石棺２基、横穴式石室１基の合計４基にもおよぶ種々の埋葬施設が築造されていた。これらの埋葬施設は、天井石がなかったり、側壁の一部が破壊されていたものの、内部そのものは撹乱されることなく、埋葬当時の様相を良好な状態で保持していたため、竪穴式石室が最も古くて横穴式石室が最も新しいことが判明した。さらに竪穴式石室には、製作時期が明らかに異なる土器が副葬され、２対で４個の耳環も出土したから、横穴式石室のように追葬が行われたことを確認したのである。また横穴式石室には８基の木棺痕跡を検出し、大量の遺物が出土した。珍しい出土品として、比較的多くの鉄滓を採集した。土壙墓22は全面調査を実施した結果、偶然に発見できた埋葬施設だけの墳墓であったが、器形の異なる多くの須恵器が出土した。

古代の奈良時代や平安時代になると、検出した遺構が極端に少なくなり、土壙墓22の上面の窪地内に存在した土器棺墓１だけであった。２個体の土師器の甕が、それぞれの口縁部を合わせて土壙内に横たわっていた。

鎌倉時代からの中世になると、備前焼の壷を蔵骨器として使用した火葬墓を検出した。いずれも極度の破壊を受けており、存在地点が確認できたのは５基だけであった。表土除去作業中に比較的多くの点数の備前焼壷小破片を採集したから、さらに数基の火葬墓が存在していた可能性が強い。

江戸時代以降の近世になると、丘陵上を全面調査したにもかかわらず遺構は全く存在しなかった。

各埋葬施設の築造と追葬時期について

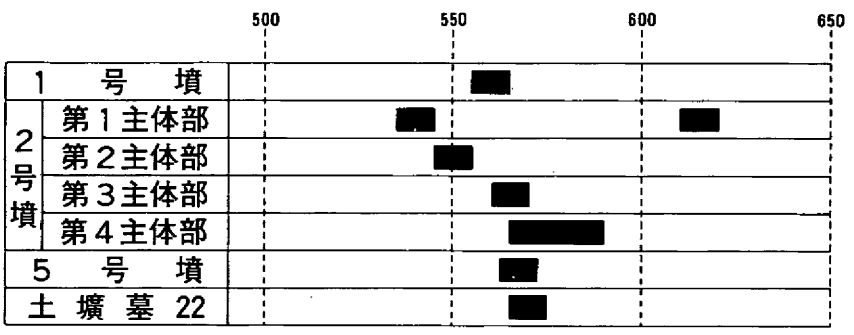
それぞれの古墳や墳墓で、須恵器が副葬品として出土した埋葬施設に関し、築造された時期や追葬の状況を考えてみたい。

斎富古墳群が所在した丘陵上には、１号墳、２号墳、５号墳の古墳３基と、墳丘を有しない埋葬施設だけの土壙墓22が検出された。そのうち２号墳には、竪穴式石室１基、箱式石棺２基、横穴式石室１基の合計４基もの埋葬施設が築造されていた。第１主体部である竪穴式石室には、時期の異なる土器を検出し、２対で４個の耳環も出土したので、追葬が行われていたことを確認した。

須恵器の杯身と杯蓋に注目すれば、竪穴式石室が築造された当初に副葬されていたのは、それぞれ12点の合計24点であり、いずれも杯身と杯蓋がセット関係になることが判明した。杯身は口径11.2～15.4cm・器高4.1～5.0cmで、口縁端部は丸く仕上げている。外面の底部はヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施している。ロクロの回転方向は時計と同じ右が多く、内面の底部に仕上げナデを施すものや、外面の底部にヘラ記号を有するものも存在する。杯蓋は口径13.0～15.4cm・器高3.9～4.8cmで、外面の天井部と体部の境に稜を有するものや、内面の口縁端部に段が認められるものが多い。外面の天井部はヘラケズリを行い、内面全体と外面の口縁部から体部にかけてヨコナデを施している。ロクロの回転方向は杯身と同様に右が多く、内面の天井部に仕上げナデを施すものや、同心円のタタキ痕跡が残存するものも存在する。また須恵器の長脚無蓋高杯には、３方向の１段透しのものがあり、３方向の２段透しが認められるものは、下段の透しが三角形を呈している。これらの杯身や杯蓋のみならず長脚無蓋高杯の形態的特徴や成形手法を陶邑古窯址群における田辺昭三氏の須恵器編年[1]と比較検討するならば、古い様相を呈する個体はＭＴ15の新相にどうにか含まれるのではないかと考えるが、主体的にはＴＫ10に属するものが多く、ＴＫ43でもいいような新しい特徴が認められるものも存在する。このように出土した須恵器に個体差が顕著な一群であるから、一応６世紀中葉でもやや前葉に近い時期としておきたい。

一方、追葬に伴う杯身は口径12.1～13.2cm・器高4.1cmで、口縁部の立ち上がりが極端に短く、断面形が三角形で著しく内傾している。底部は浅くなって不安定となり、中央部が尖った感じになっている。内面全体と外面の口縁部はヨコナデを施しているが、外面の底部はヘラ切り未調整で調整を加えていない。また杯蓋は口径11.0～14.0cm・器高4.2cmで、全体の歪みが大きく、外面の天井部はヘラ切り未調整のままである。この杯身や杯蓋を陶邑編年に対照すると、ＴＫ209の新相のものに酷似しており、７世紀前葉の時期になるであろう。

２号墳の第２主体部である箱式石棺直上の盛土内からは、重なるようにして須恵器の杯身と杯蓋が発見され、個々の焼成や色調のみならず法量や成形手法を検討した結果、２組４点のセット関係が認められた。杯身は口径12.3～12.9cm・器高4.5～4.8cmを測り、口縁端部の内側に浅い窪みが残存する



斎富古墳群で検出した各埋葬施設の築造と追葬時期一覧表

ものもある。外面の底部はヘラケズリを行い、内面の底部にはヨコナデを施した後に仕上げナデを加えている。杯蓋は口径14.4cm・器高4.7cmを測り、外面の天井部と体部の境に稜を有し、内面の口縁端部に段が存在する。外面の天井部はヘラケズリを行い、内面の天井部にはヨコナデの後に仕上げナデを加えている。ロクロの回転方向は、杯身や杯蓋ともすべて右である。前述した2号墳の第1主体部である竪穴式石室から出土した初葬に伴う杯身や杯蓋と比較するならば、全体の法量の大型化がさらに進行し、口径に比して器高が低くなっている。また外面の天井部と体部の境に存在する稜は丸くなって鈍くなり、外面のヘラケズリの面積が狭くなっている。このような2号墳の第2主体部である箱式石棺直上の盛土内から出土した杯身や杯蓋は、陶邑編年のＴＫ10のものと類似点が多く、6世紀中葉の時期と考える。

1号墳の木棺直葬と推定される埋葬施設からは、須恵器の杯蓋2点が出土した。口径15.4cm・器高4.9cmのものと口径15.9cm・器高5.9cmのもので、斎富古墳群の杯蓋では法量が最大である。外面の天井部と体部の境には、鈍い稜または凹線に似た浅い窪みが認められ、内面の口縁端部には、浅い窪みが存在する。内面の天井部は、ヨコナデの後に仕上げナデを加えているものもある。外面の天井部は回転方向が右のヘラケズリを行っているが、その面積が広いものと狭いものが存在する。前述した2号墳の第2主体部である箱式石棺直上の盛土内から出土した杯蓋と対比して検討すれば、器形全体の法量が最大に達し、内面の口縁端部に浅い窪みが存在するものの、外面の天井部と体部の境は鈍い稜または凹線に似た浅い窪みに変化している。この2点の杯蓋は、形態的特徴や成形手法から推定して陶邑編年のＴＫ43の古い段階のものでＭＴ85に近い一群に酷似し、6世紀後葉でも中葉に近い時期に属するであろう。

2号墳の第3主体部である箱式石棺からは、杯身2点、杯蓋2点、高杯1点、壷2点の合計7点の須恵器が出土した。杯身と杯蓋は口縁部を合わせたままセットになって小口部分に並んで存在し、周辺から2点の耳環と多くの玉類が出土したから、遺体の頭骨を支える枕の代用品に使われていたのであろう。杯身は口径が12.5cmと13.3cmで、器高が4.1cmと4.7cmである。杯蓋は口径が14.4cmと15.0cmで、器高が4.7cmと4.6cmである。杯身の口縁端部は丸く仕上げ、外面の底部は右方向のヘラケズリを行っているものとほとんど未調整のものがある。杯蓋外面の天井部と体部の境には鈍い稜や浅い窪みが認められ、内面の口縁端部には段状の浅い窪みが認められる。これらの杯身や杯蓋は、いずれも内面の底部や外面または内面の天井部に、同心円のタタキ痕跡が残存している。前述した第2主体部の箱式石棺直上の盛土内から出土した杯身や杯蓋と比較すれば、杯身の口縁端部は2点とも丸くなって内側に浅い窪みが存在しなくなる。さらに杯蓋の外面の天井部と体部の境は、かすかに稜が認められるが浅い窪みに退化している。また1号墳の埋葬施設から出土した2点の杯蓋と対比すると、これまで法量の大型化傾向にあったものが一変して縮小化に転じ、杯身の外面底部にヘラケズリを行わないで未調整のものが出現するようになる。この第3主体部の箱式石棺から出土した須恵器は、特異な形態をした高杯や器形の異なる2点の壷が共伴するものの、杯身や杯蓋を観察すれば陶邑編年のＴＫ43のやや古相のものに類似する点が多く、6世紀後葉の時期になるのではなかろうか。

5号墳の埋葬施設である箱式石棺には、須恵器の杯身3点、杯蓋3点、壷1点が存在した。そのうち杯身と杯蓋は口縁部を合わせた状態または近接地より出土したから、法量や色調なども考慮してセット関係になると判断した。杯身は口径11.8～12.6cm・器高4.2～4.8cmで、口縁端部は内側に浅い窪みの痕跡を有するものと丸く仕上げているものがある。外面の底部はヘラケズリを行っているが、

回転方向が右のものと左のものが認められる。内面全体にヨコナデを施しているが、底部に同心円のタタキ痕跡が残存するものや仕上げナデを加えているものが存在する。杯蓋は口径13.7～14.4cm・器高3.4～4.6cmで、いずれも外面の天井部と体部の境に鈍い稜または浅い窪みを有し、内面の口縁端部に浅い窪みが認められる。外面の天井部はヘラケズリを行っているが、杯身と同様に回転方向が右のものと左のものがある。内面は全体にヨコナデを施しているが、いずれも天井部に仕上げナデを加えている。前述した2号墳の第3主体部である箱式石棺から出土した杯身や杯蓋と比較すれば、形態的特徴や成形手法は同じであるが、法量の縮小化がさらに進み、外面のヘラケズリに回転方向が右のものと左のものが混在し、ヘラケズリの部分もより狭くなって天井部の中央が尖った感じになるものも認められる。したがってこの5号墳の箱式石棺から出土した杯身や杯蓋は、2号墳の第3主体部である箱式石棺から出土したものより少し後出の一群であり、陶邑編年のＴＫ43でもやや古相のもので、6世紀後葉の時期と考えたい。

2号墳の第4主体部である横穴式石室は、天井石が1枚も残存しなかったが石室底部は盗掘や撹乱を受けた形跡はなく、8基の木棺痕跡を検出して大量の遺物が出土した。そのうち須恵器には、多種多様の器形が認められる。杯身と杯蓋は、出土地点および法量や色調を精査した結果、9組18点のセット関係が判明した。杯身は口径10.7～13.5cm・器高3.5～4.7cmで、口縁端部はほとんどのものが丸く仕上げている。法量の比較的大きいものには、口縁端部の内側に浅い窪みの痕跡が残存するものもある。外面の底部はヘラケズリを施しているが、法量の小さいものにはヘラ切りを行っただけで調整を加えないものも認められる。またヘラケズリの回転方向は、法量の大きいものは右で小さいものは左になっている。内面は全体にヨコナデを施しているが、法量の大きいものには底部に仕上げナデを加えているものが存在し、同心円のタタキ痕跡が残存するものもある。杯蓋は口径13.0～15.4cm・器高3.7～4.9cmで、外面の天井部と体部の境に稜または浅い窪みを有するものは少なく、口縁端部も丸く仕上げているものが多い。外面の天井部はヘラケズリを行っているが、杯身と同様に法量の小さいものには回転方向が左のものがあり、ヘラ切りを行っただけで調整を加えないものも認められる。内面は全体にヨコナデを施しているが、天井部に仕上げナデを加えているものや、同心円のタタキ痕跡が残存するものもある。この横穴式石室から出土した須恵器には、長脚有蓋・無蓋高杯の一部に古式の形態が残っているようであるが、前述した5号墳の箱式石棺から出土した杯身や杯蓋と比較するならば、法量の縮小化が顕著で、成形手法にも省略化の傾向が進行しているから、やや新しい一群の須恵器であると考えられ、陶邑編年のＴＫ43からＴＫ209の古相のものに相当し、6世紀後葉の時期に追葬が継続して行われたと推定される。

土壙墓22から出土した須恵器の中で、杯身は口径12.3～13.2cm・器高3.7～4.5cmで、口縁端部はいずれも丸く仕上げているが、内側に浅い窪みの痕跡が残存するものもある。杯蓋は口径13.7～14.7cm・器高3.7～4.4cmで、外面の天井部と体部の境に稜や浅い窪みを有するものや、口縁端部の内側に浅い窪みが認められるものが多い。また杯身と杯蓋に共通して外面の底部や天井部はヘラケズリを行っているが、回転方向が右のものと左のものが混在している。内面の底部や天井部はヨコナデを施しているが、仕上げナデを加えているものや同心円のタタキ痕跡が残存するものがある。これらの土壙墓22から出土した須恵器は、前述した2号墳の第4主体部である横穴式石室から出土した初葬に伴って副葬されたと推定される古相の一群のものと同じで、陶邑編年のＴＫ43に該当し、6世紀後葉の時期になるであろう。

2号墳で検出した埋葬施設の消長について

2号墳には竪穴式石室1基、箱式石棺2基、横穴式石室1基の形態の異なった埋葬施設が築造されていたが、前項で考察したように、出土した須恵器の形態的特徴や成形手法から、第1主体部の竪穴式石室の初葬が最も古いことが判明した。次に第2主体部の箱式石棺が築造されたのであるが、これは第1主体部と第2主体部の遺構の切り合い関係からも確認されている。続いて第3主体部の箱式石棺が築造され、やや遅れて第4主体部の横穴式石室が誕生している。この横穴式石室には、追葬によって8体もの遺体が継続して埋葬されたが、その後は長期間の断絶があって第1主体部の竪穴式石室に追葬を行っていた。

2号墳の墳丘形態について

2号墳の墳丘は、前方後円墳に似た極めて特異な形態になっていた。これは丘陵の尾根方向に主軸が直交するように、西側から東側に向かって順序よく埋葬施設を築造してきたが、ある途中の段階に葬送儀礼の全く相違した横穴式石室が導入されたため、結果的に前方後円墳に似た形態を呈するようになったと考える。したがって2号墳は、決して前方後円墳にはならないと思われる。

土壙墓22から出土した須恵器について

土壙墓22は木棺直葬と推定される埋葬施設で、34点の須恵器が南北両端部の小口部分から集中して出土した。地形の高い南端部には、高杯、台付椀、直口壷、広口壷、脚付長頸壷、提瓶2、平瓶、横瓶が存在し、杯身や杯蓋は1点もなかった。地形の低い北端部には、杯身と杯蓋がセットになったもの11対22点、広口壷、大型壷が認められた。この土壙墓に埋葬された遺体の頭位は、地形の高い杯身や杯蓋が存在しなかった南側と推定されるから、遺体の部位と副葬して並べる須恵器の器種について何らかの意図があったと考える。口縁部を互いに合わせて出土した11対22点の杯身と杯蓋について、法量、胎土、焼成、色調、成形手法などを丹念に観察した結果、明らかに法量や色調などが著しく異なるものが多かった。このようにセットとして生産されたものが、実際に副葬される時には本来のセット関係を無視した状況が知られるのである。また杯身と杯蓋をセットにして並べるのに、どちらを上にしてどちらを下にするかということも、あまりこだわっていないように感じられた。

この土壙墓から出土した須恵器は、器種が豊富で同時に副葬されたと思われるから、6世紀後葉の良好な一括資料として注目される。

斎富古墳群の性格について

斎富古墳群では、6世紀中葉から7世紀前葉の時期に属する古墳3基と土壙墓1基を検出したが、埋葬施設は一様ではなく、竪穴式石室、箱式石棺、木棺直葬の土壙、横穴式石室が存在した。埋葬施設上部の天井石や側石が部分的に抜き取られていたが、偶然にも床面に近い部分は撹乱を受けておらず、埋葬された当時のままの状態で保持され、大量の遺物が出土しただけでなく、埋葬の方法や人数なども特定できる貴重な資料を得ることができた。一般的に6世紀の中葉になると、単数埋葬を目的とする竪穴式石室や箱式石棺などから、一度古墳を築造すれば複数の遺体の追葬が可能である横穴式石室に変化し、その後広く普及するようになるが、この斎富古墳群はまさに両者の接点の時期の古墳群として重要である。　（福田）

註

1　田辺昭三『須恵器大成』　角川書店　1981年

表－1　主要遺構の出土遺物個体数一覧

1号墳

土器				鉄器			
種類		推定個体数	掲載個体数	種類		推定個体数	掲載個体数
須恵器	杯身	1	1	武器	刀子	2	2
	杯蓋	2	2		鏃	12	12
	壺	2	2	不明・その他		1	1
計		5	5	計		15	15

2号墳第1主体部

土器				鉄器			
種類		推定個体数	掲載個体数	種類		推定個体数	掲載個体数
須恵器	杯身	15	14	武器	大刀	1	1
	杯蓋	13	13		刀子	3	3
	高杯	7	7		鏃	34	34
	高杯蓋	2	2	馬具	轡	1	1
	甕	2	2	棺釘		20	20
	提瓶	5	5	不明・その他		3	0
	壺	3	3	計		62	59
	壺蓋	2	2	装身具			
	不明	1	0	種類		推定個体数	掲載個体数
小計		49	48	玉類	勾玉	1	1
土師器・不明		α	0		管玉	11	11
計		49＋α	48		切子玉	7	7
					算盤玉	2	2
					丸玉	1	1
					ガラス小玉	104	104
				耳環		4	4
				計		130	130

※鉄滓若干あり

2号墳第2主体部

土器				鉄器			
種類		推定個体数	掲載個体数	種類		推定個体数	掲載個体数
須恵器	杯身	3	3	武器	刀子	1	1
	杯蓋	2	2		鏃	2	2
	横瓶	1	1	計		3	3
	壺	2	2				
計		8	8				

2号墳第3主体部

土器				装身具			
種類		推定個体数	掲載個体数	種類		推定個体数	掲載個体数
須恵器	杯身	2	2	玉類	管玉	1	1
	杯蓋	2	2		棗玉	2	1
	高杯	1	1		ガラス小玉	31	31
	壺	2	2	耳環		2	2
計		7	7	計		36	35

鉄器			
種類		推定個体数	掲載個体数
武器	刀子	2	2
	鏃	2	2
計		4	4

2号墳第4主体部

土器				鉄器			
種類		推定個体数	掲載個体数	種類		推定個体数	掲載個体数
須恵器	杯身	39	39	武器	大刀	3	3
	高蓋	37	37		刀子	9＋α	9
	高杯	13	13		鏃	66＋α	66
	高杯蓋	1	1		弓飾金具	14	14
		3	3	馬具	轡	7	7
	提瓶	15	15		兵庫鎖	4	4
	平瓶	1	1		杏葉	1	1
	椀	1	1		鉸具	6	6
	壺	18	18		飾金具	5	5
	壺蓋	6	6		不明・その他	11	11
	甕	1	0	釘		35	31
	器台	2	2	鏃		6	6
	器台杯蓋	7？	4	斧		1	1
	その他	小片　α	0	不明・その他		14＋α	14
小計		144＋α	140	計		182＋α	178
土師器	壺	4	4	装身具			
	椀	1	1	種類		推定個体数	掲載個体数
	椀	1	1	玉類	勾玉	1	1
	不明	小片　2	0		管玉	3	3
小計		8	6		切子玉	3	3
計		152＋α	146		棗玉	1	1
					ガラス丸玉	3	3
					ガラス小玉	27	26
				土製練玉		66	65
				耳環		16	16
				計		120	118

※鉄器については小細片が多数あるため、確定できない点がある。
※鉄滓が比較的多く出土している。

5号墳

土器				装身具			
種類		推定個体数	掲載個体数	種類		推定個体数	掲載個体数
須恵器	杯身	3	3	玉類	勾玉	1	1
	杯蓋	4	3		管玉	9	9
	壺	1	1		算盤玉	1	1
	不明	1	0		丸玉	1	1
計		9	7		ガラス小玉	38	37
				計		50	49

土壙墓22

土器			
種類		推定個体数	掲載個体数
須恵器	杯身	11	11
	杯蓋	12	12
	高杯	1	1
	提瓶	2	2
	平瓶	1	1
	横瓶	1	1
	壺	6	6
	壺蓋	1	1
土師器	甕	小片　α	0
計		35＋α	35

表－2　土器観察表　　法量の（　）数字は推定

遺構名	挿図番号	種別	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	残存状況	形態・手法の特徴	焼成	色調	胎土	備考
土壙墓1	1	弥生土器	壺		2.8		口縁部欠損	頸部～肩部外面ヘラミガキ、内面指オサエナデ。表面丹塗り痕跡、底部付近に黒斑。	良好	にぶい黄橙	2～4㎜の長石・石英目立つ。	
	2	弥生土器	鉢	10.2	1.6	7.0	口縁部一部欠	調整判断とせず。表面に丹塗り痕跡。	良好	橙	1～2㎜の砂粒僅。	
	3	弥生土器	甕	14.8	(5.0)		胴部欠損底部穿孔	口縁外面クシ描沈線、胴部にハケメ、ヘラミガキ。内面はヘラケズリ、指オサエ。	良好	にぶい褐色	0.5～2㎜の砂粒中量。	
土壙墓21		弥生土器	壺		10.0		底部	外面ヘラミガキ、内面ナデ、一部ミガキ？黒斑あり。	良好	橙	3㎜以下の長石多。	
土壙墓2	1	土師器	鉢	(26.0)		26.1	ほぼ完形（復元）	外面ハケメ、内面ハケメ、ナデ、指オサエ黒斑2カ所。	良好	明赤褐	2㎜以下の砂粒多。	2と対
	2	土師器	壺	22.8	4.8	62.0	完形（復元）	口縁部外面に凹線3条、胴部外面はハケメ下部にタタキか？内面はハケメおよび下部にヘラケズリ。黒斑2カ所。	良好	明赤褐	1㎜以下の砂粒多。	1と対
土壙墓3		弥生土器	壺				口頸部欠損	胴部外面ヘラミガキ、内面はヘラケズリ。底部内面に指オサエ。底部外面に黒斑。	良好	明黄褐	5㎜以下の砂粒多。	
1号墳	1	須恵器	杯蓋	15.4		4.9	完形	天上部外面ヘラケズリ（右）。	良好	青灰	1～4㎜前後の砂粒含。	主体部
	2	須恵器	杯蓋	15.9		5.9	ほぼ完形	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。	良好	灰	0.5～1㎜前後の砂粒僅。	主体部
	3	須恵器	杯身	(13.0)			口縁部1/3	横ナデ。	良好	灰	2㎜以下の砂粒多。	表土
	4	須恵器	壺	11.6			口縁部7割	肩部内面同心円文。	良好	紫灰	1㎜前後の長石多。	表土
	5	須恵器	壺				肩～胴部1/6	外面タタキ後細かいカキメ。内面同心円文。	良好	灰	2㎜以下の石英・長石少。	表土
2号墳第1主体部	1	須恵器	杯蓋	13.6		4.7	完形	天井部ヘラケズリ（右）。	良好	明青灰	1㎜以下の砂粒僅。	2と対
	2	須恵器	杯身	11.5～11.7		4.9	完形	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。	良好	明青灰	1㎜前後の砂粒僅。	1と対
	3	須恵器	杯蓋	14.1～14.5		4.6	ほぼ完形（復元）	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。	良好	明青灰	1㎜以下の砂粒僅。	4と対
	4	須恵器	杯身	12.2～12.4		5.0	完形	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。	良好	淡灰	1～4㎜の砂粒僅。	3と対
	5	須恵器	杯蓋	13.0～13.2		4.2	ほぼ完形（復元）	天井部外面ヘラケズリ（右）。	不良	浅黄～灰白	6㎜前後の長石多。	6と対
	6	須恵器	杯身	13.0		3.9	約8割	底部外面ヘラケズリ（右）。	不良	灰白	5㎜以下の長石・石英多。	5と対
	7	須恵器	杯蓋	15.4		4.1	ほぼ完形	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央に同心円文。	良好	灰	0.5～3㎜の砂粒中量。	8と対
	8	須恵器	杯身	12.9～13.1		4.5	完形	底部外面ヘラケズリ（右）。	良好	青灰	1～2㎜の砂粒少。	7と対
	9	須恵器	杯蓋	13.4		4.8	口縁部一部欠損	天井部外面ヘラケズリ（右）。およびナデか。内面は粘土紐痕。	やや不良	灰白～灰	0.5～3㎜の砂粒多。	10と対
	10	須恵器	杯身	11.2～11.4		4.5	ほぼ完形	底部外面ヘラケズリ。中央付近は未調整。内面中央仕上げナデ。	良好	青灰	1～2㎜の砂粒多。	9と対
	11	須恵器	杯蓋	14.3		4.1	1/3（復元）	天井部外面ヘラケズリ（左）。後カキメか。磨耗のため不鮮明。	不良	灰白	5㎜以下の石英・長石多。	12と対
	12	須恵器	杯身	13.1		4.1	ほぼ完形	底部外面ヘラケズリ（左）。磨耗のため不鮮明。	不良	灰白	1㎜前後の砂粒多。	ヘラ記号か11と対
	13	須恵器	杯蓋	14.4～14.6		4.5	ほぼ完形	底部外面ヘラケズリ（右）。中央部はナデか。内面中央不鮮明。	不良	灰白	1㎜前後の長石・石英多。	14と対
	14	須恵器	杯身	13.0		4.3	1/2（復元）	底部外面ヘラケズリ（右）。中央付近は軽く押さえてナデか。	不良	灰白	0.5～3㎜の砂粒多。（長石・石英多）。	13と対
	15	須恵器	杯蓋	14.1～14.3		3.9	ほぼ完形（復元）	天井部外面ヘラケズリ（左）は不鮮明。内面中央に同心円文。	不良	淡黄	0.5～1.5㎜の砂粒多。	16と対
	16	須恵器	杯身	12.7～13.1		4.3	完形	底部外面ヘラケズリ（左）後ナデか。内面中央にかすかに同心円文。粘土紐痕。	不良	淡黄	5㎜以下の長石・石英多。	15と対
	17	須恵器	杯蓋	13.9～14.3		4.8	完形	天井部外面ヘラケズリ（右）。中央部はナデか。内面中央仕上げナデ。	良好	灰	1㎜前後の砂粒多。	18と対
	18	須恵器	杯身	12.7		4.3	ほぼ完形	底部外面ヘラケズリ（右）。中央付近はナデか。	不良	灰白	1～3㎜前後の砂粒少。	17と対
	19	須恵器	杯蓋	14.3		4.7	ほぼ完形（復元）	天井部外面ヘラケズリ（右）。中央部ナデ。内面中央仕上げナデ。	不良	にぶい黄	0.5～3㎜の長石多。	20と対
	20	須恵器	杯身	12.7～13.1		4.8	完形（復元）	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。	不良	灰白	1～4㎜長石多。	19と対

遺構名	挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	残存状況	形態・手法の特徴	焼成	色調	胎土	備考
2号墳第1主体部	21	須恵器	杯蓋	13.8～14.2		4.4	口縁部3/4	天井部内面中央同心円文。(右) 天井部外面焼成不良のため不鮮明。	不良	灰白	0.5～3㎜の砂粒多。	22と対
	22	須恵器	杯身	12.4		4.5	完形	底部外面ヘラケズリ(右)。中央付近はナデか。内面中央仕上げナデか。	良好	灰	0.5～3㎜の砂粒多。	ヘラ記号＝21と対
	23	須恵器	杯蓋	13.3～14.1		4.5	3/4(復元)	天井部外面ヘラケズリ(右)。 中央部はナデか。内面に粘土紐痕。	やや不良	灰白～灰	0.5～3㎜の砂粒多。	24と対
	24	須恵器	杯身	12.5		4.4	ほぼ完形(復元)	底部外面ヘラケズリ(右)。 内面中央ナデ。	やや不良	青灰	1～2㎜前後の砂粒多。	23と対
	25	須恵器	杯蓋	11.0～14.0		4.2	完形	天井部外面ヘラ切り未調整。 歪みが大きい。	良好	灰	0.5～2㎜の砂粒少。	
	26	須恵器	杯身	12.1		4.1	ほぼ完形	底部外面ヘラ切り未調整。	やや不良	灰	0.1～1.5㎜の砂粒少。	
	27	須恵器	杯身	13.0～13.2		4.1	3/4(復元)	底部外面ヘラ切り未調整。	不良	にぶい黄橙	0.5～1.5㎜の砂粒少。	
	28	須恵器	高杯(蓋)	13.6		5.8	3/4	天井部外面ヘラケズリ(左)。 内面に同心円文。	良好	明青灰	1㎜前後の砂粒僅。	29と対
	29	須恵器	高杯	11.9	10.0	13.3	脚部1/3欠損	杯底部外面ヘラケズリ(左)。内面中央に同心円文。脚外面横ナデ。	良好	青灰	1～2㎜の砂粒少。	28と対
	30	須恵器	高杯(蓋)	13.9		6.0	ほぼ完形(復元)	天井部外面ヘラケズリ(左)。内面中央に同心円文。つまみ接合部はヘラ調整。	良好	淡青灰	0.5～3㎜の砂粒少。	31と対
	31	須恵器	高杯	11.8	8.0	13.2	1/2(復元)	杯底部外面ヘラケズリ(左)後ナデ。内面中央に同心円文。脚外面横ナデ。	良好	青灰	0.5～3㎜の砂粒少。	30と対
	32	須恵器	高杯	9.5～10.0	8.1	13.2	ほぼ完形(復元)	横ナデ。2段透し。3方向。	良好	黄灰	0.5～3㎜の砂粒多。	
	33	須恵器	高杯	10.0	8.8	13.7	完形	杯底部外面ヘラケズリ(左)。3方向三角透し2段。自然釉剝離。	良好	青灰	2～3㎜の長石多。	
	34	須恵器	高杯	8.4	7.0	10.7	ほぼ完形	杯底部～脚柱部にカキメ。	良好	青灰	1㎜前後の砂粒僅。	
	35	須恵器	高杯	9.5	7.9	13.4	8割	杯部内面中央仕上げナデ。自然釉剝離。	良好	青灰	1～2㎜の砂粒少。	
	36	須恵器	高杯	11.0～11.3	8.2	12.0	9割(復元)	杯部外面ヘラケズリ(左)。内面中央仕上げナデ。3方向透し1段。	良好	青灰	0.5～2㎜の砂粒中位。	
	37	須恵器	甕	13.2		15.2	7割(復元)	頸部上半にクシ描波状文および刺突文。胴部上半にも刺突文一周。底部にヘラケズリ(右)。	良好	灰	1㎜前後の砂粒多。	
	38	須恵器	甕	9.9		12.3	完形	口縁部～頸部上半にクシ描波状文、頸部下半～胴部上半にカキメ。胴部に連結刺突文。	良好	青灰	2㎜以下の長石石英。	
	39	須恵器	提瓶	5.6		15.3	完形	正面にカキメ。背面にヘラケズリ(右)。 把手無。	良好	青灰	1～2㎜前後の砂粒少。	
	40	須恵器	提瓶	4.2～4.4		13.5	完形	胴部にカキメ。	良好	青灰	0.5～2㎜の砂粒多。	
	41	須恵器	提瓶				口縁部・把手を欠	正・背面にカキメ。頸部にもカキメ。	良好	明青灰	1～3㎜の砂粒多。	
	42	須恵器	提瓶				口縁部・把手を欠	正面カキメ。背面ヘラケズリ(右)。および一部カキメ。	良好	明青灰	1㎜前後の砂粒多。	
	43	須恵器	提瓶	7.5		21.5	完形	正・背面にカキメ。	良好	青灰	1～4㎜の砂粒多。	
	44	須恵器	蓋	6.8～7.0		3.5	ほぼ完形	つまみ接合部ヘラ調整。 天井部外面ヘラケズリ(右)。	良好	青灰	0.5～2㎜の長石、石英多。	
	45	須恵器	壺		(1.0)		頸・肩部一部欠損	底部内外面ナデ。胴部内面は工具によるナデか。重ね焼きの痕跡。	やや不良	灰白	0.5～4㎜の砂粒多。	
	46	須恵器	壺	12.6		18.8	口縁一部欠損	胴部外面格子風タタキ、上半にカキメ。内面には同心円文。重ね焼きの痕跡。	やや不良	明青灰	1㎜前後の砂粒多。	
	47	須恵器	壺(蓋)	5.0		9.6	ほぼ完形(復元)	つまみ外面にカキメ、天井部外面にヘラケズリ(右)。内面粘土紐痕。	良好	灰	0.5～2㎜の砂粒多。	48と対
	48	須恵器	壺	8.0	15.8	34.7	ほぼ完形	肩部に連続刺突文。底体部格子風タタキ。脚柱部カキメ後連続刺突文。3方向透し3段。自然釉。	良好	暗青灰	0.5～2㎜の砂粒多。	47と対
2号墳第2主体部	1	須恵器	杯蓋	(14.4)			口縁部1/4	天井部外面ヘラケズリ(右)。	良好	青灰	0.5～1.5㎜の砂粒僅。	2と対
	2	須恵器	杯身	12.9		4.6	口縁部かなり欠損	底部外面ヘラケズリ(右)。 内面中央仕上げナデ。粘土紐痕。	良好	青灰	0.5～1.5㎜の砂粒少。	1と対
	3	須恵器	杯蓋	14.4		4.7	完形	天井部外面ヘラケズリ(右)。 内面中央仕上げナデ。灰かぶり。	良好	灰	0.2～1.5㎜の砂粒。	4と対
	4	須恵器	杯身	12.3～12.5		4.8	完形	底部外面ヘラケズリ(右)。 内面中央仕上げナデ。歪み。	良好	暗青灰	1.5㎜以下の砂粒少。	3と対
	5	須恵器	杯身	(12.3)		4.5	1/2	天井部外面ヘラケズリ(右)。	良好	青灰	0.5～2㎜の砂粒僅。	
	6	須恵器	提瓶	5.7～6.4		16.1	ほぼ完形	正面カキメ。背面ヘラケズリ(右)。 後ナデ。	良好	明青灰	2㎜以下の砂粒少。	

遺構名	挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	残存状況	形態・手法の特徴	焼成	色調	胎土	備考
	7	須恵器	壺	5.2		6.4	ほぼ完形	胴部下半に手持ちヘラケズリ。内面中央付近に粘土紐痕。	良好	青灰	0.1～1㎜の砂粒。	
	8	須恵器	壺	4.3		4.4	口縁部1/4欠損	胴部下半ケズリ後ナデ。内面中央指オサエ。内外面に自然釉。	良好	青灰	0.5～2㎜の砂粒中。	
2号墳第3主体部	1	須恵器	杯蓋	14.4		4.7	完形	天井部外面ヘラケズリ（右）。	やや不良	灰	0.5～1.5㎜の砂粒多。	天井にキズ 2と対
	2	須恵器	杯身	12.5		4.1	完形	外面ほとんど未調整。内面中央に同心円文。	良好	灰白	0.5㎜以下の砂粒僅。	1と対
	3	須恵器	杯蓋	15.0		4.6	完形	天井部外面ヘラケズリ（右）。外面に自然釉、内面中央に同心円文かすかに残る。	良好	青灰	0.5～0.6㎜の長石多。	4と対
	4	須恵器	杯身	13.3		4.7	完形	底部外面ヘラケズリ（右）。内面同心円文。	良好	灰	0.5～3㎜の長石多。	3と対
	5	須恵器	高杯	10.0	6.3	7.2	完形	杯底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央指オサエ。後仕上げナデ。脚部にカキメ。脚部円孔2個。	良好	暗青灰	2㎜前後の長石少。	
	6	須恵器	壺	10.4		15.6	完形	胴部にカキメ。下半は格子タタキ、口縁部～頸部に横ナデ。	良好	灰	0.5～1.5㎜の長石少。	
	7	須恵器	壺	17.8～18.4		26.3	完形（復元）	頸部外面に連続刺突文、カキメ。胴部下半にタタキ、内面に同心円文。口縁部若干歪み。外面自然釉、内面焼きぶくれ。	良好	暗青灰～灰白	0.5～3㎜の砂粒多。	
2号墳第4主体部	1	須恵器	杯蓋	14.4		4.7	完形	天井部ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。	良好	灰	2～3㎜の石英僅。	2と対
	2	須恵器	杯身	13.1～13.3		4.3	ほぼ完形	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央に同心円文と仕上げナデ。粘土紐痕。	良好	灰～暗青灰	微砂少。	1と対
	3	須恵器	杯蓋	14.2～14.6		4.5	完形	天井部ヘラケズリ（右）。内面中央に同心円文。自然釉剝離痕。	良好	暗灰～青黒	0.5～3㎜の砂粒中位。	4と対
	4	須恵器	杯身	12.7～12.9		4.2	完形	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央に同心円文。焼きぶくれ。	良好	暗青灰	2㎜以下の長石・石英少。	3と対
	5	須恵器	杯蓋	14.6～14.8		4.3	ほぼ完形	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。	やや不良	灰白	1㎜以下の砂粒僅。	6と対
	6	須恵器	杯身	13.1～13.5		4.2	ほぼ完形	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。	やや不良	灰白	0.5㎜以下の砂粒僅。	5と対
	7	須恵器	杯蓋	14.0		4.3	8割（復元）	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。	良好	灰	1㎜以下の砂粒僅。	8と対
	8	須恵器	杯身	12.5～13.0		4.4	ほぼ完形	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。粘土紐痕。	やや不良	灰白	2㎜以下の砂粒少。	7と対
	9	須恵器	杯蓋	14.8～15.0		4.3	完形（復元）	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。	良好	灰	0.5～1㎜の砂粒少。	10と対
	10	須恵器	杯身	13.2～13.5		4.4	完形	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央に仕上げナデ。粘土紐痕。	良好	灰白	微砂少。	9と対
	11	須恵器	杯蓋	14.2		4.1	ほぼ完形（復元）	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。粘土紐痕。	良好	青灰	2㎜以下の砂粒僅。	12と対
	12	須恵器	杯身	12.8～13.0		4.0	ほぼ完形	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。	良好	灰	微砂多。	11と対
	13	須恵器	杯蓋	14.2～14.4		4.1	ほぼ完形	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。粘土紐痕。	良好	灰	2㎜以下の砂粒少。	14と対
	14	須恵器	杯身	12.3～13.3		4.0	完形	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。口縁部歪みあり。	良好	青灰	1㎜以下の砂粒少。	13と対
	15	須恵器	杯蓋	14.0～14.4		4.4	約4/5	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。口縁部歪みあり。	良好	暗青灰	1㎜以下の長石石英少。	16と対
	16	須恵器	杯身	12.1～13.1		4.4	完形	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。口縁部歪みあり。	良好	灰	1～2㎜の長石僅。	15と対
	17	須恵器	杯蓋	14.5		4.1	ほぼ完形（復元）	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央同心円文。	良好	暗青灰	1㎜前後の砂粒少。	18と対
	18	須恵器	杯身	12.8～13.2		4.2	完形（復元）	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央同心円文。	良好	暗青灰	1㎜前後の砂粒多。	17と対
	19	須恵器	杯蓋	15.0～15.4		4.4	ほぼ完形（復元）	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央同心円文。	良好	青灰	0.5㎜以下の砂粒僅。	
	20	須恵器	杯蓋	14.7		4.2	完形	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央同心円文と仕上げナデ。	良好	暗青灰	1㎜以下の砂粒少。	
	21	須恵器	杯蓋	14.9～15.1		4.4	ほぼ完形（復元）	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。	良好	灰白	0.5～1㎜の長石、石英僅。	
	22	須恵器	杯蓋	14.9		4.7	ほぼ完形（復元）	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。	良好	灰白	0.5㎜以下の長石僅。	
	23	須恵器	杯蓋	14.6～15.0		4.6	ほぼ完形	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央同心円文。口縁部歪みあり。	良好	暗青灰	2㎜以下の長石多。	

遺構名	挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	残存状況	形態・手法の特徴	焼成	色調	胎土	備考
2号墳第4主体部	24	須恵器	杯蓋	15.0		4.6	ほぼ完形	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。口縁端部をヘラで面取り。	良好	暗青灰	0.5～2㎜の長石、石英中位。	
	25	須恵器	杯蓋	14.8		4.3	完形（復元）	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。	良好	灰	2㎜前後の長石少。	
	26	須恵器	杯蓋	14.7～14.9		4.3	口縁部一部欠損（復元）	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。粘土紐痕。	やや不良	灰～灰白	0.5～3㎜の長石、石英多。	
	27	須恵器	杯蓋	14.2～14.6		4.2	ほぼ完形	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。	良好	暗青灰	0.5～2㎜の砂粒少。	ヘラ記号Ⅱ
	28	須恵器	杯蓋	14.5～14.9		4.9	口縁部一部欠	天井部外面ヘラケズリ（右）。自然釉。口縁部歪みあり。	良好	灰～暗青灰	0.5㎜以下の砂粒少。	
	29	須恵器	杯蓋	14.6		4.7	口縁部一部欠	天井部外面ヘラケズリか？内面中央に同心円文。	不良	明黄褐	2㎜以下の長石石英多。	
	30	須恵器	杯蓋	14.3～14.5		4.2	完形（復元）	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央に同心円文および仕上げナデ。	良好	暗青灰	1㎜前後の砂粒多。（長石・石英）	
	31	須恵器	杯蓋	14.7～14.9		4.5	完形（復元）	天井部外面ヘラケズリ（左）。灰かぶり。	良好	暗紫灰	2㎜前後の石英長石多。	
	32	須恵器	杯蓋	14.5～14.7		4.4	ほぼ完形（復元）	天井部外面ヘラケズリ（右）。中央部は軽くナデ、内面中央仕上げナデ。	不良	浅黄橙	3㎜以下の石英長石多。	
	33	須恵器	杯蓋	14.1～14.3		4.1	ほぼ完形	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。	良好	緑灰	1㎜以下の砂粒多。（長石・石英）	
	34	須恵器	杯蓋	14.0～14.2		3.9	ほぼ完形	天井部外面ヘラケズリ（右）。中央部やや窪む。内面中央に粘土紐痕。	良好	青灰	3㎜以下の長石少。	
	35	須恵器	杯蓋	14.4～14.6		4.5	完形	外面ほとんど未調整。内面には明瞭な粘土紐痕。口縁部横ナデ。	良好	暗青灰	0.5～3㎜の砂粒中位。	
	36	須恵器	杯蓋	13.9～14.1		4.3	完形	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。若干歪み。	良好	青灰	0.5～2㎜の砂粒多。	
	37	須恵器	杯蓋	13.9～14.1		4.1	ほぼ完形	天井部外面ヘラケズリ（右）。中央部内外面未調整。	良好	緑灰	0.5㎜以下の砂粒僅。	ヘラ記号Ⅴ
	38	須恵器	杯蓋	13.8		4.8	2/3	天井部外面ヘラケズリ（右）。	不良	灰白	1㎜以下の砂粒多。	
	39	須恵器	杯蓋	(13.8)		4.5	1/2（復元）	天井部外面ヘラケズリ（左）。	良好	灰	2㎜前後の長石・石英多。	
	40	須恵器	杯蓋	13.3～13.5		4.0	完形	天井部外面ヘラケズリ（左）。	良好	青灰	0.5㎜以下の砂粒僅。	
	41	須恵器	杯蓋	13.5～13.7		3.7	ほぼ完形	天井部外面ヘラケズリ（左）。沈線1条。	良好	青灰	4㎜以下の砂粒僅。	
	42	須恵器	杯蓋	13.0～13.2		3.9	ほぼ完形（復元）	天井部は手持ちヘラケズリもしくは板状工具によるナデ。	良好	灰	1㎜以下の砂粒少。	
	43	須恵器	杯蓋	(14.2)		－	口縁部1/4	横ナデ。	良好	灰	2～3㎜の砂粒少。	
	44	須恵器	杯蓋	(13.7)		－	口縁部1/4	横ナデ。	やや不良	灰白	1㎜以下の砂粒多。	
	45	須恵器	杯身	13.2～13.4		4.6	ほぼ完形	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。内面中央に粘土紐痕。	やや不良	灰白	0.5㎜以下の長石僅。	
	46	須恵器	杯身	13.4～14.0		4.6	完形	底部外面ヘラケズリ（右）。内面粘土紐痕。	良好	暗青灰	1～2㎜の石英少。	
	47	須恵器	杯身	13.8		4.7	ほぼ完形	底部外面ヘラケズリ（右）。小粘土片付着。	不良	灰白	0.5㎜の砂粒多（長石・石英、多）（雲母、僅）	
	48	須恵器	杯身	13.0		(4.5)	約1/2	底部外面ヘラケズリ（右）。	良好	灰白	0.5～3㎜の砂粒少。	
	49	須恵器	杯身	13.2～13.4		3.7	ほぼ完形	底部外面ヘラケズリ（左）。内面中央仕上げナデ。内面に粘土紐痕。底部外面に凹み。	良好	青灰	0.5～1㎜の砂粒僅。	
	50	須恵器	杯身	12.9～13.2		4.5	受部大半欠損	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。	良好	灰白	0.5㎜以下の長石僅。	
	51	須恵器	杯身	13.3～13.5		4.1	ほぼ完形（復元）	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。	良好	青灰	0.5㎜程度の長石僅。	
	52	須恵器	杯身	12.9～13.2		4.3	ほぼ完形	底部外面ヘラケズリ（右）。	良好	暗青灰	1㎜前後の砂粒僅。	
	53	須恵器	杯身	12.9～13.1		4.2	ほぼ完形（復元）	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。	良好	灰	1㎜前後の長石多。	
	54	須恵器	杯身	13.3～13.5		4.2	2/3	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。	良好	灰白	微砂少。	

遺構名	挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	残存状況	形態・手法の特徴	焼成	色調	胎土	備考
2号墳第4主体部	55	須恵器	杯身	12.7		4.2	完形	底部外面ヘラケズリ（右）。	良好	青灰	1㎜前後の長石少。	
	56	須恵器	杯身	12.7～13.0		4.5	完形	底部外面ヘラケズリ（右）。	良好	青灰	1～3㎜前後の砂粒中位。	
	57	須恵器	杯身	12.9～13.1		4.5	ほぼ完形（復元）	底部外面ヘラケズリ（右）。底部外面窪みあり。	良好	暗青灰	1～2㎜前後の長石少。	
	58	須恵器	杯身	13.2		3.9	受部1/2欠損	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央に仕上げナデ。	良好	暗青灰	1～2㎜前後の砂粒多。	
	59	須恵器	杯身	12.7～12.9		3.8	完形	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央に仕上げナデ。	良好	灰	0.5～1㎜の長石少。	
	60	須恵器	杯身	13.3～13.5		4.2	完形	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央に仕上げナデ。（歪みあり）	良好	灰	1㎜以下の砂粒少。	
	61	須恵器	杯身	12.2～12.4		3.9	完形（復元）	底部外面ヘラケズリ（右）。若干の窪み、内面中央仕上げナデ。	良好	灰白	2～4㎜の長石多。	
	62	須恵器	杯身	12.3～12.5		4.3	ほぼ完形	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央に粘土紐痕。	良好	灰	0.5～2㎜の砂粒少。	
	63	須恵器	杯身	12.4～12.6		4.1	完形	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央に同心円文。	良好	灰	0.5～2㎜の砂粒少。	
	64	須恵器	杯身	12.3		4.2	ほぼ完形（復元）	底部外面はナデか。内面に指頭圧痕およびナデ。	良好	灰	3㎜以下の石英少。	
	65	須恵器	杯身	12.4～12.6		4.0	ほぼ完形	底部外面ヘラケズリ（左）。内面中央はナデ。	良好	暗青灰	0.5～2㎜の長石少。	
	66	須恵器	杯身	12.5～12.8		3.9	完形（復元）	底部外面ヘラケズリ（右）。	良好	青灰	1㎜前後の砂粒少。	
	67	須恵器	杯身	12.3		3.5	ほぼ完形（復元）	底部外面ヘラケズリ（右）。	良好	暗青灰	1㎜以下の砂粒僅。	
	68	須恵器	杯身	12.1～12.4		3.8	完形	底部外面ヘラケズリ（左）。	良好	青灰	1㎜前後の長石少。	
	69	須恵器	杯身	11.9～12.2		4.0	完形	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。	良好	青灰	0.5～2㎜の砂粒中位。	
	70	須恵器	杯身	11.6～12.0		4.1	完形	底部外面板状工具によるナデ。	良好	明青灰	1㎜前後の砂粒多。	ヘラ記号
	71	須恵器	杯身	10.7～11.4		4.0	完形	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。内外に土器片の付着物あり。自然釉。	良好	灰	0.5～2㎜の砂粒中位。	
	72	須恵器	杯身	9.6～9.8		3.4	完形	底部外面は未調整。溶着物付着。底部外面の窪み、歪みあり。	良好	灰	0.5㎜以下の砂粒僅。	
	73	須恵器	高杯（蓋）	13.8		5.4	完形	天井部外面はカキメ。内面中央に同心円文あり。つまみはナデ。	良好	暗青灰	0.5～3㎜の砂粒中位。	
	74	須恵器	高杯	11.4	12.0	14.1	ほぼ完形	杯底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央に同心円文。脚部3方向1段透し。	良好	青灰	1㎜以下の砂粒多。	
	75	須恵器	高杯	11.6	11.2	13.1	口縁部一部欠損	杯底部外面ヘラケズリ（右）後、板状工具による調整。3方向1段透し。粘土紐痕。	良好	暗青灰	2㎜前後の長石多。	
	76	須恵器	高杯	11.4	10.9	13.8	ほぼ完形（復元）	杯底部外面ヘラケズリ。3方向1段透し。自然釉。脚部内面シボリ痕。	良好	暗青灰	1㎜以下の砂粒多。	
	77	須恵器	高杯	11.5	10.8	12.1	脚裾部1/4欠損	杯底部外面ヘラケズリ（右）後、板状工具によるナデ。脚柱部も板ナデ。3方向1段透し。粘土紐痕。	良好	灰	2㎜以下の長石多。	
	78	須恵器	高杯	11.7	10.1	13.9	完形（復元）	杯底部外面ヘラケズリ（右）後、板状工具による調整。杯内面仕上げナデ。3方向1段透し。	良好	暗青灰	0.5～3㎜の砂粒多。	
	79	須恵器	高杯	10.2	7.6	12.4	完形（復元）	杯外面に連続刺突文。その直下に凹線1条3方向1段透し。脚部内面粘土紐痕。	良好	暗青灰	1㎜前後の砂粒少。	
	80	須恵器	高杯	8.0	7.6	11.3	脚部1/3欠損	杯外面に連続刺突文3段と凹線2条が巡る3方向1段透し。	良好	灰	1㎜以下の長石多。	
	81	須恵器	高杯	13.9	11.0	9.1	口縁部1/2脚部2/3欠損	横ナデ。3方向1段透し。	やや不良	灰白	2㎜前後の長石多。	
	82	須恵器	高杯	10.2	8.0	14.4	完形（復元）	杯部内面中央に同心円文。脚柱部外面に凹線1条。内側にシボリ痕。自然釉。	良好	暗青灰	1㎜以下の長石雲母。	
	83	須恵器	高杯	12.1	10.4	16.9	脚部一部欠（復元）	杯外面に沈線、底部はヘラケズリ（右）後ナデ。内面に仕上げナデ。脚柱外面に凹線2条、内側にシボリ痕。	良好	青灰	0.5～2㎜の長石少。	
	84	須恵器	高杯	12.2	9.6	15.2	脚部1/4欠損（復元）	杯外面に連続刺突文。脚柱部外面に凹線2条、内側にシボリ痕。粘土紐痕。3方向2段透し。	良好	暗青灰	1㎜前後の長石多。	ヘラ記号
	85	須恵器	高杯	8.6	8.7	14.5	ほぼ完形	杯底部外面に連続刺突文。内面に同心円文底部閉塞し、孔4個。中に2片の丸玉が存在。3方向2段透し。	良好	暗青灰	1㎜以下の砂粒少。	鈴？

遺構名	挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	残存状況	形態・手法の特徴	焼成	色調	胎土	備考
2号墳第4主体部	86	須恵器	高杯	8.5	9.1	13.8	脚部一部欠損	杯底部外面に連続刺突文。内面に同心円文底部閉塞し、孔数個。3方向2段透し。	良好	灰	1㎜以下の砂粒多。	鈴？
	87	須恵器	𤭯	8.3		10.0	ほぼ完形	横ナデおよびナデ。	良好	青灰	2㎜以下の砂粒少。	
	88	須恵器	𤭯	12.4		12.5	完形（復元）	底部外面ヘラケズリ（左）。灰かぶり、自然釉。	良好	暗青灰	1㎜以下の砂粒少。	
	89	須恵器	𤭯	14.1		15.0	口縁部3/4欠損	口縁部外面にクシ描波状文2条と沈線。肩部に連続刺突文と凹線。頸部内側にシボリ痕。	良好	青灰	1㎜前後の長石少。	
	90	須恵器	提瓶				口縁部欠損	胴部正・背面ともカキメ。背面内側に指頭圧痕。鉤状把手。	良好	暗青灰	1㎜以下の砂粒少。	
	91	須恵器	提瓶	8.5		25.0	完形（復元）	胴部正面カキメ。背面ヘラケズリ（右）背面の内側に指頭圧痕。鉤状把手。	良好	暗青灰	2㎜以下の長石多。	
	92	須恵器	提瓶	7.0		17.6	完形（復元）	胴部正面カキメ、背面ヘラケズリ（右）。鉤状把手。	良好	暗青灰	2～3㎜の石英等少。	
	93	須恵器	提瓶	6.6		18.1	完形	胴部正面カキメ、背面ヘラケズリ（右）。後カキメ。鉤状把手。	良好	青灰色	2㎜以下の砂粒多。	
	94	須恵器	提瓶	7.3		20.5	ほぼ完形	胴部正面カキメ、背面ヘラケズリ（右）。後カキメ。鉤状把手。	良好	灰白	2㎜以下の砂粒多。	
	95	須恵器	提瓶	6.6		15.9	完形	胴部正面カキメ、背面ヘラケズリ（右）。後カキメ。鉤状把手。	やや不良	灰	1～2㎜の砂粒少。	
	96	須恵器	提瓶	6.7		18.9	ほぼ完形	胴部正面カキメ、背面ヘラケズリ（右）。後カキメ。鉤状把手。把手は一方は鉤状、他方は環状把手。	不良	灰白	3㎜以下の砂粒多。	
	97	須恵器	提瓶	7.8		23.1	ほぼ完形	胴部正面横ナデ、背面ヘラケズリ（右）。環状把手。上半に自然釉。	良好	青灰	2㎜以下の砂粒	
	98	須恵器	提瓶				口縁部欠損	胴部正・背面ともカキメ。環状把手。	良好	青灰	4㎜以下の砂粒多。	
	99	須恵器	提瓶	8.1		20.9	口縁部1/2	胴部正・背面ともカキメ。鉤状把手。	良好	青灰	1～2㎜の砂粒多。	
	100	須恵器	提瓶				体部残存	胴部正面カキメ背面ヘラケズリ（右）。鉤状把手。	良好	青灰	0.5～3㎜の砂粒多。	外面に工具痕
	101	須恵器	提瓶				約4/5	胴部正・背面ともカキメ。把手は退化して貼付浮文。背面ヘラケズリ（右）。	良好	青灰	1㎜程度の砂粒多。	
	102	須恵器	提瓶	6.9		16.3	ほぼ完形	胴部正面は板状工具による軽い調整か。背面はヘラケズリ（左）。把手無し。	良好	暗紫灰	砂粒少。	
	103	須恵器	提瓶	6.7		15.5	完形	胴部正面カキメ、背面ヘラケズリ（左）。把手無し。	良好	暗青灰	2～4㎜の砂粒多。	
	104	須恵器	平瓶	(5.0)			口縁部欠損	胴部下半ヘラケズリ（右）。	やや不良	灰	2㎜以下の砂粒多。	
	105	須恵器	椀	9.9		6.6	完形	底部ヘラケズリ1周（右）。内面に自然釉、灰。	良好	暗灰	3㎜以下の長石多。	
	106	須恵器	蓋	9.5		3.5	完形（復元）	天井部外面ヘラ切り未調整。内面中央仕上げナデ。	良好	青灰	0.5㎜以下の砂粒僅。	
	107	須恵器	蓋	(10.4)		3.4	1/3	天井部外面ヘラケズリ（右）。灰かぶり。	良好	暗青灰	1㎜以下の砂粒少。	108と対
	108	須恵器	壺	8.6		9.0	口縁部～肩部一部欠損	底部外面ヘラケズリ（右）。蓋とセットで焼成した痕跡あり。外面自然釉。	やや不良	青灰	2㎜以下の砂粒少。	107と対
	109	須恵器	蓋	9.9		3.6	ほぼ完形（復元）	天井部外面ヘラケズリ（右）。	良好	青灰	2㎜前後の長石僅。	110と対
	110	須恵器	壺	8.3		8.6	ほぼ完形	肩部外面に凹線状のもの2条。1周せず。内面下半粘土紐痕。蓋とセットで焼成した痕跡あり。	良好	暗青灰	1～2㎜の砂粒少。	109と対
	111	須恵器	蓋	10.6		3.5	ほぼ完形（復元）	天井部ヘラケズリ（右）。内面中央に仕上げナデ。灰かぶり。	良好	暗灰	2㎜前後の砂粒僅。	112と対
	112	須恵器	壺	7.4		8.1	完形	底部外面ヘラケズリ（左）。内面中央に同心円文。蓋とセットで焼成した痕跡。灰かぶり。	良好	暗灰	1㎜以下の砂粒少。	111と対
	113	須恵器	壺	7.3		10.3	完形（復元）	胴部下半ヘラケズリ（右）。内面中央はナデ。	良好	灰	2㎜以下の長石少。	
	114	須恵器	壺				口頸部欠損	底部外面ヘラケズリ（左）。内面は未調整。	良好	青灰		
	115	須恵器	壺	3.5		(7.0)	完形	胴部ナデ。歪が著しい。	良好	暗紫灰	1.5～3㎜の砂粒多。	
	116	須恵器	壺	5.7		7.6	完形	口頸部～肩部横ナデ。胴部下半内外面ナデ。	良好	青灰	1～2㎜の砂粒多。	
	117	須恵器	壺	4.5		5.6	完形	口頸部付近横ナデ。	やや不良	灰白	0.5～4㎜の砂粒。	
	118	須恵器	壺	5.8		9.5	ほぼ完形（復元）	口頸部横ナデ。胴部ナデ。底部は未調整。	良好	暗青灰	1～2㎜の砂粒多。	
	119	須恵器	壺	5.1		9.0	ほぼ完形	口頸部～肩部横ナデ。底部外面ナデ。内部粘土紐痕。	良好	青灰	1～2㎜の砂粒多。	
	120	須恵器	壺	8.2		12.5	ほぼ完形	横ナデ。ただし底部内面は未調整。底部外面に重ね焼きの変色有り。	不良	灰褐	1～2㎜の長石多。	
	121	須恵器	壺	8.7	9.7	18.4	完形	横ナデ。	良好	暗青灰	1～2㎜の砂粒少。	
	122	須恵器	壺	11.5		14.7	完形（復元）	肩部に板状工具による調整。底部はヘラケズリ（右）。	良好	暗青灰	2㎜以下の砂粒少。	
	123	須恵器	壺	12.1		15.2	口縁～頸部1/2欠損(復元)	胴部下半ヘラケズリ（右）。外面灰かぶり。	良好	暗青灰	1～2㎜の砂粒少。	

遺構名	挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	残存状況	形態・手法の特徴	焼成	色調	胎土	備考
2号墳第4主体部	124	須恵器	壺	14.4		21.2	ほぼ完形	頸部～胴部上半にカキメ。底部に格子風タタキ。内面下半に同心円文。重ね焼きによる他土器片付着。	良好	青黒	2㎜以下の砂粒少。	
	125	須恵器	壺	7.6		13.6	口縁部3/4欠損	肩部付近に板状工具による調整。底部外面はヘラきり未調整。	良好	青灰	3㎜以下の砂粒多。	
	126	須恵器	壺	17.0		23.1	完形	頸部に凹線2条、ヘラ描斜線。胴部はタタキ後カキメ。内面に同心円文。自然釉。土器小片溶着。	良好	暗青灰	1㎜以下の砂粒少。	
	127	須恵器	壺	20.8		29.8	完形	頸部外面に凹線2条とクシ描波状文（一部列点状）。胴部は外面に格子風タタキ。内面同心円文。	良好	暗青灰	3㎜以下の長石多。	
	128	須恵器	器台	30.2	24.0	42.7	ほぼ完形（復元）	杯部、脚部の外面に波状文と刺突文および凹線。杯内面はタタキ、ナデ。3方向6段透し。	良好	青灰	1㎜前後の砂粒多。	
	129	土師器	高杯	17.3		13.9	杯部1/2脚部1/4欠(復元)	杯外面ハケメ横ナデ。脚柱部ヘラミガキ、内側にシボリの痕跡。丹塗り？	良好	浅黄橙	1㎜以下の砂粒僅。	
	130	土師器	高杯	14.6	10.5	11.9	一部欠損（復元）	杯底部～脚柱部外面に板状工具による調整。杯内面ナデ。	良好	橙	1㎜前後の砂粒僅。	
	131	土師器	高杯	(14.2)			杯部4割	杯底部～脚柱部外面に板状工具による調整。	良好	にぶい橙	1～2㎜の砂粒少。	
	132	土師器	高杯				杯部、脚裾部4/5欠損	横ナデか。詳細は判然とせず。外面丹塗り。	良好	浅黄橙	微砂粒僅。	
	133	土師器	壺		約2.2		口縁部欠損	磨耗著しく調整不明。	良好	にぶい橙	2～4㎜の砂粒多。	
	134	土師器	椀	15.2		5.5	2/3（復元）	小片多数より復元。よって調整が判断しにくい。内面に放射状の暗文。	良好	橙	1㎜以下の砂粒多。	
	135	須恵器	杯蓋	14.1～14.5		4.1	完形（復元）	天井部外面ヘラケズリ（左）。内面中央仕上げナデ。	良好	灰	1㎜以下の砂粒少。	
	136	須恵器	杯蓋	14.5～14.7		4.1	完形	天井部外面ヘラケズリ2回か（左）。内面中央仕上げナデ。	良好	青灰	0.5㎜以下の砂粒僅。	
	137	須恵器	杯身	12.5～12.7		4.2	ほぼ完形（復元）	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央は仕上げナデ。	良好	灰白	1㎜以下の砂粒僅。	
	138	須恵器	杯身	12.2～12.4		3.6	ほぼ完形	底部外面ヘラケズリ（左）。	良好	青灰	2㎜以下の砂粒少。	
	139	須恵器	提瓶	3.9		13.2	体部一部欠損	胴部正面に沈線とヘラ状工具による文様がドーナツ状にあり。背面は文様状にカキメ。背面内部粘土紐痕。把手部分は退化して装飾的。	良好	紫灰	4㎜以下の砂粒多。	
	140	須恵器	壺	7.0		8.6	ほぼ完形	調整はほとんど見えず。	良好	青灰	4㎜以下の砂粒多。	
	141	須恵器	壺	8.0		9.4	ほぼ完形	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央は仕上げナデ。重ね焼き痕。灰かぶり。付着物あり。	良好	灰白	3㎜以下の長石多。	
	142	須恵器	杯蓋	11.6		5.0	完形	天井部外面ヘラケズリ（右）。	良好	灰	3㎜以下の砂粒多。	(～146)セット。ただし蓋と身との対応は不明。
	143	須恵器	杯蓋	10.9		5.1	完形	天井部外面ヘラケズリ（右）。	良好	灰	3㎜以下の砂粒多。	
	144	須恵器	杯蓋	11.0		4.7	ほぼ完形	天井部外面ヘラケズリ（右）。	良好	灰	3㎜以下の砂粒多。	(142～)セット。ただし蓋と身との対応は不明。
	145	須恵器	杯蓋	11.3			1/4	天井部外面ヘラケズリ（右）。つまみ欠。	良好	灰	3㎜以下の砂粒多。	
	146	須恵器	器台	(28.5)			口縁部1/3脚柱部1/6	口径8.5cm前後の杯身7（？）を有する。脚部に沈線3条と斜線状の刺突文。受部に穿孔。	良好	灰	1㎜以下の長石多。	
2号墳その他	1	須恵器	杯蓋	(14.3)		(4.8)	1/2（復元）	天井部外面ヘラケズリ（左）。内面中央に同心円文。	良好	灰	1㎜以下の砂粒僅。	
	2	須恵器	杯蓋	(14.0)		4.6	4割（復元）	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央に仕上げナデ。	良好	灰	1～2㎜の砂粒僅少。	
	3	須恵器	杯蓋	(14.6)			口縁部1/6	天井部外面ヘラケズリ（右）。	良好	緑灰	1㎜程度の砂粒少。	
	4	須恵器	杯蓋	13.9		4.7	1/2（復元）	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。	良好	灰	2～4㎜の砂粒少。	
	5	須恵器	杯蓋	13.8		4.1	口縁部1/2欠損	天井部外面ヘラケズリ（左）。外面灰かぶり。	良好	青灰	2㎜程度の砂粒少。	
	6	須恵器	杯蓋	15.2		4.3	1/2（復元）	天井部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。	やや不良	灰白	2～3㎜の砂粒僅。	
	7	須恵器	杯蓋	13.7		4.3	8割（復元）	天井部外面ヘラ切り未調整。	やや不良	灰白	2～4㎜の長石多。	
	8	須恵器	杯身	10.9		4.7	2/3（復元）	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。わずかに同心円文。	良好	青灰	1㎜以下の砂粒多。	
	9	須恵器	杯身	12.2		4.7	1/2（復元）	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央に同心円文、仕上げナデ。	良好	青灰	1㎜以下の長石中量。	
	10	須恵器	杯身	11.9		4.6	1/3（復元）	底部外面ヘラケズリ（右）。内面中央仕上げナデ。	良好	青灰	1㎜以下の砂粒中量。	
	11	須恵器	杯身	11.5			口縁部1/6（復元）	底部外面ヘラケズリか（右）。	良好	灰	1㎜以下の長石少。	

遺構名	挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	残存状況	形態・手法の特徴	焼成	色調	胎土	備考
2号墳その他	12	須恵器	壺(蓋)	10.3＋α			1/2(復元)	天井部外面ヘラケズリ(右)。	良好	灰	1㎜以下の砂粒少。	
	13	須恵器	杯身		高台外径 8.3		小片	貼付高台。	良好	灰	0.5㎜以下の砂粒多。	
	14	須恵器	壺	17.8			口縁部1/3 肩部1/3	頸部外面に凹線とクシ描波状文、肩部外面にタタキ、内側は同心円文。	良好	青灰	1㎜以下の長石少。	
	15	須恵器	壺	11.0			口縁部大半欠損	横ナデ。台部との見解も。	やや不良	青灰	1㎜以下の砂粒少。	
	16	須恵器	壺		3.5～4.0		4割(復元)	底部外面ヘラケズリ(右)。	良好	灰	2～5㎜の砂粒多。	
	17	須恵器	器台	31.1	22.7		2/3(復元)	杯部外面タタキ、凹線と波状文。内面はタタキ後仕上げナデ。脚部に凹線、波状文、刺突文。3方向透し。(6段以上)	良好	青灰	1㎜以下の砂粒少。	
	18	須恵器	甕	14.0			口縁部1/2 肩～胴部1/4	胴部外面格子風タタキ。内面は同心円文。把手か耳の貼付け(個数は不明)。	良好	灰	1㎜前後の長石少。	
	19	須恵器	甕	21.2			口縁部1/3	肩部外面タタキ。内面同心円文。	良好	青灰	0.5㎜以下の砂粒僅。	
	20	須恵器	甕	25.8			口縁部1/4 胴部1/6(復元)	胴部外面平行タタキ後カキメ。内側は同心円文。	良好	灰オリーブ	1～2㎜の長石少。	ヘラ記号 ×
	21	須恵器	甕	41.6			口縁部大半欠損	外面に沈線とクシ描波状文。	良好	灰	0.5㎜および2㎜の長石僅。	
	22	須恵器	甕	35.0			口縁部1/4(復元)	外面に沈線および板状工具による連続刺突文。内外に自然釉。	良好	暗青灰	1㎜前後の長石少。	
5号墳	1	須恵器	杯蓋	14.0		4.5	完形	天井部外面ヘラケズリ(左)。内面中央は仕上げナデ。	良好	暗青灰	1㎜前後の砂粒	2と対
	2	須恵器	杯身	12.3		4.5	完形	底部外面ヘラケズリ(左)。卵型に歪み。	良好	青灰	1～3㎜の砂粒少。	1と対
	3	須恵器	杯蓋	13.7		3.4	完形	天井部外面ヘラケズリ(右)。内面中央は軽く仕上げナデ。	良好	青灰	1～4㎜の砂粒少。	4と対
	4	須恵器	杯身	11.8		4.2	完形	底部外面ヘラケズリ(右)。内面中央軽くオサエ、仕上げナデ。	良好	青灰	1㎜以下の砂粒	3と対
	5	須恵器	杯蓋	14.4		4.6	完形	天井部外面ヘラケズリ(右)。内面中央に仕上げナデ。天井外面半分に自然釉。粘土紐明瞭。天井部歪み。	良好	灰	1～4㎜の砂粒少。	6と対
	6	須恵器	杯身	12.6		4.8	完形	底部外面ヘラケズリ(右)。内面中央に同心円文。	良好	青灰	0.5～2.5㎜の砂粒少。	5と対
	7	須恵器	壺	9.6		11.3	完形	胴部下半ヘラケズリ(方向不明)後ナデか底部内面に棒状工具押し当て痕跡。	良好	青灰	1～2㎜の砂粒少。	
土壙墓22	1	須恵器	杯蓋	14.7		4.2	口縁一部欠	天井部外面ヘラケズリ(右)。内面中央は軽く仕上げナデ。	良好	暗灰	0.5～2㎜の長石少量。	2と対
	2	須恵器	杯身	13.0		4.1	ほぼ完形	底部外面ヘラケズリ(右)。内面中央は仕上げナデ。	良好	暗青灰	0.5㎜前後の砂粒僅。	1と対
	3	須恵器	杯蓋	14.0		3.9	完形(復元)	天井部外面ヘラケズリ(左)。内面中央軽く指オサエか。天井外面灰かぶり。	良好	暗灰	0.5～1㎜の砂粒少。	
	4	須恵器	杯身	12.4		4.3	完形	底部外面ヘラケズリ(右)。内面粘土紐痕。	良好	青灰	0.5㎜以下の砂粒少。	ヘラ記号
	5	須恵器	杯蓋	13.8		3.9	ほぼ完形	天井部外面ヘラケズリ(右)。内面中央は軽く仕上げナデ。	やや不良	明緑灰	1㎜前後の砂粒少。	6と対
	6	須恵器	杯身	12.4		4.2	完形	底部外面ヘラケズリ(右)。内面中央に仕上げナデ。	やや不良	緑灰	0.5～2㎜の砂粒少。	5と対
	7	須恵器	杯蓋	14.4		4.0	ほぼ完形	天井部外面ヘラケズリ(右)。内面中央に仕上げナデ。	良好	暗青灰	0.5～2㎜の砂粒多。	ヘラ記号
	8	須恵器	杯身	12.6		4.2	完形	天井部外面ヘラケズリ(右)。内面中央に仕上げナデ。	良好	青灰	2㎜以下の長石多。	
	9	須恵器	杯蓋	14.1		4.2	完形	天井部外面ヘラケズリ(右)。内面に2㎜以下の炭化粗付着。多少歪みあり。	良好	灰	0.5～1㎜の砂粒少。	10と対
	10	須恵器	杯身	12.3		4.2	ほぼ完形	底部外面ヘラケズリ(右)内面中央に仕上げナデ。歪み。炭化粗付着。	良好	灰白	0.5～1.5㎜の砂粒少。	9と対
	11	須恵器	杯蓋	14.6		4.1	2/3	天井部外面ヘラケズリ(左)。黒斑数カ所。内面に粘土紐痕が明瞭に残る。天井部窪み、歪み。	良好	青灰	0.5～2㎜の砂粒多。	12と対
	12	須恵器	杯身	13.1		4.3	ほぼ完形(復元)	底部外面ヘラケズリ(左)。内面中央仕上げナデ。	良好	青灰	0.5～1.5㎜の砂粒多。	11と対
	13	須恵器	杯蓋	14.5		4.4	完形	天井部外面ヘラケズリ(左)。内面の粘土紐痕が明瞭。天井部に歪み。	良好	灰	0.5～3㎜の砂粒多。	14と対
	14	須恵器	杯身	13.0		4.5	完形	底部外面ヘラケズリ(左)。内面中央に同心円文。受部に4㎝位の重ね焼き痕。歪みあり。	良好	灰	0.5～2㎜の砂粒少。	13と対
	15	須恵器	杯蓋	14.6		4.2	ほぼ完形(復元)	天井部外面ヘラケズリ(左)。内面中央に粘土紐痕。	良好	青灰	1～2㎜の砂粒多。	16と対
	16	須恵器	杯身	13.2		4.4	ほぼ完形(復元)	底部外面ヘラケズリ(左)。内面に粘土紐痕。	良好	青灰	1.5㎜以下の砂粒。	15と対

遺構名	挿図番号	種別	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	残存状況	形態・手法の特徴	焼成	色調	胎土	備考
土壙墓22	17	須恵器	杯蓋	13.7		3.7	ほぼ完形（復元）	天井部外面ヘラケズリ（左）。ヘラケズリの中心部のズレ。	良好	青灰	0.1㎜程度の砂粒僅。	
	18	須恵器	杯身	12.3		4.3	完形	底部外面ヘラケズリ（左）。内面中央に粘土紐痕。歪み。	良好	灰	1㎜以下の砂粒少。	
	19	須恵器	杯蓋	14.3		4.4	ほぼ完形	天井部外面ヘラケズリ（左）。内面中央に同心円文。	良好	オリーブ灰	0.5～3㎜の長石少。	20と対
	20	須恵器	杯身	12.9		4.5	完形	底部外面ヘラケズリ（左）。内面中央に同心円文。	良好	青灰	1㎜以下の砂粒多。	19と対
	21	須恵器	杯蓋	14.7		4.2	一部欠損	天井部外面ヘラケズリ（左）。	良好	緑灰	0.5～2㎜の長石少。	22と対
	22	須恵器	杯身	12.8		3.7	ほぼ完形（復元）	底部外面ヘラケズリ（左）。内面中央に同心円文。自然釉。底部外面に土器片付着。	良好	灰	0.5～3㎜の砂粒少。	21と対
	23	須恵器	杯蓋	12.8		4.4	完形	底部外面ヘラ切り未調整。天井部内面に粘土紐痕。	良好	青灰	2㎜以下の砂粒少。	
	24	須恵器	高杯	11.0	10.6	16.9	口縁部一部欠損	杯底部外面ヘラケズリ（右）後ナデ、板状工具による刺突文。3方向2段透し。	良好	暗青灰	1㎜以下の砂粒僅。	
	25	須恵器	椀	10.0	9.0	14.6	口縁部一部欠損	底部外面ヘラケズリ（左）。後ナデ。内面中央に粘土紐痕。	良好	灰	2㎜以下の砂粒多。	
	26	須恵器	壺	9.0		10.5	口縁部一部欠損	底部外面ヘラケズリ（左）。胴～頸部カキメ、底部内面に粘土紐痕。	良好	灰白	2㎜前後の長石少。	
	27	須恵器	壺	10.5		14.3	口縁部1/4欠損	胴部下半ヘラケズリ（左）。胴部～頸部カキメ。	良好	灰	1㎜以下の砂粒少。	
	28	須恵器	壺	18.2		27.8	口縁部一部欠損	頸部外面に板状工具による刺突文。胴部外面はタタキ、内面同心円文。自然釉。重ね焼き痕跡。	良好	青灰	3㎜以下の長石多。	
	29	須恵器	壺（蓋）	5.8		6.3	ほぼ完形	天井部外面板状工具による刺突文。天井部ヘラケズリ（右）。かえり部内側に重ね焼き痕跡。中央内面に穿孔。	良好	灰	0.2㎜前後の長石多。	30と対
	30	須恵器	壺	8.1	12.7	29.9	完形（復元）	口頸部～胴部上半に板状工具による刺突文円形および三角形の透し（2段）3方向。自然釉。粘土紐痕。	良好	灰	2㎜以下の長石多。	31と対
	31	須恵器	壺	18.6		32.6	ほぼ完形（復元）	胴部外面平行タタキ。内面に同心円文。	やや不良	灰	0.5～3㎜の砂粒多。	
	32	須恵器	提瓶	6.0		17.2	完形	胴部表面にカキメ。背面にヘラケズリ（右）。環状把手。	良好	灰	5㎜以下の長石多。	
	33	須恵器	提瓶	5.0		17.3	ほぼ完形	表面・背面にカキメ。環状把手。	良好	灰白	0.5～3㎜の砂粒多。	
	34	須恵器	平瓶	6.3		16.0	ほぼ完形	底部外面ヘラケズリ（右）。体部上面に重ね焼き痕および自然釉。土器片付着。	良好	灰	3㎜以下の長石多。	
	35	須恵器	横瓶	9.3		20.8	口縁部一部欠損	体部外面格子目タタキ、ヘラケズリ（右）および指頭圧痕。	やや不良	青灰	1㎜以下の砂粒僅。	
土棺墓器1	1	土師器	甕	(34.6)			口頸部破片	内外面にハケメ。頸部外面に指頭圧痕。	良好	にぶい黄褐	0.5㎜以下の砂粒多。	2と対
	2	土師器	甕	35.3		24.0	7割（復元）	外面にハケメ。内面はオサエ、ナデ。胴部、環状に黒斑。口縁部歪みはげしい。	良好	にぶい黄褐	1㎜以下の砂粒僅。	1と対
中世墓	1	備前焼	壺	20.0	21.6	32.0	口縁1/2欠	肩部外面に沈線3条。胴部下端にヘラケズリ1周（左）。内面にオサエ、ナデ。	良好	青灰	0.5～5㎜の砂粒多。	中世墓1
	2	備前焼	壺	11.7	12.8	22.2	2/3（復元）	肩部外面にカキメ状の沈線。胴部外面はハケメ状調整、下端1周ヘラケズリ（左）。内面オサエ、ナデ。	良好	赤褐	1～2㎜の砂粒少。	中世墓5
	3	備前焼	壺	(12.6)			破片	肩部外面に沈線3条。	良好	暗赤灰	1㎜以下の砂粒少。	
	4	備前焼	壺	(12.7)			破片数点	肩部外面にクシ描波状文。	良好	橙	微砂僅。	
	5	備前焼	壺		15.1		口頸部欠損	肩部外面に沈線数条。胴部下部外面にハケメ。内面はオサエ、ナデ。	良好	橙	2～4㎜の砂粒少。	
	6	備前焼	壺		(15.8)		底部のみ	ナデ。底部内面粘土紐痕。	良好	灰	砂粒多。	

表－3　1号墳鉄器計測表

挿図番号	種別	残存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	挿図番号	種別	残存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
1	刀子	19.2	1.7	0.2	26.3		9	鏃	2.3	0.7	0.4	1.9	同一個体か。
2	刀子	24.2	2.1	0.3	63.5	木質残	10	鏃	1.3	0.7	0.4		
3	鏃	6.8	1.0	0.2	3.3		11	鏃	3.5	1.2	0.3	3.0	
4	鏃	3.5	0.8	0.3	2.2		12	鏃	3.6	0.7	0.2	1.8	
5	鏃	4.0	0.9	0.3	(2.7)		13	鏃	1.5	0.6	0.3	(0.8)	
6	鏃	4.0	0.8	0.4	(3.7)		14	鏃	0.9	0.8	0.3	(0.6)	
7	鏃	2.8	0.9	0.3	(2.5)		15	不明			0.4	13.3	飾金具？
8	鏃	1.7	0.7	0.3	(1.1)								

表－4　2号墳第1主体部鉄器計測表　棺釘の最大値は頭部を除外

挿図番号	種別	残存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	挿図番号	種別	残存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
1	刀身	112.2	3.9	0.9	1604.5	木質残	34	鏃	7.4	0.8	0.3	(7.3)	木質残
	鍔	10.0	(8.2)	0.6			35	鏃	2.1	0.4	0.3	(0.7)	木質残
2	刀子	14.8	1.3	0.4	21.0	木質残	36	鏃	2.0	0.4	0.3	(0.5)	木質残
3	刀子	17.7	1.2	0.6	25.4		37	鏃	4.5	0.4	0.2	(1.2)	木質残
4	刀子	18.6	0.9	0.5	21.0		38	鏃	1.2	0.7	0.3	(0.6)	
5	鏃	17.5	0.9	0.2	100.0	木質残	39 馬具	銜	(23.0)	2.1	0.7	122.3	
6	鏃	15.2	1.0	0.3	11.6			鏡板	10.2	7.4	0.8		図左
7	鏃	13.8	0.9	0.2	10.6	木質残		鏡板	9.6	7.5	0.8		図右
8	鏃	15.5	1.0	0.3	10.6	木質残		引手	16.3	2.8	0.7		図左
9	鏃	15.2	1.0	0.3	9.4	木質残		引手	16.2	2.6	0.7		図右
10	鏃	15.1	1.1	0.4	11.5	木質残	40	棺釘	21.6	1.4	1.0	106.0	木質残
11	鏃	13.5	(1.0)	0.3	8.0	木質残	41	棺釘	21.4	1.5	1.1	100.0	木質残
12	鏃	9.2	1.0	0.4	7.0	湾曲	42	棺釘	20.8	1.1	1.1	79.2	木質残
13	鏃	9.2	(1.0)	0.3	6.0		43	棺釘	21.0	1.1	0.8	78.0	木質残
14	鏃	6.8	1.1	0.3	6.9		44	棺釘	19.7	1.3	1.2	105.2	木質残
15	鏃	3.6	1.0	0.4	3.3		45	棺釘	19.3	1.3	0.9	90.5	木質残
16	鏃	5.0	1.0	0.3	3.9	同一個体？	46	棺釘	19.2	1.1	1.2	116.3	木質残
17	鏃	4.7	0.7	0.4	2.7	17木質残	47	棺釘	17.8	1.0	0.7	53.7	木質残
18	鏃	10.3	1.0	0.3	7.6		48	棺釘	18.5	1.2	1.1	85.8	木質残
19	鏃	13.8	(1.0)	0.4	9.4		49	棺釘	17.9	1.1	1.0	84.8	木質残
20	鏃	8.5	1.1	0.3	5.7		50	棺釘	18.1	1.1	1.1	89.0	木質残
21	鏃	8.8	1.0	0.3	6.2		51	棺釘	18.1	1.2	1.0	74.9	木質残
22	鏃	14.1	1.1	0.3	6.1	木質残	52	棺釘	17.3	1.2	1.0	85.6	木質残
23	鏃	13.8	1.0	0.2	10.6		53	棺釘	17.3	1.2	1.1	73.6	木質残
24	鏃	12.6	1.7	0.3	11.0	木質僅残	54	棺釘	16.3	1.1	0.9	64.9	
25	鏃	12.3	1.6	0.4	9.1		55	棺釘	15.7	1.1	0.6	24.5	木質残
26	鏃	9.5	1.4	0.3	10.1		56	棺釘	15.2	1.2	1.0	65.4	木質残
27	鏃	4.5	1.4	0.2	4.1		57	棺釘	9.9	1.1	0.5	38.2	
28	鏃	14.0	0.7	0.2	6.7	木質残	58	棺釘	9.7	1.2	0.6	11.2	木質残
29	鏃	9.5	0.5	0.3	8.0	木質僅残	59	棺釘	4.9	1.0	0.8	33.4	木質残
30	鏃	11.9	0.7	0.4	(8.9)								
31	鏃	8.7	0.5	0.3	3.5								
32	鏃	7.9	0.6	0.4	6.0								
33	鏃	6.2	0.6	0.4	4.8								

（　）数字は推定、ただし重量の（　）は処理後

表－5　2号墳第2主体部鉄器計測表

挿図番号	種別	残存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
1	刀子	16.9	1.5	0.3	18.3	木質残
2	鏃	19.1	1.2	0.3	11.7	木質残
3	鏃	11.2	2.6	0.4	12.5	木質残

表－6　2号墳第3主体部鉄器計測表

挿図番号	種別	残存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
1	刀子	18.7	1.2	0.5	32.5	
2	刀子	18.5	1.1	0.4	31.4	
3	鏃	14.1	2.1	0.4	18.8	木質残
4	鏃	12.1	1.7	0.5	14.8	

表－7　2号墳第4主体部鉄器計測表

挿図番号	種別	残存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
1	大刀	73.1	3.2	0.4	681.6	3片計
2	大刀	44.3	(2.7)	0.5	212.5	
3	大刀	77.1	4.0	6.0	(295.3)	2片計
4	刀子	24.7	2.9	0.7	174.7	
5	刀子	24.3	1.9	0.4	61.1	
6	刀子	21.6	2.1	0.4	(42.8)	
7	刀子	4.0	1.7	0.4	6.0	
8	刀子	7.2	2.1	0.6	36.4	
9	刀子	5.9	2.4	0.3	(14.6)	
10	刀子	4.0	1.6	0.4	7.7	
11	刀子	3.9	0.9	0.2	5.8	
12	刀子	5.3	1.2	0.2	5.4	
13	鍔	6.8	(6.2)	0.6	38.9	
14	鍔	3.0	2.1	0.2	8.1	
15	鏃	11.5	1.2	0.4	(12.1)	
16	鏃	10.2	1.1	0.4	9.9	
17	鏃	9.9	(1.2)	0.4	9.6	
18	鏃	10.6	1.2	0.4	12.8	
19	鏃	3.3	1.2	0.3	3.0	
20	鏃	3.5	0.9	0.3	2.8	
21	鏃	6.6	0.9	0.2	(3.8)	
22	鏃	2.0	1.0	0.2	(1.2)	
23	鏃	4.3	1.1	0.2	5.1	
24	鏃	11.2	1.6	0.4	15.6	
25	鏃	10.1	1.7	0.4	10.2	木質残
26	鏃	9.0	1.7	0.3	11.6	木質残
27	鏃	8.7	2.1	0.5	9.1	
28	鏃	5.7	1.8	0.6	7.3	
29	鏃	11.6	3.9	0.5	51.8	
30	鏃	15.4	(4.2)	0.5	42.2	木質残
31	鏃	8.6	2.7	0.4	22.7	
32	鏃	11.7	(3.2)	0.4	(21.1)	木質残
33	鏃	11.8	(3.7)	0.8	26.7	
34	鏃	7.3	(3.9)	0.3	26.8	
35	鏃	12.3	(2.8)	0.6	25.4	木質残
36	鏃	12.6	3.0	0.6	(22.3)	木質残
37	鏃	7.3	2.7	0.5	17.6	
38	鏃	5.2	(2.6)	0.2	(6.2)	
39	鏃	14.9	(3.3)	0.5	(28.8)	木質残
40	鏃	9.0	3.1	0.4	17.8	
41	鏃	8.9	(2.9)	0.5	22.3	木質残
42	鏃	5.9	3.3	3.5	(17.3)	
43	鏃	7.3	(2.8)	0.5	18.0	
44	鏃	4.3	(1.7)	0.5	6.3	
45	鏃	5.6	1.7	0.3	6.1	
46	鏃	3.7	(2.2)	0.5	(5.5)	
47	鏃	4.0	(2.6)	0.3	4.8	
48	鏃	4.5	1.4	0.3	3.2	
49	鏃	8.4	2.7	0.7	34.9	木質残
50	鏃	8.1	2.7	0.5	15.7	
51	鏃	8.0	(3.8)	0.3	17.8	木質残
52	鏃	4.9	(1.9)	0.3	4.0	木質残
53	鏃	10.8	1.1	0.4	13.0	木質残
54	鏃	7.9	0.9	0.4	(11.1)	木質残
55	鏃	6.3	0.8	0.4	6.8	
56	鏃	6.2	0.7	0.4	(3.5)	木質残
57	鏃	4.5	0.8	0.3	(3.9)	
58	鏃	4.5	0.9	0.4	(6.1)	
59	鏃	3.6	0.9	0.5	(5.2)	
60	鏃	4.0	0.7	4.5	(3.2)	
61	鏃	4.5	0.7	0.4	(6.1)	
62	鏃	10.0	0.8	0.3	6.7	
63	鏃	8.4	0.8	0.4	(5.2)	
64	鏃	7.8	0.8	0.6	(9.0)	
65	鏃	5.0	0.6	0.4	(3.6)	
66	鏃	4.5	0.8	0.3	5.0	
67	鏃	3.7	0.6	0.4	4.0	
68	鏃	3.6	0.5	0.4	(3.1)	
69	鏃	3.3	0.6	0.3	(3.6)	
70	鏃	3.1	0.5	0.2	(2.3)	
71	鏃	3.9	0.5	0.3	(1.7)	
72	鏃	5.1	0.6	0.6	(3.2)	木質残
73	鏃	3.9	0.7	0.4	1.9	木質残
74	鏃	3.1	0.5	0.4	(1.7)	
75	鏃	3.7	0.4	0.4	(1.7)	
76	鏃	3.1	0.5	0.3	1.2	木質残

挿図番号	種別	残存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	挿図番号	種別	残存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
77	鏃	2.6	0.4	0.4	(0.7)		120	馬具	3.4	2.7		16.2	
78	鏃	2.1	0.6	0.3	(0.8)		121	馬具	3.4	2.8		(17.6)	
79	鏃	2.1	0.4	0.2	0.6	木質残	122	馬具	2.4	2.6		4.7	
80	鏃	1.8	0.6	0.3	1.0		123	馬具	4.6	3.6	鋲長 1.8	(24.3)	
81	弓飾金具	3.5	頭径 0.6	筒径 0.5	(2.4)		124	馬具	4.7	3.6		18.5	
82	弓飾金具	3.3	頭径 0.6	筒径 0.5	(2.3)		125	馬具	3.6		0.4	11.0	
83	弓飾金具	3.0	頭径 0.5	筒径 0.5	2.7		126	馬具	4.2		径 0.7	6.4	
84	弓飾金具	3.0	頭径 0.6	筒径 0.5	(1.8)		127	馬具	3.0		径 0.5	3.4	
85	弓飾金具	2.9	頭径 0.6	筒径 0.5	(1.9)		128	馬具	2.1		径 0.4	(1.7)	
86	弓飾金具	2.9	頭径 0.5	筒径 0.5	1.8		129	釘	17.2	1.3	1.0	84.8	
87	弓飾金具	2.3	頭径 0.5	筒径 0.5	1.6		130	釘	17.0	1.4	1.2	96.3	木質残
88	弓飾金具	2.4	頭径 0.5	筒径 0.5	(1.5)		131	釘	16.2	1:2	1.0	84.4	木質残
89	弓飾金具	2.6	頭径 —	筒径 5.5	2.3		132	釘	15.6	1.2	0.8	68.1	木質残
90	弓飾金具	2.3	頭径 —	筒径 0.5	(1.9)		133	釘	15.7	1.4	0.8	79.4	木質残？
91	弓飾金具	2.7	〃(5.5)	筒径 3.5	1.0		134	釘	15.3	1.2	0.9	78.3	木質残
92	弓飾金具	2.6	頭径 0.4	筒径 0.3	0.8		135	釘	15.1	1.3	0.8	70.7	
93	弓飾金具	2.6	頭径 0.5	筒径 0.3	0.8		136	釘	14.8	1.2	0.8	57.0	
94	弓飾金具	1.5	頭径 0.4	筒径 0.4	0.8		137	釘	15.1	1.6	0.8	64.4	木質残
95	衝上	9.7		0.9			138	釘	15.0	(1.4)	0.7	53.4	木質残
馬	衝下	9.7		0.9	138.6		139	釘	13.9	1.0	1.0	67.2	木質残
具	鏡板	7.4	8.4	0.9			140	釘	13.3	1.2	0.9	(53.5)	
96	馬具	9.2	9.0	0.9	(88.9)		141	釘	13.5	1.1	0.6	(41.8)	
97	馬具	9.6	9.2	0.8	(84.2)		142	釘	12.6	0.9	0.5	36.5	
98	馬具	14.4	2.8	0.9	35.7		143	釘	11.3	1.2	1.1	51.9	
99	馬具			0.8	56.7		144	釘	10.7	0.9	0.8	25.8	
100	馬具			0.8	44.3		145	釘	10.0	1.2	0.8	(40.7)	木質残
101	馬具	7.8	1.8	0.9	27.3		146	釘	11.1	(1.4)	(1.0)	42.9	
102	馬具	10.4	3.1	径 0.5	79.5		147	釘	10.3	1.1	0.7	(53.4)	木質残
103	馬具	4.7	2.7	径 0.5	34.9		148	釘	9.3	1.2	0.7	30.0	木質残
104	馬具	7.3		径 0.7	53.2		149	釘	9.7	1.0	0.6	(36.7)	木質残
105	馬具	8.4×2		径 0.4	(141.7)		150	釘	8.7	1.2	0.8	34.0	
106	馬具	6.5	2.6	径 0.7	(35.5)		151	釘	8.8	1.6	1.3	38.0	木質残
107	馬具	各3.5以下	0.8	径 0.4	5.5	3片	152	釘	7.5	(1.6)	(1.3)	(21.3)	木質残
108	馬具	6.9	5.6	径 0.6	42.0		153	釘	6.6	1.1	0.9	11.9	木質残
109	馬具	7.5	5.0	径 0.7	65.3		154	釘	7.6	1.2	0.9	40.3	木質残
110	馬具	6.0	5.6	径 0.9	34.4		155	釘	7.0	2.1	1.0	27.9	木質残
111	馬具	6.0		径 0.6	14.6		156	釘	6.1	1.0	0.7	24.7	木質残
112	馬具	7.8	4.6	径 0.8	32.5		157	釘	6.0	1.1	0.7	(18.8)	
113	馬具	7.6	4.3	径 0.6	(39.3)		158	釘	3.3	1.6	1.4	14.5	木質残
114	馬具	4.6		径 0.8	(19.4)		159	釘	4.4	0.8	0.7	9.6	
115	馬具	6.3	0.9	径 0.8	(19.4)		160	鎹	18.5	1.6	1.2	137.0	木質残
116	馬具	3.3		径 0.6	(3.6)		161	鎹	13.7	1.8	1.0	(94.9)	木質残
117	馬具	8.0	1.9	径 0.6	25.3		162	鎹	11.8	1.5	1.2	(85.8)	木質残
118	馬具	4.4		径 0.9	(15.9)		163	鎹	4.9	1.5	0.4	(21.1)	木質残
119	馬具	6.5		径 0.6	20.9		164	鎹	2.7	0.7	0.3	(2.3)	木質残

挿図番号	種別	残存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
165	鏃	2.7	0.8	0.3	(2.8)	
166	斧	7.5	4.0		(109.4)	袋部外径3.2
167	釘？	6.9	4.0		45.1	
168	釣針				(2.8)	
169	不明	4.9	2.2	0.6	(14.0)	
170	不明	5.8	1.0	1.0	(19.2)	釘？
171	不明	6.6	0.6	0.5	5.0	釘？鏃？
172	不明	5.2	1.4	0.7	(14.0)	釘？
173	不明	4.1	0.9	0.6	(7.0)	
174	不明	4.7	0.9	0.4	(6.1)	
175	不明	10.4	0.9	0.6	20.2	釘？
176	不明	8.1	0.9	0.8	18.5	釘？
177	不明	6.6	0.9	0.3	19.1	
178	不明	4.8	1.3	0.5	(8.1)	
179	不明	3.8	0.8	0.3	6.1	
180	不明	3.8	0.4	0.4	(1.8)	

表－8　2号墳第1主体部玉類計測表

挿図番号	種類	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	材質	色調	備考
1	勾玉	31.5	幅19.9	右 2.8、左 1.3	12.42	硬玉	淡黄	厚さ11.4mm、片面穿孔、刺突
2	管玉	29.3	8.2～7.9	上 3.2、下 1.0	3.60	碧玉	緑	片面穿孔、ややまだらの濃淡
3	管玉	27.7	7.9～7.6	上 3.0、下 1.0	3.15	碧玉	濃緑	片面穿孔
4	管玉	26.0	7.5～6.8	上 3.3、下 1.0	2.53	碧玉	濃緑	片面穿孔、まだらに濃淡
5	管玉	26.0	7.6～7.2	上 3.2、下 1.0	2.69	碧玉	緑	片面穿孔、まだらに濃淡
6	管玉	24.4	7.6～7.4	上 2.8、下 1.0	2.60	碧玉	緑	片面穿孔、ややまだらの濃淡
7	管玉	？	4.7	上 1.2	0.20	緑色疑灰岩	薄緑	粗悪、破片
8	管玉	17.1	5.8～5.5	上 2.3、下0.8	1.00	碧玉	緑	片面穿孔、ややまだらの濃淡
9	管玉	16.3	5.8～5.4	上 2.5、下1.8	0.94	碧玉	緑	片面穿孔、刺突
10	管玉	不能	(1.0)	上(1.0)、下(1.8)	0.26	緑色疑灰岩	薄緑	片面穿孔、粗悪
11	管玉	11.5	6.9～6.2	上 2.3、下 3.1	1.18	ガラス	薄緑	斜めにねじれ、引きのばし
12	管玉	？	4.8	2.2	0.10	緑色疑灰岩	薄緑	粗悪、破片
13	切子玉	24.1	15.5～	上 4.0、下 1.5	6.15	水晶	透明	片面穿孔　六面
14	切子玉	20.9	15.0～7.9	上 5.0、下 4.0	5.25	水晶	透明	片面穿孔、刺突　六面
15	切子玉	15.5	13.9～7.3	上 3.5、下 4.0	3.50	水晶	透明	片面穿孔、刺突　六面
16	切子玉	14.9	14.8～7.4	上 4.0、下 5.0	3.52	水晶	透明	片面穿孔、刺突　六面
17	切子玉	15.3	11.8～7.1	上 3.2、下 4.0	2.77	水晶	透明	片面穿孔、刺突　七面
18	切子玉	15.1	11.7～5.6	上 3.3、下 2.5	2.28	水晶	透明	片面穿孔、刺突　六面
19	切子玉	14.5	12.4～6.9	上 3.5、下 3.0	2.54	水晶	透明	片面穿孔、刺突　六面
20	算盤玉	11.7	13.0～8.6	上 3.6、下 3.5	2.57	水晶	透明	片面穿孔、刺突
21	算盤玉	8.4	12.1～6.8	上 3.5、下 1.2	1.56	水晶	透明	片面穿孔
22	丸玉	8.3	9.9～5.9	上 2.4、下 5.0	1.16	水晶	透明	片面穿孔、刺突
23	小玉	5.6	6.9～5.0	1.5	0.38	ガラス	紺	
24	小玉	5.2	6.8～5.2	1.5	0.37	ガラス	紺	
25	小玉	3.3	4.7	1.7	0.09	ガラス	淡緑	
26	小玉	2.6	4.6	1.2	0.07	ガラス	淡緑	
27	小玉	2.0	4.6	2.0	0.04	ガラス	暗青	
28	小玉	3.2	4.4	1.1	0.08	ガラス	緑	

挿図番号	種　類	長さ（㎜）	径　（㎜）	孔　径　（㎜）	重量（g）	材　　質	色　　調	備　　考
29	小　玉	2.7	6.4	1.5	0.08	ガ　ラ　ス	淡緑	
30	小　玉	2.0	4.4	1.5	0.04	ガ　ラ　ス	青（透明）	
31	小　玉	3.2	4.3	1.3	0.08	ガ　ラ　ス	淡緑	
32	小　玉	3.1	4.3	1.2	0.07	ガ　ラ　ス	淡緑	
33	小　玉	2.1	4.3	1.6	0.02	ガ　ラ　ス	青（透明）	
34	小　玉	2.0	4.3	1.5	0.07	ガ　ラ　ス	淡緑	
35	小　玉	2.1	4.3	1.3	0.05	ガ　ラ　ス	青（透明）	
36	小　玉	1.7	4.3	2.1	0.04	ガ　ラ　ス	青（透明）	
37	小　玉	2.8	4.2	1.2	0.07	ガ　ラ　ス	淡緑	
38	小　玉	2.5	4.2	1.9	0.05	ガ　ラ　ス	暗青	
39	小　玉	2.8	4.2	2.0	0.05	ガ　ラ　ス	青	
40	小　玉	1.8	4.2	1.8	0.04	ガ　ラ　ス	青（透明）	
41	小　玉	2.7	4.1	1.0	0.06	ガ　ラ　ス	紺	
42	小　玉	2.3	4.1	1.5	0.04	ガ　ラ　ス	青（透明）	
43	小　玉	2.2	4.1	1.2	0.05	ガ　ラ　ス	淡緑	
44	小　玉	2.6	4.0	1.6	0.06	ガ　ラ　ス	淡緑	
45	小　玉	3.0	4.0	1.6	0.06	ガ　ラ　ス	青	
46	小　玉	3.2	4.0	1.0	0.06	ガ　ラ　ス	淡緑	
47	小　玉	3.1	4.0	1.2	0.07	ガ　ラ　ス	薄緑	
48	小　玉	3.0	4.0	1.4	0.06	ガ　ラ　ス	淡緑	
49	小　玉	2.5	4.0	1.5	0.04	ガ　ラ　ス	青（透明）	
50	小　玉	2.9	4.0	1.3	0.06	ガ　ラ　ス	淡緑	
51	小　玉	2.0	4.0	1.5	0.04	ガ　ラ　ス	青（透明）	
52	小　玉	2.2	4.0	1.5	0.05	ガ　ラ　ス	青	
53	小　玉	1.9	4.0	1.8	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	
54	小　玉	1.8	4.0	1.3	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	
55	小　玉	1.8	4.0	1.6	0.04	ガ　ラ　ス	青（透明）	
56	小　玉	2.0	4.0	1.2	0.04	ガ　ラ　ス	青（透明）	
57	小　玉	1.7	4.0	1.5	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	
58	小　玉	1.8	4.0	1.7	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	
59	小　玉	1.8	4.0	1.5	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	
60	小　玉	1.7	4.0	1.6	0.04	ガ　ラ　ス	青（透明）	
61	小　玉	1.8	4.0	1.8	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	
62	小　玉	1.7	4.0	1.8	0.04	ガ　ラ　ス	青（透明）	
63	小　玉	3.0	3.9	1.5	0.06	ガ　ラ　ス	淡緑	
64	小　玉	2.6	3.9	1.8	0.05	ガ　ラ　ス	青	
65	小　玉	1.8	3.9	1.2	0.03	ガ　ラ　ス	青	
66	小　玉	1.9	3.9	1.7	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	
67	小　玉	1.7	3.9	1.5	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	
68	小　玉	2.7	3.9	1.3	0.05	ガ　ラ　ス	青	
69	小　玉	2.2	3.8	1.3	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	
70	小　玉	2.2	3.8	1.0	0.04	ガ　ラ　ス	青（透明）	
71	小　玉	1.6	3.8	1.3	0.02	ガ　ラ　ス	青	
72	小　玉	2.0	3.8	1.4	0.02	ガ　ラ　ス	暗青	
73	小　玉	1.8	3.8	1.5	0.02	ガ　ラ　ス	青（透明）	
74	小　玉	2.1	3.8	1.2	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	
75	小　玉	2.0	3.8	1.3	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	

挿図番号	種　類	長さ（㎜）	径　（㎜）	孔　径　（㎜）	重量（g）	材　質	色　調	備　考
76	小　玉	2.0	3.8	1.5	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	
77	小　玉	1.8	3.8	1.8	0.03	ガ　ラ　ス	暗青	
78	小　玉	2.1	3.8	1.7	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	
79	小　玉	2.0	3.8	1.2	0.02	ガ　ラ　ス	淡緑	
80	小　玉	2.0	3.8	1.3	0.04	ガ　ラ　ス	青（透明）	
81	小　玉	1.6	3.8	1.5	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	
82	小　玉	1.7	3.8	1.3	0.02	ガ　ラ　ス	青	
83	小　玉	3.1	3.7	1.2	0.05	ガ　ラ　ス	淡緑	
84	小　玉	2.7	3.7	1.0	0.04	ガ　ラ　ス	青（透明）	
85	小　玉	1.8	3.7	1.8	0.02	ガ　ラ　ス	青（透明）	
86	小　玉	2.2	3.7	1.5	0.03	ガ　ラ　ス	青	
87	小　玉	2.2	3.7	1.2	0.02	ガ　ラ　ス	淡緑	
88	小　玉	1.5	3.7	1.5	0.02	ガ　ラ　ス	青（透明）	
89	小　玉	1.8	3.7	1.6	0.03	ガ　ラ　ス	青	
90	小　玉	1.7	3.7	1.5	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	
91	小　玉	1.8	3.7	1.5	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	
92	小　玉	1.6	3.7	1.5	0.03	ガ　ラ　ス	青	
93	小　玉	1.8	3.7	1.8	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	
94	小　玉	2.0	3.7	1.3	0.04	ガ　ラ　ス	青（透明）	
95	小　玉	2.0	3.7	1.0	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	
96	小　玉	2.4	3.6	1.0	0.04	ガ　ラ　ス	青	
97	小　玉	1.8	3.6	1.2	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	
98	小　玉	2.7	3.5	0.6	0.04	ガ　ラ　ス	淡緑	
99	小　玉	3.1	3.5	1.0	0.05	ガ　ラ　ス	淡緑	
100	小　玉	2.8	3.5	1.0	0.03	ガ　ラ　ス	淡緑	
101	小　玉	1.6	3.5	1.5	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	
102	小　玉	1.6	3.5	1.5	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	
103	小　玉	2.0	3.5	1.2	0.04	ガ　ラ　ス	青	
104	小　玉	1.8	3.5	1.5	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	
105	小　玉	1.5	3.5	1.5	0.02	ガ　ラ　ス	青	
106	小　玉	1.8	3.4	1.5	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	
107	小　玉	1.6	3.4	1.5	0.02	ガ　ラ　ス	青（透明）	
108	小　玉	3.5	3.3	1.0	0.06	ガ　ラ　ス	青	
109	小　玉	1.8	3.3	1.0	0.03	ガ　ラ　ス	青(不透明に近い)	
110	小　玉	2.0	3.3	1.0	0.03	ガ　ラ　ス	暗青	
111	小　玉	1.5	3.3	1.4	0.01	ガ　ラ　ス	青（透明）	
112	小　玉	1.5	3.3	1.1	0.02	ガ　ラ　ス	青（透明）	
113	小　玉	3.2	3.2	1.6	0.05	ガ　ラ　ス	青	
114	小　玉	2.8	3.2	0.8	0.04	ガ　ラ　ス	青	
115	小　玉	2.8	3.2	1.0	0.04	ガ　ラ　ス	青	
116	小　玉	2.0	3.2	1.0	0.03	ガ　ラ　ス	暗青	
117	小　玉	1.8	3.2	1.0	0.02	ガ　ラ　ス	暗青	
118	小　玉	1.8	3.2	1.4	0.03	ガ　ラ　ス	暗青	
119	小　玉	1.4	3.2	1.1	0.01	ガ　ラ　ス	青（透明）	
120	小　玉	2.4	3.0	1.0	0.02	ガ　ラ　ス	暗青	
121	小　玉	2.3	3.0	1.2	0.03	ガ　ラ　ス	暗青	
122	小　玉	2.2	3.0	0.8	0.03	ガ　ラ　ス	濃紺	

挿図番号	種　類	長さ（㎜）	径　（㎜）	孔　径　（㎜）	重量（g）	材　質	色　調	備　考
123	小　玉	2.1	3.0	1.1	0.03	ガ　ラ　ス	紺	
124	小　玉	1.8	2.6	0.8	0.02	ガ　ラ　ス	青(不透明に近い)	
125	小　玉	1.7	2.5	1.0	0.02	ガ　ラ　ス	青(不透明に近い)	
126	小　玉	1.5	2.0	0.8	0.01	ガ　ラ　ス	淡緑	

表－9　2号墳第3主体部玉類計測表

挿図番号	種　類	長さ（㎜）	径　（㎜）	孔　径　（㎜）	重量（g）	材　質	色　調	備　考
1	管　玉	17.7	7.8	上 2.8、下 1.0	2.00	碧　玉	濃緑	片面穿孔
2	棗　玉	12.0	9.2～4.0	上 2.5、下 2.0	0.54	埋もれ木	黒	両面穿孔
3	小　玉	4.5	5.5	1.7	0.19	ガ　ラ　ス	紺	
4	小　玉	3.8	5.4	1.7	0.15	ガ　ラ　ス	紺	
5	小　玉	4.0	6.2	1.1	0.23	ガ　ラ　ス	紺	
6	小　玉	4.8	5.8	1.4	0.18	ガ　ラ　ス	紺	
7	小　玉	3.8	6.1	1.3	0.18	ガ　ラ　ス	紺	
8	小　玉	4.0	5.8	1.3	0.17	ガ　ラ　ス	緑	
9	小　玉	3.8	5.8	1.5	0.19	ガ　ラ　ス	紺	
10	小　玉	4.6	5.6	1.8	0.19	ガ　ラ　ス	緑	
11	小　玉	3.8	5.8	1.5	0.16	ガ　ラ　ス	緑	
12	小　玉	3.7	5.9	1.2	0.18	ガ　ラ　ス	紺	
13	小　玉	3.7	6.3	1.2	0.21	ガ　ラ　ス	緑	
14	小　玉	3.9	5.6	1.2	0.16	ガ　ラ　ス	紺	
15	小　玉	3.5	5.8	1.3	0.16	ガ　ラ　ス	紺	
16	小　玉	3.6	5.9	1.5	0.15	ガ　ラ　ス	緑	
17	小　玉	3.4	5.6	1.1	0.15	ガ　ラ　ス	紺	
18	小　玉	4.0	5.7	1.8	0.17	ガ　ラ　ス	緑	
19	小　玉	4.1	5.8	1.3	0.18	ガ　ラ　ス	紺	
20	小　玉	3.4	6.0	1.3	0.17	ガ　ラ　ス	紺	
21	小　玉	3.5	5.8	1.2	0.17	ガ　ラ　ス	紺	
22	小　玉	3.6	5.8	1.2	0.16	ガ　ラ　ス	紺	
23	小　玉	4.0	5.4	1.2	0.16	ガ　ラ　ス	紺	
24	小　玉	3.9	5.7	1.3	0.17	ガ　ラ　ス	紺	
25	小　玉	3.8	5.7	1.3	0.18	ガ　ラ　ス	紺	
26	小　玉	3.8	6.3	1.7	0.19	ガ　ラ　ス	緑	
27	小　玉	3.9	5.8	1.5	0.16	ガ　ラ　ス	紺	
28	小　玉	3.5	5.9	1.1	0.17	ガ　ラ　ス	紺	
29	小　玉	3.5	5.8	1.2	0.16	ガ　ラ　ス	紺	
30	小　玉	4.5	6.0	1.6	0.21	ガ　ラ　ス	緑	
31	小　玉	3.7	5.7	1.8	0.16	ガ　ラ　ス	紺	
32	小　玉	3.9	5.6	1.3	0.17	ガ　ラ　ス	紺	
33	小　玉	3.9	5.8	1.1	0.18	ガ　ラ　ス	紺	

表－10　2号墳第4主体部玉類計測表

挿図番号	種　類	長さ（㎜）	径　（㎜）	孔　径　（㎜）	重量（g）	材　質	色　調	備　考
1	勾　玉	22.0	幅12.4	上 2.5、下 3.5	2.56	瑪　瑙	暗赤褐	片面穿孔、刺突、断口も磨き
2	管　玉	33.5	8.5～7.6	上 4.0、下 1.5	3.86	碧　玉	暗緑	

挿図番号	種　類	長さ（㎜）	径　（㎜）	孔　径　（㎜）	重量（g）	材　質	色　調	備　考
3	管　玉	14.2	5.7～5.6	上 3.0 、下 2.5	0.69	ガ ラ ス	紺	
4	管　玉	?	6.1	上1.0	0.35	ガ ラ ス	青	破片
5	切子玉	19.8	12.6～5.7	上 4.0 、下 2.0	3.99	水　晶	透明	片面穿孔、刺突、六面
6	切子玉	18.0	12.6～6.9	上 4.5 、下 4.0	3.22	水　晶	透明	片面穿孔、刺突、六面
7	切子玉	10.9～6.0	10.9～6.0	上 3.5 、下 3.0	2.23	水　晶	透明	片面穿孔、刺突、六面
8	切子玉	11.7	9.9～	上 3.0 、下 1.2	1.53	水　晶	透明	片面穿孔、刺突
9	小　玉	8.6	11.9	上 4.0 、下 3.3	0.98	ガ ラ ス	透明紺	破片
10	小　玉	6.2	10.3	上 2.2 、下 2.3	0.89	ガ ラ ス	透明紺	
11	小　玉	7.5	9.3	上 2.0 、下 2.0	0.90	ガ ラ ス	透明紺	
12	小　玉	7.4	8.8	上 2.2 、下 2.2	0.72	ガ ラ ス	透明紺	成形時にねじれ
13	小　玉	4.7	8.5	上 2.2 、下 2.2	0.51	ガ ラ ス	透明紺	
14	小　玉	5.4	7.9	上 2.0 、下 2.0	0.46	ガ ラ ス	透明紺	
15	小　玉	6.4	7.6	上 2.5 、下 2.5	0.54	ガ ラ ス	透明紺	
16	小　玉	5.3	7.6	上 2.5 、下 2.5	0.31	ガ ラ ス	透明紺	
17	小　玉	4.3	7.6	上 1.4 、下 1.6	0.36	ガ ラ ス	透明紺	
18	小　玉	6.3	7.5	上 1.5 、下 1.5	0.45	ガ ラ ス	透明紺	
19	小　玉	4.8	7.3	上 1.8 、下 1.8	0.37	ガ ラ ス	透明紺	
20	小　玉	5.2	7.3	上 2.0 、下 2.0	0.36	ガ ラ ス	透明紺	
21	小　玉	6.7	7.2	上 2.5 、下 2.5	0.35	ガ ラ ス	濃紺	
22	小　玉	5.3	7.2	上 2.0 、下 1.8	0.36	ガ ラ ス	紺	
23	小　玉	4.7	7.2	上 1.8 、下 1.8	0.35	ガ ラ ス	紺	
24	小　玉	3.7	7.2	上 2.0 、下 2.0	0.25	ガ ラ ス	紺	
25	小　玉	4.5	6.9	上 2.2 、下 2.3	0.30	ガ ラ ス	紺	
26	小　玉	4.3	6.7	上 2.0 、下 2.0	0.25	ガ ラ ス	紺	
27	小　玉	4.5	6.2	上 3.0 、下 1.0	0.25	ガ ラ ス	紺	
28	小　玉	3.9	6.0	上 2.0 、下 2.3	0.18	ガ ラ ス	紺	
29	小　玉	4.7	5.9	上 1.3 、下 1.4	0.22	ガ ラ ス	紺	
30	小　玉	3.7	5.8	上 1.3 、下 1.2	0.18	ガ ラ ス	紺	
31	小　玉	5.0	5.8	上 1.5 、下 1.3	0.22	ガ ラ ス	青	
32	小　玉	4.0	5.8	上 2.8 、下 2.8	0.10	ガ ラ ス	淡青	破片
33	小　玉	3.6	5.6	上 1.0 、下 1.2	0.16	ガ ラ ス	緑	
34	小　玉	2.0	4.7	上 1.2 、下 1.2	0.05	ガ ラ ス	淡緑	
35	小　玉	2.6	4.1	上 1.3 、下 1.3	0.06	ガ ラ ス	淡緑	
36	小　玉	2.5	3.9	上 1.7 、下 1.7	0.04	ガ ラ ス	淡緑	
37	小　玉	2.4	3.9	上 1.0 、下 1.0	0.05	ガ ラ ス	淡青	
38	小　玉	7.7	8.5	上 1.3 、下 2.0	0.49	土（練玉）	黒褐	
39	小　玉	7.7	8.1	上 1.3 、下 1.5	0.48	土（練玉）	黒	
40	小　玉	7.5	8.3	上 1.6 、下 1.8	0.57	土（練玉）	黒	
41	小　玉	7.4	8.2	上 1.2 、下 1.2	0.49	土（練玉）	黒褐	
42	小　玉	7.0	8.2	上 1.6 、下 1.6	0.50	土（練玉）	黒	
43	小　玉	8.1	8.5	上 2.0 、下 1.8	0.58	土（練玉）	黒褐	
44	小　玉	8.5	8.9	上 1.5 、下 2.0	0.65	土（練玉）	黒	
45	小　玉	8.0	7.8	上 1.8 、下 1.5	0.50	土（練玉）	黒褐	
46	練　玉	8.1	8.4	上 1.8 、下 1.5	0.61	土	黒	
47	練　玉	7.0	8.6	上 1.0 、下 1.2	0.43	土	黒褐	

挿図番号	種　類	長さ（㎜）	径　（㎜）	孔　径　（㎜）	重量（g）	材　質	色　調	備　考
48	練　玉	7.3	7.9	上 1.5、下 1.5	0.46	土	黒	
49	練　玉	8.1	8.1	上 1.6、下 1.5	0.54	土	黒褐	
50	練　玉	8.6	7.9	上 1.7、下 2.0	0.55	土	黒褐	
51	練　玉	7.5	8.8	上 1.5、下 1.6	0.56	土	黒	
52	練　玉	7.0	7.7	上 2.0、下 1.5	0.40	土	黒褐	
53	練　玉	8.0	8.0	上 1.4、下 1.7	0.49	土	黒褐	
54	練　玉	8.5	7.9	上 1.3、下 1.8	0.60	土	黒褐	
55	練　玉	7.9	8.5	上 2.0、下 2.0	0.59	土	黒褐	
56	練　玉	7.0	8.2	上 1.5、下 1.5	0.45	土	黒	
57	練　玉	8.8	9.8	上 1.8、下 1.7	0.72	土	黒褐	
58	練　玉	8.5	9.0	上 2.0、下 1.5	0.70	土	黒褐	
59	練　玉	9.3	9.3	上 1.5、下 1.4	0.78	土	黒	
60	練　玉	8.2	8.3	上 1.6、下 1.5	0.56	土	黒	
61	練　玉	7.2	8.2	上 2.0、下 2.0	0.48	土	黒褐	
62	練　玉	7.2	7.9	上 1.5、下 2.3	0.43	土	黒褐	
63	練　玉	9.0	7.9	上 2.0、下 1.5	0.72	土	黒	
64	練　玉	6.8	8.9	上 2.0、下 1.5	0.46	土	黒	
65	練　玉	7.5	9.0	上 1.7、下 1.7	0.56	土	黒褐	
66	練　玉	7.2	8.1	上 2.2、下 1.5	0.45	土	黒	
67	練　玉	7.6	7.8	上 1.7、下 4.0	0.46	土	黒	
68	練　玉	7.9	8.6	上 2.2、下 2.0	0.58	土	黒褐	
69	練　玉	7.3	8.1	上 2.5、下 2.0	0.47	土	黒褐	
70	練　玉	8.0	8.7	上 1.3、下 1.3	0.60	土	黒褐	
71	練　玉	7.5	7.8	上 1.7、下 1.2	0.48	土	黒	
72	練　玉	7.9	8.5	上 1.3、下 1.5	0.64	土	黒褐	
73	練　玉	7.9	8.4	上 1.2、下 1.5	0.52	土	黒	
74	練　玉	7.2	8.4	上 1.5、下 1.8	0.55	土	黒褐	
75	練　玉	6.0	7.5	上 1.8、下 1.8	0.37	土	黒褐	
76	練　玉	7.0	8.2	上 1.9、下 2.3	0.42	土	黒褐	
77	練　玉	8.0	8.8	上 1.5、下 1.7	0.70	土	黒褐	
78	練　玉	7.2	8.0	上 1.6、下 2.0	0.48	土	黒褐	
79	練　玉	7.1	7.8	上 2.0、下 2.0	0.42	土	黒褐	
80	練　玉	8.1	8.1	上 1.8、下 2.0	0.57	土	黒	
81	練　玉	6.3	9.1	上 1.5、下 2.0	0.62	土	黒褐	
82	練　玉	6.3	8.1	上 2.0、下 1.4	0.43	土	黒	
83	練　玉	6.8	7.8	上 1.5、下 1.7	0.42	土	黒褐	
84	練　玉	7.4	8.6	上 1.3、下 1.5	0.58	土	黒	
85	練　玉	6.8	8.3	上 2.3、下 2.0	0.53	土	黒褐	
86	練　玉	8.2	9.3	上 1.7、下 2.0	0.65	土	黒	
87	練　玉	7.5	7.8	上 1.5、下 1.8	0.53	土	黒	
88	練　玉	7.5	8.1	上 1.3、下 1.3	0.48	土	黒	
89	練　玉	7.2	8.0	上 2.0、下 3.0	0.47	土	黒褐	
90	練　玉	8.4	8.5	上 2.0、下 2.5	0.53	土	黒褐	
91	練　玉	8.0	8.8	上 2.0、下 1.8	0.60	土	黒褐	

挿図番号	種　類	長さ（㎜）	径　（㎜）	孔　径　（㎜）	重量（g）	材　質	色　調	備　考
92	練　玉	7.6	8.8	上 1.7、下 1.8	0.57	土	黒	
93	練　玉	7.1	9.0	上 1.4、下 1.6	0.55	土	黒	
94	練　玉	7.6	8.9	上 2.0、下 2.0	0.57	土	黒	
95	練　玉	8.0	8.2	上 1.6、下 1.7	0.46	土	黒褐	
96	練　玉	7.5	8.2	上 1.7、下 1.7	0.39	土	黒褐	
97	練　玉	7.4	?	上 1.8、下 1.7	0.43	土	黒褐	
98	練　玉	7.7	8.9	上 1.7、下 1.3	0.59	土	黒褐	
99	練　玉	9.0	9.0	上 2.0、下 3.0	0.75	土	黒褐	
100	練　玉	9.2	9.2	上 1.8、下 1.2	0.71	土	黒褐	
101	練　玉	9.2	9.9	上 1.6、下 1.6	0.85	土	黒	
102	練　玉	6.5	8.0	上 2.0、下 2.2	0.39	土	紺	

表—11　5号墳玉類計測表

挿図番号	種　類	長さ（㎜）	径　（㎜）	孔　径　（㎜）	重量（g）	材　質	色　調	備　考
1	勾　玉	29.0	幅16.6	右 3.5、左 5.0	5.47	水　晶	透明	厚さ9.7㎜、片面穿孔、刺突
2	管　玉	29.7	10.0～9.5	上 3.7、下 1.0	5.51	碧　玉	濃緑	片面穿孔、刺突
3	管　玉	28.7	8.2～7.4	上 3.2、下 1.8	3.23	碧　玉	濃緑	両面穿孔
4	管　玉	26.6	8.0～7.7	上 3.8、下 1.0	3.09	碧　玉	濃緑	片面穿孔
5	管　玉	26.3	9.2～8.8	上 3.2、下 0.8	4.17	碧　玉	濃緑	片面穿孔
6	管　玉	24.7	8.5～8.2	上 3.0、下 1.0	3.25	碧　玉	濃緑	片面穿孔
7	管　玉	23.1	9.6～9.3	上 3.0、下 1.0	3.87	碧　玉	濃緑	片面穿孔
8	管　玉	22.3	8.3～7.9	上 4.0、下 0.8	2.72	碧　玉	濃緑	片面穿孔
9	管　玉	20.8	9.2～8.7	上 2.0、下 1.0	3.23	碧　玉	濃緑	片面穿孔
10	管　玉	19.7	9.3～9.1	上 3.0、下 0.8	3.10	碧　玉	濃緑	片面穿孔、穿ち直し
11	算盤玉	11.5	12.5～6.0	上 3.5、下 4.0	2.12	水　晶	透明	片面穿孔、刺突
12	丸　玉	7.9	10.0	上 4.1、下 2.8	1.09	水　晶	透明	
13	小　玉	4.5	6.8	2.0	0.25	ガラス	紺	
14	小　玉	3.3	4.3	1.2	0.08	ガラス	淡緑	
15	小　玉	2.5	4.6	1.5	0.06	ガラス	淡青	
16	小　玉	2.0	4.3	1.3	0.04	ガラス	青（透明）	
17	小　玉	2.0	4.0	1.5	0.03	ガラス	青	
18	小　玉	2.1	4.0	1.5	0.04	ガラス	青（透明）	
19	小　玉	2.3	3.8	1.5	0.04	ガラス	青	
20	小　玉	2.0	3.8	1.0	0.04	ガラス	青	
21	小　玉	2.0	3.8	1.2	0.03	ガラス	青（透明）	
22	小　玉	1.7	3.7	1.8	0.04	ガラス	青	
23	小　玉	1.4	3.7	2.2	0.02	ガラス	淡青	
24	小　玉	2.8	3.7	1.5	0.05	ガラス	淡青	
25	小　玉	2.0	3.7	1.2	0.03	ガラス	青	
26	小　玉	2.7	3.6	1.1	0.05	ガラス	青	
27	小　玉	1.9	3.6	1.1	0.03	ガラス	青	
28	小　玉	2.0	3.6	2.0	0.03	ガラス	青	
29	小　玉	3.5	3.8	1.5	0.06	ガラス	淡青	

挿図番号	種　類	長さ（㎜）	径　（㎜）	孔　径　（㎜）	重量（g）	材　　質	色　　調	備　　考
30	小　玉	1.9	3.5	1.5	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	
31	小　玉	1.8	3.4	1.2	0.03	ガ　ラ　ス	青	
32	小　玉	2.1	3.4	1.6	0.02	ガ　ラ　ス	青	破片
33	小　玉	3.0	3.4	1.6	0.02	ガ　ラ　ス	青（透明）	破片
34	小　玉	1.6	3.4	1.6	0.01以下	ガ　ラ　ス	青（透明）	破片
35	小　玉	2.0	3.3	2.0	0.01	ガ　ラ　ス	青（透明）	破片
36	小　玉	1.8	3.3	1.6	0.02	ガ　ラ　ス	暗青	破片
37	小　玉	2.6	3.2	1.2	0.05	ガ　ラ　ス	緑	
38	小　玉	1.3	3.1	1.5	0.01	ガ　ラ　ス	淡青	
39	小　玉	2.2	3.1	1.3	0.03	ガ　ラ　ス	赤茶	
40	小　玉	1.9	3.1	1.0	0.02	ガ　ラ　ス	淡青	
41	小　玉	2.0	3.1	1.2	0.03	ガ　ラ　ス	青	
42	小　玉	1.5	3.1	1.2	0.02	ガ　ラ　ス	紺	
43	小　玉	1.7	3.0	1.0	0.03	ガ　ラ　ス	青	
44	小　玉	2.1	3.0	1.2	0.03	ガ　ラ　ス	青（透明）	
45	小　玉	2.9	2.8	1.0	0.03	ガ　ラ　ス	黒	
46	小　玉	1.5	2.8	1.5	0.01	ガ　ラ　ス	青（透明）	
47	小　玉	1.8	2.8	1.2	0.01	ガ　ラ　ス	薄青	
48	小　玉	1.0	2.7	1.0	0.01	ガ　ラ　ス	青（透明）	
49	小　玉	2.1	2.7	1.0	0.01	ガ　ラ　ス	青	破片
50	小　玉	1.8	7.9	1.2	0.02	ガ　ラ　ス	淡青	
51	小　玉	1.8	2.7	1.2	0.01	ガ　ラ　ス	緑	破片
52	小　玉	1.8	2.6	1.1	0.02	ガ　ラ　ス	赤茶	「胴赤」
53	小　玉	1.6	2.6	1.0	0.02	ガ　ラ　ス	青	
54	小　玉	1.4	2.6	1.2	0.02	ガ　ラ　ス	淡青	

表－12　２号墳耳環計測表

遺構名	挿図番号	外径（cm）(上下)×(左右)		断面径（cm）(上下)×(左右)		重　量（g）	備　　考
第1主体部	1	3.19	2.82	0.65	0.68	17.68	銀　　2と対　切れ目幅0.5㎜
	2	3.11	2.79	0.70	0.71	19.58	銀　　1と対　切れ目幅2.3㎜
	3	1.97	1.80	0.21	0.23	1.52	銀　　4と対　切れ目幅2.1㎜
	4	1.88	1.81	0.22	0.25	1.39	銀　　3と対　切れ目幅1.0㎜
第主体3部	1	1.75	1.51	0.25	0.21	1.11	銀　断面多角形？　2と対　切れ目幅1.0㎜
	2	1.61	1.51	0.14	0.17	0.97	銀　断面多角形　1と対　切れ目幅1.1㎜
第4主体部	1	1.92	1.70	0.19	0.21	2.83	金　　2と対　切れ目幅0.5㎜
	2	1.83	1.68	0.20	0.18	2.70	金　　1と対　切れ目幅0.3㎜
	3	2.01	1.98	0.29	0.28	2.81	銀　断面多角形　4と対　切れ目幅0.5㎜
	4	1.80	？	0.24	0.25	0.60	銀　断面多角形　3と対　切れ目幅　？

遺構名	挿図番号	外径（cm）(上下)×(左右)		断面径（cm）(上下)×(左右)		重　量（g）	備　　考
第4主体部	5	2.37	1.97	0.40	0.40	2.32	鉄地金銅貼　6と対　切れ目幅　?
	6	2.14	1.91	0.31	0.31	1.59	鉄地銀貼　5と対　切れ目幅1.0mm
	7	2.15	2.09	0.54	0.50	3.84	鉄地銀貼　8と対　切れ目幅0.1mm
	8	2.10	?	0.41	0.38	1.49	鉄地銀貼　7と対　切れ目幅　?
	9	2.44	2.00	0.45	0.43	4.41	鉄地銀貼　10と対　切れ目幅　?
	10	2.06	?	0.49	0.46	0.70	鉄地金銅貼　9と対　切れ目幅　?
	11	2.58	2.30	0.53	0.52	5.56	鉄地金銅貼　12と対　切れ目幅0.1mm
	12	2.55	2.48	0.57	0.46	5.48	鉄地金銅貼　11と対　切れ目幅2.0mm
	13	2.56	2.25	0.57	0.56	5.69	鉄地金銅貼　14と対　切れ目幅2.0mm
	14	2.78	2.47	0.57	0.53	6.66	鉄地金銅貼　13と対　切れ目幅2.5mm
	15	2.80	2.60	0.68	0.69	6.49	鉄地金銅貼　16と対　切れ目幅1.0mm
	16	2.59	2.48	0.59	0.54	4.14	鉄地金銅貼　15と対　切れ目幅1.0mm

付載１　斎富遺跡・斎富古墳群出土の玉類の産地分析

藁科哲男・東村武信
（京都大学原子炉実験所）

はじめに

遺跡から出土する大珠、勾玉、管玉の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたかということを調査するのではなくて、何ヶ所かあるヒスイまたは碧玉の原産地のうち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学方法[1]および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光Ｘ線分析で行う元素比法[2,3]が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析を系統的に行った研究では、蛍光Ｘ線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析より正確に行った例[4]が報告されている。石鏃などの石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1)石器の原産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。(2)玉類は古代人が生きるために必ずしも必要なものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭り、お守り、占いの道具、アクセサリーとして、精神的な面に必要な作用を与えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるヒスイ製玉類の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれない。お祭り、お守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った玉類、玉材石材は斎富遺跡前田地区の管玉―250、前田２区―Ｐ17、勾玉同住居址８の３個および斎富古墳群５号墳主体部出土の管玉51、２号墳第４主体部内出土の管玉―37、２号墳第１主体部内出土の管玉―36の３個で、これら合計６個の遺物の分析結果が得られたので報告する。

非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は遺物組成の組合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

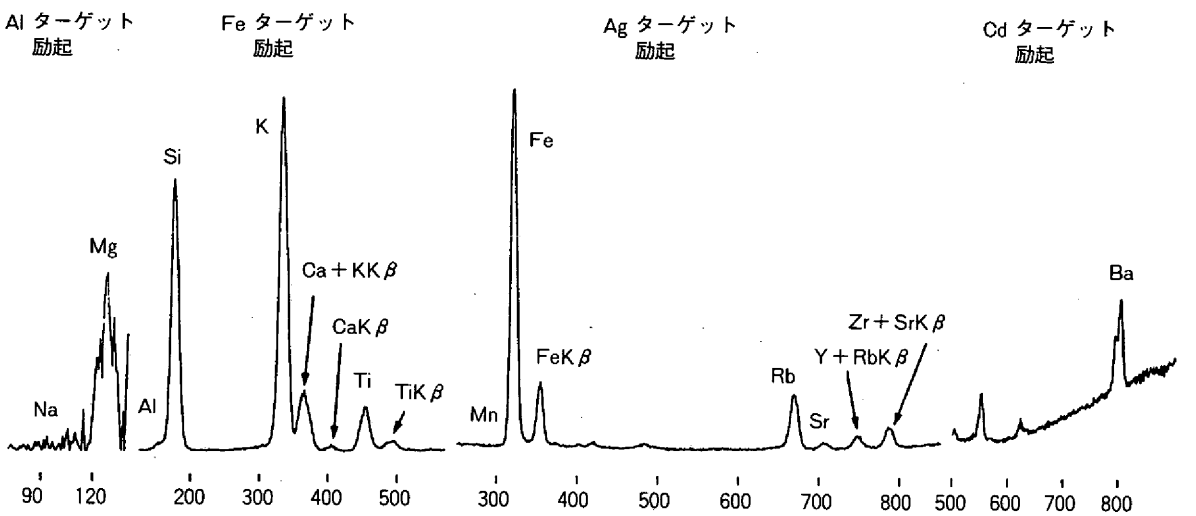
ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している[5]非破壊で分析を行なう蛍光Ｘ線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光Ｘ線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大き

さの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。

碧玉原石の蛍光X線分析

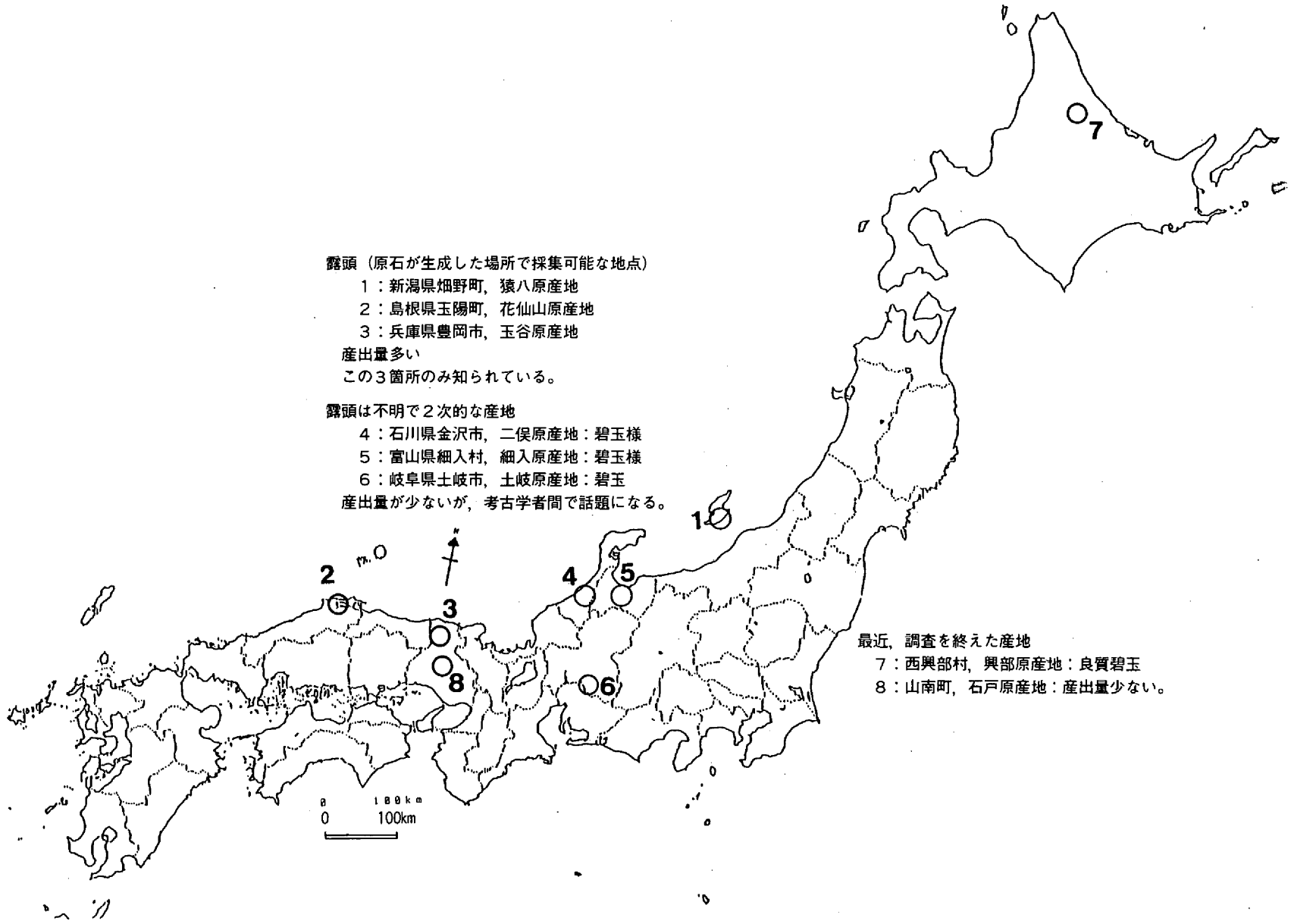
碧玉の蛍光X線スペクトルの例として花仙山産原石を第1図に示す。猿八、玉谷産の原石から検出される蛍光X線ピークも異同はあるものの図1で示されるピークは観測される。土岐、興部の産地の碧玉は鉄の含有量が他の産地のものに比べて大きいのが特徴である。産地分析に用いる元素比組成は、Al/Si、K/Si、Ca/K、Ti/K、K/Fe、Rb/Fe、Fe/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、である。Mn/Fe、Ti/Fe、Nb/Zr の元素比は非常に小さく、小さい試料の場合測定差が大きくなるので定量的な判定の指標ＴＰＯはせず、判定のときに、Ba、La、Ca のピーク高さとともに、定性的に原材産地を判定する指標として用いる。



第1図　花仙山産碧玉原石の蛍光Ｘ線スペクトル

碧玉の原産地と原石の分析結果

分析した碧玉の原石の原産地を第2図に示す。佐渡島猿八原産地は、(1)新潟県佐渡郡畑野猿八地区で、産出する原石は、地元で青玉と呼ばれている緑色系の石で、良質なものは割れ面がガラス光沢を示し、質の良くないものは光沢の少ないグリーンタフ的なものである。産出量は豊富であったらしく採石跡が何ヶ所か見られ、分析した原石は猿八の各地点から表採したものおよび地元で提供された原石などで、提供されたものの中には露頭から得られたものがグリーンタフ層の間に約7㎝幅の良質の碧玉層が挟まれた原石であった。分析した原石の比重と個数は、比重が2.6～2.4の間は5個の合計36個で、この中には、茶色の碧玉も2個含まれている。原石の比重が2.6～2.3の範囲で違っても、碧玉の色が茶色、緑色、また、茶系色と緑系色の縞があるなど、多少色の違いがあっても組成上には反映されていない。出雲の花仙山は近世まで採掘が行われた原産地で、所在地は(2)島根県八束郡玉湯町玉造温泉地域である。産出する原石は濃緑色から緑色の緻密で、剝離面が光沢をもつ碧玉から淡白色などいろいろで、硬度が低そうなグリーンタフの様な原石も見られる。良質な原石の比重は2.5以上あり、質が悪くなるにしたがって比重は連続的に2.2まで低くなる。分析した原石は、比重が2.619～



第2図　碧玉の原産地および碧玉の様な緑色の石の産地

2.600の間のものは10個、2.599～2.500は18個、2.499～2.400は７個、2.399～2.300は11個、2.299～2.200は11個、2.199～2.104は３個の合計60個である。比重から考えると碧玉からグリーンタフまでの領域が分析されている。花仙山産原石は色の違い、比重の違いによる組成の差はみられなかった。玉谷原産地は、(3)兵庫県豊岡市辻、日高町玉谷地域で、産出する碧玉の色、石質などは肉眼では花仙山産の原石と全く区別がつかない。また、原石の中には緑系色に茶系色が混じるものもみられ、これは佐渡猿八原産石より優れた感じのものもみられる。この様な良質の碧玉の採取は、産出量も少ないことから長時間かけて注意深く行う必要がある。分析した原石は比重が2.644～2.600は23個、2.599～2.589は４個の合計27個で、玉谷産原石は色の違いによる分析組成の差はみられなかった。また、玉谷原石と一致する組成の原石は日高八代谷、石井、アンラクなどで採取できる。二俣原産地は(4)石川県金沢市二俣町地域で、原石は二俣川の河原で採取できる。二俣川の源流は医王山であることから、露頭は医王山に存在する可能性がある。河原で見られる碧玉原石は、大部分グリーンタフ中に層状、レンズ状に非常に緻密な部分として見られる。分析した４個の原石の中で３個は、同一塊から３分割したもので、１個は別の塊からのもので、前者の３個の比重は2.42で後者は2.34である。元素組成は産地の組成と異なり区別できる。この４個が二俣原産地から産出する碧玉原石の特徴を代表しているかどうか、さらに分析数を増やす必要がある。細入村の産地は(5)、富山県婦負郡細入村割山定座岩地区のグリーンタフの岩脈に団塊として緻密な濃緑の碧玉質の部分が見られる。肉眼では、ほかの産地の碧玉と区別できず、また、出土する碧玉製の玉類とも非常に似た石質である。しかし、比重が非常に軽く、分析した８個は2.25～2.12で、この比重の値で他の原産地と区別できる場合が多い。土岐原産地は(6)、岐阜県土岐市地域で、赤色、黄色、緑色などが混じり合った原石が産出し、このうち緻密な光沢のよい濃緑で比重が2.62～2.60の原石を碧玉として11個分析を行った。ここの原石は鉄の含有量が非常に大きく、カリウム含有量が小さいという特徴を持ち、この元素比の値で他の原産地と区別できる。興部産地(7)、北海道紋別西興部村の碧玉原石には鉄の含有量が非常に高く、他の原産地と区別する指標になっている。また、比重が2.6以下のものはなく遺物の産地を特定する指標として重要である。石戸の産地は(8)、兵庫県氷上郡山南町地区の安山岩に脈岩として採取されるが産出量は非常に少ない。元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。

これら原石を原産地ごとに統計処理を行い元素比の平均値と標準偏差値をもとめて母集団を作り表１に示す。各母集団に原産地名を付けて、その産地の原石群、例えば花仙山群と呼ぶ。花仙山群は比重によって２個の群に分けて表に示したが比重は異なっても組成に大きな違いはみられない。したがって、統計処理は一緒にして行い、花仙山群として取り扱った。原石群とは異なるが豊岡市女代南遺跡で主体的に使用されている碧玉製の玉の原材料で原産地は不明の遺跡が出土している。同質の材料で作られた可能性がある玉類は北陸、近畿、中国地方に分布しているらしい。この分布範囲を明らかにし、原石産地を探索すると言う目的で女代南遺物群として原石群と同じように使用する。

この他、鳥取県の福部村たねが池、鳥取市つづらお岬などの自然露頭からの原石を４個分析した。比重は2.6以上あり元素比組成は、興部、玉谷、土岐石に似るが、他の原産地の原石とは組成で区別される。また、緑系の原石ではない。

表1　各碧玉の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原石群名	分析個数	Al/Si $\bar{X}\pm\sigma$	K/Si $\bar{X}\pm\sigma$	Ca/K $\bar{X}\pm\sigma$	Ti/K $\bar{X}\pm\sigma$	K/Fe $\bar{X}\pm\sigma$
興部	31	0.011±0.003	0.580±0.320	0.123±0.137	0.061±0.049	0.022±0.006
猿八	36	0.046±0.007	3.691±0.548	0.049±0.038	0.058±0.011	0.370±0.205
土岐	11	0.010±0.001	0.404±0.229	0.090±0.074	0.057±0.035	0.027±0.007
玉谷	27	0.025±0.009	0.625±0.297	0.110±0.052	0.476±0.104	0.045±0.014
花仙山1	27	0.019±0.004	0.909±0.437	0.171±0.108	0.222±0.098	0.059±0.019
花仙山2	33	0.023±0.003	1.178±0.324	0.157±0.180	0.229±0.139	0.055±0.015
細入	8	0.019±0.003	0.534±0.284	0.991±0.386	0.372±0.125	0.031±0.008
二俣	4	0.043±0.001	2.644±0.183	0.337±0.079	0.158±0.009	0.312±0.069
石戸	4	0.019±0.004	0.601±0.196	0.075±0.022	0.086±0.038	0.154±0.072
女代南遺物群	68	0.045±0.016	3.115±0.445	0.042±0.024	0.107±0.036	0.283±0.099

原石群名	分析個数	Rb/Fe $\bar{X}\pm\sigma$	Fe/Zr $\bar{X}\pm\sigma$	Rb/Zr $\bar{X}\pm\sigma$	Sr/Zr $\bar{X}\pm\sigma$	Y/Zr $\bar{X}\pm\sigma$
興部	31	0.070±0.021	174.08±124.9	16.990±13.44	0.668±0.435	1.801±1.434
猿八	36	0.384±0.153	1.860±1.070	0.590±0.185	0.139±0.127	0.165±0.138
土岐	11	0.091±0.029	47.540±31.76	4.074±2.784	0.271±0.323	0.269±0.265
玉谷	27	0.151±0.020	6.190±1.059	0.940±0.205	0.192±0.170	0.158±0.075
花仙山1	27	0.225±0.028	10.633±3.616	2.345±0.693	0.476±0.192	0.098±0.052
花仙山2	33	0.219±0.028	12.677±2.988	2.723±0.519	0.472±0.164	0.132±0.071
細入	8	0.073±0.020	12.884±3.752	0.882±0.201	1.879±0.650	0.026±0.032
二俣	4	0.338±0.039	1.495±0.734	0.481±0.176	0.697±0.051	0.088±0.015
石戸	4	0.170±0.079	7.242±1.597	1.142±0.315	0.649±0.158	0.247±0.092
女代南遺物群	68	0.267±0.063	2.374±0.676	0.595±0.065	0.214±0.097	0.171±0.047

原石群名	分析個数	Mn/Fe $\bar{X}\pm\sigma$	Ti/Fe $\bar{X}\pm\sigma$	Nb/Zr $\bar{X}\pm\sigma$	比重 $\bar{X}\pm\sigma$
興部	31	0.004±0.003	0.001±0.001	0.455±0.855	2.626±0.032
猿八	36	0.003±0.001	0.018±0.010	0.032±0.014	2.543±0.049
土岐	11	0.001±0.001	0.001±0.001	0.261±0.242	2.607±0.009
玉谷	27	0.006±0.003	0.016±0.003	0.054±0.021	2.619±0.014
花仙山1	27	0.001±0.001	0.009±0.002	0.042±0.034	2.570±0.044
花仙山2	33	0.001±0.001	0.009±0.004	0.035±0.025	2.308±0.079
細入	8	0.003±0.002	0.008±0.002	0.021±0.344	2.169±0.039
二俣	4	0.007±0.002	0.043±0.010	0.043±0.023	2.440±0.091
石戸	4	0.007±0.001	0.009±0.002	0.227±0.089	2.598±0.008
女代南遺物群	68	0.011±0.004	0.026±0.009	0.034±0.016	2.554±0.019

$\bar{X}$：平均値、σ：標準偏差値

女代南遺物群：女代南遺跡（豊岡市）で使用されている原石産地不明の玉原材料で作った群

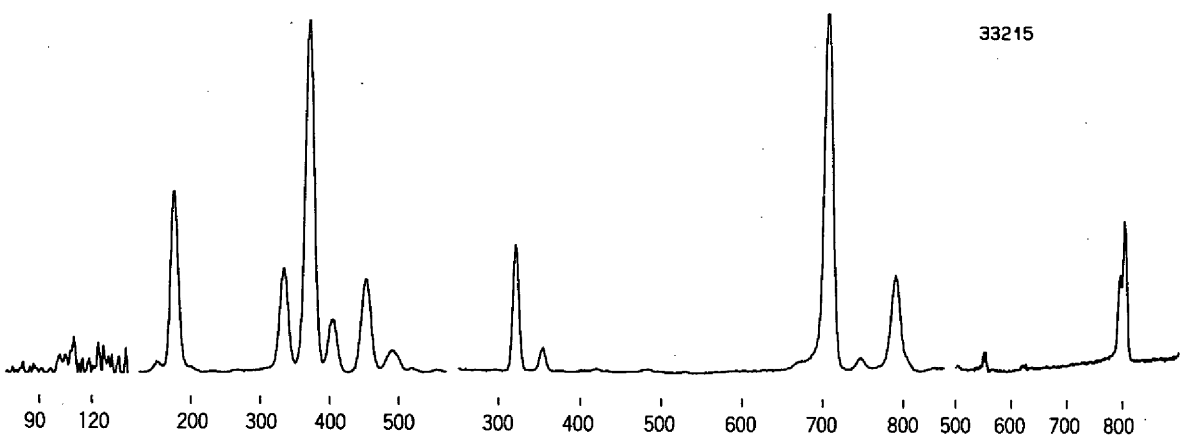
斎富遺跡・斎富古墳群出土の玉類と国内産碧玉原材との比較

遺跡から出土した玉類は表面の泥を超音波洗浄器で水洗するだけの完全な非破壊分析で行っている

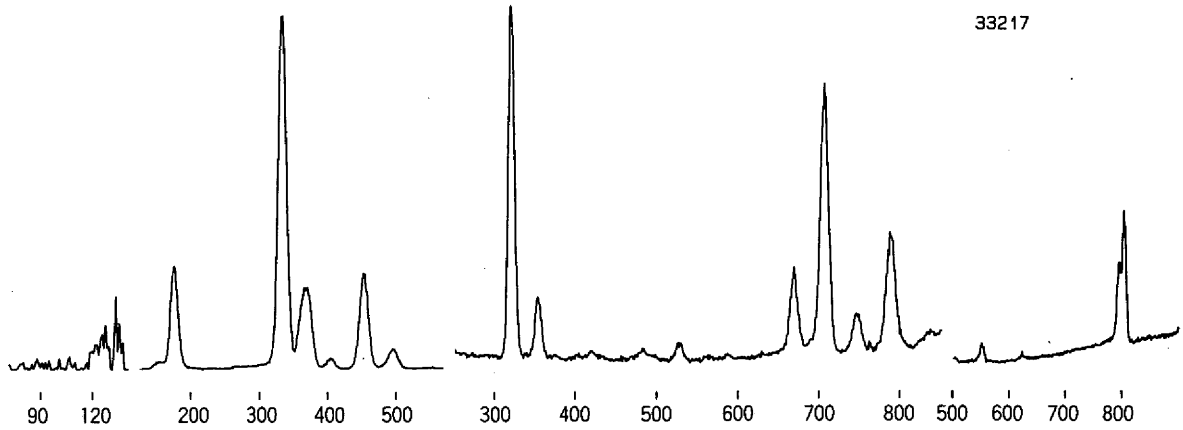
遺跡の原材産地を同定をするために、(1)蛍光X線法で求めた原石群と碧玉製遺物の分析結果を数理統計の手法を用いて比較をする定量的な判定法で行なう。(2)またＥＳＲ分析法により各産地の原石の信号と遺物のそれを比較して、似た信号の原石の産地の原材であると推測する方法も応用した。

蛍光X線法による産地分析

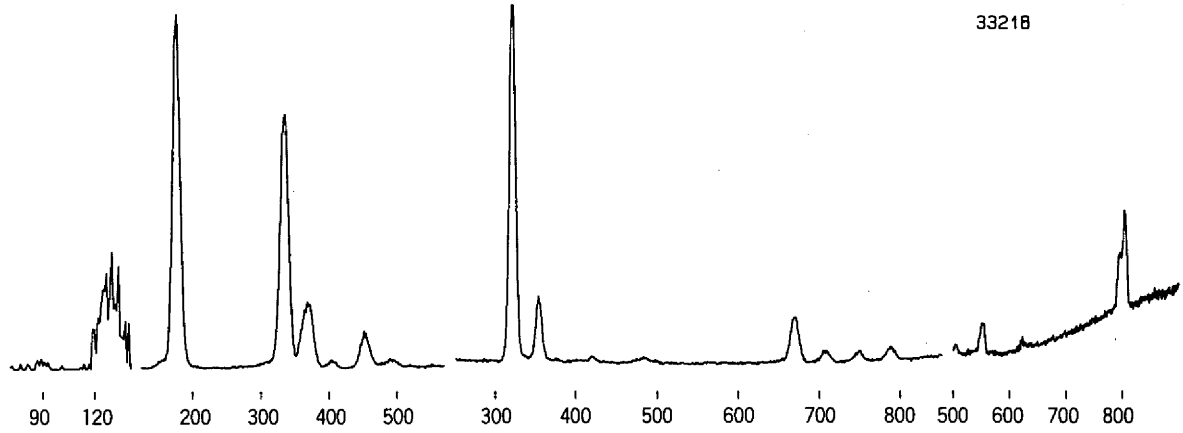
これらの遺物の蛍光X線分析の結果（図３～８）および比重（表２）から原材料の岩石を碧玉系、グリーンタフ系の２個に分類した。(1)碧玉系と分類した遺物は管玉前田２区－Ｐ17、勾玉同住居址８、管玉51、管玉―37、―36の５個である。これら遺物は緻密で比重が2.5以上あること、蛍光X線分析で Rb、Sr、Y、Zr の各元素が容易に観測できるなどを条件に分類した。(2)比重が2.2以下の管玉250の遺物をグリーンタフ系として分類した。これら遺物の元素組成比および比重を表２に示した。原石の数が多く分析された原産地については数理統計のマハラノビスの距離を求めて行うホテリング T^2 検定[8]により同定を行い結果を表３に示した。土岐、二俣、細入、石戸原産地は統計処理ができるだけの原石の分析数が用意されていないが元素組成からこれら産地の原石でないと推定された。また興部産地でないことは鉄の含有量から証明できる。蛍光X線分析の結果から原石産地を特定された遺物は、勾玉住居址８、管玉51、管玉―37、―36管玉26が花仙山産原石の可能性が示された。これら遺物を花仙山産原石と同じ原産地であると結論するには以下に述べる電子スピン共鳴（ＥＳＲ）法による結果も花仙山群に一致すればより確実な結果となる。



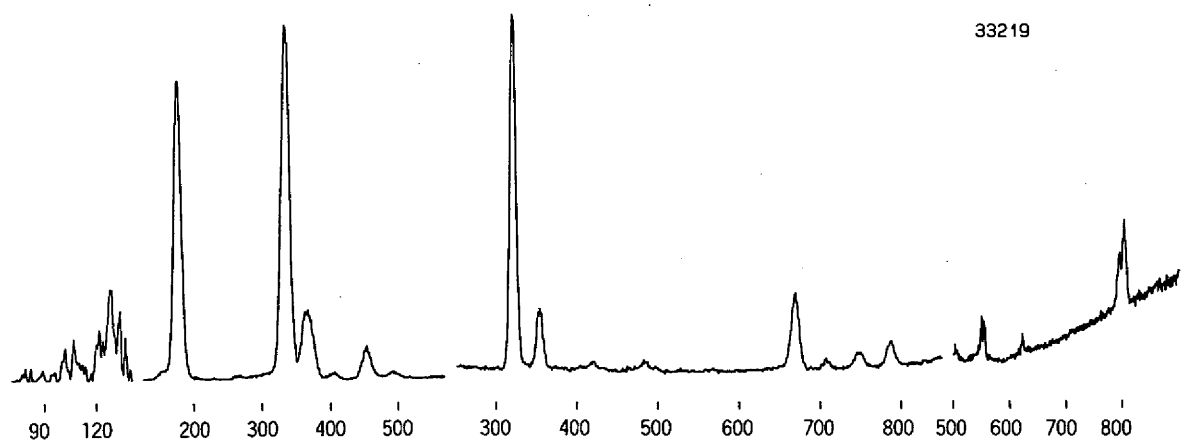
第３図　前田Ｍ1-No.250，グリーンタフ？製管玉の蛍光Ｘ線スペクトル



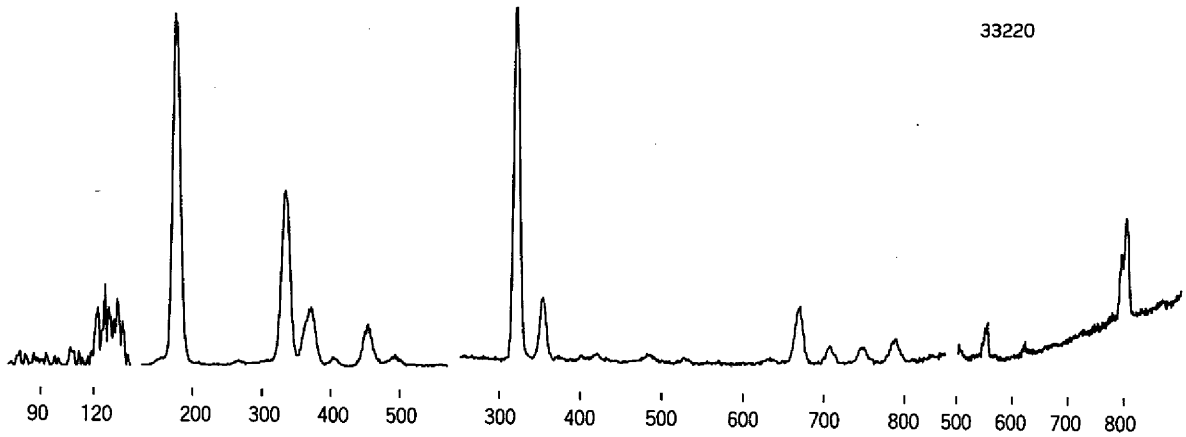
第４図　前田Ｍ2-Ｐ17，碧玉製管玉の蛍光Ｘ線スペクトル



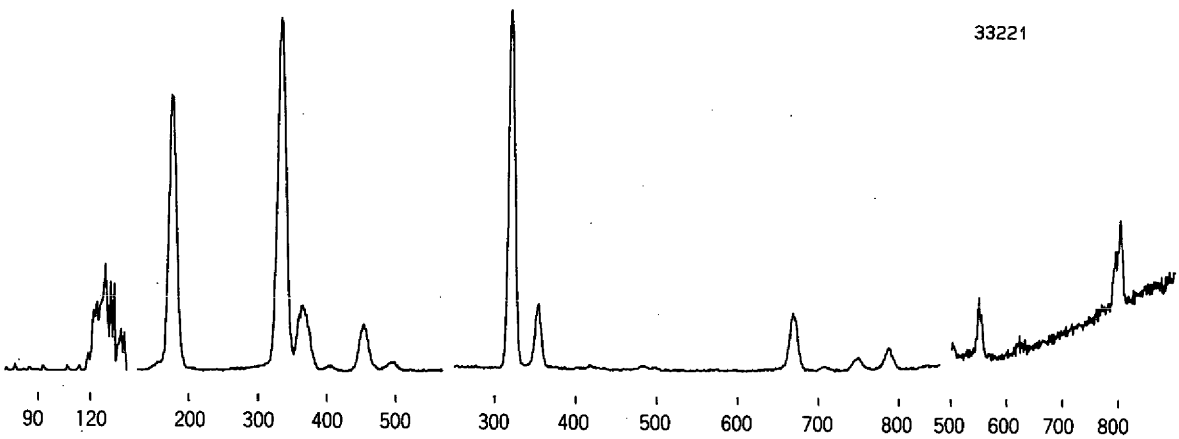
第５図　前田Ｍ1-SHO8，碧玉製管玉の蛍光Ｘ線スペクトル



第６図　５号墳-No.51，碧玉製管玉の蛍光Ｘ線スペクトル



第７図　２号墳－No. 37，碧玉製管玉の蛍光Ｘ線スペクトル



第８図　２号墳－No. 36，碧玉製管玉の蛍光Ｘ線スペクトル

表２　斎富遺跡、古墳群出土の玉類の分析結果

分析番号	元素比 Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fe	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr
33215	.048	.657	3.152	.983	.063	.118	2.300	.270
33217	.056	3.932	.160	.276	.366	.311	3.357	1.044
33218	.019	.810	.104	.143	.055	.175	24.870	4.343
33219	.022	1.331	.055	.085	.123	.274	12.183	3.333
33220	.018	.564	.140	.233	.056	.205	12.418	2.552
33221	.020	1.471	.053	.135	.080	.210	13.483	2.838
ＪＧ－1[a)]	.078	3.410	.757	.208	.130	.264	3.836	1.013

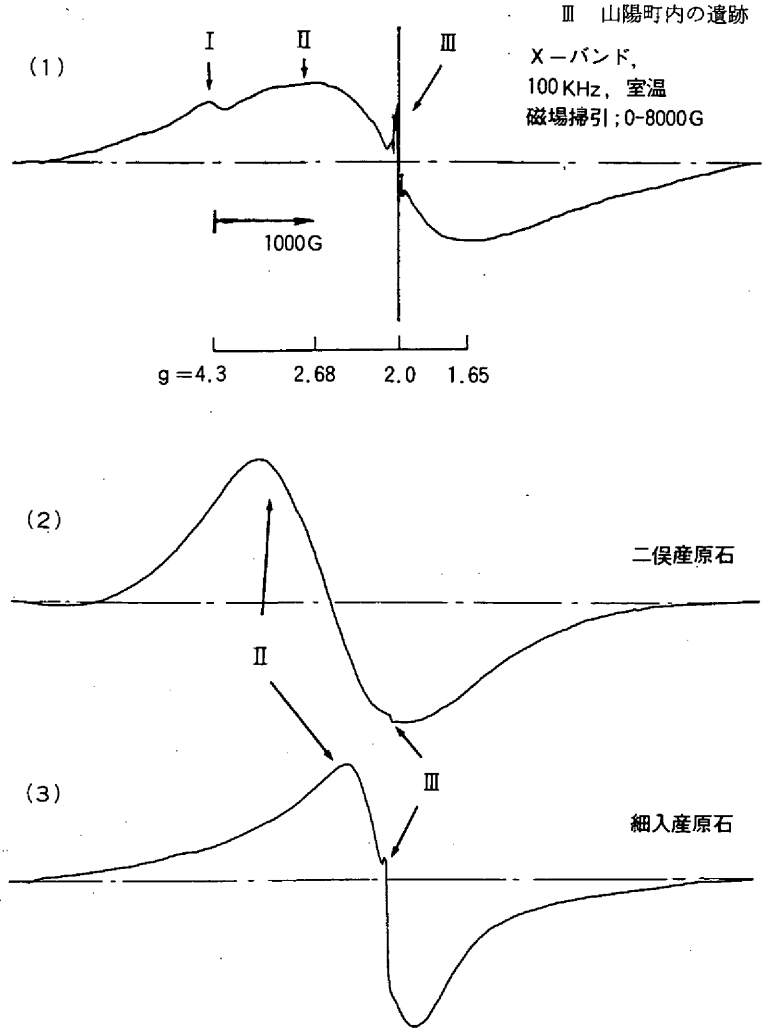
分析番号	元素比 Sr/Zr	Y/Zr	Mn/Fe	Ti/Fe	Nb/Zr	重量 gr	比重
33215	9.705	.194	.009	.045	.000	0.570	2.227
33217	3.400	.322	.004	.087	.011	15.219	2.551
33218	1.021	.119	.001	.006	.000	4.505	2.604
33219	.332	.195	.001	.009	.000	5.494	2.588
33220	.725	.351	.001	.010	.053	3.855	2.495
33221	.165	.149	.001	.008	.000	3.158	2.603
ＪＧ－1	1.312	.224	.024	.023	.114		

a)：標準試料、Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E.(1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal, Vol. 8 175-192.

a）：標準試料、Ando, A. Kurasawa, H., Ohomori, t. & Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal, Vol. 8 175-192.

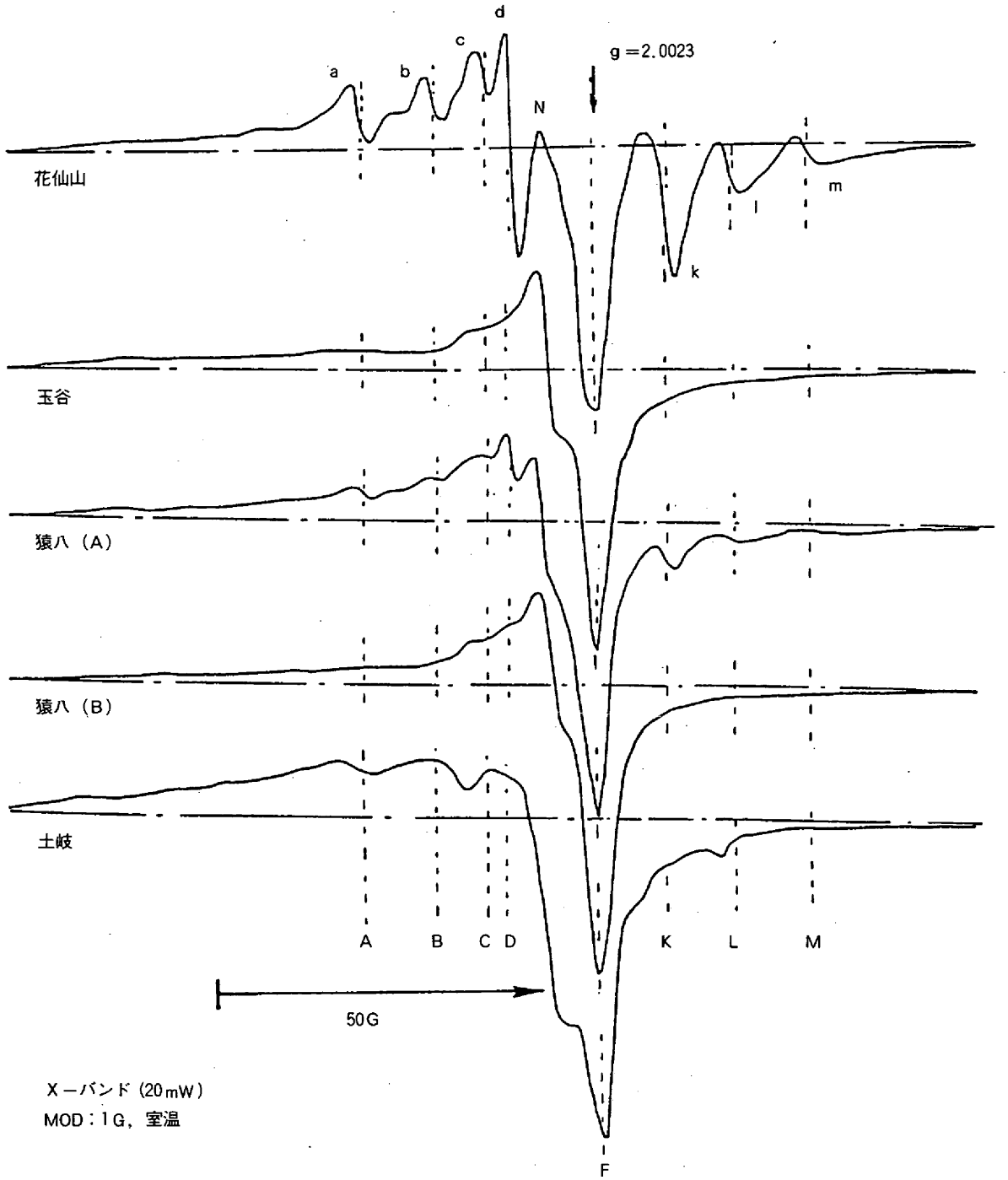
ＥＳＲ法による産地分析

ＥＳＲ分析は碧玉原石に含有されているイオンとか、碧玉が自然界からの放射線を受けてできた色中心などの常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。ＥＳＲの測定は、Varian 社のＥ－４型Ｘ－バンドスペクトロメーターで行う。試料は完全な非破壊分析で、直径が11㎜以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大で分析ができる場合がある。図９－１のＥＳＲのスペクトルは、幅広く磁場掃引したときに得られた信号スペクトルで、ｇ値が4.3の小さな信号（Ⅰ）は鉄イオンによる信号で、ｇ値が２付近の幅の広い信号と何本かの幅のピーク群からなる信号（Ⅲ）で構成されている。図９－１では、信号（Ⅱ）より信号（Ⅲ）の信号の高さが高、図９－２、－３の二俣、細入原石ではこの高さが逆になっているため、原石産地の判定の指標に利用できる。



第９図　碧玉原石の ESR スペクトル
（花仙山，玉谷，猿八，土岐）

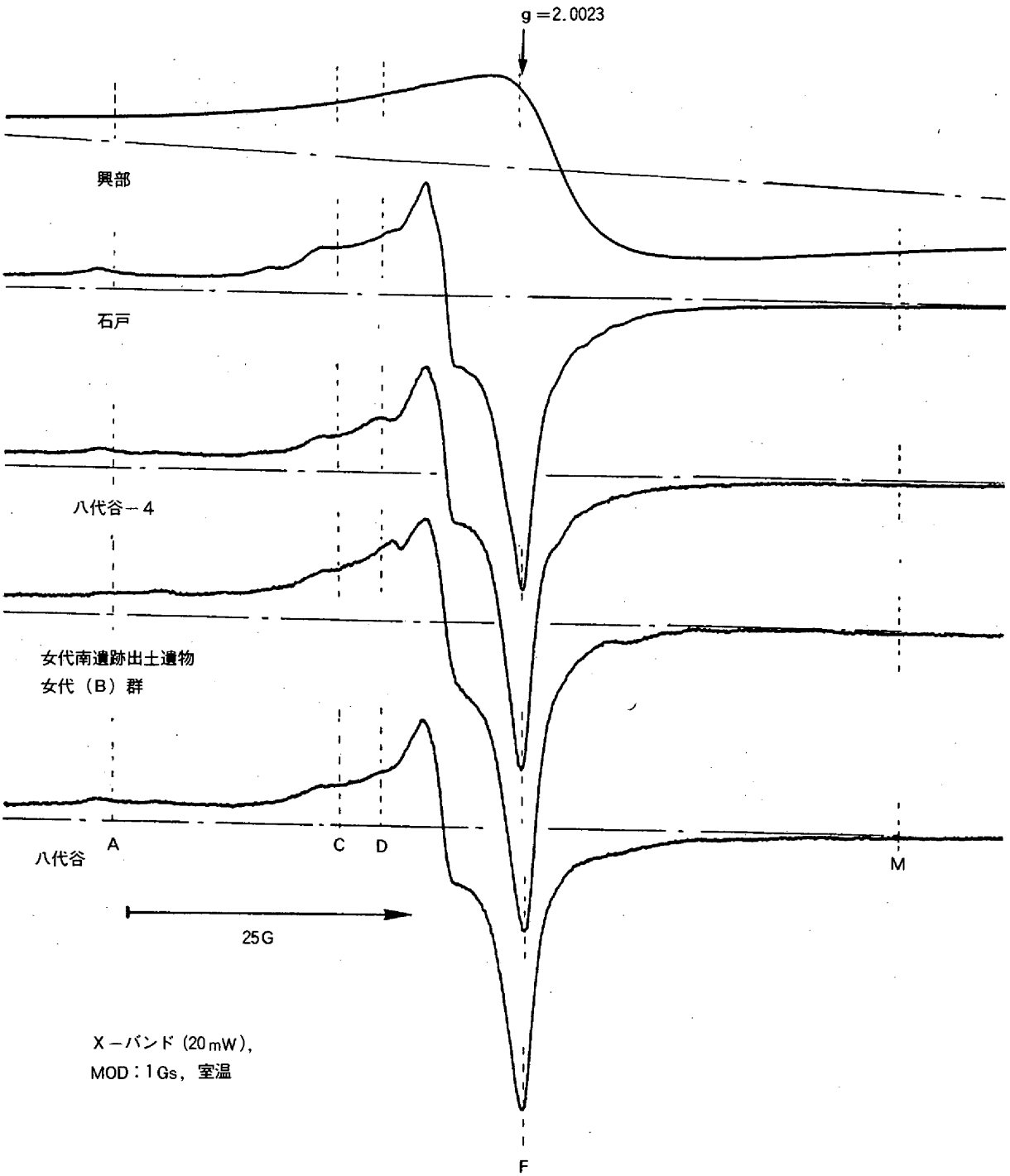
今回分析した玉類の中で信号（Ⅱ）が信号（Ⅲ）より小さい場合は、二俣、細入産でないといえる。各原産地の原石の信号（Ⅲ）の信号の形は産地ごとに異同があり産地分析の指標となる。図10－２に輿部、石戸、八代谷－４、女代（Ｂ）遺物群、八代谷の各原石の代表的な信号（Ⅲ）のスペクトルを示す。分析した玉類の信号（Ⅲ）を図11に示す。グリーンタフ系とした管玉250の信号（Ⅲ）に一致する原石産地の信号（Ⅲ）はなく、信号全体の形は細入、二俣に似るが、蛍光Ｘ線分析の結果では、これらの産地と一致しない。碧玉系と分類した管玉前田２区－Ｐ17および勾玉住居址８は遺物が大き過ぎるためにＥＳＲ装置のキャビティに入らず分析できなかった。勾玉住居址８、管玉51、管玉－37、－36の各遺物の信号（Ⅲ）は花仙山群なそれぞれ非常によく似ている。このことは、ＥＳＲ分析から見ると分析した遺物の原石産地がそれぞれ似た信号を示す原石の産地の可能性が大きいことを示唆している。さらに正確な原石産地を推測するために蛍光Ｘ線分析の結果と組み合わせ総合判定として、両方法でともに同じ原産地に特定された場合のみ、そこの原産地の原石で作られた玉であると判定する（表３）。



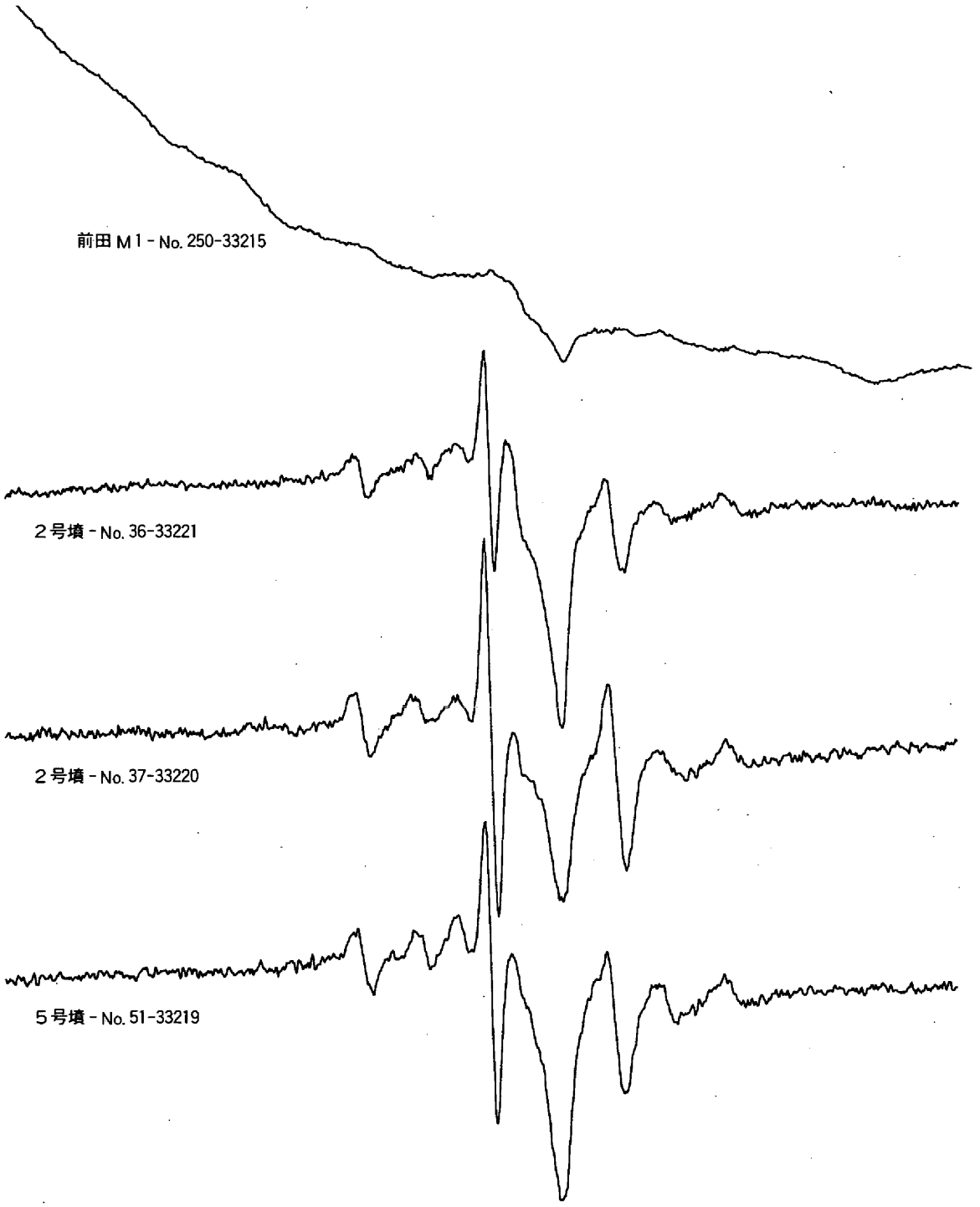
第10図　碧玉原石の信号ⅢのESRスペクトル（1）

結　論

今回分析を行った玉類の中で、斎富遺跡前田地区のグリーンタフ系とした管玉250は、ＥＳＲの結果は細入、二俣に似るが蛍光Ｘ線分析の結果では、これらの産地と一致しないため原石産地を特定できなかった。碧玉製管玉前田２区－Ｐ17の原石産地は不明で、碧玉製勾玉住居址－８のＥＳＲ信号は



第10図　碧玉原石の信号ⅢのESRスペクトル（2）



第11図　斎富遺跡，斎富古墳群出土玉類の信号Ⅲの ESR スペクトル

表 3　斎富遺跡、古墳群出土の玉類の原石産地結果（岡山県赤磐郡山陽町）

遺物番号	分析番号	碧玉製玉類蛍光X線分析法による帰属確率 興部群	玉谷群	花仙山群	猿八群	女代(B)群	ESR信号形	総合判定原石産地
管玉-250	33215	$1X10^{-16}$%	$1X10^{-22}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	不明	不明
〃 -P17	33217	$<10^{-25}$%	$1X10^{-13}$%	$<10^{-25}$%	$1X10^{-20}$%	$<10^{-25}$%	試料過大	不明
勾玉SH08	33218	$1X10^{-3}$%	$1X10^{-12}$%	0.1 %	$1X10^{-22}$%	$<10^{-25}$%	〃	花仙山産？
管玉-51	33219	$<10^{-12}$%	$1X10^{-14}$%	18.1 %	$<10^{-15}$%	$<10^{-25}$%	花仙山	花仙山産原石
〃 -37	33220	$1X10^{-5}$%	$1X10^{-9}$%	0.2 %	$1X10^{-13}$%	$<10^{-25}$%	〃	〃
〃 -36	33221	$1X10^{-7}$%	$1X10^{-11}$%	37.9 %	$1X10^{-13}$%	$<10^{-25}$%	〃	〃

測定できなかったが、蛍光X線分析では花仙山産原石の可能性を示している。斎富古墳群5号墳主体部出土の管玉51、2号墳第4主体部内出土の管玉—37、2号墳第1主体部内出土の管玉—36の3個で、これら3個は蛍光X線分析、ＥＳＲの両結果が花仙山群と一致するところから、花仙山産原石で作られた玉類と結論できた。

参考文献

1）茅原一也（1964）、長者が原遺跡産のヒスイ（翡翠）について（概報）。長者ケ原、新潟県糸魚川教育委員会：63-73

2）藁科哲男・東村武信（1987）、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要6：1-18

3）藁科哲男・東村武信（1990）、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。橿原考古学研究所紀要『考古学攷』、14：95-109

4）Tetsuo Warashina（1992）、Alloction of Jasper Archeological Imlements By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19：357-373

5）藁科哲男・東村武信（1983）、石器原材の産地分析。考古学と自然科学、16：59-89

6）番場猛夫（1967）、北海道日高産軟玉ヒスイ。調査研究報告会講演要旨録、№18：11-15

7）河野義礼（1939）、本邦における翡翠の新産出及び某化学的性質。岩石礦物鉱床学雑誌22：195-201

8）東村武信（1976）、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学、9：77-90

古墳群全景

図版２

1．古墳群遠景
（西から）

2．調査前地形
（東から）

3．表土除去後
（東から）

1．土壙墓群
（西から）

2．土壙基１
（北から）

1

2

3．土壙墓１出土
土器（1 3）

図版４

１．土器棺墓２
検出状況
（北から）

1

2

２．土器棺墓２出土土器（1/6）

１．１号墳墳丘
（北から）

２．１号墳主体部
（東から）

３．１号墳主体部出土遺物（1/3）

図版６

１．２号墳全景（西から）

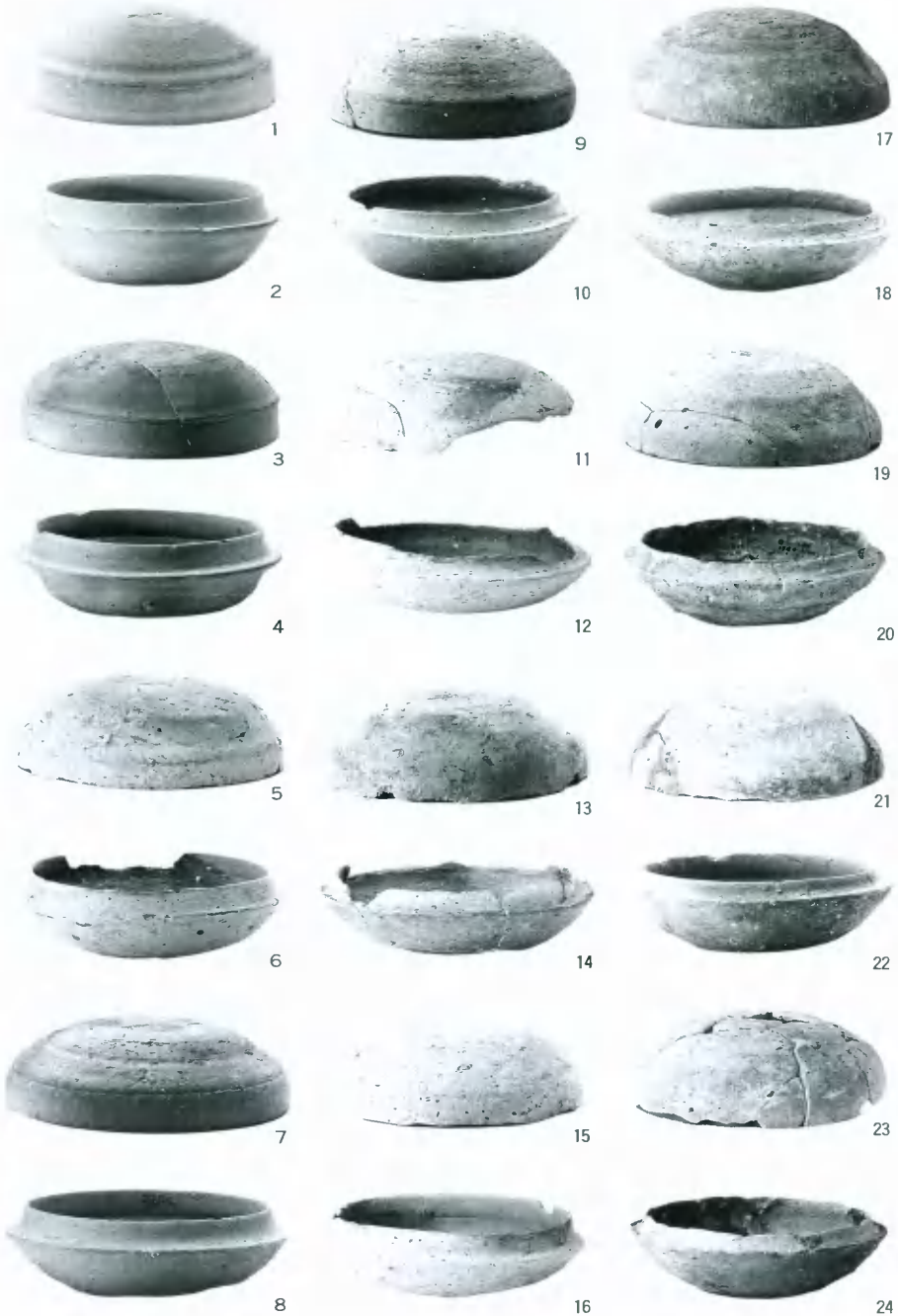
２．２号墳主体部（手前から第１～３主体部）（西から）

１．２号墳第１主体部遺物出土状況
（西から）
（石室北側）

２．２号墳第１主体部遺物出土状況
（西から）
（石室中央）

３．２号墳第１主体部遺物出土状況
（西から）
（石室南側）

図版８



２号墳第１主体部出土土器（１）(1/3)

25

26

27

28

32

35

29

33

36

30

31

34

37

２号墳第１主体部出土土器（２）(1/3)

図版10

38

39

40

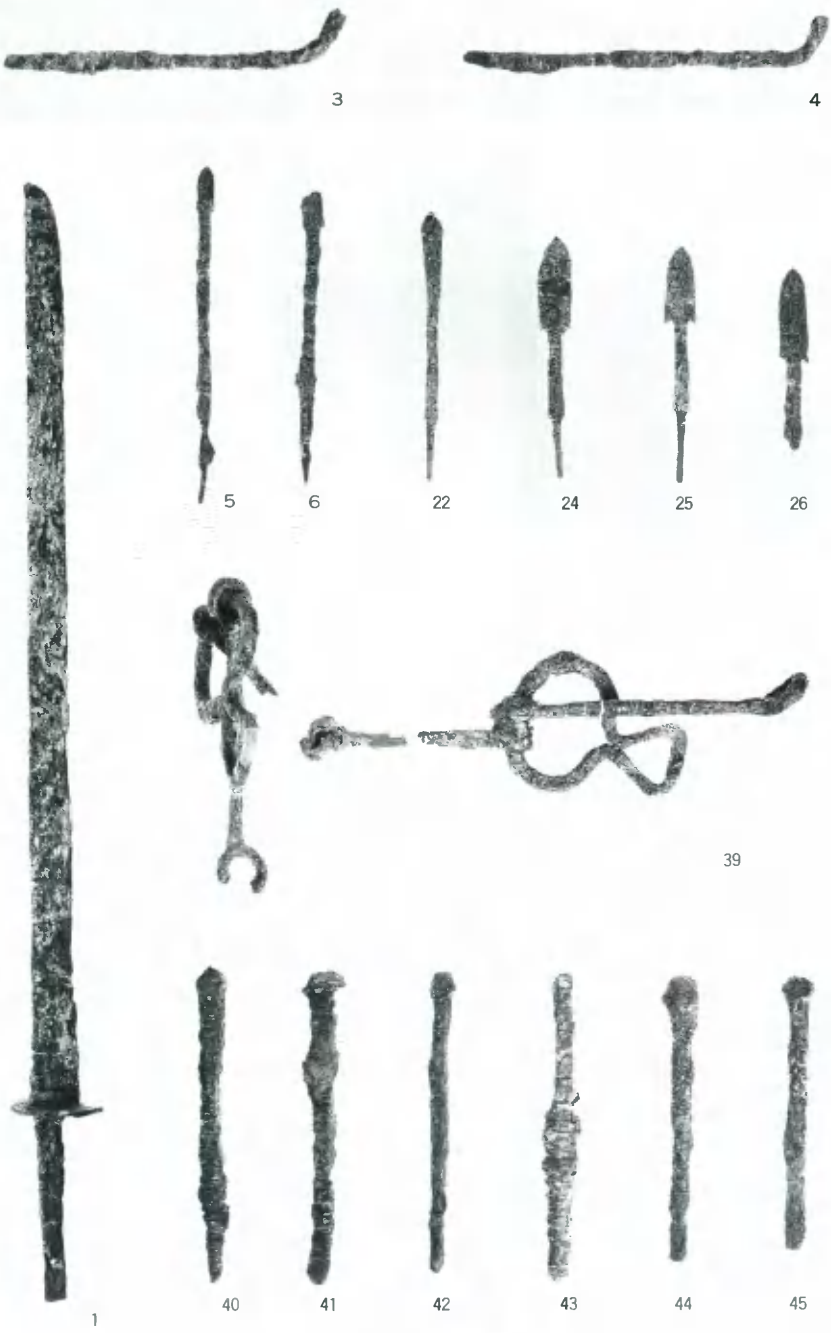
47

43

48

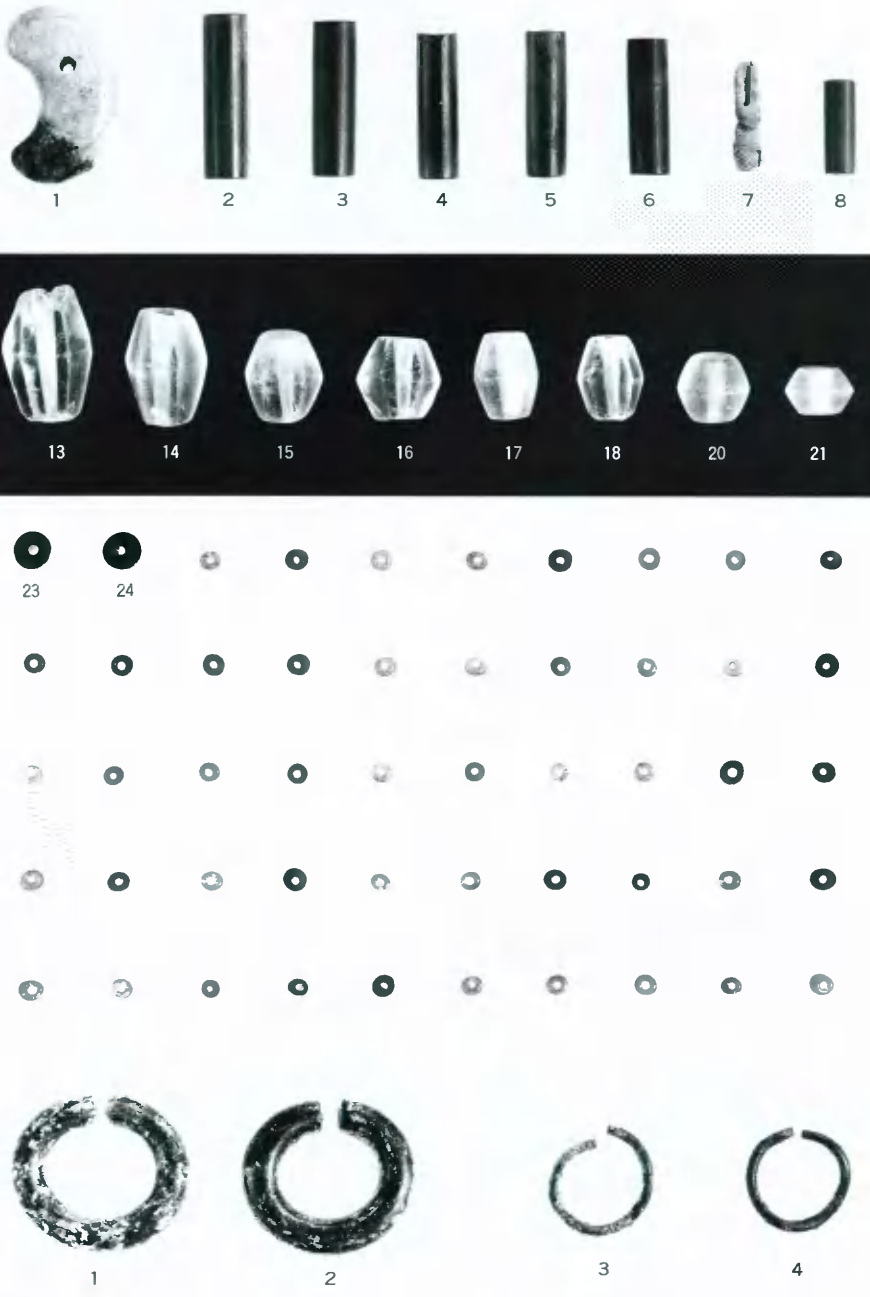
46

2号墳第1主体部出土土器（3）(1/3)



2号墳第1主体部出土鉄器（1：1/6、他：1/3）

図版12



2号墳第1主体部出土装身具（1/1）

1．（右）
２号墳第２主体部（北から）

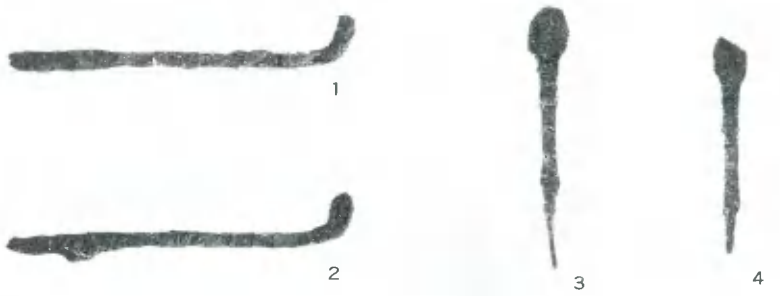
2．（下・左）
２号墳第３主体部検出状況（北から）

3．（下・右）
２号墳第３主体部蓋石除去後（北から）

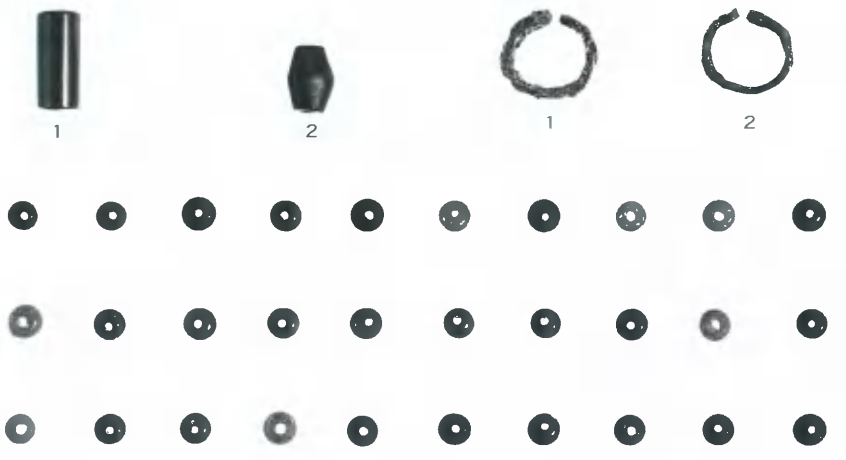
図版14

1．２号墳第２主体部出土遺物（1/3）

2．２号墳第３主体部出土遺物（7：1/4，他：1/3）



1．２号墳第３主体部出土鉄器（1/3）



2．２号墳第３主体部出土装身具（1/1）

図版16

1．２号墳第４主体部検出状況（南から）

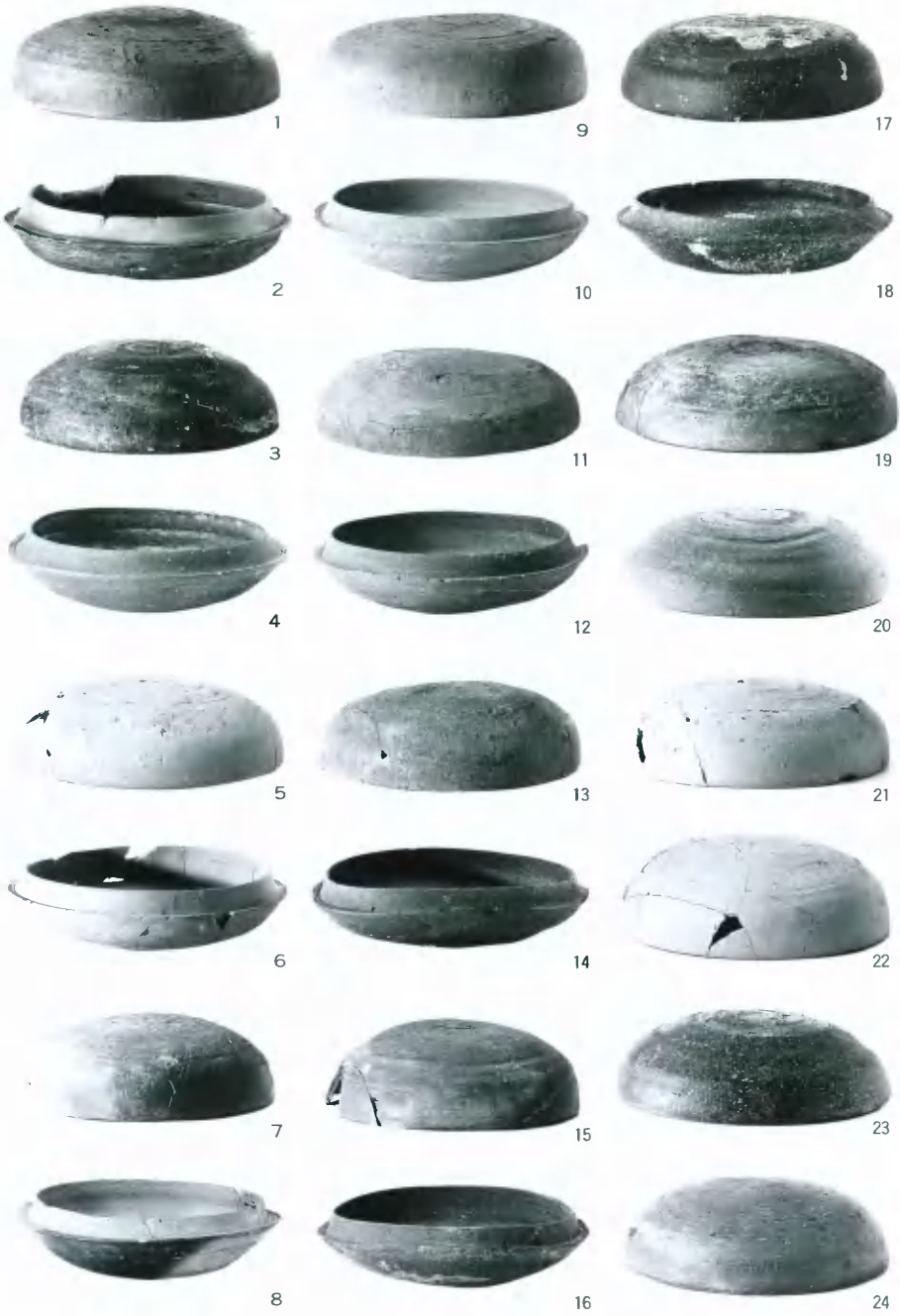
2．２号墳第４主体部遺物出土状況（南から）

1．２号墳第４主体部奥壁付近遺物出土状況（南から）

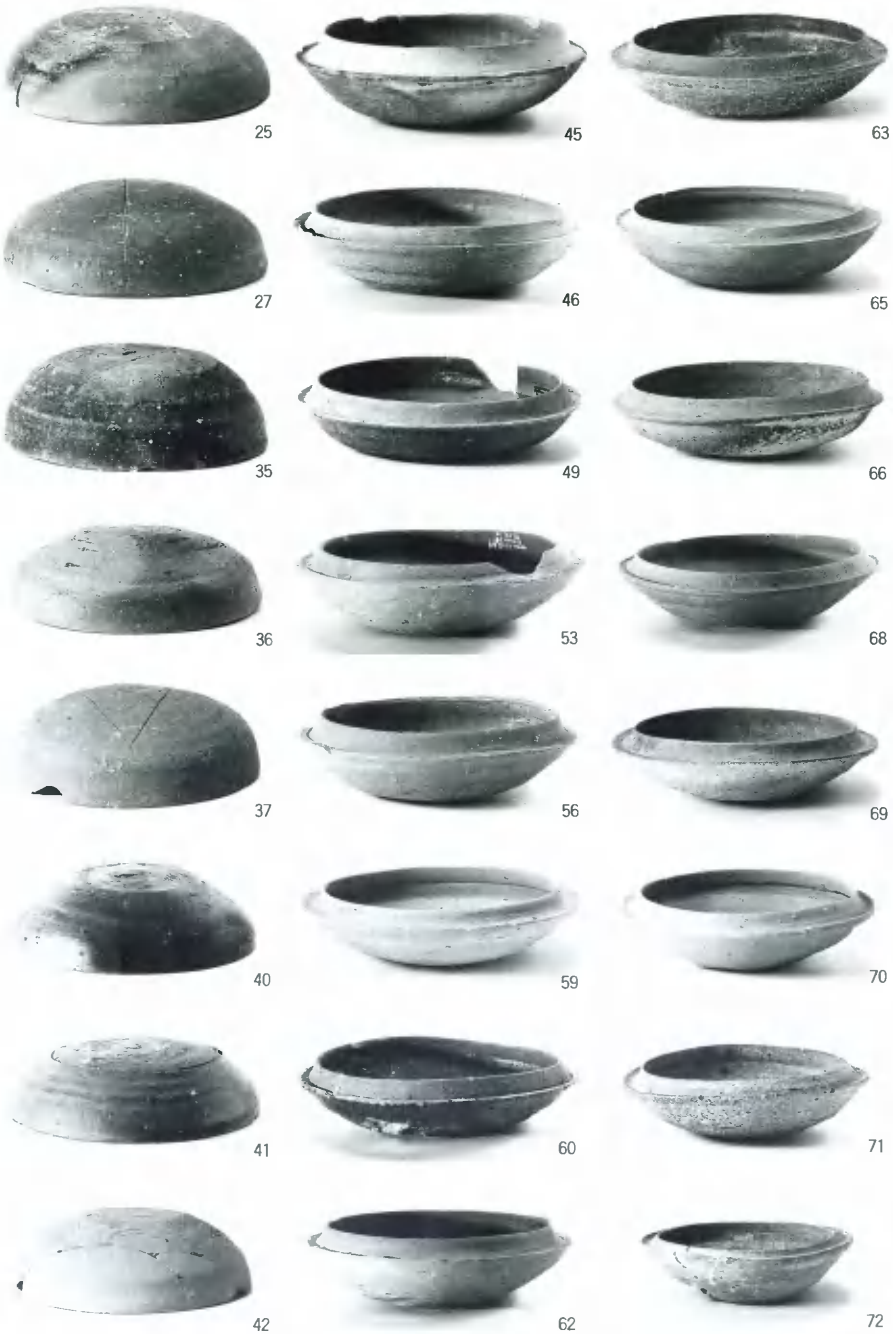
2．２号墳第４主体部奥壁構築状況（南から）

3．２号墳第４主体部袖部および羨道（北から）

図版18



2号墳第4主体部出土土器（1）(1/3)



2号墳第4主体部出土土器（2）（1/3）

図版20

73

74

79

81

85

75

82

87

78

83

89

2号墳第4主体部出土土器（3）(1/3)

90

101

96

103

98

104

105

109

110

2号墳第4主体部出土土器（4）(1/3)

図版22

116

117

118

119

120

121

124

128

127

2号墳第4主体部出土土器（5）(124・127・128：1/4，他：1/3)

130

134

1，2号墳第4主体部出土土器（6）(1/3)

135

136

137

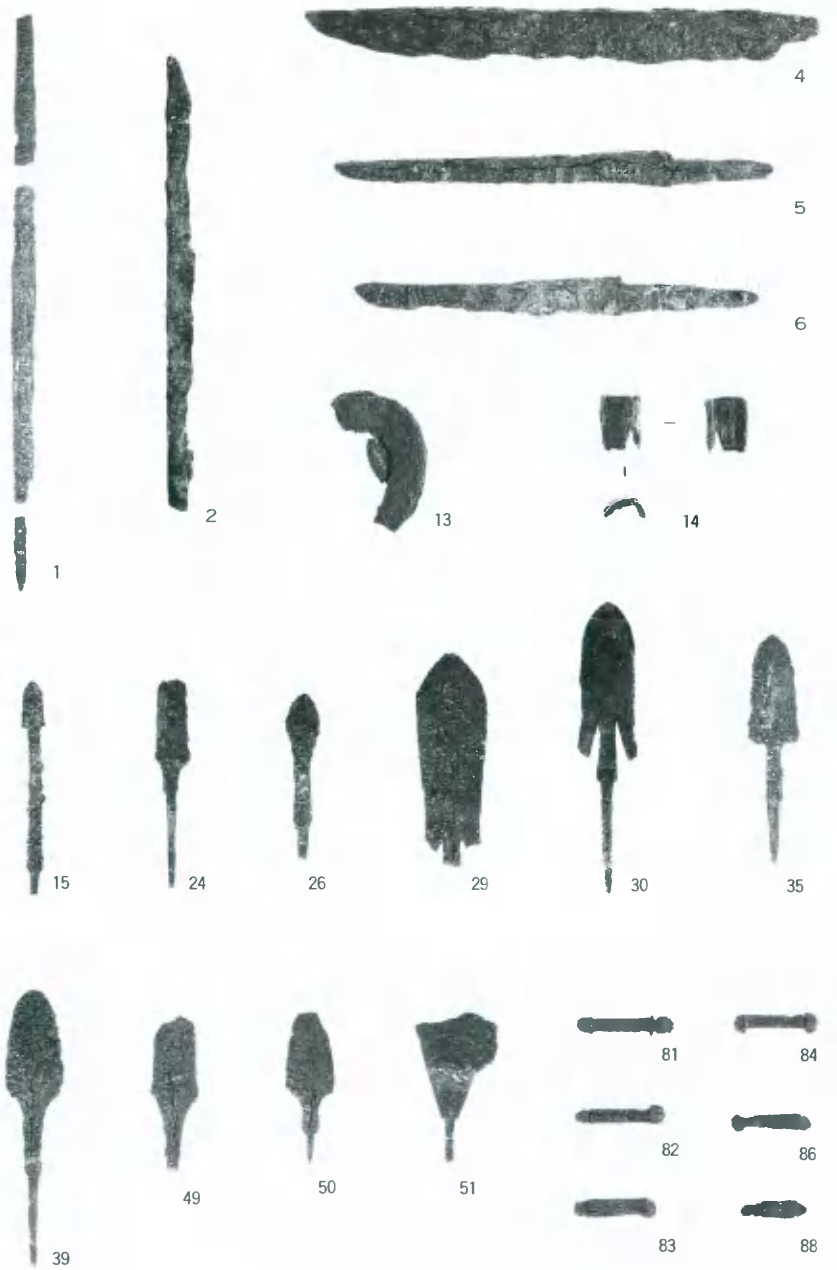
138

141

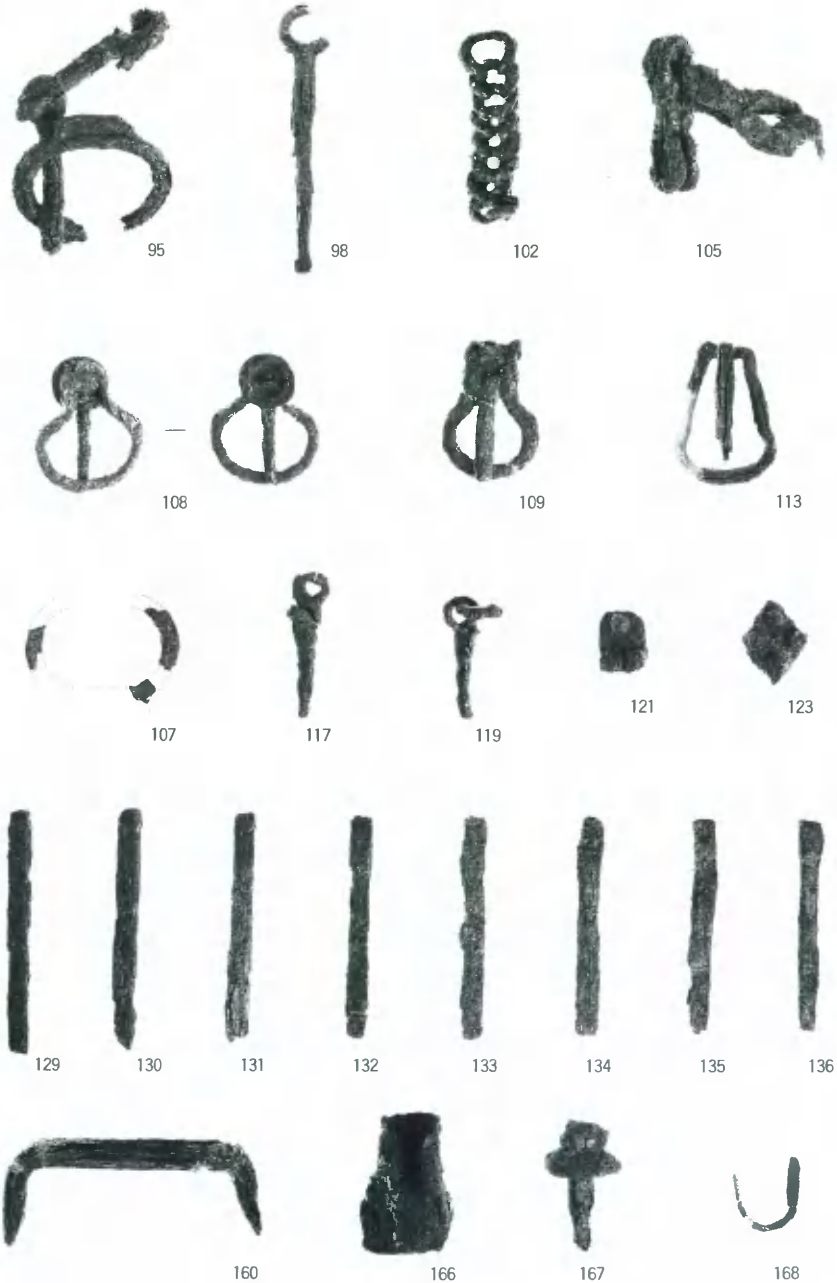
146

2，2号墳第4主体部前庭部出土土器（1/3）

図版24

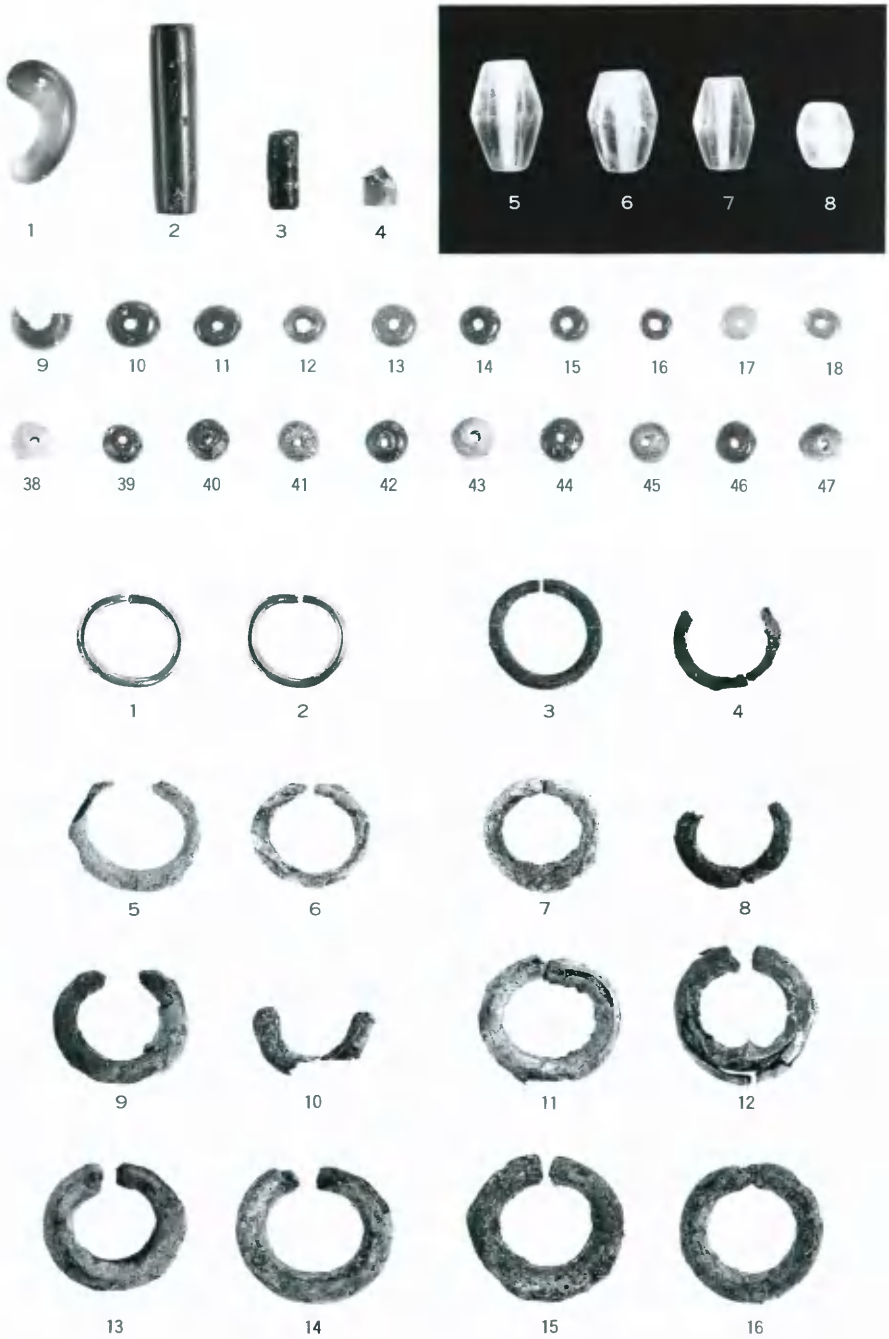


2号墳第4主体部出土鉄器（1）（1：1/8，2：1/6，81以下：1/2，他：1/3）



2号墳第4主体部出土鉄器（2）(1/3)

図版26



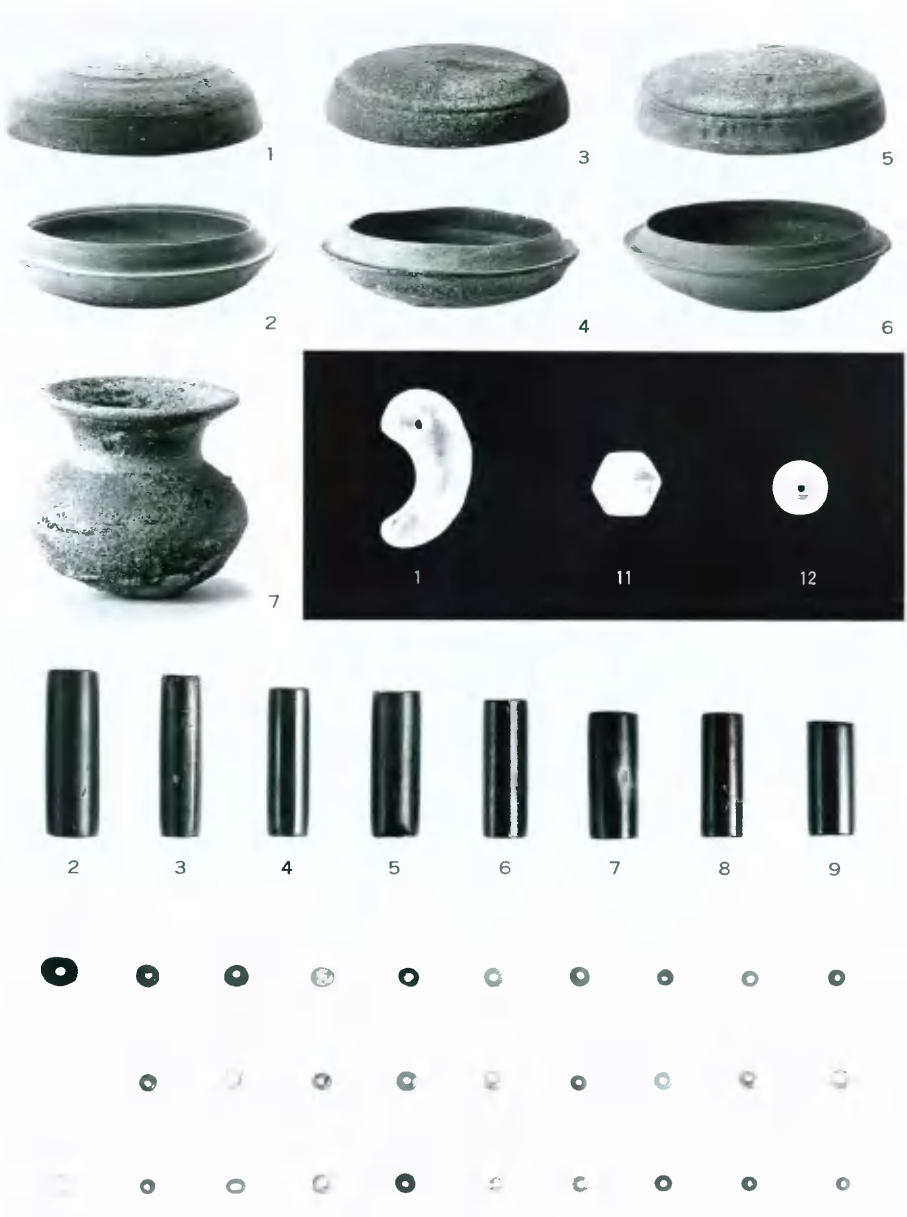
2号墳第4主体部出土装身具（1/1）

1．５号墳墳丘
（東から）

2．５号墳主体部
検出状況
（南から）

3．５号墳主体部
蓋石除去後
（南から）

図版28



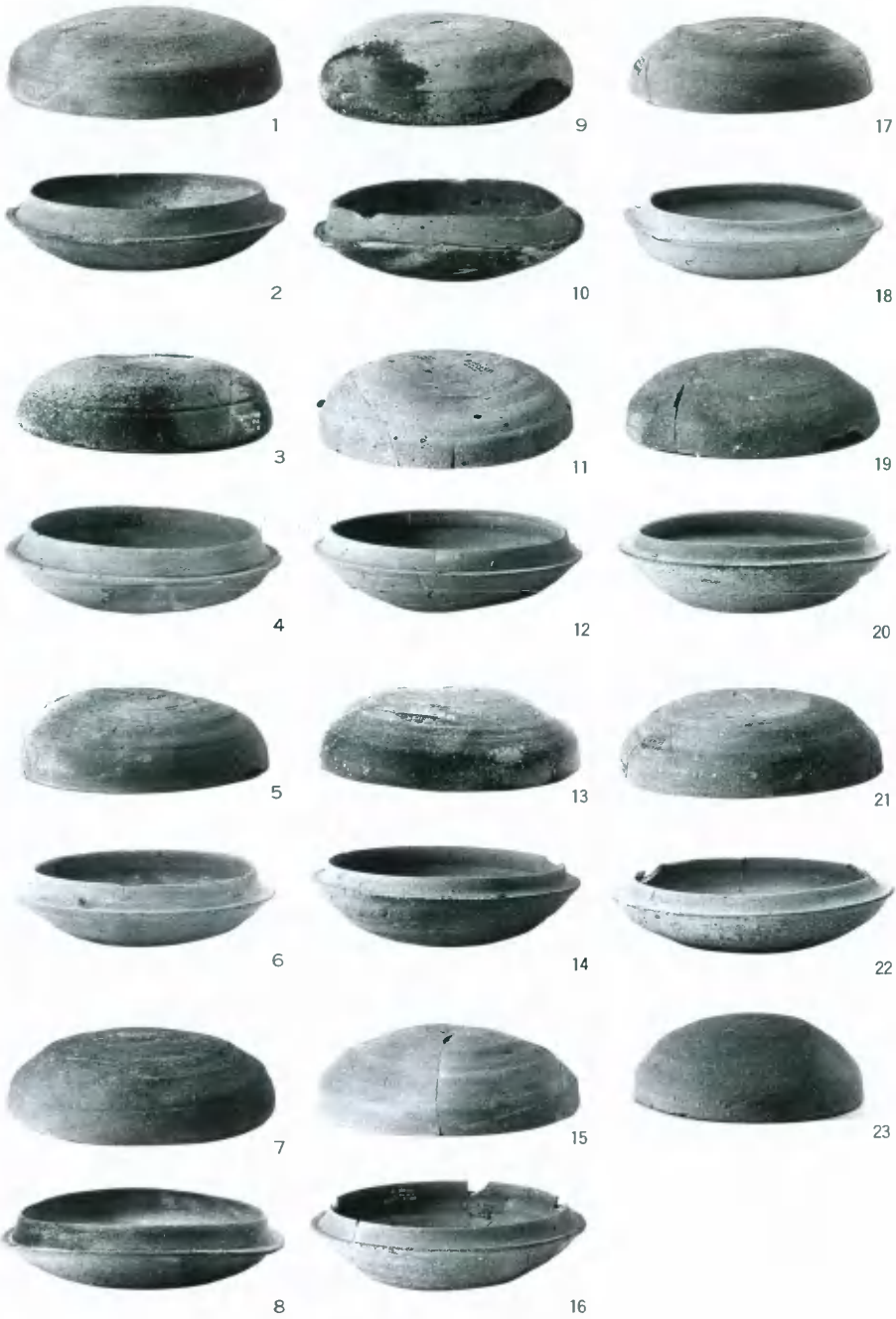
5号墳主体部出土遺物（土器：1/3、装身具：1/1）

1．土壙墓22
（北東から）

2．土壙墓22遺物
出土状況
（南から）

3．土器棺墓1
（北から）

図版30



土壙墓22出土土器（1）(1/3)

24

25

29

30

26

32

28

35

土壙墓22出土土器（2）(1/3)

1．土器棺墓 1 出土土器（1/4）

1

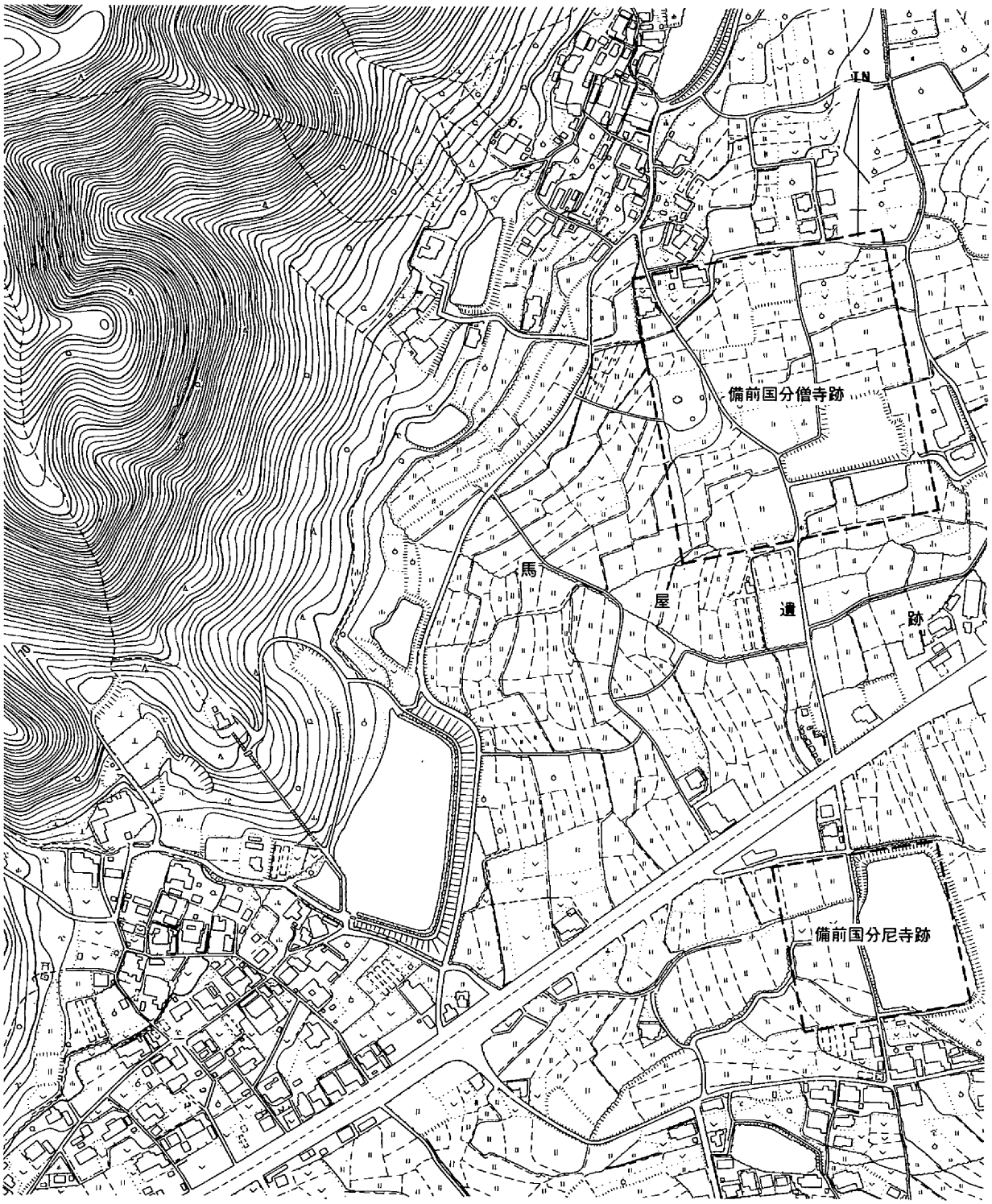
2

6

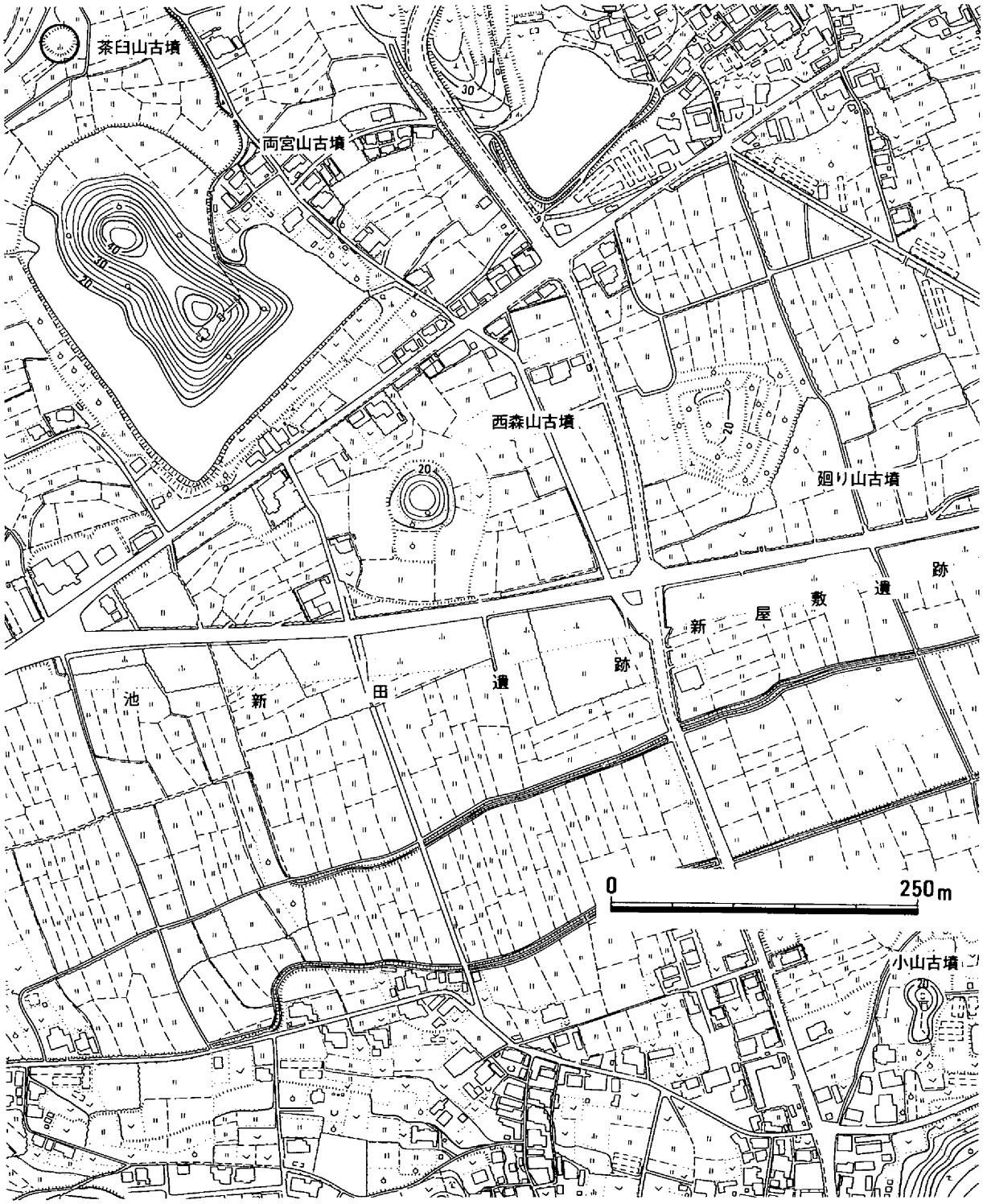
5

2．中世墓の備前焼壺（1/4）

新屋敷遺跡・池新田遺跡



第１図　馬屋・池新田・新屋敷遺跡位置



図（山陽町都市計画図改変）(1/5,000)

新屋敷遺跡・池新田遺跡挿図目次

第１図　馬屋・池新田・新屋敷遺跡位置図（山陽町都市計画図改変）(1/5000)　… 218
第２図　新屋敷遺跡調査位置図（1/2500）…… 221
第３図　新屋敷遺跡土層柱穴図および橋脚２～６遺構配置図（1/300）…… 222
第４図　橋脚９・11南側道遺構配置図および竪穴住居－１…… 223
第５図　新屋敷遺跡橋脚９土壙－３平・断面図および出土遺物…… 224
第６図　橋脚９土壙－４平・断面図および出土遺物…… 225
第７図　新屋敷遺跡側道土壙－５平・断面図および出土遺物…… 226
第８図　新屋敷遺跡土壙－６平・断面図および出土遺物…… 227
第９図　新屋敷遺跡土壙－７平・断面図… 227
第10図　新屋敷遺跡土壙－７出土遺物…… 228
第11図　新屋敷遺跡橋脚10土壙－８出土遺物…… 229
第12図　新屋敷遺跡橋脚10土壙－８平・断面図…… 230
第13図　新屋敷遺跡側道たわみ３（１、２）４（３、４）出土遺物…… 230
第14図　新屋敷遺跡側道たわみ２出土遺物…… 231
第15図　池新田遺跡調査位置図（1/4000）…… 232
第16図　池新田遺跡橋脚９・13および出土遺物(1)…… 232
第17図　池新田遺跡出土遺物(2)…… 233

新屋敷遺跡・池新田遺跡写真図版目次

図版１－１　新屋敷遺跡全景（南西から）
　２　新屋敷遺跡Ｐ－１溝－１（西から）
　３　新屋敷遺跡Ｐ－９全景（北から）
図版２－１　新屋敷遺跡Ｐ－９土壙３（北東から）
　２　新屋敷遺跡側道土壙－５（西から）・出土遺物
図版３－１　新屋敷遺跡Ｐ－９土壙－４（南から）・出土遺物
　２　新屋敷遺跡側道土壙－７（西から）
図版－４　新屋敷遺跡側道土壙－７出土遺物
図版－５　新屋敷遺跡Ｐ－10土壙－８・出土遺物
図版６－１　池新田遺跡Ｐ－９全景（北から）
　２　池新田遺跡Ｐ－13全景（西から）
　３　池新田遺跡Ｐ－19（北から）

第２節　新屋敷遺跡

(1)　調査の経緯と概要

新屋敷遺跡は赤磐郡山陽町穂崎に存している。県道岡山吉井線改良工事に伴って昭和59年度（1984）に確認調査を行い、昭和63年度（1988）に県道敷約160ｍの範囲の調査が行われ、東半部から弥生時代中期後半の溝・柱穴、中・近世の土壙の柱穴などが確認されている。

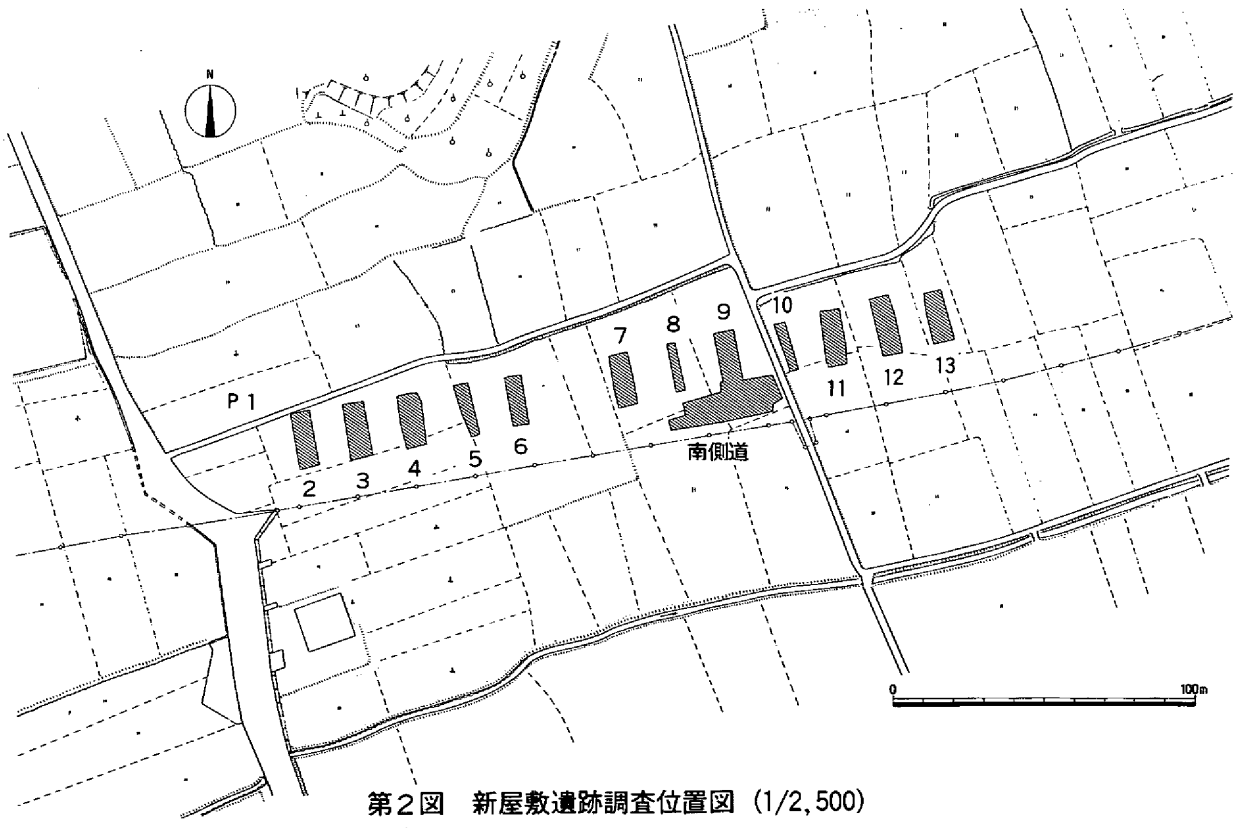
この遺跡の北100ｍ程の所には両宮山古墳の培塚の一つで、直径（一辺）60ｍの規模の廻り山古墳が存している。新屋敷遺跡はその丘陵から南に伸びた所に位置し、東・西・南へは徐々に下降していっている。

今回の調査は、県道岡山吉井線の南側部分にあたり、町道岩田穂崎線以東、約250ｍ間の橋脚14ヶ所と南側道（工事用道路）の一部の調査を平成３年７月２日から８月２日までの間に池新田遺跡、馬屋遺跡と併行して行った。

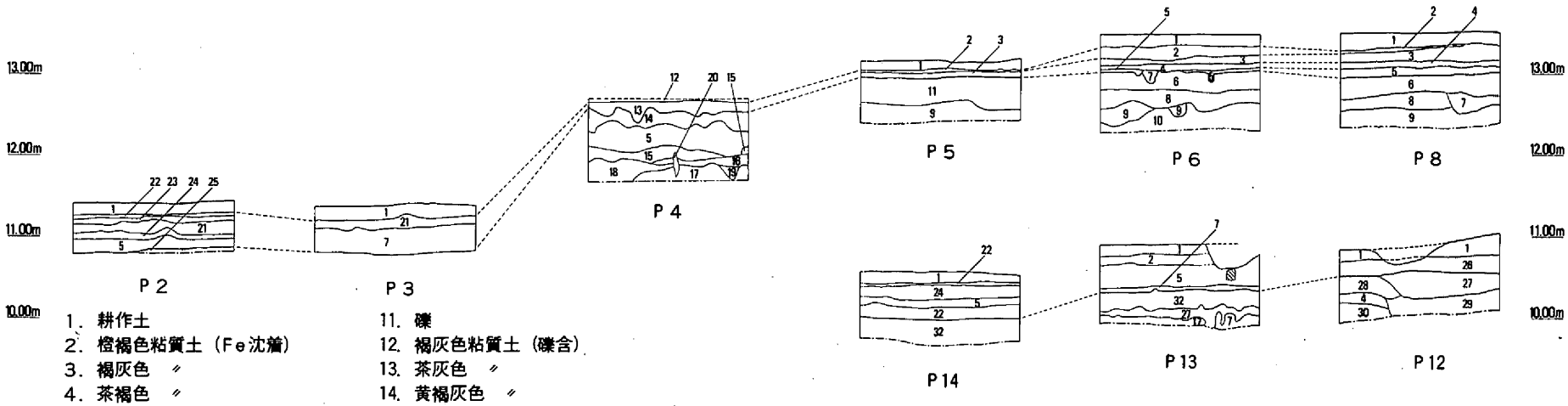
橋脚２・３からは東西方向の幅100～200㎝、深さ30～50㎝の溝、橋脚６からは時期不祥のピット数ヶ所、橋脚９からは弥生時代中期後半～後期にかけての竪穴住居址、ピット群、土壙、たわみ、溝状遺構が多数検出されたので、南側道を橋脚９・11に拡張して調査を行った。また、橋脚10からは北半部から土壙・ピットなどが検出され、橋脚11からは溝状の遺構１ヶ所が検出されたのみである。

(2)　弥生時代の遺構・遺物

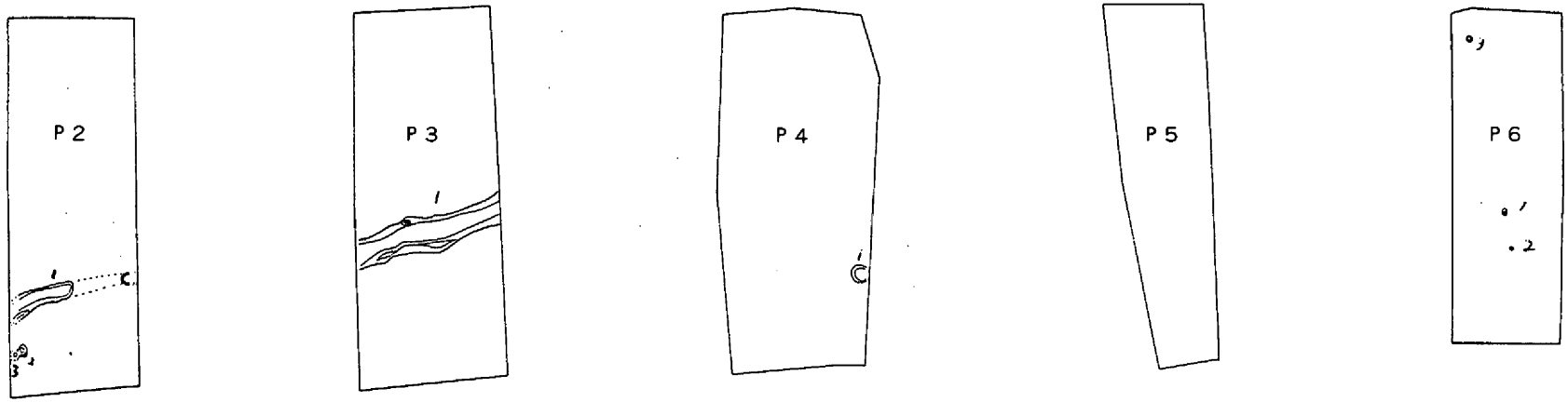
竪穴住居１　橋脚９北半部で検出したが、南側の壁体溝の一部と柱穴３本を確認したのみである。



第２図　新屋敷遺跡調査位置図（1/2,500）



1. 耕作土
2. 橙褐色粘質土（Fe沈着）
3. 褐灰色 〃
4. 茶褐色 〃
5. 灰褐色 〃
6. 黄褐色 〃
7. 暗灰褐色 〃
8. 暗褐色 〃
9. 明黄灰色 〃
10. 暗褐灰色 〃
11. 礫
12. 褐灰色粘質土（礫含）
13. 茶灰色 〃
14. 黄褐灰色 〃
15. 灰褐色 〃 （粘性強）
16. 灰褐色砂質土
17. 灰色砂礫
18. 青灰色砂質土
19. 灰色粗砂
20. 灰色細砂
21. 灰黄色粘質土
22. 明灰褐色 〃
23. 暗灰褐色 〃
24. 淡灰褐色 〃
25. 灰色粘質土（礫多含）
26. 黄灰色 〃
27. 灰色礫
28. 淡黄茶色粘質土
29. 茶褐色礫
30. 暗褐色粘質土（やや砂質あり）
31. 明褐色 〃
32. 明灰黄色 〃



第３図　新屋敷遺跡土層柱穴図および橋脚２～６遺構配置図（1/300）

第４図　橋脚９・11南側道遺構配置図および竪穴住居１

復元直径約７ｍ前後の円形の住居址と推定される。壁体溝は幅40㎝、深さ８㎝で４ｍ程が残存していたのみである。

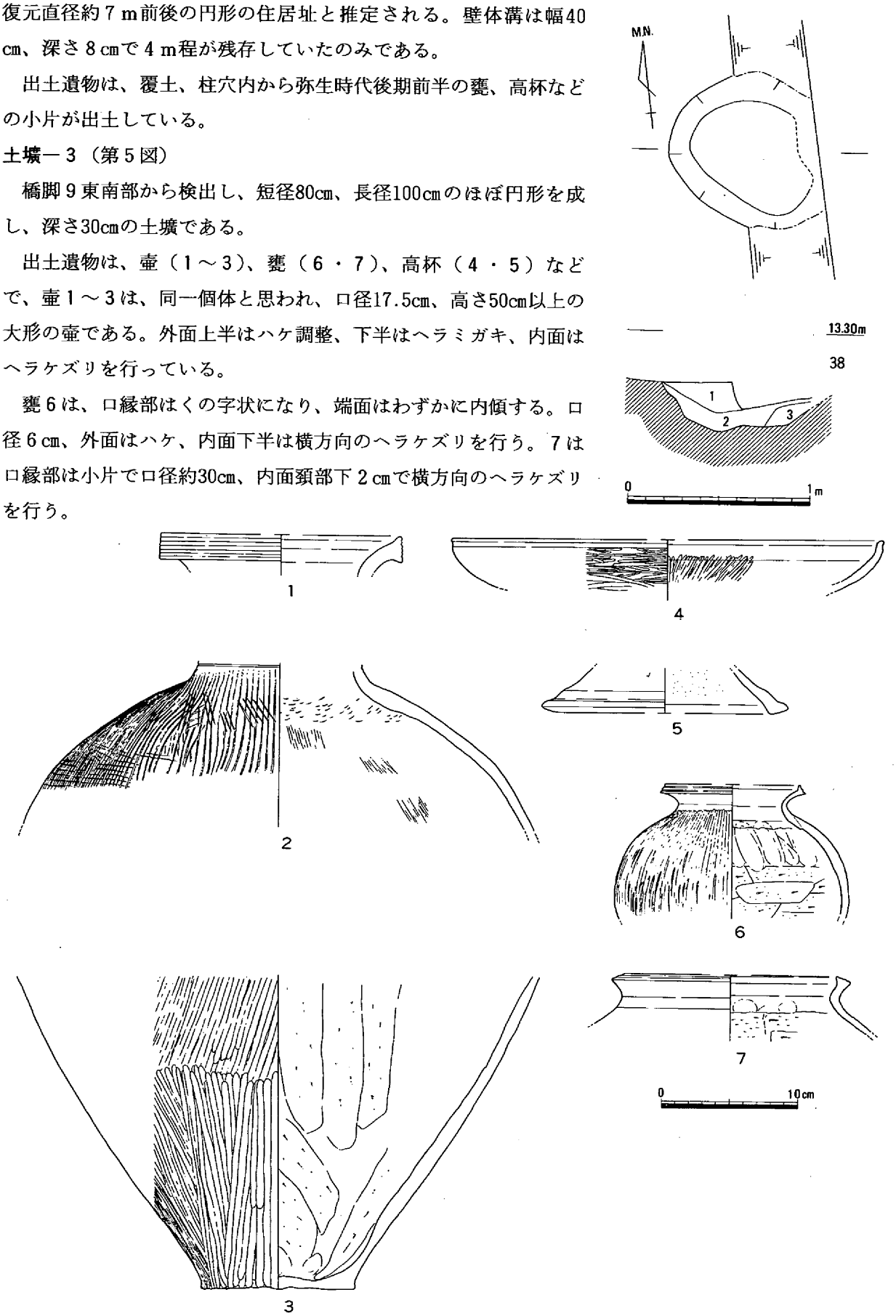
出土遺物は、覆土、柱穴内から弥生時代後期前半の甕、高杯などの小片が出土している。

土壙－３（第５図）

橋脚９東南部から検出し、短径80㎝、長径100㎝のほぼ円形を成し、深さ30㎝の土壙である。

出土遺物は、壷（１～３）、甕（６・７）、高杯（４・５）などで、壷１～３は、同一個体と思われ、口径17.5㎝、高さ50㎝以上の大形の壷である。外面上半はハケ調整、下半はヘラミガキ、内面はヘラケズリを行っている。

甕６は、口縁部はくの字状になり、端面はわずかに内傾する。口径６㎝、外面はハケ、内面下半は横方向のヘラケズリを行う。７は口縁部は小片で口径約30㎝、内面頚部下２㎝で横方向のヘラケズリを行う。

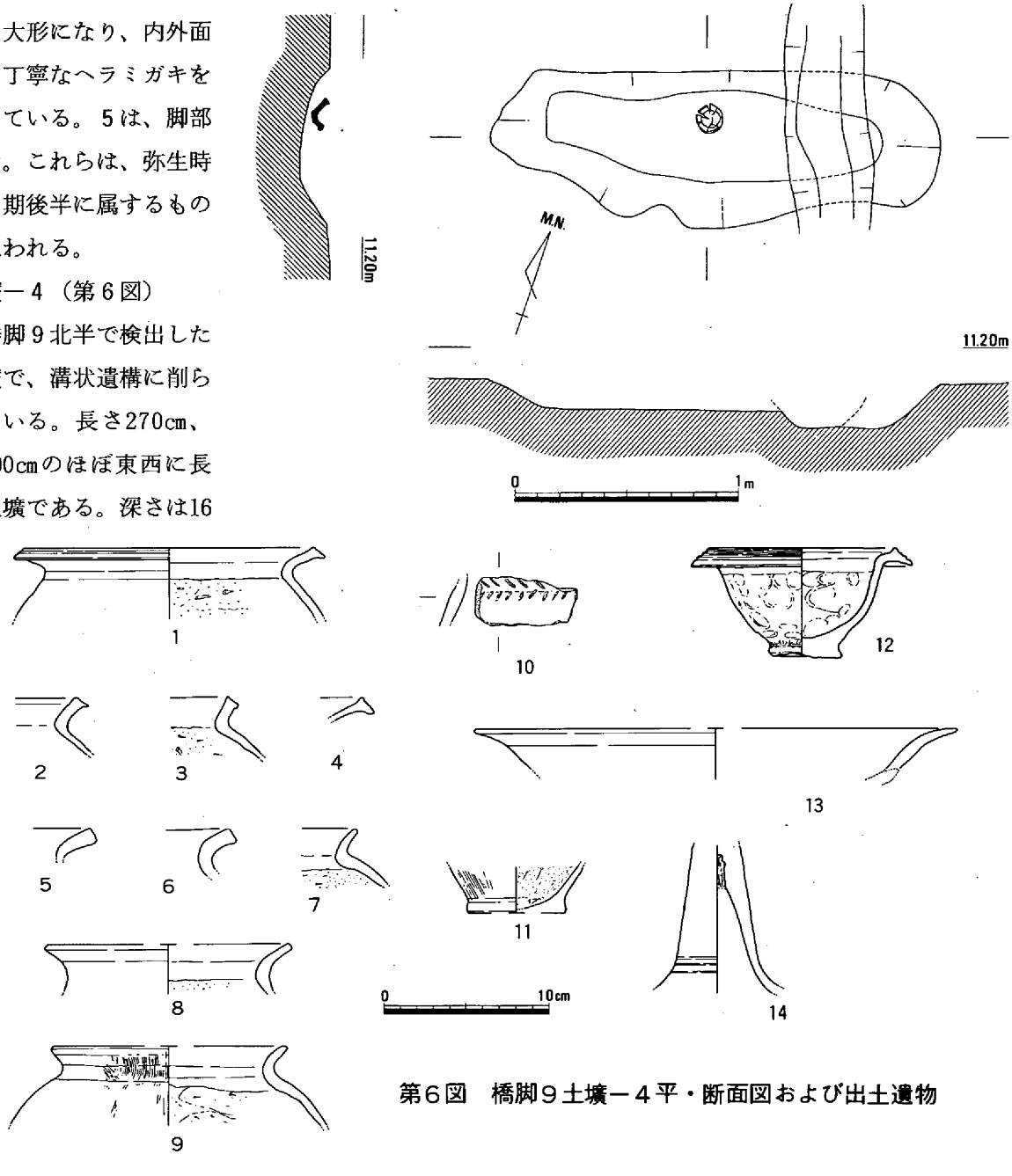


第５図　新屋敷遺跡橋脚９土壙３平・断面図および出土遺物

高杯４は、口径30cm近くの大形になり、内外面とも丁寧なヘラミガキを行っている。５は、脚部小片。これらは、弥生時代中期後半に属するものと思われる。

土壙－４（第６図）

橋脚９北半で検出した土壙で、溝状遺構に削られている。長さ270cm、幅100cmのほぼ東西に長い土壙である。深さは16



第６図　橋脚９土壙－４平・断面図および出土遺物

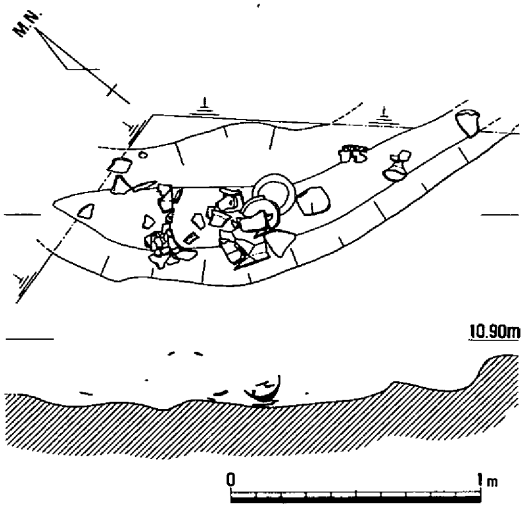
cmを測る。出土遺物は、中央部分から完形の小形の鉢12のほか甕１～11、高杯13・14などが出土している。

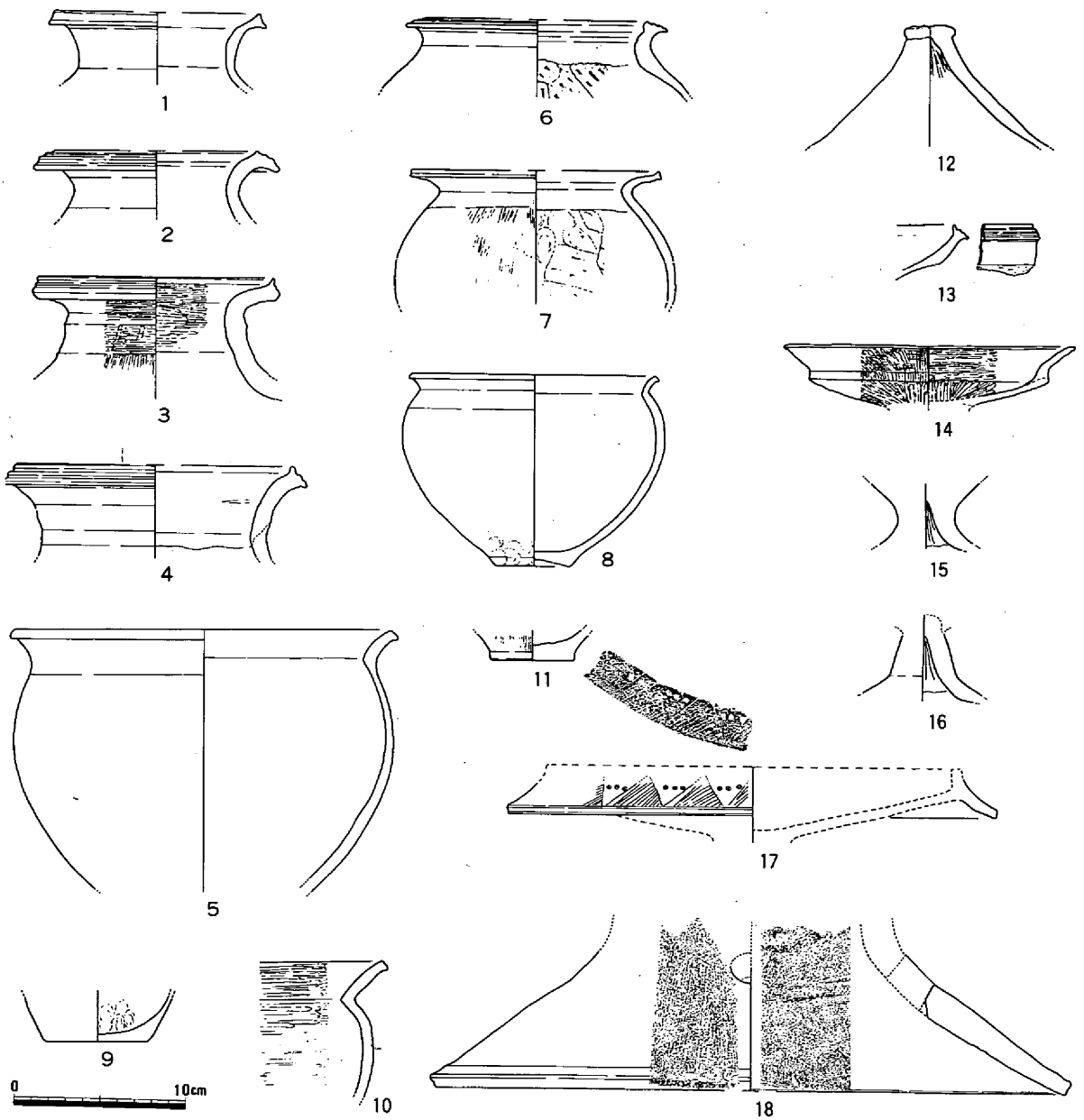
時期は、弥生時代中期後半と考えられる。

土壙－５（第７図）

側道北西角から検出し、最大幅90cm、深さ24cm、現存長260cmの土壙と考えられるが、溝の可能性もある。

土壙から、壷１～４、甕５～７・10、鉢８、高杯13～16、器台17・18、17は装飾高杯の可能性もある。これらの他に蓋12、甕・鉢の底部９・11などが出土している。これらはおおむね弥生時代後期前半に属するものと考えられる。

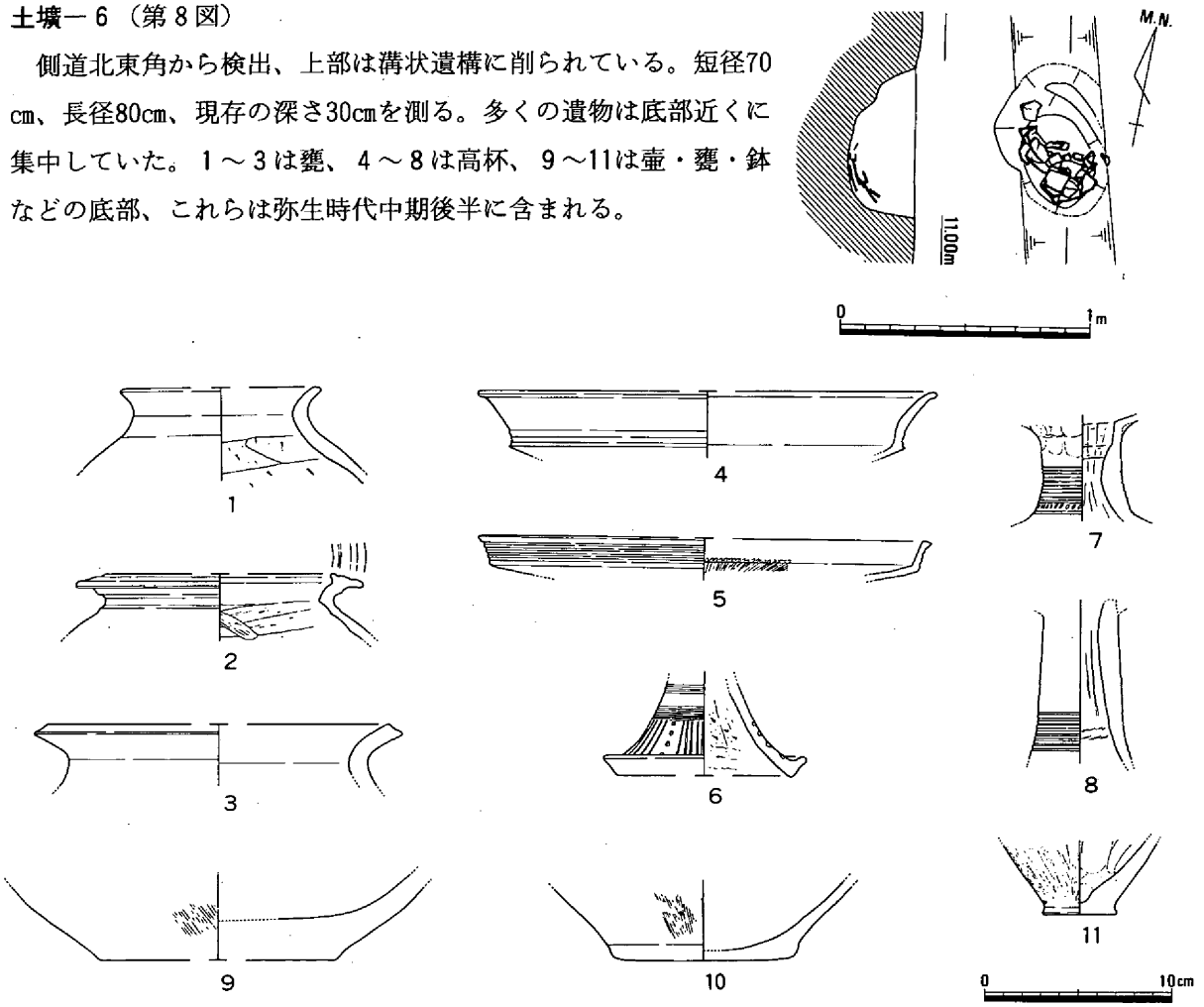




第７図　新屋敷遺跡側道土壙５平・断面図および出土遺物

土壙－６（第８図）

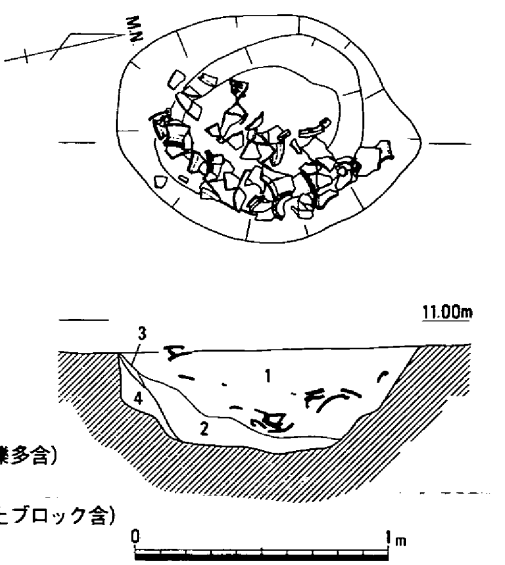
側道北東角から検出、上部は溝状遺構に削られている。短径70㎝、長径80㎝、現存の深さ30㎝を測る。多くの遺物は底部近くに集中していた。１～３は甕、４～８は高杯、９～11は壷・甕・鉢などの底部、これらは弥生時代中期後半に含まれる。



第８図　新屋敷遺跡土壙６平・断面図および出土遺物

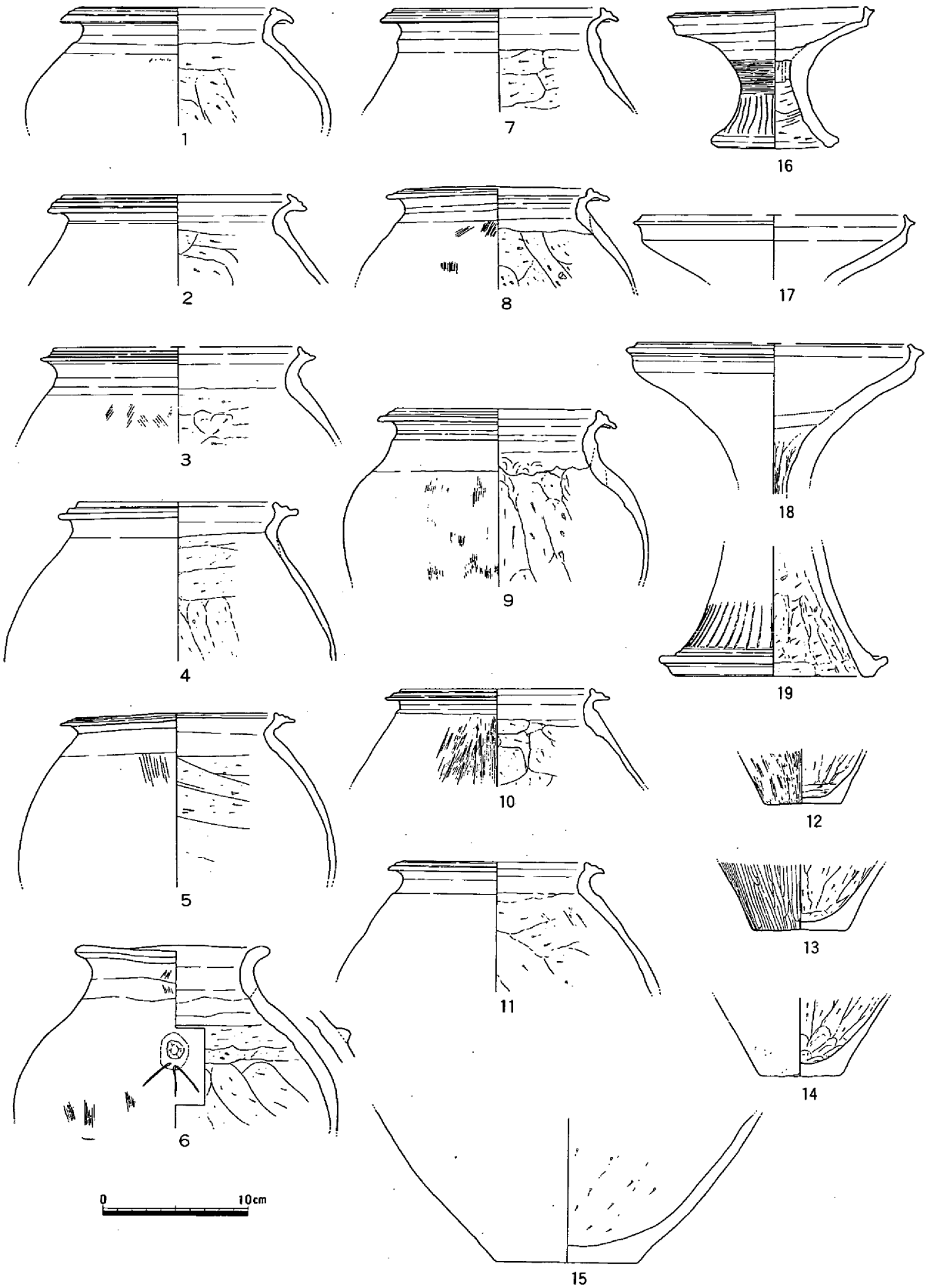
土壙－７（第９・10図）

側道中央付近から検出された土壙で、短径120㎝、長径160㎝、現存深さ54㎝の楕円形を呈する。土壙内からは、壷底部15をはじめ多くの甕１～14、高杯16～19が出土している。これらは土壙－６と同じ弥生時代中期後半に含まれる。

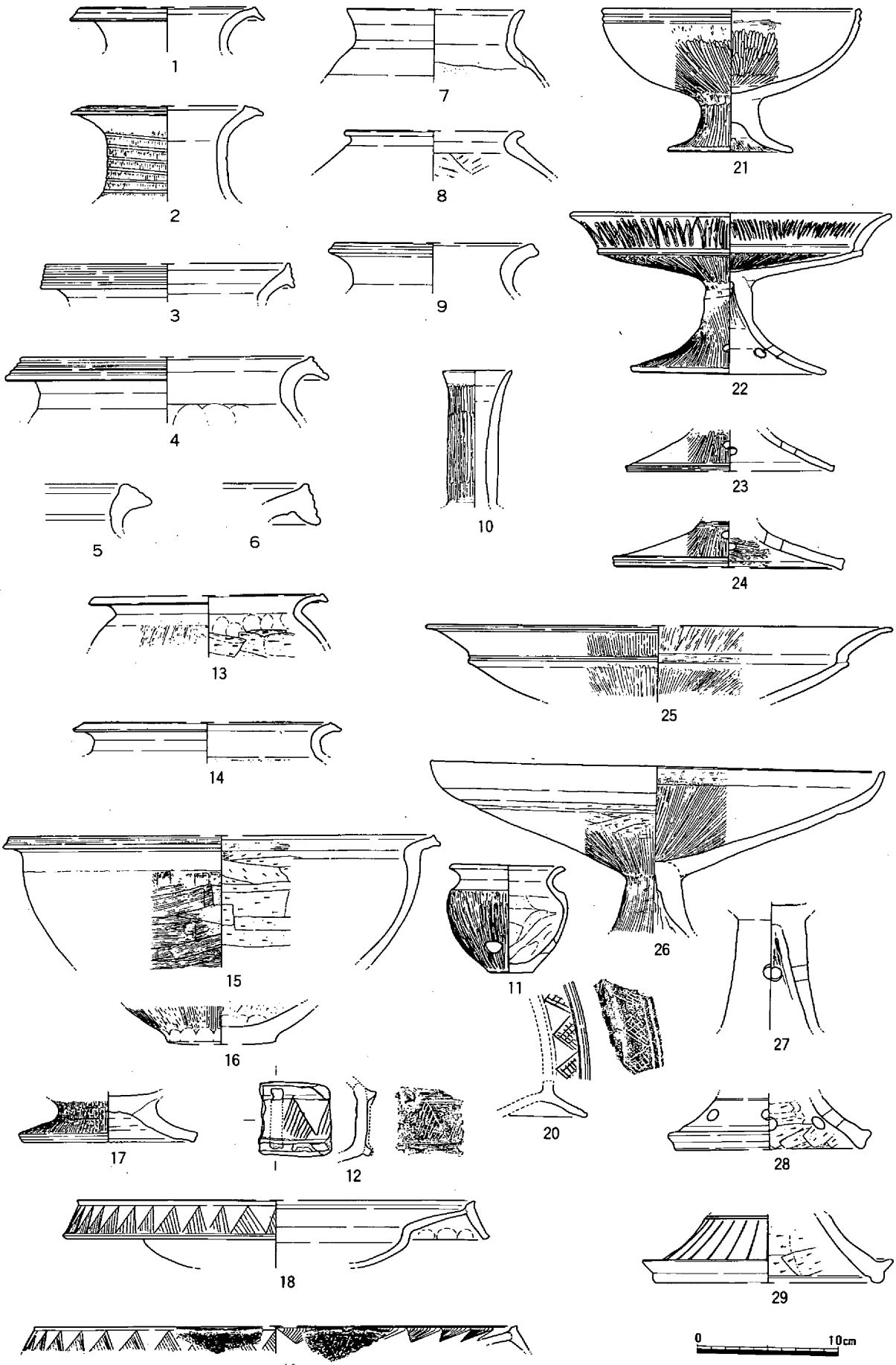


１．暗灰色粘土（2～6㎝大の礫多含）
２．暗灰色粘土
３．淡黄灰色粘土（暗灰色粘土ブロック含）
４．淡黄褐色粘土

第９図　新屋敷遺跡土壙７平・断面図



第10図　新屋敷遺跡土壙７出土遺物

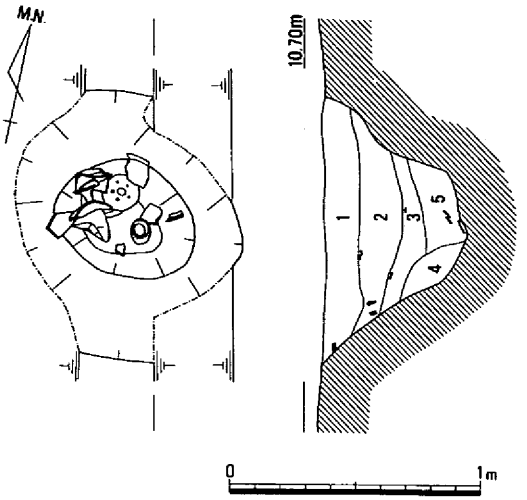


第11図　新屋敷遺跡橋脚10土壙８出土遺物

土壙－８（第11・12図）

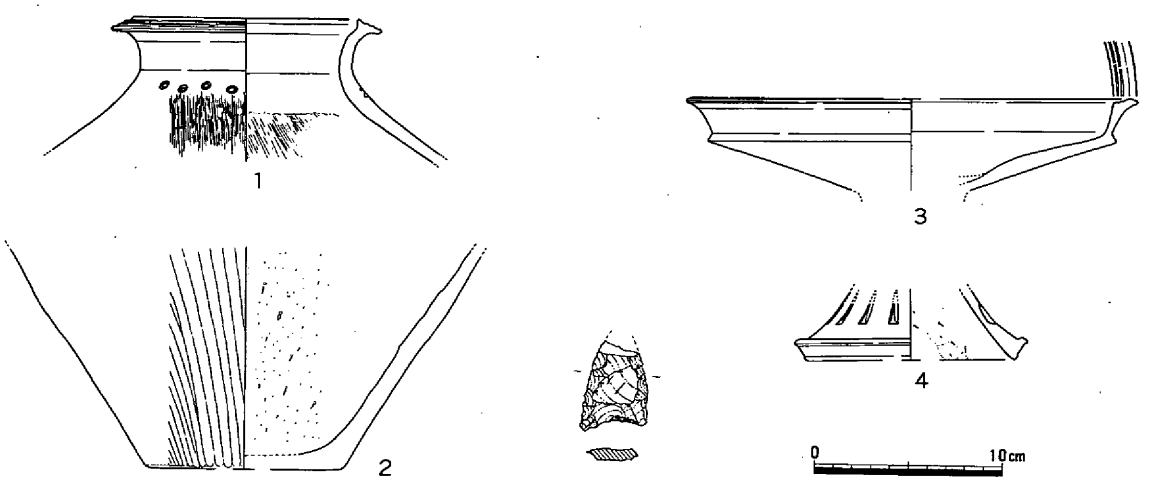
橋脚10の西側溝から検出し、直径140㎝程の土壙であるが、南北端以外の上面は不正確である。深さは80㎝程あり、これまでの土壙に比べ深くなっている。

出土遺物は、壷は１～12であるが、10は頚部が長くなり玉ねぎ形の体部をもつものと思われ、12は体部小片でであるが、二本の凸帯間に鋸歯文を持ち装飾壷の一種と考えられる。甕は13・14、鉢は15～17で、17は台脚をもつ。18～20は装飾高杯で口縁端部外面のみに鋸歯文をもつ18、内外面に鋸歯文をもつ19、鋸歯文様が斜格子状になる20などがある。高杯は21～29で、口縁部が内湾ぎみのもの21・26と外に大きく開くもの22・25の二種と、その大小がみられる。これらの土器からこの土壙は、弥生時代後期前半に含まれるものと思われる。（伊藤）

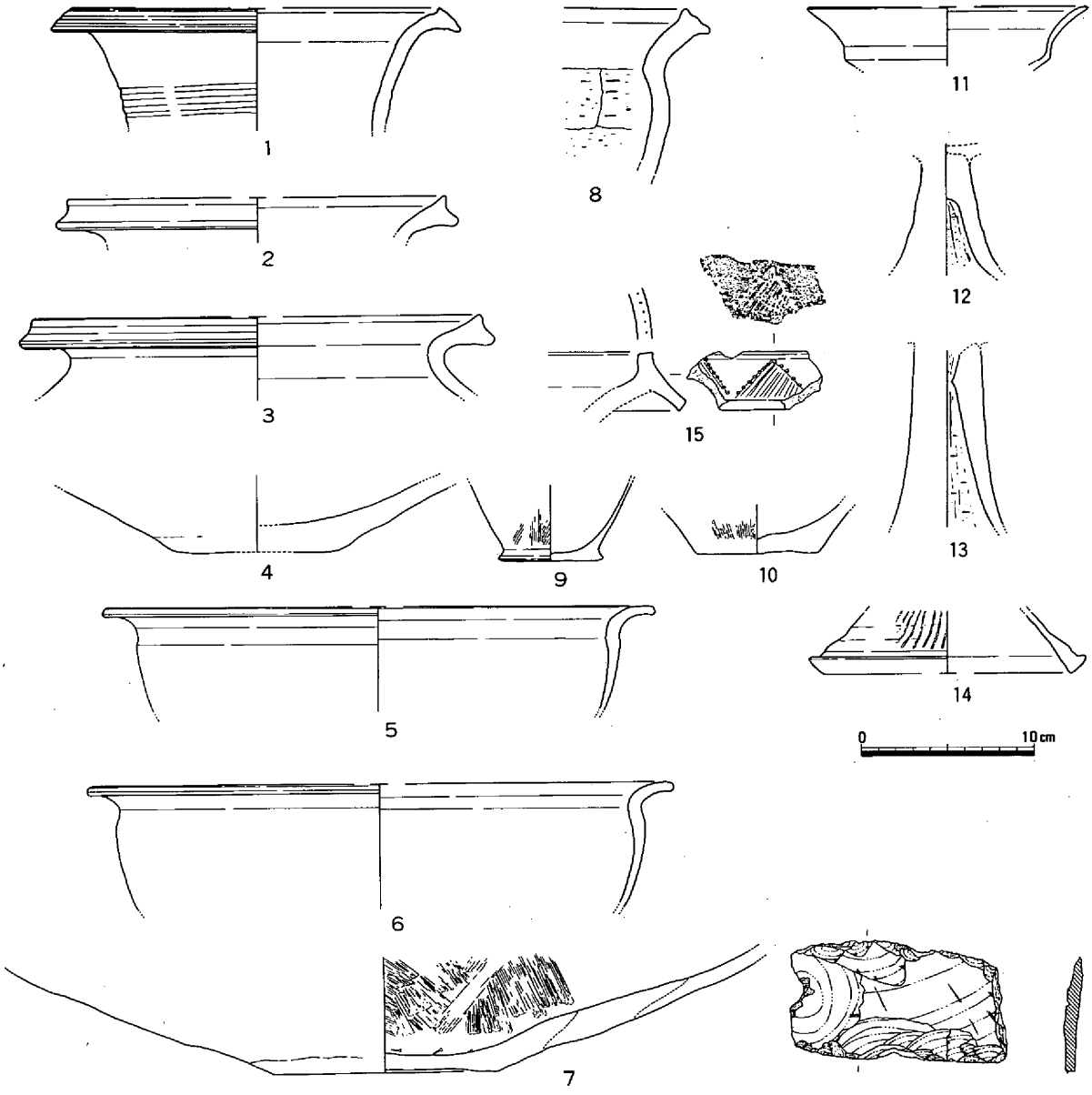


1．黒褐色粘性砂質土
2．黒褐色粘性砂質土（1よりやや明るい、黄褐色ブロック含）
3．暗褐色粘性砂質土
4．淡黄褐色粘質土（灰色ブロック含）
5．灰色粘質土
6．黄褐色粘質土（基盤層）

第12図　新屋敷遺跡橋脚10土壙８
平・断面図



第13図　新屋敷遺跡側道たわみ３（１，２）４（３，４）出土遺物

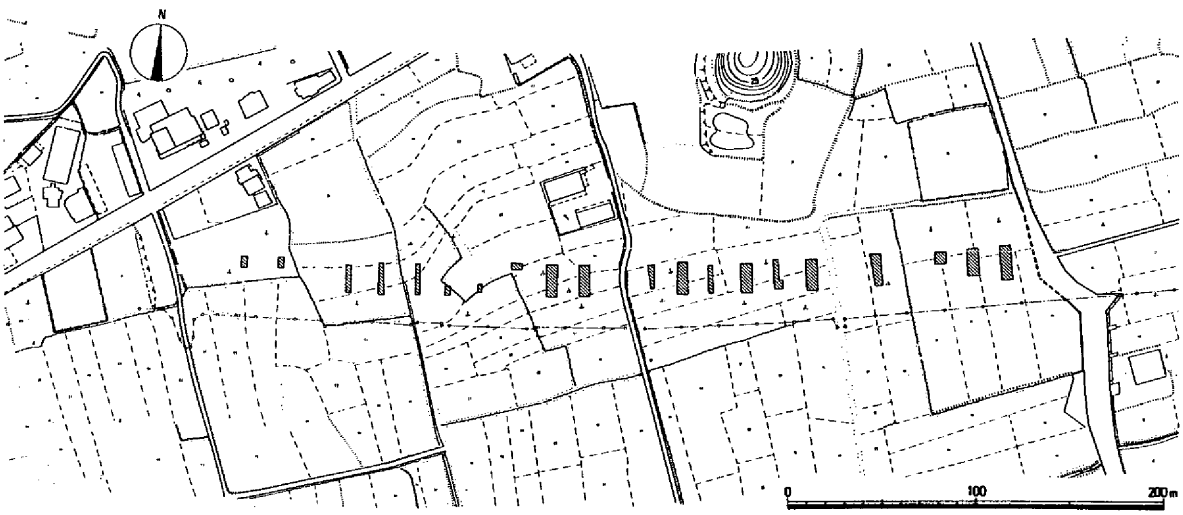


第14図　新屋敷遺跡側道たわみ２出土遺物

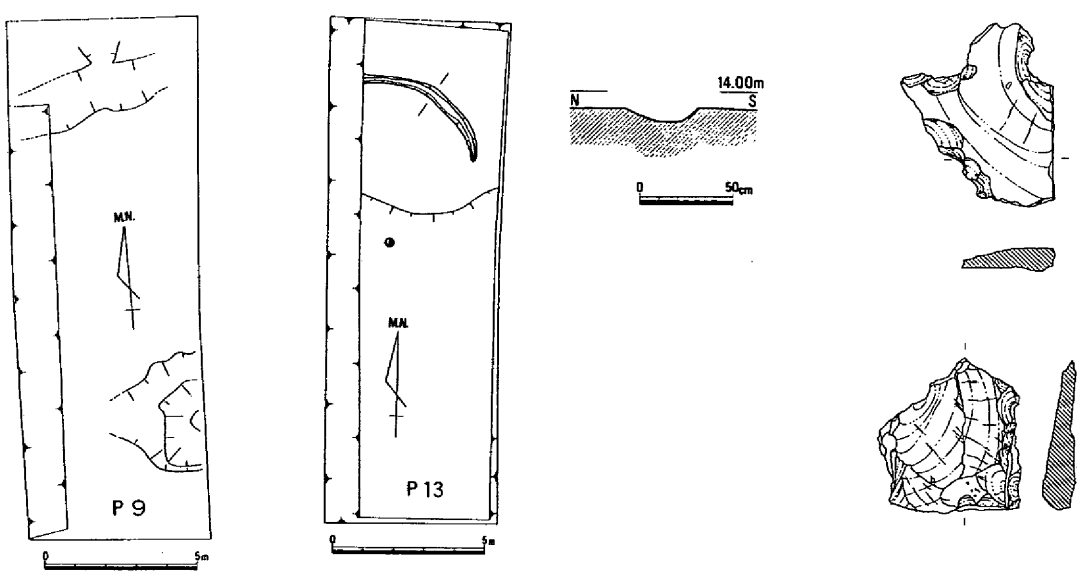
第３節　池新田遺跡

(1)　調査の経緯と概要

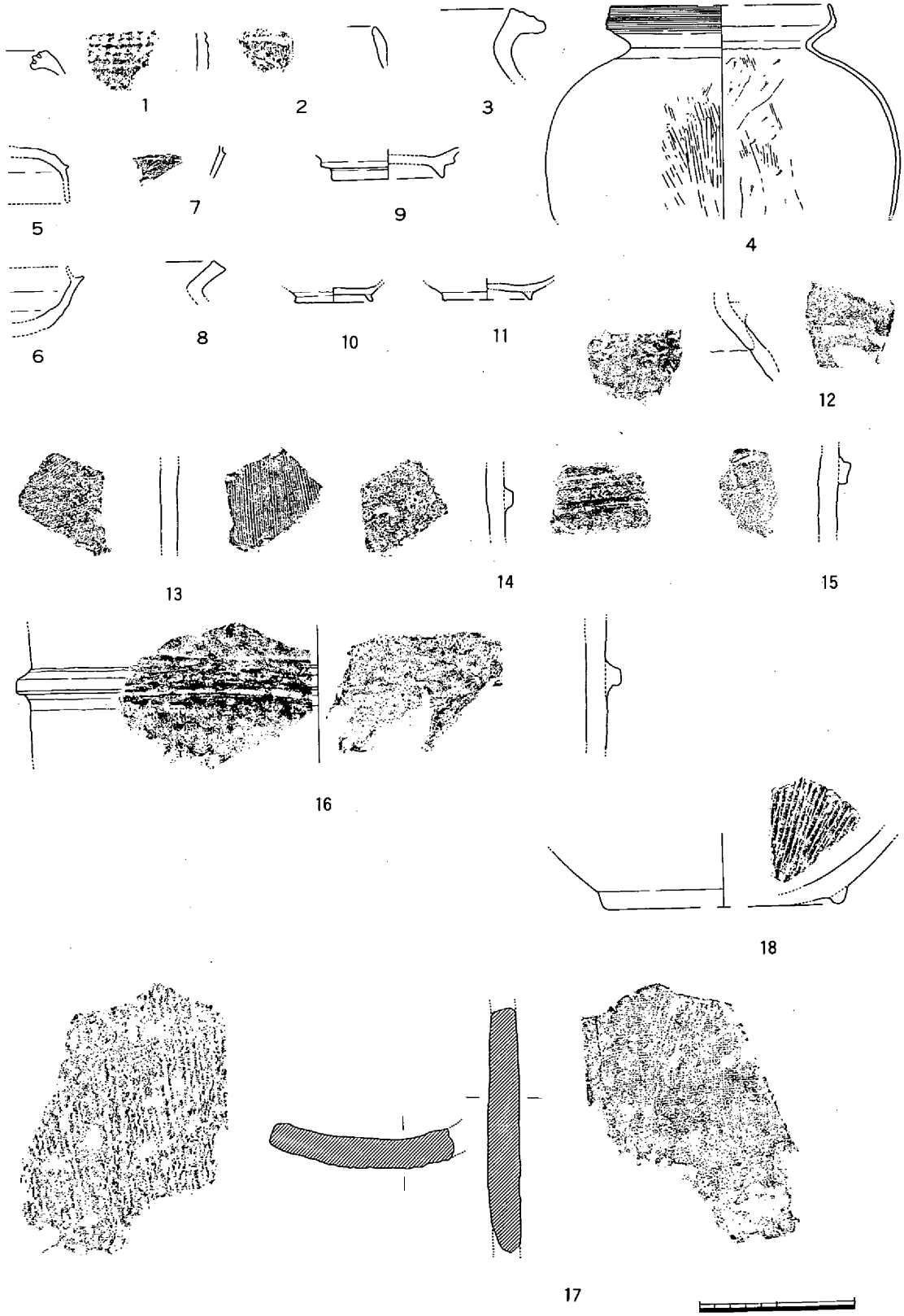
池新田遺跡は、山陽町穂崎に存し、新屋敷遺跡の東側、町道岩田・穂崎線から県道岡山吉井線までの約400ｍ間を調査対象とした。この遺跡についても、昭和59年度（1984）に県道岡山吉井線改良工事に伴って確認調査が行われ、昭和63年度（1988）に全面調査が行われた。この遺跡のすぐ北側には両宮山古墳の培塚の一つ全長60ｍの帆立貝式の墳形をもち周溝をめぐらす西森山古墳が存在している。山陽自動車道は県道岡山吉井線と平行して計画され、橋脚位置20ヶ所を調査したが、橋脚９・13などで時期不詳の溝状遺構、たわみ、土壙などがみられた位である。出土遺物についても、石器の剝片、埴輪片が採集された位でみるべきものはほとんどなかった。　（二宮・伊藤）



第15図　池新田遺跡調査位置図（Ｓ：1/4000）



第16図　池新田遺跡橋脚９・13および出土遺物（１）



第17図　池新田遺跡出土遺物（2）

1．新屋敷遺跡全景
（南西から）

2．新屋敷遺跡Ｐ－１
溝－１（西から）

3．新屋敷遺跡Ｐ－９
全景　（北から）

図版 2

1．P－9 土壙－18（北東から）

2．南側道 土壙－19（西から）・出土遺物

1．P－9 土壙－18（南から）・出土遺物

2．南側道 土壙－18（西から）

図版 4

新屋敷遺跡側道 土壙－ 7 出土遺物

新屋敷遺跡 P－10 土壙－ 8 出土遺物

図版 6

1．池新田遺跡Ｐ－９ 全景
（北から）

2．池新田遺跡Ｐ－13 全景
（西から）

3．池新田遺跡Ｐ－19
（北から）

馬屋遺跡

馬屋遺跡目次

1．第一次調査・調査区の概要…… 251
(1) 第一次調査の概要…… 251
(2) 調査区の概要…… 252
2．土盛部の調査…… 276
1）奈良時代より以前の遺構・遺物…… 276
(1) 河道－1…… 276
(2) 河道－2…… 277
2）奈良時代の遺構・遺物…… 279
(1) 掘立柱建物…… 279
(2) 柱穴列…… 285
(3) 溝…… 285
(4) 井戸…… 291
(5) 土器埋納遺構…… 291
(6) 土壙…… 293
(7) ピット…… 293
(8) たわみ…… 294
(9) 包含層の遺物…… 294
3）平安時代前半～中頃の遺構・遺物…… 298
(1) 掘立柱建物…… 298
(2) 溝…… 304
(3) 井戸…… 307
(4) 土壙…… 308
(5) たわみ…… 310
(6) ピット…… 310
4）平安時代末期～鎌倉時代初期の遺構・遺物…… 315
(1) 掘立柱建物…… 315
(2) 溝…… 337
(3) 土壙墓…… 346
(4) 土壙…… 348
(5) ピット…… 352
5）鎌倉時代以降の遺構・遺物…… 360
(1) 掘立柱建物…… 360
(2) 柱穴列…… 388
(3) 溝…… 389
(4) 井戸…… 390

(5) 土壙…… 393
(6) ピット…… 397
(7) たわみ…… 398
3．橋脚部の調査…… 408
1）奈良時代より以前の遺構・遺物…… 408
(1) たわみ…… 408
2）奈良時代の遺構・遺物…… 408
(1) 溝…… 408
(2) たわみ…… 412
3）平安時代から鎌倉時代の遺構・遺物…… 412
(1) 溝…… 412
4．ヤブレ塚…… 423
5．まとめ…… 424
掘立柱建物一覧…… 432
溝一覧表…… 434
井戸一覧表…… 436
土壙墓一覧表…… 436
土壙一覧表…… 437
土器観察表…… 439
黒色土器観察表…… 452
灰釉観察表…… 454
緑釉観察表…… 455
東播系土器観察表…… 457
瓦器観察表…… 459
輸入磁器観察表…… 464
土製品一覧表…… 469
軒丸瓦一覧表…… 470
軒平瓦一覧表…… 471
瓦類一覧表…… 472
金属器一覧表…… 475
銭貨一覧表…… 477
石器・石製品一覧表…… 477
木器・木製品樹種観察表…… 478
付載2　馬屋遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析…… 481
付載3　馬屋遺跡土壙墓－1出土の歯の鑑別…… 489
付載4　馬屋遺跡土壙墓－2出土人骨…… 492

馬屋遺跡挿図目次

第１図　馬屋遺跡（高月条里遺構）第１次調査トレンチ位置図（S：1/4000）および出土遺物…… 251
第２図　馬屋遺跡調査位置図…… 252
第３図　馬屋遺跡周辺の小字地籍図…… 253
第４図　馬屋遺跡土盛部遺構配置図（S：1/500）…… 255
第５図　馬屋遺跡土盛部分割図(1)…… 257
第６図　馬屋遺跡土盛部分割図(2)…… 258
第７図　馬屋遺跡土盛部分割図(3)…… 259
第８図　馬屋遺跡土盛部分割図(4)…… 260
第９図　馬屋遺跡土盛部分割図(5)…… 261
第10図　馬屋遺跡土盛部分割図(6)…… 262
第11図　馬屋遺跡土盛部分割図(7)…… 263
第12図　馬屋遺跡土盛部分割図(8)…… 264
第13図　馬屋遺跡土盛部分割図(9)…… 265
第14図　馬屋遺跡土盛部分割図(10)…… 266
第15図　馬屋遺跡橋脚部遺構配置図（S：1/500）…… 267
第16図　馬屋遺跡遺構配置図(11)…… 269
第17図　馬屋遺跡遺構配置図(12)…… 270
第18図　馬屋遺跡遺構配置図(13)…… 271
第19図　馬屋遺跡遺構配置図(14)…… 272
第20図　馬屋遺跡遺構配置図(15)…… 273
第21図　馬屋遺跡遺構配置図(16)…… 274
第22図　馬屋遺跡遺構配置図(17)…… 275
第23図　河道―１断面図…… 276
第24図　河道―２断面図…… 277
第25図　河道―２および奈良時代より以前の包含層出土遺物…… 278
第26図　建物―１平・断面図および出土遺物…… 279
第27図　建物―２平・断面図…… 280
第28図　建物―２柱穴断面図および出土遺物…… 281
第29図　建物―３平・断面および柱穴断面図…… 282
第30図　建物―４　柱穴列１、平・断面図…… 283
第31図　建物―４柱穴断面図・柱穴列略図…… 284
第32図　建物―４出土遺物…… 285
第33図　溝―１断面図…… 285
第34図　溝―１出土遺物(1)…… 286
第35図　溝―１出土遺物(2)…… 287
第36図　溝―２断面図…… 288
第37図　溝―３断面図…… 288
第38図　溝―２出土遺物…… 289
第39図　溝―４～７断面図…… 290
第40図　溝―８断面図および出土遺物…… 290
第41図　井戸―１平・断面図および井側材…… 291
第42図　土器埋納遺構平・断面図・和銅開珎出土状態および出土遺物…… 292
第43図　土壙―１平・断面図および出土遺物…… 293
第44図　ピット―１～４出土遺物…… 293
第45図　たわみ―１出土遺物…… 294
第46図　包含層出土の奈良時代の遺物(1)… 295
第47図　包含層出土の奈良時代の遺物(2)… 296
第48図　包含層出土の奈良時代の遺物(3)… 297
第49図　建物―５平・断面図、柱穴断面図および出土遺物…… 298
第50図　建物―６平・断面図、柱穴断面図および出土遺物…… 299
第51図　建物―７柱穴列２・３平・断面図および出土遺物…… 300
第52図　建物―７　柱穴列―２・３平面略図・柱穴断面図および出土遺物…… 301
第53図　建物―８平・断面図および出土遺物

…… 302
第54図　建物－９平・断面図および出土遺物
…… 303
第55図　溝－９断面図および出土遺物　… 304
第56図　溝－11断面図および溝－10・11出土遺物…… 304
第57図　溝－12断面図および出土遺物…… 304
第58図　溝－14断面図および出土遺物…… 305
第59図　溝－15断面図および出土遺物…… 306
第60図　溝－16断面図および出土遺物…… 306
第61図　溝－17断面図および出土遺物…… 306
第62図　井戸－２平・断面図および出土遺物
…… 307
第63図　土壙－２平・断面図および出土遺物
…… 308
第64図　土壙－３平・断面図および出土遺物
…… 308
第65図　土壙－４平・断面図および出土遺物
…… 308
第66図　土壙－５平・断面図…… 309
第67図　土壙－６平・断面図および出土遺物
…… 309
第68図　土壙－７平・断面図および出土遺物
…… 309
第69図　土壙－８平・断面図および出土遺物
…… 310
第70図　土壙－９平・断面図および出土遺物
…… 310
第71図　たわみ－２出土遺物…… 310
第72図　ピット－５平・断面図および出土遺物
…… 311
第73図　ピット－６平・断面図および出土遺物
…… 311
第74図　ピット－７～13出土遺物…… 311
第75図　包含層出土遺物（中段黒色土器、下段灰釉陶器）…… 312
第76図　遺構内および包含層出土緑釉陶器
…… 313
第77図　包含層出土輸入磁器…… 314
第78図　建物－10平・断面図および出土遺物
…… 315
第79図　建物－11平・断面、柱穴断面図… 316
第80図　建物－12平・断面図および出土遺物
…… 317
第81図　建物－13平面略図および柱穴断面図
…… 317
第82図　建物－13平・断面図…… 318
第83図　建物－14平面略図…… 318
第84図　建物－14柱穴列４・５平・断面図および出土遺物…… 319
第85図　建物－14　柱穴断面図および柱穴列５断面図…… 320
第86図　建物－15平・断面、柱穴断面図および出土遺物…… 321
第87図　建物－16平・断面図および柱穴断面図
…… 322
第88図　建物－16出土遺物…… 323
第89図　建物－17平・断面、柱穴断面図および出土遺物…… 324
第90図　建物－18　柱穴列－６・７平・断面図（S：1/80）…… 325
第91図　建物－18平面略図、柱穴断面図および出土遺物…… 326
第92図　柱穴列－６・７断面図および柱穴列－６出土遺物…… 326
第93図　建物－19平・断面図（S：1/100）
…… 327
第94図　建物－19　ピット－12平・断面図および柱穴断面図…… 328
第95図　建物－19出土遺物…… 329
第96図　建物－20平・断面図…… 330
第97図　建物－20柱穴断面図および出土遺物
…… 331
第98図　建物－21平・断面図…… 333
第99図　建物－21柱穴断面図および出土遺物
…… 334

第 100図　建物—22平・断面・柱穴断面図および出土遺物…… 335
第 101図　建物—23平・断面、柱穴断面図および出土遺物…… 335
第 102図　建物—25平・断面図および出土遺物…… 336
第 103図　柱穴列— 8 平・断面図および出土遺物…… 336
第 104図　溝—18断面図…… 337
第 105図　溝—18出土遺物…… 338
第 106図　溝—19と20との関係断面図…… 338
第 107図　溝—19断面図および出土遺物(1)…… 339
第 108図　溝—19出土遺物(2)…… 340
第 109図　溝—19・20断面図および溝—20出土遺物(1)…… 341
第 110図　溝—20出土遺物(2)…… 342
第 111図　溝—20出土遺物(3)…… 343
第 112図　溝—21～23断面図および出土遺物…… 344
第 113図　溝—20・21出土遺物…… 345
第 114図　溝—24・25断面図および出土遺物…… 345
第 115図　溝—26・27断面図および出土遺物…… 345
第 116図　土壙墓— 1 平・断面図および出土遺物…… 346
第 117図　土壙墓— 2 平・断面図および出土遺物…… 347
第 118図　土壙—10平・断面図および出土遺物…… 348
第 119図　土壙—11平・断面図…… 348
第 120図　土壙—11出土遺物…… 349
第 121図　土壙—12平・断面図および出土遺物…… 350
第 122図　土壙—13平・断面図および出土遺物…… 350
第 123図　土壙—14平・断面図および出土遺物…… 350
第 124図　土壙—15平・断面図および出土遺物…… 351
第 125図　土壙—16平・断面図…… 351
第 126図　土壙—16出土遺物…… 352
第 127図　ピット—14平・断面図および出土遺物…… 353
第 128図　ピット—15平・断面図および出土遺物…… 353
第 129図　ピット—16～27出土遺物…… 354
第 130図　河道— 1 上層包含層出土遺物… 355
第 131図　河道— 2 上層包含層出土遺物(1)…… 356
第 132図　河道— 2 上層包含層出土遺物(2)…… 357
第 133図　土盛部包含層出土遺物…… 358
第 134図　包含層出土東播系土器…… 359
第 135図　建物—25平・断面、柱穴断面図…… 360
第 136図　建物—25平面略図…… 361
第 137図　建物—26平・断面、柱穴断面図および出土遺物…… 362
第 138図　建物—27平・断面図および出土遺物…… 363
第 139図　建物—28平・断面図…… 364
第 140図　建物—29平・断面図…… 364
第 141図　建物—30平・断面図および出土遺物…… 365
第 142図　建物—31平・断面図および出土遺物…… 366
第 143図　建物—32平・断面、柱穴断面図および出土遺物…… 367
第 144図　建物—33平・断面、柱穴断面図および出土遺物…… 368
第 145図　建物—34平・断面、柱穴断面図および出土遺物…… 369
第 146図　建物—35平・断面、柱穴断面図および出土遺物…… 370

第 147図　建物—36平・断面図および柱穴断面図…… 371
第 148図　建物—37平・断面図および柱穴断面図…… 372
第 149図　建物—38平・断面図および柱穴断面図…… 373
第 150図　建物—39平・断面図…… 374
第 151図　建物—40平・断面図および出土遺物…… 374
第 152図　建物—40平面略図…… 375
第 153図　建物—41平・断面、柱穴断面図および出土遺物…… 375
第 154図　建物—42平・断面図および出土遺物…… 376
第 155図　建物—43平・断面図…… 376
第 156図　建物—44平・断面図および出土遺物…… 377
第 157図　建物—45平・断面図…… 378
第 158図　建物—45平面、柱穴断面図および出土遺物…… 379
第 159図　建物—46平・断面図…… 380
第 160図　建物—47平・断面図および出土遺物…… 381
第 161図　建物—47柱穴断面図…… 382
第 162図　建物—48平・断面図および出土遺物…… 383
第 163図　建物—49平・断面図および柱穴断面図…… 384
第 164図　建物—50平・断面、柱穴断面図および出土遺物…… 385
第 165図　建物—51平・断面、柱穴断面図および出土遺物…… 386
第 166図　建物—52平・断面図および出土遺物…… 387
第 167図　建物—53平・断面図…… 387
第 168図　柱穴列— 9 ～11平・断面図…… 388
第 169図　溝—28断面図および出土遺物… 389
第 170図　溝—29・30断面図および出土遺物…… 389
第 171図　井戸— 3 平・断面図および出土遺物…… 390
第 172図　井戸— 4 平・断面図および出土遺物…… 391
第 173図　井戸— 5 平・断面図および出土遺物…… 392
第 174図　土壙—17平・断面図および出土遺物…… 393
第 175図　土壙—18平・断面図および出土遺物…… 393
第 176図　土壙—19平・断面図および出土遺物…… 394
第 177図　土壙—20平・断面図および出土遺物…… 394
第 178図　土壙—21平・断面図および出土遺物…… 395
第 179図　土壙—22平・断面図および出土遺物…… 395
第 180図　土壙—23・24平・断面図および出土遺物…… 396
第 181図　ピット—21平・断面図および出土遺物…… 397
第 182図　ピット—22・23平・断面図および出土遺物…… 397
第 183図　たわみ— 3 平・断面図および出土遺物…… 398
第 184図　たわみ— 4 出土遺物…… 398
第 185図　包含層出土遺物(1)…… 399
第 186図　包含層出土遺物(2)…… 400
第 187図　包含層出土遺物(3)…… 401
第 188図　包含層出土遺物(4)（瓦器）…… 402
第 189図　包含層出土遺物(5)（輸入磁器）…… 403
第 190図　土盛部遺構および包含層出土遺物(6)（土製品）…… 404
第 191図　遺構出土鉄器…… 404
第 192図　包含層出土鉄器…… 405

第 193図　遺構出土石製品…… 406
第 194図　包含層出土石製品（1/3）… 407
第 195図　たわみ－1出土遺物…… 408
第 196図　溝－1断面図および溝－1・2出土遺物…… 408
第 197図　橋脚－9、溝－3・4出土遺物…… 409
第 198図　橋脚－2～3北側道、たわみ－2出土遺物…… 410
第 199図　橋脚－3、溝－2出土遺物…… 411
第 200図　橋脚－8～9北側道、溝－5断面図および出土遺物…… 412
第 201図　橋脚－6～7、溝－4出土遺物…… 413
第 202図　橋脚－12、溝－7断面図および出土遺物…… 413
第 203図　橋脚－9、溝－8平・断面図および出土遺物…… 414
第 204図　橋脚部包含層出土遺物(1)…… 415
第 205図　橋脚部包含層出土遺物(2)…… 416
第 206図　橋脚部包含層出土　奈良時代の軒丸瓦…… 417
第 207図　橋脚部包含層出土　奈良時代の軒平瓦…… 418
第 208図　橋脚部包含層・暗渠出土軒丸瓦・丸瓦…… 419
第 209図　橋脚部包含層・暗渠出土　平安時代から鎌倉時代の軒平瓦…… 420
第 210図　橋脚部包含層出土　平安時代から鎌倉時代の平瓦…… 421
第 211図　橋脚部・遺構出土鉄器・砥石・すり石…… 422
第 212図　ヤブレ塚トレンチ配置図…… 423
第 213図　奈良時代建物配置図（S:1/800）…… 424
第 214図　平安時代前期～中期建物配置図（S:1/800）…… 425
第 215図　平安時代末期～鎌倉時代前期建物配置図（S:1/800）…… 426
第 216図　鎌倉時代中期以降建物配置図（S:1/800）…… 428
第 217図　建物平面構造概念図…… 429
第 218図　備前国分僧寺伽藍想定並びに関連遺構図（S:1/2500）…… 430

馬屋遺跡図版目次

図版 1－1　馬屋遺跡遠景（西から）
2　馬屋遺跡遠景（東から）
図版 2－1　河道－1（西から）
2　河道－2（西から）
3　河道－2出土遺物
図版 3－1　奈良時代建物群（西から）
2　奈良時代建物群（南から）
図版 4－1　建物－1（北から）
2　建物－1（西から）
3　建物－2（北から）
図版 5－1　建物－3（東から）
2　建物－3（北から）
3　建物－4（東から）
図版 6　溝－1出土遺物
図版 7－1　溝－2出土遺物
2　井戸－1（東から）
図版 8－1　土器埋納遺構検出状況（南から）
2　内部検出状況
3　土器取り上げ後の状況
4　和銅開珎出土状況
図版 9　土器埋納遺構出土遺物
図版10　包含層出土奈良時代の軒丸瓦・軒平瓦
図版11－1　建物－5（西から）

2　建物－6（北から）
図版12－1　建物－7・柱穴列－3（東から）
2　建物－7・柱穴列－3（北から）
図版13－1　井戸－1（北から）
2　溝－11・12他、井戸－2出土遺物
図版14－1　建物－45（北から）
2　建物－47（北から）
3　GH－10～12区全景（東から）
図版15－1　D～F－14～16区全景（東から）
2　建物－18（西から）
3　建物－18出土遺物
図版16－1　建物－21（東から）
2　建物－19ピット－12遺物出土状況
3　建物－19出土遺物
4　建物－20（東から）
図版17－1　溝－18検出状況（東から）
2　溝－18出土遺物
図版18　溝－20出土遺物(1)
図版19　溝－20出土遺物(2)
図版20－1　土壙墓－1（北から）
2　土壙墓－2（北から）
3　土壙墓－3（東から）
図版21－1　土壙墓－2遺物出土状況
2　土壙墓－2出土遺物
図版22－1　土壙－11検出状況（西から）
2　土壙－11出土瓦
図版23－1　土壙－16（西から）
2　土壙－16出土遺物
図版24　河道－2上層出土遺物
図版25－1　AB－3・4区全景（北から）
2　建物－25・26（西から）
3　建物－27（東から）
図版26－1　建物－28・30（東から）
2　建物－29（南から）
3　建物－33・34（北から）
図版27－1　建物－36（東から）
2　建物－37（北から）
3　建物－45（北から）
図版28－1　建物－48（東から）
2　建物－50（東から）
3　建物－51（北から）
図版29－1　井戸－4（北から）
2　井戸－5（南から）
3　井戸－5出土遺物
図版30－1　橋脚－3北側道（南から）
2　橋脚－3（北から）
3　橋脚－3（南から）
図版31－1　橋脚－5（南から）
2　橋脚－6（南から）
3　橋脚－7（南から）
図版32－1　橋脚－8（南から）
2　橋脚－8（東から）
3　橋脚－8、溝－5・6（東から）
図版33－1　橋脚－9北側道、溝－8（南から）
2　橋脚－9北側道、溝－8（南から）
3　橋脚－9、溝－4（南から）
図版34－1　橋脚－9北側道（南から）
2　橋脚－9～10南側道溝－3・4（南から）
3　橋脚－14鍬痕・土壙群（南から）
図版35　橋脚部出土遺物
図版36　橋脚部包含層出土遺物

第4節　馬屋遺跡

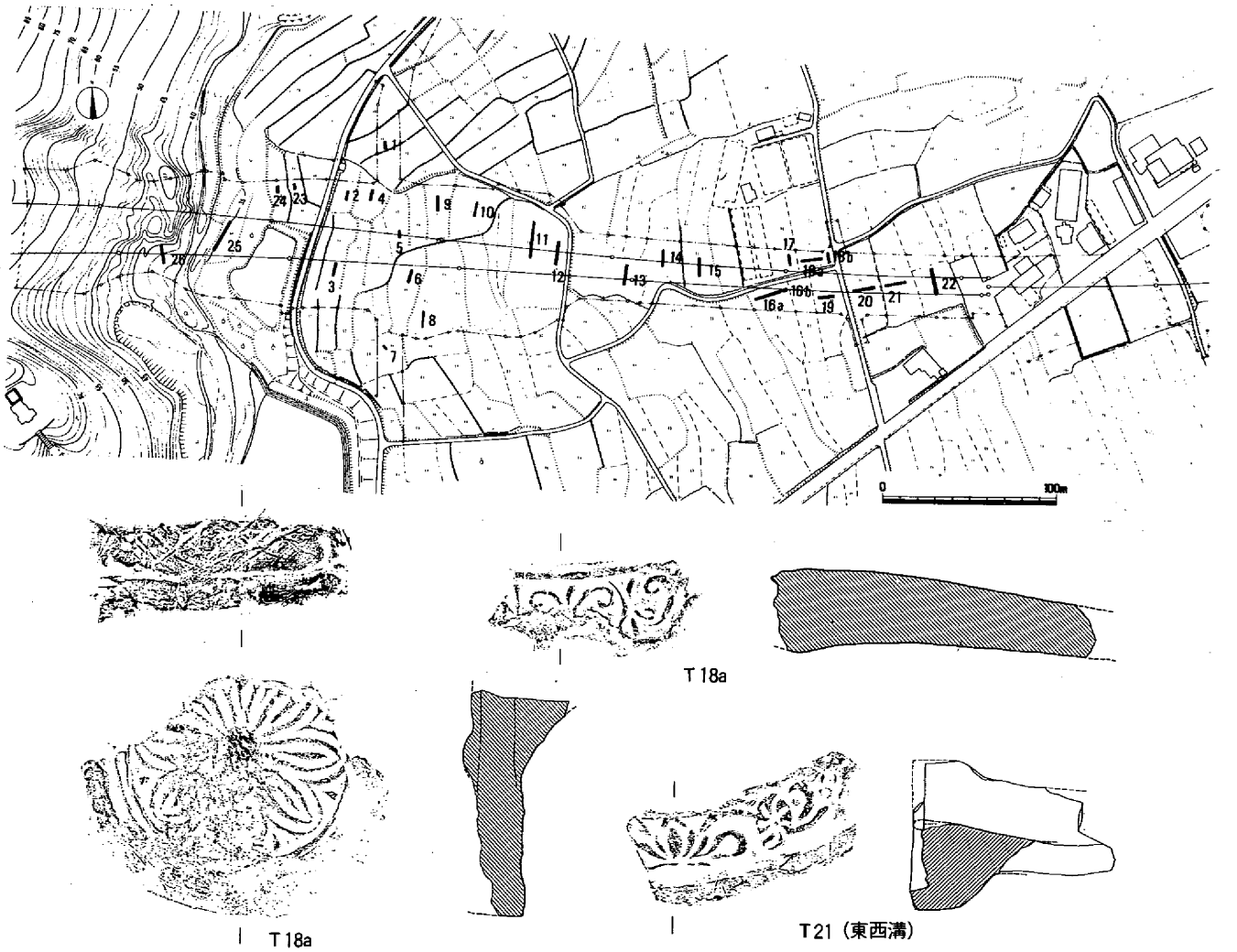
1．第一次調査・調査区の概要

(1)　第一次調査の概要（第1図）

1991年5月30日から6月19日にかけて、馬屋トンネルの開口部から主要地方道岡山・吉井線の間の山陽自動車道路線内に、28本のトレンチを設定した。

馬屋トンネルの開口部から町道馬屋・和田線の間、T—23～26では、表土直下で地山層を確認し、遺構・遺物ともに認められなかった。また、一次調査トレンチの最北端に位置し、町道馬屋・和田線の付け替え部にあたるT—1では、丘陵の下がりを確認したが、遺構・包含層は認められなかった。そのほかのトレンチ（T—2～22）では、灰褐色ないし褐灰色の包含層や柱穴・溝などの遺構、および古代から中世にかけての多量の瓦・土器などが認められた。この結果、町道馬屋・和田線から主要県道岡山・吉井線の間の、本線敷土盛部・橋脚部・側道部・町道付け替え部南側の用地について全面調査を実施することとなった。

また、馬屋トンネル開口部付近に、「ヤブレ塚」と呼称される場所が存在するという地元住民の話か



第1図　馬屋遺跡（高月条里遺構）第1次調査トレンチ位置図（S：1/4,000）および出土遺物

ら、該当場所を踏査したところ、天井石のない横穴式石室状の遺構が認められた。よって、「ヤブレ塚」周辺もあわせて調査することとした。　（横山）

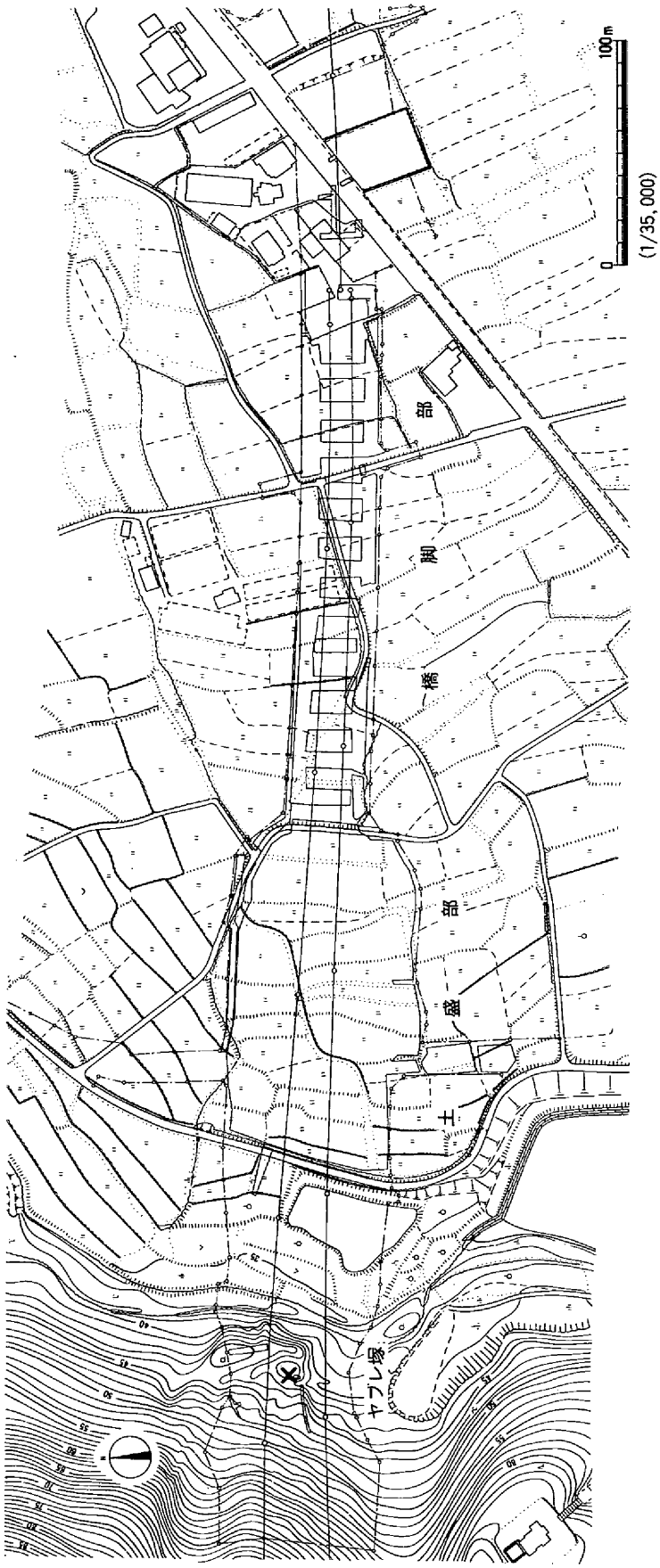
(2)　調査区の概要（第２図）

山陽自動車道は、赤磐郡山陽町馬屋地区においては、備前国分僧寺跡の南西角から50～60ｍ程しか離れておらず、また、備前国分尼寺の北側約300ｍの所を横断する設計であった。

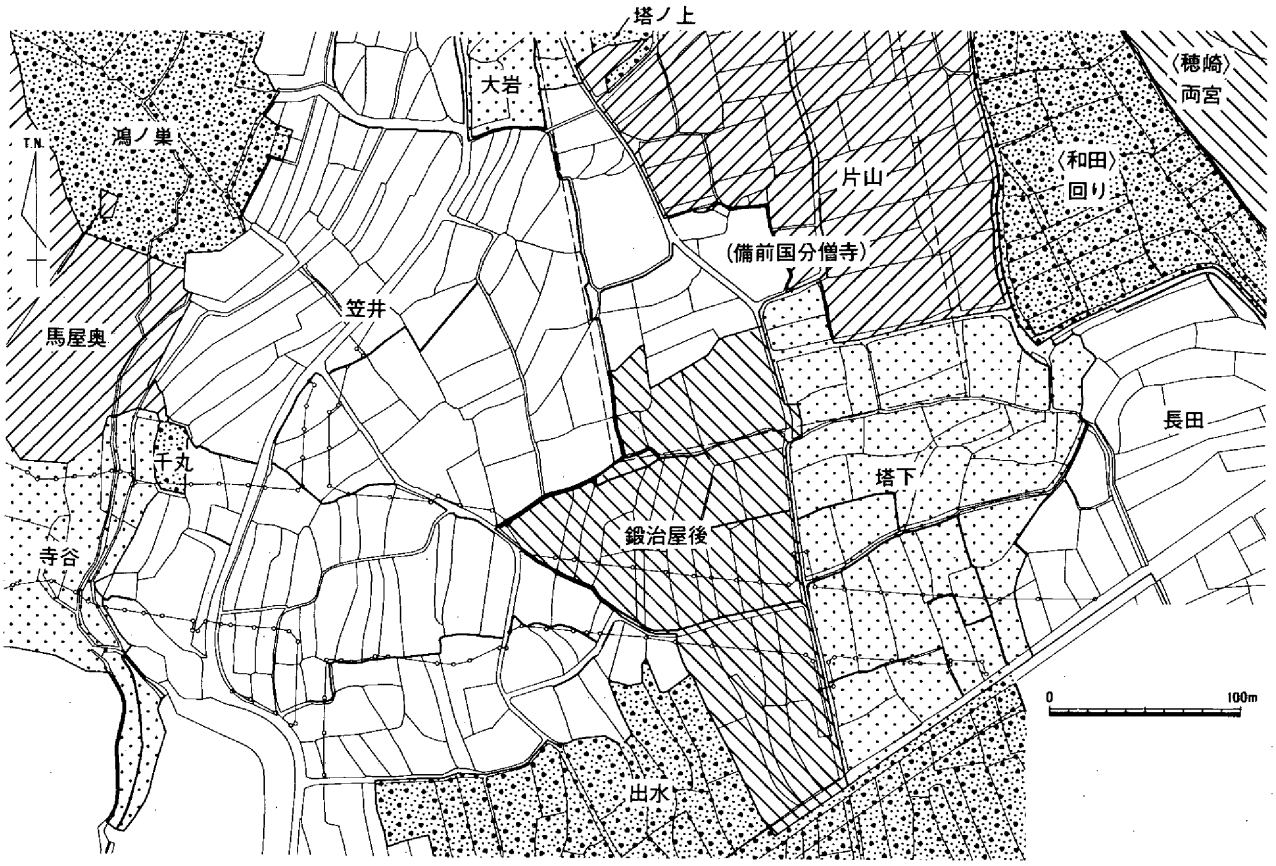
馬屋地区においての既存の調査は、昭和59年度に備前国分寺跡の確認調査が行われており[1]また、昭和63年県道岡山吉井線の拡幅工事に伴い岡山市境から備前国分僧寺南側までの約1.1㎞の範囲の確認調査が行われ、奈良時代に含まれる柱穴、溝、土壙などが検出されている[2]。その後、同工事により、平成元年度に馬屋出水遺跡・馬屋長田遺跡の調査が行われ掘建柱建物２、溝状遺構、柱穴多数、道路側溝（古代？）と思われる遺構などが検出されている[3]。そして、この馬屋地区は、分布調査時点においても高月条里制遺構としてくくられていた。

山陽自動車道は、県道岡山－吉井線と交差する部分から西350ｍほどは高架部、さらに馬屋トンネルまでの300ｍほどが盛土部となり、両側に側道（工事用道路）が取り付く計画であった。道路範囲全面にわたって平成３年５月から第一次の確認調査を行い、この結果、奈良時代から鎌倉・室町時代の遺構・遺物が確認され、約２万㎡を調査対象とした。

平成３年度は７月から全面調査を開始し、橋脚部西側の南側工事用道路から始め、盛土部、町道付け変え部



第２図　馬屋遺跡調査位置図



第３図　馬屋遺跡周辺の小字地籍図

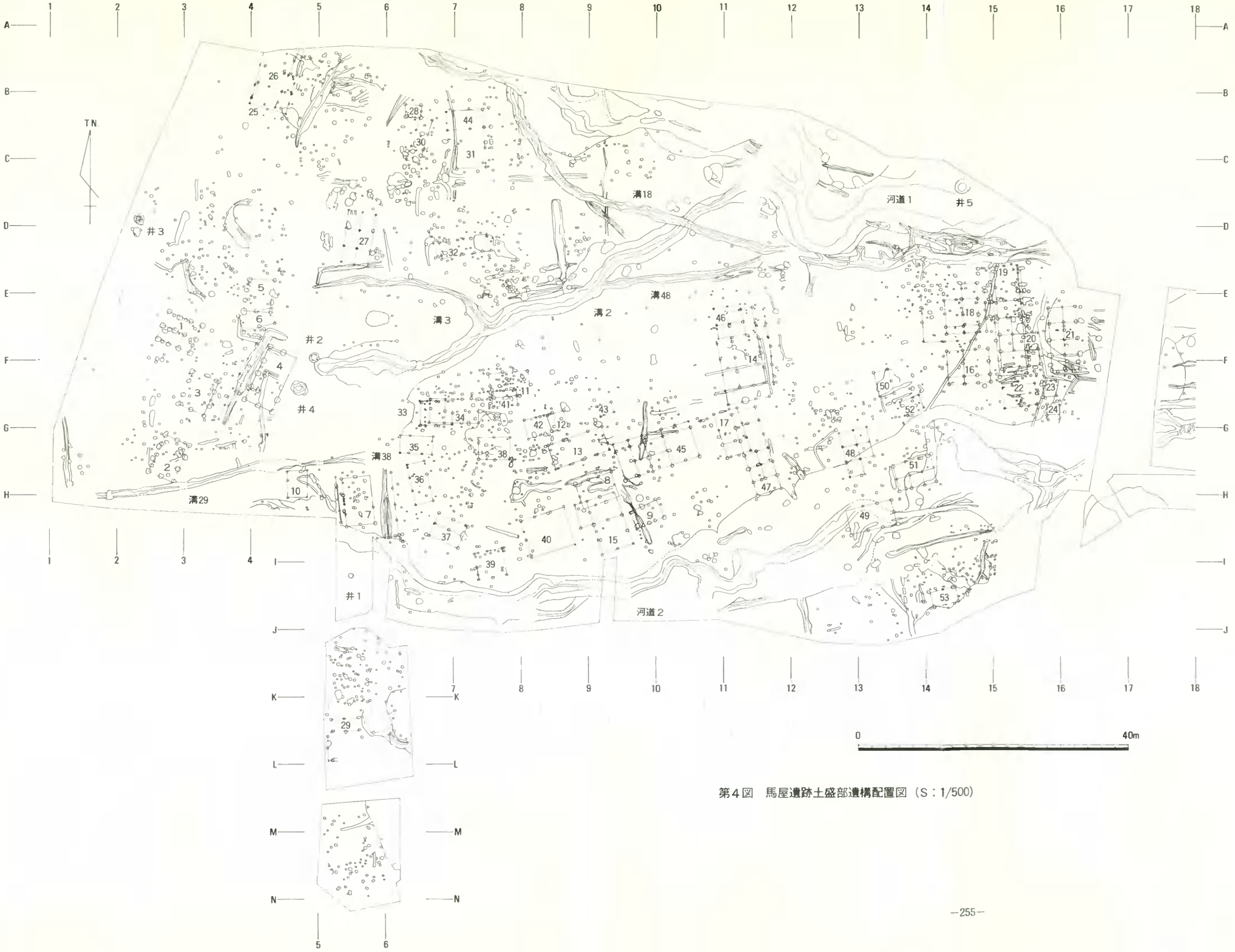
11,185㎡の調査を行い、平成４年度において、土盛部・橋脚部および南北側道の残り部分8,945㎡の調査を行った。

土盛部は、西の竜王山（212m）から東に階段状にさがる水田となり西端で標高約28m、東端部で約17mとなる。

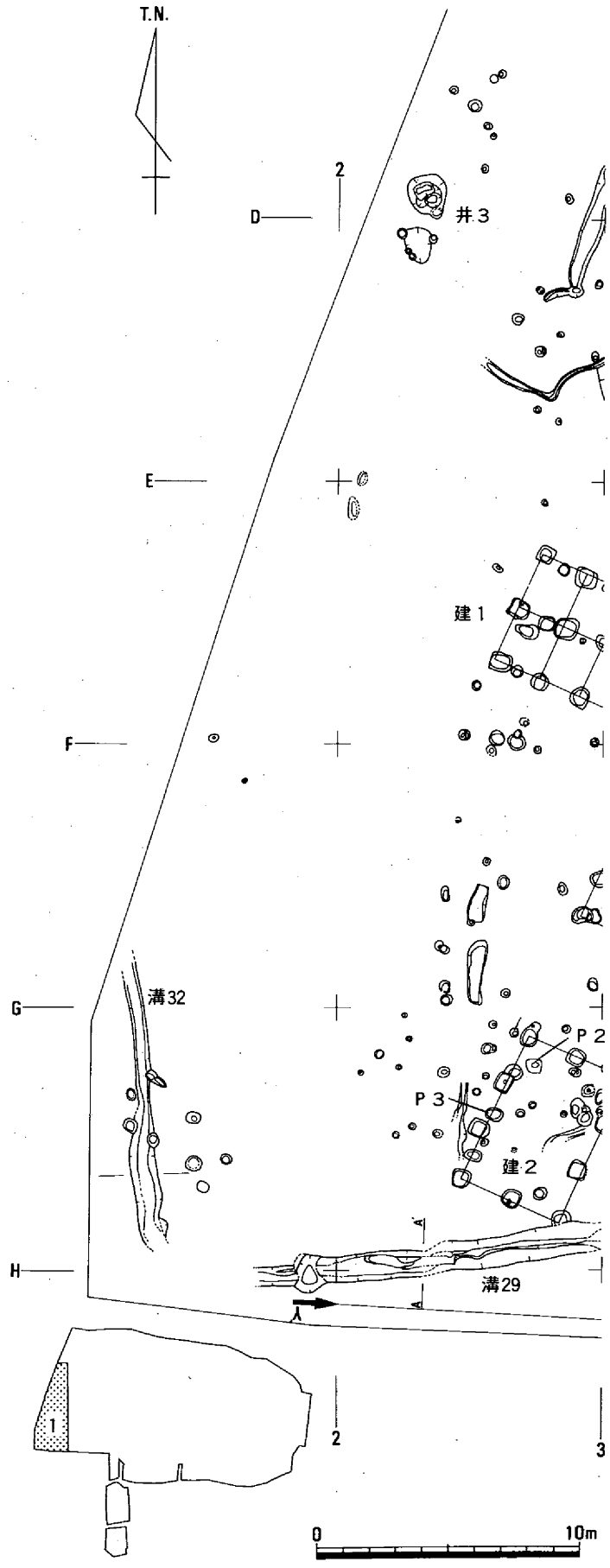
橋脚部は、馬屋片山に通じる南北にのびる町道まではほとんど水平に近いが、町道から県道岡山吉井線までの間は１m近く低く、東に、さらに南に下っていっている。

用地内のほとんどは、大字馬屋地区に入り、小字は土盛部のほとんどが笠井、橋脚部は南北農道までが笠井の一部と、鍛冶屋後、農道以東は塔の下、長田からなる（第３図）。備前国分僧寺との関係では、塔址と考えられる所から150mほど離れているが、塔下となり、鍛冶屋後も国分寺と何らかの関係を持った小字名と考えられる。　（伊藤）

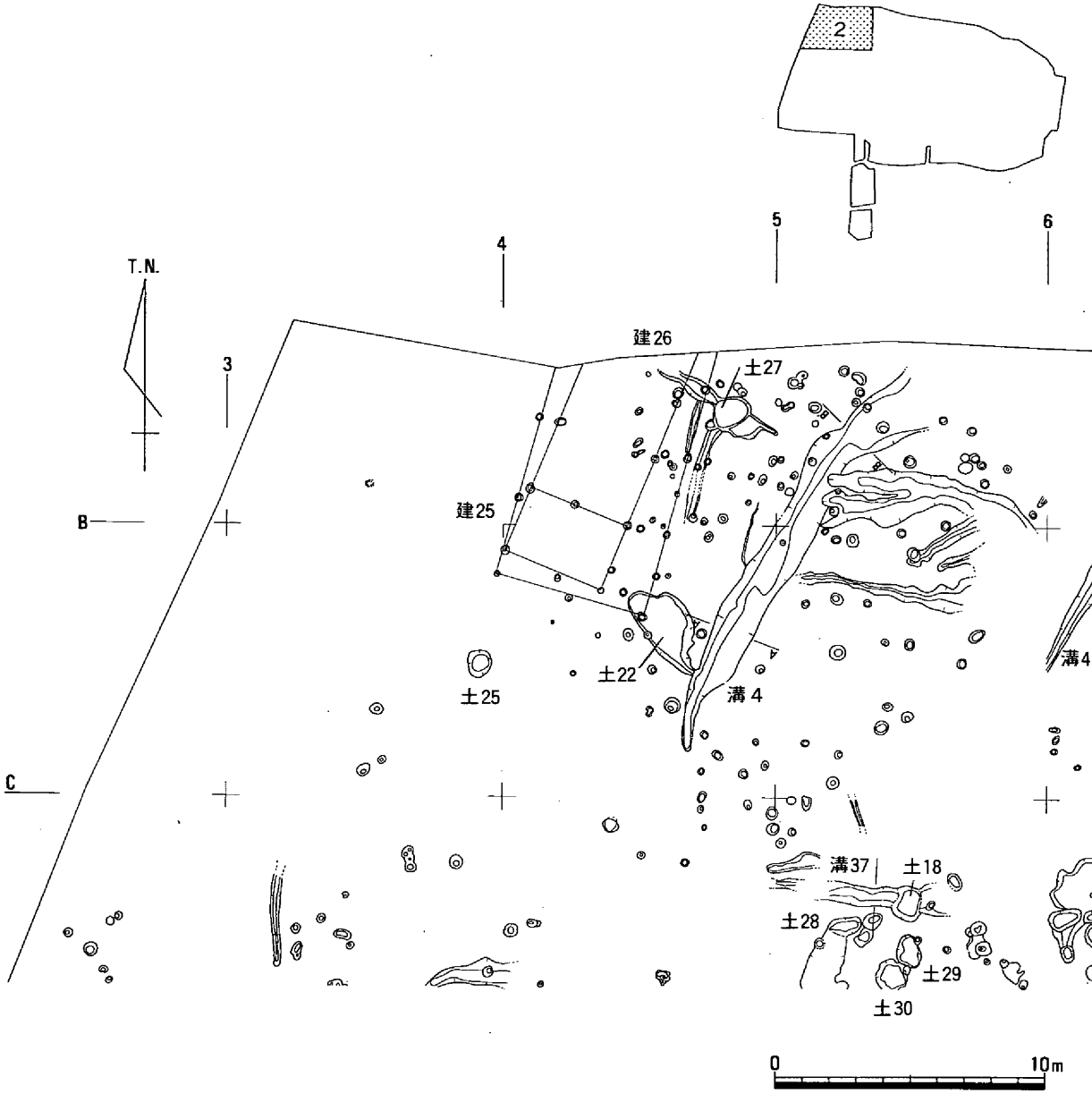
註－１　備前国分僧寺調査委員会『備前国分寺跡緊急発掘調査概要』岡山県教育委員会　1951
２　井上弘「池新田・新屋敷遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』19．1989
３　宇垣匡雅「山陽町馬屋地区確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』19．1989
椿真治「馬屋森向遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財報告』20．1990



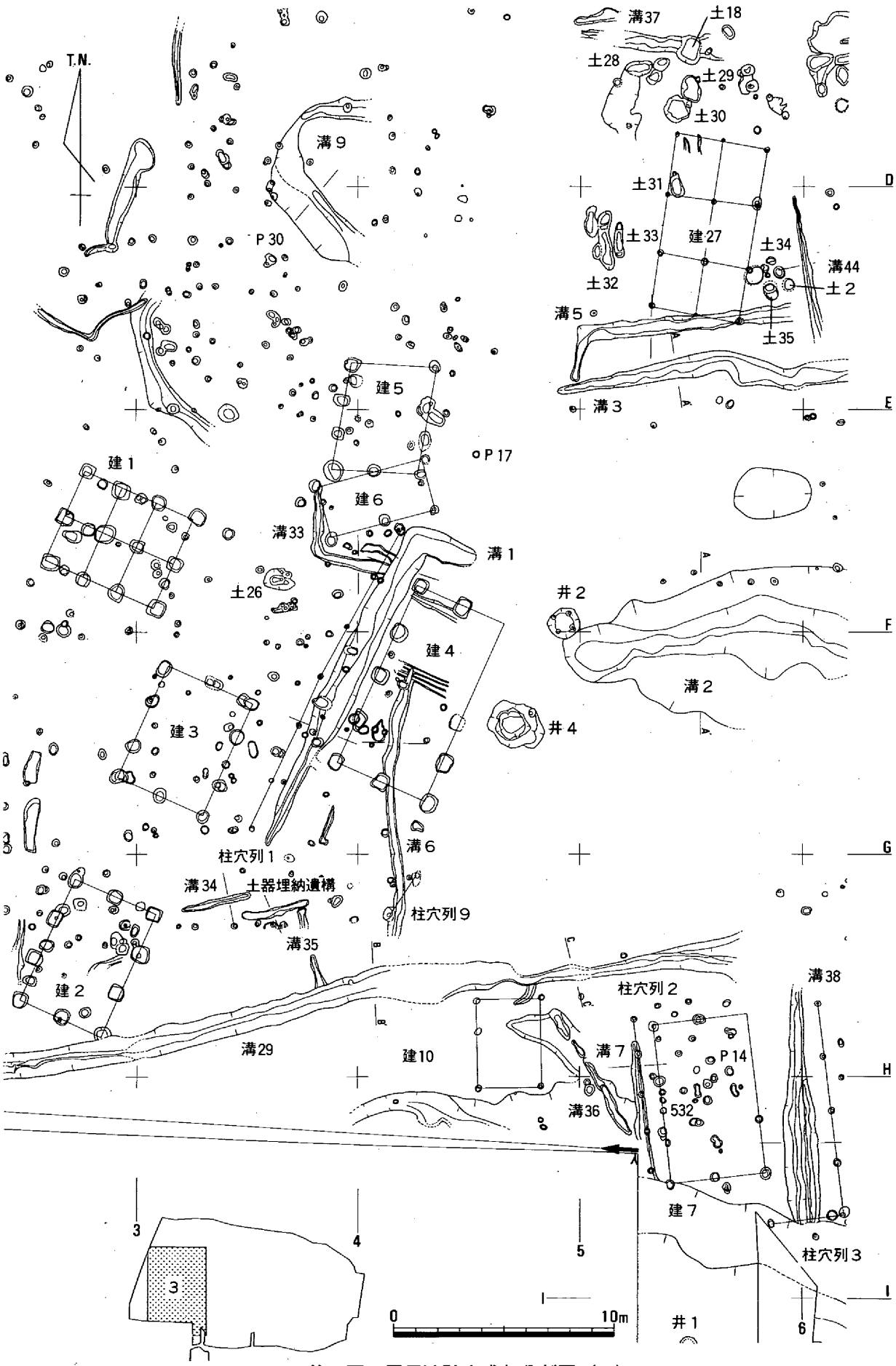
第４図　馬屋遺跡土盛部遺構配置図（S：1/500）



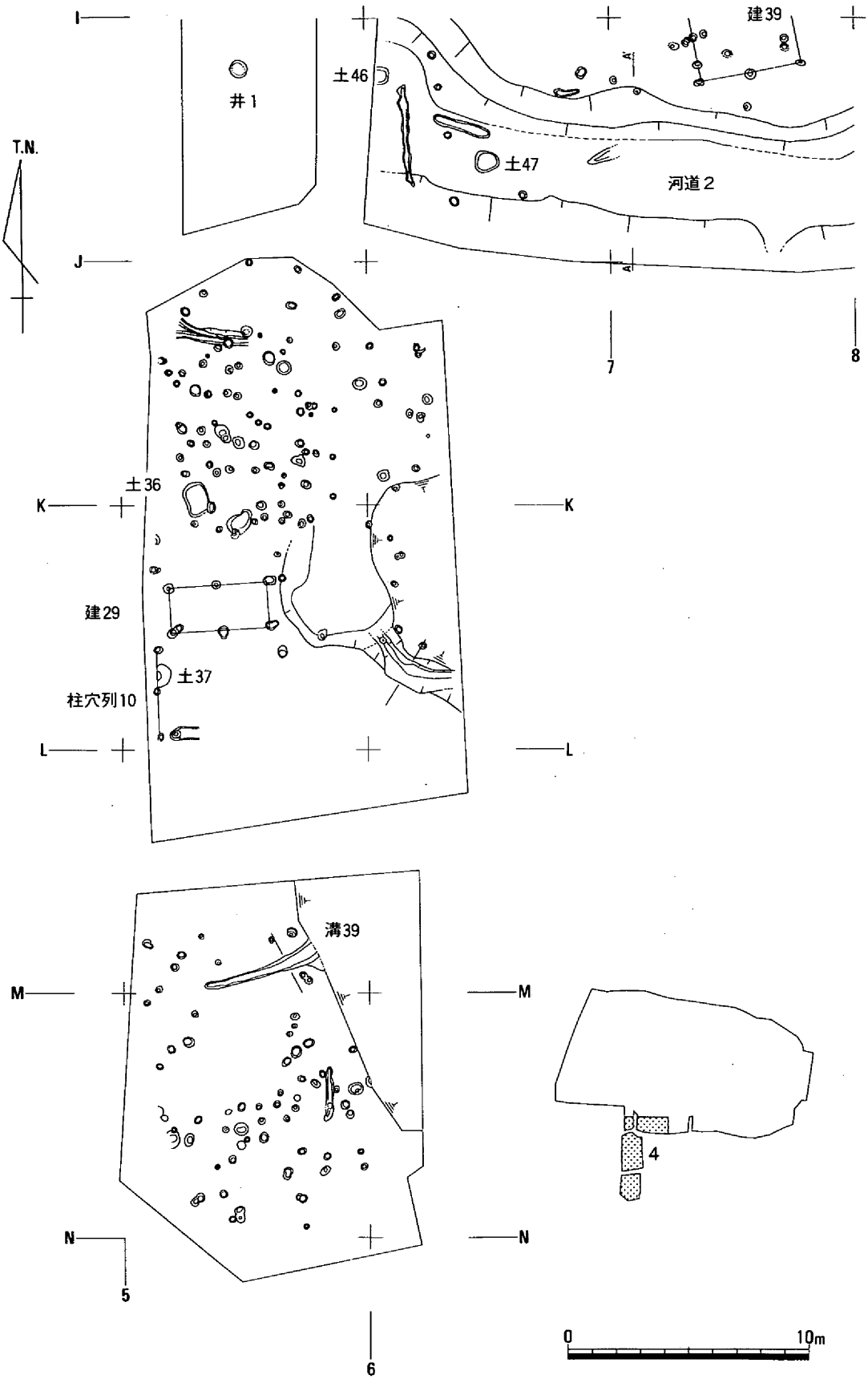
第５図　馬屋遺跡土盛部分割図（１）



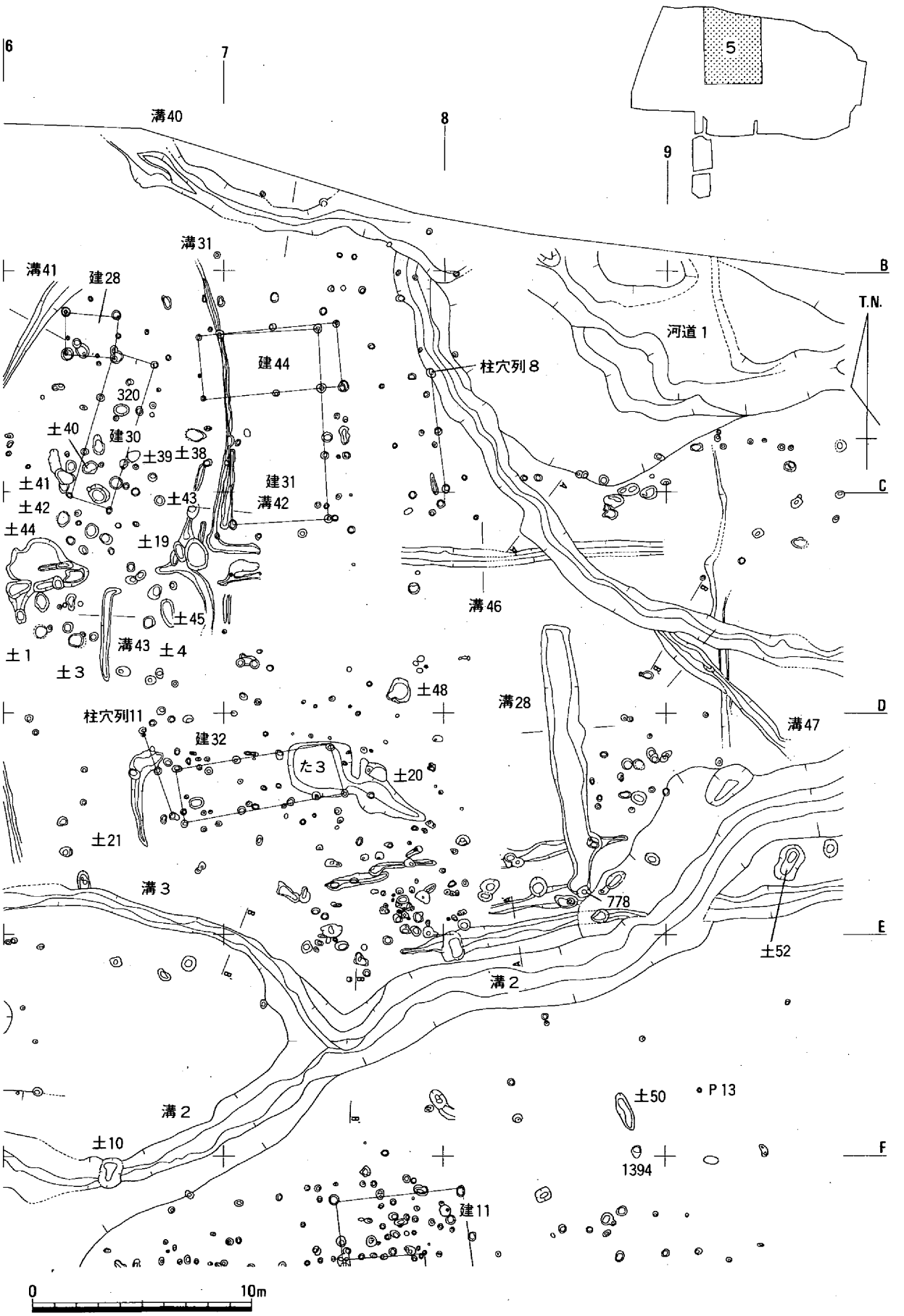
第６図　馬屋遺跡土盛部分割図（２）



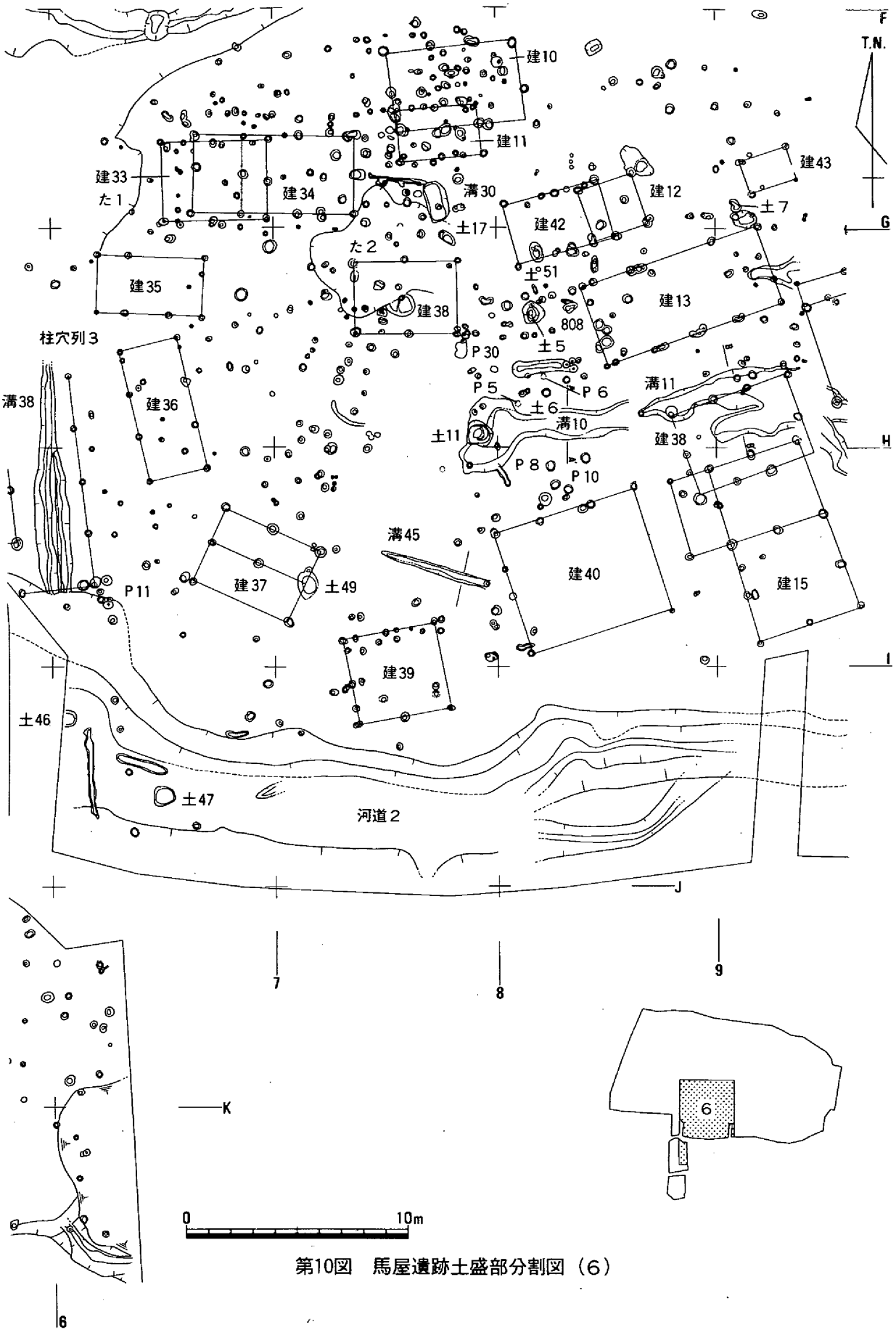
第7図　馬屋遺跡土盛部分割図（3）



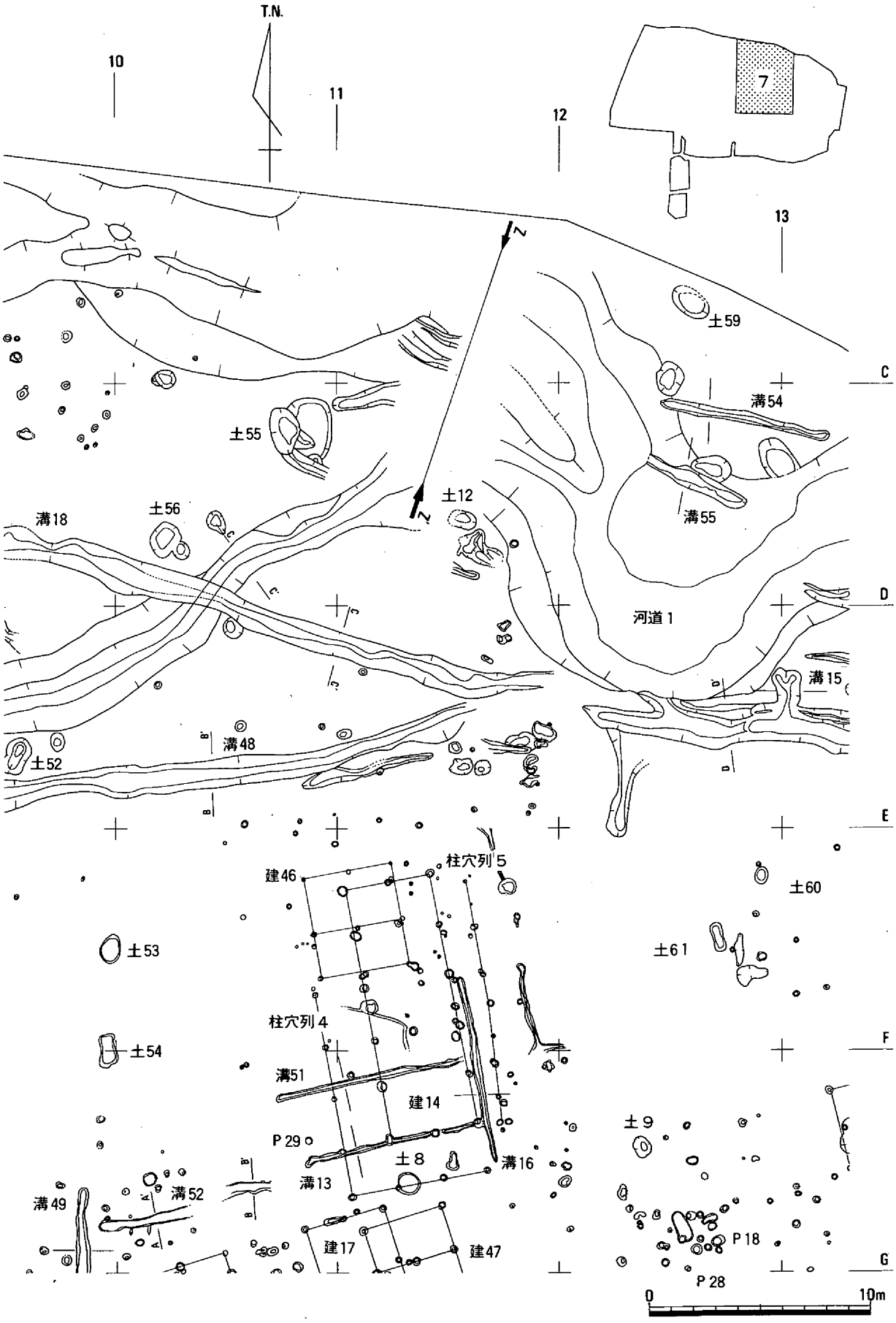
第８図　馬屋遺跡土盛部分割図（４）



第９図　馬屋遺跡土盛部分割図（５）

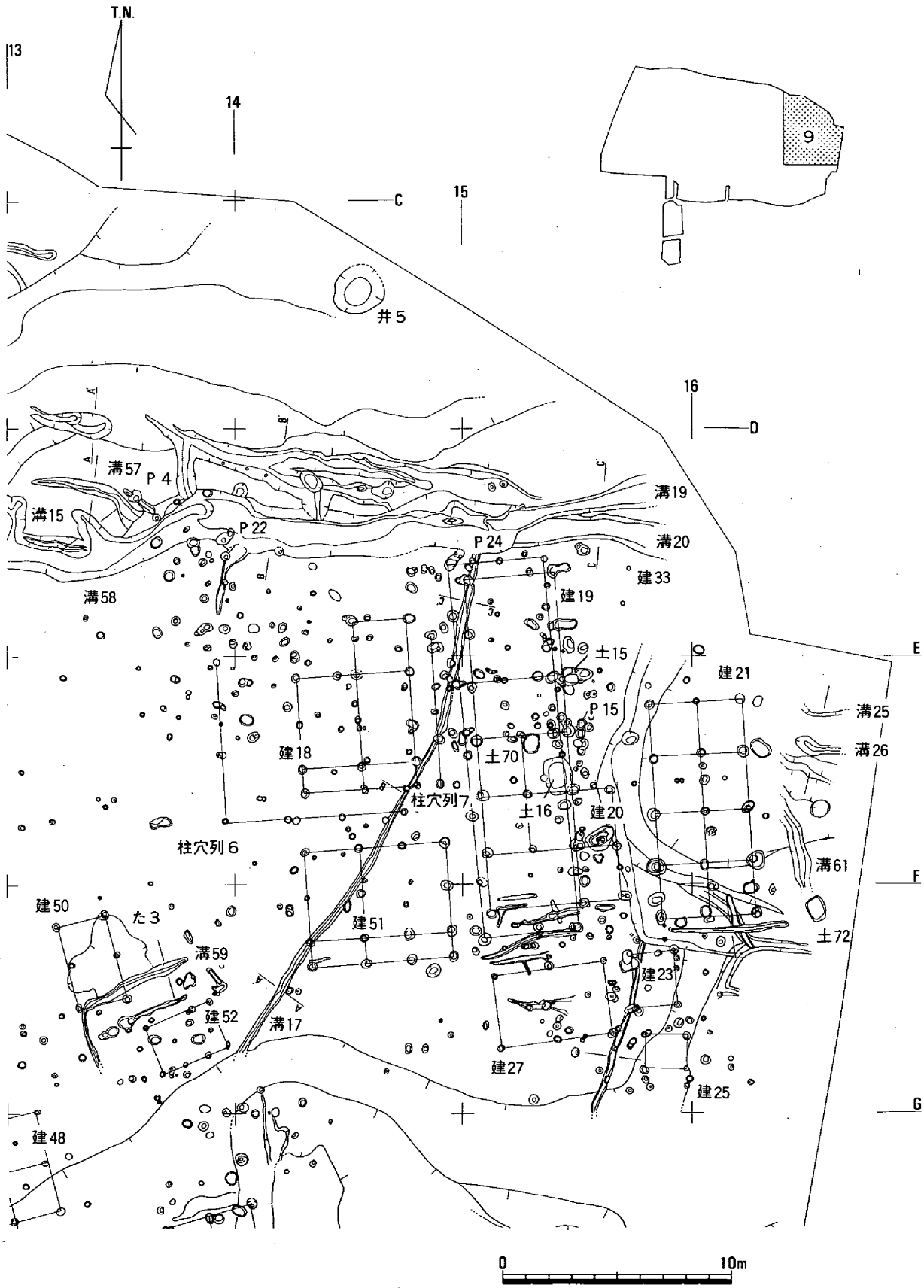


第10図　馬屋遺跡土盛部分割図（6）

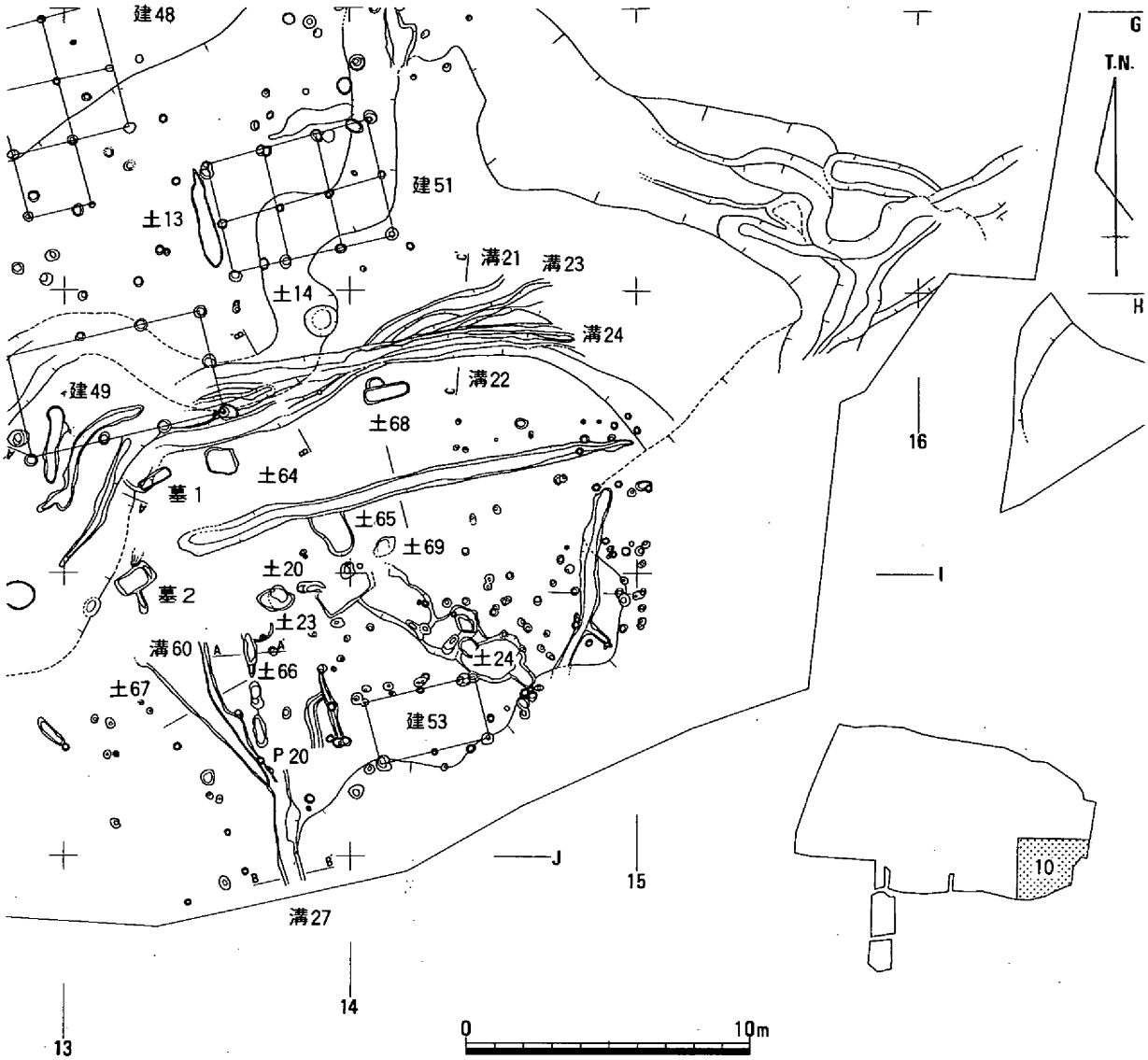


第11図　馬屋遺跡土盛部分割図（7）

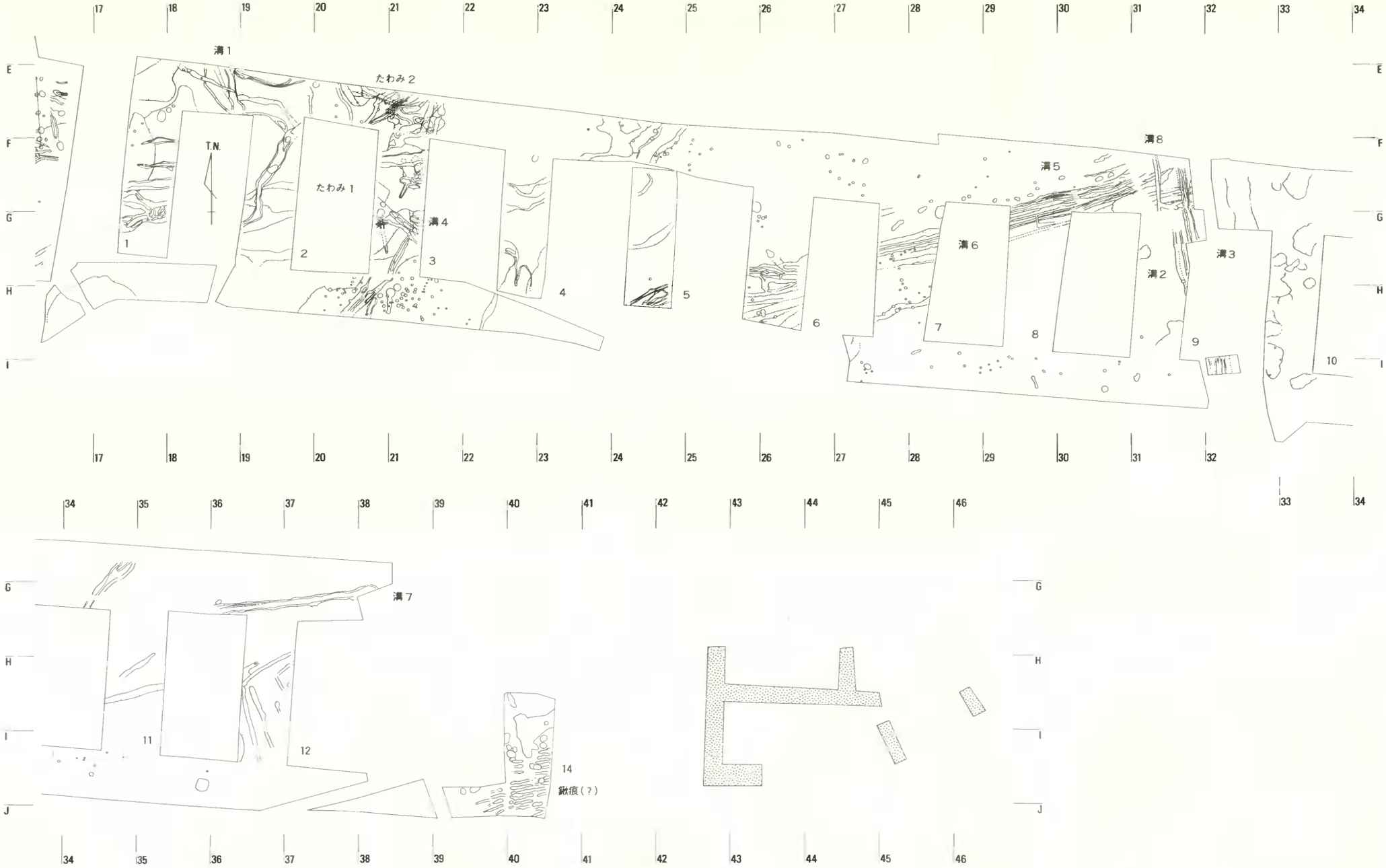
第12図　馬屋遺跡土盛部分割図（8）



第13図　馬屋遺跡土盛部分割図（9）

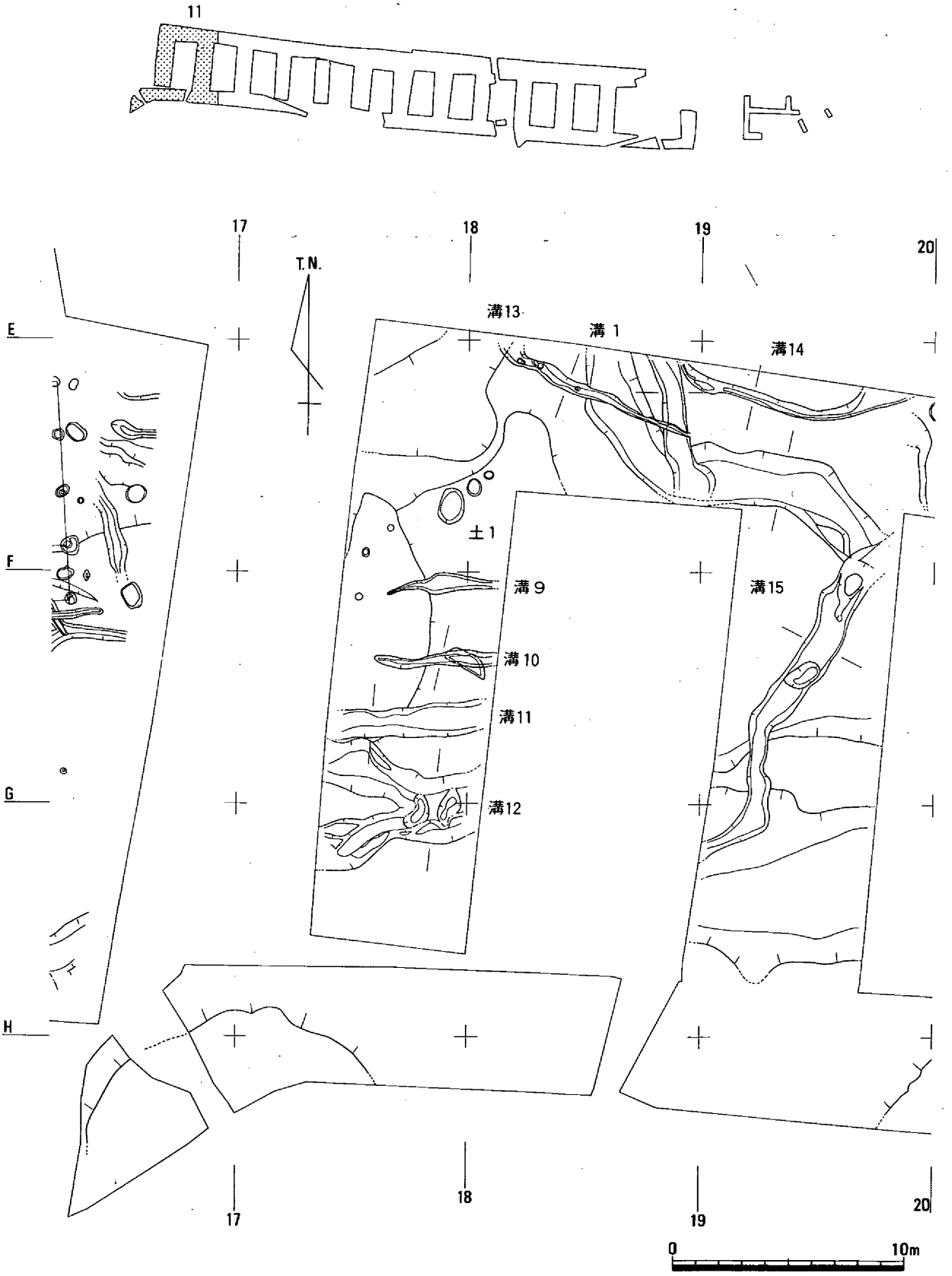


第14図　馬屋遺跡土盛部分割図（10）

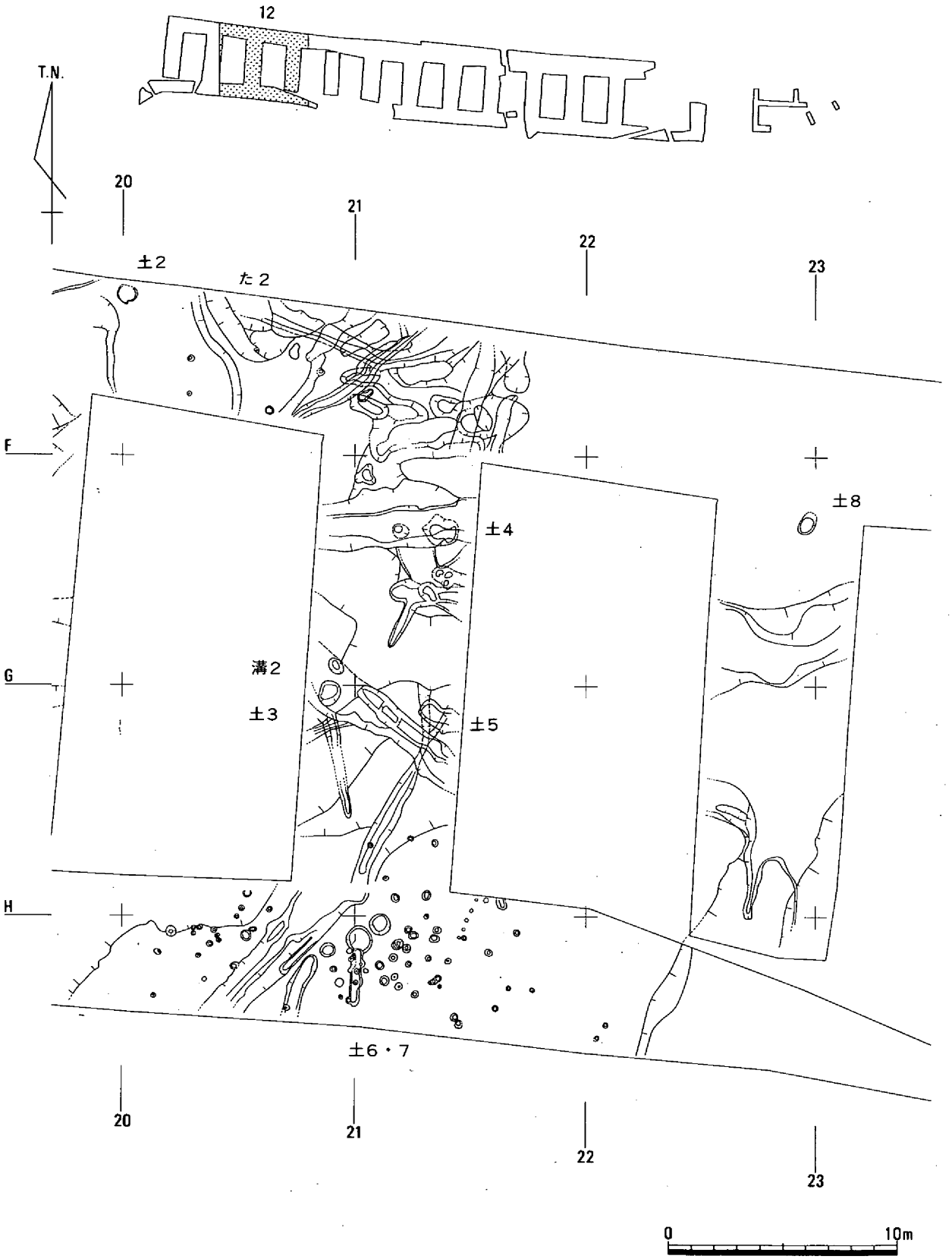


0　40m

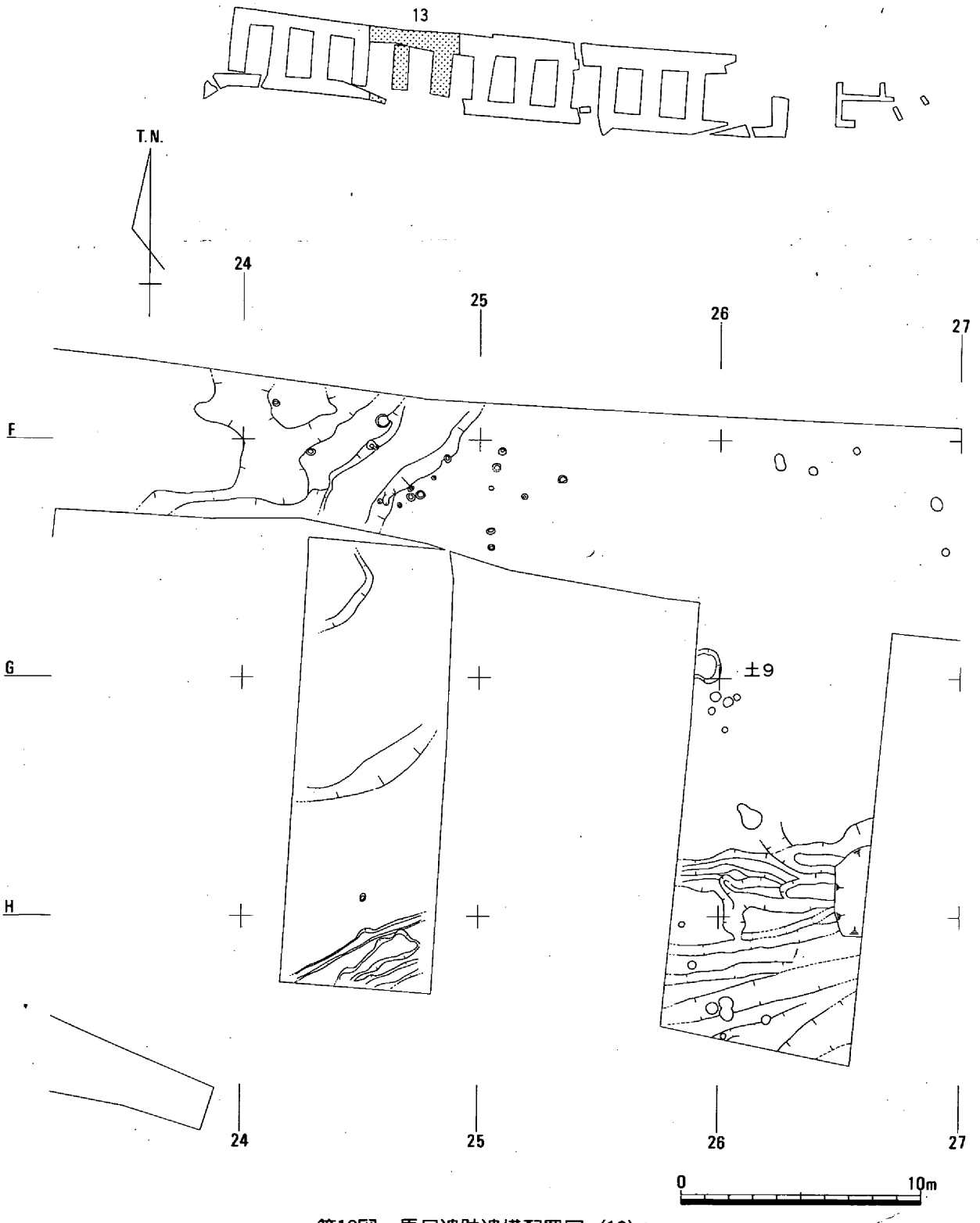
第15図　馬屋遺跡橋脚部遺構配置図（S：1/500）



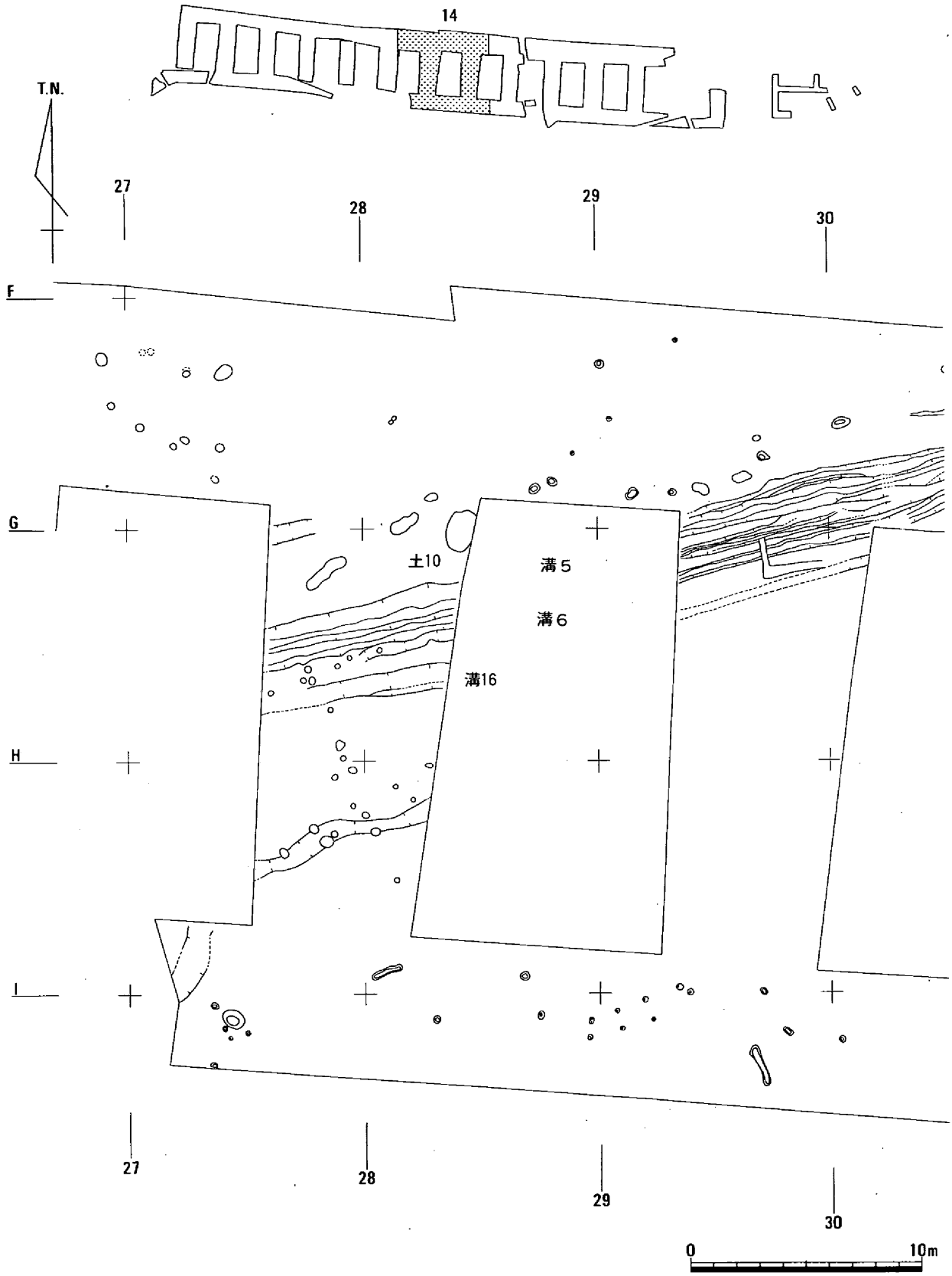
第16図　馬屋遺跡遺構配置図（11）



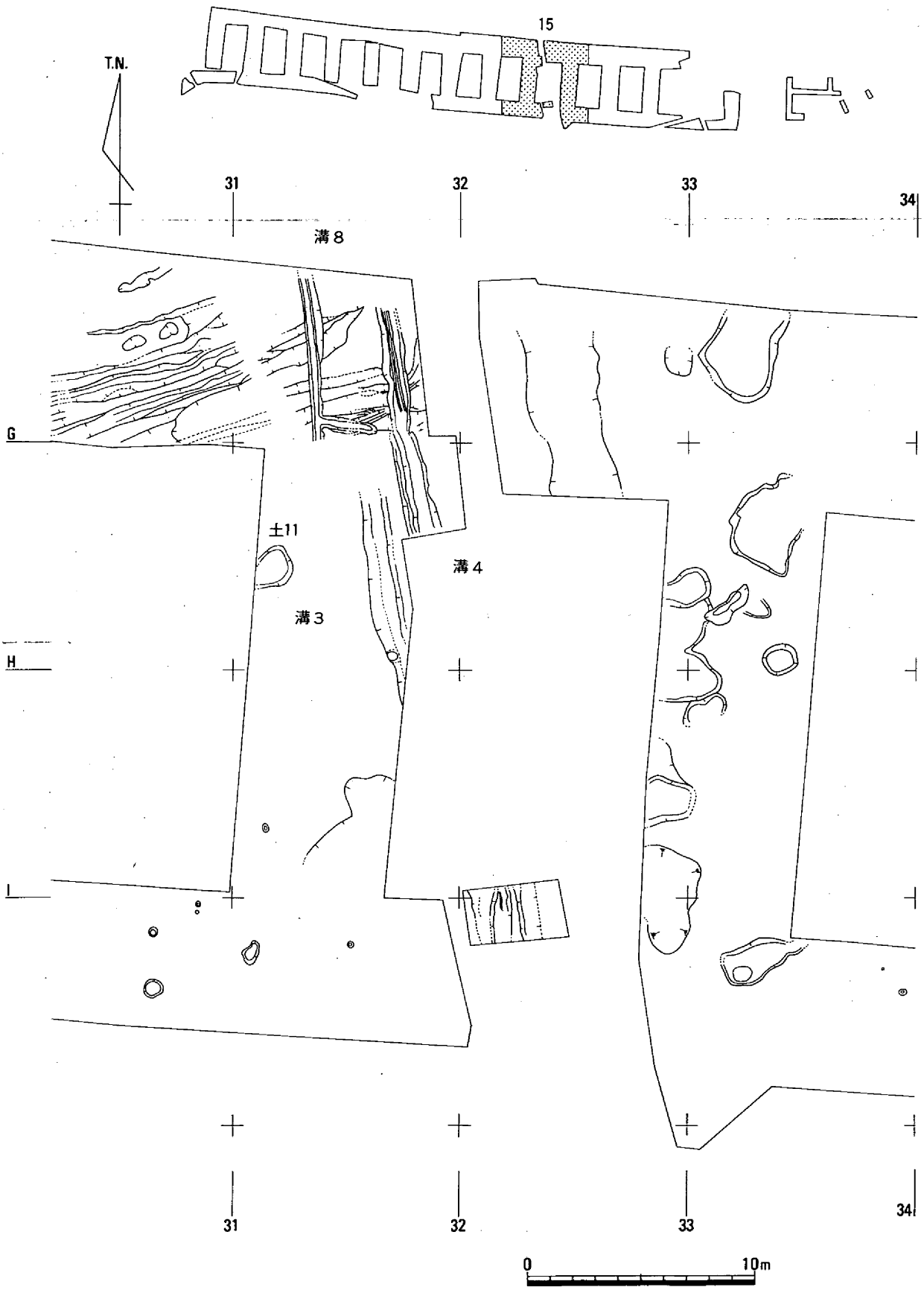
第17図　馬屋遺跡遺構配置図（12）



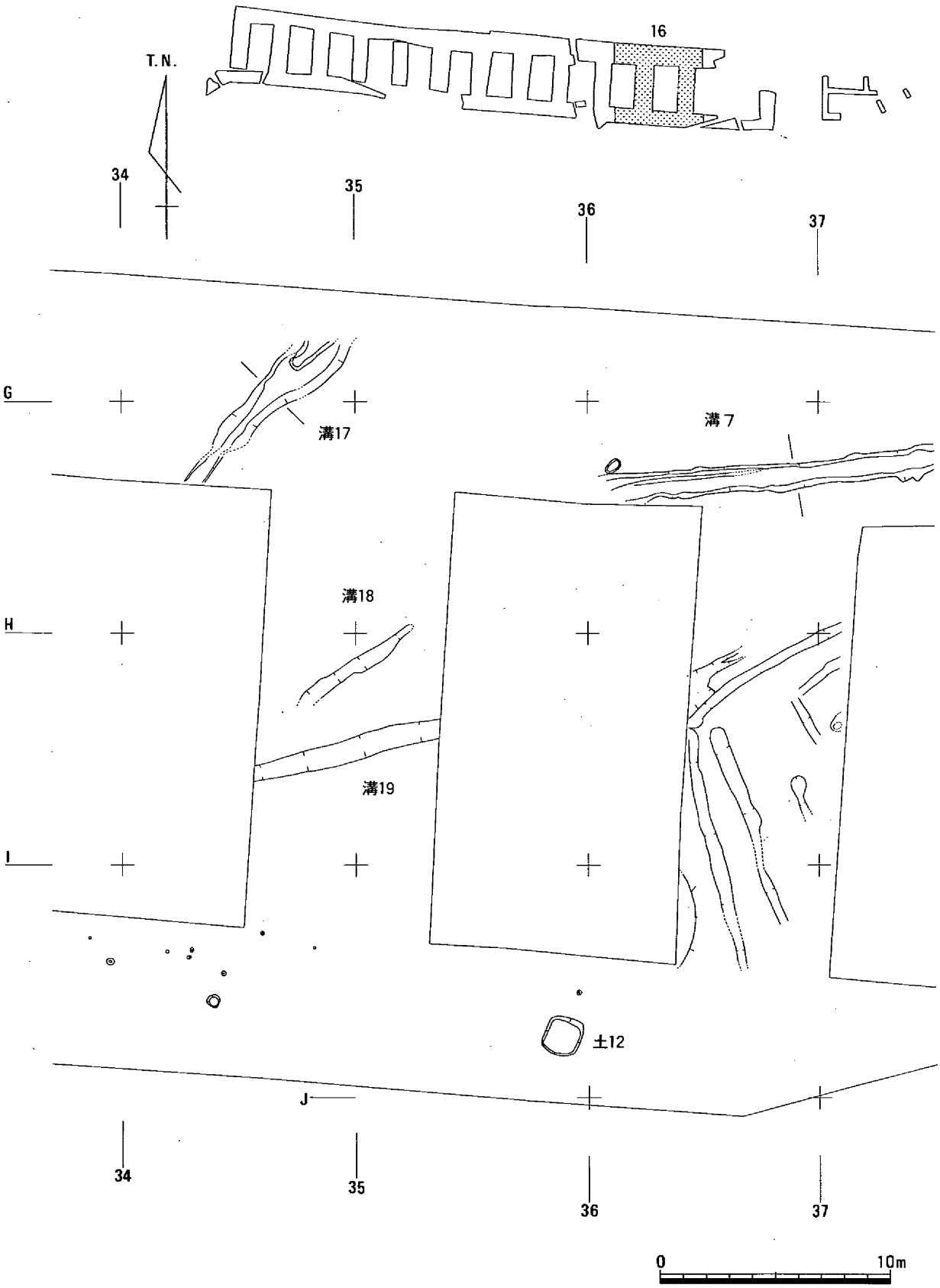
第18図　馬屋遺跡遺構配置図（13）



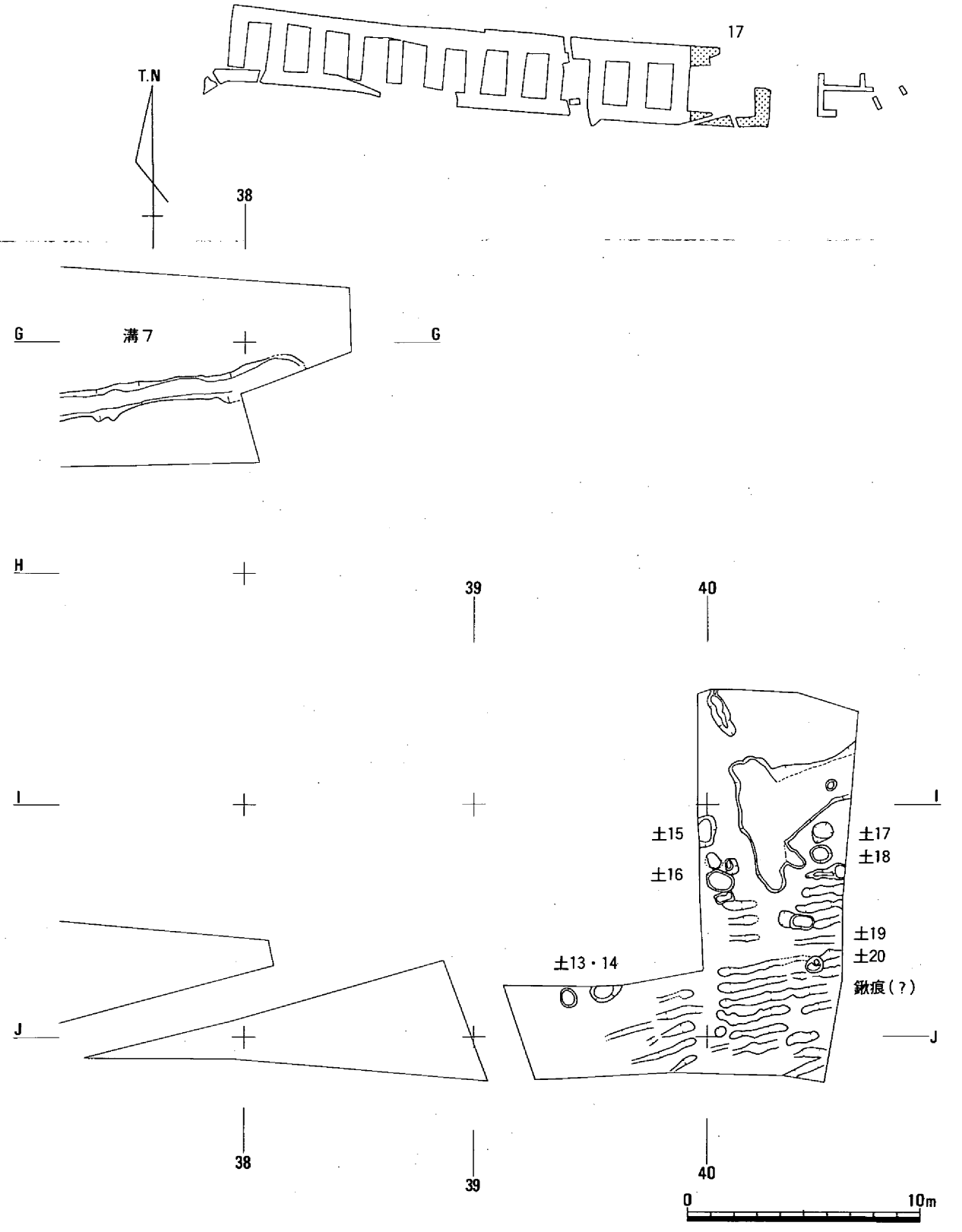
第19図　馬屋遺跡遺構配置図（14）



第20図　馬屋遺跡遺構配置図（15）



第21図　馬屋遺跡遺構配置図（16）



第22図　馬屋遺跡遺構配置図（17）

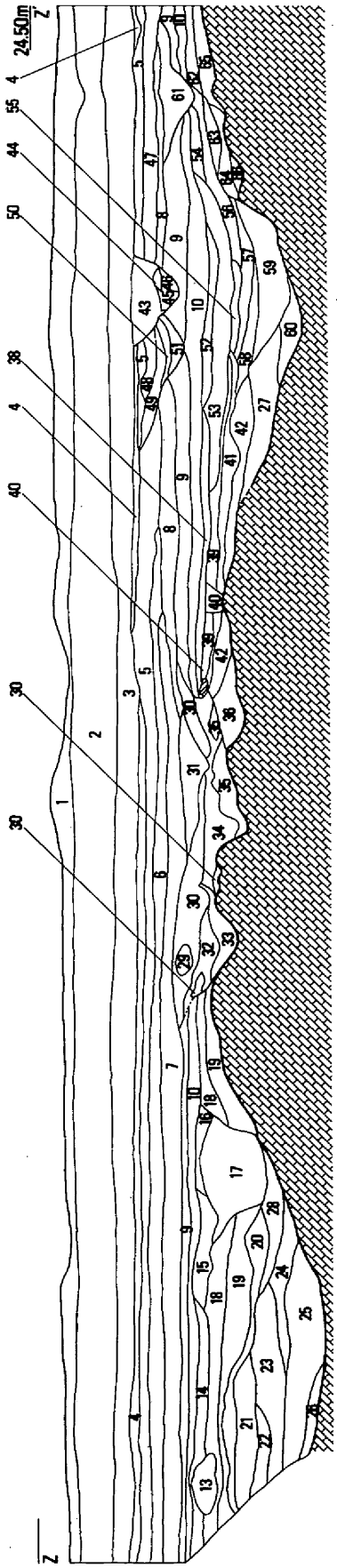
2．土盛部の調査

1）奈良時代より以前の遺構・遺物

(1)　河道－1（第23図）

調査区の北側を北西から東に流れる自然河道と考えられる。川幅は10～15mあり、12ライン付近では2条になっている。深さは耕作土下150～200cmを測る。標高は北側で23m、南側で22m前後である。D13～16の肩部から、平安時代を中心とする多くの遺物が出土している。

この河道は平安時代後半頃から、西からの堆積により埋まり初め、鎌倉・室町時代には完全に埋まっている。河道北側には室町時代の井戸が掘削されている。

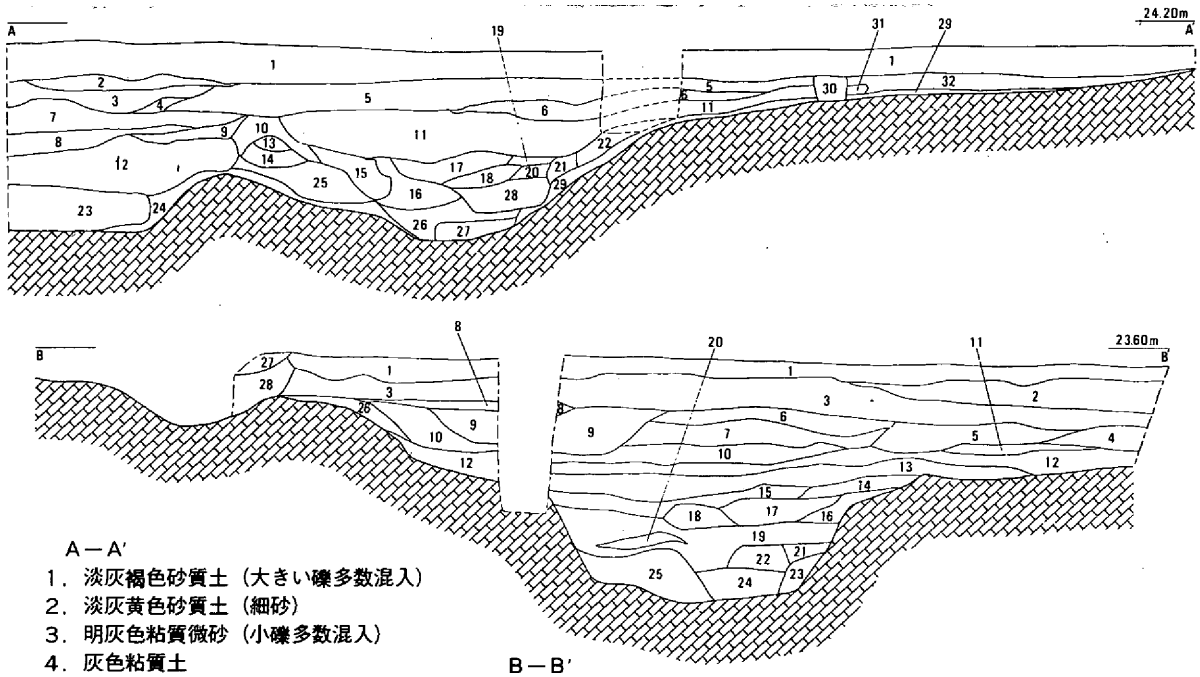


1．暗黄褐色粘質細砂（盛土）
2．青褐灰色粘質微砂（耕作土）
3．明黄灰色　〃
4．白褐灰色　〃
5．明褐灰色　〃
6．褐灰色　〃
7．淡褐灰色　〃
8．明灰褐色粘質細砂
9．淡灰褐色　〃
10．橙灰褐色粘質微砂
11．灰褐色　〃　（礫を多く含む）
12．暗褐灰色　〃
13．青灰色荒砂
14．暗灰褐色粘質細砂（小石含）
15．茶褐色粘質微砂
16．明茶褐色　〃
17．暗茶褐色粘質細砂
18．暗灰褐色　〃　（小石含）
19．青茶褐色粘質微砂
20．青黒褐色　〃
21．黄黒褐色　〃　（礫含む）
22．淡青黒褐色　〃　（礫含む）
23．暗灰黄色粘質細砂（小石含）
24．暗青灰黄色　〃　（小石含）
25．暗灰褐色　〃
26．灰黄色　〃
27．暗黄灰褐色粘質細砂
28．明灰黄色粘質微砂
29．暗灰褐色　〃　（礫含む）
30．黄褐色粘質土（基盤層）
31．淡灰褐色粘質微砂
32．青灰褐色荒砂
33．暗青灰褐色粘質細砂（小石含）
34．青黒褐色　〃　（小石含）
35．灰褐色　〃
36．暗灰褐色　〃　（小石含）
37．暗灰黄色　〃
38．欠番
39．茶灰褐色粘質微砂
40．暗茶灰褐色　〃
41．青灰褐色　〃
42．明茶褐色　〃
43．暗黄灰色　〃
44．明黄褐灰色　〃
45．茶褐灰色　〃
46．褐色粘質微砂
47．橙褐灰色粘質微砂
48．暗褐灰色　〃
49．暗褐灰色　〃
50．明灰褐色粘質微砂
51．淡灰褐色　〃
52．灰褐色　〃
53．暗茶灰褐色粘質微砂
54．黒褐色粘質土
55．明黒褐色粘質微砂
56．黄黒褐色　〃　（礫含む）
57．黄灰褐色　〃　（礫含む）
58．暗黄灰褐色　〃　（礫含む）
59．暗黄灰色　〃
60．淡褐灰色粘質細砂
61．明青灰色荒砂
62．灰褐色粘質微砂　（礫含む）
63．黄灰褐色　〃
64．暗褐灰色　〃
65．黄褐灰色　〃
66．明黄褐灰色　〃
67．暗黄灰色粘質細砂
68．褐灰色粘質微砂

第23図　河道1断面図

(2)　河道－２（第24図）

Ｈ５付近から１ラインに沿うように東に流れる自然河道である。川幅は15mほどあり、中央部がさらに一段低く幅１～２ｍで蛇行しながら略東方向に流れる。中央の川底からは、古墳時代後半期に含まれる土師器１～６がみられるが、平安時代初めには川の中央に井戸－１がつくられており、ＧＨ13区などでは鎌倉時代と考えられる掘立柱建物－48・49・51などが河道内に建てられている。河道内の上層包含層からは奈良・平安・鎌倉時代を中心とする遺物が多く出土している。　（伊藤）



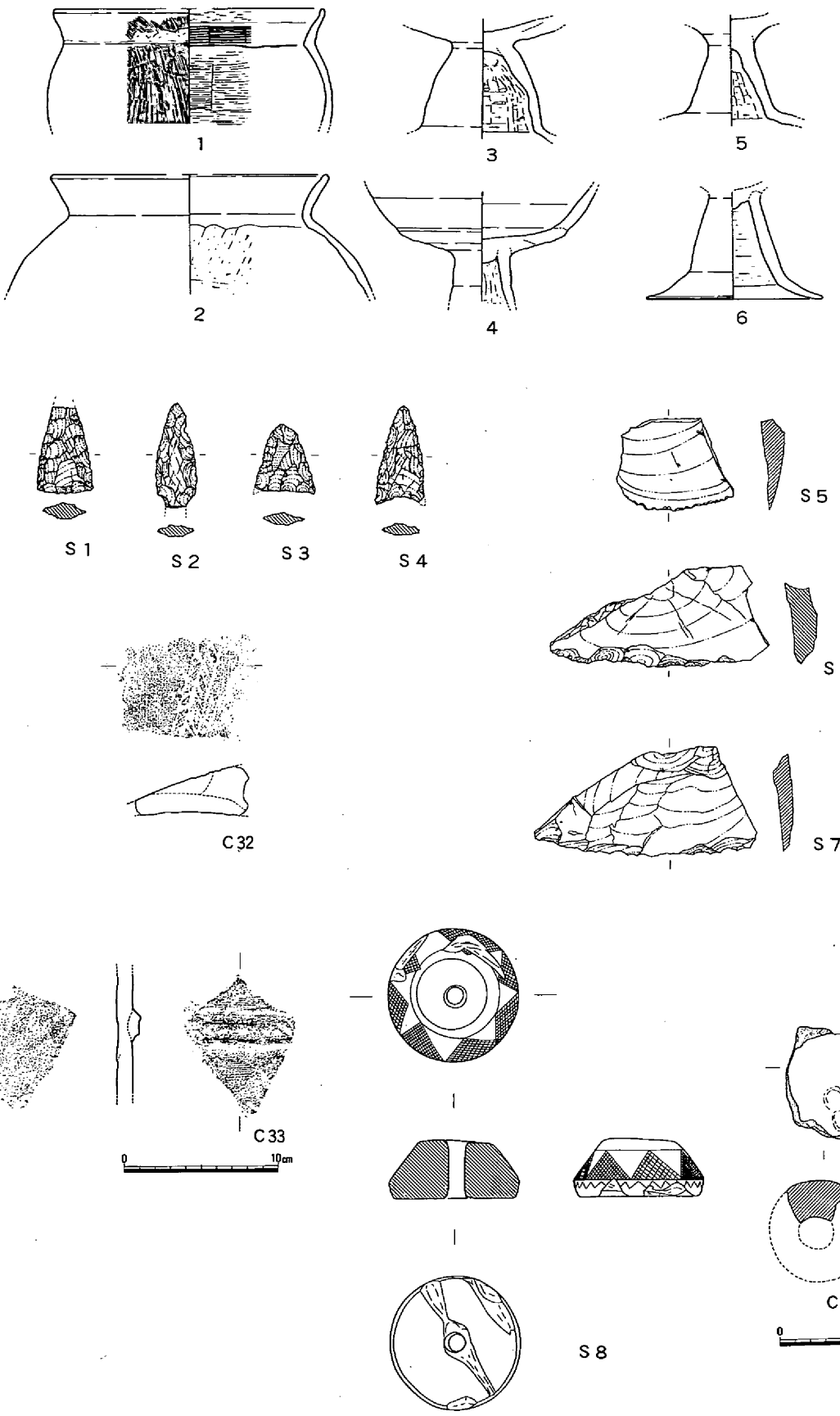
A－A'

1. 淡灰褐色砂質土（大きい礫多数混入）
2. 淡灰黄色砂質土（細砂）
3. 明灰色粘質微砂（小礫多数混入）
4. 灰色粘質土
5. 灰褐色粘質微砂（小礫多数混入）
6. 灰色砂質土（細砂）
7. 灰褐色粘質土（小礫多数混入）
8. 灰色砂質土（粗砂）
9. 黄灰色砂質土（礫大小多数混入）
10. 暗灰褐色粘質微砂（粘土多量に混入）
11. 暗灰褐色粘質微砂
12. 暗灰色粘質土
13. 暗灰褐色砂質土（粗砂）
14. 灰褐色粘質土（小礫多数混入）
15. 暗灰色粘質土
16. 灰黄色砂質土（細砂）
17. 黒灰褐色粘質微砂
18. 灰黄色砂質土（粗砂粘土混入）
19. 暗灰色粘質微砂
20. 明灰黄色砂質土（粗砂粘土混入）
21. 灰黄色粘質微砂
22. 暗灰色粘質土
23. 黒灰色　〃
24. 明灰黄色　〃
25. 明灰褐色砂質土（粗砂）
26. 明灰黄色　〃　（〃）
27. 黒灰色　〃　（〃）
28. 暗灰黄色粘質微砂
29. 明灰黄色粘質土
30. 暗灰色　〃
31. 暗灰褐色粘質微砂
32. 灰褐色粘質微砂（小礫多数混入）

B－B'

1. 褐灰色砂礫土（Mn少含）
2. 灰褐色粘質土
3. 淡灰褐色粘性砂質土（瓦あり）
4. 灰褐色粘質土（２より青味あり）
5. 灰褐色　〃　（　　〃　　，４よりしまりない，やや砂質あり）
6. 暗灰褐色粘性砂質土（Ｃ多含，土器含）
7. 灰褐色粘質土（２などに比し暗い，Ｃやや含，Mn含）
8. 灰褐色砂質土（礫少含）
9. 灰褐色細砂（上層より褐色弱い，土器含，礫含）
10. 褐灰色粘質土（Mn７より多，微細）
11. 暗褐色　〃　（細砂）
12. やや暗い褐灰色粘質土（微細）
13. 褐灰色砂質土（10・13に比し褐色強，黄褐色礫含）
14. 暗灰色粘質土（細砂）
15. 暗灰褐色粘性砂質土＋黄褐色ブロック（13より褐色弱）
16. 灰褐色粘質土
17. オリーブ黒　〃　（細砂，下層より明るめ）
18. オリーブ黒色粘質土（黒色粘土ブロック多含）
19. オリーブ黒色　〃　（やや砂質土，グライ化強）
20. オリーブ灰色砂（グライ化強）
21. オリーブ灰細砂（　〃　）
22. オリーブ黒色細砂（　〃　）
23. オリーブ黒色礫（　〃　）
24. オリーブ黒色微砂（　〃　）
25. オリーブ黒色粗砂（　〃　）
26. 灰色粘質土（礫混）
27. 褐色砂質土
28. 灰褐砂（細砂）

第24図　河道２断面図



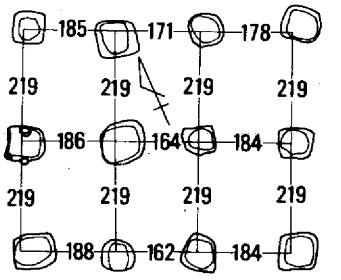
第25図　河道－２および奈良時代より以前の包含層出土遺物

2）奈良時代の遺構・遺物

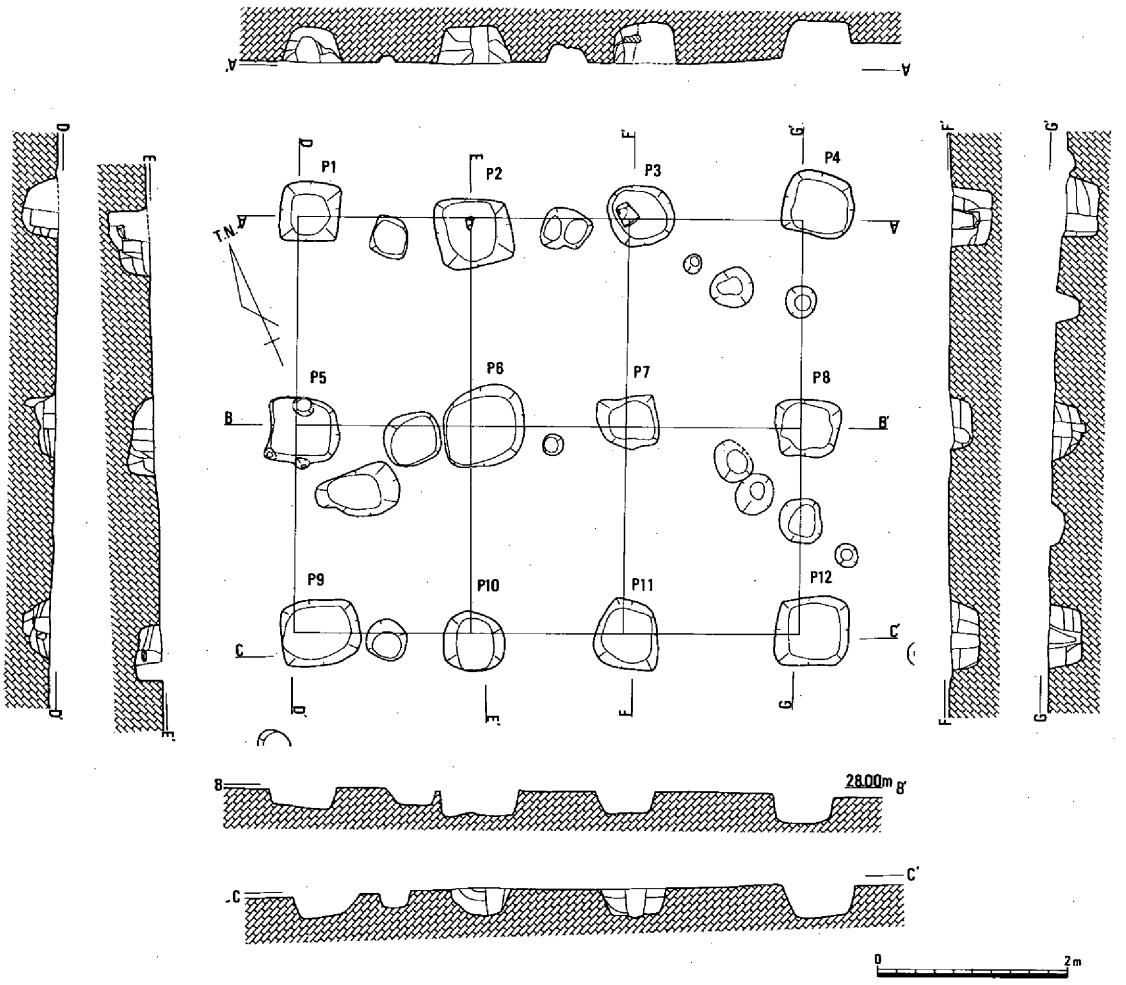
(1)　掘立柱建物

建物－1（第26図）

E 2区周辺に位置する、桁行3間×梁行2間（534cm×438cm）の総柱建物である。建物面積は23.4㎡で、建物の主軸はN－66°－Wを示している。

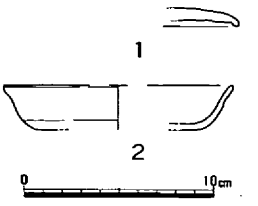


建物の検出レベルは標高27.73～27.98m、柱穴底で標高27.48～27.78mである。柱間距離は桁間で219cm、梁間で162～188cmを測る。柱穴の掘方平面は一辺約48～74cm程の隅丸方形状を呈している。柱痕跡はP 6・P 7以外で確認できた。またP 2・P 3には根石が遺存していた。



第26図　建物1平・断面図および出土遺物

遺物は土師器などが出土している。図示したものは（第26図）、ともにP 4の掘方から出土している。1は土師器の蓋、2は土師器の杯で丹塗りの痕跡が見られる。



この建物の時期は、奈良時代前半期と考えられる。また、建物の性格としては、総柱であることなどから倉庫と推定される。（横山）

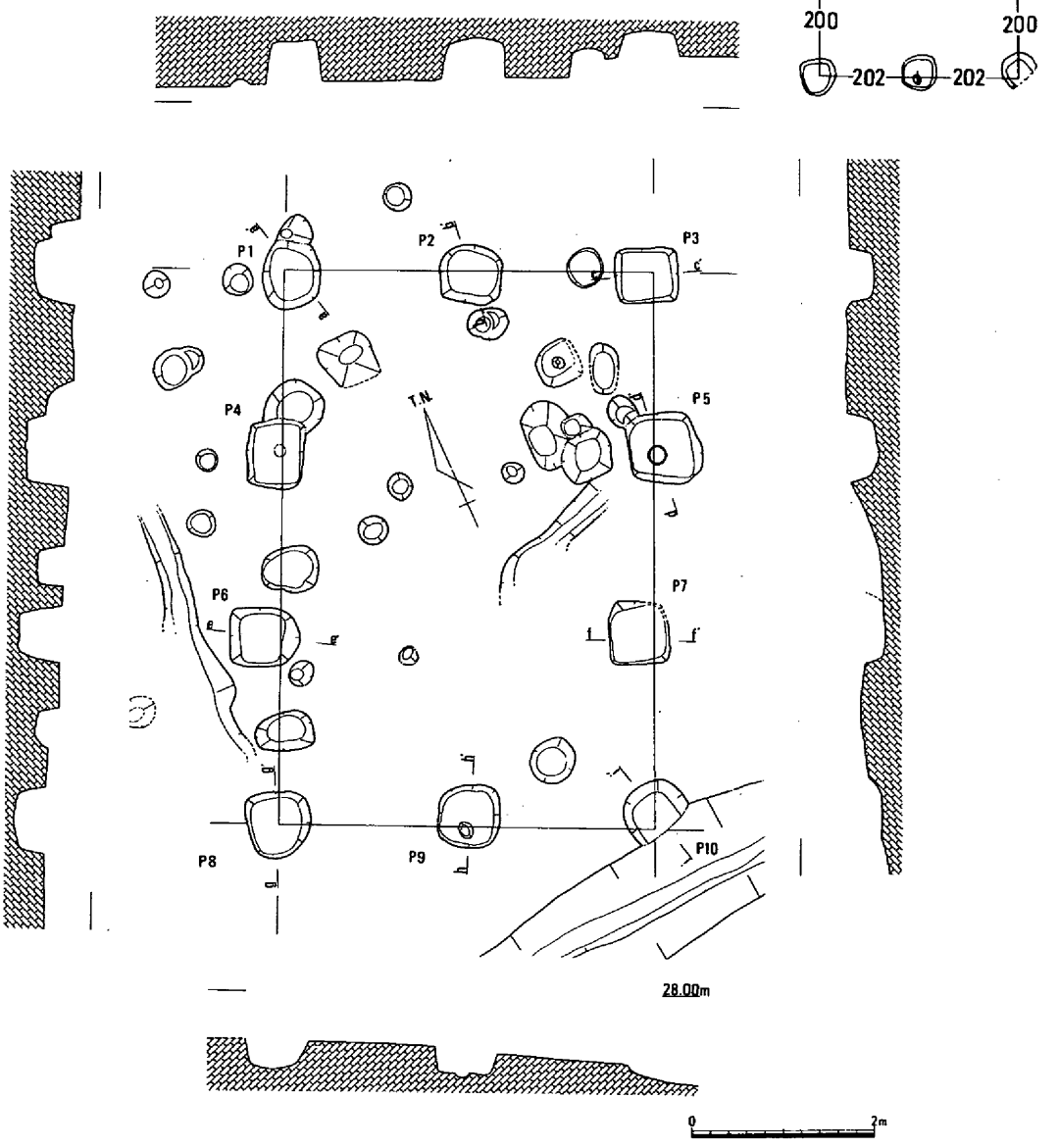
建物－２（第27・28図）

建物－１の南方向Ｇ２区周辺に位置する、桁行３間×梁行２間（604cm×404cm）の建物である。建物面積は24.0㎡で、建物の主軸はＮ－24.5°－Ｅを示している。

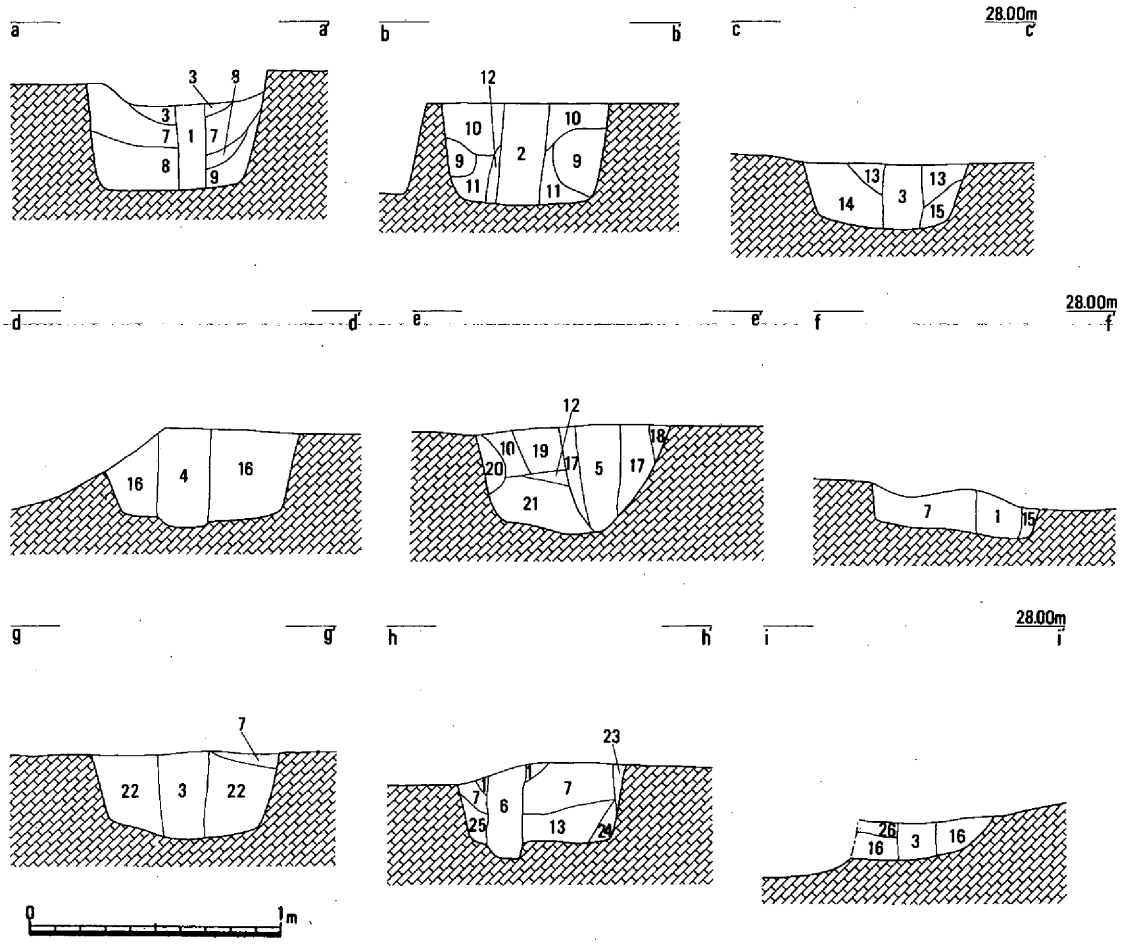
建物の検出レベルは標高27.25～27.80m、また柱穴底のレベルは標高27.08～27.32mである。柱間距離は、桁間で200～204cm、梁間で198～202cmを測る。柱穴の掘方平面は一辺約61～77cm程の隅丸方形を呈している。柱穴のうちＰ10は溝－29によって１/３程度切られている。また柱痕跡は、Ｐ４以外の９本で確認できた。

遺物は、Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ６・Ｐ７・Ｐ８・Ｐ９・Ｐ10から出土した。図示した遺物（第28図）のうち、ｉ１は鑿と推定される鉄製品でＰ６から出土した。また１・２は須恵器の杯蓋、３は丹塗りの土師器杯で、１・３はＰ７から、２はＰ９からそれぞれ出土した。

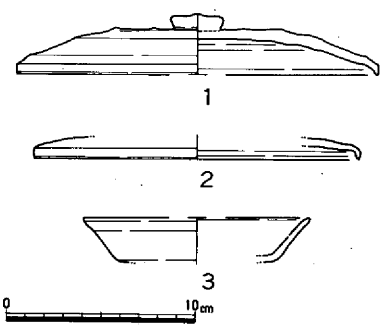
この建物の時期は、出土遺物から奈良時代前半期と考えられる。（横山）

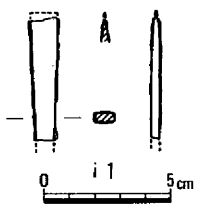


第27図　建物２平・断面図



1．淡灰色土　(Mn含)
2．褐灰色粘質土（〃）
3．淡黄灰色土（〃）
4．淡暗灰色土
5．褐灰色砂質土（Mn含）
6．淡灰色土
7．明黄灰色土　(Mn含)
8．淡暗灰褐色土（〃）
9．黄褐色粘質土（〃）
10．灰褐色土　（〃）
11．褐灰色粘質土
12．灰褐色　〃
13．淡明黄灰色土（Mn含）
14．淡明黄色土　(Mn含)
15．淡黄灰色土
16．淡明黄色土
17．褐灰色砂質土（小礫，炭化物含）
18．褐灰色粘質土（Mn含）
19．灰褐色土　(小礫含)
20．褐灰色土　(小礫，Mn含)
21．灰褐色砂質土
22．黄灰色土　(炭化物多含)
23．淡明灰色土
24．淡黄灰色粘質土
25．淡黄色土　(Mn含)
26．淡暗灰褐色土





第28図　建物２柱穴断面図および出土遺物

建物－３（第29図）

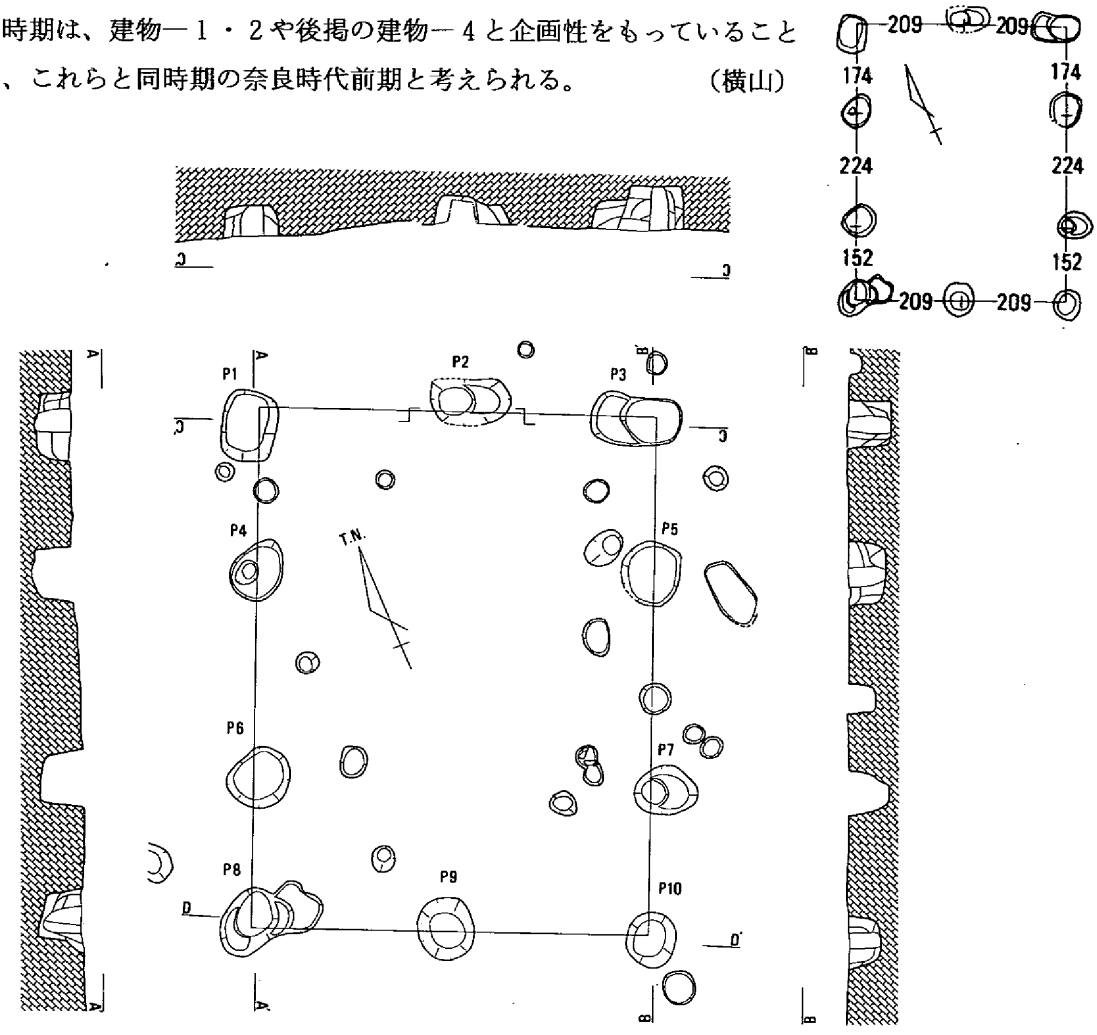
建物－２の北東約4.8mのＦ３区に位置し、建物の主軸はＮ－24°－Ｅで、建物－２と棟をそろえた関係にある。規模は、桁行３間×梁行２間（550cm×418cm）で、建物面積は23.0㎡になる。

建物の検出レベルは標高27.50～27.82m、また柱穴底のレベルは27.04～27.34mである。柱間距離は梁間で209cmを測る。桁間は南から152cm・224cm・174cmで、中央の柱間だけが長い。

柱穴の掘方平面は楕円形ないし隅丸方形状を呈しており、長軸（一辺）は約66～75cmで建物－１・建物－２とほぼ同規模である。柱痕跡はＰ６・Ｐ７以外の８本で確認できた。

遺物はＰ７・Ｐ９・Ｐ10から須恵器などの小片が少量出土したのみで、図化できるものはなかった。

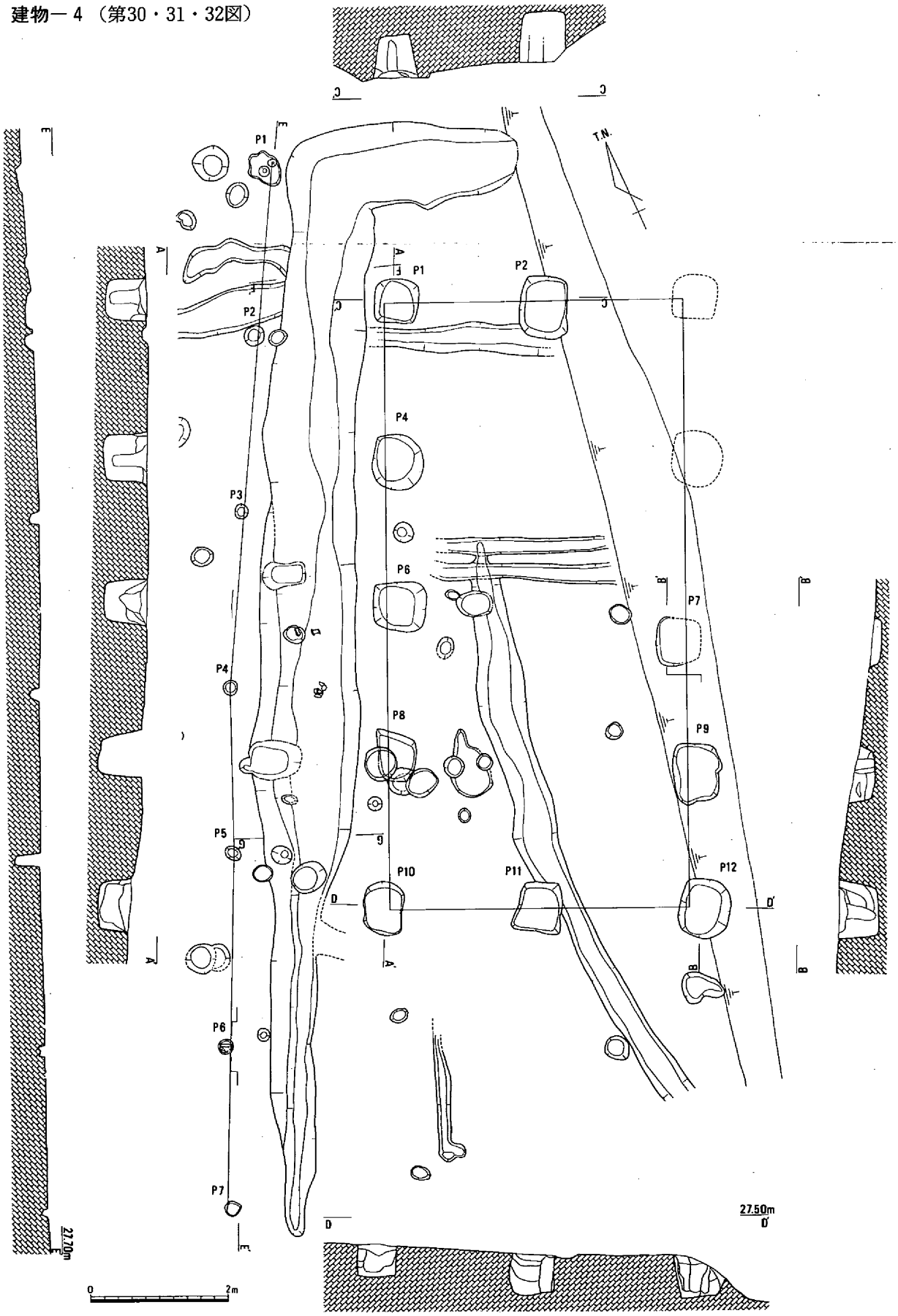
建物の時期は、建物―１・２や後掲の建物―４と企画性をもっていることなどから、これらと同時期の奈良時代前期と考えられる。　（横山）



1．淡茶灰色粘質土
2．茶灰色砂質土　（粘質土混）
3．褐茶色　〃　（　〃　）
4．淡灰色　〃　（　〃　）
5．淡灰茶色　〃　（　〃　）
6．褐灰色　〃　（　〃　）
7．淡褐灰色　〃　（　〃　）
8．灰褐色　〃　（　〃　）
9．淡灰黄色　〃　（　〃　）
10．淡黄茶色　〃　（　〃　）
11．黄灰色　〃　（　〃　）
12．黄茶色　〃　（　〃　）
13．黄茶色粘質土
14．淡黄灰色砂質土（粘質土混）
15．淡茶灰色砂質土（粘質土混，１より灰色淡い）
16．黄褐色　〃　（　〃　）
17．茶褐色粘質土
18．褐灰色　〃
19．黄褐色　〃

第29図　建物３平・断面および柱穴断面図

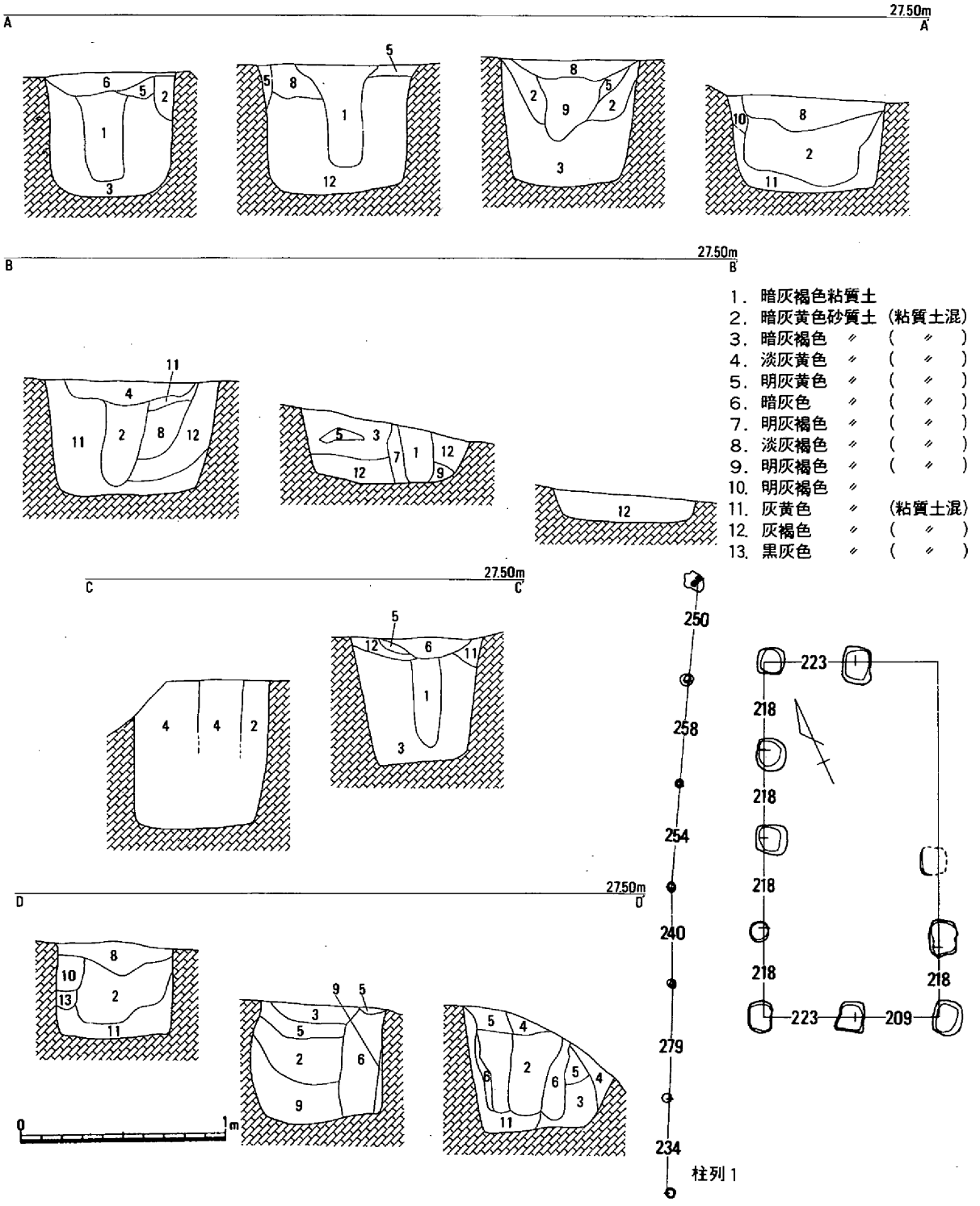
建物－4（第30・31・32図）



第30図　建物４柱穴列１平・断面図

建物－１の南東約10.4ｍのＦ４区周辺に位置する。建物の規模は、桁行４間×梁行２間（874㎝×432㎝）、面積は37.7㎡で、馬屋遺跡のこの時期の建物としては最大である。建物の主軸は、Ｎ－24°－Ｅを示しており、建物－１～３と企画性をもっている。

建物の検出レベルは26.41～27.22ｍ、柱穴底のレベルは26.31～26.66ｍである。建物の南東側は後世の削平をうけており、Ｐ３・Ｐ５は検出できず、Ｐ７・Ｐ９・Ｐ12も一部削平を受けている。柱間距離は、桁間218㎝、梁間209～223㎝を測る。柱穴の掘方平面は、一辺約52～84㎝のほぼ隅丸方形状を

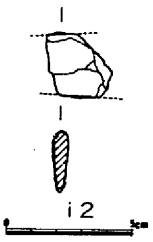


第31図　建物４柱穴断面図・柱穴列略図

呈しており、概して、建物－１～３の柱穴よりも規模が大きい。柱痕跡はＰ１・Ｐ２・Ｐ４・Ｐ９・Ｐ11・Ｐ12の６本で確認出来た。

また、建物の北東側・北西側に、建物に伴うと考えられる溝－１がめぐり、そのさらに北西側に、これも建物に伴うと考えられる柱穴列－１が存在する。

遺物は、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４・Ｐ６・Ｐ８・Ｐ10・Ｐ11から出土した。図化した遺物（第32図）は、ｉ２は、刀身の一部と考えられる。またＰ２から製鉄炉壁、Ｐ10からガラス質滓がそれぞれ出土している。



第32図　建物４出土遺物

この建物は、建物－１～３とともに建物群を構成し、その性格は、規模の大きさや付属施設の存在から、主屋的存在であったと推定される。（横山）

(2)　柱穴列

柱穴列－１（第30図）

建物－４の西側に位置し、この建物に伴うと考えられ、建物－４の北東から南東に溝－１を挟んで伸びる柱穴列で６間分存在する。柱穴間隔は234～279cmとまばらで、柱穴掘り方も20cm前後で、深さはＰ５が40cmある他は20cm前後である。柵列の可能性が高い。遺物は、土師器などの小片が少量出土したのみで、時期は確定できないが、建物－１～３・４と同時期の奈良時代と考えられる。（伊藤）

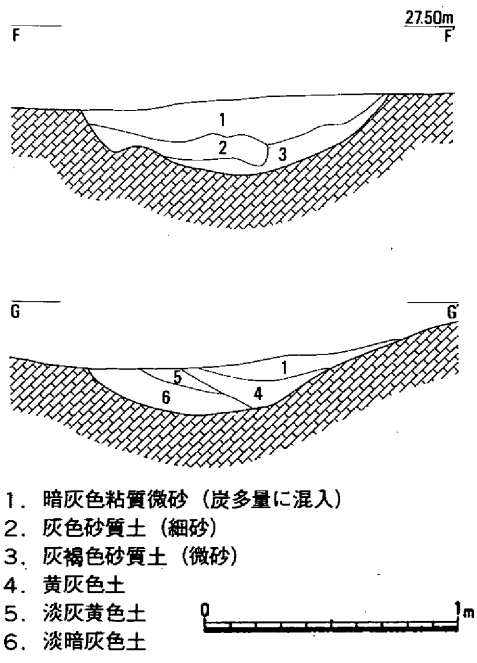
(3)　溝

溝－１（第33図）

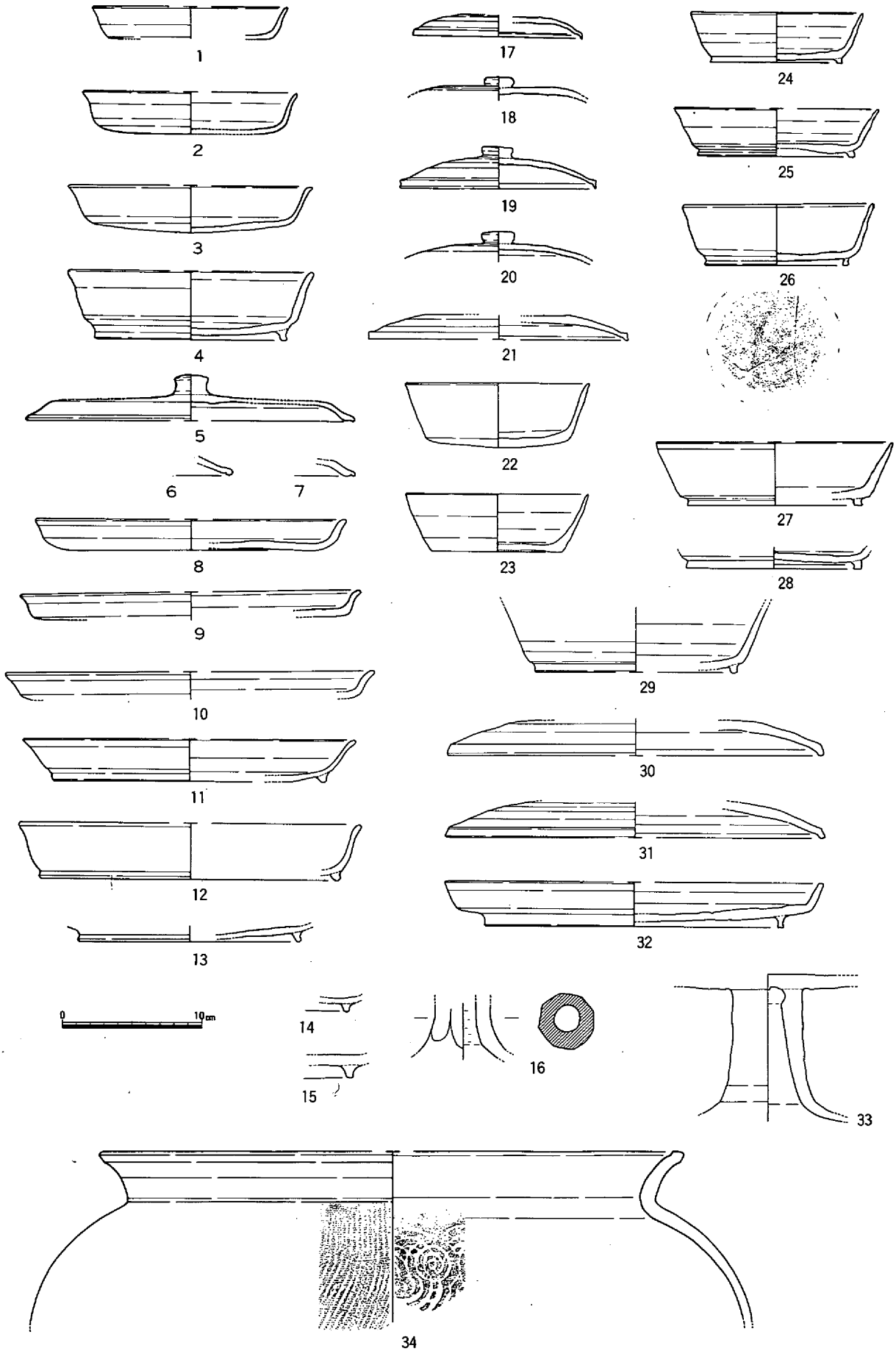
掘立柱建物－４の北東側から北西側にかけて「字状に建物を囲むように存在するが、北東側より後世の水田によって削平されている。北西部で最大幅120cm、北東部で140cm、深さは40～80cmを測る。

溝内からは、後世の柱穴等の混入物もみられるが、その中心は奈良時代のものが主である。１～４・12は土師器杯身、５～７は土師器杯蓋、８～11は土師器盤（皿）、16は土師器高杯で脚柱部は八面体となる。１～16の土師器類は丹塗を行っている。17～21、30・31は須恵器杯蓋、22～29は須恵器杯身、32は須恵器杯身、32は須恵器盤、33は須恵器高杯、34は須恵器甕などである。35～38、ｉ－１～２は輸入陶磁器、Ｇ～３土垂は後世の混入物と思われるが、鉄器（３～５）、吹子の羽口、Ｃ－５の不明土製品などの時期は不詳である。

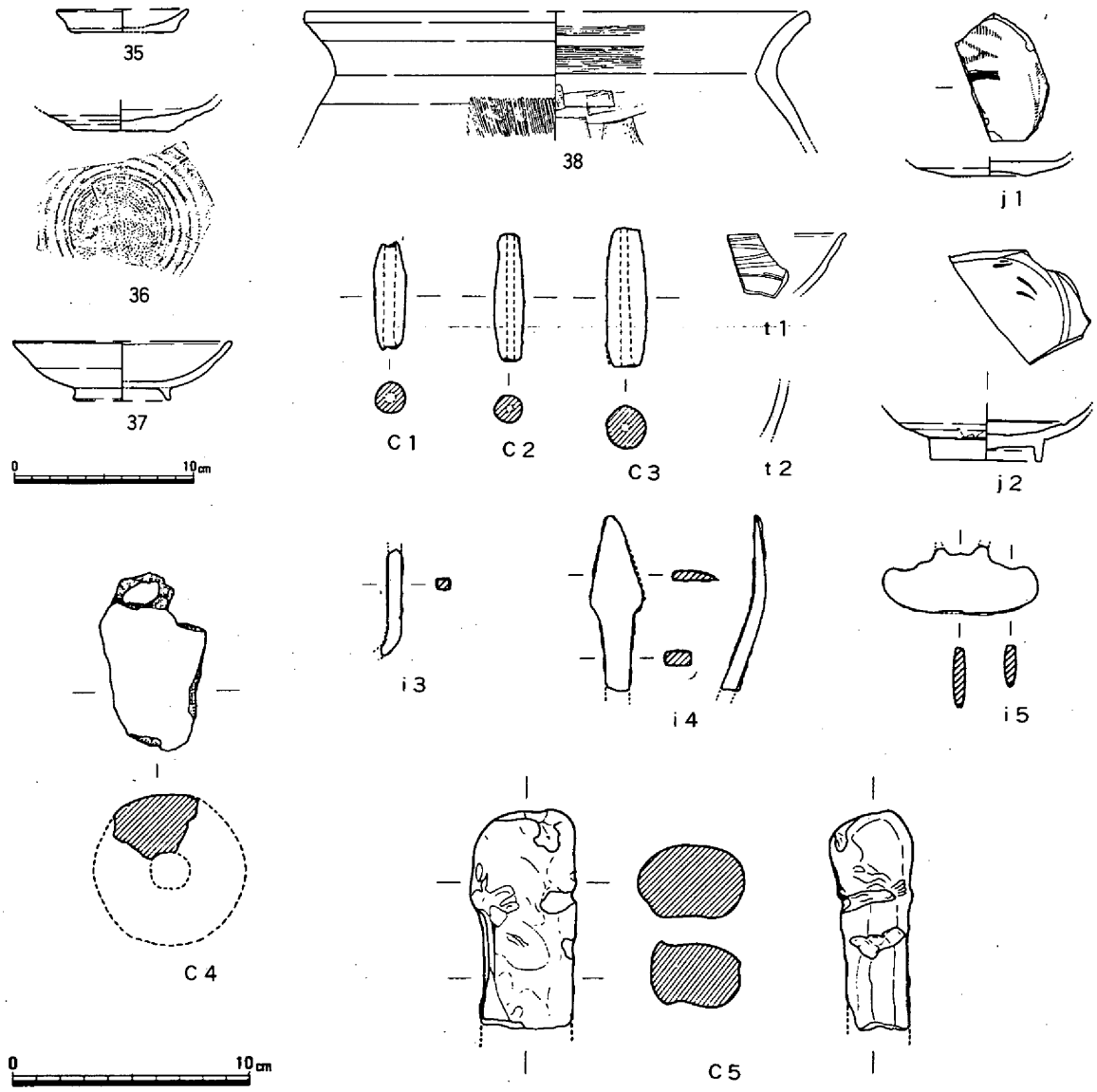
鉄器－５は、携帯用の火打金である。（伊藤）



第33図　溝１断面図



第34図　溝１出土遺物（１）

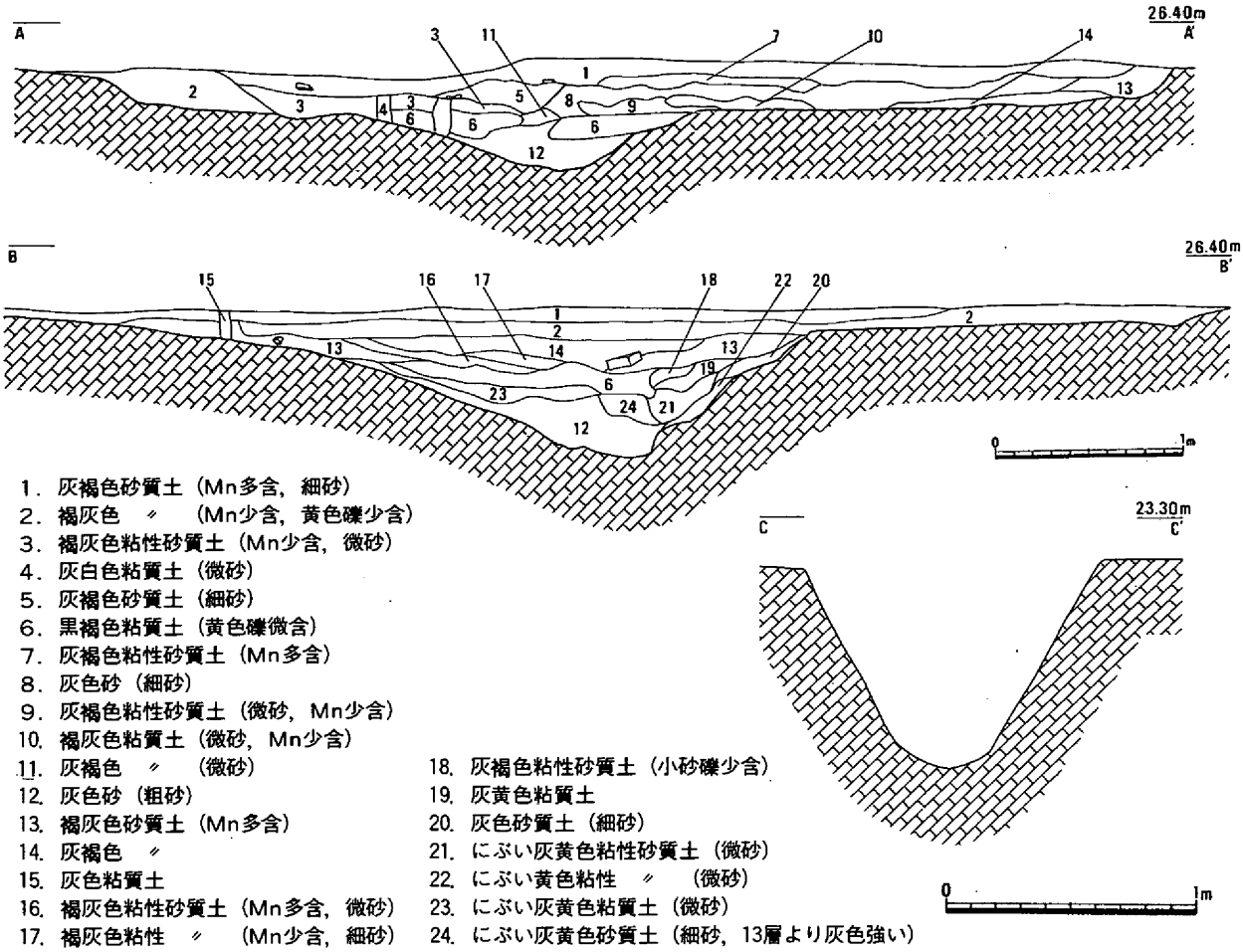


第35図　溝１出土遺物（２）

溝－２（第36・38図）

Ｅ５区、Ｆ５区付近から２本みられ１本は掘立柱建物－４の北東から、もう一つはその北約10ｍの所からみられ、ほぼ東流し、Ｅ７区付近で、合流し北東に流れ、Ｄ11区付近で北側の自然河道に流れこむ。延長は70ｍ近くなる。断面は上部が大きく開き、Ｕ～Ｖ字形をなしている。上流部Ａセクションでは幅６ｍ前後、深さ60㎝で、合流部のＢセクションでは、幅6.5ｍ、深さ80㎝を、下流部Ｃセクションでは上面は河道によって削られているが幅120㎝、深さ80㎝を測る。

溝内からの出土遺物は、土師器、須恵器、平瓦、鉄器などである。１～４は須恵器杯蓋、５～９は須恵器杯身で、５には内外面に漆状の付着物が付いている。11は須恵器盤、12は須恵器甑、13は徳利状になる瓶、14は須恵器高杯、15は短頸壷であるが、体部下半に「和我」と読める篦書きがみられる。この意味については不明である。16は甕体部片ｊ－３・４は輸入陶磁器である。ｒ－10は平瓦、鉄器は釘と考えられる。このように出土遺物は少ないが奈良時代後半から平安時代初期にふくまれるものと考えられる。（伊藤）

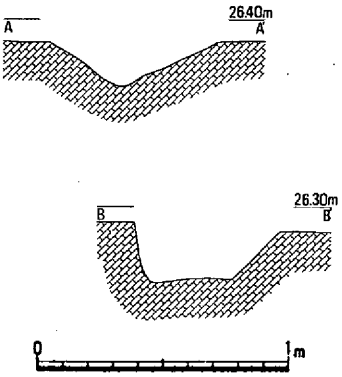


1．灰褐色砂質土（Mn多含，細砂）
2．褐灰色　〃　（Mn少含，黄色礫少含）
3．褐灰色粘性砂質土（Mn少含，微砂）
4．灰白色粘質土（微砂）
5．灰褐色砂質土（細砂）
6．黒褐色粘質土（黄色礫微含）
7．灰褐色粘性砂質土（Mn多含）
8．灰色砂（細砂）
9．灰褐色粘性砂質土（微砂，Mn少含）
10．褐灰色粘質土（微砂，Mn少含）
11．灰褐色　〃　（微砂）
12．灰色砂（粗砂）
13．褐灰色砂質土（Mn多含）
14．灰褐色　〃
15．灰色粘質土
16．褐灰色粘性砂質土（Mn多含，微砂）
17．褐灰色粘性　〃　（Mn少含，細砂）
18．灰褐色粘性砂質土（小砂礫少含）
19．灰黄色粘質土
20．灰色砂質土（細砂）
21．にぶい灰黄色粘性砂質土（微砂）
22．にぶい黄色粘性　〃　（微砂）
23．にぶい灰黄色粘質土（微砂）
24．にぶい灰黄色砂質土（細砂，13層より灰色強い）

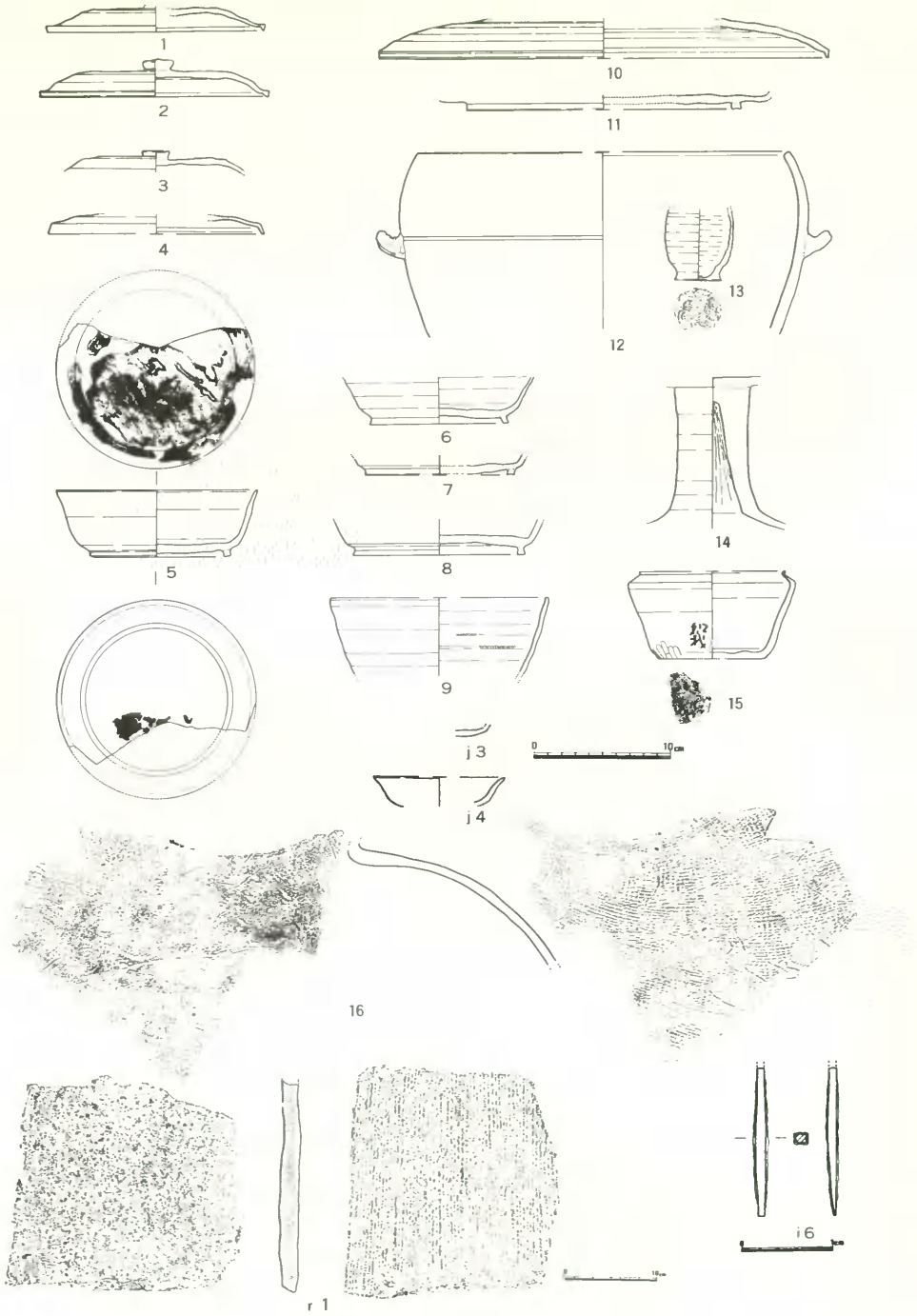
第36図　溝２断面図

溝－３（第37図）

Ｄ５区南西角から始まり東進し、Ｅ７区中央付近で溝－２と合流する。全長30ｍほどで、上流部は削平を受けているが、幅80㎝、深さ20㎝ほどで、７ラインＢセクションでは、幅75㎝、深さ30㎝を測る。上流肩部での標高26.4ｍ、底部26.2ｍ、下流部では肩部26.2ｍ、底部25.9ｍを測る。溝内から出土遺物は、土師器高杯などの小片で実測できるものはなかった。溝－２と同時期のものと考えられる。



第37図　溝３断面図



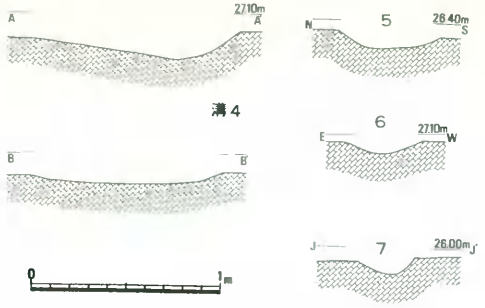
第38図　溝２出土遺物

溝－4（第39図）

Ａ５区からＢ４区にかけてみられる残存長16ｍほどの溝である。遺物も奈良時代の須恵器・土師器の小片が含まれるのみで詳細な時期は不明である。

溝－5（第39図）

Ｄ５区にあり、西側で南に「状に屈折する。これも奈良時代の須恵器杯小片がみられたのみである。



第39図　溝４～７断面図

溝－6（第39図）

Ｆ４区からＧ４区にかけて略南北に伸びる溝である。建物－４に半分近く入り込んでいる。奈良時代の須恵器、土師器小片のみで詳細な時期は不明である。

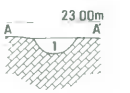
溝－7（第39図）

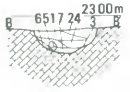
Ｇ５区からＨ５区にかけて南北に6.4ｍほどの長さである。奈良時代の須恵器・土師器小片が出土しているが、建物－７に伴うと考えられる柱穴列－３に沿っており、この時期に降る可能性も充分考えられる。

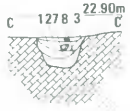
溝－8（第40図）

Ｇ12区付近に位置し、北東から南西にさらに南東に向けくの字状になり、南端は南河道に切られている。幅は10～34㎝、深さ８～16㎝を測る。溝内より奈良時代後半に属する横瓶１と吹子の羽口Ｃ６が出土している。鍛冶関係の遺構の可能性が考えられる。

（伊藤）

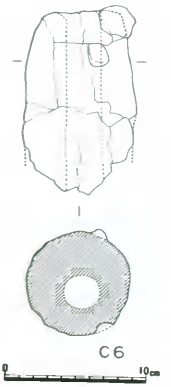


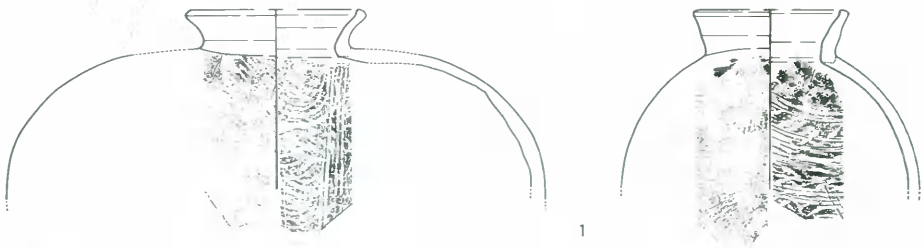




(1/30)

1．暗灰褐色砂質土（Mn含，カーボン含）
2．灰褐色砂質土（微砂）
3．褐灰色粘性砂質土（Mn少含）
4．灰褐色砂質土（Mn微少）
5．灰色粘性砂質土
6．灰色　〃　（黄色地山粒少含）
7．褐灰色　〃
8．褐灰色　〃　（７層よりもMn多い）





第40図　溝８断面図および出土遺物

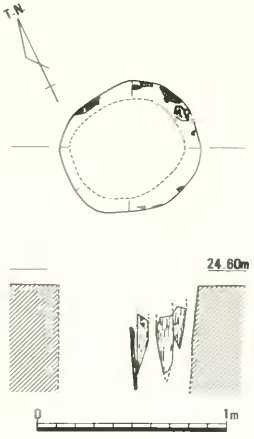
(4)　井戸

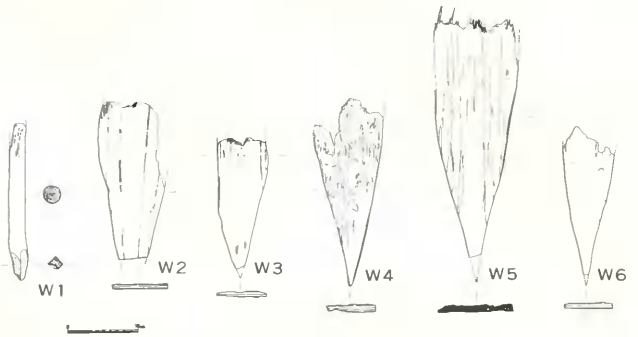
井戸－1（第41図）

Ｉ５区に位置し、古墳時代の河道－２上に掘られている。この井戸－１は河道－２のトレンチを重機で掘削中に検出されたため、遺構の上部は不明であり、また底部も湧水のため判然としなかった。残存部の形状は、掘方の平面が長径74cm短径68cmのほぼ円形で、壁面は、ほぼ垂直に掘り込まれている。そして、壁面の崩壊を防ぐために、矢板（Ｗ２～６）を周辺に打ち込み、さらに矢板を固定するために杭（Ｗ１）を打ち込んでいる。検出した時点には、矢板は１/３程度しか残存していなかったが、本来は壁面全体に打たれていたものと考えられる。矢板の材質はコウヤマキ、杭の材質はコナラで、矢板は桶材の二次的利用の可能性がある。

この他の遺物としては、古墳時代の土師器小片も出土したが、井戸－１に伴うものではなく、河道－２の埋土に含まれる遺物と考えられる。

井戸－１の時期は確定できないが、井戸の形態等から、奈良時代頃と推定される。（横山）





第41図　井戸１平・断面図および井側材

(5)　土器埋納遺構

土器埋納遺構－１（第42図）

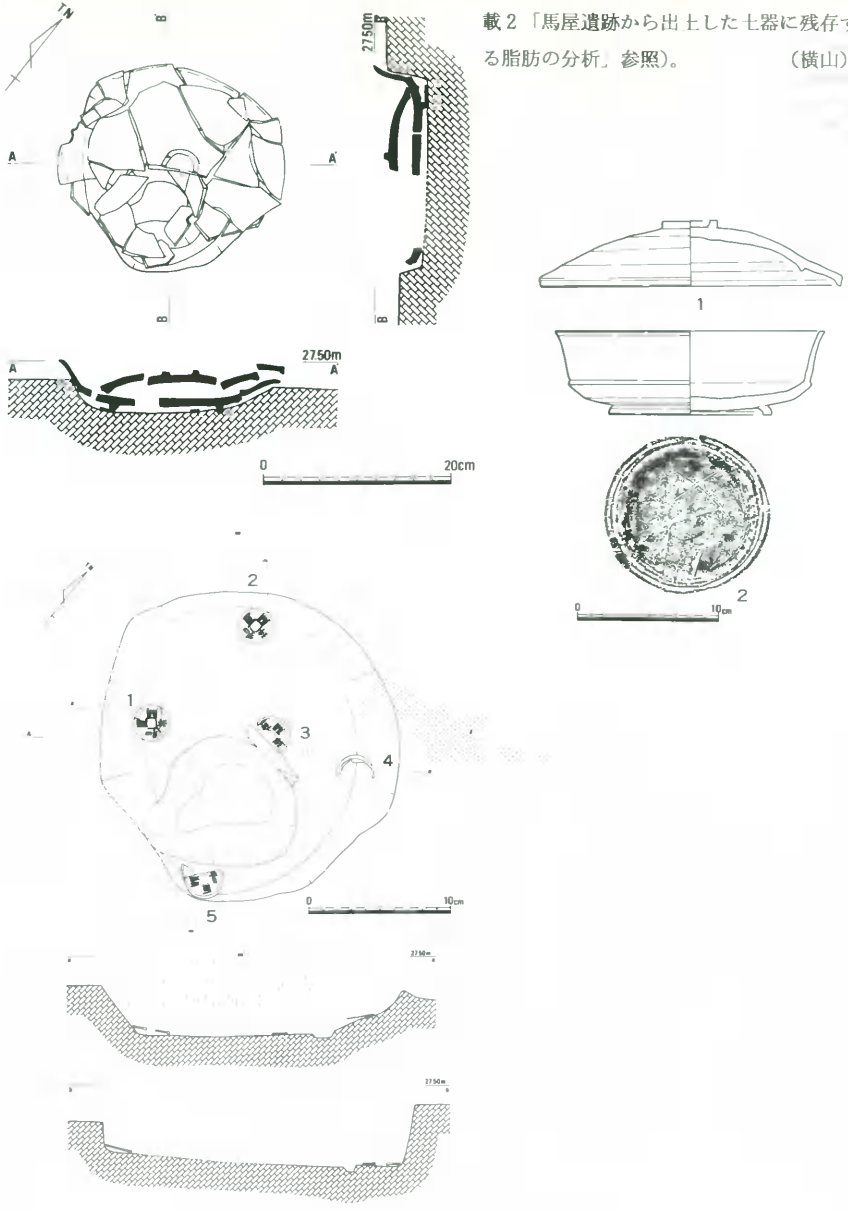
建物－２の北東約4.4m、建物－３の南東約3.0mのＧ３区で検出された。南北で20.4cm、東西22.0cmのやや不整形気味の円形状を呈している。南側部分は、後世の杭と考えられる小型ピットが重複している。検出レベルは標高27.48m、底面のレベルは標高27.44mを測る。

この小土壙内に、壁面・底面と間隙がない状態で、蓋をされた須恵器杯が埋納されていた。また、杯の直下からは中央に１枚（Ｃ３）、その四方に４枚（Ｃ１・Ｃ２・Ｃ４・Ｃ５）の和同開珎が、少なくとも４枚は銭文を上にした状態で出土した。Ｃ１・Ｃ２・Ｃ４は原位置を保っているが、Ｃ３・Ｃ５は後世杭を打ち込んだ際、移動したと考えられる。和同開珎は５枚とも、錆化が著しく進んでおり、特に東側のＣ４は原型をほとんど留めていない。４枚の和同開珎（Ｃ１・Ｃ２・Ｃ３・Ｃ５）とも、一般的に新和同とする型式である。

埋納されていた須恵器杯蓋１・杯身２は、どちらも金属器模倣器である。蓋は輪状のつまみをもち、内側に返りを有する。身は体部下半に稜をもち、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部は外反する。また高台内に×字状のヘラ記号が施されている。この金属器模倣器は、岡山県下で現在のところ、類例を見ないものである。

この遺構の時期は、奈良時代前半と推定される。また、杯身内部の土壌を脂肪酸分析を依頼した結

果、内部に納められていたものは、人間の胞衣の可能性が高いという結果を得た（付載２「馬屋遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析」参照）。　（横山）



第42図　土器埋納遺構平・断面図・和銅開珎出土状態および出土遺物

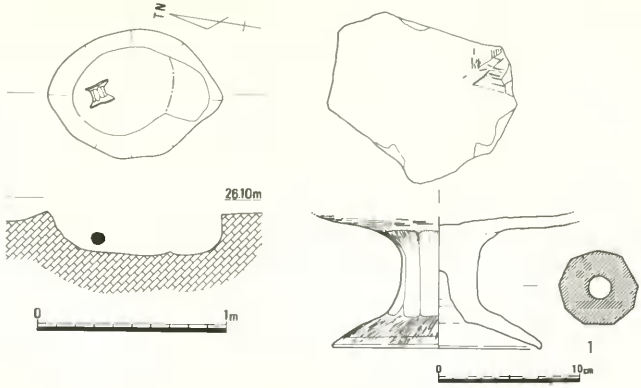
(6)　土壙

土壙－1（第43図）

Ｃ6区に位置する。平面は楕円形で、長軸が92㎝、短軸が69㎝である。断面は、浅いU字状を呈し、深さは23㎝を測る。

遺物としては、丹塗りの土師器高杯1が出土している。脚柱部は短脚で、9面に面取りされている。また杯部内側に葉脈状の暗文が一部残存している。

遺構の時期は、奈良時代と推定される。　（横山）



第43図　土壙1平・断面図および出土遺物

(7)　ピット

ピット－1（第44図）

Ｅ1区建物－1の西方15mの所にあり、直径40㎝深さ30㎝のピットで、土師器高杯杯部1が出土している。内外面とも丹塗りを行っている。

ピット－2（第44図）

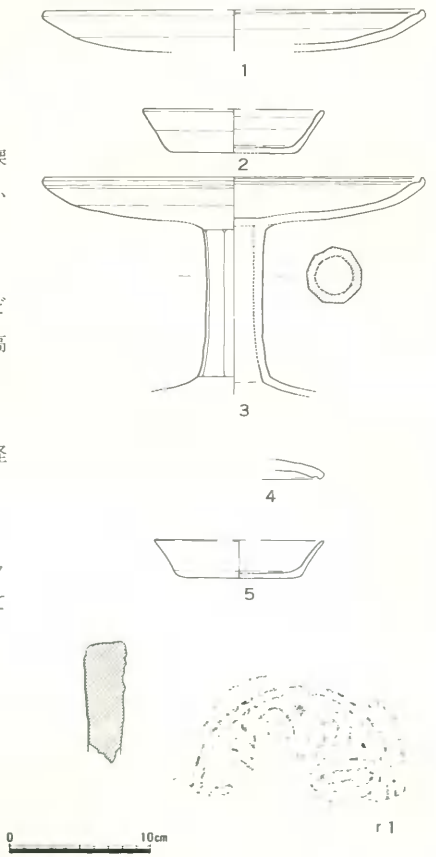
Ｇ2区建物－3の西北角付近にあり、一辺60㎝ほどのピットで、土師器杯2、高杯3が出土している。高杯は丹塗りが行われ、脚柱部は九面体となる。

ピット－3（第44図）

Ｇ2区建物－3の西柱穴列上にあった柱穴で、直径50㎝のピットで土師器高杯4、杯5が出土している。

柱穴－4（第44図）

Ｄ13区河道－1の肩部付近にあり、直径50㎝のピットで、備前国分寺1式の軒丸瓦ｒ－1が1点出土している。　（伊藤）



第44図　ピット1～4出土遺物

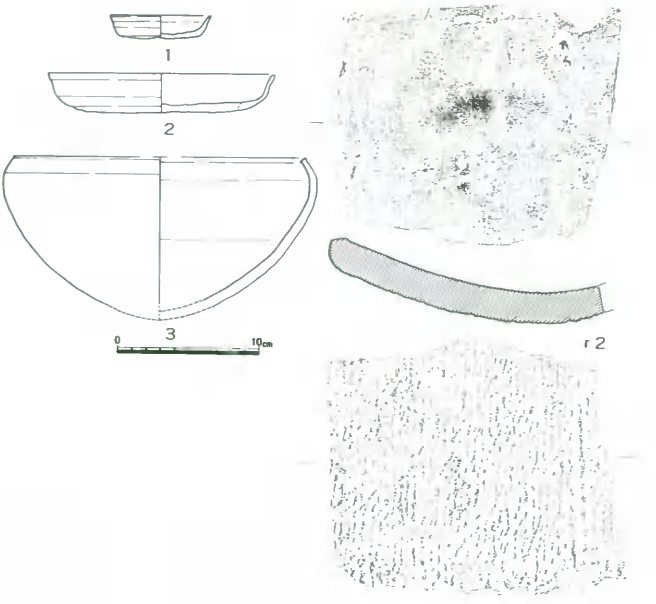
(8)　たわみ

たわみ－1（第45図）

Ｆ6区に位置し、溝－2の東側南に接する。平面形は不整形で、西側は後世の削平を受けている。検出レベルは25.46～25.51m、底部のレベルは25.36～25.44mを測る。

図化した遺物（第45図）は、1が須恵器小皿、2が須恵器皿である。3は須恵器鉢で、金銅鉢を模倣したものである。ｒ2の平瓦は、表に布目圧痕、裏に縄目叩きが残る。

この遺構の時期は、奈良時代後半期と考えられる。（横山）

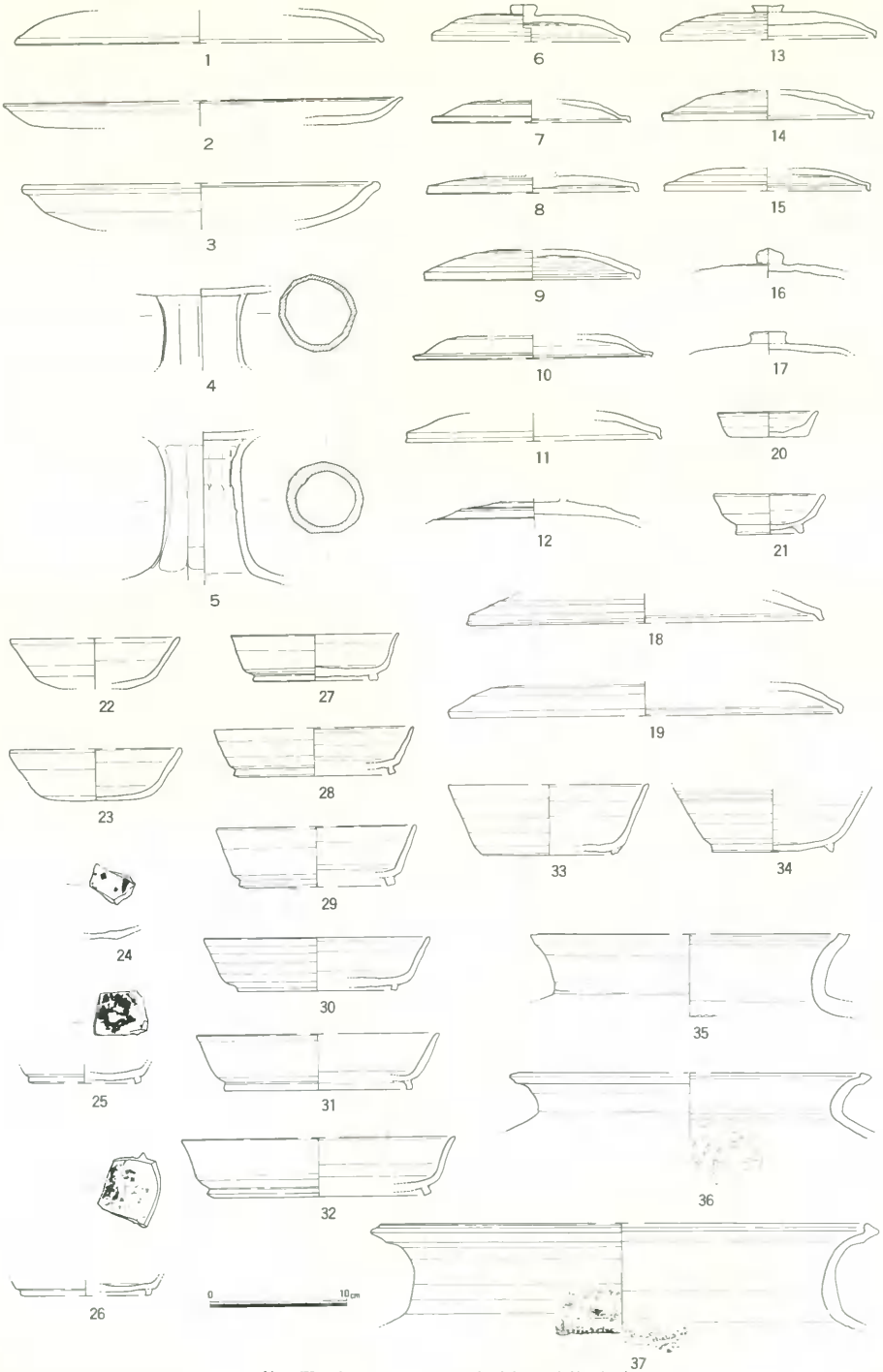


第45図　たわみ1出土遺物

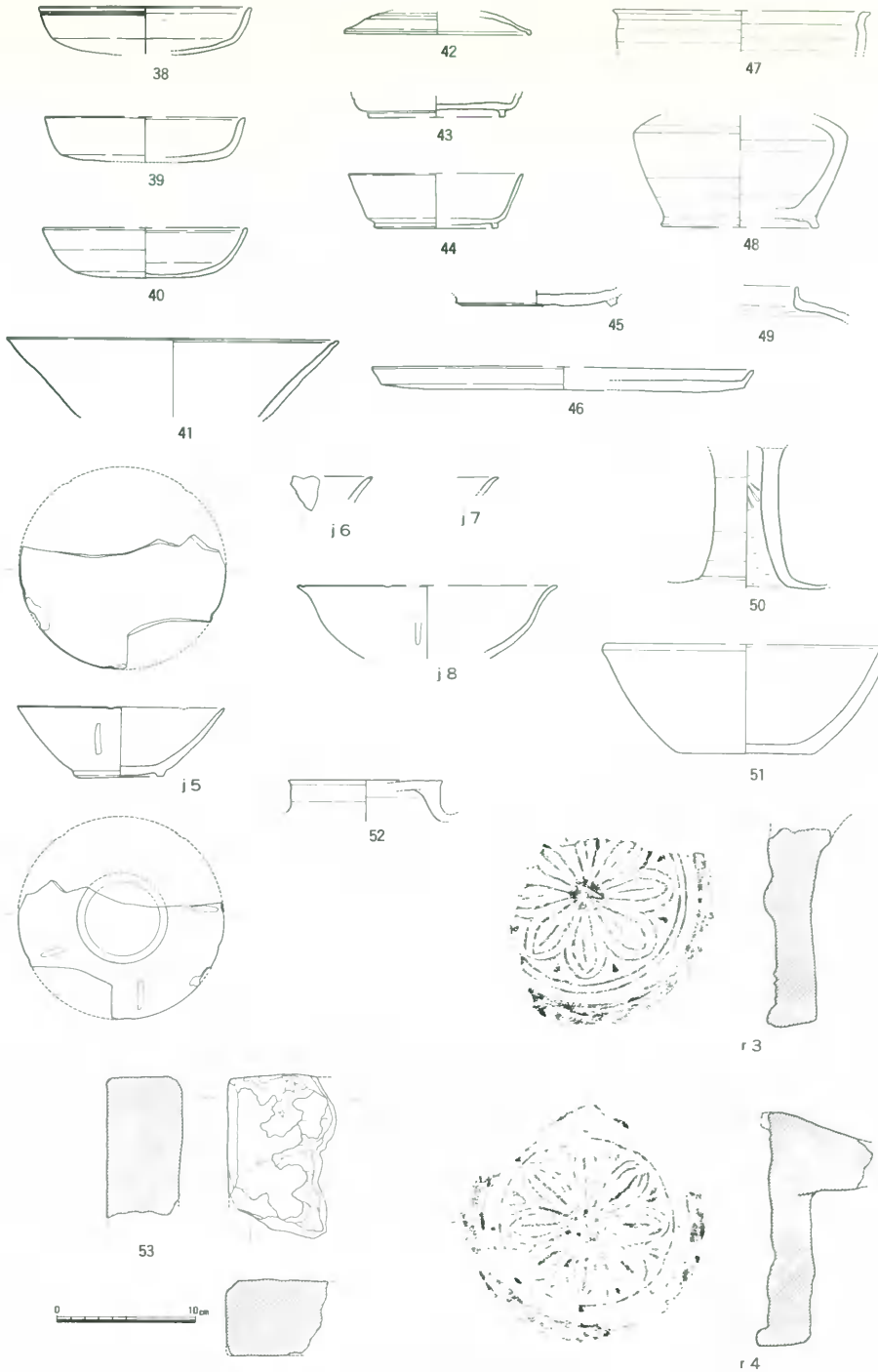
(9)　包含層の遺物（第46・47・48図）

盛土部調整区から出土した、奈良時代の遺物は、土師器、須恵器、瓦など数多くが出土している。1～5、38～41は土師器で、1は蓋、2は皿あるいは盤、3～5は高杯でいずれも全面に丹塗りを行っている。6～19・42は須恵器杯蓋、22～34、43～45は杯身、24～26の杯には漆状の皮膜が付着している。52は円面硯で陸から海にかけての小片である。ｊ5～8越州系の青磁椀で、5は口縁部を篦状工具で押え五稜花になる輪花椀である。体部にも口縁部と同じ下部に縦方向に2㎝近くの押えがみられる。底部は輪高台になり、砂目が付着する。内面にも3ヶ所ほどトチンの跡がみられる。胎土は緻密で、色調は濁緑色を呈する。

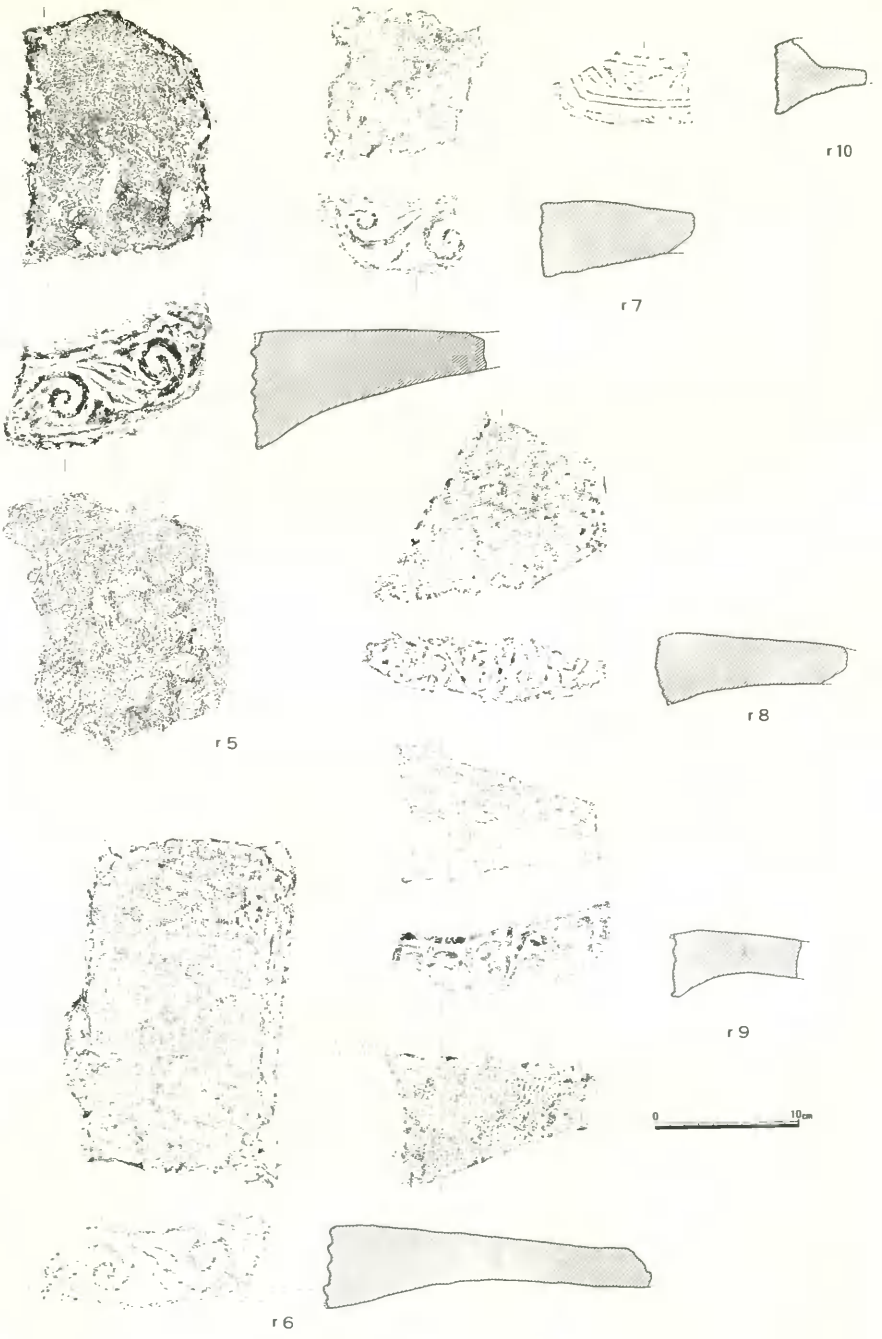
Ｃ7は瓦塔で、大きさは不明であるが、厚さは5.3㎝を測る。瓦はｒ3～10、ｒ3・4は国分僧寺に使用された軒丸瓦で3がⅠ式、4がⅡ式のものである。軒平瓦5～7はⅢ式、7は平城京6663系、8・9はⅡ式のものである。（伊藤）



第46図　包含層出土の奈良時代の遺物（1）



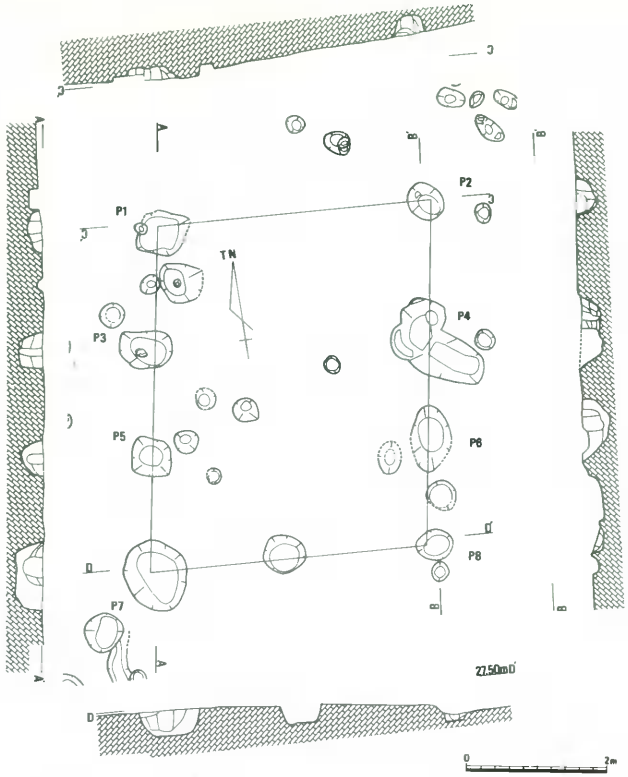
第47図　包含層出土の奈良時代の遺物（2）

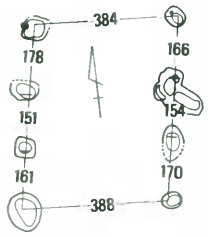


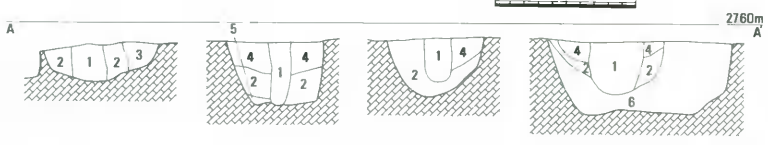
第48図　包含層出土の奈良時代の遺物（3）

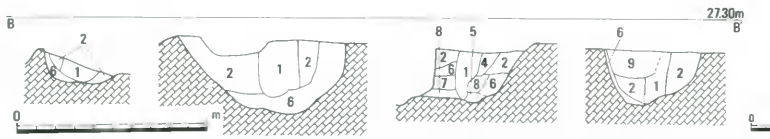
3）平安時代前半～中頃の遺構・遺物

(1)　掘立柱建物









第49図　建物５平・断面図，柱穴断面図および出土遺物

1．褐灰色砂質土（粘質土混，Mn含）
2．暗灰色　〃　（　〃　，小礫含）
3．暗灰色　〃　（　〃　，Mn含）
4．灰褐色　〃　（Mn含）
5．灰黄色粘質土
6．にぶい黄褐色砂質土
7．褐灰色砂質土（粘質土混）
8．灰褐色　〃　（　〃　）
9．灰褐色　〃　（Mn含，４層より灰色強）

建物－５（第49図）

Ｄ４区周辺に位置する、桁行３間×梁行１間（590㎝×388㎝）の側柱建物である。平面は平行四辺形に近い歪な形をしている。建物面積は18.7㎡で、建物の主軸はＮ－10°－Ｅを示している。

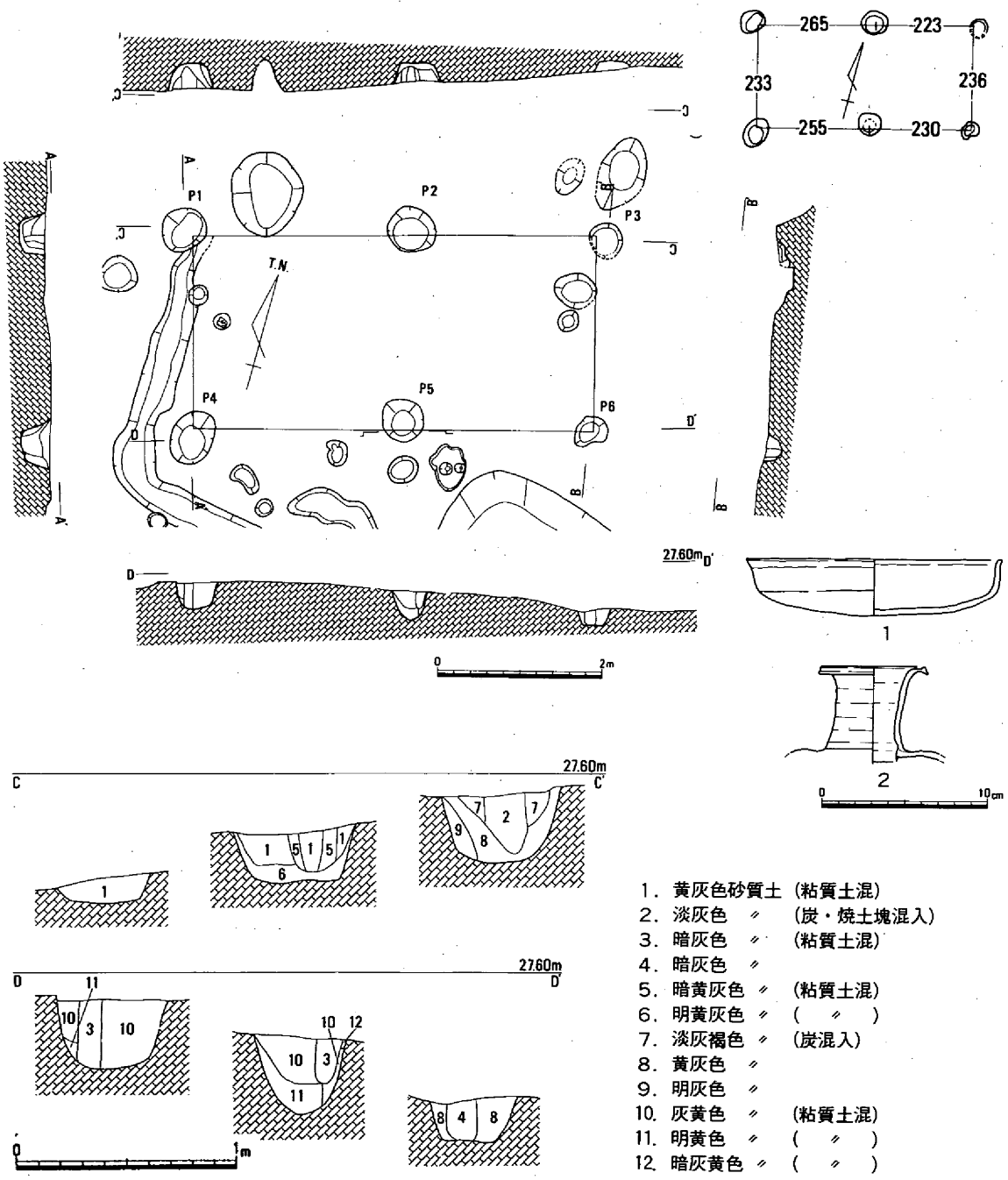
建物の検出レベルは標高27.00～27.50m、また柱穴底のレベルで標高26.88～27.28mである。柱間距離は桁行で151～178㎝とばらつきがあり、梁間で384～388㎝を測る。柱穴の掘方平面は不整形で、大きさにもばらつきがある。柱痕跡は全てに確認できた。遺物は、Ｐ８からのみ出土した。図化できた遺物は１のみで、須恵器杯蓋である。

この建物の時期は、平安時代前期と考えられる。　（横山）

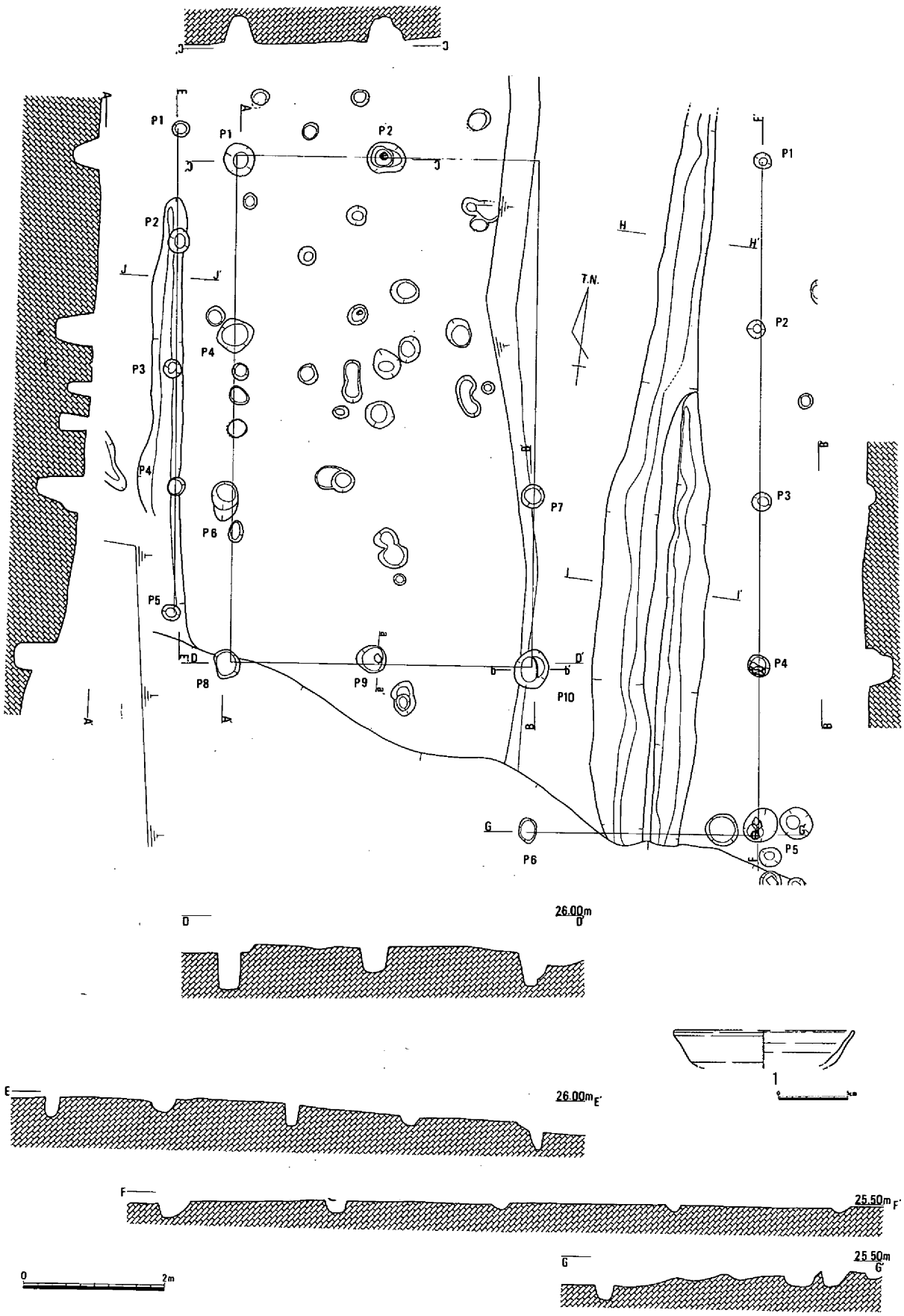
建物－６（第50図）

Ｅ４区を周辺に位置し、建物－５と重複している。建物の規模は、桁行２間×梁行１間（480～485cm×233～236cm）で、面積は11.6㎡である。建物の主軸は、Ｎ－75°－Ｅを示す。

建物の検出レベルは標高27.02～27.55ｍ、柱穴底で26.84～27.20ｍである。柱間距離は桁間で223～265cm、梁間で233～236cmを測る。柱穴の掘方平面は、直径45～52cmのほぼ円形状を呈している。柱痕跡はＰ３・Ｐ４以外の４本で確認できた。図化した遺物は、１が土師器杯でＰ１から、２が須恵器壷の口縁部から頸部でＰ５からそれぞれ出土した。この建物の時期は、建物－５よりも後出の平安時代前期と推定される。　（横山）



第50図　建物６平・断面図，柱穴断面図および出土遺物



第51図　建物７　柱穴列２・３平・断面図および出土遺物

建物－７（第52図）

Ｇ５区周辺に位置する。建物の規模は、桁行３間×梁行２間（720cm×428cm）である。東側桁部のＰ３・Ｐ５は、後世の削平により検出できなかった。この主屋の西側に４間の柱穴列－２と東から南側に５間の柱穴列－３を伴う。柱穴列－３は、建物－７の柱穴とそろっており、建物－７の広庇となる可能性がある。

建物面積は30.8㎡で、建物の主軸はＮ－6.5°－Ｗを示す。建物の検出レベルは標高20.20～25.92m、柱穴底のレベルは標高24.92～25.59mである。柱間距離は、桁間で240cm、梁間で209～219cmを測る。

柱穴の掘方平面は、直径（長軸）約32～55cmのほぼ円形または楕円形状を呈している。柱痕跡は、Ｐ２・Ｐ９・Ｐ10の３本で確認された。またＰ２には、根石に代用された平瓦が遺存していた。

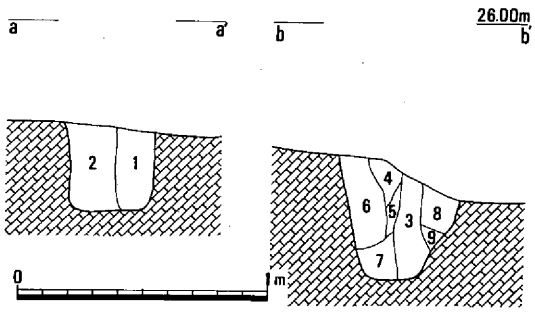
遺物は、Ｐ２から平瓦、Ｐ４から土師器皿、Ｐ６から土師器小皿や平瓦、Ｐ８から土師器杯、Ｐ９から須恵器甕や土師器甕、などの小片が出土した。図化した遺物１は、土師器杯の口縁部から体部の小片でＰ８から出土した。口径は、推定値で約12.8cmを測る。

なお、建物－７の内部にあたる、時期不明のピット－14から鉄製鋤先が出土している。鋤先の埋納遺構の地鎮的性格については、すでに指摘されており、このピット－14も建物－17に関連した地鎮遺構の可能性が強い。　（横山）

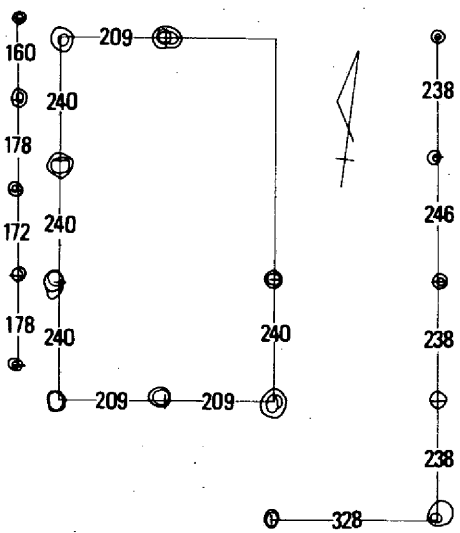
柱穴列－２（第52図）

建物－25の西側柱穴列の80cm西側に４間分あり、溝－７内に３間分が入る。柱間は160～178cmを測る。

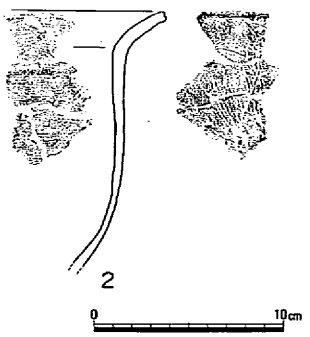
出土遺物はみられないが、柱穴列－３とともに建物－７の柵列と考えられる。



1．灰黄色粘質土
2．明黄色　〃
3．灰色　〃　（炭化物少含）
4．褐灰色　〃
5．灰色　〃　（Mn微含）
6．黄褐色　〃
7．灰色　〃
8．灰褐色　〃　（黄色地山ブロック少含）
9．灰色　〃　（　〃　微含）



第52図　建物７　柱穴列－２・３平面略図・柱穴断面図および出土遺物



柱穴列－３（第52図）

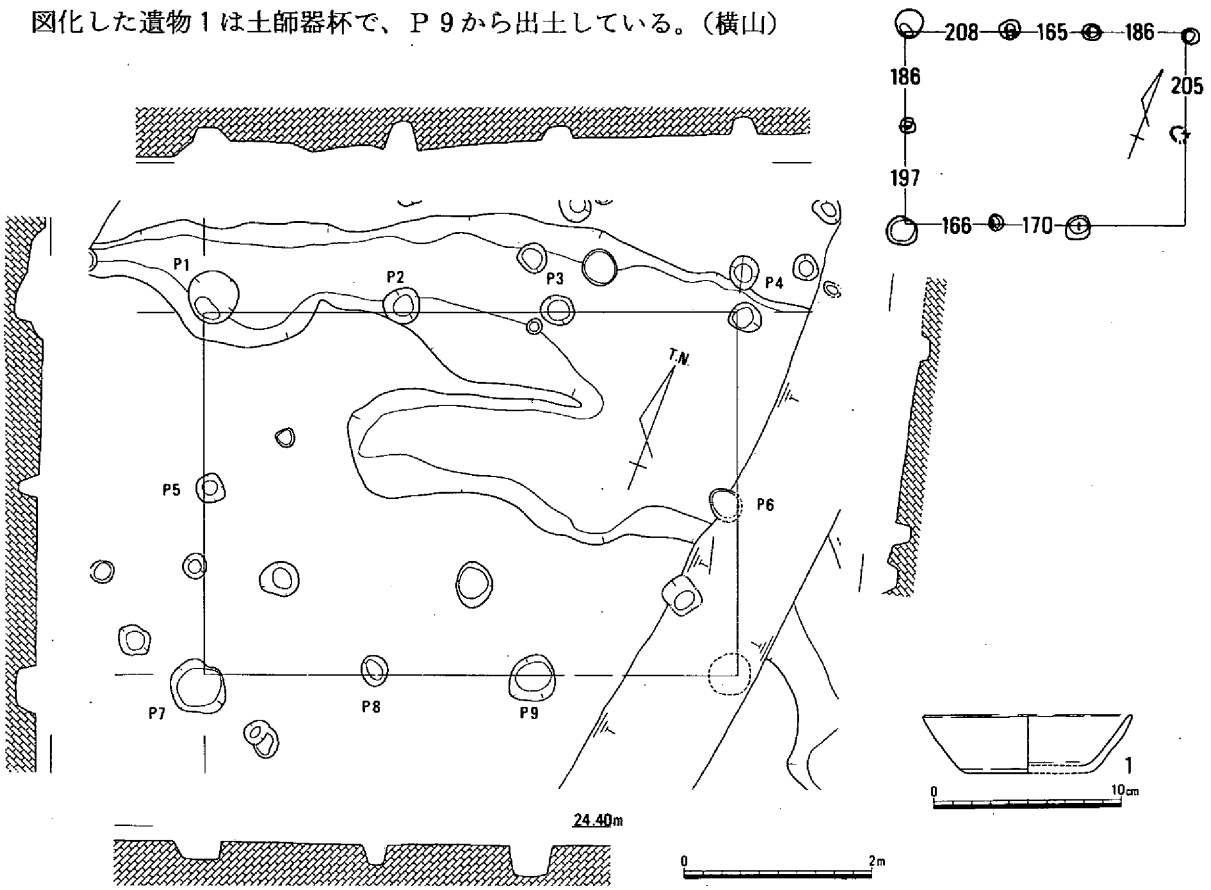
建物－７の東側柱列から320cm西側に」字状に、南北４間分、東西１間分を検出した。建物－７とこの柱穴列の丁度中間に溝－36が存在する。南北の柱間隔は238～249cmで、東西は328cmを測る。柱穴から土師器杯１、鍋の小片２が出土し、他からも土師器椀片などが出土している。この柱穴列は、柱穴列－２とともに建物－７を囲むように存在し、建物－７に伴う柵列で、また、この溝－７・36もこの建物－７と関連したものと考えられる。時期は鎌倉時代前半期と推察される。　（伊藤）

建物－８（第53図）

Ｇ８区周辺に位置する。一部建物－15と重複して検出された。建物の規模は、桁行３間×梁行２間（559cm×383cm）である。南東角のＰ－10は、後世の用水路により削平され、検出できなかった。

建物面積は21.4㎡で、建物の主軸はＮ－70°－Ｅを示す。建物の検出レベルは標高24.02～24.36mで、柱穴底のレベルは標高23.87～24.04mである。柱間距離は、桁間で165～208cm、梁間で186～205cmを測る。柱痕跡は確認できなかった。

図化した遺物１は土師器杯で、Ｐ９から出土している。（横山）



第53図　建物８平・断面図および出土遺物

建物－９（第54図）

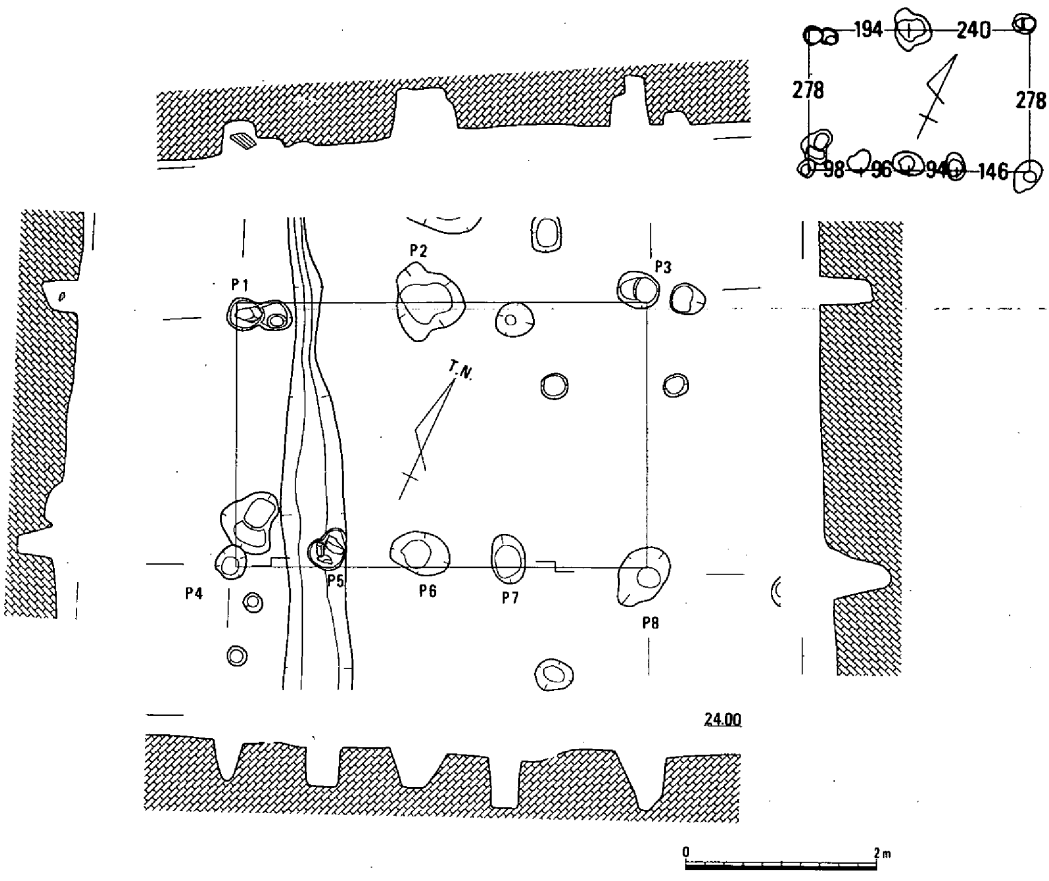
Ｈ９区周辺に位置する。建物の規模は、基本的には。桁行２間×梁行１間（434cm×278cm）である。しかし、南側桁部には、それぞれの柱間に支えの柱が検出されている。

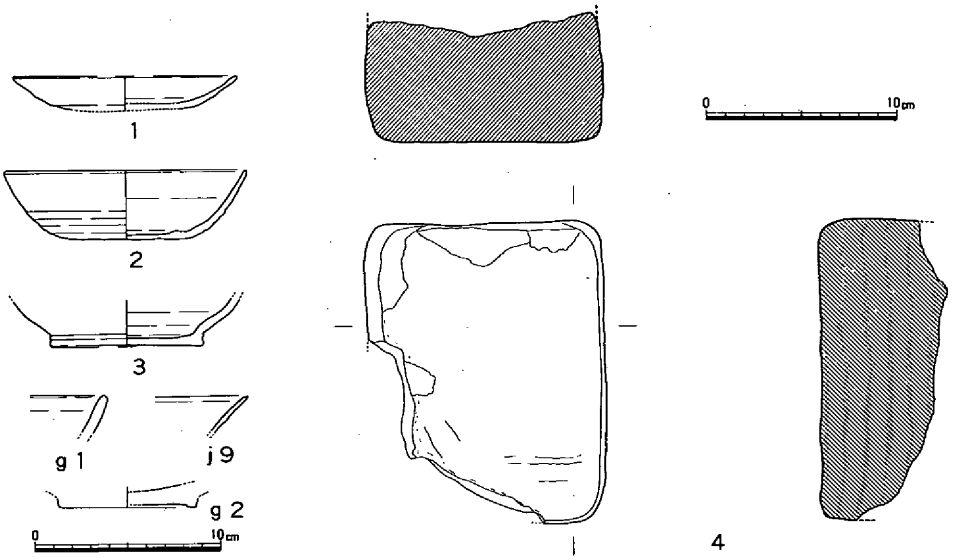
建物面積は12.1㎡で、建物の主軸はＮ－65°－Ｅを示す。建物の検出レベルは標高23.66～23.88mで、柱穴底のレベルは標高23.09～23.48mである。柱間距離は、桁間で94～240cmを測る。

柱穴の掘方平面は、楕円形または不整形な形状を呈し、大きさはばらつきがある。

遺物は、Ｐ２から土師器椀・白磁小皿や、Ｐ３から土師器皿・椀や緑釉陶器椀、などが出土した。図化した遺物は、次の７点である。１は土師器の皿で、Ｐ３から出土した。２は土師器の杯で、Ｐ３から出土している。３は土師器の椀で、円盤高台で内底面に段をもつ、西播磨系の土器である。Ｐ２から出土している。ｊ９は白磁の小皿、ｇ１・ｇ２は緑釉陶器の椀である。ｇ２は削り出し高台で、山城系のⅡ期古型式の様相を示している。４は土師質の埦である。

建物の時期は、出土遺物の様相から、平安時代中期頃と推定される。（横山）



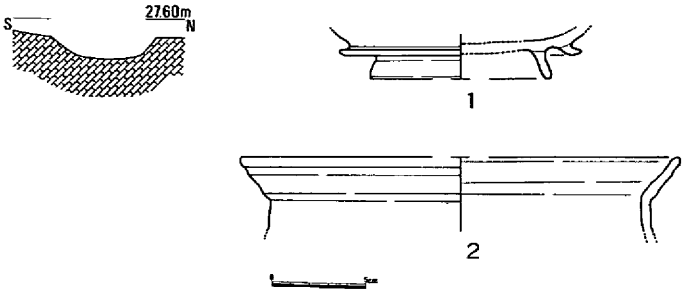


第54図　建物９平・断面図および出土遺物

(2)　溝

溝－9（第55図）

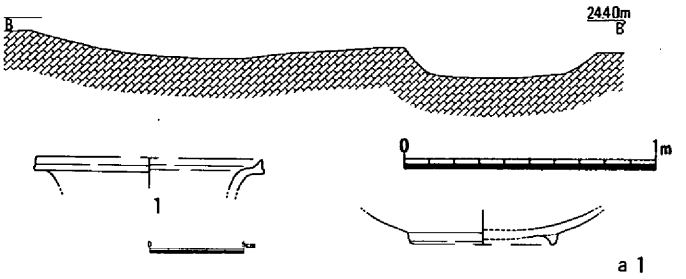
Ｃ３～Ｄ３区にかけ孤状になる溝状の遺構がある。幅45～120cm深さ10cm程である。溝内より土師器椀１（托状になる）、甕２が出土している。



第55図　溝９断面図および出土遺物

溝－10（第56図）

Ｇ７区からＧ８区にかけて延長7.4mほどあり、幅は92cmから342cm、深さは14cmを測る。出土遺物は、須恵器壷の口縁部、灰釉、黒色土器片などがある。時期は、平安時代中頃と考えられる。



第56図　溝11断面図および溝－10・11出土遺物

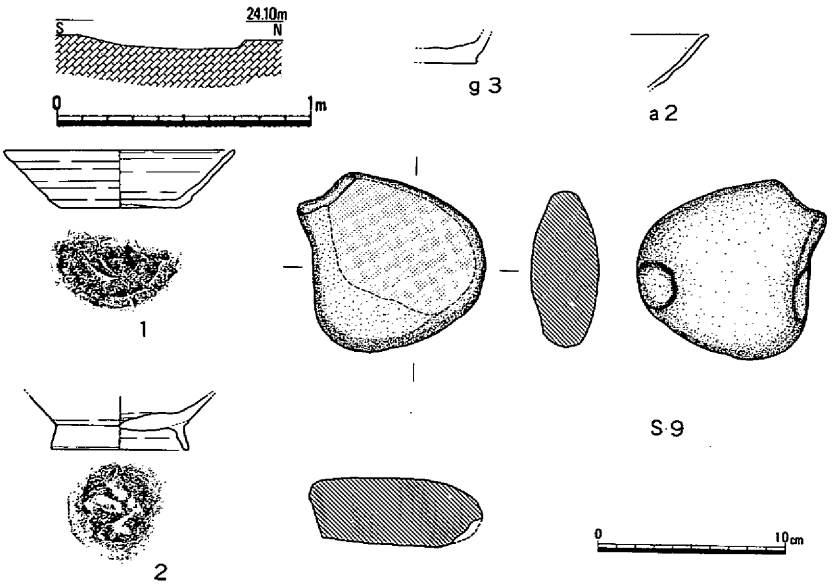
溝－11（第56図）

Ｇ８区かＧ９区にかけて東西に約８mほどの溝である。東半は上面をたわみ状遺構によって削平を受けているが幅１m深さ16cmを測る。溝北側肩の標高は24.04m、底部で23.82mである。遺物は灰釉陶器１点が出土している。西側の溝－10、東南の溝－12など途切れているが一連の溝と考えられ、遺物も少ないが、ほとんど同一時期の10～11世紀代のものである。しかし、建物－52・22を囲むようにもみられ、建物は平安時代末から鎌倉時代初期に降る可能性も考えられる。

溝－12（第57図）

Ｇ９区付近で建物21の南西角に北西から南東に向け約2.8m程が残存していた。幅は狭い所で58cm、広い所で120cm程ある。深さは６cmと浅い。

溝内より須恵器杯１、土師器椀２の他に緑釉灰底部と壷片、灰釉皿片、黒色土器の椀、叩き石状の石器などが出土している。



第57図　溝12断面図および出土遺物

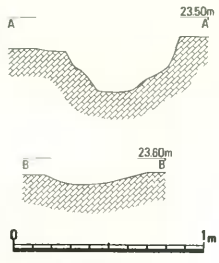
溝－13

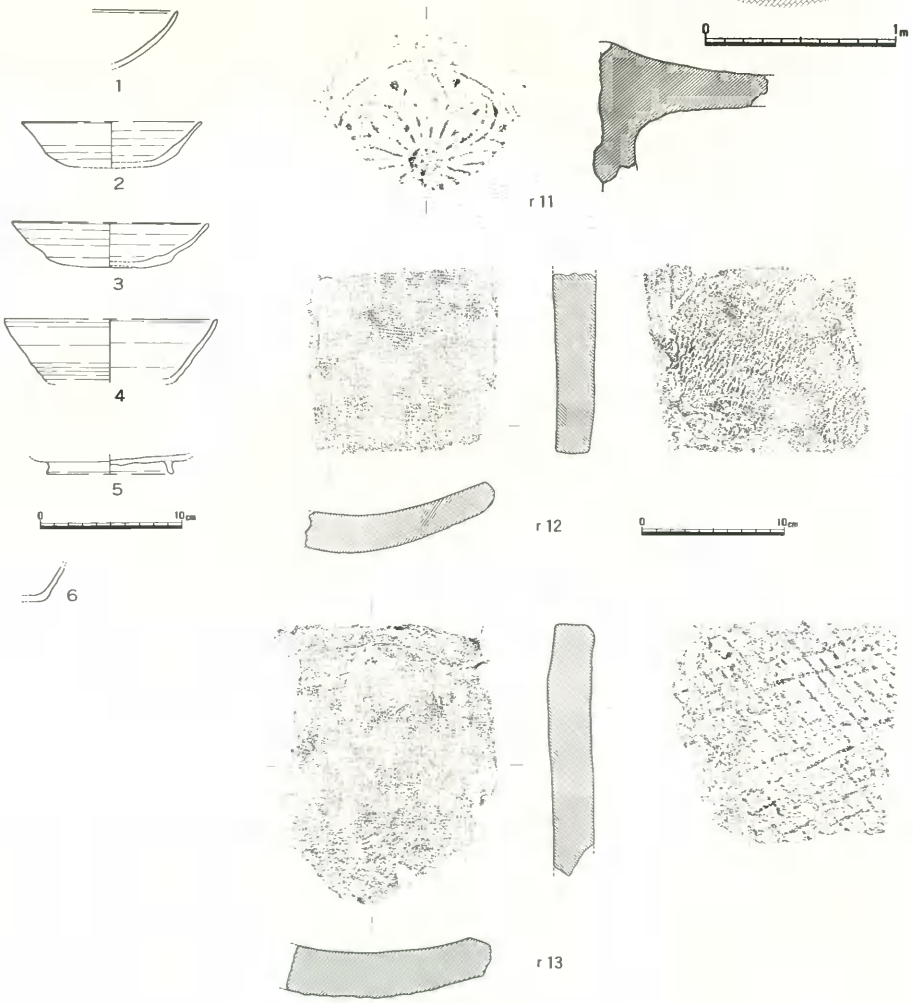
Ｆ10区からＦ11区にかけてほぼ東西に走る溝で、全長85m程ある。幅20～37cm、深さ９cmを測る。後世の溝－16と直行し溝－51とはほぼ並行する。建物－14の南柱列と同じように走り、この溝は溝16・51とともに建物－14と関係ある溝の可能性がある。　（伊藤）

溝－14（第58図）

G12区周辺に位置し、溝－３の西側部分に並行して北西から南東に向って流路を取り、南河道内に流れこむ溝である。全長５ｍ程で、河道部に近い所で幅約80㎝、深さ40㎝、中程で70㎝、深さ10㎝ほどである。上流部での標高23.5m、河道部で上面が23.4m、底部で23mである。

溝内からの出土遺物は、土師器椀１・２～３、須恵器杯４・６、盤５、備前国分寺Ⅰ式の軒丸瓦ｒ11、平瓦ｒ12、平安時代の裏面に斜格子叩きをもつ平瓦ｒ13、などが出土している。溝の時期は出土遺物から奈良時代後半から平安時代後半にかけてのものと考えられる。





第58図　溝14断面図および出土遺物

溝－15（第59図）

D13区に位置し、南北に２ｍ程の短い溝で、幅110㎝、深さ30㎝で溝13に切られている。溝内から土師器杯２点１・２が出土している。

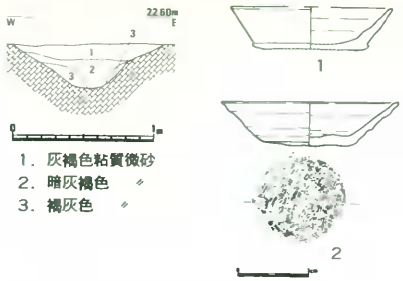
溝－16（第60図）

E11区からF11区の略南北溝で、幅12～40㎝、深さ19㎝ほどの溝である。建物－14と柱穴列７の丁度中程にあり、建物－14に伴う溝の可能性もある。溝内から平安時代に含まれる須恵器椀１、土師器椀、土師器小片が出土している。

溝－17（第61図）

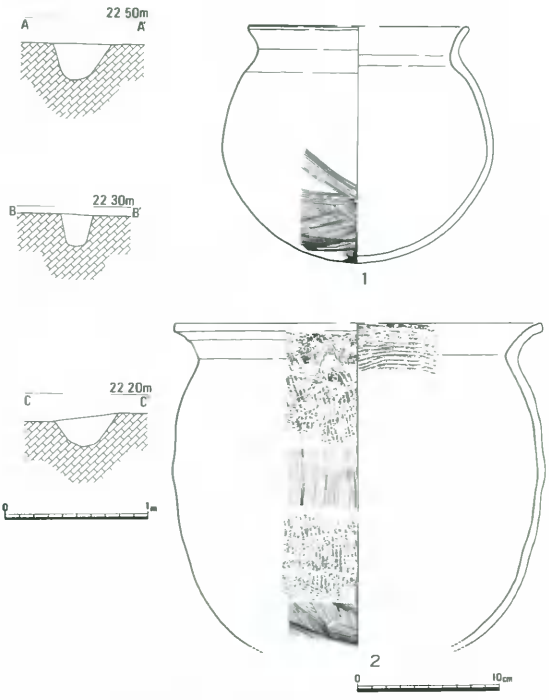
F14区付近から北東のD15付近略南北に流れる溝で、南端は南河道で、北端は北河道で削られている。南側での幅40㎝、深さ25㎝、中程で幅20㎝、深さ20㎝、北端で幅40㎝、深さ20㎝を測る、南端での底部は標高22.05ｍ、北端で21.90ｍである。

溝内から土師器壷点１・甕２と瓦器椀・白磁小皿小片が出土している。詳細な時期は不明であるが、平安時代の中に入るものと思われる。　（伊藤）



第59図　溝15断面図および出土遺物

第60図　溝16断面図および出土遺物



第61図　溝17断面図および出土遺物

(3)　井戸

井戸－２（第62図）

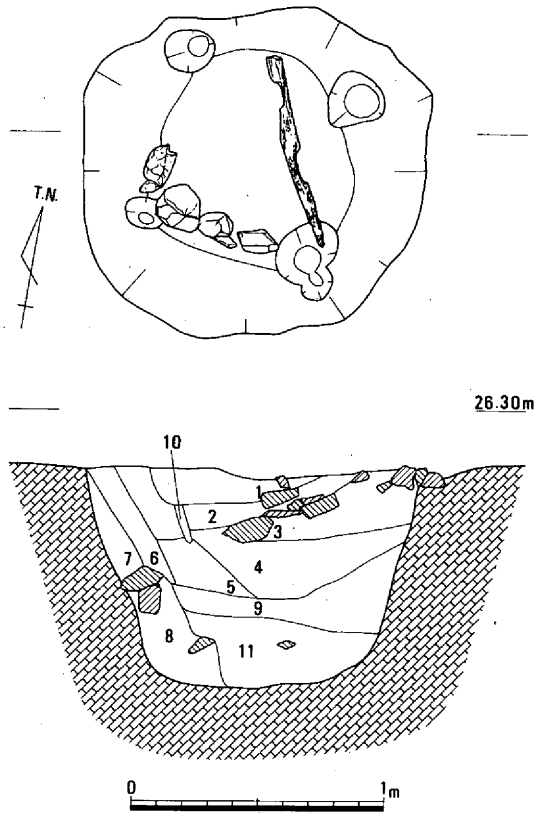
Ｅ４区に位置する、素掘りの井戸である。上部は大きく後世の削平を受け、本来の規模、形状は不明である。残存部の形状は、掘方の平面が長軸136㎝、短軸129㎝のほぼ円形で、壁面は内側にやや傾斜をつけて掘り込まれている。残存部の深さは96㎝で、底面の標高は25.40～25.45ｍを測る。

また、底部の北東・南東・南西・北西４ヶ所に用途不明のピットが検出されている。

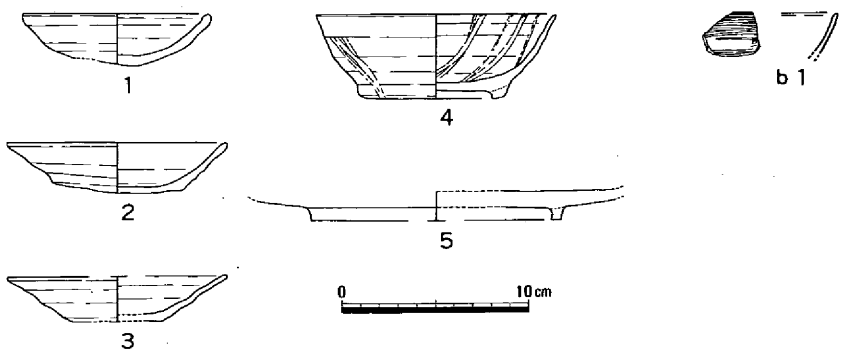
出土遺物のうち、図化出来たものは次の６点である。１は土師器の皿で、底部を指押さえによって調整している。２・３も土師器の皿である。５は須恵器の高台付き盤、４は須恵器の椀で内外面とも緋襷の痕跡が残る。また黒色土器Ａ類ｂ１の小片も１点出土している。

土器のほかにも、井戸の底面から、ノグルミの木片１点が出土しているが、木片の加工痕については、可能性のある部分もあったが、現状では判然としなかった。

井戸－２の時期は、出土遺物の特徴などから、平安時代中期から後期ごろと推定される。　（横山）



1．灰色粘質土（微砂）
2．灰色砂（細砂）
3．灰色砂（細砂・小礫少含）
4．灰色粘性砂質土（細砂・小礫少含）
5．灰色粘性　〃　（微砂・カーボン微含）
6．灰色粘性　〃　（微砂・Mn微含）
7．灰色粘性　〃　（微砂・Mn少含）
8．灰色砂質土（強砂）
9．灰色粘質土（微砂）
10．灰黄色砂（Mn少含）
11．暗灰色粘性砂質土
12．暗灰色砂

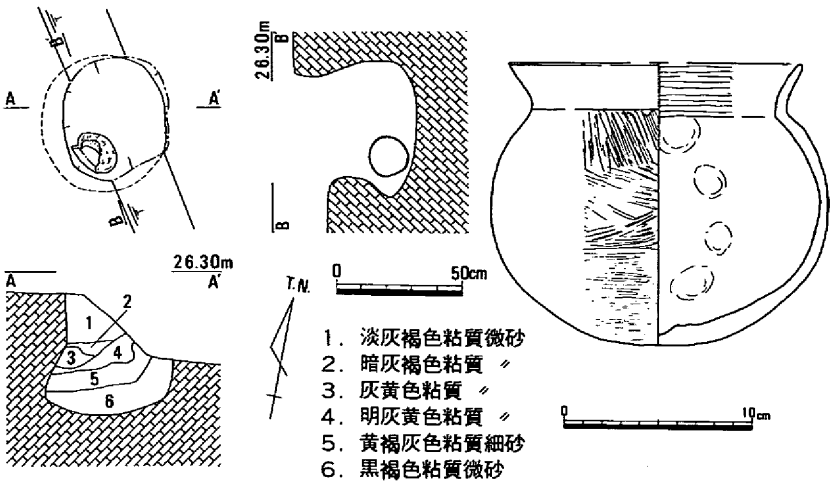


第62図　井戸２平・断面図および出土遺物

(4)　土壙

土壙－２（第63図）

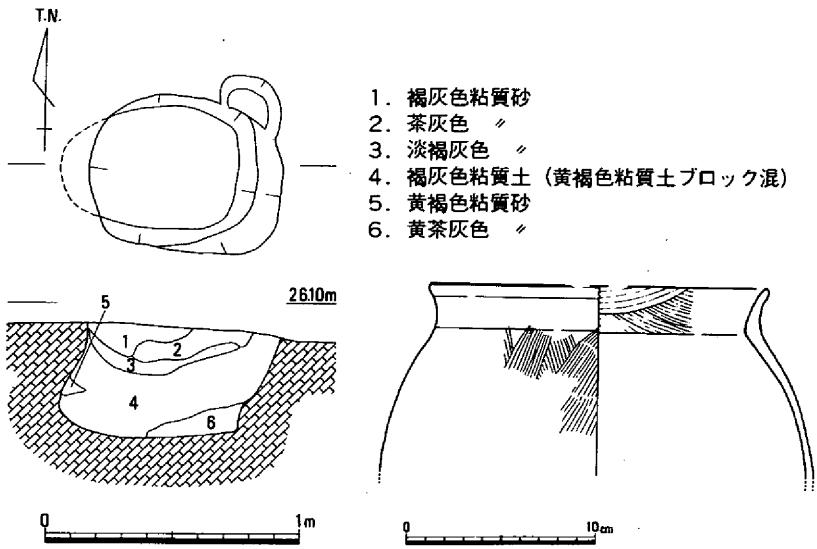
Ｂ４区から検出され、上面の東西40cm、南北50cmで袋状になる。深さは50cmを測る。土壙底部より土師器壷１が１点出土している。詳細な時期は不明であるが平安時代に収まるものと考えられる。



第63図　土壙２平・断面図および出土遺物

土壙－３（第64図）

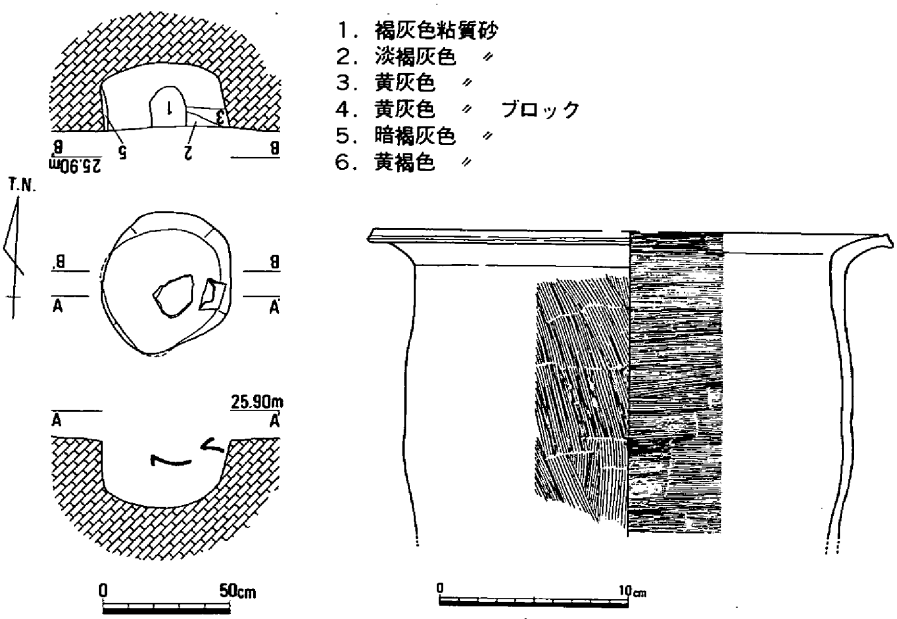
Ｃ６区にあり、上面東西80cm、南北60cmの楕円形をなし、西側が部分的に袋状になる。内部から土師器甕１が１点のみ出土している。詳細な時期は不明であるが平安時代に含まれるものと思われる。



第64図　土壙３平・断面図および出土遺物

土壙－４（第65図）

Ｃ６区にあり、直径50cmほどの円形になり、深さは25cmを測る。土壙上層より、土師器甕１が１点出土している。詳細な時期は不明であるが、平安時代の中に含まれるものと思われる。



第65図　土壙４平・断面図および出土遺物

土壙－５（第66図）

Ｇ８区にあり、短軸95cm、長軸105cmほどの不整円形で、深さは40cmである。土壙内には、角礫が多く含まれていたが、出土遺物はなく、時期は不詳であるが、同じような集石土壙が、平安時代のものが多く、平安時代に含まれると考えられる。

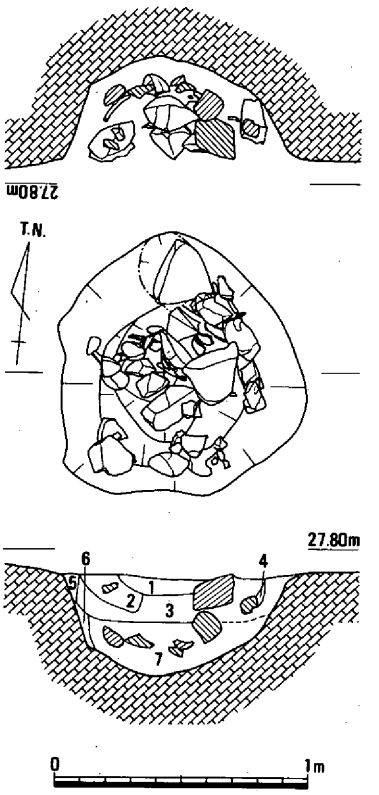
土壙－６（第67図）

Ｇ８区南西部に存し、直径40cm、深さ20cmほどの土壙である。土壙内には直径10cm前後の円礫が多くみられ、緑釉陶器１点ｇ15と、土師器小片の石器ｓ12が１点みられた。緑釉ｇ４は京都産（京－Ⅱ）で椀の高台部分で、高台部はわずかに削り出している。

叩き石は、側面中央部分が楕円形に摩滅している。この土壙の時期は、緑釉陶器から平安時代中頃と考えられる。

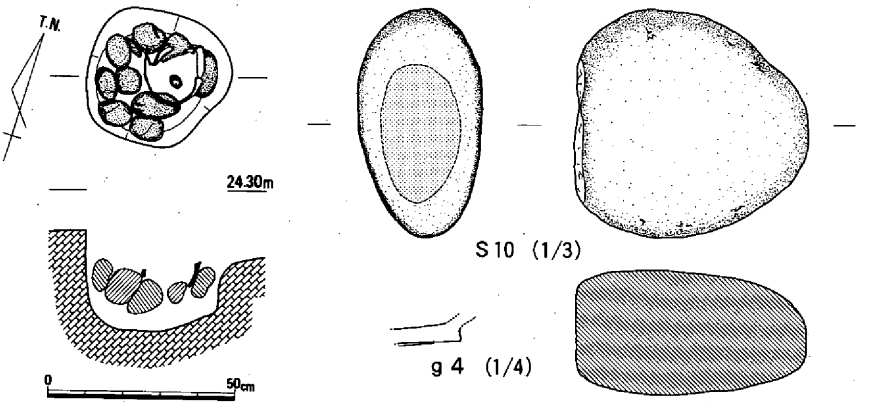
土壙－７（第68図）

Ｅ９区南西角付近Ⅱ存し、短軸43cm、長軸64cmの不整円形になるが、２個の土壙が重なっている可能性が強い。深さは10cmほどである。土壙内から土師器皿１～３、杯５、椀４・６・７、黒色土器の椀口縁部小片が１点ｂ３が出土している。時期は出土遺物から平安時代中頃と考えられる。

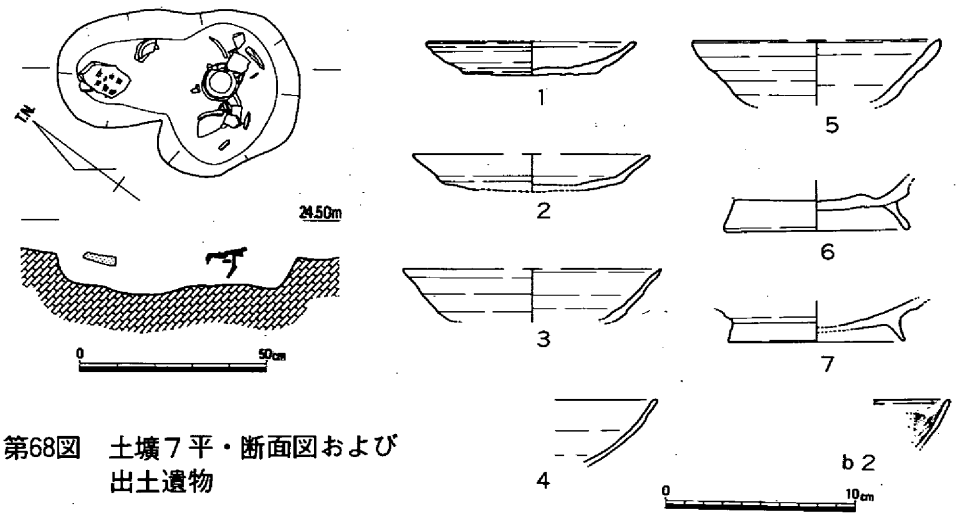


1．淡茶灰色砂質土
2．褐灰色　〃　（黄褐色土混）
3．褐灰色　〃
4．淡灰色　〃
5．淡灰色粘質砂
6．淡灰色砂質土（黄褐色土混）
7．褐灰色粘質砂

第66図　土壙５平・断面図



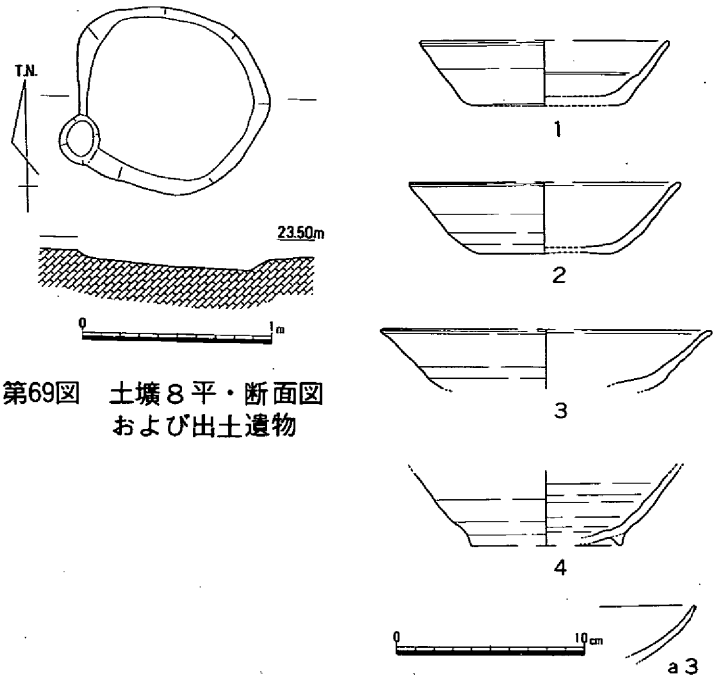
第67図　土壙６平・断面図および出土遺物



第68図　土壙７平・断面図および出土遺物

土壙－８（第69図）

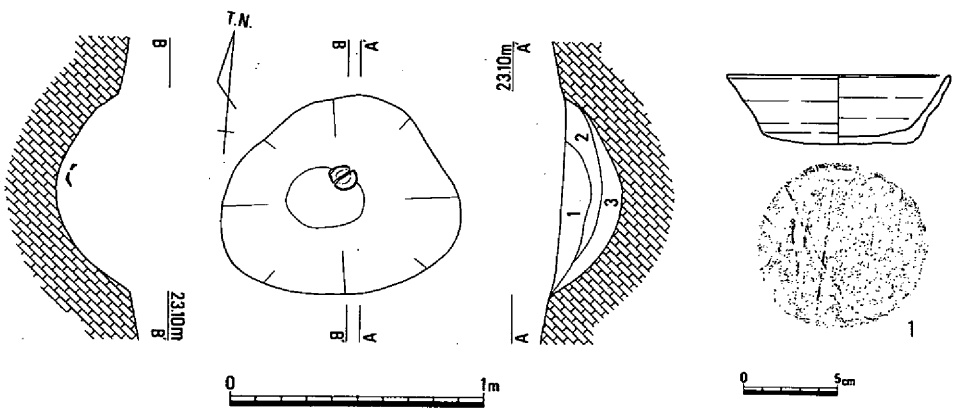
Ｆ11区建物－26の南杭列上に存する。直径100cm、深さ10cm前後の円形の土壙である。土壙内から須恵器杯１・２、土師器杯３、須恵器椀４、灰釉皿ａ15、青磁椀片が出土している。時期は出土遺物から平安時代中頃と考えられる。



第69図　土壙８平・断面図および出土遺物

土壙－９（第70図）

Ｆ12区中央付近にあり、短径77cm、長径94cmの不整円形で、深さ23cmほどで、摺鉢状になる。土壙内から土師器１の１点のみ出土している。時期は平安時代中頃と考えられる。（伊藤）



1．淡灰色土
2．淡灰色粘質土（地山ブロック含）
3．淡黄灰色土（粗砂含）

第70図　土壙９平・断面図および出土遺物

(5)　たわみ

たわみ－２（第71図）

ＦＧ７区にあり、東西６～７ｍ前後の不整で、浅いたわみ状の遺構である。たわみ内から土師器杯１、須恵器杯（椀？）２が出土している。

(6)　ピット

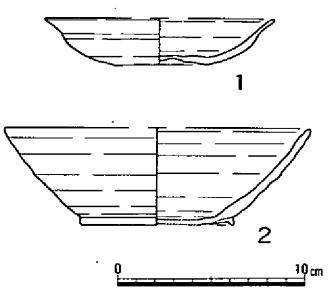
平安時代に含まれるピット・柱穴はあまり多くないが、遺物がみられたもののみを記述しておく。

ピット－５（第72図）

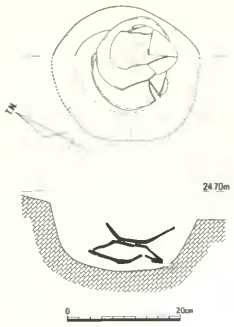
Ｇ８区南西にあり、直径25cmほどで、深さが20cm前後で、土師器杯１～３３点が折り重なるように検出された。

ピット－６（第73図）

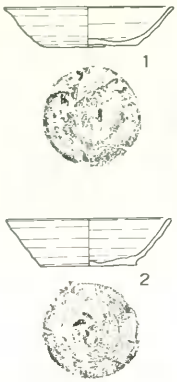
Ｇ８にあり、直径25cmほどで、深さが10cmほどを測る。ピット内より、土師器１が１点みられた。（伊藤）

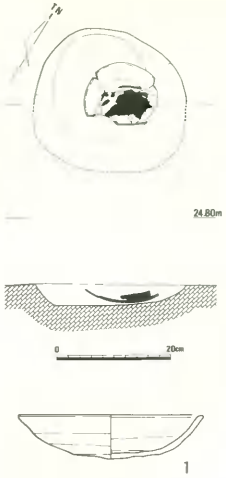


第71図　たわみ２出土遺物



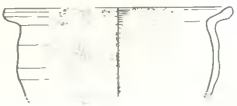
第72図　ピット５平・
断面図および
出土遺物

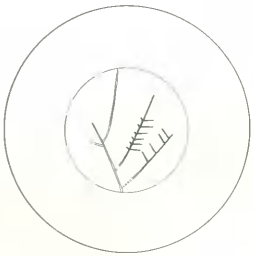




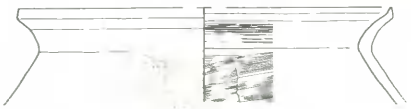
第73図　ピット６平・
断面図および
出土遺物

P７

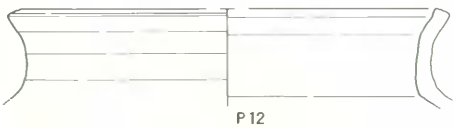

P８


P10

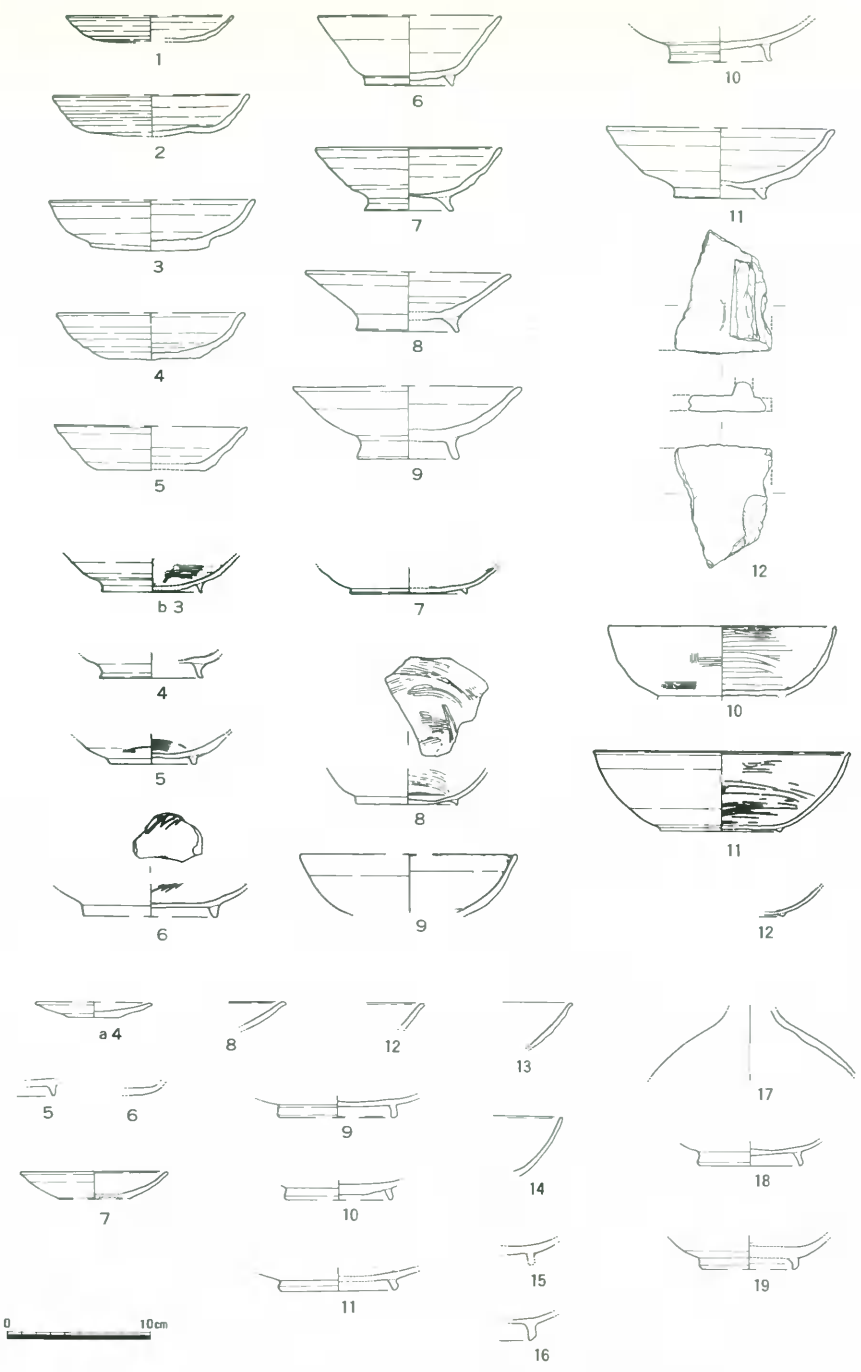
P９


P11

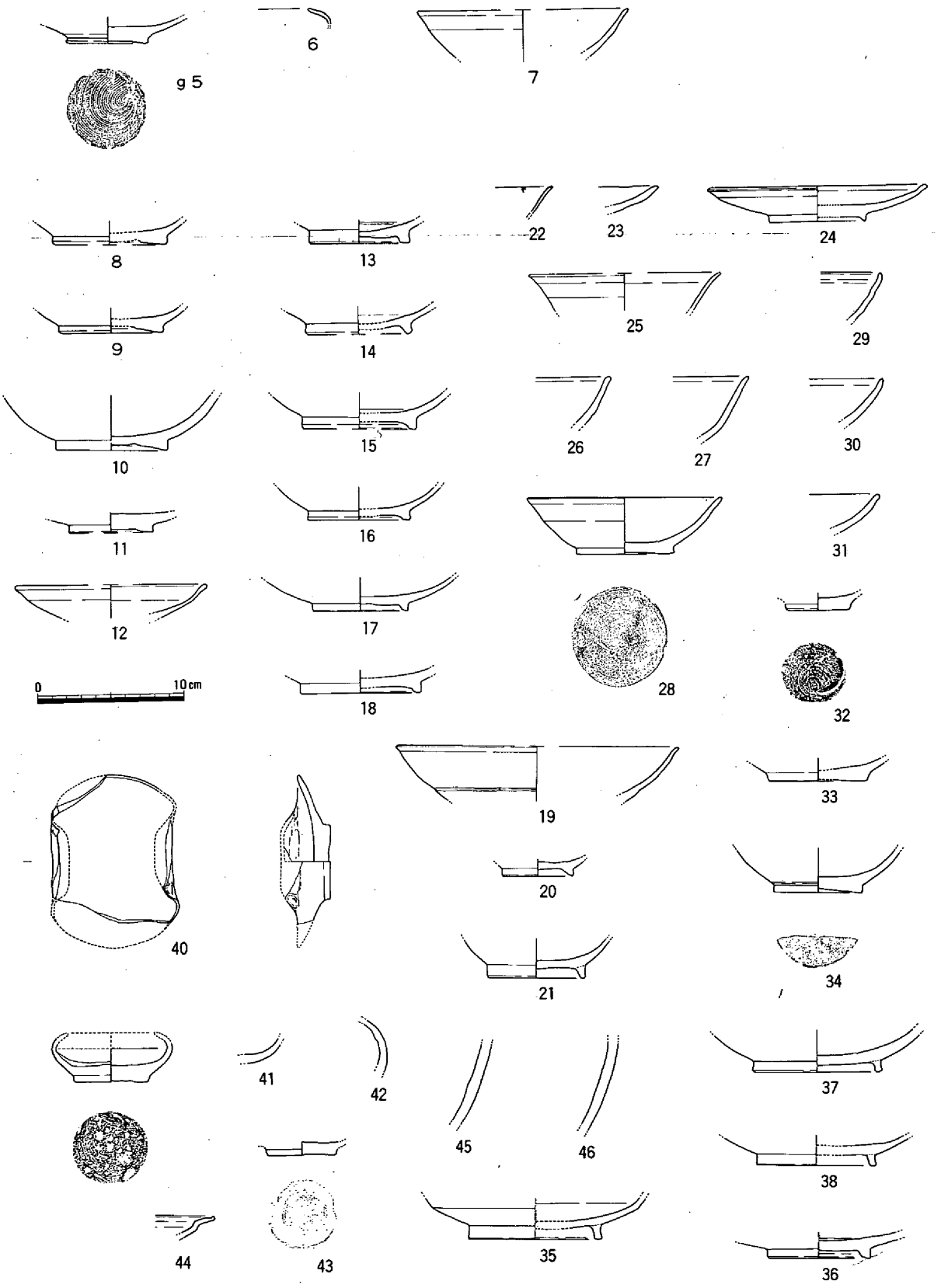
P13


P12

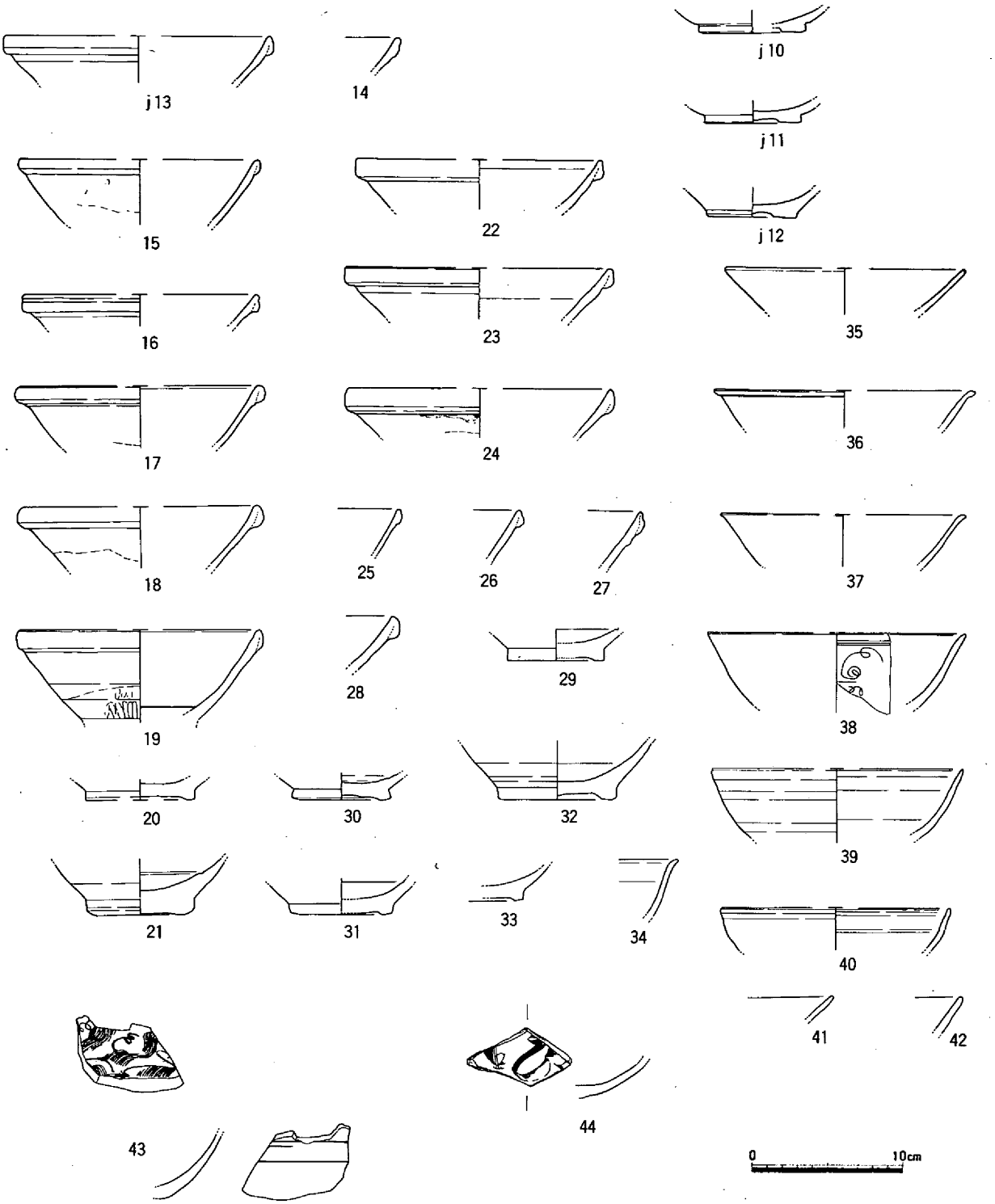
第74図　ピット７～13出土遺物



第75図　包含層出土遺物（中段黒色土器，下段灰釉陶器）



第76図　遺構内および包含層出土緑釉陶器



第77図　包含層出土輸入磁器

４）平安時代末期～鎌倉時代初期の遺構・遺物

(1)　掘立柱建物

建物－10（第78図）

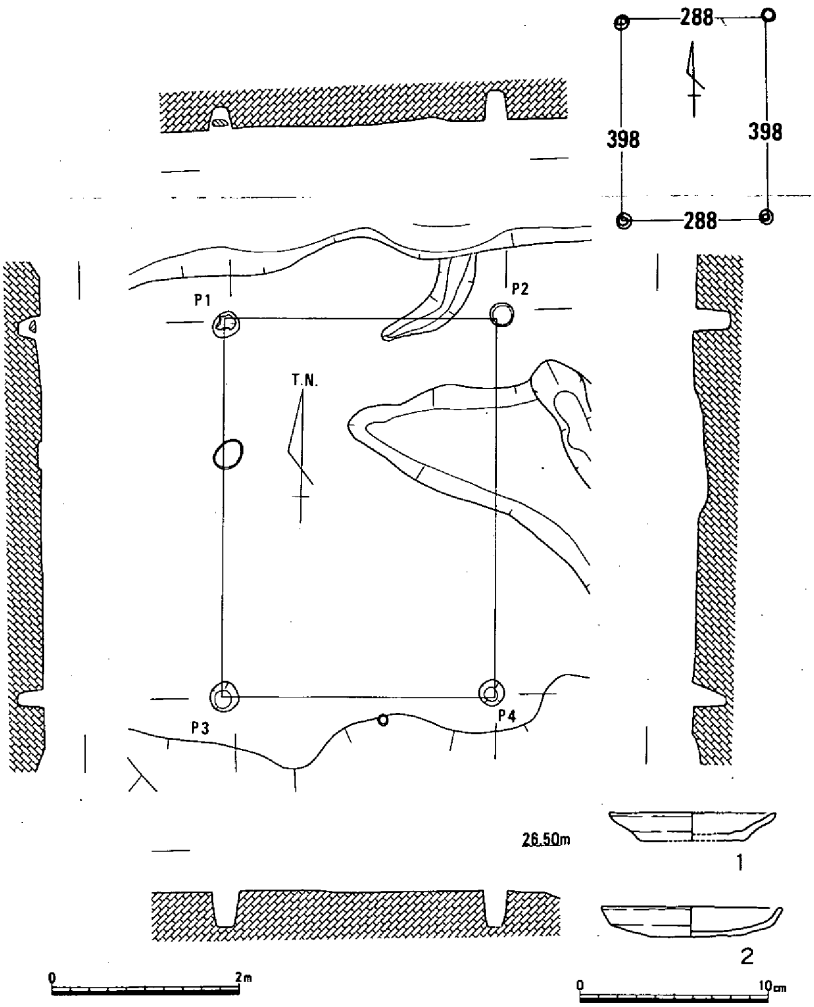
Ｇ４区周辺に位置する、桁行１間×梁行１間（398㎝×288㎝）の建物である。建物面積は11.5㎡で、建物の主軸はＮ－１°－Ｗを示す。

建物の検出レベルは標高26.02～26.10m、柱穴底のレベルは標高25.70～25.84mである。

柱穴の掘方平面は直径約27～32㎝のほぼ円形状を呈している。柱痕跡は全ての柱穴において確認できなかった。

遺物は、Ｐ２から土師器、Ｐ３から土師器やかまど、Ｐ４から土師器小皿・皿・甕や備前焼椀などが出土した。図化した遺物は２点１～２で、いずれも土師器の小皿で、Ｐ４から出土した。

建物の時期は、判然としないが、12世紀末～13世紀前半と推定される。（横山）



第78図　建物10平・断面図および出土遺物

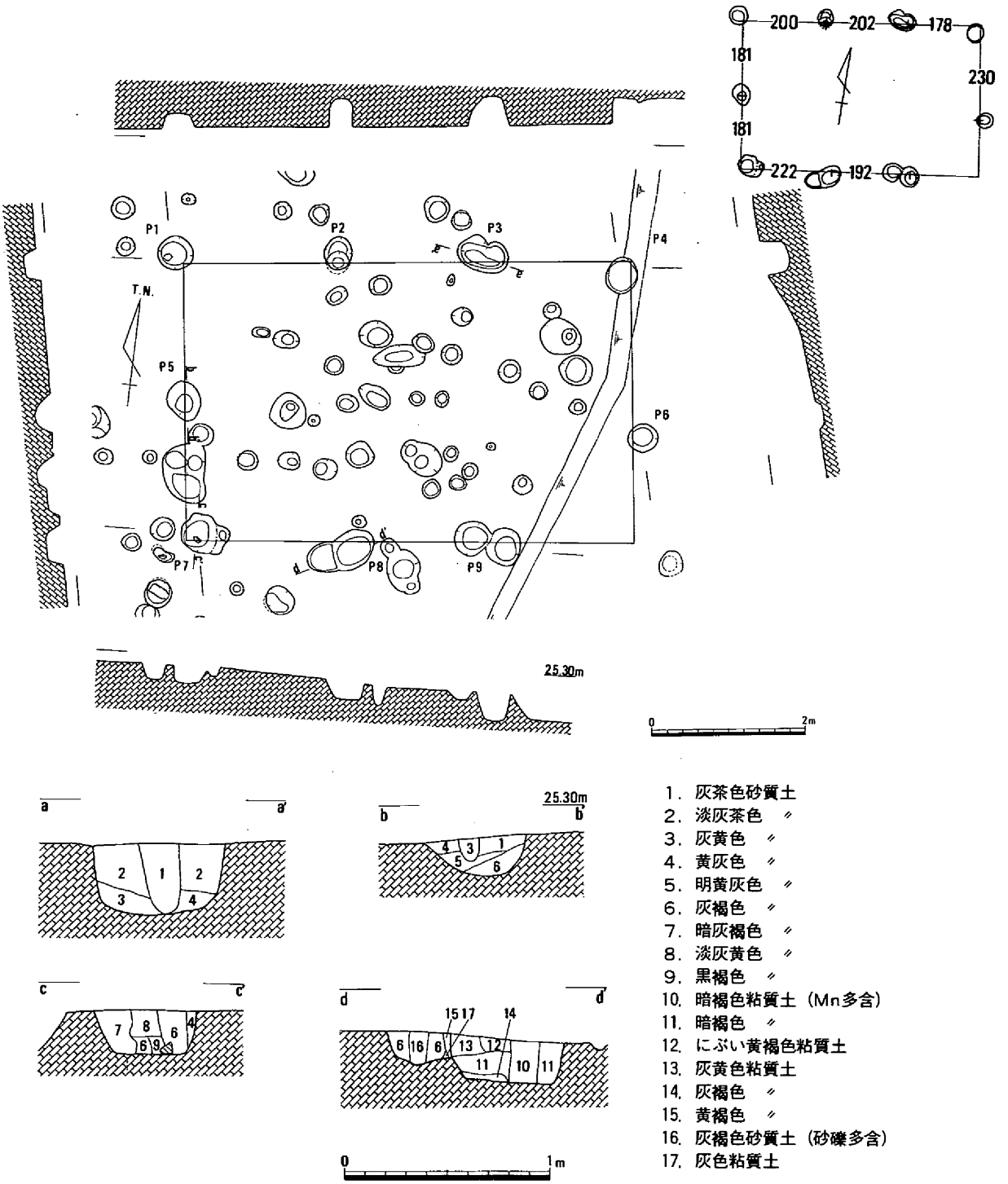
建物－11（第79図）

Ｆ７区周辺に位置する。桁行３間×梁行２間（580㎝×368㎝）の建物で、建物－41と重複して検出された。建物の平面型は、やや歪となっている。またＰ６の位置も、建物の中心軸から南側にずれている。

建物面積は21.1㎡で、建物の主軸はＮ－83°－Ｅを示している。建物の検出レベルは標高24.60～25.20m、また柱穴底のレベルで標高24.52～25.00mである。建物の南東側は水田開墾時の削平をうけており、Ｐ10は検出されなかった。柱間距離は、桁間152～222㎝、梁間181～230㎝を測り、ややばらつきがある。

柱穴の掘方平面は、複数の柱穴・ピットが切り合っているものもあるが、基本的には、直径約30～52㎝のほぼ円形状を呈している。柱痕跡はＰ３・Ｐ５・Ｐ７・Ｐ８の４本で確認できた。

遺物は、Ｐ７から土師器小片、Ｐ９から丹塗り土師器や土師器の小片、などが出土したが、図化できるるものはなかった。（横山）



第79図　建物11平・断面図，柱穴断面図

建物－12（第80図）

Ｆ８区周辺に位置し、建物－42と重複して検出された。建物の規模は、桁行１間×梁行１間（260cm×242cm）で、面積は6.3㎡である。主軸はＮ－71°－Ｅを示す。

建物の検出レベルは標高24.45～24.71ｍで、柱穴底のレベルは標高24.19～24.61ｍを測る。柱穴の掘方平面は直径（長軸）約42～49cmのほぼ円形ないし楕円形状を呈している。

遺物は、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３から少量の土師器が出土している。図化した遺物１は、土師器杯で、表面に丹塗りの痕跡が残存している。これは、Ｐ２から出土した。

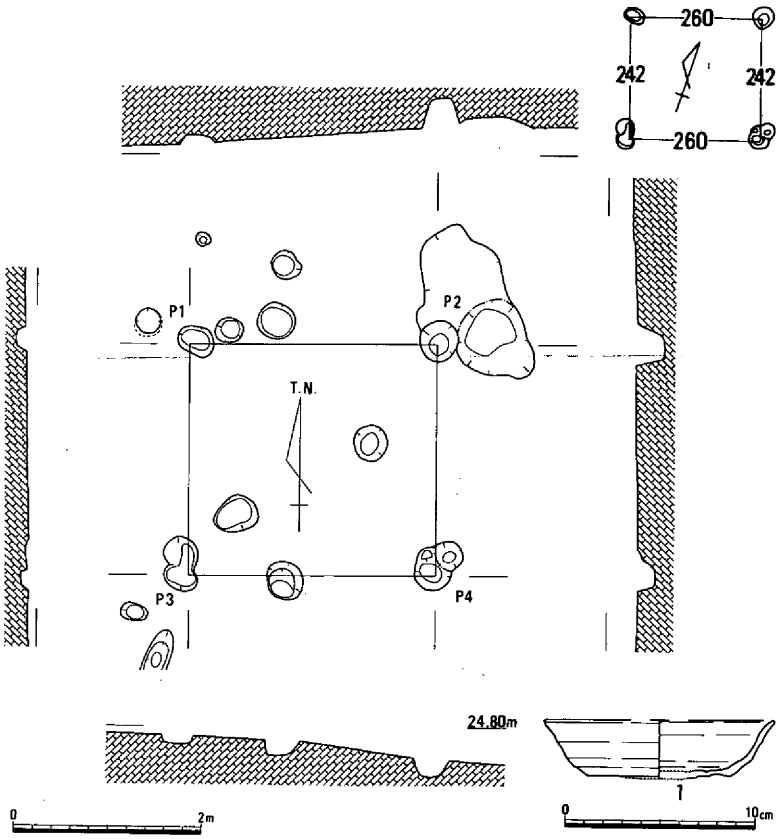
この建物の時期は、図化した遺物１の時期ではなく、Ｐ３から備前焼と思われる細片が出土していることから、平安時代末期から鎌倉時代前期まで下がると考える方が妥当であろう。

また、この建物－12は、桁部が、西側にもう１間分拡張する可能性もあるが、判然としない。

（横山）

建物－13（第81・82図）

Ｇ８区周辺に位置する。この建物の規模は、桁行４間×梁行１間（848cm×368～378cm）である。北側桁部のＰ３は、確認できなかった。建物面積は31.7㎡で、建物の主軸はＮ－70.5°－Ｅを示す。建物の検出レベルは標高24.26～24.62m、柱穴底のレベルは標高24.11～24.41mである。柱間距離は、桁間で214～232cmを測る。



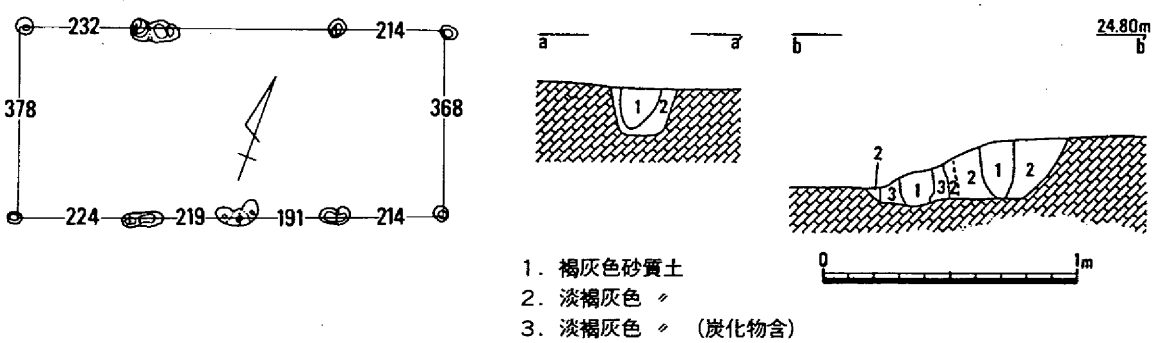
第80図　建物12平・断面図および出土遺物

柱穴の掘方平面は、直径（長軸）約28～44cmの円形または楕円形状を呈している。柱痕跡はＰ６・Ｐ７で確認できた。

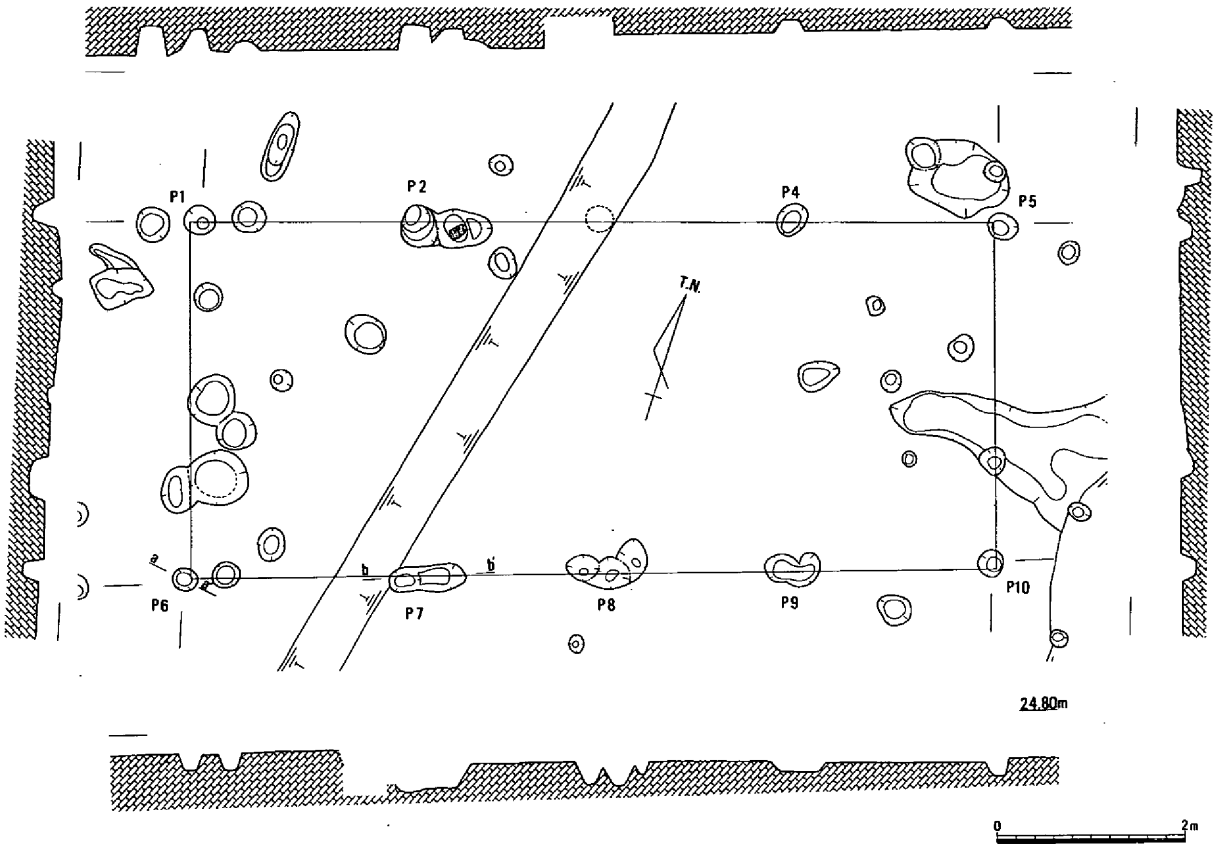
遺物は、Ｐ２から土師器小片、Ｐ４から土師器小片や緑釉陶器の体部細片、Ｐ６から土師器小片、Ｐ７から土師器小片や須恵器小片、Ｐ８から土師器小片や須恵器小片、Ｐ９からも土師器小片や須恵器小片、などが出土した。しかし、図化できる遺物はなかった。

建物の時期は、不明であるが、13世紀以前と推定される。

（横山）



第81図　建物13平面略図および柱穴断面図



第82図　建物13平・断面図

建物－14（第83～85図）

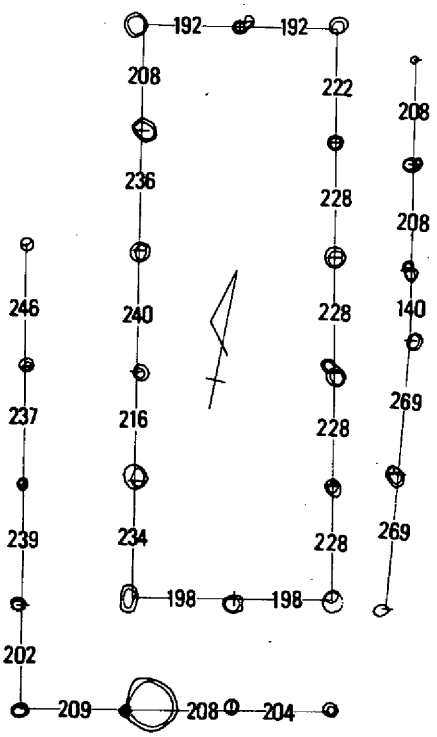
Ｅ11区周辺に位置し、建物－46と一部重複した形で検出された。この建物は、桁行５間×梁行２間（1134cm×396cm）の側柱の主屋部に東面に５間（柱穴列－５）、西面（４間分）から　南面（３間分）にかけて７間（柱穴列－４）の柱穴列を伴っている。このうち、柱穴列－４は、主屋部建物の柱穴と揃っており、建物の下屋部の柱穴にあたる可能性が強いと考えられる。

建物面積は44.3㎡で、建物の主軸はＮ－10°－Ｗを示している。建物の検出レベルは標高23.31～23.58m、柱穴底のレベルは標高23.13～23.44mである。柱間距離は桁間で208～240cm、梁間で192～198cmを測る。

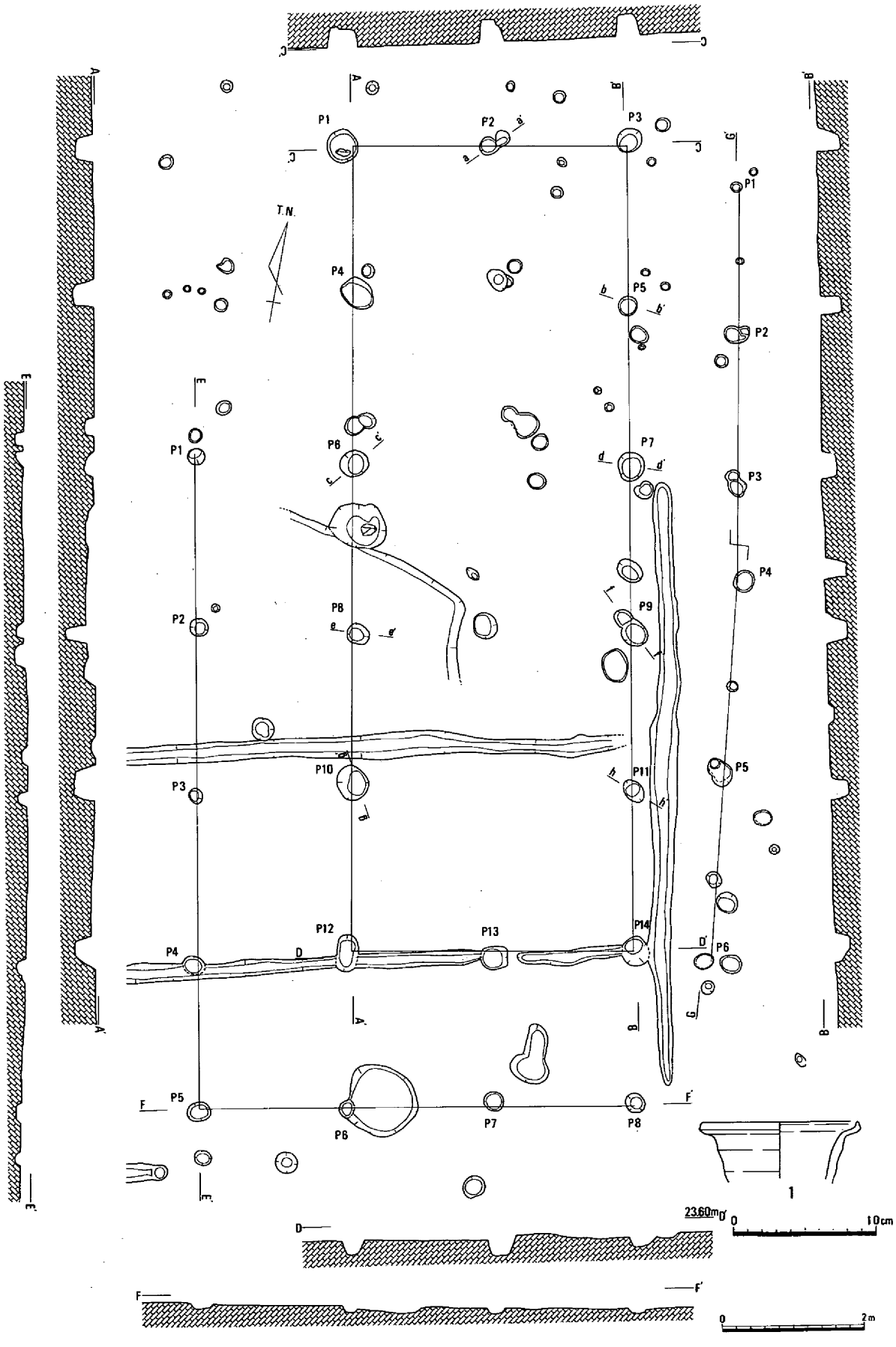
柱穴の掘方平面は直径約28～48cmのほぼ円形状を呈している。柱痕跡は、Ｐ２・Ｐ５・Ｐ６・Ｐ７・Ｐ８・Ｐ９・Ｐ10・Ｐ11の８本の柱穴で確認できた。

遺物は、Ｐ１・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ７・Ｐ８・Ｐ10・Ｐ13・Ｐ14の９本で、土師器や須恵器の小片などが出土した。図化した遺物１は、須恵器の壺（瓶）の口縁部小片で、Ｐ７から出土した。

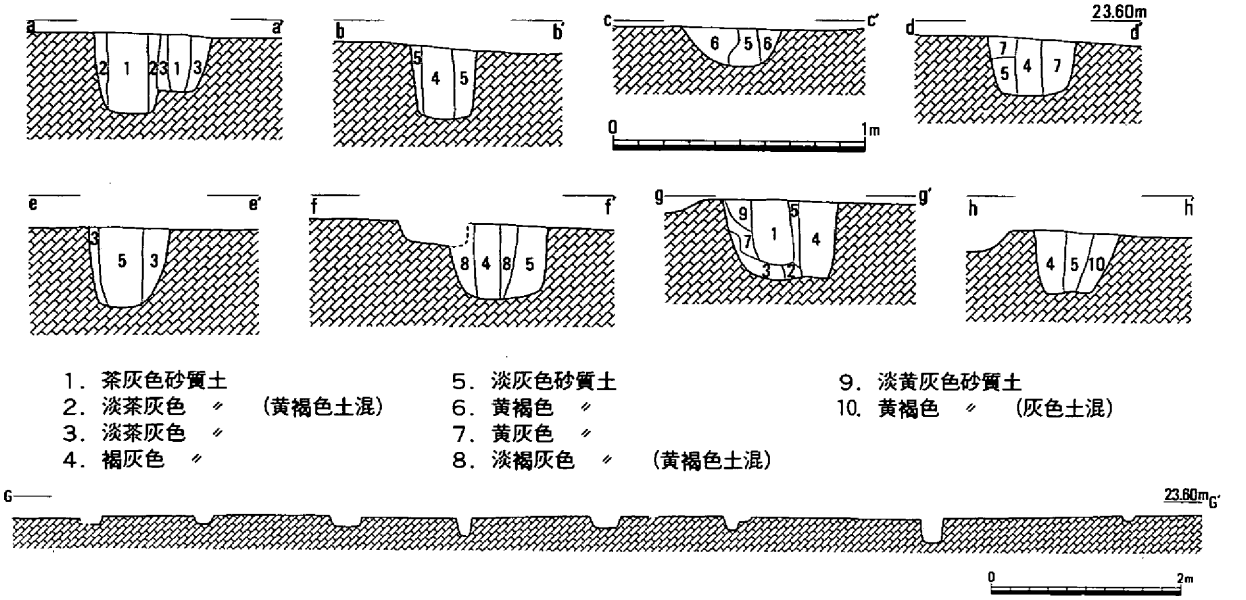
建物の時期については、平安時代末期から鎌倉時代初期ではなく、もう少しさかのぼる可能性もある。　（横山）



第83図　建物14平面略図



第84図　建物14　柱穴列４・５平・断面図および出土遺物



第85図　建物14　柱穴断面図および柱穴列５断面図

柱穴列－４（第83・84図）

建物－14の西側２間南から南側にかけてＬ字状に囲む柱穴列で、建物－14の西柱穴列・南柱穴列から220cm離れている。西側は４間分（9.2m）、南側は３間分（6.2m）あり、柱穴の間隔は202～246cmである。それぞれの柱穴列は、主屋の柱穴列とほぼ並び、下屋部あるいは庇になる可能性も考えられる。

柱穴列－５（第83～85図）

建物－14の東側に取り付く柱穴列で５間分（10.8m）ある。柱間隔は140～269cmとまばらで、南側が少し西に振って直線的である。（伊藤）

建物－15（第86図）

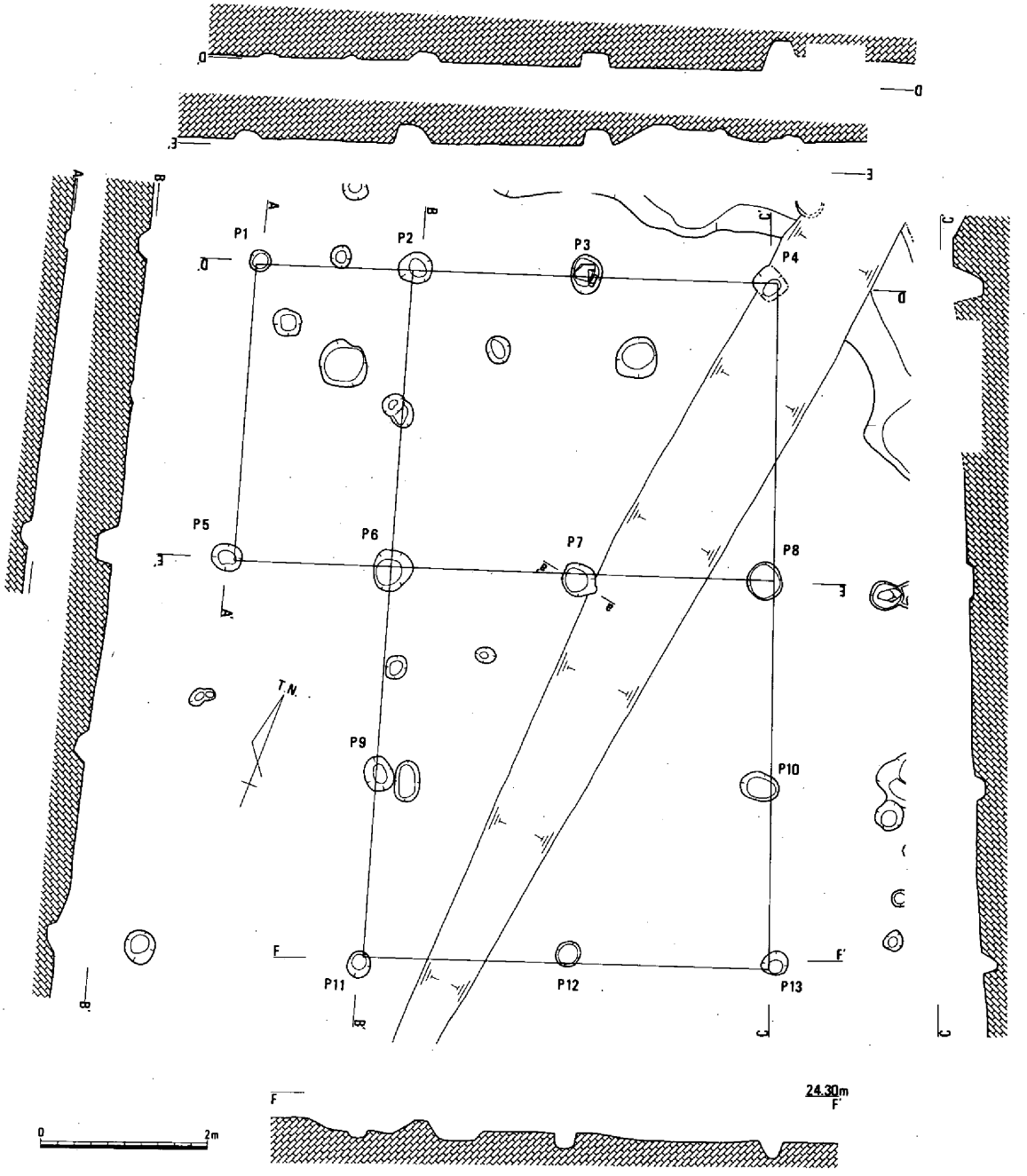
Ｈ９区周辺に位置する。建物の規模は、桁行３間×梁行２間一部３間（818cm×644cm）で、３間×２間の主屋の北西部に１間×１間の角屋を付属させた構造をとる。ただし、東側桁部Ｐ４とＰ８の間の柱穴が、後世の用水路により削平されている可能性もある。

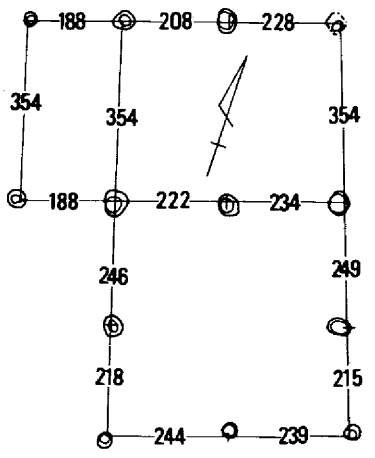
建物面積は43.2㎡で、建物の主軸はＮ－18°－Ｗを示す。建物の検出レベルは標高23.96～24.28mで、柱穴底のレベルは標高23.58～24.23mである。柱間距離は、桁間で215～354cm、梁間で188～244cmを測る。

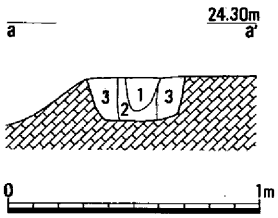
柱穴の掘方平面は、直径（長軸）約26～46cmのほぼ円形または楕円形状を呈している。柱痕跡は、Ｐ７で確認できた。

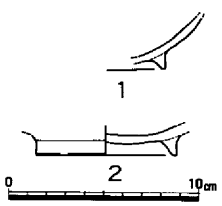
遺物は、Ｐ２から土師器、Ｐ６から土師器椀や丸瓦、Ｐ７から土師器、Ｐ９から土師器皿・椀、Ｐ12から土師器椀、などが出土した。図化した遺物１は、土師器椀の体部から底部で、Ｐ12から出土した。高台径は7.2cmを測る。

建物の時期は、判然としないが、12世紀以降と推定される。（横山）



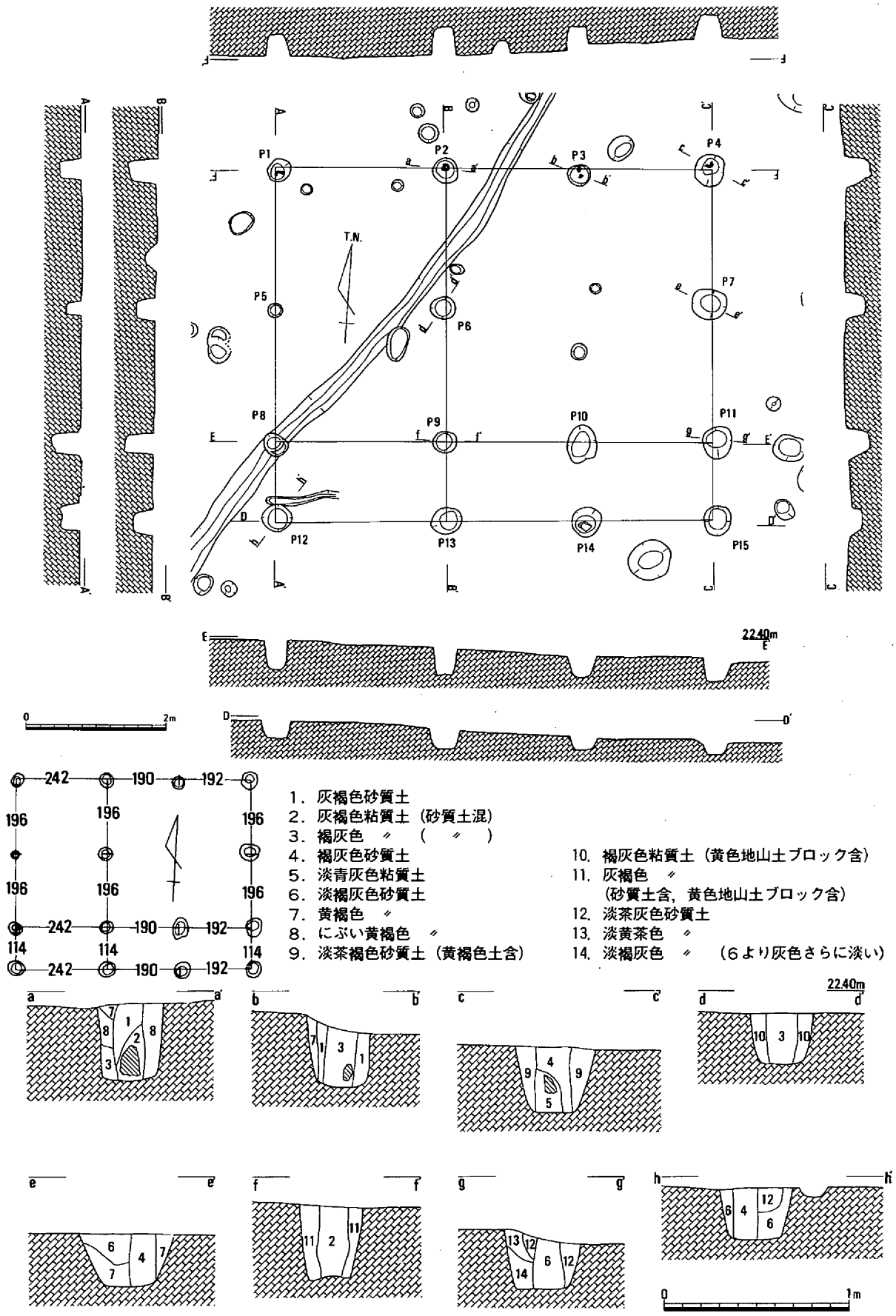






1．淡青灰色粘質土
2．褐灰色砂質土
3．灰褐色

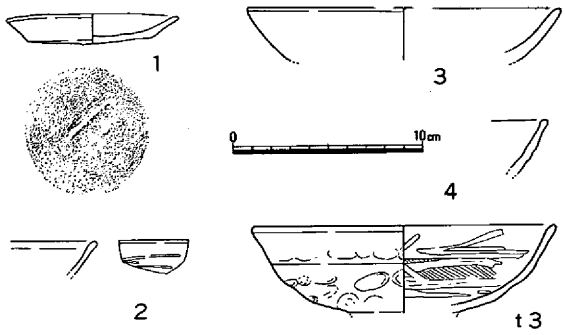
第86図　建物15平・断面，柱穴断面図および出土遺物



第87図　建物16平・断面および柱穴断面図

建物－16（第87・88図）

E14区周辺に位置する。建物の構造は、桁行３間×梁行２間（622cm×392cm）の上屋部と桁行３間×梁行２間（622cm×114cm）の下屋部からなる。建物面積は31.5㎡で、建物の主軸はN－86°－Eを示している。建物の検出レベルは標高22.04～22.34m、柱穴底で標高21.72～21.92mである。柱間距離は桁間で190～242cm、梁間は上屋部で196cmを測る。柱穴の掘方平面は直径約21～51cmのほぼ円形状を呈している。



第88図　建物16出土遺物

Ｐ１にはアカマツ、Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４にはネズミサシの柱根が遺存していた。また、Ｐ６・Ｐ７・Ｐ11・Ｐ12において、柱痕跡が確認できた。

遺物は、Ｐ５・Ｐ11・Ｐ15以外の柱穴で出土した。２は早島式土器の椀でＰ７から、３は土師器の杯、４は備前焼椀、ｔ３は瓦器椀でＰ６から出土した。これは和泉型Ⅲ－１期とみられ、このことから、建物－16の時期は、12世紀末から13世紀初めごろと推定される。（横山）

建物－17（第89図）

G11区周辺に位置する。一部建物－47と重複して検出された。建物の規模は、桁行３間×梁行２間（674cm×366cm）である。梁部Ｐ４とＰ５の間には柱穴は検出されなかった。

建物面積は24.7㎡で、建物の主軸はN－17°－Wを示す。建物の検出レベルは標高23.28～23.48mで、柱穴底のレベルは標高22.88～23.36mである。柱間距離は、桁間で212～246cm、梁間で183cmを測る。

柱穴の掘方平面は、直径約24～40cmのほぼ円形状を呈している。柱痕跡は確認できなかった。

遺物は、Ｐ２から須恵器や土師器、Ｐ３・Ｐ５から土師器、Ｐ７から備前焼椀や早島式土器椀、Ｐ９から備前焼椀・土師器や鉄製釘、Ｐ10から東播系鉢や土師器、などが出土した。図化した遺物のうちＵ１は東播系こね鉢の口縁部で、第Ⅷ期第２段階の様相を示す。

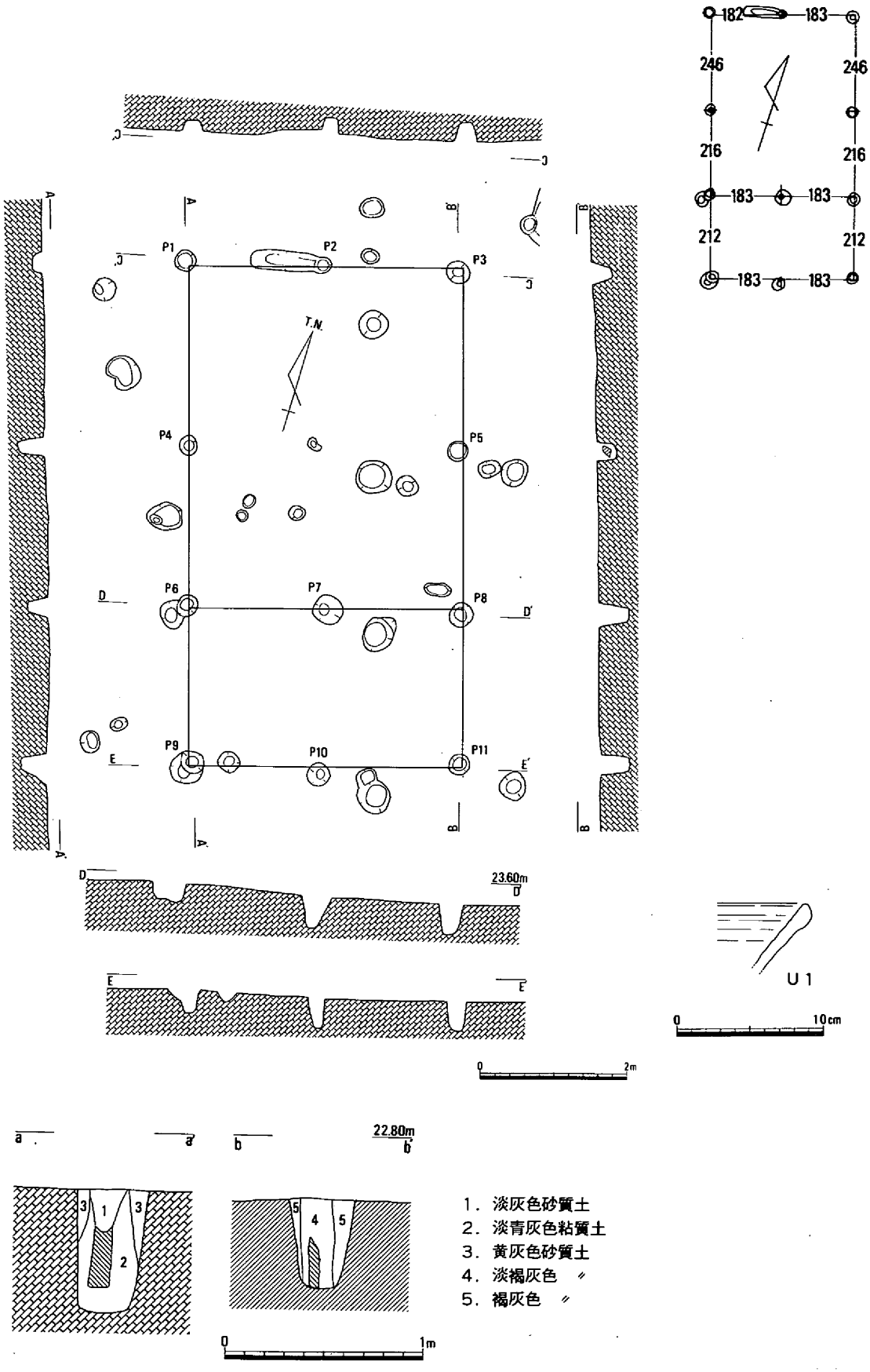
建物の時期は、東播系鉢の様相から、12世紀終わりから13世紀初めごろと推定される。（横山）

建物－18（第90・91図）

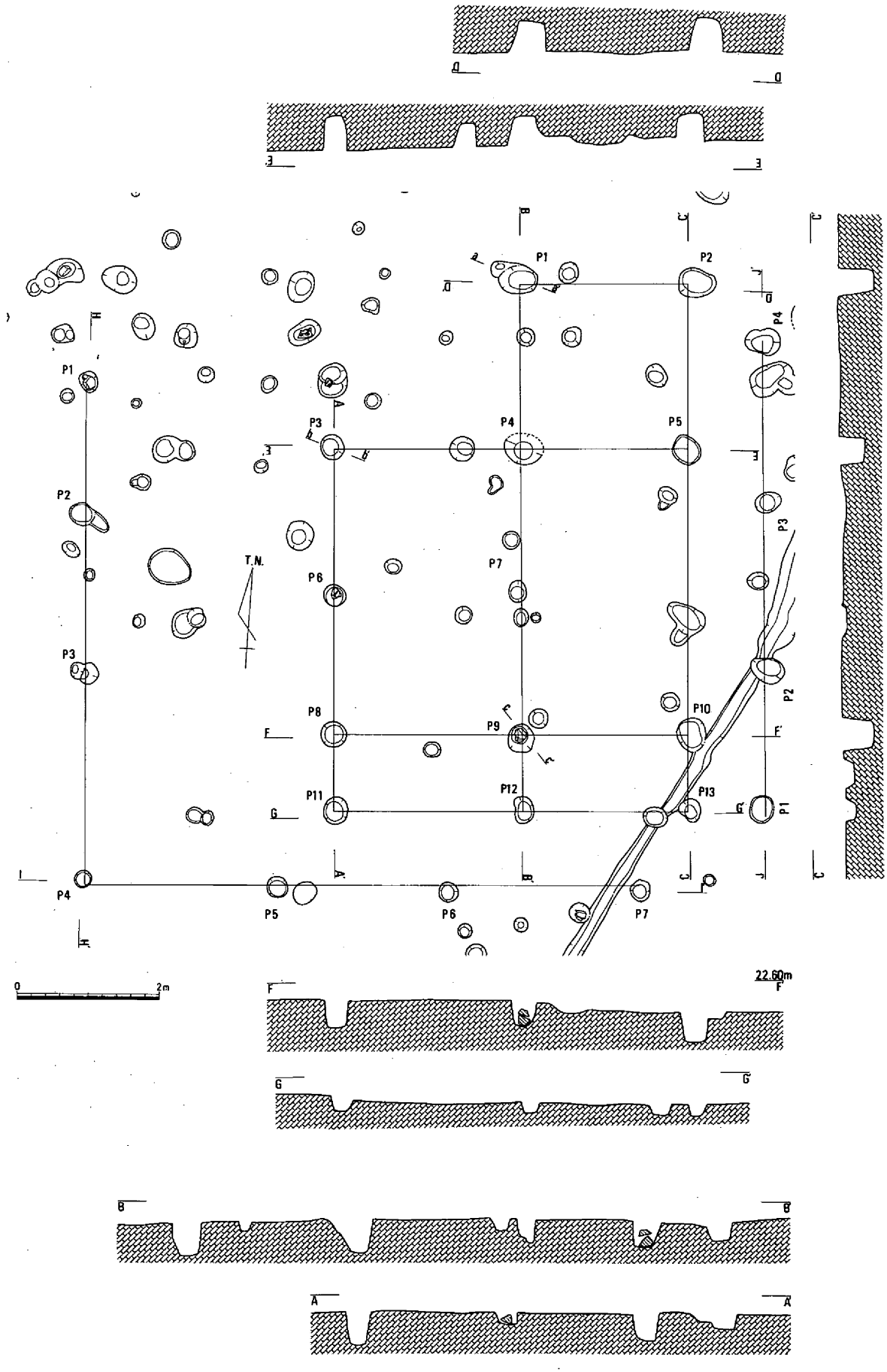
E14区周辺に位置する。建物の規模は、桁行４間（一部３間）×梁行２間（506～736cm×492cm）である。南側梁部に下屋を付属させた構造を有する。また建物の東側に柱穴列－７、南側から西側に柱穴列－６を伴う。建物面積は30.1㎡で、建物の主軸はN－3.5°－Wを示す。建物の検出レベルは標高22.14～22.37mで、柱穴底のレベルは標高21.74～22.20mである。柱間距離は、桁間106～230cm、梁間224～264cmを測る。柱穴の掘方平面は、直径（長軸）約30～52cmのほぼ円形または楕円形状を呈している。Ｐ９に根石が遺存していた。またＰ１・Ｐ３で柱痕跡が確認できた。

図化した遺物は次の12点である。１～５・９は土師器の小皿である。６は耳皿で、小皿を両側から押さえたものである。７は土師器の杯である。８は備前焼の椀で、Ⅰ期のものと考えられる。ｔ４は瓦器椀の口縁部であろう。ｊ45は白磁の皿で、Ⅵ類のものである。Ｃ９・Ｃ10は用途不明の方形土製品である。

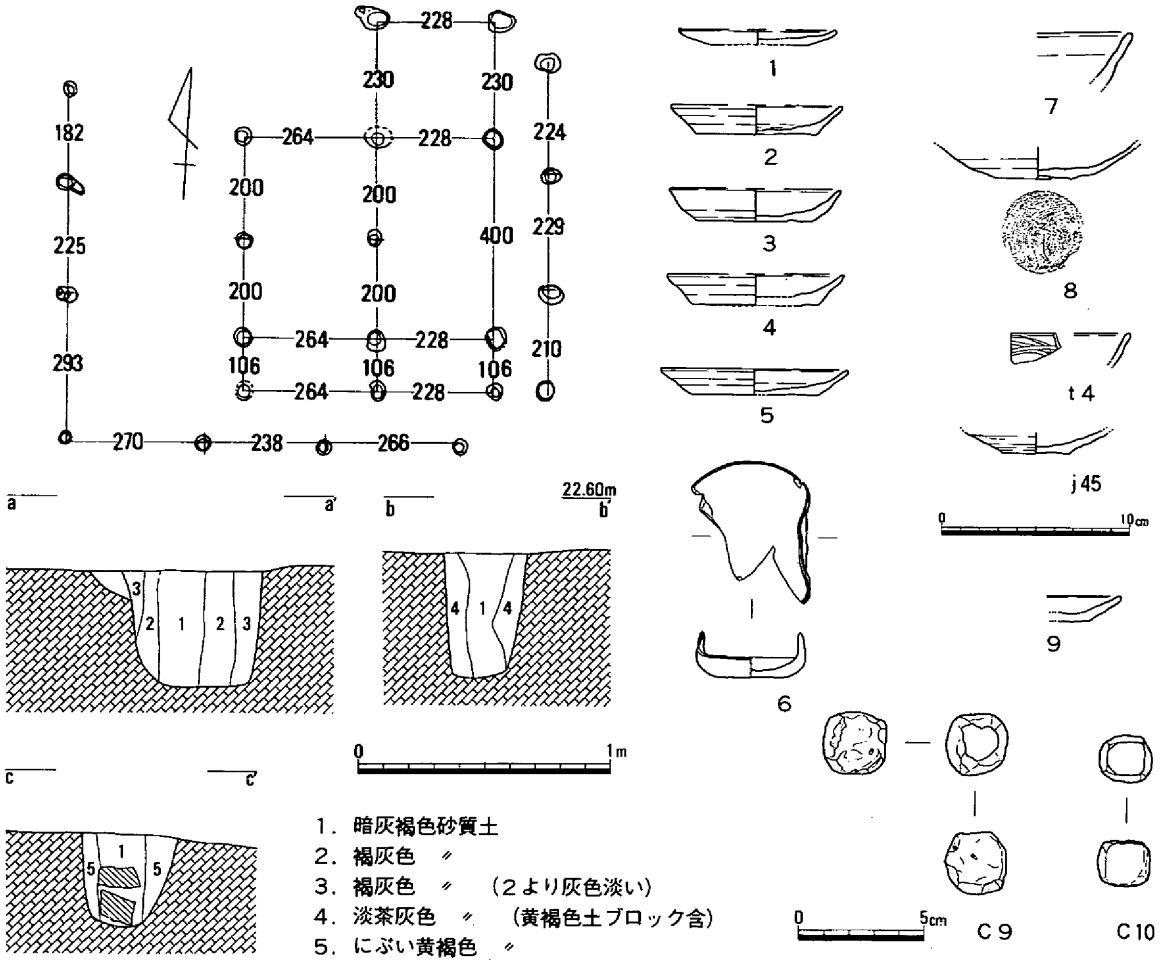
建物の時期は、主軸方位をそろえる建物－19・20・21などと同じ、12世紀末～13世紀前半と推定される。（横山）



第89図　建物17平・断面，柱穴断面図および出土遺物



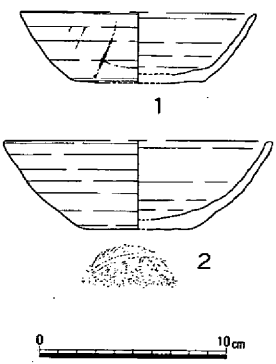
第90図　建物18　柱穴列６・７平・断面図（S：1/80）



第91図　建物18平面略図，柱穴断面図および出土遺物

柱穴列－6（第90～92図）

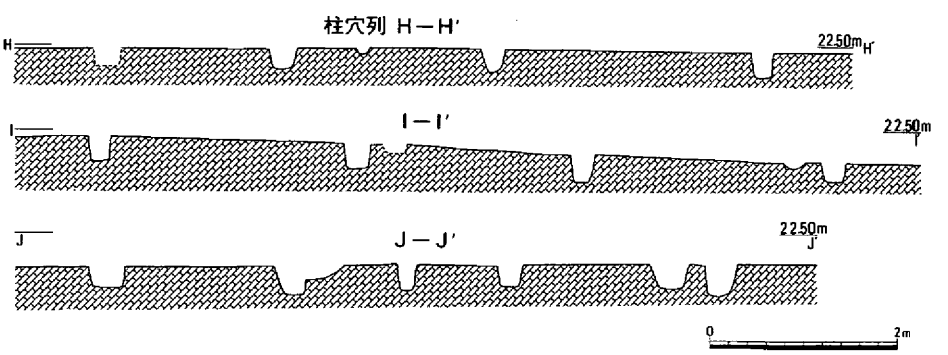
建物－18の西側から南に囲むように検出された柱穴列で、西側は、建物－17の西柱列からは3.6m、南側列からは1m離れている。西・南側とも3間分あり、柱間隔は182～293cmと同一間隔はみられない。柱穴は直径30cm、深さは20cm前後である。柱穴から須恵器杯1、備前焼椀2が出土している。時期は12世紀末前後と考えられる。柱穴列－5とともに、建物－17を囲む柵列と考えられる。



柱穴列－7（第90～92図）

建物－18の西側柱列から1m離れ3間分検出された。柱間隔は210～219cmである。

（伊藤）

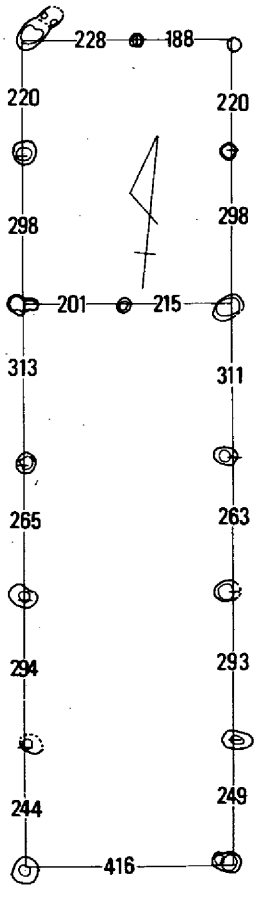


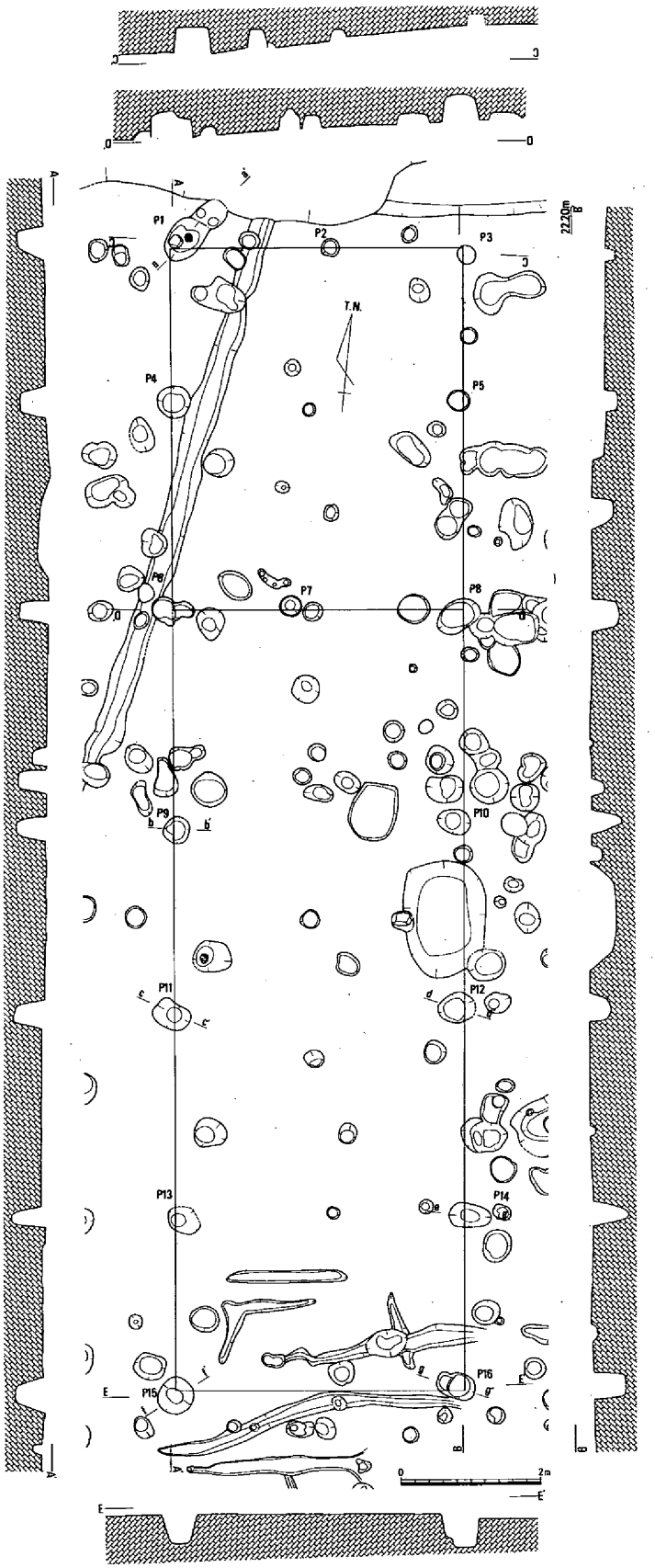
第92図　柱穴列6・7断面図および柱穴列6出土遺物

建物－19（第90～92図）

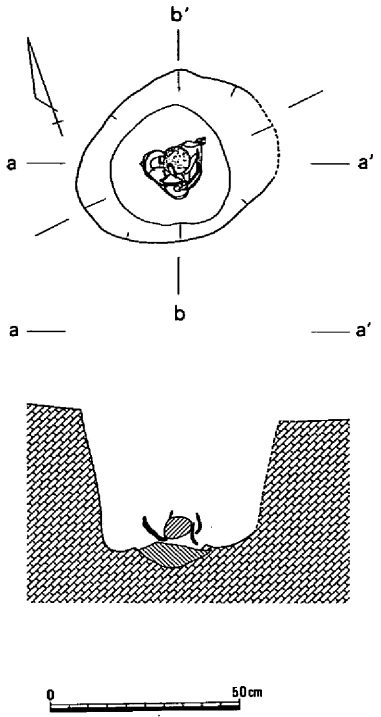
E15区周辺に位置し建物－20と重複して検出された。建物－19は、桁行６間×梁行２間（1634cm×416cm）の南北棟で、梁部北端のＰ１とＰ３との間と梁部２間目のＰ６とＰ８との間に、他には中心柱をもたない構造である。建物面積は68.0㎡、建物の主軸はＮ－６°－Ｗを示す。建物の検出レベルは標高21.92～22.15m、柱穴底のレベルは標高21.42～21.83mである。柱間距離は、桁間で220～313cm、梁間で188～228cmを測り、桁間でかなりばらつきが存在する。

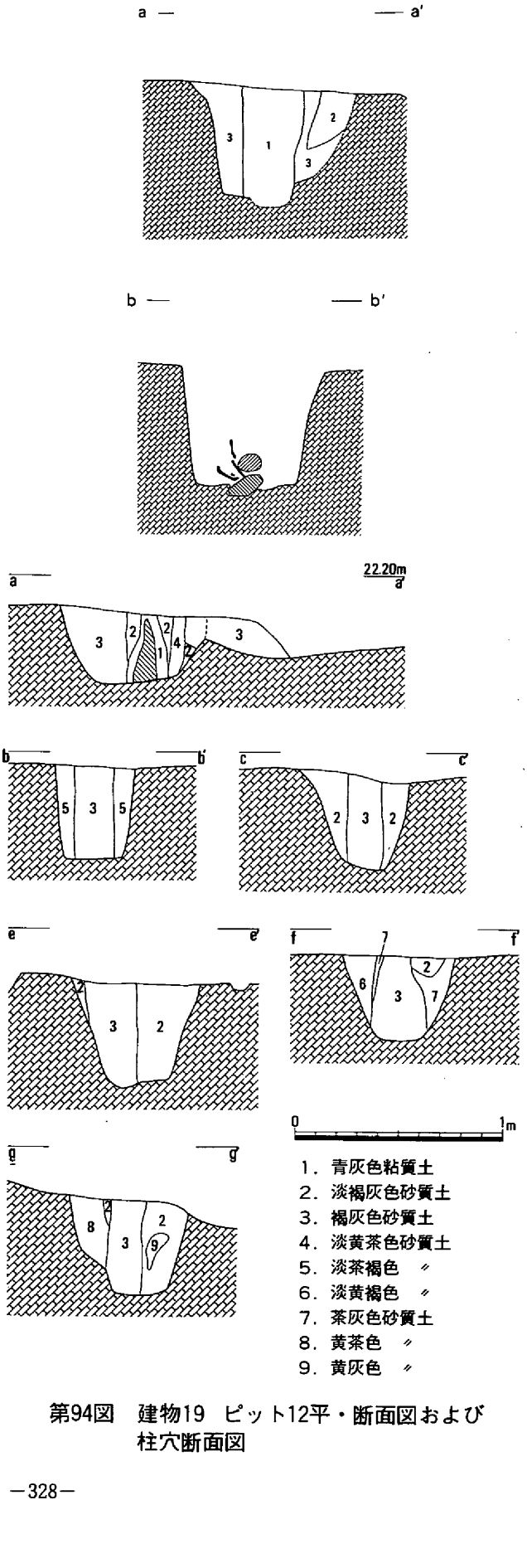
柱穴の掘方平面は、直径約26～54cmのほぼ円形状を呈し、これもばらつきがある。Ｐ１には根石とネズミサシの柱根が、同一掘方内に遺存しており、建て替





第93図　建物19平・断面図（S：1/100）





第94図　建物19　ピット12平・断面図および柱穴断面図

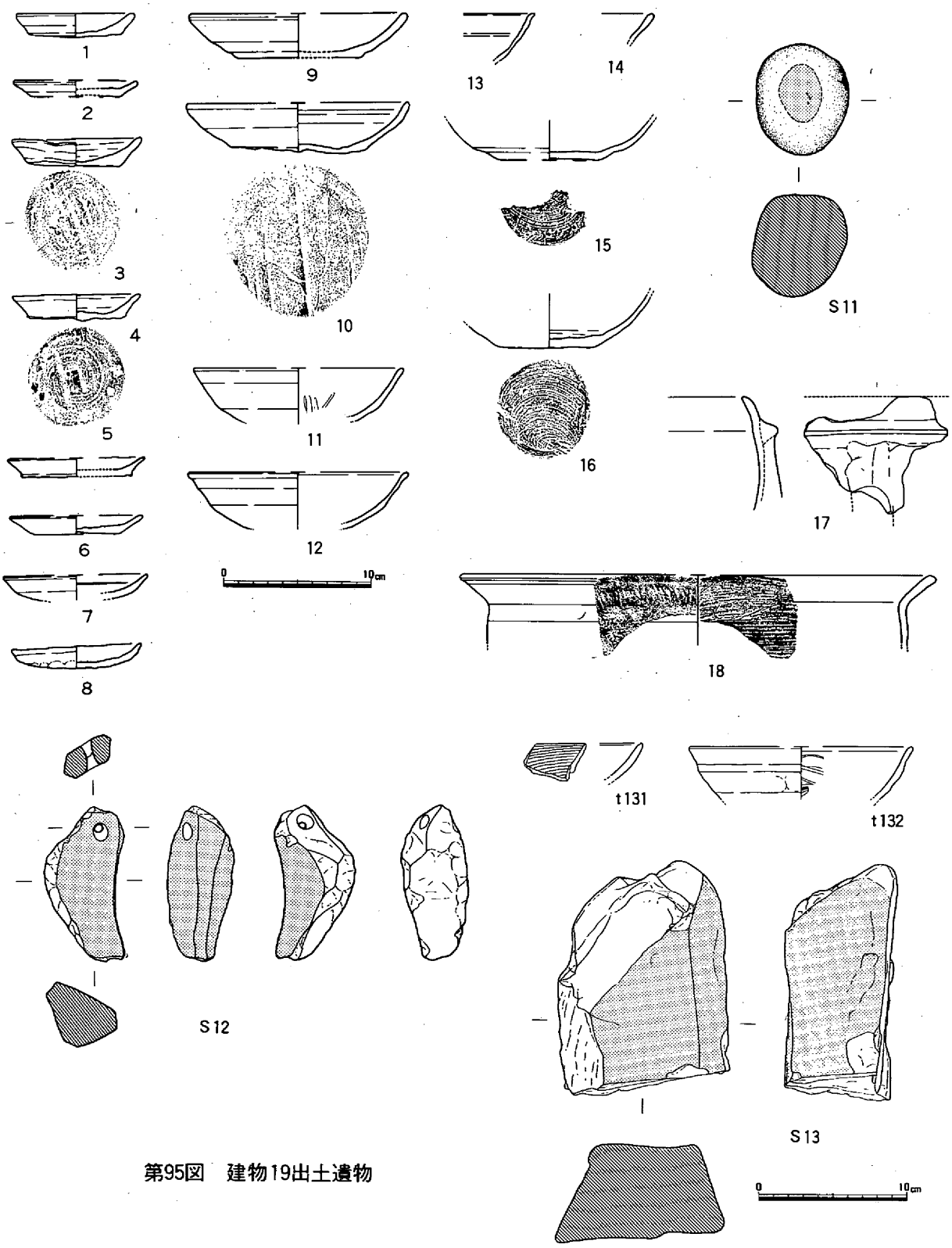
えの可能性がある。このほか、Ｐ９・Ｐ11・Ｐ12・Ｐ14・Ｐ15・Ｐ16で柱痕跡が確認できた。このうち、Ｐ12では、柱痕跡部の底に、球状の石と完形の土師器小皿３枚や早島式土器椀の小片などが北東方向から入れられた形で出土した。これは、柱抜き取り後の地鎮行為と推定される。

遺物は、Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５以外の柱穴で出土した。１～８は土師器小皿で、８は底部を指押さえで調整している。９・10は土師器杯である。15～16は備前焼椀で、Ⅰ期の様相を呈している。11～12は早島式土器椀で、Ⅲ－１期に属する。ｔ131・132は瓦器椀で、和泉型Ⅲ－１期に属する。17・18は土師器鍋で、17は脚の取付き部である。石製品は３点出土した。Ｓ12は携帯用砥石で先端部に紐穴を有する。Ｓ11は歪な球状で平坦部に使用痕がある。Ｓ13は砥石であ

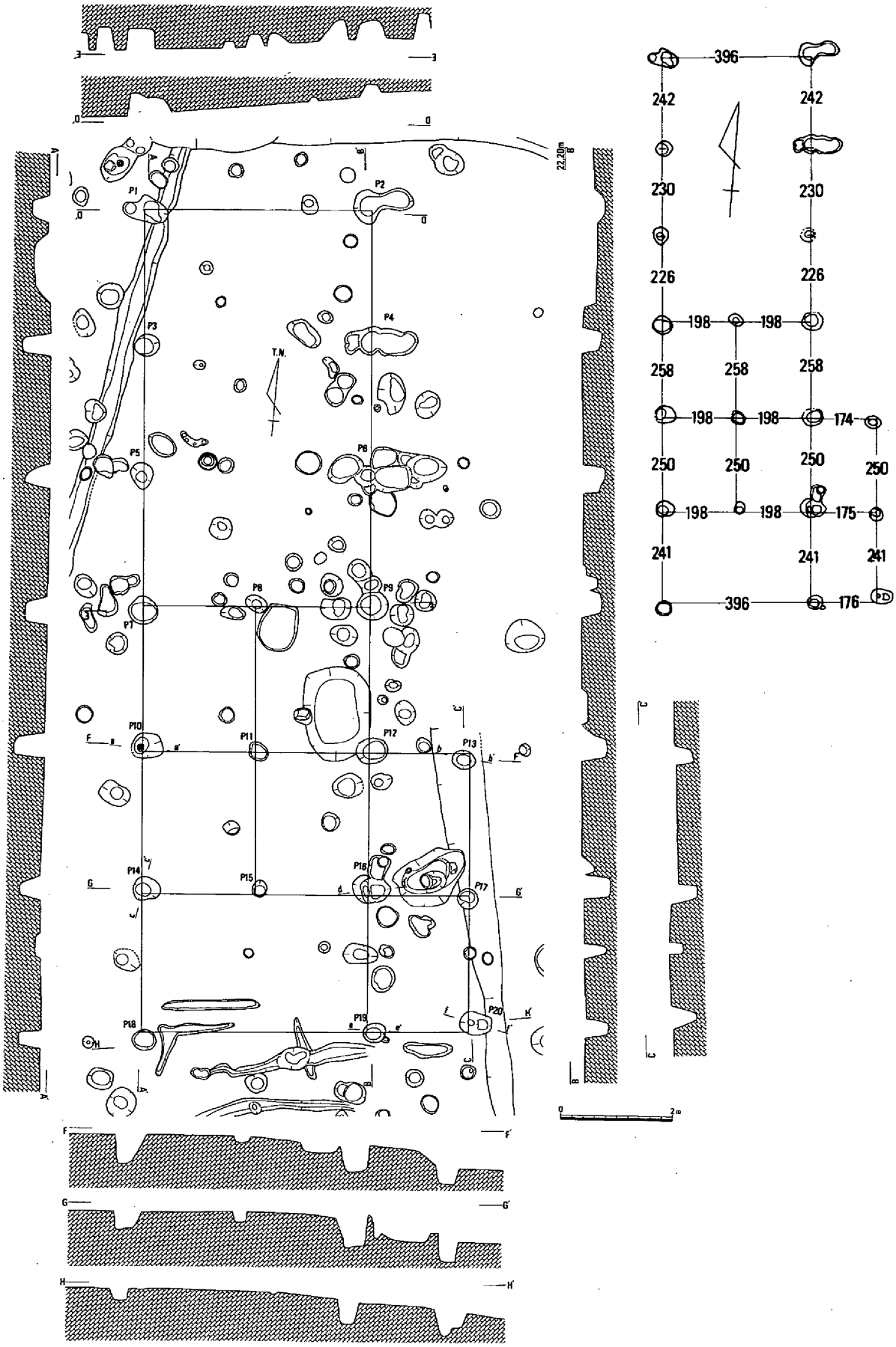
る。

建物の時期は出土遺物から12世紀末～13世紀前半ごろと推定され、建物―20とほとんど時期差がない。しかし、建物の構造と、P12の地鎮遺構としての性格から建物―19の方が前出と考えられる。

（横山）



第95図　建物19出土遺物

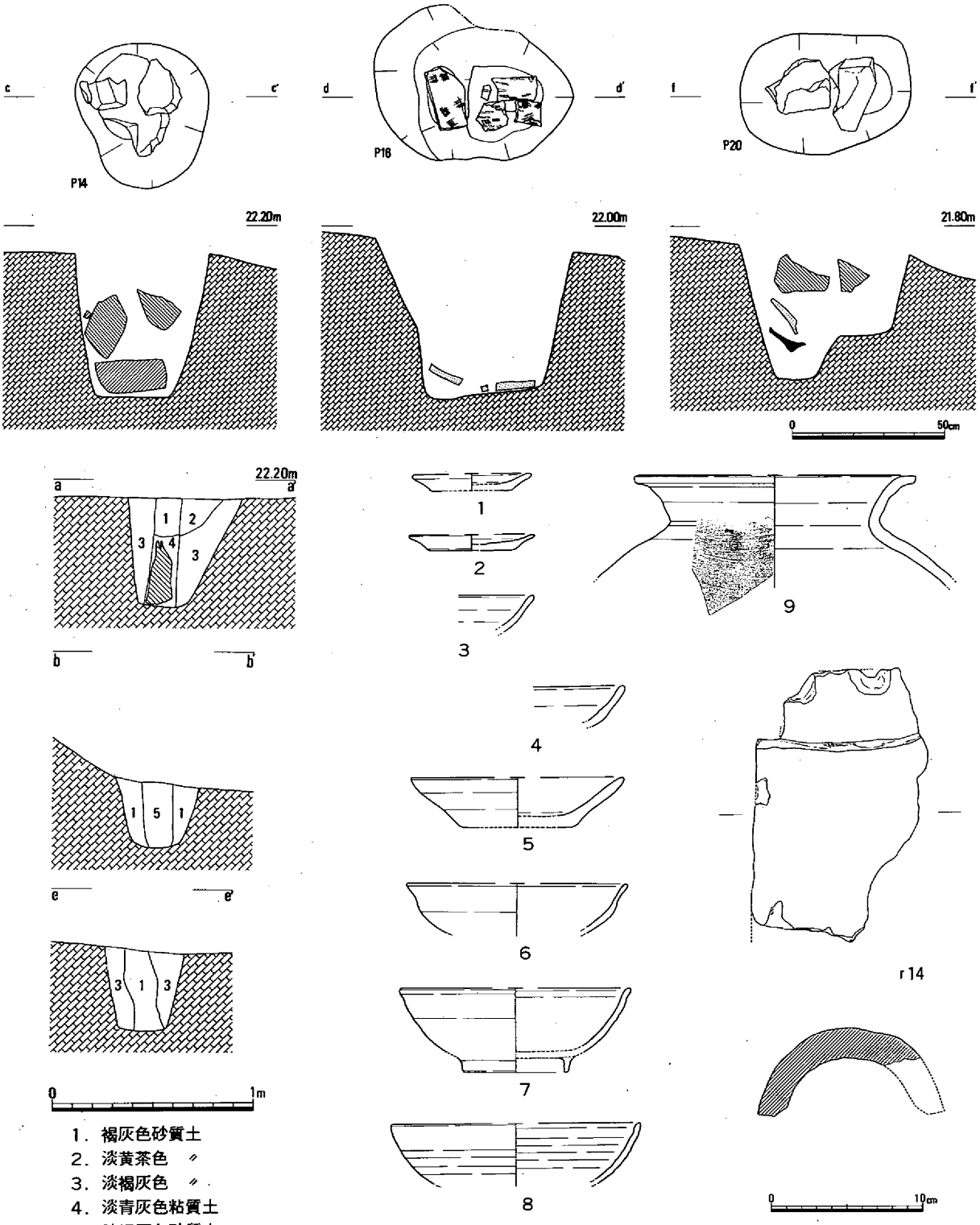


第96図　建物20平・断面図

建物－20（第96・97図）

E15区周辺に位置し、建物－19と重複して検出された。桁行６間×梁行２間（1447cm×396cm）の南北に長い主屋部に、２間×１間（491cm×176cm）の角屋部を南東隅に付属させた構造を有する。また、主屋部の内部は、北側４間目から５間目において、中心柱を有する総柱構造をとり、その南北側では中心柱は検出されていない。

建物の面積は38.5㎡で、建物の主軸はN－5°－Wを示している。



第97図　建物20柱穴断面図および出土遺物

建物の検出レベルは標高21.13～21.54cm、柱穴底のレベルは標高21.22～21.77cmである。柱間距離は桁間で226～258cm、梁間で174～198cmを測る。

柱穴の掘方平面は不整形で、その長軸は約31～65cmであり、柱穴の形状・大きさともにばらつきがある。

柱穴のうち、P10には樹種がネズミサシの柱根が遺存していた。また、P14には根石が遺存しており、P16には根石代わりに使用された奈良時代の国分僧寺のものと推定される平瓦が遺存していた。P20では、柱抜き取り後に石・土器や瓦が落ち込んだ状況で検出された。この他、P13・P19でも柱痕跡が確認できた。

遺物は、P1・P12から土師器・須恵器の小片、P2・P3から土師器の小片、P4から備前焼椀・土師器皿・早島式土器椀、P5から土師器の細片、P7・P13から土師器甕や皿、P8から備前焼甕や椀、P9から備前焼椀・土師器皿や甕・早島式土器椀、P10から土師器皿・須恵器椀、P11から須恵器甕や鉄滓、P16から瓦器の細片・須恵器椀・土師器皿や甕、P18から備前焼椀・土師器甕、P19から土師器の小片、P20から須恵器甕・丸瓦、などが出土した。

図化した遺物は、次の10点である。1・2は土師器の小皿、4・5は土師器の杯である。6・7は早島式土器の椀である。この早島式土器椀の口径は、それぞれ推定値14.6cm・15.0cmを測り、鹿田Ⅱ－2期～Ⅲ－1期の様相を示している。8は備前焼の椀で、Ⅰ期に属する。9は須恵器の甕である。r14は丸瓦である。

建物－20の時期は、出土遺物の様相から、12世紀末から13世紀前半ごろに属すると推定される。この時期からすれば、重複する建物－19とはほとんど時期差はないが、建物の構造からいえば、建物－20の方が後出と考えられる。（横山）

建物－21（第98・99図）

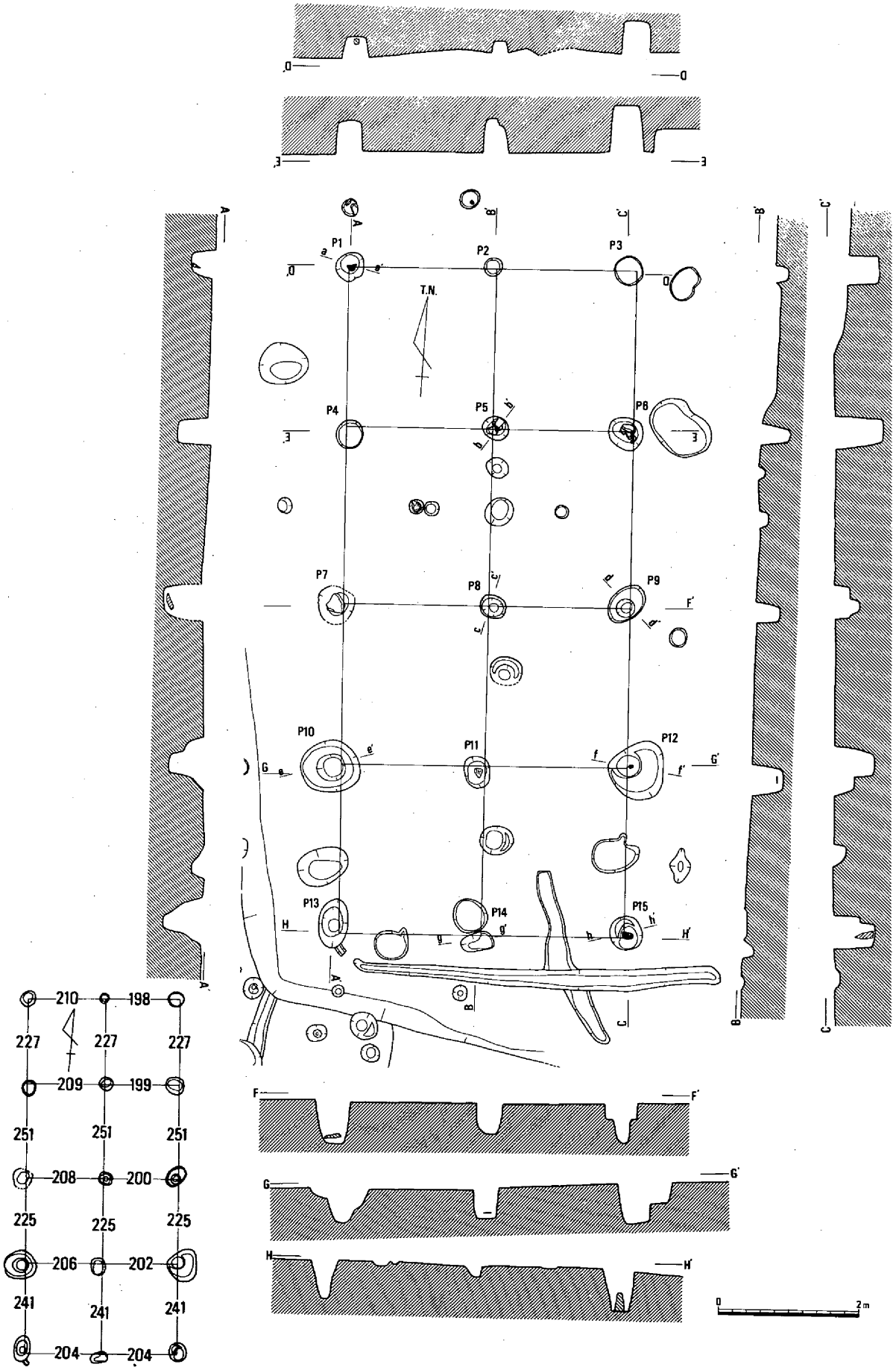
E16区周辺に位置する。旧河道の堆積土上に立地し、建物の南側と西側には整地された痕跡が残っている。建物の構造的には、総柱建物である。しかし、P2・P14の掘方の深さは、他と比較して非常に浅く、機能は異なっていると推定され、純然たる総柱とはいえない。建物の規模は、桁行4間×梁行2間（944cm×408cm）で、面積は38.5㎡である。建物の主軸はN－3.5°－Wを示している。

建物の検出レベルは標高21.29～21.55m、柱穴底のレベルは標高20.80～21.37mである。柱間距離は桁間で225～251cm、梁間で198～210cmを測る。

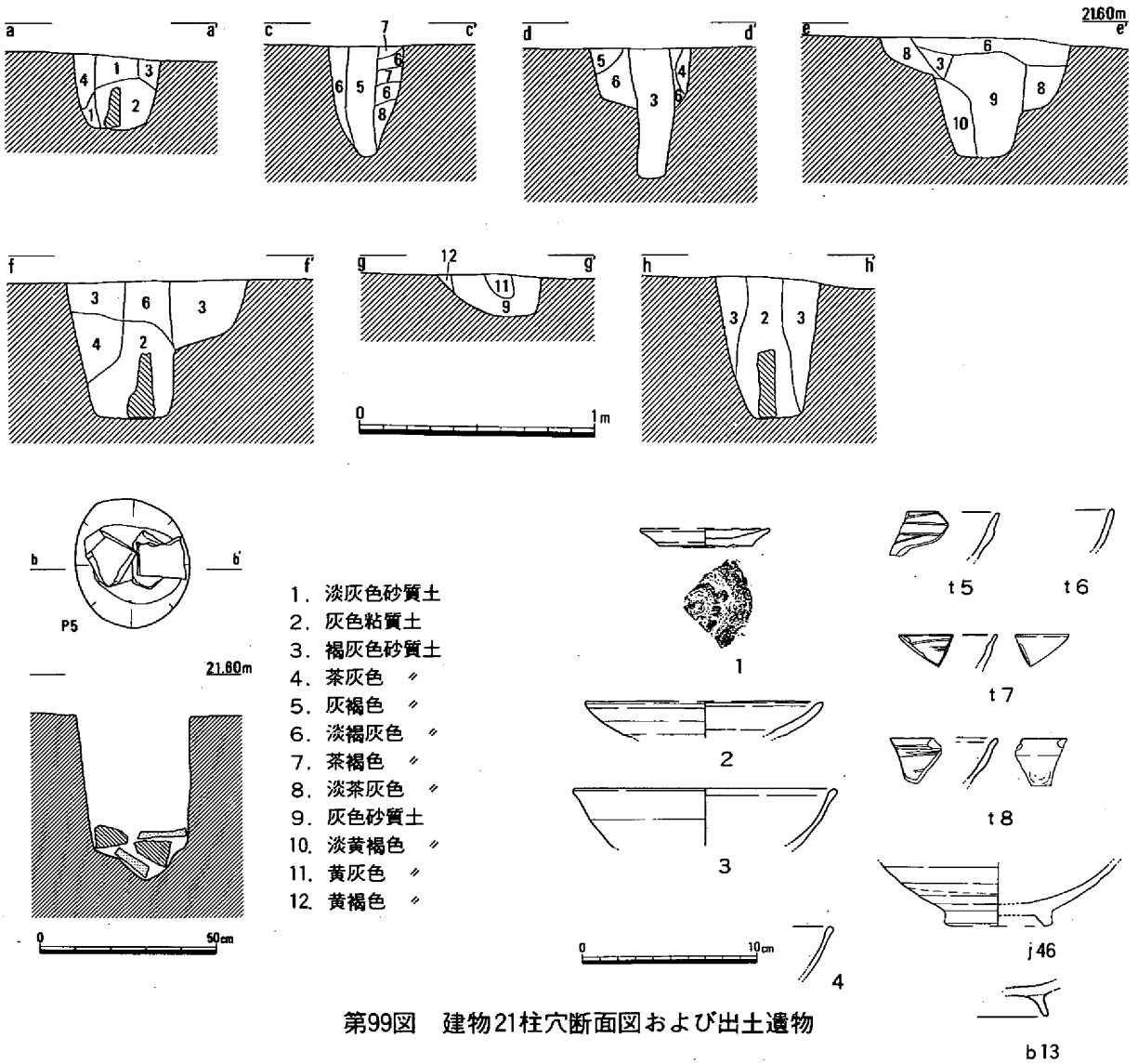
柱穴の掘方平面は、直径約25～84cmのほぼ円形状を呈しており、柱穴の大きさにも、かなりのばらつきがある。

柱穴のうち、P1にはクリ、P12にはアラカシ、P15には樹種不詳（アキニレか）の柱根が遺存していた。また、P5では、根石として平瓦と石が遺存しており、P7にも根石が遺存していた。このほか、P8・P9・P10・P13において、柱痕跡が確認できた。

遺物は、P1から須恵器と早島式土器の小片、P2から土師器椀小片、P3・P6から備前焼椀小片、P5から平瓦や土師器皿小片、P7・P8・P14から土師器甕小片、P9から備前焼椀や土師器甕の小片、P10から瓦器や黒色土器、P11から土師器・須恵器の小片、P12から備前焼椀や早島式土器の小片、P13から土師器小皿や早島式土器の小片、P15から備前焼椀や土師器甕・皿の小片、などが出土している。図化したものは、次の9点である。1は土師器の小皿、2は土師器の杯である。3・4は早島式土器の椀で、4の高台はⅠ－3期の様相を示しているが、3の口径は15.0cmでⅡ－2



第98図　建物21平・断面図



第99図　建物21柱穴断面図および出土遺物

期～Ⅲ－１期の様相を示している。５は備前焼の椀である。ｔ５～８は瓦器の小片で、椀と推定される。いずれも和泉型Ⅲ－１期に属する。ｊ46は白磁碗で、削り出し高台である。

建物－21の時期は、出土遺物の様相から、12世紀末から13世紀前半ごろと推定される。　（横山）

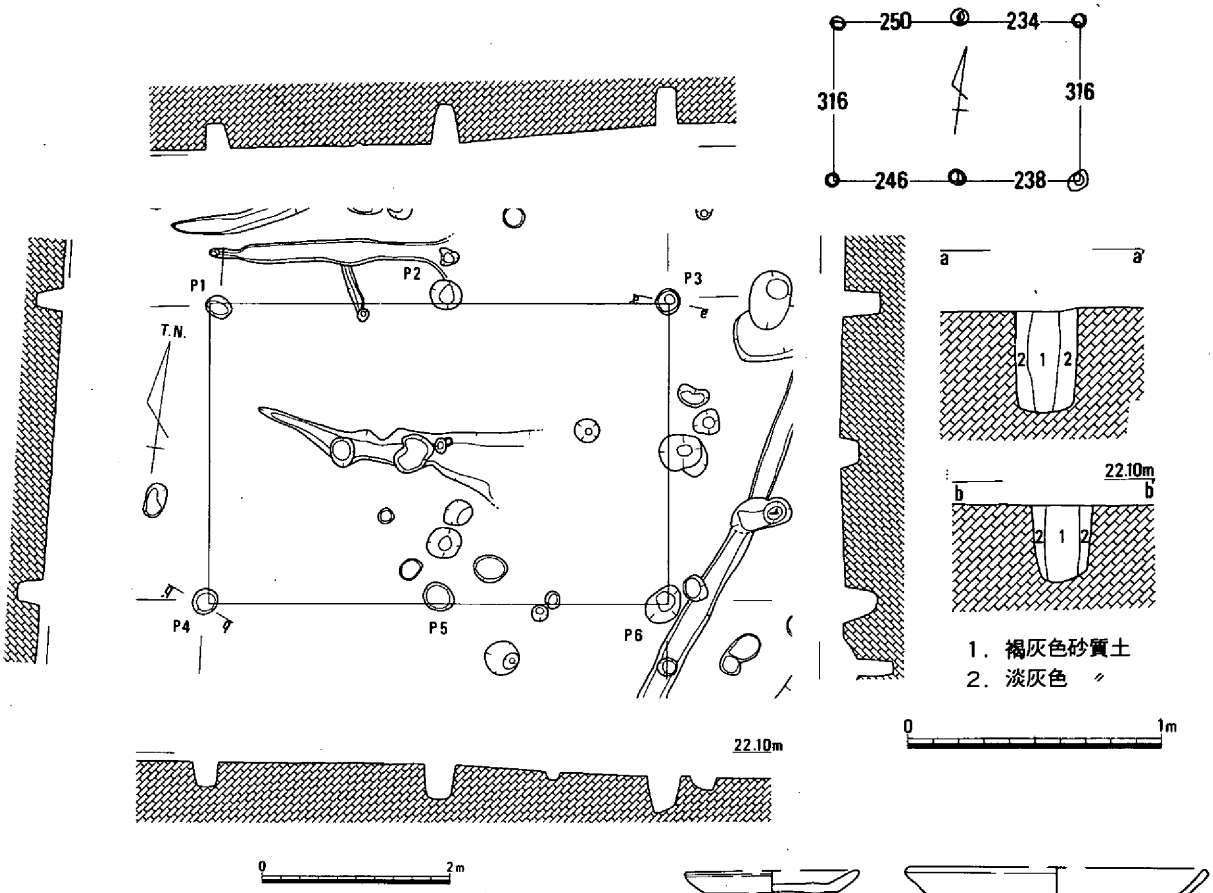
建物－22（第100図）

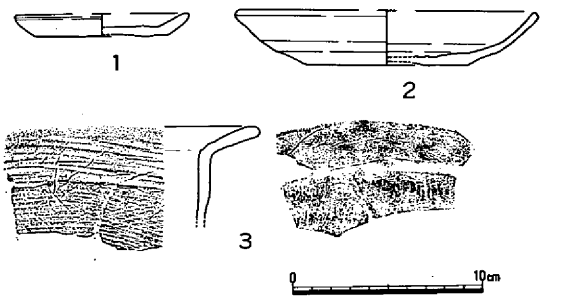
Ｆ15区に位置する、桁行２間×梁行１間（484cm×316cm）の側柱建物である。建物面積は15.3㎡で、建物の主軸はＮ－82°－Ｅを示す。

建物の検出レベルは標高21.85～22.05m、柱穴底のレベルは標高21.46～21.77mである。柱間距離は、桁間で234～250cm、梁間で316cmを測る。

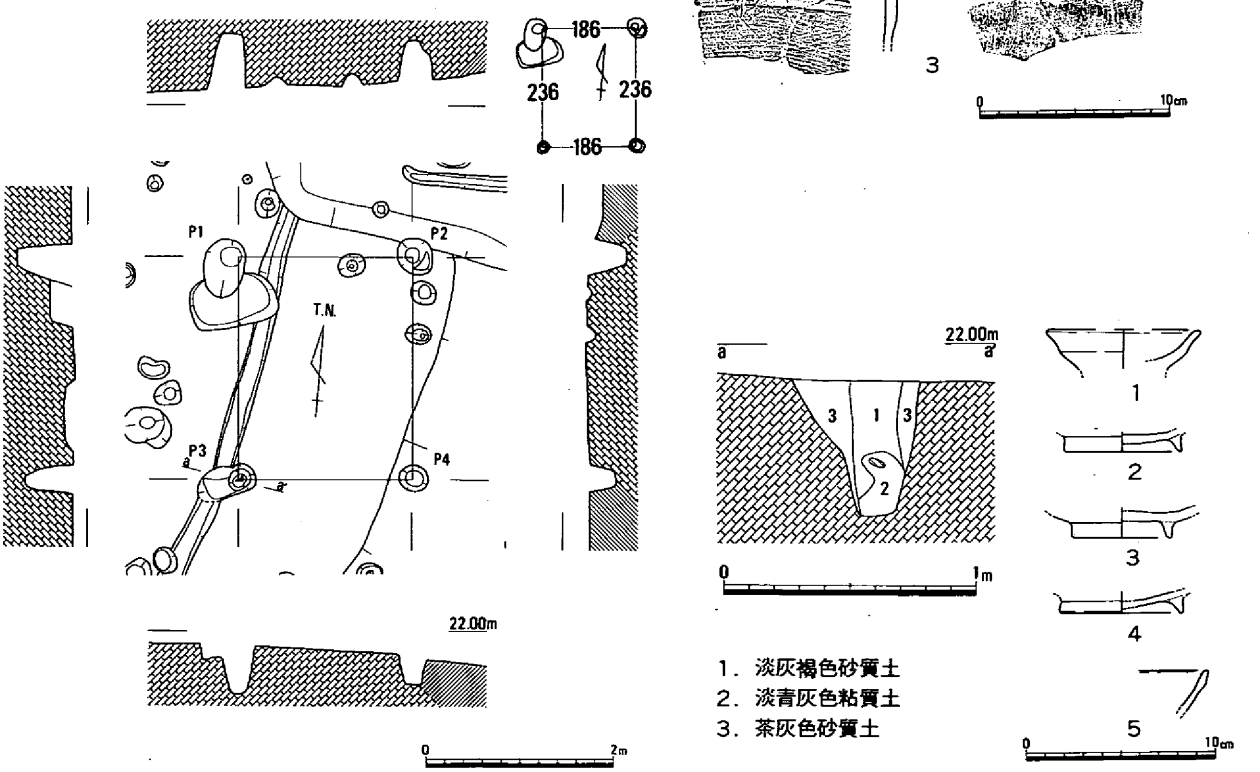
柱穴の掘方平面は、直径約24～43cmのほぼ円形状を呈している。柱痕跡は、Ｐ３・Ｐ４の２本で確認できた。

遺物は、Ｐ１から土師器甕、Ｐ３から早島式土器や土師器小皿、Ｐ４から備前焼鉢や土師器皿、Ｐ５から土師器甕・小皿、などが出土した。図化出来たものは次の３点である。１は、Ｐ５から出土した、土師器小皿で、灯明皿として使用していたようである。２は、Ｐ４から出土した土師器皿、３は、Ｐ５から出土した、土師器甕の小片である。　（横山）





第100図　建物22平・断面・柱穴断面図
および出土遺物



第101図　建物23平・断面，柱穴断面図および出土遺物

建物－23（第101図）

Ｆ15区に位置する。建物の規模は、桁行１間×梁行１間（236cm×186cm）である。建物面積は4.4㎡で、建物の主軸はＮ－５°－Ｗを示し、建物－16・18・19・20・21などと同じである。建物の検出レベルは標高21.66～21.87ｍで、柱穴底のレベルは標高21.24～21.44ｍである。

柱穴の掘方平面は、直径（長軸）約30～61cmのほぼ円形または楕円形状を呈している。Ｐ３にはネズミサシの柱根が遺存していた。

遺物は、すべての柱穴から出土した。図化した遺物は、次の５点である。１は土師器の台付小皿で、Ｐ１から出土した。２～４は早島式土器椀の底部で、２・３はＰ１、４はＰ３から出土した。５は備前焼椀の口縁部小片で、Ｐ１から出土した。

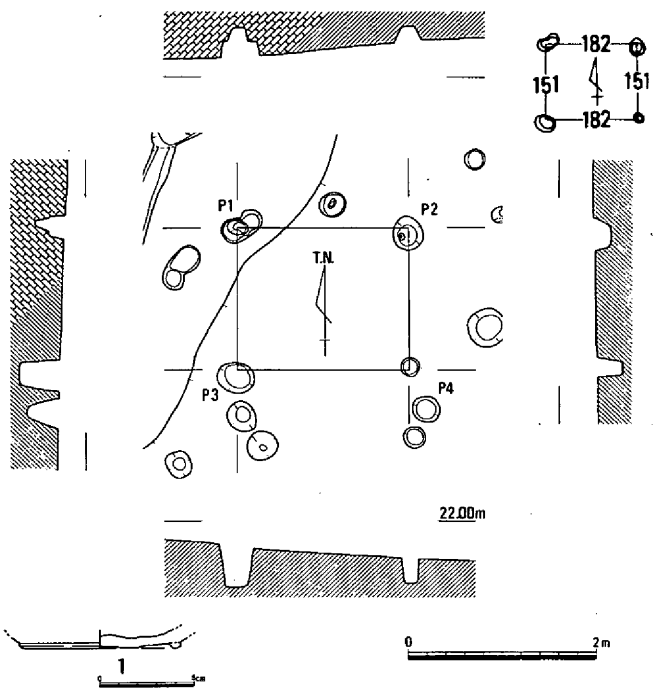
建物の時期は、出土遺物の様相から、12世紀末から13世紀前半ごろと推定される。（横山）

建物－24（第102図）

Ｆ15区に位置する。建物の規模は桁行１間×梁行１間（182cm×151cm）で、面積は2.7㎡である。主軸はＮ－89°－Ｗを示す。

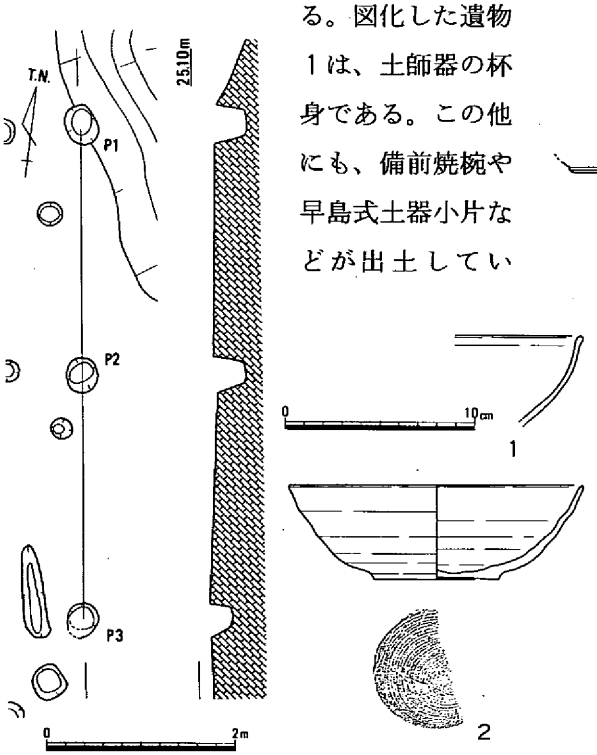
建物の検出レベルは21.60～21.80ｍで、柱穴底のレベルは21.30～21.46ｍを測る。柱穴の掘方平面は直径約20～49cmのほぼ円形状を呈している。

遺物はＰ２・Ｐ３から出土している。図化した遺物１は、土師器の杯身である。この他にも、備前焼椀や早島式土器小片などが出土している。



第102図　建物25平・断面図および出土遺物

小片ながらも、これらの出土遺物の年代から、平安時代末期から鎌倉時代前期ごろと推定される。（横山）



第103図　柱穴列８平・断面図および出土遺物

柱穴列－８（第103図）

Ｂ７区東側に位置し、２間分を検出した。柱穴直径は35～40cm、深さ30～40cmを測る。柱間隔は270cmである。柱穴－545から早島式土器椀１、備前焼椀２が出土している。いずれも12世紀末頃のものと考えられる。東に伸びる建物の可能性もあるが不明である。

（伊藤）

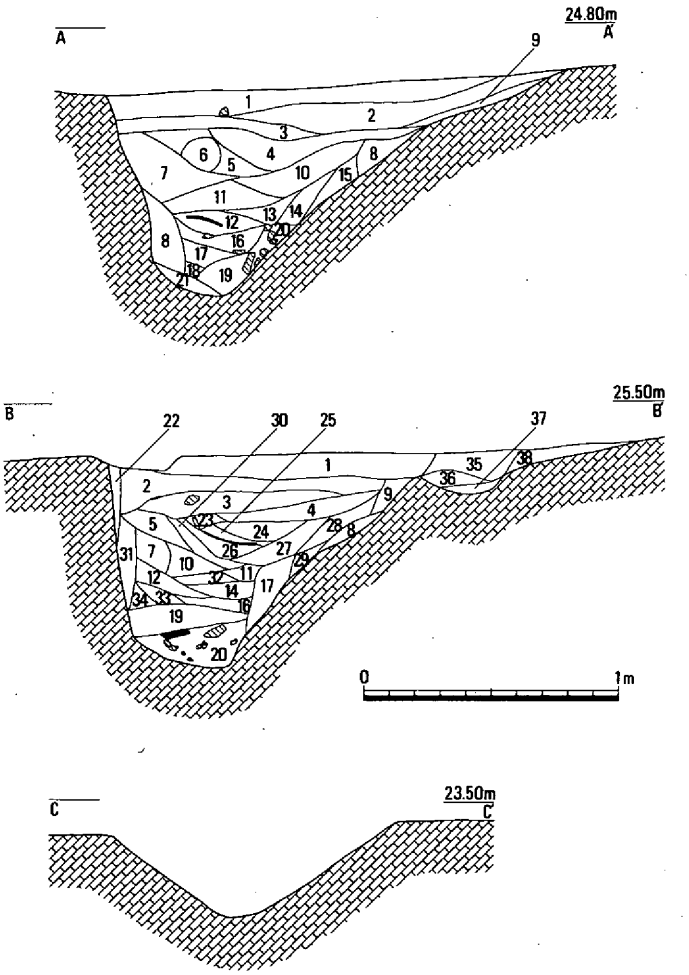
(2)　溝

溝－18（第104・105図）

Ａ７区東南角から、東南方向にさらにＣ９区付近から　東の方向に流れ、Ｄ１区付近で北河道に流れこむのか、あるいは河道に沿って溝904、溝1447と同じ方向に流れる。

全長52m＋αになる。上・中流域では幅２m近くあり、深さは80cmほどあり断面はＵ字形を呈す。Ｄ11区付近では上面が後世の水田によって削平を受け幅１m前後、深さも40cm前後になる。Ｂ７区付近で上面標高24.5m、溝底では23.7m、Ｄ11区付近では23.1mである。

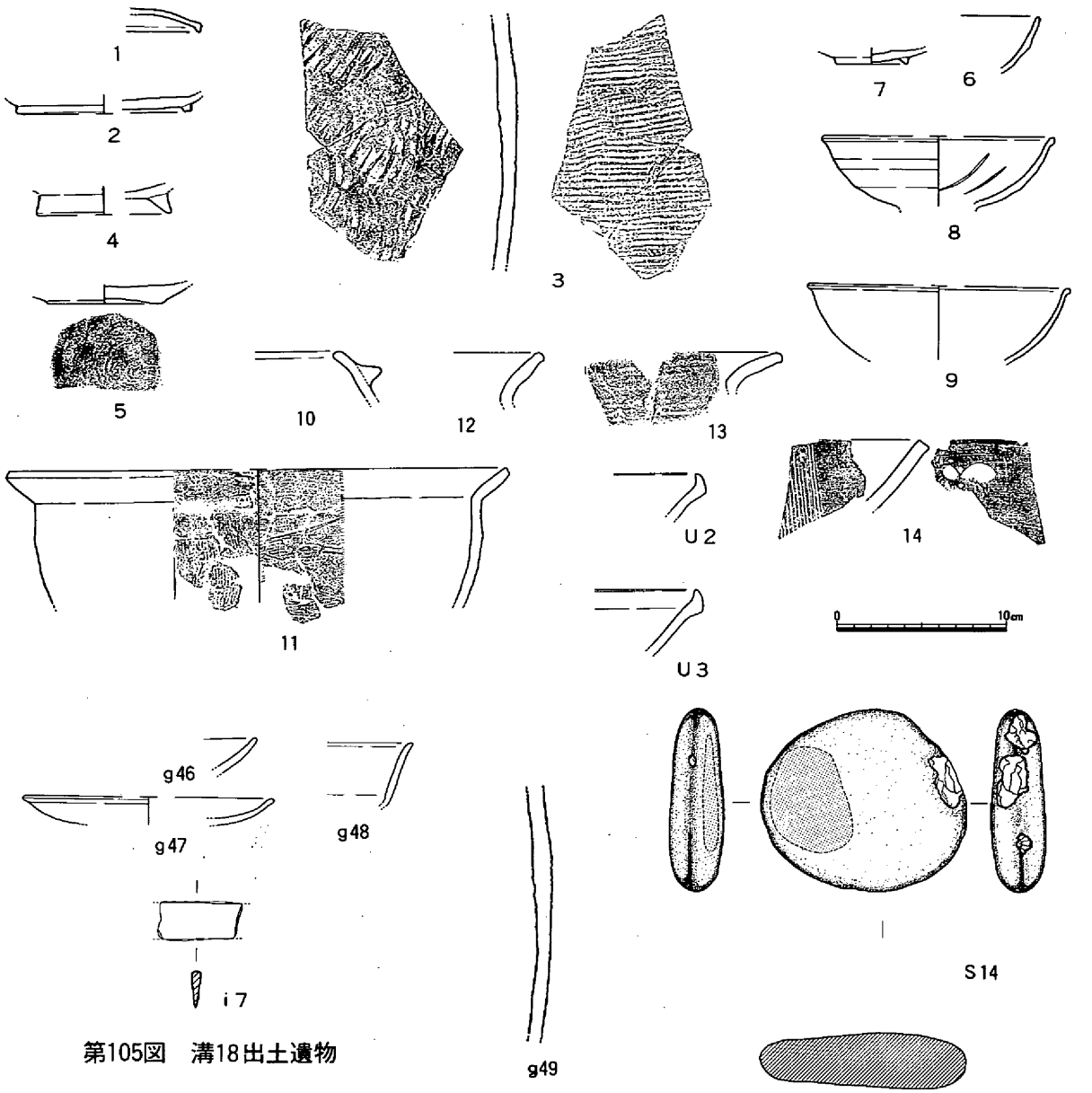
溝内から奈良時代の須恵器１～３、平安時代の緑釉陶器ｇ10～13、鎌倉時代の土師器椀（早島式土器）６～９、鍋10・11、甕12・13、東播系のこね鉢14・15、備前焼摺鉢16などがあり、その他に刀子ｉ７、叩き石状の石器Ｓ14などが出土している。



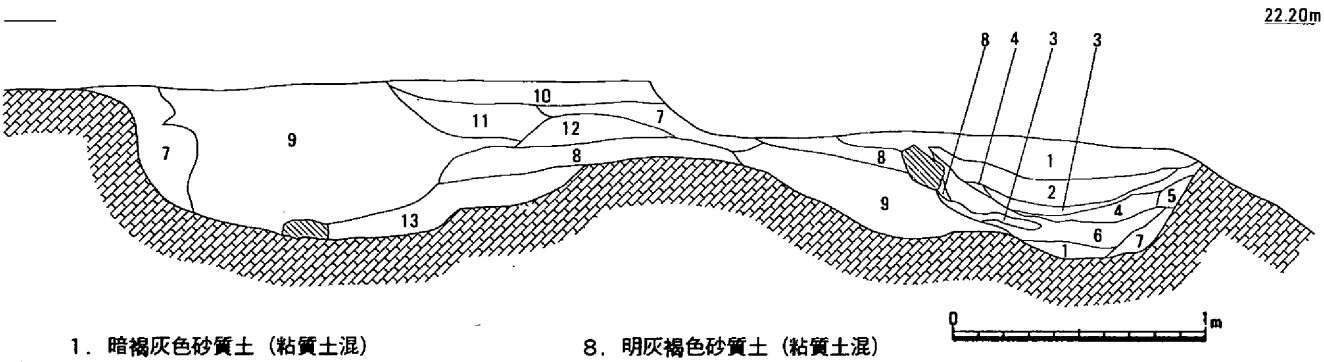
溝18（A－A'）（B－B'）

1. 灰褐色砂質土（Mn微含，微砂）
2. 褐灰色　〃　（Mn少含，　〃　）
3. 褐灰色　〃　（　〃　，細砂）
4. 褐灰色粘性砂質土（　〃　，微砂）
5. 灰褐色粘性　〃　（Mn微含，　〃　）
6. 褐灰色粘性　〃　（微砂，ブロック状堆積）
7. 灰褐色砂質土（Mn少含，微砂）
8. 灰褐色粘性砂質土（粗砂，黄色地山ブロック少含，しまりが悪い）
9. にぶい黄色粘性砂質土
10. にぶい黄褐色粘性砂質土（Mn少含，微砂）
11. にぶい黄褐色粘性　〃　（Mn微含，　〃　）
12. 灰褐色粘性砂質土（微砂）
13. 灰褐色粘性　〃　（Mn少含，微砂）
14. 灰褐色粘性　〃　（　〃　，細砂）
15. 灰褐色粘性　〃　（Mn強含，　〃　）
16. 灰色粘性砂質土（小礫１～２cm大多含）
17. 褐灰色粘質土（角礫３～５cm大多含）
18. 灰色粘性砂質土（細砂）
19. 暗灰色砂（粗砂）
20. 褐灰色砂礫土（角礫５～６cm大多含）
21. にぶい黄色粘質土（しまりが良い）
22. にぶい灰黄色砂質土（Mn強含）
23. 暗褐色粘性砂質土（Mn多含）
24. 褐灰色粘性　〃　（Mn少含，微砂）
25. 灰褐色粘性　〃
26. 暗褐灰色粘性砂質土（Mn少含，カーボン含）
27. 灰褐色粘性砂質土（Mn多含）
28. 灰黄色粘性　〃　（Mn微含，小砂礫微含）
29. 暗灰色粘質土（小砂礫少含）
30. にぶい黄灰色粘性砂質土（小砂礫少含）
31. 灰褐色粘性砂質土（細砂）
32. 灰褐色粘性　〃　（小砂礫少含）
33. 黄褐色粘性　〃　（微砂）
34. 灰黄色粘性　〃　（　〃　）
35. 灰褐色砂礫土（小礫２～３cm大多含）
36. 灰褐色砂質土（小礫１～２cm大少含）
37. 灰褐色　〃　（微砂）
38. 褐灰色　〃　（細砂）

第104図　溝18断面図



第105図　溝18出土遺物

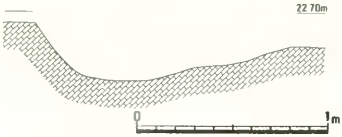


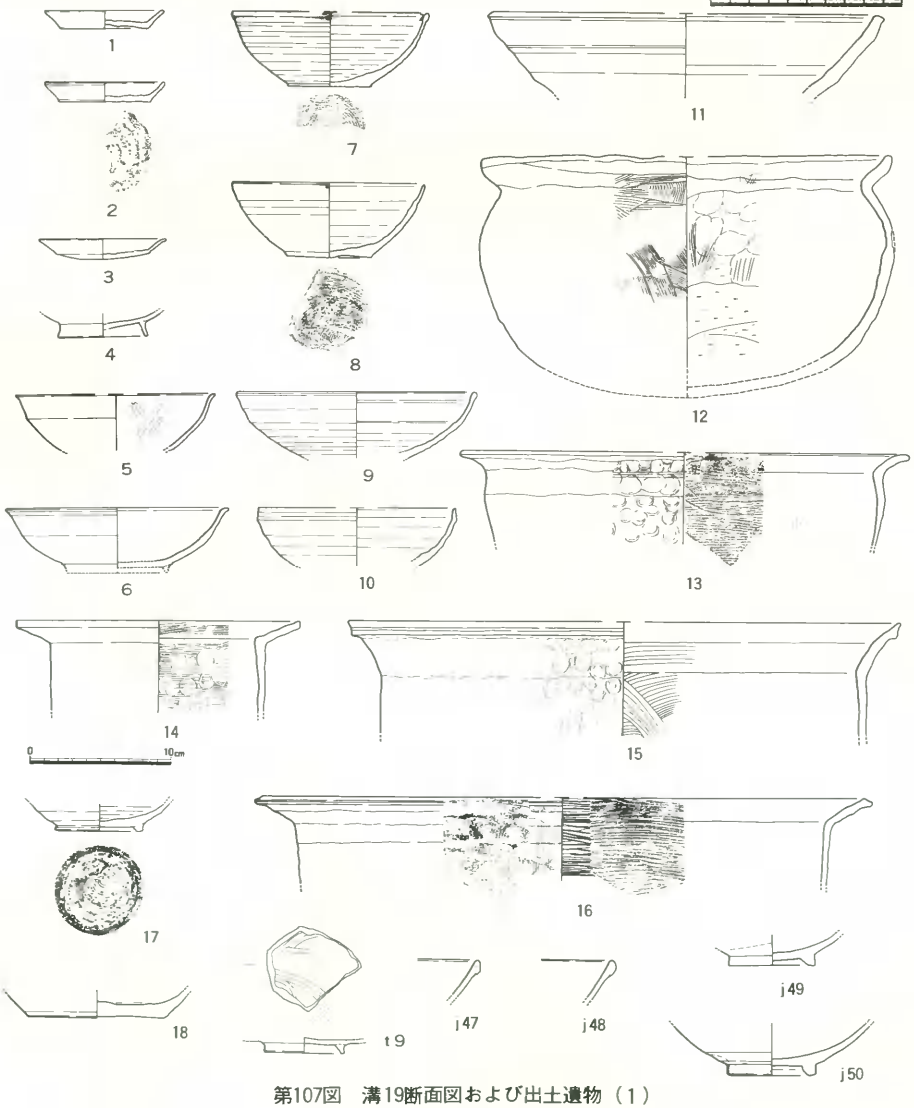
1．暗褐灰色砂質土（粘質土混）
2．黒褐色粘質土（炭化物・土器片を多く含む）
3．明褐灰色砂質土（粘質土混）
4．明黄褐色細砂
5．褐灰色砂質土（粘質土混）
6．淡灰色粘質土
7．淡灰色砂質土（粘質土混）
8．明灰褐色砂質土（粘質土混）
9．明灰褐色　〃　（　〃　，砂礫を多く含む）
10．暗灰褐色　〃　（　〃　）
11．暗灰褐色　〃　（　〃　，炭化物・土器片を含む）
12．灰褐色　〃　（　〃　）
13．黄灰色　〃　（　〃　）

第106図　溝19と20との関係断面図

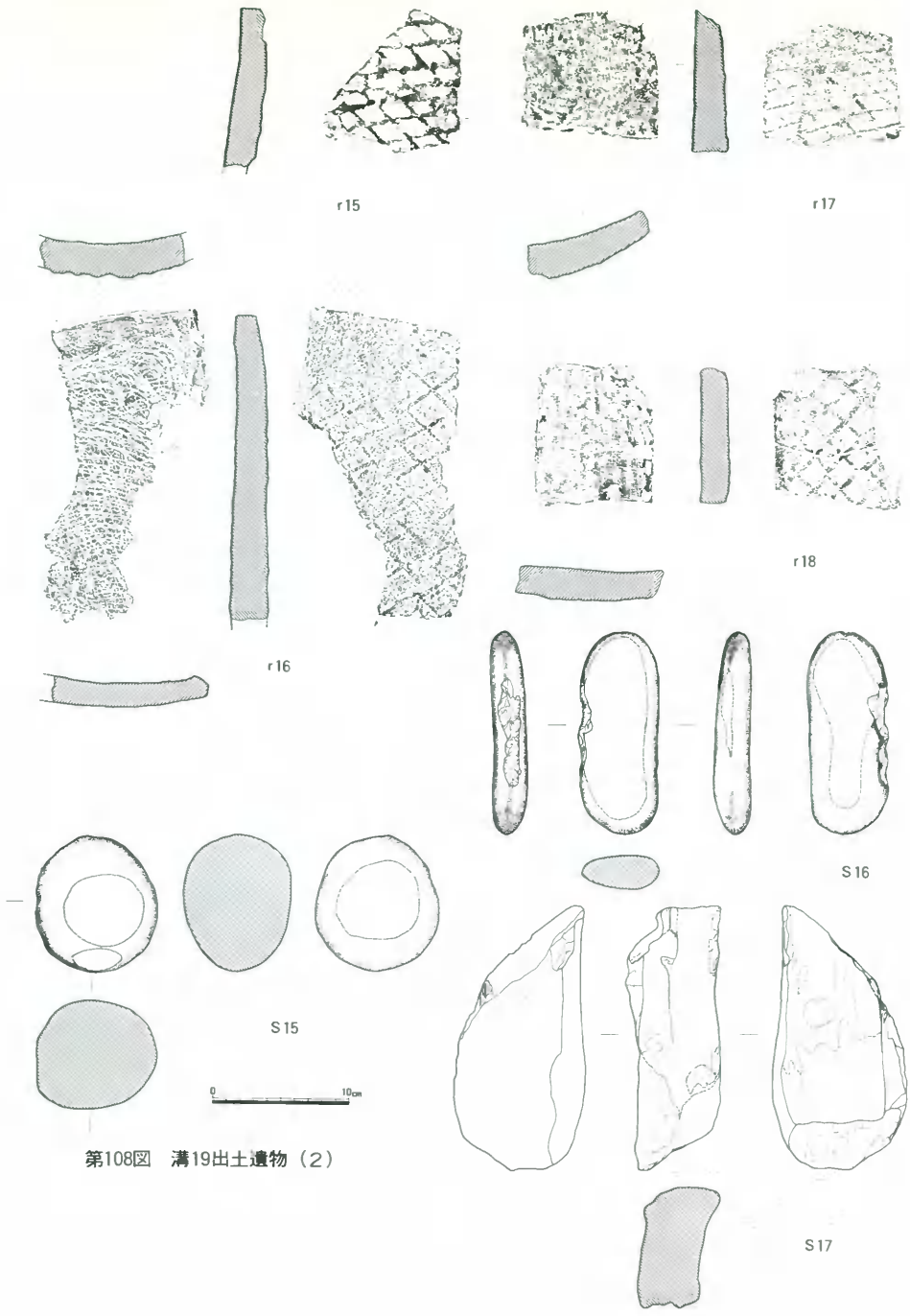
溝－19（第106～108図）

Ｄ９区の溝－２付近から始まり、Ｄ12区付近ではっきりしないが、溝－12と交差し、河道－１に沿ってＤ16区に向って流れる溝で全長約80mに達する。幅は場所によって異なり１～２mあり、深さは12～35cmである。Ｄ12区付近で上面の標高22.65m、底部では22.45m、Ｄ16区付近では上面21.8m、底部20.4mである。溝内からは土師器小皿１～３、椀（早島式土器）４～６、備前焼椀７～10、摺鉢11、土師器鍋12・13、甕14～16、瓦器ｔ９、白磁ｊ47～50、斜格子の叩き文様を持つ平瓦ｒ15～18、砥石Ｓ17、叩き石Ｓ15・16などがみられる。





第107図　溝19断面図および出土遺物（１）

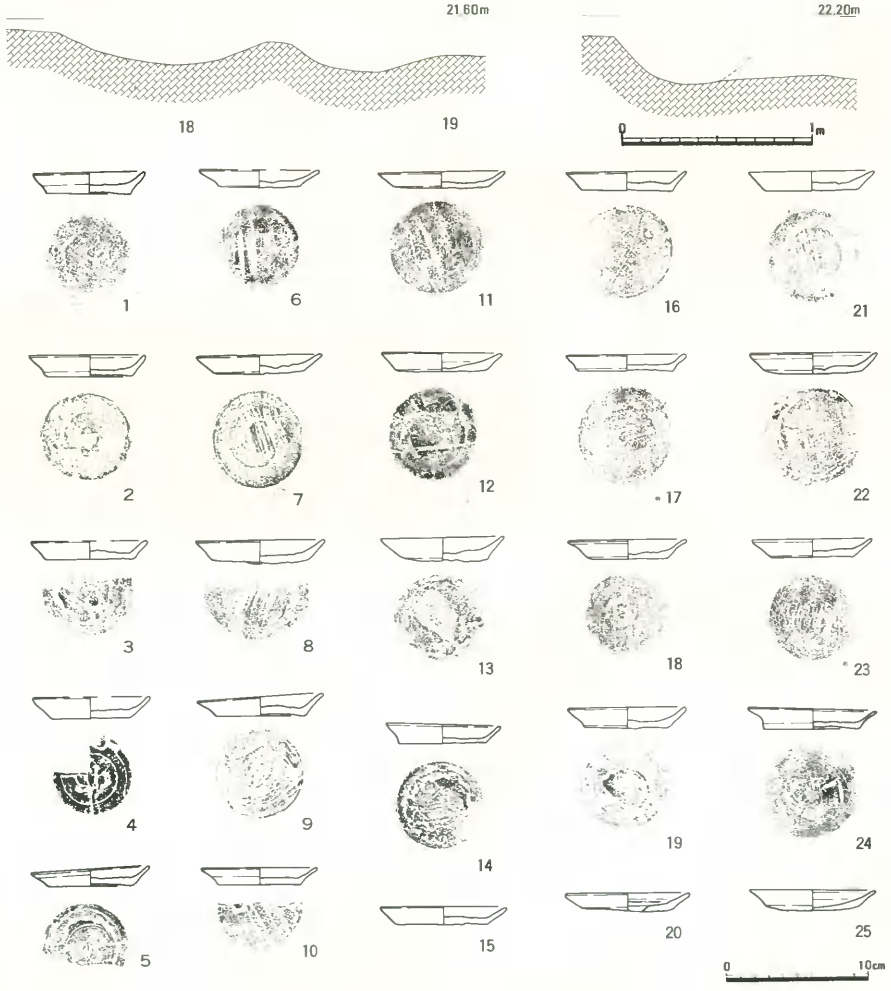


第108図　溝19出土遺物（2）

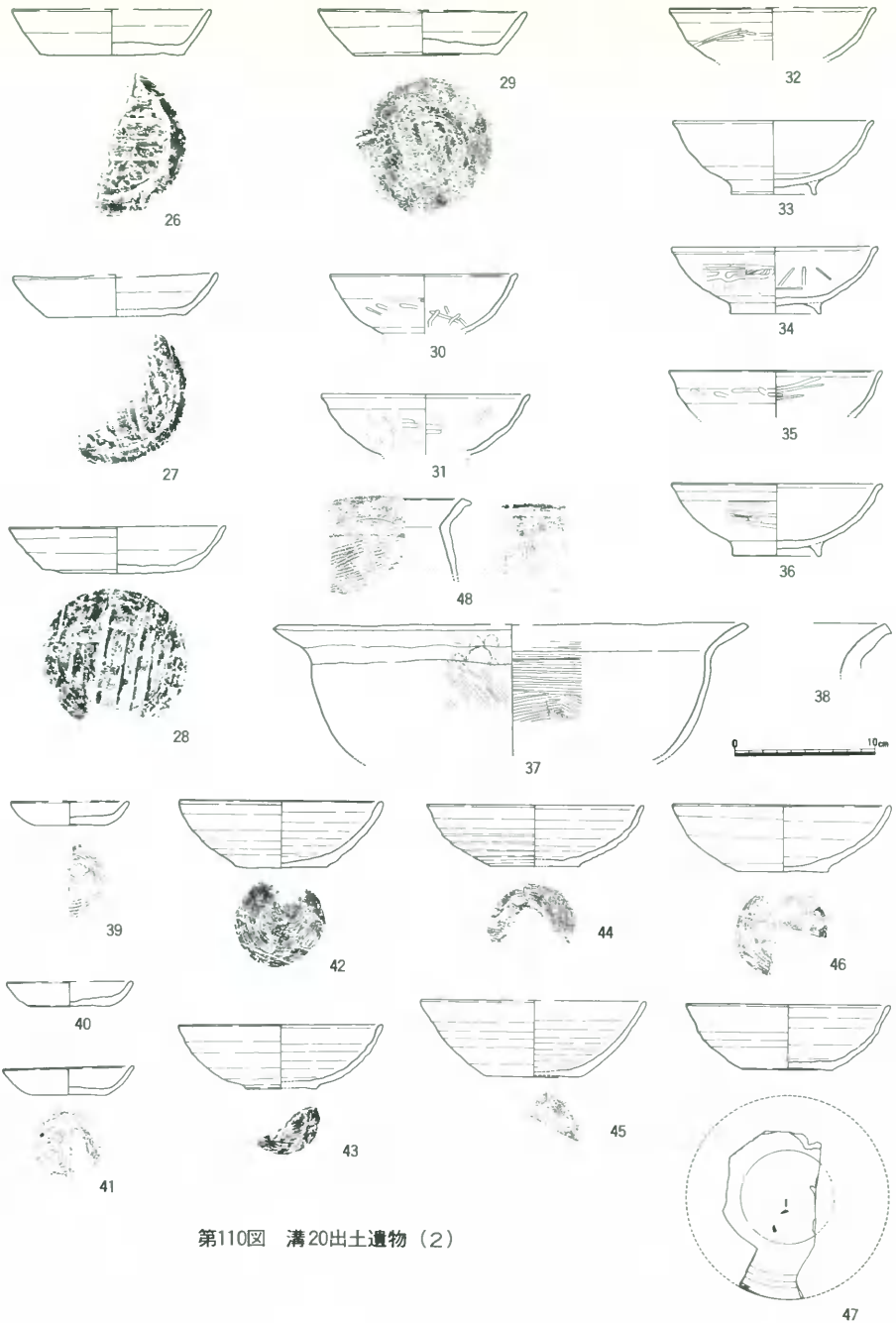
溝－20（第106・109～111図）

O13区付近から、河道－1に沿って東にD16区付近までおよそ23mほど流れる。溝幅90～135cm、深さ14～18cmを測る。溝内から多量の土器が出土している。

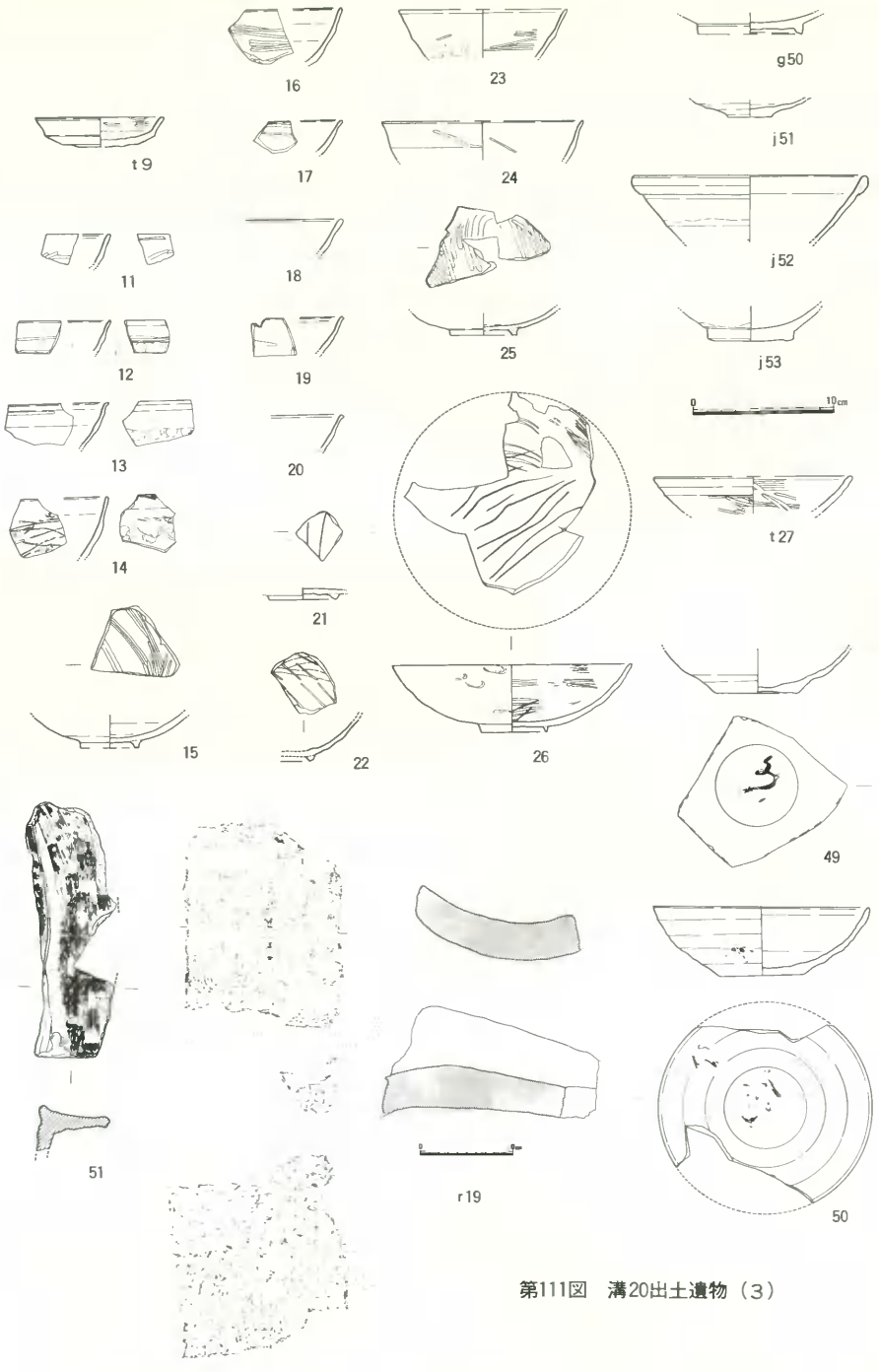
1～25は土師器質小皿、26～29は杯、30～36は椀（早島式土器）、37は鍋、39～41は須恵器小皿（備前焼）、42～50は椀で、47～50は底部や側面に墨書が見られるが、判読はできない、凡字の可能性が強い。他にカマド、奈良時代の軒平瓦などもあり、また瓦器の小皿大9：11、椀t12～26、緑釉陶器g50、白磁小皿j51、椀52・53などが出土している。



第109図　溝19・20断面図および溝20出土遺物（1）



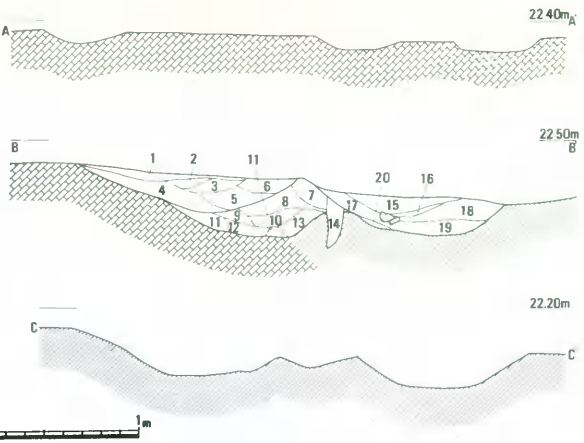
第110図　溝20出土遺物（2）



第111図　溝20出土遺物（3）

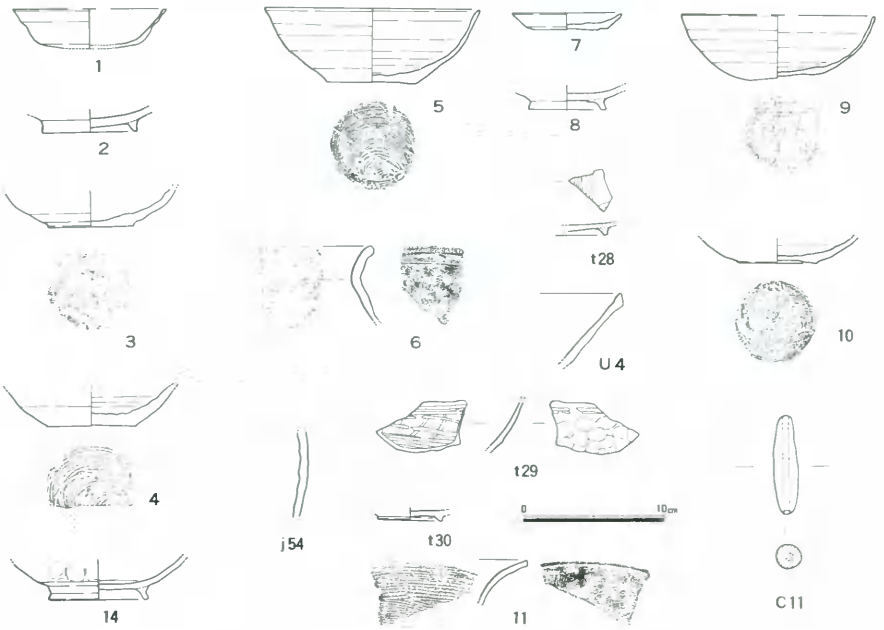
溝－21・22・23（第112図）

H13～14区にかけて見られた溝で、これらの溝は南河道の北側微高地端部に沿って作られた溝である。この中では溝－22が最も新しい。溝－21は幅42～95cm、深さ17～20cm、全長22m、溝－22は幅35～70cm、深さ6～31cm、全長15.5m、溝－23は幅30～117cm、深さ5cm、全長3.5m、

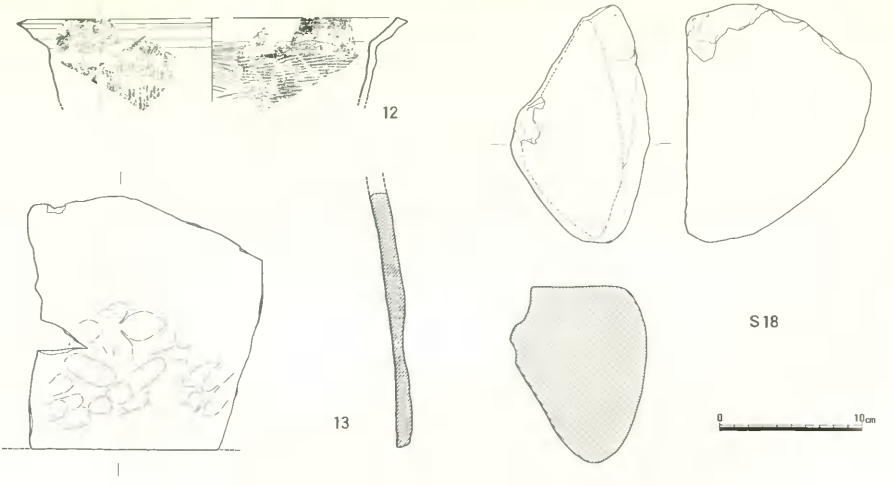


溝21・22（B－B'）

1. 灰白色砂質土（Mn少含，5mm大の小礫多含）
2. 褐灰色　〃
3. 灰褐色砂（細砂）
4. 暗黄褐色粘質土（Mn強含）
5. 暗褐灰色　〃　（　〃　）
6. 褐灰色砂礫土（Mn多含）
7. 褐灰色粘質土（　〃　）
8. 褐灰色砂（微砂，Mn強含）
9. 暗褐灰色粘質土（Mn強含，5層土よりも更にMnが強い）
10. 褐灰色砂礫土（Mn少含，細砂，5mm大の小礫少含）
11. にぶい黄灰色砂質土（地山ブロック）
12. 灰色砂質土（微砂）
13. 灰褐色　〃　（細砂）
14. 暗灰色粘質土
15. 灰黄色　〃　（3mm大の小砂礫少含）
16. 暗灰色砂質土
17. 暗灰色　〃
18. 灰白色砂（微砂）
19. 暗灰色粘質土（細砂）
20. 褐灰色砂質土（Mn強含）



第112図　溝21～23断面図および出土遺物

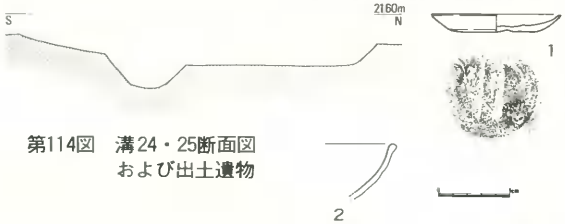


第113図　溝20・21出土遺物

それぞれの溝内からの出土遺物は、溝―21から１～６、12で、１は土師器杯、２は椀、３～５は備前焼椀、12は土師器鍋、他に砥石Ｓ９などが出土している。溝―21・22は混っているが、７～11が出土している。７は土師器小皿、８は椀、９・10は備前焼椀であり、他に瓦器椀ｔ28～30、緑釉陶器片、東播系鉢ｕ４、青磁壷胴部ｊ54、土師質のカマドの脚台部片13、土錘などが出土している。また溝―23からは、土師器椀14が１点のみ出土している。これらの遺物からみるとそれぞれの溝間に大きな時期差はみられず、12世紀後半と考えられる。

溝―24・25（第114図）

Ｅ16区で東西に全長2.0～2.4m検出された溝で全容は不明である。24から土師器小皿１のほかに須恵器片、土師器小片がみられた。25からは早島式土器椀２のみが出土している。



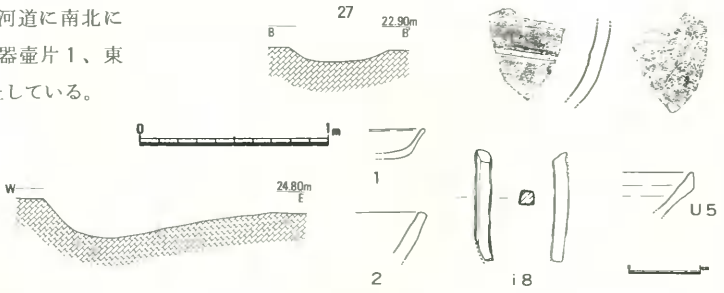
第114図　溝24・25断面図および出土遺物

溝―26（第115図）

Ｉ13～Ｊ13区南河道に南北に8.6mの溝で、須恵器壷片１、東播系捏鉢ｕ３が出土している。

溝―27（第115図）

Ｃ８～Ｄ８区にある。南北に12mの溝状の遺構である。　（伊藤）

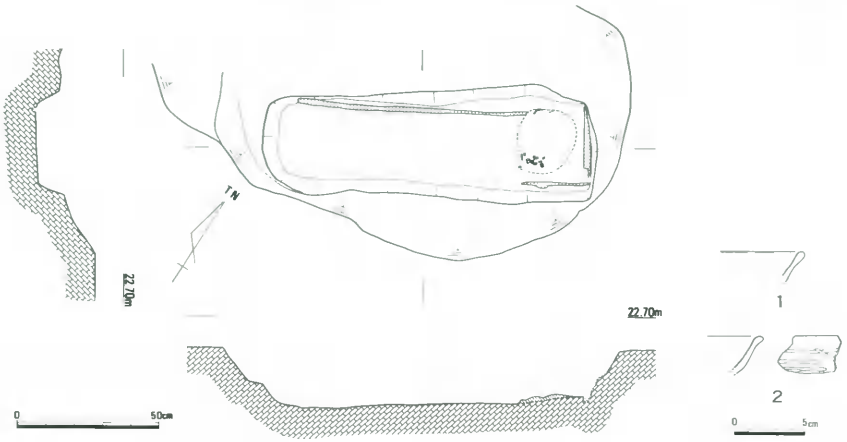


第115図　溝26・27断面図および出土遺物

(3)　土壙墓

土壙墓－１（第116図）

H13区に位置する。検出レベルは標高22.58～22.59m、床面レベルは標高22.38～22.45mである。長軸147cmの楕円形の平面を呈する墓壙に、平面が長軸117cm・短軸41cmの隅丸方形を呈する木棺埋納壙が掘り込まれている。床面には、朽ちた頭部と28本の歯が遺存していた。頭位は北西、頭部左側を下位にすなわち横向きをとっている。遺存していた歯の特徴から、20歳前後の女性と推定される。副葬品は存在せず、少量の遺物が出土したのみである。図化した遺物１・２は早島式土器椀の口縁部小片で、Ⅱ－３期の様相を示す。このことから土壙墓－１の時期は、12世紀半頃と推定される。(横山)



第116図　土壙墓１平・断面図および出土遺物

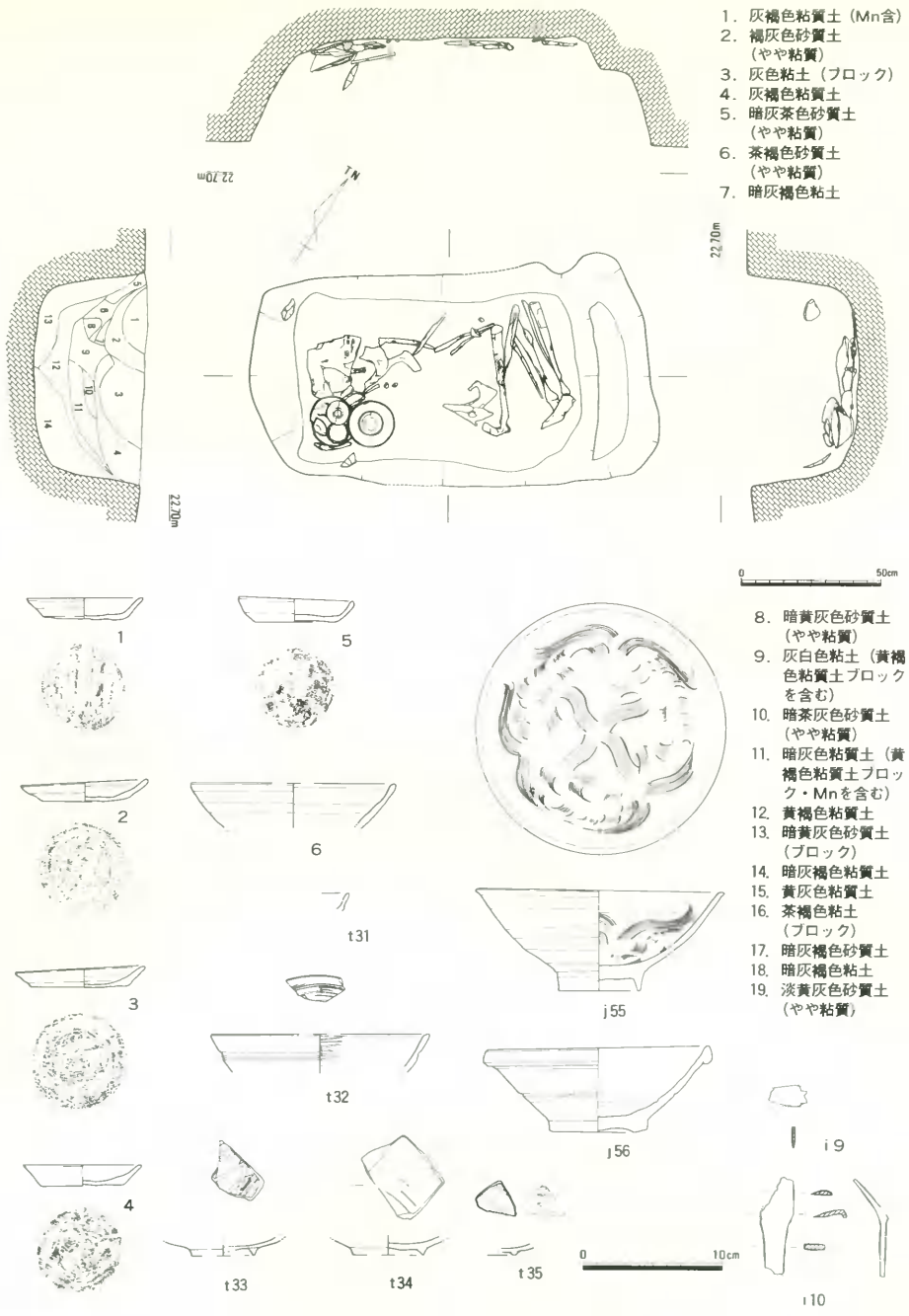
土壙墓－２（第117図）

H13区からＩ13区の土壙墓－１の南約３mに位置する。検出レベルは標高22.59～22.61m、床面のレベルは標高22.21～22.25mである。掘方平面は長軸143cm・短軸76cmの隅丸方形状を呈している。木棺の痕跡は確認できなかった。

床面には、頭部を南西に向け、体部左側を下位すなわち横向きにして、股関節、膝関節を強く曲げた横臥屈位で埋葬された状態で、人骨が遺存していた。但し、遺存状況は極めて悪い。遺存していた歯の特徴などから、壮年男性の骨と推定される。

後頭部側には、白磁椀ｊ56の内部に土師器小皿２枚（１・２）が重ねられて、白磁椀ｊ55の内部に土師器小皿２枚（３・４）と備前焼小皿１枚（５）が並べられて埋葬されていた。ｊ55は同安窯系の白磁椀で、内面に櫛で花文を描いている。ｊ56も同安窯系の白磁椀で、口縁部を玉縁につくる。備前焼小皿５は、Ⅰ期の様相を示す。また、白磁椀ｊ56の南東側にも鉄製刀子ｉ10が、折れ曲がった状態で埋葬されていた。このほか、備前焼椀６や瓦器小皿ｔ31・瓦器椀ｔ８・32～34や鉄製刀子小片ｉ９などが出土している。瓦器は、ｔ32のみが和泉型Ⅲ－１期、そのほかは、和泉型Ⅲ－２期の様相を示す。

土壙墓－２の時期は、出土遺物の様相から、13世紀前半ごろと推定される。土壙墓－１と土壙墓－２は、時期的に近接しており、それぞれの土壙墓の埋葬者は、血縁関係あるいは夫婦関係にあった可能性が想定される。(横山)

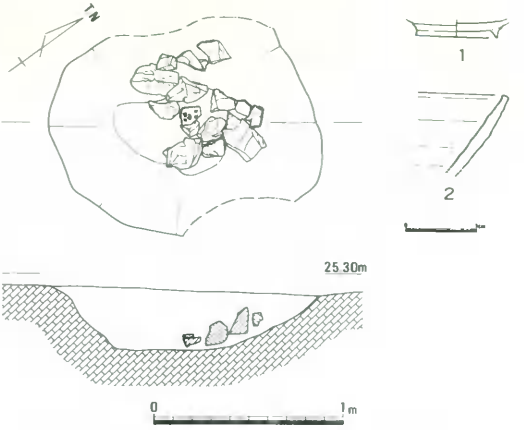


第117図　土壙墓２平・断面図および出土遺物

(4)　土壙

土壙－10（第118図）

Ｅ６区に位置する。平面は、長軸144㎝・短軸推定115㎝の楕円形状を呈している。検出レベルは標高25.18～25.24ｍ、底面のレベルは標高24.89～24.91ｍを測る。埋土は青灰色粘質土であり、底面には石や平瓦が遺存していた。図化した遺物は２点で、１は早島式土器椀の底部で、２は備前焼鉢の口縁部である。時期は、遺物の様相から13世紀ごろと推定される。　（横山）

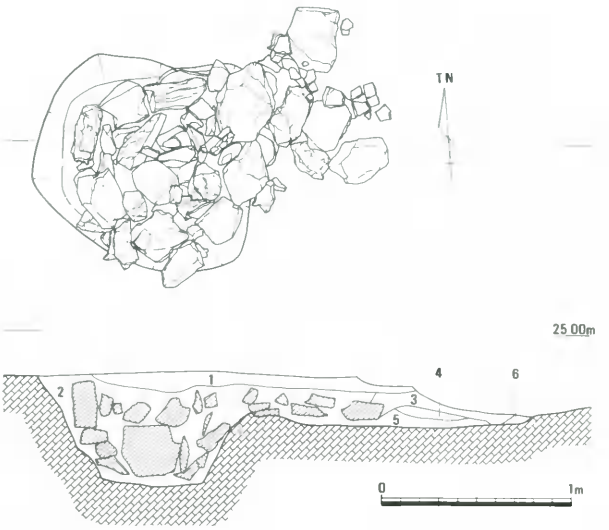


第118図　土壙10平・断面図および出土遺物

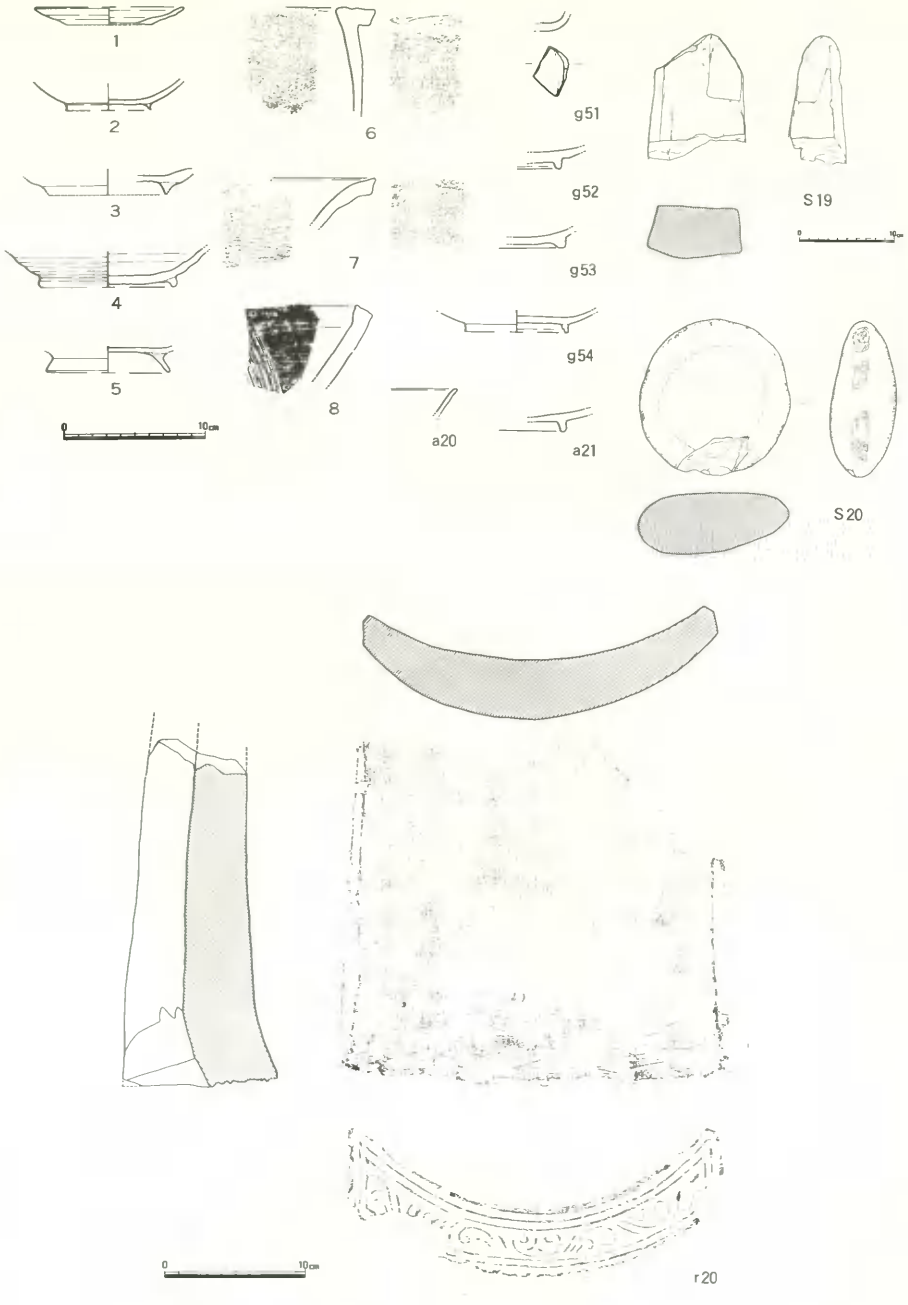
土壙－11（第119・120図）

Ｇ７区南東角に存し、上面東側は溝10に切られている。直径110㎝、深さは60㎝あり、内部は拳大から人頭大の角礫が上層から下層まで詰められていた。特に、最下層には30×30㎝程の大きな石が置くように残されていた。内部から土師器小皿１、椀２～５、甕６・７、擂鉢８、緑釉陶器３～６、灰釉陶器１・２、奈良時代国分寺に使用されていたと思われる6225系の軒平瓦で、立てたようにしている。Ｓ７は砥石で閃緑岩製、２は直径15～126㎝、厚さ４～６㎝の扁平な叩き石と思われ、上面中側直径11㎝ほどは摩滅したようになり、側面は打痕により部分的に欠損している。

この土壙の時期は、緑釉陶器、灰釉などから平安時代中頃のものと思われ、３の早島式土器、８の備前擂鉢は、鎌倉期のもので、溝の混入物と考えられるものもあるが、土壙もこの時期まで降る可能性もある。　（伊藤）



第119図　土壙11平・断面図

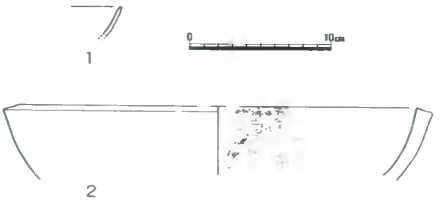


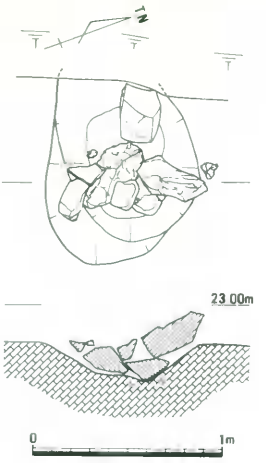
第120図　土壙11出土遺物

土壙－12（第121図）

C11区に位置する。掘方平面は、長軸推定98cm・短軸81cmの楕円形状を呈している。検出レベルは標高22.78～22.80m、底面のレベルは標高22.59～22.64mを測る。壙内には石が多数遺存していた。

図化した遺物は２点で、１は備前焼椀と推定される口縁部で、２は備前焼摺鉢で内面には条線がわずかに残存していた。２はⅡ期に属するとみられ、時期は13世紀ごろと推定される。（横山）



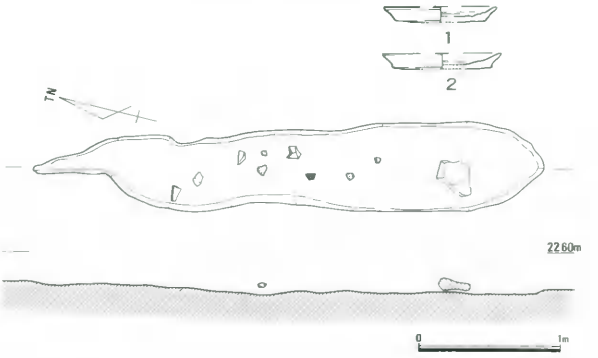


第121図　土壙12平・断面図および出土遺物

土壙－13（第122図）

G13区に位置し、建物－29西側に沿っている。短軸40～60cm、長軸3.5mと細長く、深さは深い所でも数cmしかない。

土壙内から土師器小皿１・２が２点出土している。建物に伴う溝状遺構の可能性も考えられる。時期は平安時代終末頃と思われる。（伊藤）



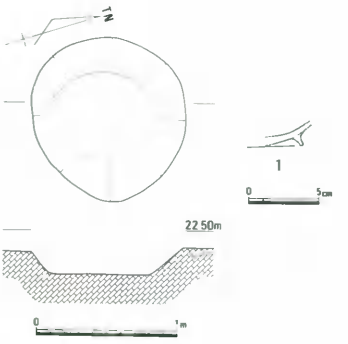
第122図　土壙13平・断面図および出土遺物

土壙－14（第123図）

H13区に位置し、河道－２の埋土の上に掘り込まれている。掘方平面は、長軸116cm・短軸73cmで、ほぼ円形状を呈している。検出レベルは標高22.35～22.38m、底面のレベルは標高22.19～22.20mを測る。

図化した遺物１は、早島式土器椀の底部である。時期は確定できないが、Ⅱ期の可能性が強い。また図化できなかった遺物としては、白磁小片や緑釉陶器小片なども出土している。

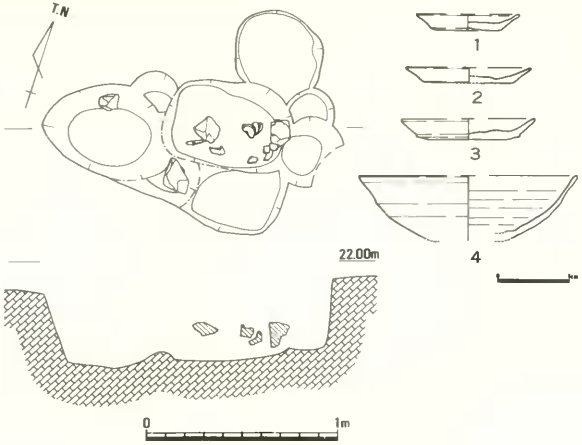
土壙の時期は、出土遺物の様相から、12世紀末から13世紀前半ごろと推定される。（横山）



第123図　土壙14平・断面図
および出土遺物

土壙－15（第124図）

Ｅ15区に位置し、７本の柱穴・ピットと切り合って検出された。建物－19・20と重複している。掘方平面は、隅丸方形に近い楕円形状を呈している。残存長は長軸66㎝・短軸46㎝を測る。検出レベルは標高21.83～21.90m、床面レベルは標高21.47～21.50mである。図化した遺物は、１～３は土師器小皿、４は備前焼椀である。このほか瓦器椀（和泉型Ⅲ－２期）も出土している。土壙の時期は、13世紀前半と推定される。（横山）



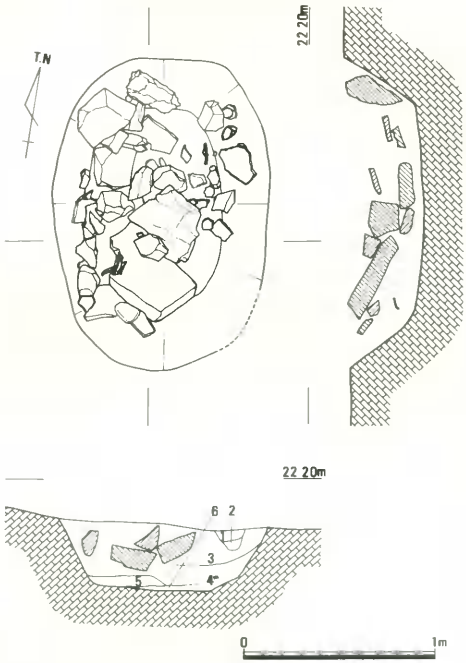
第124図　土壙15平・断面図および出土遺物

土壙－16（第125・126図）

Ｅ15区に位置し、建物－19・20と重複して検出された。掘方平面は、長軸164㎝・短軸113㎝を測る楕円形状を呈している。検出レベルは標高21.95～22.00m、底面のレベルは標高21.61～21.64mである。壙内には、西側を中心に石が多数遺存していた。

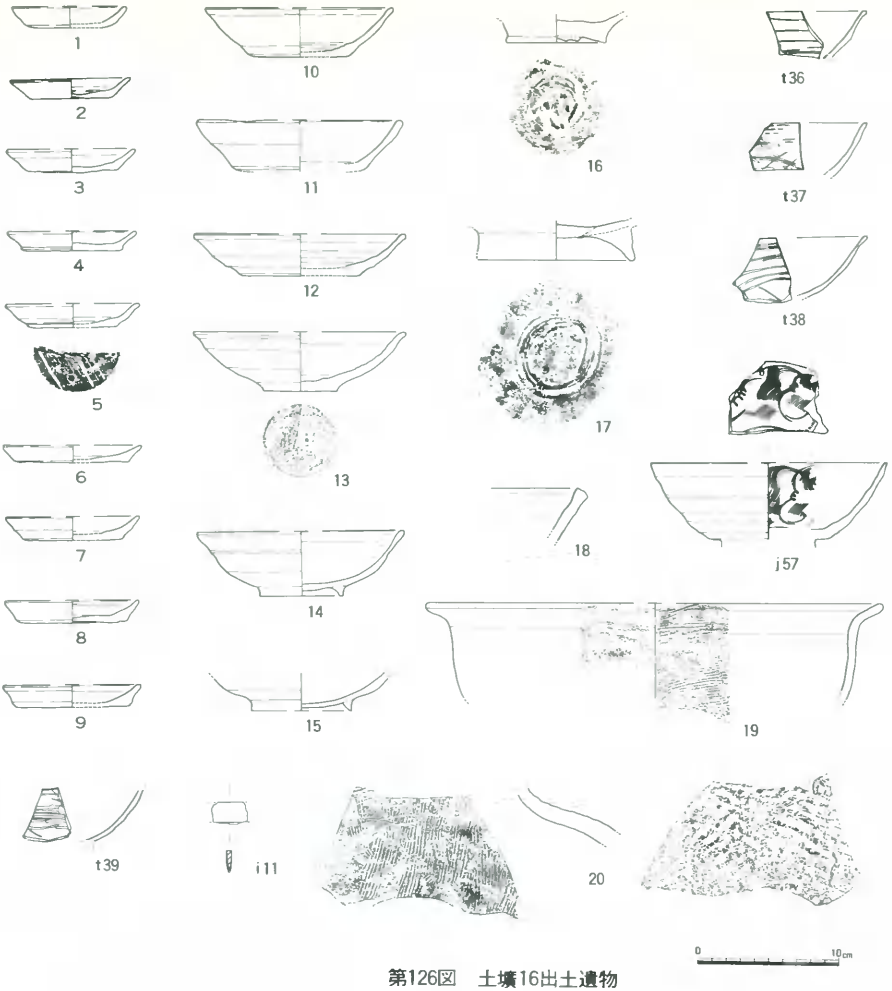
出土した遺物には、土師器小皿・杯・椀・鍋、須恵器甕、早島式土器椀、瓦器椀、青磁碗などがある。図化した遺物１～９は土師器小皿、11～12は土師器杯、13は土師器椀、19は土師器鍋の口縁部から体部、20は須恵器甕の体部、14・15は早島式土器椀、ｔ36～38は瓦器椀の口縁部、ｊ57は青磁椀の口縁部から体部である。また16・17は土師器椀の底部と考えられる。土師器椀13は底部糸切りである。早島式土器椀14は口径推定14.4㎝を測り、Ⅱ－２からⅢ－１期に属すると考える。瓦器椀はｔ36が和泉型Ⅲ－１ないし２期、ｔ37・ｔ38は和泉型Ⅲ－２期である。青磁碗ｊ57は龍泉窯系で12世紀後半ごろのものとみられる。このほか、鉄製刀子ｉ11も出土している。

土壙の時期は、出土遺物の様相から、13世紀前半ごろと推定される。建物－19・20とは



1．赤褐色土
2．淡暗灰褐色土
3．淡暗灰褐色土（炭化粒含）
4．暗灰褐色土（　〃　）
5．暗茶灰色粘質土（黄褐色地山ブロック多混）
6．灰色粘質土（砂粒を多混）

第125図　土壙16平・断面図



第126図　土壙16出土遺物

ほとんど時期差がない。また、土壙－16の性格（特に建物との関係）も判然としない。　（横山）

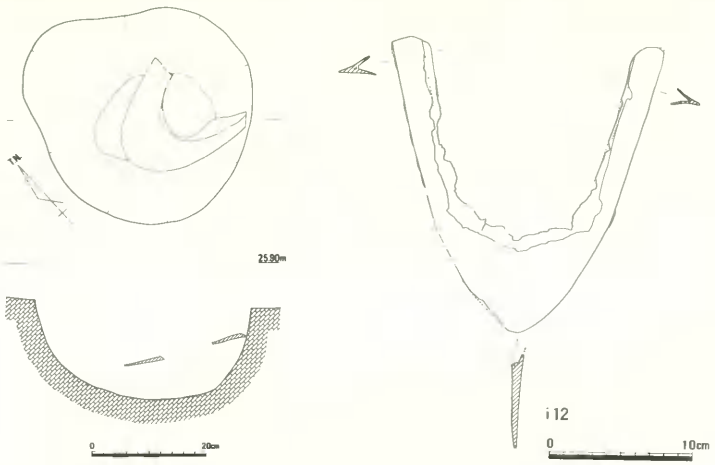
(5)　ピット

ピット－14（第127図）

Ｈ５区に位置し、建物－７の内部で検出された。掘方平面は、長軸50cm・短軸38cmのやや涙滴形状を呈している。検出レベルは標高25.82～25.83m、底面のレベルは標高25.66～25.68mを測る。

ピット内には、先端を下にした形で埋納された鉄製鋤先が出土した。鋤先の全長は20.7cm・最大幅は18.8cmを測り、ほぼ原形をとどめている。

ピット－14の性格は判然としない。しかし、鋤先の埋納遺構の地鎮的性格については、すでに報告されており（瀬川芳則「スキをたてる祭り」『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズ刊行会　1985）、このピットも建物－７に関連した地鎮遺構の可能性がある。　（横山）



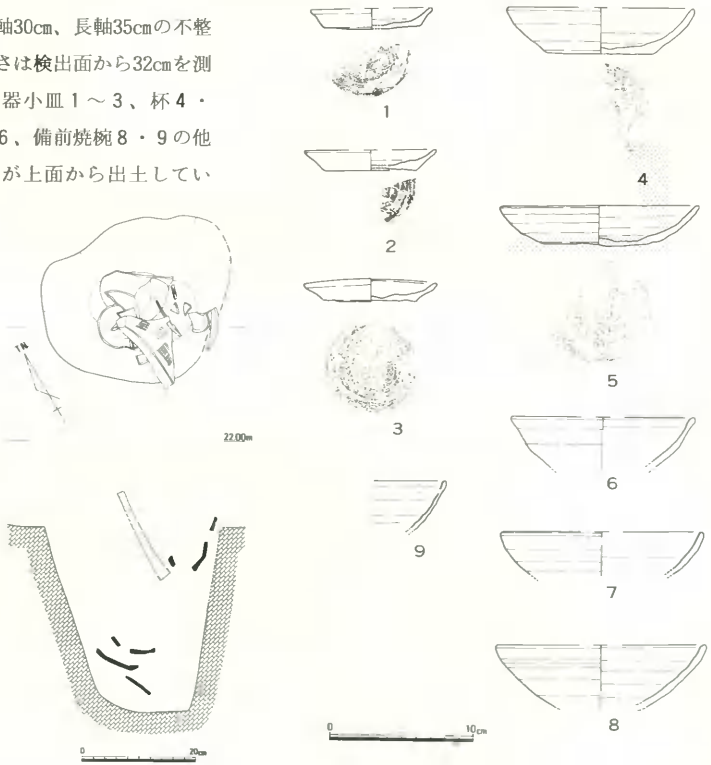
第127図　ピット14平・断面図および出土遺物

ピット－15（第128図）

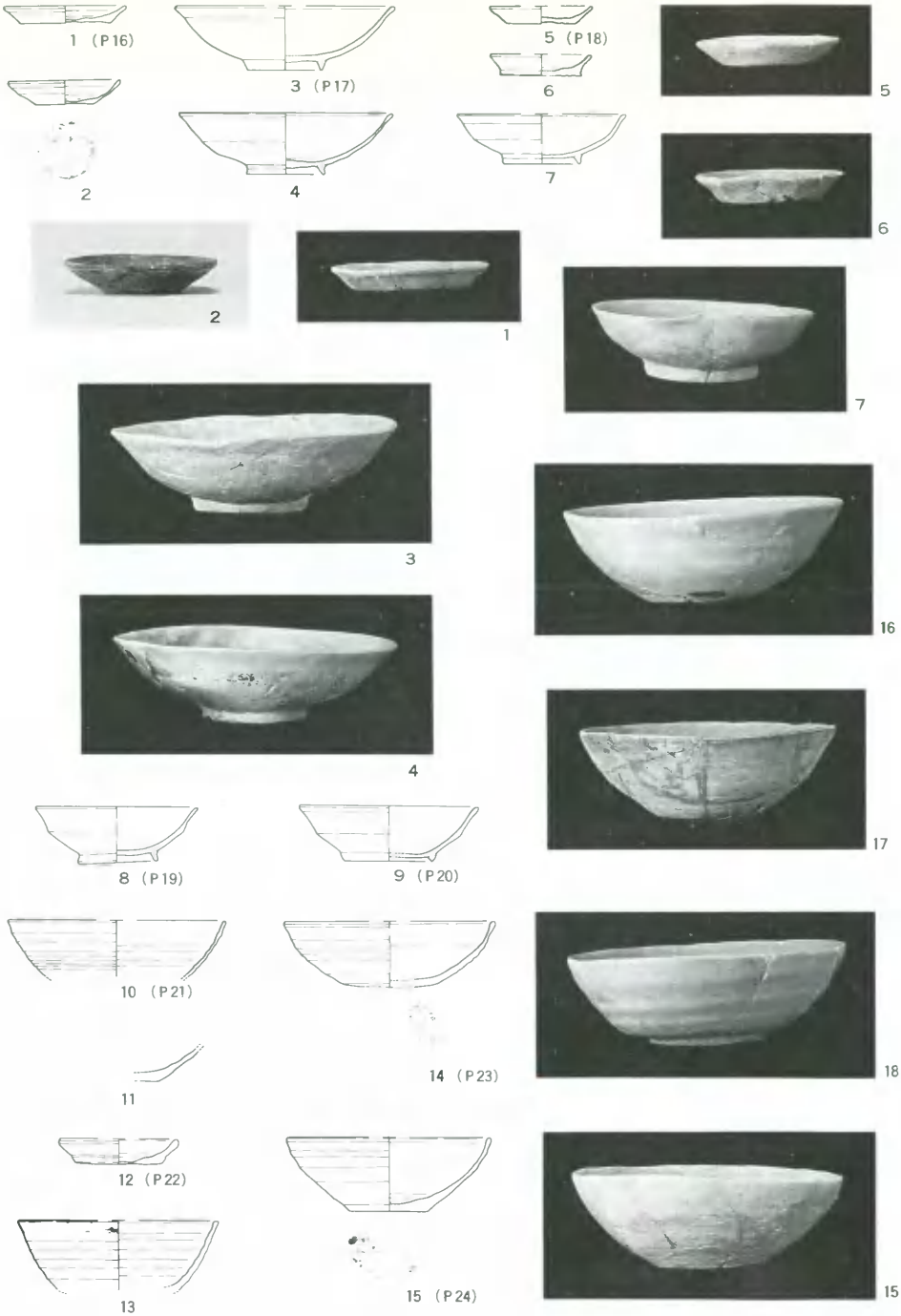
E15区に位置し、短軸30cm、長軸35cmの不整形なピットである。深さは検出面から32cmを測る。ピット内から土師器小皿１～３、杯４・５・７、早島式土器椀６、備前焼椀８・９の他に奈良時代後半の平瓦が上面から出土している。

時期は、13世紀前半と考えられる。

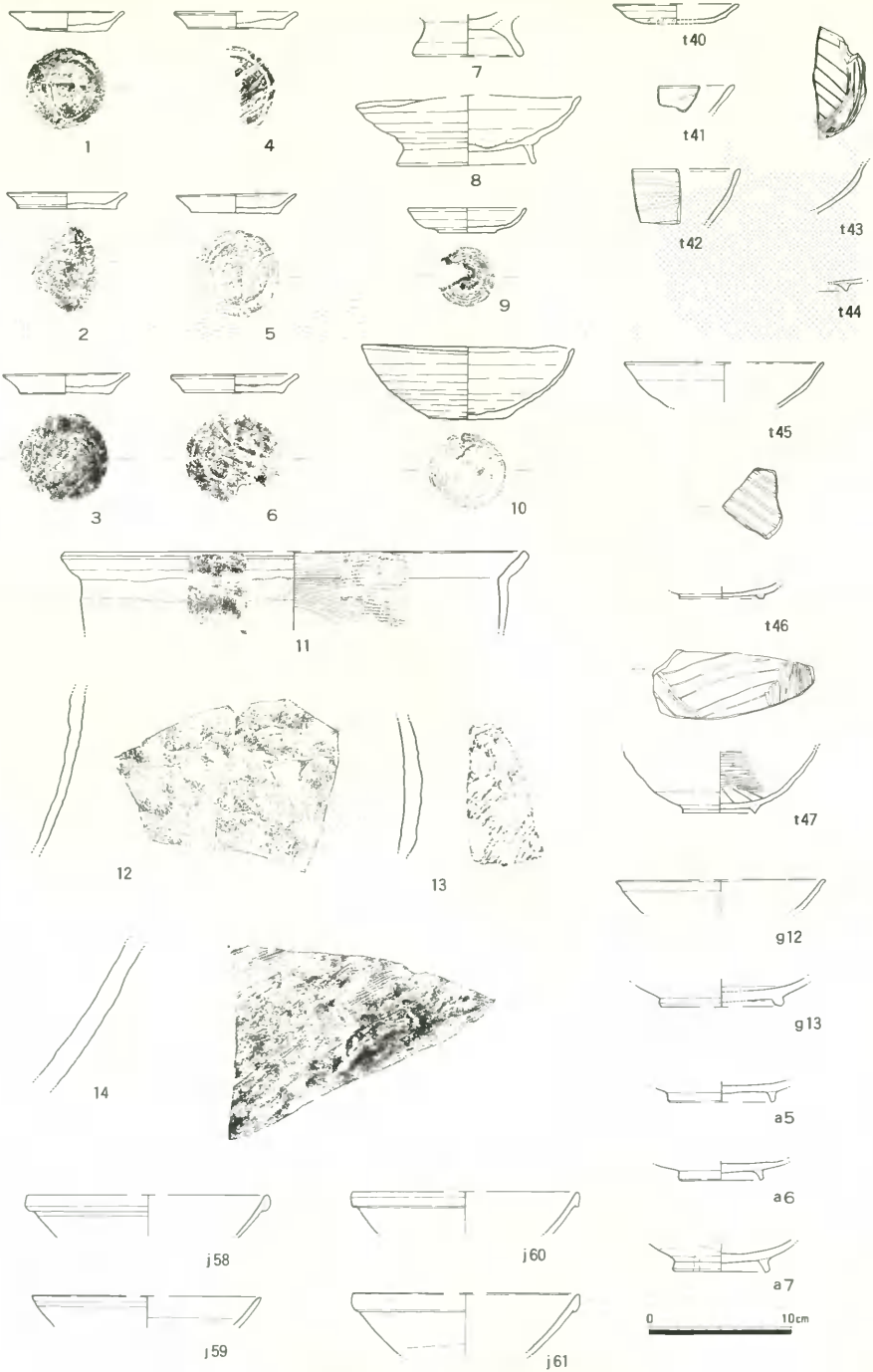
（伊藤）



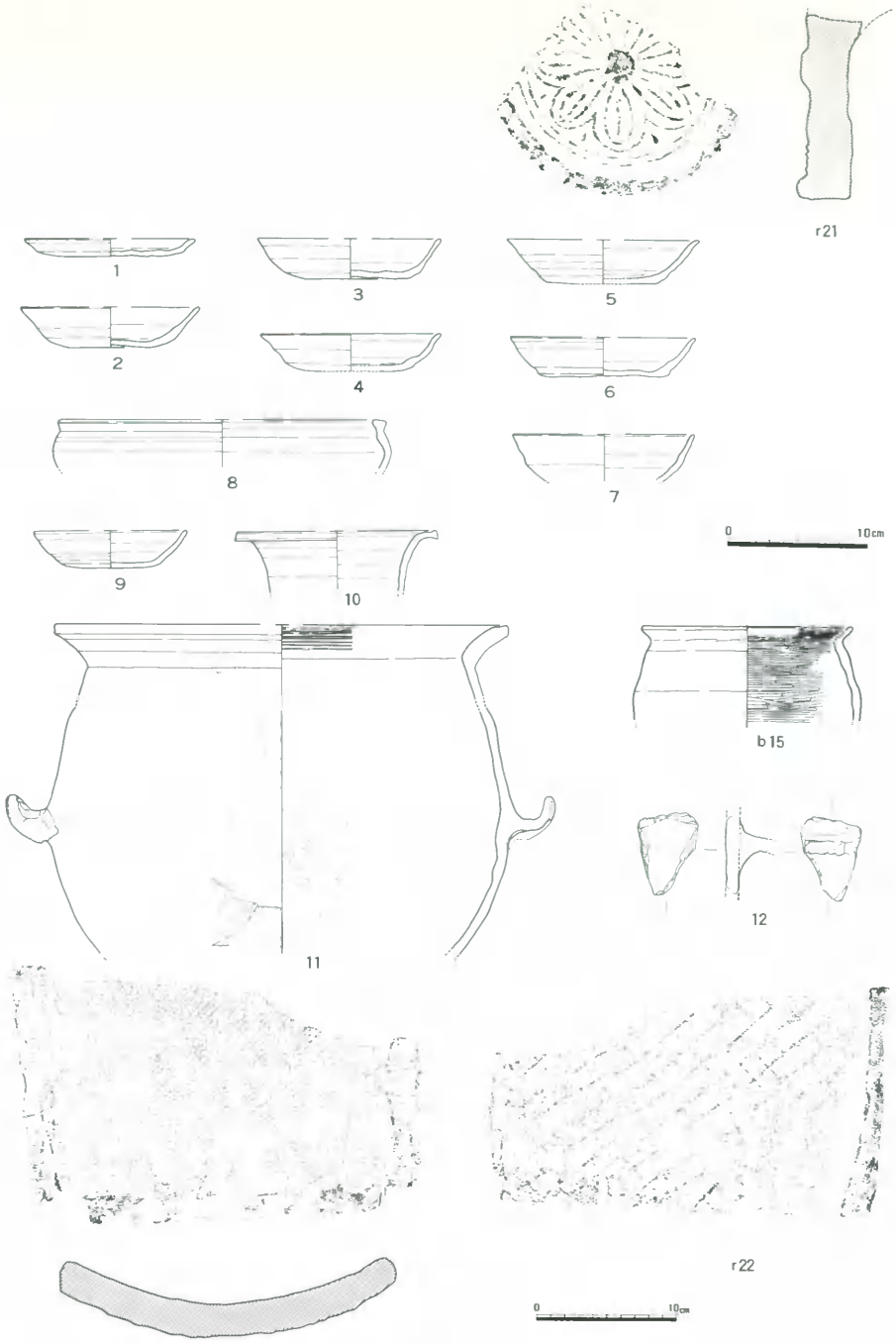
第128図　ピット15平・断面図および出土遺物



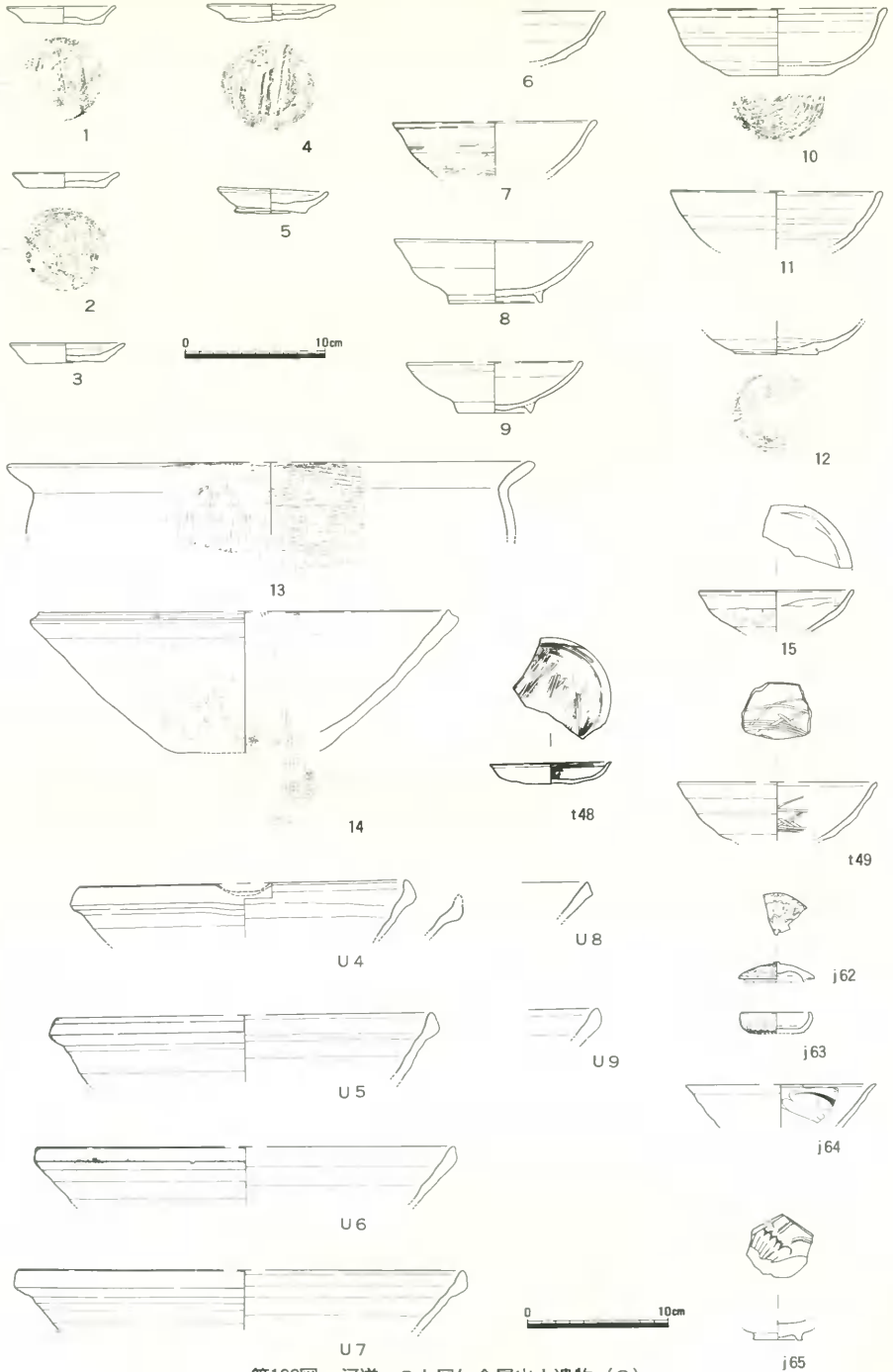
第129図　ピット16～27出土遺物



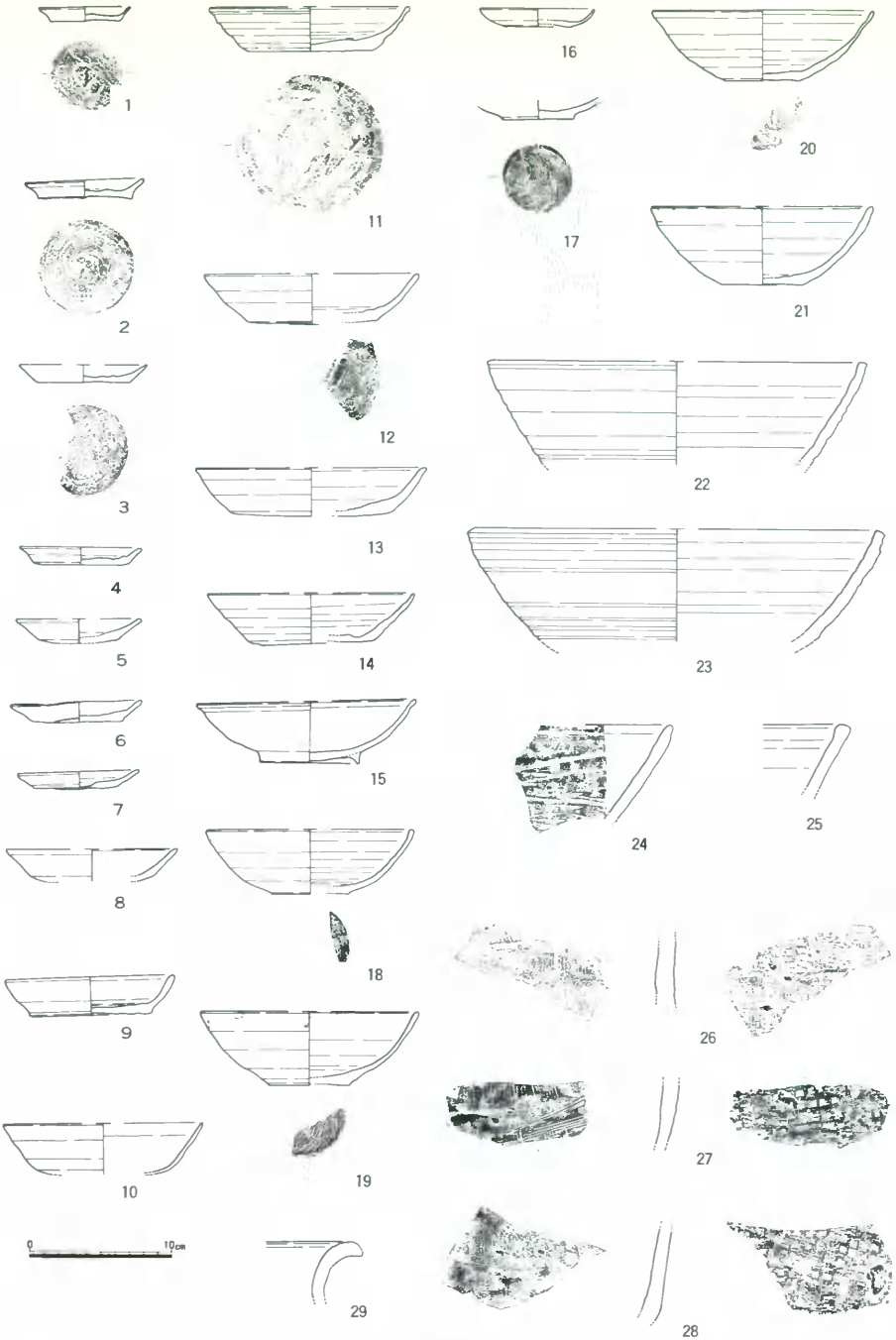
第130図　河道－1 上層包含層出土遺物



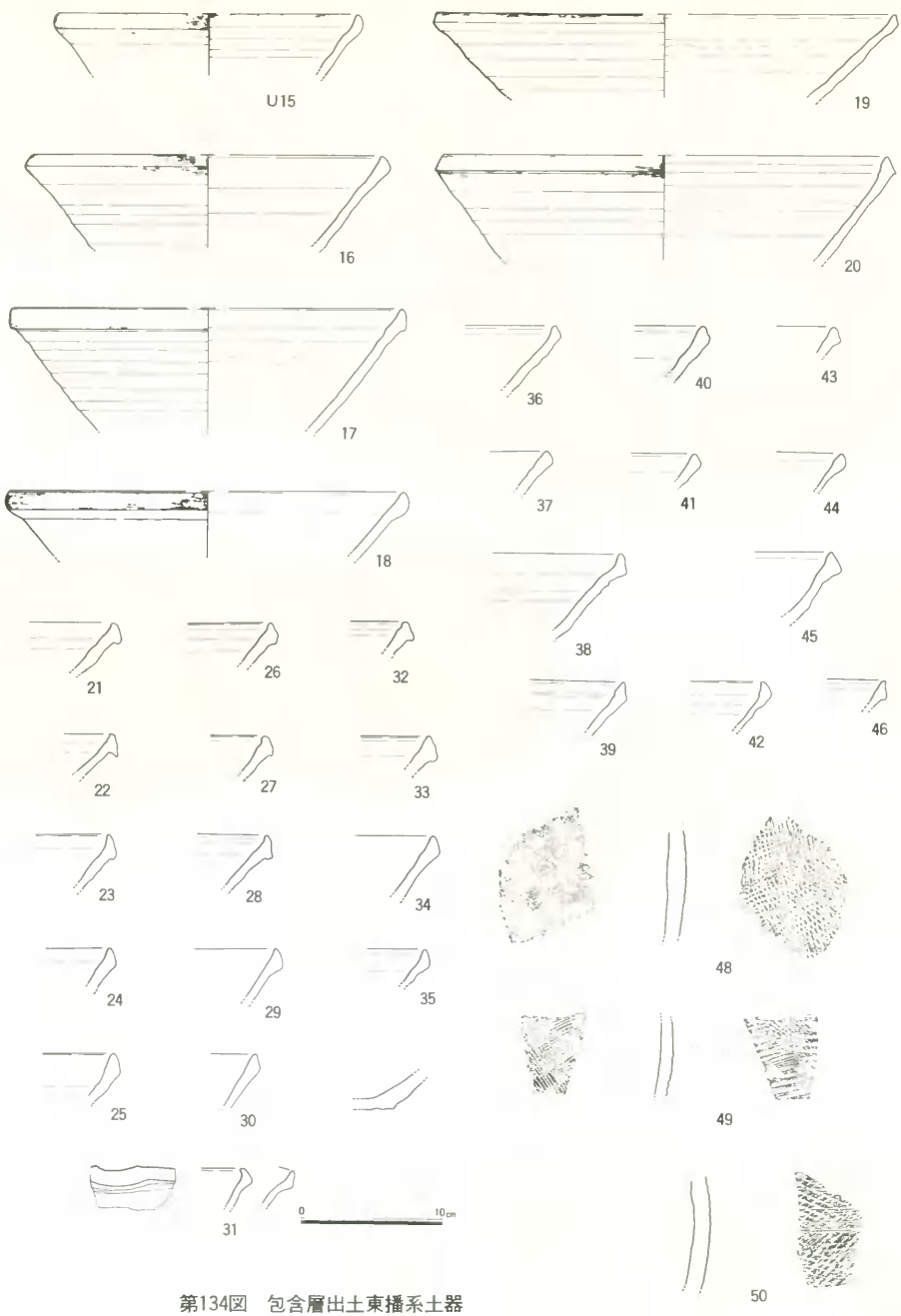
第131図　河道－2上層包含層出土遺物（1）



第132図　河道－2上層包含層出土遺物（2）



第133図　土盛部包含層出土遺物

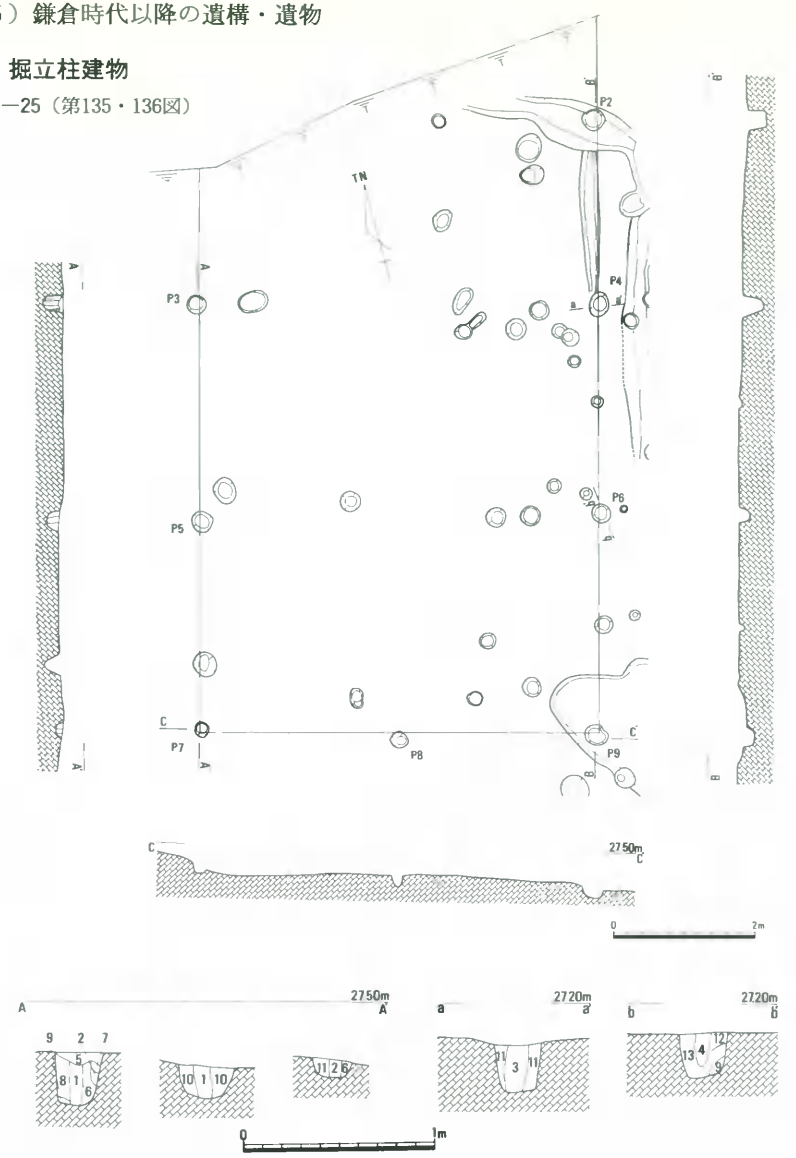


第134図　包含層出土東播系土器

5）鎌倉時代以降の遺構・遺物

(1)　掘立柱建物

建物―25（第135・136図）



1．暗灰黄色砂質土
2．灰黄色　〃
3．淡灰黄色　〃
4．淡茶灰色　〃
5．淡灰茶色　〃
6．灰茶色砂質土
7．淡灰黄色　〃
8．暗灰褐色　〃
9．黄灰色粘質土
10．淡灰褐色砂質土
11．淡黄灰色砂質土
12．淡黄茶色　〃
13．茶灰色　〃

第135図　建物25平・断面，柱穴断面図

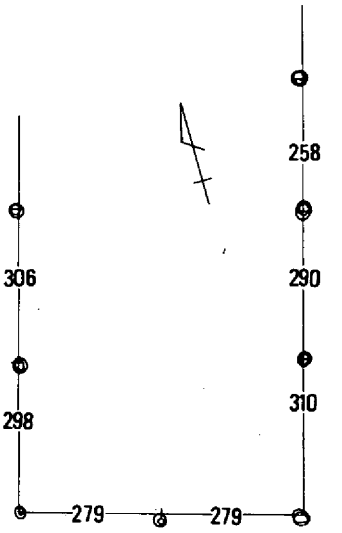
Ａ４区周辺に位置し、建物―26と重複して検出された。建物の規模は、北部が、調査区外となるため詳細は不明であるが、確認できたのは桁行４間以上、梁行２間（558cm）である。建物の主軸はＮ―15.5°―Ｅを示す。

建物の検出レベルは標高26.92～27.23m、柱穴底のレベルは標高26.68～27.10mである。柱間距離は、桁間で258～310cm、梁間で279を測る。

柱穴の掘方平面は、直径約23～34cmのほぼ円形状を呈している。柱痕跡はＰ３・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ６・Ｐ７の５本の柱穴で確認できた。

遺物は、Ｐ４から土師器甕・小皿の小片、Ｐ５から土師器細片、Ｐ７から土師器甕の小片、などが出土した。しかし、いずれの遺物も、小片で図化することはできなかった。

遺物が小片のため、建物の時期の特定はできないが、13世紀から14世紀に属するものと考えられる。



第136図　建物25平面略図

建物―26（第137図）

Ａ４区周辺に位置し、建物―25と重複して検出された。建物の構造は、建物―25と同様に北部が調査区外となるため詳細は不明であるが、確認できたのは桁行は４間以上、梁行は２間（376cm）で、南側から１間目Ｐ５とＰ７の間に中心柱（Ｐ６）を有する。

建物の主軸はＮ―22°―Ｅを示す。建物の検出レベルは標高27.05～27.17m、柱穴底のレベルは標高26.69～26.91mである。

柱間距離は、桁間で254～290cm、梁間176～200cmを測る。柱穴の掘方平面は直径約21～41cmのほぼ円形状を呈している。柱痕跡はＰ２・Ｐ３・Ｐ５・Ｐ７・Ｐ８・Ｐ９の６本の柱穴においてで確認できた。

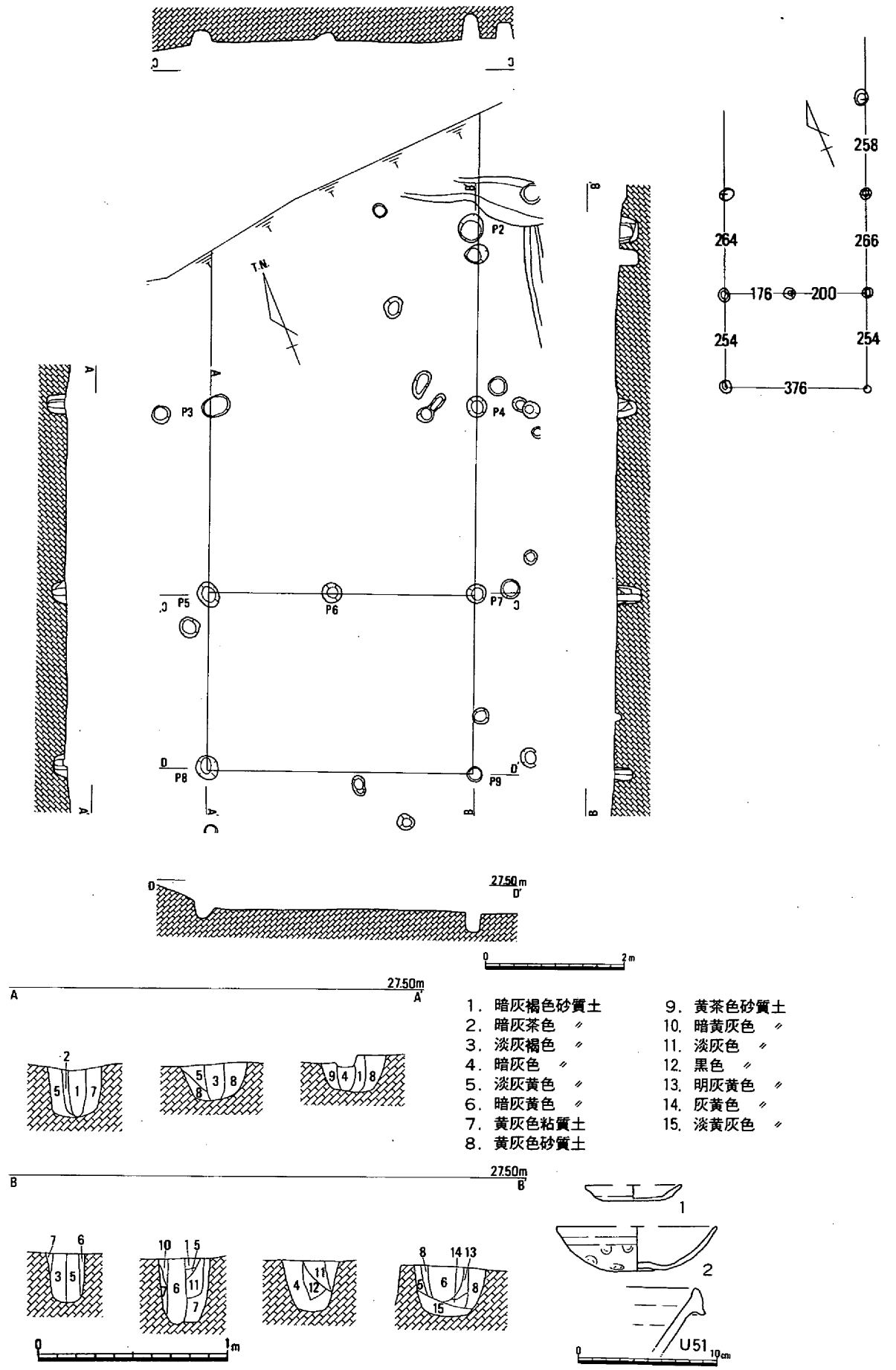
遺物は、Ｐ３から土師器小片、Ｐ４から土師器小片・早島式土器椀・備前焼甕や東播系須恵器鉢、Ｐ７から土師器甕、土師器小皿やかまど、などが出土した。図化できた遺物は次の３点で、すべてＰ４から出土した。１は土師器小皿で、推定口径は7.0cmを測る。２は早島式土器椀で、底部を指押さえによって調整している、いわゆるヘソ椀である。推定口径は11.6cm、器高は3.2cmを測る。時期的には14世紀前半ごろと推定される。３は東播系須恵器鉢の口縁部で、13世紀後半から14世紀前半のものと推定される。

建物の時期は、出土遺物の様相から、14世紀前半ごろと推定できる。重複している建物―25との時期差はあまりなく、関係ははっきりしないが、建物の構造などからいえば、建物―26の方が後出と考えられる。（横山）

建物―27（第138図）

Ｃ５区周辺に位置する、桁行３間×梁行２間（784～786cm×394～418cm）の総柱建物である。建物面積は31.8㎡で、建物の主軸はＮ―10°―Ｅを示す。

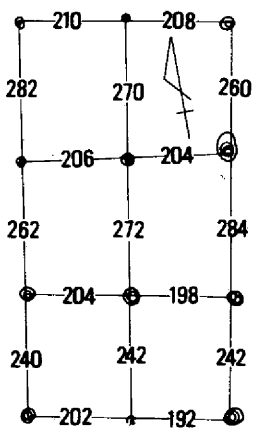
建物の検出レベルは標高25.95～26.35m、柱穴底のレベルは標高25.83～26.22mである。柱間距離は、桁間で240～284cm、梁間で192～210cmを測る。柱穴の掘方平面は直径（長軸）約18～40cmのほぼ円形または楕円形状を呈している。柱痕跡は全ての柱穴で確認できなかった。

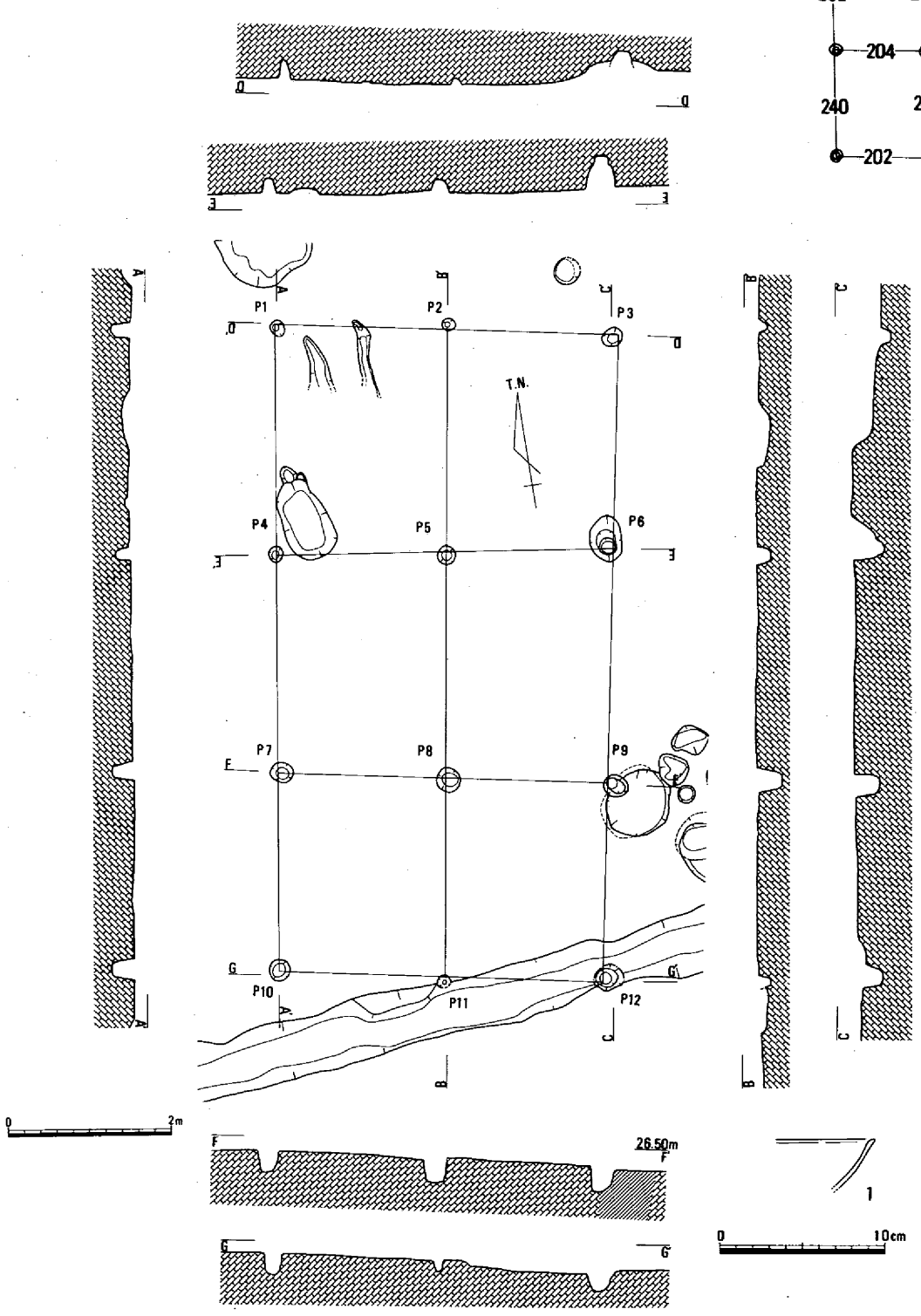


第137図　建物26平・断面，柱穴断面図および出土遺物

遺物は、Ｐ１・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ７・Ｐ９・Ｐ10・Ｐ11・Ｐ12から少量出土した。図化した遺物１は、早島式土器椀の口縁部で、Ｐ11から出土した。口縁端部を押さえ面を作りわずかに外反させている。また器壁は薄い。

（横山）





第138図　建物27平・断面図および出土遺物

建物－28（第139図）

Ｂ６区に位置し、一部建物－30と重複して検出された。桁行１間×梁行１間（224～241cm×188～190cm）の建物で、平面はやや歪な形状を呈している。建物面積は4.4㎡で、建物の主軸はＮ－84°－Ｗを示す。

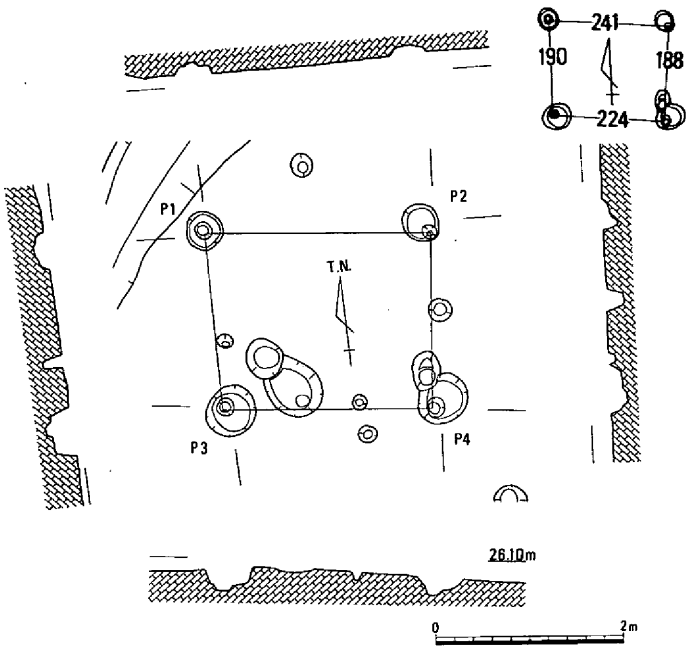
建物の検出レベルは標高25.89～26.03m、柱穴底のレベルは標高25.73～25.86mである。柱穴の掘方平面は直径約38～55cmのほぼ円形状を呈している。小規模な建物にもかかわらず、柱穴の規模は大きいといえる。柱痕跡は全ての柱穴において確認できた。

遺物は、Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４から出土したが、すべて細片で、図化できるものはなかった。（横山）

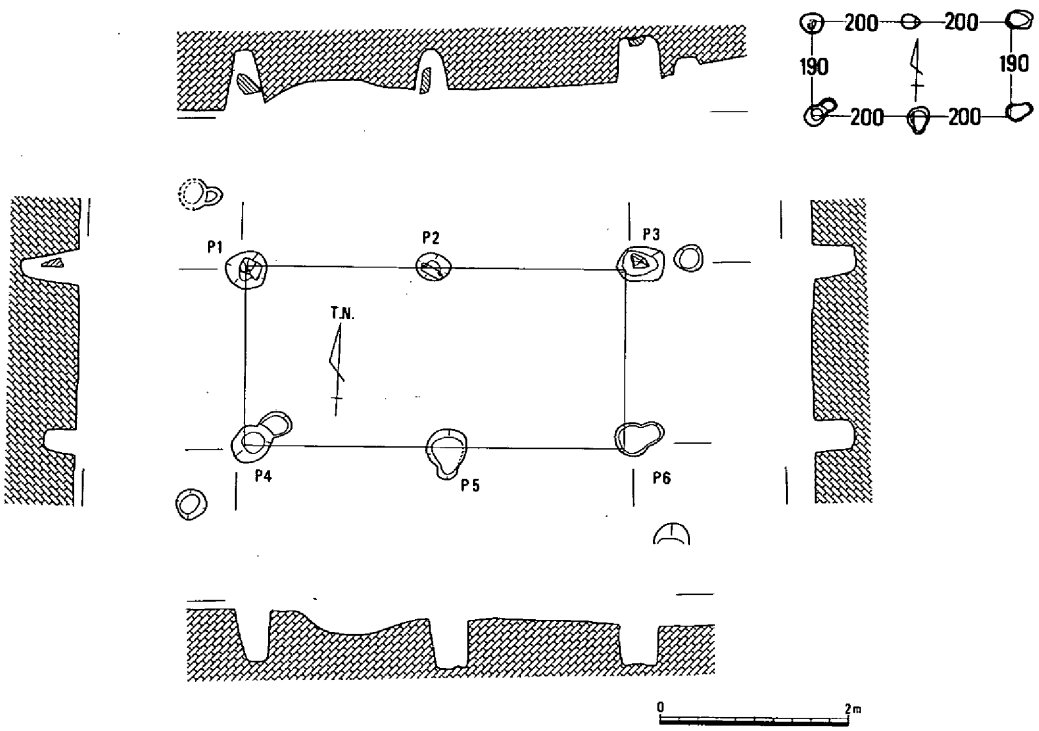
建物－29（第140図）

Ｋ５区に位置する。建物の規模は、桁行２間×梁行１間（400cm×190cm）である。建物面積は7.6㎡で、建物の主軸はＮ－87°－Ｅを示す。

建物の検出レベルは標高25.74～26.02m、柱穴底のレベルは標高25.28～25.46mである。柱間距離は、桁間で200cmを測る。柱穴の掘方平面は、直径（長軸）約36～43cmの円形または楕円形状を呈している。柱痕跡は確認できなかった。



第139図　建物28平・断面図



第140図　建物29平・断面図

遺物は、Ｐ１から土師器小片、Ｐ２から須恵器や土師器小片、Ｐ３から土師器鍋、Ｐ４から土師器小片、Ｐ５から土師器や早島式土器、などが出土した。（横山）

建物－30（第141図）

Ｂ６区周辺に位置し、建物－28と重複して検出された。桁行３間×梁行１間（687cm×190cm）の建物である。建物面積は13.1㎡、建物の主軸はＮ－16.5°－Ｅを示す。建物の検出レベルは標高25.84～26.04m、柱穴のレベルは標高25.30～25.65mである。柱間距離は、桁間218～251cmを測る。

柱穴の掘方平面は、直径（長軸）約30～37cmのほぼ円形～楕円形状を呈している。Ｐ４・Ｐ５で柱を支えるための根石が遺存していた。

遺物は、Ｐ２から土師器細片、Ｐ４から瓦器・土師器や早島式土器細片、Ｐ５から土師器小皿、Ｐ６から土師器や須恵器の細片、Ｐ７から13世紀ごろの青磁１点や土師器細片、Ｐ８から土師器や早島式土器小片、などが出土した。図化したｔ７・ｔ８は瓦器で器種不明だが、和泉型Ⅲ－２期の様相を呈している。

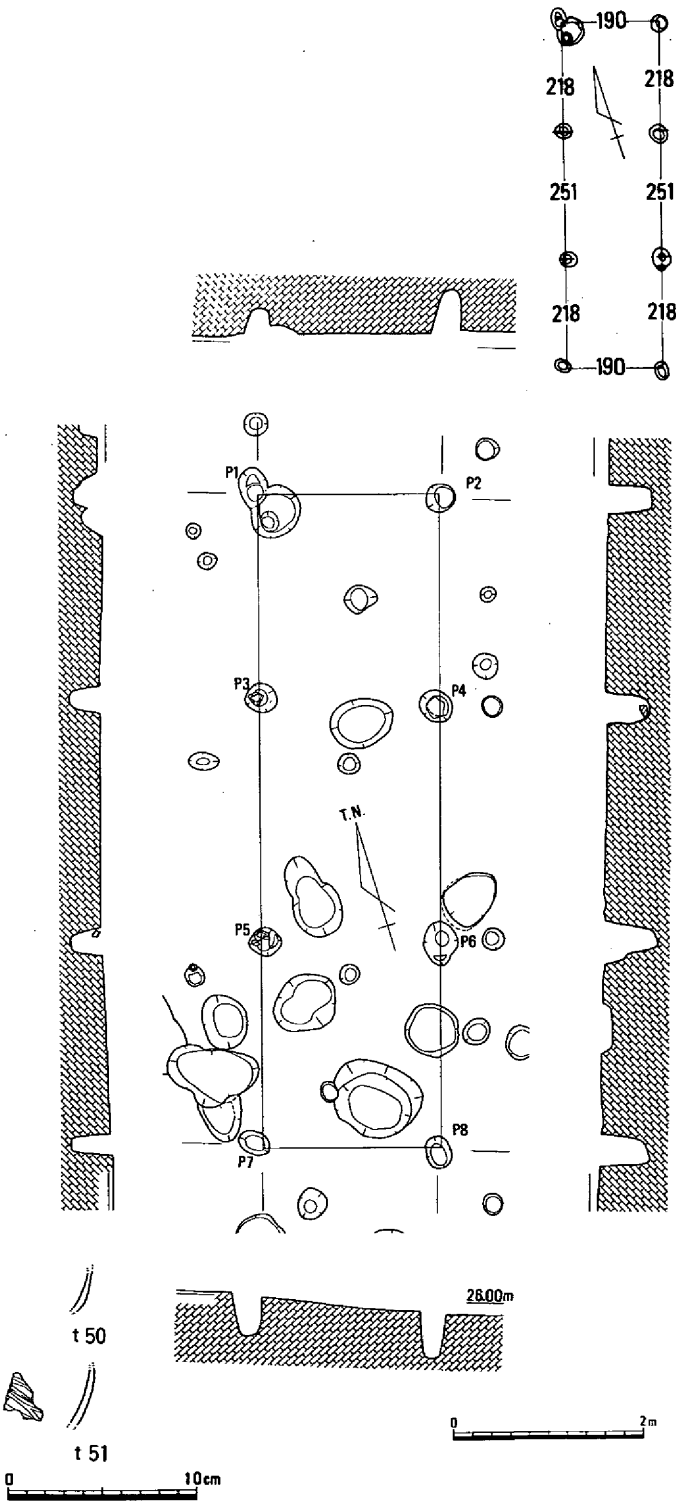
建物の時期は、青磁や瓦器の様相から、13世紀中期から後期ごろと推定される。（横山）

建物－31（第142図）

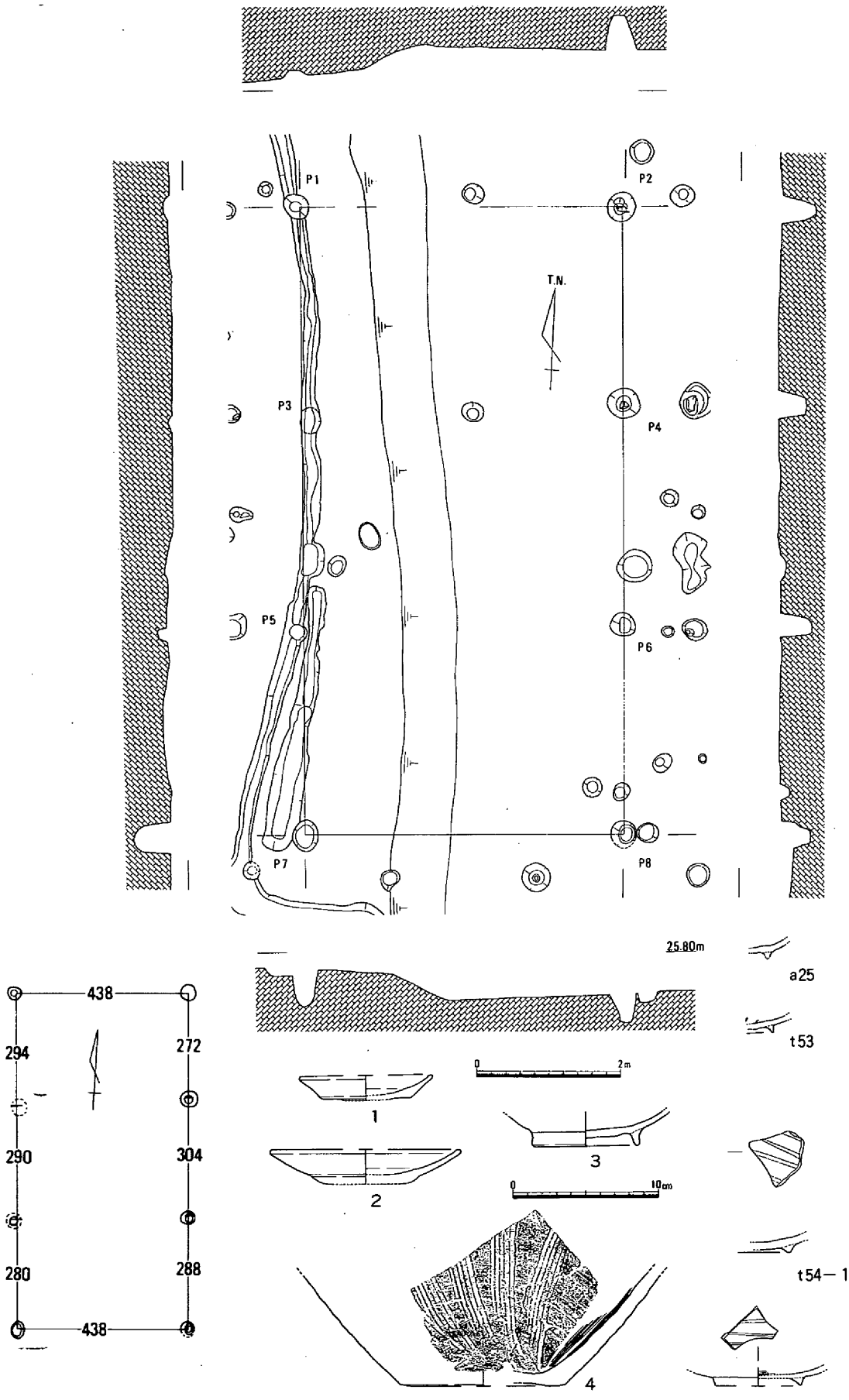
Ｂ７区周辺に位置し、建物－44と重複して検出された。建物の規模は、桁行３間×梁行１間（864cm×438cm）である。柱穴のうち、Ｐ３は溝によって削平され、またＰ５も同じ溝によって切られ底部しか検出されなかった。建物面積は37.8㎡で、建物の主軸はＮ－3°－Ｗを示す。

建物の検出レベルは標高25.05～25.62mで、柱穴底のレベルは標高24.76～25.52mである。柱間距離は、桁間で272～304cmを測る。柱穴の掘方平面は、残りのよいもので、直径約33～45cmのほぼ円形状を呈している。柱痕跡は、Ｐ８で確認できた。

遺物はＰ２・Ｐ４・Ｐ６・Ｐ７から出土している。図化した遺物１は土師質小皿、２は土師質皿、３は早島式土器椀、４は、Ｐ２から出土した備前焼擂鉢で、Ⅲ期前半の様相を示す。この他、灰釉底部小片ａ25、瓦器底部小片ｔ50、53、54などが出土している。この



第141図　建物30平・断面図および出土遺物



第142図　建物31平・断面図および出土遺物

ことから、建物の時期は、鎌倉時代後半と推定される。　（横山）

建物－32（第143図）

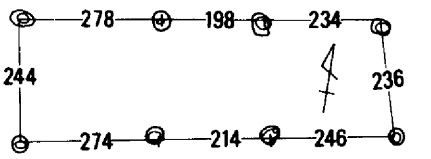
Ｄ７区周辺に位置する。建物の平面は、東角が突出した歪な形となっている。建物の規模は、桁行３間×梁行１間（710～734cm×236～244cm）である。建物面積は26.0㎡で、建物の主軸はＮ－80°－Ｅを示す。

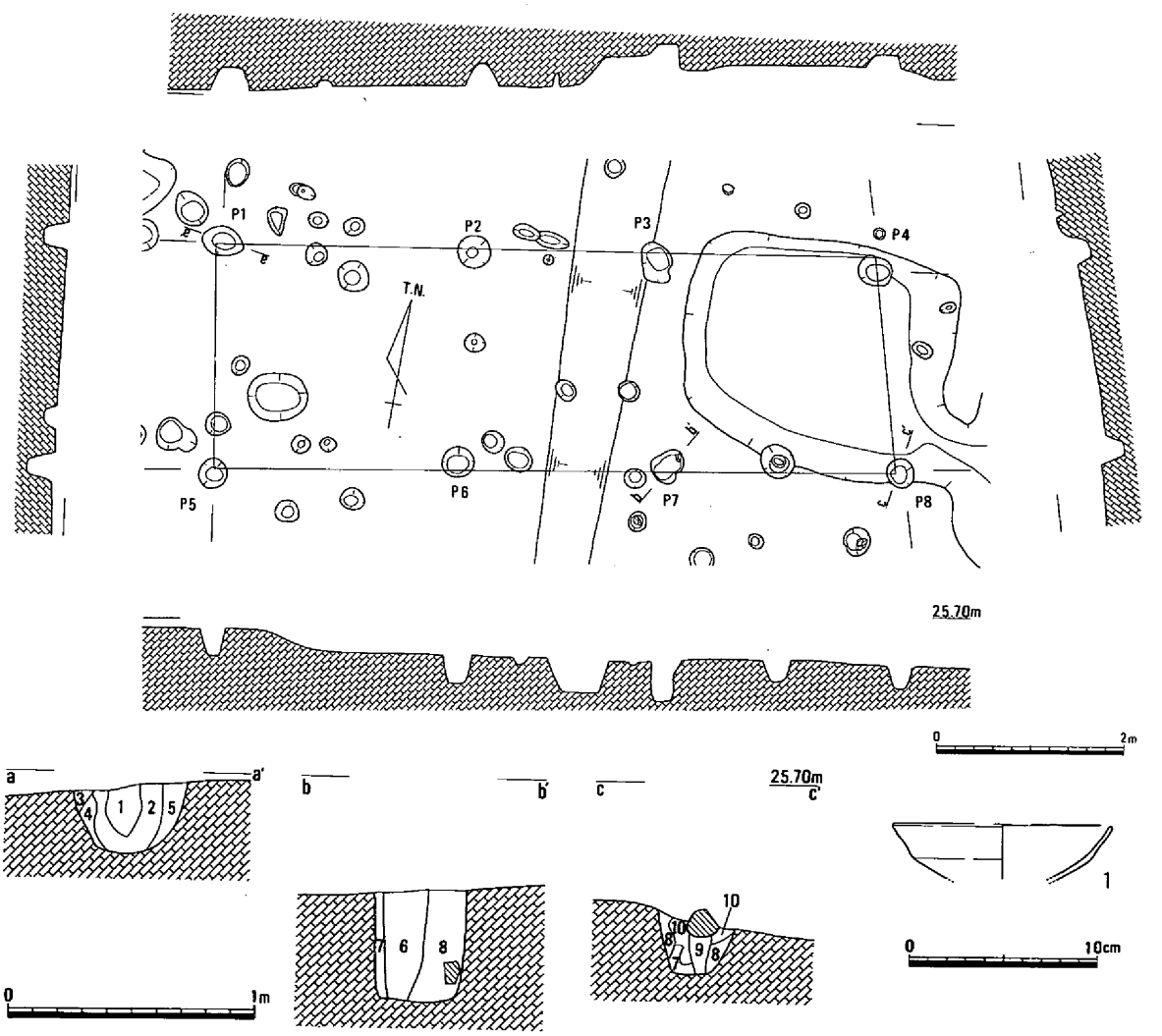
建物の検出レベルは標高25.10～25.64m、柱穴底のレベルは標高24.92～25.38mである。柱穴距離は桁間198～278cmを測る。

柱穴の掘方平面は、直径約31～36cmのほぼ円形状を呈している。柱痕跡は、Ｐ１・Ｐ７の２本の柱穴において確認できた。

遺物は、Ｐ１から土師器皿、Ｐ２から土師器や早島式土器、Ｐ３からかまど、Ｐ６から備前焼椀、Ｐ７から土師器甕や小皿・早島式土器、などの小片が出土した。このうち図化した遺物１は早島式土器椀の口縁部で、Ｐ２から出土した。口径は推定11.6cmで、口径の特徴からⅢ－３期に属すると考えられる。

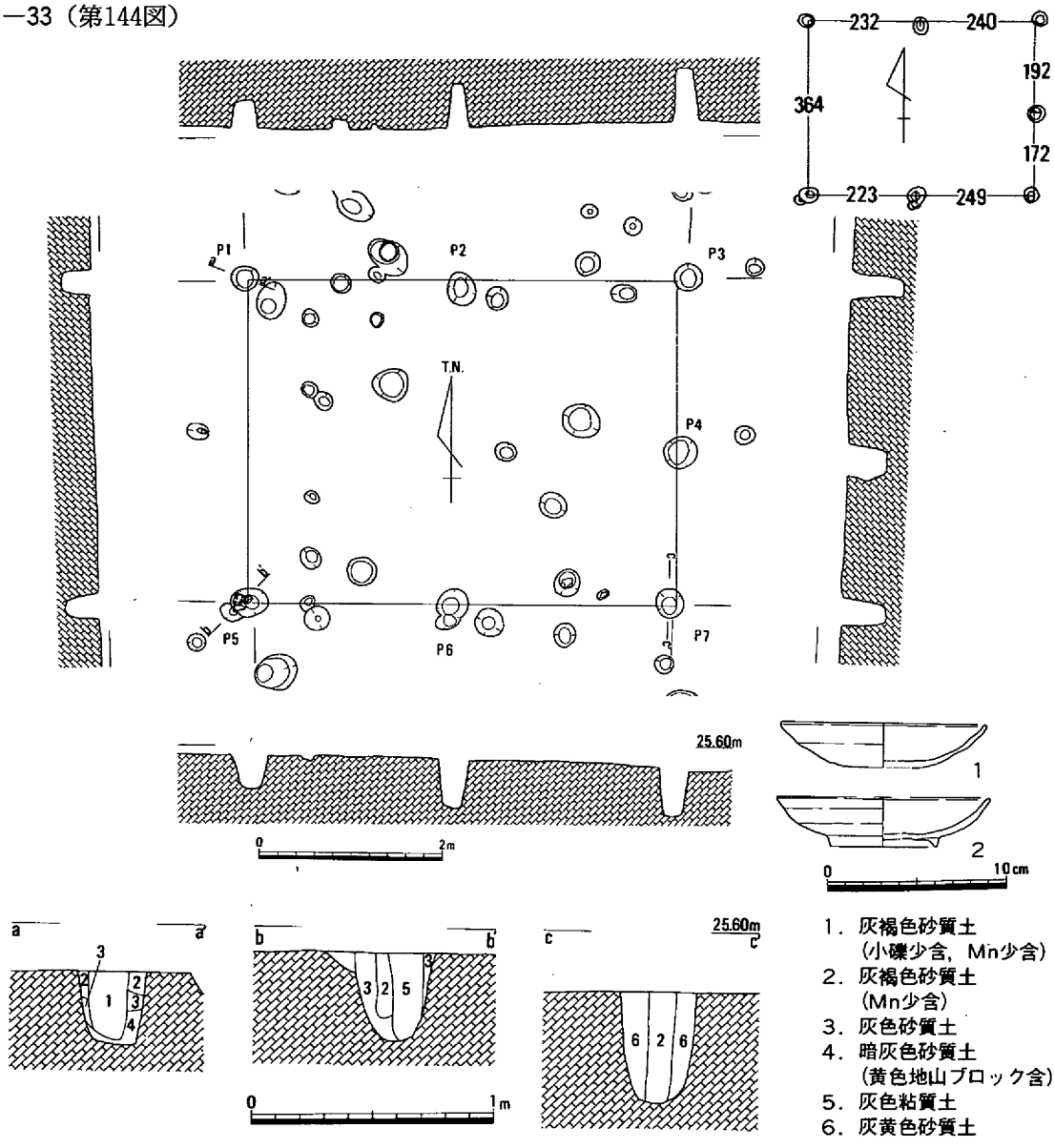
建物の時期は、出土遺物のうち早島式土器の時期から、14世紀前半ごろと推定される。　（横山）





第143図　建物32平・断面，柱穴断面図および出土遺物

建物－33（第144図）



第144図　建物33平・断面，柱穴断面図および出土遺物

Ｆ６区周辺に位置する。建物－34と重複して検出された。建物の規模は、桁行２間×梁行２間（472cm×364cm）である。西側梁部の中央柱は検出されなかった。但し、構造的に、西側梁部の中央柱が存在しない可能性もある。

建物面積は17.2㎡で、建物の主軸はＮ－89°－Ｅを示す。建物の検出レベルは標高25.34～25.51ｍで、柱穴底のレベルは標高24.82～25.18ｍである。柱間距離は、桁間で223～249cmで、梁間で172～192（364）cmを測る。

柱穴の掘方平面は、直径約29～37cmのほぼ円形状を呈している。Ｐ３には、クリの柱根が遺存していた。また、柱痕跡も、Ｐ１・Ｐ５・Ｐ７の３本で確認できた。

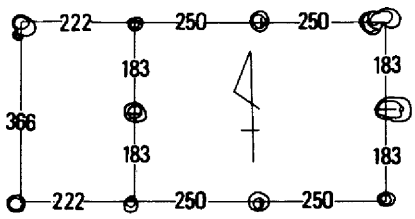
遺物は、Ｐ２から土師器、Ｐ３から土師器、Ｐ５から平瓦、Ｐ６から早島式土器椀、Ｐ７から須恵器や土師器、などの小片が出土した。図化した遺物１・２は、早島式土器の椀で、Ｐ６から出土している。１は、高台部が欠損している。計測値について、１は推定値で口径11.7cm、２は推定値で口径12.0cm、器高2.8cmを測る。普通の早島式土器椀と比較して、口径に対する器高は低く、扁平なイメー

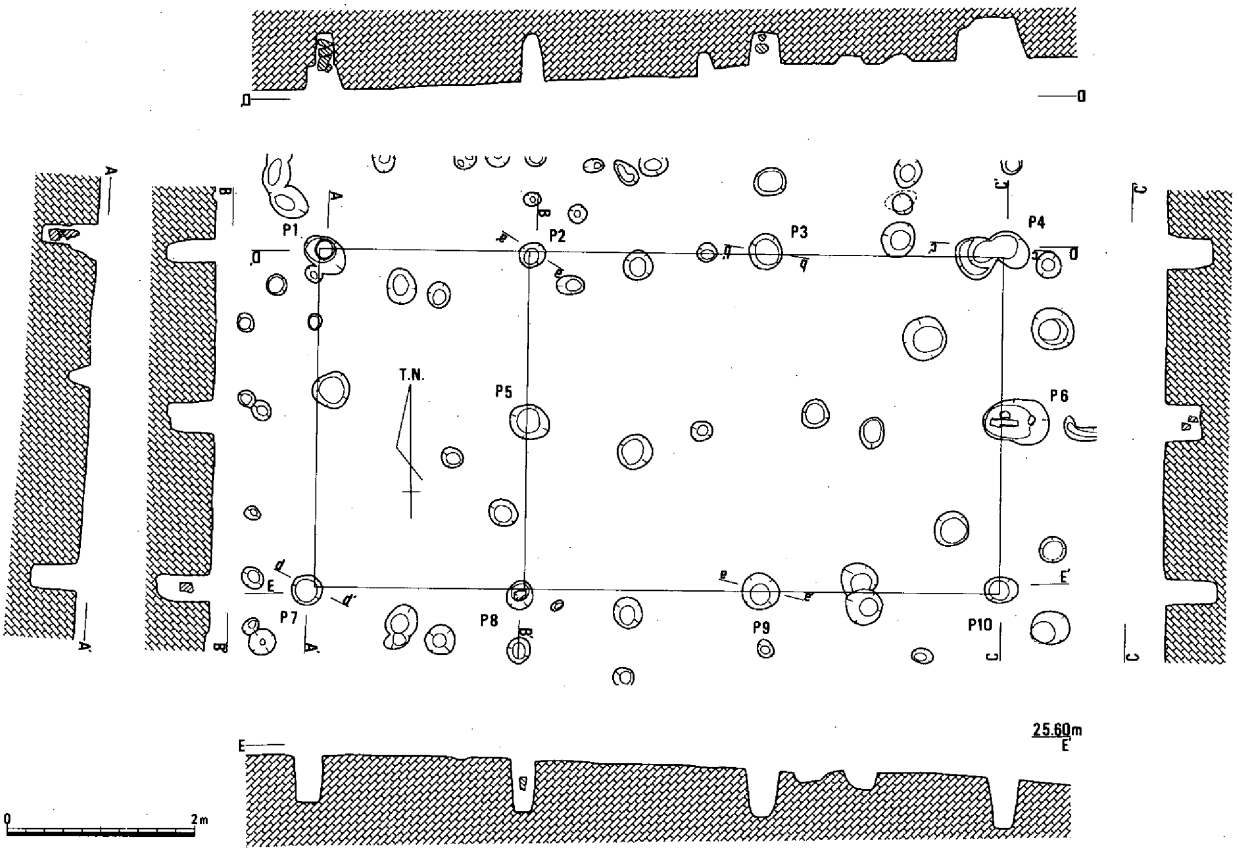
ジをうける。Ⅲ－２～３期の様相に近いと考えられる。

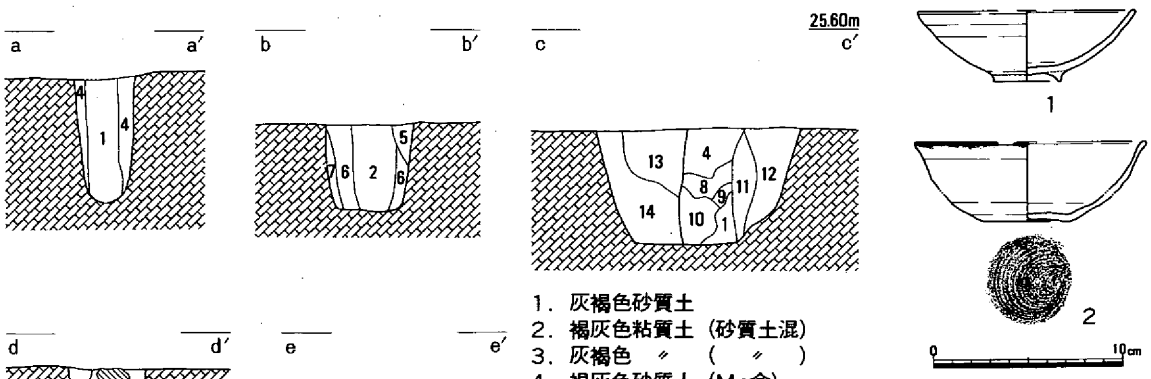
建物の時期は13世紀末以降と推定され、建物－34と時期差はほとんどない。

建物－34（第145図）

Ｆ６区周辺に位置する。建物－33と重複して検出された。建







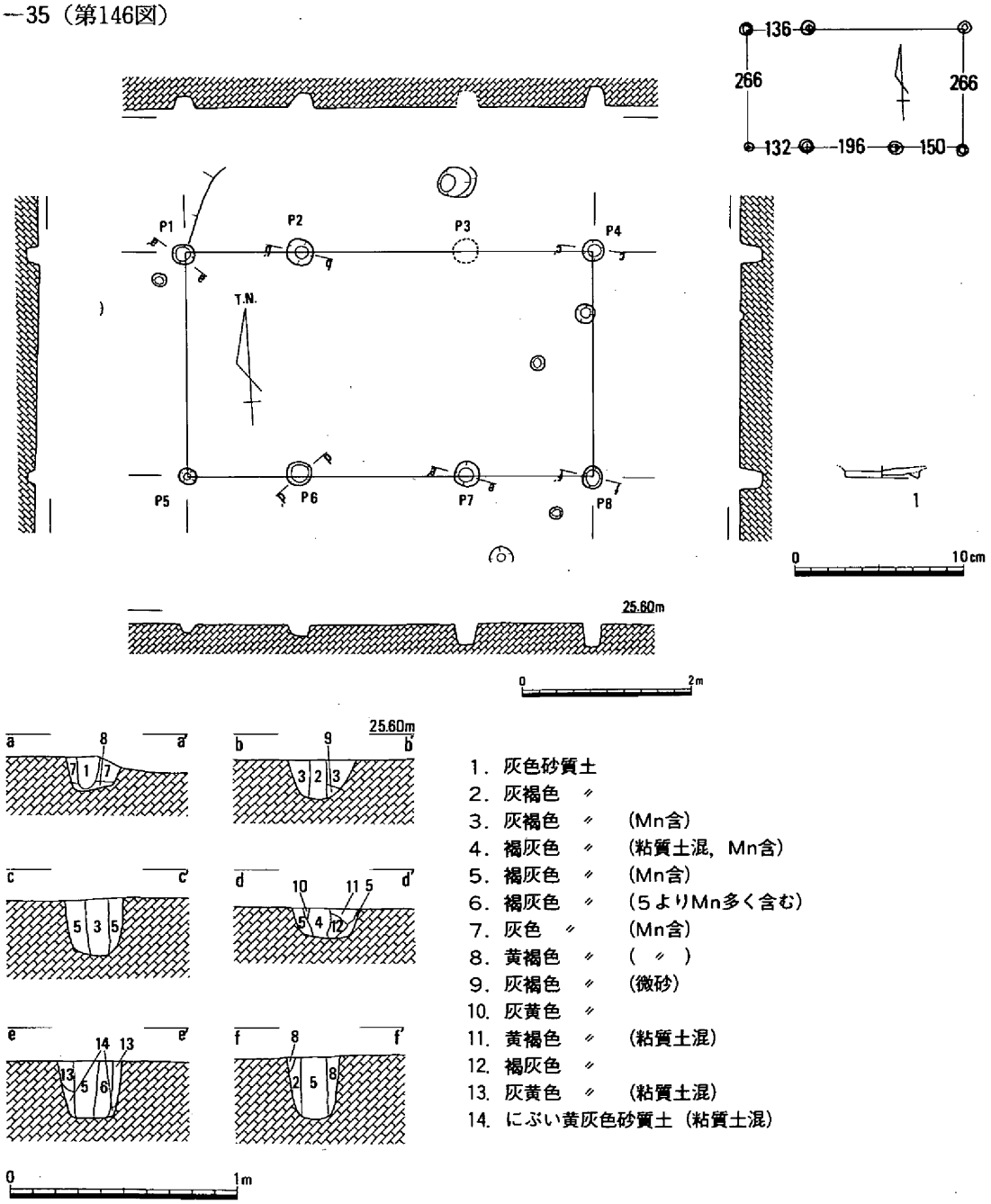
1．灰褐色砂質土
2．褐灰色粘質土（砂質土混）
3．灰褐色　〃　（　〃　）
4．褐灰色砂質土（Mn含）
5．褐灰色粘質土（砂質土混，Mn含）
6．暗灰褐色　〃　（　〃　）
7．にぶい黄灰色砂質土
8．暗褐灰色砂質土
9．灰褐色　〃　（黄色地山ブロック含）
10．黄色土
11．黄褐色砂質土
12．にぶい黄褐色砂質土（Mn多く含む）
13．褐灰色砂質土
14．褐灰色　〃　（黄色地山ブロック多く含む）
15．灰褐色砂質土（Mn含）
16．にぶい黄褐色砂質土（粘質土混，Mn含）

第145図　建物34平・断面，柱穴断面図および出土遺物

物の規模は、桁行３間×２間（722cm×366cm）である。西側梁部の中心柱は検出されなかった。しかし、これは構造的に存在しないものと推定される。建物面積は26.4㎡で、建物の主軸はN－89°－Wを示す。建物の検出レベルは標高25.15～25.50mで、柱穴底のレベルは標高24.64～24.99mである。柱間距離は、桁間が222～250cm、梁間が183～366cmを測る。柱穴の掘方平面は、直径約29～40cmのほぼ円形状を呈している。柱痕跡はＰ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ９で確認できた。

遺物は、Ｐ４から土師器Ⅲ、Ｐ６から須恵器や早島式土器、Ｐ７・Ｐ９から土師器や早島式土器、Ｐ８・Ｐ10から備前焼椀や早島式土器椀、などが出土した。図化した遺物、１は早島式土器椀でⅢ－２～３期の様相を示す。２は備前焼の椀で、Ⅱ期の様相を示す。建物の時期は、13世紀末以降であろう。

建物－35（第146図）



第146図　建物35平・断面，柱穴断面図および出土遺物

Ｇ６区に位置する。建物の規模は、桁行３間×梁行１間（478cm×266cm）である。北側桁部のＰ３は確認できなかった。建物面積は12.7㎡で、建物の主軸はＮ－87°－Ｗである。

建物の検出レベルは標高25.43～25.50m、柱穴底のレベルは標高25.19～25.35mである。柱間距離は、桁間で132～196cmを測る。柱痕跡は、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４・Ｐ６・Ｐ７・Ｐ８の６本の柱穴において確認できた。

遺物は、Ｐ４・Ｐ７から出土した。図化した遺物、１は早島式土器の椀の底部で、Ｐ４から出土した。高台径は4.2cmで、逆三角形の貼り付け高台を有する。Ⅲ－３期に属すると考えられる。

建物の時期は、早島式土器の時期からすれば、14世紀初めごろと推定される。（横山）

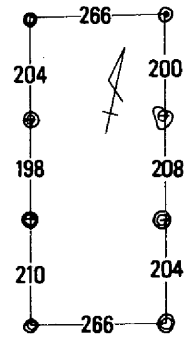
建物－36（第147図）

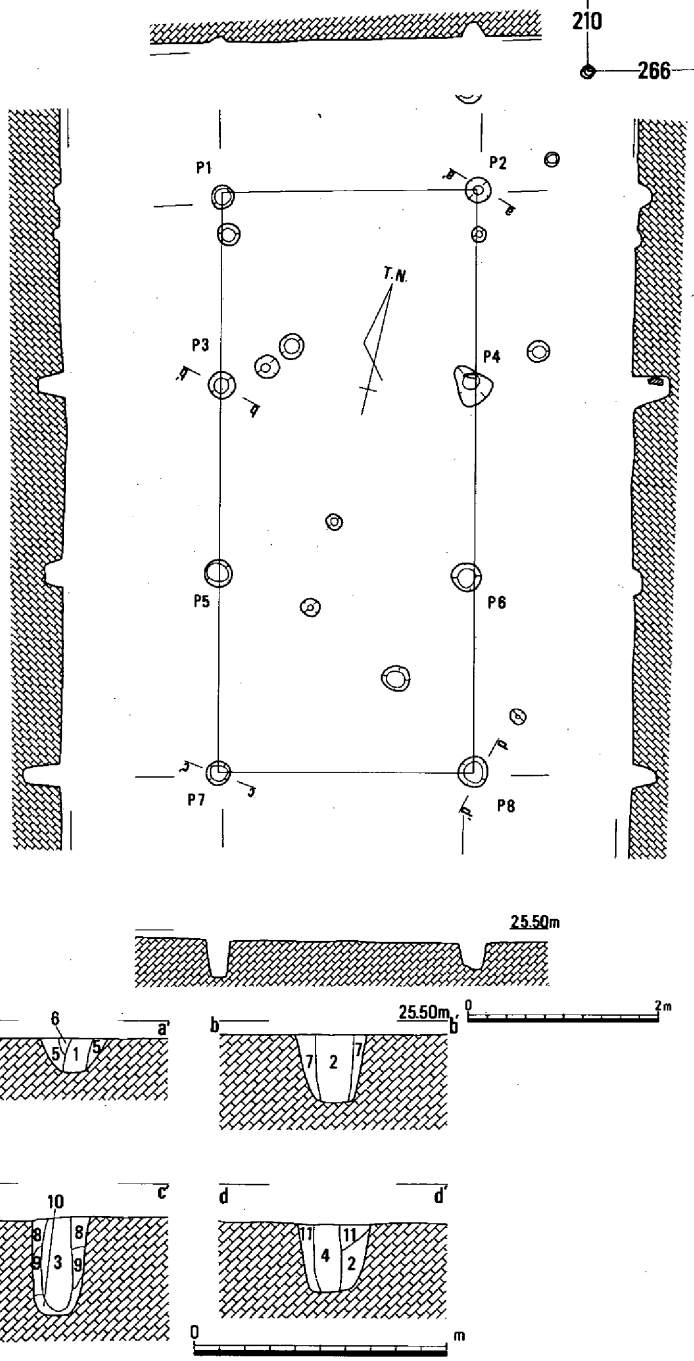
Ｇ６区周辺に位置する。建物の規模は、桁行３間×梁行１間（612cm×266cm）である。建物面積は16.3㎡で、建物の主軸はＮ－13°－Ｗを示す。

建物の検出レベルは標高25.34～25.46mで、柱穴底のレベルは標高25.00～25.34mである。柱間距離は、桁間で198～210cmを測る。

柱穴の掘方平面は、Ｐ４以外は、直径約24～32cmのほぼ円形状を呈している。柱痕跡は、Ｐ２・Ｐ３・Ｐ７・Ｐ８の４本の柱穴においてで確認できた。

遺物は、すべての柱穴において、まったく出土せず、建物の時期は、不明である。（横山）

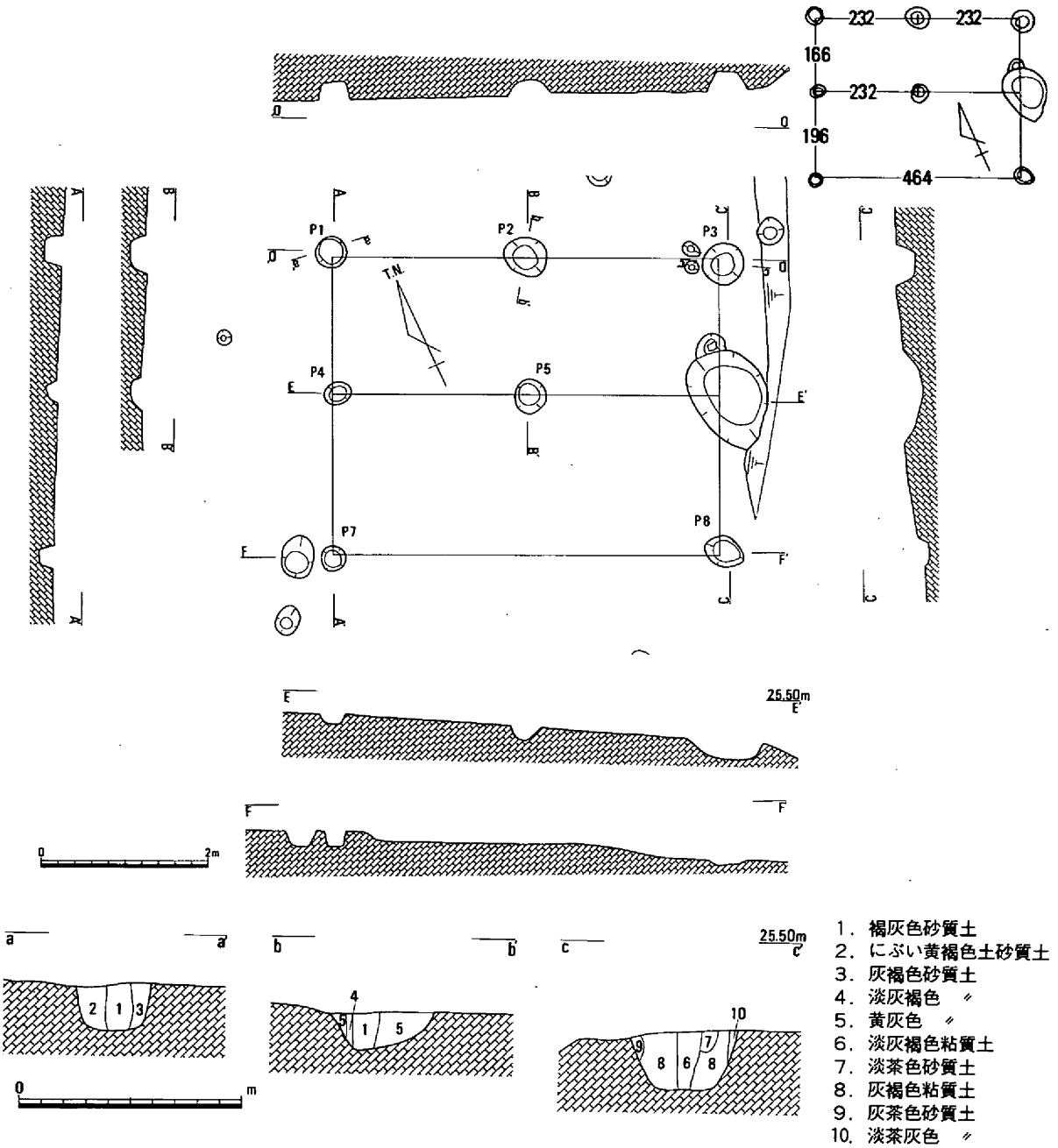




1．暗灰色砂質土（粘質土混）
2．灰褐色　〃
3．灰黄色　〃　（粘質土混）
4．褐灰色　〃　（Mn含）
5．褐灰色　〃　（粘質土混，Mn含）
6．褐灰色　〃　（粘質土混，５よりMnを多く含む）
7．灰黄色　〃　（Mn含）
8．灰褐色砂質土（Mn含）
9．灰色　〃
10．褐灰色　〃　（粘質土混）
11．にぶい黄褐色砂質土（Mn含）

第147図　建物36平・断面図および柱穴断面図

建物－37（第148図）



第148図　建物37平・断面図および柱穴断面図

Ｈ６区周辺に位置する。建物の規模は、桁行２間×梁行２間（464cm×362cm）である。南側桁部の中央柱は検出されなかった。また、東側梁部のＰ６は、後に掘られた土壙－49に切られ、検出されなかった。

建物面積は16.8㎡で、建物の主軸はＮ－66°－Ｗを示す。建物の検出レベルは標高24.78～25.28mで、柱穴底のレベルは標高24.73～25.10mである。柱間距離は、桁間で232cm、梁間で166～196cmを測る。柱穴の掘方平面は、直径約33～52cmのほぼ円形状を呈している。柱痕跡は、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３で確認できた。

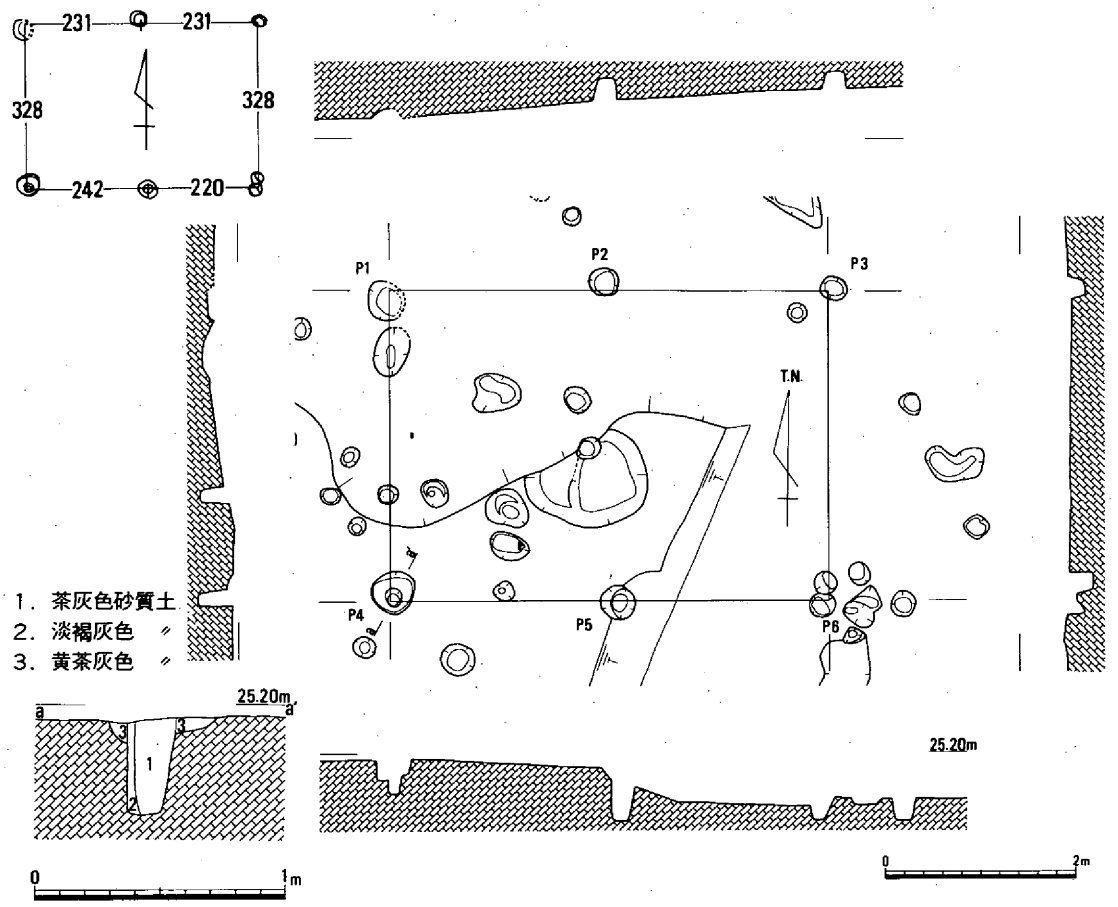
遺物は、Ｐ３から備前焼椀の底部小片などが出土したのみである。この遺物の時期から判断すれば、建物の時期は12世紀末以降と推定される。（横山）

建物―38（第149図）

Ｇ７区に位置する。建物の規模は、桁行２間×梁行１間（462cm×328cm）である。建物面積は15.2㎡で、建物の主軸はＮ―89°―Ｅを示す。

建物の検出レベルは標高24.66～25.14m、柱穴底のレベルは標高24.42～24.98mである。柱間距離は、桁間で220～242cmを測る。柱穴の掘方平面は、直径約27～44cmのほぼ円形状を呈している。柱痕跡は、Ｐ５のみで確認できた。

遺物は、Ｐ５・Ｐ７から土師器小片などが出土した。しかし、図化できる遺物はなかった。（横山）



第149図　建物38平・断面図および柱穴断面図

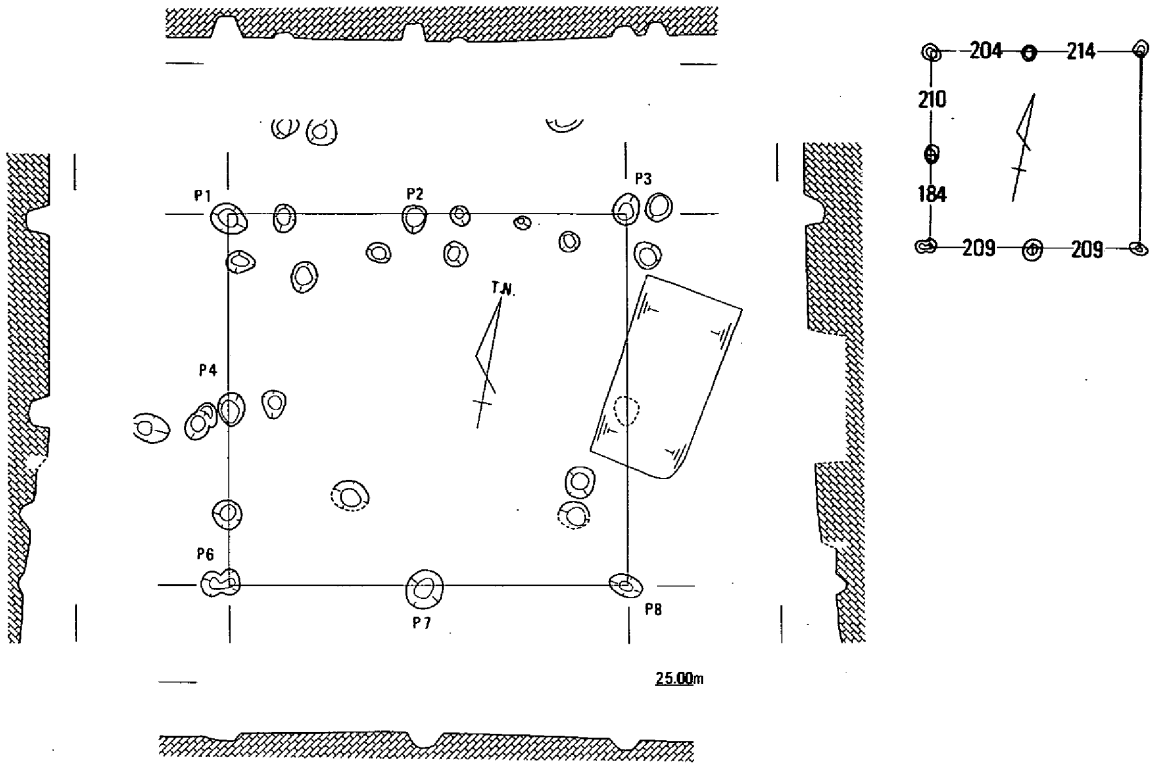
建物―39（第150図）

Ｉ７区周辺に位置する。建物の柱穴のうちＰ５は、後世の掘り込みにより、検出されなかった。建物の規模は、桁行２間×梁行２間（418cm×394cm）である。建物面積は16.5㎡、建物の主軸はＮ―79.5°―Ｅを示す。

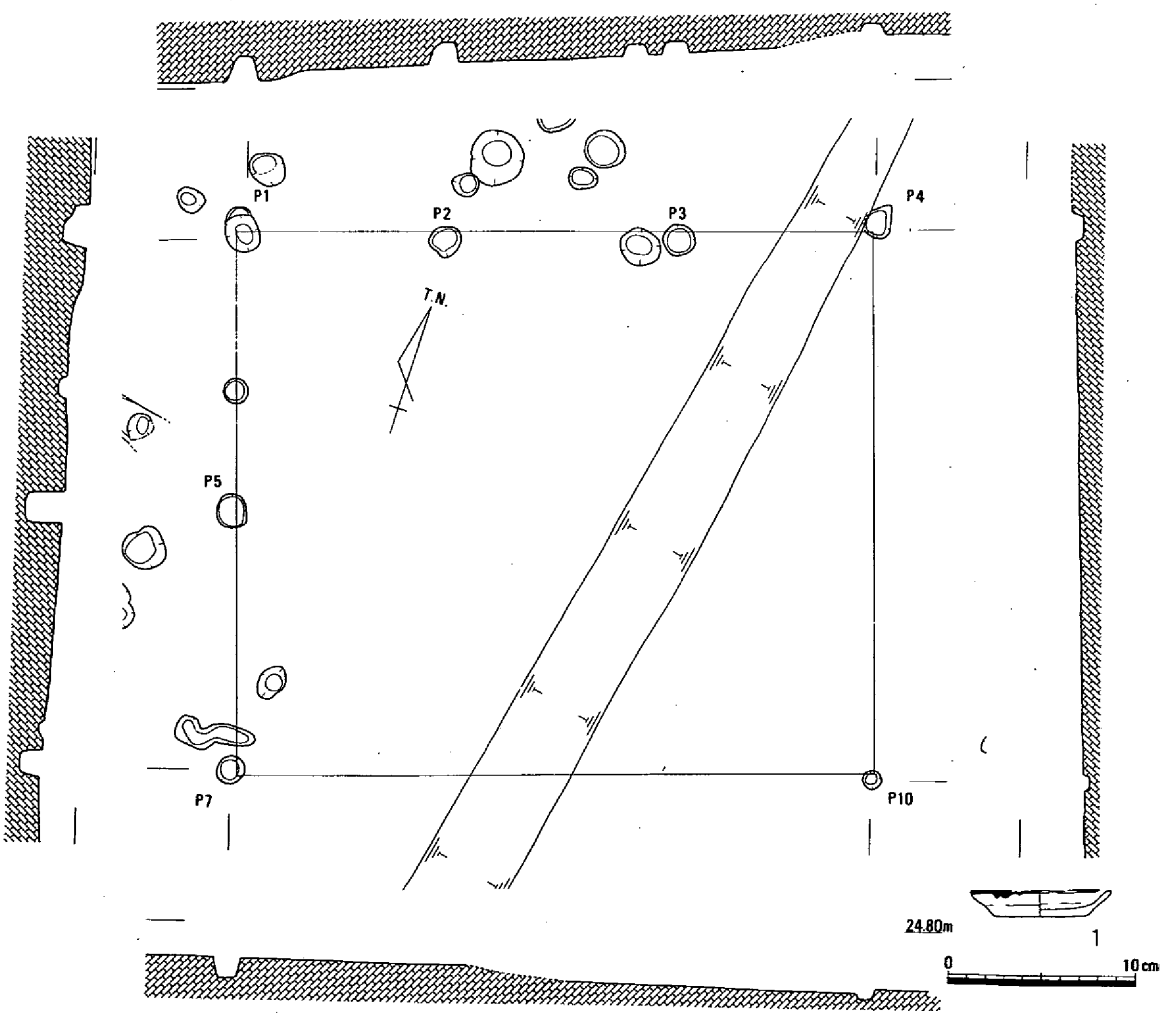
建物の検出レベルは標高24.42～24.76m、柱穴底のレベルは標高24.30～24.60mである。柱間距離は桁間で204～214cm、梁間で184～210cmを測る。

柱穴の掘方平面は、直径（長軸）約30～41cmの円形または楕円形状を呈している。柱痕跡はすべての柱穴において確認できなかった。

遺物は、Ｐ７から土師器の小片が少量出土したのみである。このため、図化できる遺物はなかった。（横山）



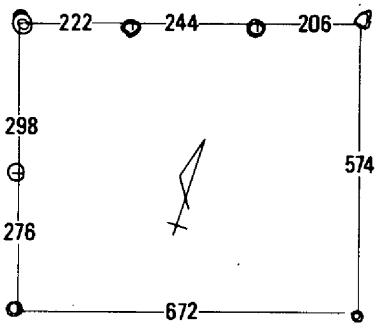
第150図　建物39平・断面図



第151図　建物40平・断面図および出土遺物

建物－40（第151・152図）

Ｈ８区に位置する。後世の削平などにより、南側桁部のＰ８・Ｐ９と東側梁部のＰ６は検出されなかった。建物の規模は、桁行３間×梁行２間（672cm×574cm）である。建物の検出レベルは標高24.14～24.75m、柱穴底のレベルは24.08～24.48である。柱痕跡は確認されなかった。遺物は、Ｐ１・Ｐ３・Ｐ５で出土した。１は土師器小皿で、Ｐ１で出土した。（横山）



第152図　建物40平面略図

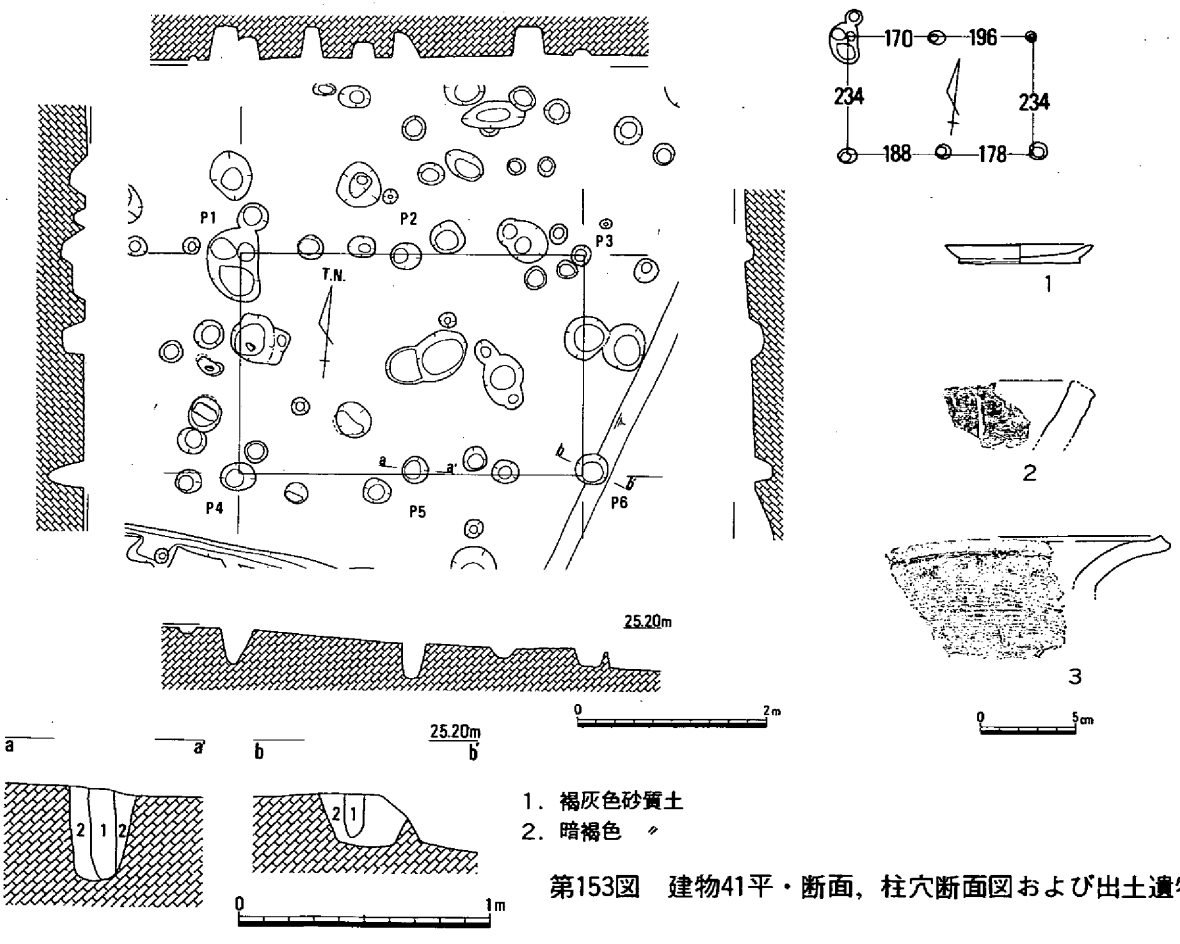
建物－41（第153図）

Ｆ７区に位置し、建物－11と一部重複して検出された。建物の規模は、桁行２間×梁行１間（366cm×234cm）である。建物面積は8.6㎡で、建物の主軸はＮ－85°－Ｅを示す。

建物の検出レベルは標高24.95～25.16m、柱穴底のレベルは標高24.64～25.02mである。柱間距離は桁間で170～196cmを測る。柱穴の掘方平面は、直径約21～35cmのほぼ円形状を呈している。柱痕跡はＰ５・Ｐ６で確認できた。

遺物は、Ｐ１から土師器甕・椀、Ｐ２から土師器の小片、Ｐ３から須恵器や土師器の小片、Ｐ４から土師器小皿、Ｐ６から土師器甕、などが出土した。図化した遺物は次の２点である。１は土師器の小皿で、Ｐ４から出土した。２は土師器の甕の口縁部で、Ｐ６から出土した。

建物の時期は、判然としないが、13世紀後半以降と推定される。（横山）

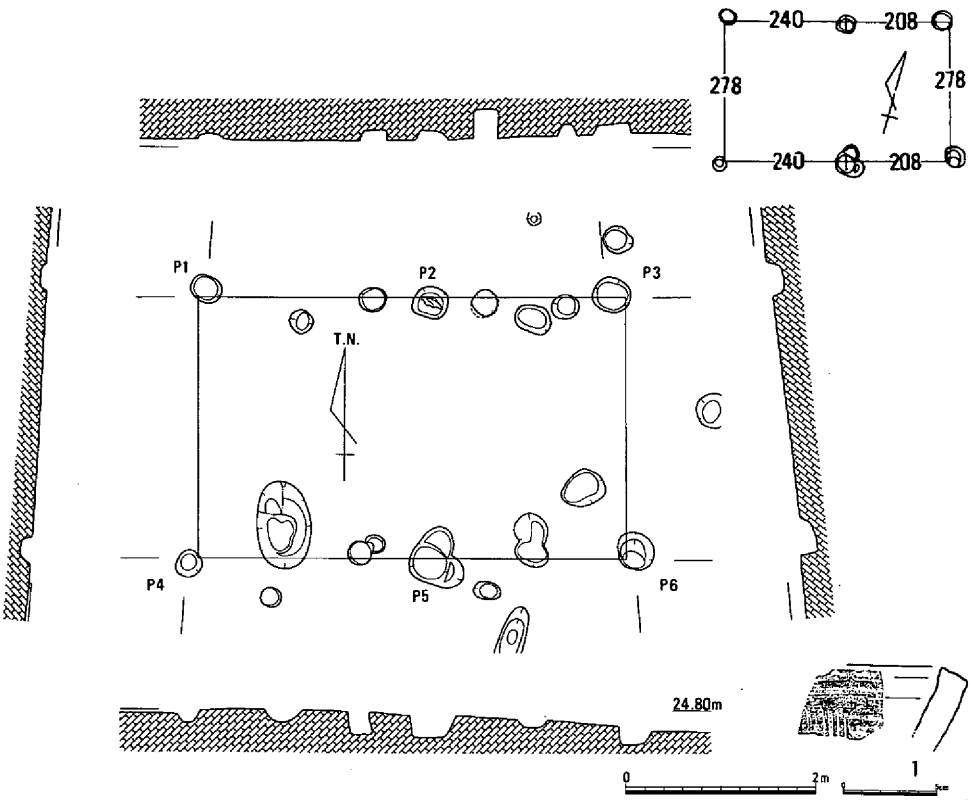


第153図　建物41平・断面，柱穴断面図および出土遺物

建物―42（第154図）

Ｆ８区周辺に位置する。建物の規模は、桁行２間×梁行１間（448cm×278cm）である。建物面積は12.5㎡で、建物の主軸はＮ―74°―Ｅを示す。建物の検出レベルは標高24.58～24.78ｍで、柱穴底のレベルは標高24.44～24.66ｍである。柱痕跡は確認できなかった。

遺物は、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４・Ｐ６から出土している。図化した遺物１は備前焼擂鉢の口縁部小片で、Ｐ６から出土している。これはⅡ期の様相を呈していると考えられる。



第154図　建物42平・断面図および出土遺物

建物の時期は、13世紀中ごろから終わりごろと推定される。（横山）

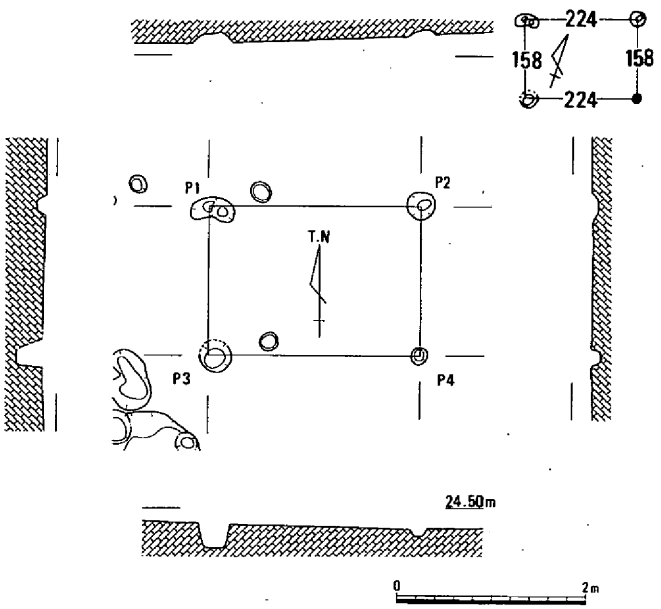
建物―43（第155図）

Ｆ９区に位置する。建物の規模は桁行１間×梁行１間（224cm×158cm）である。建物面積は3.5㎡で、建物の主軸はＮ―72°―Ｅを示す。

建物の検出レベルは標高24.27～24.38ｍ、柱穴底のレベルは標高24.06～24.26ｍである。

柱穴の掘方平面は、直径（長軸）約19～33cmの円形もしくは楕円形状を呈している。柱痕跡は全てで確認できなかった。

遺物は、Ｐ１から土師器皿などの小片が出土した。しかし、図化できる遺物はなかった。よって、建物の時期は判然としない。



第155図　建物43平・断面図

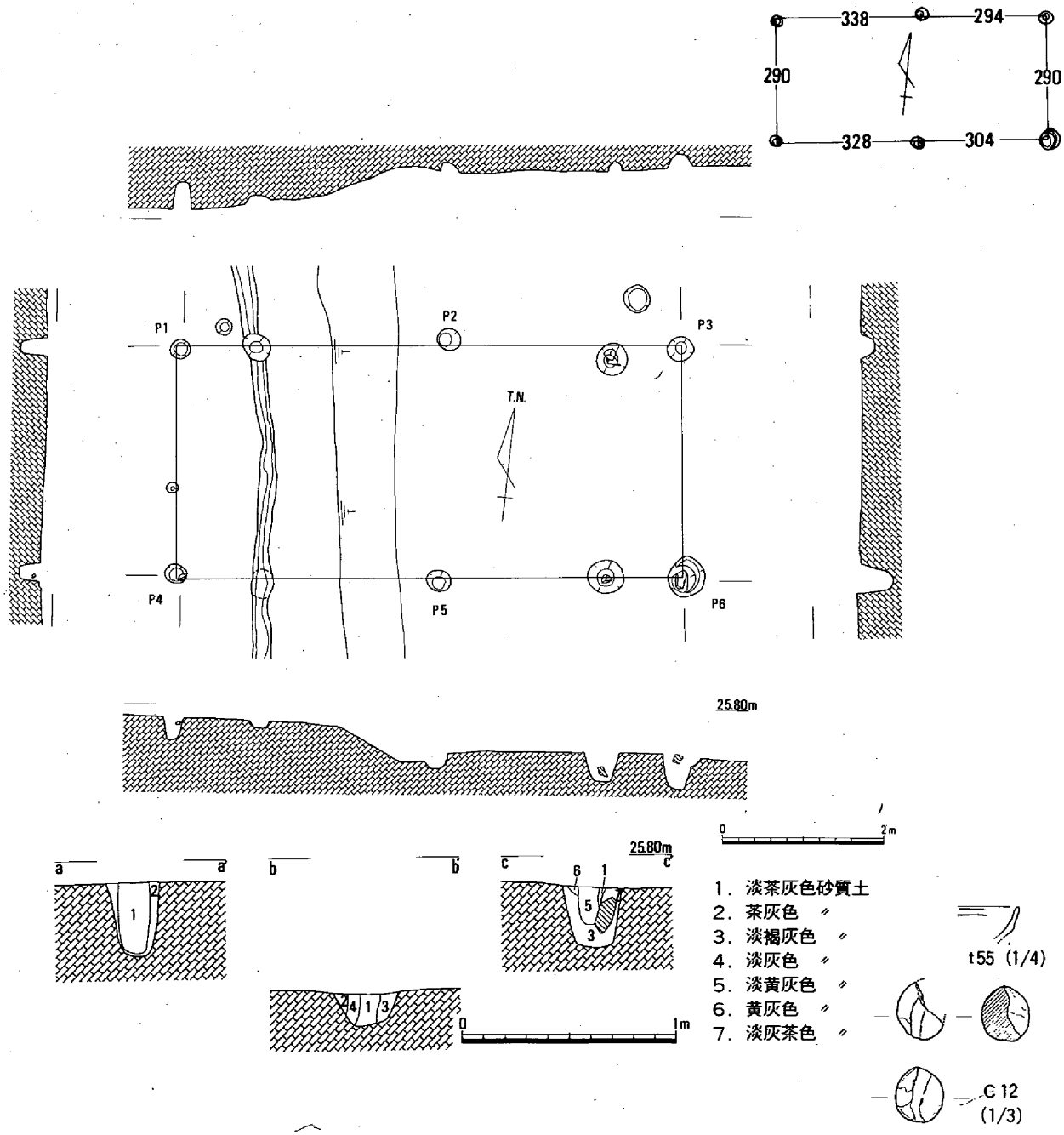
建物－44（第156図）

Ｂ７区に位置し、建物－31と重複して検出された。建物の規模は、桁行２間×梁行１間（632㎝×290㎝）である。建物面積は18.3㎡、建物の主軸はＮ－84.5°－Ｅを示す。

建物の検出レベルは標高25.18～25.70m、柱穴底のレベルは標高24.81～25.01mである。柱間距離は桁間で294～338㎝を測る。柱穴の掘方平面は、直径約24～46㎝のほぼ円形状を呈している。柱痕跡は確認できなかった。

遺物は、Ｐ１から土師器やかまど、Ｐ４から土師器、Ｐ５から土師器小皿、Ｐ６から須恵器・早島式土器や瓦器、などが出土した。図化した遺物は次の２点で、いずれもＰ６から出土した。ｔ55は瓦器の小皿で、和泉型Ⅲ－２期に属する。ｃ12は球状の土錘で、中央部に焼成前に凹みをつけている。

建物の時期は、瓦器の時期からすると、13世紀中ごろ以降と推定される。（横山）

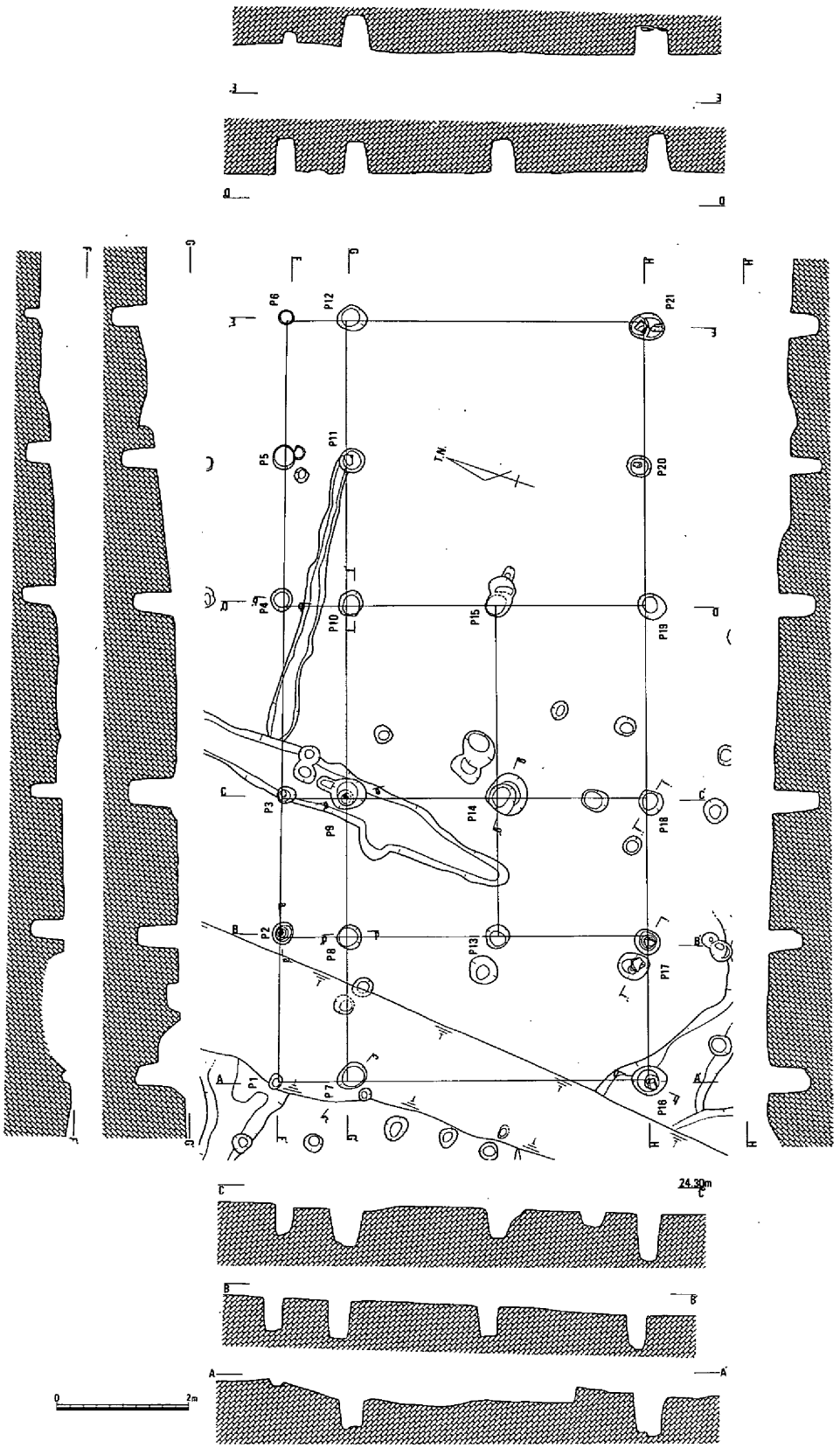


第156図　建物44平・断面図および出土遺物

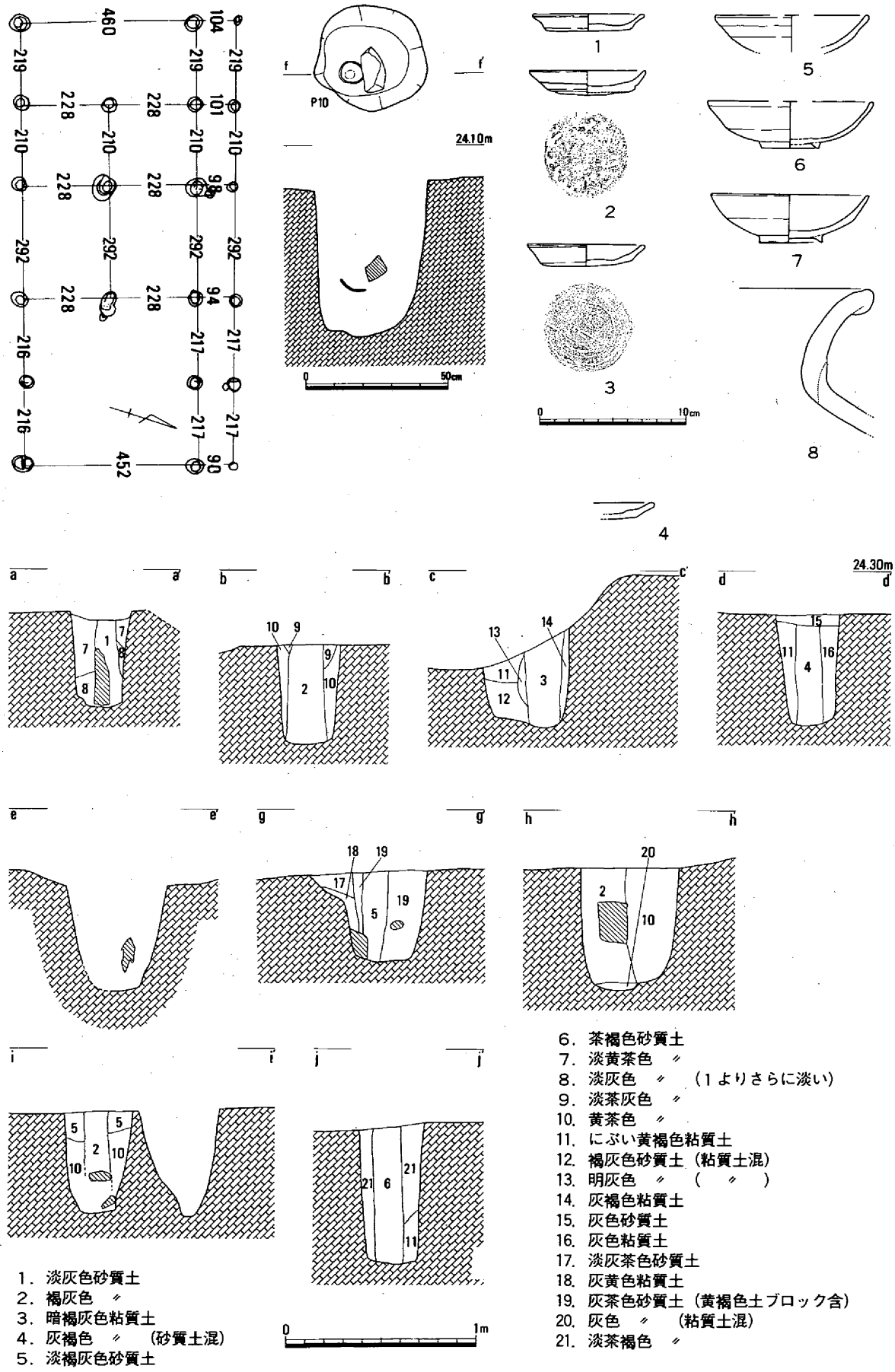
建物－45（第157～159図）

Ｇ９区周辺に位置する。規模は桁行５間×梁行３間（1153～1155cm×542～564cm）である。この建物は、南側２間の上屋と北側１間の下屋を付属させた構造をもつ。上屋内部は東側から３間目と４間目に間仕切りの束柱を有する。建物面積は64.2㎡で、建物の主軸はＮ－71.5°－Ｅを示す。建物の検出レベルは標高23.58～24.24ｍで、柱穴底のレベルは標高23.12～24.10ｍである柱間距離は、桁間で210～292cm、梁間228(90)～230cmを測る。

柱穴の掘方平面は、直径約21～63cmのほぼ円形状を呈している。Ｐ２にはアラカシ、Ｐ９にはネズミサシの柱根が遺存していた。また、Ｐ21には根石と礎板に使用された可能性のあるコウヤマキの板状木製品が遺存していた。この他、Ｐ４・Ｐ７・Ｐ８・Ｐ14・Ｐ16・Ｐ17・Ｐ18で、柱痕跡が確認できた。この他、Ｐ10では、土師器小皿を柱抜き取り後に埋納したと推



第157図　建物45平・断面図



1．淡灰色砂質土
2．褐灰色　〃
3．暗褐灰色粘質土
4．灰褐色　〃　（砂質土混）
5．淡褐灰色砂質土
6．茶褐色砂質土
7．淡黄茶色　〃
8．淡灰色　〃　（1よりさらに淡い）
9．淡茶灰色　〃
10．黄茶色　〃
11．にぶい黄褐色粘質土
12．褐灰色砂質土（粘質土混）
13．明灰色　〃　（　〃　）
14．灰褐色粘質土
15．灰色砂質土
16．灰色粘質土
17．淡灰茶色砂質土
18．灰黄色粘質土
19．灰茶色砂質土（黄褐色土ブロック含）
20．灰色　〃　（粘質土混）
21．淡茶褐色　〃

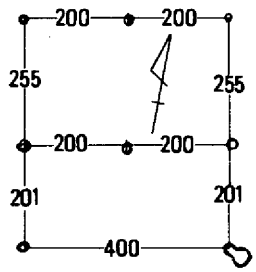
第158図　建物45平面，柱穴断面図および出土遺物

定される状態で検出された。

図化した遺物は次の７点である。１～４は土師器の小皿、５～７は早島式土器の椀、８は備前焼の甕である。早島式土器の計測値は、５が口径10.3cm、６が口径11.2cm・器高3.3cm、７が口径10.75cm・器高3.35cmを測る。これらはすべてⅢ－３期の様相を示している。また８の備前焼甕はⅢ期の様相を示している。

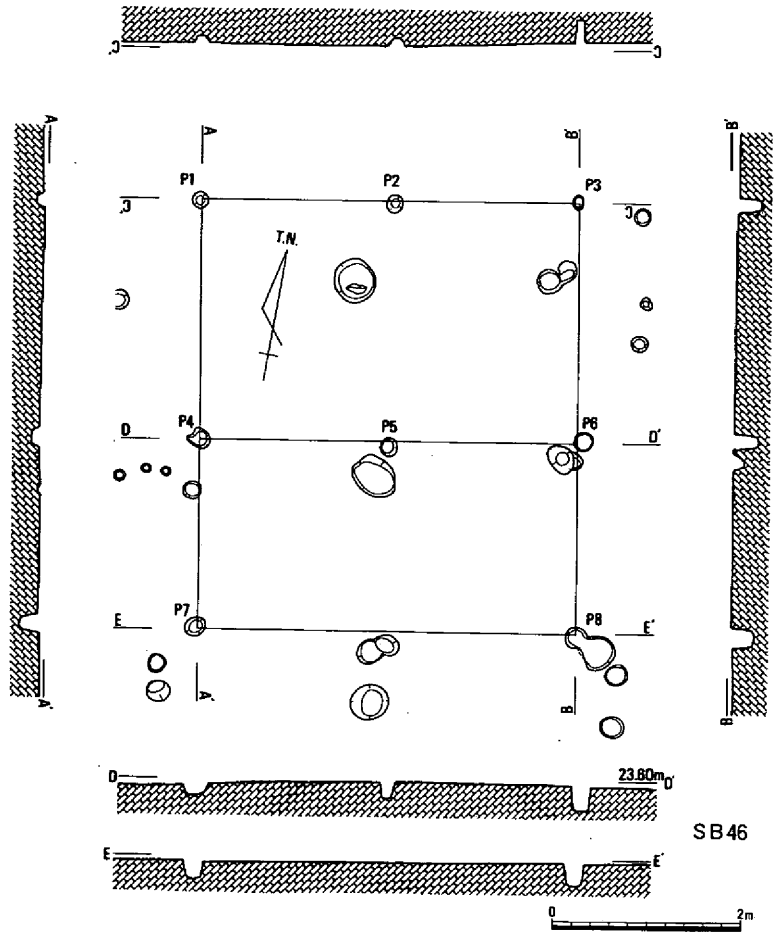
建物の時期は、出土遺物のうち早島式土器、備前焼の様相から、14世紀前半頃と推定される。

（横山）



建物－46（第159図）

E11区周辺に位置し、建物－14と一部重複して検出された。建物の規模は桁行２間×梁行２間（456cm×400cm）である。この建物は、南側梁部に中心柱をもたない構造をとる。建物面積は18.2㎡で、建物の主軸はN－10°－Wを示す。



第159図　建物46平・断面図

建物の検出レベルは標高23.51～23.58m、柱穴底のレベルは標高23.27～23.47mである。柱痕跡はすべての柱穴で確認できなかった。

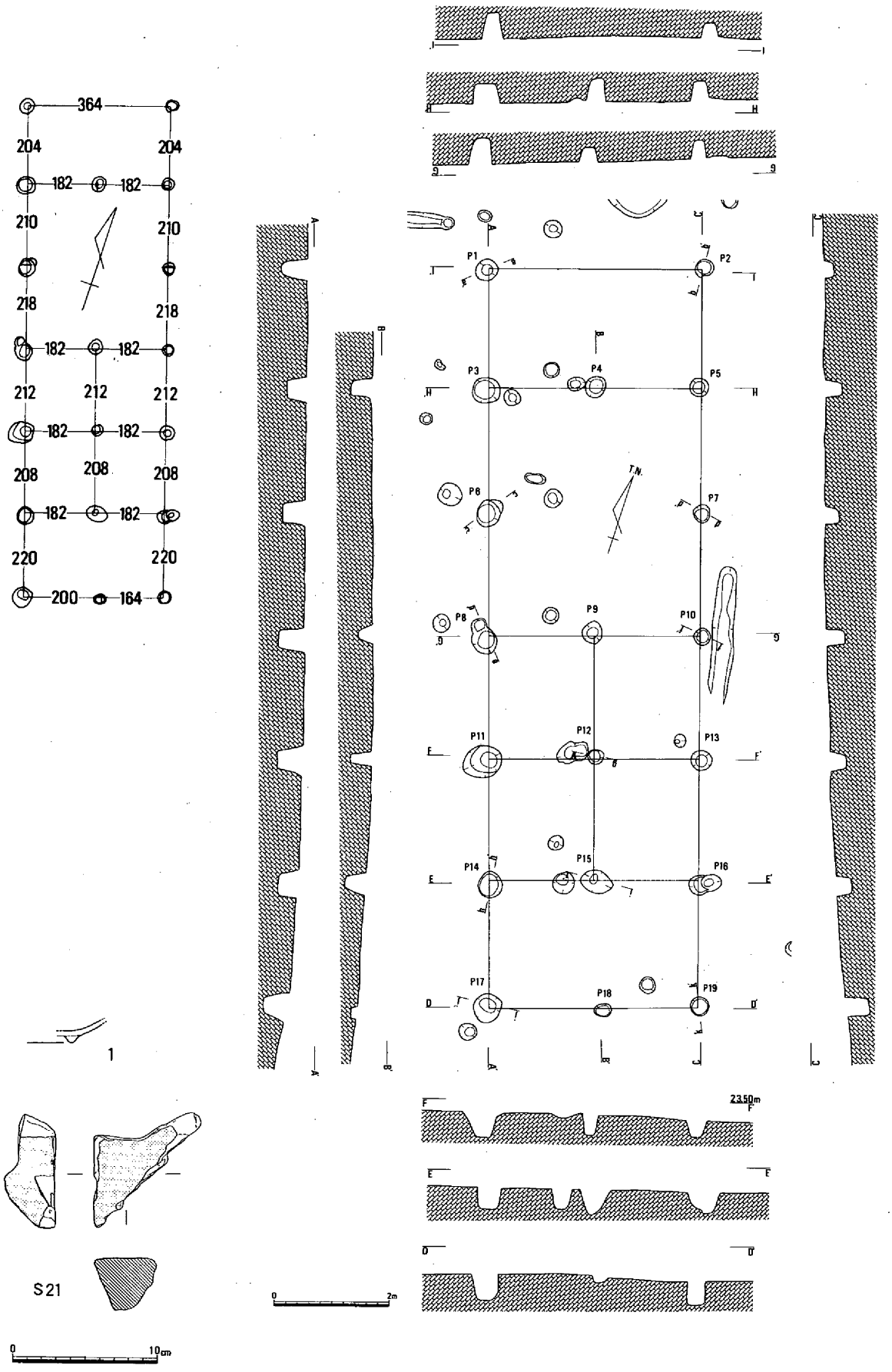
遺物は、Ｐ２・Ｐ６・Ｐ７・Ｐ８で少量出土した。しかし、図化できるものはなかった。（横山）

建物－47（第160図）

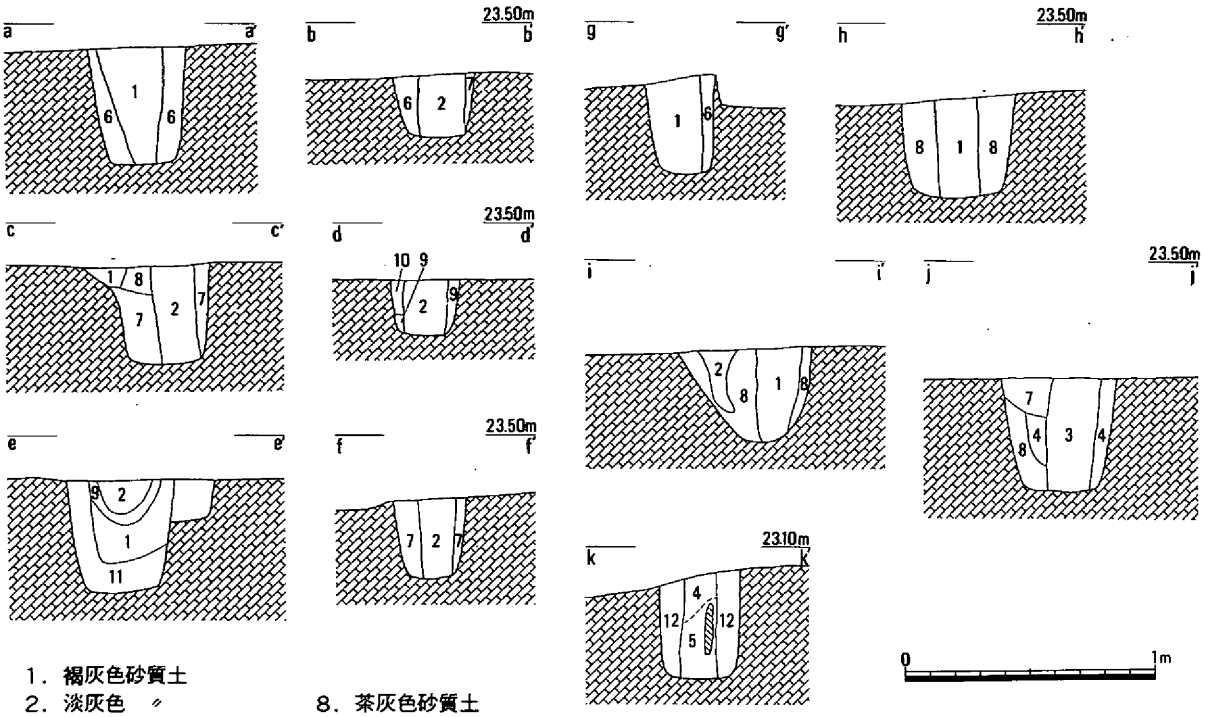
G11区周辺に位置する。建物－17と一部重複して検出された。建物の規模は、桁行６間×梁行２間（1272cm×364cm）である。梁部Ｐ１からＰ２間・Ｐ６からＰ７間の柱穴は検出されなかった。また、梁部Ｐ17からＰ19の中央柱Ｐ18は、ほかの柱穴と比較して、小規模かつ浅く、この建物の柱穴とはならない可能性もある。建物は、南北に１間分の下屋を設け、上屋は北側２間の土間部と南側２間の総柱部の部屋からなる構造と推定される。

建物の面積は46.3㎡で、建物の主軸はN－17°－Wを示す。建物の検出レベルは標高22.90～23.40mで、柱穴底のレベルは標高22.46～23.04mである。柱間距離は、桁間で204～220cm、梁間で164～200cmを測る。

柱穴の掘方平面は、直径約28～69cmのほぼ円形状を呈している。Ｐ19には、クリの柱根が遺存していた。このほか、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ６・Ｐ７・Ｐ10・Ｐ12・Ｐ14・Ｐ15・Ｐ17の９本の柱穴において、柱痕跡が確認できた。



第160図　建物47平・断面図および出土遺物



1．褐灰色砂質土
2．淡灰色　〃
3．暗灰色　〃
4．灰色　〃
5．暗青灰色粘質土
6．黄褐色砂質土
7．淡茶灰色　〃
8．茶灰色砂質土
9．淡黄灰色　〃
10．淡褐灰色　〃　（2より灰色淡い）
11．褐灰色　〃　（黄褐色土ブロック含む）
12．淡灰色　〃　（　〃　）
13．暗灰褐色　〃

第161図　建物47柱穴断面図

遺物は、Ｐ１から須恵器や土師器、Ｐ２から土師器や早島式土器、Ｐ３から須恵器や土師器椀、Ｐ８から備前焼擂鉢や土師器、Ｐ11から備前焼椀・土師器や砥石、Ｐ12から土師器、Ｐ13から土師器、Ｐ14から須恵器や土師器皿、Ｐ15から製鉄炉壁、Ｐ16から土師器、などの小・細片が出土している。図化した遺物は、次の２点である。１は早島式土器椀の底部小片で、Ｐ２から出土した。高台の断面は半円形状を呈している。Ⅲ－３期と考えられる。S21は砥石で、２面に使用痕跡が残る。

建物の時期は、出土遺物の様相から、鎌倉時代後半ごろと推定される。　（横山）

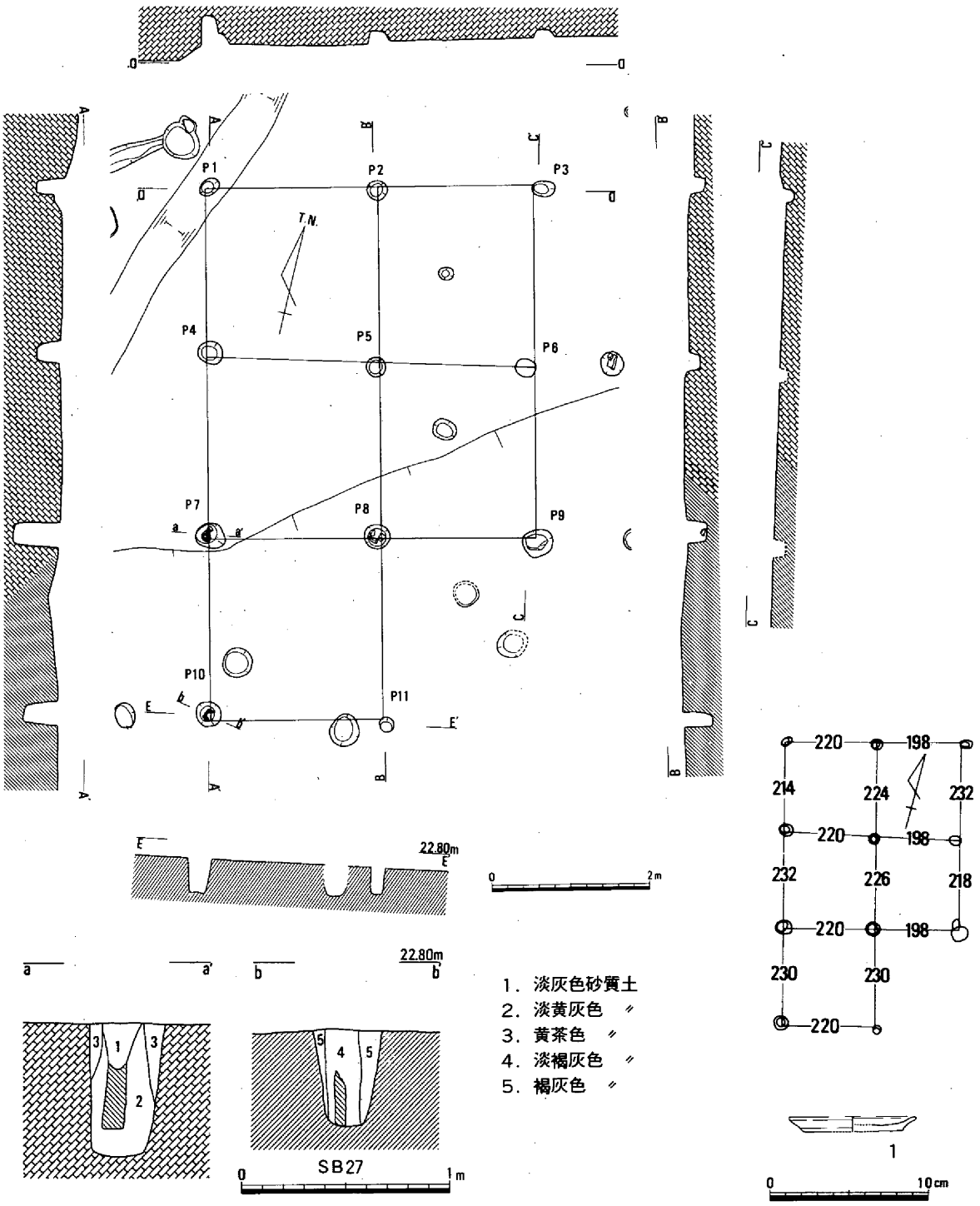
建物－48（第162図）

G12区周辺に位置する。建物の規模は、桁行３間（一部２間）×梁行２間（450～680×418cm）である。南東角の柱穴は、検出されなかった。建物面積は23.8㎡で、建物の主軸はＮ－14.5°－Ｗを示す。

建物の検出レベルは標高22.32～22.58ｍで、柱穴底のレベルは標高21.89～22.35ｍである。柱間距離は、桁間で214～232cm、梁間で198～220cmを測る。柱穴の掘方平面は、直径約19～37cmのほぼ円形状を呈している。Ｐ４にはアカマツ、Ｐ７・Ｐ10にはクリの柱根が遺存していた。また、Ｐ８には柱を支える根石が遺存していた。

遺物は、Ｐ４から土師器小皿や早島式土器椀、Ｐ７から土師器杯、Ｐ８からかまど、Ｐ９から土師器、Ｐ10から須恵器、Ｐ11から土師器小皿、などが出土している。図化した遺物１は土師器小皿でＰ11から出土した。

建物の時期は、鎌倉時代前半ごろと推定される。　（横山）



第162図　建物48平・断面図および出土遺物

建物－49（第163図）

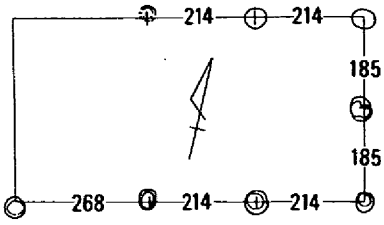
H13区周辺に位置し、河道－２の堆積土上に立地する。建物の規模は梁行３間×２間（696cm×370cm）である。西側のＰ１・Ｐ５は、調査中の不認識により誤って削平し、不詳である。建物面積は25.8㎡、建物の主軸はＮ－76.5°－Ｅを示す。

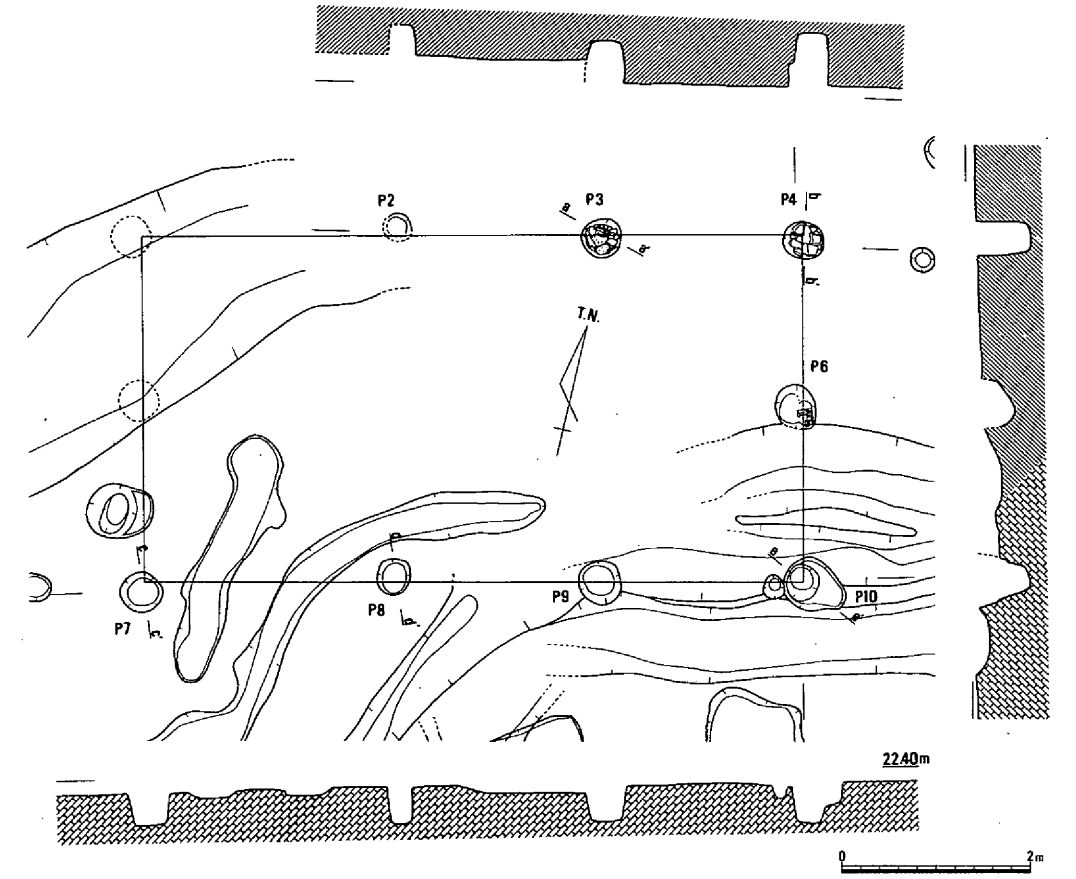
建物の検出レベルは標高22.10～22.32m、柱穴底のレベルは標高21.72～21.92mである。柱間距離は、桁間で214～268cm、梁間で185cmを測る。柱穴の掘方平面は、直径約36～46cmのほぼ円形状を呈している。Ｐ９にはアカマツの柱根が、Ｐ３・Ｐ４には柱を支える根石や基石が遺存していた。また、柱

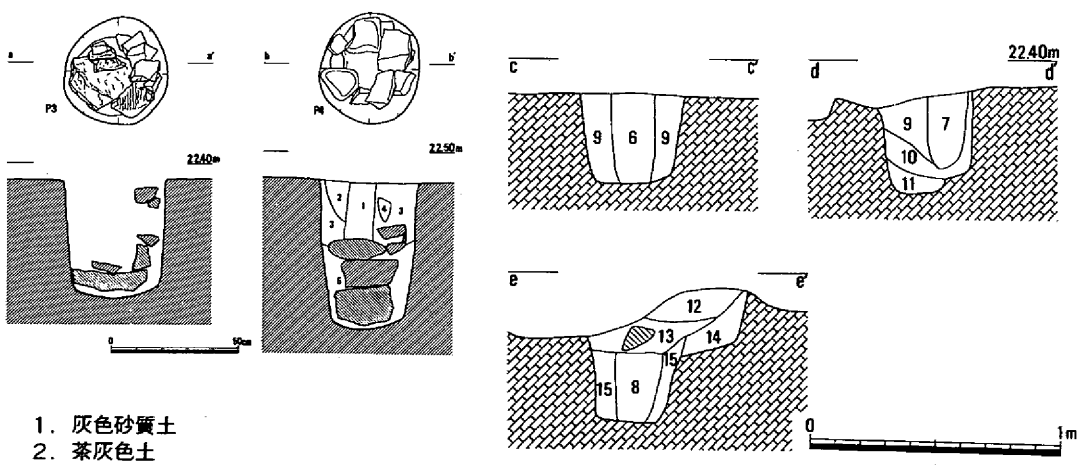
痕跡は、Ｐ７・Ｐ８・Ｐ10の３本の柱穴において確認できた。

遺物は、Ｐ４・Ｐ６・Ｐ８・Ｐ９・Ｐ10から出土した。しかし小・細片のみで実測できなかった。

建物の時期は不明であるが建物―51などと同じ時期であろう。　（横山）







1．灰色砂質土
2．茶灰色土
3．淡茶灰色土
4．茶灰色土ブロック
5．灰色粘土
6．暗褐灰色砂質土
7．暗灰色　〃
8．灰色粘質土
9．褐灰色砂質土
10．茶灰色　〃　（黄褐色土混入）
11．茶灰色　〃
12．灰褐色砂質土
13．褐灰色粘質土
14．淡褐色　〃
15．淡灰色　〃

第163図　建物49平・断面図および柱穴断面図

建物―50（第164図）

F13区周辺に位置する。建物の規模は、桁行２間×１間（376cm×220cm）である。Ｐ３は、建物の内部側に位置し、歪な平面構造である。建物面積は8.3㎡、建物の主軸はＮ―14°―Ｗを示す。建物の検出レベルは標高22.38～22.56m、柱穴底のレベルは標高22.03～22.27mである。柱間距離は桁間で180～196cmを測る。柱穴の掘方平面は、直径約23～37cmのほぼ円形状を呈している。柱痕跡はＰ５・Ｐ６で確認できた。

遺物は、Ｐ１から須恵器、Ｐ４から土師器皿、Ｐ６から須恵器・土師器や早島式土器椀、などが出土している。図化した遺物１は、Ｐ６から出土した早島式土器椀の底部で、Ⅲ－２～３期と考えられる。これから、建物の時期は、鎌倉時代後半ごろと推定される。（横山）

建物―51（第165図）

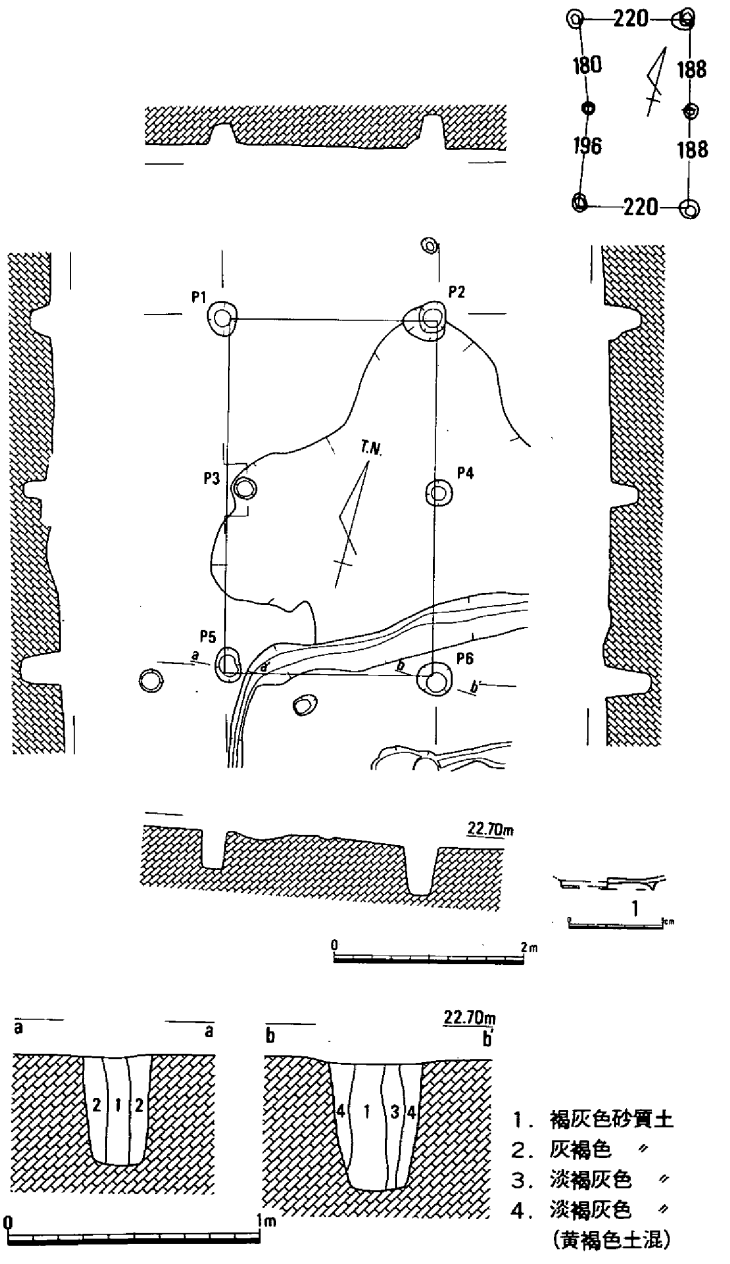
G13区周辺に位置する、総柱建物である。建物の平面は、歪な構造となっている。建物の規模は、桁行３間×梁行２間（582cm×398～418cm）である。建物面積は23.7㎡、建物の主軸はＮ―76°―Ｅを示す。

建物の検出レベルは標高22.10～22.26m、柱穴底のレベルは標高21.45～22.02mである。柱間距離は、桁間178～220cm、梁間186～204cmを測る。

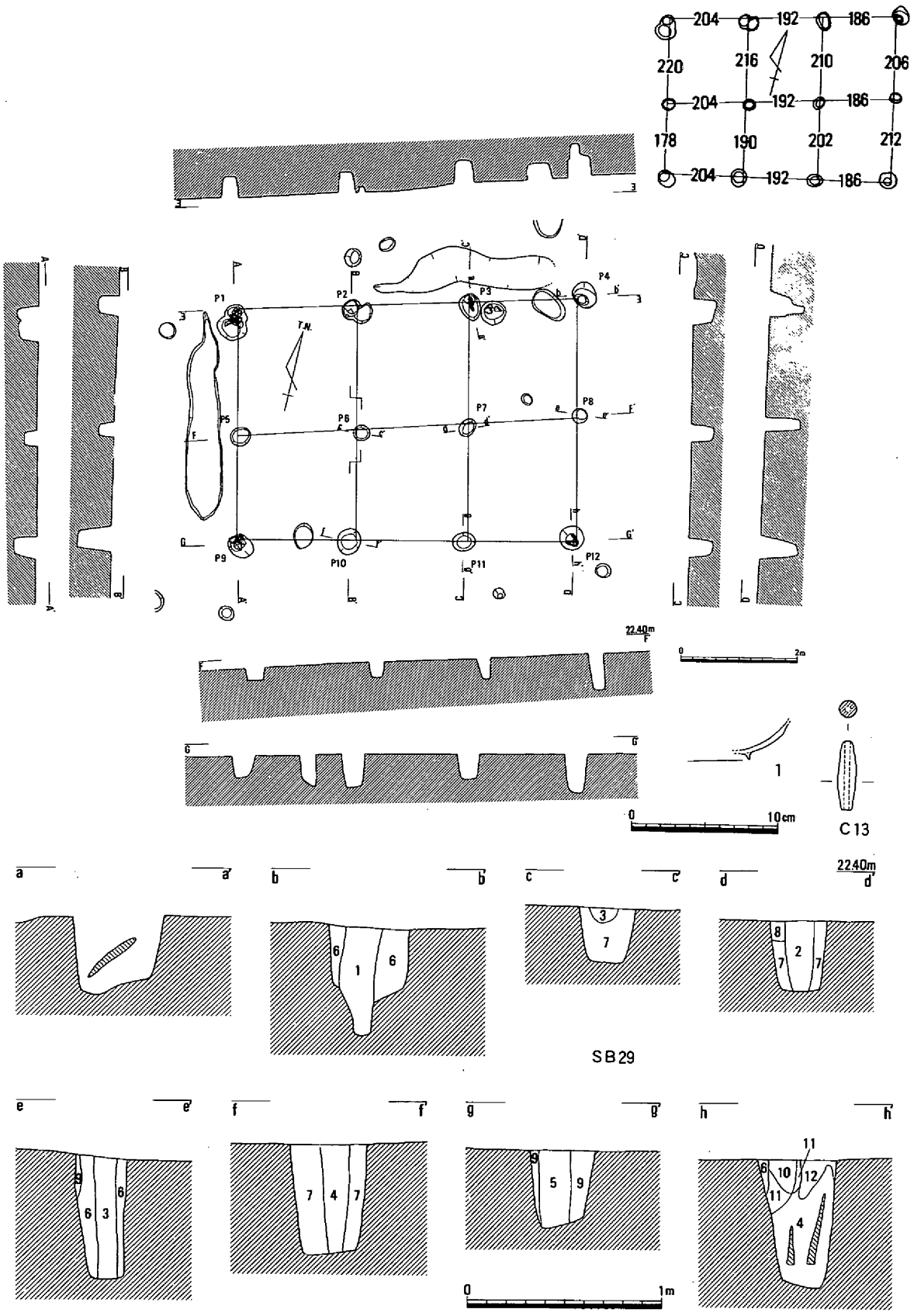
柱穴の掘方平面は、直径約27～46cmのほぼ円形状を呈している。Ｐ３にはアラカシ、Ｐ12にはクリの柱根が遺存していた。このほか、Ｐ４・Ｐ６・Ｐ７・Ｐ８・Ｐ10・Ｐ11の６本の柱穴において、柱痕跡が確認できた。

遺物は、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ７・Ｐ８・Ｐ９・Ｐ10・Ｐ11・Ｐ12において、須恵器・土師器・早島式土器・緑釉陶器・瓦器などの小片が出土している。図化した遺物のうち、１は早島式土器椀、ｃ13は土錘で、どちらもＰ10から出土した。１は小片のため、はっきりとはしないがⅢ－２～３期に属すると考えられる。

建物の時期は、出土した早島式土器の様相から鎌倉時代後半以降と推定される。（横山）



第164図　建物50平・断面，柱穴断面図および出土遺物



1．灰褐色土
2．灰褐色砂質土
3．灰色土
4．灰色粘質土
5．淡暗灰色粘質土
6．茶褐色土
7．茶灰色土
8．暗灰色土
9．淡茶灰色土
10．茶褐色土
11．淡明灰色粘質土
12．淡黄灰色土

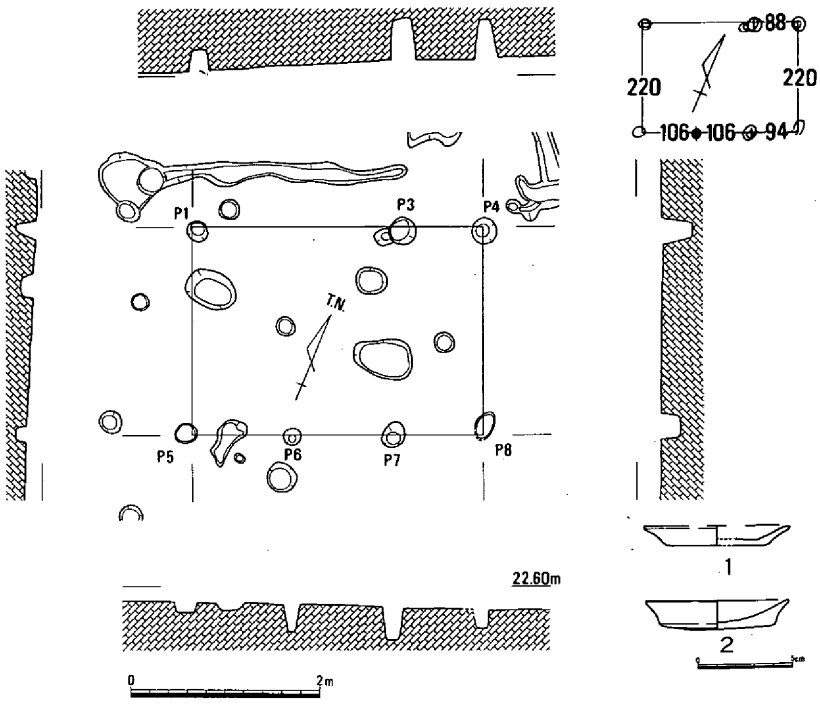
第165図　建物51平・断面，柱穴断面図および出土遺物

建物－52（第166図）

Ｆ13区に位置する。桁行３間×梁行１間（306cm×220cm）の建物である。北側桁部のＰ２は検出できなかった。建物面積は6.7㎡で、建物の主軸はＮ－68°－Ｅを示す。

建物の検出レベルは標高22.32～22.56m、柱穴底のレベルは標高21.99～22.32mである。柱痕跡はすべての柱穴で確認できなかった。

遺物は、Ｐ５・Ｐ６から出土した。１・２は土師器の小皿で、口径はどちらも7.6cmと小さい。　（横山）



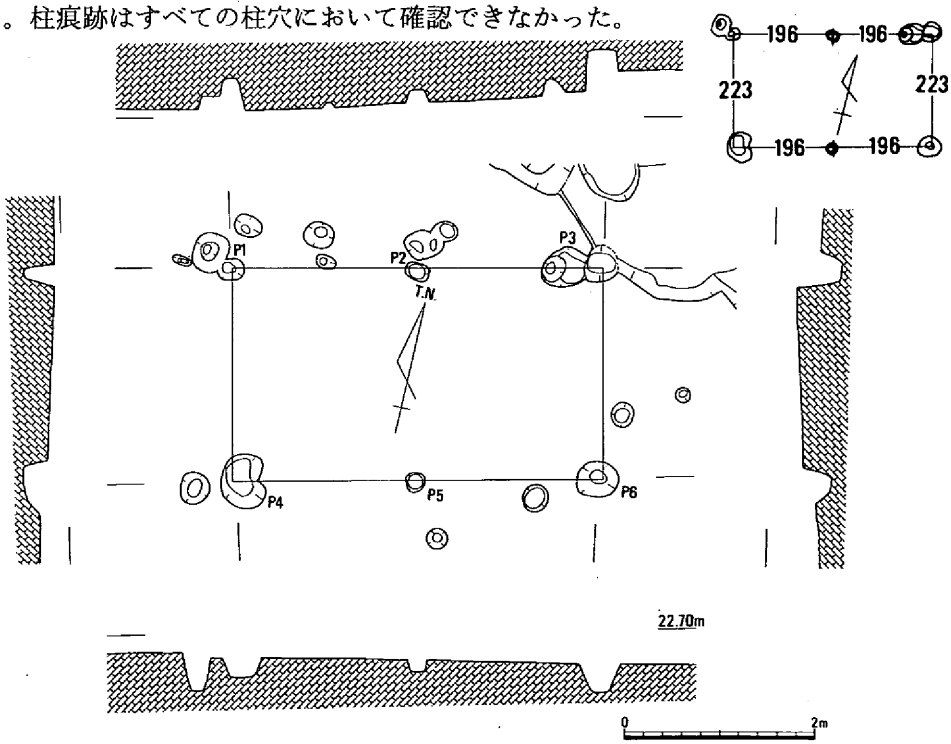
第166図　建物52平・断面図および出土遺物

建物－53（第167図）

Ｉ14区周辺に位置する。建物の規模は、桁行２間×梁行１間（392cm×223cm）である。建物面積は8.7㎡で、建物の主軸はＮ－77°－Ｅを示す。

建物の検出レベルは標高22.22～22.62m、柱穴底のレベルは標高21.98～22.41mである。柱間距離は桁間で196cmを測る。柱痕跡はすべての柱穴において確認できなかった。

遺物は、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ６で、土師器や早島式土器の細片などが出土した。しかし、図化できる遺物はなかった。遺物が小片のため、建物の時期も明確にならない。　（横山）



第167図　建物53平・断面図

(2)　柱穴列

柱穴列－９（第168図）

Ｇ４区にあり、溝－６を斜めにまたぎ、北東かＲ南西に向け１間分、柱間220cmが検出されたのみで、建物になる可能性もある。出土遺物はみられず、時期は不詳である。

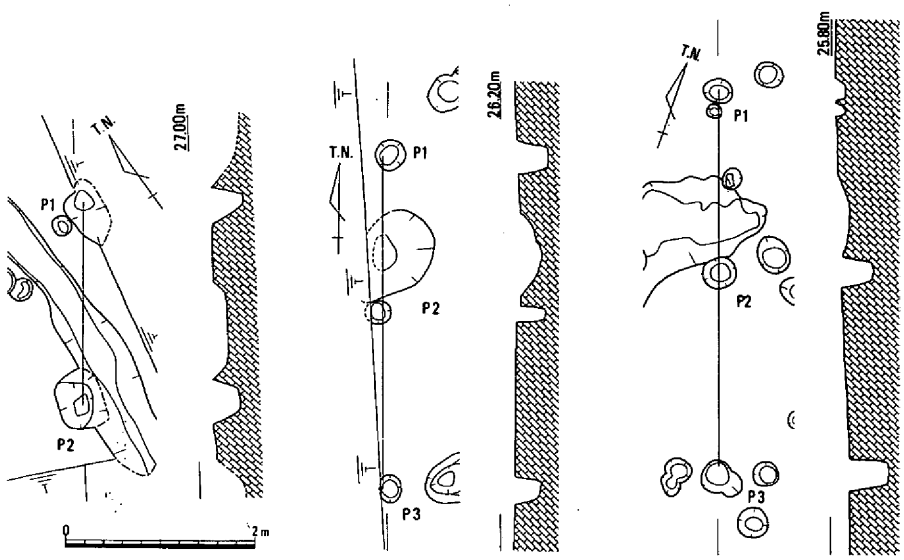
柱穴列－10（第168図）

Ｋ５区においてほぼ南北に２間分検出できた。柱間は160、180cmである。西側が調査区外で建物になる建物になる可能性も考えられる。

柱穴列－11（第168図）

Ｄ６区にあり、北西から南西に２間分あり、柱間は200、220cmである。出土遺物はみられず、時期は不詳である。

（伊藤）

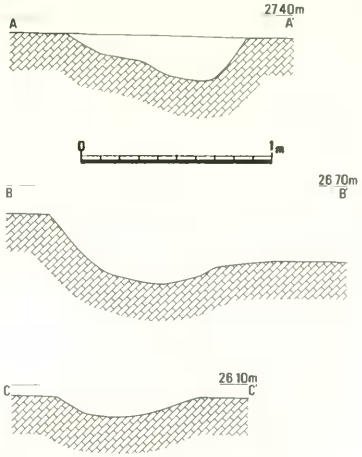


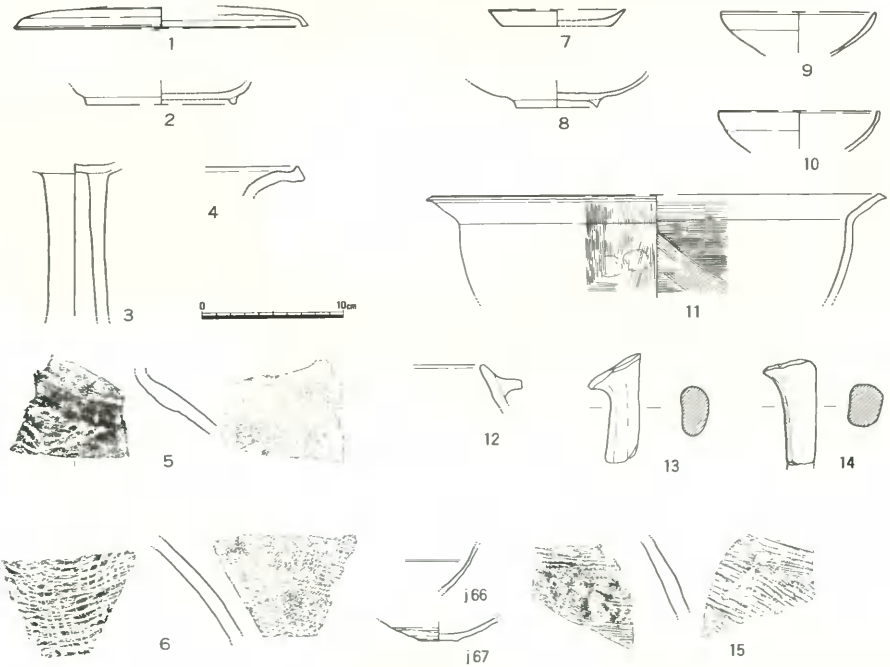
第168図　柱穴列９～11平・断面図

(3)　溝

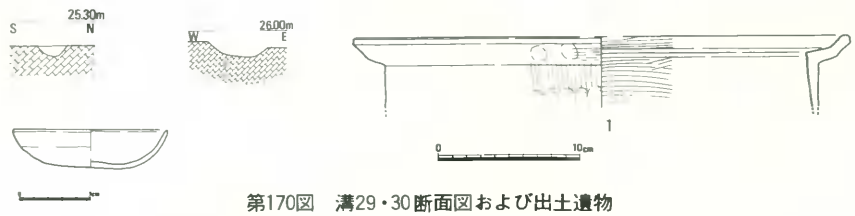
溝－28（第169図）

Ｈ１区から東に伸びＧ５まで約40ｍほど伸びる溝である。幅は一番良く残っている西側部分で１ｍ前後、深さは25㎝ほどであるが、東は水田が一段下がっており幅60㎝、深さ10㎝ほどが残るのみで、上段での検出面の標高は27.3ｍ、溝底部では27.15ｍ、下段では検出面で26ｍ、溝底部は25.90ｍを測る。溝－40とはほぼ直角になり、建物等を囲む溝の可能性もある。溝内からは奈良時代の須恵器１～６、鎌倉時代後半の小皿６、早島式椀８・９、鍋10、羽釜11、支脚12・13、白磁椀ｊ66、小皿ｊ67などが出土している。溝の時期は、奈良時代にさかのぼる可能性もあるが奈良時代の建物との方位はずれており、鎌倉時代後半と考え





第169図　溝28断面図および出土遺物



第170図　溝29・30断面図および出土遺物

られる。

(4)　井戸

井戸－3（第171図）

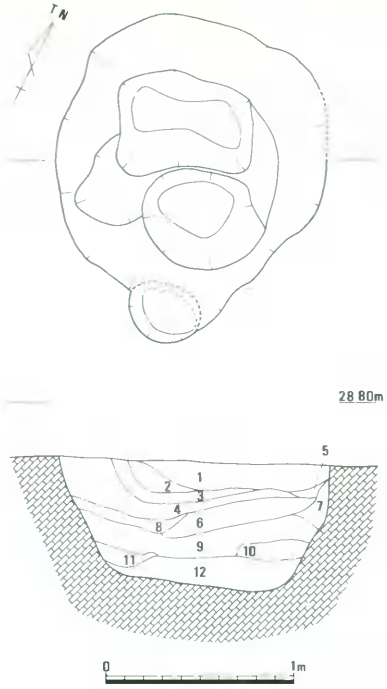
C 2区に位置する、素掘りの井戸である。残存部の形状は、掘方平面は不整形で、底面は、平らではなく、かなり凹凸がある。規模は長軸152cm・短軸145cm、深さは67cmを測る。検出レベルは標高28.46～28.51m、底面のレベルは標高27.79～27.89mである。

遺物は、備前焼甕1・2のみが出土した。内外面とも刷毛目がみられ、Ⅱ期の様相を示す。このことから、井戸－3の廃絶時期は、13世紀前半頃と推定される。

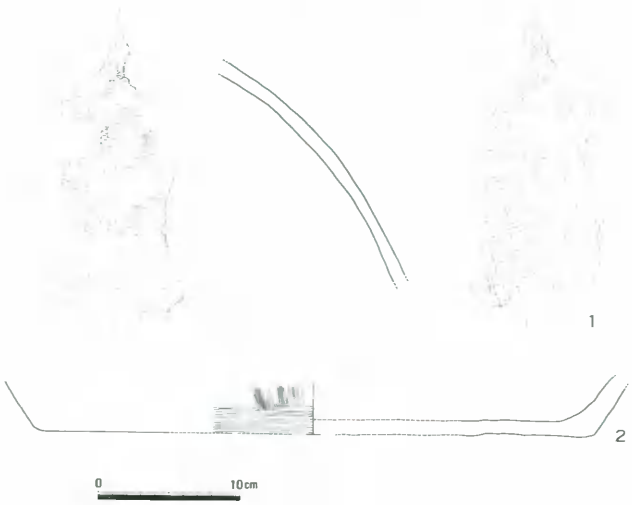
井戸－4（第172図）

井戸－2の南南西約5mのF 4区に位置する、石組の井戸である。上部は大きく後世の削平を受け、本来の規模、形状は不明である。残存部の掘方平面は、不整形な形状を呈している。壁面は内側にややなだらかな傾斜をつけて掘り込まれている。また石組は、やや雑な積み方をしている。規模は、長軸251cm・短軸203cm、深さ73cmを測る。検出レベルは標高26.13～26.16m、底面のレベルは標高25.41～25.45mである。

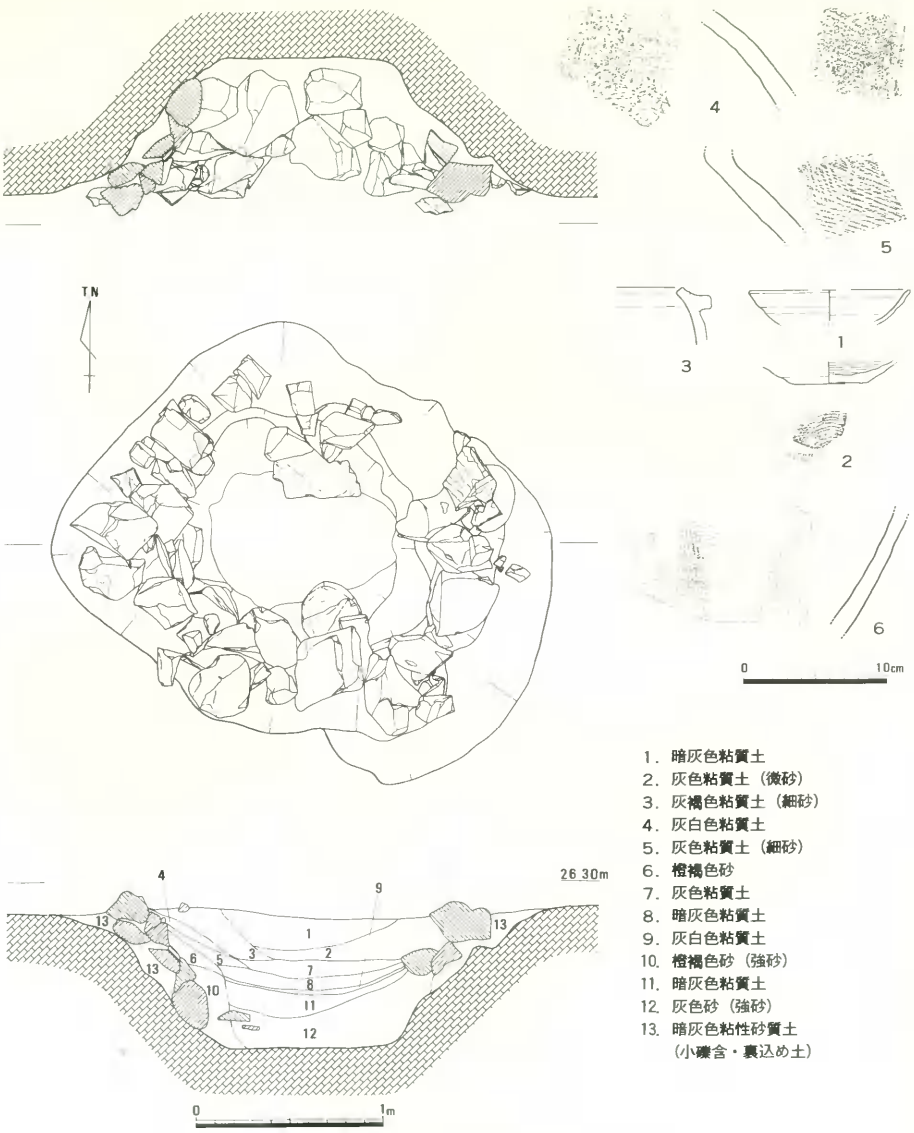
出土遺物のうち、図化できたものは6点である。1は土師器皿の口縁部、2は備前焼椀の底部、3は瓦質土器羽釜口縁部から体部、4・5は須恵器甕の体部、6は備



1. 暗褐色砂質土
(Mn・黄褐色ブロック土含)
2. 淡灰褐色粘性砂質土 (Mn含)
3. 褐灰色粘性砂質土 (Mn含)
4. 淡黄褐色砂質土
(Mn・褐灰色ブロック土含)
5. 灰褐色砂質土
6. 褐灰色粘性砂質土
7. 暗褐色粘性砂質土
8. 淡灰黄色粘性砂質土
9. 淡黄灰色粘性砂質土
10. 淡黄茶色砂質土
11. 淡灰褐色砂質土
12. 灰黄色粘性砂質土



第171図　井戸3平・断面図および出土遺物



第172図　井戸４平・断面図および出土遺物

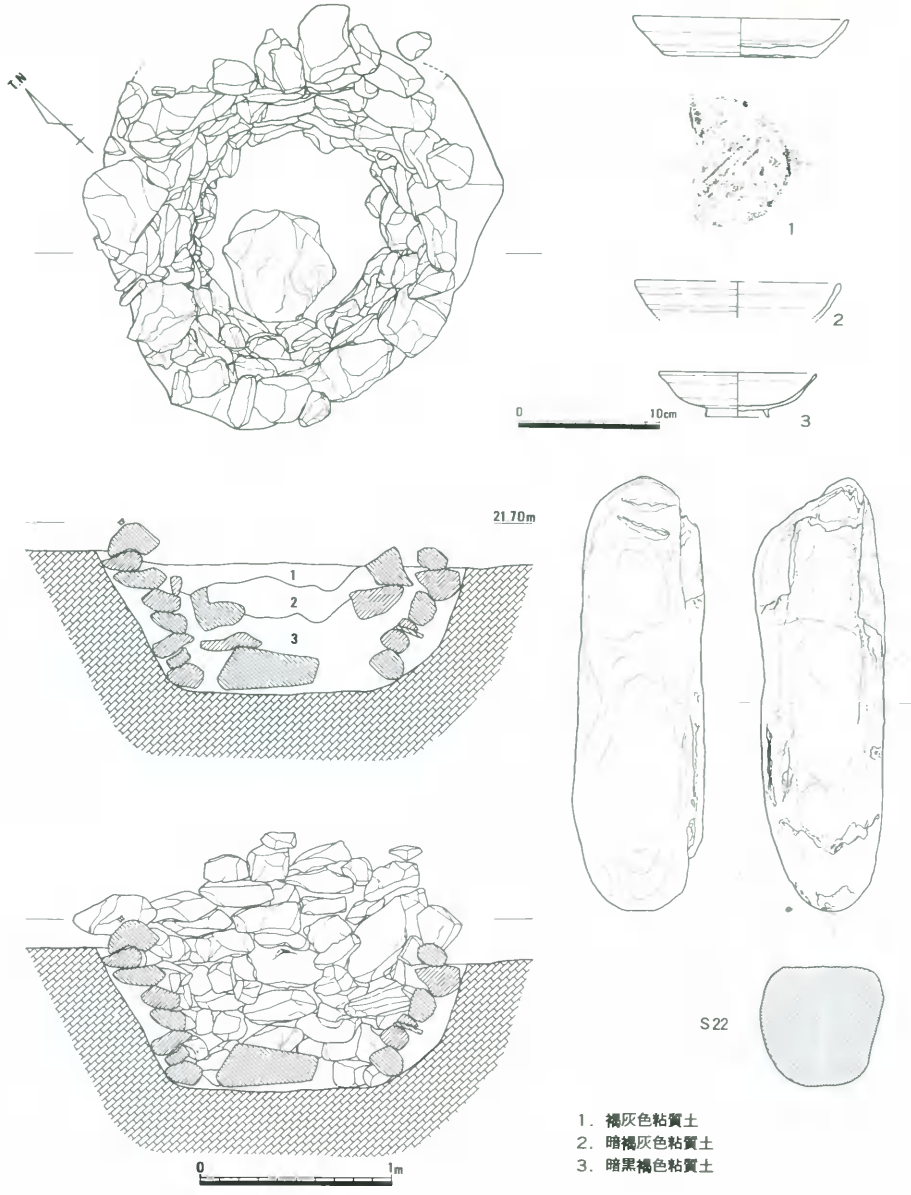
前焼擂鉢体部である。このほか、和泉型の瓦器小片１点も出土している。井戸－４の廃絶時期は、出土遺物の様相から、13世紀と推定される。（横山）

井戸－５（第173図）

Ｃ14区に位置する、石組の井戸である。壁面は、内側にやや緩やかに掘り込まれている。石組は井戸－４より丁寧である。残存部の規模は、長軸222cm・短軸201cm、深さ95cmを測る。底面のレベルは

標高20.79～20.82mである。

遺物は、土師器皿1、備前焼椀2、早島式土器椀3や砥石S22などが出土した。早島式土器椀3は口径11.2cm・器高3.25cmを測り、Ⅲ－3期の様相を示す。砥石S22は1面に使用痕跡が残存している。井戸－5の廃絶時期は、出土遺物の様相から、14世紀初めごろと推定される。　（横山）

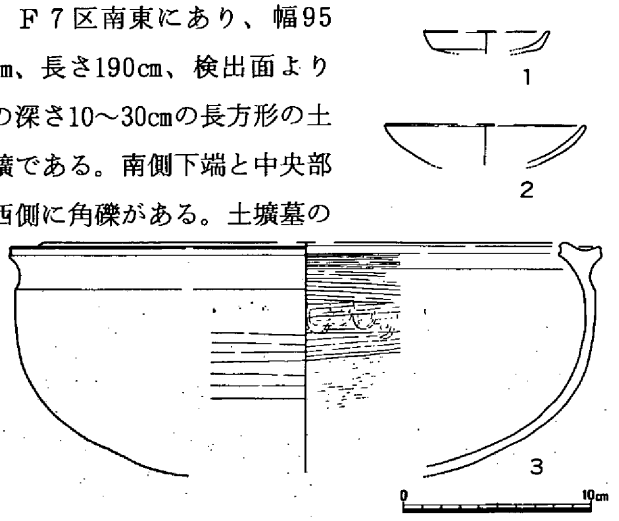


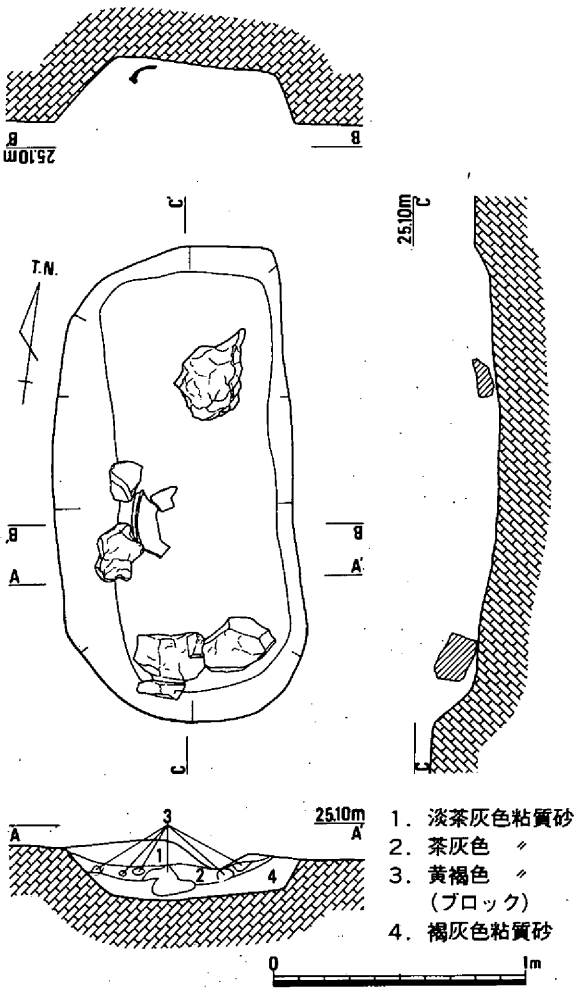
第173図　井戸5平・断面図および出土遺物

(5)　土壙

土壙－17（第174図）

Ｆ７区南東にあり、幅95cm、長さ190cm、検出面よりの深さ10～30cmの長方形の土壙である。南側下端と中央部西側に角礫がある。土壙墓の可能性もある。土壙内から土師器小皿１、椀２、羽釜３が出土している。時期は、鎌倉時代中頃と考えられる。

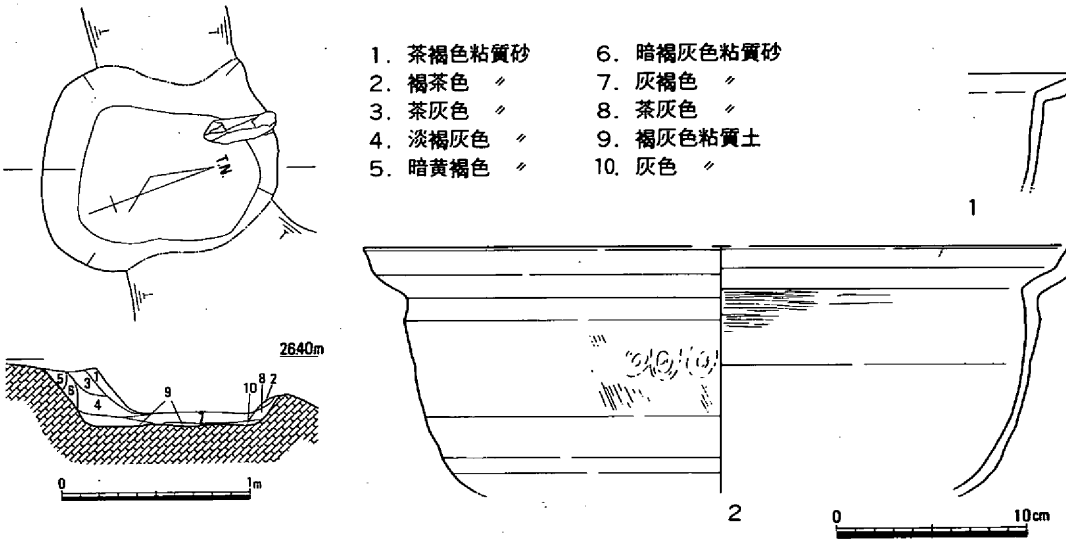




第174図　土壙17平・断面図および出土遺物

土壙－18（第175図）

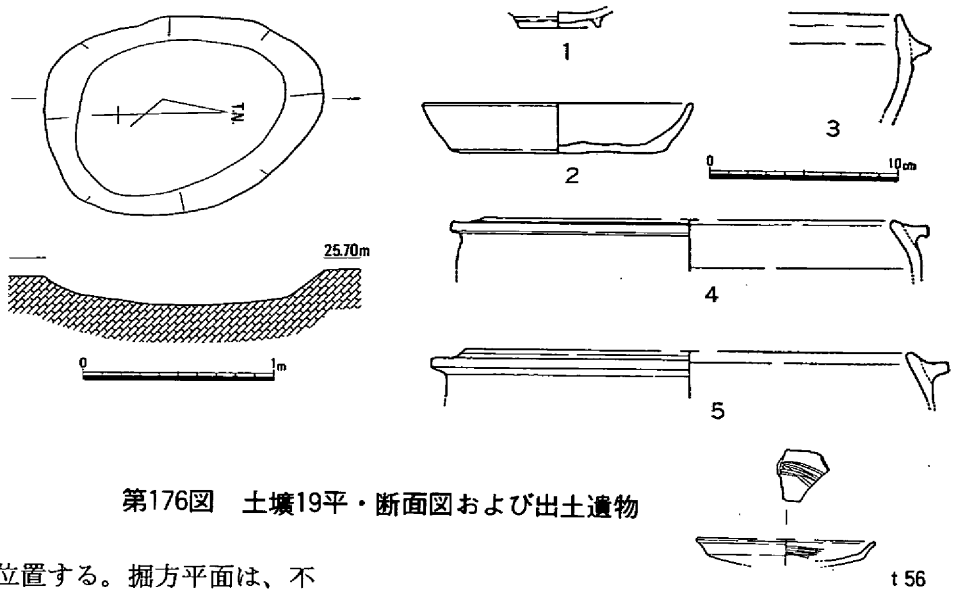
Ｄ５区にあり、溝に切られて不整円形になっているが、直径125cm前後、深さは検出面より20～30cmの土壙である。北端に角礫が１個存し、土壙内から土師質の鍋１・２の２点が出土している。時期は鎌倉時代中頃と考えられる。



第175図　土壙18平・断面図および出土遺物

土壙－19（第176図）

Ｃ６区北東にあり、短軸104cm、長軸150cm、深さ15cmほどが残る楕円形の土壙である。土壙内から土師質椀（早島式土器）１、杯２、羽釜３～５が出土している。時期は鎌倉時代中頃以降と考えられる。　（伊藤）



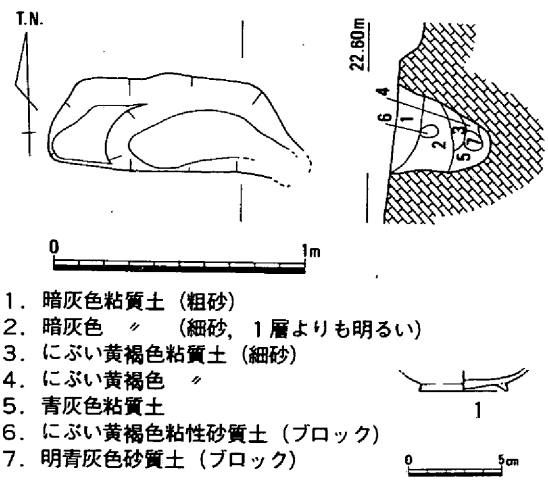
第176図　土壙19平・断面図および出土遺物

土壙－20（第177図）

Ｈ13区からＩ13区に位置する。掘方平面は、不整形な形状を呈している。土壙の規模は、長軸推定102cm、短軸38cmを測る。検出レベルは標高22.48～22.51m、底面のレベルは標高22.11～22.13mである。

遺物は、備前焼椀・早島式土器椀や青磁小皿、などが出土している。図化した遺物１は、早島式土器椀の底部で、高台径は4.7cmを測り、Ⅲ－２期からⅢ－３期の様相を示している。また図化できなかったが、青磁皿は見込み部に段のついたものである。

土壙の時期は、13世紀末から14世紀初めごろと推定される。　（横山）

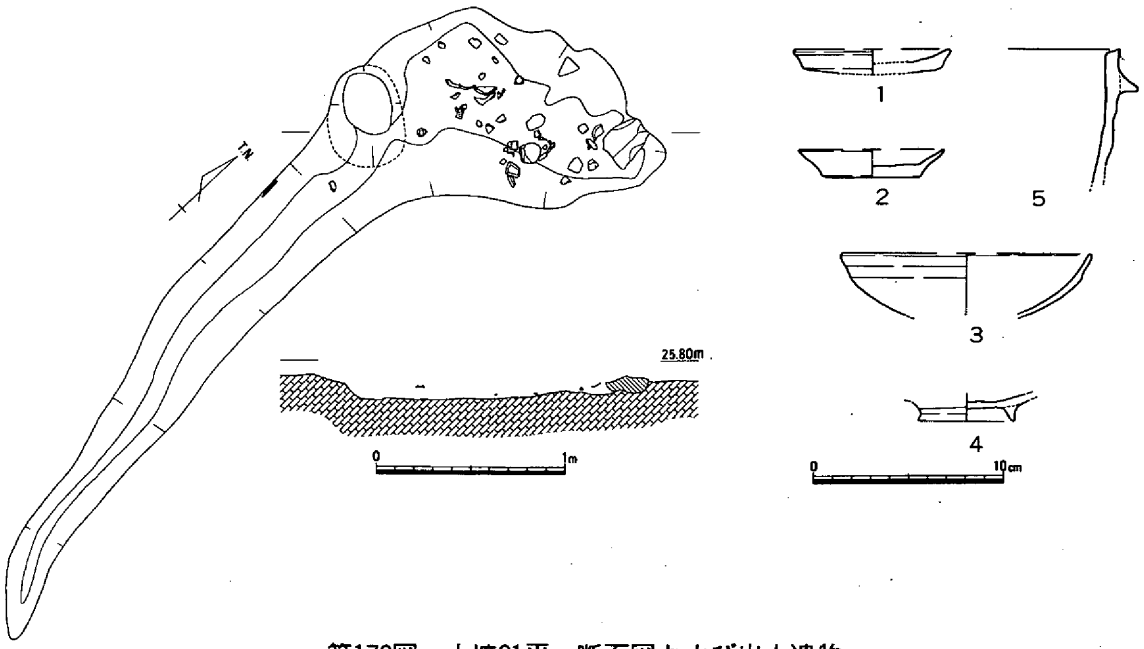


第177図　土壙20平・断面図および出土遺物

土壙－21（第178図）

Ｄ８区に位置し、建物－19の北から西にとりまく状態で検出された。幅20～120cm、長さ4.5m、深さ数cm～20cmで、いびつな形状を呈した土壙状の遺構である。土壙の北側から西にかけての部分から土師質小皿１・２、早島式土器３・４、羽釜５、羽釜あるいは甑になると思われるもの６が出土している。

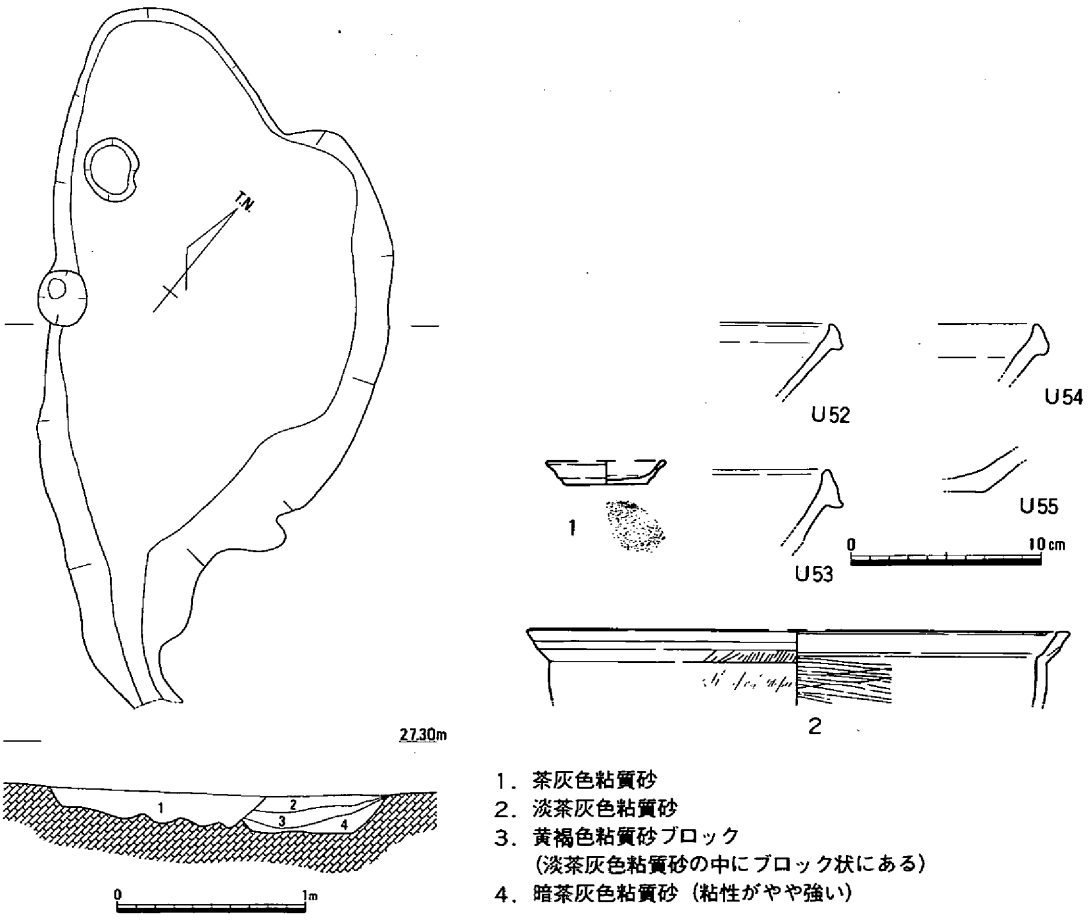
建物－19に伴う溝状遺構の可能性もある。時期は鎌倉時代後半と考えられる。　（伊藤）



第178図　土壙21平・断面図および出土遺物

土壙―22（第179図）

Ｂ４区中央に位置し、短軸170cm、長軸370cmの歪な形をしている。検出面からの深さは10～20cmである。土壙内からの土師質小皿１、鍋２、東播系摺鉢ｕ52～55などが出土している。時代は鎌倉時代中頃と考えられる。



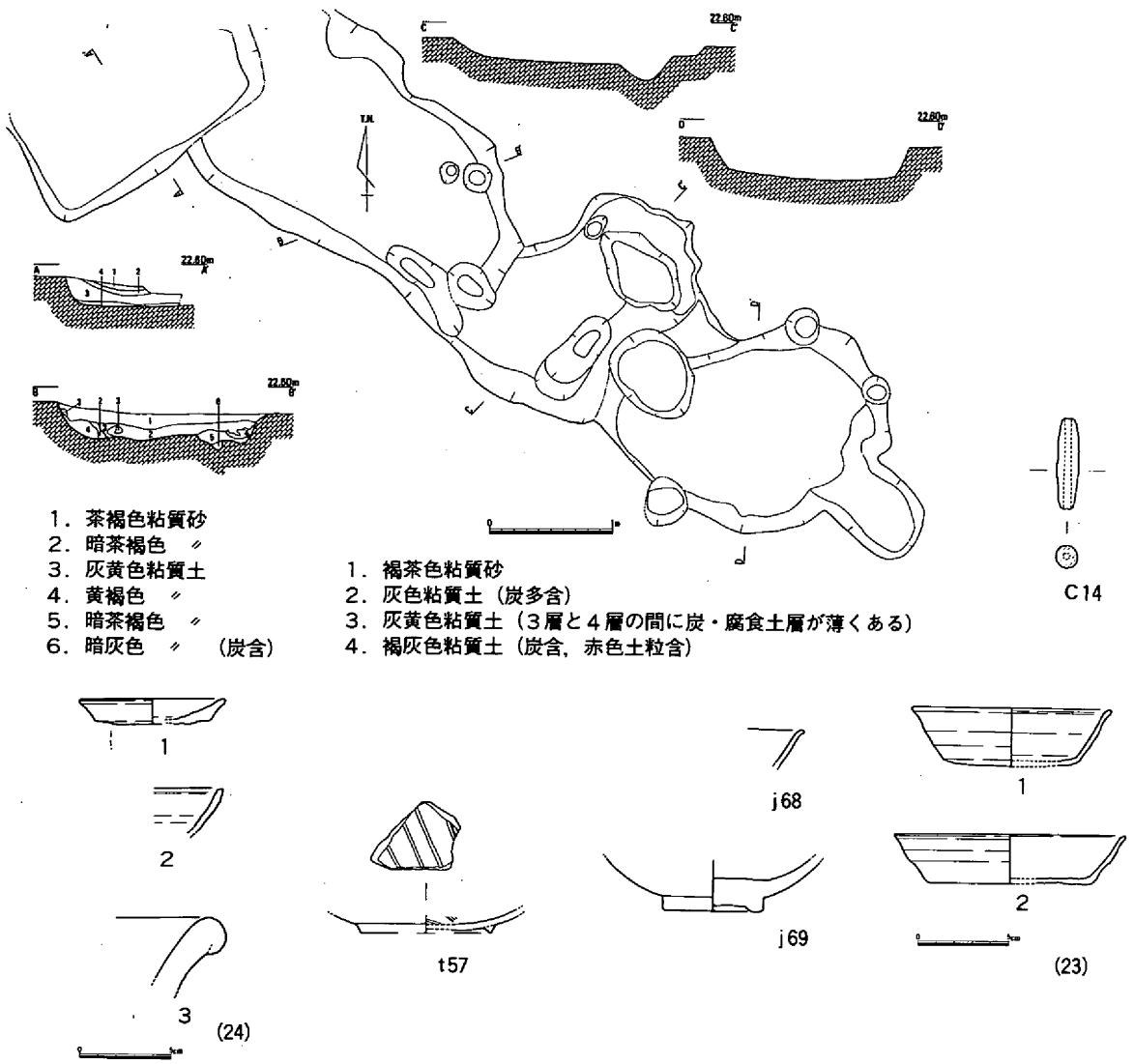
第179図　土壙22平・断面図および出土遺物

土壙－23（第180図）

Ⅰ14区に位置する。土壙－24と接しながらさらに３～４の土壙、ピットが多く切り合っている。土壙内から須恵器杯、土師器杯、土錘などが出土しているが、時期ははっきりしない。

土壙－24（第180図）

南河道南側のH13区からⅠ14区に位置する。北西側が不明であるが、長軸220cm、深さ20cmの長方形を呈す土壙と考えられる。検出面の標高22.5m、底面は22.3mである。土壙内から備前焼椀、甕、瓦器、青磁椀、白磁などが出土している。時期は鎌倉時代後半と考えられる。（伊藤）



第180図　土壙23・24平・断面図および出土遺物

(6)　ピット

ピット－21（第181図）

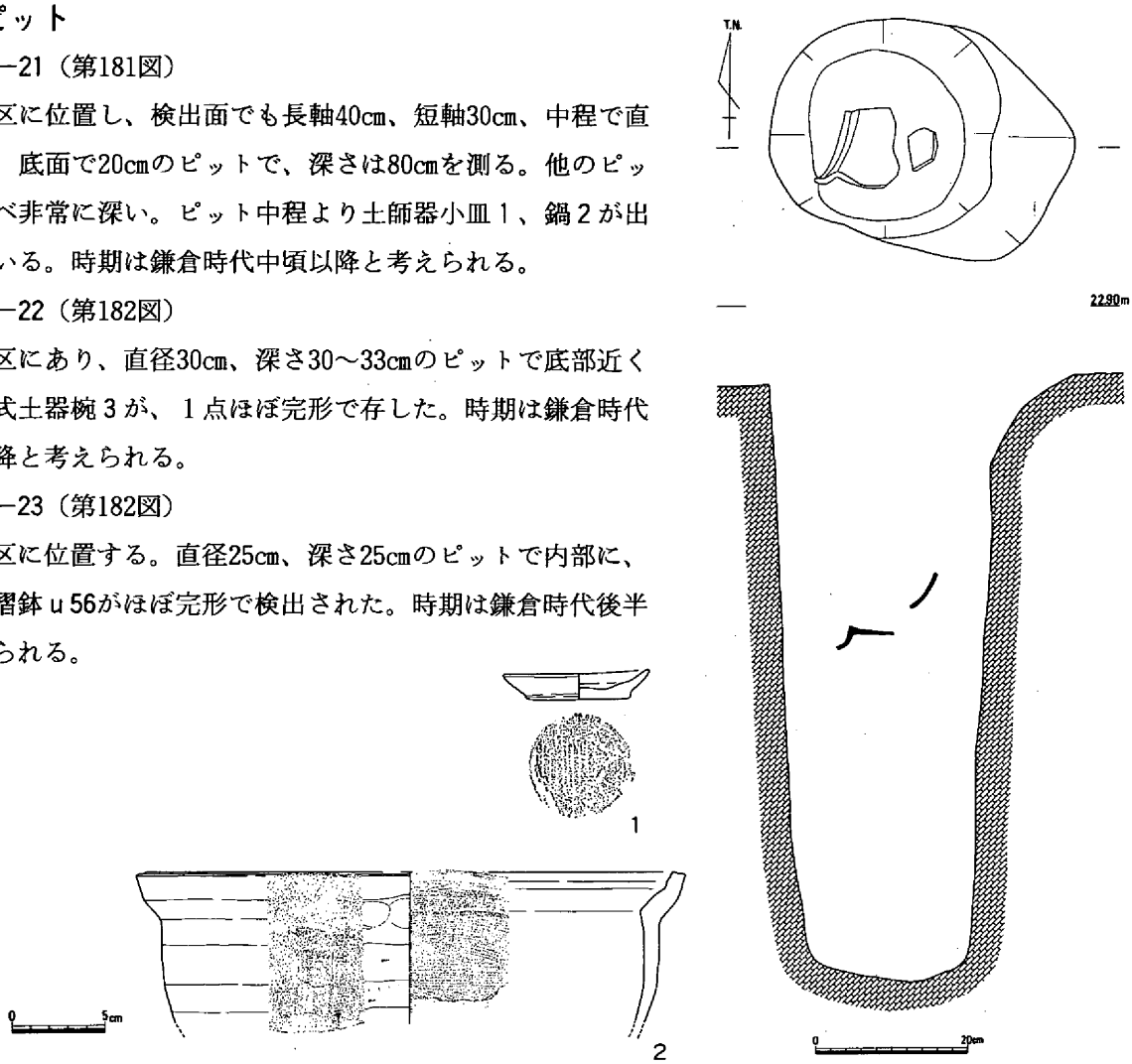
Ｆ12区に位置し、検出面でも長軸40cm、短軸30cm、中程で直径26cm、底面で20cmのピットで、深さは80cmを測る。他のピットに比べ非常に深い。ピット中程より土師器小皿１、鍋２が出土している。時期は鎌倉時代中頃以降と考えられる。

ピット－22（第182図）

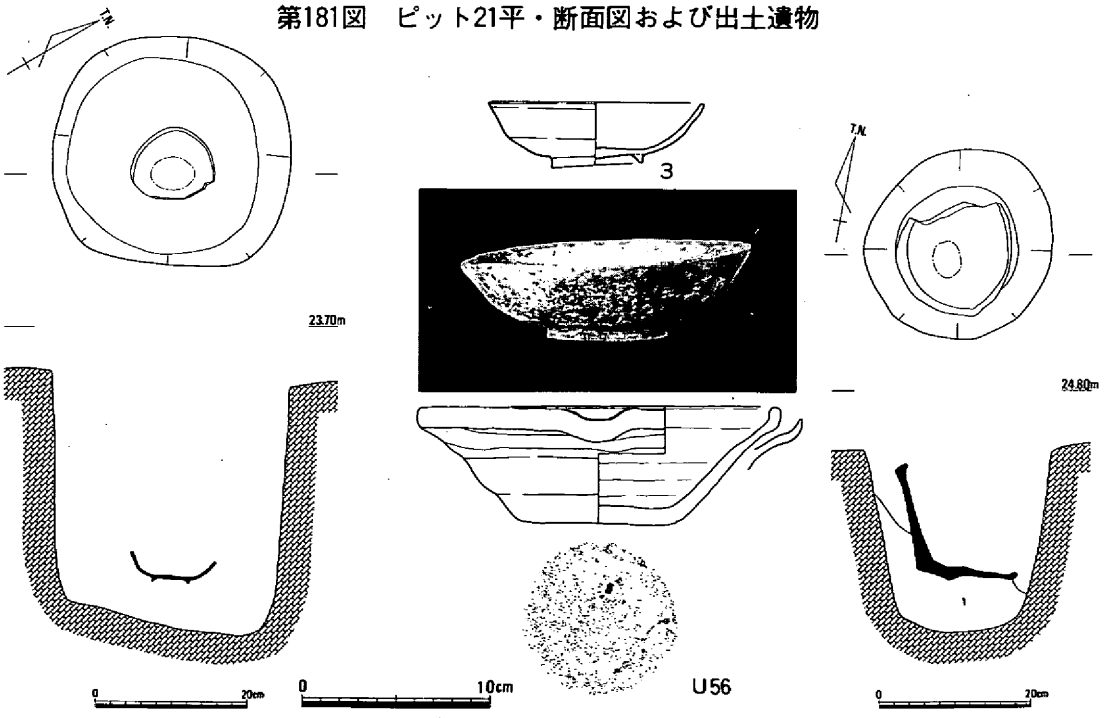
Ｆ10区にあり、直径30cm、深さ30～33cmのピットで底部近くに早島式土器椀３が、１点ほぼ完形で存した。時期は鎌倉時代中頃以降と考えられる。

ピット－23（第182図）

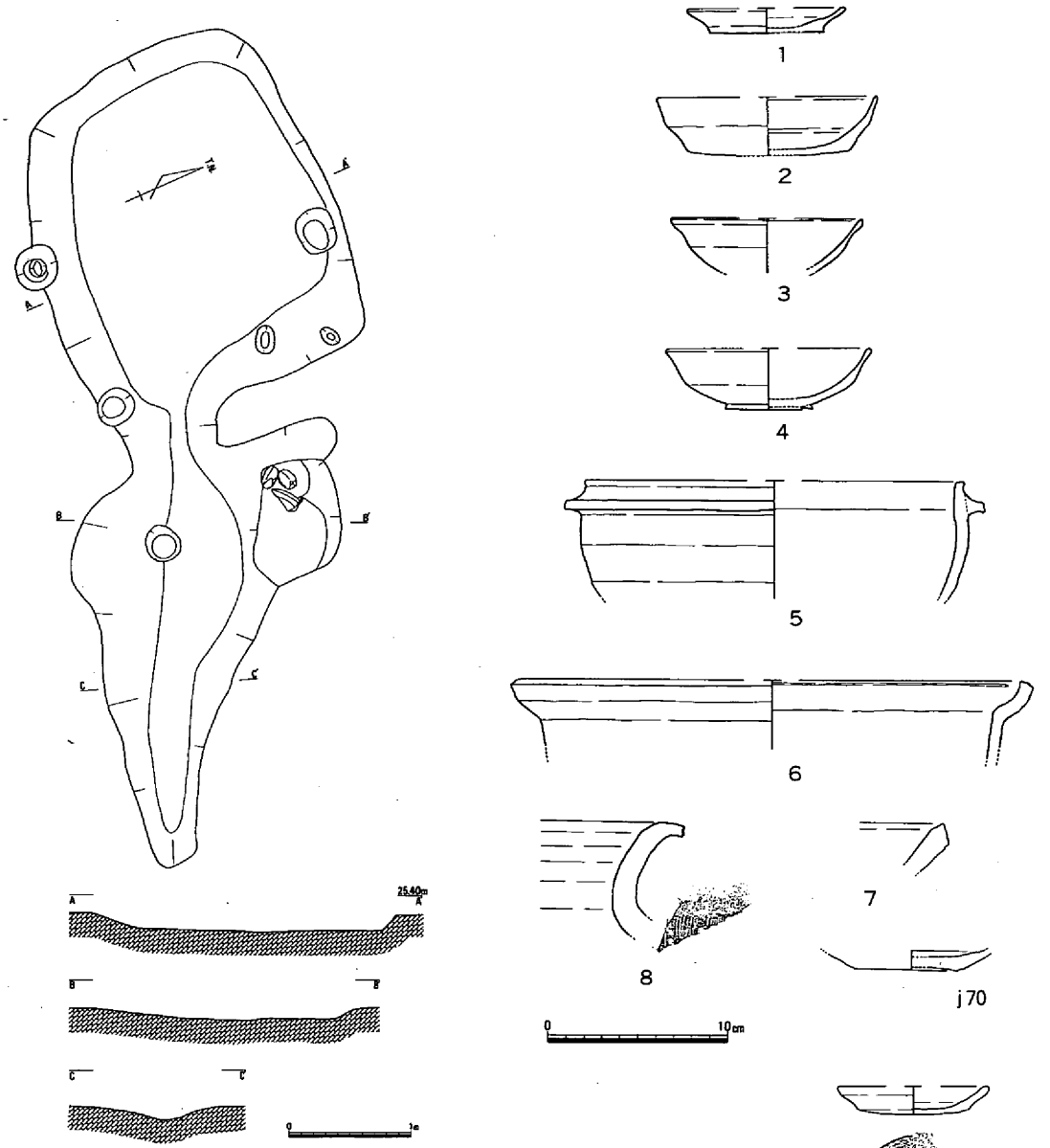
Ｇ７区に位置する。直径25cm、深さ25cmのピットで内部に、東播系摺鉢ｕ56がほぼ完形で検出された。時期は鎌倉時代後半と考えられる。



第181図　ピット21平・断面図および出土遺物



第182図　ピット22・23平・断面図および出土遺物



第183図　たわみ３平・断面図および出土遺物

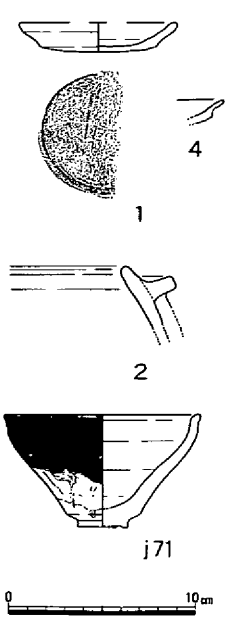
(7)　たわみ

たわみ－３（第183図）

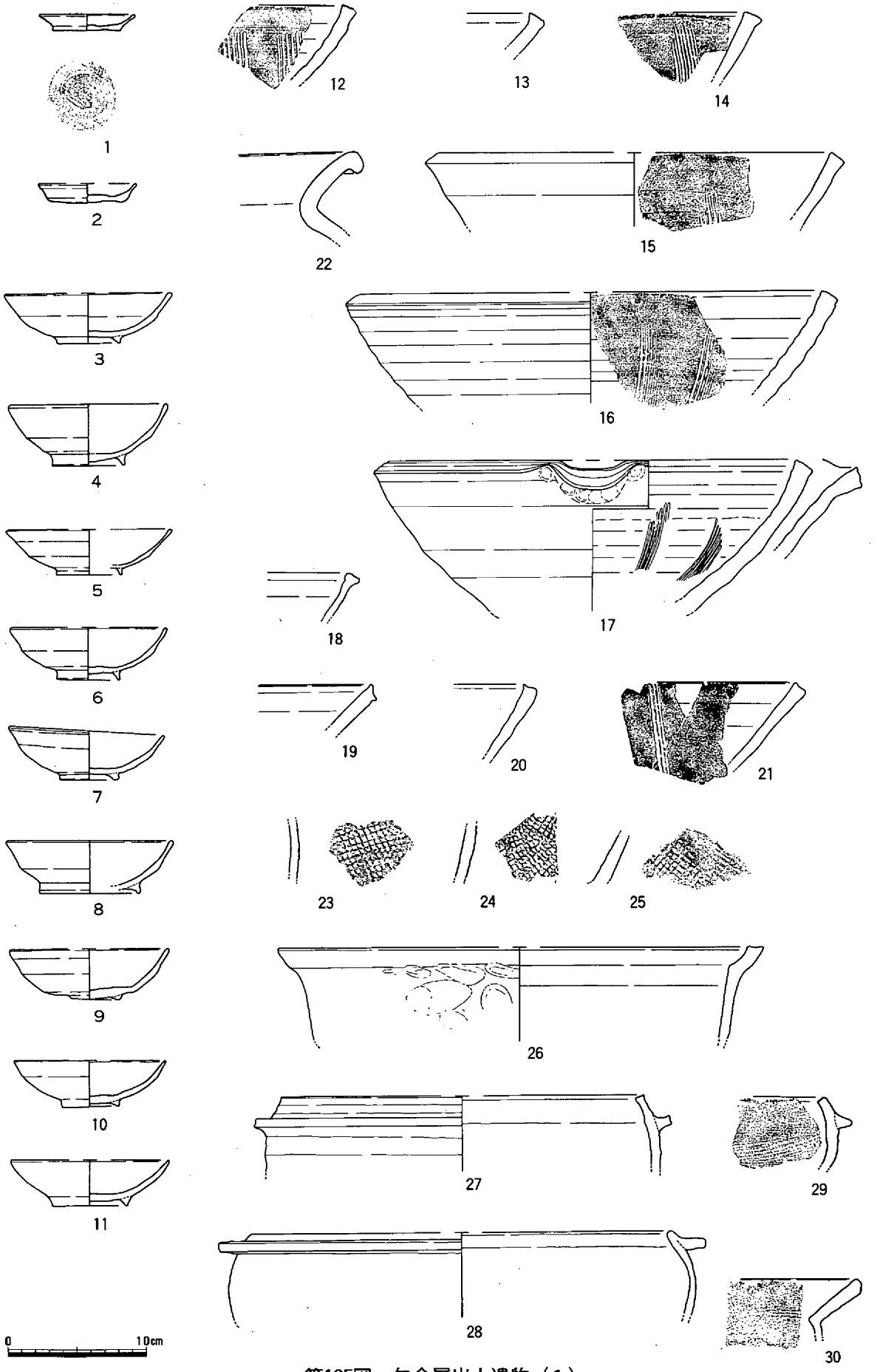
Ｄ７区建物－19の東側部分に位置し、土壙－20と一連のものになる可能性もある。東西幅３ｍ、南北幅２ｍの略長方形になる。深さは、検出面から12cmほど浅い。出土遺物は、土師器小皿１、杯２、早島式土器椀３・４、羽釜５、鍋６、備前焼摺鉢７、甕９、白磁皿ｊ70などが出土している。時期は、建物－19と同じく鎌倉時代前半と考えられる。たわみ－３からの出土遺物はない。

たわみ－４（第184図）

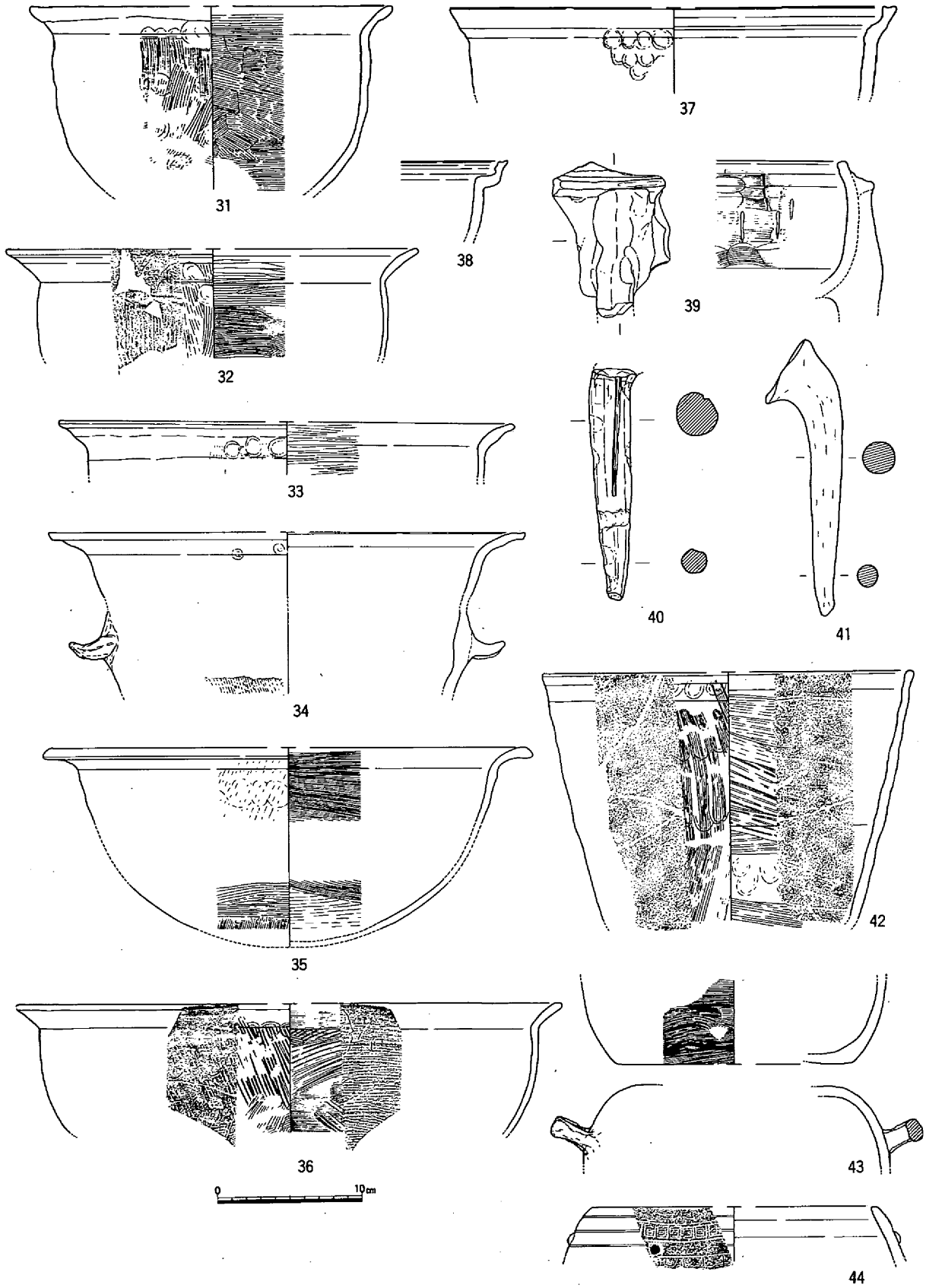
Ｆ13区建物－50の全体に拡がる浅いたわみ状の遺構である。土師器小皿１、羽釜２、天目茶碗ｊ71、瓦器小皿４などが出土している。天目茶碗は建窯産と考えられる。



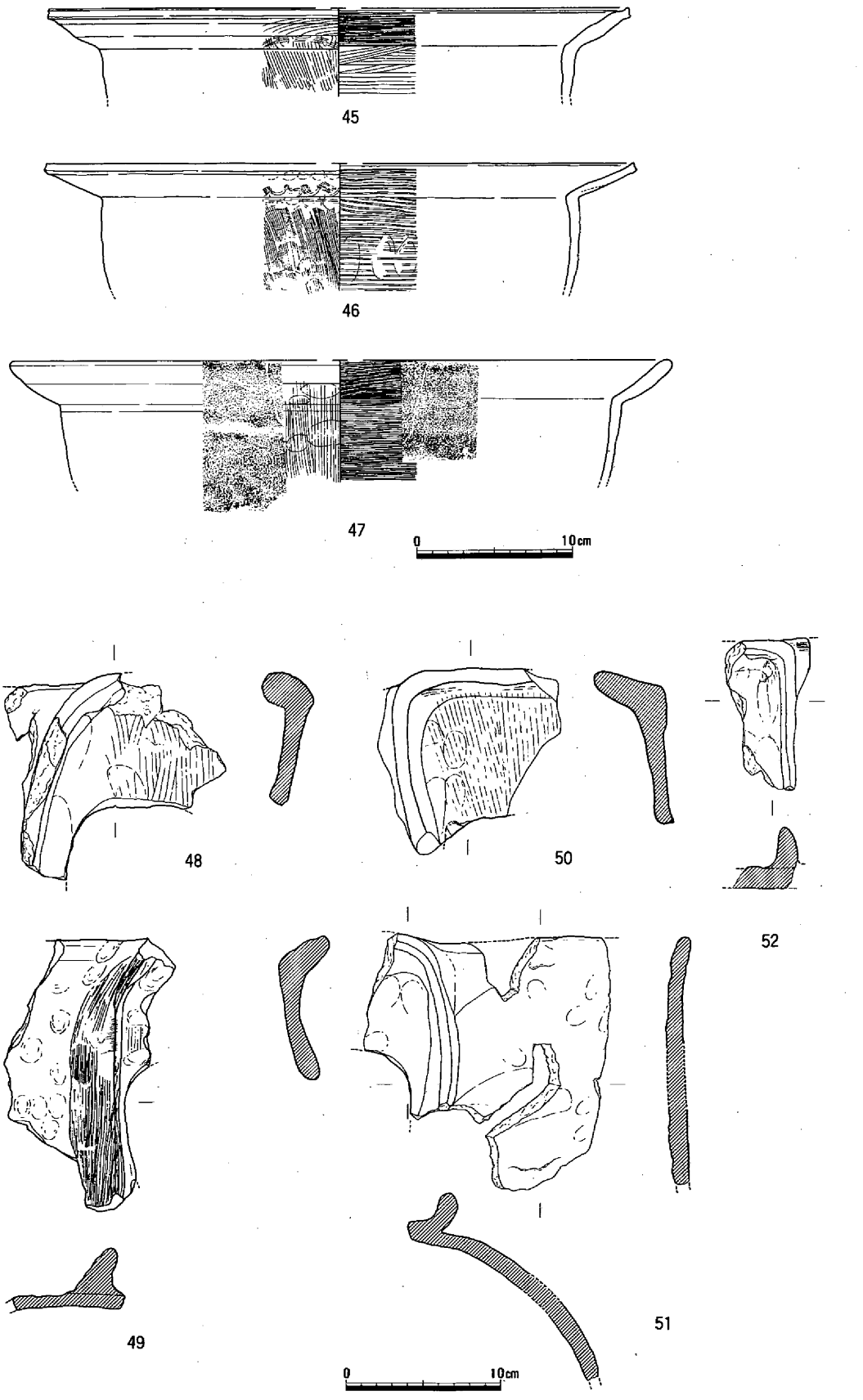
第184図　たわみ４出土遺物



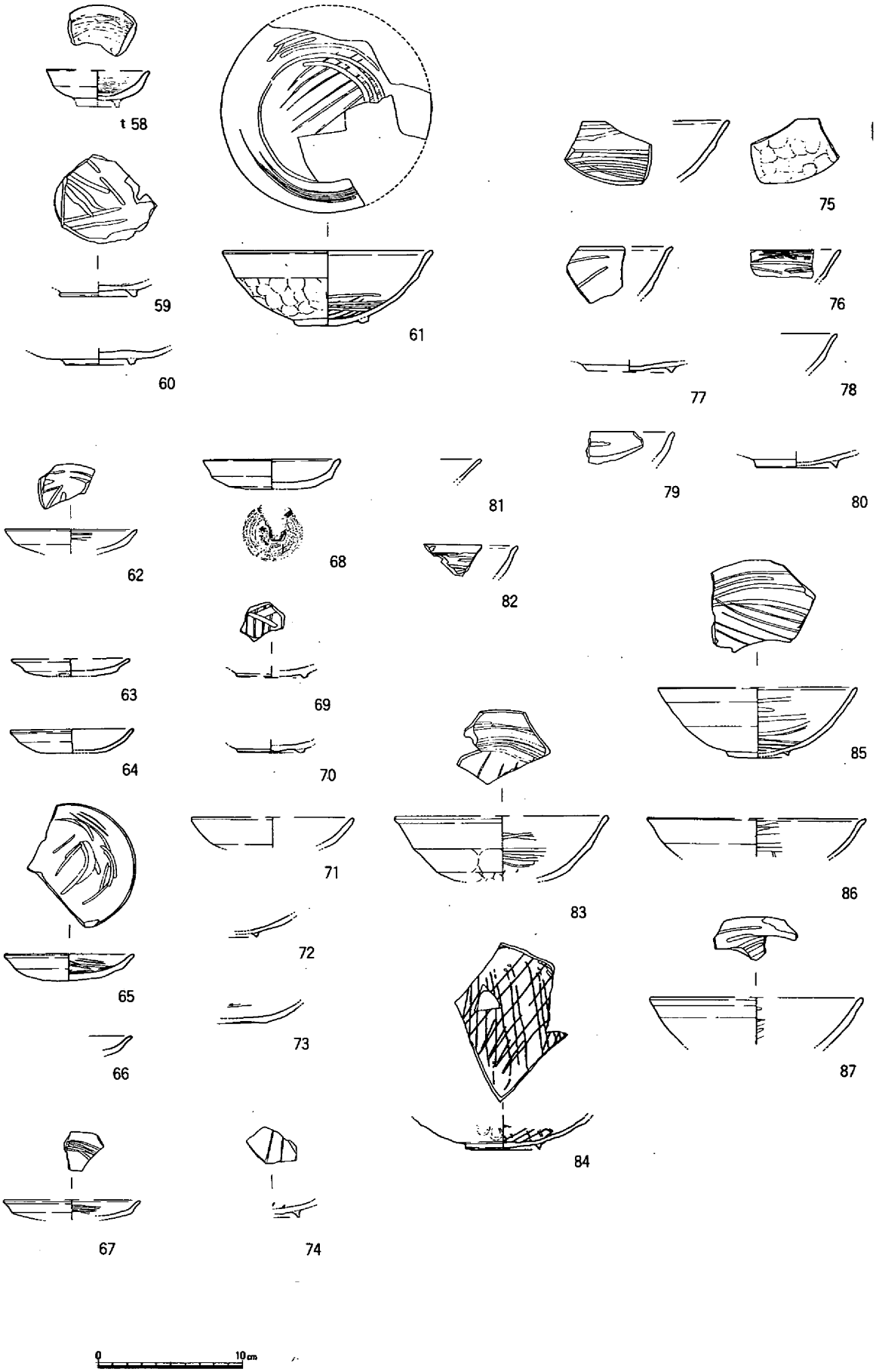
第185図　包含層出土遺物（1）



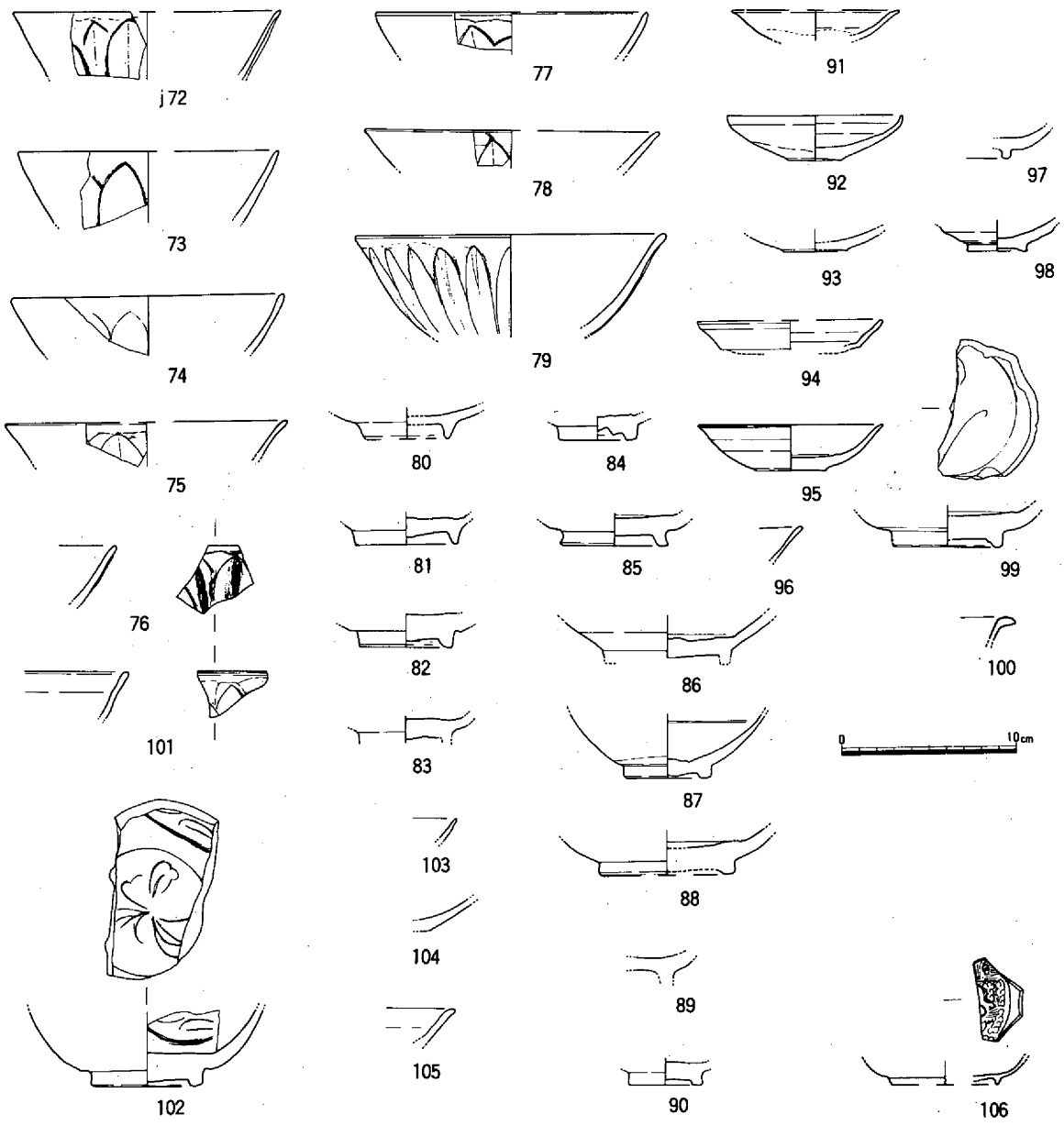
第186図　包含層出土遺物（2）



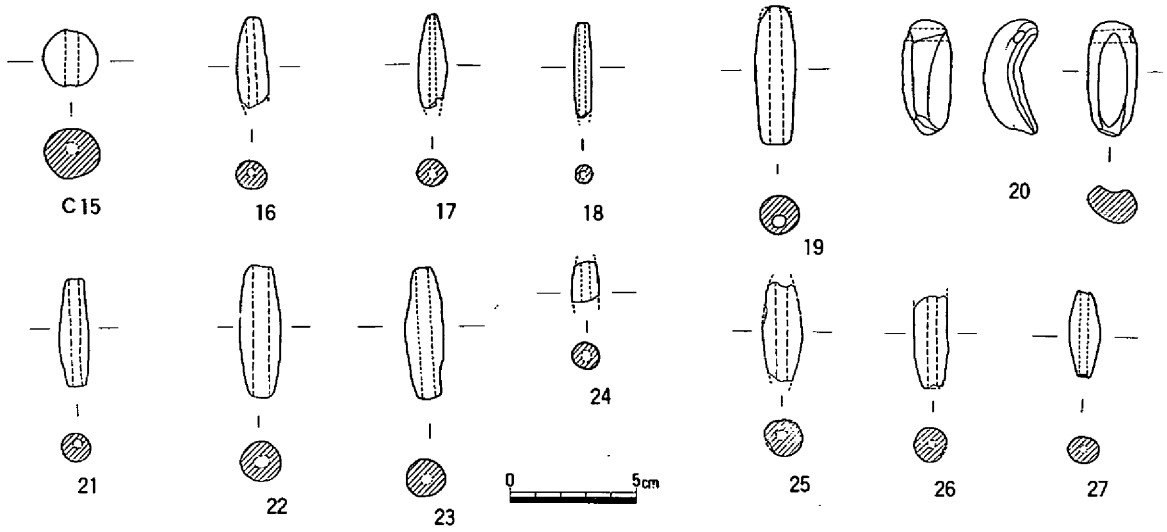
第187図　包含層出土遺物（3）



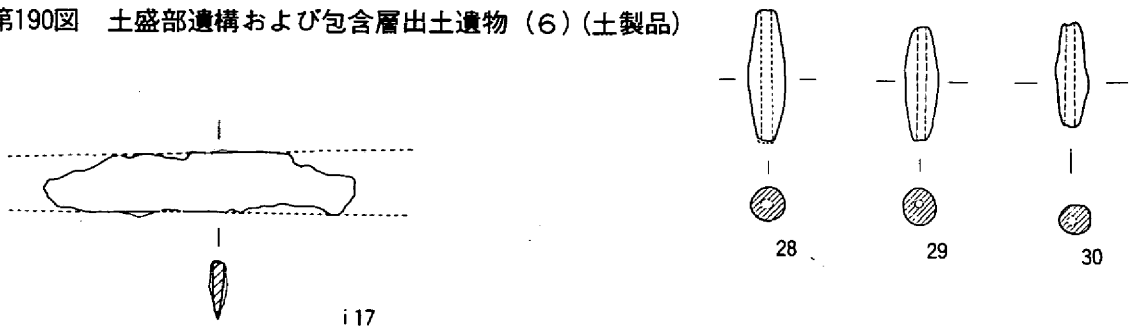
第188図　包含層出土遺物（4）（瓦器）

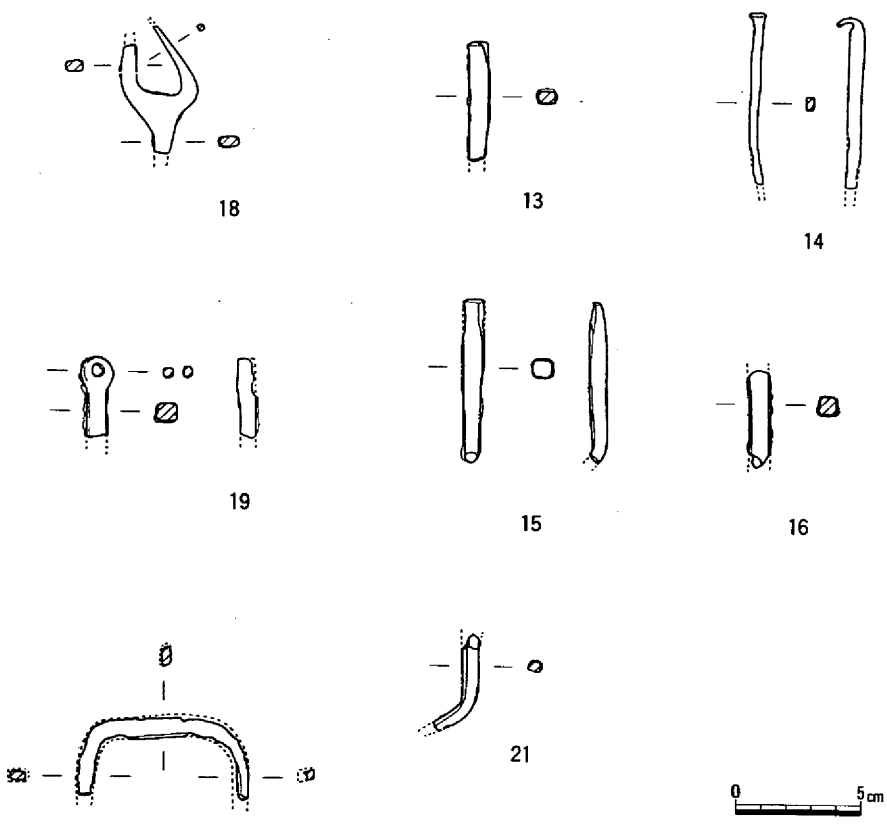


第189図　包含層出土遺物（５）（輸入磁器）

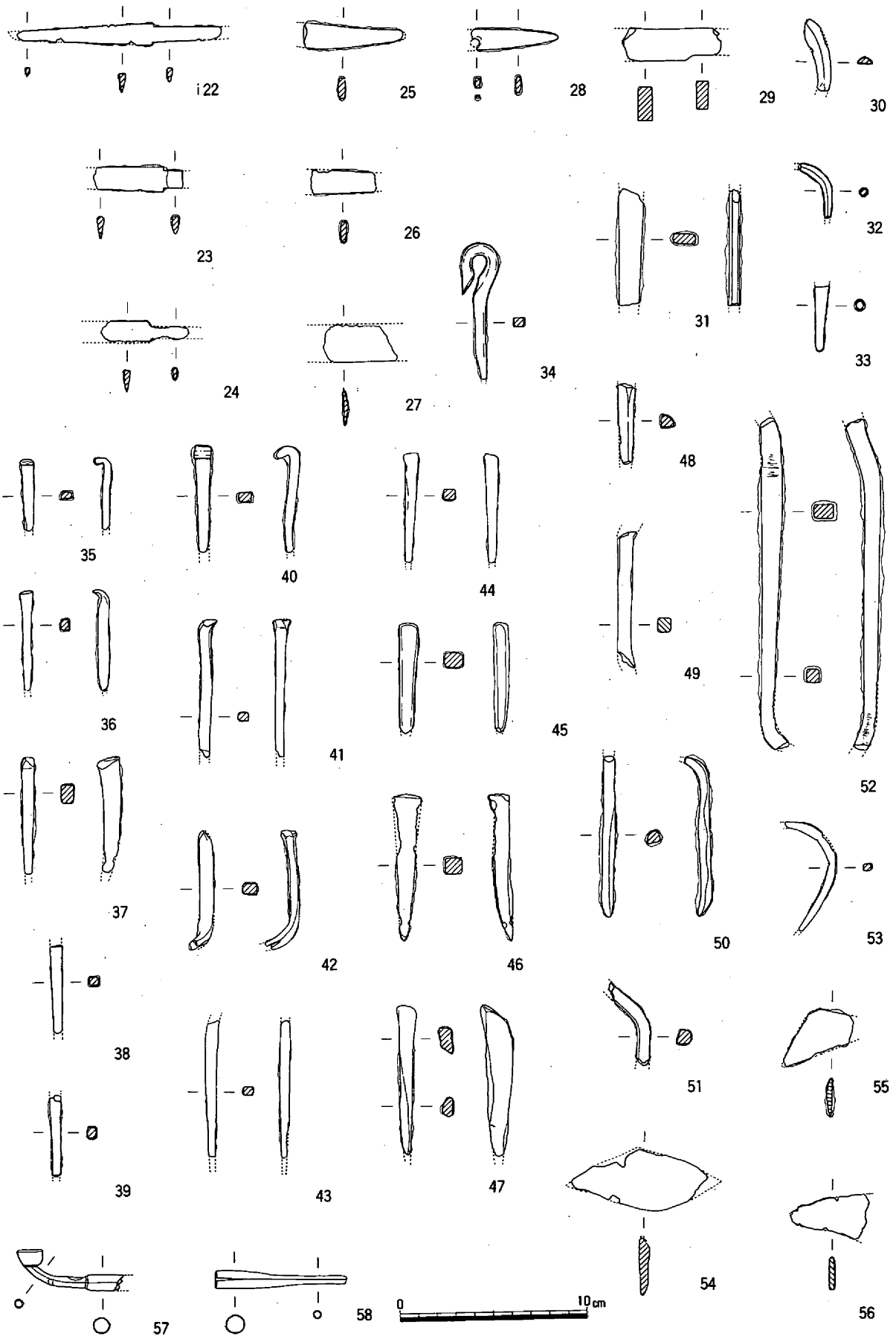


第190図　土盛部遺構および包含層出土遺物（6）(土製品)

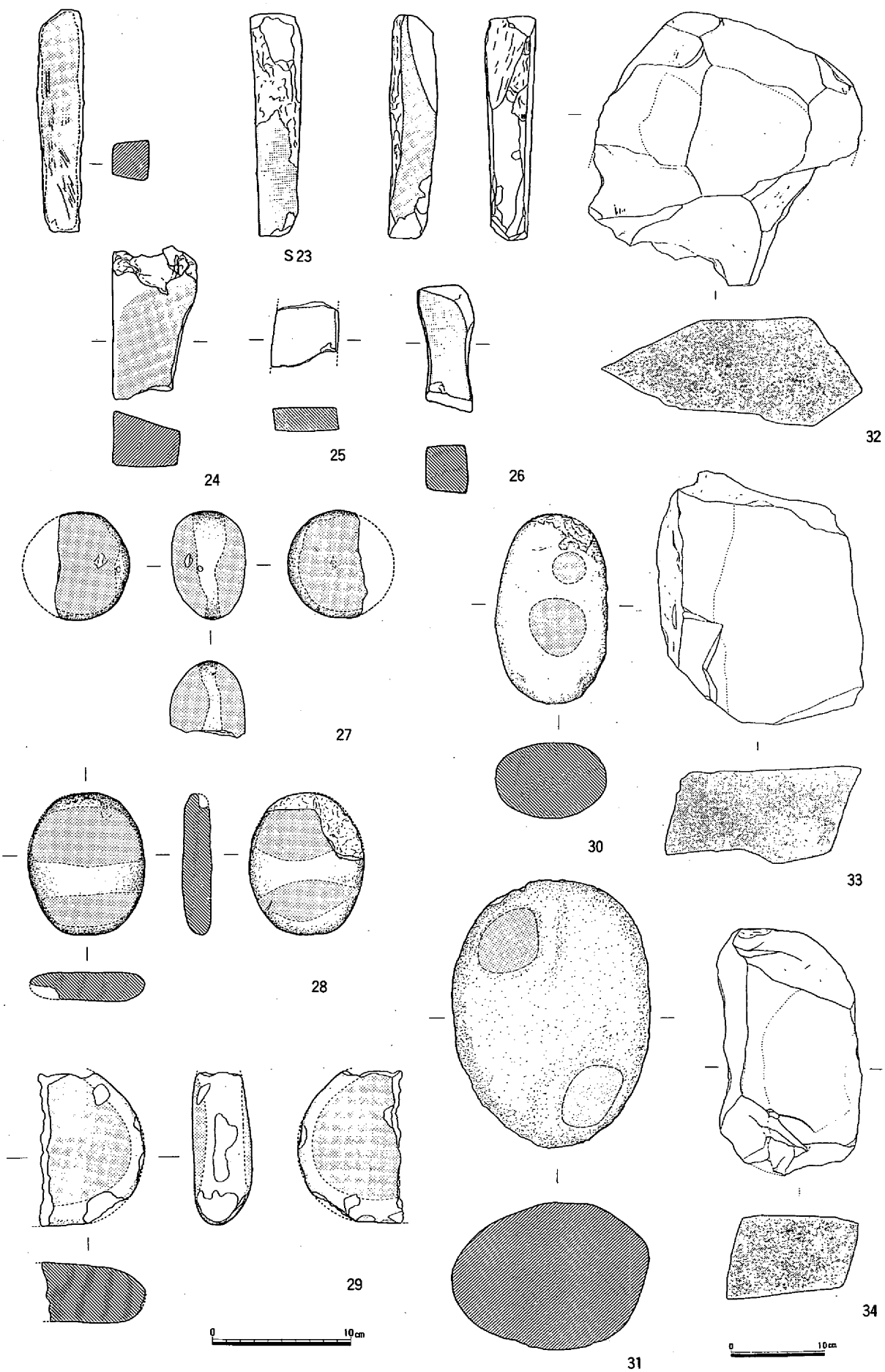




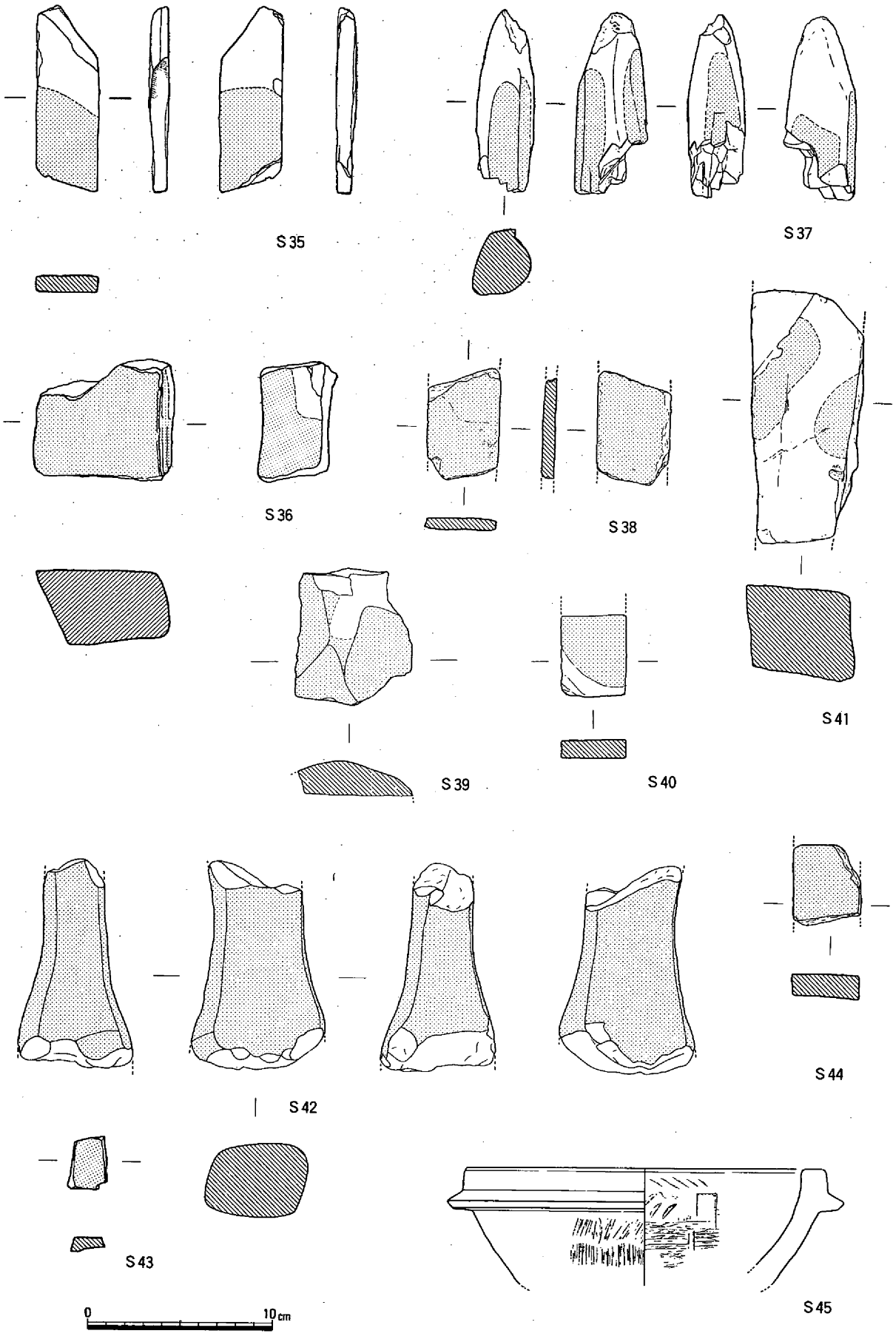
第191図　遺構出土鉄器



第192図　包含層出土鉄器



第193図　遺構出土石製品（左３点は1/6，他は1/4）



第194図　包含層出土石製品（1/3）

3．橋脚部の調査

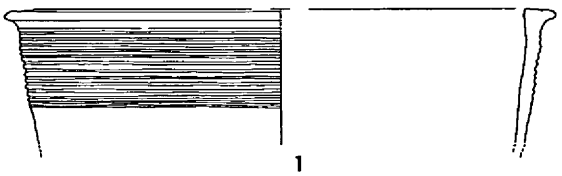
1）奈良時代より以前の遺構・遺物

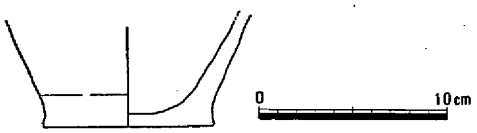
(1)　たわみ

たわみ－1（第195図）

橋脚－2南西部で検出した。上面を溝－2によって削平を受けた土壙状の不正円形のたわみである。

内部から弥生時代前期後半の甕の口縁部から底部にかけてのほぼ一ヶ体分がみられた。口径約126m、口縁直下に11～12条の櫛描沈線が施されている。底部は径9.2cmを測る。　（伊藤）





2）奈良時代の遺構・遺物

(1)　溝

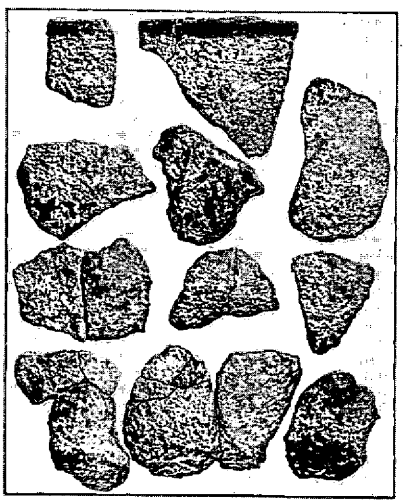
溝－1（第196図）

橋脚－1～2北側道に位置する。蛇行する溝で、上部は後世に削平を受けている。検出できた溝は、全長15mほどである。溝北側での標高は20.2m、溝底部で19.3mを測る。

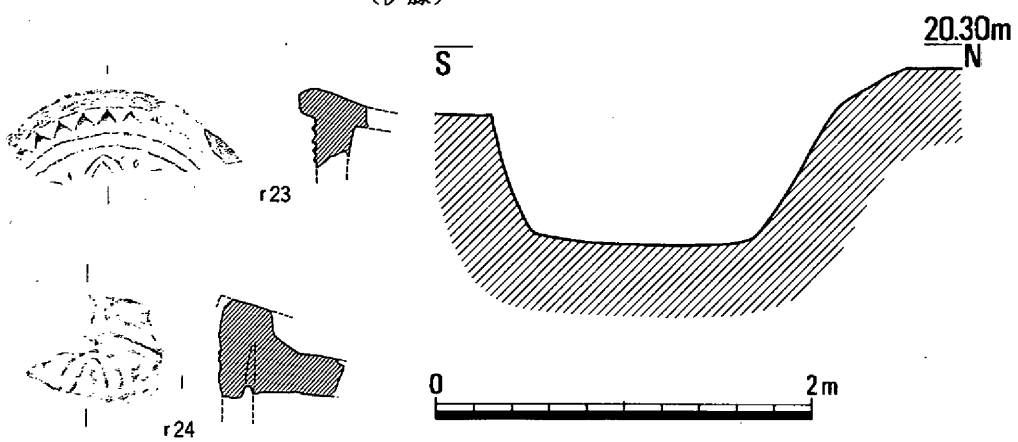
溝内の堆積土は小砂がほとんどの砂層である。溝内から、軒丸瓦がr23出土している。この瓦は、外区外縁に鋸歯文、二重圏線を持つ。内区は線で表現する花弁で、これまで出土している備前国分僧寺跡出土のものとよく似たものと考えられ、鋸歯文を持つ例は新出である。

その他にも、平瓦、丸瓦片が多く出土している。

（伊藤）



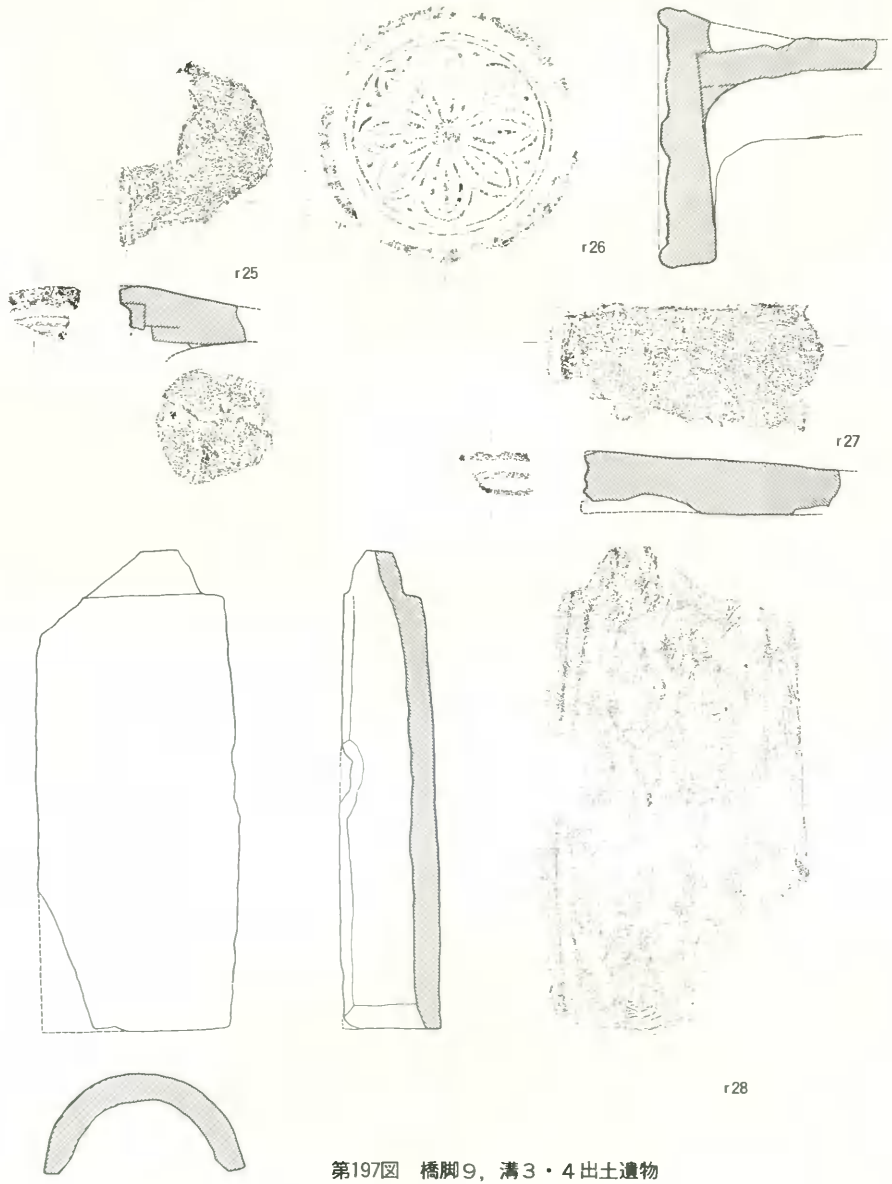
第195図　たわみ1出土遺物



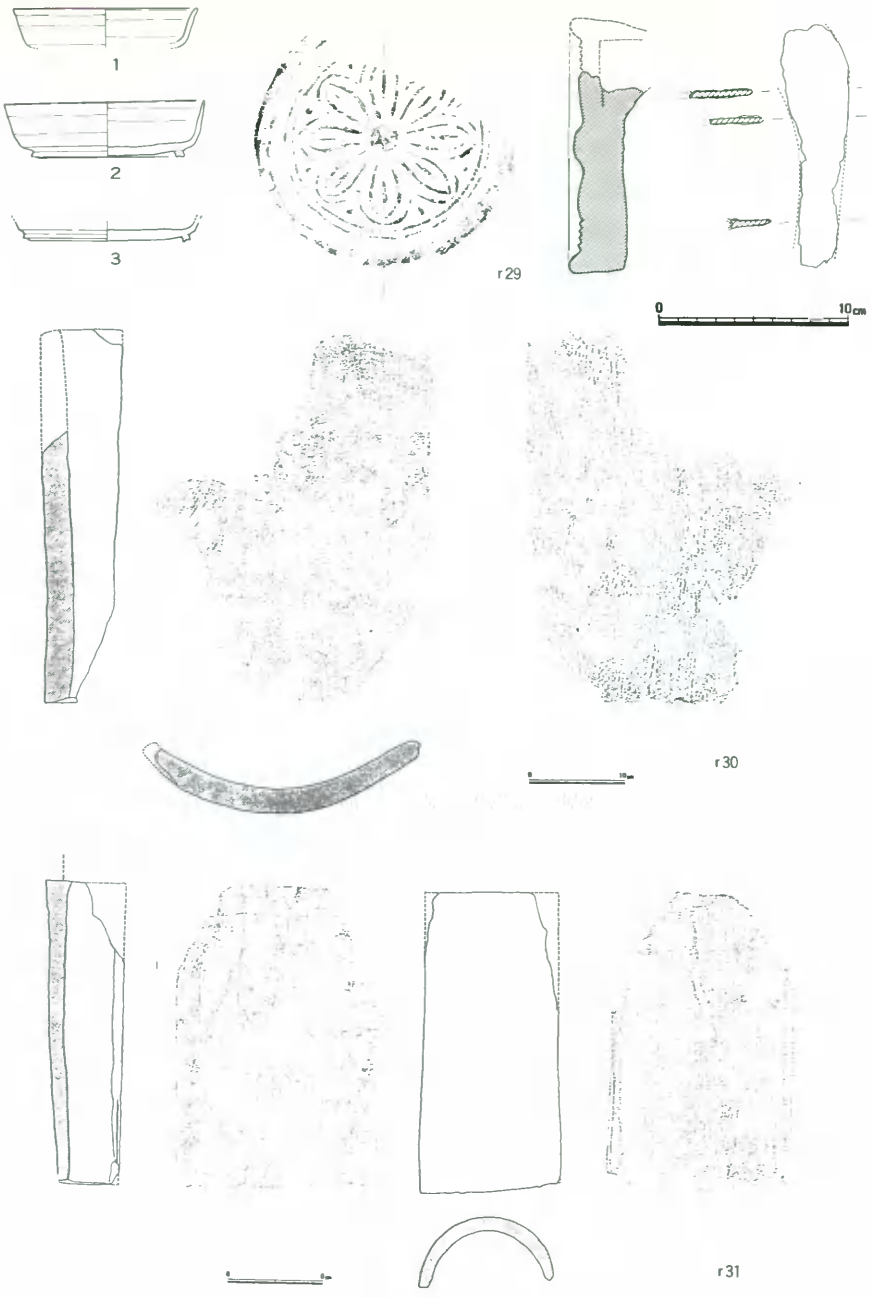
第196図　溝1断面図および溝1・2出土遺物

溝－３・４（第197図）

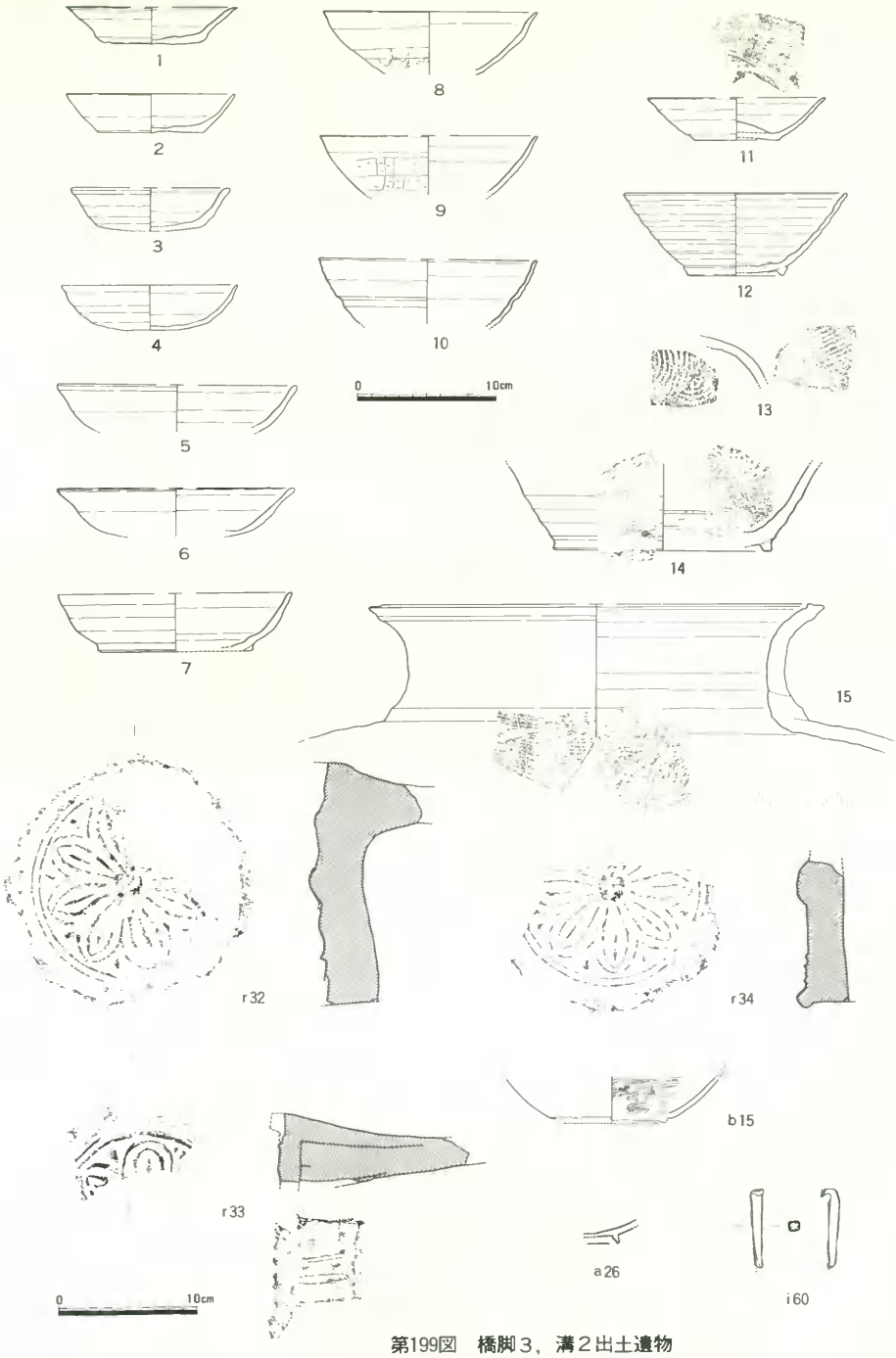
橋脚－９で現農道に並行する形で２条の溝が検出されたが、上層が後述の溝－８で、その下層から検出された溝である。遺物はほとんどが、奈良時代後半の備前国分僧寺に伴うものと考えられる。軒丸瓦Ⅰ式ｒ25・26と、三重弧文になる軒平瓦ｒ27１点などが出土している。



第197図　橋脚９，溝３・４出土遺物



第198図　橋脚２～３北側道，たわみ２出土遺物



第199図　橋脚3，溝2出土遺物

(2)　たわみ

たわみ－2（第198図）

橋脚－2～3北側道に位置し、南側の約2分の1を検出した。東西幅7m、深さ30～40cmほどで、堆積土は粗砂である。溝内からは奈良時代後半の須恵器杯身1～3の3点、備前国分僧寺軒丸瓦Ⅰ式のr29、平瓦r30、丸瓦r31などが多数出土している。

3）平安時代から鎌倉時代の遺構・遺物

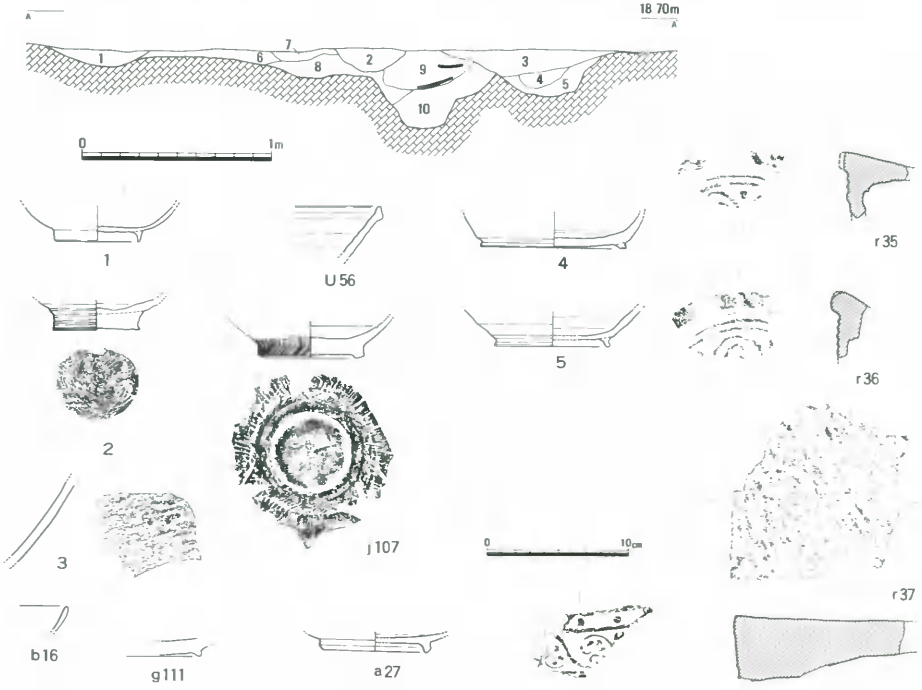
(1)　溝

溝－2

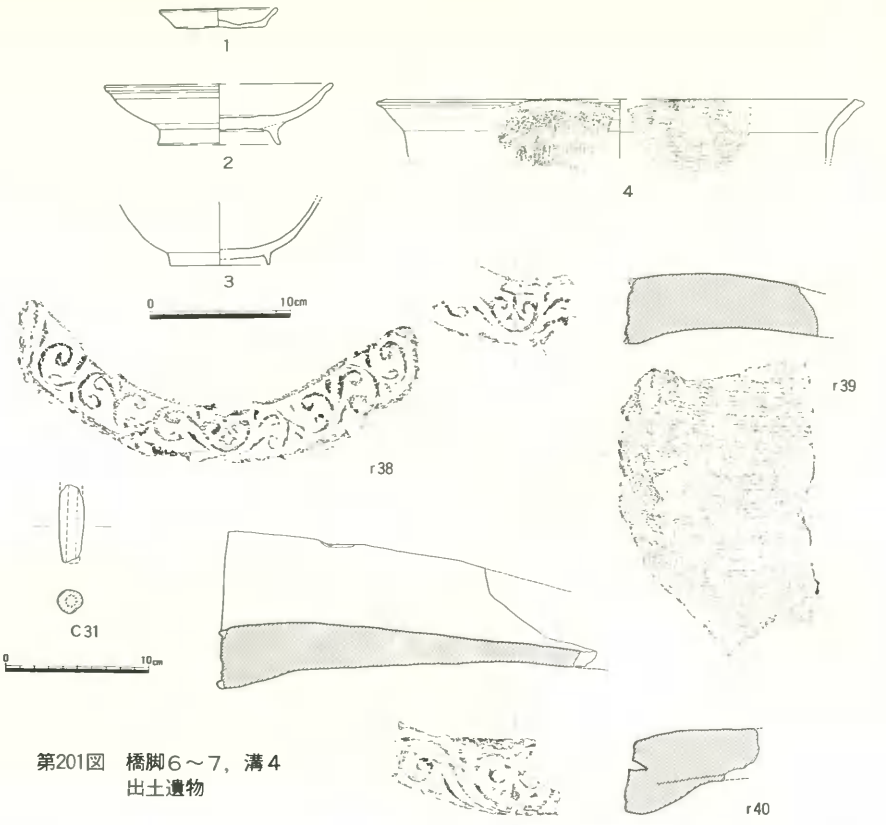
橋脚－3中央に位置し、北西から東南方向の溝で、幅1.2～3.0m、深さは15～30cmである。溝内からは土師器Ⅲ1～4、杯5～7、椀（早島式土器）8～10、須恵器杯11、椀12、壺13・14、甕15、黒色土器b15、備前国分僧寺軒丸瓦Ⅰ式r32～34、鉄釘（鎹？）i60などが出土している。時期は平安時代後半から鎌倉時代初めにかけてのものと考えられる。

溝－3（第200図）

橋脚－8～9の北側道に位置し、3～4条の溝が重複している。全体での幅は3m程ある。北側の1条は幅50cm、深さ10cm、南側のものは幅1m、深さ26cmを測る。両者とも中央の溝を切って作られている。検出面での標高18.52m、北側の溝底部18.4m、中央が18.1m、両側で18.3mを測る。出土遺物は各溝ごとに取り上げられていないが、奈良時代の須恵器4、備前国分僧寺Ⅱ式の軒平瓦r37 1点



第200図　橋脚８～９北側道，溝５断面図および出土遺物



第201図　橋脚6～7，溝4
出土遺物

と軒丸瓦Ⅰ式の破片が2点r35・36、平安時代の土師器椀1・2、須恵器杯身5、緑釉陶器片、東播系こね鉢u56、白磁椀j107などが出土している。

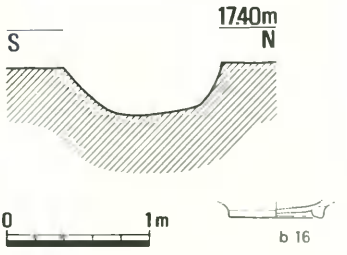
溝－4（第201図）

橋脚－6～8にかけ南西から北東に伸びる溝で、橋脚－5の南肩部での溝、先述の溝－3と同一と考えられるが、出土遺物において若干新しいものが含まれている。

出土遺物は、奈良時代後半の備前国分僧寺Ⅰ・Ⅲ式の軒平瓦r38・39・40、土師器小皿1、椀2・3が橋脚－6で、土師器甕4、土錘C31が橋脚8で、出土している。

溝－7（第200図）

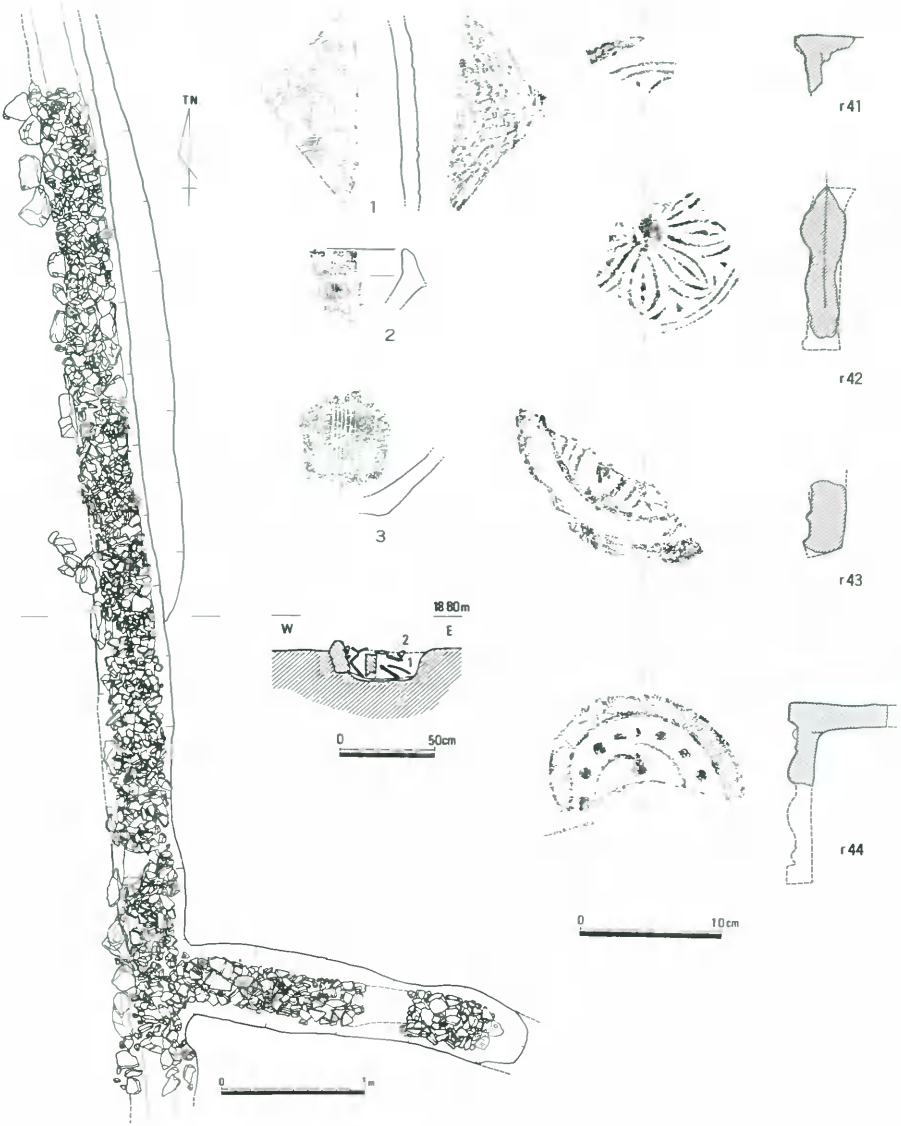
橋脚－12～13の北側道に位置し、ほぼ東西に23mほどある。幅110cm、深さは検出面より35cmある。検出面での標高は17.15m、溝底部で16.8mを測る。出土遺物で実測可能なものでは、黒色土器b17が1点のみで他には、土師器片、瓦片などがある。



第202図　橋脚12，溝7断面図および出土遺物

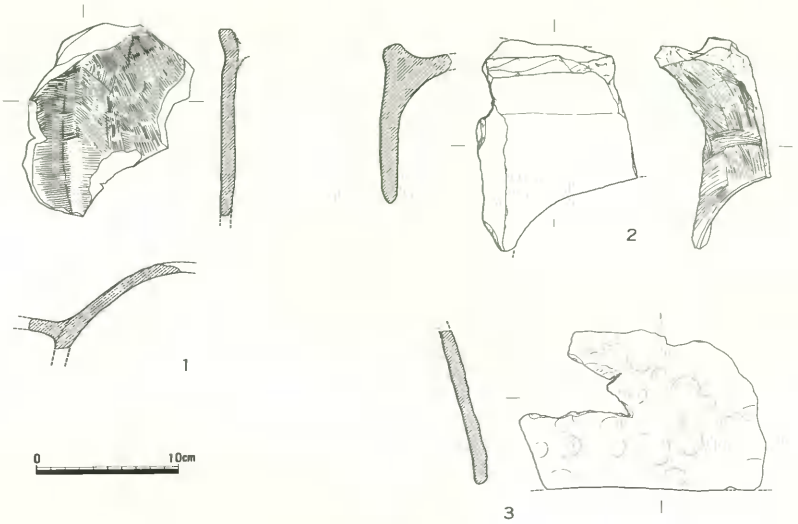
溝－８（第203図）

橋脚－９北側道で先述しの溝－３・４の上層部にあたりほぼ南北に伸びる溝で、南端部で別に西方に伸びる溝が取り付く。幅70cm、深さ20cmほどで、西側部を20cm前後の石を組、溝内は小礫、瓦などを敷き詰めるような感じで埋められていた。検出面での標高は18.6m、溝底部で18.4m前後である。溝内からは、奈良時代から鎌倉・室町時代頃までの土器片、瓦などが出土している。１は格子目叩き

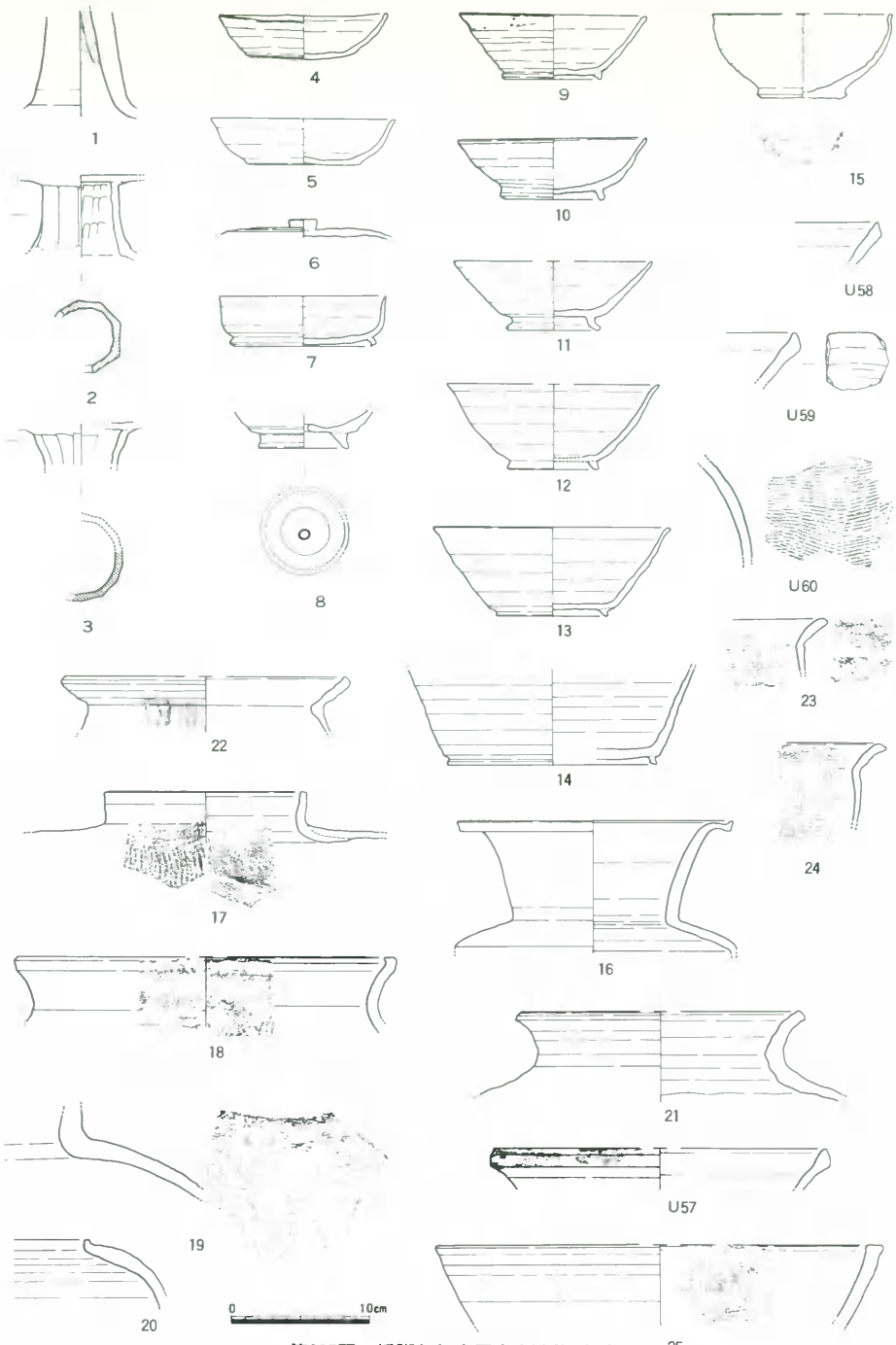


第203図　橋脚９，溝８平・断面図および出土遺物

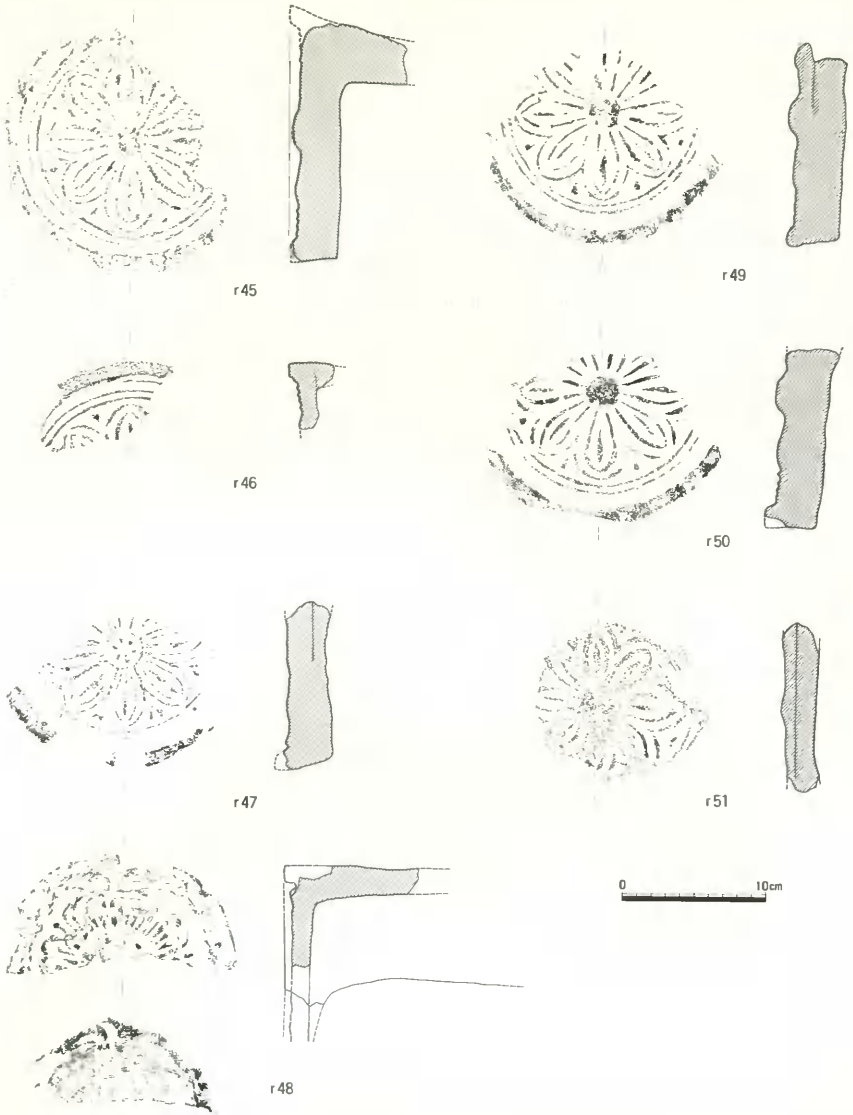
をもつ中世須恵器、２・３は14世紀代の備前焼擂鉢、軒丸瓦ｒ41・42は備前国分僧寺Ⅰ式、ｒ43はⅣ式、ｒ44は三（二）巴文である。現南北農道は、備前国分僧寺の中軸線上にあたり、この南約300ｍの所に位置する尼寺とを結ぶ道路の可能性が考えられ、この溝も旧道の側溝の可能性もある。（伊藤）



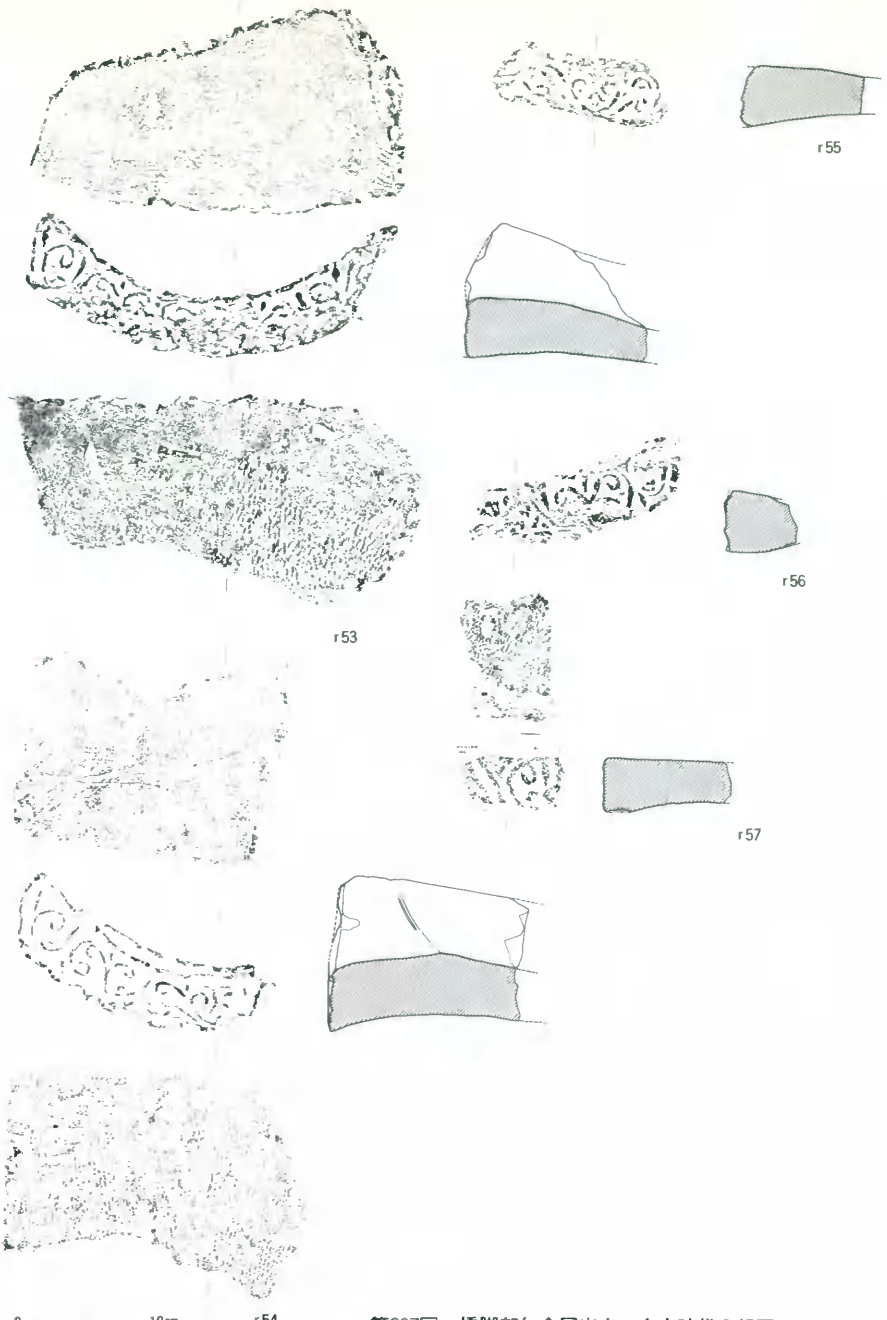
第204図　橋脚部包含層出土遺物（１）



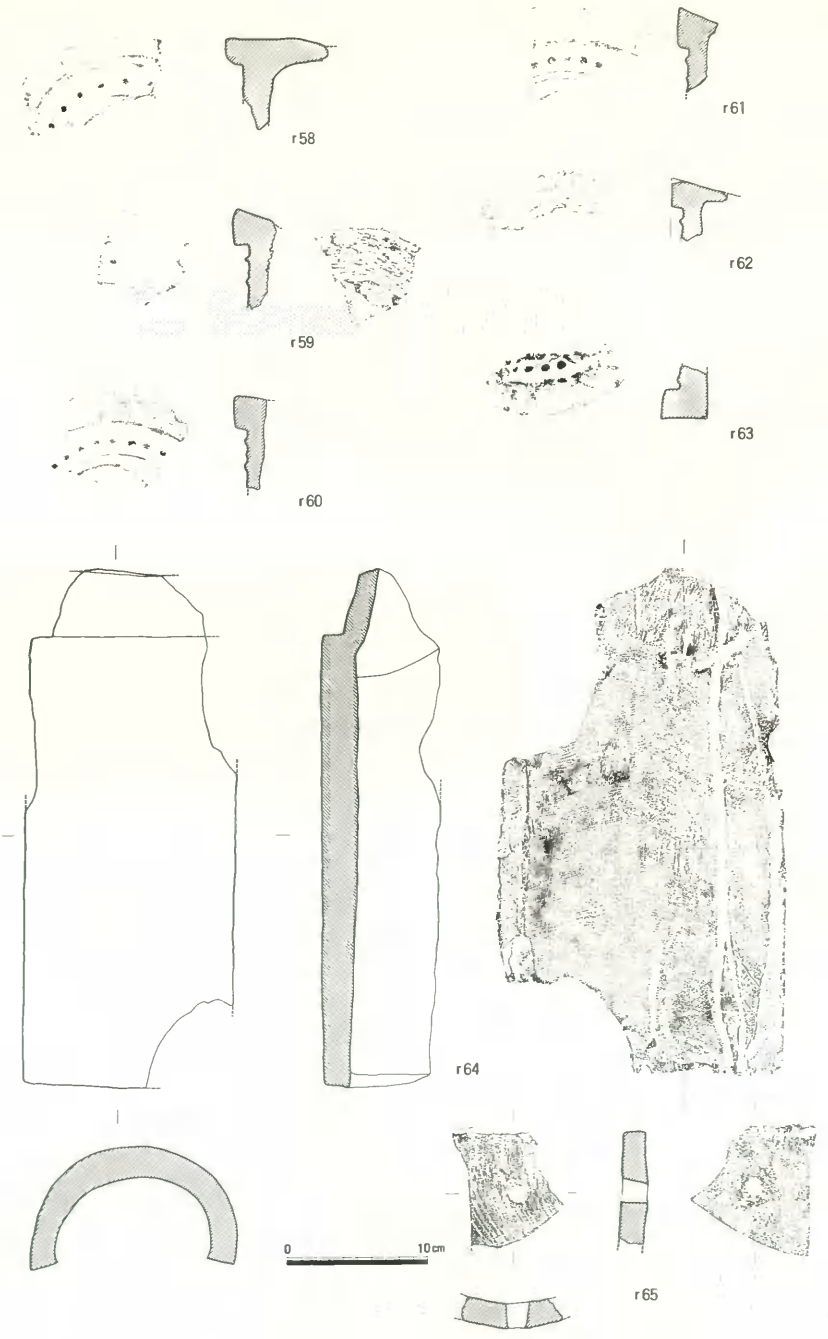
第205図　橋脚部包含層出土遺物（2）



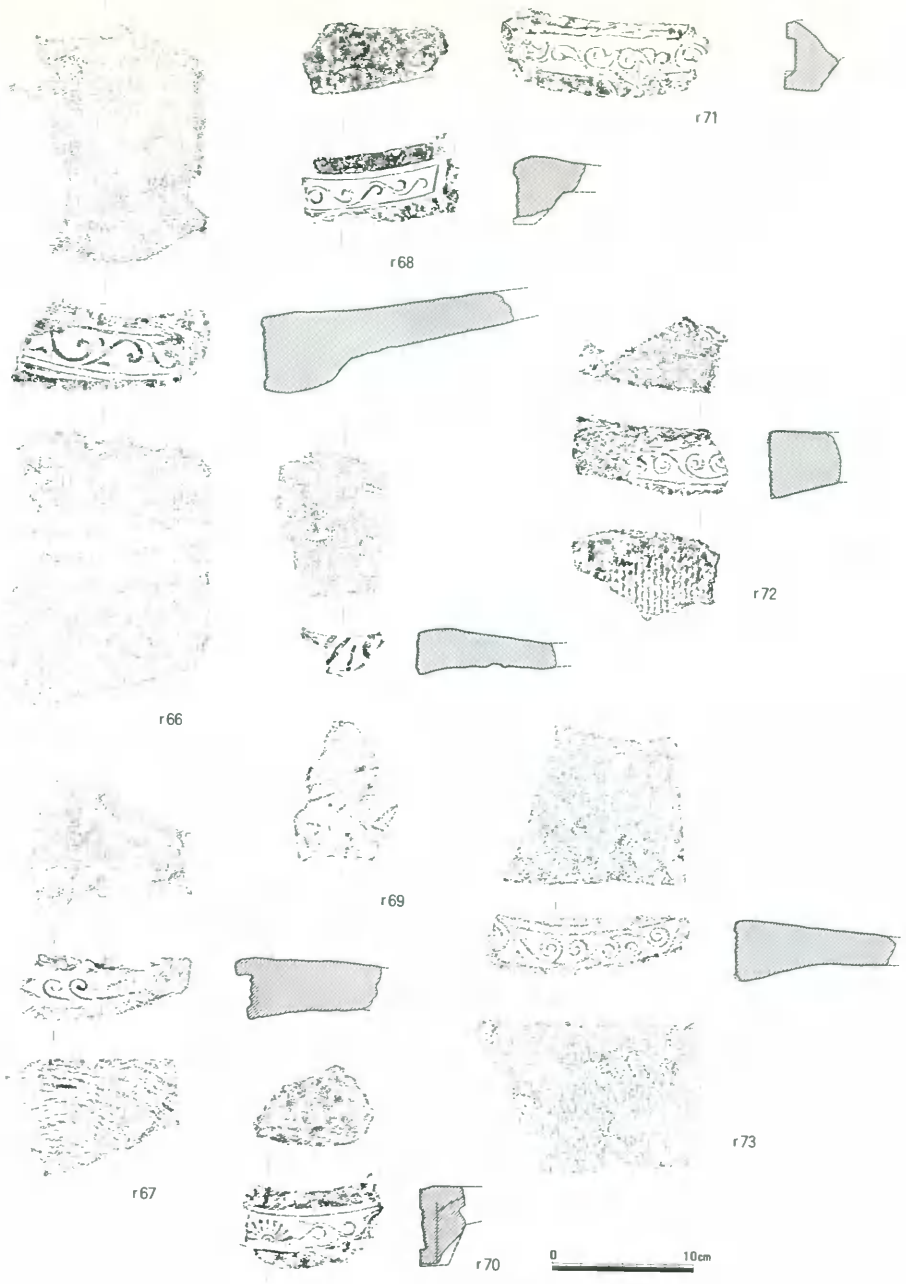
第206図　橋脚部包含層出土　奈良時代の軒丸瓦



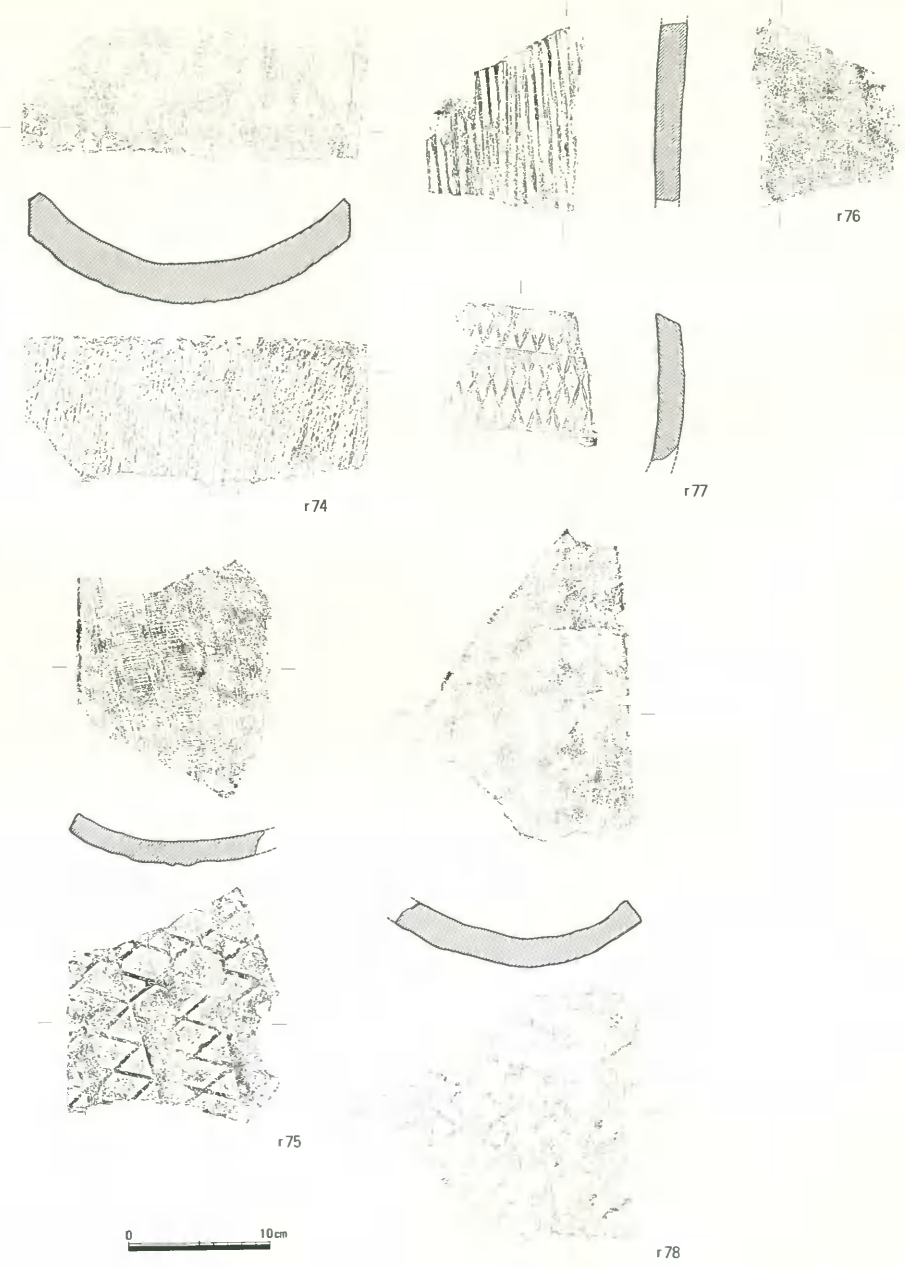
第207図　橋脚部包含層出土　奈良時代の軒平瓦



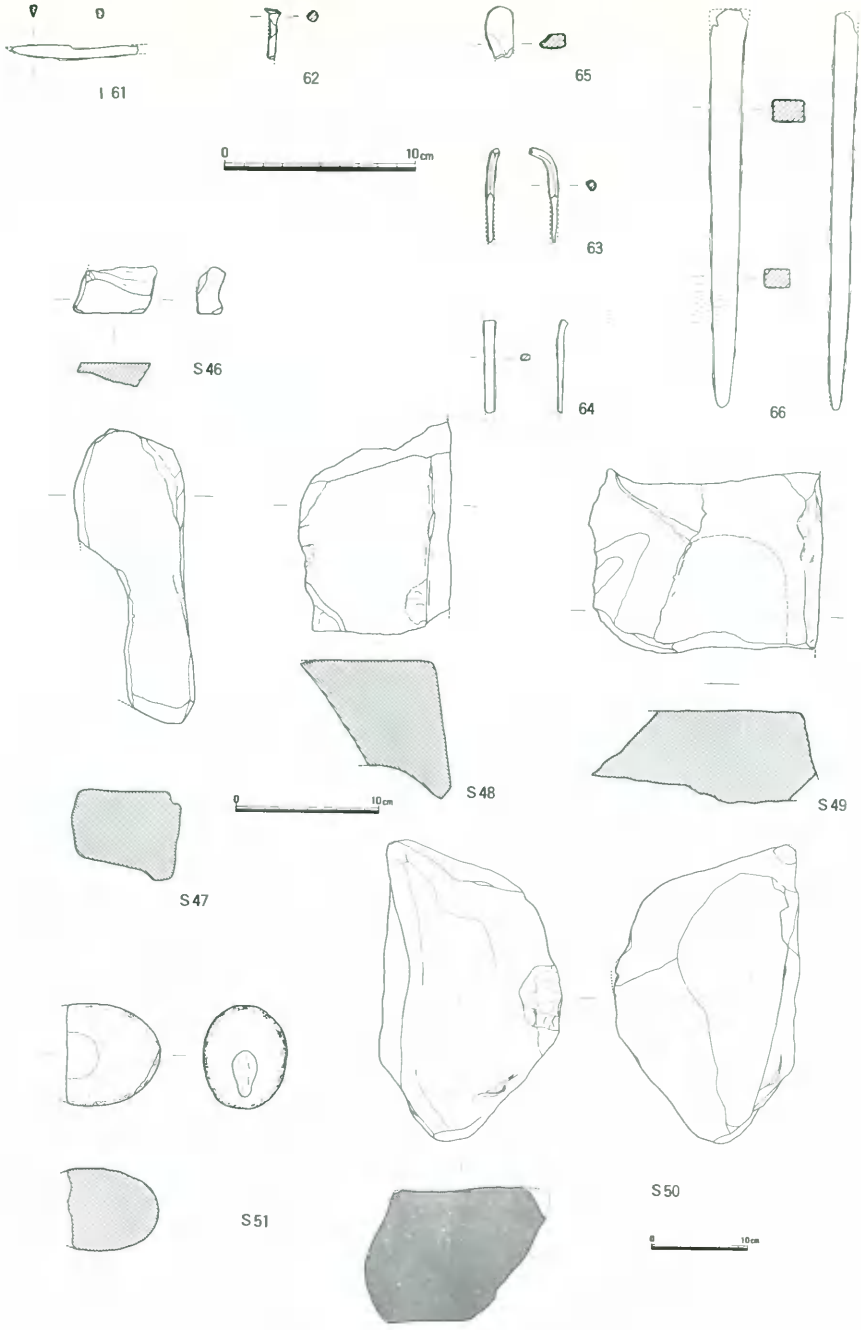
第208図　橋脚部包含層・暗渠出土軒丸瓦・丸瓦



第209図　橋脚部包含層・暗渠出土　平安時代から鎌倉時代の軒平瓦



第210図　橋脚部包含層出土　平安時代から鎌倉時代の平瓦

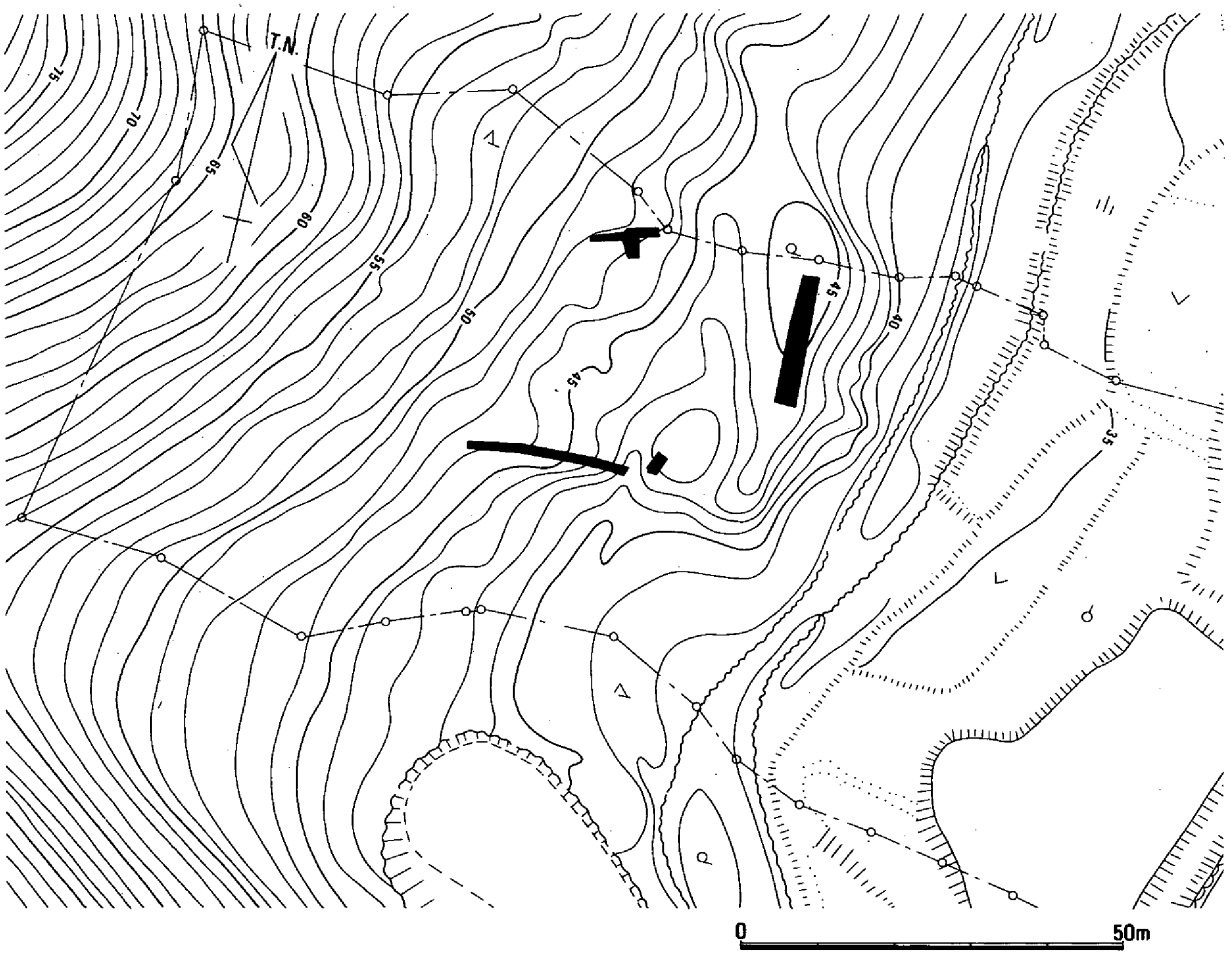


第211図　橋脚部・遺構出土鉄器・砥石・すり石

4．ヤブレ塚

馬屋遺跡第１次調査を行っているとき、地元住民から西方丘陵＝馬屋トンネル付近に「ヤブレ塚」と称する古墳があるという事を聞き、伐開後トレンチを丘陵上・谷部に数本設置した。どのトレンチからも古墳と考えられる遺構・遺物はみられなかった。谷部に水路が走り西側に石組みをして、底部に石を敷いたものがみられたが、これは水路の荒手であり、これを古墳と見誤ったものと考えられる。あるいは用地外の別の場所に存在するかも知れないが、今回は確認することができなかった。

（伊藤）



第212図　ヤブレ塚トレンチ配置図

5．まとめ

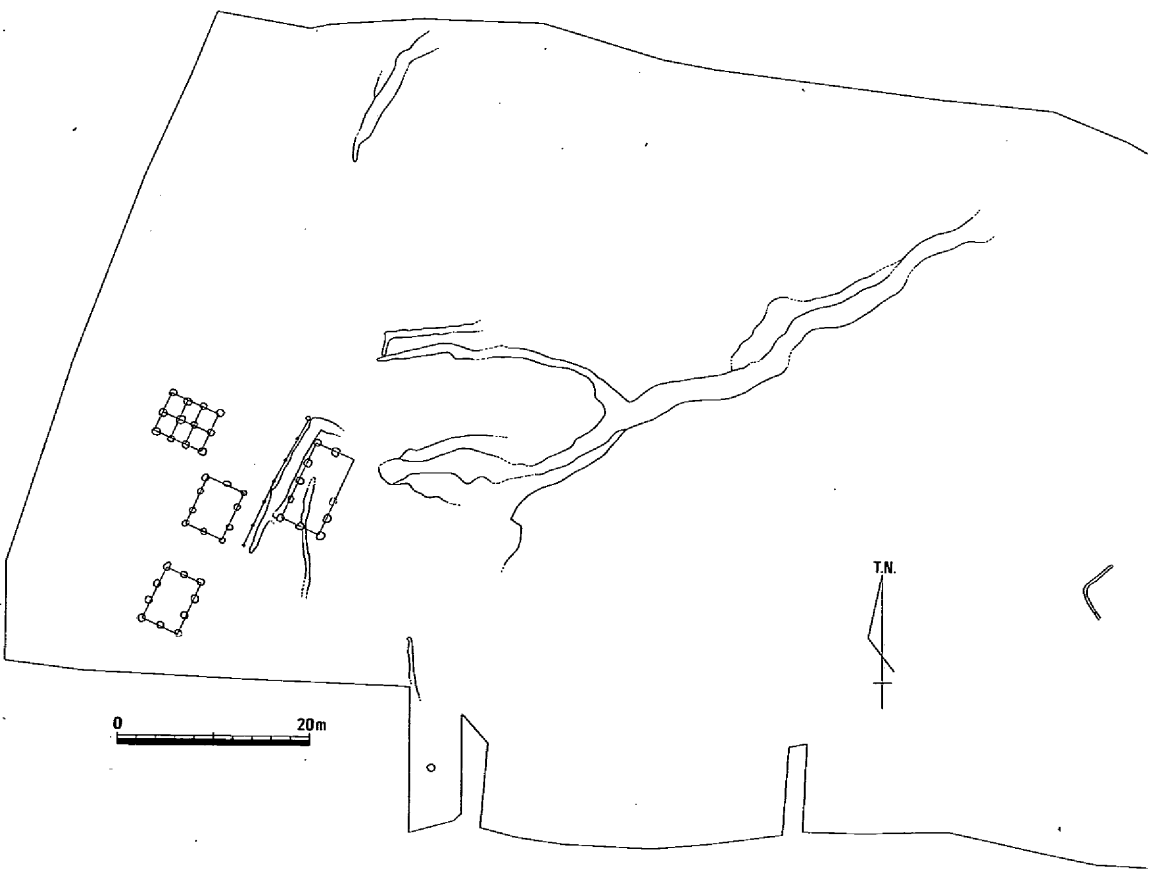
今回の馬屋遺跡の調査は、総面積20130㎡にわたり、掘立柱建物53棟・井戸5基・土壙墓2基・土壙83基・溝72本などの遺構が検出された。これらの遺構が、奈良時代（Ⅰ期）・平安時代前期から中期（Ⅱ期）・平安時代末期から鎌倉時代前期（Ⅲ期）・鎌倉時代中期から室町時代前期（Ⅳ期）におよんでいることは、既に報告した通りである。ここでは、掘立柱建物を中心とした各時期の遺構の変遷、掘立柱建物の平面構造について検討するとともに、馬屋遺跡に近接する備前国分僧寺と関連する遺構についても言及する。

(1)　遺構の変遷

①　奈良時代（Ⅰ期）

奈良時代の建物は、土盛部調査区の南西部に、3間×2間の総柱建物1棟（建物―1）と4間×2間の側柱建物1棟（建物―4）・3間×2間の側柱建物2棟（建物―2・3）の合計4棟が検出された。これらの建物は、方向をそろえ整然と配置されるなど企画性をもち、1つの公的施設として建物群を形成していると考えられる。建物―1は総柱建物であることから、倉と推定される。また、建物―4は、規模が他の建物と比較して大きく、建物の周囲に溝や柱穴列を伴うなど、この建物群の主屋としての機能を有し、建物―2・3は副屋と考えられる。

馬屋遺跡の周辺には、近接して備前国分僧寺跡や国分尼寺推定地が存在し、やや離れて古代山陽道の高月駅の存在が推定されている。また、馬屋遺跡の調査以前に、主要県道岡山・吉井線拡幅工事に



第213図　奈良時代建物配置図（S：1/800）

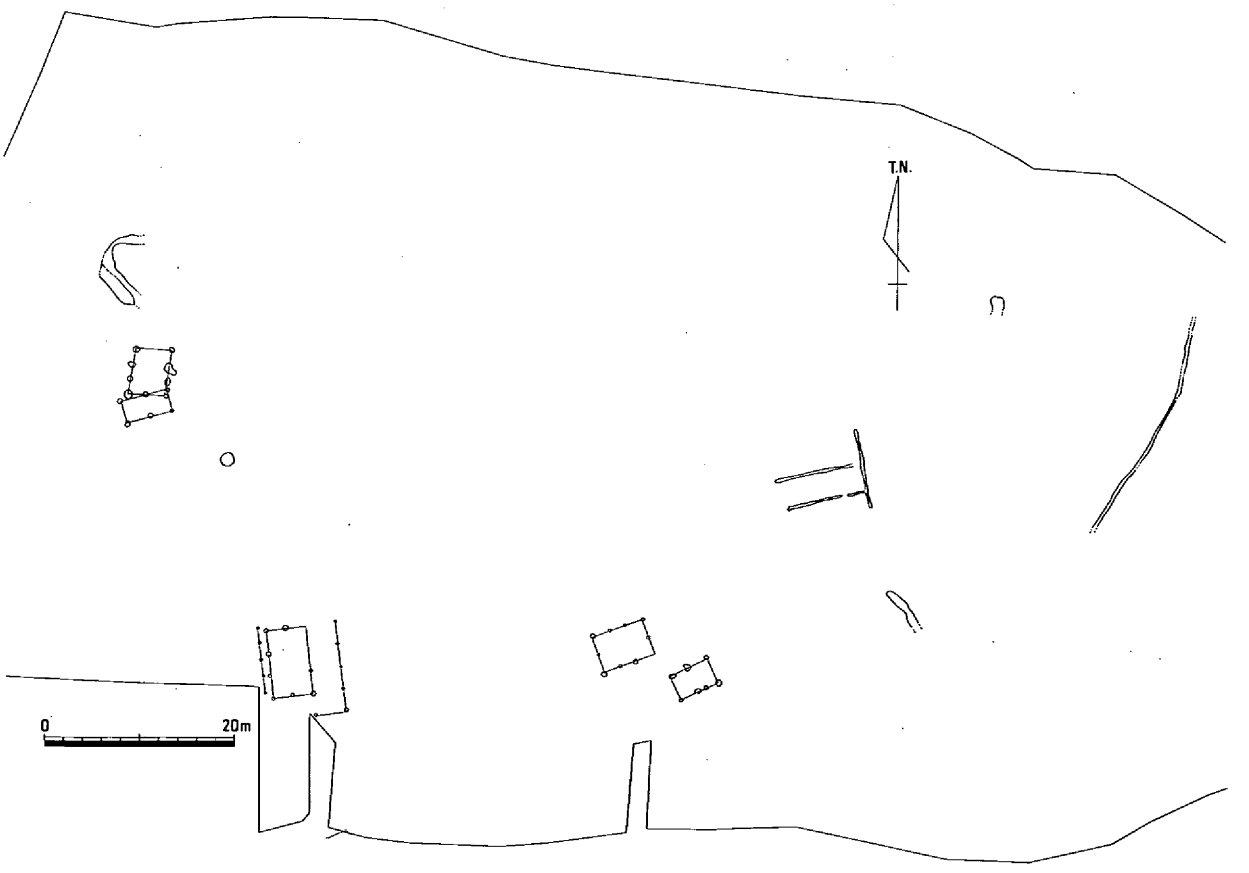
伴う馬屋出水遺跡の発掘調査で、奈良時代の掘立柱建物が２棟検出されており[1]、この一帯は、いくつもの公的施設が集中する、奈良時代における備前国の１つの中心地域であったといえる。馬屋遺跡の奈良時代の建物群も、これらの施設との関連を考慮する必要がある。近接した備前国分僧寺との関連が一番考えられるが、国分僧寺の主軸線がN－10°－Wである[2]のに対して、馬屋遺跡の建物群はN－24°－E（N－66°－W）を示している。また、位置的にもやや離れているところなどからも、国分僧寺と直接関係がある付属施設とは考えられない。この建物群の方向は、条里や地形に制約されたものとは考えられない。むしろ、可能性としては道路との関係が想定されるのではないだろうか。

平安時代の史料（年）だが、『上野国交替実録帳』に、郡司などの役人の宿泊に供される施設として交通の要所に設置されたと考えられる「館」の記載がある。「館」は、最初郡司の居館と考えられていたが、郡内に分置された「館」の所在が認められる例もあることが確認されている[3]。『上野国交替実録帳』には建物の構成も記されている。参考として一例を次に掲げる[4]。

一館

宿屋壱宇　　向屋壱宇　　副屋壱宇　　厩壱宇

これと馬屋遺跡の建物群と比較すると、「厩壱宇」の代わりに、倉１棟が存在する点が異なっているのみで主屋と副屋の構成は類似している。また、馬屋遺跡の建物群の一角には、胞衣を埋納したと推定される土器埋納壙が検出されており、この建物群の居住者（使用者）が、中央とのつながりをもった人物であると考えられる。これらのことから、馬屋遺跡の建物群は、「館」的な施設の可能性が高いと推定される。



第214図　平安時代前期～中期建物配置図（S：1/800）

②　平安時代前期～中期（Ⅱ期）

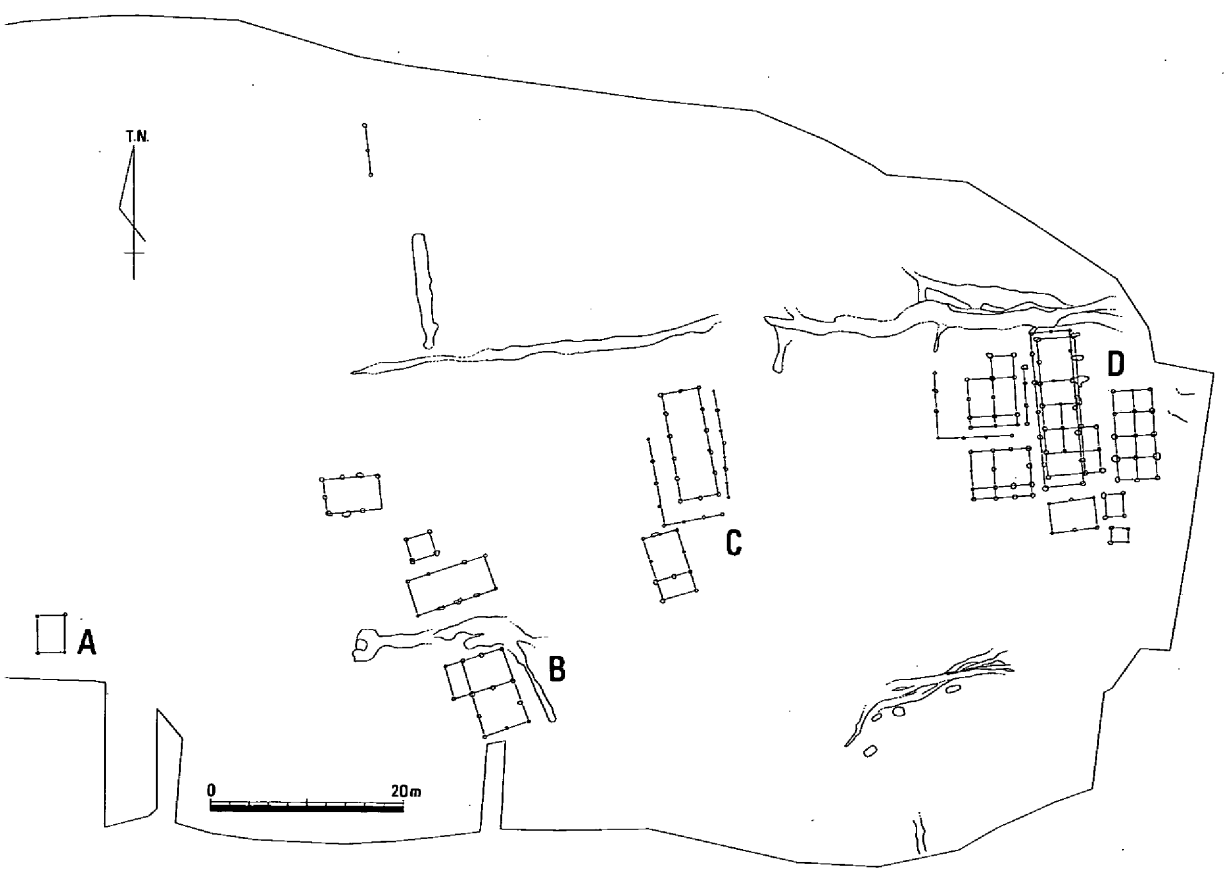
この時期の建物として２間×１間２棟（建物－６・９）、３間×１間１棟（建物－５）、３間×２間２棟（建物－７・８）の合計５棟が検出された。これらの建物は、まとまりをもたず、調査区内に散在している。また、遺構の密度は、他の時期と比較して、薄いといえる。建物の規模も、小型の建物が多い。

建物－７は、２本の柱穴列を伴い、特に柱穴列－３が、平安期から行われるようになった広庇となる可能性もあり、規模の大きな建物で、Ⅱ期の中心的建物と考えられる。しかし、立地は他の建物と関連なく孤立している。

つまり、遺構からすれば、Ⅱ期は馬屋遺跡の停滞期といえる。しかし、遺物について検討すると、馬屋遺跡から多数の緑釉陶器・灰釉陶器や黒色土器が、また少量だが、日本では公的施設からしか出土しない定窯系白磁も出土しており、中央あるいは畿内との密接なつながりを指摘できる。また、これらの遺物は、Ｅ・Ｆ・Ｇ５～９区にかけて、かなり多く分布しており、この範囲に確認できていない建物が存在する可能性もある。以上のことから、Ⅱ期の馬屋遺跡は、中央あるいは畿内とのつながりは保ちながら、公的施設としての性格が薄らいでいき、これに従って、建物を中心とした遺構の規模も縮小していったと考えられる。

③　平安時代末期～鎌倉時代前期（Ⅲ期）

Ⅲ期の馬屋遺跡は、東西方向に流れる溝－18・19によって南北方向に区画された南側の土地に、15棟の建物が検出され、おおむね４つの建物群に分けられる。これらの建物群は、空間地を置きながら



第215図　平安時代末期～鎌倉時代前期建物配置図（Ｓ：1/800）

存在しており、この時期の１つの特徴となっている。もっとも西側にあるＡ群は、１間×１間の建物１棟（建物―10）のみが検出された。今回の調査では１棟しか確認できなかったが、調査区外南側に建物が存在する可能性もある。

Ｂ群は、３間×２間の主屋に１間×１間の角屋を付属させた建物１棟（建物―15）、４間×１間１棟（建物―13）、３間×２間１棟（建物―11）、１間×１間１棟（建物―12）の合計４棟からなる。この内、建物―12・13・15は、建物の方向を、Ｎ―71°―Ｅ前後にそろえている。建物―15の北側および東側周囲には、溝がめぐらされている。これは、雨落ち溝あるいは屋敷地を区画する溝が想定される。しかし、建物―12・13との関係を考えあわせると、前者の可能性が強く、建物―15がＢ群の主屋的性格の建物で、建物―12・13がこれに付属する建物と推定される。また、建物―11のみが方向が異なっており、この建物は別の屋敷と推定される。

Ｃ群は、三方を柱穴列で囲まれた５間×２間の建物１棟（建物―14）と３間×２間の建物１棟（建物―17）からなる。建物―14に伴う柱穴列のうち、西側から南側の柱穴列―４は下屋となり、大型の建物になる可能性がある。建物―14と建物―17の方向はやや異なっているが、その位置関係から、同一屋敷内の建物と想定され、建物―14が主屋で、建物―17がこれに付属する建物であろう。Ｄ群は、３間×２間の上屋部と３間×１間の下屋部からなる建物１棟（建物―16）、２間×２間の上屋部・２間・１間の下屋部に１間×１間の角屋を付属させた建物１棟（建物―18）、６間×２間の建物１棟（建物―19）、６間×２間の主屋部に２間×１間の角屋を付属させた建物１棟（建物―20）、４間×２間の総柱建物１棟（建物―21）、２間×１間の建物１棟（建物―22）、１間×１間の建物２棟（建物―23・24）の合計７棟が検出された。建物の方向はやや異なるものも存在するが、この建物群で１つの屋敷を形成していたものと推定される。また、建物―19・20建て替えにより重複して検出されており、この屋敷は大小６棟の建物で構成されていたと考えられる。この建物群は、他の建物群と比較して傑出しており、馬屋遺跡を含む集落の、中心的人物（名主層）が居住していた屋敷と想定される。このことは、輸入陶磁器の分布でみても、Ｄ群周囲で、多数出土していることからも明らかである。

馬屋遺跡Ⅲ期よりやや時代が下るが、名主層の住居の規模・構成が判明する史料として、「延慶３年（1310）伊勢国泊浦村江村在家検注并名寄帳」がある。この史料のなかで一番建物数の多い登録人「麻口」の屋敷は２間×５間・２間×２間・４間×３間・２間×４間・２間×２間・２間×２間・の合計６棟の建物で構成され、延床面積42坪に及ぶ[5]。これに対し馬屋遺跡Ⅱ期Ｄ群の屋敷は、合計６棟で延床面積42.3（41.9）坪[6]と、「麻口」の屋敷とほぼ同規模となる。この点からも、Ｄ群の屋敷は名主層の屋敷と推定される。

また、Ｄ群の南には、溝―20～23に画されて、同安窯系白磁碗２点などを副葬した土壙墓―２など土壙墓２基と土壙墓の可能性もある土壙２基が存在し、墓域を形成している。検出された数が少ないため一世代程度の墓域と推定され、集落全体の墓域とは考えにくい。この墓域の埋葬者は、土壙墓―２の副葬品から集落の上層者、つまりＤ群の屋敷居住者が想定される。

なお、今回の調査では、Ⅲ期の井戸は確認されなかったが、次のⅣ期に廃絶したと考えられる井戸が、Ⅲ期にも使用されていたと推定される。

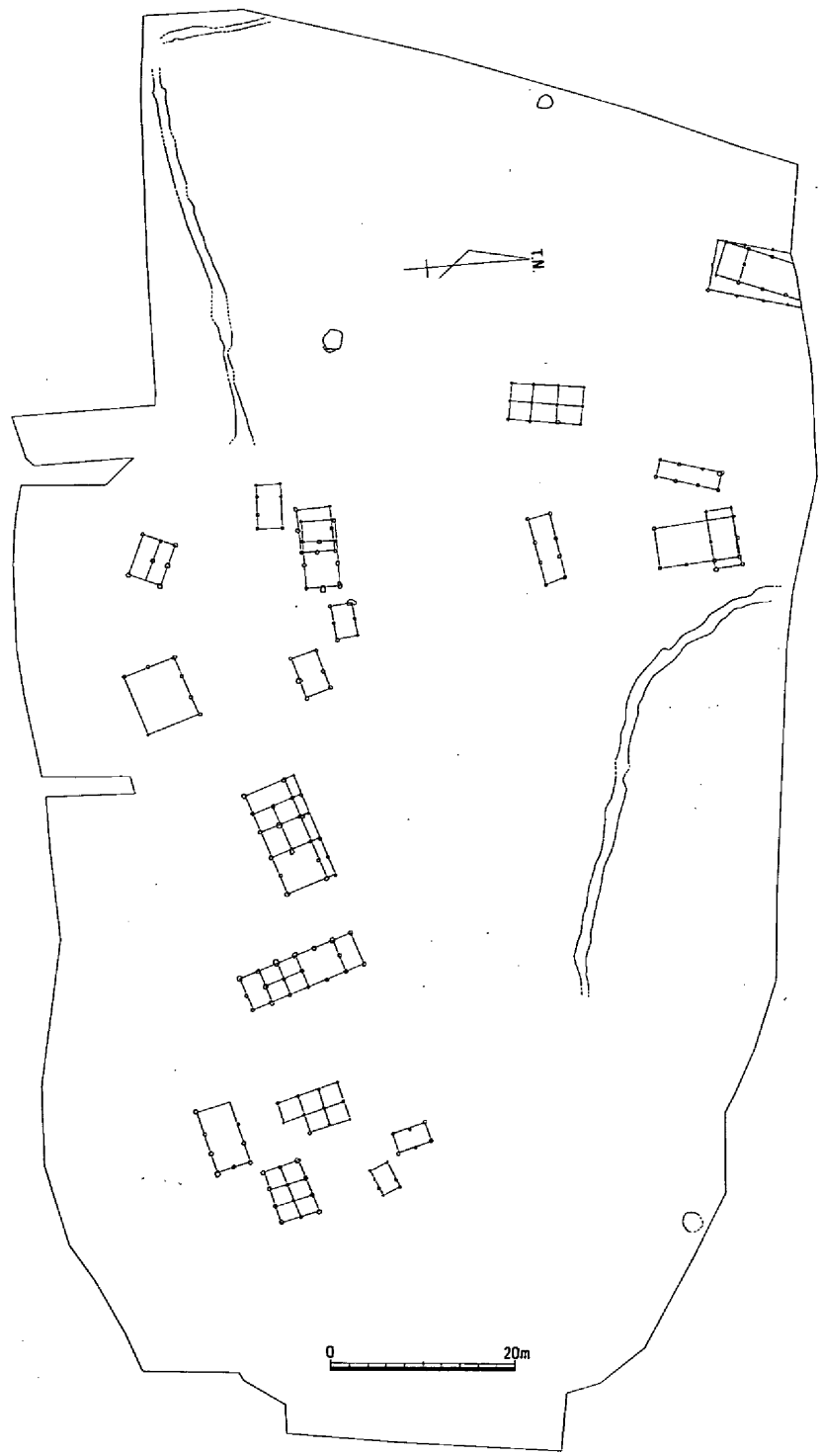
④　鎌倉時代中期～室町時代前期（Ⅳ期）

この磁器の建物は、合計21棟分確認された。その内訳は、３間×２間の総柱建物２棟（建物―27・51）、３間×１間の側柱建物５棟（建物―30・31・32・35・52）、２間×２間の建物２棟（建物―33・

37)、3間×2間の建物3棟（建物—34・40・49)、2間×1間の建物4棟（建物—41・42・44・50)、5間×2間の上屋部と5間×1間の下屋部からなる建物1棟（建物—45)、6間×2間の建物1棟（建物—47)、2間×2間の主屋に1間×1間の角屋を付属させた建物1棟（建物—48)、規模不明の建物2棟（建物—25・26）である。

これらの建物は、溝—17の南岸に位置している。Ⅲ期のように空間地を有しながら建物群を構成するのではなく、単独で存在している印象を受ける。建物—45や建物—47のように大型の建物は存在するが、付属する建物はなく、やはり単独で屋敷を形成していると推定される。まとまった屋敷となる可能性があるのは、建物—34と建物—35、建物—48・建物—49と建物—51の2群のみで、規模も大きくない。Ⅲ期のような大規模で傑出した屋敷は存在しない。

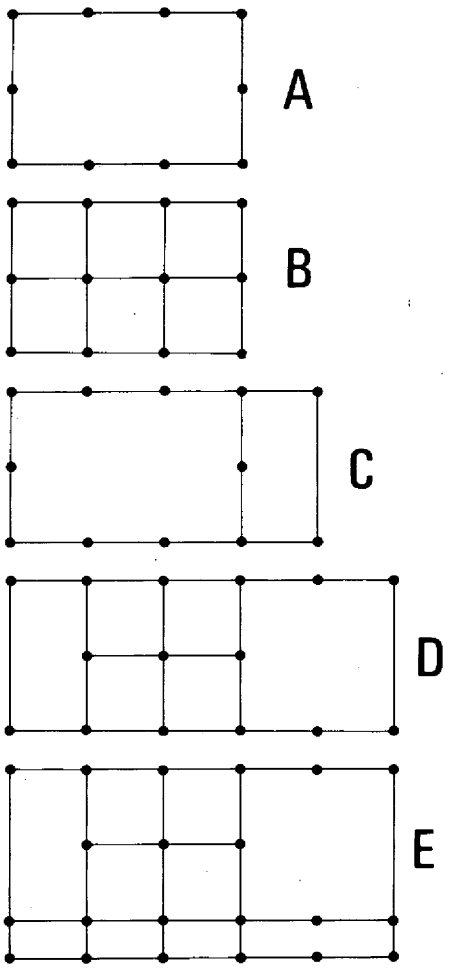
つまり、馬屋遺跡Ⅳ期においては、少数の大型建物と多数の中小建物が混在する屋敷の平均化がみられる。そして、複数の建物で構成される屋敷およびそれを包括する屋敷地が明確でなく、Ⅲ期に居住していた有力富裕農民の姿はみられない。



第216図　鎌倉時代中期以降建物配置図（S：1/800)

(2)　掘立柱建物の平面構造について

今回の馬屋遺跡の調査で検出された掘立柱建物の平面構造を類型化すると、概ね次の５タイプに分けられる（第217図）。A型はいわゆる側柱建物で、Ⅰ期では建物－２・３・４、Ⅱ期では建物－５・６・７・８・９、Ⅲ期では建物－10・11・12・13・14・22・23・24、Ⅳ期では建物－30・31・32・33・35・40・41・42・44・49・50・52、時期不明の建物では建物－28・29・36・38・43・53・がこのタイプである。B型はいわゆる総柱建物で、Ⅰ期では建物－Ⅰ、Ⅲ期では建物－21、Ⅳ期では建物－27、時期不明の建物では建物－48・51がこのタイプである。C型は、側柱の梁部中央穴の一方を欠き、建物内部の梁部一箇所に中央穴を有する建物である。Ⅰ・Ⅱ期には存在せず、Ⅲ期では建物－15・17、Ⅳ期では建物－34・37、時期不明の建物では建物－46がこのタイプである。またC型に類似した建物として、Ⅲ期に建物－16・18・19・がある。D型は、基本的には側柱で、一部分が総柱構造となる建物である。これもⅠ・Ⅱ期には存在せず、Ⅲ期では建物－20、Ⅳ期では建物－47がこのタイプである。E型は、D型の桁部側を、幅狭く１間分拡張した建物で、Ⅳ期の建物－45のみである。また、幅狭く１間分拡張したという意味であ、Ⅲ期の建物－16・18も類似している。



第217図　建物平面構造概念図

A～E型の建物を、時期的に検討すると、A型はⅠ～Ⅳ期全ての時代で多数みられる。これに対し、C型・D型は、両者ともⅢ期に初めて出現する。また、E型は、Ⅳ期に初めて出現する。

また、構造的に検討すると、C型は、A型の梁部を１間分拡張し、土間または下屋としたと推定される。D型は、B型とC型の融合型で、総柱部を部屋部として、他を土間または下屋としたと推定される。E型は、D型の梁部に下屋を設けた発展型といえる。

つまり、馬屋遺跡の掘立柱建物は、A型・B型の建物が全ての時代で建てられる一方で、平安時代末期ごろからC型の建物が建てられるようになり、やや時期を経て大型の建物にB・C融合型のD型が採用され、さらに鎌倉時代末期にはD発展型のE型が出現したと考えられる。

他の遺跡でも同様のことが確認されるかについては、今後の課題とする。

(3)　備前国分僧寺関連の遺構

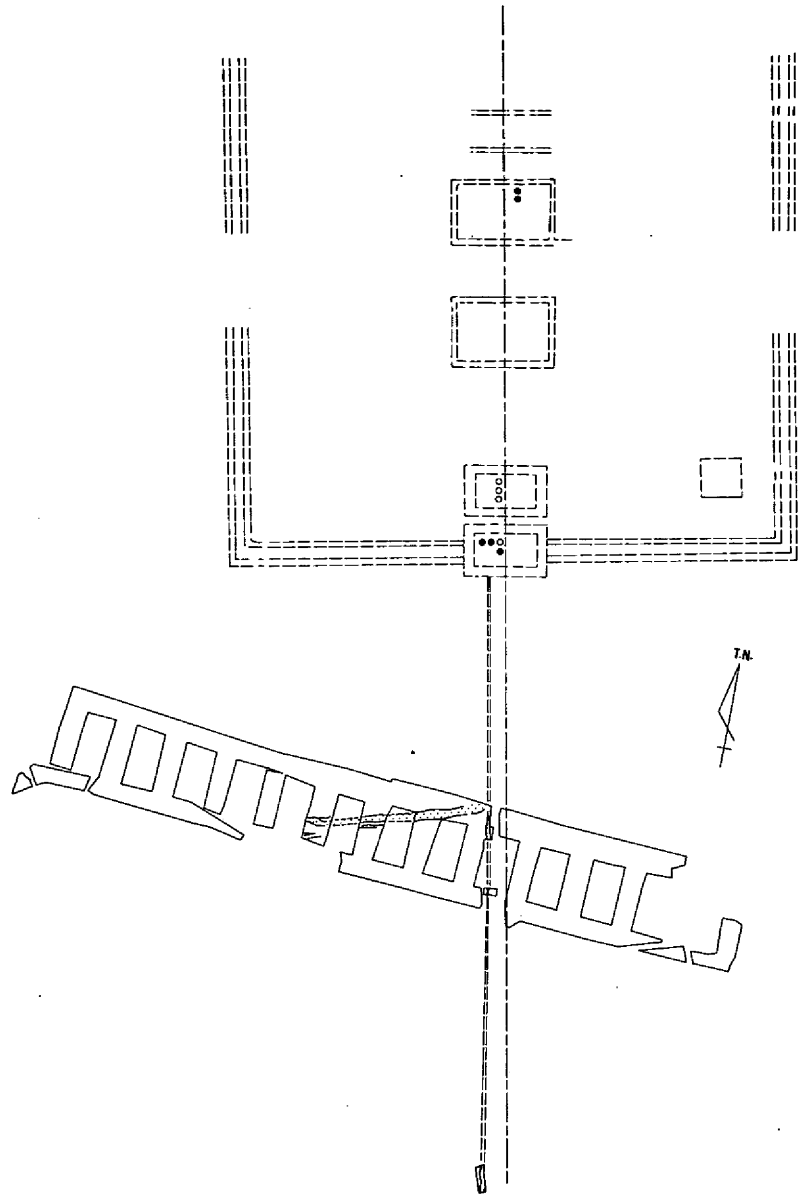
今回の調査では、橋脚部において、備前国分僧寺跡の南約55～70mという近距離を発掘することになり、国分僧寺関連の遺構の検出が想像されたが、実際には、関連遺構と考えられるものは溝２条のみであった。

①　溝－4

溝－4は、橋脚部調査区のP9の北端部から南南東方向にかけて、国分僧寺の中軸線とほぼ平行に流れている。この溝－4の延長上に、主要県道岡山・吉井線拡幅工事に伴う発掘調査された馬屋長田遺跡で確認された奈良時代以降と推定される溝[7]が位置し、同一の溝の可能性が高い。

発掘調査は行われていないが、備前国分尼寺は、国分僧寺の南約300mの所に位置し、中軸線をほぼ同一すると推定されている[8]。

以上の国分僧寺と国分尼寺の関係から、中軸線にほぼ平行に流れる溝－4は、国分僧寺と国分尼寺を結ぶ道路の西側溝の可能性が高い。なお中軸線東の現在の地形がかなり削平を受けている状況を看取出来るところから、東側溝は削平により消滅したものと考えられる。溝－4から中軸線までは約5mあり、東側溝も中軸線と同じ関係にあった推定すると、この道路の下端の幅は約10mに復元される。これは道路としては、兵庫県落池遺跡などで確認された古代山陽道と規模が匹敵する[9]。しかし、現段階では、規模については不明といわざるをえない。



第218図　備前国分僧寺伽監想定並びに関連遺構図（S：1/2500）

なお、調査時に、調査担当者が道路の西側溝と報告した[10]石と瓦片を敷きつめた遺構（溝－8）は、出土遺跡から、16世紀の遺構であり、遺構の形態から排水溝の可能性はあるが、道路の側溝とは考えられない。

②　溝－5

溝－5は、すでに報告した通り、土層断面と出土遺物から、奈良時代から鎌倉時代にかけて底浚えを繰り返しながら存続した溝と考えられる。存続時期や溝の方向・位置関係などから国分僧寺に関連

した遺構と考えられる。

武蔵国分僧寺や上総国分僧寺などでは、伽藍中枢部を含む寺域を内に内包し、寺としての機能保持のため直轄する区域＝寺地を限る溝が確認されている(11)。馬屋遺跡で今回の調査で確認された溝－5も寺地を限る溝の可能性が高いと考える。

なお、先程の溝－4とこの溝－5の接続（切り合い）関係は、調査担当者の不認識により、十分な調査がなされなかった。このため、これらの遺構と国分僧寺との関係を解明する資料を十分には手に入れられず、非常の残念である。

(4)　おわりに

今回の調査によって、馬屋遺跡は、岡山県下では数少ない平安時代末期から室町時代前期を中心としたの集落（村落）遺跡であることが判明した。中世考古学の進展が著しい現在においても、良好な資料となると確信している。また、国分僧寺との関係については、国分僧寺周辺の整備などによる調査に期待したい。

なお、この報告をまとめるにあたって、掘立柱建物の構造などについて、東京国立文化財研究所の松本修自氏には数多くのご教示を頂いた。馬屋長田遺跡・馬屋出水遺跡については、調査を担当した椿真治氏に、助言や図面の便宜を図って頂いた。また、報告書担当者のほかに、報告に使用した遺物実測図は楠本浩子・小宮山泰子・柴田令子・千原尚子・延原経子・光延秀典・山本響子の諸氏、図面の浄書は赤木祐子・岩崎加代子・藤原いづみの諸氏の援助を得た。そして何よりも発掘調査・整理作業に従事してくださった多数の方々に、末筆ながら記して謝意を表したい。　（横山）

註

1　椿真治「馬屋森向遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財報告』20　岡山県教育委員会　1990年。

2　備前国分寺跡緊急発掘調査委員会『備前国分寺跡緊急発掘調査概要』　岡山県教育委員会　1975年。

3　阿部義平『官衙』　ニュー・サイエンス社　1989年。

4　『平安遺文』。

5　伊藤鄭爾『中世住居史』　東京大学出版会　1958年。

6　この当時の1坪は現在よりも広いと推定されていて（前掲註(5)書）、やや時代は下るが1464年（寛正5）の新見荘の事例から1坪を7尺四方で計算した。

7　註(1)に同じ。

8　伊藤晃「備前」『新修国分寺の研究』第四巻　吉川弘文館　1993年。

9　「古代の道と考古学」『季刊考古学』第46号　雄山閣出版　1994年。

10　二宮治夫ほか「馬屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』23　1993年。

11　滝口宏「武蔵」・「上総」『新修国分寺の研究』第二巻　吉川弘文館　1991年。

掘立柱建物一覧

構造番号	規模（間）	柱間距離 桁		柱間距離 梁		桁行		梁行		面積	棟方向	時期	備考	調査時構造名
		cm	尺	cm	尺	cm	尺	cm	尺	(㎡)				
建物－1	3×2	162～188	5.5～6.3	219	7.4	534	18.0	438	14.7	23.4	N66° W	奈良	柱穴方形	SB01
建物－2	3×2	152～174	5.1～5.9	209	7.0	550	18.5	418	14.1	23.0	N24° E	奈良	柱穴方形	SB03
建物－3	3×2	200～204	6.7～6.9	198～202	6.7～6.8	600～604	20.2～20.3	396～404	13.3～13.6	24.0	N24.5° E	奈良	柱穴方形	SB02
建物－4	4×2	218	7.3	209～223	7.0～7.5	872	29.4	432	14.5	37.7	N24° E	奈良	柱穴方形、柱穴列1	SB06
建物－5	3×1	151～178	5.0～5.9	384～388	12.7～12.8	590	19.5	384～388	12.7～12.8	18.7	N10° E	奈良～平安前半		SB04
建物－6	2×1	223～265	7.4～8.7	233～236	7.7～7.9	480～485	15.8～16.0	233～236	7.7～7.9	11.6	N75° E	平安前半		SB05
建物－7	3×2	240	7.9	209～219	6.9～7.2	720	23.8	428	14.1	30.8	N6.5° W	平安	柱穴列2·3	SB13
建物－8	3×2	165～208	5.4～6.9	186～205	6.1～6.8	559	18.4	383	12.6	－21.4	N70° E	平安後半		SB38
建物－9	2×1	(94)～240	(3.1)～7.9	278	9.2	434	14.3	278	9.2	12.1	N65° E	平安中期		SB23
建物－10	1×1	398	13.1	288	9.5	398	13.1	288	9.5	11.5	NI° W	平安末～鎌倉初期		SB12
建物－11	3×2	178～222	5.0～7.3	181～230	6.0～7.6	580	19.1	362～368	11.9～12.1	21.1	N83° E	〃		SB18
建物－12	1×1	260	8.6	242	8.0	260	8.6	242	8.0	6.3	N71° E	鎌倉前半		SB43
建物－13	4×1	214～232	7.1～7.7	368～378	12.1～12.5	848	28.0	368～378	12.1～12.5	31.7	N70.5° E	平安末～鎌倉初期		SB39
建物－14	5×2	208～240	6.9～7.9	192～198	6.3～6.5	1134	37.4	384～396	12.7～13.1	44.3	N10° W	〃	柱穴列4·5	SB26
建物－15	(3×3)	215～354	7.1～11.7	188～244	6.2～8.1	818	27.0	624～644	20.6～21.3	43.2	N18° W	平安末～鎌倉初期		SB22
建物－16	3×(2+1)	190～242	6.3～8.0	196	6.5	622	20.5	506	16.7	24.4+7.1	N86° E	鎌倉前半	西庇	SB31
建物－17	3×2	212～246	7.0～8.1	183	6.0	674	22.2	366	12.1	24.7	N17° W	鎌倉前半		SB24
建物－18	(3+1)×	200～230	6.6～7.6	224～264	7.4～8.7	736	24.3	492	16.2	24.9+5.2	N3.5° W	平安末～鎌倉初期	西庇、柱穴列6・7	SB32
建物－19	6×2	220～313	7.3～10.3	188～288	6.2～7.5	1634	53.9	416	13.7	68.0	N6° W	〃		SB33
建物－20	(6×3)	226～258	7.5～8.5	174～198	5.7～6.5	1447	47.8	572	18.9	66.0	N5° W	〃		SB34
建物－21	4×2	225～251	7.4～8.3	198～210	6.5～6.9	944	31.2	408	13.5	38.5	N3.5° W	〃		SB35
建物－22	2×1	234～250	7.7～8.3	316	10.4	484	16.0	316	10.4	15.3	N82° E	鎌倉前半		SB50
建物－23	1×1	236	7.8	186	6.1	236	7.8	186	6.1	4.4	N5° W	平安末～鎌倉初期		SB41
建物－24	1×1	182	6.0	151	5.0	182	6.0	151	5.0	2.7	N89° W	〃		SB45
建物－25	3+×2	258～310	8.5～10.2	279	9.2			558	18.4		N15.5° E	〃		SB09
建物－26	3+×2	254～290	8.4～9.6	176～200	5.8～6.6			376	12.4		N22° E	鎌倉後半		SB08
建物－27	3×2	240～284	7.9～9.4	192～210	6.3～6.9	784～786	25.9～26.0	394～418	13.0～13.8	31.8	N10° E	〃		SB07
建物－28	1×1	224～241	7.4～8.0	188～190	6.2～6.3	224～241	7.4～8.0	188～190	6.2～6.3	4.4	N84° W	〃		SB11
建物－29	2×1	200	6.6	190	6.3	400	13.2	190	6.3	7.6	N87° E	〃		SB42
建物－30	3×1	218～251	7.2～8.3	190	6.3	687	22.7	190	6.3	13.1	N16.5° E	〃		SB10
建物－31	3×1	272～304	9.0～10.0	438	14.5	864	28.5	438	14.5	37.8	N3° W	〃		SB36

建物—32	4×1	198～278	6.5～9.2	236～244	7.8～8.1	710～734	23.4～24.2	236～244	7.8～8.1	26.0	N80° E	鎌倉後半		SB19
建物—33	(2×2)	223～249	7.4～8.2	172～364	5.7～12.0	472	15.6	364	12.0	17.2	N89° E	〃		SB16
建物—34	(3×2)	222～250	7.3～8.3	183～366	6.0～12.1	772	23.8	366	12.1	26.4	N89° W	鎌倉中期		SB17
建物—35	3×1	132～196	4.4～6.5	266	8.8	478	15.8	266	8.8	12.7	N87° W	〃		SB51
建物—36	3×1	198～210	6.5～6.9	266	8.8	612	20.2	266	8.8	16.3	N13° W	〃		SB15
建物—37	(2×2)	232	7.7	166～196	5.5～6.5	464	15.3	362	11.9	16.8	N66° W	〃		SB14
建物—38	2×1	220～242	7.3～8.0	328	10.8	462	15.2	328	10.8	15.2	N89° E	〃		SB47
建物—39	2×2	204～214	6.7～7.1	184～210	6.1～6.9	418	13.8	394	13.0	16.5	N79.5° E	〃		SB37
建物—40	3×2	206～244	6.8～8.1	276～298	9.1～9.8	672	22.2	574	18.9	38.6	N72° E	〃		SB52
建物—41	2×1	170～196	5.6～6.5	234	7.7	366	12.1	234	7.7	8.6	N85° E	〃		SB48
建物—42	2×1	208～240	6.9～7.9	278	9.2	448	14.8	278	9.2	12.5	N74° E	〃		SB44
建物—43	1×1	224	7.4	158	5.2	224	7.4	158	5.2	3.5	N72° E	〃		SB40
建物—44	2×1	294～338	9.7～11.2	290	9.6	632	20.9	290	9.6	18.3	N84.5° E	〃		SB20
建物—45	5×(2+1)	210～292	6.9～9.6	228～230	7.5～7.6	1153～1155	38.1	542～564	17.9～18.6	529.9+11.3	N71.5° E	室町前半	北庇	SB21
建物—46	(2×2)	201～255	6.6～8.4	200	6.6	456	15.0	400	13.2	18.2	N10° W	鎌倉～室町		SB46
建物—47	6×2	204～220	6.7～7.3	164～200	5.4～6.6	1272	42.0	364	12.0	46.3	N17° W	〃		SB25
建物—48	(3×2)	214～232	7.1～7.7	198～220	6.5～7.3	676～680	22.3～22.4	418	13.8	23.8	N14.5° W	〃		SB27
建物—49	3×2	268～214	8.8～7.1	185	6.1	696	23.0	370	12.2	258.8	N76.5° E	〃		SB28
建物—50	2×1	188	6.2	220	7.3	376	12.4	220	7.3	8.3	N14° W	〃		SB30
建物—51	3×2	178～220	5.9～7.3	186～204	6.1～6.7	582	19.2	398～418	13.1～13.8	23.7	N76° E	〃		SB29
建物—52	3×1	88106	2.9～3.5	220	7.3	306	10.1	220	7.3	6.7	N68° E	〃		SB49
建物—53	2×1	196	6.5	223	7.4	392	13.0	223	7.6	8.7	N77° E	〃		SB53

溝一覧表

遺構番号	残存長（cm）	幅（cm）	深さ（cm）	方向	時期	出土遺物	調査時遺構番号
溝—01	17.6	30～156	19～30	南東へL字状	奈良	須恵杯・高杯、盤	141
溝—02	72.0	120～515	110	N58.5° E	奈良	須恵杯、盤、壷	90
溝—03	29.0	62～237	23～31	南東へ弓状	奈良？	土師高杯	120
溝—04	16.0	34～206	7～19	北東へ弓状	〃	須恵・土師小片	478
溝—05	11.2	30～74	11	N84° E	〃	須恵杯	235
溝—06	12.3	32～64	9	N170° E	〃	須恵・土師小片	622
溝—07	6.4	35～62	11	N173° E	奈良～平安？	須恵・土師小片	757
溝—08	7.4	19～34	8～16	？	古墳～奈良	須恵壷、早島椀、灰釉段皿、羽口	941
溝—09	9.5	125～40	11	？	平安後半？	土師托上椀・甕	44
溝—10	7.8	92～342	14	東	平安中頃？	須恵壷、灰釉、黒色土器	815
溝—11	7.4	33～308	11	N77° E	〃	黒色椀他小片	851
溝—12	2.8	58～120	6	N64° W	平安後半	須恵杯、土師椀、緑釉壷、灰釉皿、黒色椀	894
溝—13	7.8	16～34	6	N75° E	？	須恵・土師小片	1064
溝—14	4.8	42～86	7～35	N40° W	平安後半～	須恵杯、土師椀、軒丸瓦	942
溝—15	1.4	100～135	31	N178.5° E	平安	土師杯	761
溝—16	8.4	12～40	9	N6.5° W	〃	土師椀、須恵・土師小片	965
溝—17	24.2	26～42	15～19	N13° E	平安？	土師甕、瓦器椀、白磁小皿	1270
溝—18	51.9	88～163	34～84	東へ弓状？	平安末～鎌倉前半	須恵杯、備前擂鉢、東播系、早島椀、緑釉皿・椀	520
溝—19	80	97～215	12～35	N79.5° E	〃	備前椀、土師皿・甕、早島椀、瓦器椀、白磁小皿・碗	1447
溝—20	22.5	90～135	14～18	N99.5° E	〃	備前椀、土師皿・甕、早島椀、瓦器小皿・椀、白磁小皿・碗	904
溝—21	22.0	42～95	17～20	東へやや蛇行	〃	備前椀、土師杯・甕、早島椀、瓦器椀	1174
溝—22	15.5	35～70	6～31	東へやや蛇行	〃	（備前椀、土師甕・早島椀、瓦器椀）	1175
溝—23	(3.5)	30～117	5	？	〃	早島椀	1191
溝—24	5.0	20～50	6	東へ弓状	〃	土師甕・皿他小片	1391

溝—25	2.4	34～62	35	東へくの字状	鎌倉前半	早島椀	1237
溝—26	(8.6)	76	9	N 9° W	鎌倉前半？	須恵壷、東播系こね鉢	S31
溝—27	12.0	75～160	24	？	？	須恵鉢、唐津椀	780
溝—28	39.2	115～40	11～26	N84.5° E	平安末～鎌倉	須恵杯・高杯、土師鍋、早島椀、白磁碗	65
溝—29	2.6	110～195	6	N101.5° E		土師椀	632
溝—30	15.1	16～60	5	東へL字状	（以下未掲載）	瓦質鍋他細片	355
溝—32	10.5	40～105	21	東へL字状？		なし	1465
溝—33	6.0	24～60	13	東へL字状		土師細片	300
溝—34	3.2	10～34	6	N76° E		早島椀	151
溝—35	3.0	26～44	7	N75° E		須恵細片	152
溝—36	6.5	10～50	12	N146° E		なし	1474
溝—37	4.2	62～114	18	N94° E		なし	1472
溝—38	9.4	74	11～23	N 3° E		備前擂鉢、土師高杯・甕	585
溝—39	4.8	27～78	11	N77° E		土師細片	B80
溝—40	15.5	102～155	28	北東へ弓状		なし	1466
溝—41	5.2	26～106	10	N29° E		なし	1473
溝—42	3.6	14～46	13	N8.5° E		早島椀他細片	356
溝—43	4.6	28～42	8	東へL字状		須恵・備前・土師細片	335
溝—44	6.4	12～46	10	N165° E		なし	1471
溝—45	5.0	18～44	6	N106.5° E		なし	1475
溝—46	10.5	57～95	8	N87° E		なし	1469
溝—47	7.5	48～110	19	N136° E		なし	1468
溝—48	37.5	85～150	14～19	N72.5° E		なし	1467
溝—49	8.8	30～78	8	N 3° E		なし	1476
溝—50	9.4	21～107	6	N160° E		黒色椀、土師小片	1120
溝—51	8.2	20～37	9	N77° E		須恵・土師小片	1063
溝—52	10.2	30～50	6～7	N75° E		須恵・土師・緑釉小片	1117
溝—53	7.5	105	26	N77° E		なし	S 2
溝—54	7.7	35～55	13	N101.5° E		土師小片	1038
溝—55	4.5	55～90	15	N113° E		なし	1470
溝—56	5.4	72～135	17～24	N13° W		須恵・土師小片	S 3
溝—57	5.0	20～72	12	南東へくの字状		土師小皿、須恵小片、黒色土器	1307
溝—58	1.9	40～107	28	N144° E		なし	960
溝—59	7.5	12～41	9	北東へL字状		なし	1479

溝—60	5.4	18～48	9～14	N13° W		土師細片	S22
溝—61	3.5	55～79	8	N169.5° E		なし	1447

井戸一覧表

遺構番号	形状		規模cm		深さ	形態	時期	出土遺物	備考	調査時遺構番号	地区
	平面	断面	長軸	短軸							
井戸—1	円	(A1)	74	68	(55)	木組	奈良～平安			B81	I5
井戸—2	円	A2	136	129	96	素掘	平安後半	須恵杯・盤、土師皿、黒色		89	E4
井戸—3	不整形	B3	152	145	67	素掘	鎌倉	備前甕		125	C2
井戸—4	不整形	B1	251	203	73	石組	鎌倉	備前擂鉢・椀、土師皿、瓦器		88	F4
井戸—5	楕円	B1	222	201	95	石組	鎌倉末	備前椀、早島椀、砥石		582	C14

土壙墓一覧表

遺構番号	形状		規模 cm			埋葬状況	時期	出土遺物	備考	調査時遺構名	地区
	平面	断面	長軸	短軸	深さ						
土壙墓—1	(隅丸方形)	(B2)	(117)	(41)	26	頭を北東に向ける	平安末～鎌倉	早島椀、瓦器	木棺痕跡あり	1452	H13
土壙墓—2	隅丸方形	A2	143	76	39	頭を南西顔を左横(北西)に向け屈葬	鎌倉前半	白磁碗、備前椀小皿、土師小皿、瓦器椀		1051	I13

土壙一覧表

遺構番号	形	規模 cm			時期	出土遺物	備考	調査時遺構番号	地区
	平面	長軸	短軸	深さ					
土壙—01	楕円	92	69	23	奈良	土師高杯		100	C 6
土壙—02	円？	45	(33)	46	平安	土師甕	袋状	99	D 6
土壙—03	楕円	76	62	45		土師甕	一部袋状	104	C 6
土壙—04	円	56	51	25	〃	土師甕	一部袋状	101	C 6
土壙—05	不整形	103	95	38	〃	なし	集石	651	G 8
土壙—06	円	38	36	23	〃	緑釉椀、土師小片		653	G 7
土壙—07	不整形	64	43	10	〃	土師椀・皿、黒色椀		716	F 9
土壙—08	円	200	199	6	〃	須恵杯・椀、灰釉皿、青磁碗		956	F11
土壙—09	円	94	77	23	〃	土師杯		799	F12
土壙—10	楕円？	144	(155)	32	鎌倉	備前鉢、早島椀	集石	126	F 6
土壙—11	不整形	131	122	61	〃	須恵椀、備前擂鉢、緑釉、灰釉、軒平瓦	集石	221	G 7
土壙—12	楕円	(98)	81	19	〃	備前擂鉢・椀	集石	903	C11
土壙—13	不整形	360	63	7	〃	土師小皿、瓦器小皿		1103	G13
土壙—14	円	116	73	18	〃	早島椀、緑釉、白磁小皿		1389	H13
土壙—15	楕円	(66)	(46)	40	〃	備前椀、土師小皿、瓦器椀		1169	E15
土壙—16	楕円	164	113	35	〃	土師杯・小皿、早島椀、瓦器	集石、土壙墓の可能性	920	E15
土壙—17	楕円？	189	94	24	〃	瓦質羽釜、土師小皿・椀	土壙墓の可能性	218	F 7
土壙—18	楕円？	125	(106)	31	〃	土師鍋・甕		124	C 5
土壙—19	楕円	146	106	16	〃	土師皿、瓦質羽釜、瓦器小皿		354	C 7
土壙—20—1	隅丸方形	270	247	14	〃	土師小皿・鍋、白磁小皿		189	D 7
土壙—20—2	不整形	347	(139)	11	〃	須恵・土師小片		190	D 7
土壙—21	不整形	414	147	12	〃	土師小皿、早島椀		186	D 6
土壙—22	不整形	(368)	178	18	〃	土師鍋・小皿、瓦器		98	B 4
土壙—23	不整形	(760)	187	21	〃	須恵杯、土師杯、土錘		S61	I 13/14
土壙—24	隅丸方形	(206)	?	19	〃	瓦器		S60	I 13/14
土壙—25	円	102	84	27		なし	（以下未掲載）	1456	B 4
土壙—26	不整形	144	94	42		なし		1453	F 4
土壙—27	楕円	(139)	(127)	18		土師三片		162	A 4
土壙—28	楕円	?	68	19		なし		1478	C 5
土壙—29	楕円	127	87	10		土師甕、備前細片		257	C 5
土壙—30	円	121	119	12		土師一片		256	C 5
土壙—31	楕円	(103)	59	15		土師・早島細片		237	D 5
土壙—32	不整形	(190)	61	14		かまど、須恵・土師小片		239	D 5
土壙—33	楕円	160	42	13		須恵・土師小片		238	D 5
土壙—34	楕円	(94)	(74)	30		土師小片		236	D 5
土壙—35	楕円	55	(45)	43		須恵一片	一部袋状	106	D 5
土壙—36	隅丸方形	142	102	17		土師細片		B46	J/K 5
土壙—37	楕円	?	72	22		なし		B82	K 5
土壙—38	楕円	90	54	30		なし		1455	B 6

土壙—39	円	81	77	30		土師甕？		216	C 6
土壙—40	円	71	61	22		土師二片		316	B 6
土壙—41	不整形	96	60	30		土師一片		319	B 6
土壙—42	円	70	56	22		なし	一部袋状	91	C 6
土壙—43	円	67	59	25		土師小片		92	C 6
土壙—44	不整形	374	367	10		かまど、土師杯・甕		339	C 6
土壙—45	楕円	127	59	9		須恵・土師細片		347	C 6
土壙—46	隅丸方形	71	46	15		須恵椀・土師甕細片		S 4	I 6
土壙—47	楕円	95	89	10		土師細片		S 8	I 6
土壙—48	不整形	109	(109)	32		須恵・土師小片		571	C 7
土壙—49	楕円？	(111)	91	37		なし		446	H 7
土壙—50	楕円	179	62	21		なし		1457	F 8
土壙—51	楕円	92	56	23		須恵甕、白磁皿、緑釉		672	G 8
土壙—52	楕円	172	112	26		なし		1460	D 9
土壙—53	楕円	129	102	19		土師二片、備前一片		1110	E/F 9
土壙—54	不整形	157	83	11		土師甕小片		1109	E 9
土壙—55	不整形	208	133	43		なし		1462	B11
土壙—56	隅丸方形	149	118	14		なし		1461	C 9
土壙—57	楕円	92	62	30		黒色椀、土師小片	底部に焼土塊	750	H10
土壙—58	円	52	50	85		土師甕細片	袋状	S 95	I 10
土壙—59	楕円	187	?	16		平瓦		1134	B14
土壙—60	楕円	75	58	15		なし		877	E12
土壙—61	隅丸方形	127	42	30		土師椀他小片	土壙墓の可能性	784	E12
土壙—62	不整形	(72)	(71)	(32)		なし	焼土層あり	1025	H12
土壙—63	不整形	92	(71)	27		なし		884	H12
土壙—64	不整形	110	90	20		黒色椀、白磁、須恵・土師・早島細片		1108	H13
土壙—65	不整形	(161)	120	27		須恵・土師・早島細片		1052	H13
土壙—66	不整形	133	86	35		土師・早島・瓦器細片		1433	I 13
土壙—67	?	(88)	(31)	12		土師甕		S 24	I 13
土壙—68	長方形	158	52	15		土師椀他小片	土壙墓の可能性	1054	H14
土壙—69	不整形	63	?	13		土師細片		1170	H14
土壙—70	隅丸方形	84	68	24		なし		1464	E15
土壙—71	不整形	131	91	(36)		なし		1008	E15
土壙—72	隅丸方形	108	77	12		なし		1463	F16

土器観察表

奈良

（一部図版に掲載していない遺構出土の土器も含まれるが、これは旧遺構名を記している。これは遺構番号（遺構）で示している。）

図番号	種別	器別	口径	底径	器高	色調	胎土	残存状況	形態・手法	遺構名
26—01	土師器	蓋				にぶい黄橙10ＹＲ6/4	砂粒多い	口縁部小片	全面丹塗り（表面剥離）。	建物—1柱穴
—02	土師器	杯	(12.0)	(9.4)		にぶい黄橙10ＹＲ6/4	砂粒多い	1/5	全面丹塗り？	建物—1柱穴
28—01	須恵器	蓋	(19.0)		(3.2)	灰N6/	砂粒多い	1/3	天井部逆時計回りのヘラケズリ、焼け歪み。	建物—2柱穴
—02	須恵器	蓋	(17.2)			灰5Ｙ6/1		1/8		建物—2柱穴
—03	土師器	杯	(12.0)	(8.4)		浅黄2.5Ｙ7/3		口縁部～底部1/6	丹塗り。	建物—2柱穴
34—01	土師器	杯身	(13.8)			淡橙5ＹＲ8/4		1/6	全面ヘラミガキ。全面丹塗り。	溝—1
—02	土師器	杯身	(15.2)	(12.0)	(3.0)	橙7.5ＹＲ7/6		1/10	全面丹塗り。	溝—1
—03	土師器	皿	(17.0)	(14.0)	(3.4)	にぶい褐7.5ＹＲ6/3		口縁部～底部1/4	全面丹塗り。	溝—1
—04	土師器	杯身	(17.2)	(13.2)	(5.0)	にぶい黄橙10ＹＲ7/2		1/3欠損	全面丹塗り。貼り付け高台。	溝—1
—05	土師器	盤蓋	23.2		(3.4)	にぶい黄7.5ＹＲ7/4		口縁部小片、つまみ部	全面丹塗り。？	溝—1
—06	土師器	蓋				にぶい黄橙10ＹＲ7/4		口縁部小片	全面丹塗り。	溝—1
—07	土師器	蓋				浅黄橙7.5ＹＲ8/4		口縁部小片	全面丹塗り？	溝—1
—08	土師器	皿	22	18	2.25	にぶい橙7.5ＹＲ7/4		1/8	全面丹塗り？	溝—1
—09	土師器	盤？	(24.0)			灰黄2.5Ｙ7/2		1/10	全面丹塗り？	溝—1
—10	土師器	皿	(26.2)			にぶい黄橙10ＹＲ7/4		1/10	全面丹塗り？	溝—1
—11	土師器	杯？	(23.6)	(18.7)	(3.05)	灰白10ＹＲ8/2		口縁部小片	全面丹塗り。	溝—1
—12	土師器	杯身	(24.0)	(20.8)	(4.1)	灰白10ＹＲ8/2		1/10	全面丹塗り。貼り付け高台。	溝—1
—13	土師器	盤		15.2		にぶい橙7.5ＹＲ7/4		1/8	全面丹塗り。貼り付け高台。	溝—1
—14	土師器	盤				にぶい黄橙10ＹＲ7/2		底部小片	全面丹塗り。貼り付け高台。	溝—1
—15	土師器	盤？				浅黄橙7.5ＹＲ8/3		底部小片	全面丹塗り。貼り付け高台。	溝—1
—16	土師器	高杯				にぶい黄橙10ＹＲ7/2		脚柱部	脚柱部八面体。全面丹塗り。	溝—1
—17	須恵器	杯蓋	12.1			灰10Ｙ6/1		口縁部3/4欠損	天井部ヘラケズリ？	溝—1
—18	須恵器	杯蓋				灰白5Ｙ7/1		天井部	天井部逆時計回りのヘラケズリ。	溝—1
—19	須恵器	杯蓋	14		3.1	灰白N7/		1/3	天井部逆時計回りのヘラケズリ。碁石状つまみ	溝—1
—20	須恵器	杯蓋				灰白N7/		天井部	天井部逆時計回りのヘラケズリ。	溝—1
—21	須恵器	杯蓋	(18.6)			灰白N7/		口縁部～天井部1/6	天井部逆時計回りのヘラケズリ。	溝—1
—22	須恵器	杯身	13	10.2	4.7	灰5Ｙ6/1	小砂粒多い	口縁部3/4欠損	焼成甘い。底部ヘラキリ？	溝—1
—23	須恵器	杯身	13.1	9.4	4.2	灰白N7/		3/1		溝—1
—24	須恵器	杯身	12.4	9.6	3.6	灰N6/		口縁部1/4～底部1/2	底部ヘラキリ？貼り付け高台。	溝—1
—25	須恵器	杯身	(14.7)	(11.2)	(3.5)	灰N6/		口縁一部底部1/4	底部ヘラキリ？貼り付け高台。	溝—1
—26	須恵器	杯身	13.6	10	4.5	灰N6/		口縁部1/4欠損	底部逆時計回りのヘラケズリ。×の窯印。	溝—1
—27	須恵器	杯	(17.0)	(11.4)	(4.6)	灰N6/		口縁部～底部小片	体部外傾しながら直線的に立ち上がる。	溝—1
—28	須恵器	杯身		12.6		灰N5/		底部2/3	貼り付け高台。	溝—1
—29	須恵器	杯身		(13.8)		灰白N7/		体部～底部1/5	貼り付け高台。深い形態の杯。	溝—1
—30	須恵器	盤蓋	(26.6)			灰白5Ｙ7/1		口縁部～天井部1/10	底部逆時計回りのヘラケズリ。	溝—1
—31	須恵器	盤蓋	(26.6)			灰白7.5Ｙ7/1		口縁部～天井部1/6	底部逆時計回りのヘラケズリ。	溝—1
—32	須恵器	盤	(26.8)	(20.8)	(3.3)	灰白N7/		口縁部1/4底部1/2		溝—1
—33	須恵器	高杯				灰白N7/		杯底部～脚部	脚は筒部からハの字状に開く。	溝—1
—35	土師器	小皿	(7.1)	(5.6)	(1.35)	灰黄褐10ＹＲ5/2		1/2	底部ヘラキリ？	溝—1
—36	備前	椀		5.4		青灰5ＰＢ5/1		体部～底部小片	底部イトキリ。	溝—1
—37	早島	椀	(12.7)	(5.2)	(3.3)	灰白10ＹＲ8/2		口縁部1/8底部1/3	貼り付け高台。	溝—1
—38	土師器	甕	(27.7)			灰黄褐10ＹＲ6/2	砂粒多い	口縁部小片	外部ハケ後ナデ。	溝—1
38—01	須恵器	杯蓋	(15.8)			灰10Ｙ6/1	小砂粒含む	口縁部～天井部1/5		溝—2

38—02	須恵器	杯蓋	16.8		2.85	灰白5Y7/1		1/3	逆時計回りのヘラケズリ。偏平な宝珠つまみ	溝—2
—03	須恵器	杯蓋				灰N6/		天井部1/3	逆時計回りのヘラケズリ。碁石状のつまみ。	溝—2
—04	須恵器	杯蓋	16			灰N5/		口縁部～天井部1/6	天井部逆時計回りのヘラケズリ。	溝—2
—05	須恵器	杯身	14.8	10	5	灰N6/		2/3	内面・外面底一部に漆付着。	溝—2
—06	須恵器	杯身		9.4		灰N6/		体部～底部1/5	貼り付け高台。	溝—2
—07	須恵器	杯身		(9.8)		灰N6/		底部2/3	高台内逆時計回りのヘラケズリ。	溝—2
—08	須恵器	杯身		11.4		灰白N7/		底部1/2	貼り付け高台。	溝—2
—09	須恵器	杯？	15.6			灰N6/		口縁部～体部1/5	深い杯？	溝—2
—10	須恵器	盤蓋	(32.9)			灰10Y6/1		口縁部～天井部1/3		溝—2
—11	須恵器	盤		(18.8)		灰N5/	小砂粒多く含む	底部1/3	高台内逆時計回りのヘラケズリ。	溝—2
—12	須恵器	甑	(27.1)			灰白5Y7/1		口縁部～胴部1/10	耳状の把手が付く。(胴部最大径30cm)	溝—2
—13	須恵器	壺？		3.4		灰N6/		胴部～底部	底部イトキリ。内部に水引き痕よく残る。	溝—2
—14	須恵器	高杯				灰白N8/	小砂粒含む	脚部		溝—2
—15	須恵器	短頸壺	(10.7)	(7.8)	6.5	灰5Y6/1		1/8	体部下半にヘラガキ「我」。	溝—2
—16	須恵器	甕				灰N6/		頸部～体部	内面青海波擦り消し。外面平行タタキメ。	溝—2
40—1	須恵器	俵形壺	(10.0)			青灰5PB6/1		口縁部～体部上半	外面平行叩き後ナデ、内面青海波後ハケ。	溝—8
42—01	須恵器	杯蓋	21		4.7	灰白5Y7/1		ほぼ完形	金属器模倣。天井部ヘラケズリ、輪状つまみ	土器埋納遺構
—02	須恵器	杯身	19	10.4	6	灰N6/		ほぼ完形	金属器模倣。体部下半に稜。高台内×黒印。	土器埋納遺構
43—01	土師器	高杯		14.4		橙5YR7/6	砂粒多い	杯部～脚部	丹塗り。不均衡な九面体。杯部内面暗文？	土壙—1
44—02	土師器	杯	(12.2)	(9.0)	(3.1)	にぶい橙5YR7/4		1/4	全面丹塗り？	67（ピット）
—03	土師器	高杯	26.5			にぶい橙7.5YR7/4			皿部1/3、脚柱部九面体	67（ピット）
—04	土師器	高杯？				にぶい黄橙10YR7/4		口縁部小片		63（柱穴）
—05	土師器	杯	(11.8)	(7.2)	(2.7)	浅黄橙7.5YR8/3		1/3	内外面丹塗り？	63（柱穴）
45—01	須恵器	小皿	7	6	1.6	灰N6/		完形	底部ヘラキリ。	たわみ—1
—02	須恵器	皿	16	14.8	2.8	灰白2.5YR8/1	砂粒多い	口縁部1/3欠損	底部逆時計回りヘラキリ。	たわみ—1
—03	須恵器	鉢	(20.6)			灰5Y6/1		口縁部一部と体部	金銅鉢模倣。内面ヘラ調整の痕有り。	たわみ—1
46—01	土師器	杯蓋	(26.4)			にぶい黄橙10YR7/3		口縁部小片	全面丹塗り。	包含層
—02	土師器	盤？	(29.2)			にぶい黄橙10YR7/4		1/6	丹塗り？	包含層
—03	土師器	皿	(25.6)			浅黄橙7.5YR8/3		口縁部～体部1/2	全面丹塗り。	包含層
—04	土師器	高杯				にぶい黄橙10YR7/2		皿部～脚部	脚柱部12面体。全面丹塗り。	包含層
—05	土師器	高杯				灰白2.5Y8/2		脚柱部	全面丹塗り。脚柱部11面体。	包含層
—06	須恵器	杯蓋	(14.2)		2.7	灰白N7/		1/3	天井部1/2程逆時計回りのヘラケズリ。	包含層
—07	須恵器	杯蓋	(14.2)			灰7.5Y6/1		口縁部小片		包含層
—08	須恵器	杯蓋	(15.2)			灰白N7/		口縁部1/4	天井部全体に逆時計回りのヘラケズリ。	包含層
—09	須恵器	杯蓋	15.4			灰白7.5Y7/1		口縁部1/4	天井部はとんど逆時計回りのヘラケズリ。	包含層
—10	須恵器	杯蓋	(17.0)			青灰5B6/1		口縁部1/4	天井部1/2程逆時計回りのヘラケズリ。	包含層
—11	須恵器	杯蓋	(18.4)			灰白N7/		口縁部小片		包含層
—12	須恵器	杯蓋				灰白N7/		天井部小片	金属器模倣。輪状つまみ。	包含層
—13	須恵器	杯蓋	(15.4)		(2.5)	灰白2.5Y7/1		1/8	碁石状のつまみ。天井部半分程ヘラケズリ。	包含層
—14	須恵器	杯蓋	15			灰N7/		口縁部小片	天井部1/2程逆時計回りのヘラケズリ。	包含層
—15	須恵器	杯蓋	(14.8)			灰白N7/		口縁部1/4	天井部1/2程逆時計回りのヘラケズリ。	包含層
—16	須恵器	杯蓋				灰10Y6/1		天井部小片	丸みの宝珠つまみ。	包含層
44—17	土師器	杯蓋				浅黄橙10YR8/3		口縁部・天井部小片	碁石状のつまみ。全面丹塗り。	包含層
—18	須恵器	杯蓋	(25.2)			青灰5PB6/1		口縁部小片	天井部逆時計回りのヘラケズリ。	包含層

44—19	須恵器	杯蓋	(28.2)			青灰５ＰＢ６/１		口縁部小片	天井部１/２程逆時計回りのヘラケズリ。	包含層
—20	須恵器	小皿	7.2	5.7	1.8	灰白7.5Ｙ７/１		ほぼ完形	底部ヘラキリ。	包含層
—21	土師器	小椀	7.8	4.5	2.9	浅黄橙10ＹＲ８/４	小豆色の粒含む	４/５	貼り付け高台。	包含層
—22	土師器	杯	(12.3)			灰黄褐10ＹＲ６/２	小砂粒多い	口縁部～体部１/４	底部ヘラキリ後、ナデ。	包含層
—24	土師器	小皿	7.7	5.7	1.5	橙7.5ＹＲ７/６			底部ヘラキリ？	包含層
—27	須恵器	杯身	12.2	8	3.4	灰Ｎ６/		１/２	底部逆時計回りヘラケズリ。貼り付け高台。	包含層
—28	須恵器	杯身	(14.4)	(11.0)	3.5	灰Ｎ６/		口縁部小片		包含層
—29	須恵器	杯身	(14.4)	(10.3)	4.4	灰白Ｎ７/		１/５		包含層
—30	須恵器	杯身	16.4	11.6	3.8	灰Ｎ６/		１/４	貼り付け高台。	包含層
—31	須恵器	杯身	(17.6)	(12.8)	4.1	紫灰５ＲＰ６/１		１/４		包含層
—32	土師器	杯身	(12.4)	6.9	3.75	淡橙５ＹＲ８/４		１/３	全面丹塗り。	包含層
—33	須恵器	杯身	(14.4)	9.2	5.1	灰Ｎ８/		１/４	貼り付け高台。	包含層
—34	須恵器	椀？		8.8		灰白Ｎ７/１	小礫混入	体部～底部	貼り付け高台。	包含層
—35	須恵器	甕	(12.5)			青灰５Ｂ５/１	小砂粒多い	口縁部１/４	口縁端部ほぼ水平。	包含層
—36	須恵器	甕	(24.8)			青灰５ＰＢ５/１		口縁部１/６	内面青海波文、外面擬格子タタキメ。	包含層
—37	須恵器	甕	(35.2)			灰Ｎ６/		口縁部小片	内面青海波文、外面擬格子タタキメ。	包含層

平安

図番号	種別	器別	口径	底径	器高	色調	胎土	残土状況	形態・手法	遺構名
49—01	須恵器	杯蓋				灰白2.5Ｙ７/１		口縁部小片		建物—５
50—01	土師器	杯	15.4	13.8	3.4	にぶい黄橙ＹＲ７/４		１/２		建物—６
—02	須恵器	壺	6.3			青灰５ＰＢ６/１		口縁部～頸部	薄手のしっかりしたつくり。	建物—６
51—01	土師器	杯	(12.8)			明赤褐５ＹＲ５/８		口縁部１/５		建物—７
52—01	土師器	杯	13	(5.4)	3.2	にぶい橙５ＹＲ７/４		完形		建物—７
—02	土師器	甕				黒褐10ＹＲ３/１	砂粒多い	口縁部～体部	体部内外面ハケメ。	柱穴列—３
53—01	土師器	杯	(11.2)	(7.2)	3.1	橙５ＹＲ６/６		１/６		建物—８
54—01	土師器	皿	(12.0)	(8.1)	1.8	明赤褐５ＹＲ５/６		１/８		建物—９
—02	土師器	杯	13	6	3.7	暗灰Ｎ３/	小砂粒多い	１/６	二次的に火を受ける。	建物—９
—03	土師器	椀		(8.0)		にぶい黄橙10ＹＲ７/３		底部小片	円盤高台。内底面に段。器形須恵器に類似。	建物—９
55—01	土師器	椀		(9.6)		褐灰7.5ＹＲ６/１	小砂粒含む	底部小片	托上椀	溝—９
—02	土師器	甕	(23.2)	(9.6)		明褐黄10ＹＲ７/６	小砂粒含む	口縁部小片		溝—９
56—01	須恵器	壺？	(12.0)			灰Ｎ６/		口縁部小片		溝—11
57—1	須恵器	杯	12.1	6	3.1	灰白Ｎ７/	小砂粒含む	１/２	底部ヘラきり。	溝—12
—2	土師器	椀？		6.8		浅黄橙7.5ＹＲ８/３	小砂粒含む	底部高台２/３	張り込み高台。	溝—12
58—01	土師器	椀				にぶい黄2.5ＹＲ６/３		口縁部～体部小片		溝—14
—02	土師器	椀	(12.6)			橙５ＹＲ６/６		１/８	口縁部外側ナデ、以下はそのまま。	溝—14
—03	土師器	皿	(13.8)	(8.9)	(3.1)	にぶい橙７/３		１/６	底部ヘラキリ？	溝—14
—04	須恵器	杯？	(15.0)			灰Ｎ６/		口縁部～体部小片		溝—14
—05	土師器	杯？		(8.6)		にぶい橙7.5ＹＲ７/３		底部１/４	貼り付け高台。	溝—14
—06	須恵器	杯				灰白５Ｙ７/１		体部～底部小片	底部ヘラキリ？	溝—14
59—01	土師器	杯	(11.2)	8.2	3	橙５ＹＲ６/６	小砂粒含む	口縁部～底部２/３	底部ヘラキリ？	溝—15
—02	土師器	杯	12.4	6.8	3.1	橙7.5ＹＲ７/６	小石含む	２/３	底部イトキリ。	溝—15
60—01	須恵器	杯？		8		杯白2.5Ｙ８/２	微砂多く含む。	体部～底部１/２	体部外面ヘラガキ沈線２条。貼り付け高台。	溝—16
61—01	土師器	甕	(15.4)		16.8	にぶい橙7.5ＹＲ７/４	砂粒多い	口縁部～底部	外面細いハケ。	溝—17
—02	土師器	甕	(25.9)			にぶい橙2.5ＹＲ６/４		口縁部１/２～体部	口縁部内側・外面荒いハケ内面下半指押さえ	溝—17
62—01	土師器	皿	9.9		2.7	灰白５Ｙ７/１		１/２	底部押えによって調整する？	井戸—２
—02	土師器	皿	11.7	7	2.7	灰白Ｎ８/		１/２		井戸—２
—03	土師器	皿	(11.7)	(5.0)	2.4	灰白2.5Ｙ７/１		１/６		井戸—２
—04	須恵器	杯？	12.8	6.6	4.5	灰Ｎ５/	小砂粒多い	２/３	底部ヘラキリ？貼り付け高台。内外面緑釉。	井戸—２

62—05	須恵器	盤		(12.4)		灰白7.5Y 7/1	緻密	底部小片	貼り付け高台。	井戸—2
63—01	土師器	甕	(15.4)		(15.0)	明褐灰7.5YR 7/2		口縁部一部以外は4/5	外面上半タテ、下半タテハケ後ヨコハケ。	土壙—2
64—01	土師器	甕	(11.7)			灰白10YR 8/2	砂粒含む	口縁部～体部	外面タテハケ。	土壙—3
65—01	土師器	甕	(27.4)			褐灰10YR 6/1	緻密	口縁部～体部1/5	内面ヨコハケ、外面タテハケ。	土壙—4
68—01	土師器	Ⅲ	11	7.2	1.8	にぶい橙7.5YR 7/3		1/2	底部ヘラキリ。	土壙—7
—02	土師器	Ⅲ	(12.4)	(9.6)	(2.0)	灰白2.5Y 8/2		口縁部～体部小片		土壙—7
—03	土師器	Ⅲ	(13.5)			橙7.5YR 7/6		口縁部～体部1/5		土壙—7
—04	土師器	椀				灰N 5/	砂粒多い	口縁部～体部1/5		土壙—7
—05	土師器	杯？	(13.0)			にぶい橙7.5YR 7/4		口縁部～体部小片		土壙—7
—06	土師器	椀			9.5	にぶい橙7.5YR 7/4	砂粒多い	底部	1.5cm程の足高高台。	土壙—7
—07	土師器	椀		9.15		にぶい橙10YR 7/2	微砂粒多い	底部1/2	1cm程の高い高台。	土壙—7
69—01	須恵器	杯	(13.0)	(8.2)	(3.4)	淡橙5YR 8/3		1/4	体部内面に沈線。	土壙—8
—02	須恵器	杯	(14.2)	(6.8)	(3.8)	灰白N 8/		1/5	底部外周ヘラケズリ。	土壙—8
—03	土師器	杯	(17.3)			橙5YR 7/6		口縁部1/6	体部～口縁部ラッパ条に開く。	土壙—8
—04	須恵器	椀		(7.9)		灰白5Y 7/1		体部～底部1/4	三角形の貼り付け高台。	土壙—8
70—01	土師器	杯	11.8	8.5	3.7	浅黄橙10YR 8/4	小豆色の粒含む	口縁具1/3欠損	底部板目。体部と底部の境をヘラで削る。	土壙—9
71—01	土師器	椀	(12.3)	5.1	2.5	浅黄橙10YR 8/4	砂粒多い	1/5	口縁部外面ナデ。底部ヘソ椀状。	たわみ—2
—02	須恵器	椀	(16.3)	(8.0)	(5.2)	灰N 6/	砂粒多い	1/4	椀状の底部に小さく高台を貼り付ける。	たわみ—2
72—01	土師器	杯	11.7	7.3	3.1	にぶい黄橙10YR 7/2		完形	底部ヘラキリ。内外面ナデ。	ピット—5
—02	土師器	杯	11.6	6.8	3.4	橙7.5Y 7/6	小豆色の粒含む	完形	底部ヘラキリ。内部面ナデ。燈心の痕有り。	ピット—5
—03	土師器	杯	11.9	7	2.9	灰黄2.5Y 7/2	小豆色の粒含む	ほぼ完形	底部ヘラキリ。内外面ナデ。	ピット—5
73—01	土師器	杯？	12.8		3.1	にぶい褐7.5YR 6/3	小石粒含む	口縁部1/2欠損	内外面ヘラ状工具で調整。	ピット—6
74—07	須恵器	杯？	(14.2)			灰N 5/	小砂粒多い	口縁部～体部1/4	深杯。口縁端部わずかに外反。	ピット—7
74—08	土師器	甕	16			黄褐2.5Y 5/6		1/3	内面ヨコ・外面タテハケ、底部へは不規則。	ピット—8
74—09	土師器	椀	12.9	8.6	5.05	黄橙10YR 7/3	小豆色の粒含む	ほぼ完形	足高高台。口縁端部を丸く小さく張り出す。	ピット—9
74—10	土師器	Ⅲ？	17.2			にぶい橙7.5YR 6/4		口縁部1/5高台部欠損	外面沈線6本前後。見込部にヘラガキ文様。	ピット—10
74—11	土師器	甕	(26.1)			にぶい黄橙10YR 7/2	砂粒多い	口縁部～体部	内面体部細い横内面口縁部・外面荒い縦ハケ。	ピット—10
75—01	須恵器	杯身？	(11.6)	(7.8)		褐灰10YR 4/1		口縁部小片		包含層
75—02	土師器	杯	(13.4)		2.95	灰褐7.5YR 6/2		1/4	底部指押さえ。	包含層
75—03	土師器	杯	(14.3)	8.2	3.6	灰白7.5YR 8/2		口縁部3/4欠損	底部ヘラキリ。	包含層
75—04	須恵器	杯	(12.8)	6.4	3.3	灰白N 7/		1/4	底部板状圧痕？ヘラキリ痕？	包含層
75—05	土師器	杯	(13.4)	(7.6)	3.1	灰白2.5YR 8/1		1/6	底部ヘラキリ？	包含層
75—06	土師器	杯	(12.6)	6.2	4.95	淡赤橙2.5YR 7/4		1/8	貼り付け高台。	包含層
75—07	土師器	椀	12.8	5.8	4.5	明褐灰7.5YR 7/2	小砂粒多い	口縁部3/4欠損	貼り付け高台。	包含層
75—09	土師器	椀	(15.6)	6.3	5.2	明赤灰2.5YR 7/2	小豆色の粒含む	1/2	1.5cm程度の足高高台。	包含層
75—10	早島？	椀		(7.0)		灰白10YR 8/1		底部1/2	1cm近くの貼り付け高台。	包含層
75—11	土師器	椀	(16.0)	6	5	明褐灰7.5YR 7/2		1/6	貼り付け高台。	包含層

平安末～鎌倉初（建物）

図番号	種別	器別	口径	底径	器高	色調	胎土	残存状況	形態・手法	遺構名
78—01	土師器	小皿	8.8	5.4	1.5	にぶい黄橙10YR7/4		1/5		建物—10
—02	土師器	小皿	9.6	8.6	1.6	灰7.5Y6/1		1/4	瓦器の形態を模倣か？	建物—10
80—01	土師器	杯	(12.2)	(7.8)	(3.1)	にぶい橙5YR6/3		1/3	丹塗り。	建物—12
84—01	須恵器	壺	10.8			灰白N7/	緻密	口縁部小片		建物—14
86—02	土師器	杯身		7.9		にぶい橙7.5YR6/4	砂粒多い		貼り付け高台。	建物—15
88—01	土師器	小皿	8.9	6.5	1.65	にぶい橙7.5YR7/3	小豆色の粒含む	口縁部2/3欠損	底部板目後ヘラで削り調整？	建物—16
—02	早島	椀				淡黄2.5YR8/3		口縁部小片	内外面ヘラミガキ。	建物—16
—03	土師器	杯？	(16.4)			橙7.5YR6/6		口縁部小片		建物—16
—04	備前	椀				黄灰2.5Y6/1		口縁部小片		建物—16
91—01	土師器	小皿	(8.2)	(5.1)	0.8	にぶい黄橙10YR6/4		1/6		建物—18
—02	土師器	小皿	9	6.4	1.55	黄褐10YR5/6		1/4	底部ヘラキリ。	建物—18
—03	土師器	小皿	(9.0)	(6.2)	(1.75)	明黄褐10Y6/6		1/4	底部ヘラキリ。	建物—18
—04	土師器	小皿	(9.2)	(6.6)	1.7	にぶい黄橙10YR7/4	小豆色の粒含む	1/5	底部ヘラキリ。	建物—18
—05	土師器	小皿	9.8	6.8	1.4	にぶい黄橙10YR7/4		1/6		建物—18
—07	土師器	杯				にぶい橙7.5YR7/2	小豆色の粒含む			建物—18
—08	備前	椀		4		灰N7/	微砂粒含む	体部～底部	底部イトキリ。	建物—18
—09	土師器	小皿				明褐7.5YR5/6	小豆色の粒含む	1/8		建物—18
92—01	須恵器	杯	(12.6)	(7.2)	(3.8)	灰N6/		1/5	底部ヘラキリ。外面緋襷状模様。	柱穴列—6
—02	備前	椀	(14.2)	(6.0)	(4.75)	灰N6/		1/2	底部イトキリ。	柱穴列—6
97—01	土師器	小皿	(7.5)	(5.4)	1.1	灰白2.5Y8/1		1/6	底部ヘラキリ。	建物—20
—02	土師器	小皿	(8.2)	(5.7)	1.1	灰黄2.5Y7/2		1/5	底部ヘラキリ。	建物—20
—03	備前	椀				灰7.5Y5/1		口縁部小片		建物—20
—04	土師器	杯？				にぶい黄橙10YR5/4		口縁部～体部小片		建物—20
—05	土師器	杯	(14.0)	(7.2)	(3.2)	にぶい橙7.5YR7/4		1/3	底部ヘラキリ。	建物—20
—06	早島	椀	(14.6)			灰白7.5YR8/2		1/5		建物—20
—07	早島	椀	(15.0)	(6.4)	(5.6)	灰白2.5Y8/1		口縁部～高台部小片	貼り付け高台。内面丁寧な仕上げ。	建物—20
—08	備前	椀	(16.4)			灰白7/		口縁部1/4		建物—20
—09	須恵器	甕	(18.2)			灰N5/	緻密	口縁部1/4	外面平行タタキメ？内面ナデ。	建物—20
99—01	土師器	小皿	(7.4)	5.4	1.1	にぶい黄橙10YR7/3		1/5	底部ヘラキリ。	建物—21
—02	土師器	杯？	(13.6)			灰黄2.5Y6/2		口縁部1/6		建物—21
—03	早島	椀	(15.0)			灰白2.5Y8/2	微砂粒含む	口縁部小片	内面丁寧な仕上げ。	建物—21
—04	備前	椀				灰白2.5Y8/1		口縁部小片	口縁部外面重ね焼き痕跡。	建物—21
100—01	土師器	小皿	(9.0)	(7.0)	(1.2)	にぶい黄橙5YR6/4		1/3	底部ヘラキリ。燈明皿？	建物—22
—02	土師器	皿	(15.5)	(8.2)	2.9	灰白10YR8/2		1/6	底部ヘラキリ。	建物—22
—03	土師器	甕				にぶい黄褐10YR5/3		口縁部1/6		建物—22
101—01	土師器	小皿	(7.8)			橙5YR6/6		口縁部1/6	台付小皿	建物—23
—02	早島	椀		6		灰白2.5Y8/1		底部	貼り付け高台。	建物—23
—03	早島	椀		5.2		黄灰2.5Y4/1		底部1/4	貼り付け高台。	建物—23
—04	早島	椀		6.2		灰白10YR8/1		底部1/4	貼り付け高台。	建物—23
—05	備前	椀				灰N4/		口縁部1/10		建物—23
103—1	早島	椀				灰白2.5Y8/1		口縁部小片		柱穴列—8
—2	備前	椀	15.5	6.6	5.1	灰白7.5Y7/1		1/3	底部イトキリ。	柱穴列—8
105—01	須恵器	杯蓋				明青杯5PB7/1		口縁部小片		溝—18
—02	須恵器	杯身		(9.4)		灰白5Y8/1		底部1/4	貼り付け高台。	溝—18
—03	須恵器	甕				青灰10BG5/1		胴部小片	内面青海波文、外面格子タタキメ。	溝—18
—04	土師器	椀		(7.7)		浅黄橙10YR8/3		底部1/4		溝—18
—05	土師？	椀		6.2		浅黄橙10YR8/3		底部1/2	底部イトキリ。	溝—18
—07	早島	椀		4.2		灰白2.5Y8/1		底部のみ	貼り付け高台。	溝—18
—08	早島	椀	(13.6)			灰白2.5Y8/1		口縁部～体部1/8	内面ヘラ仕上げ、部分的にヘラミガキ状。	溝—18
—09	土師器	椀	(15.3)			浅黄橙7.5YR8/3		口縁部～体部小片	内面ヘラ仕上げ、口縁端部丸く外に出る。	溝—18
—10	瓦質	羽釜				灰白N7/		口縁部細片		溝—18

105—11	土師器	甕	(28.9)			褐灰7.5YR4/1		口縁部～体部1/8	内面横方向、外面縦方向の細いヘケメ。	溝—18
—12	土師器	甕				黒褐10YR3/1	小砂粒多い	口縁部小片	口縁部横方向の荒いヘケメ。	溝—18
—14	備前	播鉢				明青灰5PB7/1		口縁部小片	条線11十？本	溝—18
—16	備前	播鉢						口縁部小片		溝—18
107—01	土師器	小皿	8.3	6.4	1.4	明黄褐10YR7/6		1/3	底部ヘラキリ。	溝—19
—02	土師器	小皿	8.4	6	1.3	橙8YR7/4		1/3	底部ヘラキリ。	溝—19
—03	土師器	小皿	9	6.5	1.3	にぶい橙7.5YR7/4		1/2		溝—19
—05	早島	椀	15.4			灰白2.5Y8/1		底部・高台部1/4	貼り付け高台。内面丁寧な仕上げ。	溝—19
—06	早島	椀	(14.0)			灰白10YR8/1		口縁部1/6	口縁端部少し外反。内面ヘラミガキの痕跡。	溝—19
—07	備前	椀	(13.9)	(5.8)	(5.3)	灰N4/		1/3	底部イトキリ。	溝—19
—08	備前	椀	13.5	6	5.4	灰N6/		口縁部～底部1/2	底部イトキリ。	溝—19
—10	備前	椀	(14.0)			灰N6/	微砂粒	口縁部～体部	体部半球状の丸み。口縁部はぼ垂直に立つ	溝—19
—11	備前	こね鉢	(26.5)			灰N6/		口縁部～体部	口縁端部丸く収める。	溝—19
—12	土師器	鍋	(28.6)		(17.0)	にぶい橙5YR6/3	砂粒多い	口縁部～底部1/5	内面ナデ、外面ランダムなハケメ。	溝—19
—13	土師器	甕？	(31.0)			黒褐10YR3/1		口縁部～体部1/6	内面横方向のハケメ。	溝—19
—14	土師器	甕？	20			橙5YR6/6		口縁部～体部1/6	内面ヨコハケメ。外面？	溝—19
—15	土師器	甕	(38.5)			にぶい黄橙10YR6/3		口縁部～体部小片	内面荒いハケ、外面荒いハケ後ナデ。	溝—19
—16	土師器	甕？	(42.0)			暗灰黄2.5Y5/2		口縁部～体部1/6	内面横方向、外面立方向のヘケメ。	溝—19
—17	備前	椀			5.4	灰5Y6/1		体部～底部	底部イトキリ後、貼り付け高台。	溝—19
—18	土師器	杯		9.6		橙5YR7/6		体部～底部	底部ヘラキリ。	溝—19
109—01	土師器	小皿	7.8	6	1.6	にぶい褐7.5YR5/4		完形	底部ヘラキリ。	溝—20
—02	土師器	小皿	8.2	6	1.55	にぶい黄橙10YR5/3		ほぼ完形	底部ヘラキリ。	溝—20
—03	土師器	小皿	(7.9)	(6.1)	(1.3)	にぶい黄橙10YR6/4		1/3	底部ヘラキリ。	溝—20
—04	土師器	小皿	(8.2)	(5.3)	(1.6)	にぶい黄橙10YR6/3		1/3	底部ヘラキリ。	溝—20
—05	土師器	小皿	8.3	6	1.2	にぶい橙7.5YR7/3		1/3	底部ヘラキリ。	溝—20
—06	土師器	小皿	(8.2)	(5.7)	(1.3)	橙2.5YR6/3		1/2		溝—20
—07	土師器	小皿	8.7	6.5	1.4	にぶい黄2.5Y6/3		完形	底部ヘラキリ。	溝—20
—08	土師器	小皿	9	6.1	1.6	にぶい橙7.5YR7/4		1/2	底部ヘラキリ。	溝—20
—09	土師器	小皿	8.65	6.4	1.4	にぶい褐7.5YR6/3		口縁部1/3欠損	底部ヘラキリ。	溝—20
—10	土師器	小皿	8.2	5.8	1.2	にぶい黄橙10YR6/4		1/2	底部ヘラキリ。	溝—20
—11	土師器	小皿	8.8	6.7	1.2	にぶい黄橙10YR6/4		完形	底部ヘラキリ。	溝—20
—12	土師器	小皿	8.3	6.4	1.35	にぶい橙7.5YR7/4		完形	底部ヘラキリ。	溝—20
—13	土師器	小皿	8.55	5.8	1.75	灰黄2.5Y6/2		1/2	底部ヘラキリ。	溝—20
—14	土師器	小皿	8	6.1	1.35	灰黄褐10YR6/2		2/3	底部ヘラキリ。	溝—20
—15	土師器	小皿	8.7	6.3	1.3	暗灰黄2.5Y5/2		完形	底部ヘラキリ。	溝—20
—16	土師器	小皿	8.4	6.3	1.4	褐灰7.5YR6/1		1/2	底部ヘラキリ。	溝—20
—17	土師器	小皿	8.3	6.7	1.2	にぶい黄褐10YR6/4		完形	底部ヘラキリ。	溝—20
—18	土師器	小皿	8.05	5.65	1.4	灰褐7.5YR6/2		1/2	底部ヘラキリ。	溝—20
—19	土師器	小皿	8.1	6	1.5	にぶい橙7.5YR6/4		ほぼ完形	底部ヘラキリ。	溝—20
—20	土師器	小皿	8.6	6.4	1.3	にぶい黄褐10YR7/2		1/2	底部ヘラキリ。	溝—20
—21	土師器	小皿	8.7	6.5	1.4	にぶい橙7.5YR7/4		完形	底部ヘラキリ。	溝—20
—22	土師器	小皿	8.8	7	1.5	灰黄7.5Y7/2		完形	底部ヘラキリ。	溝—20
—23	土師器	小皿	8.4	5.8	1.6	にぶい黄褐10YR6/3		3/4	底部ヘラキリ。	溝—20
—24	土師器	小皿	8.8	6.8	1.45	にぶい黄橙10YR7/3		ほぼ完形	底部ヘラキリ。	溝—20
—25	土師器	小皿	8.7	6.6	1.55	にぶい黄橙10YR7/3		ほぼ完形	底部ヘラキリ。	溝—20
110—26	土師器	杯	(13.7)	(10.2)	(3.3)	にぶい黄橙10YR7/3		1/3	歪み有。底部ヘラキリ。	溝—20
—27	土師器	杯	(14.3)	(9.7)	(3.0)	にぶい橙7.5YR6/6		1/2	歪み有。	溝—20
—28	土師器	杯	15.2	10.4	3.3	にぶい黄橙10YR7/2		口縁部1/3欠損	底部板目状圧痕あり。	溝—20
—29	土師器	杯	(14.5)	(10.2)	(3.35)	にぶい黄橙10YR6/3		口縁部1/2欠損	底部ヘラキリ。	溝—20
—30	早島	椀	13.2			杯白2.5Y8/1	砂粒多い	口縁部～体部1/4	内外面部分的にヘラミガキ。	溝—20
—31	早島	椀	14.7			杯白2.5Y8/2	緻密	口縁部1/3～体部	内外面部分的にヘラミガキ。	溝—20
—32	早島	椀	(14.6)			杯白2.5Y8/1	砂粒多い	口縁部1/6	内面ヘラミガキ。	溝—20

110—33	早島	椀	14.2	6	5.3	杯白2.5Y 8/1	緻密	口縁部1/10～底部1/2	貼り付け高台。見込部に重ね焼き痕跡。	溝—20
—34	早島	椀	14.6	6.4	4.8	にぶい黄褐10YR 7/3	緻密	1/2	内面部分的にヘラミガキ。外面一部篦で削る？	溝—20
—35	早島	椀	15			淡黄2.5Y 8/3	砂粒含む	口縁部1/3～体部	内面ヘラミガキ。	溝—20
—36	早島	椀	14.8	6.2	5.2	灰白2.5Y 8/1	緻密	ほぼ完形	内面丁寧な台ヘラミガキ。外面一部篦で削る？	溝—20
—37	土師器	鍋	(33.0)			褐灰10YR 6～4/1		口縁部小片	内面ヨコハケ、外面右下がりのハケ。	溝—20
—38	備前	甕				灰5Y 4/1	小石粒含む。	口縁部小片		溝—20
—39	備前	小皿	(8.2)	(5.0)	(1.7)	灰白5Y 7/1		1/2	底部イトキリ。	溝—20
—40	備前	小皿	9.2	5.5	1.95	灰N 6/		3/4	底部イトキリ。	溝—20
—41	備前	小皿	9.2	5.5	1.95	灰N 6/		3/4	底部イトキリ。	溝—20
—42	備前	椀	14.2	6.5	4.8	灰N 6/			底部イトキリ。	溝—20
—43	備前	椀	14.4	5	4.6	灰N 5/		1/3	歪み有、底部イトキリ。	溝—20
—44	備前	椀	15.5	6.4	4.4	暗灰N 3/		2/3	底部イトキリ。	溝—20
—45	備前	椀	(16.0)	(6.8)	(5.45)	灰白N 7/	雲母含	口縁部～底部1/4	底部イトキリ。	溝—20
—46	備前	椀	15.3	6.5	4.85	灰N 6/	緻密	ほぼ完形	底部イトキリ。内外面ロクロ水引跡。	溝—20
—47	備前	椀	14.5	6.4	4.7	灰白7.5Y 7/1	長石多い	口縁部1/8～底部	底部静止イトキリ。底部に墨書。	溝—20
110—48	土師器	甕				黒褐7.5YR 3/1	砂粒多い	口縁部小片	内面ヨコハケ、外面タテハケ。	904（溝）
111—49	備前	椀	15.2	5.8	4.9	灰白5Y 8/1	緻密	口縁部1/2欠損	底部イトキリ。底部・体部下半に墨書。	溝—20
—50	備前	椀		5.8		灰N 5/	緻密	体部～底部	底部イトキリ。底部に墨書。	溝—20
—51	かまど				1	黄褐10YR 5/6	粗砂粒多い	焚口右下部片	内外面荒いハケメ。	溝—20
112—01	土師器	杯	(10.8)	(7.0)		灰白10YR 8/2		1/4	薄手のつくり。	溝—21
—02	早島	椀		6.2		灰白5Y 8/1		底部1/2		溝—21
—03	備前	椀		6.4		灰N 6/		体部～底部1/2	底部イトキリ。	溝—21
—04	備前	椀		6		灰白5Y 8/1		体部～底部	底部イトキリ。	溝—21
—05	備前	椀	15.1	6.4	5.3	灰N 5/		4/5	内外面緋襷状の放射状線。底部イトキリ。	溝—21
—06	土師器	甕	(26.4)			にぶい橙7.5YR 7/4		口縁部～体部		溝—21
—07	土師器	小皿	7.8	5.9	1.2	浅黄橙10YR 8/3		1/3	底部ヘラキリ。	溝—21・22
—08	早島	椀		4.8		灰白2.5Y 8/1		底部2/3	貼り付け高台。	溝—21・22
—09	備前	椀	(13.8)	(5.4)	(4.5)	灰白N 8/		4/5	薄手で丁寧なつくり。底部イトキリ。	溝—21・22
—10	備前	椀		5.8		灰N 6/		体部～底部	薄手で丁寧なつくり。底部イトキリ。	溝—21・22
—11	土師器	甕				にぶい黄褐10YR 5/3		口縁部小片	内面ヨコハケ、外面タテハケ。	溝—21・22
112—14	早島	椀		6.6		灰白N 8/		体部～底部	体部外面指押え。内面ヘラミガキ。	溝—23
114—01	土師器	小皿	9.05	6.3	1.3	にぶい黄橙10YR 7/3		ほぼ完形	底部板目。外周ヘラケズリ。	溝—24
—02	早島	椀				灰白10YR 8/2		口縁部1/6	口縁端部少し厚くなり丸く収める。	溝—25
115—01	須恵器	小皿				青灰5PB 6/1		口縁部小片	底部イトキリ状にも見えるが不明。	溝—28
—02	須恵器	鉢？				青灰PB 5/1	小石混入	口縁部小片	口縁端部水平に近い。	溝—28

平安末～鎌倉初（土壙）

図番号	種別	器別	口径	底径	器高	色調	胎土	残存状況	形態・手法	遺構名
116—01	早島	椀				灰白2.5Y 7/1	微砂粒多い	口縁部小片	内外面ヘラミガキ。口縁端部やや外反。	土壙墓—1
—02	早島	椀				灰白10YR 8/1	砂粒多く含む	口縁部小片	口縁端部肥厚く丸く収める。	土壙墓—1
117—01	土師器	小皿	8.3	6.1	1.4	灰白2.5Y 7/1		完形	底部ヘラキリ。	土壙墓—2
—02	土師器	小皿	8.9	6.3	1.4	灰黄2.5Y 7/2		完形	底部ヘラキリ。	土壙墓—2
—03	土師器	小皿	9.3	7	1.3	黄灰2.5Y 6/1		完形	底部ヘラキリ。	土壙墓—2
—04	土師器	小皿	8.4	5.8	1.5	にぶい黄橙10YR 7/2		ほぼ完形	底部ヘラキリ。	土壙墓—2
—05	土師器	小皿	8.2	6	1.5	灰白N 7/	緻密	完形	底部イトキリ。口縁端部外面黒くなる。	土壙墓—2
—06	備前	椀	(14.6)			灰白2.5Y 7/1	砂粒含む	口縁部～体部小片	焼成不良。	土壙墓—2
118—01	早島	椀		5.7		灰白10YR 8/1		底部のみ	三角形の貼り付け高台。	土壙—10
—02	備前	鉢				灰白N 5/	砂粒含む	口縁部小片		土壙—10
120—01	土師器	小皿	(10.4)	(6.0)	(1.3)	にぶい橙7.5Y 6/4	砂粒多い	1/8	底部ヘラキリ。	土壙—11
—02	早島	椀		(6.0)		灰白5Y 7/1		体部～底部1/3	三角形の貼り付け高台。	土壙—11
—03	土師器	椀？				褐灰10YR 6/1		底部小片	三角形の貼り付け高台。	土壙—11
—04	須恵器	椀		(9.0)		灰黄褐10YR 6/2	石英粒含む	体部～底部1/3	貼り付け高台。	土壙—11
—05	土師器	椀？		(8.6)		橙7.5YR 7/6		底部1/4	足高の貼り付け高台。	土壙—11
—06	土師器	鍋				黄褐10YR 5/6	砂粒多い	口縁部～体部小片	逆L字状口縁。内面細い、外面荒いハケ。	土壙—11
—07	土師器	甕				にぶい黄橙10YR 6/4	砂粒多い	口縁部小片		土壙—11
—08	備前	擂鉢				褐灰5YR 4/1		口縁部小片		土壙—11
121—01	備前	椀？				明青灰5PB 7/4		口縁部細片		土壙—12
—02	備前	擂鉢	(28.1)			青灰5PB 6/1		口縁部小片	条線わずかに残存。体部～口縁部湾ぎみ。	土壙—12
122—01	土師器	小皿	(8.0)	(6.4)	(1.15)	灰白7.5YR 8/1	水簸的	3/5	底部ヘラキリ。	土壙—13
—02	土師器	小皿	(8.4)	(7.0)	(1.15)	にぶい橙7.5YR 7/4		1/3	底部ヘラキリ。	土壙—13
123—01	早島	椀				灰白N 8/		底部1/6	貼り付け高台。見込部重ね焼き痕跡。	土壙—14
124—01	土師器	小皿	(7.1)	4.5	1.1	にぶい黄橙10YR 7/2		1/5	底部ヘラキリ。	土壙—15
—02	土師器	小皿	(8.7)	(6.2)	(1.1)	にぶい黄橙5YR 7/3		1/2	底部ヘラキリ。	土壙—15
—03	土師器	小皿	(9.2)	(7.2)	(1.5)	にぶい橙7.5YR 7/4		1/5	底部ヘラキリ。	土壙—15
—04	備前	椀	(15.3)			灰N 5/		口縁部～体部1/5		土壙—15
126—01	土師器	小皿	(7.8)	(6.0)	(1.5)	灰白10YR 8/1		1/3	底部ヘラキリ。	土壙—16
—02	土師器	小皿	8.2	5.7	1.4	にぶい黄橙10YR 7/2		1/2	底部ヘラキリ。	土壙—16
—03	土師器	小皿	(8.8)	(6.2)	(1.7)	にぶい橙7.5YR 7/4		1/2	底部ヘラキリ。	土壙—16
—04	土師器	小皿	(8.8)	7	1.4	にぶい黄橙10YR 7/3		1/3	底部ヘラキリ。	土壙—16
—05	土師器	小皿	(9.2)	(7.0)	(1.7)	にぶい橙7.5YR 7/4		1/2	底部ヘラキリ。	土壙—16
—06	土師器	小皿	(9.4)	(8.0)	(1.25)	明褐灰7.5YR 7/3		1/3	底部ヘラキリ。	土壙—16
—07	土師器	小皿	(9.2)	(7.0)	(1.7)	にぶい黄橙10YR 7/3		1/3	底部ヘラキリ。	土壙—16
—08	土師器	小皿	(9.2)	7.2	1.5	にぶい橙7.5YR 7/4		1/2	底部ヘラキリ。	土壙—16
—09	土師器	小皿	(9.5)	(8.0)	(1.6)	浅黄橙7.5YR 7/4		1/4	底部ヘラキリ。	土壙—16
—10	土師器	杯	(13.0)	(6.8)	3.5	灰白7.5YR 8/2		1/8	底部ヘラキリ？	土壙—16
—11	土師器	杯	(14.0)	(9.0)		杯黄褐10YR 6/2		1/5		土壙—16
—12	土師器	杯	(14.5)	(8.2)	(3.0)	にぶい黄橙10YR 7/3		1/4	底部ヘラキリ？	土壙—16
—13	土師器	椀	(14.6)	5	4.25	にぶい橙7.5YR 7/3	小豆色の粒多い	1/5	底部イトキリ。口端部外反し丸く収める。	土壙—16
—14	早島	椀	(14.4)	5.6	4.6	杯白10YR 8/1	石英含む	口縁部3/4	外面ヨコナデ。指押さえ。貼り付け高台。	土壙—16
—15	早島	椀		6.8		灰白2.5Y 8/1		底部のみ	三角形の貼り付け高台。	土壙—16
—16	土師器	椀？		6.9		にぶい褐7.5YR 6/3		底部のみ	ヘラでえぐりこんで高台状にする。	土壙—16
—17	土師器	？		10.8		にぶい橙7.5YR 7/4		底部のみ	貼り付け高台。	土壙—16
—18	須恵器	？				灰N 4/		口縁部小片		土壙—16
—19	土師器	鍋	(31.8)			褐灰7.5YR 5/1		口縁部～体部	内面口縁部荒いヨコハケ、体部細いヨコハケ	土壙—16
—20	備前？	甕				灰白N 4		体部小片	内面ヨコハケ、外面格子タタキメ。墨残着。	土壙—16
128—01	土師器	小皿	(8.3)	(6.8)	(1.45)	にぶい橙7.5Y 7/3		1/4	底部ヘラキリ。	ピット—15

128—02	土師器	小皿	(9.0)	(6.3)	(1.5)	橙7.5YR7/6		1/4	底部ヘラキリ。燈心痕	ピット—15
—03	土師器	小皿	9	6.5	1.6	にぶい橙7.5YR7/4		口縁部1/2欠損	底部ヘラキリ。	ピット—15
—04	土師器	杯	(12.8)	(7.4)	(3.3)	灰褐7.5YR6/2		1/4	底部ヘラキリ。	ピット—15
—05	土師器	杯	13.5	8.1	2.7	にぶい黄橙10YR7/2		完形	底部板目状圧痕。ヘラで切り離し。	ピット—15
—06	早島	椀	(12.7)			灰白10YR8/2		1/6		ピット—15
—07	土師器	杯	(13.8)			にぶい黄橙10YR6/3		口縁部1/4	底部ヘラキリ。	ピット—15
—08	備前	椀	(14.4)			灰白N8/		1/5		ピット—15
—09	備前	椀				灰白N7/		口縁部小片		ピット—15
129—01	土師器	小皿	8.8	6.5	1.3	橙7.5YR6/6		1/2	底部ヘラキリ。	1325（ピット）
—02	備前	小皿	8.1	4.2	1.8	灰N4/		口縁部1/2欠損	底部イトキリ。	1325（ピット）
—03	早島	椀	(15.2)	5.2	4.8	灰白5Y7/1	砂粒含む	口縁部1/8、底部1/3	内面丁寧なヘラ調整。貼り付け高台。	1325（ピット）
—04	早島	椀	15.6	5.4	4.6	灰白5Y8/1		1/5と底部完存	貼り付け高台。	301（ピット）
—05	土師器	小皿	(7.6)	(5.2)	(1.3)	にぶい橙5YR7/4		1/3	底部ヘラキリ？	1140（ピット）
—06	土師器	小皿	(7.3)	(6.0)	(1.6)	橙7.5YR7/6		1/5	底部ヘラキリ？	1325（ピット）
—07	早島	椀	(12.3)	(5.4)	(3.8)	灰白10Y8/2		口縁部～底部小片	内外面丁寧な仕上げ。貼り付け高台。	1140（ピット）
—08	早島	椀	11.8	5.7	4.15	灰白5Y8/1	石英粒含む	口縁部2/3欠損	内面丁寧な仕上げ。貼り付け高台。	881（柱穴）
—09	備前	椀	(15.3)	(7.0)	4.8	灰N5/		1/3	底部イトキリ。	S29（ピット）
—10	備前	椀	(16.0)			灰白N8/		口縁部1/4		778（ピット）
—11	備前	椀				灰白N8/		1/3	底部ヘラキリ。	778（ピット）
—12	土師器	小皿	(8.5)	(6.4)	(1.9)	にぶい黄橙10YR7/4		1/3	底部ヘラキリ？	918（柱穴）
—13	備前	椀	(14.5)			青灰5PB6/1		口縁部小片		918（柱穴）
—15	備前	椀	(14.8)	(5.6)	(5.5)	灰白N7/		1/4	底部イトキリ。	1357（ピット）
130—01	土師器	小皿	7.9	5.7	1.4	明灰褐7.5YR7/2		口縁部1/2欠損	底部ヘラキリ。	包含層
—02	土師器	小皿	8.4	7	1.2	にぶい黄褐10YR7/3		1/3	底部ヘラキリ。	包含層
—03	土師器	小皿	8.8	6.3	1.4	にぶい黄褐10YR7/3		口縁部1/2欠損	底部ヘラキリ（逆時計回り）。	包含層
—04	土師器	小皿	8.4	6.7	1.3	灰白7.5YR8/2		1/3	底部板目圧痕。	包含層
—05	土師器	小皿	8.4	6.2	1.35	灰黄褐10YR6/2		口縁部2/3欠損	底部ヘラキリ。	包含層
—06	土師器	小皿	8.8	7	1.3	にぶい黄褐10YR6/4	小豆色の粒含む	口縁部1/2欠損	底部ヘラキリ（逆時計回り）。	包含層
—07	土師器	？		(7.4)		橙7.5YR6/6		脚台部		包含層
—08	土師器	杯	16	9.4	5	明褐灰7.5YR7/2	小豆色の粒多い	口縁部1/2欠損	1.5cm程の足高高台。	包含層
—09	備前	小皿	8.2	4.4	1.8	灰N6/		口縁部1/3欠損	底部イトキリ？	包含層
—10	備前	椀	15	5.5	5.2	灰白N6/		ほぼ完形	底部イトキリ。	包含層
—11	土師器	甕	(32.8)			にぶい赤褐5YR5/4		口縁部小片	内外面ハケメ、後口縁部のみヨコナデ。	包含層
—12	須恵器	甕				灰N4/		体部小片	外面平行タタキメ。	包含層
—14	備前？	甕				灰N5/		体部小片	内面板目、外面格子タタキメ。	包含層
131—01	土師器	小皿	(11.9)	10.2	1.3	にぶい褐7.5YR6/3		1/3	底部外面指押さえ。	包含層
—02	土師器	杯	(12.4)	5.8	2.9	にぶい黄橙10YR7/4	小砂粒多い	1/2		包含層
—03	土師器	杯	(12.8)	7.4	2.9	にぶい褐7.5YR7/4	小砂粒多い	1/2	底部外面指押さえ。	包含層
—04	土師器	杯	12.8	(8.0)	2.7	浅黄橙10YR8/3	小砂粒多い	1/3	底部外面指押さえ。	包含層
—05	土師器	杯	(13.4)	(8.0)	3.2	にぶい黄橙10YR7/3	小砂粒多い	1/3	底部ヘラキリ。	包含層
—06	土師器	杯	(13.2)	9.4	2.9	灰黄2.5Y6/2 3	小砂粒多い	1/3	底部ヘラキリ。	包含層
—08	土師器	杯	(10.8)	6	2.7	にぶい橙5YR7/3	小石混入	1/4		包含層
—09	須恵器	鉢？	(21.4)			灰7.5Y5/1		口縁部～体部1/6		包含層
—10	須恵器	壺	(14.0)			灰N4/		口縁部小片		包含層
—11	土師器	甕	(31.8)			褐灰10YR5/1		口縁部～体部小片	内面指押さえ・ハケメ、外面ハケメ。	包含層
132—01	土師器	小皿	7.7	5.6	1.25	にぶい黄橙10YR7/3		1/2	底部板目圧痕、ヘラキリ。	包含層
—02	土師器	小皿	7.4	5.8	1.2	にぶい橙7.5YR7/4		3/4	底部板目圧痕、ヘラキリ。	包含層
—03	土師器	小皿	8.1	5.6	1.4	にぶい黄橙10YR7/2		ほぼ完形	底部ヘラキリ。	包含層
—04	土師器	小皿	8.9	6.8	1.2	浅黄橙10YR8/4		完形	底部板目圧痕、外側ヘラで切り取る。	包含層
—05	土師器	小皿	7.7	5.3	1.8	にぶい黄橙10YR7/3		ほぼ完形	底部板目圧根。	包含層
—06	早島？	椀				灰白10YR8/2		1/4		包含層
—07	備前？	鉢	(22.9)			灰N6/		口縁部～体部小片		包含層
—08	早島	椀	14	6.5	4.65	灰白5Y8/1		ほぼ完形	高さ0.7cm程の貼り付け高台。	包含層

132—09	早島	椀	12.2	5.2	3.7	灰白2.5Y 8/1	小砂粒含む	1/8	三角形の貼り付け高台。	包含層
—10	土師器	椀	(14.3)	6.8	4.2	にぶい橙5YR 7/3		1/10	貼り付け高台。	包含層
—11	備前	椀	(14.5)			灰白N 8/	小石混入	口縁部1/5	口縁部外側1㎝程黒くなる。	包含層
—12	備前	椀		5.9		灰白5Y 8/1		体部～底部1/2	底部イトキリ。	包含層
—13？	土師器	甕	(36.8)			灰白10YR 8/2		口縁部1/6	内外面ともハケメ。	包含層
—14	瓦質	擂鉢	(29.4)	(10.2)	10.1	灰N 5/		1/6	条線4本。	包含層
—15	早島	椀	(10.8)			灰白2.5Y 8/1		口縁部～体部1/4	口縁部内面下位に線刻文様（草花文？）	包含層
133—01	土師器	小皿	6.3	5	1	にぶい橙7.5YR 7/4		1/2	底部ヘラキリ。	包含層
—02	土師器	小皿	8.2	6.6	1.3	にぶい黄橙10YR 6/4		完形	底部ヘラキリ。	包含層
—03	土師器	小皿	(8.95)	6.4	1.3	にぶい黄橙10YR 6/4		1/3	底部ヘラキリ。	包含層
—04	土師器	小皿	8.6	6.6	1.3	橙7.5YR 7/6		完形	底部板目圧痕、外周ヘラ切リ？	包含層
—05	土師器	小皿	(8.6)	(5.6)	(1.8)	橙5YR 6/6		口縁部～底部小片	底部ヘラキリ？	包含層
—06	土師器	小皿	9.1	6.3	1.4	浅黄橙10YR 8/3	緻密	口縁部1/2欠損	底部ヘラキリ。	包含層
—07	土師器	小皿	8.5	5.7	1.3	にぶい橙10YR 7/3		完形	底部ヘラキリ。	包含層
—08	土師器	杯？	(12.0)			明赤褐2.5YR 5/6	小砂粒多い	1/3		包含層
—09	土師器	杯	11.7	8.6	2.7	にぶい橙7.5YR 7/4		1/2	底部ヘラキリ。	包含層
—10	土師器	杯	(13.9)			浅黄橙7.5YR 8/4	小豆色の粒含む	口縁部～体部小片	薄手。丹塗り？	包含層
—11	土師器	杯	(14.2)	9	3.3	淡赤橙2.5YR 7/3	緻密	口縁部2/3欠損	底部ヘラキリ。板状圧痕。	包含層
—12	土師器	杯	(14.9)	(9.1)	3.6	にぶい橙7.5YR 7/3	小豆色粒多い	1/4	底部ヘラキリ、板状圧痕。	包含層
—13	土師器	杯	(16.1)	(11.4)	3.45	にぶい橙10YR 7/3	小砂粒含む	口縁部～底部1/3	口縁端部わずかに外反。	包含層
—14	須恵器	杯	(14.4)	8.4	3.5	灰白2.5Y 8/1		3/4	底部ヘラキリ？	包含層
—15	早島	椀	(14.7)	6.8	4.4	灰白10YR 8/1		1/4	口縁端部わずかに外反。貼り付け高台。	包含層
—16	土師器	小皿	8	4.8	1.3	灰白2.5Y 8/1		1/2	底部ヘラキリ。	包含層
—17	備前	椀		5		灰N 6/		体部～底部	底部イトキリ。	包含層
—18	備前	椀	(14.4)	(5.4)	4.6	灰白N 7/	微砂粒多い	1/6	底部イトキリ。	包含層
—20	備前	椀	15.5	5.2	2.05	灰白10Y 7/1	緻密	口縁部一部底部1/3	底部イトキリ。	包含層
—21	備前	椀	(15.6)	5.8	5.6	灰白N 7/		1/4	底部イトキリ。	包含層
—22	備前	こね鉢	(26.0)			灰N 6/		口縁部小片		包含層
—23	備前	こね鉢	(28.5)			青灰5B 6/1		1/5		包含層
—24	亀山？	鉢				灰N 6/		口縁部小片		包含層
—25	須恵器	鉢				灰白2.5Y 8/1		口縁部小片		包含層
—26	備前？	甕				灰N 5/		体部小片	外面格子タタキ内面青海波文タタキの後ハケ	包含層
—27	備前？	甕				褐灰10YR 5/1		体部小片	内面同心円文タタキ後ハケ外面格子タタキメ	包含層
—28	備前？	甕				青灰5PB 5/1		体部小片	外面格子タタキ内面青海波文タタキの後ハケ	包含層
—29	備前	壺？				紫灰5P 6/1	緻密	口円部小片		包含層

鎌倉

図番号	種別	器別	口径	底径	器高	色調	胎土	残存状況	形態・手法	遺構名
137—01	土師器	小皿	(7.0)	(4.4)	1.1	橙5YR7/6		1/4		建物—26柱穴
—02	早島	椀	(11.6)	(5.0)	3.2	褐灰5YR4/1	小石・砂粒多い	1/3	底部をわずかに押さえる（ヘソ椀的）。	建物—26柱穴
138—01	早島	椀				灰白2.5Y8/2	砂粒多い	口縁部小片	口縁端部を押さえ、わずかに外に出す。	建物—27柱穴
142—01	土師器	小皿	(8.8)	(6.0)	(1.7)	にぶい黄橙10YR7/4		1/4	板目圧痕。底部ヘラキリ。	建物—31柱穴
—02	土師器	皿	(12.6)	(6.0)	(2.4)	にぶい黄橙10YR7/4		1/4	底部ヘラキリ。	建物—31柱穴
—03	早島？	椀		6.85		灰白7.5Y8/2		底部	長方形貼り付け高台。見込み部重ね焼き痕跡。	建物—31柱穴
—04	備前	擂鉢		(11.3)		青灰5PB6/1	砂粒多い	体部～底部	条線5～6本。	建物—31柱穴
143—01	早島	椀	(11.6)			灰白2.5Y8/1	小砂粒多い	口縁部1/6		建物—32柱穴
144—01	早島	椀	11.4			灰白2.5Y8/2		1/4	普通の早島椀に比べ、口径に対する器高低い。	建物—33柱穴
—02	早島	椀	12	5.8	2.8	灰黄2.5Y7/2	緻密	1/4	普通の早島椀に比べ、口径に対する器高低い。	建物—33柱穴
145—01	早島	椀	(11.4)	(3.4)	3.75	灰白2.5Y8/2	緻密	1/8	不正円形の貼り付け高台、重ね焼き痕跡。	建物—34柱穴
—02	備前	椀	(12.2)	4.5	4.2	灰白5Y8/1		口縁部1/8～底部	底部イトキリ。	建物—34柱穴
146—01	早島	椀		4.2		灰白2.5Y8/1		底部1/2	逆三角形の小さい貼り付け高台。	建物—35柱穴
151—01	土師器	小皿	(7.5)	(5.0)	(1.5)	明黄褐10YR7/6		1/3	底部ヘラキリ。口縁端部歪心の痕。	建物—40柱穴
152—01	土師器	小皿	7.7	6.4	1.05	にぶい橙7.5YR7/4		1/2	底部ヘラキリ。	建物—41柱穴
—02	土師器	甕				浅黄橙10YR8/3	砂粒多い	口縁部小片	口縁部内面横方向のハケ、外面縦方向のハケ。	建物—41柱穴
154—01	備前	擂鉢				にぶい赤褐5YR5/3		口縁部小片	条線6本。	建物—42柱穴
158—01	土師器	小皿	7.4	5.65	1.15	浅黄橙7.5YR8/3	小砂粒含	3/4	底部ヘラキリ。	建物—45柱穴
—02	土師器	小皿	7.9	6.3	1.5	橙5YR7/6	小豆色の粒多い	完形	底部ヘラキリ。	建物—45柱穴
—03	土師器	小皿				橙7.5YR7/6	小豆色の粒多い	1/5		建物—45柱穴
—04	土師器	小皿	7.9	6.05	1.7	灰白10YR8/1		口縁部大半欠損		建物—45柱穴
—05	早島	椀	(10.3)			灰白10YR8/2		口縁部1/3		建物—45柱穴
—06	早島	椀	10.75	4.2	3.36	灰白2.5Y8/1		ほぼ完形	三角形の貼り付け高台。	建物—45柱穴
—07	早島	椀	11.2	3.9	3.3	灰白2.5Y7/1	緻密	1/2	三角形の貼り付け高台、内面丁寧な仕上げ。	建物—45柱穴
—08	備前	甕				淡黄2.5Y8/3	小石、砂粒多い	口縁部～体部小片	口縁部玉縁。内面ヘラ調整。焼成不良。	建物—45柱穴
160—01	早島	椀				浅黄橙10YR8/4	微砂粒含む	底部小片	貼り付け高台で半円形、内面ヘラミガキ。	建物—47柱穴
162—01	土師器	小皿	8	6.2	1	にぶい黄橙10YR6/4	小豆色の粒含む	1/3		建物—48柱穴
164—01	早島	椀		(4.8)		灰白2.5Y8/1		底部1/4	三角形高台。見込部重ね焼き痕。	建物—50柱穴
165—01	早島	椀				灰白2.5Y8/1	砂粒含む	体部1/3～底部片	三角形高台。外面体部下半ヘラケズリ。	建物—51柱穴
166—01	土師器	小皿	(7.6)	(5.4)	(1.05)	にぶい黄橙10YR7/4		1/4		建物—52柱穴
—02	土師器	小皿	7.6	6.2	1.6	明褐灰7.5YR7/2	砂粒多い	4/5	底部ヘラキリ？	建物—52柱穴
169—01	須恵器	蓋	(20.0)			灰白N7/		口縁部～底部1/6	天井部逆時計回りのヘラケズリ。	溝—28
—02	須恵器	杯身		(10.0)		灰N7/		底部小片	貼り付け高台。	溝—28
—03	須恵器	高杯				灰白N8/		脚柱部	脚柱部最大径4.0cm	溝—28
—04？	土師器	鍋				にぶい黄橙10YR6/3		脚部		溝—28
—05	須恵器	蓋				灰N6/		脚部小片	外面擬格子状？内面青海波文タタキメ。	溝—28
—06	須恵器	甕				灰白5Y7/1		頸部～体部	外面擬格子状？内面青海波文タタキメ。	溝—28
—07	土師器	小皿		7.6	1.2	浅黄橙10YR8/4		1/3	底部ヘラキリ？	溝—28
—08	早島	椀		5.6		灰白5Y8/1	砂粒含む	体部～底部	見込部重ね焼き痕？三角形の貼り付け高台。	溝—28
—09	土師器	椀	(10.9)			灰白10YR8/2	砂粒含む	口縁部～体部1/4		溝—28
—10	早島	椀	11.2			浅黄橙10YR8/3		口縁部～小片		溝—28
—11	土師器	椀	(31.3)			明褐7.5YR5/8		口縁部～体部1/6	内面口縁部荒い体部細いヨコ・外面タテハケ	溝—28
169—12	土師器	鍋				にぶい黄橙10YR7/3		脚部		溝—28

—13	土師器	羽釜				暗灰N 3/		口縁部小片		溝—28
—15	備前？	甕？				灰7.5Y 4/1		口縁部細片		溝—28
170—01	土師器	椀	10.8	5.8	2.7	灰白10YR 8/1	小砂粒含む	口縁部 1/2 欠損	手法は「早島」だが、小砂粒多い。無高台。	溝—29
172—01	土師器	皿	(11.2)			灰黄2.5Y 7/2		口縁部 1/5		井戸— 4
—02	備前	椀		4.8		灰7.5Y 6/1		底部小片	底部イトキリ。	井戸— 4
—03	瓦質	羽釜				灰N 4/	砂粒多い	口縁部～体部小片		井戸— 4
173—01	土師器	皿	15.2	10.8	2.8	にぶい橙7.5YR 7/4	小豆色の粒含む	2/3	底部ヘラキリ。	井戸— 5
—02	備前	椀	(14.4)			灰N 7/		口縁部～体部小片		井戸— 5
174—01	土師器	小皿	(6.6)			橙7.5Y 6/6		1/3	底部ヘラキリ。	土壙—17
—02	土師器	椀	(10.6)			灰黄褐10YR 6/2	小石(石英)含む	口縁部～体部 1/4		土壙—17
—03	瓦質	羽釜	27.5			灰 5Y 6/1		1/2	内面荒いハケ後ナデ、外面下半ヘラケズリ。	土壙—17
175—01	土師器	甕				にぶい黄橙10YR 6/4		口縁部～体部小片	内外面ナデ。	土壙—18
—02	土師器	鍋	(38.0)			灰白N10YR 6/4		口縁部～底部 1/10	内面ヘケのあとヨコナデ。	土壙—18
176—01	早島？	椀？		4.1		浅黄橙10YR 8/3	微砂粒含む	底部のみ	貼り付け高台。内面ヘラミガキ？	土壙—19
—02	土師器	皿	14.2	11.4	2.7	浅黄橙7.5YR 8/4	小豆色の粒多い	口縁部～底部	底部ヘラキリ。	土壙—19
—03	土師器	羽釜	(39.6)			灰N 6/	小砂粒多い	口縁部小片		土壙—19
—04	土師器	羽釜	(21.8)			灰白2.5Y 7/1	小砂粒多い	口縁部小片		土壙—19
—05	瓦質	羽釜	(23.6)			灰N 5/	小砂粒多い	口縁部小片		土壙—19
177—01	早島	椀		4.7		灰白10YR 8/1		底部のみ	貼り付け高台。見込部重ね焼き痕跡。	土壙—20
178—01	土師器	小皿	(7.7)	(5.1)	(1.5)	にぶい黄橙10YR 7/3		1/2	底部ヘラキリ。	土壙—21
—02、	土師器	小皿	(8.1)	(7.3)	(1.3)	にぶい橙7.5YR 7/3		1/4		土壙—21
—03	早島	椀	(13.0)			灰白2.5Y 8/1	砂粒含む	口縁部～体部 1/4	外面時計回りのヘラケズリ状痕跡。	土壙—21
—04	早島	椀		5		灰白N 8/		底部のみ	貼り付け高台。	土壙—21
—05	土師器	鍋				灰 5Y 4/1	砂粒多い	口縁部小片		土壙—21
—06	土師器	羽釜				灰白 5Y 7/1		口縁部小片		土壙—21
179—01	土師器	小皿	(6.2)	(4.4)	(1.3)	にぶい黄橙10YR 7/2		1/5	底部イトキリ。	土壙—22
—02	土師器	鍋	(28.0)			灰白2.5Y 8/1	小砂粒含む	1/4		土壙—22
180—01	須恵器	杯	10.8	7.6	3.15	灰白2.5Y 8/1	小砂粒含む	1/4		土壙—24
—02	土師器	杯	12.6	8.7	2.7	橙 5YR 6/6	小石粒含む	1/4		土壙—24
—03	土師器	小皿	7.8	6.3	1.4	浅黄橙7.5YR 8/3		1/5	底部ヘラキリ。	土壙—25
—04	備前	椀				灰N 5/		口縁部小片		土壙—25
—05	備前	甕				褐灰10YR 4/1	小砂粒多い	口縁部小片	わずかに折り曲げ、玉縁口縁とする。	土壙—25
181—01	土師器	小皿	7.5	5.5	1.4	灰黄2.5Y 7/2		ほぼ完形	底部板目状痕跡。ヘラで切り離し。	ピット—21
—02	土師器	鍋	(28.0)			灰白 5Y 7/1		1/4	体部内面ヨコハケ後ナデ、外面頸部指押さえ	ピット—21
182—03	土師器	椀	11.2	4.7	3.35	淡赤橙2.5Y 7/4		口縁部 1/4 欠損	内面ヘラ状工具による丁寧な仕上げ。	ピット—22
183—01	土師器	小皿	(8.5)	(6.3)	(1.4)	橙7.5YR 7/5		1/4	底部ヘラキリ。	たわみ— 3
—02	土師器	杯	(12.5)	(9.0)	(3.3)	にぶい黄橙10YR 7/2		1/6	底部ヘラキリ。	たわみ— 3
—03	早島	椀	(10.6)			灰白10YR 8/2	砂粒多い	口縁部～体部 1/3		たわみ— 3
—04	早島	椀	(11.2)	(4.9)	(3.4)	灰白2.5Y 8/1		1/10	外面ナデ以下は、指押さえの凹凸激しい。	たわみ— 3
—05	土師器	羽釜	(20.9)			褐灰10YR 4/1	砂粒多い	口縁部 1/6		たわみ— 3
—06	土師器	鍋	(27.6)			灰N 4/	砂粒多い	口縁部 1/6		たわみ— 3
—07	須恵器	甕				灰白N 7/		口縁部細片		たわみ— 3
—08	備前	甕				灰N 6/	小石を含む	口縁部小片	外面平行タタキメ？	たわみ— 3
184—01	土師器	小皿	(8.2)	6.2	1.6	にぶい赤橙10R 6/4		口縁部一部体 底部 1/2	底部板目。	たわみ— 4
—02	瓦質	羽釜				灰 5Y 5/1	砂粒多い	口縁部小片	脚部付け根の一部が残る。	たわみ— 4
185—01	土師器	小皿	6.7	4.8	1.2	灰白10YR 8/2		完形	底部ヘラキリ。粘土紐巻き上げ。	包含層
—02	土師器	小皿	(7.0)	5.4	1.4	にぶい橙10YR 7/4	小豆色の粒多い	口縁部 1/6・ 底部 3/4	底部ヘラキリ。	包含層
—03	早島	椀	(11.6)	4.4	4.6	灰白10YR 8/3		1/3	内面丁寧な仕上げ。三角形の貼り付け高台。	包含層
185—04	早島	椀	11	5.1	4.4	浅黄橙7.5YR 8/3		1/5	内面ヘラミガキ状痕跡。	包含層

—05	早島	椀	(11.4)	4.4	3.2	灰白2.5Y 8/1		1/4	貼り付け高台。内面丁寧な仕上げ。	包含層
—06	早島	椀	(11.0)	4.3	3.8	灰白10YR 8/2		1/2	三角形の貼り付け高台。内面丁寧な仕上げ。	包含層
—07	早島	椀	11)	4.2	3.5	灰黄2.5Y 7/2		口縁部3/4欠損	貼り付け高台。見込部に重ね焼きの痕跡。	包含層
—08	早島	椀	11.8	7	3.8	灰白10YR 8/2		1/3	三角形の貼り付け高台。内面丁寧な仕上げ。	包含層
—09	早島？	椀	(11.2)	(3.4)	(3.6)	灰白10YR 8/1		1/4強	高台中心からずれる。粘土紐状の高台。	包含層
—10	早島	椀	(10.8)	4	3.3	浅黄橙10YR 8/3		1/2	三角形の貼り付け高台。内面丁寧な仕上げ。	包含層
—11	早島	椀	(11.2)	5.2	3.3	浅黄橙10YR 8/3	小豆色の粒含む	1/3		包含層
—14	備前	擂鉢				暗青灰5PB 4/1		口縁部小片	条線8本。	包含層
—15	備前	擂鉢	(28.0)			灰白5Y 6/1		口縁部小片	条線5＋？本	包含層
—16	備前	擂鉢	(33.0)			赤灰2.5YR 4/1		口縁部小片	条線6本。	包含層
—17	備前	擂鉢	(29.0)			暗赤褐5YR 3/2		口縁部～体部1/6	片口部。条線6本。	包含層
—19	亀山？	こね鉢				灰7.5Y 5/1		口縁部小片		包含層
—20	亀山？	鉢				灰N 4/		口縁部小片		包含層
—21	亀山	擂鉢				灰N 5/		口縁部小片	条線4本。	包含層
—22	備前	甕				青灰5PB 5/1	小砂粒多い	口縁部小片	口縁端部を逆L字状に折る。	包含層
—23	亀山	甕				暗灰N 3/		体部小片		包含層
—24	亀山	甕				灰N 4/		体部小片	外面格子タタキメ。	包含層
—25	亀山	甕				にぶい黄橙10YR 7/4		体部小片		包含層
—26？	土師器	羽釜						口縁部小片		包含層
—27	土師器	羽釜	(25.8)			灰N 4/		口縁部小片		包含層
186—31	土師器	鍋	(25.0)			にぶい橙7.5YR 6/4		口縁部～体部1/5	内外面細いハケメ。	包含層
—32	土師器	鍋	(27.8)			灰褐7.5YR 5/2		口縁部～体部1/8	内外面細いハケメ。	包含層
—33	土師器	鉢	(29.2)			にぶい橙5YR 7/4		口縁部小片		包含層
—35	土師器	鍋	(32.8)			灰黄褐10YR 4/2		口縁部～体部1/2	内外面ハケメ。	包含層
—36	土師器	鍋	(37.2)			浅黄橙10YR 8/4		1/5	内外面ハケメ。	包含層
—38	瓦質	鍋				灰黄褐10YR 5/2	小砂粒多い	口縁部小片	内面丁寧な仕上げ。外面指押さえ。	包含層
—39	土師器	羽釜				灰N 5/	微砂粒多い	口縁部～脚の付く所		包含層
—40	土師器	鍋				灰N 4/		脚部		包含層
—41	土師器	鍋				褐灰7.5YR 4/1		脚部		包含層
—42	土師器	甑	(25.2)			にぶい黄橙10YR 7/3		口縁部～体部1/6	押圧後、内外面細いハケメ。	包含層
—43	須恵器	壷				暗灰N 3/		肩部・底部	リング状の横耳。体部下半ハケによる仕上げ。	包含層
187—45	土師器	甕	(37.4)			にぶい黄橙10YR 7/3	小砂粒多い	口縁部小片	口縁部細い横、体部荒い外面縦内面横ハケ。	包含層
—46	土師器	甕	(37.9)			灰黄褐10YR 6/2		口縁部～体部1/6	内外面指押さえ後細いハケメ。	包含層
—47	土師器	甕	(41.8)			灰褐黄10YR 6/2	微砂粒多い	口縁部1/6	内外面ハケメ。	包含層

黒色土器観察表

図番号	器別	口径	底径	器高	色調	胎土	残存状況	形態・手法	時期	産地	遺構名
01	?				灰白	砂粒多い	口縁部小片	内面ヘラミガキ。			井戸－2
02	?				淡灰褐		口縁部小片	内面ヘラミガキ。		10C初	土壙－7
03	椀		6.6		淡赤褐		底部～体部1/6	三角形の貼り付け高台。	10C前半		包含層
04	椀?		6.5		淡褐		高台部1/3	外に強く踏ん張る貼り付け高台。	10C中		包含層
05	椀		5.7		淡褐	緻密	底部1/2	見込部手持ちヘラケズリ状。ヘラガキ有。	10C前半	在地産	包含層
06	椀		(8.8)		淡褐		高台部～体部	内面ヘラミガキ。	10C		包含層
07	椀		7.8		灰褐	砂粒多い	底部1/3	貼り付け高台。	10C	畿内産?	包含層
08	椀		7		淡褐	緻密	底部1/4	台形の貼り付け高台。内面ヘラミガキ。	10C前半		包含層
09	椀	(14.8)			淡灰褐		口縁部～体部1/5	ヘラミガキ。内面剝離。	10C初		E2（ピット）
10	椀	16			淡褐	緻密	口縁部～体部1/2	在地産にあまりない胎土。内外面ヘラミガキ。	10C	畿内産?	E1（ピット）
11	椀	18	8.4	5.7	淡黄褐		1/2	口縁端部に段。内面丁寧なヘラミガキ。	10C初	畿内産?	包含層
12	椀?				淡灰褐		高台部～体部小片	薄手。半円形の貼り付け高台。ヘラミガキ。	10C初	畿内産?	包含層
13	椀						高台部小片				建物－21柱穴
14	鉢	15			淡褐		口縁部～体部1/8	内面丁寧な横方向のヘラミガキ。	10C		包含層
15－1	椀?				淡灰黄		体部1/8	内面丁寧なヘラミガキ。	10C		P溝2
15－2	椀?				淡褐		口縁部～体部1/6	ヘラミガキ。内面剝離。	10C.	畿内産?	P溝2
15－3	椀?				灰		口縁部～体部1/6	内面ヘラミガキ。			P溝2
16	椀				淡褐		底部小片		10C. 初	畿内産?	P溝7
17	椀?	(14.6)	(6.2)	(4.35)	淡灰褐		口縁部～高台部1/10	半円形の貼り付け高台。内面ヘラミガキ。	10C. 初	畿内産?	包含層
18	?				黒		口縁部小片		?		溝－10
19	椀?				淡赤褐	砂粒多い	高台部小片	三角形貼り付け高台。	?		溝－12
20	椀?				淡灰橙	砂粒含む	口縁部小片	内面ヘラミガキ。	10C.		包含層
21	椀				淡橙	砂粒含む	底部小片	貼り付け高台。	10C前		土壙－64
22	椀?				淡黄灰	砂粒含む	体部細片				43（ピット）
23	椀?				淡橙		体部細片				溝－10
24	?				淡橙		体部細片	内面ヘラミガキ。	10C. 後半		包含層
25	鉢				灰桃	小石含む	頸部～体部	内面ヘラミガキ。	10C.		包含層
26	椀				淡橙	微砂粒含む	底部	三角形の貼り付け高台。内面ヘラミガキ。	10C.		包含層
27	杯?				淡桃	微砂粒含む	底部	内面ヘラミガキ。			包含層
28	?				淡灰褐	金雲母含む	底部	内面ヘラミガキ。			包含層
29	?				灰桃	小石含む	体部小片	内面ヘラミガキ。			包含層
30	?				灰白	微砂粒含む	体部小片	内面ヘラミガキ。			包含層
31	?				淡灰桃	微砂粒含む	体部小片	内面ヘラミガキ。			包含層
32	?				淡褐	微砂粒含む	体部細片	内面ヘラミガキ。			包含層
33	椀				淡黄灰	微砂粒含む	底部小片	貼り付け高台。内面ヘラミガキ。	10C.		包含層
34	椀				淡黄灰		口縁部小片	内面ヘラミガキ。			包含層
35	椀				淡桃		高台部細片	貼り付け高台。内面ヘラミガキ。	10C.		包含層
36	椀				淡黄白		口縁部細片	内面ヘラミガキ。			包含層
37	椀?				淡黄	微砂粒含む	体部小片	内面ヘラミガキ。			750（土壙）
38	Ⅲ?				淡黄灰	微砂粒含む	体部小片	内面ヘラミガキ。		畿内産?	溝－57
39	椀?				淡橙	微砂粒含む	底部細片	貼り付け高台。内面ヘラミガキ。	10C.	畿内産?	1314（ピット）
40	椀?				淡黄橙	微砂粒含む	体部細片	内面ヘラミガキ。			987（ピット）
41	?				淡灰橙	砂粒含む	体部細片	内面ヘラミガキ。			1035（柱穴）
42	?				淡黄橙	砂粒多い	体部細片	内面ヘラミガキ。			703（柱穴）
43	?				淡黄褐	砂粒含む	体部小片	内面ヘラミガキ。			850（ピット）
44	椀				橙	砂粒含む	底部小片	貼り付け高台。内面ヘラミガキ。	10C前		1084（ピット）
45	?				橙		体部小片	内面ヘラミガキ。			1417（ピット）
46	?				灰黄		体部細片	内面ヘラミガキ。			1417（ピット）
47	?				灰黄		体部細片				1417（ピット）
48	椀?				淡黄灰		口縁部細片	内面ヘラミガキ。			757（柱穴）
49	?				淡黄橙	砂粒含む	体部細片	内面ヘラミガキ。			包含層
50	?				淡灰橙	砂粒含む	体部細片	内面ヘラミガキ。			包含層

51	椀				淡黄		底部	三角形の貼り付け高台。内面ヘラミガキ。	10C		包含層
52	椀				淡黄橙	砂粒多い	底部小片	貼り付け高台。	10C前		溝—50
53	椀				淡黄橙	小豆色の粒含む	底部小片				包含層
54	椀？				灰黒	砂粒含む	体部小片				包含層
55	椀？				赤橙		底部1/3	内面剝離。	10C中		包含層
56	？				淡黄橙		小片	内面剝離。			749（柱穴）
57	椀				淡灰黄		口縁部～体部1/8	内面黒色化不良。外面口縁下部凹線状の段。			P溝4
58	椀				淡黄		口縁部～体部小片	薄手。口縁端部丸く収める。			P溝4
59	？				淡黄		体部小片	内面幅広のヘラミガキ			P溝4
60	？				淡橙		口縁部細片	内面ヘラミガキ。			P溝4
61	？				淡黄		体部小片	内面ヘラミガキ。			E11（土壙　）
62	椀？				淡黄		体部小片	内面ヘラミガキ。			67（ピット）
63	？				淡橙白	水簸粘土的	底部細片	貼り付け高台。			包含層
64	？				淡橙	石英粒	体部細片				包含層
65	？				淡黄褐	石英粒	口縁部細片	内面ヘラミガキ。			包含層
66	椀？				淡褐	微砂粒含む	底部小片	貼り付け高台。	10C．後？		包含層
67	？				淡灰褐	微砂粒含む	口縁部小片	内面ヘラミガキ。			包含層
68	椀				灰橙	微砂粒含む	底部	内面ヘラミガキ。貼り付け高台。	10C．後？		包含層
69	？				淡橙	小豆色の粒含む	口縁部細片				包含層
70	？				淡褐	微砂粒含む	体部小片	器壁厚い。			包含層
71	椀？				淡黄白		底部小片	小型三角形の貼り付け高台。内面ヘラミガキ。			包含層
72	？				淡茶	微砂粒含む	体部小片	内面ヘラミガキ？			包含層
73	椀？				褐		底部1/6	台形状の貼り付け高台。	10C．中		包含層
74	？				淡黄白		底部1/6	底部外面押圧。内面ヘラミガキ。			包含層
75	椀？				淡灰橙	小豆色の粒含む	底部1/8	貼り付け高台。内面ヘラミガキ？			包含層
76	？				淡橙		体部細片				10（たわみ）
77	？				淡橙		底部細片				66（たわみ）
78	椀？				淡橙白		底部1/4	内面ヘラミガキ。			P溝4
79	？				淡橙	小豆色の粒含む	体部小片	内面ヘラミガキ。			P溝4
80	？				淡灰黄	小豆色の粒含む	体部小片				P溝4
81	？				淡灰黄		体部小片				P溝4

灰釉観察表

図番号	器種	口径	底径	器高	色調	残存状況	形態・手法	分類	産地	遺構名
01－1	皿		(7.3)		淡緑		貼り付け高台。重ね焼き痕跡。	大原2	東美濃	溝－11
01－2	?				薄黄緑	体部細片	重ね焼き痕跡。	K－89	猿投	溝－11
02－1	椀?				淡黄緑	口縁部小片	釉は斑点状につく。薄手につくられている。	K－89	東美濃	溝－12
02－2	?					口縁部細片		K－90前後	猿投	溝－12
03	皿				淡灰	口縁部～体部		O－53	猿投	土壙－8
04	耳皿				薄緑	口縁部～底部小片	底部糸切り?	K－5(古)	猿投	751（土壙）
05	皿?				薄黄緑	底部小片		K－89	猿投	751（土壙）
06										
07	小皿	(10.2)	(5.0)	1.95	淡ウグイス	口縁部小片		K－90	猿投	包含層
08	皿				淡緑	口縁部～体部	釉は灰褐色の素地の上に斑点状につく。	K－89	猿投	包含層
09	皿		(7.7)		淡緑	体部～底部1/4	釉はなまこ状になる。貼り付け高台。	K－90	猿投	包含層
10	皿?		(7.2)		淡緑灰	底部1/5	貼り付け高台（内傾）重ね焼き痕跡	K－90	東美濃	1187（ピット）
11	皿		7.8		淡緑灰	体部～底部小片	貼り付け高台。口縁端部内傾	K－90	猿投	901（ピット）
12	?				淡黄緑	口縁部小片		S－5	篠岡	包含層
13	皿				薄緑	口縁部～体部	口縁部わずかに外反	K－90～89	猿投	包含層
14	椀?				淡灰緑	口縁部～体部小片		K－90～89	東美濃	包含層
15	皿?				薄緑	体部～底部片		K－89	猿投	包含層
16					緑灰	体部～底部1/5他2片	貼り付け高台。重ね焼き痕跡。	K－90	猿投	包含層
17	瓶				淡緑	体部片	取手付。釉内面になし。	K－90	猿投	包含層
18	椀?		7		薄緑	底部1/2	釉斑点状。貼り付け高台。重ね焼き痕跡	K－90	猿投	包含層
19	椀		(6.2)		淡灰黄	底部1/5	貼り付け高台。	K－90(新)	猿投	包含層
20	皿?				淡灰褐	口縁部小片		K－5(新)	東美濃	土壙－11
21	皿				淡灰緑淡ウグイス	体部～底部	貼り付け高台。口縁端部内傾	O－53	猿投	土壙－11
22	皿?		(6.9)		淡黄緑	体部～底部1/2	貼り付け高台。重ね焼き痕跡	O－53	猿投	河道－2
23	皿		5.6		淡ウグイス	体部～底部1/2	見込部はハケで塗っている。貼り付け高台。	K－90(古)	東美濃	包含層
24	椀		6.2		淡黄灰	体部～底部1/4	貼り付け高台。重ね焼き痕跡。ハケ塗り	K－89	猿投	包含層
25	皿?				薄緑	底部小片	貼り付け高台。重ね焼き痕跡。	O－53	猿投	建物－31柱穴
26	皿?				灰白	体部～底部小片	貼り付け高台	O53～H72	猿投	P溝2
27			7		淡灰黄	底部1/4	貼り付け高台。	K－90(新)	猿投	P溝5
28	?				淡黄緑	細片		K－89	猿投	276（柱穴）
29	?				薄緑	細片2	泡粒上の釉	K－89	猿投	建物－45柱穴
30	?				淡灰黄	体部小片		K－89	猿投	溝－10
31	皿?				淡灰緑	口縁部小片	口縁端部わずかに外反	K－89	猿投	826（ピット）
32	?				淡緑灰	口縁部小片		K－89	猿投	建物－8柱穴
33	段皿				薄緑	体部小片		S－5	猿投	溝－8
34	皿?				淡緑	口縁部小片	泡粒状の釉	K89～90	猿投	1394（溝）
35	瓶				薄緑	体部小片	釉内面になし。取手付	K－90	猿投	溝－61
36	皿?				薄緑	体部小片	重ね焼き痕跡。取手付	O－53	猿投	包含層
37					淡灰緑	体部小片2		K－89	猿投	包含層
38	?				薄黄緑	体部小片		K－89	猿投	包含層
39	椀?				淡灰黄	体部小片		O－53	猿投	包含層
40	小皿?				淡灰黄	口縁部小片	口縁端部わずかに外反	K－89	猿投	包含層
41					淡灰黄	口縁部小片	口縁端部わずかに外反	K－90(新)	猿投	包含層
42	皿?				透薄緑	底部小片	貼り付け高台。			包含層
43	皿?				?	体部小片	外面細いヘラで調整			S87（溝）
44	?				透薄緑	体部小片	外面ヘラケズリ?の痕跡	K－90?	猿投	包含層
45	皿?				透薄緑	口縁部細片	口縁端部わずかに外反。			溝－38
46	皿?					底部小片				溝－11

緑釉観察表

図番号	器種	口径	底径	器高	色調	胎土	残存状況	形態・手法	時期	産地	遺構名
001	椀				濃緑	須恵質	口縁部小片				建物―9柱穴
002	椀？		6.4		淡黄緑	軟質	底部1/4	削り出し高台。	Ⅱ(古)	京都	建物―9柱穴
003―1	壷				明緑	硬質	底部小片	底部断面に本体とは別の粘土が板状に付く。		猿投	溝―12
003―2	壷				明緑	須恵質	体部小片	内面板状工具による横方向カキメ。取手付。		猿投	溝―12
004	椀？				淡緑	須恵質	底部小片	削り出し高台。底部の削りは時計回り			653（土壙）
005―1	耳皿		5.0＊		淡黄緑	須恵質	底部	底部イトキリ。底部のみ露胎			集石遺構
005―2	？				淡緑	須恵質	小片				集石遺構
006	耳皿				淡黄緑	須恵質	耳部細片			京都	808（ピット）
007	椀	(14.2)			濃緑	須恵質	口縁部1/8				1161（柱穴）
008	椀		(7.2)＊		薄緑	軟質	底部	蛇の目高台。	Ⅱ(古)	京都	包含層
009	椀		6.6＊		淡緑	軟質	底部	蛇の目高台。全面施釉。	Ⅱ(古)	京都	
010	椀		7.3		淡明緑	軟質	体部～底部1/3	底部蛇の目の高台。見込部重ね焼き剝離痕。	Ⅱ(古)	京都	包含層
011	椀		(5.6)＊		淡緑	須恵質	底部1/4	削り出し高台。全面施釉。	Ⅱ(古)	京都	包含層
012	椀	(12.8)			透濃緑	須恵質	口縁部小片			京都	包含層
013	椀		5.6		淡緑	硬質	底部1/4	削り出し高台。	Ⅲ(古)	京都	包含層
014	椀		(6.5)		薄緑	硬質	底部1/4	見込部に素地焼きの重ね痕。削り出し高台。	Ⅲ(古)	京都	包含層
015	椀		(7.6)＊		濃緑	硬質	底部1/3	削り出し高台。全面施釉。	Ⅲ(古)	京都	包含層
016	椀		5.8		緑	硬質	底部1/4	削り出し高台。高台接地部及び内側露胎。	Ⅲ(古)	京都	包含層
017	椀		5.7		明緑	硬質	底部1/4	見込部ヘラミガキ状の痕跡。削り出し高台。	Ⅲ(古)	京都	包含層
018	椀		7.2		濃緑	須恵質	底部1/3	削り出し高台。全面施釉。			包含層
019	Ⅲ	(19.0)			濃緑	須恵質	口縁部～体部1/5				包含層
020	椀		4.7		濃緑	軟質	底部	三角形の貼り付け高台。見込部2本の沈線。		近江	包含層
021	椀		6		緑	軟質	底部1/4	7～9㎜の高さの高台を貼り付ける。		近江？	包含層
022	椀？				明黄緑	須恵質	口縁部小片	口縁端部を両側から挟んで輪花状にする。	Ⅱ(新)	京都	包含層
023	Ⅲ				淡黄緑	須恵質	口縁部小片				包含層
024	Ⅲ	14.3	6.4	2.45	濃緑	須恵質	1/4	全面施釉。削り出し高台。底部に窯印？			包含層
025	？	(12.8)			薄緑	硬質	口縁部	口縁部わずかに外反。			包含層
026	椀				透濃緑	須恵質	口縁部1/8				包含層
027	椀				濃緑	須恵質	口縁部小片				包含層
028	椀	13	6.7＊	3.9	濃緑	須恵質	2/3	全面篦磨き状痕跡。底部糸切り後削り取る。			包含層？
029	Ⅲ？				淡黄緑	軟質	口縁部小片				包含層
030	Ⅲ？				淡黄緑	軟質	口縁部小片				包含層
031	椀				透濃緑	須恵質	口縁部小片	口縁部外側をヘラ状工具で押え輪花状にする			包含層
032	耳皿		3.95		透濃緑	軟質	底部のみ	底部イトキリ。			包含層
033	椀				濁緑	須恵質	底部小片	削り出し平高台。全面施釉。			包含層
034	椀		5.8		淡黄緑	須恵質	底部～	削り出し平高台。底部に窯印？			包含層
035	稜椀		8.2		明緑	硬質	底部1/4	全面に施釉。貼り付け高台。		猿投	包含層
036	Ⅲ？		5.8		淡黄緑	硬質	底部1/6	削り出し高台。			包含層
037	椀		7.9		淡緑	硬質	底部1/4	貼り付け高台。高台接地部釉削り取る？		東海	包含層
038	椀		7.4		淡緑	硬質	底部1/4	貼り付け高台。高台接地部以外全面施釉。		東海	包含層
039	耳皿		4.7＊		明緑	軟質	耳部欠損	底部イトキリ。全面に施釉。			包含層
040	耳皿				濃緑	須恵質	底部～立ち上がり部			京都	包含層
041	唾壷				淡黄緑	須恵質	肩部小片			猿投	包含層
042	？				明薄緑	須恵質	体部小片			東海？	
043	段皿				緑	須恵質	口縁部小片				包含層
044	壷？				明緑	須恵質	体部小片	内面板状工具による横方向のカキメ。		猿投	包含層
045	椀				緑	須恵質	口縁部細片				包含層
046	椀				薄緑	須恵質	口縁部小片	全面施釉。			溝―18
047	皿				薄緑	須恵質	口縁部小片	内面のみ施釉			溝―18
048	椀	(14.4)			濃緑	須恵質	口縁部小片	口縁端部を少し外に出し丸く収める。			溝―18
049	椀？				緑	須恵質	体部小片				溝―18
050	Ⅲ？		(6.5)		淡緑	硬質	底部1/4	削り出し高台。		京都	溝―20
051	耳皿				灰(緑)	須恵質	底部小片			京都	土壙―11
052	椀				淡黄緑	硬質	底部小片	見込部黄色斑点状の釉調。		京都	土壙―11
053	椀				透薄緑	須恵質	底部小片	削り出し高台。重ね焼きの剝離痕。			土壙―11

054－1	皿？		(6.9)		淡黄緑	硬質	底部1/4	全面施釉。貼り付け高台。		東海？	土壙－11
054－2	小皿？				透緑	須恵質	体部小片	見込部重ね焼きの剥離痕。			土壙－11
055	椀				暗緑	須恵質	口縁部小片		Ⅱ(中)		包含層
056	椀		(7.6)		緑	須恵質	底部1/4	削り出し高台。全面施釉。			包含層
057	椀？				濃緑	須恵質	口縁部細片				建物－45
058	？				薄緑	須恵質	体部細片				建物－45
059	椀？				淡緑	須恵質	体部細片				建物－13
060	？				濁緑	須恵質	口縁部細片	口縁端部強く外反。			建物－51
061	椀？				明黄緑	軟質	口縁部細片	口縁端部わずかに外反し、丸く収まる。	Ⅱ(古)	京都	建物－51
063	？				緑	須恵質	体部細片				建物－18
064	壺？				明緑	須恵質	体部小片			猿投	建物－40
065	椀？				薄緑	軟質	口縁部小片			猿投	建物－8
066	？				透濃緑	須恵質	口縁部細片	素地焼きの時の重ね痕がわずかにみられる。			溝－52
067	椀？				明緑	須恵質	口縁部小片	口縁端部わずかに外反。			溝－21・22
068	椀				濃緑	軟質	底部小片	底部全体を貼り付ける。		近江	1279（溝）
069	？				明緑	軟質	体部小片				土壙－51
070	椀？				淡緑	須恵質	体部小片	内面ヘラミガキ。			土壙－14
071	皿？				透黄緑	軟質	口縁部細片				384（柱穴）
072	稜椀？				淡緑	須恵質	体部小片				499（柱穴）
073	？				淡緑	須恵質	口縁部細片				592（ピット）
074	椀？				暗緑	須恵質	底部細片				1082（ピット）
075	椀？				暗黄緑	須恵質	口縁部細片				1142（ピット）
076	椀？				淡黄緑	須恵質	体部小片	見込部近くに素地焼きの重ね痕			包含層
077	？				緑	須恵質	体部細片			美濃？	包含層
078	椀？				淡緑	須恵質	底部細片	見込部に素地焼きの重ね痕。削り出し輪高台			包含層
079	椀？				淡緑	須恵質	口縁部小片				包含層
080	椀				淡緑	須恵質	底部小片	削り出し高台。			包含層
081	椀？				透薄緑	須恵質	口縁部細片		Ⅱ(新)		包含層
082	椀？				薄緑	軟質	体部～底部				包含層
083	？				淡緑	軟質	細片				包含層
084	椀？				濃緑	須恵質	体部小片				包含層
085	椀				緑	須恵質	底部小片	削り出し高台。			包含層
086	？				濃緑	軟質	細片				包含層
087	皿？				透緑	須恵質	体部小片	見込部素地焼きの重ね痕。	Ⅱ(新)		包含層
088	椀？				緑	須恵質	口縁部小片				包含層
089	？				淡緑黄	軟質	？				包含層
090	？				黄緑	軟質	口縁部細片				包含層
091	椀				明緑	須恵質	体部小片				包含層
092	椀？				濃緑	須恵質	体部小片				包含層
093	椀？				明緑	軟質	体部小片				包含層
094	椀	(14.4)			透濃緑	須恵質	口縁部1/6			京都	包含層
095	椀				薄緑	軟質	体部～底部小片	削り出し高台？			包含層
096	皿？				緑	軟質	口縁部小片			美濃	包含層
097	？				濃緑	須恵質	体部細片				包含層
098	椀				淡黄緑	須恵質	口縁部小片	口縁端部わずかに外反。		猿投	包含層
099	壺				明緑	須恵質	胴部小片	内面板状工具による横方向のナデ。			包含層
100	？				明緑	軟質	細片				包含層
101	椀？				淡黄緑	軟質	口縁部細片				包含層
102	椀				緑	須恵質	体部～底部	見込部2本の沈線。			包含層
103	椀				明薄緑	須恵質	体部～底部	削り出し高台。見込部沈線。			包含層
104	？				淡緑	須恵質	体部小片	内面に板状工具による横方向のカキメ。		東海？	包含層
105	椀？				濁緑	須恵質	口縁部小片	口縁部わずかに外反。			包含層
106	椀？		4.5		透淡緑	軟質	底部	削り台し高台。底部露胎。			包含層
107	皿？				緑	須恵質	口縁部小片				P溝4
108	？				薄緑	須恵質	体部細片				P溝4
109	椀		7		明緑	須恵質	底部1/4	削り出し高台。全面施釉。			P溝4
110	椀		8.2		黄緑	軟質	底部1/4	全体をヘラ状工具により調整？貼り付け高台			包含層
111	椀？				透薄緑	須恵質	底部小片	削り出し高台。		京都	P溝5

112	椀？				緑	軟質	口縁部小片	口縁端部わずかに外反。		近江？	溝—19
113	椀？				薄黄緑	軟質	体部細片				包含層
114	椀？				透薄緑	須恵質	体部細片				包含層
115	椀？				濃緑	須恵質	体部小片				包含層

東播系土器観察表

図番号	器種	口径	底径	器高	色調	胎土	残存状況	形態・手法	遺構名
1	こね鉢				灰N 6/	砂粒多い	口縁部小片		建物—17柱穴
2	こね鉢				青灰5PB6/1		口縁部細片	口縁部外側重ね焼きで黒くなる。	溝—18
3	こね鉢				明青灰5PB7/1		口縁部細片	口縁部外側重ね焼きで黒くなる。	溝—18
4	鉢				灰N 6/	白色小砂粒多い	口縁部小片		溝—21・22
5	こね鉢				灰N 6/	長石多い	口縁部小片		溝—27
6	こね鉢	(23.0)			灰白2.5Y 8/1	小砂粒多い	口縁部小片		包含層
7	こね鉢	(26.4)			灰白N 7/		口縁部小片		包含層
8	こね鉢	(29.6)			灰白N 7/		口縁部小片		包含層
9	こね鉢	(31.0)			灰白N 7/		口縁部小片		包含層
10	こね鉢								旧河道
11	こね鉢				灰白N 7/		口縁部小片		包含層
15	こね鉢	(21.0)			暗灰N 3/	小砂粒多い	口縁部小片	口縁部外側2㎝程重ね焼き痕跡。	1004（ピット）
16	こね鉢	(24.6)			灰N 6/	小石含む	口縁部～体部小片	内面使用痕有。	65（溝）
17	こね鉢	(27.4)			青灰5PB6/1		口縁部～体部	内面下半ヘラケズリ？	包含層
18	こね鉢	(27.8)			青灰5PB5/1	小石含む	口縁部 1/5	口縁部外側重ね焼き痕跡。	包含層
19	こね鉢	(32.2)			灰N 6/	小砂粒含む	口縁部～体部小片	内面使用痕有。	包含層
20	こね鉢	(31.0)			灰N 6/	砂粒含む	口縁部～体部 1/8	口縁部下端重ね焼き痕有。内面使用痕。	129（ピット）
21	こね鉢				灰N 5/		口縁部小片		包含層
22	こね鉢				灰白5Y 7/1		口縁部小片		包含層
23	こね鉢				灰N 6/		口縁部小片		包含層
24	こね鉢				灰N 7/		口縁部小片		包含層
25	こね鉢					小砂粒多い	体部小片		包含層
26	こね鉢				灰10Y 5/1		口縁部小片		包含層
27	こね鉢				暗灰N 3/		口縁部小片		包含層
28	こね鉢				灰N 5/		口縁部小片		包含層
29	こね鉢				灰N 6/		口縁部小片		包含層
30	こね鉢				灰N 5/	砂粒多い	口縁部小片		包含層
31	こね鉢				灰N 6/		口縁部小片	片口部。	土壙—20・2
32	こね鉢				灰N 6/		口縁部小片		包含層
33	こね鉢				灰N 4/		口縁部小片		包含層
34	こね鉢				青灰5PB6/1	砂粒多い	口縁部小片		包含層
35	こね鉢				灰白N 7/	砂粒多い	口縁部小片	玉縁部下に重ね焼きの剝離痕跡。	901（ピット）
36	こね鉢				灰N 6/		口縁部小片		包含層
37	こね鉢				青灰5PB5/1	砂粒多い	口縁部小片		包含層
38	こね鉢				灰N 5/	小砂粒多い	口縁部～体部 1/8		包含層
39	こね鉢				灰N 4/		口縁部小片		包含層
40	鉢				灰白N 7/		口縁部小片	口縁部外面重ね焼きによる剝離痕？	包含層
41	こね鉢				灰N 6/		口縁部小片		包含層
42	こね鉢				灰N 6/		口縁部小片		包含層
43	こね鉢				灰N 5/		口縁部小片		包含層
44	こね鉢				灰N 5/		口縁部細片		包含層
45	こね鉢				灰白N 7/		口縁部小片		包含層
46	こね鉢				灰N 7/		口縁部細片		包含層
47	こね鉢				灰N 6/		底部小片		包含層
48	甕				青灰5PB5/1		体部小片	外面平行タタキメ。	包含層
49	甕						体部小片		包含層
50	甕				灰N 6/		体部小片	外面擬格子タタキメ。	包含層
51	鉢				灰7.5YR 6/1	小石、砂粒多い	口縁部小片		建物—26柱穴

52	こね鉢				灰白7.5Y 7/1	小砂粒含む	口縁部小片		土壙—22
53	こね鉢				灰N 6/	小砂粒含む	口縁部小片		土壙—22
54	こね鉢				灰白2.5Y 7/1	小砂粒含む	口縁部小片		土壙—22
55	こね鉢				灰白N 7/	小砂粒含む	底部小片	内面使用痕有。	土壙—22
56	こね鉢	18.3	8.2	6.2	にぶい橙7.5YR 7/4	小石、小豆色の粒含	口縁部1/3欠損	底部イトキリ。	652（ピット）
57	甕				灰N 6/		体部小片	外面平行タタキメ。	1253（ピット）
58	こね鉢				灰N 6/	砂粒多い	底部小片	使用痕有。	782（ピット）
59	こね鉢				青灰5PB 5/1		口縁部小片		土壙—39
60	こね鉢				灰N 3/	砂粒多い	口縁部小片		543（ピット）
61	こね鉢				灰白N 7/		口縁部小片		包含層
62	鉢				灰N 6/	砂粒多い	口縁部小片	口縁端部わずかに折り曲げふくらみをもつ	P溝5
63	こね鉢	(24.0)			灰N 8/	微砂粒多い	口縁部小片		包含層
64	壺？				暗灰N 3/	砂粒多い	体部小片	外面細い平行タタキメ。	包含層
65	こね鉢	(30.6)					口縁部小片	口縁端部1.5cm程黒くなる。	
66	甕				灰N 5/		体部小片	外面平行タタキメ。	井戸—4
67	甕						体部細片	外面平行タタキメ。	包含層
68	鉢				灰N 6/		口縁部小片		包含層
69	甕？				灰N 5/		体部小片	外面平行タタキメ。	包含層
70	鉢				灰7.5Y 6/1		口縁部小片		包含層
71	鉢				青灰5PB 5/1		口縁部～体部小片		499（柱穴）
72	こね鉢				褐灰10YR 4/1	小石、砂粒多い	口縁部小片		1084（ピット）
73	鉢		(14.0)		灰5Y 6/1	小石小砂粒含む	底部	内面使用痕。	798（柱穴）
74	こね鉢						口縁部小片		包含層
75	こね鉢				灰N 4/		口縁部小片		包含層
76	こね鉢					小砂粒多い	体部小片		包含層
77	こね鉢				灰N 5/		口縁部小片		包含層
78	甕						体部小片	外面平行タタキメ。	包含層
79	こね鉢				灰N 6/	小砂粒多い	口縁部小片		包含層
80	甕						体部小片	外面平行タタキメ。	（包含層）
81	こね鉢						口縁部小片		包含層
82	鉢				灰N 6/		口縁部小片		包含層

瓦器観察表

図番号	器種	口径	底径	器高	色調	胎土	残存状況	形態・手法	分類	産地	遺構名
001	椀				灰黒		口縁部～体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉？	溝－1
002	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉？	溝－1
003	椀				灰		口縁部～体部1/2	内面ヘラミガキ。外面上半ナデ下半指押さえ？		和泉	建物―16柱穴
004－1	椀				灰黒		口縁部小片	口縁部ナデ。内面ヘラミガキ。		和泉	建物―18柱穴
004－2	椀				灰黒		口縁部小片	建物―18柱穴			
004－3	椀				灰黒～黒		口縁部小片	口縁部ナデ。		和泉	建物―18柱穴
004－4	椀				黒		口縁部細片	口縁部ナデ。		和泉	建物―18柱穴
005	椀				淡黒		口縁部小片			和泉	建物―21柱穴
006	椀				灰		口縁部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	建物―21柱穴
007	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	建物―21柱穴
008－1	椀				黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	建物―21柱穴
008－2	椀				黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。口縁部外側に沈線？	Ⅲ－1	和泉	建物―21柱穴
008－3	椀				灰～淡灰黒		体部小片	見込部暗文。		和泉	建物―21柱穴
008－4	椀				灰黒		底部小片	内面ヘラミガキ。貼り付け高台。		和泉	建物―21柱穴
009	椀		5.2				底部	内面ヘラミガキ。貼り付け高台。	Ⅲ－1	和泉	溝―19
010	小皿				灰黒		1/2		Ⅲ－1	和泉	溝―20
011	椀				黒		口縁部小片	口縁端部内側に段。	Ⅲ－1	和泉	溝―20
012	椀				黒		口縁部小片	口縁端部内側に段。	Ⅲ－1	和泉	溝―20
013	椀				灰		口縁部1/6		Ⅲ－1	和泉	溝―20
014	椀						口縁部1/6	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	溝―20
015	椀		(3.6)		灰～灰黒		体部～底部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	溝―20
016	椀				黒		口縁部～体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1？	和泉	溝―20
017	椀				灰		口縁部小片	見込部平行線状の暗文。		和泉	溝―20
018	椀				黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ状。		和泉	溝―20
019	椀				淡灰		口縁部小片	内面ヘラミガキ状。	Ⅲ－2	和泉	溝―20
020	椀				黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ状。	Ⅲ－1	和泉	溝―20
021	椀		4.7		灰～黒		底部小片	貼り付け高台。	Ⅲ－2	和泉	溝―20
022	椀				黒		体部～底部小片	内面ヘラミガキ。台形の貼り付け高台。	Ⅲ－2	和泉	溝―20
023	椀	(12.0)			黒		口縁部1/6		Ⅲ－1	和泉	溝―20
024	椀	(14.4)			黒灰		口縁部1/6		Ⅲ－1	和泉	溝―20
025	椀		4.1		灰黒		体部～底部小片	内面ヘラミガキ。台形の貼り付け高台。	Ⅲ－1	和泉	溝―20
026－01	椀	17	4.9	4.85	黒～灰		1/6	見込部平行線状の暗文。三角形貼り付け高台。	Ⅲ－2	和泉	溝―20
026－02	椀				灰黒～黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。口縁端部わずかに外反。		和泉	溝―20
026－03	椀？				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。		和泉	溝―20
026－04	？				黒		底部小片	内面ヘラミガキ。台形の貼り付け高台。		和泉	溝―20
026－05	椀				黒～灰		口縁部小片	内面ヘラミガキ。		和泉	溝―20
026－06	椀				灰～黒		口縁部小片	口縁端部ナデ後ヘラで調整。		和泉	溝―20
026－07	椀				灰黒		口縁部小片			和泉	溝―20
026－08	椀				灰～黒		口縁部小片		Ⅲ－2	和泉	溝―20
026－09	椀				黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	溝―20
026－10	椀				灰黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	溝―20
026－11	椀				黒		体部小片		Ⅲ－2	和泉	溝―20
026－12	小皿				灰黒		底部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	溝―20
026－13	椀				黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	溝―20
027－1	椀				明灰～淡灰黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。口縁部外面強い段。		？	溝―20
027－2	椀				灰		体部小片			和泉	溝―20
027－3	椀				灰白		体部小片	内面ヘラミガキ。		和泉	溝―20
027－4	椀				灰		体部細片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	溝―20
028	椀				黒		底部1/5	内面ヘラミガキ。貼り付け高台。	Ⅲ－1	和泉	溝―21・22
029	椀				灰～灰黒		体部	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	溝―21
030－1	椀		4.3		灰		底部	内面ヘラミガキ。貼り付け高台。	Ⅲ－2	和泉	溝―21
030－2	椀				黒		体部小片		Ⅲ－？	和泉	溝―21
030－3	椀				黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	溝―21

030—4	椀				灰黒		口縁部小片		Ⅲ—2	和泉	溝—21
030—5	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ—2	和泉	溝—21
031	小皿				黒		口縁部小片		Ⅲ—2	和泉	土壙墓—2
032	椀	(15.6)			黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。口縁部外面に段。	Ⅲ—2	和泉	土壙墓—2
033	椀		(4.2)		灰黒		底部小片	内面ヘラミガキ。台形の貼り付け高台。	Ⅲ—1	和泉	土壙墓—2
034	椀		(5.0)		灰黒～黒		底部1/2	見込部平行線状の暗文三角形の貼り付け高台	Ⅲ—2	和泉	土壙墓—2
035—1	椀				灰黒		口縁部小片		Ⅲ—2	和泉	土壙墓—2
035—2	椀				黒		口縁部細片	口縁端部肥厚。	Ⅲ—2	和泉	土壙墓—2
035—3	椀？				灰黒		底部細片？		Ⅲ—2	和泉	土壙墓—2
035—4	椀？				黒		体部細片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ—2	和泉	土壙墓—2
035—5	椀				黒		体部細片		Ⅲ—2	和泉	土壙墓—2
035—6	椀				灰		口縁部細片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ—2	和泉	土壙墓—2
035—7	椀				黒～灰白		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ—2	和泉	土壙墓—2
035—8	椀				黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ—2	和泉	土壙墓—2
035—9	？				灰		底部小片	見込部平行線状暗文。低い台形貼り付け高台	Ⅲ—2	和泉	土壙墓—2
036	椀				灰黒		口縁部～体部	内面ヘラミガキ。	Ⅲ—2	和泉	土壙—16
037	椀				灰黒		口縁部～体部	内面ヘラミガキ。口縁部の一部桃灰色。	Ⅲ—1	和泉	土壙—16
038	椀				黒		口縁部～体部	内面ヘラミガキ。外面指押さえの跡？	Ⅲ—2	和泉	土壙—16
039—1	椀				黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ—2	和泉	土壙—16
039—2	椀				黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ—1	和泉	土壙—16
039—3	椀				灰黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ—2	和泉	土壙—16
039—4	椀？				灰黒		体部細片		Ⅲ—2	和泉	土壙—16
039—5	椀				灰		体部小片	内面ヘラミガキ。沈線有。	Ⅲ—2	和泉	土壙—16
039—6	椀				黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ—2	和泉	土壙—16
040	小皿	(8.8)	(6.8)	(1.4)	灰黒		口縁部～底部1/6		Ⅲ—2	和泉	包含層
041	椀				灰白		口縁部小片		Ⅲ—1	和泉	包含層
042	椀				黒		口縁部小片		Ⅲ—1	和泉	包含層
043	椀				灰黒		体部片	内面ヘラミガキ。(幅狭い)。	Ⅲ—2？	和泉	包含層
044	椀				灰白～灰黒		底部1/4	内面ヘラミガキ。三角形の貼り付け高台。	？	和泉	包含層
045	椀	(14.0)			灰白		口縁部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ—1	和泉	包含層
046	椀		(5.2)		淡灰		底部1/4	内面ヘラミガキ。長方形の低い貼り付け高台。	Ⅲ—2	和泉	包含層
047—1	椀		4.9		黒		体部～底部	内面ヘラミガキ。三角形貼り付け高台。	Ⅱ—2	和泉	包含層
047—2	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ—2	和泉	包含層
048	小皿	8.6	6.9	1.55	黒		体部1/3	内面ヘラミガキ。	Ⅲ—1	和泉	包含層
049	椀	(14.0)			灰		口縁部～体部1/6	内面ヘラミガキ。	Ⅲ—1	和泉	包含層（河道2）
050	小皿？				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ—1	和泉？	建物—30柱穴
051・052	？				灰		体部小片			和泉	建物—30柱穴
053—1	椀		(5.8)		黒		底部小片	見込部平行線状暗文。三角形貼り付け高台。	Ⅲ—2	和泉	建物—31柱穴
053—2	椀				灰		口縁部・体部小片		Ⅲ—2	和泉	建物—31柱穴
054—1	椀				灰黒		底部小片	見込部太目の平行線状暗暗文。台形張り付け高台。	Ⅲ—2	和泉	建物—31柱穴
054—2	椀		5.6		灰黒		底部1/3	内面ヘラミガキ。三角形の貼り付け高台。	Ⅲ—2	和泉	建物—31柱穴
054—3	椀				灰黒～黒		体部小片	見込部斜格子状暗文。		和泉	建物—31柱穴
055	小皿				黒		口縁部		Ⅲ—2	和泉	建物—44柱穴
056—1	小皿	(9.4)			黒		口縁部～底部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ—2	和泉？	土壙—19
056—2	？				灰白～黒		口縁部～体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ—2	和泉？	土壙—19
057—1	椀		(7.0)		黒		底部1/4	見込部太目平行線状暗文。三角形貼り付け高台。	Ⅲ—2	和泉	S35（ピット）
057—2	椀				黒		口縁部細片	口縁部わずかに外反。内面ヘラミガキ。	Ⅲ—1	和泉	S35（ピット）
057—3	椀				灰黒		体部細片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ—2	和泉	S35（ピット）
057—4	椀				灰黒		口縁部細片	口縁端部外反。	Ⅲ—2	和泉	S35（ピット）
057—5	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ—2	和泉	S35（ピット）
058	小碗	(7.1)			灰		1/4	内面ヘラミガキ。三角形貼り付け高台。	Ⅱ—1？	楠葉？	包含層
059	椀		4.7		灰黒～淡褐		底部	内面ヘラミガキ。台形の貼り付け高台。	Ⅱ—？	和泉	916（柱穴）

060	椀		4.2		灰黒		底部1/2	内面ヘラミガキ。貼り付け高台。	Ⅱ－？	和泉	包含層
061	椀	14.5	4.8	5.3	淡灰白		完形	見込部平行線状の暗文。低い台形状の高台。	Ⅱ－2	和泉	包含層
062	小皿	9.2			淡灰		口縁部～底部1/6		Ⅲ－1	和泉	土壙－13
063	小皿	(8.0)	(6.5)	(1.25)	灰		口縁部～底部	口縁部ナデによる薄い仕上げ内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1？	和泉	包含層
064	小皿	8.4	4.9	1.7	灰白		1/4		Ⅲ－2	和泉	包含層
065	小皿	8.8	7.2	1.85	灰黒		口縁部～底部1/2	内面ヘラミガキ。口縁部回転による引き上げ。	Ⅲ－1	和泉	包含層
066	小皿				灰黒		口縁部小片		Ⅲ－2	和泉	包含層
069	椀		(4.4)		黒灰		底部小片	内面ヘラミガキ。台形の貼り付け高台。	Ⅲ－2	和泉	包含層
070	椀		3.9		灰黒～淡橙		底部小片	低い台形の貼り付け高台。	Ⅲ－2	和泉	包含層
071	椀	(11.2)			灰黒		口縁部小片		Ⅲ－1	和泉	包含層
072	椀				灰黒		体部～底部小片	三角形貼り付け高台。	？	和泉	包含層
073	椀				黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	包含層
074－1	椀				灰黒		底部小片	見込部平行線状暗文。三角形貼り付け高台。	Ⅲ－？	和泉	S37（溝）
074－2	椀				灰白～灰黒		底部細片	見込部平行線状暗文。台形貼り付け高台。	Ⅲ－2	和泉	S37（溝）
074－3	小皿				黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	S37（溝）
074－4	椀				黒～灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	S37（溝）
074－5	椀				灰黒		体部細片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	S37（溝）
075	椀				淡灰		口縁部～体部	内面ヘラミガキ。外面下半指押え。	Ⅲ－2	和泉	
076	椀				灰黒		口縁部1/6		Ⅲ－2	和泉	包含層
077	椀		(5.8)		灰		底部1/5	台形の貼り付け高台。	Ⅲ－2	和泉	包含層
078	椀				灰黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	包含層
079	椀？				黒		口縁部小片		Ⅲ－1？	和泉	504（柱穴）
080	椀		5.2		灰		底部1/5	見込部平行線状暗文。台形貼り付け高台。	Ⅲ－2	和泉	包含層
081	小皿				黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉？	322（ピット）
082	椀				漆黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉？	S63（ピット）
083	椀	(14.7)			黒		口縁部～体部1/6	見込部平行線状の暗文。	Ⅲ－2	和泉	包含層
084	椀		4.9		灰黒		体部～底部	見込部斜格子状暗文。貼り付け高台。	Ⅲ－1	和泉	包含層
085－1	椀	(13.8)	(4.2)	(5.0)	灰黒～灰白		口縁部～体部1/5	内面ヘラミガキ。見込部平行線状暗文。	Ⅲ－2	和泉？	68（ピット）
085－2	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉？	68（ピット）
086	椀	(15.3)			灰黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	包含層
087	椀	(14.8)			淡灰黒		体部片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1？	和泉	包含層
088	？				灰黒		体部細片		？	和泉？	350（ピット）
089	椀				灰黒～黒		体部小片		Ⅲ－2	和泉	694（ピット）
090	小皿				灰黒		口縁部小片	口縁部は薄く、強く外反。	Ⅲ－2	和泉	936（たわみ）
091－1	椀				淡灰		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	987（ピット）
091－2	椀				黒		体部細片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－？	和泉	1113（柱穴）
092	椀				灰白		口縁部小片		Ⅲ－2	和泉	1169（土壙）
093	椀				灰黒		体部小片		Ⅲ－2	和泉	1224（ピット）
094	椀？				灰黒～黒		口縁部小片		Ⅲ－2	和泉	1270（溝）
095	椀				黒		体部小片	内面ヘラミガキ。見込部平行線状？の暗文。	Ⅲ－1	和泉	1344（ピット）
096	椀				黒		底部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	1435（柱穴）
097	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－？	和泉	B 4（ピット）
098	椀				灰黒		底部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－？	和泉	B21（ピット）
099	小皿？				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	B40（ピット）
100	小皿？				灰		口縁部細片		Ⅲ－？	和泉	S20（ピット）
101	椀				黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	S31（溝）
102	椀				灰黒		口縁部小片		Ⅲ－1	和泉	S49（ピット）
103	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	S 6（溝？）
104	椀				黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ口縁部ヨコナデ後篦で調整	Ⅲ－2	和泉	S69（ピット）
105	椀？				灰黒		？	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－？	和泉	井戸－4
106	椀？				灰黒		体部細片		？	和泉	499（柱穴）
107	？				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	1145（ピット）

108	椀				黒		体部小片			和泉	1452（土壙墓）
109	椀				灰～黒		体部細片			和泉	1433（土壙）
110	?				黒		体部細片	内面ヘラミガキ。		和泉	356（溝）
111	椀?				灰白～黒		体部～底部小片	見込部平行線状暗文。台形貼り付け高台。		和泉	98（土壙）
112	椀				灰黒		口縁部細片	口縁部ナデ。		和泉	1150(SB29柱穴)
113	小皿?				灰黒		体部小片			和泉	1342（ピット）
114	?				灰黒		体部小片			?	1276（ピット）
115	椀?				淡灰～灰黒		体部細片	内面ヘラミガキ。		?	1149（柱穴）
116	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。		和泉	S60（土壙）
117	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。		和泉	B30（ピット）
118	椀				淡灰～灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。		和泉	B31（ピット）
119	椀				黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。口縁端部わずかに外反。		和泉	S31（ピット）
120	椀				灰黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。口縁端部わずかに外反。		和泉	B38（ピット）
121	椀				灰白		底部小片	内面ヘラミガキ。貼り付け高台。		和泉	B43（ピット）
122	椀?				淡灰～灰黒		体部細片			和泉	43（ピット）
123	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。		和泉	溝—11
124	椀?				灰白～黒		体部細片			和泉	土壙—66
125	?				灰黒		体部細片			和泉	354（土壙）
126	椀				灰～灰黒		口縁部細片			和泉	354（土壙）
127	椀?				黒		体部細片	内面ヘラミガキ。		?	1433（土壙）
128	椀				黒～灰白		体部細片		Ⅲ－2	和泉	1433（土壙）
129	椀				灰		体部細片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉?	1433（土壙）
130—1	小皿				灰黒		体部小片		Ⅲ－?	和泉	S20（ピット）
130—2	椀				黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	S69（ピット）
131	椀				灰黒		口縁部小片	口縁端部内側に小さい段。平行のヘラミガキ	Ⅱ－3?	楠葉?	建物—19柱穴
132—1	椀	(14.8)			黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	建物—19柱穴
132—2	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	建物—19柱穴
132—3	椀				黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－?	和泉	建物—19柱穴
133	椀				灰黒		体部細片	内面ヘラミガキ。	Ⅱ－?	和泉	建物—20柱穴
134	椀				灰黒		体部小片		Ⅲ－2	和泉	包含層
135	椀						口縁部小片		Ⅲ－?	和泉	包含層
136	椀				黒		口縁部～体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2?	和泉	包含層
137	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	?	和泉	包含層
138	椀				灰黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－?	和泉	包含層
139	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	包含層
140	椀				灰黒		体部小片	見込部斜格子状暗文。	Ⅲ－1	和泉	包含層
141	椀				黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	包含層
142	椀				黒灰		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	包含層
143	椀				灰黒		底部小片	見込部平行線状の暗文。三角形貼り付け高台	Ⅲ－2	和泉	包含層
144	椀				灰黒		体部小片		Ⅲ－1	和泉	包含層
145	椀				黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	包含層
146	椀				灰黒		口縁部小片		Ⅲ－2	和泉	包含層
147	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	包含層
148	椀				灰～灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	包含層
149	椀				灰～灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	包含層
150	椀				灰黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	包含層
151	椀				黒		口縁部小片		Ⅲ－2	和泉	包含層
152	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	包含層
153	椀				灰		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	包含層
154	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	包含層
155	?				灰	微砂粒含む	体部細片	内面ヘラミガキ。外面押圧			包含層
156	?				灰	微砂粒含む	体部細片	内面ヘラミガキ。外面押圧			包含層
157	椀?				灰黒		底部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	
158	椀?				灰黒		体部小片		Ⅲ－?	和泉	包含層

159	椀？				黒		体部片		Ⅲ－1	和泉	包含層
160	？				黒		底部小片	三角形貼り付け高台。	？	和泉	包含層
161	椀				灰～黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。		和泉	包含層
162	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ？		和泉	包含層
163	椀				灰黒		口縁部小片	口縁端部わずかに外反。内面ヘラミガキ。		和泉	包含層
164	椀				漆黒		体部小片	内面ヘラミガキ。		和泉	包含層
165	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。		和泉	包含層
166	椀				黒		底部小片	三角形貼り付け高台。		和泉	包含層
167	椀				灰白～灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。		和泉	包含層
168	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。		和泉	包含層
169	椀				黒		体部小片	内面ヘラミガキ。		和泉	包含層
170	椀				灰～灰黒		底部小片	内面ヘラミガキ。五角形貼り付け高台。		和泉	包含層
171	椀				黒		底部小片	内面ヘラミガキ。台形貼り付け高台。		和泉	包含層
172	椀				灰～灰黒		底部小片	内面ヘラミガキ。台形貼り付け高台。		和泉	包含層
173	椀				黒		体部小片	内面ヘラミガキ。		和泉	包含層
174	椀				灰黒		体部細片			和泉	包含層
175	小皿				灰～黒		口縁部細片	内面ヘラミガキ。		和泉	包含層
176	？				灰白～灰		体部細片	内面ヘラミガキ。		和泉	包含層
177	？				灰黒		体部細片			和泉	包含層
178	椀				灰白～黒		体部下半小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	包含層
179	椀				淡灰桃～灰黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。		和泉	包含層
180	椀				灰黒		体部細片			和泉	B 5（ピット）
181	椀				灰白		底部 1／4	見込部平行線状暗文。三角形貼り付け高台。		和泉	包含層
182	椀				黒		底部小片	三角形貼り付け高台。		和泉	包含層
183	椀？				灰白～灰黒		口縁部細片			和泉	包含層
184	椀				灰黒		体部小片		Ⅲ－2	和泉	包含層
185	椀				黒		体部小片		Ⅲ－2	和泉	包含層
186	椀				灰黒～灰白		体部小片		Ⅲ－2	和泉	包含層
187	椀				灰黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	包含層
188	椀				灰白		体部小片	内外面ヘラミガキ。	？	？	包含層
189	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－？	和泉	包含層
190	椀				灰～灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	包含層
191	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	包含層
192	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	包含層
193	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	包含層
194	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	包含層
195	椀				黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	包含層
196	椀				灰～黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	包含層
197	椀				黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	包含層
198	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。		？	包含層
199	椀				灰黒		口縁部細片		Ⅲ－2	和泉	包含層
200	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	包含層
201	椀				灰黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	包含層
202	椀				白～灰黒		口縁部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	包含層
203	椀				灰黒		底部小片	内面ヘラミガキ。貼り付け高台。	Ⅲ－2	和泉	土壙―15
204	椀				灰黒		体部	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－2	和泉	溝―17
205	椀				灰黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	包含層
206	椀				灰黒		底部小片		？	和泉	P溝 5
207	椀？				灰白	微砂粒含む	体部小片	内面ヘラミガキ。			包含層
208	？				灰黒	微砂粒含む	口縁部細片				包含層
	？						小片 9 点	小片一括個体数不明。		和泉	溝―20
	椀				灰黒～黒		体部小片	内面ヘラミガキ。	Ⅲ－1	和泉	包含層

輸入磁器観察表

図番号	種別	器種	口径	底径	器高	色調	胎土	残存状況	形態・手法	時期	産地	遺構名
001	青磁	小皿		4.2		透淡ウグイス	緻密	底部1/2	内面櫛描ジグザグ点綴文。底部釉かきとる。	12～13	同安窯系	溝－1
002－1	白磁	碗		5.5		白	緻密	底部1/2	外面体部下半、底部無釉。見込沈線状の段。	12		溝－1
002－2	白磁	碗？				灰白	緻密	体部小片		12		溝－1
002－3	白磁	碗？				透白	緻密	体部小片		12		溝－1
003	青磁	碗				薄緑	緻密	体部小片		13	龍泉系？	溝－2
004	白磁	碗				灰白	緻密	口縁部・体部小片	口縁部小さい玉縁。	12		溝－2
005	青磁	碗	14.7	5.2	5.1	ウグイス		1/2	口縁部・体部五輪花。輪高台。畳付露胎	9～10	越州窯	包含層
006	青磁	碗				灰オリーブ	緻密	口縁部小片	口縁部輪花。	9～10	越州窯系	包含層
007	白磁	皿？				灰白		口縁部外反。	口縁部外反。	12～13		936（たわみ）
008	青磁	碗？	(18.4)			淡緑灰	緻密	口縁部～体部	口縁部・体部五？輪花。口縁部ラッパ状。	9～10	越州窯系	包含層
009	白磁	碗				透白		口縁部小片				建物－9柱穴
010	白磁	碗		6.4*		乳白		底部1/3	蛇の目高台。畳付研磨。	9～10	定窯系	包含層
011	白磁	碗		6.0*		乳白		底部1/4	蛇の目高台。畳付研磨。高台内一部露胎。	9～10	定窯系	包含層
012	青磁？	碗		5.8*		淡灰オリーブ		底部小片	蛇の目高台。畳付に目跡。二次的加熱？	9～10	越州系？	包含層
013	白磁	碗	(17.0)			灰オリーブ	緻密	口縁部小片	口縁部玉縁。	12		902（ピット）
014	白磁	碗				明灰白	緻密	口縁部小片	口縁部玉縁。	12		1218（ピット）
015	白磁	碗	(15.0)			灰白	緻密	口縁部～体部1/6	小さい玉縁。外面体部下半露胎。	12		包含層
016	白磁	碗	(14.9)			灰オリーブ		口縁部小片	口縁部玉縁。	12		包含層
017	白磁	碗	(15.2)			灰白	緻密	口縁部1/6	口縁部玉縁。	12		包含層
018	白磁	碗	(15.2)			灰白		口縁部1/6	口縁部玉縁。	12		包含層
019	白磁	碗	(15.5)			灰白		口縁部～体部1/6	口縁部玉縁。	12		包含層
020	白磁	碗？		(5.9)		灰白		底部1/5	非常に浅い削り出し高台。	12？		包含層
021	白磁	碗		(5.0)		濁灰白		体部～底部	内面沈潜状の段。非常に浅い削り出し高台。	12		包含層
022	白磁	碗	(15.8)			淡灰オリーブ		口縁部小片	口縁部玉縁。	12		包含層
023	白磁	碗	(17.2)			オリーブ灰	緻密	口縁部小片	口縁部玉縁。	12		包含層
024	白磁	碗	(17.0)			白（黄）		口縁部小片	口縁部玉縁。	12		包含層
025	白磁	碗				灰白	緻密	口縁部小片	口縁部玉縁。	12		包含層
026	白磁	碗				淡ウグイス	緻密	口縁部小片	口縁部玉縁。	12		包含層
027	白磁	碗				濁白		口縁部小片	釉口縁部下に玉状に垂下。	12		包含層
028	白磁	碗				灰白		口縁部小片	口縁部玉縁。	12		包含層
029	白磁	碗		5.2		（灰）白	緻密	体部～底部1/5	非常に浅い削り出し高台。見込部圏線。	12		包含層
030	白磁	碗		5.2		灰白	緻密	底部1/3	非常に浅い削り出し高台。	12		包含層
031	白磁	碗		5.2		濁灰		底部1/3	見込部に素地焼きの重ね焼の痕跡？畳付研磨。	12		包含層
032	白磁	碗		5.8		淡白黄		体部～底部	非常に浅い削り出し高台。内面見込部沈線。	12		包含層
033	青磁	碗		(6.5)		濃緑灰		体部～底部	非常に浅い削り出し高台。見込部沈線状の段。			包含層
034	白磁	碗				淡灰オリーブ		口縁部小片	口縁端部外反。	12？		包含層
035	白磁	碗	(15.6)			明灰白		口縁部1/5		12		包含層
036	白磁	碗	(16.4)			淡灰オリーブ		口縁部小片	口縁端部わずかに外反。	12		包含層
037	白磁	碗	(15.4)			濁灰白		口縁部1/6	口縁端部外反。			包含層
038	青磁	碗	(16.9)			淡灰緑		口縁部小片	内面飛雲文。	13	龍泉窯系	包含層
039	白磁	碗	(16.4)			淡黄白		口縁部1/5	口縁部玉縁。	15？		包含層
040	青磁	碗				淡緑		口縁部小片	外面鎬蓮弁文。砧青磁。	13	龍泉窯系	包含層
041	白磁	碗				濁灰白		口縁部小片				包含層
042	青磁	碗				薄緑		口縁部小片	外面雷文。	15		
043	青磁	碗				淡緑灰	緻密	体部小片	内面櫛描と片切彫による文様。	13	龍泉窯系	包含層

044	青磁	碗				明ウグイス		体部小片	内面片切彫による文様。	13	龍泉窯系	包含層
045	磁器	小皿？		3.6		淡黄		体部～底部		13		建物一18柱穴
046	白磁	碗		(5.2)		灰白		体部～底部	削り出し高台。二次的加熱？	13		建物一21柱穴
047	青磁	碗？				明ウグイス		口縁部細片	口縁部玉縁。	12		溝一19
048	白磁	碗				淡灰オリーブ		口縁部小片	口縁部玉縁。	12		溝一19
049	白磁	碗				明白（黄）	緻密	体部～底部	削り出し高台。体部外面下半ヘラケズリ。	12		溝一19
050	白磁	碗				白（黄）		体部～底部	削り出し高台。	12		溝一19
051－1	磁器	小皿？		3.1		淡黄	須恵質	体部～底部小片	底部ヘラキリ、ヘラによる沈線。	12～13		溝一20
051－2	白磁	小皿				浅黄緑	緻密	口縁部1／6		12～13		溝一20
051－3	白磁	小皿				淡黄白～浅黄緑	緻密	体部～底部小片	底部ヘラキリ？	13		溝一20
052	白磁	碗	16.4			乳白	緻密	口縁部1／4	口縁部玉縁。	12		溝一20
053－1	白磁	碗				濁白	緻密	口縁部細片	薄手で玉縁小さい。	12		溝一20
053－2	白磁	小皿				浅黄緑		体部小片				溝一20
053－3	白磁	碗				灰オリーブ	緻密	体部小片		12		溝一20
053－4	白磁	小皿？				明灰オリーブ	緻密	体部小片		12～13		溝一20
053－5	白磁	碗				明灰オリーブ	緻密	体部～底部	浅い削り出し高台。外面体部下半底部露胎。	12～13		溝一20
054	白磁	瓶				灰（白）	少し砂っぽい	体部小片	内面釉無し。			溝一21・22
055	白磁	碗	17	5.1	7.3	灰オリーブ	緻密	完形	内面櫛描文。口縁端部水平になる。	13	同安窯系	土壙墓一2
056－1	白磁	碗	15.6	5.2	6	淡灰オリーブ	緻密	完形	見込部に沈線。体部外面～高台部ヘラケズリ。	13	同安窯系	土壙墓一2
056－2	白磁	？				灰白	緻密	体部小片		13？		土壙墓一2
057	青磁	碗	(16.6)			ウグイス	含微砂	口縁部～体部1／6	櫛描と片切彫による草花文。	12>13	龍泉窯系	土壙一16
058	白磁	碗	17.0			明灰オリーブ		口縁部小片	口縁部玉縁。	12		包含層
059	白磁	碗	(16.3)			灰白	緻密	口縁部小片	体部内面上半に沈線。	12～13		包含層
060	白磁	碗	(15.8)			灰オリーブ	緻密	口縁部小片	口縁部玉縁。	12		包含層
061	白磁	碗	(16.0)			淡黄灰	砂粒多い？	口縁部～体部小細片	口縁部玉縁。	12		包含層
062	青白磁	小壺蓋	(4.4)		(1.45)	淡青白	緻密	1／6	重蓮弁文（菊花？）を型押しで陽刻。	12		包含層
063	青磁	合子蓋	4.8		(1.6)	淡浅緑	緻密	口縁部1／4	外面型押しで蓮弁文をあらわす。	12		包含層
064	白磁	碗	(13.0)			透淡ウグイス	緻密	口縁部小片	内面劃花文。			包含層
065	青磁	碗		2.6		青白	緻密	底部小片		14初頭	龍泉窯系	包含層
066	白磁	碗				透白	緻密	体部小片	薄手。釉付けかけ。内面下半に沈線。	12		溝一29
067－1	磁器	小皿		2.8		淡灰黄		体部～底部	釉付けかけ。	13		溝一29
067－2	白磁	碗				オリーブ灰		体部小片		12		溝一29
068	白磁	？				白	緻密	体部細片		12？		土壙一24
069－1	青磁	碗		4.8*		灰褐		体部～底部小片	削り出し高台。高台内側に砂痕。	13		土壙一24
069－2	青白磁	？				青白	緻密	口縁部小片	口縁端部外反。内側櫛描文。	12		土壙一24
070	白磁	皿		5.2		乳白		体部～底部小片	外面体部下半底部露胎。見込部沈線状の段。			土壙一24
071	天目	碗	10.4	2	6	漆黒	堅緻	口縁部～体部1／3	体部下半～高台にかけヘラケズリ。	13～	建窯？	たわみ－4
072	青磁	碗	(15.5)			淡緑灰	緻密	口縁部小片	外面鎬蓮弁文。	13	龍泉窯系	包含層
073	青磁	碗	(15.0)			淡灰緑		口縁部小片	外面鎬蓮弁文。	13		
074	青磁	碗	(15.6)			黄灰	緻密	口縁部小片	外面ヘラガキ蓮弁文。	13	龍泉窯系	包含層
075	青磁	碗	(16.2)			淡青緑		口縁部小片	外面鎬蓮弁文。	13	龍泉窯系	包含層
076	青磁	碗				灰オリーブ		口縁部小片	外面鎬蓮弁文。	13	龍泉窯系	包含層
077	青磁	碗	(15.6)			濁淡緑黄		口縁部小片	外面鎬蓮弁文。	13	龍泉窯系	包含層
078	青磁	碗	(16.8)			薄緑		口縁部小片	外面鎬蓮弁文。	13	龍泉窯系	
079	青磁	碗	17.8			淡灰緑		口縁部～体部1／4	外面鎬蓮弁文。	13	龍泉窯系	包含層
080	青磁	碗		(4.5)		緑青		底部小片	砧青磁。	14	龍泉窯系	包含層
081	白磁	碗		5.4		灰白	緻密	底部3／4	削り出し高台。見込部重ね焼きの痕跡有り。	12～13		包含層

082	青磁	碗？		4.6		明緑灰		底部1/3	削り出し高台。	12		包含層
083	青磁	碗				濁緑	緻密	底部	削り出し高台。無文。	13	龍泉窯系	包含層
084	青磁	碗		3.4		淡ウグイス		底部小片		13新	龍泉窯系	包含層
085	白磁	碗		5.2*		オリーブ灰	緻密	底部のみ	削り出し高台。見込部に沈線。	13	龍泉窯系	包含層
086	白磁	碗				乳白		体部～底部	削り出し高台。内面見込部に1cm程釉かからず	12		包含層
087	白磁	碗		3.8		白	緻密	体部～底部	削り出し高台。体部内面上位沈線。	12		建物－45柱穴
090	青磁	碗		2.9		薄灰緑		底部1/4	畳付研磨。	12<13	龍泉窯系	1068（ピット）
091	白磁	小皿	(9.4)			明灰白		口縁部～体部1/5	内外面体部下半露胎。			建物－18柱穴
092	白磁	小皿	9.9	3	2.6	白黄	緻密	1/3	底部ヘラキリ。口縁部わずかに内傾。	12		1347（ピット）
093	白磁	小皿		3.6		明白	緻密	体部～底部小片	底部ヘラキリ。外面体部下半～底部露胎。	12		1346（ピット）
094	白磁	小皿	(10.6)	(8.0)		灰オリーブ		口縁部1/4	体部の屈曲部内面に段。	13>14	同安窯系	包含層
095	白磁	小皿	10.5	3.95	2.7	白黄		1/3	底部ヘラキリ。見込部に圏線。	12		包含層
096	白磁	？				透白		口縁部小片		12		包含層
097	青磁	小碗				オリーブ灰	緻密	体部～底部小片		13	龍泉窯系	包含層
098	白磁	碗？		2.6		淡黄白		底部1/2	削り出し高台。	15	李朝	559（ピット）
099	青磁	碗		5.3		薄緑		体部～底部	削り出し高台。見込部に圏線。片切彫草花文	13	龍泉窯系	包含層
100	青磁	杯				淡緑灰	緻密	口縁部小片	口縁部鋭く外反。外面蓮弁文。	14初	龍泉窯系	包含層
101	青磁	碗				透緑黄		口縁部小片	外面鏑蓮弁文。	13	龍泉系？	901（ピット）
102	青磁	碗		4.9		淡灰緑		体部～底部	削り出し高台。内面片切彫による花文	12	龍泉窯系	S42（柱穴）
105	白磁	小皿				明灰白		口縁部～体部小片	口縁部外反。体部下半露胎。	12		土壙－51
106												
107	白磁	碗		6.1		灰白		底部	見込部沈線状の段。浅い削り出し高台。	12		P溝5
108	青磁	？				ウグイス		体部小片	外面鏑蓮弁文。	13		建物－30柱穴
109	磁器	？				明灰褐	含微砂	口縁部小片				257（ピット）
110	青磁	碗				濁緑		体部小片	外面鏑蓮弁文。	13～14初		283（ピット）
111	白磁	碗				灰白		体部細片		12～13		365（ピット）
112	青磁	碗				明（淡）緑	含微砂	体部小片		13	龍泉窯系	626（ピット）
113	白磁	碗？				白（灰）	緻密	体部小片		12		918（柱穴）
114	白磁	皿？				明白		体部細片		12		建物－20柱穴
115	青磁	碗				淡黄褐		体部小片		12<13		土壙－8
116	磁器	小皿？				浅黄緑		体部小片		13		建物－19柱穴
117	青磁	小皿？				薄緑		体部小片		13		1016（ピット）
118	白磁	碗				乳白		体部小片		9～10	定窯系	1030（柱穴）
119	白磁	？				明白		体部細片		12？		土壙－64
120	白磁	碗				明白		体部小片		12		1124（ピット）
121	白磁	皿				明白		体部小片		12		1169（土壙）
122	白磁	碗？				灰白		体部小片		12		建物－29柱穴
123	白磁	碗？				白黄		口縁部細片		12		建物－29柱穴
124	白磁	碗？				明灰白		体部小片	内面櫛描文。	12～13		1253（ピット）
125	白磁	小皿				白黄		口縁部小片	口縁部わずかに内傾。	12？		1270（溝）
126	白磁	小皿？				灰オリーブ		口縁部小片	口縁部わずかに内傾。	12？		1296（ピット）
127	白磁	？				乳白	緻密	体部細片		12？		1347（ピット）
128	白磁	？				灰白	緻密	体部細片		12？		土壙－14
129	青磁	碗				明青白	緻密	体部小片	外面削り出し蓮弁、櫛目。内面片切彫で施文	13	龍泉窯系	1399（ピット）
130	青磁	小皿？				薄黄緑	緻密	体部細片	見込部？に段。	12？		1439（土壙）
131	白磁	？				白		口縁部細片				B20（ピット）
132	白磁	皿？				灰オリーブ	緻密	口縁部細片	口縁端部外反。	12		1433（土壙）
133	白磁	？				白		口縁部細片	口縁部小さい玉縁。			建物－50柱穴
134	青磁	碗				淡灰緑		体部小片		13<14		包含層

135	白磁	碗				濁灰白		体部小片		12～13		包含層
136	青磁	碗				明緑黄		体部小片	内面櫛描点綴文、片切彫。	13	同安窯系	包含層
137	青磁	碗	(14.8)			淡ウグイス		口縁部	体部内面下半沈線、櫛描点綴文。	13	同安窯系	包含層
138	青磁	碗				濁黄緑		体部小片	外面鎬蓮弁文。	13	龍泉窯系	包含層
139	青磁	碗				淡濁緑		体部小片	内面片切彫による草花文。	13<14		包含層
140	白磁	碗				明灰白		口縁部小片	口縁部玉縁。	12		包含層
141	白磁	碗				明灰白		口縁部小片	口縁部玉縁。	12		包含層
142	白磁	碗				灰オリーブ		口縁部小片	口縁部玉縁。	12		包含層
143	白磁	碗				濁灰白		体部小片		12		包含層
144	白磁	碗？				明黄白		体部小片		12		包含層
145	白磁	皿				明青白		口縁部小片	口縁部外反。	13？		包含層
146	青磁	碗				明薄緑		体部小片		12？		包含層
147	青磁	碗				濁緑		高台部小片	浅い削り出し高台。	13	龍泉窯系	包含層
148	青磁	碗				灰緑		体部小片		13	龍泉窯系	包含層
149	白磁	碗？				明白		口縁部細片	口縁部外反。	12？		包含層
150	白磁	碗				淡灰白		口縁部小片	ロハゲ。	13>14		包含層
151	青磁	碗				薄緑		体部小片	外面鎬蓮弁部、大きな弁をヘラで描く。	13	龍泉窯系	包含層
152	白磁	碗				灰白		口縁部小片	口縁部玉縁	12		包含層
153	白磁	碗？				明白		体部小片	削り出し高台、畳付研磨。	12		包含層
154	白磁	碗				明灰オリーブ		体部小片	体部内面に沈線。	12		包含層
155	青磁	碗				淡灰緑		体部小片	二次的に加熱？	13	龍泉窯系	包含層
156	青磁	碗				明薄緑		体部小片	外面鎬蓮弁文。	13	龍泉窯系	包含層
157	白磁	小皿？				白	砂粒多い？	体部小片		12		包含層
158	白磁	小皿				明黄緑	緻密	体部～底部	底部ヘラ切り。	13		包含層
159	青磁	碗				浅緑		体部小片	内面櫛描、片切彫による草花文。	13	龍泉窯系	包含層
160	青磁	碗				淡緑		体部小片	外面蓮弁文？	13	龍泉窯系	包含層
161	青磁	碗				ウグイス		体部小片		13	龍泉窯系	包含層
162	白磁	皿				灰白		口縁部小片	ロハゲ。	13		包含層
163	青磁	碗				淡黄緑		口縁部小片	口縁部内側に沈線。	12～13		包含層
164	白磁	碗				濁淡灰緑		体部小片	内面櫛描文。	13	龍泉窯系	包含層
165	白磁	碗				透黄緑		体部小片	外面鎬蓮弁文。	13	龍泉窯系	包含層
166	白磁	碗？				灰白		体部～底部	内外面体部下半～底部露胎。			包含層
167	白磁	碗				灰白		体部小片	見込部沈線状の段。	12		包含層
168	白磁	碗				灰白		口縁部小片	口縁部玉縁。	12		包含層
169	白磁	碗				灰		体部小片		12		包含層
170	青磁	小皿				薄黄緑		体部小片		13		包含層
171	白磁	碗				明灰白		体部小片	見込部に沈線。			包含層
172	白磁	碗？				明灰白		口縁部小片	口縁端部外反。	12		包含層
173	白磁	碗				明灰白		口縁部小片	口縁部玉縁。	12		包含層
174	青磁	碗				淡濁緑	砂分含	体部小片	外面ヘラミガキ鎬蓮弁文？二次的加熱。	15		包含層
175	青磁	碗？				灰緑		体部小片	外面ヘラガキ鎬蓮弁文？	15		包含層
176	白磁	？				乳白		体部小片		12		包含層
177	白磁	？				透白		体部小片		12？		包含層
178	青磁	碗				淡緑		体部小片	外面鎬蓮弁文。	13		包含層
179	青磁	碗				淡緑		体部小片	外面片切彫風沈線。内面片切彫による文様。	13		包含層
180	白磁	碗				濁灰白		体部小片	内面沈線。	12		包含層
181	白磁	皿				乳白		口縁部小片	ロハゲ。	13		包含層
182	白磁	皿？				乳白		体部小片		12		包含層
183	青磁	碗				ウグイス		体部小片		13	龍泉窯系	包含層
184	青磁	碗				明ウグイス		体部小片	内面櫛描・片切彫による文様。	13	龍泉窯系	包含層
185	白磁	碗				灰白	緻密	体部小片	外面体部下半に沈線。	12		包含層
186	青磁	碗				オリーブ灰	緻密	体部小片		9～10	越州系？	包含層

187	青磁	碗				オリーブ灰	緻密	体部小片		9～10	越州系？	包含層
188	白磁	碗？				オリーブ灰	緻密	体部細片		12		包含層
189	白磁	碗				？		高台部	深い削り出し高台。	12？		包含層
190	白磁	碗				明灰		口縁部細片	口縁端部外反。	12		包含層
191	白磁	？				乳白		体部細片		12		包含層
192	白磁	碗				明灰オリーブ	緻密	口縁部小片	口縁端部外反。	12		包含層
193	白磁	碗				白		体部～底部	蛇の目高台？	9～10	定窯系	包含層
194	白磁	碗				明ウグイス		口縁部小片	口縁端部外反。	12		包含層
195	白磁	碗				淡ウグイス		体部小片		12		包含層
196	白磁	四耳壺				淡灰黄	緻密	体部小片	内側にも釉かかる（淡ウグイス色）。	12		包含層
197	青磁	碗				淡（灰）褐		体部小片		9～10	越州系？	包含層
198	白磁	碗				淡ウグイス		体部小片	外面体部下半露胎。	12		包含層
199	白磁	碗				濁灰		体部～底部	非常に浅い削り出し高台。	12		包含層
200	白磁	皿？				白		口縁部小片	口縁端部わずかに外反。	12		包含層
201	白磁	碗				灰白		底部小片	非常に浅い削り出し高台。	12		包含層
202	白磁	碗				淡オリーブ		口縁部小片	口縁部玉縁。	12		包含層
203	白磁	碗				オリーブ灰		体部小片	見込部沈線状の段。	12		包含層
204	白磁	？				淡黄白		体部小片		12？		包含層
205	白磁	？				淡薄緑		体部小片				包含層
206	青磁	碗				薄緑		口縁部小片	外面雷文。	15初	龍泉窯系	
207	白磁	碗				灰白		体部小片		12		
208	磁器	碗				淡灰（青）		体部～底部小片	削り出し高台。			
209	青磁	小皿				淡ウグイス		体部～底部	内面櫛描ジグザグ点綴文。片切彫。	12	同安窯系	包含層
210	白磁	碗				灰白		口縁部小片	口縁端部外反。	12		包含層
211	白磁	？				乳白	緻密	体部小片		12		包含層
212	白磁	碗？				淡黄白	緻密	底部小片	削り出し高台。			包含層
213	白磁	？				灰白	緻密	体部小片		12		包含層
214	青磁	？				ウグイス		口縁部小片	内面櫛描文。	13	龍泉窯系	､
215	白磁	碗				明灰		体部小片		12		
216	青磁	碗				明薄緑		体部小片	外面鎬蓮弁文。	13	龍泉窯系	包含層
217	青磁	？				明薄緑		体部小片		13	龍泉窯系	包含層
218	青磁	？				黄緑		口縁部～体部小片	すだれ状に白くなる（剝離？）。	12	同安窯系	包含層
219	青磁	碗				濁緑灰		体部小片	内面片切彫による花文。	13	龍泉窯系	包含層
220	白磁	碗				灰白		底部小片	削り出し高台。	12		包含層
221	白磁	碗				淡ウグイス		体部小片	外面櫛描文。内面櫛先点描文。	12	同安窯系	包含層
222	白磁	碗				淡オリーブ灰		体部小片	内面劃花文？	12		包含層
223	青磁	？				明青白	緻密	口縁部細片	外面鎬蓮弁文。	13	龍泉窯系	包含層
224	青磁	？				褐		体部小片		9～10	越州系？	包含層
225	白磁	？				灰白		体部小片		12		包含層
226	青磁	小皿				濃黄緑		体部～底部		12	同安窯系	包含層
227	白磁	碗				淡灰	緻密	底部1/5	浅い削り出し高台。	12？		包含層
228	青白磁	小皿				濁青白		体部細片		12？		
229	青磁	小皿				黄緑		体部～底部小片	底部へラキリ。	12		包含層
230	白磁	瓶				淡青白		体部小片	内面釉なし。風形。双耳壺？	11		包含層
231	青磁	碗				淡灰オリーブ		体部小片	外面ネコカキ文。内面櫛描・片切彫の花文。	12	同安窯系	包含層
232	白磁	碗				白		体部小片				包含層
233	明染付	皿				紫青		体部小片1/6	内面蜘子文、外面無文。	16後		包含層
234	青磁	碗				薄緑		口縁部小片		14中		6（溝）
235	青磁	碗		5.6		淡灰オリーブ	緻密	体部～底部	見込部重ね焼き部分露胎。削り出し高台。			包含層
236	白磁	？				白		口縁部小片	薄手で口縁部玉縁小さい。	12		包含層
237	白磁	小皿				灰オリーブ		口縁部小片	底部へラキリ。見込部沈線状の段。	12		包含層

238	白磁	碗				灰白		口縁部小片	口縁部直線的に立ち上がる。	12		包含層
239	白磁	?				乳白		体部小片				包含層
240	白磁	?				淡青白		体部小片		12?		包含層
241	白磁	碗		(5.6)		灰白		体部～底部	削り出し高台。	12		包含層
242	磁器	小皿		3		浅黄緑		体部～底部	底部直径3㎝ヘラで削る。	13		包含層
243	白磁	碗				灰白		体部小片		12		包含層
244	青磁	?				薄灰緑		口縁部小片				
245	白磁	碗?				淡灰オリーブ	緻密	口縁部小片		12		
246	白磁	?				白	緻密	体部小片				包含層
247	白磁	皿?				淡青白	緻密	体部小片	見込部沈線状の段。内外面体部下半露胎。	12		1180（たわみ）
248	青磁	碗				濁灰緑		体部小片	外面鏑連弁文？二次的加熱？	13	龍泉窯系	包含層

土製品一覧表

遺物番号	遺構名	種別	長	幅	厚	残存状況	色調	胎土	備考 1	旧遺構名
01	溝－1	土錘	4.5	1.3	0.5	完形	にぶい黄橙10YR6/3	砂粒多い	円錐。重量7.1。孔径0.5。	141（溝）
02	溝－1	土錘	5.4	1.2	0.5	完形	黒褐10YR3/1	砂粒僅少	円錐。重量8.2。孔径0.3。	141（溝）
03	溝－1	土錘	5.8	1.8	0.7	ほぼ完形	灰5Y5/1	砂粒少ない	管状。重量5.8。孔径0.4。	141（溝）
04	溝－1	羽口	—	—	2.5	小片	浅黄橙10YR8/4	微砂粒多い		141（溝）
05	溝－1	?（棒状）	9.2	4.4	3	先端部のみ	にぶい橙5YR7/4	砂粒多い	用途不明。	141（溝）
06	溝－8	羽口	—	—	3.2	1/2?	灰白2.5Y8/1	砂粒多い	孔径2.3～2.6。	941（溝）
09	建物－18	?（方形）	2.5	2.5	2.5	ほぼ完形	明褐7.5YR5/6	微砂粒多い	2ヶ所に刺突状の孔。	1318（SB32柱穴）
10	建物－18	?（方形）	2.1	1.9	1.8	ほぼ完形	にぶい黄橙10YR7/4	微砂粒多い	二次加工品。用途不明。	1318（SB32柱穴）
11	溝－21	土錘	5.2	1.3	0.6	ほぼ完形	橙5YR6/6	小砂粒多い	管状。重量8.6。孔径0.4。	1174（溝）
12	建物－44	土錘	3.6	2.9		1/2	灰5Y4/1	長石石英多い	球形。重量23.7。孔なし。	550（SB20柱穴）
13	建物－51	土錘	4.8	1.3	0.5	ほぼ完形	浅黄橙10YR8/3	小砂粒多い	円錐。重量7.3。孔径0.3。	1150（SB29柱穴）
14	土壙－24	土錘	5.5	1.7	0.5	先端部一部欠	灰白10YR7/4	微砂粒僅少	円錐。重量7.3。孔径0.4。	S61（土壙）
15	ピット	土錘	2.3	2.2	0.9	完形	にぶい黄橙10YR7/4	小砂粒多い	球形。重量9.1。孔径0.5。	843（ピット）
16	柱穴	土錘	3.7	1.2	0.6	3/4	灰白2.5Y8/2	小砂粒多い	円錐。重量5.3。孔径0.3。	55（柱穴）
17	ピット	土錘	3.7	1.2	0.5	先端部一部欠	暗灰N3/	雲母若干含む	球形。重量4.4。孔径0.3。	S78（ピット）
18	ピット	土錘	3.8	0.7	0.3	先端部一部欠	明赤褐N2.5YR5/6	微砂粒僅少	球形。重量2.1。孔径0.3。	S78（ピット）
19	ピット	土錘	5.5	1.6	0.6	先端部一部欠	灰白10YR8/1	砂粒多い	管状。重量13.0。孔径0.5。	741（ピット）
20	包含層	勾玉	4.3	1.9		完形	明赤褐5YR5/6	微砂粒多い	重量13.5。孔径0.5～0.6。	741（ピット）
21		土錘	4.4	1.2	0.6	ほぼ完形	灰白N8/	小砂粒多い	円錐。重量5.0。孔径0.5。	
22	ピット	土錘	5.3	1.6	0.5	完形	浅黄2.5Y7/3	小砂粒多い	円錐。重量12.8。孔径0.7。	S93（ピット）
23		土錘	5.3	1.6	0.7	完形	白灰10YR8/2	小砂粒多い	円錐。重量11.5。孔径0.5。	
24	ピット	土錘	1.5	1.1	0.5	両端部欠損	灰5Y5/1	微砂粒僅少	円錐。重量1.7。孔径0.4。	S63（ピット）
25	包含層	土錘	4	1.5	0.7	両端部欠損	褐灰10YR5/1	砂粒多い	円錐。重量8.8。孔径0.5。	包含層
26	包含層	土錘	3.7	1.3	0.6	先端部一部欠	灰黄褐10YR5/2	小砂粒多い	円錐。重量5.9。孔径0.4。	包含層
27	包含層	土錘	3.4	1.2	0.6	完形	にぶい黄橙10YR7/3	微砂粒僅少	円錐。重量3.8。孔径0.4。	包含層
28	包含層	土錘	5.2	1.5	0.6	先端部一部欠	灰黄2.5Y7/2	微砂粒含む	円錐。重量9.8。孔径0.4。	包含層
29	包含層	土錘	4.6	1.3	0.7	ほぼ完形	橙5YR6/6	砂粒多い	円錐。重量8.2。孔径0.3。	包含層
30	包含層	土錘	4.3	1.3	0.6	ほぼ完形	オリーブ黒5Y3/1		円錐。重量6.0。孔径0.4。	包含層
31	溝	土錘	4.1	1.3	0.5	両端部欠損	浅黄橙10YR8/3	微砂粒少ない	円錐。重量6.5。孔径0.5。	P49（溝）
32	包含層	埴輪	—	—	3.3		橙2.5YR7/8	微砂粒多い	盾形？	包含層
33	包含層	円筒埴輪	—	—	1	小片	明黄褐10YR7/6	砂粒多い	外面ヨコハケメ。凸帯有。	包含層
34	包含層	羽口	—	—	2.4	小片	明黄褐10YR7/6	砂粒多い		包含層

軒丸瓦一覧表

型式	瓦当面 直径	内区 中房 径	形	蓮子数	内区 外縁 弁区径	弁幅	弁数	外区幅	外区 内縁 幅	文様	外区 外縁 幅	高	文様	出土地 土盛部	出土地 橋脚部	備考
Ⅰ	18	2	凸	—	13	3 ～3.6	単8	2.5	1	線	1.5	0.8	素	10	25	
Ⅰa	[14.6]	[2]	凸	—	[12]	3.4～3.6	単8	[2.2]	[0.6]	線	[1.6]	[0.8]	素	1	1	
Ⅰb	(16)	1.6	凸	—	?	?	単7	2.4	1.4	線	1.0	0.3	素			
Ⅰc	(15)	1.3	凸	—	?	?	単6	1.8	1	線	0.8	0.3	素			
Ⅰd	(15.4)	?	凸	?	?	?	単?	2.7	1.4	線	1.3	0.8	鋸歯	1		新出
Ⅱ	16.6	2.6	凹	6	12	2.9	単8	2.4	1	珠8	1.4	0.8	素	1	1	
Ⅲ	?	6.2	凹	1＋6	?	?	?	?	?	?	?	?	?			
Ⅳ	?	?	凹	?	?	2 ～2.2	単8?	2.8	2	素	0.8	0.8	素			
Ⅴ	16.2	4	凹	1＋6	11	1.8～2.2	単7	2.4～3.2	1.5	珠11	0.9～1.7	0.8	素			
Ⅵ	(15.5)	4	凹	1＋8	10	2.5～3	単8	2.8	1	線	1.8	0.7	素			
Ⅶ	(14.5)	4.5	凸	1＋4	10.5	2.4～3.8	単8	2 ～3	1.2	—	0.8～1.8	0.8	素			
Ⅷ	[20]	[5.5]	凸	[1＋6]	[14.4]	3.8	単5	3.1	1.5	—	1.8	0.5	素		1	
Ⅸ	16.5	三つ巴文						3.2	1.5	珠32	1.4～2.8	0.8	素	4	1	
Ⅹ	?	三つ巴文						?	?	珠	?	?	?			
Ⅺ	?	三つ巴文						?	?	珠	?	?	?			
Ⅻ	(15.4)	?	凹	3＋7	?	2.7	復8?	1.7～1.9	0.5	—	?	1.1	素		1	新出
ⅩⅢ	12.9	三つ巴文						2.9	1.3	珠	1.8	0.6	素		1	新出

軒平瓦一覧表

型式	瓦				当面					全長	顎の形態	出土地		備考
	上弦幅	下弦幅	弧深	瓦当厚	内区		外区					土盛部	橋脚部	
					厚	文様	上厚	下厚	文様					
Ⅰ	26.0	27.4	10.9	4.3	3.1	均整唐草文	0.6	0.6	—	?	曲線	2	12	
Ⅰa	?	?	?	?	?	均整唐草文	?	?	—	?	?		1	新出
Ⅱa	[28.0]	[28.5]	(10.5)	5.9	4.1	均整唐草文	0.9	0.9	—	?	曲線	2	5	左右不均整
Ⅱb	?	?	?	8.3	5.1	均整唐草文	1.9	1.3	—	?	?	1	1	
Ⅲ	[25.0]	[27.0]	(9.0)	6.0	3.5	均整唐草文	1.2	1.3	珠	37	曲線		1	
Ⅳ	?	?	?	6.4	3.0	均整唐草文	1.7	1.7	珠	?	?			
Ⅴ	28.0	29.0	10.5	6.0	3.0	均整唐草文	1.2	1.8	—	?	段			
Ⅵ	?	?	[8.8]	(5.1)	(4.3)	均整唐草文	?	?	—	?	曲線	3	3	
Ⅶ	?	?	?	3.5	?	?	?	?	?	?	?			
Ⅷ	?	?	?	4.5	2.3	均整唐草文	1.3	0.9	—	?	曲線		2	
Ⅸ	22.5	24.0	6.4	4.0	2.3	均整唐草文	0.6	1.1	—	?	段			
Ⅹ	?	?	[8.4]	4.7	2.1	均整唐草文	1.1	1.5	—	?	段	1		
Ⅺ	?	?	?	?	?	二重孤文	?	?	—	?	?		1	
Ⅻ	26.8	27.9	10.4	4.8	1.8	均整唐草文	1.7	1.3	—	?	曲線	1		新出。平城宮式6663系。
ⅩⅢ	?	?	?	4.8	2.0	均整唐草文	0.9	1.9	—	?	?	1		「備前」第21図の２と同笵。
ⅩⅣ	?	?	?	5.1	2.6	均整唐草文	1.3	1.2	—	?	段		1	新出。
ⅩⅤ	?	?	?	?	?	?	?	?	—	?	?		1	新出。
ⅩⅥ	?	?	?	5.0	3.1	蓮華唐草文	0.8	1.1	—	?	曲線		1	「備前」第22図の30と同笵。
ⅩⅦ	?	?	?	4.8	1.7	均整唐草文	1.6	1.5	—	?	段		1	新出。
ⅩⅧ	?	?	?	5.3	2.0	菊花唐草文	2.0	1.3	—	?	段		1	新出。
ⅩⅨ	?	?	?	4.0	2.0	均整？唐文	0.9	1.1	—	?	直線		1	新出。

注）　型式分類は、伊藤晃「備前」（『新修国分寺の研究』　吉川弘文館　1991年）の国分寺における分類を基に、一部補訂した。

今回出土しなかった型式の数値は、伊藤同上論文の数値を用いた。

出土していても、数値不明のものについては、伊藤同上論文の数値を用い、[　] で示した。

上記の他、三つ巴文の小片３点、型式不明の細片２点も出土している。

瓦類一覧表

遺物番号	種　別	残存長	残存幅	残　存　状　況	分　類	備　　考　　1	遺　構　名
第1図	軒丸瓦		17.9	瓦当部2/3	Ⅰ型式	一次調査T－18－a出土	P溝5
第1図	軒平瓦	18.7	11.3	瓦当部1/3、平瓦部1/6	Ⅰ型式	一次調査T－18出土	〃
第1図	軒平瓦	11.2	14.6	瓦当部1/2、平瓦部1/8	Ⅻ型式	T－21（東西溝）出土	
00—01	平瓦	27.8	13.3	1/4			溝－2
02	平瓦	18.1	19.9	1/4			たわみ－2
03	軒丸瓦		18.3	瓦当部2/3	Ⅰ型式		包含層
04	軒丸瓦	10.2	18.6	瓦当部完存	Ⅱ型式		包含層
05	軒平瓦	12.4	16.6	瓦当部右1/3	Ⅱ型式		包含層
06	軒平瓦	15.0	22.4	瓦当部右1/3	Ⅱ型式		J11区包含層
07	軒平瓦	9.8	11.8	瓦当部左1/4	Ⅱ型式		南側道包含層
08	軒平瓦	13.7	18.5	瓦当部1/2平瓦部一部	Ⅰ型式		包含層
09	軒平瓦	13.2	8.3	瓦当部1/2平瓦部一部	Ⅰ型式		南側道包含層
10	軒平瓦	8	11.2	瓦当部1/3平瓦部小片	Ⅻ型式	平城宮6663系	包含層
11	軒丸瓦	13.5	17	瓦当部1/2平瓦一部	Ⅰ型式		溝－14
12	平瓦	12.6	13.7	小片		表布目、裏縄目叩き	〃
13	平瓦	17.8	14.4	1/6		表布目、裏斜格子叩き	〃
14	丸瓦	18	10.8	1/3			建物－20柱穴
15	平瓦	11.7	10.5	小片		表布目、裏斜格子叩き	溝－19
16	平瓦	22.5	11.5	小片		表布目、裏斜格子叩き	〃
17	平瓦	10.5	9	小片		表布目、裏斜格子叩き	〃
18	平瓦	10.05	10.9	小片		表布目、裏斜格子叩き	〃
19	軒平瓦	20.2	19.9	平瓦部1/4瓦当部1/2	Ⅰ型式	瓦当文は中心飾のみ	溝－20
20	軒平瓦	23.9	28.1	瓦当部完存、平瓦部1/2	Ⅻ型式	平城京6663系	土壙－11
21	軒丸瓦		20.3	瓦当部2/3	Ⅰ型式		包含層－河道2上層
22	平瓦	16.7	23.9	1/2		表布目、裏斜格子叩き	包含層－河道2上層
23	軒丸瓦		14	瓦当部小片	Ⅰd型式	新出－外縁に鋸歯文	P溝－1
24	軒丸瓦	6.5	10.6	瓦当部・平瓦部小片	Ⅰ型式		P溝－2
25	軒丸瓦		12.9	瓦当部1/8	Ⅰ型式		P溝－3・4
26	軒丸瓦	16.7	20.2	瓦当部完存平瓦部一部	Ⅰ型式		〃
27	軒平瓦	17.9	17.4	瓦当部小片平瓦部一部	Ⅺ型式	新出－三重弧文	〃
28	丸瓦	33.9	14.3	ほぼ完形			P溝－5
29	軒丸瓦		18.6	瓦当部4/5	Ⅰ型式		Pたわみ－2
30	平瓦	39.5	27.5	3/4			〃
31	丸瓦	32.15	15.05	丸瓦部一部欠、玉縁部欠。			〃
32	軒丸瓦	7.7	19.5	瓦当部ほぼ完存平瓦部一部	Ⅰ型式		P3溝－2
33	軒丸瓦	15.2	13.2	平瓦部一部瓦当部小片	Ⅰ型式		〃
34	軒丸瓦		17.9	瓦当部1/2	Ⅰ型式		〃
35	軒丸瓦	4.9	7.6	瓦当部小片	Ⅰ型式		P8～9北溝－5
36	軒丸瓦		8.2	瓦当部小片	Ⅰ型式		〃
37	軒平瓦	13.1	14.3	瓦当部・平瓦部小片	Ⅲ型式		〃
38	軒平瓦	28.1	29.1	瓦当部完存、平瓦部1/2	Ⅰ型式		P6～7溝－4
39	軒平瓦	13.9	21.2	瓦当部一部、平瓦部一部	Ⅰ型式	瓦当文中心飾のみ	〃
40	軒平瓦	10.3	13.5	瓦当部1/4、平瓦部一部	Ⅵ型式		〃
41	軒丸瓦		7.7	瓦当部小片	Ⅰ型式		P9溝－8

42	軒丸瓦		11.5	瓦当部1/2	Ⅰ型式		P9溝－8
43	軒丸瓦		17.8	瓦当部1/6	Ⅷ型式		〃
44	軒丸瓦	8.1	14.7	瓦当部1/2平瓦部一部	Ⅻ型式		〃
45	軒丸瓦	9.6	19	瓦当部3/4	Ⅰ型式		包含層
46	軒丸瓦	5.0	2.0	瓦当部小片	Ⅰ型式		包含層
47	軒丸瓦	11.4		瓦当部1/2	Ⅱ型式		P7～P9北側道包層
48	軒丸瓦	17.3	17.2	瓦当部1/2平瓦部一部	Ⅻ型式	新出復弁、内側布目	包含層
49	軒丸瓦	16.2	14.2	瓦当部3/4	Ⅰ型式		P区北側道暗渠
50	軒丸瓦	17.0	12.6	瓦当部2/3	Ⅰ型式		P6北側道暗渠
51	軒丸瓦		15.7	Ⅲa型式	Ⅲ型式		（暗渠）
53	軒平瓦	16	25.6	瓦当部ほぼ完存、平瓦部1/3	Ⅰ型式	瓦当部1/2欠損	（暗渠）
54	軒平瓦	15.4	19.2	瓦当部1/2、平瓦部1/8	Ⅰ型式		？
55	軒平瓦	11.8	8.4	瓦当部1/4	Ⅰ型式		P8包層
56	軒平瓦	14.0	4.8	瓦当部右1/3	Ⅰ型式		暗渠
57	軒平瓦	6.0	9.2	瓦当部1/5	Ⅵ型式？		暗渠
58	軒丸瓦	6.4	7.0	瓦当部小片		外区珠文（内区巴文？）	暗渠
59	軒丸瓦	7.0	3.0	瓦当部小片		外区珠文（内区巴文？）	暗渠
60	軒丸瓦	6.0	1.7	瓦当部小片		外区珠文（内区巴文？）	暗渠
61	軒丸瓦	6.0	1.8	瓦当部小片		外区珠文（内区巴文？）	暗渠
62	軒丸瓦	4.0	4.0	瓦当部小片		外区珠文（内区巴文？）	土盛部暗渠
63	軒丸瓦	3.2	3.4	瓦当部小片		外区珠文（内区巴文？）	土盛部暗渠
64	丸瓦	35.9	14.7	ほぼ完形			50？
65	丸瓦	8.1	7	小片		釘穴有	包含層
66	軒平瓦	21.1	13.2	瓦当部1/4、平瓦部1/4			（暗渠）
67	軒平瓦	10.3	12.8	瓦当部1/4、平瓦部一部			（暗渠）
68	軒平瓦	11.0	5.0	瓦当部1/3			
69	軒平瓦	10.3	7.2	瓦当部・平瓦部小片（左端）			（暗渠）
70	軒平瓦	9.8	3.2	瓦当部1/4		室町？	P9北側
71	軒平瓦	14.5	2.8	瓦当部1/2	Ⅹ型式		？区暗渠
72	軒平瓦	11.0	5.0	瓦当部1/3	Ⅷ型式		P6北側暗渠
73	軒平瓦	14.2	11.4	瓦当部1/2	Ⅷ型式		P6北側暗渠
74	平瓦	12	22.7	瓦当部1/5		表布目、裏縄目叩き	P包含層
75	平瓦	17.1	15.3	小片		表布目、大麦文叩き	（暗渠）
76	平瓦	12.5	10.4	小片		表布目、平行叩き	包含層
77	平瓦	11.1	10.4	小片		表布目、小麦文叩き	包含層
78	平瓦		16.8	1/5		表布目、麦目文叩き	包含層
	軒丸瓦		10	瓦当部1/6	Ⅰ型式	（以下未掲載）	包含層
	軒丸瓦		9	瓦当部小片	Ⅰ型式		（暗渠）
	軒丸瓦		18.4	瓦当部1/2	Ⅰ型式		987（ピット）
	軒丸瓦		10.9	瓦当部中心部小片	Ⅰ型式		包含層
	軒丸瓦		10.7	瓦当部中心部小片	Ⅰ型式		包含層
	軒丸瓦		6.7	瓦当部小片	Ⅰ型式		包含層
	軒丸瓦		6.4	瓦当部小片	Ⅲa型式？		（暗渠）
	軒丸瓦	7.4	11.4	瓦当部1/5	Ⅸ型式		（暗渠）
	軒丸瓦		9.3	瓦当部1/5	Ⅸ型式		（暗渠）
	軒丸瓦		9.3	瓦当部小片	Ⅸ型式		（暗渠）
	軒丸瓦		9.8	瓦当部小片	？	巴文	（暗渠）

	軒丸瓦		12.1	瓦当部小片	?	巴文	(暗渠)
	軒丸瓦	5.4	10.3	瓦当部小片	Ⅰ型式		(暗渠)
	軒丸瓦		6.5	瓦当部細片	Ⅰ型式		10 (たわみ)
	軒丸瓦		10.7	瓦当部1/6	Ⅰ型式	27も同一個体	包含層
	軒丸瓦		8.6	瓦当部小片	Ⅰ型式		包含層
	軒丸瓦		18	瓦当部1/2	Ⅰ型式		(暗渠)
	軒丸瓦		6.8	瓦当部1/6	?	巴文。全容不明	(暗渠)
	軒丸瓦		19.4	瓦当部1/2	Ⅰ型式		包含層
	軒丸瓦		11.7	瓦当部1/3	Ⅰ型式		包含層
	軒丸瓦		18.8	瓦当部1/2	Ⅰ型式		(暗渠)
	軒丸瓦		18.5	瓦当部1/2	Ⅰ型式		(暗渠)
	軒丸瓦		7.7	瓦当部小片	Ⅰ型式		包含層
	軒丸瓦		18.1	瓦当部1/2	Ⅱ型式		包含層
	軒丸瓦	11	10	平瓦部一部瓦当部細片	?	二重圏線・珠文か?	P溝－3
	軒丸瓦		6.1	瓦当部細片	?	二重圏線・Ⅰ型式か?	(暗渠)
	軒丸瓦	9.9	9.3	平瓦部一部瓦当部細片	Ⅰ型式		(暗渠)
	軒平瓦	11.1	17	瓦当部1/2平瓦部一部	Ⅵ型式		包含層
	軒平瓦	12.7	14	瓦当部1/4平瓦部一部	Ⅱ型式		包含層
	軒平瓦	5.2	9.2	瓦当部小片	Ⅵ型式		(暗渠)
	軒平瓦	25.2	17.5	瓦当部1/2平瓦部1/3	Ⅱ型式		包含層
	軒平瓦		16.4	瓦当部1/2	Ⅹ型式		(暗渠)
	軒平瓦	21.7	18	瓦当部1/3、平瓦部1/5	Ⅱ.b型式		包含層
	軒平瓦	9.2	13.5	瓦当部1/3、平瓦部一部	Ⅱ型式		(暗渠)
	軒平瓦	12.6	11.8	瓦当部1/4平瓦部一部	Ⅱ型式		(暗渠)
	軒平瓦	12.5	15.7	瓦当部1/2、平瓦部小片	Ⅷ型式		(暗渠)
	軒平瓦	12.7	17.2	瓦当部1/2、平瓦部一部	Ⅱ型式		(暗渠)
	軒平瓦	7.5	16.3	瓦当部1/2、平瓦部一部	Ⅱ型式		(暗渠)
	軒平瓦	16.4	13.6	瓦当面欠損、平瓦部一部	Ⅱ型式		包含層
	軒平瓦	7.7	12.8	瓦当部1/3、平瓦部一部	Ⅷ型式		(暗渠)
	軒丸瓦		9.3	瓦当部1/6	Ⅸ型式		(暗渠A)
	軒丸瓦		7.2	瓦当部1/8	Ⅰ型式		(暗渠B)
	軒平瓦	8.3	10.6	瓦当部1/3、平瓦部小片	Ⅵ型式		(暗渠)
	軒平瓦	16.2	17	瓦当部1/2平瓦部一部	Ⅰ型式		包含層
	軒平瓦	11.2	9.9	瓦当部1/5、平瓦部小片	Ⅰ型式	瓦当面僅かに残存	(暗渠)
	軒平瓦	21.6	17.7	瓦当部小片、平瓦部1/5	Ⅰ型式?	瓦当面わずか	P溝4
	軒平瓦	15.2	12.8	瓦当部2/5、平瓦部1/6	Ⅰ型式		(暗渠)
	軒平瓦	11.8	11	瓦当部1/04平瓦部一部	Ⅰ型式		(暗渠)
	軒平瓦	9.8	9.6	瓦当部・平瓦部小片	ⅩⅤ型式		(暗渠)
	軒平瓦	7.2	11.3	瓦当部・平瓦部小片	ⅩⅦ型式		(包含層)
	軒平瓦	6.7	13.3	瓦当部1/3	ⅩⅠ型式		包含層
	軒平瓦	20.1	19.9	平瓦部1/5	Ⅱb型式	瓦当面欠損	(暗渠)
	軒平瓦	19.1	14.9	瓦当部1/3、平瓦部1/5	ⅩⅤ型式		(暗渠)
	軒平瓦	4.6	10.8	瓦当部小片	Ⅵ型式		(暗渠B)
	軒平瓦	10.2	12.5	瓦当部2/5、平瓦部小片	ⅩⅨ型式		(暗渠)
	平瓦	31.8	22.5	1/4		一次調査出土一橋脚23 (溝)	P溝5
	セン	10	7.3	小片			(包含層)
	セン	16	12.6	3/4			建物－9柱穴

	平瓦	16.3	13.9	小片			1145（土壙）
	平瓦	14.3	11.7	小片			942（溝）
	平瓦	11.1	11.1	小片			942（溝）
	丸瓦	36.6	14.8	ほぼ完形			包含層
	丸瓦	21.7	14.95	1/2			（包含層）
	平瓦	24.7	22.8	2/5			90（溝）
	平瓦		10.65	小片			建物－19柱穴
	平瓦	33.1	26.4	ほぼ完形			（包含層）
	平瓦	10.2	21.8	小片			包含層
	平瓦	36.9	28.9	5/6			E17（溝）
	平瓦	36.9	26.3	ほぼ完形			包含層
	平瓦	36.5	29.5	ほぼ完形			包含層

金属器一覧表

掲載番号	器種	計測最大値（cm）			重量(g)	材質	残存状況	備考	遺構番号	出土地区
		長	幅（径）	厚						
002	刀？	(2.6)	2.4	0.6	(5.70)	鉄	刀身部の一部。		建物－4柱穴	
003	釘	(4.45)	0.5	0.5	(3.86)	鉄			溝－1	E、F・4・5
004	？	(7.4)	1.1～1.8	0.45～0.6	(14.93)	鉄		・の一種。	〃	E、F・4・5
005	火打金	(6.4)	1.2～2.45	0.5	(15.42)	鉄			〃	E、F・4・5
006	釘？	(8.3)	0.6	0.5	(6.32)	鉄		両先端が細くなる。一方はとがる。	溝－2	G5
007	刀子	(3.7)	1.8	0.5	(5.61)	鉄			溝－18	C8
008	釘？	(5.8)	0.8	0.7	(8.84)	鉄	先端部欠損。		溝－28	D8
009・010	刀子	(7.05)	1.4～2.4	0.3～0.5	(11.30)	鉄			土壙墓－2	I13
011	刀子？	(9.2)	1.8	0.4	(13.48)	鉄			土壙－16	E15
012	鋤先	20.7	18.8	0.2～0.8	(151.80)	鉄		V字状の鋤先。	ピット－14	H5
013	釘？	(3.6)	0.5	0.4	(2.94)	鉄			土壙－20－1	D7
014	釘	(5.1)	0.8	0.4	(3.19)	鉄	先端部欠損。	頭部折り曲げ。	1092（柱穴）	G11
015	釘	(4.9)	0.6	0.5	(4.00)	鉄			549（ピット）	D7
016	釘	(3.1)	1.0	0.9	(5.10)	鉄	先端部？	断面楕円形。	703（ピット）	G8
018	？	(3.85)	0.2～0.6	0.2～0.4	(3.10)	鉄			570（ピット）	D7
019	？	(2.4)	0.6	0.5	(2.00)	鉄		頭部リング状（直系0.3cm）	B78（ピット）	町道M5
020	？	(5.1)	0.5	0.35	(3.20)	鉄		コの字状による。	294（ピット）	F4
021	釘	(2.85)	0.4	0.3	(1.44)	鉄		湾曲。	溝－31	C6
022	刀子	(11.0)	1.2	0.4	(6.47)	鉄	茎3.5cm刀身7.6cm		包含層	F15
023	刀子	(4.8)	1.1～1.4	0.2～0.5	(6.73)	鉄	1/2	木部残存。	包含層	東側道HG1718
024	刀子	(4.7)	2.1	0.3	(2.79)	鉄			包含層	G15
025	刀子？	(5.3)	1.2	0.4	(6.40)	鉄			河道－2肩部堆積土	H11
026	刀子？	(3.5)	1.1	0.4	(3.69)	鉄		刀子の茎。	包含層	E16～G16
027	？	(4.0)	(2.0)	0.2	(4.26)	鉄	先端部欠損。		河道-2上包含層	G13
028	刀子？	(4.6)	(0.9)	0.3	(3.65)	鉄		目釘穴？直系0.5cm	包含層	町道K5·6、J5·6
029	？	(5.2)	1.8	0.8	(22.30)	鉄			包含層	A、B、C5
030	・	(3.8)	0.8	0.4	(2.21)	鉄		先端部、鏃状になる。	河道-2上包含層	H13
031	？	(6.2)	1.2	0.6	(17.69)	鉄		刀子の茎か？	包含層	南側道
032	釘	(3.0)	0.4	0.4	(1.90)	鉄		くの字状に曲がる。	包含層	B7
033	？	(3.45)		0.6	3.19	鉄	先端部欠損？		包含層	上段
034	？	(7.2)	0.5	0.5	(16.19)	鉄	先端部のみ。		包含層	G11
035	釘	(3.9)	0.6	0.4	(3.61)	鉄		頭部の折り曲げ。	河道-2上包含層	G13
036	釘	(5.35)	0.5	0.5	(5.34)	鉄			包含層	C6
037	釘	(6.25)	1.2	0.7	(7.93)	鉄			東下り包含層	E、F、G16
038	釘	(4.7)	0.5	0.4	(3.01)	鉄			包含層（東側溝）	E16
039	釘	(4.3)	0.6	0.65	(3.89)	鉄	両端欠損。		包含層	A、B、C5

040	釘	(5.7)	0.7	0.5	(9.68)	鉄	完存。	頭を1.1cm折り曲げる。	包含層	町道Ｌ５・Ｍ５
041	釘	(7.4)	1.0	0.5	(6.07)	鉄	先端部欠損。	頭部折り曲げ。	河道-２上包含層	G13・14
042	釘	(6.4)	0.8	0.7	(6.78)	鉄		先端部湾曲。	包含層	
043	釘	(7.3)	0.7	0.5	(6.48)	鉄	両端部欠損。		包含層	H14
044	釘	5.85	0.7	0.6	5.94	鉄			包含層	F13・14
046	釘	(7.85)	0.9	0.9	(20.32)	鉄			河道-２上包含層	F14
047	釘	(8.1)	1.25	0.7	(14.89)	鉄	先端部欠損。		東下り包含層	E、F、G16
048	釘？	(4.3)	0.7	0.6	(4.82)	鉄			包含層	Ｂ５
049	鎹？	(7.3)	0.8	0.7	(13.80)	鉄			包含層	Ｄ７
050	鎹	(8.6)	0.7	0.55	12.02	鉄	先端部欠損。		包含層	Ｅ・Ｇ２
051	釘	(4.45)	0.7	0.8	(6.00)	鉄		くの字に曲がる。	包含層	Ｅ16～Ｇ16
052	？	(17.7)	0.8 ～1.0	0.6 ～0.7	(38.17)	鉄	先端わずかに欠損。		包含層	Ｄ６
053	釘	(5.9)	0.5	0.4	(3.64)	鉄		孤状になる。	包含層	Ｄ14
054	？	(7.2)	2.9	0.8	(16.00)	鉄			排土	
055	火打金？	(4.0)	2.1	0.3	(7.63)	鉄			包含層	南側道Ｈ Ｉ15
056	？	(4.1)	(2.3)	0.3	(6.72)	鉄			包含層	町道K5-6、J5-6
057	煙管	(5.75)	0.4 ～1.0	0.6	(6.06)	銅		火皿1.3×0.8、雁首長3.5径0.5厚0.05	包含層	Ｄ３
058	煙管	7.1		0.05	5.19	銅	雁首と火皿部。	直系0.4～1.0cm	包含層	H14
059	釘	(4.3)	0.5	0.4	(2.07)	鉄		頭部折り曲げ。	Ｐ溝４	端脚Ｐ３
060	刀子	(6.65)	0.5 ～0.65	0.3	(3.15)	鉄			包含層	端脚Ｐ２北側道
061	鋤先？	(12.9)	2.05～3.25	0.35～0.5	(27.46)	鉄	両端部欠損。		Ｐたわみ２	北側道Ｐ３
062	釘	(2.75)	0.5	0.5	(1.04)	鉄		頭部折り曲げ。	899（ピット）	
063	釘	(5.05)	0.45	0.55	(1.97)	鉄	先端部欠損。		９（溝）	橋脚Ｐ３
064－１	釘	(5.0)	0.5	0.3	(2.35)	鉄			包含層	橋脚Ｐ２北側道
064－２	釘	(4.4)	0.5	0.3	(1.83)	鉄	吸口部。		包含層	橋脚Ｐ２北側道
066	大釘	21.25	1.37～1.67	1.0 ～1.16	149.04	鉄			包含層	北側道Ｐ７・９
067	釘？	4.0	0.6	0.4	1.81	鉄	釘先端部？	（以下未掲載）	包含層	南側道Ｊ14Ｉ15
068	？	(3.2)	1.2	0.5	(1.81)	鉄		刀子の茎か？	Ｓ５（溝）	南側道
069	釘	(4.1)	0.8	0.7	(4.79)	鉄			S51（柱穴）	南側道Ｉ14
070	釘	(2.6)	0.7	0.6	(1.98)	鉄			S51（柱穴）	南側道Ｉ14
071	釘？	(4.9)	1.3	0.8	(7.68)	鉄			包含層	町道Ｋ５
072	釘？	(3.5)	0.5		(2.19)	鉄			包含層	町道K5-6、J5-6
073	？	(3.7)	(3.6)	0.8	(13.87)	鉄			包含層	町道K5-6、J5-6
074	釘？	(2.9)	(1.1)	(0.8)	(3.05)	鉄			包含層	町道K5-6、J5-6
075	釘？	(3.4)	1.0	0.8	(5.54)	鉄			包含層	町道K5-6、J5-6
076	釘	(3.8)	0.4		(1.63)	鉄			包含層	G14、Ｈ５・６
077	鑿？	(4.9)	1.3	0.1 ～0.3	(5.24)	鉄			64（柱穴）	Ｇ２
078	？			～	(14.55)	鉄	細片。		包含層	Ａ、Ｂ、Ｃ５
079	釘？	(2.7)	1.4	1.0	(9.00)	鉄			包含層	Ａ、Ｂ、Ｃ５
080	釘？	(2.2)	0.8	0.8	(2.69)	鉄			包含層	Ｃ６
081	？	(3.7)	1.6	0.3	(2.74)	鉄			333（ピット）	Ｃ６
082	？	(2.2)	2.0	0.3	(1.69)	鉄			333（ピット）	Ｃ６
083	釘	5.9	1.0	0.9	13.70	鉄			包含層	Ｅ８
084	？	1.8	1.8	0.5	(2.17)	鉄	先端部わずかに欠損。		包含層	Ｂ３
085	？	(3.4)	1.9	0.6 ～1.1	(13.69)	鉄			包含層	H10
086						鉄			河道－２肩部堆積土	H11
087	？				(0.54)	鉄			包含層	E16～G16
088	釘？	(1.6)	0.5	0.4	(0.81)	鉄	頭部欠損。		包含層	F14
089	釘	(1.6)	0.5		(2.37)	鉄			河道-２上包含層	H13
090	？	(1.9)	(1.5)	0.3	(0.67)	鉄			東下り包含層	E、F、G16
091	刀子	(1.9)	1.2	0.2	(1.40)	鉄			925（柱穴）	E16
092	釘？	(3.2)	0.5	0.4	(1.10)	鉄			1332（柱穴）	E14
093	釘	(2.9)	0.6	0.6	(2.93)	鉄	両端部欠損。		703（柱穴）	Ｇ８
094	？	(2.8)	1.3	0.8	(4.90)	鉄			排土	橋脚Ｐ３
095	釘？	(2.6)	0.7	0.6	(2.34)	鉄			包含層	H13
096	釘？	(1.9)	0.7	0.3	(0.57)	鉄			包含層	H13
097	・？	(1.5)	(0.6)	0.2	(0.28)	鉄			包含層	H13
098	釘	(2.8)	0.5	0.3	(0.57)	鉄			1316（ピット）	E14

099	釘？	(4.15)	1.0	0.6	(4.92)	鉄			河道-2上包含層	G13・14
100	鏃	(1.1)	(0.3)	(0.25)	(0.15)	鉄		茎・糸巻き残存。	河道-2上包含層	G13・14
101	釘？	(3.6)	1.6	0.5	(1.72)	鉄			P溝5	北側道P8・9
102	刀子？	(1.6)	0.5	0.25	(0.30)	鉄			包含層	橋脚P2北側道
103	？	(1.4)	(0.6)	0.6	(0.99)	鉄			包含層	橋脚P2北側道
104	？	(5.4)	(2.0)	(0.5)	(9.03)	鉄			溝－1	E、F・4・5
105	刀子	(4.9)	1.0	0.3	(4.64)	鉄	茎部		333（ピット）	C6
106	釘	(3.9)	1.1	1.1	(10.43)	鉄	頭部	断面方形。L字状。	744（柱穴）	G9
107	鎹？	(3.3)	0.3～0.5	0.3～0.5	(2.72)	鉄	先端部		建物－45柱穴	G9
108	刀？	(3.0)	1.6～2.0	0.5	4.94	鉄	茎部		901（ピット）	H9
109	釘	(3.3)	1.0	1.0	4.76	鉄	中央部	断面方形？	1277（ピット）	FG14
110	刀子？	(6.8)	(0.4～0.7)	(0.4～0.7)	(4.71)	鉄	茎部		1277（ピット）	FG14
111	火打金？	5.3	2.8	0.2～0.5	8.57	鉄			溝－19	D14・15
112	釘	(1.6)	1.3	1.2	3.48	鉄	頭部？		包含層	ABC5
113	？	(4.9)	5.2	1.3	(109.56)	鉄	？	鋳造物か？	包含層	A13
114	釘	(5.9)	0.6～0.8	0.5～0.7	7.40	鉄	先端部	断面長方形	包含層	D14
115	釘	(2.8)	1.0	0.6	4.59	鉄	頭部	L字状。	包含層	E15
	釘？	(1.6)	0.4	0.2	(0.21)	鉄	刀身部一部のみ。		S25（柱穴）	南側道I13

銭貨一覧表

番号	銭貨名	出土遺構・出層名	法量（mm）					重量（g）	備考	調査時遺構名
			外縁外径	外縁内径	内郭外径	内郭内径	外縁厚			
C1	和同開称	土器埋納壙－1	25.29	20.98	8.10	6.30	1.34	1.03		87(土器埋納壙)
C2	和同開称	土器埋納壙－1	?	?	8.49	6.33	1.39	(0.60)		87
C3	和同開称	土器埋納壙－1	25.34	21.30	7.81	6.24	1.48	(0.89)		87
C4	和同開称	土器埋納壙－1	?	?	?	?	?	(0.10)		87
C5	和同開称	土器埋納壙－1	?	?	?	?	1.48	(0.56)		87
C6	開元通寶		23.94	29.21	8.13	6.14	1.12	(1.70)		B27（ピット）
C7	元祐通寶		23.95	19.32	8.53	6.91	1.07	2.17		523（たわみ）
C8	洪武通寶		23.19	17.86	7.24	5.58	1.33	2.93		不明ピット
C9	大〇〇寶		?	?	7.80	6.24	1.53	(1.15)	1/4のみ残存	26（ピット）
C10	・平元寶	包含層	22.09	18.75	7.37	5.89	0.91	1.49	歪む有	包含層（K6）
C11	皇宋通寶	包含層	24.07	19.61	7.94	6.44	1.17	(1.99)		包含層（K10）
C12	元豊通寶	包含層	24.76	20.27	8.69	7.00	1.07	(1.34)		包含層（DE5.6）
C13	〇元〇寶	包含層	23.79	?	?	?	0.82	(1.56)	歪む大	包含層（K6）

石器・石製品一覧表

掲載番号	器種	計測最大値（cm）			重量(g)	材質	備考	遺構名	出土地区
		長	幅（径）	厚					
石-01	石鏃	(2.8)	2.0	0.6		サヌカイト		溝－3	D6
石-02	石鏃（有茎）	(6.0)	1.4	0.4		サヌカイト		包含層	G14
石-03	石鏃	2.2	2.2	0.4		サヌカイト		包含層	P2
石-04	石鏃	3.0	1.6	0.3		サヌカイト		包含層	P3
石-05		3.0	4.0	(0.6)	7.9	サヌカイト		1300（ピット）	D15
石-06		3.0	7.2	0.8	6.7	サヌカイト		包含層	D.E6.7
石-07		3.3	7.3	0.6		サヌカイト		包含層	B7
石-08	紡錘車		4.25～4.35	1.9	51.26	滑石	0.539台形上2.2下4.0斜部の所に鋸歯文（格子になった）	包含層	D3

石−09−1	すり石？	10.8	9.5	3.6	520.4	角閃岩	上面のみ使用	溝−12	
石−09−2	叩き石？	8.2	(3.6)	2.9	117.2	流紋岩	一部分	〃	
石−10	叩き石？	12.2	12.2	6.6	1454.4	花崗閃緑岩	先端部のみ使用痕	653（柱穴）	G 8
石−11	叩き石？すり石		6.9 ～ 6.5	6.4	474.1	安山岩	一面のみ使用、円球状	991	
石−12	携帯用砥石	10.0	5.0	4.4	227.1	流紋岩	完存、三面を使用、紐穴両側から	989	E15
石−13	砥石	(14.0)	7.0 × 6.0	6.0	1865.6	砂岩	約1/2、二面使用	989	E15
石−14	すり石？叩き石	12.3	10.9	3.2	635.3	角閃岩	円万状	溝−18	
石−15	叩き石？		8.9 ～10.2	8.0	1101.7	角閃岩	二面使用痕、円球状	溝−20	
石−16	砥石？	15.1	5.9	2.8	367.2	安山岩？	二面共使用	〃	
石−17	砥石	(17.55)	9.7	6.2	1467.2	石英安山岩	1/2三面使用、仕上げ砥、凹部分も使用	〃	
石−18−1	砥石？				163.9	花崗岩		溝−21	（未掲載）
石−18−2	砥石	13	16.4	12.6	231.0	角閃岩	一面のみ使用、仕上げ砥	〃	
石−19	砥石	(13.5)	9.9	5.6	961.4	砂岩？	1/2残存、三面試用、仕上げ砥	土壙−11	
石−20	砥石？叩き台？	16.6	15.9	7.5	2490	閃緑岩	両面使用痕跡、円版状	〃	
石−21	砥石	(6.3)	(7.5)	(3.6)	121.9	流紋岩	仕上げ砥一部	建物−47柱穴	G11
石−22	砥石	31.2	8.6	8.5	4330	岩	自然石を利用し上面のみ使用、仕上げ砥	井戸−5	
石−23	砥石	16.3	2.7 ～ 3.6	2.7～3.3	268.8	頁岩	五面使用、仕上げ砥	322（ピット）	B 6
石−24	砥石	(12.6)	3.5 ～ 5.2	2.5～4.0	363.0	流紋岩	1/2残存	30（ピット）	
石−25	砥石	(4.2)	4.6	2.9	65.0	凝灰岩	両側欠損、四面使用、仕上げ砥	土壙−33	D 5
石−26	砥石	(9.35)	3.0 ～ 3.9	3.5	201.7	流紋岩		S27（柱穴）	I 13
石−27	すり石？	7.9	5.3	5.3	318.6	花崗斑岩	2/3片面のみ使用痕	包含層	E．F 4
石−28	すり石？	10.3	8.3	2.1	299.9	閃緑岩	円版状の両面に使用痕有り	包含層	E 3
石−29	すり石？叩き石？	(7.5)	11.1	4.45	544.4	花崗岩	両面中央部使用	包含層	B～D 5～6
石−30	叩き石	13.3	8.1	5.5	921.0	斑岩	両端を使用	包含層	E 5
石−31	すり石？叩き台？	19.55	14.4	10.75	4040	花崗岩		包含層側溝内	？
石−32	砥石	29.6	25.5	11.2	9090	砂岩	一面とその斜部を利用	包含層	K 5
石−33	砥石	27.6	22	11.5	8480	砂岩	一面のみ使用	包含層	A 5
石−34	砥石	26.8	15.2	12.2	6420	安山岩	一面のみ使用	1251（ピット）	E15
石−35	砥石	10.0	3.35	0.9	49.3	流紋岩	一部欠損	包含層	E13
石−36	砥石	(6.6)	7.6	4.0	301.4	砂岩	一部、二面使用	包含層	GH17．18
石−37	砥石？	(9.8)	3.8	3.0	101.1	泥岩	四面を使用仕上げ砥	包含層	F16
石−38	砥石	(5.3)	3.9	0.7	28.5	流紋岩	両端欠損、四面とも利用、仕上げ砥	包含層	（上段）
石−39	砥石？	7.4	(6.2)	(1.93)	126.3	砂岩	一部分	包含層	G15FG15．16
石−40	砥石？	(4.3)	3.4	1.0	32.9	流紋岩		河道−2上包含層	G13
石−41	砥石	(13.5)	6.0	4.6	649.5	流紋岩		包含層	16
石−42	砥石	(11.2)	4.7 ～ 7.2	3.3～6.2	520.3	石英斑岩	約1/2、四面使用	包含層	J．K 5．6
石−43	砥石？	(2.9)	2.2	(0.9)	8.0	流紋岩	小片	包含層	GH17．18
石−44	砥石	(4.0)	3.6	1.2	202.4	安山岩	小片、二面使用	溝−2	F 5
石−45	石鍋		16.8		197.7	滑石	1/4内面横方向・外面縦方向に削り、口縁・羽部は磨き	包含層	C 4
石−	砥石	30.6	18.9	20	12040	砂岩？	二面使用	包含層	G13
石−					35.3	凝灰岩		包含層	J．K 5．6
石−	砥石	20.8	6.5	4.0～7.7	1279.3	泥岩	上部のみ使用	包含層	P 1
石−	砥石	(15.1)	(10.6)	(9.9)	2048.0	砂岩	一部、一面のみ使用	包含層	P 2
石−	叩き石？	(6.5)	7.2	5.9	400.3	花崗岩		62	P 3（北側道）
石−	砥石	(16.0)	(13.1)	6.7	2460	砂岩	破片、一面中央部のみ使用	包含層	P2～P5北用水路
石−	砥石	(5.8)	(3.4)	(2.1)	37.9		小片	包含層	P10北側道

木器・木製品樹種観察表

遺構名	器種	材種	備考	旧遺構名	地区
建物−16柱穴	柱？	ネズミサシ		994	E−14
建物−16柱穴	柱	ネズミサシ		996	E−15
建物−16柱穴	柱？	ネズミサシ		1061	E−14

建物－16柱穴	柱	ネズミサシ		1062	E－14
建物－16柱穴	？	アカマツ	ふしの部分	1211	E－14
建物－19柱穴	柱	ネズミサシ(モロマツ)		1106	D－14
建物－21柱穴	柱	クリ		934	E－15
建物－23柱穴 建物－33柱穴	？ 柱	ネズミサシ クリ	残存長約９cm（小）	972 598	F－15 F－６
建物－45柱穴	柱	ネズミサシ		728	G
建物－45柱穴	礎板	コウヤマキ		1422	G－10
建物－45柱穴	柱	アラカシ		1437	G－９
建物－47柱穴	柱	クリ		787	G－11
建物－47柱穴	柱	？アキニレ		921	F－16
建物－47柱穴	柱	アラカシ		922	E－16
建物－48柱穴	柱	クリ		1028	G－12
建物－48柱穴	柱	クリ		1032－①	G－12
建物－48柱穴	柱	クリ		1032－②	G－12
建物－48柱穴	？	アカマツ		1190	G－12
建物－49柱穴	？	アカマツ		1143	H－13
建物－51柱穴	柱	アラカシ		1157	G－13
建物－51柱穴	柱	クリ	火を受けている？	1153	G－14
土壙墓－２	？		小片	1051	I－13
井戸－１	井側材	矢板コウヤマキ(W2～6)杭コナラ（W－１）	矢板の中に桶材二次利用か？	B81	町道Ⅰ－５
井戸－２	？	ノグルミ		89	E－４
柱穴	？		小片	302	B－６
柱穴	杭		残存長約12cm（小）	517	A－７
柱穴	？		残存長約５cm（極小）	1000	E－15
柱穴	？		小片	1007	F－16
柱穴	？		小片	1029	G－12
柱穴	柱		残存長約12cm（中）	1029	G－12
柱穴			小片	1029	G－12
柱穴	柱		残存長約20cm（大）	1031	H－12
柱穴	柱		残存長約20cm（小）	1034	G－13
柱穴	柱		残存長約13cm（中）	1036	G－13
柱穴	？		残存長約８cm（中）	1163	
柱穴	柱		残存長約28cm（大）	1168	H－13
柱穴	？		極小片	1234	E－15

柱穴	?		小片	1403	H－14
柱穴	?		小片	1427	F－13
柱穴	柱		残存長約27cm（中）	(1441)？	H－13
柱穴	柱		残存長約30cm（大）	B56	町道J－6
柱穴	?		小片	S54	南側道I-14
河道－2	?			S 1	H－12
包含層				(包含層)	D14，15
包含層			北西下層	(包含層)	D12
包含層	?			(包含層)	橋脚D－2
包含層	杭		残存長約13cm	(包含層)	橋脚D－3

付載２　馬屋遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析

中野益男（帯広畜産大学生物資源化学科）
中野寛子・明瀬雅子・長田正宏
（㈱ズコーシャ総合科学研究所）

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと(1)、古代遺跡から出土した約２千年前のトウモロコシ種子(2)、約５千年前のハーゼルナッツ種子(3)に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保存されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した(4)。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物の種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生物植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能である。

このような出土遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて、馬屋遺跡から出土した土器の性格を解明しようとした。

１．土壌試料

岡山県赤磐郡山陽町の馬屋遺跡は奈良時代を中心としたものと推定されている。この遺跡の地表下約70cmの所から、一部欠損部分はあるものの、須恵器の杯身およびその中に割れ込む形で須恵器の杯蓋が出土した。また杯身の直下から中央に１枚、その四方に４枚の奈良時代中頃の和同開珎が、銭貨を並べた上に杯を置くような形で出土した。試料はこの杯の内外から採取した土壌である。土壌試料採取地点を図１に示す。試料№１は杯内から、試料№２は杯直下北側から、試料№３は杯直下南側から、試料№４

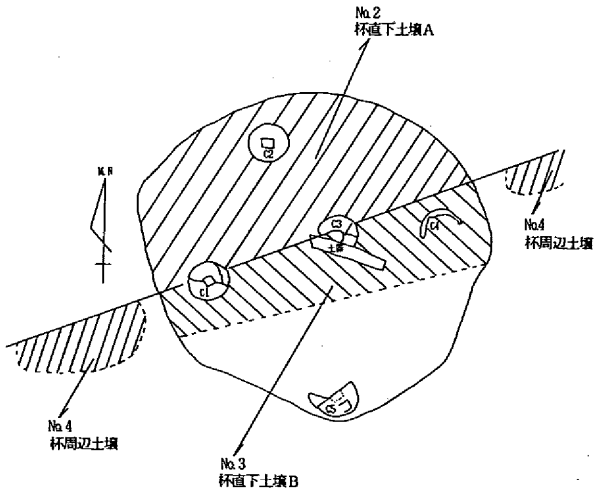


図１　土壌試料採取地点

は杯周辺の東西からそれぞれ採取した。

2．残存脂肪の抽出

土壌試料144～942ｇに3倍量のクロロホルム—メタノール（2：1）混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム—メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1％塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルムと水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表1に示す。抽出率は0.0010～0.0049%、平均0.0027％であった。この値は出土土器を胞衣壺と判定した奈良県平城京左京（外京）五条五坊十坪から出土した胞衣壺内土壌試料の平均抽出率0.0199％[5]よりは低いが、古墳時代の胞衣壺と判定した平城京右京三条三坊一坪の土師器試料の0.0039％[6]、出土土器を胞衣壺と判定した同じ岡山県内の津寺遺跡の土器および土壌試料の0.0028％[7]、出土土器を胞衣壺もしくは骨壺と判定した宮城県郷楽遺跡の土器試料の0.0013％、土器内土壌試料の0.0062％[8]、出土土器を胞衣壺と判定した平城京右京三条二坊十五坪の土壌試料の0.0007％[9]とはほぼ同程度であった。

表1　土壌試料の残存脂肪抽出量

試料No.	試　料　名	湿重量（ｇ）	全脂質（mg）	抽出率（％）
1	須恵器杯内土壌	235.5	11.6	0.0049
2	須恵器杯直下土壌（A）	114.0	1.9	0.0017
3	須恵器杯直下土壌（B）	930.2	29.2	0.0031
4	須恵器杯周辺土壌	942.4	9.1	0.0010

残存試料をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質から構成され、遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール（トリグリセリド）、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

3．残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪に5％メタノール性塩酸を加え、125℃封管中で2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルをクロロホルムで分解し、ヘキサン—エチルエーテル—酢酸（80：30：1）またはヘキサン—エーテル（85：15）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した[10]。

残存脂肪の脂肪酸組成を図2に示す。残存脂肪から10種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸（C16：0）、ステアリン酸（C18：0）、オレイン酸（C18：1）、リノール酸（C18：2）、アラキジン酸（C20：0）、エイコサモノエン酸（C20：1）、ベヘン酸（C22：0）、リグノセリン酸（C24：0）の8種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー—質量分析により同定した。

各試料中での炭素数18までの中級脂肪酸の分布割合について見てみると、いずれの試料中でも主要な脂肪酸はパルミチン酸で約42～52％分布していた。試料No.1～No.3では次いでステアリン酸とオレイン酸がほぼ同程度の18～22％分布していた。試料No.4ではオレイン酸が約29％、ステアリン酸が約12％分布していた。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が酸化されてパルミチン酸を生成するためで、主

として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来ていると推定される。またオレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられる。植物性脂肪では特に根、茎、種子に多く分布するが、動物性脂肪の方が分布割合は高い。

一方、高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられるアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸はそれら３つの合計が試料No.１では約17％、試料No.２～No.４では約８～11％であった。通常の遺跡出土土壌中の高級脂肪酸の含有量は約４～10％である。従って、試料No.１での高級脂肪酸含有量は多いといえる。このことは杯の内外での土壌の性質が異なることを示唆している。

脂肪酸の分析から、すべての試料中には飽和脂肪酸のパルミチン酸、ステアリン酸が多く分布していること、試料No.１には特に高級脂肪酸が多く分布していることがわかった。

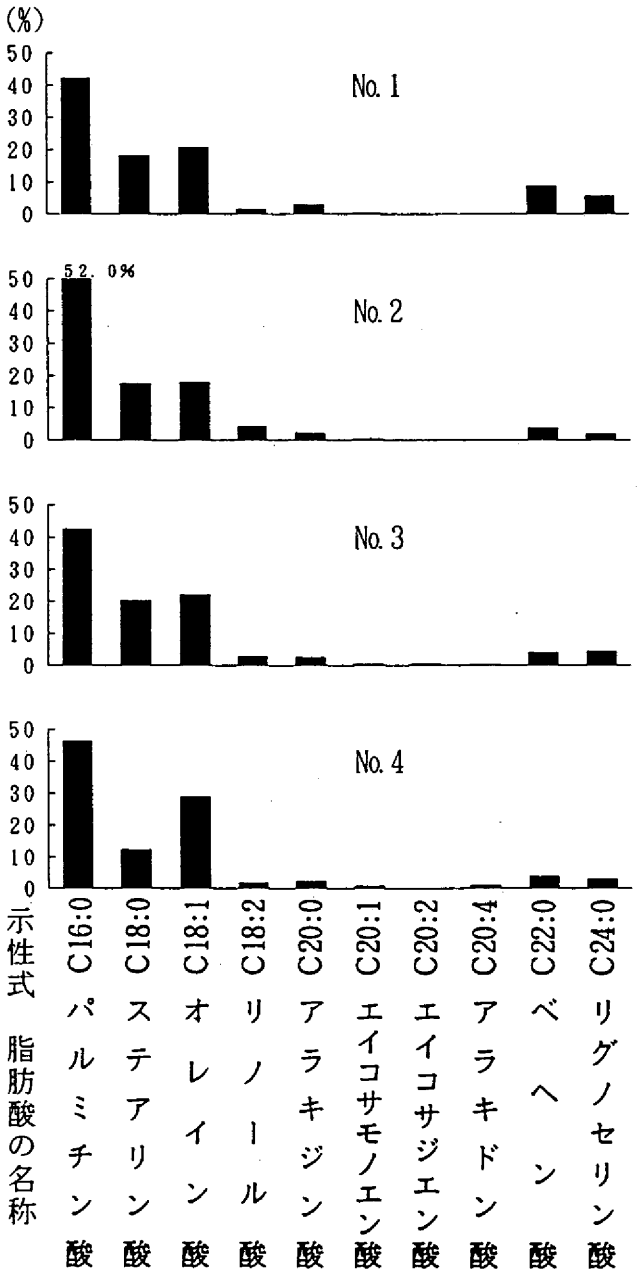


図２　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

４．残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサン―エチルエーテル―酢酸（80：30：１）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン―無水酢酸（１：１）を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を図３に示す。残存脂肪から11～15種類のステロールを検出した。このうちコレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど７種類のステロールをガスクロマトグラフィー―質量分析により同定した。

各試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールはすべての試料中で約11～16％分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは４～８％含まれているので、いずれの試料中にもコレステロールはそれよりもやや多く含まれていた。中でも試料No.４には約16％分布していた。植物由来のシトステロールはすべての試料中で約23～35％分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはシトステロールは30～40％、もしくはそれ以上分布している。クリ、クルミ等の堅果植物由来のカンペステロール、スチグマステロールはすべての試料中で約４～12％分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはカンペステロール、スチグマステロールは約１～10％分布している。微生物由来のエ

ルゴステロールは試料No.１、No.２では検出されず、試料No.３、No.４では約４～７％分布していた。この値は人為的に微生物を添加した値[11]に比べるとかなり低いもので、積極的に杯の内外で何かを醗酵させたのではなく、土壌微生物による自然醗酵が若干あったものと思われる。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壌で0.6以上[12]、土器・石器・石製品で0.8～23.5をとる[13],[14]。土壌試料コレステロールとシトステロールの分布比を表２に示す。表からわかるように、試料No.１～No.３では分布比が0.3～0.4、試料No.４では0.7であった。この結果からすると、杯外の周辺土壌試料の方が分布比が高く、かつその値が0.6以上であることになる。また試料No.１～No.３も分布比は0.6以下ではあるが、0.6に近いものであった。周辺土壌試料がそのような結果を示したのは、破損した杯から埋納された動物遺体の一部が周辺土壌に浸出したか、杯の周辺に動物遺体の一部が埋納されていたためかもしれない。

これらの成績から、試料中には動物性脂肪が残存していることがわかった。

表２　試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料No.	コレステロール（%）	シトステロール（%）	コレステロール／シトステロール
1	10.76	27.27	0.39
2	11.29	27.12	0.42
3	12.10	35.41	0.34
4	16.26	22.74	0.72

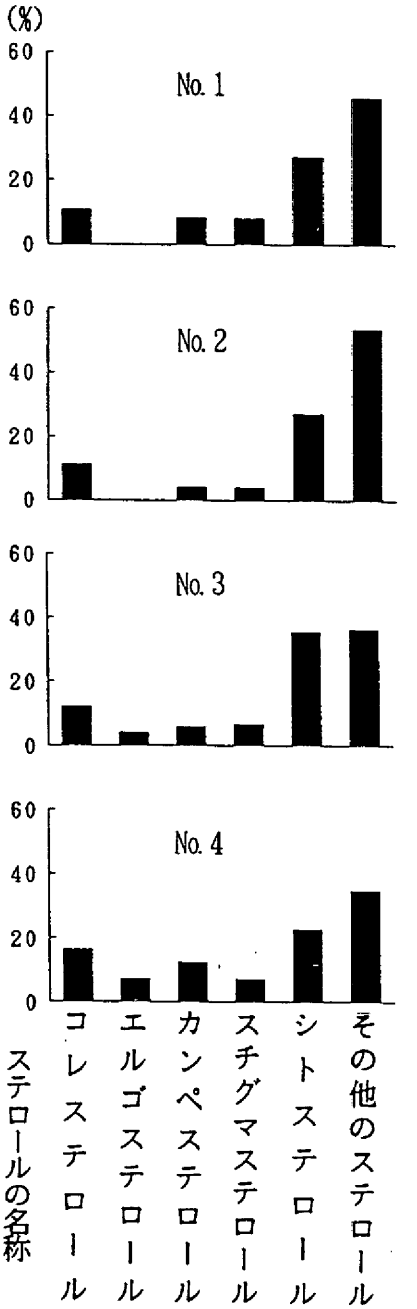


図３　試料中に残存する脂肪のステロール組成

５．脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料間の類似度を調べた。同時に平城京左京（外京）五条五坊十坪から出土した胞衣壺試料、平城京右京三条三坊一坪から出土した土器試料、平城京右京三条二坊十五坪から出土した胞衣壺試料、津寺遺跡から出土した胞衣壺試料間および人間の胎盤試料に残存する脂肪酸の類似度とも比較した。

各試料の脂肪酸組成の類似度をパターン間距離にして表した樹状構造図を図４にしめす。図からわかるように、馬屋遺跡の試料は平城京右京三条三坊一坪の試料の一部、平城京左京（外京）五条五坊十坪の試料、平城京右京三条二坊十五坪の試料の一部および人間の胎盤試料と共に相関行列距離0.1以内でＡ群を形成した。津寺遺跡と平城京右京三条二坊十五坪、平城京右京三条三坊一坪のＡ群に属さなかった試料は相関行列距離0.1以内でＢ群を形成した。これらＡ群とＢ群は相関行列距離0.1以内

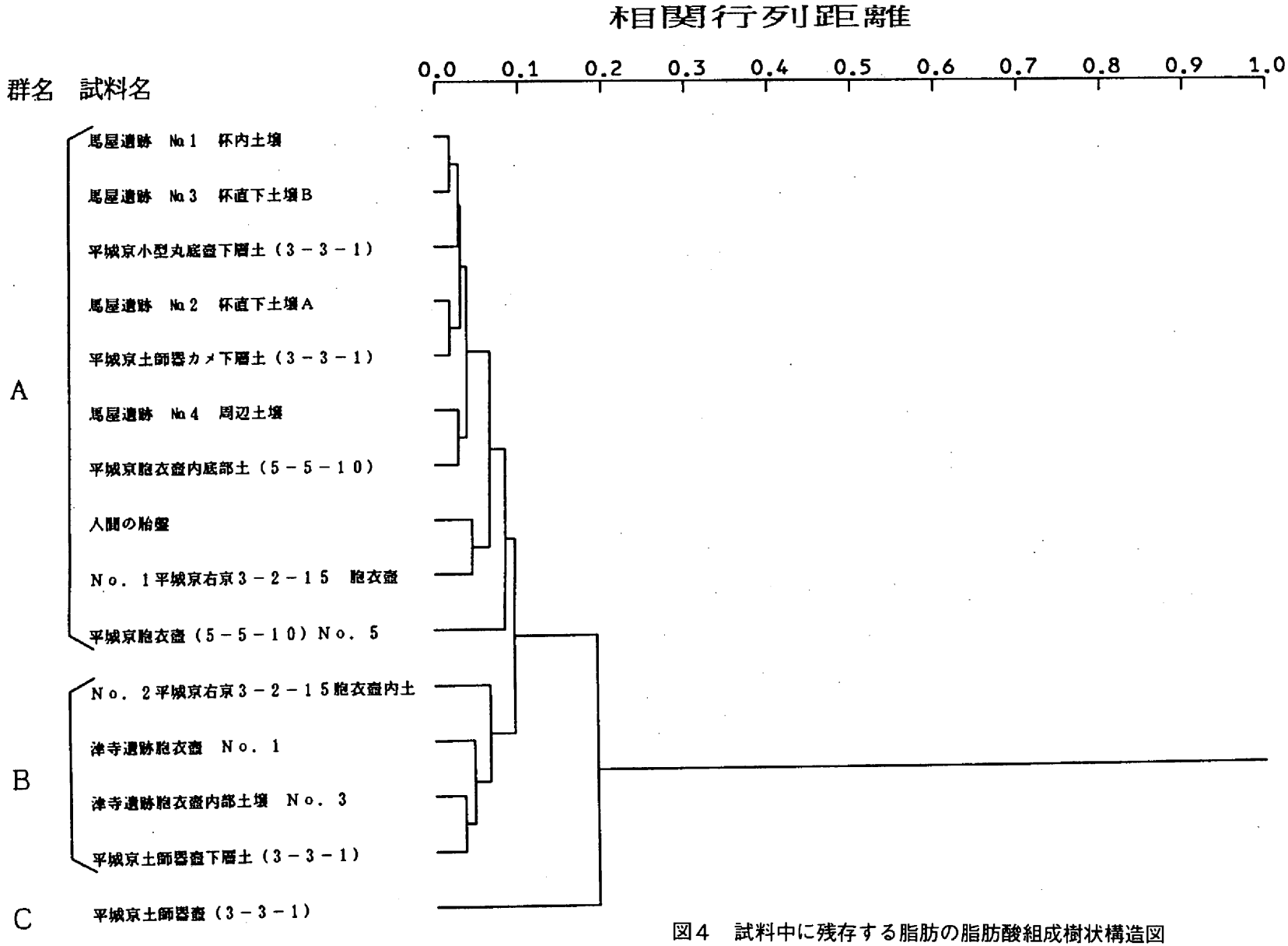


図4　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

にあり、非常に類似しているといえる。平城京右京三条三坊一坪の土師器壺試料は単独でC群を形成し、A、B群とは相関行列距離で0.2以内の所にあり、それらの試料と若干類似していた。

これらのことから、馬屋遺跡の試料は試料№4の杯外周辺土壌試料も含めて、胞衣壺試料や人間の胎盤試料と非常に類似していることがわかった。

6．脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異異性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限に移る原点から離れた位置に海産動物が分布する。

試料の残存脂肪から求めた相関図を図5に示す。図からわかるように、試料はすべて第2象限内に分布していた。この分布位置は試料中に動物由来の脂肪が残存していることを示唆する所である。

このことから、馬屋遺跡の試料中には動物由来の脂肪が残存していることがわかった。

7．総括

馬屋遺跡から出土した土器の性格を判定するために、須恵器杯内外の土壌試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪酸分布の結果、試料中にはパルミチン酸とステアリン酸が多く分布していることがわかった。また高級脂肪酸は杯内試料№1で若干多く含まれていた。

残存する脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果、馬屋遺跡の試料は出土土器を胞衣壺と判定した試料や人間の胎盤と非常に類似していることがわかった。

残存するステロール分析の結果、動物由来のコレステロール含量が際立って多くはないが、10%以上分布しており、試料中に動物性脂肪が残存していることがわかった。特に杯周辺土壌試料中にその傾向がみられた。これは破損した杯から動物性脂肪が浸出して周辺土壌にも影響を与えたか、もしくは杯の周辺に動物遺体の一部が埋納されていたためかもしれない。

以上の成績から、馬屋遺跡から出土した須恵器杯には胞衣と類似の脂肪が残存していたことが判明した。

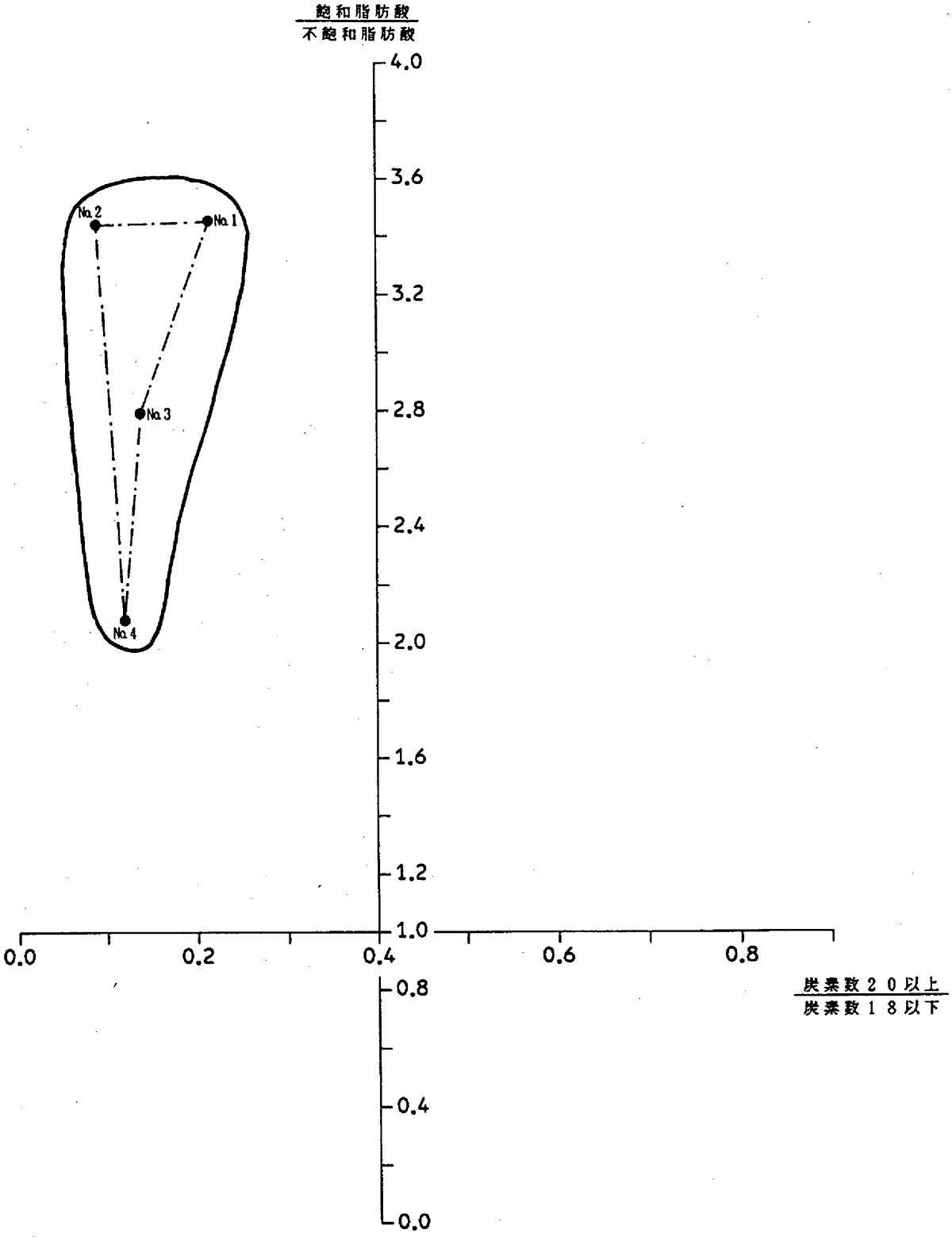


図５　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

参考文献

（1）R. C. A. Rottländer and H. Schlichtherle：「Food identification of samples from archaeological sites」，『Archaeo. Physika.』，10巻，1979，pp 260.

（2）D. A. Priestley, W. C. Galinat and A. C. Leopold：「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」，『Nature』，292巻，1981，pp 146.

（3）R. C. A. Rottländer and H. Schlichtherle：「Analyse frühgeschichtlicher Gefässinhalte」，『Naturwissenschaften』，70巻，pp 33.

（4）中野益男：「残存脂肪分析の現状」，『歴史公論』，第10巻(6)，1984，pp 124.

（5）中野益男，中岡利泰，福島道広，中野寛子，長田正宏：「平城京左京（外方）五条五坊十坪から出土した胞衣壺の残存脂質について」，『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書―昭和63年度』，1989，pp 5.

（6）中野益男，長田正宏，中野寛子，福島道広：「平城京右京三条三坊一坪から出土した古墳時代前期の土師器に残存する脂質について」，『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書―平成元年度』，1990，pp 79.

（7）中野寛子、明瀬雅子、長田正宏、中野益男、福島道広：「津寺遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析」，『未発表』，岡山県古代吉備文化財センター.

（8）中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏：「郷楽遺跡から出土した埋設土器に残存する脂肪の分析」，『未発表』，宮城県教育委員会.

（9）中野益男、中野寛子、明瀬雅子：「平城京右京三条二坊十五坪から出土した土器に残存する脂肪の分析」，『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書―平成３年度』，1992，pp 38.

（10）M. Nakano and W. Fischer：「The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021」，『Hoppe - Seyler's Z. Physiol. Chem.』，358巻，1977，pp 1439.

（11）中野益男，福島道広，中野寛子，中岡利泰，根岸　孝：「残存脂肪分析法による原始古代の生活環境―とくに東北地方の縄文時代前期遺跡から出土したクッキー状炭化物の栄養化学的同定（第７報）」，『日本農芸化学会東北支部北海道支部合同秋期大会講演要旨』，1987，pp 15.

（12）中野益男，伊賀　啓，根岸　孝，安本教傅，畑　宏明，矢吹俊男，佐原　真，田中　琢：「古代遺跡に残存する脂質の分析」，『脂質生化学研究』，第26巻，1984，pp 40.

（13）中野益男：「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」，『真脇遺跡―農村基盤総合設備事業能都東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書』，能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団，1986，pp 401.

（14）中野益男，根岸　孝，長田正宏，福島道広，中野寛子：「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」，『ヘロカルウス遺跡』，北海道文化財研究所調査報告書，第３集，1987，pp 191.

付載３　馬屋遺跡土壙墓―１出土の歯の鑑別

小田嶋　梧郎（岡山大学名誉教授）

本調査における資料は、発掘時に歯群がまとまって出土し、土壌を広範囲に提供してくれたため、表層から保存状態の良好な歯を検出できた。更に深層に亙って順次検索を進め、最終的には期待を込めて、すべてを水洗し、総計32本の永久歯のうち28本までもが完全な資料となった。すなわち、その歯式は次の如くである。

	（右）	（左）	
上顎歯列	⑧⑦⑥◯④③②◯	①②③④⑤⑥⑦⑧	上顎歯列
下顎歯列	◯⑦⑥⑤④③②①	①②③④⑤⑥⑦◯	下顎歯列

⌊1⌋：左・上顎第一切歯，⌈1⌉：右・下顎第一切歯，⌊1⌉：左・下顎第一切歯，
⌊2⌋：右・上顎第二切歯，⌊2：左・上顎第二切歯，⌈2⌉：右・下顎第二切歯，
⌊2⌉：左・下顎第二切歯，⌊3⌋：右・上顎犬歯，　⌊3⌉：左・上顎犬歯，
⌈3⌉：右・下顎犬歯，　⌊3⌉：左・下顎犬歯，　⌊4⌋：右・上顎第一小臼歯，
⌊4⌉：左・上顎第一小臼歯，⌈4⌉：右・下顎第一小臼歯，
⌈4⌉：左・下顎第一小臼歯，⌊5⌉：左・上顎第二小臼歯，
⌈5⌉：右・下顎第二小臼歯，⌊5⌉：左・下顎第二小臼歯，
⌊6⌋：右・上顎第一大臼歯，⌊6⌉：左・上顎第一大臼歯，
⌈6⌉：右・下顎第一大臼歯，⌈6⌉：左・下顎第一大臼歯，
⌊7⌋：右・上顎第二大臼歯，⌊7⌉：左・上顎第二大臼歯，
⌈7⌉：右・下顎第二大臼歯，⌈7⌉：左・下顎第二大臼歯，
⌊8⌋：右・上顎第三大臼歯，⌊8⌉：左・上顎第三大臼歯

……以上、計28本

なお、頭位は北西、頭部左側を下位に、すなわち横向きにとっている。また、土器片と朽ちた骨部を検出した。

特記すべきは、切歯群において、そのすべてに切縁結節があることから、若年層の個体歯であるばかりでなく、右および左の上顎大臼歯群が明瞭な４咬頭をもった大臼歯の基本形態をすべて具えていることから、その年齢20歳前後と断定できる。そこで、最も興味ある上顎大臼歯について、私見を述べさせてもらおう。

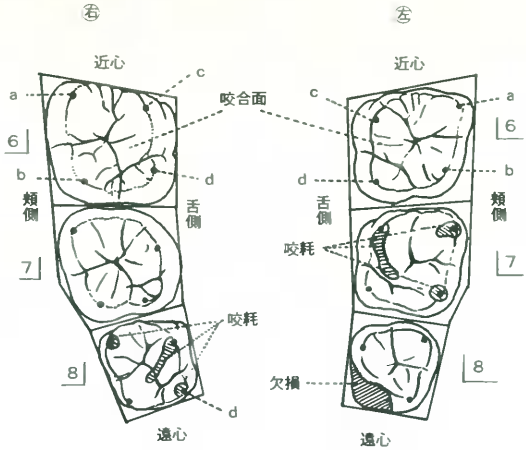
上顎大臼歯の咬頭の基本形は４咬頭（多咬頭性）で最も大きな特徴である。すなわち、多咬頭性はその咬合面を増すことによって、食物の咀嚼機能に適合しようとするためである。上顎大臼歯の典型的な基本形態は、第一大臼歯に見られ、咬合面が菱形で、頬側と舌側とにそれぞれ２個の咬頭が並ぶ。すなわち、頬側に近心頬側咬頭と遠心頬側咬頭があり、舌側に近心舌側咬頭と遠心舌側咬頭がある（図参照）。

そのうち、近心舌側咬頭が最も大きく、遠心舌側咬頭が最も小さい。

上顎大臼歯の歯冠の退化現象が遠心舌側咬頭に最も著明に現われ、日本人は他の種族と比較して可

成り著明であるという。また、この退化形を示すのが普通であるが、本資料では第三大臼歯の歯冠にほとんど退化現象が認められないのである。

しかも興味ある所見は、咬頭の咬耗の度合いが、右・上顎では第三大臼歯の各咬頭に磨耗が強くあらわれるのに反し、左側では第二大臼歯に強度の磨耗が現われ、更に近心舌側咬頭およびそれから発する近心舌側三角稜咬耗のへと続いていて、そのほかの大臼歯にはそれほど強い咬耗は認められないのである（図および写真参照）。

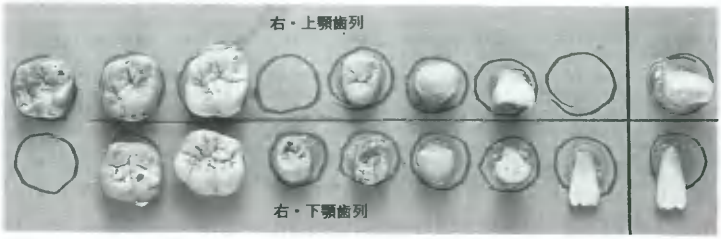


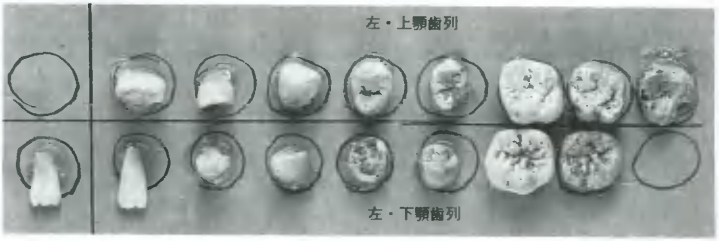
a：近心頬側咬頭
b：遠心頬側咬頭
c：近心舌側咬頭
d：遠心舌側咬頭

上顎の各大臼歯における形態の推移は、確かに、大きさの点からは、後方の歯ほど諸計測において小さく、歯冠の計測値で明らかである。また、歯冠が後方のものほど近遠心的に圧平されている（図参照）。

大臼歯は後方にいくに従って、咬頭が順次小さくなり、遂には消失する咬頭の退化現象は、遠心舌側咬頭にあらわれ、上顎第三大臼歯の咬合面は菱形から不等辺四辺形、さらに三角形になってしまう。

現代人の上顎第三大臼歯（智歯）では4咬頭性は比較的少なく、特に近頃の若年層では智歯の萌出





のない場合さえあることから、本資料は智歯の退化現象の推移を考える上で貴重な症例といえる。

今回の調査を通して感じたことは、やはり現代人の食生活の変化と共に、歯の退化現象が徐々に現われてくるということを実感した。

なお、計28本の歯冠部を計測すると、日本人平均値より僅かではあるが小さいことから本例は20歳前後の女性歯と推察した。

付載４　馬屋遺跡土壙墓一２出土人骨

池田　次郎

左を下にして股関節、膝関節をまげた横臥屈位で埋葬されている。頭蓋骨、下顎頸堆、左右上肢骨、下肢骨が残存するが、保存状態はきわめて悪い。左の上顎骨には犬歯から第２大臼歯までの５本が、下顎骨には中切歯から第３大臼歯の全歯が釘埴している。第１大臼歯の磨耗度はブロカの２度で、第３大臼歯の歯はほとんど磨滅していない。下顎歯、とくに第１大臼歯の近遠心径は大きい。壮年男性骨と推定される。

1．馬屋遺跡遠景（西から）

2．馬屋遺跡遠景（東から）

図版 2

1．河道 1（西から）

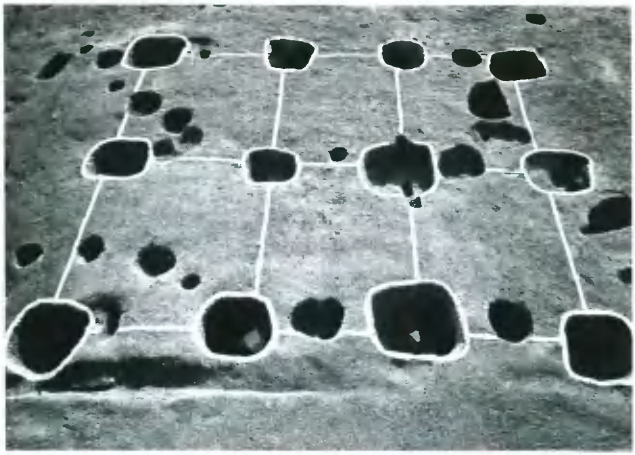
2．河道 2（東から）

3．河道 2　出土遺物

1．奈良時代建物群（西から）

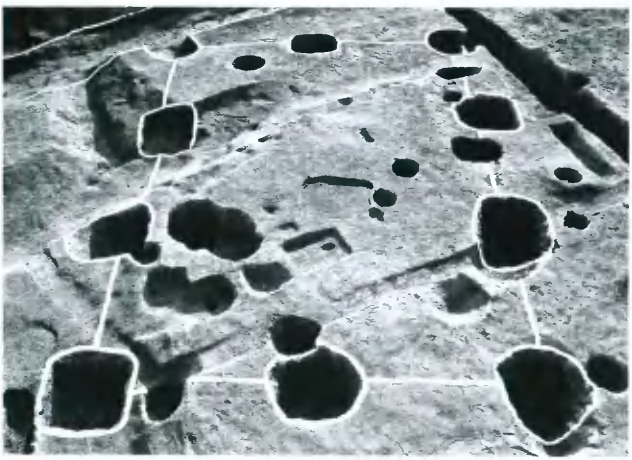
2．奈良時代建物群（南から）

図版 4

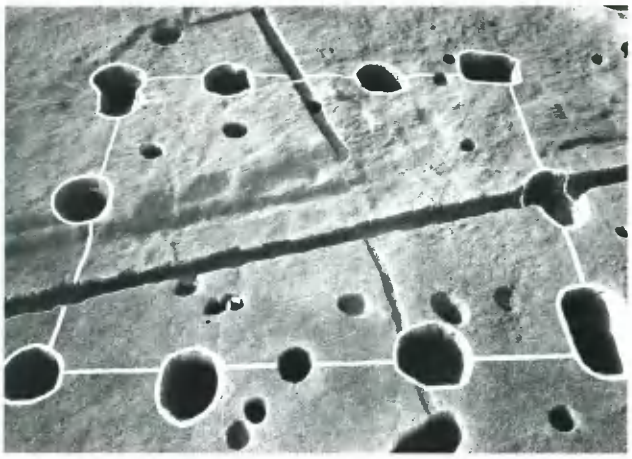


1．建物－1（北から）

2．建物－1（西から）



3．建物－2（北から）

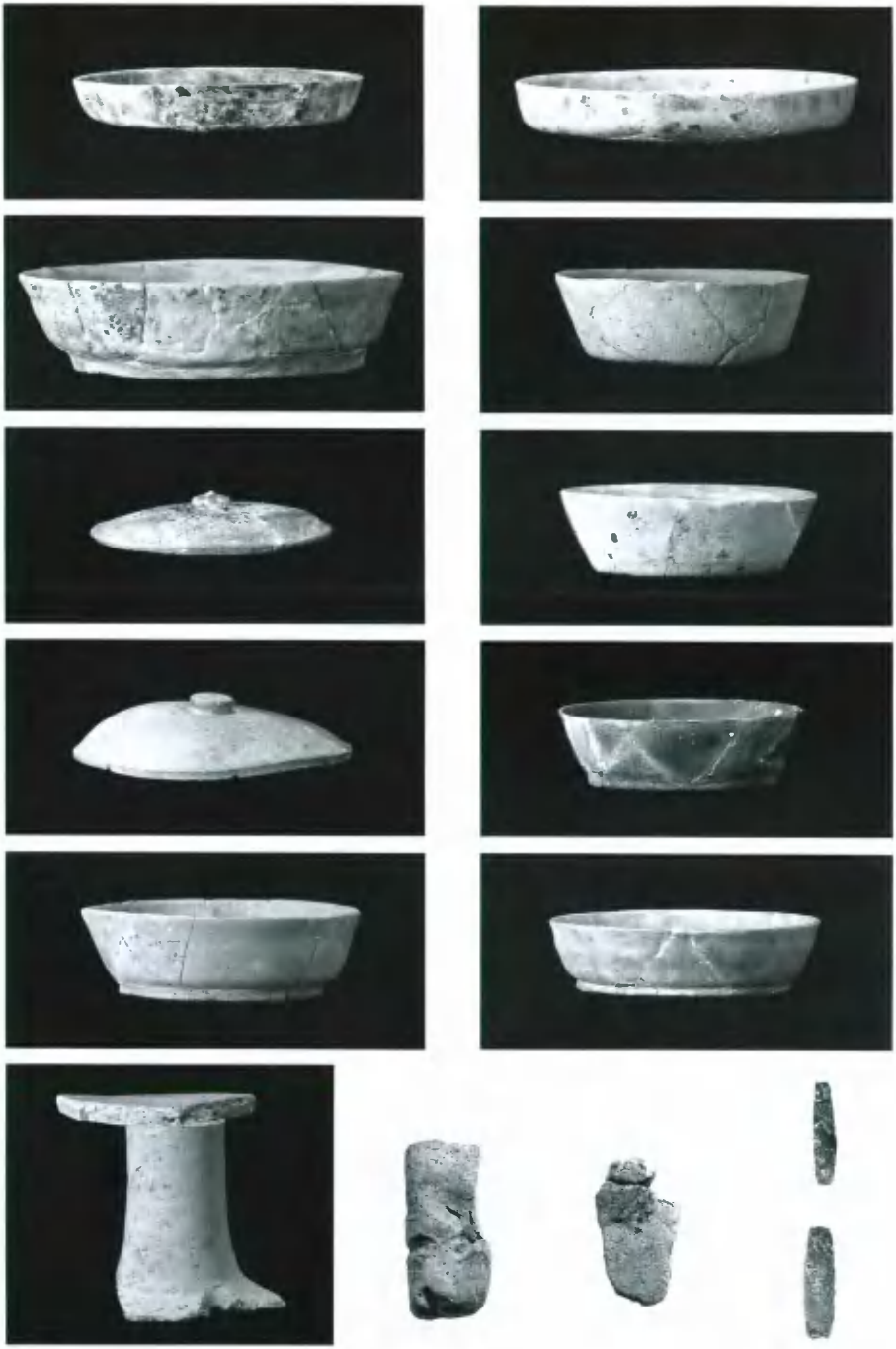


1．建物－3（東から）

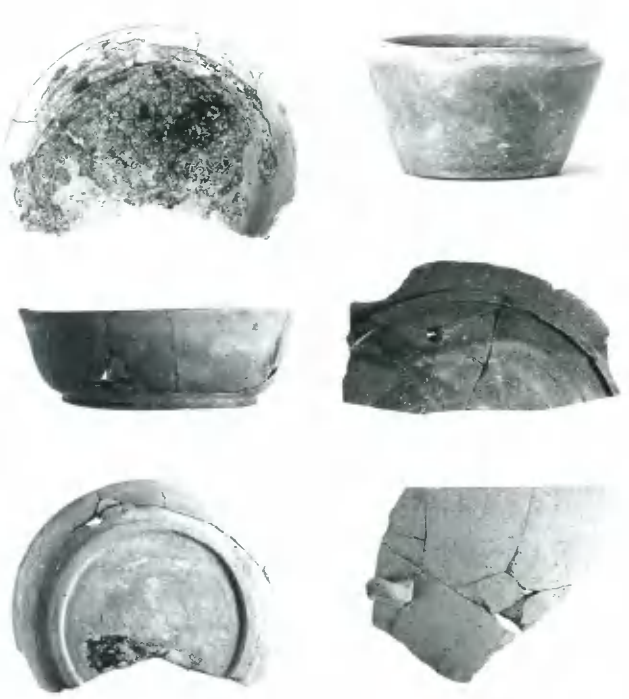
2．建物－3（北から）

3．建物－4（東から）

図版 6



溝－ｌ　出土遺物



1．溝－2 出土遺物

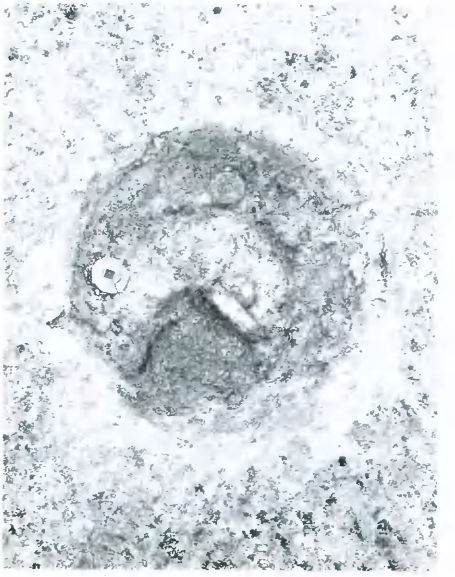
2．井戸－1（東から）

図版 8

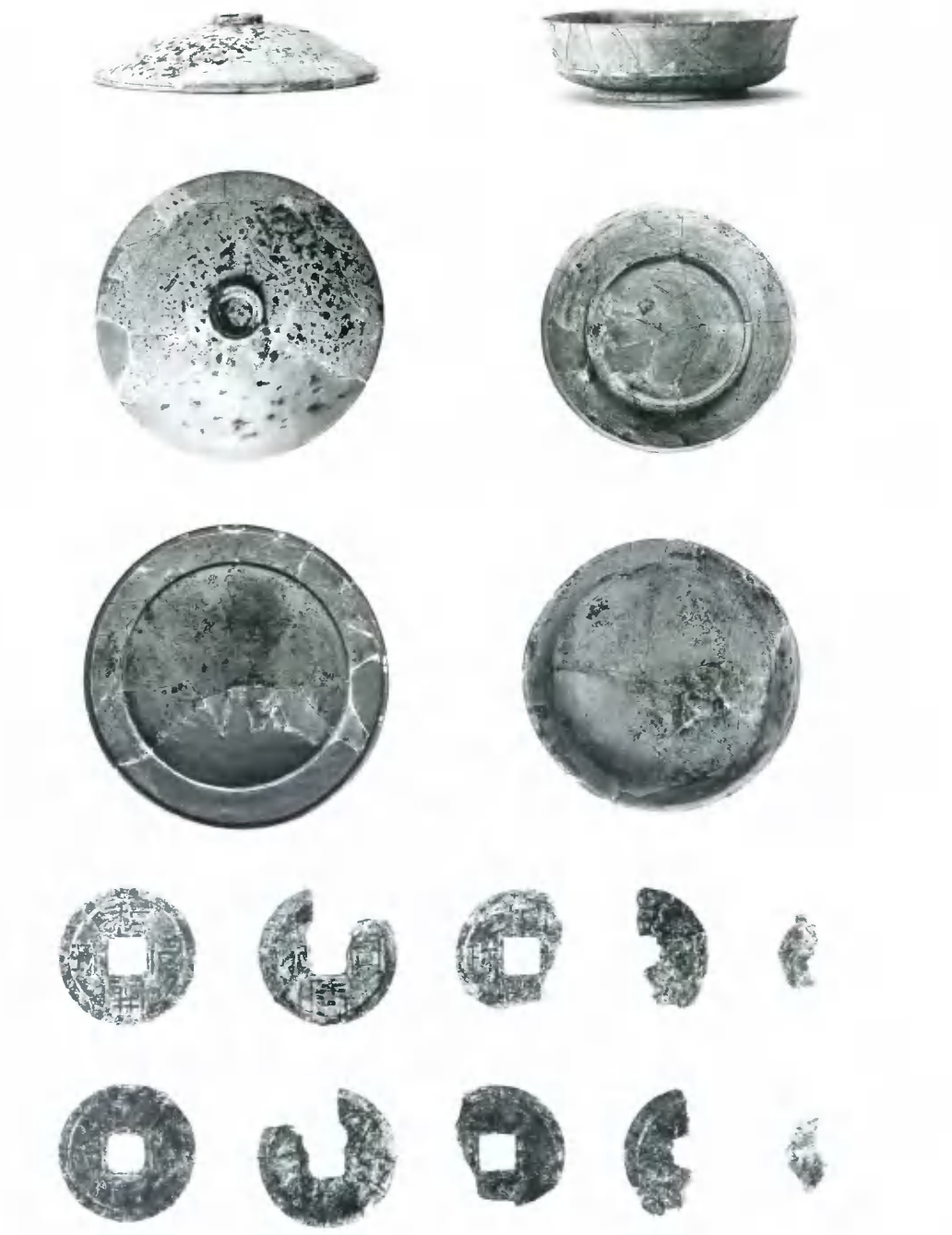
1．土器埋納土壙検出状況（南から）

2．内部検出状況

3．土器取りあげ後の状況



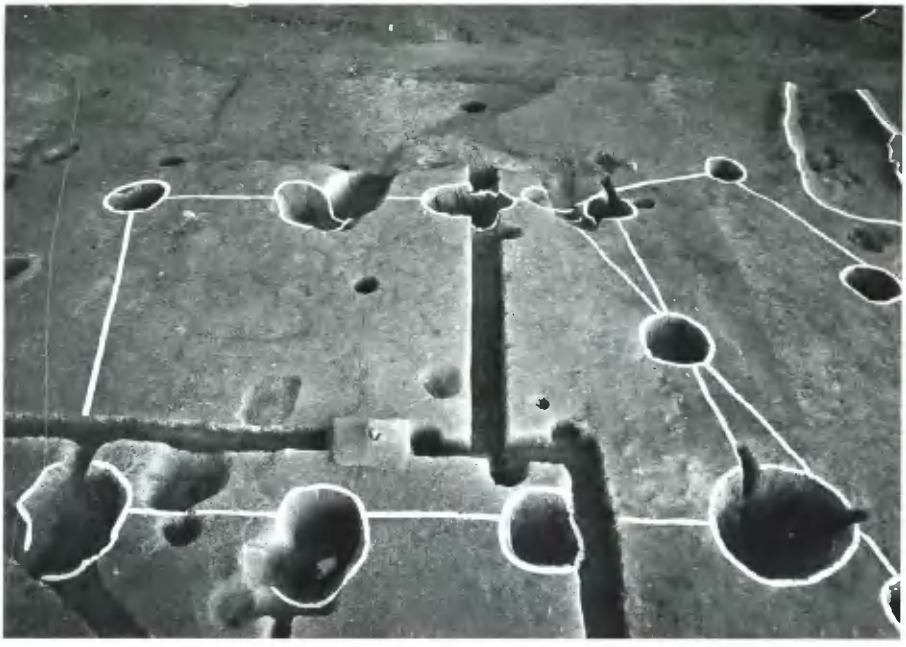
4．和同開珎出土状況



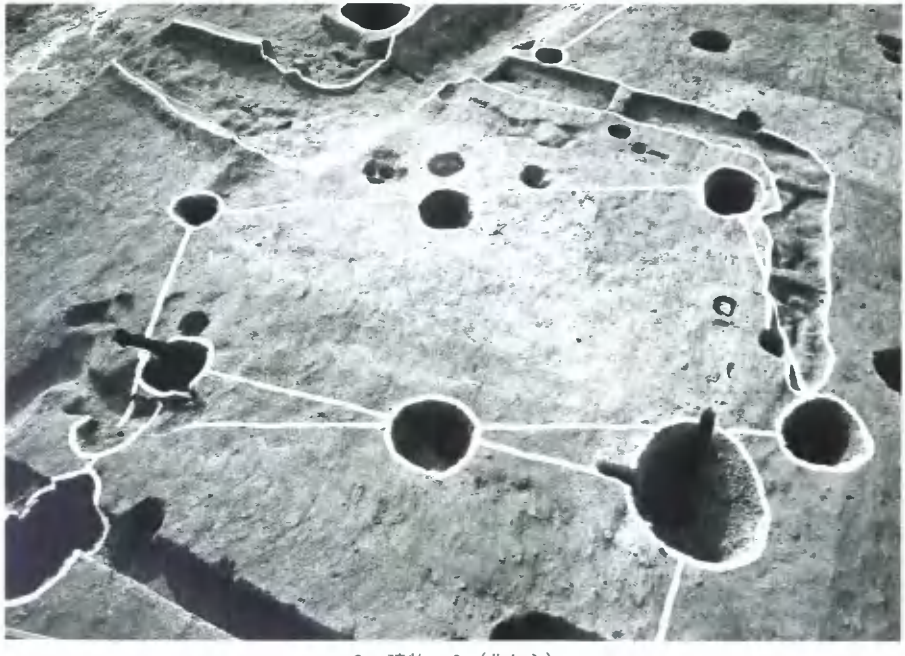
土器埋納土壙出土遺物

図版10

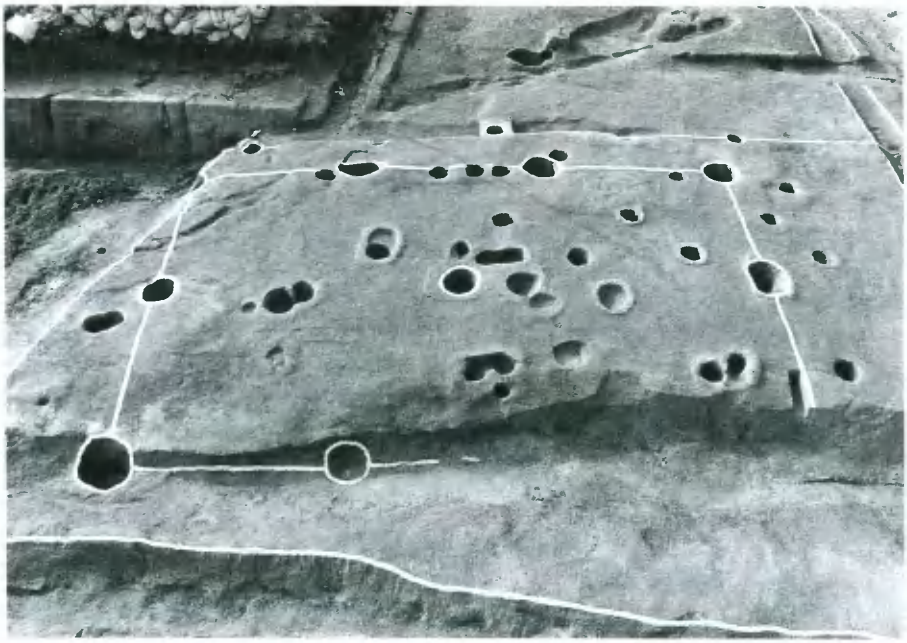
包含層出土奈良時代の軒丸瓦・軒平瓦



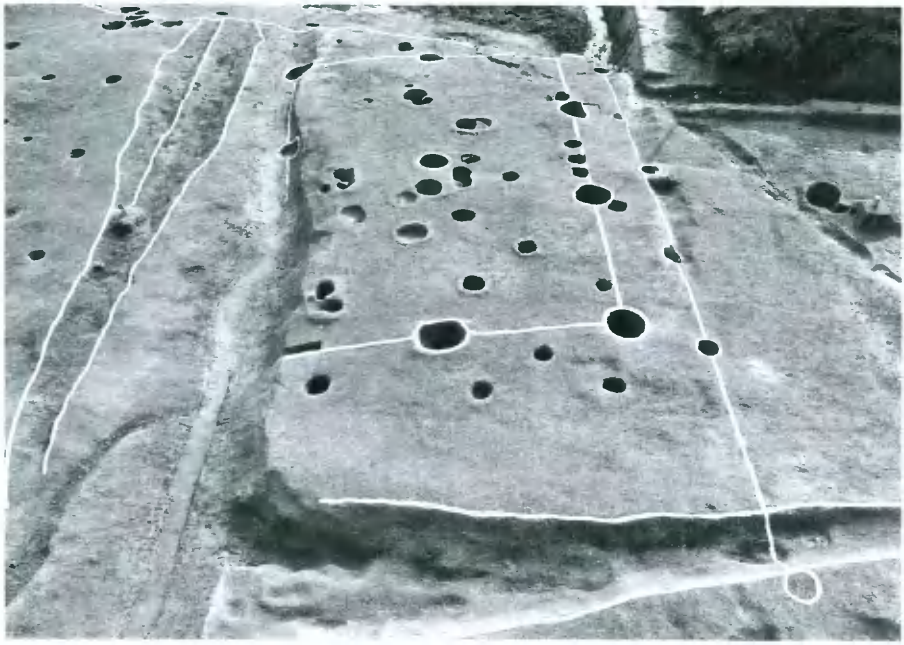
1．建物－5（西から）



2．建物－6（北から）



1．建物－7・柱穴列3（東から）

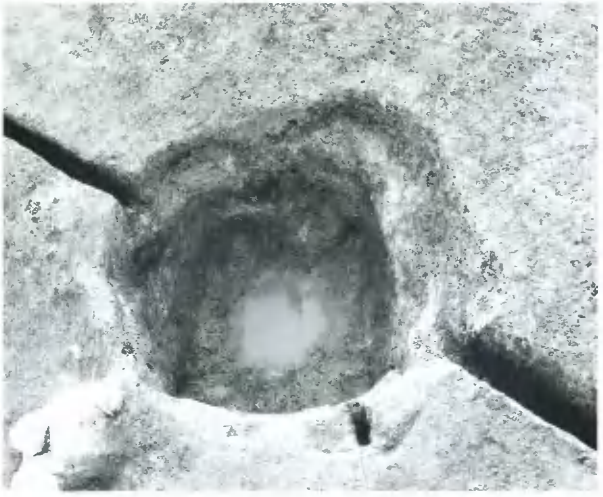


2．建物－7・柱穴列－3（北から）

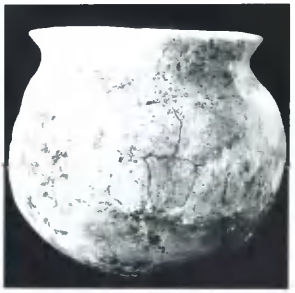
建物－6

溝－12

溝-11



1．井戸－1（北から）



2．溝－12他・井戸－1　出土遺物

1．建物－11（北から）

2．建物－16（北から）

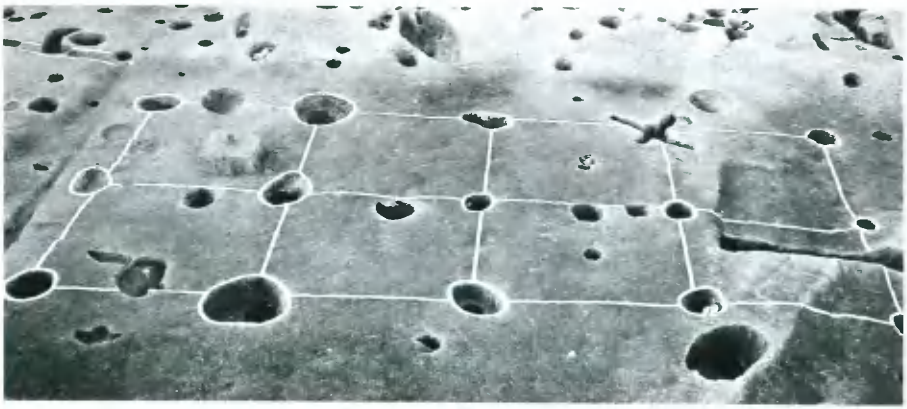
3．ＧＨ－10～20 全景（建物24・25東から）

1．D～F－14～16区　全景（東から）

2．建物－18（西から）

3．建物－18
出土遺物

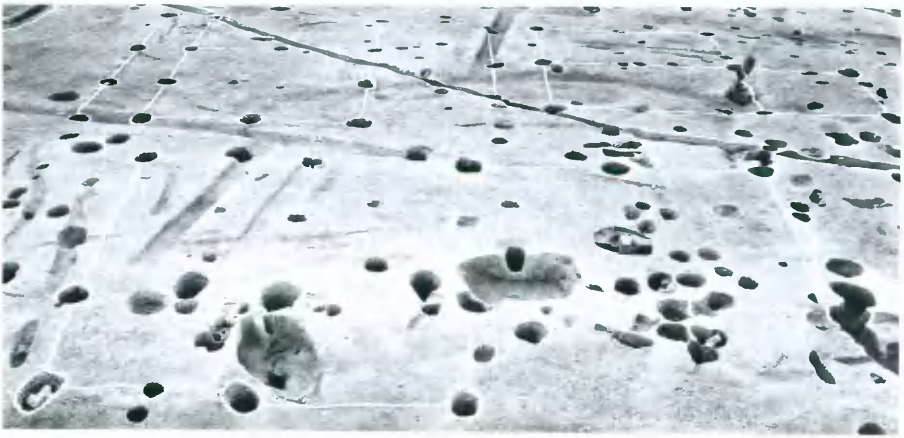
図版16



1．建物－19（西から）

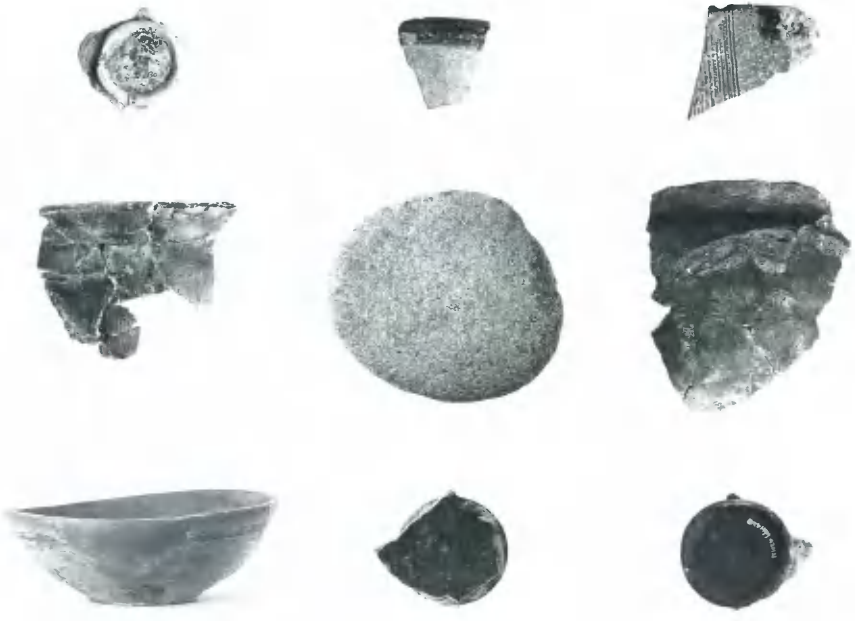
2．建物－19 ピット12 遺物出土状況

3．建物－19 出土遺物



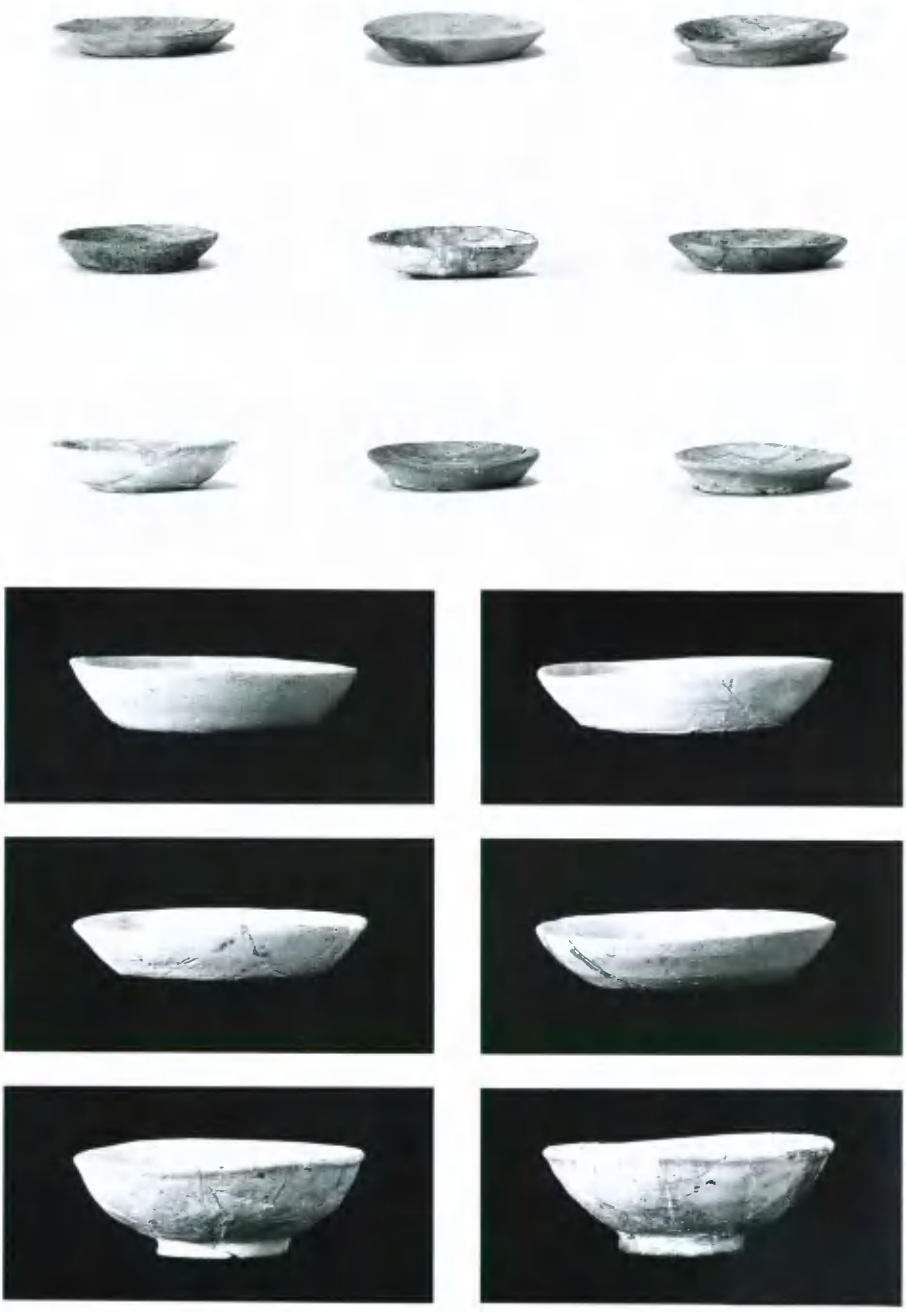
4．建物－20（東から）

1．溝－17 検出状況（東から）



2．溝－17 出土遺物

図版18



溝－19 出土遺物(1)

溝－19 出土遺物(2)

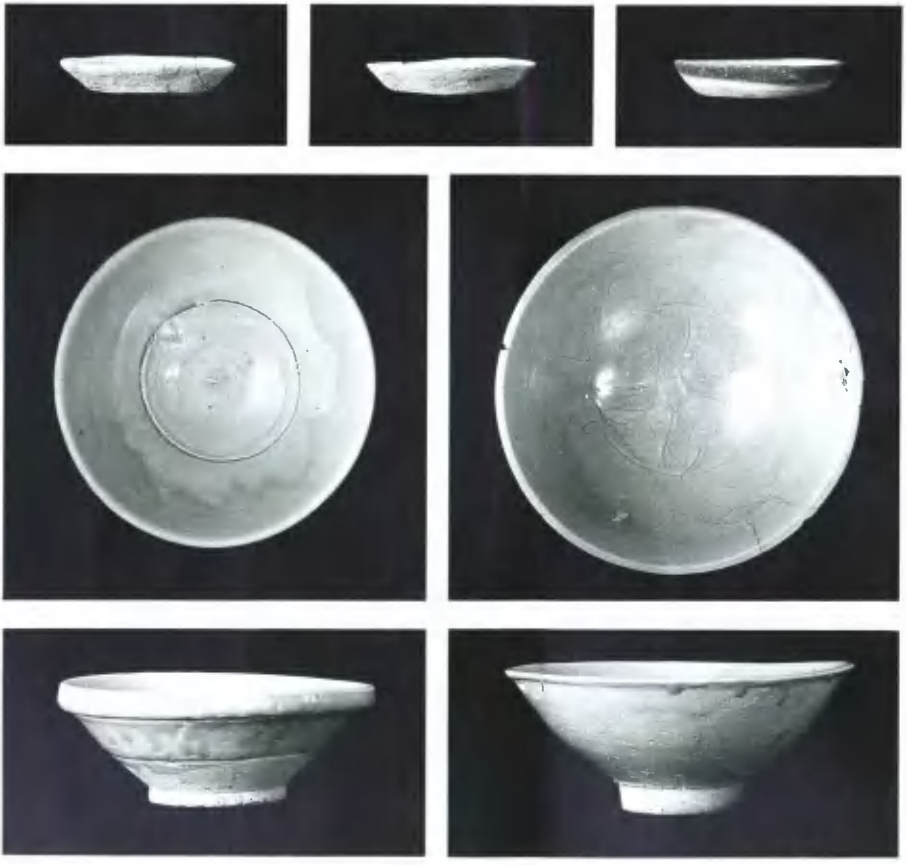
図版20

1．土壙墓－1
（北から）

2．土壙墓－2
（北から）

3．土壙墓－2
（東から）

1．土壙墓－2
遺物出土状況



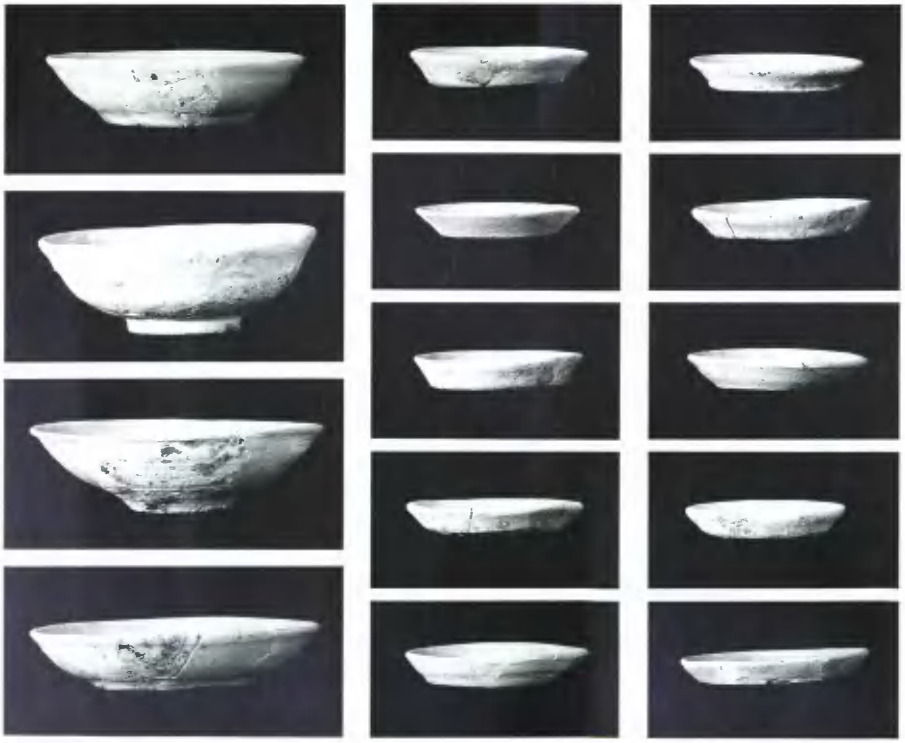
2．出土墓－2 出土遺物

図版22

1．土壙－11 検出状況（西から）

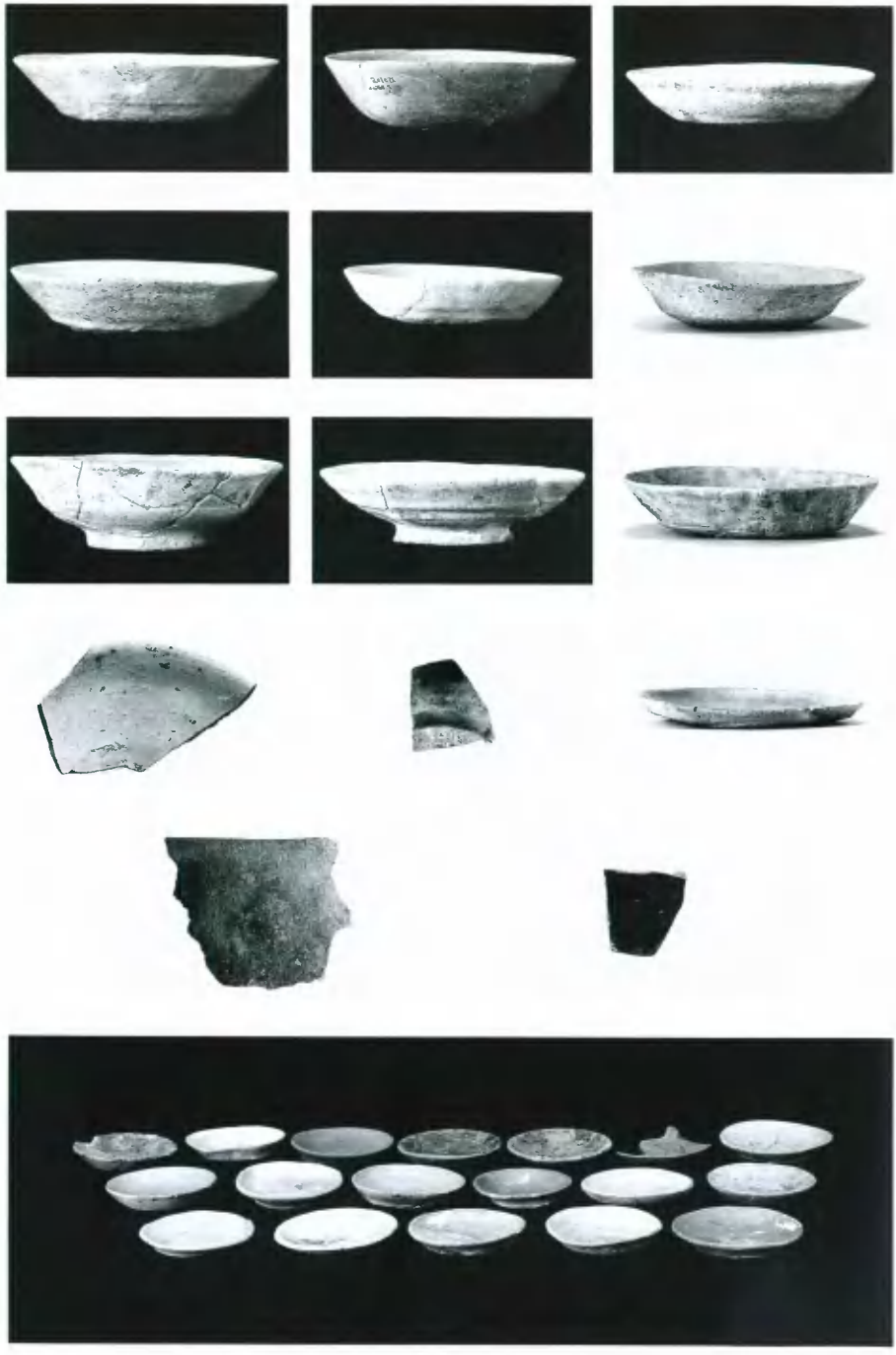
2．土壙－11 出土瓦

1．土壙－16（西から）



2．土壙－16 出土遺物

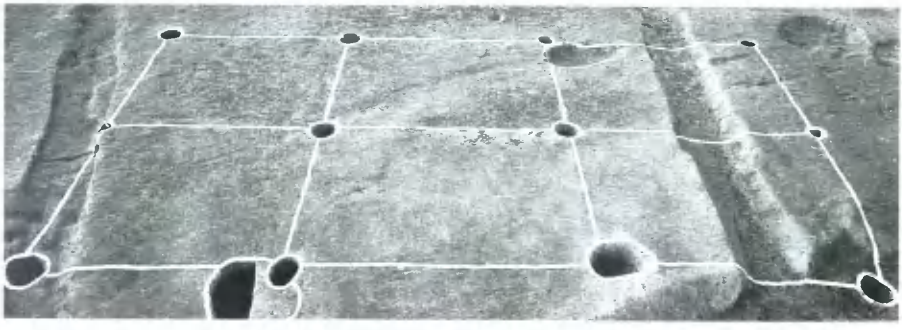
図版24



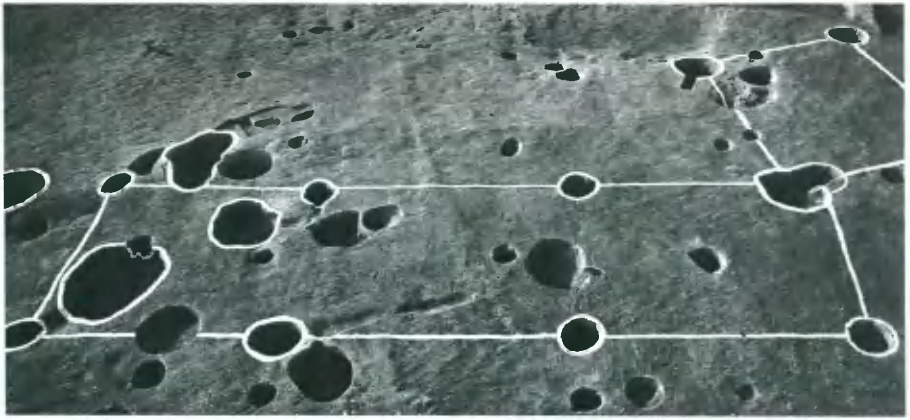
南河道土層出土遺物

1．ＡＢ－３・４区全景（北から）

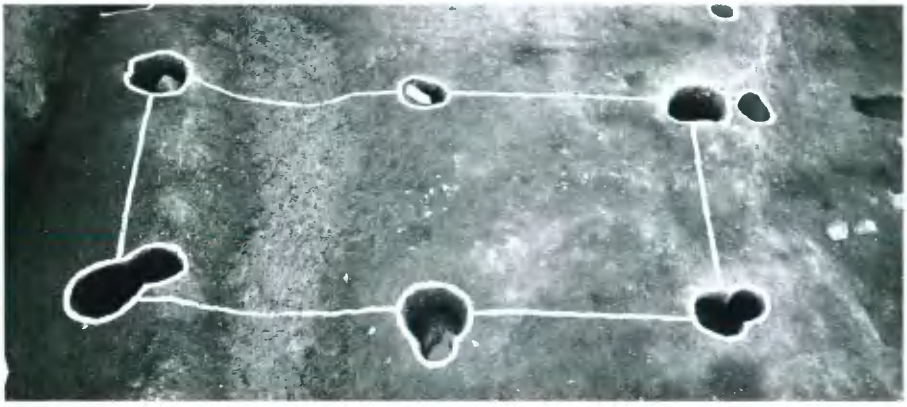
2．建物－25・26（西から）



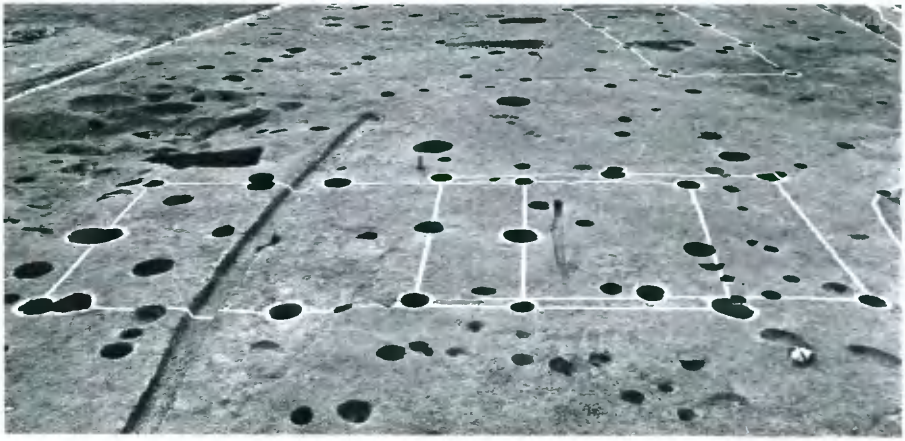
3．建物－27（東から）



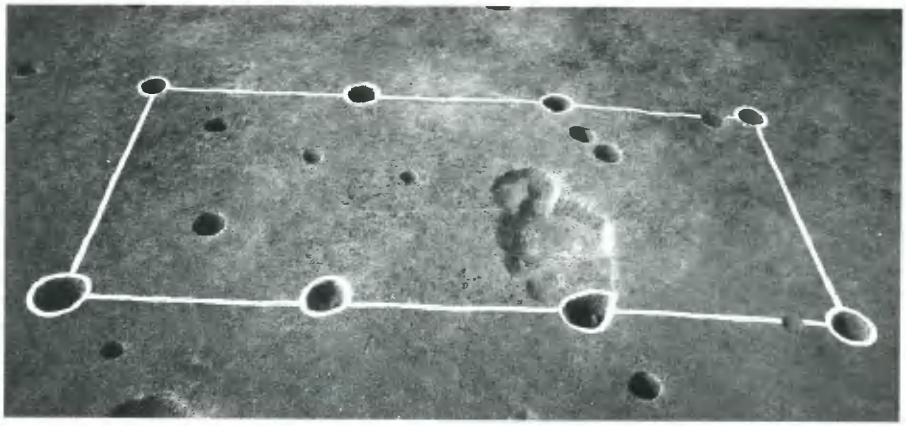
1．建物－28・30（東から）



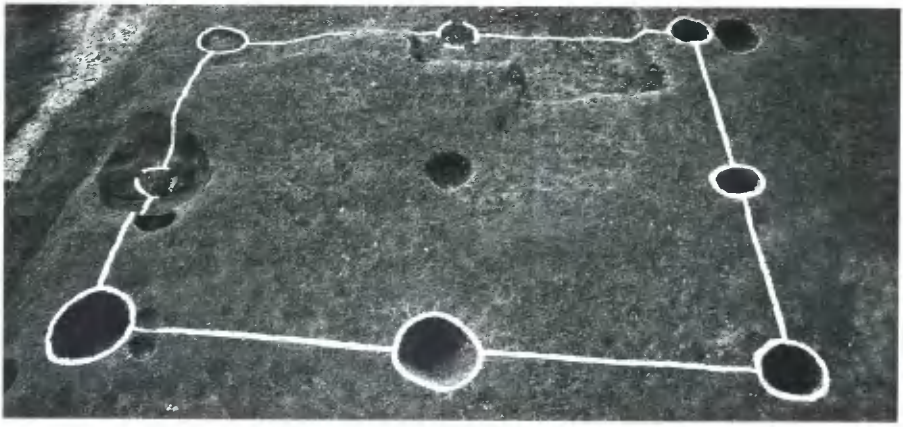
2．建物－29（南から）



3．建物－33・34（北から）

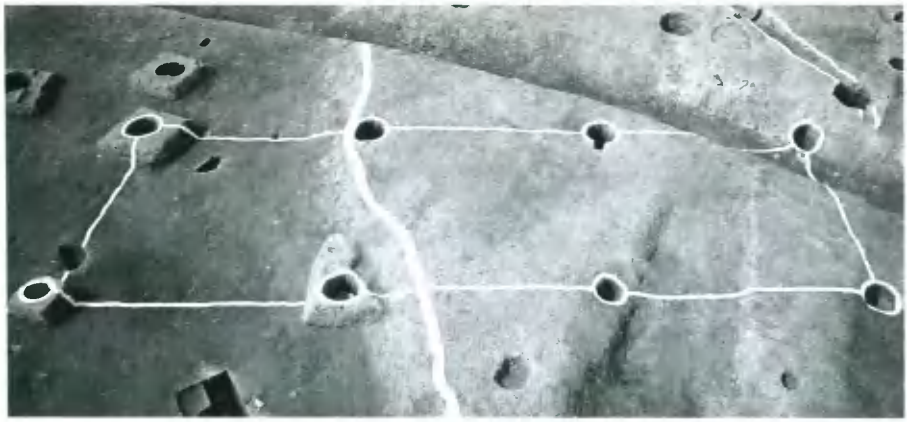


1．建物－36（東から）

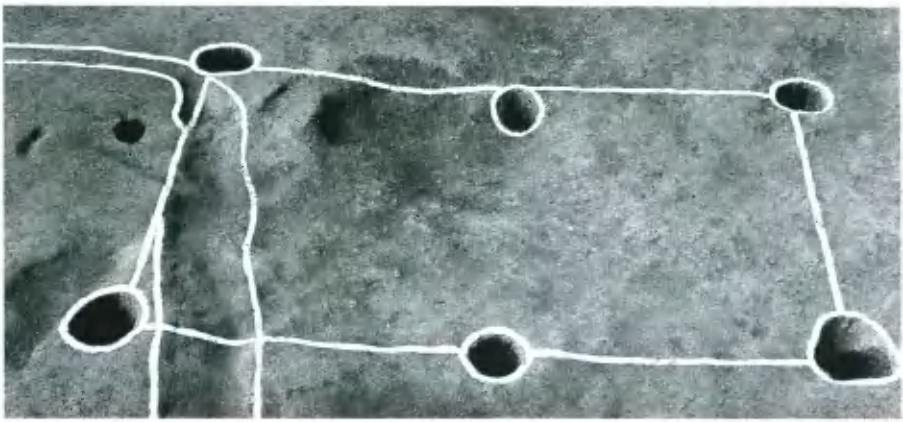


2．建物－37（北から）

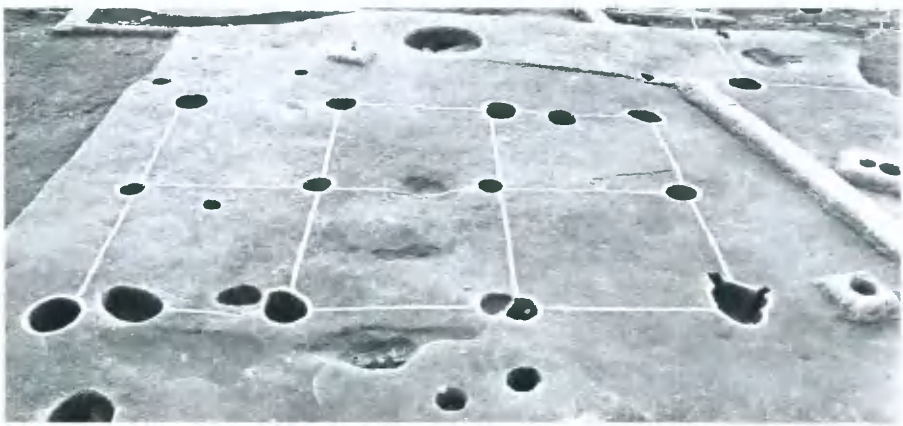
3．建物－45（北から）



1．建物－48（東から）



2．建物－50（東から）



3．建物－51（北から）

1．井戸－4（北から）

2．井戸－5（南から）

3．井戸－5 出土遺物

図版30

1．橋脚－3
北側道（南から）

2．橋脚－3（北から）

3．橋脚－3（南から）

1．橋脚－5（南から）

2．橋脚－6（南から）

3．橋脚－7（南から）

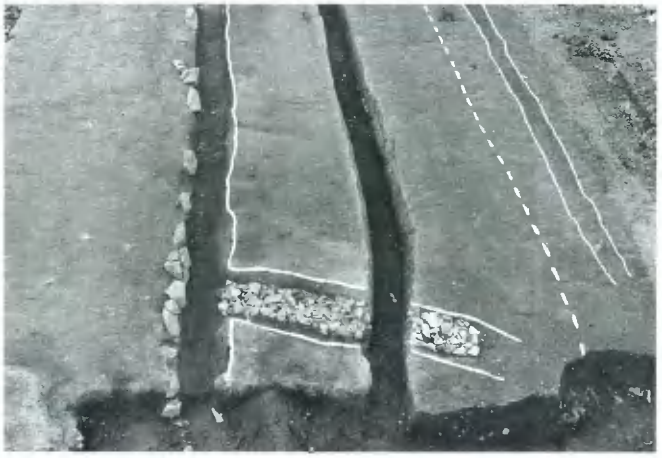
図版32

1．橋脚－8（南から）

2．橋脚－8（東から）

3．橋脚－8，溝－5・6
（東から）

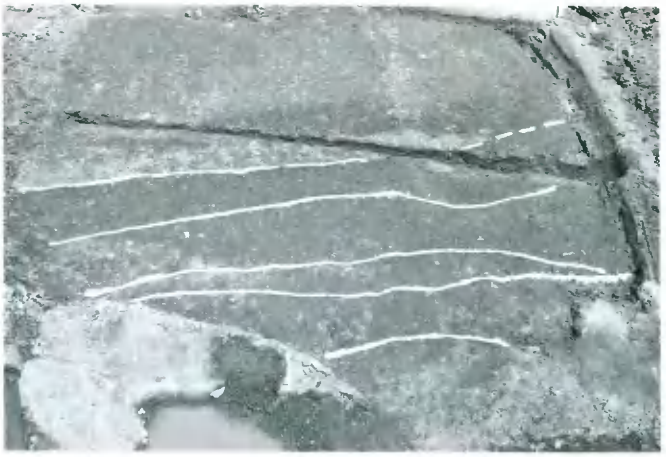
1．橋脚－9北側道
溝－8
（上面南から）



2．橋脚－9北側道
溝－8
（南から）

3．橋脚－9
溝－4（南から）

図版34



1．橋脚－9
北側道（南から）

2．橋脚－9～10南側道
溝3・4（南から）

3．橋脚－14鍬痕
土壙群（南から）

23

たー2

26

28

29

31

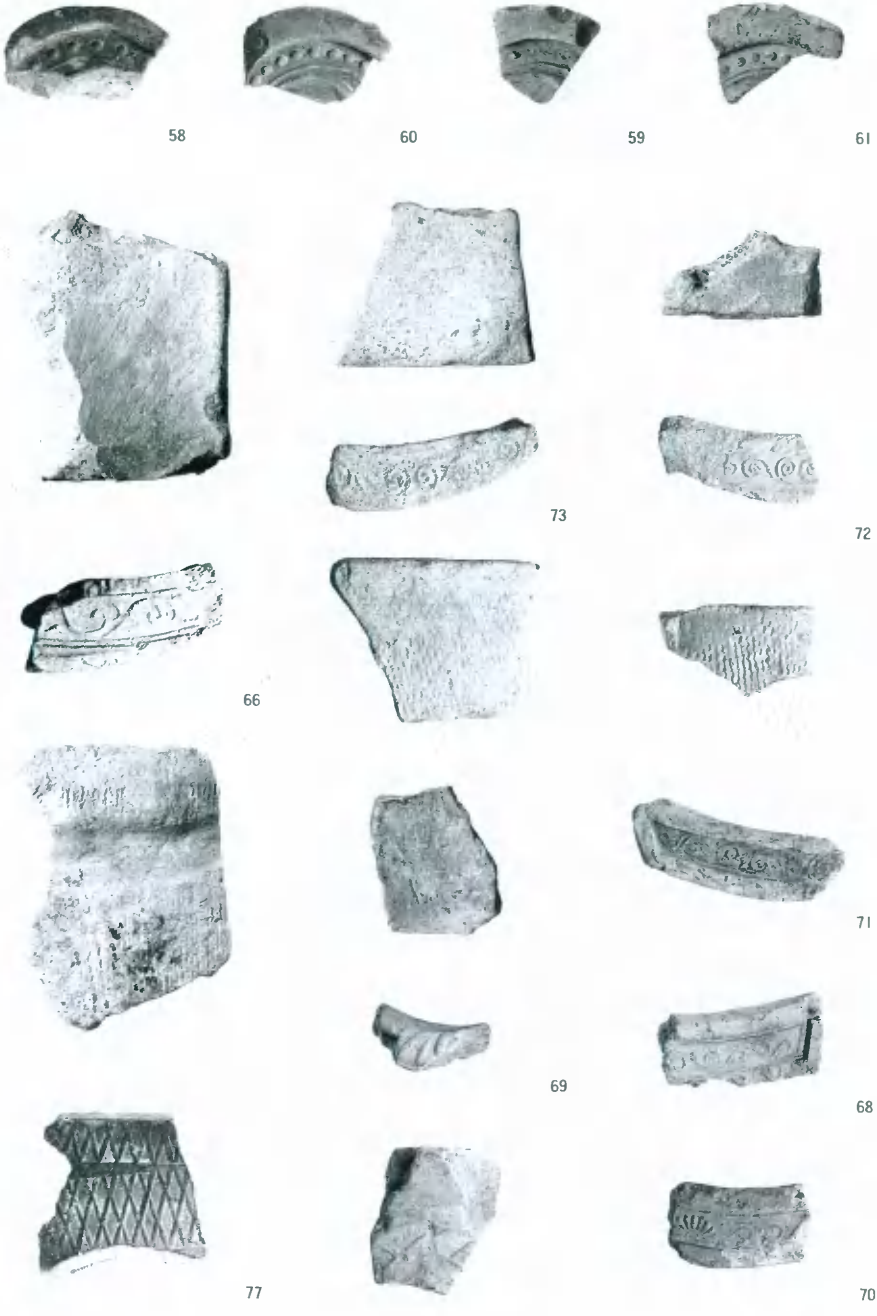
32

34

30

橋脚部出土遺物

図版36



橋脚部包含層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	まつおこふんぐん　さいどみこふんぐん　まやいせき
書名	松尾古墳群　斎富古墳群　馬屋遺跡他
副書名	山陽自動車道建設に伴う発掘調査
巻次	11
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	99
編著者名	伊藤　晃・下澤公明・福田正継・横山　定
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-01　岡山県岡山市西花尻1325-3　☎086-293-3211
発刊機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700　岡山県岡山市内山下2-4-6　☎086-224-2111
発行年月日	西暦　1995年3月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
実教寺遺跡	赤磐郡瀬戸町	321		34°45′56″	134°04′30″	H2.2.5～2.21 H2.2.5～4.21	635	山陽自動車道建設に伴う調査
松尾2号墳 松尾4号墳 松尾5号墳	赤磐郡瀬戸町	〃	17—477	34°05′15″ 34°46′10″ 〃	134°05′10″ 134°05′15″ 134°05′20″	H2.5.7～8.4	626	
勘定口2号墳	赤磐郡瀬戸町	〃	17—422	34°45′40″	134°02′40″	H3.4.18～5.16	370	
斎富古墳群	赤磐郡山陽町斎富	322	17—386 387 388	34°45′00″	134°02′25″	H3.2.25～3.21	1,683	
新屋敷遺跡	赤磐郡山陽町穂崎	〃	17—693	34°44′05″	134°00′40″	H3.7.2～8.2	1,160	
池新田遺跡	赤磐郡山陽町穂崎	〃	17—693	34°44′00″	134°00′25″	H3.7.2～8.2	1,120	
長尾遺跡	赤磐郡山陽町長尾	〃	17—694	34°44′15″	134°01′15″	H3.5.20～5.31	50	
馬屋遺跡	赤磐郡山陽町馬屋	〃	17—693	34°44′	134°01′	H3.7.1～4.10.31	20,130	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
実教寺遺跡					———
松尾2号墳 松尾4号墳 松尾5号墳	古墳	古墳後期	横穴式石室	須恵器 陶棺	
勘定口2号墳	古墳	古墳後期	横穴式石室		
斎富古墳群	弥生～中世古墳	古墳後期	横穴式石室 竪穴式石室	須恵器 鉄器	
新屋敷遺跡	集落	弥生中・後期	住居、土壙	弥生土器	———
池新田遺跡	集落		溝	埴輪片	
馬屋遺跡	集落	奈良・平安・鎌倉・室町	掘立柱建物53、井戸5、溝72、土壙83、土壙墓2	胞衣用器、輸入陶磁器、緑釉、灰釉、黒色土器、瓦器、陶硯	
ヤブレ塚古墳					荒手

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告99

松尾古墳群
斎富古墳群
馬屋遺跡ほか

山陽自動車道建設
に伴う発掘調査11

平成７年３月20日　印刷
平成７年３月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
発　行　岡　山　県　教　育　委　員　会
印　刷　西日本法規出版株式会社